

機動戦士ガンダム虹の 軌跡

シルヴァ・バレット

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

あなたは知る。彼が見た【虹】を――

主人公ムゲン・クロスフォードが歩む機動戦士ガンダムの宇宙世紀の話です。ファーストからユニコーンまでの話を描きます。

それなりに原作のキャラも出ます。

キャラ設定やオリジナル機体はあとがきで書いてありますので、よろしく願います。一部原作とは異なる展開もあるかもしれませんが。

表現や、文章があまり伝わりにくい場合もございますが、目を瞑っていただければ助かります。

完結済み

t w i t t e rではご質問など全般を承っておりますので、よろしければお使いください。

t w i t t e rアカ @ g a e l l c h a n

目次

一年戦争編

00 : ムゲン・クロスフォード

1

01 : 第00特務試験MS隊 | 5

02 : 初めての戦場 | 16

03 : 謎の敵との遭遇 | 30

04 : 様々な心と意思 | 46

05 : オデッサでの激闘 | 66

06 : 暗躍する特殊部隊 | 80

07 : 別れと決意 | 92

08 : 死を司る執行人 | 105

09 : 本当の正しさ | 117

10 : 再会 | 132

11 : 隷属する亡霊と失われし自分

150

12 : レイスとの別れ | 新たな邂逅

13 : 幸せ | 171

14 : 宇宙へ | 意志を引き継いで | 185

15 : 悲しみの先 | 暖かな光 | 196

16 : ソロモンの激戦 | 213

17 : 掴めなかった望み | 236

18 : 手をつないで | 261

外伝：カカサの男飯	444
外伝：二人が願う未来	436
a	383
外伝：Episode of Rin	361
onodo	
外伝：Episode of Kur	330
asa	
外伝：Episode of Kak	310
y	
外伝：Episode of Gra	294
一年戦争外伝	269
19：己が刃で斬り捨てる	
20：未来を歩んで	

an	587
外伝：Episode of Eth	
デラーズ紛争編外伝	559
28：抹消—StarFall	
27：目覚め	538
26：変化の時	520
25：転落	504
24：戦いの意味	489
23：炎のトリントン	477
22：第一小隊	464
21：新たなる序曲	457
デラーズ紛争編	

34 : A sign of arou	759	外伝 : 迷探偵!? リナちゃん	998
on		ile	974
33 : Tears of the	m 734	外伝 : Episode of Et o	936
again		38 : 虹の花	904
32 : Reunited once		37 : 砕かれた刃	880
31 : Show light	716	r & Kuronodo	
	693	外伝 : Episode of F ea	
30 : Remaining Scar		グリプス戦役編外伝	
on	677	uture	852
29 : A New generati		36 : Hope and the	f 813
始動 : 0087	642	35 : Will committed	
グリプス戦役編		sal	791
外伝 : エミリーと黒猫	611		

外伝：Episode of KY1	1276
アジア戦線編外伝	1243
48：芽生えた感情	1222
47：AI	1207
46：ある休日の出会い	1178
45：蛇の誘因	1149
44：小さな願い	1108
43：望まぬ結託	
42：第66特殊戦闘小队	1080
アジア前線編	1050
41：小さな虹	1015
40：教導	
39：先生	

54：向き合う覚悟	1494
53：穏やかな日	1474
52：血濡れ 救い	1446
51：役割	1427
50：罰	1405
49：不穏なトリントン	1378
tory 0089	
戦士の帰還 The Hidden	1360
外伝：Episode of guy	1330
外伝：Episode of Rei	1305

外伝：Episode of Fena	2	1721
外伝：Episode of Kaka		1700
外伝：Last Episode of Kuronodo		1700
第二次ネオ・ジオン抗争編外伝		1662
60：時の果て		1631
59：決着―虹の奇跡―		1599
58：私の戦う理由		1565
57：彼の戦う意味		1536
56：戦いへの躊躇		1517
第二次ネオ・ジオン抗争編		1517

64：夜明けの宇宙		1898
63：白紙の計画		1882
62：家族の形		1865
61：謎の男		1851
5		
After the war		009
Taro		1838
外伝：Episode of Shiny		1794
外伝：Episode of Lily		1766
外伝：Episode of Rin		1741

外伝：Episode of Etto

ile 2

1929

ラプラス戦争編

65：進む者と止まる者

1954

66：亡霊の妖精と魔獣に飼われた炎

の魔神

67：受け継いだもの

68：共鳴するガンダム

69：再会の刻

70：分かり合う事

71：決着—愛—

72：決着—真実—

73：虹の軌跡・上

21832157212720902069203320031979

終：虹の軌跡・下

一年戦争編

00：ムゲン・クロスフォード

宇宙世紀0079年1月3日、サイド3は自らをジオン公国と名乗り、地球連邦に宣戦布告をした。

ジオン公国は各サイドに大量破壊兵器である神経ガスを使い、サイドにいる住民を虐殺した。

時は遡り、宇宙世紀0079、1月2日、静まり返る市街地を一人必死に走る少年がいた。

「はあはあ……！」

もうすぐ周りを真っ暗に染め上げる夜が来る、ひたすら彼は家路に向かって走っていた。

いつもはワクワクしながら周りを見渡して散歩している彼だが、今日は何故か、急いで帰らなければならない気に駆られていた。

その理由は彼ですら分からない、ただ、とても嫌な予感がした。

「はあ……はあ……！」

いつもの見慣れた居住区に入る、そしてそこから左に曲がり、突き当たったところに見える黒い色の屋根の家が彼の家だった。

ここの居住区の人たちは、ご近所付き合いなど盛んで、とても仲がいいのだ。

だが、いつも仲睦まじく話し合っている人たちどころか、人がいる気配がまったくないのだ。

その違和感に気づいていたのか、何も言わずとも彼の足取りは速くなる。

そして、自分の家の前に着いたとき、彼の両親が大きな荷物を持って、彼の帰りを待っていた。

「ムゲン!!」

母親が彼の名前を呼ぶ。

「母さん!どうしたの!?!一体何が起こっているの!?!」

彼はまったく状況が読めていない。

「お前は知らなくていい、さあ、急ぐぞ!」

父親がそう言っつて、彼の手を引っ張っていく。

「と、父さん!!」

彼を引っ張って、大きな建物に入る。

「父さん……ここはどこなの?」

彼は何度も聞くが、父親は知らなくていいの一点張りだった。

「あなた…大丈夫かしら…」

母親が心配そうに父親を見つめている。

「大丈夫だ、おまえは心配するな…」

そういいながら、父親は、何かを気にしながら窓を何度も覗いている。

そして…突如大きな突き上げるような震動がこちらに向かうにつれて大きくなっていく。

「来たのか…くそっ!!」

父親はそう言つて、彼を強引にクローゼットの中に入れる。

「な、何するんだ父さん!!」

「お前とは…もつと一緒にいたかった…」

父親が涙を見せ、クローゼットを閉めた。

そんな姿を見て、彼は何も言えなかった。

しばらくした後、ドタドタと大きな足音が聞こえた後、銃声が響き渡った。

自分の全身から血の気がドツと引いていく感じがした。

クローゼットのドアを少し開けて、外の様子をのぞいた時、彼は声すら出すことが出来なかった、息が詰まる、とても苦しかった。

ある二人の兵士が両親を撃ち、死んでいるのに何度も何度も持っている銃で射的の的のように撃っていた。

彼はドアを静かに閉めた後、声を押し殺して、震えていた。

両親が殺されたこと、そして、両親を何度も撃っていた彼らに対しての怒りで震えていた。

しばらくすると、飽きたのか、彼らが去っていく音が聞こえた。

クローゼットのドアを開け、外に出る。

両親の顔は、もう見ることすら出来ない、ただ、彼は怒りに震えていた。

周りに目をやると、彼らが置いていったものだろうか、小さなエンブレムらしきものがあつた、彼はそれを拾い、思いつき握り締める。

「…父さん…母さん…俺は…うわあああああああああ
!!!!!!」

00 完

01 : 第00特務試験MS隊

あの一件の後、たまたま居合わせた民間人と共に、俺はサイド2を離れ、地球で暮らしていた。

月日が流れて、宇宙世紀0079 2月。地球連邦軍に対して宣戦布告したジオン軍は、地球にまで軍を伸ばし、ミノフスキー粒子散布内でも戦闘が可能なモビルスーツを投入し

連邦軍を圧倒していたが、なれない地域にジオンの兵士は疲弊^{ひへい}し、少しずつだが連邦軍も勝利を収めていった。

宇宙世紀0079年7月、連邦軍初となるモビルスーツであるRX-77ガンキャノンとRX-78-1プロトタイプガンダムが完成。

その後、プロトタイプガンダムに代わる新型機、RX-78-2ガンダムの完成を以ってRX-79計画を先行、先行量産型の製作を開始した。

宇宙世紀0079年10月、連邦軍各地の工場でRGM-79ジムの本格的量産を開始、連邦軍は本格的な反撃を始めた。

そんな話をテレビで聞き、俺はモビルス^Mーツのパイロットとして、連邦軍に志願する

事にした。

「よし！パイロット志願のものはこっちに来るんだ!!」

大柄な連邦軍の士官が叫ぶ。

俺は言われたとおり並んだ。

「今から配属先と所属する部隊を言うから、番号をいわれた者は前に来るように」

俺は自分の番号を確認する、番号は161番だった。

「次だ！161番!!来い！」

士官が俺の番号を呼ぶ、俺は言われたとおり、士官の前に立った。

「えー、ムゲン・クロスフォードだな。お前は北アメリカにあるニューヤーク基地の防衛だ。そして所属の部隊だが、第00特務試験MS隊だい00とくむしけんモビルスーツたいに配属することになった」

俺は領き、配属書を頂いた後、彼に深くお辞儀をすると、彼が少し引いていたのは何故だろう。

そして後日、俺は配属されたニューヤーク基地に着いた。

「お前が新人だな!!」

そう言って、目の前に赤毛の少年が立ちふさがる。

見たところ、14才くらいの少年だろうか。

「そうだけど…あなたは…?」

と、聞き返してみた。

「俺はフアングって言うんだ!よろしくな!」

フアングと名乗る少年は、笑顔で答えてくれた。

「俺は、ムゲン・クロスフォードです、よろしく」

そう言つて、自分の名前を言つた。そして、フアングは頷いた後

「じゃあ、部隊員に紹介するから、ついてきてくれ!」

そう言つて、部隊の人たちが休む憩いの場所、兵営に歩いていく。俺は、周りの景色

に後ろ髪を引かれながらも、フアングの後を追つた。

「新人のムゲンだ、仲良くしてあげてくれ」

そう言つて紹介してくれるフアング。

「よろしくお願いします」

俺は皆に深くお辞儀をした。

「また弄りがいのある人が入ってきましたね」

そう言つて部隊員の一人が呟く。

「…どうでもいいな…」

「…えつと…」

少し冷たい反応に俺が戸惑っていると、フアングがこちらを向いて言う。

「じゃあ、ムゲン。とりあえずお前にはシミュレーターで戦闘を行ってもらおう」

そんな唐突な言葉を聞いて、俺は少し驚いた。

「まあ、そんなに驚かなくてもいい、ただお前用に機体をチューンしたいって、整備兵が言っているな」

理解が追いつかないが、とりあえず頷きながら言った。

「そうなんですか…分かりました」

連れて行かれた場所に、コックピットを再現したシミュレーターが置いてあった。

「これに座って、これで機体を動かすんだ、いいな？」

俺は頷き、イスに腰をかけた後画面に目をやる。

両親を殺した仇である、ジオンのモビルスーツがあった。あれは、ジオン軍のザクと呼ばれた機体だっただろうか…。

カラーリングは緑色で、普通の人間からすれば見るだけで恐怖しそうだった。

だががしかし、それと共に自然と怒りがこみ上げてくる。当然…なのだろうか…。

「うおおおおお!!」

ビームサーベルを引き抜き、相手に斬りかかる。

すると、自然と敵の弱点と、敵が確実に当たる場所が分かるような気がした。相手のザクが右に避ける瞬間、ビームサーベルで、右から左へ斬りかかる。すると、綺麗にザクの体が半分に分断される。

「…次!!」

続けざまにザクがマシンガンを撃って応戦してくる。

マシンガンを盾で受けた後、盾をザクのメインカメラに投げつけた後、ザクを切り裂く。

そして、10分のシミュレーションの結果は、格闘武器での撃破数が30機、射撃武器での撃破数が1機だった。

その結果を見たファングは言った。

「すごいなあ…：本当に！」

「そうなんですか？」

不思議そうに聞き返す俺。

「ああ、すごいよ!!格闘でそれだけ倒すなんて。まあ、射撃は微妙だが、それは今後直せばいいと思うー!」

と、凄く感心している。：射撃に関しては少し啞然としていたが。

「とりあえず、ムゲンのチューンは格闘特化の機体にチューンしてもらおうようにお願い

しておくよ」

そう言つて、ファングは格納庫に走つていった。

「不思議な隊長ですよね」

不意に後ろから声が聞こえたので振り返ると、メガネをかけた少女と、フードを深くかぶつていて分かりにくいのが、たぶん少年であろう人物が立っていた。

「あなた達は…?」

「申し遅れました、私はユーリと言います、そしてこつちの弄り…ゲフンゲフン」

「…八雲道夜だ…」

と、二人とも挨拶をしてくれた。

「俺は、ムゲン・クロスフォード。よろしく」

俺は二人に手を差し出す。

「ええ、よろしく、ムゴンさん」

そう言つて、あえて名前を変え、さらには手も握つてくれなかつたユーリ。

一方道夜は…。

「…よろしく」

そう言つて、素っ気無く手を握り返してくれた。

「二人とも、ここに来てどれくらいなんですか?」

素直な気持ちで二人に言った。

「だいたい2ヶ月ぐらいですかねえ…」

「俺も同じくらいだ…」

二人はそう答えてくれた。

「そうなんですか…ところで、隊長って言うのは…?」

「ああ、この部隊の部隊長はファングさんなんですよ」

そう言つて、ユーリが説明してくれた。

「そうだったんですか…?!」

ファングさんがあまりにもフレンドリーすぎてタメ口になってしまっていた自分を心の中で少し責める。

「だが…ファングさんは別にタメ口でも構わないと思うぞ」

と、俺の心を見透かしたように道夜が言った。

「そうですね、あ、後僕たちに対してもタメ口で構いませんよ、歳も近いことですし」

「…わ、分かった…こ、これからよろしくな!二人とも!」

そう言つて俺は笑った。

すると二人は頷き笑い返してくれた。

「…それにしても、さっきのシミュレーション、凄かったな」

道夜がシミュレーターの結果を見ながら言った。

「そうかな…？俺はそうでもないと思うけど…」

どこが凄いのか、俺には分からなかった。意識している暇がないといったほうが正しいだろうか。

「俺はただ、ジオンの奴らを見てると無性に腹が立ってくるんだ…理由は分かっているんだけどね…」

そう、あの日俺の目の前で母さんも父さんもジオンの奴らに殺された。きっと俺は奴らを死ぬほど恨んでる、ただそれだけなんだと思う。

「そんなことがあったんですね…やっぱりジオンは許す事ができませんね」

ユーリは小さく呟いた。

「…だからこそ戦争を早く終わらせるんだ…」

と、道夜が言った。

しばらく3人の間に沈黙が続いた。この原因は俺だと思い、先陣を切って言った。

「すまない、少し暗い雰囲気にしてしまったな…俺は部屋に戻るよ…」

「あ、じゃあムゲンさんの部屋に案内しますよ」

「そうか…じゃあ俺も帰るとするか…またな、二人とも」

「ああ…またな」

そうやって俺は道夜と別れを告げた後、ユーリの後を追った。

そして、ユーリは俺の部屋まで送ってくれた。なんだかんだいって優しい。

「ありがとう、ユーリ、じゃあ、またな」

「いえいえ。じゃあ私はこれで」

去っていくユーリの背中を見送った後、俺は自分の部屋に入った。

俺はベッドに寝転んで、少し考え事をしていた。

母さんと父さんが殺されたあの日、ジオンを恨み連邦軍の士官学校に入った事、そして、今日会った人たちの事を思い返していた。

気がつくと、俺は長い間眠りについていていた。

ここ数日、まったく眠ることができなかった俺は、かなり長い間眠っていたようだ。

フアングさんの声に俺は気づき、目が覚めた。

「起きたか、ムゲン」

「…どうしました？フアングさん」

俺はベッドから起き上がった。

「出撃の時間だ。先に格納庫に行って待っているからな！」

俺は頷き、フアングさんの後を追った。

格納庫に行くと、既に道夜達が出撃の準備をしていた。

「おーい!!ムゲン、こっちだー!」

フアングさんが叫んでいるように俺は歩き出した。

「こいつがお前の機体、R.G.M-79ジムだ。どうだ?でかいだろ!そんでカッコいいだろ?」

俺がフアングさんの前に来ると同時に、機体の説明をしてくれた。

「これが…俺の機体…」

見上げると、青色のボディに肩には連邦軍を象徴するエンブレムと、この小隊のエンブレムが張ってあった。

「士官学校で習ったとおりに戦えば、死にはしない。大丈夫だ」

俺は頷き、コックピットに乗る。

初めての実践の前に、俺の心は、少し高鳴っている気がした。

「よし、出撃準備いいか?第00特務試験MS隊、出撃だ!!」

フアングさんが最初に出撃する。

次に、一人、また一人と出撃していく。

「八雲道夜、出撃する!!」

そう叫び、道夜が出撃していく。

「では、行きましようか」

と、言って、ユーリも出撃した。
「…ムゲン・クロスフォード、行きます
!!!!」

01 完

02：初めての戦場

宇宙世紀0079・10・4 第00特務試験MS隊、ニューヤーク基地北部に位置する市街地の戦闘に参加。

戦果は、ムゲン機が著しい戦果を挙げた模様。

報告終了。

地上に降りた俺は、まず隊長機であるフランクさんを確認後、レーダーで敵の位置を確認する。

「こちらムゲン、敵影なしです。どうしますか？」

フランクさんに無線を送る、するとフランクさんは言った。

「分かった、少し前に出よう！全機、陣形を崩さず前へ前進！」

その言葉を聞き、他の小隊員もフランクさんに続く。

俺も陣形を崩さず前進した。

すると、突然フランクさんの機体が止まり、しゃがんだ。

「レーダー前方に敵影2機確認した。まだこちらには気づいてないようだな……」

その言葉を聞き、道夜の機体が前に出る。

「道夜！何してるんだ!!」

俺は叫んだが道夜はその言葉を無視し、前方の2機に攻撃を開始する。

道夜の突然の強襲^{きょうしゅう}で、前方の2機はパニックになっている。

「今だ!!」

フアングさんが叫ぶ。

すると、俺以外の機体が2機を蜂の巣の如く射撃する。

「敵機の撃破を確認！射撃、止め！」

フアングさんの言葉と共に全員が攻撃を止める。

俺はそんな光景をただ見ていることしか出来ず、少しへこんでいると、フアングさんが察したかのように言った。

「ムゲン。最初はそんなものだから、気にしなくていい。お前はお前の戦いをしろ」と、優しく言ってくれた。

俺はその言葉を聞き

「分かりました！フアングさん！」

と、頷きながら言った。

「フアングさん、前方から敵影4機、後方から敵影3機……囲まれてる」

と、道夜が言った。

「くっ…場所がバレたか…！各機自分の判断で敵を撃破しろ！いいか、一人で行動するな！」

「了解!!」

全員が散り散りになっていく。

俺も散開して敵を迎え撃った。

ザクが2機迫ってくる、1機はバズーカを持ち、もう一方はマシンガンを持っていた。1機がマシンガンで牽制してくる。

俺は咄嗟にマシンガンをシールドでガードする。

その隙を見て、もう一方のザクが背後に回り、バズーカを放った。

バズーカは見事に俺の機体のバックパックに直撃し、バックパックから電気が走る。「しまった!?!」

俺はパニックになり、機体の制御ができず、機体が前のめりになる。

そこをすかさずザクがヒートホークを握り、止めを刺そうとしてくる。

「ダメなのか…俺は…!」

俺は覚悟を決め、目を瞑った。

そして、次の瞬間爆音が響き渡った。

「え……？」

目を開くと、奥のザクが的確な射撃により撃破され、横たわっている。

そして、ヒートホークを握ったザクは、それに気づき、背後を振り返った。

そして、無線が来て、無線の主は叫んだ

「今ですよ!!」

俺はその言葉で、ジムを起き上がらせ、ビームサーベルを引き抜く。

ザクがこちらを向き、ヒートホークを構えなおす。

一瞬も気が抜けない睨み合いが続く。このときだけは、無線の声すら聞こえず、ただ相手のザクとの睨み合いが続いた。

そして、俺の頭では、先に動いたほうが負ける、そんな言葉がよぎった。

暫く睨み合いが続き、遂に痺れを切らしたザクがヒートホークを持って突撃してくる。

そしてザクが大きく振りかぶったその瞬間を俺は見逃さなかった。

「この勝負、貰ったあああああ!!!」

俺は、両手でビームサーベルを構えて、ザクのコックピット目掛けてビームサーベルで貫いた。

見事にビームサーベルはザクのコックピットを綺麗に貫いた。

ザクが動かなくなるのを見て、俺はビームサーベルを引き抜いた。

「やった…のか…」

ザクを倒した後、緊張の糸が切れたかのように、機体内の空調音が聞こえてくる。

そして、モニターに目をやると、遠距離用ライフルを持ったジムが立っていた。戦闘後に聞いた話だが、そのジムの名前はジムスナイパーと言うらしい。

「やりましたね！」

そんな丁寧な言葉遣いを聞いて気づく。声の主、ジムスナイパーに乗っていたのはユーリだった。

「倒せた…のか…」

まだ倒せた実感がわかなかったが、自分の手を見ると、凄く震えていた。自分が人を殺したからなのか、敵を倒せた喜びからなのか、それは分からなかった。

「スラスターがやられてるみたいですね。とりあえず、修理しましょう。今修理兵を呼びます」

そう言つて、ユーリは無線を切った。

俺はコックピットの中で、少し考えていた。

「何故だろう…倒せたのに…怖い…」

俺は自分の手を思いっきり握った。人を殺してしまったそんな感情からなのか、自然

と体が震えている。

待っている間俺は敵がレーダーにいないことを確認し、コックピットを開く。すると待っていたのは、小さな子供だった。銃を構え、こちらを睨む。大体8才くらいの子だろうか

俺は少し焦ったが、少しの間が空いた後、その少年から話しかけてきた。

「おい、お前、ここで何してるんだ！」

「それはこつちの台詞だ！何でMSに乗ってき…!？」

言い切る前に銃口を向けられ、言葉を失ってしまう。どうやら俺には質問する権利はないようだ。

「機体が損傷して、動けないんだ。だから修理兵を待つてる」

それを聞いた少年は、少し考えた後、こう言った。

「お前…悪い奴なんだろう!!」

【悪い奴】。そんな言葉が頭に響いた。実際自分はどのようなだろう、と少し考えたが、こう言った。

「そうかもしれない…けど、お前たちに危害を加えるつもりはない。分かってくれ」

少年は、銃を降ろして、言ってきた。

「お前、名前は？」

俺は素直に名前を答えることにした。

「ムゲン・クロスフォードだ、お前は…？」

すると少年は黙り込んでしまった。

俺は察した、この子は名前がないのだと。

「…そうだな…お前は一人なのか？」

それを聞いて少し目つきがきつくなつたが、素直に答えてくれた。

「…2人…弟と妹がいる…」

「…じゃあ、お前はお兄さんなんだな」

俺は少し考えた後この子に名前をつけてやることにした。

「お前の名前…俺が付けてもいいか…？」

少年は驚いていたが、少し考えた後、黙って頷いてくれた。

「ありがとう。…お前の名前は、ジェームスなんてどうだろうか？」

ジェームスは頷いた後、笑顔でこう言った。

「…ジェームス…ジェームス…うん！いい名前だな…！」

「喜んでもらえて嬉しいよ」

「今日から俺には名前があるんだ！ちゃんとお前じゃなく、ジェームスって呼んでくれ

よー！」

そんな嬉しそうな姿を見て、この笑顔を守りたいと心から思った。

「ジェームス…突然のことと理解できないとは思いますが、今は戦闘中なんだ。俺の言葉が分かるなら、俺が居なくなっても絶対に建物から出るなよ！」

守りたいから、だからこそ強く言った。

ジェームスは少し驚いたが、頷いて言った。

「…分かった。けどさ、この戦いが終わったら、俺の兄弟にも名前を付けてやってよ!!」

俺は頷き、それを見たジェームスが喜んで機体を降りていく背中を俺は見送った。

しばらくすると、ホバートトラックがやってきて、ジムの修理をはじめめる。

「ムゲン、大丈夫か?」

その無線と共に目の前にジムが降下してきた。どうやら声の主は道夜のようなのだ。

「ああ、大丈夫だ、何とか倒せた」

「そうか、よかった…なんだ!」

突然空から爆弾の雨が降り注ぎ、ホバートトラックが2機とも撃破される。

「…残念だが修理は終わりみたいだな、ムゲン」

爆風が消え去ると、見たことのない部隊章をつけた機体が3機立っていた。

「俺が前が出る、ムゲンは…?!?お、おい!ムゲン、何をしてるんだ!!」

ジェームスたちは俺が守る、咄嗟にそう思った俺は敵に攻撃を仕掛けた。

「俺が相手になってやる!!!」

その言葉が通じたのか、相手のザクの1機が言った。

「そんなボロい雑魚で何が出来んだよ、こりや傑作だぜ!ハハハ!!」

その言葉で俺の頭の中は真っ白になり、ザクに向かって突進した。

「言いやがったな…お前!!!」

俺はすばやく懐に飛び込みザクの腕を切り落とす。

そして、ザクの腹部に蹴りを入れ、踏みつけながらこう言った。

「お前…こいつが雑魚だといったな…?その言葉はな…お前みたいな奴の事を言うんだ

よ!!!」

「て、てめえ!!!殺してやる!!!」

ザクは起き上がろうとするが、踏みつけられている脚のせいで動くことが出来ない。

すると横からもう1機のザクがバズーカを放ってきた。

俺はシールドを構え、バズーカを難なく防いだ。

横のザクが動こうとした瞬間、ビームサーベルによりザクの背中が貫かれた。

「遅かったな…」

道夜の言葉と同時に、コックピットから脱出し逃げていく兵士が見えた。

俺はザクから脚をどかし、すかさずビームサーベルでザクの両足を切り落とす。言う

までも無く、ザクは戦闘不能に陥ってしまった。

「あとー機……だな」

道夜の言葉から、少し焦りを感じる。それほど強い相手なのだ。

相手のザクに目をやった。見た目は普通のザクとなんら変わらない機体だが、何とも言えぬ威圧感が俺達を飲み込み、圧倒する。

「くっ……なんだこいつ……」

道夜も俺も動くことが出来なかった。

すると、相手のザクから無線が来て、こう言った。

「動かんのか、なら俺から行かせてもらおうぞ!!」

そしてザクは俺を狙ってマシンガンを撃ってくる。間一髪、シールドで守ることが出来た。しかし次の瞬間、右側から強い衝撃が走り、機体が吹っ飛ばされてしまった。

「うわあああ!!」

「ムゲン!!……ぐあっ!!」

道夜も、相手の動きについていくことが出来ない。

「くっ……このまま……負けるわけには……」

しかし、そうは言っても、先ほどの衝撃により機体の左腕が言うことを利かないのだ。まともに応戦することなど出来る筈も無かった。

すると、外から一人の影が視界に映る。ジエームスだった。

「やめろ!!ジエームス来るな!!」

その言葉に気づいたザクがジエームスに照準を合わせる。

「つ……やめろおおおおお!!」

俺は、ジエームスをジムで庇うようにうずくまった。

射撃は外れ、近くの建物を燃やす。

俺はジエームスをコックピットの中に入れる。

「大丈夫か!?しっかりしろ!!」

ジエームスは震える手で俺の手をきつく握りしめ、怒りに震えながら搾り出すように

言った。

「妹と…弟を…返せ…!!」

建物に目をやると、無残にも小さな少年と少女が倒れているのが分かった。

「…すまない…ジエームス…」

「俺の…妹と…弟を…!!」

「…ジエームス…しっかりつかまってるんだぞ」

そう言っただけ俺はジエームスに微笑む。

「…?…うん」

ザクに目をやると、道夜のジムのビームサーベルとヒートホークがぶつかり合って、戦っていた。

「道夜！下がってくれ！こいつは…俺がやる…!!」

「だが…!!」

「いいから！道夜はフアングさんを…!!」

少し考えた後、道夜はザクとの間合いを取り、俺に言う。

「分かった、俺がフアング隊長を呼んでくる…!!」

そう言っつて、道夜はミデアに向かった。

「お前だけは…絶対に…!!」

ザクのパイロットはその言葉を鼻で笑う。

「やれるものならやってみろ！」

俺はビームサーベルを持ち、ザクに切りかかる。

しかし、ザクは俺の攻撃を軽々とかわし、左腕を切り落とす。

「くそっ…!!」

「遅いな…遅すぎる…」

挑発するようにザクのパイロットが笑う。

俺は静かに動きを止め、目を瞑る。

ジムが動かなくなったのを見て、ザクのパイロットが言った。

「ふっ…負けを認めたか、ならば死ね!!!」

その言葉と共にヒートホークを振りかぶった、その瞬間、俺はビームサーベルを引き抜き、ザクの胴体を半分にするように切り抜けた。

すると、綺麗に胴体が半分になる。

「ば、馬鹿な…?!何故俺が負け…る!?!」

その言葉を最後にザクは爆発四散した。

ビームサーベルをバックパックにしまい、俺はため息をつく。

そして、震えるジエームスに言った。

「すまない…俺がもつとしつかりしてれば…!!こんなことには…!お前を悲しませることなどなかったのに…!!」

自分を嫌になることは何度もあったが、今回はひどく自分を恨んだ。自分の力のなさに。

ジエームスは泣きながら言った。

「…俺は…どうすればいいんだ…?これから…教えてくれよ…ムゲン!」

その言葉が俺にきつく突き刺さる。

しばらく沈黙が続いた後、フアングさんたちがやってきた。

「作戦終了だ、全員帰還するぞ」

そうして、皆帰還しようとする背中に俺は言った

「皆、お願いがあるんだ……」

俺はコックピットを開け、ジェームスのことを話した。

「そうだったのか……辛かったな、ジェームス。……分かった。その妹と弟、そしてお前のために、ここに墓を立てよう。……こんなことでしか力になれなくてごめん……」

そう言つて、皆で二人分の小さな墓を作り、遺体を埋めた。

俺は二人に名前を付けた。弟のほうにはジョアン、妹のほうにはルインと名づけた。

そして、ジェームスも部隊に連れて行こうとしたが、その時、ジェームスは言った。

「俺はいいよ。ムゲンたちに迷惑かけるのもいけないし……それに、この二人の面倒も見なきゃいけないから」

と、言ったその彼の瞳は、新たな決意を秘めていた。

こうして、ジェームスを残し、俺たちはミデアに戻ったが、俺の気持ちは、この日の曇り空のように曇っていた。

02 完

03：謎の敵との遭遇

宇宙世紀0079・10・6、ジオン公国の本拠地であるサイド3で、ガルマ・ザビの国葬が行なわれた。

その国葬は、全世界規模で中継される。

もちろん、俺たちもしっかりその式を見ていた。

そして、その際に行なわれたジオン公国総帥そうすいであるギレン・ザビの演説も：

「諸君の父も、子もその連邦の無思慮な抵抗の前に死んでいったのだ！」

この悲しみも怒りも忘れてはならない！それを、ガルマは！死をもつて我々に示してくれた！

我々は今、この怒りを結集し、連邦軍に叩きつけて、初めて真の勝利を得ることができきる。

この勝利こそ、戦死者全てへの最大の慰めとなる。

国民よ立て！悲しみを怒りに変えて、立てよ！国民よ！

我らジオン国民こそ選ばれた民であることを忘れないでほしいのだ。

優良種である我らこそ人類を救い得るのである。ジーク・ジオン！」

テレビから沢山の兵士の掛け声が聞こえてくる。

俺はその画面をただボーっと見つめていた。

するとファングさんはテレビを消し、またイスに腰掛けた。

しばらくの沈黙が続いた後、一人の兵士が口を開く。

「何が優良種だ！抵抗できず死んでいった人間はこつちだつて山ほどいるんだぞ!!」

その言葉を聞いた兵士たちは次々に賛同の声を上げた。

そんな光景を見ていた俺は、静かに立ち上がり、兵営へいえいから出て行く。

兵営から出た後、俺の足は自然と格納庫へと向いていた。

格納庫に入ると、整備兵が忙しそうに仕事をしているのが分かる。

入り口に呆然と立っていると、俺に気づいた整備兵が近づき声をかけた。

見た感じ年齢は自分と同じかそれ以下かと言うくらいの少女だった。

髪の色はたぶん銀色で、髪を束ねて帽子に入れているのが見て取れた。

顔は、学校でよくいる目立ちほしめないけど可愛い。そんな感じの子だった。

「どうされました？自分の機体でも眺めに来られたのですか？」

少し違ったが、俺は整備兵にとりあえず頷いてみる。

「そうでしたか。ですが、今あなたの機体は修理中ですけど…」

「いえ、だからこそ、見に行きたいんです」

それを聞いた整備兵は少し考えた後、答えた。

「そうですか…では、こちらへどうぞ」

整備兵は俺の機体の格納庫の前で立ち止まり、俺のほうへ振り向いて言った。

「あなたの機体はこちらです。…では、私はここで失礼します」

そう言つて整備兵は走つて仕事に戻つていった。

俺は自分の機体を見上げた。

左腕は完全に取り外されて、ボロボロになっている。

一瞬だけ、ジムのカメラアイが悲しんでるように見えたのは気のせいだろうか。

俺は驚いて再びジムを見つめたが、先程と変わらないボロボロになったジムの顔が

あつた。

しばらくの間、俺が黙つてジムを見上げていると、背後から誰かが大声で叫んだ。

「敵襲だ!!! 敵襲だ!!!」

俺は驚き、急いで兵営に向かう。

息を切らせながら兵営の中に入ると、兵士全員が慌てていた。

俺は、冷静に周りを見渡す。すると、見慣れた人影を見つけた。道夜だった。

「道夜!!!」

俺は叫んで道夜を呼んだ。

俺に気づいた道夜は、寄ってきて言う。

「敵襲らしい、行くぞ」

そう言っただ道夜は走っていった。

俺も道夜に続いて、兵営を後にする。

格納庫に行くと、見慣れない機体が出撃していくのを見かける。ジオンの機体と連邦の機体が混ざった感じの機体だった。

驚いていた俺に気づいた整備兵が、声をかけて言ってくれた。

「あの機体は、道夜さんの機体で、その名はA E F C^レ—m k^イ2といひます」

覚えにくい名前と共に、ただならぬ強さを俺は感じた。だが、なにより今はそんな事を話してる場合じゃない。俺は焦りながら口を開いた。

「それはいいんですけど、自分の機体は出せますか？」

整備兵は黙って首を横に振った。

俺は分かっていた。あの状態で出れるはずが無いのだ、俺は悔しくも兵営に戻ることにした。

兵営に戻ると、ファングさんと別の部隊の隊長らしき人が言い争っていた。

「この状況をみて分からないのか！今敵が迫ってるんだぞ!!」

ファングさんが拳をテーブルに叩きつけながら言う。

それを横目に大きな態度をとっている兵士が反論した。

「だからさ、道夜が行ったんだらう？なら大丈夫だって言ってるのが分からねえのかよ、このガキ！」

その言葉を聞いて黙っていられなくなった一人の兵士が立ち上がって言った。

「てめえ!!聞いてればいい気になりやがって!フアングさんを舐めるなよ!!!」

「やめろ、気にしないでいい」

今にも殴りかかろうとする兵士をフアングさんが抑えに入る。

そんな光景を見た偉そうな兵士が大笑いと言った。

「はっはっは!なんだそのざまはよ!!俺たちはお前たちモルモットにチャンスをやってるんだよ、分かるか?」

「モルモット」その言葉で今まで必死にこらえていた俺の心で何かが切れる音がした

「何がチャンスだよ……クソ野郎……!」

全員の兵士がこちらを見る、本当はとても恥ずかしい状況だろうが、今の俺にはそんな恥ずかしさは微塵も感じなかった。

フアングさんを馬鹿にするだけでなく、部隊まで馬鹿にした、そんなやつに一言言わねば気がすまなかったからだろうか。

俺を見て、あの兵士が笑いながら言う。

「何だ？何かと思えばこの前着任して颯爽とジムを壊したクソ下手な伍長殿じゃありませんか。こつちでは噂になってますよ！はははははは！！」

部屋中が笑い声で埋め尽くされる。

本当だったらいつをぶん殴っていただろう、だが俺は、それを堪えて大声で叫んだ。「こんなことしてる暇があるなら出撃したらどうだ、クズ共！それともジオン共に撃たれて死ぬのがお望みかよ!!」

「お、おいムゲン!!」

フアングさんの言葉も振り切って、俺は走って格納庫に向かった。

そして、自分の機体に乗るこむ、それを見た整備兵が驚きながら言った。

「ムゲンさん！無茶です！流石にその機体では今度こそ死にますよ!?!」

俺は落ち着きながら整備兵に一言言った。

「分かっている。でも今救わなければならぬのは仲間の命だ!!それに、俺はこんなところで死にません!だから、修理の準備しといてくださいね」

そう言って俺はコックピットを閉めた。

俺はMSを起動し、出撃する。幸い足がやられていなかったおかげで、なんとか普通に歩くことは出来た。

格納庫から出ると、ジオンのザクは3機ほどだろうか、道夜が既に戦っている。

道夜は対艦刀で1機のザクを斬り、さらに続けざまにハンドガンで2機目の機体を撃ちぬいた。

油断した道夜の背後に切りかかるザクを俺はビームサーベルで切り裂く。

「ありがとう、ムゲン」

俺は頷いたあと、リーダーを確認した、あと3機こちらに向かってくるのが分かる。

そのうちの1機が、他の2機と比べてあきらかに速い速度で迫ってくる。

「まだ来る……」

俺が前を向くと、1機、遠くからでも分かる、白い色でカラーリングされたザクがこちらに向かってくる。

白いザクは道夜に向かってマシンガンを放つ。

道夜はすかさずマシンガンを回避する。

回避した先に待っていたのは2機目のザクだった、ザクは道夜を待っていましたというかのようにバズーカを放つ

バズーカは道夜の機体の肩に直撃して、道夜の機体が動かなくなる。

嫌な予感がしたが、白いザクが今度はこちらにマシンガンを放ってくる。

「くそっ!!」

間一髪でマシンガンを回避する。次に俺が前を見た瞬間、白いザクがこちらにバズー

力の銃口をこちらに向けているのに気づき、悟った。

「……くっ……」

軍人になってこんなことをしたくないという自分の気持ちを押し殺し、ビームサーベルを手から落そうとした瞬間、なんと白いザクのパイロットから無線が入った。

「そんな機体で俺と戦う勇氣は認めてやる、だがそいつじゃ勝てないぜ？ 無理に戦う必要はないんじゃないかな？」

声の主は、挑発するような口調でもなく、優しく言ってくれた。

確かに彼の言う通りだった、今の状態で実際戦えば俺は確実に死ぬか捕虜のどちらかしかない、だから生き残れるわけがないのだ。

俺は、恐る恐る無線の主に話をしてみた。

「あ、あの……どうしてそんなことを……？」

「どうして……そりゃそんな奴を倒したって面白くないだろう……？ それに、連邦ジオン関係なく人間には変わらないからな、無駄に命はとらないさ」

こんな優しい人がジオンの軍人なのかと、俺は心の中で思った。いつもジオンは人命なんて何とも思わない人ばかりの集団だと思っていたからだ。

でも、俺はそれを否定した。ジオンに優しい人などいないと、そうでも思わなければ、どうして俺が軍に入ったのかですら分からなくなってしまうから……。

だからこそ、俺は覚悟を決め、彼に言った。

「そうだとしても、俺には基地を守る使命がある。悪いが引き下がれない!!」

ビームサーベルを構えなおし、気を引き締める。

声の主はため息をついた後言った。

「仕方ない…なら、やるしかないか…」

白いザクは間合いを取った後、バズーカを投げ捨て、ヒートホークに持ち変える。

「ビームサーベル相手に遠距離じゃ、分が悪いだろう?こいつ一本で相手してやる、来い!!」

「舐めるなあああ!!」

俺はビームサーベルで相手を斬りに行く、しかしその攻撃は軽々と避けられ、反撃のヒートホークがコックピット前を掠める。

ヒートホークの熱気でコックピットの装甲が焼き切られる。

「くっ!何故だ…!何故当たらないんだ!!」

「何故かって?それはな、お前の動きが遅すぎるんだよ!!」

そう言って白いザクはタックルを仕掛けてくる、それをなんとか回避する、そしてビームサーベルで奴の背後を斬った…が

「そこにはもういないぜ?」

「何!?!」

俺が振り返ると、そこに白いザクが立っている。

「言っただろう…お前の反応が遅すぎるんだと!」

「くそお…!畜生!!」

白いザクに対して、俺は完全に翻弄されていた。

「これで終わりにしてやる!!」

白いザクは凄いい速さでヒートホークを横薙ぎに斬つて来る

「一瞬でも…一瞬でもいい…奴に勝てる力を…!」

「お前の速度では追いつけん!終わりだああああ!!」

その瞬間、俺の頭で何かが閃いた。奴のヒートホークの高さは、ジムがしゃがめばギリギリ回避できる高さだ。ならば回避して腕を切り上げて落せばいいと。

「頼む!!ジム!!」

その言葉と共にジムを動かす。

そして、ジムは体を低くし、ヒートホークをギリギリでかわす。

「何だと!?!」

「この状態から立ち直ることはできないはずだ!!これで…終わりだああああ!!!」

俺はビームサーベルを白いザクの腕目掛けて切り上げた

腕は見事に両断され、ヒートホークと共に地面に落ちる。

「くっ……腕が……!」

俺はビームサーベルを白いザクに突きつけ言った。

「形勢逆転だな!」

「ふっ……中々やるようだな、お前名前はなんと言う」

「ムゲン・クロスフォードだ、お前は……?」

「クロノード・グレイスだ、また会おう」

そう言って、クロノードは2機のザクに命令を出し、撤退していった。

そんな彼の背中を、俺はただ呆然と見つめていた。

しばらくすると、他の味方がやってきて、残念そうに言った。

「何だ、敵は逃げちまったのか……残念だな」

声の主で分かった、さっきの偉そうな兵士だと。

「くっ……敵は……」

動かなかつた道夜の機体が動いた、どうやら気絶していただけみいだった。

「なんだ、お前らみすみす逃がしたのかよ、情ねえやつらだな!!ははははは!!」

偉そうな兵士の笑い声が響く、俺は黙って、道夜のほうを向き言った。

「帰ろう道夜、敵はいなくなつた」

「…分かった」

俺たちが帰ろうとすると、偉そうな兵士が言った。

「待てよお前ら!! 目の前で敵を逃がす奴はどうなるか知ってるだろうな?」

嫌な予感がして、振り返ると奴の機体が銃口をこちらに向けている。

「何のつもりだ!!」

「敵を見逃す奴が軍人を気取るなんて馬鹿げてるんだよ! だから俺がお前達を裁く」

このとき、俺の心ではもう誰が味方なのかも分からなくなっていた、彼の言動はまさしくあの日のジオンの軍人と同じだったのだから

こころえ切れない俺の心の言葉が口から自然と漏れ出していた。

「何でだよ…何なんだよおおお!! 俺は!! 俺は何を信じればいいんだよおおお!!」

「何だ?」

「くそっ!! 敵は誰なんだ!! 一体どつちが正しいんだよ…俺は…誰と戦えばいいんだ…!!」

「懺悔にしちやあ面白みもねえなあ!! ははははは!!」

そんな光景を見ていた道夜は

「そいつで俺たちを撃ったその時、お前は連邦から反逆罪として追われることになる

ぞ!!」

奴はその言葉を鼻で笑い、言った。

「んなこたあ気にしちやいねえ…ただ役に立てない兵士は切り捨てるのみだろうが！それが連邦だ!!」

「違う…人はどんな形であれ役には立ってるんだ…役に立たない人なんか誰一人いないんだ!!!」

「ふん！やはりくだらん！その偽善では何も守れねえんだよ!!!」

奴は銃口を俺に向ける。

「やらせん…!!!」

道夜はすばやく奴の懐に飛び込み、奴の腕から武器を落させた。

「くっ!!!」

「諦めろ、所詮お前はその程度だ」

「ああ、そうだな、体を弄繰り回された化け物には勝てねえわ」

「…勝手に言ってる」

そう言っつきびすを返し、道夜は俺に帰るぞと言って歩いていった。

俺も道夜の後を追って、基地に戻った。

格納庫に戻ると、沢山の整備兵が待っていた。

そして、兵営の前にファンクさんやユーリ達俺たちの部隊の人たちが笑って待っていて

た。

コックピットから降りると、整備兵が待っていた。

「怪我はありませんか？」

と、心配そうに見てくる。

少し恥ずかしくて、俺は黙って頷いた。

「そうですか。では修理に入ります！ ゆっくり休んでくださいね」

そう言つて整備兵はジムの修理に入る。

俺はジムから降り、格納庫を見渡す、すると丁度道夜が機体から降りてきたところだった。

「道夜！」

俺は道夜に声をかけ、手を振った。

それに気づいた道夜は、こちらに歩いてくる。

「どうした、ムゲン」

「さっきは助かった。ありがとう」

「…気にしないでいいさ、それじゃ」

そう言つて去つてこうとする道夜を俺は止めた。さっきの話を聞きたかったからだ。

「…道夜…ちよつと待って」

「どうした？まだ何かあるのか？」

「いや…その、聞きづらいんだが、さっきの体を弄繰り回されたって…どういう…」
「その話は…今はしたくない…悪いな…」

俺が言葉を言い切る前に道夜はそう言つて兵營に帰つていった。

俺も彼に続いて帰ることにした。

ファンングさんに今回の戦闘であつたことを一通り話した後俺は自分の部屋に戻る。

部屋に入つて俺はベッドに飛び込んだ。

「俺…何で連邦軍に入ったんだっけな…」

今日の一件で頭の中がごちゃごちゃになつてしまった、誰が正しいのか…俺はどうすればいいのだろう…

「はあ…」

しばらくそうしていると眠気がしてきた、少し…眠ろう…そうつぶやき俺は眠りについた。

微かに声が聞こえた…優しい女性の声…誰だろう…俺を呼んでいるのは…

「ムゲンさん!!」

ベッドから起き上がると、息を切らした銀髪の整備兵がいた、どうやら声の主は彼女の声だったらしい。

「どうしました…?」

目をこすりながら言った。

「その…あの…ムゲンさんのジムなんですけど…修理…のついでで、改良したのですが…見てくれませんか?」

「え…?改良…?」

「はい。ムゲンさんのための機体に改良してみたんです」

頭の中でしばらく考えた後、俺は笑って言った。

「そっか、よし!見に行こう!」

俺は整備兵と共に部屋を後にした。

03 完

04：様々な心と意思

宇宙世紀0079・10・07 第00特務試験MS隊、オデッサ作戦のため、連邦軍の集結地ワルシヤワへ進行を開始する。

「MSの格納急げ!!」

慌しく他の整備兵たちが仕事をしているのを横目に、俺は彼女についていく。

そして、自分の格納庫に案内される。

見上げると、修復されたジムが佇んでいた。

「これは…」

見たところあまり変化は見られなかったが、なにより自分のジムが修復されているのが単純に嬉しかった。

「どうです？しつかり治ってますけど…」

「ありがとうございます。でも…改良したと言われても…あまり見た目が…」

その言葉を聞いた彼女がふっふっふと笑って言った。

「それは、戦場に出て初めて変わったって思えるはずですよ!」

と、自信満々に言われて、俺はただ頷くしかできなかった。

「そういえばムゲンさん。さっきミデアのほうでフアングさんが招集をかけていましたよ。行ってみてはどうですか?」

「…ミデア…?」

その言葉に少し驚いた彼女は、少し考えた後口を開く。

「えっと、ミデアって言うのは、MSを輸送したり、物資を輸送するための戦術輸送機なんです。そこには、生活するだけのスペースもありますし、結構快適なんですよ?」

「…そうなんですか…。とりあえず、そこに行けばいいんですね?」

「はい!そこでフアングさんが待つてるはずですよ!」

「分かりました。じゃあ向かってみます」

彼女に一言お礼を言って、格納庫を後にした俺はミデアに向かった。

会議室に入ると、すでに部隊員が全員集まっていた。

「お、ムゲンが来たか…」

フアングさんが俺を見た後、机に紙を広げて言った。

「これより我が部隊はオデッサ作戦のためワルシャワへの移動を開始する、移動期間は想定4日ぐらいだろう」

「現在この大きな作戦のために、必要な食料と、機体を格納中だ、それだけで…」

「今回の作戦、俺たちは最前線の第一陣として参加する事になった」

その言葉で会議室中の人が驚いた。もちろん俺もだった。入隊してすぐ最前線で戦うことになるなんて…。

「皆には悪いが、俺達は俺達なりにできることをするしかない、分かってくれ…」

「さて、以上で報告は終了だから、各自仮眠でもしておいてくれ！解散」

その一言で全員が司令室かれ出て行く。

このままここにいてもすることがないので、俺は司令室を後にし、格納庫に向かう。

「ムゲン…」

廊下を歩いていると、聞きなれた声が背後から聞こえた。

振り返るとそこには道夜が立っている。

「どうしたんだ？道夜」

「いや、さっきの作戦、どう思った？」

珍しく道夜からの質問だった。さっきの作戦、つまり最前線で戦うという事の意味だろうか。

「うーん…何だろう…何とも言えない…」

「そうか…俺は適任だと思う。俺たちが最前線で戦うのは…」

「何で…」

それを聞くのかというような顔をしながら彼は言った。

「俺たちは…モルモット部隊だからな…」

「そんな…！モルモット部隊だからって最前線なんて…!!」

道夜は鼻で笑った後言った。

「軍の奴らはそうとしか考えてないだろうよ。それに俺たちはどうあがいても軍人だ。上の命令は絶対なのさ…」

「でも！でもそんなことって…！」

「ムゲンが認めようが認めまいが、決まったことは変えられない…：運命に抗えないように…」

「くっ…！」

道夜は少しため息を吐いた後、静かに言った。

「俺が呼び止めたのはそんな嫌みを言うために止めたんじゃないんだ、なんせ俺も大規模な作戦に参加するのは初めてだからな…お前はこういう心境なのかと思ってな…」

「そうだったんだ…。なんか…すまない…」

「気にするな。俺も悪かった…：。どちらにせよ、今回の作戦は連邦軍の反撃の狼煙のろしを上げる作戦だ。絶対に生きて帰ろう」

俺が頷くと道夜は少し笑った後、歩いていった。

そんな道夜の背中を見送ったあと、俺は再び格納庫に向かった。

すると丁度、俺のジムを格納庫からミデアに搭載する準備をしていたところで、俺に気づいた整備兵がこっちに歩いてきた。

「あ、ムゲンさん、悪いですけど今は忙しいので、兵営で休憩しててください」と、格納庫を追い出されてしまった。なんか虚しい気持ちになった。

俺は仕方なく兵営でおとなしく待っていることにした。

「お、ムゴンさんじゃないですか。どうしたんです？」

「あ…：ユーリ」

「と、言うわけで紅茶でもどうですか？」

「どういわけだよ…：」

「まあ固い事いわずに。今準備するんで待っててください」

言いながらも手馴れたように紅茶を淹れる準備をしているユーリ。なんか、結構うるさい奴だな。とか思ったりした。

1時間くらい経つただろうか、ユーリが淹れてくれた紅茶を飲みながら雑誌を読んでいるとフアングさんがやってきて言った。

「第00特務試験MS隊はこれよりワルシヤワへ向かう！全員ミデアに乗りこめ！」

フアングさんが言うのと部隊員が次々に兵営から出て行く。

俺も兵営から出てミデアに乗り込んだ。遂に大規模なオデッサ作戦のために俺達部隊は集結地ワルシヤワへ向かうことになった。

ミデアでの移動は4日間：何もなければの話だとフアングさんは言っていた。

ミデアが出航した後、フアングさんが全員に司令室への招集をかけた。

俺は司令室に向かった。

司令室に入ると、まだフアングさんしかいなく、とりあえず俺はイスに腰をかけることにした。

「ムゲン、来てもらって悪いが、全員集まるまで待つていてくれ」

俺はフアングさんに頷いて、少し考え事に耽^{ふけ}ることにした。

ジオン軍は本当に敵なのか：そんな感じの事を茫然と考えていた。

「…ムゲン…」

フアングさんの声で我に返る。周りを見渡すともう皆集まっており、俺に全員の視線が集中していた。

「あ…すいません…」

「よし、ムゲンの妄想も終わったみたいだし、話をするとするか」

俺は少し恥ずかしくなり俯いた。

「冗談はさておき、航行期間は4日間。というわけだが、前も話したとおり航行中に何も

なければの話だから、もしもの時に備えていつでも出撃できるように機体の整備はしておいてくれ」

「オデッサ作戦については現地で説明する、今は皆ゆつくりしてくれ。では解散」

皆散り散りに戻っていく、俺はファングさんにあの偉そうな兵士の事を聞いてみた。

「ファングさん…この前のファングさんと言い合っていたあの偉そうな兵士って一体誰なんですか…?」

「あの人か…あの方はシゼル・クライン大佐。軍の上層部のお気に入りの軍人だ。あまり下の人たちからは風当たりは良くないが、パイロットの腕は本物だ。…それがどうかしたか?」

「いえ何でもないです…。ではこれで」

そう言つて俺は司令室を後にした。

司令室を出ると、俺を待っていたのか、ジムを改良してくれた彼女が待っていた。

「あ…ムゲンさん…」

「あれ…どうしましたか?」

彼女は少し照れくさそうに言った。

「あの…少し一緒にお話しませんか…?」

「ああ、いいですよ。でもここで話すのもなんだね…」

「あ、じゃあムゲンさんのジムのところでどうでしょうか…」

「え…ああ、まあいいよ。じゃあそこで話そう」

「はー！」

俺と整備兵は格納庫へ向かう途中も話をした。どうして軍に入ったのか、とかほとんど彼女からの質問ばかりだった。が…。

でも、彼女が幸せそうだったので、あまり気にしなかった。

格納庫へ着くと、俺のジムのほうへ歩いていく。

コックピットを開き、シートに座る。彼女は、作業台についている小さなイスに腰をかける。作業台はコックピットの高さまで上がると自動的にとまった。

「戦闘のとき以外で座るなんて思ってもみなかったよ…」

整備兵の彼女はクスツツと笑って言った。

「私も、こんなところで話すなんて思ってませんでしたよ」

「そういえば、ずっと聞かなかったけど、あなたの名前は何て言うの…?」

「私はリナ・ハートライトって言います。ムゲンさん改めてよろしく願いますね！」

と元気よく自己紹介してくれた。

「うん、よろしくねリナさん」

俺とリナさんは互いに握手を交わした。

「そういえば、リナさんはどうして整備兵として軍に入ったの？」

その言葉を聞いて少し顔が暗くなるが、一息ついた後口を開いた。

「私の父は軍人さんだったんです。でも機体の整備不足のまま出撃して、機体が大気圏での戦闘に耐え切れなくてそのまま……」

「それを聞かされたのは、ブリティッシュ作戦の後でした。その日、丁度私が15才の誕生日で……その知らせを聞いて私はその場に崩れ落ちました……」

「それで、連邦軍の整備兵として、もう二度と父のような被害者を出さないようにと志願したんです……おかしいですよね……こんなことで整備兵になるなんて……」

俺は彼女の手を取った、手は柔らかく、とても暖かかった……母さんの手も……こんなに暖かくて優しかっただろうな……と思いつつ言った。

「おかしくなんかないさ……俺が言えるのかは分からないけど……君は正しいと思う……君の整備で救われた人だって沢山いるはずだよ」

「でも……私、整備兵としてしつかり出来てないと思つて……皆からは整備兵に向いていない……」

「何を言つてるんだ。自分が正しいと思つたならそれを曲げずにやればいいんだよ。誰に言われようが自分の意思が大事なんだ」

「君が整備兵としてパイロットを支えたいと思うのならその意思が大事だと思うんだ……」

リナさんは黙りながら頷いた。彼女の顔を見ると、今にも泣きそうな顔だった。

「だ、大丈夫だよ！リナさんなら優秀な整備兵になれる。俺が保障するよ！と、言っても……俺はそんなに偉い人じゃないんだけどね……ははは……」

と、笑うと、リナさんも少しだけ笑ってくれた。

「そ、そうですね。大切なのは自分の意思ですよね……」

「そうだよ、だから気にしなくていいんだよ」

「ありがとうございます、少し前向きになりました！」

少しどころじゃないだろうな、と思ったがでも元気になってくれたよかったです。思った。

しばらく話していると、下から整備兵が叫んで言った。

「おーい！リナー！ちよつと手伝ってくれー!!」

それに気づいたリナさんは一言返事をし、俺に言った。

「すいません、ちよつと手伝ってきますね。また今度お話ししましょうね」

俺とリナさんは作業台に乗り、床まで降りた。そしてリナさんは整備兵と仕事に戻った。

その背中を見送った後、俺は格納庫を後にした。

廊下を歩いていると、突然ミデアが揺れた。

バランスを崩した俺は、地面に倒れてしまう、運悪く頭を打ち、目が霞んでいく、そして、そのまま俺は気絶してしまった。

「くっ……いてて……」

次に目が覚めたのは、自分のベットだった、体を起こすとまだ頭がクラクラする。

「気がついたか……」

声のほうを見ると、見知らぬ兵士が腕を組んで座っていた。

「あなたは……?」

「……フミネだ。MS傭兵をしている。よろしく」

「あ、はい……それで……さつき……」

全て言い切る前にフミネさんは言葉を遮る様に言った。

「今はジオン軍の勢力下にある場所だ。つまりそこを横断して集結地に向かうらしいが、残念だが敵に位置がつかまったみたいで今コイツは停泊中だ……」

「じゃあ……!」

「察しがいいな。お前の面倒を見ていた俺とお前以外はコイツの防衛に借り出されて

る」

「行きます…！自分も!!」

「そうか…じゃあ行くとするか…」

フユミネさんは立ち上がり、俺の部屋から出て行く。

フユミネさんに続くように俺も自分の部屋を後にした。

俺とフユミネさんは走って格納庫に向かう。

格納庫に着くと、リナさんがこちらに気づいて走って寄ってくる。

「ムゲンさん!」

「話は聞いているから、ジムを…!!」

「分かりました!整備長!06番のコックピットハッチを開けてください!」

無線でリナさんが叫ぶ。

無線から声が聞こえてくる。

「了解した、06番ジム・コンバットカスタム、ハッチオープンだ!早く乗りな!!」

その言葉を聞いた俺はジムに向かい走り出す。

すでにフユミネさんはミデアから出撃し、ジム・コマンドを駆り格納庫前で敵と交戦を始めている。

俺は、ジムに乗り込み全てのシステムを起動させる。

「よし、システム起動……。動かせる……！」

ジムを出撃しようとする、無線が入る。どうやら声の主はリナさんだった。

「ムゲンさん……かならず帰ってきてください！」

そんな言葉を聞いて、なんか恥ずかしくなりながら言葉を返した。

「……うん。分かっている……！」

「ムゲン機出撃します!!!」

俺はジムを動かし、格納庫から出る。

「来たか。ムゲン」

「フユミネさん、俺は他の仲間の援護に向かいます。ここは……」

「言うまでもない。任せておけ……」

「はい……！」

俺は、レーダーを確認し、移動を開始する。

周りを見ると、道夜は東側で敵を圧倒的な力で倒し、フユミネさんは格納庫前で敵からの攻撃を防衛している。

ユーリは南側の敵を冷静に対処し、そしてファングさんは西側で敵をほんろう翻弄しながら

戦っている。

俺は手薄になってきている北側を2機の味方と共に迎撃する事にした。

正面に5機の敵が迫ってきているのが目で見ても分かる。

俺はビームサーベルを引き抜く、いつものビームサーベルと違うのには一瞬で気づくことはできたが、どうやって扱えばいいのか、それは分からなかった。

1機のザクがマシンガンで牽制けんせいしてくる、俺は頭部バルカンを撃った、すると着弾した地面から周辺にスモークが散布された。

「これは…なるほどな…！そういうことか…！」

混乱しているザクを俺はビームサーベルで切り抜け撃破する。

2機目のザクがバズーカを放ってくる

「くっ…間に合うか…!？」

俺はすかさずスモークバルカンをバズーカにあて、相殺し、俺の機体を隠すようにスモークが散布された。

「もらったあああ!!！」

戸惑って隙を見せているザクをビームサーベルで切りかかり撃破する。

さらに続けざまにビームサーベルを横に切り裂く。そしてもう1機撃破する。

「後2機…！」

すると正面から鋭い弾丸が味方を貫く。

「う、うわああああ!!」

「何…!?!」

すると、白いカラーリングのザクが横の茂みから立ち上がり、マシンガンを放ち、混乱したもう一機のジムをヒートホークで切り裂いた。

「あの機体…!!まさか…!」

「そうだ…そのまさかだ…!」

ザクのパイロットの声が聞こえる、やはりあの時のパイロットだった。

「クロノード・グレイス…!」

「ほお…覚えていたのか…ムゲン・クロスフォード!!!」

「まさかここで会えるとは…嬉しいぞ…!」

クロノードは1機のザクに命令する。すると、ザクは後退した。

「どうせだ、今度こそけりをつけようじゃないか。…なあ…!」

クロノードはそう言って一気に間合いをつめマシンガンを放つ。

咄嗟に俺はシールドでガードする、それを予測していたのか、ザクは横薙ぎにヒートホークを振り、シールドを真っ二つにする。

「くそっ…!シールドが…!!」

「前と変わらず遅すぎるぞ……ムゲンよ!!」

「何を……」

俺はスモークバルカンを放ち、スモークを散布した。

「ほお……スモークか……。これで混乱させてる間に近接に持ち込むわけか……。だが……！」

クロノードのザクは飛び上がり、ヒートホークで切りかかってくる。

俺はビームサーベルで受け、鏝迫り合いの形になる。

だが、こちらのサーベルの出力が低いせい、ザクのヒートホークに若干負けている。

「く……っそお……!!」

「遅ければ力もないか！こんなことで勝てると思うなよ!!!」

「ちく……しょお……!!」

完全に圧され、負けかけて、全てが遅くなるような、そんな感覚に陥る。

そんな時、突然無線が入り、声の主は叫んだ。

「ムゲンさん!!右のレバーを奥に押し込んで!!」

「え……?」

「早く!!」

俺は言われるがままに右のレバーを思いっきり奥に押し込んだ。

するとビームサーベルの出力が一気に跳ね上がる。

「な、何だ!? ビームサーベルの出力が…上がってる…!?」

「ぐ…おとおお!!」

今ならいける、自分の勘が告げた

突然ビームサーベルの出力が上がり、さすがに動揺を隠せないクロノード。その隙見逃さず、俺はビームサーベルでヒートホークを吹き飛ばす。

「な、何!?」

「俺の…俺の勝ちだああああ!!!」

俺はビームサーベルでザクの頭部を切り落とし、続けて右腕をも切り落とした。

「何だと!? どこにそんな出力を上げる力があるんだ!!」

「こいつは…リナさんの…整備兵の意思の心だ!!」

「意思…だと…!?」

「そうだ!パイロットを一人でも整備で救えるならと!必死に考え、編み出した!彼女の意思の成せる業だ!!!」

その言葉を聞いたクロノードは、笑いながら言った。

「ふ…ははは!!やはり面白いな、ますます気に入ったぞムゲンよ!!」

「何…?」

「俺はこの状態じゃ戦えん撤退する。またお前と戦える時を楽しみにしている」
「あ……!!!ま、まて!!!」

俺の言葉を無視し、彼の機体は闇夜に消えていった。

俺は、レバーを見つめる、どうやらこれでビームサーベルの出力を調整できるようだ。俺はビームサーベルをバックパックにしまった後、ドクドクと脈打つ心臓に手を当てながら格納庫前に戻った。

格納庫前では、既に戦闘が終わっており、全員が集まっていた。

俺は格納庫にMSを置いた後、コックピットから降り、フアングさんのところへ向かった。

「ムゲン、お疲れ様。大変だったみたいだな…」

「あ…はい、でも大丈夫です…」

「そうか…?無理はするなよ…」

俺は頷いて自分の部屋に戻ってイスに腰をかける。

「…ふう…疲れたな…」

さっきの戦いを思い返してみると、自分が随分恥ずかしいことを言っていたのを思い出し、顔が真っ赤になる。

「でも…まあいいか…。さて…お茶でも淹れるか…」

俺は立ち上がり、ポットに水をいれ、湯を沸かす。

湯が沸くのを待っている、突然ドアをノックする音が聞こえた。

「誰ですか…?」

ドアを開けると、リナさんが心配そうに立っていた。

「あれ…リナさん。どうしましたか…?」

「えっ…いや、あの…さっき元気なさそうだったから…少し心配で…」

自分ではそうは思っていないのだが、他人の目からはそう見えたのだろうか…。

「そっか…心配してくれてありがとう。ここで話すのも何だし、部屋に入りなよ」

そう言っただけで俺は手招きをする。

「えっ…と…でも…」

彼女は少し戸惑った後、一息ついて俺の部屋に入ってきた。

部屋に戻ると、丁度湯が沸いていて、俺はコンロの火を消し、カップにティーパックを入れ、お湯を注ぐ。

そして、小さな机の前で座っている彼女にお茶を差し出した。

「お茶だけど…大丈夫…?」

「あ、ありがとうございます…!」

彼女はお茶を受け取り、少しずつ飲んだ。

俺も床に座り、お茶を飲む。

しばらくの沈黙の後、俺は彼女にお礼を言った。

「リナさん、さつきはありがとう。あの時教えてくれなかったら俺は今頃……」

「い、いえっ！でも……無事でよかったです……」

と、嬉しそうに笑った。その笑顔が少し可愛く見えて、見惚れているのをお茶を飲んで誤魔化した。

そしてまたしばらくの沈黙が訪れる。彼女は腕時計を確認し、お茶を飲み干して言った。

「じゃあ私、帰りますね！まだ仕事があるので！お茶ご馳走様でしたー！」

「ああ……お仕事ががんばってね」

「……はい!!」

笑顔で頷いた彼女は俺の部屋から出て行った。

俺はベットに横になり、しばらくぼーっとしていると、自然と瞼が重くなり、俺はそのまま眠りについた。

05：オデッサでの激闘

宇宙世紀0079・10・20 連邦軍各部隊が集結地ワルシャワに到着、そして野戦本部が設営された。

宇宙世紀0079・10・25 オデッサ作戦最終確認後、陽動部隊を各地に派遣。

そして、遂には宇宙世紀0079・11・07 06:00 ヨーロッパ鉾山地帯を制圧しているジオン軍の壊滅を目的とした連邦軍の反抗作戦、オデッサ作戦が決行された。

「作戦を説明するぜ！よく聞いておいてくれ！」

俺達、第00特務試験MS隊の全員は会議室に招集され作戦の説明を受けていた。

「俺たちはオデッサ作戦の第一軍として参加する事になっている。後の軍のことを考えて、ジオンの勢いをくじくことにする、そのためには俺達なるべく多くの敵を撃破する必要がある」

「配置はこうだ。俺と、フユミネ、そしてもう一機はミデアの防衛に努める。そしてムゲン、道夜、ユーリで正面の敵を頼みたい。出来るか？」

俺達3人は黙って頷いた。

「よし、じゃあ残りは左右の防衛を行ってもらう」

そして最後に、フアングさんは皆を見渡し力強く叫んだ

「俺たちは負けない！誰一人として欠けず、生還したら皆でメシ食おうぜ!!」

全員が頷き、格納庫へ向かう。俺は道夜やユーリと共に格納庫へ急いだ。

全員が出撃して行き、俺もジムのコックピットを開き、シートへ座った。

ハッチを閉めようとした時、リナさんが顔を見せてくれた。

「ムゲンさん…行くんですね…」

彼女は少し悲しそうに言った。

「うん…。この戦いで連邦軍の反撃が始まる…！大丈夫だよ。きつと帰ってくるから

…」

「でも…」

彼女の言葉を遮るように俺は言った。

「俺はこんなところでは死なない…。だから…今回も修理の準備しておいてね…リナさ

ん…」

俺はそう言って彼女の頭を撫でてあげた。すると彼女は本当に幸せそうな顔を見せ

てくれた。

「じゃあ、もう行くよ…」

「あ…」

彼女の言葉を振り切り、俺はハッチを閉めた。

「大丈夫…きつと帰るから…」

モニターに映る彼女に一言言つて、俺は出撃した。

俺達3人は前線に立ち、目の前から迫ってくる数多のザクを睨み付ける。

「時間は…?」

「…5時59分…」

「いよいよですね…」

全員が配置に着いたのを確認したフランクさんが叫けぶ。

「皆!行くぞ!!作戦開始だ!!」

ついにオデッサ作戦…俺たちの戦いが始まった。

「正面の敵影…10!!」

「…行くぞ!!!」

「さあ、撃ちますよ…!!」

俺はザクに接近し、ビームサーベルで切り裂く。さらに続けて2機目のザクを駆け抜けざまに切り裂いた。

「遅い……」

道夜はハンドガンで2機を撃ちぬき、彼の背後から迫るザクをユーリがスナイパーで撃ちぬいた。

不意にユーリの背後を見た道夜が叫ぶ。

「つ!!ユーリ!後ろだ!!」

ユーリが振り返ると、ザクがヒートホークを構えて切りかかってくる。

「残念でしたね!!」

ユーリはザクの腹部を殴る。その瞬間腕に格納されたビームサーベルが展開され、ザクを貫いた。

「すごい……」

「この日のために改良してもらいましたからね……!当然です!」

「さて……残る敵も殲滅するぞ……!」

俺とユーリは頷いた。

俺は1機のザクのメインカメラにスモークバルカンを当てる。弾丸はメインカメラに着弾し、そこからスモークが散布され、混乱に陥るザクを、ユーリのスナイパーライフルが撃ち貫いた。

「ナイスだ!ユーリ!」

「援護はしますよ！いつでも仕掛けてください！」

一方道夜は、4機のザクに対して、ハンドガンをしまい、大型のビームライフルを取り出し、そのうちの1機を撃ち抜き、さらに対艦刀で2機目のザクを貫く。

俺はビームサーベルの出力を最大にし、道夜に叫んだ

「道夜！下がれ!!!」

俺はビームサーベルを構え、縦に一刀両断する。

1機は真つ二つになった。2機目は熱に耐え切れず半分溶けてしまい、機体から脱出していく兵士がいるのが分かった。

俺はビームサーベルの出力を下げて、通常の状態に戻した後、エネルギーパックをリロードする。

「一息ついたかな……」

俺はため息を吐いて、少しリラックスする。

「いや……まだだ……!」

レーダーを確認すると、3機ほど前方から接近してくるのが分かった。

俺たちはまた武装を構えなおす。

だが、3機の機体は俺たちに気づくと、ジオン兵はこちらに迫ってきて無線を繋げた。

「た、助けてくれ!!!俺たちは投降する!!!」

「えっ…!? どういうことですか!？」

突然の状況に俺達は混乱した。何から助けて欲しいのか。

「頼む！助けてくれ…!!死にたくない!!」

「待ってくれ…状況が掴めないんだ。どんな奴から助けてほしいんだ…？」

俺たちが困惑していると、背後からフアングさんが乗ったガンダムが駆けつけてくれた。

「どうした？ムゲン」

「フアングさん、実はこの3機が…」

「頼む！死にたくない!!投降するから助けてくれ!!」

この3機は完全に戦う意思を無くしてしまっている。一体彼らがそこまでおびえるものは何なのだろう…。

「待て…なんだ…この反応は…!!」

「な、何なんですか…アレは!!」

ユーリの目線の先を見ると、見たこともない巨大なMSが浮いている。

「あ、ああ…!!嫌だ!!死にたくない!!」

どうやらこいつのせいで戦う意思を削られたのだろうか3機のザクは逃げようとする。

「おやあ…？敵前逃亡は銃殺刑と言ってるんだがなあ…！」

「ひっ…！た、頼む！俺には妻と子供が…」

「知ったことか!!!逃げる者は殺す、それだけだろう!!!」

不意に巨大なMSと目があった気がした。そして、巨大なMSのパイロットは言う。

「ほお…丁度連邦のやつもいるのか…。丁度いいな、殺戮さつりくでも楽しんでみるか!!!」

「まずは…お前たちへの判決を言い渡してやる…。死刑だあ!!!ふふふ…ははははは

!!!」

声の主は笑いながら一機ずつザクを破壊していく。

「…仲間を…！」

「仲間を倒すなんて…あなたクズですね…！」

その言葉を聞いた声の主は答えた。

「クズだあ…？そいつは、この敵に投降しようとしたゴミ共のことかな…？」

そう言っただけでも何度もビームをザクへと撃っている。

「っ…！撃ち抜く!!!」

さすがのユーリも我慢ならなかったのだろうか、彼女はスナイパーライフルであるMSを撃つが、弾丸はMSに当たったがどこかへと弾かれてしまった。

「まさか…弾かれるなんて…！」

「ん？今何かしたかね…？では、反撃するかね…」

そう言つてユーリにビームが放たれる。

「ちい…!!!」

道夜はユーリを庇うようにビームに飲み込まれる。

「道夜!!!」

ビームが消えると、機体が溶けかけた道夜の機体が立っていた。

「くっ…!!」

「大丈夫か！道夜!!!」

「ムゲン、道夜はミデアに回収する！撤退する時間を稼いでくれ!!!」

そう言つてファングさんは、道夜の機体を担いで移動を開始する。

「ふふふ…はははは！軟弱な装甲ではこのメガ粒子砲は防げまい!!!」

「これ以上やらせるわけには行かない!!!」

「ムゲンさん、私が援護します!」

ユーリが180mmキャノンを構え、放つ。弾丸は機体に直撃するが、まるでダメー
ジが通つてはいなかった。

「ほお…面白いな…。もう一度耐えられるかな？こいつが!!!」

巨大MSのパイロットはビームを再びユーリに放つ。

「くっ…!!!」

「ユウリ!!!」

咄嗟にシールドを構えたユウリは、ビームをガードするが、反動が大きすぎて、腕が吹っ飛ぶ。

「ここまでやられると…!」

「ユウリ下がって!俺が…後は俺がやってみる!!!」

「ですが…!」

「大丈夫だから!!」

「分かりました…。でも…帰ってこなかったら殴りますからね…」

「分かってる…」

ユウリは立ち上がり、ミデアに向かって移動する。

「たった1機で何が出来るのかね?威勢だけは良いようだが…」

「皆を…やらせるものか!!!」

奴の機体からビームが放たれる。俺はそれを回避する

「ほお…中々だな…!だが、これで終わりだ!!!」

俺が奴を見た時、巨大なビームがこちらに迫ってくるのを気づいた。

これは受けきれない。心の中でそう思った。

「こんな……こんなことで……!!」

巨大なビームが俺を飲み込む。

「ぐ、ぐおおおおお……!!!!」

モニターが砂嵐に変わり、機体の部品が飛び散り、俺の額に傷をつける。

「はははは!!!!このまま塵になれ!!!!」

そんな笑い声が俺の頭で響く。そして、皆の顔が走馬灯のように駆け巡る。

「み……ん……な……」

ビームが消えると、機体の両足、左腕、そしてメインカメラが使えなくなっていたが、まだ俺は生きているのが分かった。

だが、この状況はどうあがいても打開できるわけがなかった。運よく相手はビームの再装填までまだ時間があるようだった。

俺の体も、ほとんどが傷だらけで動くことさえままならなかった。

「く……そ……どうする……!」

「次で最後だ、せめて懺悔でもしていたらどうだ？」

「くっ……!!」

すると突然、コックピットが開いた。

「ムゲンさん!!!!」

なんと、そこに居たのはリナさんだった。

「リ……リナさん……？何をしてるんだ……ここからはやく……！」

「私のことはいいんです！ムゲンさん、落ち着いて聞いてください。あの機体の弱点は、ビームを撃つ時に開くエンジンルームがあるんです。あそこにビームを撃てれば……！」

「……だが……その肝心のビーム兵器は……」

「大丈夫です。もって来ましたから」

コックピットから外に目をやると、道夜が使っていたビームライフルがトラックに積んであった。

「だが……メインカメラが……使え……」

「だから私が居るんです！私があなたの……ムゲンさんの目になって狙いをつけます！だから私が叫んだ瞬間撃つてください！」

「でも……そうしたら……君は……」

心配そうに俺が聞き返すと、彼女は俺の頬に手を当て笑いながら言った。

「私も、こんな所では死にません……あなたを守りたいから……！」

「……わか……つた……どのみちそれしか助かる方法はないから……」

俺はビームライフルを装着する。本来は適正の武器を使わないと、関節がイカれてしまふのだが、そんなこと言っている場合じゃないのは分かっていたので、躊躇わなかつ

た。

そして、奴に向かってビームライフルを構える。

「…もう少し上…はい。そこで大丈夫です！」

俺は彼女に言われたとおり腕を操作する。

「何をするかわからんがこれで終わりだ!!!」

「もう少し左です!!!」

俺は左に腕を動かした。

「死ぬがいい!!!ふはははは!!!」

奴がビームを放ってくる。

「今です!!!」

俺はビームライフルのトリガーを引きながら叫んだ

「死ぬのは、お前だああああああああ!!!」

奴のビームは俺の機体をギリギリ掠め、俺が放ったビームは奴のエンジンルームに直

撃する。

「な、何っ!?!何故…何故だああああ!!!」

痛みを抑えながら俺はリナさんをコックピットの中に入れ、爆風に備える。

奴の機体は落下し、爆発する。

爆風は俺の機体を飲み込み、機体は熱によって溶け始める。俺は彼女を庇うように抱きしめた。

しばらくすると、周りが静かになり、一時の静寂が訪れる。コックピットから出ると、あの機体の破片がそこらじゅうに転がっていた。

「…倒せたのか…」

俺はコックピットに戻り、リナさんを確認する。どうやら無事のようなのだ。

「ムゲンさん…」

「…ありがとう、リナさんのおかげで助かったよ…」

そう言っつて、俺はリナさんを抱きしめた。なんでこんな事をしたのかは分からない。助かった喜びからだろうか。

「へっ?! えっ?! えつと…ムゲンさん…?」

「あ、ご、ごめん…嫌だったかな…?」

「あ…いえ…その…もう少しこのまま抱きしめててくださいい…」
しばらくそうしていると、機体の歩く音が近づいてくる。

見上げると、ファングさんのガンダムが歩いてきているのが分かった。

俺はリナさんから離れて笑顔で言った。

「さあ…帰ろうか…」

「はい……！」

そんな二人の背中を、暖かい朝日が照らし続けた。

05 完

06：暗躍する特殊部隊

宇宙世紀0079. 11. 08 俺達の部隊はオデッサ作戦で第1軍として最前線で戦うことになって1日が経過した。しかし、ジオン軍との睨み合いが続き、戦場は一時的に膠着状態こうちやくとなる。

一方の俺は、出撃できる機体が無く、俺はただ戦闘を見守ることしか出来ず、俺は苛立ちと歯がゆさによって苛さいなまれていた。

「くそっ!!!」

俺はミデアの壁を思いっきり殴る。しばらくするとその反動で殴ったほうの腕が痛くなった。当然と言えば当然なのだが…。

前の戦闘で俺は機体を大破させてしまい、作戦に参加することができない状況にあった。

「む、ムゲンさん…落ち着いて…」

リナさんが俺を落ち着かせようとする。

「でも!!俺だつて戦いたい…!!」

「機体がないんですから仕方ないですよ。だから、少し落ち着いて座ってください」

「…ああ…うん。ごめん…」

俺は少し落ち着いてイスに腰をかける。

しばらくの間、俺とリナさんの間に沈黙が続いた後、リナさんが口を開いた。

「あ、あの…ムゲンさん…」

突然声をかけられて、俺は少し驚きながら聞き返す。

「な、なんですか…？」

「わ、私…あの戦闘でムゲンさんが助かってよかったって、本当に思ってるんです…」

「え…？あ、ああ…うん、あの時はリナさんがいなかったら俺はたぶん…。だから、とても感謝してるよ。ありがとう…リナさん」

「いえ、それで…ですね…。お願いしたいことがあるんです」

「お願い…？」

俺が聞き返すと、彼女は顔を真っ赤にさせながら言った。

「ムゲンさん専属の整備兵にならせてください！」

「え…？」

一瞬言葉が理解できなかった。俺は一度、頭の中の情報を整理する。

しばらくした後、俺は彼女の言葉の意味を理解した。そして俺は、彼女に微笑みながら言う。

「俺専属の整備兵になったら、修理はほぼ毎日だと思うけど、それでもいいなら…」
俺の言葉を聞き、彼女はそれはもう飛び跳ねるくらい喜んで言った。

「本当ですか!?! やったあ!!! ずっと…夢だったんです。専属の整備兵になるのが…」
「そうだったんだ…でも、喜んでもらえて嬉しいよ」

そう言つて俺はまた彼女に微笑んだ。

その後、彼女と他愛も無い話をしてしていると、3機ほどだろうか、格納庫へ見知らぬ機体が入ってくるのが分かる。

「あれは…」

「見たことのない機体ですね…。見に行つて見ましようか」

どうせ出撃も出来ないからと思つた俺は、リナさんに頷く。そして俺たちは格納庫へ向かった。

格納庫へ着くと、3機の機体が補給を受けていた。その足元には、パイロットらしき人物が3人、整備長と話しているのが分かる。

「いやあ…すまないな。丁度弾薬が尽きてしまつてて…迷惑をかけるな」

「気にしないでください。弾薬くらいなら分けることは可能なので…。えつと、それが必要なものは…。お、リナ！ いいところに!!」

整備長がリナさんと呼ぶ。リナさんは、俺に待つてと一言言つて、整備長のところ

へ向かっていった。

何もしないで待っているのもなんだったので、俺は補給を受けている3機に目をやる。

1機は、改良型のガンキャノンだろうか…そして、もう1機はガンダムタイプの機体みたいだ。

そして最後の1機は、ガンダムともジムともいえない見た目の機体だったが、胸部の武装を見るに、陸戦型ガンダムの改良型なのが見て取れた。カラーリングは全身黒めの色合いだった。

「おつ、その野戦服、パイロットだな？」

不意に背後から声をかけられ、俺は驚きながら背後を振り向いた。

「そうですけど…あなたは…？」

「俺か？俺は、トラヴィス・カークランド中尉だ。皆からはフィクサーって呼ばれてるから、お前さんも好きに呼ぶといい」

トラヴィスと名乗る人物は笑顔で手を差し出してきた。

「ムゲン・クロスフォード伍長です。よろしくお願いします！」

俺は彼の手を握る。彼の手は優しく、暖かかった。

「ああ…お前さんが…。噂は聞いているよ」

噂…たぶん、初陣でジムを中破させたことだろうか…。今考えると少し頭を抱えたくなってしまう。

すると、トラヴィスさんは言った。

「ん？何をそんなにしよげてるのか知らないが、お前さん、初陣で敵を数機同時に相手したそうじゃないか。しかも格闘で」

「え…？」

確かに俺はあの時、道夜と共に3、4機ほどのザクを撃破したのを思い出した。そして、守れなかった二人の小さな命も…。

「…確かに…撃破はしました…。でもあの時は自分でも必死で…」

「そうだろうなあ…。まあ、あんまり気張るなよ。こんな大規模な作戦の時に言うのもなんだけどな」

「はい…少しですけど、元気になりました」

「ん？そうか。そりゃあよかった」

「フィクサー、誰と話しているんだ…？」

トラヴィスさんは声の方向へ振り向き、言った。

「ああ、リップパーか。何、ここの部隊の部隊員と話してたんだ。ほら、お前が前から気にかけていたパイロットだ」

トラヴィスさんの横に並ぶように一人の青年が俺の前で立ち止まる。

青年は、だいたい20歳くらいだろうか、額にはバンダナをして、少し肌の色が黒かった。

「ほお…お前が初陣で格闘を使って敵を撃破した奴だな…」

「え…つと…ムゲン・クロスフォードです…」

俺はたじろぎながら挨拶をする。

「フレッド・リーバーだ。よろしく」

そうやって彼は少し微笑んだ。

「あの戦いで格闘を使ったのはたまたまで…その、マグレなんです…」

「おいおい…3体も格闘で撃破しておいてマグレはないだろう…」

「でも…あの時仲間がいなかったら俺は…」

俺は今までほとんど褒められることはなかった。父親からも…。だからなのだろうか、どうしても褒められるとどうしていいかわからず、自分を批難してしまう。

「仲間とか、そういうのはいいんだ。大事なのは、お前が格闘で敵を撃破したっていう結果が残ってるんだ。それを恥じる必要はないと思うぞ」

「結果…」

「そうさ、結果が全てと言うわけではない。だが、結果が出れば守れる者も自ずと増えて

いく…そういうことなんだ」

「おー？リツパーが珍しく説教してるぞ？」

「説教なんかじゃない。ただ褒めているだけなんだが…」

リツパーさんは少し照れながら頭を掻く。

そんな光景を見ていた俺は、少し元気になれた。

「…お前はきつと強くなる、なんとなくだが、格闘のセンスは俺と同じかそれ以上な気がする…。だから、戦えムゲン。守りたいものがあるならな」

そう言つてリツパーは俺の肩に手を乗せた。

「…はい！」

俺が大きく頷くと、彼は軽く微笑んでから自分の機体のところへ戻つていった。

その背中を、俺とトラヴィスさんは見送った。そして、トラヴィスさんが口を開く。

「リツパーは、お前さんのことをかなり気に入つてるみたいだなあ…」

「そうなんですか…？」

「ああ、そうみたいだ…。なんせあれだけ激励してるのを見たことはないからなあ」

「俺は…期待に答えられるかな…」

皆からの期待を一身に背負つた俺は、不安なのかそんな言葉が口から漏れた。

すると、トラヴィスさんは微笑みながら言う。

「そうだな、お前さんはまだ若いからなあ。一つ一つ困難を乗り越えていけばいい。ゆっくりと、自分のペースでな」

「トラヴィスさん…」

「なんだ…お前さんを見てみると、息子のことを思い出してしまうなあ」

失礼だと思いつながら、俺は恐る恐る聞いた。

「息子さん、いるんですか…?」

「ああ、いるさ。…まあ、今は会えてないんだがな」

そんなトラヴィスさんの瞳は、少しだけ悲しそうに見えた。

そんな彼を見て、俺は言う。

「えつと…きつとまた会えますよ」

「そう…だな…また会える…きつとな…」

その話の後、俺はトラヴィスさんにいろいろな話を聞いた。

彼らに乗っている機体の名前や、メンバーの名前、部隊の雰囲気など、色々なことを質問した。その時の俺は、父親にいろいろな事を聞いている気分になれた。

俺とトラヴィスさんが話していると、突然大きな振動と共に足音が聞こえてくる。

「この振動…」

「お前さんの仲間が帰ってきたのか?」

俺は目を瞑り、足音を聞いた。

そして、俺は気づく。この足音は…ジムやガンダムの物じゃない…と。

「この音は…ジオンです…!!!」

「何…!?くそっ!ミデアに入る時に気づかれたか!!」

トラヴィスさんは大声で叫んだ。

「スレイヴ・レイス隊!このミデアを防衛するぞ!」

そう叫んだ後、彼は俺のほうを向き、言う。

「お前さんは、ミデアの中で待機してくれ」

「…分かってます…。お願いしますね…」

何をお願いするとは言っていないが、俺の言いたいことは彼に伝わり、彼は頷いていった。

「言われなくても、任せてもらうぜ」

彼は機体へ乗りこみ、格納庫から出て行く。

続いてガンキャノンとガンダムも出て行った。

俺は走ってブリッジに向かう。この船の中で唯一外が見れる場所、そこがブリッジだったから。

ブリッジに着くと、当然人は無く、俺の息を切らした音だけが反響して聞こえてくる。

俺は急いで、外を見る。すると、戦闘は既に始まっていて、10機ほどのザクを相手に3機の機体が大暴れしていた。

ピクシーと呼ばれる機体が近接戦闘を仕掛け、相手をまとめて切り伏せる。

ガンキャノンが遠距離から砲撃を放ち、相手を粉砕する。

そして、スレイヴ・レイスがビームライフルなどの武装を使い、敵を撃破する。

見れば見るほど、俺は言葉を失って、彼らの戦闘を見つめていた。

恐ろしいまでの連携プレイ。今の俺たちには…こんなことは出来ない…。

そんな3機のうち、飛びぬけて見つめていた機体があった。「ガンダム・ピクシー」と呼ばれるあの機体だった。

あの機体と共に駆け抜けられたらどんなに素晴らしいんだろうと、頭の中で思う。

自分たちの劣勢に気づいたのか、ジオン軍は撤退していく。

3機は、そのまま遠くに歩いて行ってしまふ。別れの挨拶もなしに行ってしまうのだろうか…。

俺は我慢できず、無線を取り言った。

「トラヴィスさん!!!」

俺の言葉が届いたのかは分からない、だが、機体はこちらを振り向く。

「ありがとうございました!!また…また会えますよね!!」

スレイヴ・レイスは腕を大きく上げ、親指を立てた。

この通信は、きつと届いた。そう信じて俺は無線を切った。

しばらくその場に立ち尽くしていると、突然背後から物音がした。俺は背後に振り向いた。

「あ……」

扉の端から、こつそりとこちらを見つめていたリナさんが、気づかれたからか小さく声を上げる。

「リナ……さん……？ どうしたんですか？」

「えっと……あの……。さ、さっきの機体……凄かったですよね！」

突然だったが、確かにあの機体が凄いのは分かる。

「そ、そうだね……特にあの」

「ピクシーですね」

俺の心を見透かすように彼女は言った。そうだ、俺はあのピクシーで『戦いたい。敵を倒してみたい』そんな心がいつしか生まれているのに気がついた。

「でもきつと、俺なんかじゃ到底乗れる機体じゃないんだろうな……」

「きつと……いつか乗れますよ。ムゲンさんなら！」

彼女が優しく励ましてくれる。

「あ、ありがとう…。でも…」

それでもへこんでいる俺を見て、彼女は言った。

「分かりました！私が…私がピクシー…造ります!!」

「え…?」

「だから、私たち整備班が全力でピクシーを造ります！あなたのために!!」

思いがけない言葉で、俺は驚きを隠せない。

「だから…」

彼女は俺の手を取っていった。

「そんなに悲しまないでください…」

慰めのつもりで言ってくれたのだろうか…。そんな彼女の優しさが身に染みる。

「うん…ありがとう…リナさん」

「よし、飲み物でも飲みに行こうか!」

「…はい!!」

俺とリナさんは、ブリッジを後にした。

06 完

07：別れと決意

宇宙世紀0079・11・09 オデッサ作戦は終盤に差し掛かっていた。

03：35 第4軍、包囲網を突破。以後、さしたる抵抗を受けずに進撃。

05：00 第4軍の突入をさかいに、連邦軍の攻勢がはじまる。

11：00 公国軍、防衛線の縮小。連邦主力部隊（第3軍）、カルパート山脈東、キシニョフへ到達。

17：00 公国軍司令官マ・クベ大佐、宇宙へ撤退。連邦軍、敵掃討開始。14時には臨戦体制から警戒体制へ。

オデッサ作戦、3日間の戦いの末、連邦軍の圧倒的勝利に終わる。これにより欧州からアジア地域における公国軍勢力は衰退を始める。

そして、俺達は一時の勝利の余韻よゐんを嘯み締める。

各部隊での表彰などは、電報が届き、報告されるらしい。

電報はフアングさんとフユミネさんのみで確認する事になっている。

「さて、読むぞ……。今回の戦闘で、貴隊の活躍、見事だった。貴隊のおかげで、その後の進軍に影響なく進軍できた。何より、巨大MモビルアーマーAを撃破したことを上層部は多大に評価

している」

「この電報に書きたくはないが、一つ報告がある。ムゲン・クロスフォード伍長をこちらの研究の実験台として預からせてもらいたい。これに関してはあまり時間が無いので、返答求む」

フアングさんは手紙を折りたたむと、机を強く叩く。

「くそつたれが!!!」

「フアング…どうした？」

フユミネさんが手紙を見て、驚く。

「…これは…。どうするつもりだ、フアング」

「どうするもなにも…奴らにムゲンを渡すわけには行かない」

「だが…このままではこの部隊も危ういぞ…」

「分かっている!!だから…だからなんだ…くそつ!!」

「…渡すしかないみたいだな…。残念だが…」

「くつ…仕方…ないのか…」

フアングさんは苦虫を噛み潰したような顔をしながら渋々答える。

別れは突然と言うが、確かにそういうものなのかもしれない。

俺が朝起きると、ミデアの様子はいつもと違い、異様なまでに静かだった。まるで、誰かが死んだかのように。

廊下をぼんやりと歩いていると、目の前にフアングさんが立っていた。

「フアングさん、おはようございます！」

フアングさんは俺を見るや否や俺の手を引き、ブリッジに連れて行かれた。

「フアングさん…？」

「ムゲン、重要な話がある…。落ち着いて聞いてくれ」

「え…？あ、はい」

いつもと違う様子に、俺は気を引き締め話を聞く。

「覚えているか？お前が入隊して、既に1ヶ月ほど経った。この1ヶ月で随分とお前も強くなったな」

「だから、お前に言うことがある。俺たちが必死に考えた結果なんだが…お前を軍の上層部のところへ…送ることにした」

「えっ!?!」

思考が一瞬停止する。つまり、俺は皆から捨てられると言ったことなのだろうか…心臓が潰れるほど痛くなる。

「もちろんお前を捨てたくは無い…。だけど…この部隊を盾に取られたら、俺はどうし

ようもないんだ…分かってくれ」

「…そ、そんな…」

今にも崩れ落ちそうな自分を、必死に理性が抑えた。

「お前と別れるのは俺だつて辛い…。けど、もしお前がどんな形で帰ってきてても、俺たちは家族だ！だから…こここのことは心配しないで行って来てくれ」

【家族】…そうだった。この1ヶ月、ずっと一人だった俺に、皆声をかけてくれた。

辛いこともあった。それでも皆が笑つて俺を励ましてくれたから、俺は辛いことさえ忘れられた。

皆がいたから、どんなに辛くても俺は自分を信じる事が出来た。その家を潰すわけには。そう思った俺は強く答える。

「フアングさん。俺…行きますよ。だから、帰ってきたら、また皆でメシ食べましょうね！」

辛くはなかった。皆を思えばの事だと、自分でも理解はしていたから。

「…すまない…ムゲン。…報告はしておく。下がっていいぞ…」

ブリッジから出ると、正面で待っていたのは道夜だった。

「ムゲン、話がある。来い」

俺は道夜に連れられ、外に出る。

「……ここでもいいか」

「どうしたの？ 話って……」

道夜もまた真剣な表情でこちらを見つめる。

「お前、行くんだろう……」

さっきの話を聞いていたのだろうか、道夜が心配そうに答える。

「ああ……行くよ……！」

「……そうか……。そういえば、この前の話をしようと思つてな……」

「何だっけ、それ」

覚えてないはずがなかった。道夜の過去の話だ。彼を信じていくに当たって、彼を知

りたいがために、聞いたあの日の事を。

「俺がこの部隊に入る前、俺はある施設で人造ニュータイプ計画と言う実験の実験台だった」

「人造……ニュータイプ……」

「そうだ、ジオン・ズム・ダイクンが提唱した人類の革新であるニュータイプを、人工的に作り上げるという物だ」

「俺は当時、主任と呼ばれる人物へ絶対の忠誠を誓っていた。彼のために俺は戦ってい

た」

「それじゃあ…人形じゃないか…」

「ああ…そうだ…。だが、ファングさんに出会った。彼との出会いで、俺の心には感情というモノが生まれつつあった」

「そして、俺は主任の手を逃れ、この部隊に入った。そして、お前と出会い、少しだが、仲間の暖かさというものを知った…」

「戦いの後、皆で食事をしている時、今までの俺にとってそれはとても暖かく、優しい光景だった」

「正直、最初は面倒だった。でも、いつからだっただろうな、そんな心はどこかに消え失せてしまった」

なぜか俺の頭の中で、幸せそうに皆で食事をしている光景が浮かんだ。そこでは、皆が笑っていて、どんなに辛いことも吹き飛ばすくらいの暖かい場所だった

「道夜…」

「もし、お前に会えずにこの作戦を迎えたなら、俺はきつと仲間のことなんて一切構わず戦って、死んでいただろう」

「お前に第一軍で戦うことになったあの日の話で気づいたんだ」

あの日のことだろう。オデッサ作戦のために集結地に向かう日。道夜と少し言い

合ったあの日だ。

「お前みたいな奴がいれば、少しばかりなら無茶しても着いてきてくれるんだらうって」
「…だから、あの時あの巨大なMSからの攻撃を庇った…。お前がきつと守ってくれると信じてたからな」

「でもあれは…」

「確かに奇跡かもしれない。でも、少なからず、お前と共に戦っていなかったら気づけなかったココロだ」

「そんなココロをくれたお前に一言言っておきたい」

「…家は…任せておけ」

道夜はフードを深く被りながら言った。涙を見られたくなかったからだろうか。声が震えていたので見なくても分かった。

俺は道夜の肩に手を置いて言う。

「ああ…家は…任せた…」

そう言つて俺はそのまま道夜のところを去る。

きつともうすぐフアングさんが招集をかける。俺との別れを知らせるために。

俺は静かに空を見上げる。

ジエームスと別れたあの日の空のように今日の空も曇っていた。

「…ムゲンさん？」

彼女の声がある。俺は振り向くと、やはり、いつも通りの彼女、リナさんが立っていた。

「あ…リナさん…」

「ここにいたんですね。ファングさんが呼んでますよ。何やら全員集合だとか…」

「…そつか…分かった。行こう」

俺は再びブリッジに向かう。その途中の廊下を、これほど長くあつて欲しいと願ったことは無かった。

「ムゲンさん」

「ん？どうしたの？」

「帰ったら、見せたいものがあるんです！」

「どんなの？」

「それを言ったら意味ないじゃないですかー」

と、彼女は笑いながら言った。

この笑顔を見るのも何度目になるだろう。頭の中で自然と思い浮かんでくる。

「リナさん…」

「何ですか？」

「…いや、何でもない」

「えー！気になるじゃないですか!!」

と、俺の腕を引っ張る。

「はは…また、時が来たと言おうよ…」

俺はブリッジに入る。

当然、皆いた…俺の家族全員が…自然と心臓が高鳴る。

「…来たか…ムゲン…」

フアングさんが呟く

「皆、真剣に聞いてくれ」

皆がフアングさんのほうを向く。

「…皆に一つだけ言うことがある…ムゲンが、今日から他の部隊へ移動する事になった」

皆、驚きを隠せない。当然だろう、その中でも一番驚いていたのはリナさんだった。

「え…そんな…」

「皆、別れは辛いだろが、我慢してくれ…俺も辛いんだ…」

「ムゲンさん…」

立ち上がって俺を見る。ユーリだった。

「ユーリ……」

「ちゃんと帰ってくるんですよ。おやつは300円までですからね！」

「……ああ……分かってるよ」

「帰ってこなかったら、スライディング土下座してもらいますからね！」

「うん……。分かった……」

ユーリだつてきつと辛いだろう、俺は彼女に強く頷くしかできなかった。

「……10分後には迎えが来る。ムゲン、準備はいいのか？」

特にもつて行くものはなかったの、俺は頷いた。

「はい……大丈夫だよ……みんな！ちゃんと帰ってくるから！」

そう言つて、一足早くブリッジから出て行つた。

「……きつと……帰るから……」

扉の前で呟いた後、俺は格納庫へ向かつた。

そこに着くと、壁に寄りかかっていたフミネさんがこちらに気づいて寄つてきた。

「……ムゲン」

「フミネさん……。どうしたんですか？」

「ああ……元気でな……。それだけだ……」

これが彼なりの励ましなのだろう。俺は彼の思いを受け取って頷いた。
「はい……」

10分というのは本当に短い。外に大きな輸送機が降りてくる。

「……来たのか……」

俺は一步一步、歩き、輸送機の元へ向かう。

そして、見知らぬ研究者が出てきて言う。

「ムゲン・クロスフールドだな？」

「……はい……」

「では、こちらに来てもらおう」

そう言つて俺を輸送機の中へ連れて行こうとする。すると、格納庫のほうから大声で
声が聞こえた。

その方向を見ると、リナさんが必死に走つてこちらに向かつていた。

「ムゲンさん!!!ムゲン!!!」

「おい！止めろ!!」

兵士が彼女を抑えようとする。

俺は我慢できずに輸送機から飛び出した。

「何をするつもりだ!!!」

「待っててくださいい！俺が止めてきます!!」

俺は走って彼女のほうへ向かう。

「ムゲン!!!」

「り、リナさん!!!」

走ってこちらに来る彼女を俺は抱きしめた。

「ムゲン……！行かないで……！」

彼女は今にも泣きそうな顔で言った。

この顔も何度見たことだろう……。だからこそ、俺は彼女に言った。

「……大丈夫、きつと帰るから……。だって……リナさんを……リナを守りたいから!!!」

「……こんな時に……卑怯ですよ……」

「ごめん……でも、心配しないで。ちゃんと帰ってくるから」

そう言って俺は彼女の髪をなでる。すると彼女は、あの日と変わらない笑顔を俺に見

せてくれた。

「時間だ……。行かなきゃ……」

「あ……ムゲン……」

「また……ね……」

俺は彼女に背を向け歩き出した。

07 完

08：死を司る執行人

宇宙世紀0079・11・10 あの後、俺は見知らぬ研究所へと運ばれ、俺は研究者の実験台として調整を受けることになった。

0079・11・11 俺は研究者から、「適合者」と呼ばれるようになった。どうやら実験は成功し、俺の身体は通常の人間以上になったらしい。

0079・??・?? だんだん記憶があいまいになっていく…時折自分が誰だかすら分からなくなってくる。今日は…何をされたんだっけ…

??・??・?? …研究者が、MSを渡してくれた…

「起きろ。適合者」

「…」

「起きろって言うてんだろぅが!!!」

研究者は俺を蹴り飛ばす。体は宙を浮き、壁に叩きつけられる。最近殆ど食事が喉を通らなかつたせいかな、俺の体は呆気ないほどに飛んでしまう。

俺は、震えながら立ち上がる。

「…」

「よし、起きたな。来い」

研究者の後を俺は追う。

ただただ長い廊下を歩く。光で目が痛くなる。

今…何時だろう…。それを問おうとしても分からない…。喋る力が出ないからである。

「さあ…着いたぞ」

格納庫だろうか、見上げると、蒼い色のカラーリングが施されたジム…なのだろうか。頭部はジムそのものなのだが、機体の胴体はガンダムに近しい感じがした。

「…」

「RX―80―PR〔EX〕…〔ペイルライダーエクセキューション〕…。死を司る執行人だ」

「…」

俺はただ頷いた。

「お前はこれに乗って戦うんだ」

「ただ…か…う…」

「そうだ！戦って戦って死ぬまで戦い続けるんだ！」

「…はい」

戦う…その言葉により俺の意識がはつきりしはじめる。

俺はペイルライダーに乗り込み、システムを起動させる。MSの操縦は、何故だか知っていた。長い間乗っていなかったのに。

「おお…！おお…！！いいぞ！適合者よ！！」

研究者は狂うほどの大声で笑った。

「…出撃…します…」

俺は機体を動かし、戦場へ向かった。

この機体は試験機らしく、表向きの戦場ではなく、相手の暗殺などを中心にデータを取るらしい。データも何のデータなのかは分からなかったし、別に興味もなかった。

戦場に出ると、俺は研究者に通信を送る。

「…指示を…」

「指示か…そこにいるジオン軍や連邦軍、全てを抹殺せよ」

それが彼の望み…。ならば私が執行する。

ライダーを確認すると、ジオン機3機、連邦機5機だけであった。

「…執行する…」

俺はまず、連邦軍の機体に矛先を向ける。

「な、なんだ?!あの敵は!!!」

「見たことないです！たいちよ…うわああああ!!!」
俺は瞬時に敵を切り裂く。

「…次…」

「ひ、ひっ!!!」

「ひるむな!!相手は1機だ!!」

ジムがまとめて切りかかってくる。

俺は1機のジムの腕をつかむ。

「な、なんだ!?!この化け物!!!」

【化け物】。その言葉が…心地よかった。

俺はつかんだジムの腕を砕き、さらに、地面に投げ飛ばした後、追い討ちのようにビームライフルで何度も撃ち抜いた。

「て、てめえ!よくもテリーを!!!」

もう1機がマシンガンを放つ。俺は、それを軽く防ぎ、敵をビームライフルで撃ち抜いた後、ビームサーベルを構えながら言った。

「…執行する…お前に…死を」

「な、なんなんだよ!!!化けも…」

そこで通信は途切れた。俺がビームサーベルでコックピットを貫いたからである。

斬ろうとする。

するとザクは、間合いを取り、すかさずクラツカーを投げってくる。

投げたクラツカーをザクマシンガンで撃ち抜いて、クラツカーは爆発する。

それをシールドで防いだ俺を、ザクは、クナイで回転するように攻撃する。ビームサーベルで受け止める余裕が無かったため、クナイがペイルライダーの頭部を掠める。

「……」

すると、モニターが砂嵐と化し、相手を見ることが出来なくなる。だが、別にどうとも思わなかった。

俺は目を瞑り、足音を探った。

右から来る……そして左から斬りかかって来る……それを俺の勘が告げた。

「……!!!」

「おお！やるなあ!!!」

俺の予想は的中し、モニターが戻ると、ビームサーベルがヒートサーベルの攻撃を受け、防いでいた。

「……」

俺は一方のビームサーベルでザクを切り裂こうとするが、ビームサーベルはザクの腕をギリギリ掠めて当たらなかった。

「…危ねえ！おい！修理代ひどいんだぞ！！分かってんのかよ！！」

「…」

俺はヒートサーベルを吹き飛ばし、敵にビームサーベルを向ける。

「おっと…」

「…お前に死を…」

それからの記憶は殆ど曖昧だ。その後、彼を殺したのか。それとも逃がしたのか。分からないが、今はただただ眠かった。

体の自由は利かず、頭が割れそうなほどの頭痛と、吐き気…俺は一体どうしてしまったのだろう。

「…この…者は…だ…」

研究者達が俺のベットの横で話をしている。会話は殆ど断片的で、聞き取れない。ああ…眠い…。

自分がどうなるかなんてどうだっていい。俺に帰る家は無い。ただ俺は…戦うだけだ…。俺は現実から逃げるように眠りに着いた。

…夢なのだろうか、見覚えのある人たちがこちらへ向かって歩いてくる。だが、名前を思い出すことが出来ない。

こんな感情が俺にもあったのかと。

「くっ……うああ……うぐう……!!」

突然の頭痛、これももう慣れた事ではあるが、何度やつても慣れる事は無い。何だっただろうか、少し前に失った感情と同じ……そんな感じの……

「はあ……はあ……!!」

激しい頭痛のする頭を抑え、俺は部屋に戻る。

部屋に戻ると、研究者が苛立ちを隠せない様子で待っていた。ああ……また……か。

俺が帰ってきたのを見るや否や、彼は俺の腹を一発殴った。

俺の口から、望んでいないはずの血が吐き出される。

「か……はっ……」

俺はそのまま地面にうずくまった。

「どこに居たんだ……寂しかったじゃないかよ！ええ？」

そう言っ腕の骨をポキポキとならす研究者。これも……いつものこと……。

「……」

「何とか言ったらどうだよ！適合者!!!」

「ぐっ……!?!」

彼は俺を何度も蹴り飛ばす。これもいつも通りのことだ。

「…申し…訳…ありません…ぐはっ!!」

謝ろうとする余裕すら許されないそんな状況…でも、それでいいのだと、自分に言い聞かせる。何故なら、自分が全て悪いから。

「ふんっ!!二度と逃げ出そうとすんなよ!!」

そう言つて研究者は扉を強く閉めて出ていった。

俺は震えながら立ち上がり、自分の口から出てきた血を拭う。この作業も毎日のように行なわれれば、慣れていくものだ。

辛くも、悲しくもない。ただ、彼が去っていた後のこの静寂だけは、なぜか知らないがいつまでも慣れないものだった。

「…あ…くっ…」

右腕が痛む。どうやらまた折れたみたいだ。

俺の体は、改造されたせいとか、骨なんて半日で治る。そんな化け物になつてしまったようだ。だが、今更そんな事どうとも思いはしなかった。

俺はまたベットに横になる。ただ少しだけ…眠くなつた。だが、どうしても眠れない。

そういえば…少し前のことだ、一人の女性から手紙が届いていたのを思い出した。

俺は研究者にばれない様に引き出しに隠した手紙を取り出し、読む。

「ムゲンさんへ…そちらでの生活はどうですか？苦しくないですか？笑えますか？

ムゲンさんがいなくなった私たちの部隊は、少なからず皆元気が無いように見えません。

でも、私は信じています！ムゲンさんがきつと帰ってくるってことを…！

だから、今は泣きません…きつとあなたに会えたとき、その時は私をまた…抱きしめてください！

あ、そうでした！ムゲンさんのために、新しい機体を皆で製造していますよ！

道夜さんは、「俺の機体のデータ、使えるはずだ」そう言ってデータを渡してくれて

ユーリさんは、ムゲンさんの戦闘スタイルに合わせた機体の配色を考えてくれて

フユミネさんは、武装の考案とコックピットの配置、そして、フアングさんが全体の機体バランスを考えてくれてるんです！

私は…その前に1機だけ、同じ機体を造ってみました！名前は…まだ決めてないですけど！

これを基に、みんなで今必死に考えています！だから…少しでもいい…早く帰ってきてね…」

手紙はここで終わっていた。手紙を読み終えると、俺は手紙をたたんで、引き出しに

戻す。

誰が書いたのか、皆つて誰：俺の頭の中はぐちやぐちやになり、それから逃げるように眠りに着いた。

そして、嫌でもまた朝日は昇っていく。

「……」

俺は着替えを済ませ、部屋から出て行く。そして、上着を着ようとする時、胸のポケットトから何かが落ちた。

俺はそれを拾い上げ、確認することなく元の場所にしまった。

それが何なのかは分からない。

ただ、俺が俺でいれる証みたいなの：そんな大切なものなのは分かっていた。

「……行く……」

俺は自分に言い聞かせ、ペイルライダーに乗り込んだ。

08 完

09：本当の正しさ

宇宙世紀0079・11・20 敵を倒すことが当然となる毎日：俺とペイルライダーの実験は日に日に過酷になっていく。別にそれがどういいうわけでもないが。

「いいな！出撃だ!!!」

研究者が叫ぶ。俺はいつも通り頷き、ペイルライダーに乗り込む。

「…指示は…」

「全軍の抹殺」

研究者はそう一言いった。

「了解…」

そう言っ出て撃する。

か…
戦場に出ると、レーダーを確認する。連邦機はざつと6機、ジオン機も同じ数だろうか…

「…執行する…」

俺は呟いた後、ビームサーベルを引き抜きざまにジムを切り裂いた。

「う、うわああああ!!!」

「…」

背後からの気配に気づいた俺は、振り返ると共にビームサーベルでザクを切り裂いた。

「く、くそがああああ!!!」

何故、こうも人は悲鳴を上げながら死んでいくのだろう。ああ…鬱陶しい。

俺が周りを見渡すと、ジオンの機体と連邦の機体が俺を取り囲んでいた。

おかしい。この状況は俺の頭の中でも理解できた。こいつらには裏がある。

だが、今はそんなことを考えている時じゃないと言うことも同時に理解できた。

「…この取引の現場を見られた以上…死んでもらう!!」

「…執行する…お前へタチニ…シヲ…」

突如俺の意識が朦朧としてくる。薄れ行く意識の中、何とかモニターを見つめた。

「…くっ…」

「[H A D E S] …モニターの中心にはそう書いてあった。それが何なのかは分からない。ただ、こいつのせいで俺の理性は消えかかっていたというのは理解できる。」

このままでは、俺はまた意識が飛んでしまうだろう。だが、今回は…今回こそは、自分の手で…こいつを使ったかった。

だから、俺は研究者に渡された得体の知れない注射器を自分の腕に打ち込んだ。これは確か、H A D E S の負荷にパイロットが耐えるための精神剤だっただろうか…

打ち込まれた後、俺はいつもの頭痛と吐き気…そして、自分の憎悪が自分自身を飲み込んでいくかのような気持ちに駆られる。

少しすると、俺の意識ははつきりしてきたが、自分が誰なのか、それすら分からず、ただ今は、敵を殺したくてたまらない衝動に駆られていた。

「…ア…アアア…!!」

ペイルライダーのカメラアイが真っ赤に染まる。排気口から周りが見えなくなるほどの熱を排気し、その煙の中からコイツのカメラアイが奴らを睨み付けた。

「な、何だ…!? 周りが見えない…!」

「どうなってる! 普通じゃないぞこんな…!」

「…し、執行…。オマエタチヲ…コロス」

俺の意識は殆どコイツに飲み込まれ、もうこれ以上自分を保っていることは出来ないほどだった。

「え、援軍を呼べ!!! 急ぐんだ!!!」

ペイルライダーはビームサーベルを引き抜き、出力を勝手に上げだす。今、俺はそれを抑制すること、制止する心すら消え、ただコイツの言いなりになり操縦する機械と成

り果てた。

「な……！」

恐らく軽く振ったであろうビームサーベルの熱に耐え切れず、ジムの機体が半分溶け始める。

「な、なんなんだよ！こいつは!!!」

「……コロス……！オマエタチニ……シヲ……!!!」

ザクは、必死に応戦し、マシンガンを放つものの、出力を上げたビームサーベルの前にはなすすべなく溶けて消えていく。

「こ、こんなんじゃあ……勝てない……!!」

「お、おい！お前たちが遅れさえしなければ、こんなことにはならなかったんだぞ!!」
「何を言ってるんだ！ジオンのお前たちこそ、こいつに位置を嗅ぎ付けられてたんじゃないのかよ!!!」

「何だと!!!」

こんな状況でも人は、自分は悪くない。相手が全て悪いと言って、罪を擦り付け合う。それを見るのはもう……飽きた。

ペイルライダーは俺に代わり、彼らを執行する。全員が死刑……それがペイルライダーの判決だった。

「ワレハ…オマエ…タチヲ…ゼンイン…クロス…ダケダ…」

ペイルライダーはさらにビームサーベルの出力を上げる。これ以上上げてしまうと、機体に負荷が掛かりすぎすぎて耐えられない。

でも、今の俺にはそれを止める術などなかった。もう…ここまでなのか…。諦めかけた俺の目に、胸ポケットに入っている写真が目に入る。

俺は震える手でそれを取り、見つめた。

「…コレ…は…」

その写真には、恐らく自分であろう人物と、それを囲うように肩を組んで笑っている画があった。

「…あ…ああ…」

自然と言葉が漏れ出す。覚えていないはずなのに、それでも何故か自然と彼らの名前が出てきた。

「…これは…フアングさん…それで…これが道夜…そして、ユーリに…フユミネさん…そして…リナ…」

彼らの名前が俺の心、意識をはつきりとさせる。彼らは…俺の…何だったのだろう…。だが、それが分からなくても、その写真は俺に何か強い力を与えてくれる。

俺は写真を胸ポケットにしまった後、モニターを見た。

ペイルライダーのH A D E Sシステムを強制的にダウンさせれば、こちらも相手も被害を受けないですむ。微かに残った自分の理性がそうさせる。

「……やめるんだ……これ以上は俺がさせない……!!」

ペイルライダーは俺の言葉を無視し、出力を上げようとする。

「……お前に……人を殺させは……しない……!」

俺はそう言って、H A D E Sシステムを強制的にシャットダウンする。すると、機体の中は真つ暗になり、世界中が自分だけになったかのような静寂が訪れた。

「……」

コックピットを開くと、そこには、ビームサーベルの熱に耐えられず、溶けた機体が地面に転がっていた。

結局、ペイルライダーは彼らに死刑を執行した。俺は、何のために戦っていたのだろう……

いろいろな事で頭がごちゃごちゃになってしまう。俺はペイルライダーを動かし、研究所へ帰還した。

コックピットから降りると、研究者が俺の頬を殴る。

俺は宙に浮き、吹き飛ばされた。

「適合者よ！どうしてシステムを強制ダウンさせた!!」

「…申し…訳…ぐっ!!」

言葉を言い切る前に腹に蹴りを入れられる。

「何故だ!!大事なデータを!!どうしてくれんだよ!!この役立たずが!!」

そう言つて彼は何度も何度も俺を殴り続けた。

「…くっ!!」

「ふんっ！今度からはちゃんと命令を聞いてもらうために強化しなければな…なんせ、お前は俺の人数だからな!!分かったな！ええ?」

「…了解…」

俺はただ一言言つて、その場に力尽きた。

次に目が覚めたのは自分の部屋で、体を起こすとき殴られた頬が少しだけ痛む。

俺は立ち上がり、おぼつかない足取りで部屋を後にした。

廊下を歩いてみると、少し目眩がして膝を付いてしまう。

「大丈夫か…?適合者…いや、【ムゲン・クロスフォード】」

本当にしばらくぶりに、俺は自分の名前を呼ばれた。俺が顔を上げると、そこには白衣の老人が立っていた。この人も研究者だろうか…

「…」

俺は言葉を出せず、ただ頷いた。

「そうかそうか…。よし、立てるかね？」

彼は俺に手を差し伸べてくる。俺は彼の手を取り、立ち上がった。

「…あり…がと…う…」

精一杯の一言。それを見た彼はやさしく微笑みながら言った。

「構わんさ。随分とポロポロじゃないか…。さあ、ちよつとこつちに來なさい」

そう言つて彼は俺の手を引いてゆつくりと歩き出す。

そして、連れて行かれたのは小さな個室。恐らくは彼の部屋だろう。そして部屋に入ると、彼は俺をイスに座らせる。

「どれ、飲み物を出してやろう…。少し待つていなさい」

そう言つて彼は飲み物の準備をします。正直、こんな俺にどうしてこう優しくするのか理解できなかつた。俺は、精一杯声を振り絞り彼に聞いてみた。

「…なぜ…俺に…優しく…す…る…」

「何故か…。とな…？」

彼は少し考えた後、笑顔で言った。

「どんな形であれ、人間は人間だ。だからわしは、君を適合者なんて言わない。君にはちゃんと親に与えられた素晴らしい名前があるじゃないか。なあ？ムゲン君よ」

「…」

俺はただ頷いて彼の話を聞いた。

「さあ、出来たぞ…：コーヒーだが飲めるかね？」

俺は頷いてコーヒーを飲んだ。このコーヒーの味は、言葉では言い表せないほど暖かく、そして優しい味だった。

何故だか…いや、自分でも理解は出来ていた。このコーヒーを一口飲むたびに、涙がこぼれてくる。彼の優しさだろうか、そんな暖かい何かを久しぶりに見つけられたから…。

「ほら…：君にも心があるじゃないか…：こんなにも綺麗で、優しい…：心だ…」

彼はそう言つて俺の頭を優しくなでてくれた。

「…っ…くっ…：うう…！！」

この涙は、自分が望んで出したのだろうか。それは分からないが、今はただただ涙が頬を流れ続けた。

本当に…：本当に久しく涙を流した俺は、疲れたせいか彼の部屋で眠ってしまった。た。

長い眠りから目覚めた俺は、研究所の異変に気がつく。

俺はベットから立ち上がり、部屋を後にした。

しばらく寝たからか不思議と意識ははつきりとしていて、体もしつかりと動いてくれる。

廊下に出ると、誰かの怒号と悲鳴が響きあっていた。

俺はその声をたどって走り出した。

声をたどると着いた場所は、ペイルライダーの格納庫で、俺は急いで扉を開く。

格納庫には、ジオンと連邦の軍人が研究員たちを一人ずつ撃ち殺していた。

「はっはあ!!ヘッドショットだ!!」

「ジオンじゃあそんなの当たり前だ」

「ほお…じゃあやつてもらおうじゃないか!」

「いいだろう…こいつにするか…」

ジオンの兵士が選んだのは、あの老人だった。

「あ…ああ…いや…め…!」

精一杯の言葉で叫ぶ。すると、老人は俺に気づき叫んだ。

「ムゲン君!!人間に…本当の正しさなんてものは…ない…!だが、それが正しくなくて
も、正しくても構わない!君が!!君自身が思ったとおりに戦えばいいんだ!!!」

「我々が君にした仕打ちは酷いものだ。それを許してもらおうなどとは思ってはいない

「ただ、君には『生きる権利』がある!!!」

「わしは…君を信じるよ…ムゲン君」

すると、ジオンの兵士が笑いながら言った。

「おいおい、この爺さん。頭が狂って見えない誰かと話してるよ!!はははは!!傑作だ!!」
そして、笑いながら彼の頭を撃ち抜いた。

「あ…ああああ…!!」

言葉にならない声を上げ、その場に倒れそうになる。そんな自分を抑え、ペイルライダーの所へ向かった。

「これで全部か?何だ!?蒼いジムが…!?」

彼らが気づいたときにはもう遅く、俺はペイルライダーに乗りこんで、MSを起動していた。

「しまった!!!皆!MSに乗るんだ!!!」

兵士たちが逃げるようにMSに乗り込む。敵の数は合わせて4機。

「…俺は…お前達を殺す…!!!」

彼の仇を討とうとは思ってはいない。ただ、自分の意思でこいつらを仕留めたかった。

「ちっ!! 攻撃だ!!!」

ザクが2機斬りかかって来る。そしてジムがマシンガンを放つ。

「爺さん…。俺は…生きる…。爺さんのためにも…。」

俺はそう言つてザクを2機まとめて斬り捨てる。

「う、うわあああ!!!」

「た、助け…」

「…お前たちに言い渡す判決は…死だ!!!」

「ひっ…。て、撤退だ!!!」

逃げようとするジムたちを俺は逃がさずビームライフルで撃ち抜いた。

全員が動かなくなるのを確認し、俺は機体を格納庫へ移動させる。

機体から降りると、いつもの見慣れた研究者が立っていた。

「適合者よ、よくやったな…」

と、珍しく研究者は俺を褒めた。この研究所の半数の人が失われて、さすがの彼もショックが大きいのだろう。そのせいかな、普段よりは優しく言ってくれたわけだ。

「…はい…」

「適合者よ、次の作戦は、ジャブローの夜間偵察を行なっているジオン軍と連邦軍を抹殺

する事だ」

「…何故…」

「この研究の資金提供をしている人物が、彼らを邪魔に思っているみたいなんだ。やっ
てくれるな？」

「…はい…」

俺は彼に一言言つて、自分の部屋に戻り、眠りにつく。

彼が何を望もうと、俺はただその通りに動き、敵に死を与える執行者になるのみ。そ
れ以外は何も求めてはいなかった。

ただ、あの老人が死ぬ間際に言った「君には生きる権利がある」その言葉が、俺には
理解が出来なかった。

本当の正しさも、自分の戦う意味でさえ曖昧な俺には、あまりにも贅沢な言葉だった。

ああ…分からない…分からないんだ!!自分は誰で…何者なのか…そして、本当の…心
は何なんだ…

俺は嫌でも訪れる現実から目を背ける。だが、目を背ければ夢の中で常に知らない誰
かと戦つて、殺して、殺されて。その繰り返しで。

俺が求めたものは何なんだろう。感情?心?仲間?居場所?考えれば考えるほど分
からなくなっていく。

ああ…まただ…。

深い深い夢の中へ引きずり込まれていく。

まるで、底の無い沼に入り込んでしまったかのように少しずつ、少しずつ引きずり込まれるんだ。

そして、俺はまたここでも戦い続けるんだ…それが嫌であろうが、そうでなからうが…。

今の俺に…安息はない…。

「くっ…はあっ!!!」

今日は自分が殺されて目が覚めた。見覚えのある機体に何度もビームライフルで撃ちぬかれた夢だ…。

俺は体を起こし、着替えを始める。

今日の任務は、ジャブローを偵察中のジオン軍と連邦軍の部隊を抹殺すること。

ただ、今回は、何故だか分からないが、異様な胸騒ぎを感じた。

何が起こるのかは分からない。ただ、ものすごく恐ろしい何かが起こる予感がした。

俺はそんな考えを振り切って、立ち上がる。

そして、一度胸ポケットにしまった写真を取り出し、見つめた。

そして、少しだけ微笑んだ後、それをしまい、部屋を後にした。

10：再会

宇宙世紀0079・11・29　あの一件の後、少しばかり研究者たちの動きが小さくなったように見えた。

不思議と足取りは軽く、俺は研究者のところへ向かった。

「来たか…。適合者よ」

「…はい」

研究者は忙しそうに機械を動かしている。

「作戦は夜に行なわれる。そこまでは自由にしているがいい」

普段とは打って変わって、研究者は静かに言った。

「…了解」

俺は頷いて部屋を後にする。

特にすることは無かったが、あの老人の部屋へ自然と足が向いていた。

老人の部屋の前に立つ。俺は扉を開け、部屋の電気をつけた。

周りを見渡すと、老人のお気に入りだったのだろうか、沢山のコーヒーの素と共に、

コーヒーメーカーが置かれていた。

「…爺さん…」

調整を受けた俺には感情と言うものはない。自分ではそう思っていたが、だが彼のこ
とだけは、自分の中でどうしても忘れることが出来なかった。

彼が最後に言った言葉をまた思い出す。「君には生きる権利がある!!!」そんな言葉と
共に、彼が必死に叫ぶ姿が目に浮かんだ。

「…くっ!!!」

俺は頭を抱える。どうしてあの時彼を助けられなかったんだろう…と。

そういえば…昔、こんな感じのことがあつて、自分を恨んだ時があつたな…いつだつ
ただろう、誰を失つてそうなったのだろう、今の自分には何一つ思い出すことが出来な
かった。

「…」

俺はポットに水を入れ、火にかける。昨日飲んだコーヒーがまた飲みたくなつたから
だろうか、俺は静かに湯が湧くのを待つことにする。

しばらくするとポットから湯気が出てくる。タイミングを計って俺は火を消し、前に
準備していたコーヒーマシンの粉末をフィルターのペーパーに振りかけた後、そこからお湯を
かけた。

すると、フィルターペーパーを伝つて、下のポットへコーヒーが一滴ずつ落ちていく。それを見つめていると、少しだが眠くなってくる。

「…」

丁度一杯分のコーヒーが出来たので、俺はカップにコーヒーを注ぐ。

俺は静かにコーヒーを口に運んだ。昨日ほどおいしくないのは何故だろう。

残ったコーヒーを全て飲み干したあと、呟いた。

「爺さん…：コーヒーおいしかった…」

カップを洗い場に置いた後、俺は彼の部屋から出る。

いつもは賑わっている廊下も、今日はとても静かだった。まあ、昨日の一件で人が足りないのも当然と言えば当然なのだ…

俺はそんな静かな廊下を一步ずつ歩いていく。廊下は静か過ぎて俺の足音だけが響いて聞こえてくる。

そして、歩いた先に見えてきたのは、俺と共に過酷な実験に付き合わされた可哀想なアイツが見えてきた。

思えばコイツも研究者達の私利私欲のために造られた機体で、俺と同じなんだろう。

俺はペイルライダーに向かって問いかけてみる。

「…お前は…お前の家は…どこにあるんだ…？」

何故それを聞いたのかは分からない。たぶん…俺に家が無いからだろうか…自分で聞いておいて少し寂しくなってしまう。

「…確証なんかないが…きつと帰れるさ…お前の家に…」

そう言つて俺はペイルライダーに微笑む。

「…また後でな…」

小さく呟いて、俺は格納庫を後にした。

俺は作戦のために、部屋で仮眠をとることにする。

ベットに横になり天井を見上げてみると、ふとある人の言葉を思い出す。

「どんな形であれ俺たちは家族だ!!」そんな言葉を思い出した。

確か…髪の色は赤で、元気な性格で…みんなの部隊長だった…

「フアング…さん…」

そう、その人の部隊で、確か名前は…

「第…00特務試験MS…隊…」

「くっ…!!」

思い出そうとすると頭が痛くなる。何故すっかり思い出すことが出来ないのだろうか……

「……」
俺は静かに目を瞑り眠りに着いた。

ここは夢だろうか……俺は真つ暗な世界にたった一人で立っている。周りを見渡すと何もなく、本当に何も無い虚無の世界。

「……」
ただ朦朧とした意識でぼんやりと立ち尽くしていると、遠くから歩いてくる人影を見つけた。

彼らは俺の前で立ち止まる。よく見ると、彼らは自分とそっくりの人間だった。

そして、一人の俺が言う。

『お前が求めているのは何だ』

「……」

ただ俺は黙って聞いていることしか出来ない。

『人が死ぬのがお前の望みか』

『自分の居場所が望みなのか？』

『自分のココロが欲しいの?』

『それとも…自分が生きる事を望んでいるのかい?』

俺は精一杯声を振り絞り言った。

「…消えろ…」

全て俺を惑わすもの、俺はただ早く夢が覚めることを願う。

その言葉を聞いた彼らは言った。

『君は…自分のココロですら殺すのかい?』

「…」

『それが君の望みなら、俺たちは消えよう…』

そう言って、彼らは霧のように消えていった。

それと同時に、俺は目を覚ます。

「…」

目覚めた俺は、自分から何か大切なものがポツカリと消えた感じがした。

俺は立ち上がり、時計を確認する。時間は夜の6時くらいだろうか…。

俺は部屋を後にし、格納庫へ向かった。

はじめてあったあの時のように、コイツは静かに佇んでいる。

夜間に行なうためか、ペイルライダーには黒いフード付きのマントが装着されていた。

「…行くか…ペイルライダー」

俺は機体に飛び乗り、MSを起動させた。

すると、研究者から通信が入る。

「適合者、時間だ。行け」

「…指示は…」

「言うまでもない、全軍の抹殺」

いつも通りの指示、俺は頷いて言った。

「了解…。出撃する」

俺はペイルライダーの出力を上げ、ブーストを起動し出撃する。

今の俺には、何も躊躇いはない。自然と敵との戦闘に心を躍らせていた。

しばらく移動していると、連邦軍の本拠地であるジャブロー付近に近づいたことを自分の感が告げた。

ライダーを確認する。既に連邦とジオンの間で戦闘が始まっているようだ。

俺は崖の上に立ち、彼らを見る。

連邦機はおおよそ7機…そのうちの3機…おそらくは特務部隊だろう。

ジオン機は13機程か：俺は先に連邦の機体に矛先を向ける事にする。

「さて…行くか…」

ようやく俺が居る事に気づいたのか、全機が俺たちを見た。

俺は、風になびくマントを投げ捨て、H A D E Sシステムを発動させる。

「面白そうだ…そこに混ぜてもらおうか!!」

俺がターゲットにしたのはイフリートタイプの機体と罅迫り合っているガンダムタイプの機体だった。

俺は崖から飛び出し、迎撃してくる3機のザクをマシンガンで撃ちぬく。

「う、うわああああ!!」

いくらザクに乗っていても所詮は新兵で、彼らの放ったマシンガンは、俺の機体に掠りもせずにとこかへ消えていった。そして、彼らの命も。

1機は完全に戦意を喪失し、そしてもう1機のザクはこちらにマシンガンを放つ。それに構わず、ガンダムタイプを切り裂こうとする。

「…貫った!!」

「こ、こいつ!」

「リップパー、回避!そいつはヤバイ!」

攻撃は避けられ、ガンダムは反撃しようとする。しかし、それを俺は余裕で回避した。

「友軍じゃないのか…!？」

一人の連邦兵が言う。

「こいつは…敵だ！」

「かかる火の粉はなんとやらってね」

「…全員まとめて相手してやる!!」

俺はビームサーベルでピクシーをと罅迫り合う。

「くっ！何なんだこいつは！」

ピクシーは間合いを取ると、ガンキャノンが砲撃を放つ。俺はシールドでそれを防ぐ、その間にスレイヴレイスがビームサーベルで切り裂こうとする。

「…！」

「くっ！この機体…！」

俺は左手でビームサーベルを引き抜いて彼の攻撃を防いでいた。

「トラヴィスさん！避けてください！」

スレイヴレイスが身を引くと、ビームライフルが飛んでくる。

「…！」

それを身を屈めて回避し、前を見ると、真っ白なピクシーが立っていた。

「お譲ちゃんは下がってな…こいつは本気でヤバイぞ！」

「いいえーやりますー！」

そう言つてピクシーがダガーで攻撃してくる。

俺はビームサーベルでダガーを受け止めた。

「…ちっ！」

「仲間…やらせません！」

聞き覚えのある声。だが、それが誰なのかは思い出せない。そんなことより、今はこの機体と戦えて心臓が破裂するほどワクワクしている。

「…！」

ピクシーを吹き飛ばし、ビームサーベルで切り裂こうとすると、それに割つて入った白い機体が対艦刀で受け止めた。

「邪魔を…するな！」

俺はビームサーベルの出力を上げ、対艦刀を焼き切る。すると、白い機体は間合いをとり、遠くから弾丸が飛んできた。

「数で圧せる…行くぞ、ユーリ！」

「援護は任せてください！」

聞きなれた名前と声…だが、まだ思い出すことが出来ない。いや、自分が思い出したくないのかもしれない。そんな俺から言葉が漏れた。

「…黙れ…黙れえええ!!!」

その叫びは、全員に聞こえたのか、全員が攻撃の手を休める。

「その声、もしかしてその蒼い機体に乗ってるのはムゲン…お前さんなのか!?」
スレイヴレイスのパイロットが無線で問いかけてくる。

「…そう…だ…」

俺が答えると一人の女性が叫ぶ。

「…ムゲン!!ムゲンなんですよ!?何で攻撃してくるの!?!」

何故攻撃してくるか、そう問われたら、俺は淡々と言い放った。

「何故…それは、戦いできなきゃ満たされないからだ!!!」

「そして!俺はコイツで全てを執行すると決めた…!」

「そ、そんな…!ムゲン…嘘だよ……!」

完全に戦意を喪失した白いピクシーをビームサーベルで切り裂こうとする。

「やらせない!!!」

その間にグレーのピクシーが割ってはいった。

「お前の相手はこの俺だ!」

「…執行する!」

サーベルと、ピクシーのダガーがぶつかり合い火花を散らす。

俺は間合いを取った後、ブーストを吹かし飛び上がる。そして、ビームサーベルを上から振り下ろした。

「ちっ!!」

ピクシーは間合いを取る。そして、機体を低くした。するとピクシーを掠めてビームが飛んできた。

「ムゲン！お前さんなんだろう!!目を覚ますんだ!!」

「フィクサー、今の奴に何を言っても無駄だ。今はこいつを止めるしかない!」
スレイヴレイスのパイロットは少し考えた後、叫んだ。

「野郎共!こいつから嫌でもムゲンを降ろさせるぞ!」

そう言ってスレイヴレイスはビームライフルを放つ。

俺はそれを防ぎ、マシンガンを放った。

「くそっ……!」

奴をビームサーベルで切り裂こうとした瞬間、マシンガンが背後に直撃する。

「……!」

「ムゲン！聞こえているな！俺だ！ファングだ!!」

聞き覚えのある声、そして、名前……そう……俺が前にいた部隊のリーダー……今、思い出した。ずっと引つかかって思い出せなかった、全員の名前、顔全てを思い出した。

「フアング…さん…」

「ムゲン!! その機体から降りるんだ!」

「…りよう…か…」

言葉を言い切る前に、研究者から無線が入る。

「適合者! 何をしている! そうか…調整に失敗したか…。ならばこちらでH A D E Sを強制的に起動させてやろう」

研究者の声が聞こえたのか、慌ててフアングさんが叫ぶ。

「何だ?! おい! ムゲン! 早く降りるんだ!!」

俺がハッチを開ける前に、ペイルライダーは熱を排気し、カメラアイが赤く光る。間に合わなかった、H A D E Sが起動した以上、俺はコイツを操る機械と化してしまう。

「ぐ…アア…!? アアアアアア…!!!」

「ムゲン!!! しっかりするんだ!!!」

ペイルライダーはゆっくりと起き上がり、背後にいるガンダムを睨み付ける。

「…ぐ…あ…!」

意識が消えかけ、言葉さえ発せ無くなってきた。

「ムゲン! やめるんだ!!!」

「フアン…グ…さん…逃げる…んだ…」

「お前が帰ってきたのに今ここで逃げてどうするんだ!!俺たちが受け止める、だから…帰って来い!!」

フアングさんが必死に叫ぶ。そんな言葉で、朦朧とした意識が少しずつはつきりし始める。

「があっ…はあっ…はあっ…!」

「ムゲン!!皆待つてる!戻って来い!!」

「…了解…はあっ…はあっ…!」

俺はH A D E Sを強制的にシャットダウンさせる。そして、コックピットハッチを開き、機体から降りようとした瞬間、唐突に目眩いがする。

倒れるように落ちるのを、大きな機械の手がゆっくりと俺を捕らえた。

「く…あ…」

機体のハッチが開く、そして彼女の声が聞こえてくる。

「ムゲン!やつと…やつと会えた…」

「…り…ナ…」

彼女は、俺を引きずるようにピクシーの中に入れた。

「ムゲン!!!会いたかった…ずつと…ずつと…!」

「リナ…」

彼女の言葉で目が覚めていく。

「ああ…ムゲン!!」

彼女は俺を強く強く抱きしめてきた。

「…痛い…よ…」

「あ…ごめん…」

久しぶりの再会の雰囲気潰すかのようにその機体は現れる。

「な、なんだ…?あいつ…!」

「この蒼い機体と同じ…?」

「いや…少し違う!」

「なにせよ、野郎共!ここが正念場だ!!」

トラヴィスさんが叫ぶと、リップパー、ボマーが動き出し、見たことのない機体と戦闘を開始する。

「リナ…怖いだろうけど、少しだけだから我慢して…」

「うん、ムゲンがいるなら何も怖くないよ!」

俺は彼女に微笑んだ後、モニターを見る。

俺はピクシーのダガーを引き抜き、蒼い機体に斬りかかった。

そして、軽々とダガーをビームサーベルで受け、俺の機体を吹き飛ばす。

「ぐあ……っ！」

「ジオンの機体を逃がしたお前らは、俺によつて抹殺されなきゃなんねえよなあ!!」
「その声……! お前は……シゼル・クライン!!」

彼は俺の声を聞き、驚きながら言った。

「おやあ? 俺が実験台として要求したムゲン君がどうしてそんな機体に乗ってるんだあ? 実験台はなあ……実験台らしくペイルライダー乗ってればいいんだよお!!」

そう言つてビームライフルを撃つてくる。

俺はその攻撃を回避し、ダガーで奴を斬ろうとする……が。

「ふっ!! 遅いんだよお!!」

そう言つて奴は、ピクシーの腕を掴み、そのまま投げた。

「ぐあああああああ!!」

機体が吹き飛ばされ、地面に叩きつけられる。

その刹那、俺はリナを庇うようにコックピットでうづくまった。そのせいか、頭を強く打ち、意識が飛びそうになる。

ピクシーは膝を付き、ゆっくりと立ち上がる。

「……頼む……俺……に……力を貸せ……ピクシー……ハートライトオオオオオ!!」

俺は叫びながらシゼルに一本のビームダガーを突き刺す。

「な、なにっ!？」

シゼルは負けじと頭部バルカンを放ち、バルカンの弾はコックピットに貫通し、機器が破損し、モニターが砂嵐になりかける。その際、俺の腕に機器の破片が飛び散り傷をつけた。

「ムゲン……!あなた……!」

「リナ……逃げろ……!きつと帰るから……!」

「嫌だ!ムゲンと離れたくない!!!」

そう言つて抱きついてくるリナ。

「言うことを聞いてくれ!!!頼む……早くコックピットから降りて逃げるんだ!!!」

俺が必死に叫ぶと、彼女は涙目になりながら言った。

「……分かった……絶対帰つてきてね……」

「うん…… フアングさん!リナの回収頼みます!」

そう言つてハッチを開ける。そして、リナを機体から降ろした。

「ムゲン!絶対帰つてくるんだぞ!!!」

「了解……!」

フアングさんがリナを回収したのを確認した後、奴と間合いを取った俺はシゼルに叫

んだ。

「お前を逃がすわけには行かないんだ!!!」

「黙れ……!!お前を処刑してやる!!!」

機体が赤く発光する、やはりあいつもH A D E Sシステムを搭載していたのか。

「うおおおおお!!!」

サーベルとダガーがぶつかり合い、二機は一度間合いを取る。

そして、俺はダガーの出力を上げながら、呟いた。

「この一撃に……俺の魂を込める……!」

「俺がお前を殺してやる!!!終わりだあ!!!ムゲン!!!」

シゼルがビームサーベルを振り下ろす。俺は咄嗟に回避し、続けて左腕のダガーで機体の腕を切り落とした。

「何だ?!」

「これが……俺の魂の一撃だあああああ!!!」

俺はビームダガーを奴の頭部に突き刺した。

そしてそのまま俺は気を失った。

11：隸属する亡霊と失われし自分

宇宙世紀0079 11.30 ジャブロー攻防戦。公国軍、ジャブロー降下作戦を展開。

ブリテイツシュ作戦以来、連邦軍参謀本部総司令部ジャブローを攻撃目標としていなかった公国軍が、MS工場破壊を目的として再び攻撃をしかける。

水陸両用MS3機からなる先発攻撃隊、アマゾン河を溯行、MS用出入口を発見。

ジャブロー側侵入を察知、警戒警報発令。キャルフオルニア基地よりジオン増援部隊到着、MS隊降下開始。ジャブロー、迎撃体制に入る。迎撃戦闘機隊発進。

シヤア・アズナブル大佐、RX-78-2ガンダムと交戦するも、RGM-79GM量産工場爆破を失敗。ジオン攻撃部隊、撤退。ジャブロー攻撃失敗。これを機に、公国軍地上戦力の崩壊に拍車がかかる

そんな大きな戦いを知ったのは、その日から数日たった後だった。

宇宙世紀0079 12.01 スレイヴ・レイス隊に保護されたムゲンは、前の戦闘で今までの記憶が無くなってしまっている可能性が発覚。

「……いはい……」

目を覚ますと見知らぬ部屋に自分はいた。

何か大切なことを忘れていている気もしたが、俺は立ち上がり部屋を出ることにする。

「…」

部屋を出ると、丁度俺に用事があつたのか、一人の青年がこちらへ歩いてきた。

「あ、目が覚めたんですね」

「…は、はい」

「気分はどうですか？」

「…大丈夫です…」

まだ頭の中ははつきりとしませんが、俺は彼に頷く。

「そうですか。あ、そういえば、あなたの機体は修理しておきましたよ。いやあ、修理は結構時間が掛かってしまいましたけどね」

機体：…その言葉を聞いてもしつかりと思いつくことが出来なかった。俺が困惑した顔をしていたのか、彼は不思議そうに聞いてきた。

「もしかして…機体が分からないんですか…？」

機体どころではなかった。俺は自分の名前すら思い出せないで居たのだ、機体のことなど分かるわけがない。

俺は彼に首を横に振った。すると彼は驚きながら言う。

「ええ!?…やっぱりそうなんですか…」

どうやら彼は俺に何があつたかを知っているように見えた。

俺は意を決して彼に問いかける。

「俺…俺に…何があつたんですか…?」

彼は少しずつだが答えてくれた。

「あなたは前の戦闘で見たことのない機体と戦闘して、その機体を撃退した後、そのまま気絶していたんです」

「その後、あなたと機体を回収して、あなたを診たところ、運が悪いと記憶がなくなっている可能性があるというのが分かつたんです」

「…どうして…ですか?」

「その理由までは分かりませんが…。たぶん、戦闘中に頭を強く打つたのかもしれないですね」

「…」

彼が言ったことを簡単にまとめてみた。自分は見知らぬ機体と戦ってその機体を撃退した後、気を失い、機体と俺は回収され、俺を診てみると記憶がなくなっているかもと、言うことらしい。

「…分かりました…。なんとなくは…」

「そうですか…おつと、こんなことしてる場合じゃない、隊長に報告があつたんだ！それではこれで！」

そう言つて彼はおれにお辞儀した後、走つて行つてしまつた。俺は何もすることがなく、とりあえずここを見てまわることにする。

廊下を歩いてみると、一人の女性とすれ違つた。

すると女性は立ち止まり、俺に声をかけてきた。

「あら、目が覚めた？」

俺は振り返り、彼女を見る。だいたい20代の女性といった感じの人で、こちらを微笑みながら聞いてきたので、俺は頷きながら答えた。

「あ、はい…。俺は…」

「ああ、言わなくても分かるからいい」

そう言つて彼女は俺の言葉を遮る。

「なんにしろ、君の目が覚めたのはフィクサー達にも言つておかないと。ちよつと付いてきて」

言いながら彼女は歩き出した。

俺はそれに続いて歩き出す。

しばらく歩き続けると、彼女は立ち止まり、その部屋へ入っていく。俺も続いて入ることにする。

部屋に入ると司令室なのだろうか、ホワイトボードやイスが置いてある。

彼女は慣れた手つきで無線機のスイッチをオンにし、誰かと連絡を取っていた。

俺は邪魔にならないようにイスに腰をかける。

「もうすぐ全員集まるわ。それまで少しゆっくりしていて」

そう言って彼女は俺の前にコーヒーを差し出してくれた。

「ありがとうございます……」

俺はそれを受け取り、コーヒーを口に運ぶ。

少なからず、今の俺には人物の記憶はなくなっているものの、日常で生活する程度なら支障はない程度で済んでいるみたいだ。

でもどうして俺の記憶は消えてしまったのだろうか……すっかり思い出そうとすると頭が割れるように痛くなる。

そんなことをぼんやりと考えていると、俺の肩に手が置かれた。

見上げると、俺のほうを心配そうに見つめる人がいた。

「……あ……すいません……」

「着いたわね、フィクサー」

「おう。それで、ムゲンの状態は？」

その言葉を聞いた彼女は、フィクサーと呼ばれる人物に首を横に振る。

「そうか…」

しばらく考えた後、彼は俺を見ながら聞いてきた。

「お前さん、自分の名前は…？」

しばらく考えたが、自分の名前を思い出すことが出来ない。その姿を見た彼は言った。

「…そうか…分かった…」

そう言っただけは、俺に言う。

「ムゲン・クロス・フォード」…。それがお前さんの名前だ」

「…ムゲン…俺の名前…」

「そうだ、それがお前さんの名前だ」

彼はその言葉と共に微笑んだ。

「俺の名前はトラヴィス・カークランド、みんなからフィクサーと呼ばれてる。お前さんと実際に会うのは2度目だが、よろしくな！」

「トラヴィスさん…よろしくお願ひします」

「そして、こいつがハイヤー。それで、彼女がダイバーだ。んで、このバンダナのこいつがリツパーだ。それで、このメガネをかけたこいつがボマー。仲良くしてやってくれ」

トラヴィスさんは一人ずつ俺に紹介してくれる。

俺は立ち上がり、皆にお辞儀をした。

「皆さん、よろしくお願ひします！」

「よろしくな！ムゲン」

ボマーさんが言う。

「よろしく、ムゲン」

続いてリツパーさんが

「よろしくお願ひします！ムゲンさん！」

ハイヤーさんが言った。

「よろしくね、ムゲンちゃん」

と、ダイバーさんが言う。

「そして、ようこそレイスへ」

そう言つてトラヴィスさんが俺に手を差し出す。

俺は彼の手を握り返しながら言った。

「…はい！」

今の俺には記憶が無い。それでも、今俺に手を差し伸べてくれる人たちがいるなら、その人たちを守るために戦う。きつと過去の俺もそうしたはずだ。

「丁度いいから、今日の作戦について説明しておくわ」

そう言ってダイバーさんは説明を始める。

「サン・ルイス付近まで敗走したジオン部隊を掃討せよとの命令よ。お迎えが来ないと想定されるジオン部隊は、アルカントラ発射場を指すと決め付けたみたい」

分からないことだらけの俺は一つ質問する事にした。

「あの…そのアルカントラ発射場って…」

「要するに連邦軍管轄のロケット発射場ね。ここなら直接、宇宙に戻るからね。先回りして、アルカントラ発射場でジオン部隊を待ち伏せしろだつてさ」

「なるほど…」

俺が理解したのを見て、ダイバーさんは続けた。

「今回、いつもの機体は使えないわ。今までの実戦データの回収ついでに、整備場送りだつてさ」

「代替機のジムじゃ、いつものハイスペックみたいにはいかないけど、そこは腕でカバーしてちょうだい」

「後、ムゲンちゃんはここで待機ね」

「えっ…」

「前の戦いでの傷も殆ど治つてるとはいえ、戦い方の分からないムゲンちゃんが出ても足手まといなのよ…。悪いけど、ここで待機して？」

「…はい…」

確かにそうだ。今の俺には機体を操作する方法すら分からないのに、出撃することなんて出来っこないのは自分でもわかつてはいたのだが。

「ちよつと待った、ダイバー」

そう言つてトラヴィスさんが止める。

「何よ」

「ムゲンにも出撃してもらいたいんだ」

「えっ…?」

「どういうこと? フイクサー」

「今整備場送りになつて俺達の機体以外、ハイスペック機が1機いるだろう? あいつを使うのさ」

「でも彼はまだしつかり動けないはずよ」

「それはムゲン次第さ」

彼はこちらに振り返り、言つた。

「なあに、お前さんに何かあったら責任は全部俺が取るさ。な？いいだろう？」

「…俺は…構いませんよ」

「じゃあ決まりだ！野郎共！いくぞ!!」

「了解！」

みんなと声が重なる。俺は初めての戦闘に少しばかりか心が踊っているのに気がついていた。

格納庫へ行くと、大きなロボットが静かに佇んでいた。

「これがムゲンさんの機体です。名前は『ピクシー・ハートライト』」

「ピクシー…ハートライト…」

ハートライト…その名前をずっと前に聞いたことがあるような気がしたのは気のせいだろうか…

俺は機体に取りこみ、慣れた手つきでシステムを次々と起動させていく。おかしい。どうして俺はこれを知っているんだろう。

俺が全てのシステムを起動させると、ピクシーのカメラアイが一際強く輝いた。

そして、モニターが周りを映し出し、トラヴィスさんからの無線が入る。

「その様子なら、問題なさそうだな」

「でも…」

「大丈夫、お前さんならできるさ。期待してるぜ？」

「…はい！」

「よし！野郎共！出撃だ!!!」

そう言つて出撃する。

ボマーさんとリツパーさんに続いて俺も出撃した。

「ムゲン・クロスフオード…行きます!!」

作戦は、アルカンタラ発射場でジオン部隊を待ち伏せと言うことで、皆は機体を動かしながら話をしている。

しばらくすると、目標地点である場所に到着した。

「ここが目標地点だよな？」

トラヴィスさんがダイバーさんに聞く。

「そのはずよ」

「ジオン部隊の影も形も無えな…」

と、彼は眩く。

「視界が悪い…嫌な感じだ」

リッパーさんが眩く。

「待ち伏せ用だからな」

と、軽く受け流すボマーさん。

「それにこのジム、動きが鈍すぎる。早くピクシーに…」

「我慢して。ピクシーはハイヤーが整備に持っててるはずでしょ…あれ？」

ダイバーさんが何かに気がつく。

「どうした？ダイバー」

「レーダーに反応！包囲されてる」

「ハメられたか」

「やれやれだ」

俺達は立ち止まり、周りに目をやる。すると、胸部がオレンジ色に塗装されたジムが、こちらへ向かって歩いてくる。

「しかも友軍かよ…」

「何でこんな…」

困惑する俺に、リッパーさんが言う。

「掃除屋だ。俺たちを始末しに来たんだ」

「ひどい…」

「クビならそう言ってくれりや、喜んで出て行くのによ…」

「それだけ、レイスが怖いのか」

少し考えた後、トラヴィスさんが言った。

「野郎共、強行突破だ！」

「どこへ行くんだ？もう帰る場所なんて無いぞ？」

「いいから付いて来い！」

そう言っつてジムのブースターを吹かし、移動するトラヴィスさん。俺も後れを取らぬよう、彼の後を追う。

ジムが立ちほだかる。リッパーさんがビームサーベルを引き抜き、敵を切り裂く。

「敵機！撃破だ！」

「急ぐぞ！もう少しだ！」

そして、逃げながらたどり着いた場所は、ひとつの大きな建物。見たところ、格納庫のようだが…。

「ここに何があるんだ？」

不思議そうにボマーさんが尋ねる。彼らが機体から降りていくのが分かった。

「ムゲンはその位置で待機だ。機体は降りなくていい」

トラヴィスさんの指示。俺は黙ってその様子を見届ける。

「皆さん！ご無事で！」

そこで待つていたのは、ハイヤーさんだった。

「ハイヤー？」

驚いたドライバーさんにハイヤーさんはだいたいの理由を説明しながら、3人に機体を乗り換えさせる。

愛用のピクシーが戻ってきたからか、とても嬉しそうなリツパーさんが言う。

「これだ、この感覚！ジムとは大違いだ！」

「じゃあ、整備場に送ったのは、ダメーだったって事？」

「ええ、予備パーツででっちあげたハリボテです」

「冴えてるじゃない！」

「いや、隊長の指示でしたから」

と、少し照れくさそうに言った。

「別口でオーバーホールしたのはお前だろ？」

「発信機とか、そういうのは取り付けられてないでしょうね？」

「取り外しましたよ。ついでにジェネレーターに妙な細工がしてあるのを見つけました」

「細工…ですか」

俺は思わず言葉を漏らす。

「出力制御が、外部からの割り込みを受けるようになっていて…」

「ごめん、一言で言っただけ」

分からなかったのか、たまたまダイバーさんは言葉を遮った。正直俺も何を言っているのか理解できない。

「えーと、特定の信号でドカン！ってなる仕組みがっていました」

その言葉を聞いて驚いたトラヴィスさんは

「マジかよ、動く核爆弾ってわけか？」

「俺の機体にも？」

ボマーさんが言う。

「ええ、3機とも同様に細工されました」

「……やれやれ」

少し呆れたように聞こえたのは気のせいだろうか。

「おい、追撃部隊がじきに追いつく。どうする隊長？」

すると、トラヴィスさんは答えた。

「いい考えがある」

そう言って、全員に考えを言う。

「…ホントにやるのか？」

「ああ、お前なら出来る…だろ？」

そう言つて彼が微笑んだように見えた。

少し考えた後、ボマーさんは口を開く。

「分かった。岬の発射場で落ち合おう」

そう言つて、先に行つてしまった。

「ムゲン。お前さんはボマーと一緒に行つてくれ」

「で、でも！」

「大丈夫だ、俺たちなら問題ない。だから、ボマーを頼むぞ、ムゲン」

ほかならぬトラヴィスさんの頼みだった。俺は一言了解と言つて、ボマーさんの後を追つた。

「ムゲン、来たのか」

ボマーさんは俺に気がついたのか、無線が入る

「隊長の命令で…」

「そうか。じゃあ少し手伝つてもらおうぞ」

そう言つて彼の機体に並んで俺は歩き出した。

「ボマーさん」

「なんだ？」

「思い出したくない過去ってありますか…？」

「…」

何か悪いことを聞いてしまっている気もしたが、俺は黙って返答を待った。

しばらくすると、ボマーさんが口を開く。

「俺がレイスに入ったのは、仲間殺しをしてしまったからだ」

「…仲間を殺した時のことは、今でも夢に見る」

「反連邦ゲリラの掃討作戦。仲間が全員脱出するまで、待てなかった。俺がチキンだ

からだ」

「爆薬を仕掛けたアジトから、先に脱出するのが仲間の部隊か、それともゲリラ共か

…」

「俺は丸腰だった。敵が脱出すれば、俺は殺されていただろう」

「「カチツ」だからスイッチを押した。「ボン！」…敵と仲間を大勢殺し、俺は勲章を

貰った」

「…そんな…悪いことじゃないですか…！」

「ああ。だから徹底的に責められた方がまだ気が楽だったろう。その勲章の重さに耐

え切れず、俺は疲弊し、一時しのぎの快楽に溺れた」

「そんな俺を拾ったのがグレイヴだった。グレイヴは仲間を殺せる男を欲しがっていた」

「あの時の後悔は今でも忘れてはいない。だが、このレイスに入れたのは、少しばかりだが嬉しかったりもするんだ」

「フィクサーやリッパ、皆が仲良くしてくれるからな」

「…そうだったんですね…」

一通りの話を聞いて、正面に目をやると、3機ほどの機体が前方から迫ってくるのが分かった。たぶん、追撃部隊がこっちに気づいたのだろう。

「…敵です！」

「そのようだな」

「援護するから、頼んだぞ！ムゲン」

「了解！」

俺はビームダガーを引き抜き、相手に斬りかかる。不意の攻撃に驚いたジムは、何の抵抗も無く真つ二つになった。

「1機撃破!!」

「俺も1機落としたぞ！」

最後の1機であるジムが俺に斬りかかって来る。すかさず俺はそれを回避し、ジムと鏝迫り合いの形になる。

ビームサーベルの出力より、ダガーの出力は劣っているためか、俺は徐々に圧され始めた。

「くっ……まだ……まだ!!!」

俺はもう一本のダガーを取り出し、相手のコックピット目掛けて突き刺す。

ジムが完全に動かなくなるのを見て、また俺たちは歩き出した。

「発射場まであと少しだ。急ごう」

「はい……」

俺はピクシーのブーストを吹かし、移動する。

そして、しばらくすると、発射場が見えてきた。

「よし、ムゲン、この爆弾を発射場に取り付けるんだ」

「え……つと」

渡された爆弾を言われたとおりに設置していく。

10分くらいすると、全ての爆弾が設置し終える。

「よし、こっちだ」

そう言って丘に登る。そこでトラヴィスさんたちを待つことになった。

少しすると、2機の機体がこちらへ向かってくる。

「来い!!」

ボマーさんが叫んだ。

すると2機は、この丘へ上ってくる。そして、その後を追う機体には見覚えがあった。蒼い機体…。何かが引つかかった。

全員がこちらに来たのを確認した彼は叫ぶ。

「シヨータイムだ!!」

その言葉と共に、発射場は爆発し、蒼い機体を飲み込んだ。

「やった!」

しかけた爆弾が上手く作動してくれたことで出た言葉なのは分らないが、俺の口からは自然とその言葉が漏れた。

行くあてがあるのか分らないが、俺がトラヴィスさんと並んで歩いていると、ボマーさんはトラヴィスさんに問いかけた。

「なあ、フィクサー」

「あん?」

「俺の過去、知ってんだろ?それでよくこんな事任せたな」

「過去は過去、今は今だ」

そう言い放った。その言葉に、俺は少しだけ憧れを抱いた。自分に過去の記憶が無い。だから、過去を思い出すことも出来ないのだ。過去の俺は、一体どんな奴だったんだろう…。

1 1 完

12：レイスとの別れ —新たな邂逅—

宇宙世紀0079 12.02 あの作戦の後、スレイヴ・レイス隊は地球連邦軍でお尋ね者として追われる身になった。

それは、レイスに保護されている俺も例外ではない。そんな俺たちは、帰る家も無く、ただただ放浪する身になっていた。

そして、そんな日の朝、俺たちは、簡易テントに招集をかけられたのだった。

「はい注目！」

ダイバーさんの言葉で全員の視線が彼女に向かう。

「これで私たちは晴れてお尋ね者つてワケね。無線を傍受した感じじゃ、生死不明扱いだけど、追撃が掛かるのは時間の問題ね」

「何より、グレイヴと、あの蒼いジムが諦めるとは思えないわ」

あの時見た蒼い機体、俺には見覚えがあった。ずっとそれが俺の胸の中で引っかかっている。

「つてことでまずは足を手に入れなくちゃね。船は遅いし、海の上じゃ逃げ場もないわ。北米沿岸の基地で、ミデアを拝借しましょう」

作戦の概要を説明し終わったダイバーさんは、トラヴィスさんにアイコンタクトを送ったのか、トラヴィスさんが口を開いた。

「んじゃあ、レイス共、その基地に向かうとするか！」

「了解です！」

俺はピクシーに乗り込み、システムを起動させる。

全員が機体に取りこみ、北米沿岸の基地へ向けて移動を開始した。

移動している途中、俺は頭の中であの蒼い機体について考えていた。

奴と俺は一体どんな関係だったのか、どうしてあいつを見た瞬間胸騒ぎがしたのか、分からない。

「…ゲン！ムゲン！！」

トラヴィスさんの声で正気に戻る。

「あ、どうしましたか？」

「もし何か来ても油断はするなよ？」

「え…あ、はい」

「それで、お前さん…何を考えてたんだ？」

俺は少し考えた後、思い切って彼に聞いてみた。

「隊長…。あの前の作戦にいた蒼いジムって一体何なんですか…?」

少しの間が空いた後、トラヴィスさんは口を開く。

「お前さんがどうしても知りたいと言うのなら、先に言っておきたいことがある。世の中には思い出さなくて良い過去ってものはあるってことだ」

「お前さんと蒼いジムの関係が良い過去でなくても…それでもお前さんは聞きたいか？」

彼は、俺を察して言ってくれたのだろう。だが、今の自分にはどんなことでも知りたかった。自分の過去がどんなものかを。

「俺は…知りたい。たとえどんな過去であろうとも、知らないというのが一番辛いんです。だから…お願いします」

「…分かった…」

「簡潔に言っておこう。あの蒼いジムには、お前さんは乗ったことがある」
「どういうことですか…?」

「あの日は、ジャブローの夜間偵察をしていた時だったな。ジオンの部隊を見つけ、戦闘になっているときに、お前さんの乗ったあの蒼いジムが現れたんだ」

「そして、瞬く間にジオンの機体を3機落とす。俺たちを狙ってきた…」

「…そんな…事が…」

「お前さんは、その時少しずつ自分を思い出し、仲間とともに帰ろうとしたとき、あの蒼い機体に似た機体が来てな

「お前さんは、今乗っている機体でその蒼い機体を撃退したんだ」

記憶のなかった俺は、とてもショックな気持ちになった。レイスの皆を狙ったという事が分かってしまい、俺は自分自身を責める。

「隊長…申し訳ないです…」

「何、お前さんが悪いわけじゃない。あれは仕方なかったんだ…」

「でも…隊長たちを傷つけたことには変わりありません…」

「んー…なんだ。まあそんな自分を責めなさんな。俺たちレイスはそういうことやって拾われた奴らの集まりだからな」

彼の優しさが身に染みた。こんな自分でも許してくれるのなら、俺は彼らのために役に立とうと心に誓う。

そして、しばらくすると連邦軍の基地が見えてきた。

すると、ダイバーさんが口を開く。

「いい？あたしがうまいことやるから。余計な事言わずに黙ってるのよ？」
するとトラヴィスさんは少し呆れながら言った。

「へいへい」

俺たちは静かに彼女を見守ることにする。

「ハア〜イ、基地司令さん。ちよつとお願いがあるんだけどお〜」

これにはさすがの俺も驚いた。なんか、うまいことやってそういうことなのか？と。

司令は彼女の言葉を聞いていないのだろうか。もしくは無視しているかのどちらかだろう。

ダイバーさんは続けた。

「あたしたちの部隊い、困ってるんです〜」

「…ひでえ」

ボマーさんの口からそんな言葉が漏れ出した。

すると、ダイバーさんの誘惑（？）のせいかなMS隊が出撃してきてしまう。

「げっ！」

「ダイバーの口調が怒りを買ったか？」

「んなわけあるか！情報がまわってるのよ！」

そんな話を聞き、俺は隊長に問いかける。

「こんなにも早く情報がまわってるなんて…！どうします？隊長」

「仕方無え。レイス共、実力行使でミデアを借りるぞ！」
「了解です！」

彼の言葉に頷いた俺はビームライフルを構え、1機のジムを射撃する。

「ムゲン！ミデアのある場所まで急ぐんだ！」

トラヴィスさんが叫ぶ。俺は彼の機体を追いながら敵を倒す。

だが、予定外の増援がやってきた。なんとジオン軍だった。

「なんだと!？」

「ジオン!? どうしてここに……!」

「ミデアまでもう少しだ! 急ぐぞ!!」

「くっ……!」

俺たちは激しい攻撃を耐えながらミデアのある場所まで向かう。

ミデアにつくと、ダイバーさんは機体から降り、ミデアの操舵席に向かった。

「ツイてるわ。燃料満タン。機体の登録変更をかけるから、時間を稼いで」

「了解」

リッパーさんのピクシーが敵をまとめて切り伏せる。

ボマーさんがバズーカで敵を粉碎し、トラヴィスさんがビームライフルで敵を的確に撃ち抜いていく。

だが、さすがに数が多く3人では捌ききれしていない。俺はビームダガーを引き抜いて、ジムを切り伏せた。

「くっ！こんなに多いなんて!!」

「黙って敵を倒せ。ムゲン」

「…了解…!」

ガンキャノンのビームライフルがリッパーさんのピクシーを掠める。

「ちっ!!」

ピクシーは間合いを取る。そして追撃してこようとするガンキャノンを俺はビームダガーで切り裂いた。

「遅い!!」

「まだなんですか!?ダイバーさん!!」

「偽造するのがたくさんあんのよ。命令書に作戦コード、それに身分証明書…」

「いいから、はやくやれ!」

「はいはい。もうちよつとだつて…オツケー、準備完了!」

「いきます!乗ってください!」

その間にも次々と増援がやってくる。

3人は一足早くミデアに向かう。だが、俺は彼らの撤退した道に仁王立ちになり、敵

を迎え撃つ。

「ムゲン！お前さんも早く来るんだ!!!」

「隊長！俺は大丈夫です。後は任せました!!」

「ムゲン！戻って来い!!ムゲン!!!」

「行つて下さい！すぐに追いつきます!!」

「…すまない。ムゲン…!」

そして、その言葉を最後にミデアは離陸して行つた。

「お元気で…レイスの皆…」

俺はそれを見送つた後、レーダーを確認する。

敵は10機程度。俺とこの機体なら、それくらいは容易いと思つた。

「いこう…。ハートライト…!」

俺はビームライフルで1機のジムを撃ち抜く。そして、背後に近づいてきたザクを

ビームダガーで振り向きざまに切り裂いた。

「お前らの相手は…この俺だああああ!!!」

そう叫びながら俺は突撃する。

「うおおおおお!!どけえええ!!!」

そして、威圧で圧されたザクを駆け抜けながら切り裂く。

「は、はやい!!?うわあああああ!!」

なんだろう…この感覚。ずっと俺はこれを求めていた。なぜだろう、とても込み上げるものがあつた。

レーダーに反応していた機体が次々に撤退していく。

「なんだ…?」

そして、撤退していく機体の中、2機だけこちらに迫ってくる機体があった。

「くっ!!」

突然ヒートホークを構えた白いザクが攻撃してくる。

「白いガンダム…。なるほど…こいつが」

俺はビームダガーでヒートホークを受け、つばぜりあい鏑迫り合いの形になった。

「くっ…強い…」

「そうか…なるほど…トラヴィスに聞いたとおりだ」

「…え?」

するとザクは間合いを取った後、ヒートホークを投げってくる。

「くっ!!」

ダガーで受けたため、ダガーが吹き飛ばされ、俺はビームライフルを構えようとした。…が、背後からの殺気に気づいた俺は察して、ビームライフルを地面に落とす。

「…そうだ。そうして貰ったほうが話は早い。ムゲン・クロスフォード」

「なぜ…俺の名前を…？」

「話のとおり、記憶もなくなってるのかよ！あーあ…！前の借りを返したかったのによお…」

「黙ってる、カカサ。とりあえず、お前には話を通じそうだな。俺の名前はクロノード・グレイス。悪いが付いてきてもらうぞ」

「…分かった」

「俺はカカサ・キヤモイって言うんだ。お前あの蒼いやつに乗ってたやつだろ？情報は全部知ってるんだ!!」

「カカサ、お前は黙れ！」

「へいへーい」

「…」

俺は彼らの後を追った。

しばらく歩いていると、小さな輸送機が見えてきた。あれは……ジオンの輸送機だろうか。

機体から降りると、背の高い銀髪の人物が迎えてくれる。

「さ、着いたぞ。ようこそ！第30特別遊撃部隊へ！」
だいさんまるとくべつゆうげきぶたい

と、笑顔でクロノードと言う人物が言った。顔はどちらかというといふと美形なほうで、整っている。

「…あの…」

「さて、話はこいつの中で聞こう」

俺は機体から降り、輸送機の中へ入る。

廊下を歩いていると、連邦の制服を着た人物を見かけ、ジオンの人物と仲良く談笑しているのを見かける。

「ジオンと連邦が仲良くしてるのは変か？」

クロノードが聞いてきた。

「…変じゃないですけど、なんか新鮮だな…と」

「この特別遊撃部隊は、非公式で作った部隊でな、こいつは連邦にいられなくなったパイロットとかも流れてきてるのさ」

「そうなんですか…」

「さ、着いたぜ」

前を見ると、大きく看板に司令室と子供が書くような文字で書いてあった。

「これは…」

「ああ、こいつは子供たちが書いた文字だな」

「まあ気にせず入れって」

そういつてクロノードが手招きをする。

「…」

「さて、話はだいたいトラヴィスから聞いている。お前、記憶がなくなってるんだってな」

「隊長を知ってるんですか…？」

「ああ、こつちではレイスは有名なんだぜ？…と、そんなことはいい」

「あ、はい」

「んで、俺と会ったことも覚えてないと」

「…申し訳ないですけど…はい…」

「気にするな。うーむ…まあ、レイスの囚になって残って戦い続けた度胸は変わってないみたいだが」

「そうだな、しばらくここにいいさ。そうすりゃあ、少しは記憶が戻るんじゃないか？」

「…だと良いんですが…」

「そんじやま、俺は偵察に行つて来るわ。お前はここをゆつくり見て回ると良いさ」
「あ…はい」

俺に手を振つて、クロノードは出て行つた。

「…」

俺は立ち上がり、司令室を後にする。

「よお!!」

さっきのうるさい人物だった。確かカカサとか言つたか。

短髪の黒髪。少し癖っ毛。

そして、顔はそれなりにカッコいいのだが…、なんか残念だ。

「…あ、どうも」

「お前、確かムゲンとか言つたよな! どうせ暇なんだろう? ちよつと一緒にここを見てまわらねえか?」

「…あ…はい」

と、半ば強引に俺はカカサに連れていかれた。なんだかまた面白そうな所に来たな…と、心で思うのだった。

1
2
完

13：幸せ

宇宙世紀0079. 12. 03 前の戦闘で俺はレイスの囷となり、彼らと別れた。情報によると、レイスは宇宙に上がった後、また地上に降りたらしい。また…隊長と会えるだろうか。

「と、言うわけで…現状はあまりよろしくない状況だ。なにより物資が少ない。そこで、連邦部隊の基地を強襲し、物資を奪う」

俺たちパイロットは、司令室に集められ、クロノードの話聞いていた。

「さて、奪うに最適な基地はどこだ？…おい、おい!!!カカサ!!!」

「んー？何かねクロノード君よ」

と、クロノードを挑発するように言う。

「…物資を奪うのに最適な…」

「ここから4km先にある、ソノラ砂漠が、今のところ手薄だ」

と、突然真面目になるカカサ。まったく彼の心情を読むことができない。

「…分かった。よし、これから少数の部隊に分ける。まず、リックお前が第1小隊のリーダーだ。んで、グレイ…」

次々に名前が呼ばれていく。

「第3小隊のメンバーは、俺とカカサとムゲン、お前だ」

「…あ、はい」

「よし、以上だ。全員出撃準備だ!!」

「了解!!!」

全員が立ち上がり、司令室を後にする。

俺はクロノードと共に格納庫へ向かった。

「へっへっへ！今日こそお前よりスコアとってやるぜカカサア!!」

「俺に勝とうなんて10年早いぜ！あ…いや、12年位か？いやいや、19年くらい…」

「お喋りはそこまでだ二人とも。早く準備をしろ」

そう言いながら手際よく機体に取り込む3人。

「…」

俺もピクシーに乗り込み、システムを起動させる。すると、クロノードから無線が入った。

「ムゲン、いつでもいけるな？」

「はい、いつでも大丈夫です」

「よし…第30特別遊撃部隊、行くぞ!!!」

そう叫び、白いザクを筆頭に出撃していく。

俺もピクシーを動かし、クロノードに続いた。

しばらく歩いていると、突然うるさい声が機体内に響き渡る。

「おい、ムゲン!!」

「…なんですか」

「お前、あの蒼いジムに乗ってたやつだろう?」

「え…一応…そう聞きましたけど…」

「なら、俺に修理代を払ってもらおうか!」

「えっ…?」

唐突な発言である。まったく、彼の言動は読むことができない。

「あの…」

「ふっふっふ…いつもは30倍にして返してもらおうところだが、今回は許してやろう。…お前金もつてなさそうだしな」

とか、小さくつぶやいたつもりなのだろうが、彼の言葉はこっちに丸聞こえだった。俺が困っているのに気づいたクロノードが彼に言う。

「おい、カカサ。ムゲンをあまり困らせるな。まったくお前はいつも…」

「はいはい、隊長さんはお偉いですからねえ、まったく頭が上がりませんよお、はい」と、挑発した口調で言った。

「…まあ、こんな奴だが根はいい奴なんだ。悪く思わないでくれ」

「あ…はい」

「なあムゲン。お前本当に記憶がないのか？」

と、突然真面目な口調で聞いてくるカカサ。俺は困惑しながらも頷いた。

「うーむ…じゃあ、俺の機体を傷つけたのも覚えてないのかよ…。まったくおめでた奴だぜ…」

彼は、俺と一度戦ったことがあるらしい。過去を知らない俺にとっては、彼は渡りに船のような存在だった。俺は、彼に意を決して聞いてみた。

「あの…カカサ。君は俺と戦ったことがあるんだよね？そのことを教えてくれないかな」

どうせ変な回答しかこないと思っていたが、以外にも彼は真面目に答えてくれた。

「あれは確か、連邦とジオンの裏取引に確証をつけるために奴らを追っていたときだった」

「その日はそれはもう綺麗な月が出ててだな、その月は本当に綺麗な満月でだな…い

や、すこし削れていた気もする…」

「いいから続けるカカサ…」

たまらず言葉をさえぎるクロノード。

「ああ。それで俺が裏取引の証拠写真を撮ろうとしたとき、蒼いあのジムがやってきて連邦とジオンの機体をバツタバツタと薙ぎ倒したんだ」

「それで、その蒼い奴は俺のほうにも向かってきたんだ」

「奴と俺は一進一退の攻防をした挙句、俺は武器を吹き飛ばされて負けかけた」

「けど、奴はなんかよく分からないけどそのまま動かなくなったんだ。だから、一目散に逃げたわけなんだ」

「…そうだったんですか…」

また一つ、俺は自分を責める過去を知った。どうして俺は出会う人達を傷つけてしまうのだろう。

「申し訳ない…カカサ…」

「本当だよ！まったくよお…修理がどれだけかかったと思ってるんだよ!!おまけに破損した武器代も…!!」

「お、おいカカサ…」

「だが…それでもあれほど燃える戦いができたのには感謝してるよ…ムゲン」

「え……？」

「戦争は一人でするもんじゃないから、一対一の戦闘なんてできない。だから、それができただけでもうれしいのさ」

その言葉は、少しだけだが彼の優しさを垣間見ることができた。

「さて、おしゃべりは終わりみたいだ、行こうぜムゲン！」

モニターを見ると、大きな基地が目に入る。

「…分かった、カカサ！」

先に隠れるのに適した場所に身を潜めたクロノードさんは誰かと連絡を取り合っていた。

「さて…。おい、第一小隊…！どうした!!反応しろ!!」

「どうしたんです…?」

「くっ…やられたのか!?!」

「おい、落ち着けよクロノード君。この俺みたいに…さ!!!」

気がつくとかカカサは俺達に近づいていたジムを背後からヒートサーベルで静かに貫いていた。

「これは…!」

「…おいおい…毘かよ…」

周りを見渡すと、10機ほどの機体に囲まれている。

「どうします…？クロノードさん」

「おいおい…『さん』付けはやめてくれ。…どうするかつてのは…こうするんだ!!」
 クロノードが1機のジムを対艦ライフルで撃ち抜くと、その音に呼応して基地のほうから爆音が響き渡った。

「第1小隊の生き残りは、第2小隊と合流。陣形を立て直して物資を回収し、帰還しろ！」

「やれやれ…。まーたお決まりの囀かよ…。俺の職業は暗殺だって言うのにさあ…クロノード君、俺を使いすぎなんじゃないの？高くつくよー？」

「まったく…。焼き鳥おごるから我慢してくれ」

「よっしゃー乗ったぜ！…んじゃ…殺るか」

そう言つて2機まとめてジムの切り裂くカカサ。

「どうよ！これが俺の力だぜ!!」

油断しているカカサの背後に忍び寄るジムの彼はまったく気づいていない。

「カカサ！後ろ!!」

「何…!?うわああ!!」

カカサはジムの振り上げたビームサーベルを避けきるほどの余裕がない。俺はいてもたってもいられなくなり、持っていたダガーをジムに投げつけた。

「頼む…届いてくれええ!!!」

俺の投げたダガーはジムの振り上げた腕に直撃し、ジムは持っていたビームサーベルを地面に落とした。

「今だ！カカサ!!!」

「任せとけて!!そらよおお!!!」

そう言いながらヒートサーベルをジムのコックピットに突き刺す。

「残り5機…か」

「…クロノード、カカサ…先に戻っててくれ」

「どうした？ムゲン」

俺はゆっくりとピクシーを動かし、5機のジムの前に立ちふさがった。

「こいつらは、俺だけで仕留める」

「なんだと!?!流石に無理があるぞ!」

「…今ならいけます…。俺でも役に立てるって所を見せましょう…!!!」

俺はジムの腕に刺さったダガーを引き抜き、構える。

「ムゲン…」

「俺あ信じるぜ！ムゲンをよ！！ただーし！負けたら修理代は自腹だ！！」

「…任せてくれ、カカサ」

「おう…！」

「さて…始めようか…狩りを…！」

するとその言葉に反応した連邦兵が言った。

「何が狩りだよ！俺達をなめると痛い目見るぜ！！かかれ！！」

俺は目を瞑った。右から2機、左に2機そして…

「上に…1！！！！」

そう言いながら、今にも振り下ろされようとしていたビームサーベルを受け止め、空中に居たジムのコックピットをもう一方のダガーで貫く。

続けざまに右左にいる1機を、腕をクロスするように切り裂いた。

「さあ…まだまだ！！」

「ひ、ひい…！なんなんだよこいつ！！」

「くっ…撤退だ！！退け！退け！！」

2機のジムは踵を返し、逃げるように撤退していったのを確認すると、俺はダガーをしまった。

「…帰りましょう。任務終了です」

俺は二人に微笑んで、輸送機へ向かって歩き出す。

輸送機に向かう間、俺達は他愛もない話で盛り上がった。今日の夕ご飯の話や、さっきの戦闘の話……。そんな他愛もない話をしながら輸送機へ向かう。

何故だか知らないが、俺はこの時間が長く続いて欲しいと願った。理由は分からない。だが、とても懐かしい気持ちになれたから。

そんな話をしていると、気がつけば輸送機は目と鼻の先だった。

「よし、無事に帰ってこれたな。第1、第2小隊、損害報告を」

「こちら第一小隊のグレイ……。僕以外は……第一小隊……全滅です」

「……そうか……墓は作っておいてやれ……」

「……了解……!」

その声はとても震えていて、こちらまで悲しみが伝わってくる。

声をかけようと思った。だが、それはクロノードによってとめられた。

「やめておけ。余計悲しくなるだけだ……」

「……でも……これじゃあ報われませんよ……」

「皆、地球に残された時点で覚悟はできていたはずだ。その死を無駄にしないためにも、俺達が【意志を引き継いで】戦うんだ」

「…」

「まあそんなに湿っぽくさせるなよ、クロノード君。湿ったら機械が壊れちまうぞ？」

「…そうだな…。よし、俺達も機体から降りるぞ！」

「そうこなくつちやな！さーて、おごりの焼き鳥だなあ!!!」

「そんなこと言っただけか？」

「んな!?そんなの無いぜー!!」

オーバーなりアクションを見た俺とクロノードは思わず笑みがこぼれて笑った。

「ははは!!」

「ぶっ…はははは!!」

「んな!?んだよ！お前らああ!!!」

「そうか…これが幸せなんだ…」

「…ああ…。だからこそ、その幸せを壊すわけには行かないんだ」

「そうですね…!!」

俺達は機体から降り、輸送機へ歩き出す。

そんな背中を夕日が照らしていた。

14：宇宙へ——意志を引き継いで——

宇宙世紀0079・12・4 第30特別遊撃部隊は、ジオン公国の重要拠点であるソロモンへの召集が掛けられ、宇宙へ上がることとなる。

「と、言うわけで…俺達の部隊第30特別遊撃部隊は軍の上層部によって正式的な部隊になった」

「そんなわけで俺達の部隊は今後行われるであろう大規模な作戦に参加するため、宇宙^{そら}に上がる」

「そのためにまずは、マストドライバー基地に向かう必要があるんだが…おい、カカ！」

「ここからだと遠いが、中東にあるアデン基地と呼ばれるジオン管轄の基地がある。そここのHLVを使えばいいだろう」

「…そうか…今居る場所がニューヤーク付近だ…そこから中東のアデンまではこの輸送機でもだいたい5日間くらいはかかるか…」

「どうするかね？クロノード君よ」

「…よし、それで行こう。全員が輸送機に乗り込んだら移動を開始する。以上だ!!」

全員が司令室から出て行く。そして、俺も静かに司令室を後にした。

司令室を出ると、クロノードが、小さなボードとにらめっこをしているのが目に入る。「どうしたんですか？」

「うん？ ああ、ムゲンか。何、メンバー確認をしていたんだ」

「メンバー…ですか」

「ああ。ここの部隊の連邦軍のメンバーと、ジオン軍のメンバーを全員確認していたんだ」

「どうしてそんな…」

「まあ、色々あるのさ。そんなことより、移動を始めたら航行中は地上に降りれないが、準備はいいのか？」

言葉を返そうとしたが、彼に遮られた。そして、俺は少し戸惑いながら言葉を返す。

「俺は大丈夫です」

「そうか。んじゃあ、自分の部屋で仮眠でもとって来るといい。少しは寝ておかないと、いざと言うとき何もできないからな」

「了解です」

彼に一度お辞儀をした後、俺は自分の部屋に向かった。

部屋に入り、灯りをつける。そして、ベッドに腰を掛け、周りを見渡す。

部屋は静かで、目を瞑ると自然と眠くなってしまふほどだった。

「…寝ようかな…」

そんなことを考えていると、突然部屋にノックの音が響き渡る。

誰だろうと思いつながらドアを開けると、そこにはいつものうるさいカカサがいた。

「よお！ どうせ一人で寂しいかと思つたから会いに来てやつたぜ！ どうだ？ 嬉しいだらう！」

「…え…つと」

「言葉が出ないほど嬉しいのか、そうかそうか、じゃあお邪魔するぜ！」

そう言つて許可も取つていないカカサは俺の部屋に入つて床に座り、俺に言う。

「おいムゲン！ 茶をくれ、茶を!!」

「…」

一瞬この馬鹿をぶん殴つて追い出そうとも思つたが、結局何をやつても戻つてくるな。と思つた俺は、一息ため息を吐いた後ドアを閉め、お茶の用意を始める。

「少しは気を遣えないのか…?」

「んー？ 何を言つてるんだムゲン君。俺は邪魔するぜつて言つただらう？ だから気を遣う必要なんか無いのサ」

「…」

全力で殴りたい衝動を抑え、俺は黙ってお湯を沸かす。

「さて、クロノード君は忙しいみたいだし、ここで少しやることをやらせてもらうかねえ」

そう言つてカカサは机に色々な資料を広げ、確認している。何を書いてあるのかは俺にはまったく分からなかった。

ふと、一枚の資料が偶然自分の足元に落ちた。俺はそれを拾い上げ、目で読み始める。

「…これは…」

俺が資料を読んでいるのを見たカカサは、驚くべき速さで俺が持っていた資料を奪い取った。

「おっと、それ以上はいけないなあ。人の情報を見るのは良くないって、それくらいできるだろう？これ以上見るなら、情報料を払ってもらおうよ？」

口調はいつもと変わらないものの、目は本気だったので、すぐに気がついた。これはまずい、と。

「…(、)めん…」

「さっきの情報は忘れてくれるね？忘れなかつたら、大変なことになるんだぞ。たとえば、これから3日間足をタンスの角にぶつけてしまふとか…分かったね!？」

「え……あ……うん」

「よしよし……ところでお茶はまだかね？」

「え？あ、ごめん」

ポットをみると、すでに湯気が昇っていた。俺は火を消し、お茶の葉が入った急須にお湯を入れる。

「よし、出来たよ」

「おう、君は優秀な人間だな。まあ、俺ほど優秀な人間は居ないけどな！だいたい3位くらいか……いや、4位……」

「……あの……」

「ん？何かねムゲン君よ」

俺の過去について聞こうと思った。しかし……

「俺の……」

「君の情報は何も無い。俺の財布の中身くらいないね」

「そうですか……」

あまりにも冷たい反応をされて、少し気分が滅入った。そんな姿を見たカカサが言う。
「あーそうそう。一つだけあったな。とはいっても、10円くらいの価値にしかならん

奴だけだな。…いや、5円…いやいや…2円…」

「教えてください!!俺に…その情報を…!」

食い気味に迫る俺に少し驚きながら、カカサは答えてくれた。

「本当にいいのか?1円にも満たない価値だぞ?」

「何でもいから教えてください!自分の過去が…俺は知りたい!!」

「…わーつたよ…まったく…そんなに叫ばないでくれ。うるさいから。五月の蠅みたい」

いつもうるさいのはどっちだという言葉は、胸の中で秘めておくことにする。今さえぎったら何も教えてはくれないだろうし。

「ムゲン君。君の前に居た部隊の名前を教えてあげよう。その部隊は、連邦上層部から「モルモット部隊」と呼ばれている部隊なんだ」

「…モルモット…?」

「そうさ、MSの試験運用や、データ採取。大規模な作戦ではいつも最前線。そんな部隊だ」

「その部隊には、基本的に新型のMSが配備されず、ただデータを収集することだけを目的とされている」

「それじゃあ…修理とかは…」

「あー…まあ、そこは大丈夫だ。その話はタンスにしまっておくとして。いや、クローゼットでもいいぞ？はたまたスーツケースでも」

「そんなことはいいとして、その部隊の名前は…」

「…」

「【第00特務試験MS隊】って言うのさ。どうだ？いかにもって感じだろう？」

名前を聞いた瞬間、何故か懐かしい感じがした。理由は分からないが、ずっと前に聞いたことのある名前…

「…そうですか…ありがとうございます」

「おう。別に1円の価値もないから、今回は10円で我慢してやろう。あーむしろ100円でもかまわんぞ？」

「え…」

「なんて、冗談の冗談の冗談だ」

少し困惑する俺を見て、少しあきれながらカカサは言った。

「つまり、冗談ってことだ」

「…はあ…」

「あー…ほんと、クロノード君みたいに頭がカツカツの奴だなあ…少しはやわらかくすれば？この俺みたいにサ！」

とか言って、頬を伸ばして「ピローン」とか言っているカカサ。…なんかムカつく。

「さて、じゃあ情報も教えたし、やることやったから帰って寝よう。じゃー!」

そう言っただけで颯爽と俺の部屋を出て行くカカサ。俺は唾然としながら、ドアが閉まるまでその場に立ち尽くしていた。

「…なんだったんだ…」

それから、何の問題もなく輸送機は俺達を乗せ航行した。

宇宙世紀0079. 12. 9 第30特別遊撃部隊は中東のアデン基地付近に近づいていた。

「さて、ここからはこの輸送機は別の部隊に譲渡して俺達はMSでアデン基地に向かう。子供達と女性はこの地で他の地上部隊に任せる」

俺達は司令室でクロノードの作戦を一通り聞いている。俺はその時、ただただ嫌な胸騒ぎがするのを必死に抑えていた。

「さて、今回は作戦という作戦はない。なんせ俺達はジオン軍なんだから。小隊に分ける必要もない。さあ、皆!宇宙へ上がるぞ!!」

「おー!!!」

全員が歓喜の声を上げる。当然といえば当然なのだろうか、もともとジオン軍は宇宙

移民の人たちだから、故郷に帰れるのは嬉しいのだろう。

「よし、全員MSに乗り込め！あと、整備兵はパイロットと同乗してくれ！以上だ!!」

その言葉と共に、全員が急いで格納庫へ向かった。

俺も歩いて格納庫へ向かう。

格納庫に着くと、すでにMSがどんどん出撃しているのが目に入った。

俺はピクシーに乗り込み、システムを起動させる。

「…行こう、ピクシー…」

俺はピクシーを動かし格納庫を出た。

「全機揃ったな。よし、移動を開始するぞ」

そうして、クロノードの機体が歩き出した。それに続いて多くの機体が歩き出す。俺

も遅れをとらぬように機体を動かした。

しばらくすると、大きな発射台が目に入る。あれがたぶんHLVの発射台なのだろう。

「…止まれ」

急にクロノードが全員を制止させる。俺の嫌な胸騒ぎが当たらなければ良いのだが

…

「どうしたんだい？クロノード君よ」

「…基地の様子がおかしい…」

「隊長…！レーダーに反応…！連邦軍です！！」

「何…！？」

「連邦がどうしてここに居るんだよ！！」

「ちっ…これはやつちまったな…。すまん、クロノード。俺の情報収集不足だった。こんな状況も見分けれないとは…」

「気にするな。もうそんなこと慣れたさ。さて…囲まれている以上は、前にいくしかないな！！」

「さて…全機！あのHLVのところまで強行突破作戦を行う！！いいか！一機でも多くHLVにたどり着くんのだ！！」

その言葉を皮切りにクロノードが戦陣を切って突撃する。

嫌な胸騒ぎはこれだったのだと気づいた。俺はクロノードを追うために機体を動かす。

「さあて…。こうなったらヤケだ！！俺だつてやってやる！！」

一人の兵士が連邦兵に切り込んだ。すると、後ろを歩いていたザクが次々に連邦機へ攻撃を始める。

「何をしている!!! H L Vのところまで…」

「隊長、俺達は大丈夫です！隊長は、精鋭の奴らを引き連れてH L Vへ!!!」

「なんだと!？」

「ここぐらい…っ！かつこつけさせてください！時間稼ぎぐらいはしてっ…!!みせま
す!!!…ぐあっ!!!」

「だめだ!!!皆宇宙へ行くんだろう!!!」

「隊長…俺達…隊長に従ってきて正解でした。最後はこんな派手な戦いになるなんて
!!!…うおっ!!!」

「だめだ…だめだ!!!皆で…」

「クロノード君…行くんだ。ムゲン、お前もだ」

「そんな…！俺だつて戦います!!!」

「だめだ。味方の誠意を無駄にしたいのかい？それほど君の器は小さかったか？」

彼の言葉に一理あった。この状態で戦ったら勝ち目はない。それでも彼らは俺達のため
に戦っている。

それを無駄にしないためにも…

「…くっ…。分かった…」

「ムゲン?!お前は裏切るのか!？」

「違う…！クロノード…!!」

「…だったら俺は…」

「残るなんていうなら君を全力でぶん殴るけど構わないかね？クロノード君よ」

口調は普段と変わってはいない。しかし、カカサの言葉は本気だというのが痛すぎるほど伝わった。

「…くっ…すまん…。みんな…!」

「隊長…謝らないでください。俺達は地上に残されたときから覚悟は出来ていました。だから、謝る必要なんてありません!!」

「…お前ら…!」

「行くぞ！HLVで既に 그레이が準備しているはずだ!!!」

「…了解!!!」

「行くんだ、クロノード。振り向かず、俺達は宇宙そらに帰る!!」

「ああ…行くぞ、カカサ!!ムゲン!!!背中は…任せた!!!」

「勿論だとも。さあ、行くぞムゲン!!!」

「ああ…分かった!!!」

俺はビームダガーを引き抜き、ジムを切り裂く。そして、手前のガンキャノンをかカサがヒートサーベルで貫く。

「もう少しだ…！急げ!!!」

「隊長!!!」

「グレイか?!何だ!!!」

「H L V 発射準備完了です!!!いつでもいけます!!!」

「よし、分かった!!!すぐ向かう。聞いたな、二人とも！行くぞ!!!」

「了解!!!」

「おうよ!!!」

俺達は敵を倒しながらH L Vに向かった。

そして、H L Vの前にたどり着くと、連邦の制服を着た人が手を振っていた。おそらく彼がグレイだろう。

「ここに機体の収納を!!!」

「ムゲン、お前は右のH L Vを使え。そしてグレイと共に乗ってくれ」

「え…?」

「急で悪いがここでお別れだ。俺達はジオン軍に戻る。そして、お前達は連邦軍に戻るんだ」

「そんな…!」

「分かってくれ…!」

「別れは悲しいが、今は時間がない。ムゲン、お前にデータを送った。後でお前のところの整備兵に渡すんだ」

「…え？」

「じゃあ、また会おう。次回は戦場だな。その時は容赦はしないぜ？あー…少しはしてやらんでもないぞ？」

「…分かった」

カカサとクロノードが機体を格納するのを見たグレイは

「隊長！HLV発射させます!!!!また…お会いしましょう！」

「了解だ…また会おう」

そして、HLVは宇宙を目指して上っていった。

俺は機体をHLVに格納し、HLVに乗り込む。

「準備はいいですか？ムゲンさん！」

「いいですよー！」

「了解です！首の骨折れないように気をつけてくださいね!!！」

すると、大きな地響きと共に上からものすごい圧がかかる。

「うぐぐぐぐつ!!!!」

「ぐっ……!!!」

そして、しばらくすると、その圧は消えた。そして、窓を見ると、地上ではまだ特別遊撃部隊の面々が連邦軍と攻防を繰り返していた。

その姿をただ見ている事しかできなくて、俺は涙が頬を伝う。

「くっ……うう……!!皆……!!!」

「…仕方ないんです…。皆の意志を継いで、僕達には行くんです。隊長だってそうしたはずですよ…」

「…そう…だね…」

しばらくすると、パイロットスーツに着替えるように言われ、スーツとヘルメットを着用した。

そして、ついに地球を離れ、俺は宇宙に上がる。

それから間もなく。とある人物から通信が入った。

「こちら第00特務試験MS隊の隊長、ファンク・クラウド。ムゲン・クロスフォード、グレイ・シュタイナー、聞こえているな？」

その声はとても懐かしく感じる。だが、しっかりと思い出す事はできない。

「聞こえています」

「よし、二人とも居るようだ。これより、俺達の部隊が回収を行う。ポイント800

0まで移動を頼む」

「了解!!ポイント8000ですね?」

「ああ、そこで俺達の艦と合流だ」

「了解です!それでは、後ほど!」

そして、通信が終わるとグレイはこちらを向いて言った。

「あのう…。僕、操縦とか慣れてないんで…お願いできますか?」

少し呆気にとられたが、俺は快く頷いて言う。

「分かった。ポイント8000だったね?」

「うん。すまないね」

「気にしないでくれ」

俺は操縦席に座り、HLVから切り離された小型艇を操縦する。

座標を修正し、ポイントを8000に指定し、移動を開始した。

30分くらい移動しただろうか、ポイント8000に到着する。すると、大きな戦艦

が目に入った。

「…あれが…」

「大きい…!」

俺達二人は、ただあの大きな戦艦を見つめていた。

1
4
完

15：悲しみの先 —暖かな光—

宇宙世紀0079・12・9 ムゲン・クロスフォード少尉、グレイ・シユタイナー少尉、第00特務試験MS隊に再入隊。

俺とグレイはあの後、「ペガサス級強襲揚陸艦第4番戦艦グロリアス」に回収され、俺はその部隊に入隊することになった。

カカサの話によればこの部隊が元居た部隊ということらしいのだが、確かにそんな感じがする。記憶にはないが、俺はここに居た。そんな感じの懐かしいものがそこにはあった。

「と、言うわけでムゲンはおかえり。そして、グレイはようこそ！ここは自分の家だと思ってくつろいでくれ!!」

フアングと名乗る少年が元気な声で言う。その声はカカサのようならさうさい声ではなく、まさしく少年っぽい感じの声だった。

「はい！ありがとうございます。フアング隊長!!」

「お、おう……」

グレイの真面目な言葉に少し驚きながら言葉を返すフアング。

「さて、ムゲン。久しぶりだな!!話は全部聞いてるよ。記憶が無いんだろう?」
「…はい」

「そうか。まあ、でもここにいればいつかは思い出すさ、気にするなよ!」

そう言つて、歯を見せて笑うファング。正直、俺はこんな人がこの部隊の隊長なのかと思つたが、それは胸に秘めておくことにする。

「…はい」

「じゃあ、しばらくは艦内を見て回るといいさ。ここはすぐく広いからな!ちよつとした探検くらいになるんじゃないか?」

そういい残して、ファングは司令室を出て行つた。

「じゃあムゲン、一緒に見て回ろうか」

「そう…だね」

「嫌かい?」

「そんなことは無いさ。行こう」

俺達二人は司令室を後にして、艦内を見て回ることにする。

廊下を歩いていると、一人の少年とすれ違つた。フードを深くかぶっているせいで、顔までは分からない。

すると、突然少年は立ち止まり、俺達に声を掛けた。

「ムゲン…なのか？」

俺は振り返り、頷きながら言う。

「…はい…」

「そうか…久しいな…。とは言っても、記憶が無いお前からすれば初対面なんだろうが…」

「…申し訳ない…」

「丁度新しい人も居るみたいだから改めて自己紹介する。八雲道夜だ。よろしく」

「グレイ・シユタイナー少尉です！よろしくお願いします！」

「…ああ、よろしく」

「…ムゲン・クロスフォードです…。よろしく」

「ああ」

「じゃあ、それだけだ。また後で会おう」

そういつて道夜は俺の肩に手を置いた後、歩いていった。

「さあ、じゃあ先に進みましょうか」

「…うん」

俺達は再び廊下を歩き出す。

しばらく歩いていると、食堂と書いてある場所が目に入る。

「食堂……」

「ちよつと寄つてみましょうか」

「……そうだね」

俺がドアの前に立つと、ドアが自動で開く。そして、俺とグレイは食堂の中に入った。

「……」

周りを見渡していると、一人の女性が目に入る。机に沢山のお菓子を広げて耳にはヘッドフォンを当てていた。

「声でも掛けますか?」

「そうしようか」

俺達は彼女の近くに近寄つて声を掛けてみる。

「あの……」

しかし、彼女はヘッドフォンを当てていて、まったく聞こえていない。

俺は肩をゆすつてみる。

「何ですか?人の楽しい時間を邪魔するなんて、水ぶっかけますよ?……つて……」

俺の顔を見て驚いた顔をする彼女。ここに来ることをフアングさんから聞いていな

かったのだろうか。

「ムゲンさんじゃないですか！覚えてます？とりあえず殴って記憶戻しましょうか？」

「…戻せるならお願いしたいくらいですけど…」

「この様子じゃ本当に記憶がなくなってるんですね。これじゃああんまり弄れないじゃないですか…」

「まあいいや。私はユーリ。ジムスナイパーで日々敵を撃ち落としてますよ。戦闘で私の前に立つたらぶん殴りますからね」

なんとというか、カカサに似ていると思った俺がいた。だが、俺は彼女に頷きながら返す。

「ムゲン・クロスフォードです。よろしく」

「グレイ・シユタイナー少尉です！よろしくお願ひします！」

「えーっと、ムゴンさんにグレイさんね」

「あの…グレイじゃなくて…」

「覚えたから大丈夫。じゃあ、私は音楽聞くので邪魔だけはしないでね」

そう言つてグレイの言葉を遮り、ユーリは再びヘッドフォンをつけ音楽を聴き始める。

「…行こう、グレイ…これ以上は言つても無駄だよ」

「分かりました…。別の場所に行きましょう」
こうして、俺達は食堂を後にした。

廊下を歩いている間、俺はグレイといろいろな話をした。前に居た部隊のこと、消えていった仲間達のこと…。

そして、ふとグレイは何か思い出したのか、俺に問いかけた。

「…ねえムゲン」

「何ですか？」

「ムゲンには、夢がありますか…？」

「…夢…？」

「夢でも、願いでもいいんです。何か…そんな感じのもの」

突然そんなことを聞かれても、すぐには思いつくものなんて無かった。

「…僕には夢があります…」

「どんな…？」

「30 特別遊撃部隊の皆のように、ジオンも連邦も関係なく皆が幸せになって欲しい…
そんな夢があるんです」

「…」

「きつと…皆まだ気づいてないだけなんです。ジオンだからとか、連邦だからって言うのに縛られて、単純なことに目が行かないだけなんです」

「いつか…連邦もジオンも分け隔てなく手をつなぎあう時が来れば…その時こそが、本当の幸せなんだって思います」

「それはきつと、長くて遠い道のりかもしれない。けど、それでもそんな世界が来てくれることを、僕は夢見てるんです」

彼が夢を話しているとき、彼の瞳はキラキラと輝いていた。こんな人が居れば、いつか絶対そういうときが来る…。そんな感じがした。

「…すごいね…グレイは」

「え…?」

「立派な夢があつて。俺なんか、夢なんか思いつかないよ…」

正直、自分自身が嫌いになるほど。夢なんか無い。悲しい人間なんだと自分を責めた。

「でも…願いはある…」

「何ですか?」

「…記憶を取り戻したい…。かな…」

「記憶…ですか…」

「うん。たとえ、どんなつらい過去でも、思い出さないほうが楽な過去だとしても…俺は…グレイのように夢を持ちたいんだ。…だから…思い出したい。自分自身を…」

「…大丈夫ですよ。ムゲンなら…きつと思いい出せます」

「何で分かるんだい？」

「…なんとなく…かな…。でも、頭の中で考えたら、そんな姿が目には浮かぶんだ。ムゲンが笑っている姿が」

きつと、俺を慰めるつもりで彼は言ってくれたのだろう。その気持ちだけでも十分嬉しかった。

「…そうか…ありがとう」

「いえいえ。それにさ、夢が無いなら僕と一緒に夢を見ればいいんだよ」

「一緒に…夢…？」

「そうだよ、一緒に叶えよう。ジオンも連邦も分け隔てなく暮らせる幸せな日々を…」
そう言つて、彼は立ち止まり、俺へ手を差し出す。俺は少し緊張しながら答える。

「…うん。そうだね…きつと、叶えよう…」

そして、俺は彼に手を伸ばした。そして、互いに笑顔になる。

しばらく歩いていると、小さなベンチが目に入った。それを見たグレイは、俺のほうを向き、少し残念そうに言った。

「ごめん。僕は疲れたから、少し休憩してから行くよ。ムゲンは先に見て回ってきて」
「…ああ、分かった」

俺はグレイと別れた後、俺は、大きな格納庫へと足を踏み入れる。

そこでは、整備兵達が忙しそうに機体の整備を行っていた。

俺の機体に目をやると、なにやら機体に武装を追加しているのが目に入る。ピクシーに近寄り、見上げた。

「…ピクシー…」

「あ…」

不意に背後から、女性の声が聞こえる。振り向くと、自分より背が少し小さい、銀色の髪を下ろした女性が立っていた。

「…ムゲン…?」

「…うん。そうだけ…ど!?!」

突然彼女は持っていた道具を投げ出し抱きついてくる。

「ムゲンなんだね…。やっと帰ってきてくれた…」

「…えつと…」

「何も言わなくていい。…分かってる…だから…今はこのままで…」

「…」

しばらくした後、満足したのか彼女は俺から離れて言った。

「記憶…無くなってるんだね…」

「…うん。…ごめん」

「謝らないで。笑顔になってよ…。それだけで十分だから…」

「…う、うん…」

「もう一度自己紹介するね。私はリナ・ハートライト、あなたの専属整備兵です。よろしくね！」

そう言つて笑顔で言う。

「…ムゲン・クロスフォードです。…よろしく」

「よろしくね！ムゲン!!」

そして、彼女は道具を拾い、ピクシーを見上げた。

「この子…大切に使つてくれてありがとうね。…心配だったんだ…」

「…ピクシーのこと…?」

「うん。私、ムゲンと約束してたんだ。ピクシーを造つてあげるって」

「そんな約束を…?」

「うん。スレイヴ・レイス隊の戦闘を見てたとき、ムゲンがピクシーに乗つてみたいって

言ったから」

「…すごいね。…リナは…」

「そ、そうかな…？ 私なんてまだまだだよ…」

少し照れながら俯くりナ。

「…ありがとう。俺のためにこいつを造ってくれて」

「いえいえ。…それで、どうかな…この子の使い心地は」

「悪くない…。機動性も高く、格闘能力も抜群だね。それに、ビームライフル。これも

威力が高いのに中距離でも戦える…いい機体だよ」

「そっか…よかったあ…」

安心しながら胸を撫で下ろすリナ。そんなに心配だったのだろうか。

「ごめんね、今から仕事をしなきゃいけないから、ムゲンは少し別の場所で時間を潰してきて」

「…ああ、ごめん。分かったよ」

俺はリナと別れて格納庫を後にした。

それから俺は、自分の部屋に案内される。そして、部屋でくつろいだりなどをして、しばらくぶりの休日過ごすことが出来た。

「……これは……」

ある晩、表向きに公開されていない昔のデータベースを見てみると、サイド2事件と呼ばれるものを見つけた。

内容は、毒ガス作戦の前日、MS開発の夫婦が暗殺されるという物だった。

何より驚いたのは名前だった。

一人は、夫の「グラン・クロスフォード」。そして、妻が「エルナ・シエナード」という人だった。

そう、自分と同じ苗字の人間がいるということに驚いたのではない。少しはそんな気持ちがあったかもしれない。

だが、それより驚いたのは、彼らには俺と同一年の少年が居たと記録されている。

さらに、その息子の名前は……「ムゲン・クロスフォード」。

「……!!!」

一瞬息が詰まる感覚になった。自分の名前が書いてある。そんな驚きと、自分の両親が暗殺されたという事が何よりショックだった。

そして、さらに読んでいくと分かったことがある。

その計画を実行した人物は、「シゼル・クライン」と呼ばれる連邦軍の人物だった。

「……シゼル・クライン……」

静かな夜に、ただ虚しくキーボードの音が響き渡った。

宇宙世紀0079。12。24 15：45 少しずつ時間が迫ってくる。もうすぐ大規模な作戦が行われるのを前に、俺は少しワクワクしていた。理由なんか分からない。

俺たちはファングさんと呼ばれ、作戦の最終確認を行っているところだった。

「…もうじきソロモン攻略戦が始まる。作戦の最終確認をするぞ」

「分かっているとと思うが、俺たちは第一艦隊として参加する。今、俺達はソロモン付近に近づいている」

「……この作戦…特に何も無いんだけど。…それでも一つだけ言う事がある…」

「皆…生きて帰ろう！」

「…了解!!!」

全員が声をそろえて答えた。

そして、俺達は格納庫へと向かう。

俺はピクシーに乗り込み、手際よくシステムを起動していく。

「…ムゲン…」

リナがひよっこり顔を出してくる。

「…どうしたの…？リナ…」

「…帰ってくる…よね…」

少し考えた後、俺は彼女を優しく撫でる。どうしてそんなことをしたのかなんて分からない。

「…ムゲン…」

「大丈夫。…帰ってくる…」

「…うん…そうだね。…待ってるよ…」

そう言った彼女は笑顔で続けた。

「期待してるよ。ムゲン！」

「…ああ…！」

そう言っただけ俺はコックピットを閉めた。

「ムゲン、準備はいいな？」

「…いつでもどうぞ」

「よし…第00特務試験MS隊…出るぞ!!!」

次々に機体が出撃していく。

「ムゲン・クロスフォード…ピクシー、行きます!!!」

戦域へ出た俺は、レーダーを確認する。

「…敵は…」

「ムゲン、俺が先行する。ついて来い！」

「…了解!!」

俺はファングさんを追うようについて行った。

大きな要塞が近づくにつれて、レーダーに敵影が増えていく。その数はおおよそ30を優に超えるだろう。

「…敵です！…どうしますか？」

「…そうだな…どうやら俺たちと同じ奴らが先行してるな…」

レーダーをよく見ると、2機ほど、先行して迫ってくる機体がいる。

「…2機…」

「ムゲン、こいつを任せたい。出来るか？」

「えっ…」

突然の言葉に驚いてしまう俺。

すると、グレイが言う。

「隊長、僕も残ります。一人より二人のほうがいいです」

少し考えた後、フアングさんは。

「…分かった。二人とも気をつけるよ」

「了解です！」

そう言つて、フアングさんたちは先に進んでいった。

「…グレイ…どうして先に行かなかつた…？」

「君だけじゃ駄目だつて思つたんだ」

「…それは…」

「君の腕は本物だよ。だけど…ええと…なんて言えばいいのかな…でも駄目なんだ
！」

彼の言っていることは少し理解は出来なかつたが、それでも一人よりは心強かつたのは確かだ。

「…ありがとう。…グレイ」

「気にしないで。…そんなことより…来るよ！」

前を見ていると、見慣れたザクが2機やつてくる。

「あの機体…は…!!」

「……やつぱり…そうだったんですね…クロノード隊長…！」

彼は何かを知つていそうだったが、そんなことを考える余裕は今微塵もなかつた。

ザクはヒートホークを持って切りかかってくる。

俺はビームダガーでヒートホークを受けきる。

「くっ…!!」

「ムゲン…お前だな…」

「クロノード…!!」

「悪く思うなよ!」

クロノードが間合いを取ると、背後からの殺気を察知する。振り返ると、カカサが今にもヒートサーベルを振り下ろそうとしていた。

「あらら…見つかっちゃったよ。どうする? クロノード君」

「…はああああ!!」

そんなカカサを横から 그레이が切りかかる。

「おっと…! 그레이…って言ったっけか…。そんな操縦で…!!」

「うわああああ!!」

カカサはヒートサーベルで 그레이を軽々と吹き飛ばす。

「 그레이!!…カカサお前…!!」

「熱くなるなよ。そんなに死にたいかあ?」

ヒートサーベルとビームダガーが激しくぶつかり合う。

「くっ…!!!」

「これで終わりだ！ムゲン!!!」

ビームダガーを吹き飛ばされ、カカサが俺のコックピットを刺そうとする。

俺は死を覚悟した。その時、目の前で何かが爆発する音がした。

「何…?」

「な、何だ!?」

レーダーを見ると、1機こちらに近づいてくる。識別は所属不明だった。

「う、うおっ!?!」

「カカサ!!下がれ!!!」

「こんなやつに負けるか!!!」

カカサはヒートサーベルを握りなおし、謎の機体に切りかかる。

しかし、カカサはの攻撃は軽々と回避され、さらに、右腕をつかんだと思うと、その

まま握りつぶした。

「な…何だつてん…」

さらに続けざまに頭部を切り落とされる。さらに両足は膝についたコールド・ブレードによって切り落とされてしまう。

「カカサアアアアアアア!!!」

叫びながらクロノードが謎の機体をスナイパーライフルで射撃するものの、謎の機体はその射撃を余裕で避ける。

さらに、奴はスナイパーライフルを構え、クロノードの機体を撃ち抜く。

「くっ!？」

一瞬何が起きたのか、クロノードですら分からなかった。あまりにも弾速が早すぎて見えないほどに…。

奴は続けてクロノードをスナイパーライフルで撃ち抜いていく。

「……俺は……!!!」

クロノードを撃つのが飽きたのか、今度は俺に切りかかってくる。

「くっ!!!」

俺はなんとかビームダガーで受けきるが、奴の攻撃にいつまで耐えられるか分からないかった。

「遅いな……ムゲン・クロスフォード!!!」

「……何……!？」

「どうして俺を知っている!!!」

「……全て知っている。……俺はお前のことを!!!」

「な、何……!？」

「お前の記憶を消すように仕向けたのは私だからな」

「…!?!」

「驚いているようだな…。覚えておけ…お前を殺すのは、このシゼル・クラインだ!!!」
その名前を聞いて少しずっ思いつい出しかけていた。家族を殺されたこと。ペイルライダーの実験体になったこと…そう…全て…。

「…思い出した…すべて…」

「何…?」

「お前が…父さんと母さんを殺した…!!!そして、俺をペイルライダーの実験体として研究所送りにしたのもお前だな!!!」

「…ふん！お前の両親はやりすぎたのだよ!!」

「なんだと?!」

「ありとあらゆる研究資料を引っ張り出し、MSを開発しようとしてた!」

「…だから…殺したって言うのか!?!」

「気に入らないものは…殺すだけだろう?」

「…そんなの間違ってる!!!」

「貴様には分かるものかああ!!」

そういつてシゼルはビームサーベルに力をこめる。ビームダガーが吹き飛ばされ、俺

にもてる武装はもう無かった。

「親父が地獄で待つてゐるってさ!!! さっさと逝けええええ!!!」
「くっ…!!!」

「ムゲエエエエン!!!」

微かに聞こえる声。グレイの声だった。

「何!?!」

「お前の相手は…この僕だ!!!」

「グレイ!!!」

「いいんだ!! 早く逃げるんだ!!」

「何を…!」

「ムゲン! 僕は君と一緒に夢が見れたこと、とつても嬉しかった!!」

「だから…その夢のために、ムゲンはやらせない!!!」

そういつてグレイはシゼルに組み付いた。

「やめろ!!! グレイ!!!」

「君だけでも…ぐっ…!! 【生きるんだ】!!!」

「離れる!! クソがああ!!!」

暴れるシゼルの機体を必死にグレイが抑える。

「もう少しだ！黙ってる!!!」

「ムゲン！僕は人工ニュータイプの研究に成功したんだ！僕は…殺しのためにニュータイプになったわけじゃない！」

「…グレイ…」

「でもね…。それでも人を殺さなきゃ…駄目みたいだ…」

「…そんなこと無い!!!グレイ…お前は…！戦う必要なんて…!!」

「ううん。…ムゲン…君を救うためには…戦わなきゃいけないんだ…だから…」

「やめろ!!!」

「とめないでくれ!!!僕は…いや…これが僕の覚悟だ!!!ムゲン…僕の夢は…託したよ

!!」

「何をする気だ!!!離れろ!!くそつたれがあああ!!!」

「待たせたな…!!お前は僕と地獄逝きだああああ!!!」

少しづつグレイがジムのスラスターの出力を上げていく。

「あ…ああ…待ってくれ…グレイ…!」

「後は…任せ…たよ…ムゲン…」

彼のジムに手が届きそうな所で、ジムが爆発する。

その光は、とても暖かく、一瞬、 그레이が俺の横を通り過ぎて行った気がした。

「… 그레이…」

「ちっ…こんなことでは…帰還する…。次は覚悟しておけ、ムゲン・クロスフォード」
そう言って半壊したシゼルの機体は消えていった。

「…くっ…ううああああ…うあああ… 그레이い…!!くそおお!!!くそおおおおおお

!!!」

一人残った俺は、ただ目の前のジムを抱きしめながら泣いた。

「…お前の…お前の希望は受け継いだ… 그레이…!!」

15 完

16：ソロモンの激戦

宇宙世紀0079・12・24 18：10 第3艦隊、サイド4の残骸を楯に、ソロモン至近距離まで到達。先鋒のパブリク突撃艇部隊発進。ビーム攪乱幕を展開。

18：35 第3艦隊から、MS隊、戦闘機隊発進。

18：50 第2連合艦隊、サイド1の残骸を楯に、新兵器のソーラー・システム展開。ソロモンゲート、ソーラー・システムの照射により融解。

19：10 連邦軍第2連合艦隊、MS隊を先発させつつソロモンに接近。

俺は補給を受けるため一度、グロリアスに帰還し、機体の中で補給が終わるのを待っていた。

グレイの事を伝えるべきか…なんて事を考えながら…。

「ムゲン。補給終わったよ！」

「…あ、ああ…うん」

「どうしたの…？」

心配そうなりなの声。そういえば、まだ記憶が戻ったことを誰にも伝えてなかったな…。

「…いや…なんでもない。それで、このビームダガー…」

「あ、気づいた？新しい武装なんだけど」

「何が違うの…？」

少し考えた後、リナが答える。

「えっと、カートリッジから供給されるエネルギーを調整して…」

あまりにも分かりづらいので、黙っていると

「…あ…。まあ、簡単に言うと、自由に刀身を伸ばしたり縮めたり出来るようになった

！…ってことかな…」

と、分かりやすく教えてくれた。…察してくれてよかった。

「後…ね？」

「何だ？」

少し恥ずかしそうに言うリナ。

「その…この機体さ…」

「うん？」

「この子の名前なんだけど…」

「うん。ピクシー・ハートライ…」

「それ…。恥ずかしいからさ、名前変えて欲しいなあ…って…」

「あ……ごめん……」

「……いや……こっちこそ……」

互いに謝りあう。こんな光景、前にも見たことがあったな……そんなことを思い出した。

「ふふっ……」

そんなことを思い出したら少し笑ってしまう。

「な、何がおかしいの？」

「あー……ごめん。そうだな……名前か……」

しばらく考えるがしっくりとした名前が出てこない。

「……【ミラージュ】……」

ふと、そんな言葉が漏れ出す。

「【ミラージュ……？】」

「……【見る】って意味。……それ以外に【夢】や【希望】って意味もある」

「【ピクシー・ミラージュ。……いいね……！かっこいい!!】」

「【じゃあこの子の名前はミラージュ……分かった？】」

「ああ……分かった。……そろそろ行くか……」

「気をつけてね……ムゲン」

「…ありがとう。リナ」

「…あれ…」

何かに気づくりな。何があったのだろう。

「どうした…?」

「いやね、何かムゲンがさつきと違う感じがして…」

「どういうこと?」

「えつと…記憶があつたときのムゲンみたいだった…って思つて。…ま、まあ…気のせいだよね…」

と、少し残念そうに言った。…やっぱり記憶が戻つたこと伝えておけばよかつたかな…と、少し後悔する。

「気のせいだよ。じゃ、行つて来る」

「あ、うん。頑張つてね!」

「了解だ!ムゲン・クロスフォード、ピクシーミラージュ…出るぞ!!」

カタパルトから射出された俺は、ファングさんたちと合流を目指す。

「…急ごう…!」

俺はブースターを吹かし、移動する。

しばらくすると、レーダーに機影が見えてくる。識別は連邦機とジオン機。

「…う、うわああああ!!!」

1機のジムがザクに切られようとしている。俺は居てもたつても居られなくなり、ビームダガーを引き抜き、ザク目掛けて突進する。

「な、何だ!?!ガ、ガンダム!?!」

「やらせない!!!」

俺はジムを庇うように立ちふさがった。

「…ガ、ガンダムだ…。…助かった…。」

「退け!命を無駄にするな!!」

俺の言葉を聞き、ジムは一言礼を言つて撤退していった。

「相手がガンダムだろうが、こっちは数で圧せる!行くぞ!!!」

1機のザクがマシンガンを放つ。俺はスモークバルカンでそれを相殺する。

「何!?!スモーク!?!」

俺はビームダガーの出力を少し上げた後、両手で構え、目をつぶる。

スモークが晴れ、ザクがヒートホークで切りかかろうとするのが感覚でわかった。

その瞬間、俺はビームダガーをザク目掛けて斬りつけた。

ザクは真つ二つに斬られ、爆散する。

「く、くそ!! 怯むな!! 攻めろ!!」

そう叫びながらザクが特攻してくる。だが、それは俺の目の前で止まった。

一発の弾丸がザクのコックピットを貫く。

撃った主が誰かはなんとなく予想はついていた。

「ムゲンさん。ぼーっとしてたら死にますよ?」

「…すまない。ユーリ」

「まったく…後でお菓子おごって貰いますからね」

「…現金な奴だな…まあいいさ。まずはこいつらを片付ける!」

まずはユーリがスナイパーライフルで1機のザクの足を止め、続けて俺がビームダ

ガーでザクの頭部を切り落とす。

そして、止めに、ビームダガーでコックピットを貫いた。

「…次だ!!」

「援護は任せてもらいますよつと」

そう言いながら彼女はどんどん敵の足を止める。

「くそつ! なんてスナイパーだ!!」

「!? はや…うわあああああああ!!」

ユーリに気をとられている隙に、俺は1機ずつ確実に仕留めて行く。

「後何機いる…!？」

「そうですねえ…あと10機くらいですかね。弾薬はありますし、頑張って動いてくださいね」

「…相変わらず…人使いが荒いな…」

と、小さくつぶやいた後、俺は敵に斬りかかる。

「何か言いました?」

「気のせいだろう…っ!」

「だといいですけどね」

ユーリとの連携で、あっという間に10機片付けられる。

レーダーを確認しても、敵影は見当たらない。

「…終わったか…」

「みたいですね。さて、先に進みますか」

「そうだな…」

俺達はファングさんに合流するために移動を開始する。

「そういえば、ムゲンさん」

「何だ?」

「記憶治ったの、皆に言ったんですか?」

「えっ…!？」

なぜユーリは記憶が治つたのを知っているのだろうか…。

「な、何で知ってるんだ？」

「さつきと雰囲気としゃべり方が違うので」

普段何も考えてなさそうで意外に人をしっかりと見ているユーリを、少しだけ尊敬した。…ほんの少しだけ。

「…ああ…戻ったさ…全ての記憶が…」

「どうです？記憶が戻った感想は」

「…嫌なことも多いが、それよりも見えたものがあつた」

「見えたもの…?？」

「自分がしてきた過ちだったり、人の暖かさだったりつてものが見えた」

「へーそーなんですかー（棒）」

ほとんど棒読みなユーリ。一瞬機体ごと蹴り飛ばそうとも思ったが、やめておくことにする。決して後の仕返しが怖いからではない。そう決して。

「俺は連邦とジオンどちらにも行つたから分かる。たぶん、分かり合える世界は来る」

「…ジオンと分かり合うなんて無理なんじゃないですかねえ…」

「何でだ？」

「…あの頭の硬い連邦の上層部が「はいそうですか」で頭を下げるわけがないじゃないですか」

「…まあ…そうだが…」

「まあ、でも…いいんじゃないですかね。夢くらいは持つてても」

「…そうだな…」

「先を急ぎましょう」

「ああ…」

しばらく移動していると、連邦軍の識別反応がレーダーに映った。

「フアングさん!!」

「ムゲンか?! 丁度いい! 手を貸してくれ!」

「どうしたんですか?」

「数が多くてな、道夜とフミネだけじゃ足りないんだ。すまないが手を貸してくれ」

「了解です! ユーリ! 行くぞ!!」

「言われるまでもないんですがねえ…」

俺はビームダガーを引き抜き、2機のザクをまとめて切り伏せる。

「!!…ムゲンか!?!」

「待たせたな! 道夜!」

「…遅かったな」

その道夜の言葉には普段と違う何かを感じた。とても嬉しそうな…そんな感じの。

「ユーリ、援護を頼むぞ！」

「任せてください。道夜も居ることですし。久々に撃ちますよー」

そう言つてスナイパーライフルを構えるユーリ。

「俺はフミネさんの所へ向かう。ここは任せた！」

「…任せておけ。…そういえば…ずっと前もこんな別れ方をしたな…」

「…その話は後にしよう」

「分かつてる」

「生きろよ…ムゲン」

「そつちもな。道夜」

俺はブースターを起動させ、フミネさんの所へ急いだ。

「…はっ!!」

フミネさんは鮮やかに敵を倒していく。まずビームガンで敵を貫き、続けて背後から迫る敵をマシンガンで的確に撃ち抜いていく。

だが、4機の機体がフミネさんを囲む。俺はビームライフルを構え、照準を合わせ

る。

「…頼む…そのまま動くなよ…!」

1機のザクがヒートホークを振り下ろそうとしたとき、俺はビームライフルのトリガーを引いた。

「いつけええええええ!!!!」

放たれたビームはザクのコックピットを見事に貫いた。奇跡的だ…。

「む……。ムゲンか…助かったぞ」

「大丈夫ですか?」

「ああ、問題ない」

そう言いながらもフユミネさんはザクと戦い続ける。

「手を貸します!」

「必要ないが…まあいいだろう。頼むぞ」

「…素直ですね」

「素直じゃ駄目か?」

「いいえ…。援護します!」

俺はビームライフルを構え、ゆつくりと照準を合わせる。さつきよりうまく当てることはできないだろう。ならば、牽制でもと。

「…まったく…またこいつの相手か…」

「…ムゲン、お前とこいつはつくづく縁があるようだな…」

「…あまり嬉しい縁じゃないですね…こいつとは…」

そう、俺たちの前に立っている機体。それは、改修されたペイルライダーだった。

「…フユミネさん…こいつとは俺が決着をつけます…下がっててください！」

「一人でやる気なのか？」

「…はい…。だから下がってください」

「…分かった。任せたぞ」

そういつてジム・コマンドが後退する。

「…久しぶりだな…ペイルライダー…。とはいっても、もうパイロットは変わってるんだったな…」

『…アソボウヨ』

「何…?!この声はパイロットの声なのか…?!」

それにしても機械的な声だ…あまりにも人間のような言葉では…。

そんなことを考えていると、ペイルライダーはビームサーベルで切りかかってくる。

俺はそれをビームダガーで受ける。

「くっ…こいつ…前より強くなってる…!!」

当然といえば当然だが、あのビームサーベルではないのは一瞬で分かった。それが幸いだったかもしれない。

『…タノシモウヨ。モットアソボウヨ』

「ペイルライダー…お前…!」

俺はビームサーベルを吹き飛ばし、間合いを取る。そして、ビームライフルを構え、射撃するが…。

ペイルライダーは素早い身のこなしで、回避する。

「くっ…どうする…」

少し考えていると、戦艦の残骸が宙をさまよっているのを見つける。

俺は、ひとまず残骸に身を隠すため、後退する。しかし、そうはさせまいとペイルライダーが追ってくる。

「ちっ…!ピクシーに追いつけるなんて…!」

『マツテヨ、アソボウヨ』

不気味な声が機体の中で響き渡る。俺はどうしてしまったんだ。

俺は不意に反転し、ビームダガーでペイルライダーを切り裂こうとする。

しかし、それは回避され、ペイルライダーは零距离で180mmキャノンを放とうとした。

俺は、機体を無理に動かし、回避したが、そのためか、足の関節から電流が流れる。「くっ……!」

奴と戦って5分くらい経っただろうか……突然ペイルライダーのカメラアイが緑色に戻り、動かなくなった。

「…H A D E Sの声……だったのか……? そうか……きつとそうだったんだな……ペイルライダー……」

長くここに居ると、シゼル専属の部隊がこいつを回収しに来るはず。面倒なことを避けるため、俺はその場から後退した。

宇宙世紀0079・12・24 19:30 公国軍、MS部隊、艦艇を呼び戻し、水際作戦を展開。ソロモン総司令官ドズル・ザビ、MA、MA-08ビグ・ザムで出撃。

20:20 連邦軍MS隊、ソロモン内に突入成功。

20:25 公国軍、グラナダ基地よりソロモン支援艦隊を発進させる。

20:40 ソロモン総司令官ドズル・ザビ中将、ソロモン放棄を決意。

20:55 連邦軍作戦司令官、マクファアティ・ティアンム提督戦死。

ティアンム提督が亡くなったこともあったためか、連邦軍は破竹の快進撃でソロモンを攻略していく。

それに負けじとジオンの新型MAを駆るドズル・ザビが応戦する。
こんな事をして、何も変わらないのに。人が死んでいくだけなのに…。
そのころ俺達はグロリアスに帰還し、2度目の補給を受けていた。

「…まだ…戦いは終わらないんだろうか…」

「知らん。そんなことは俺に聞かないでくれ」

補給を受けている間、俺と道夜はそんな話をしていた。

「道夜機出撃できます！」

「…了解。八雲道夜…出るぞ」

「先に行くぞ、じゃあな」

「…あ、ああ…」

そう言つて道夜は出撃して行った。

「ムゲン。もう少して修理終わるよ」

「…分かった」

俺はしばらく目を瞑り、考え事をすることにした。

俺がずっと忘れていた記憶。取り戻すことはできた。それは嬉しい。だが、でも…心のどこかで、それでも何か悲しいものを感じていた。

理由は…たぶん、グレイのことだろう。

「…グレイ……お前は…」

彼が語った夢…そのときの瞳を思い出すととても心が苦しくなる。力強く、楽しそうでも、少なくとも無かったあの悲しげな瞳を…。

「ムゲン…？」

「…?!……あ…？どうした…？」

「ご、ごめん…驚かせた…？」

リナの心配そうな声が無線越しからも伝わってくる。俺は彼女を安心させるように言った。

「ああ…別に大丈夫だよ…」

「そう…？なら…いいんだけど…」

「それで？俺を呼んだって事は何かあるんだろう？」

「あ…そうだった。えっと、補給が終わったって事を報告したかっただけだよ」

「お、そうか…。分かった。出撃する」

「気をつけてね」

「もちろんだ。ムゲン・クロスフォード、ピクシーミラージュ。出るぞ！」

そう叫び、機体を動かかそうとした時だった。唐突に艦内に無線が響き渡る。

「皆聞いてくれ!!!俺たち第00特務試験MS隊は現在の作戦であるソロモン攻略戦への介入をしない!!いや…する必要が無くなったというべきだな」

そうしてフアングさんが次に口を開くまでは、俺もリナですら言っている意味が分からなかった。

「この戦い、俺たち連邦軍の勝利に終わる。だから、もう無駄に戦うな!失うな!!!この戦いで…何も失わせるな………」

彼の言葉…その言葉には、色々な感情が詰まっていた。昂たかぶる感情を押さえ込むような…そしてそれでいて悲しげで、辛そうな…。

「…聞こえたな?全機…帰還しろ!!」

彼の一声で、リナたち整備兵が忙しそうに行動を始めるのを、俺はただ機体のモニターで呆然と見つめていた。そして、一つ頭に浮かんだ言葉があった。

『俺は何の役に立っている…?誰の役に立っている…?…俺はいつたい何のために戦っている…?』

そんな言葉が頭の中でグルグルと回り続けている。

…突然モニターの左側が眩しく光る。

思わず手で覆ってしまうほど…。

だが、その光を見るまでに時間は要らなかった。

…地球では見慣れた星がそこにはあつた。

「……」

モニターに目をやると、誰もがその光に啞然としている。

……その光は、あるいは戦い疲れたものたちを優しく包み込み、あるいはこの戦いで消えていった者たちを悼む光であり…それは万人に平等に与えられる。

そのときだけは、誰であろうがその光に心奪われ…自分が自分でいれる証……。
そんな暖かい光は、俺たちを見守ってくれている。

16 完

17：掴めなかった望み

宇宙世紀0079. 12.?? ソロモンが陥落してから二日後…だんだんと迫る決戦の前に、心を躍らせるものがいた。

「……ムゲン・クロスフオード…」

自分の機体なのだろうか見上げながら微笑むその男。

「……司令。調整は如何ほどに…」

その部下であろう人物が男に問う。

男は不敵に笑った後、言った。

「…最大だ。機体の限界まで上げる」

「…で、ですがそれではあなたの身が…！」

男を案じて彼は言ったのだろう。だが、その言葉が届くには彼の心は狂いすぎていた。届くはずが無かった。ムゲン・クロスフオードを殺す。ただそれだけしか見えない男には…。

「…構わん…。限界まで上げる」

「り、了解です…」

彼は渋々頷き、踵を返し歩いていった。

「…元々は…違っていたのだが…」

男は小さくつぶやく。それが何を意味しているのかは分からない。男は小さなため息をほつとはいった後、口を開いた。

「…宇宙世紀…。そもそもそれが間違っていたのだろうか。…ジオンや連邦が争う事で生まれた憎しみ…悲しみ…差別…」

「虐げられる者が居て、虐げるものが居た…それはこの戦争から始まったことじゃあない…」

「では…俺がどうしてこの軍に入ったのか…」

男には分からなかった。全てを崩した奴が現れてしまったことで…全てが壊れてしまった。

「彼だけのせいではないな…。だが…ならなぜ俺は彼を恨んでいる…？この身が壊れそうなのほど恨んでいるのは何故だ…？」

今の男の頭では考え切れなかった。だから考えることをやめようとする…。いつもならここで終わっているはずだった。

「…そうだ…奴が…俺には…奴が…いいや…この話はよそう…」

そういつて咳払いをした後、話を続ける。

「俺が軍に入ったのは……ただの正義感だったか……」

「俺が住んでいた町では争いや差別、そんなものは日常茶飯事だった。俺も被害者の一人だったからな」

「争うこと、差別……そんなものは気にならなかった。だが、連邦の兵士が町を占領してから……」

「連邦に齒向かえば銃で撃たれることが日常的になり、兵士は女を毎晩屯所へ連れて行く。連れて行かれるのを拒否すれば、即刻銃殺」

「……あの町の凄惨な光景とあの時感じた火薬と血が混ざり合ったような匂い……。あれをずっと嗅いでいたらきつと人は狂ってしまうだろう」

「俺はその町で育ち、考えた。どうすればこんな腐ったことが変えられるのかを……」

「そして結論に至った。俺が連邦のトップになって腐った奴らを叩き直して全て変える」と

「それからの俺は必死だった。ただトップになることだけを夢見て、連邦軍に入隊し、まずい飯を食わされ、血の滲む様な訓練。訓練が終われば死ぬように床に就く。そんな生活だった」

「そんな苦行を強いられても、あの時の俺は折れなかった。ただトップになるというワフワフしたものにならなくて必死に喰らいついていたからな」

「苦勞の末に俺は『グレイヴ』と呼ばれるレビル派の高官と出会い、右腕として働くようになった」

「…グレイヴの右腕となつてからは、もはや表沙汰に出ることは無くなつた。そして、裏での暗殺の指揮、得体の知れない研究の数々の主任として」

「…そういえば…今度出撃させるペイルライダーのパイロットも俺が主任だつたな…」

「そんなある日、極秘でM.S.データを作成していた夫婦を暗殺するように仕向けることになつた。あまり乗り気ではなかつたが、ジオンが殺したように仕向けさせた」

「その光景を見てグレイヴは嘲笑あざわらつていたか…。俺にとつてはなんとも思わなかつたが。彼にはとても刺激的だつたのだろう…」

「そういえば…あの時からか…あの少年の瞳に憎しみというものが宿つてしまつたのは…」

「ムゲン・クロスフォード。…彼と戦場で出会い、刃を交えて俺は再び理解した。あの時やはり殺しておいたほうがよかつた…」

「それが…彼にとつても…俺にとつても幸せだつたのだろうと…」

「……………次の戦い…必ず俺と奴のどちらかが死ぬ…」

「…何故だか分からない…。長年の勘だろうか…」

「…生きてきた上でどんな奴にも言われた言葉があつた…」

『お前…機械みたいだな』

「機械みたいといわれて、あまり自覚は湧かなかった」

「でもよく考えるところかもしれない。人の下で働き、ただ言われたことをこなす…それを苦痛とも思わない」

「…だが、俺はそれでも立ち止まってたらいけなかった。この先も…止まらない…」
……それから行く刻がたった後…。

「…シゼル様…出撃なさるのですか…？」

「ああ…もう逝かなければ」

「…ご無事で…」

「…お前はもう故郷にもどれ。こいつの修理は要らない」

「えっ!？」

「…二度は言わんぞ。その頭が吹っ飛ばされたくないなら二度と俺の前に出てくるな!!
クスが!!」

男はあえて強い口調で言った。そうでもしないと動かない頑固な奴だと知っているから。

「…そこまで言うなら…生きろよ…シゼル・クライン」

そうぼつりと眩いて歩いていった。

「……さあ……ハデスジャツジメント……!行くぞ!!!」

17 完

18：手をつないで

宇宙世紀0079・12??

ここは……どこだろう…

俺は……誰なんだろう…

問いかけてもその言葉だけが反響する…

帰ってくるのは自分の発した言葉だけ…

自分が今どこに居るのかすら分からない…

「……」

気がつくくと、俺は見慣れた家の中に居た。

『よおし！お前の名前は……ムゲンだ！』

目の前には懐かしい二人と、男性が抱える一人の赤ん坊。

『なんでムゲンって名前なの？もつといいのあると思うんだけど…』
『…こいつに【無限の可能性と希望】を願って…かな』

突然風景が一変する。また同じような家に立っている。

『パパ…ママ…』

『おい！ムゲンが喋ったぞ!!』

『本当!?…いい子ね…ムゲン』

どうしてこんな風景が流れてくるのだろうか。

『父さん!!』

『お前とは…もつと一緒に居たかった…』

『…!!』

『お前がMSのデータを極秘で研究してるってやつだな?』

『そうだとしても、お前達にデータをくれてやるわけにはいかん!!』

『そうか…ならやむを得ないな…』

響き渡る銃声。弾丸は父の腹部を貫いた。

『ぐはっ…!!け、研究データは…わた…』

父は続けざまに弾丸を何発も撃たれる。

それをみて母は、ただ震えていた。

『この女、研究データ持つてるぞ!! そいつをよこせ!!』

『だめ……これは……私と……彼の……!!』

銃声が響き渡る。止めたくても止められない。

『……やめろ……!! やめてくれ!! 母さんを……母さんを放せ!!』

心で叫んでも、その言葉は届かない。

『ぐっ……ムゲン……ごめん……』

言い切る前に……母さんは力尽きた。

「……うわああああああああ!!!」

「はあ……!! ハア……!!」

目を覚ますと、いつもの見慣れた自分の部屋。もうあの場所に戻ることはできない。

俺は手から血が出るほど手を強く握った。

「くっ……うあああ……!! うあああ……!!」

堪えきれず言葉が漏れてしまう。

そんな声に反応したのか、ノックもせず扉が開く。

「…ムゲン…?」

前を見ると、いつもの彼女が居た。だが、今は涙で前を見ることができない…。

「どうしたの…?」

「…り…ナ……。くっ…」

喋りたくてもまともに喋れない…悲しいからか、つらいからなのか…分からない…だが涙は自然と流れてくる。

「ムゲン…」

すると彼女は、俺の横に座り、優しく頭を撫でてくれた。

「…!」

彼女を見ると、とても優しく微笑みながら言う。

「辛いなら…泣いていいんだよ…?だって…ずっと頑張ってきたんだもん。…ムゲンは泣いてもいいんだよ…?」

「きつと辛かったんだよね…だって、顔ぐしゃぐしゃにしてるんだもん…。嫌でも分かるよ」

「…くっ…うあ…あああ…ぐっ…えぐっ…」

そのときの涙は、決して悔しかったからじゃない。親を失ったその記憶が蘇った。だからだろうか…。

「リナあ…リナあ…うわあああ…!!!」

「そ、そんなに辛かったんだ。…よしよし…。もう辛くないよ。ムゲンは一人じゃないから…」

その日、俺は初めてリナの前で涙を流した。

いつもは逆の立場だった彼女が、今は俺を優しく撫でてくれる。

リナは天井を見上げながら呟く。

「…どうして…皆分かり合えないのかな…」

「こうやって、人は肌と肌で触れ合って、話し合って…。ちゃんと分かり合えるのに…」
「……………」

俺はただ黙っていることしか出来なかった。彼女の瞳は、とても悲しそうで、そして、慈愛に満ちていた。

「…ムゲン…きつと…来るよね…あなたが記憶を取り戻すときも…。そして、皆が皆手を取り合う日が…来るよね…」

「……来るんじゃない…持って来るんだ…」

「え…?」

「今は霧が濃すぎて見えないけど…それでもその先に手が伸ばせたなら…きつと手に届く…。そう信じてる…」

「…グレイがな…ソロモン攻略戦で死んだ…。その時、言ったんだ」

俺は涙を堪えながら続ける。

「…夢を託したって…。奴の夢は…ジオンや連邦が分け隔てなく笑って過ごしている世界なんだ」

喋るたびに胸が苦しくなる。

「そこでは争いが無くて…。幸せそうな家族が仲良く暮らしてるんだ…」

「そ、それでツ…それでさ…ツ…」

話そうと思うのに、言葉が詰まってしまふ。

「父親がいて、母親がいて、子供は幸せそうに外で遊んでる。そんな…そんなありきたりだけど…そんな世界…なんだ…ツ」

「か、かれが…っ…求めたのはっ…そんな…優しい世界なんだ…っ…それを…造るためにも…」

「今ここに居る皆を守るためにも…！」

「俺は…戦うよ…リナ」

そう言つて、俺は涙も拭かずに彼女に微笑んだ。みると、彼女も涙を流している。

「…な、泣くなよ。…可愛い顔が台無しだ…」

「…ムゲン…！私…」

「大丈夫。皆で行こう…。しっかりと手をつないで、霧の中でも…暗い宇宙の中でも。とてつもなく冷たい海の中でも…俺たち全員で、平和…掴むんだ」

「……うん」

俺は、腕時計に目をやる。時間は丁度4：00だった。星一号作戦が強行されることになり、俺たちは司令室でファングさんの話を聞いていた。

「皆聞いてくれ。俺達はXフィールド攻略に参加することになった」

「…敵は今まで以上の大勢で来るだろう…。だが…！俺たちなら…。超えられる。俺達はどうなるものより強い家族の絆がある!!!」

「…いいか…絶対に、全員で生きるんだ！もうそれ以外は何も望まない。ただ、生きて帰って来い!!」

ファングさんの強い想いを胸に秘め、俺は…いや、俺達家族は、最後の戦いへ赴く。全てを終わらせるためじゃない…グレイや皆が願った世界を造るために、未来へ手を伸ばすんだ。

「…行こう…道夜！ユーリ!!!」

機体に取り込み、ハッチがオープンされる。

「……生きるぞ…ムゲン」

「さーて、いきますかー」

そんな聞きなれた人たちの声が、何故か今だけは特別に感じた…。
ユーリ、道夜が出撃していく。俺も遅れないように…。

「ムゲン・クロスフォード…ピクシー・ミラージュ…行くぞ!!!」

そう叫び、出撃した。

18 完

19：己が刃で斬り捨てる

宇宙世紀0079. 12. 31 05:00 連邦軍、残存艦隊の再編成終了。

08:10 連邦軍と公国軍によるア・バオア・クー攻防戦の開始。連邦軍、突撃艇を主力とする第1次攻撃隊を発進させる。

08:40 連邦艦隊からMS隊発進

俺達第00特務試験MS隊は、【第40特別攻撃小隊】、さらに【第01遊撃小隊】と共闘することになった。

そして、既に俺たちは、Xフィールド付近で待機していた。

「……長いな……」

「まだ時間かかるんですか……もう手持ちのお菓子切れちゃいますよ……」

そう言いながらも、何かお菓子を食べているユーリ。

「……少しは甘いものを控えられないのか……?」

呆れ気味に言う道夜。

「えー、だってー。美味しいんですもん」

「……お前という奴は……」

「…敵の反応は…ないが…」

そんな二人をよそ目に、俺は小さく呟く。

「……ここまで来て待機なんて…」

待機するのには理由があつた。

第40特別攻撃小隊の小隊員は揃っているものの、いまだに第01遊撃小隊が誰一人として来ないのだ。

そして、既に他フィールドでは戦闘が始まっているはずなのだが…。

「…おかしいな…」

そろそろおかしいと思つても仕方が無い時間だ。かれこれ俺たちは小一時間は待っているだろう。

「…まさか…落とされたか…?」

「そんな訳は無い。背後には味方が待機しているというのに、どうやったら落とせるんだ…」

「…それもそうか…」

二人で考え込んでしまう。すると、ユーリが口を開く。

「そうですね…あるとするなら、寝返りですかね…」

「ね、寝返り…?」

「…なくはなさそうだが…あまり考えたくないな…」

「う、うわああああ!!!」

唐突に聞こえる悲鳴。そして背後で聞こえる爆音。

「…!」

「なんなんですか!?!」

「くっ…なんだ…!!」

「くそっ!!なんで連邦が攻撃して来るんだ…っ!」

「お、落ち着くんだ!皆!!!態勢を立てなお…うわああああ!!」

連邦のジムによつて味方のジムが落とされる。そしてそれはさらに状況を悪化させることになる。

「た、たいちよおおおお!!!」

「…!!まずいな…むこうの隊長機が落とされただど…!?!」

「今から援護に…!ぐっ…!?!」

突然前からジオンのザクが接近してくる。

「あちゃあ…これは…裏切られましたね…」

「ちっ…！ムゲン！どうする?!」

「…くっ…!」

俺は、Xフィールドの戦闘指揮をファングさんから任されていた。自分は嫌だといったのだが、周りの空気でそうなってしまった。

「俺が…。俺が味方機の救援に行く！道夜、ユーリは正面を！」

「…ふっ…。任された」

「りよーかいですよー。隊長さん」

と、からかってくるが、声に余裕が見れないユーリ。状況が状況で仕方が無い。

俺は二人に背を向け、味方の救援へ向かう。

俺はブースターを起動し、急いで味方の元へ向かう。

「間に合ってくれよ…!」

「ひいひい!!!死にたくない…死にたくない!!!」

味方に裏切られ、完全に戦意を喪失している。そんな味方に向かって、ジムはビームガンで撃ち抜こうとする。

だが…。今だからこそ、俺はビームライフルを構え、照準を合わせる。

「……今なら……当てられる……！」

仲間を……守るために……！」

俺はその想いをこめ、トリガーを引いた。

「そこだああ!!!」

ビームは鋭くジムの右腕を貫いた。

「……えっ……!?!」

すかさずビームダガーを引き抜き、ジムを通り抜けざまに切り裂く。

「ぐっ……シゼル……騙しやがったな……。簡単な任務だと……!!うおおおおお!!」

その言葉と共に、機体が爆音を上げて爆発する。

「……た、たす……かった……?」

まだ状況が理解できない味方に、無線を送る。

「こちら第00特務試験MS隊所属のXフィールド攻撃隊指揮官のムゲン・クロス
フオードだ! ヨンマル。生存報告を!」

その言葉を聞いて、1機のジムが近づいてきて言った。

「こちら第40特別攻撃隊です。現在生存者は自分を合わせて5機……。隊長機は……落
とされました」

そう、悔しそうに言葉を出す兵士。

「…そうか…。よし、これよりヨンマル隊は、俺達〇〇隊が指揮権もつ！」
「えっ…!？」

「命令は2つだ！一つは、寝返った連中を抑えてくれ！」

「ま、待つてくれ！抑えるつて言つても…俺たちは5機だぞ?!無理だ!!」

「何…。手はある…。10分だ。10分耐えるだけでいい。そうすれば、何とかなる！」

「こんな状況だ、こんな作戦では誰も乗つてくれはしないと想つたが…。」

「…信じます。俺は…！」

先ほど助けた兵士が叫ぶ。

「あなたは、可能性を捨てた俺を生かしてくれた…。一度死んでるようなもんですから…！だから、あなたに命…預けます！」

その言葉を皮切りに、4人の兵士は声を上げて賛同してくれた。

「……お前ら…よし…10分でもいい。耐えろ!!10分過ぎて勝てないなら、撤退しろ！
そうすれば、俺達の部隊はやられる。そんだけだ」

「……了解です！隊長!!」

隊長と呼ばれるのはあまり慣れていないからか、少し恥ずかしい。

「あ……そういや、もう一つだったな…。いいか…俺の指揮下になつた以上は…死ぬなよ！」

「…!!」

全員が驚いている。…ちよつとかつこつけすぎたかな…。

「…はい…！隊長!!」

なんか、やはり少しだけ恥ずかしい。

「…じゃあ…10分…任せるぞお前ら!!!」

「…引き受けました!!!」

そして、俺は道夜達の元へ戻る。

「はっ…!」

「…！道夜！左です!!」

「くっ…!」

道夜達は既に、数機もの敵交戦していた。

「道夜！ユウリ!!!」

俺はビームライフルをけん制で放つ。

ビームはあらぬ方向へ向かって飛んでいく。その弾丸が道夜を掠めてザクに直撃した。

「おっ！やったぜ！」

「……お前は俺を殺す気なのか!？」

「あー……すまん……」

「まあいいさ。手を貸してくれ!!」

「もちろんだ!行くぞ!!」

彼らと約束した時間はあと8分……。少し時間が足りない気がする。

「……ちっ!!」

俺達3人は背を向けあい、少しずつ敵を落とす。

「くっ……」

残された時間はあと……6分。

「……仕方ない……。ユーリ!俺らに構わず、後ろの味方、何とかしてやってくれ!!!」

「……えー……めんどくさい……」

「……お菓子くらい幾らでもおごってやるから!行ってくれ!!」

「……本当ですね……?じゃあやりますよ!」

そう言つて、ユーリは俺達の背中をバネにして、機体を動かした。

「いいのか?あんなこと言つて……」

「よ、よくないかもしれないが、まあいいだろう!人の命よかマシだろ」

「……お前……変わったな」

と、少し嬉しそうに言った。

「気のせいだろ……。さあ……行くぜえ道夜!!!」

「背中には任せろ！相棒!!!」

俺はビームダガーを引き抜き、ザクを2機切り裂く。

道夜はそれにあわせて、ビームライフルを放ち、敵を貫く。

あらかた片付いたであろうか……二人で少し安堵する。

「……ユーリは……うまくやってくれてるだろうか……」

「さあ？だが、あいつは出来るさ……」

「……そうだな」

「先に進もう……!」

「んじゃ、行くか!」

俺達二人は、先行し、先に進むことにした。

しばらく進んでいると、正面に1機、見たことのない機体が立ちふさがっていた。

「……」

「どうした？道夜」

「…ムゲン…先に行ってくれ」

「何…?!」

「…分かるだろ…? お前にも【宿命】と呼べる奴がいるんだ…俺にも居るんだよ…そういう奴がな」

なんとなく察しはついていた。これが道夜の…道夜にとつてのけじめなんだと。

「…分かった。生きろよ…相棒」

「…ふっ…任せておけ」

道夜は小さく鼻で笑った。

そして、俺は先に進む。振り返らずに。

信じたら…信じきる。…それも…大切なものだと思つたから。

どれくらい進んだらうか…もう既に道夜もユーリの姿も無い。それでもここまで進んだ意味が…いや、進まなければいけないと思つた。

「…ふう…」

息を一つ吐く。周りを見渡しても、機体の残骸や、戦艦の残骸が散らばっているだけ。突然レーダーに反応が出る。動きがかなり遅い。戦艦だらうか…。それにしても、こつちに向かつてくる。

「……っ!!な、なんだ…あいつは…!!」

レーダーで見えるより明らかに分かるそいつは、あまりにも強大で…ものすごいプレッシャーがかかる。

「…くっ…!!」

奴は俺を見つけたと思うと、両腕を前に出し、ビームを放ってくる。

何とか回避するものの、そのビームは、戦艦の倍ほどの大きさがあつた。

「くそっ！ジオンめ…！化け物作りやがって!!」

俺がビームライフルを構えた瞬間、右からビームライフルが打ち抜かれた。

「何っ!!」

みると、奴の腕が有線式で繋がっていた。

「なるほどな…！そいつで腕が伸びて攻撃してくるわけか…！ずいぶんだな…」

俺はビームダガーを引き抜き、接近する。

「近距離なら!!はああああ!!」

奴の懐に飛び込み、敵を切り裂く。しかし…手ごたえが無かつた。

「!？」

みると、奴は前装甲のアーマーから出たビームサーベルでダガーを受けている。

「(ハ、ハ、ハ)っ…!!」

俺は間合いを取り、ビームダガーの出力を上げ、もう一度切りかかる。

「うおおおおお!!!」

しかし、奴もビームサーベルの出力を上げだし、鏢迫り合う。

「ちっ!!なんなんだ!!こいつは!!」

すかさず左腕でビームダガーを引き抜こうとするが、一方のビームサーベルで左腕が切り落とされる。

「しまっ!!」

さらに、奴の背後から歯車のようなものが射出されたかと思うと、俺目掛けて突撃してくる。

「くっ!!!」

なんとか間合いを取ろうとするが、奴に右腕を掴まれる。

「くそっ!離せ!!」

そのから空きになった俺の背中に容赦なく歯車は突っ込んでくる。

そして、背中爆発すると、ものすごい振動と共に、モニターが砂嵐になる。

「ジャミングだど!!くそっ!!」

さらに状況が分からぬまま、機体にどんどん歯車は攻撃を仕掛けてくる。

「うわあああ!!!」

内部機器から少し電気が走る。

「ちっ！まずいな…!!」

俺もここまでか…そう思ったときだった。

正面から爆音。そして、何かに掴まれ、移動している。

モニターが元に戻って前を見ると、ピクシーの破片が散らばって、奴のビームサーベルが宙に浮いているのが分かった。

「つたく…世話が焼けるね君は…。ムゲン・クロスフォード君よ」

聞き覚えのある声。そう、あの特別れた…あの…。

「カカサ…?!」

「クロノード君もいるぞ?」

「ずいぶんひどい有様だな…ムゲン。まあ…相手がああの化け物じゃ…そいつも不利だな」

「…二人とも…ジオンなのに助けた…?」

それを聞くのかという口調でカカサが返す。

「そりゃあ、一度は同じ焼き鳥を食った仲だからな。ついでに…俺もこいつは倒しておかんといけないと思ったのさ。お前のためにも…後の奴らのためにも…残らずな!」

「そういうわけだ。もう一度共闘と行こうぜ?ムゲン」

「だが…これがバレたら…俺は良いとして、お前たちは…」

「なあに…気にしなさんな。正面の奴は俺の部下が抑えてる」

「…それって!!」

「…まあ…なんにせよ…こいつを潰す。それだけだろ?」

「……ああ……」

俺はもう一度自分の心を震いたたせ、奴と対峙する。

2機増えて何が出来るとはわからない。それでも、今俺の心には『もし負けたら』なんて言葉が出てこなかった。

……それだけ…信頼しているのが、自分でも分かった。

だからこそ…!!

「…行くぞ…!!カカサ!!クロノード!!」

「うっしやあ!!斬るぜ!!」

「…さあ…30特別遊撃隊。いっちょ暴れるぜ!!」

カカサの黒いゲルググが左側から奴に攻撃しながら移動する。

ふと気がつくと、奴のデータが俺に送られていた。…いつの間に…。

「…ムゲン…ギア…」

かつて父さんと母さんが研究していたデータを基に作られた機体…。これも運命な

のだろうか。

しかも、こいつに搭載されてるAI…。コードネームは【m u g e n】…つまり俺なんだ。

…こいつは俺の過去なんだな…自分でもそう理解できた。

俺はこんな歪で大きな負の感情を持っていた。

だからこそ…。

「終わらせる…こいつを…斬る!!」

俺はビームダガーを構えなおし、奴の右側から斬りかかる。

奴は、腕部のビームを放ってくる。

俺はそいつを真つ向から受けて立つ。

ダガーの出力を上げ、絶対にあるまいであろう事を可能にした。

「俺とピクシーの刃は…!!ビームをも切り裂く!!うおおおおお!!」

叫びながら突撃する。ダガーにビームが触れると、なんとビームが真つ二つに分かれる。

それをみたクロノードが言った。

「……………こいつも奴と同じくらい化け物だな…。その度胸も…腕も…そして…機体も」

「そりゃあ、褒め言葉として受け取っておくぜ?」

「ああ…それで構わん」

だが、どこを攻撃しても、まるでダメージが通っている気がしない。

「ちつ…なんなんだ？ ビームは弾かれるし…ダガーで斬っても効いた様子が無い」

「…ムゲン、一度下がれ」

「な、なんだ？」

「カカサもだ。お前なら分かるだろ？」

何かを察したようにカカサは呟く。

「戻る必要があるかあ…？」

「戻ったほうが身の安全が図れるぞ？」

「…つたく…なるほどな。分かった。ムゲン、下がるぞ」

状況が理解できないが、俺もカカサに続いて、相手の攻撃を避けながらクロノードの

元へ戻る。

「つと、こんなもんだろ」

「……いいか、ムゲン。俺が攻撃したら、一気に奴を叩け。奴の弱点は…装甲の奥に

ある!!!」

「装甲の奥…？」

理解できない俺に、なるべく早い口調でカカサが言う。

「いくらお前の親の研究データを使おうが、結局作った元はジオンだ。俺はあの装甲は貼り付けてあるだけだって思ったんだよ」

「…なるほど…つまり…その奥に…ケーブルがあるって言うのか？」

「そういうことだ。考えてる余裕なんか無い。狙うのは、頭部のケーブル!!!俺とお前で2本ずつだ!!そいつさえ…そのケーブルを切ればAIも逝く!!」

「…よし…それに賭ける」

「じゃあ…始めるぞー」

クロノードがライフルを構え、射撃の準備をする。

すると、奴は胸部の装甲を開き、ミサイルを俺達のいる場所目掛けて放ってくる。

「くるぞお…！お前ら!!頼んだぜ!!!」

「言われなくてもー。俺が生きたいから守るさ」

そう言ってカカサがビームライフルでミサイルを撃ち抜いていく。

「くっ…俺も…!!」

俺もビームライフルでミサイルを撃ち抜く。…3本くらいだが。

「もう少しだ…!!!」

「おいおい…！もうもたない…!!」

「…カカサ…俺は賭けたい事がある」

「なんだ……？」

こんな事を戦闘中に言うのはおかしいかもしれない。だが、それしか俺達が生き残る可能性は……ない。

「……こいつを……受ける……！」

「なっ!？」

「ムゲン……？」

「お、俺とカカサで盾になって……このミサイル……受け切る!!!」

「……」

さすがに唐突な作戦に驚きを隠せないカカサ。

だが、少し考えた後、笑いながら言った。

「……お前らしいな……ははは……!!!いいぜ!!やってやるよ!!聞いたな?クロノード君よ」

そして、カカサらしくない言葉を漏らす。

「……お前に命……賭けてやるよ」

「……カカサ……。……。ああ……任せろ。一撃で決める」

ふつと笑ったカカサは、俺と共にクロノードの前へ立ちふさがる。

「んで?ただ受けるだけじゃあないんだろう?」

「……そりゃあな……。カカサ。お前はなるべく奴に派手にやられたように見せてやってく

れ。AIですら見まがうほどの…な」

「…つたく…結構な注文だな。…オーケー…やろう」

「後は…俺に任せろ」

「はいはい」

迫るミサイルを前に、俺とカカサは身構える。

着弾ギリギリまでひきつけ…俺はスモークバルカンをミサイルに当たるようにばら撒いた。

ミサイルに着弾したスモーク弾は、ミサイルと共に爆散し、スモークが散布される。

それに続いてカカサが、シヤドウクナイを手前に投げ、集まった一箇所にビームライフルで撃ち抜くと、機体1機分が爆発したように見せかけた。

そう。いくらAIだろうが、俺は俺なんだ。自分自身がこの状況、ましてや過去の自分なら、油断しないわけが無い。

「いける…！いけるぞムゲン!!カカサア!!」

「…グッドタイミングだ…クロノード!!」

「うっし。準備するぜ!!」

俺とカカサは左右に分かれる。

そして、スモークが消え去ると共にクロノードは

「こいつで…化けの皮剥ぎやがれええええ!!!」

ライフルで奴の頭部目掛けてビームを撃ち込んだ。

ビームが放たれると、俺達は駆ける…! 奴の頭部目掛けて…! 狙うは奴のケーブル!!!
ビームが着弾し、ガンダムのカメラアイが剥がれる。みると、ケーブルはザクのよう
な配置で接続されている。

「今だああああ!!!」

カカサが先行し、斬りかかる。流石に早かったのか、奴の攻撃に阻まれるが、それが
幸いした。こちらに一切の目がいつていない!!!

「…ムゲン!!! 決めろおお!!!」

だんだんとダガーの出力を上げる。気がつけば、出力は限界まで達していた。それで
も下げることはしなかった。只今は…奴を斬る!!!

「うおおおおおおお!!!」

奴がこつちを見たときには遅かった。

俺は、奴の二つのケーブルが接続されている場所を切り裂く。すると、奴の行動が遅
れた。

『オ…オマエ…ダレ…ダ…』

微かに聞こえる声。俺だった。俺の声だった。ありえないはずではある声が聞こえ

る。だが、それに答えるように俺は叫ぶ。

「…俺か…？俺はオマエを…殺す奴だ!!!」

そのまま俺は、奴の頭部から真下へ、真つ二つに切り裂いた。

そして、俺とカカサが身を引くと、奴は爆発する。何故かその爆発の光が、あのグレイの時と同じだったのは…気のせいだろう…。

「…ふう…や、やった…な」

「ほえー。案外やれば出来るもんだなあ」

カカサが珍しく安堵している。

「…なんとかなったな。助かったぜ…。ムゲン」

「いや、俺のほうこそ助かった。あのままじゃ勝てなかった」

本当にそうだった。二人がいなかったら今頃俺はあの世に逝っていただろう。

「そういうや、記憶は戻ったのか？ムゲン」

「クロノード…。すべて戻ったよ…」

この二人には、もう隠す必要は無い。そう思ったからこそ、言った。

「そうか…そりゃあよかった。さて…普通この状況だったら、俺はお前を落として帰るんだが…今日は気分が乗らない。…いや…もう…俺は……っ!?!」

唐突に俺とクロノードを別つビーム。

「なんだ!？」

「…クロノード…! 無事か?!」

「あ、ああ…」

「……」

珍しくカカサが黙り込む。いったいどうしたのだろうか。

彼が見ている方向に眼をやると…。

「……シ…シゼ…」

「シイゼエルアアアアア!!!」

俺が言い切る前に怒りをあらわにしたカカサが叫ぶ。

「…お前達に会いにきたわけじゃない…狙いはムゲン・クロスフォード…。ただ一人だ!!!」

「んだとお…!!」

その言葉が余計に彼をイラつかせる。俺は、カカサをなだめようとする。

「カカサ…! 落ち着け!!! こいつの狙いは俺だ!!」

「うるせえ!!! 奴は…俺が…!!!」

そんな姿を見て、シゼルが不敵に笑いながら言った。

「いいのか? 俺に構ってて。今頃お前らの味方は蹂躪され…部下の女共も…ふふふ…」

俺の頭の中に道夜、ユーリ、フアングさん、フコミネさん、そして、トラヴィスさんやボマーさん。…そして…ペイルライダー。その姿が流れてくる。

「多くの仲間、色んな奴とであつたからこそ…こいつを倒すのは…俺だ…!! カカサ、クロノード…お前はお前の家族を守れ!!」

「こんな所で足止めなんかしてちゃ…笑える世界なんて造れねえぞ!!!」

俺の言葉を聞き、カカサが口を開く。

「…諦めきれない…だが…ここはお前に任せる」

「何?」

「行こう。クロノード君。家族って奴を守りにいこうぜ」

「…俺は…あいつらを馬鹿にしたシゼルを許せない…!!! 絶対につぶ…」

「分らないのか!!!」

彼の叫びがこだまする。

「……!!」

「俺だって…俺だって奴を殺したい!!! だが…それよりも大切なものがあるだろう!!!」

……俺達の順番は…終わったのさ」

「……カカサ……。分かった…。ムゲン…必ずけりを着けろ。それで…戦争終わった

ら…うまい飯食おうぜ…! 家族全員で!!!」

「…ああ…！また会おう!!!」

カカサとクロノードはシゼルの機体とすれ違い、正面に消えていった。

「…いいのかあ？3機でかかれば倒せたかも知れんぞ？」

「…必要ない。お前の相手は…俺一人で十分だ!!!」

19 完

20：未来を歩んで

『父さん…母さん…俺は…うわあああああ!!!!』

あれからまだ1年もたっていない。

よく考えると、どうしてこの道しか選べなかったのだろうか…。

本当は楽になったほうが良かったのではないだろうか…。

でも違っていた。いつの頃か母さんが言っていた言葉があった。

『人生にね、間違いなんてものは何一つ無いんだよ?』

『そうなの?』

『そうよ。だって、どんな道が示されようとも、どんな道が出来ていようとも、結局はその判断を下すのは自分自身』

『……』

『たとえそれが間違いであろうと、正しい道だとしても…その道は、全て間違いなんかじゃないのよ』

視界がだんだん晴れていく…。

俺はモニターを見つめ、奴と対峙する。

「……シゼル・クライン……!!」

「ムゲン・クロスフォード……!!」

自然とレバーを握る力が強くなる。全ての元凶……。父さんと母さんを殺すように仕向けさせたのも……ペイルライダーをおもちやのように使ったことも……全て奴がやったことだ。

だからこそ……奴を許すことは出来ない。

「絶対にいいいい!!」

俺はビームダガーを構え奴に斬りかかる。

奴は軽々とビームサーベルで受け止め、鏝迫り合いの形になった。

「ぐっぐおおお!!」

「くっ……!!」

「お前を……俺があ……! 斬る!!!」

「出来るものならやってみる……この死に損ないがああああああ!!!」

シゼルは間合いを取り、ビームライフルを撃つてくる。

俺はそれを回避しながら、スモークバルカンを直撃させ、斬りかかった。

しかし、それは驚くべき速さで回避されてしまう。

「早い…!!!」

「ふんっ!! 心の変化はあっても…腕はあの時と同じか!! 所詮雑魚は雑魚なんだよ!!」

「何を!!!」

サーベルとダガーが激しくぶつかり合い、離れ、それが何度も弧を書くように火花を散らしあう。

「シゼルウウウウウ!!!」

「ムゲエエエエエエエエエ!!!」

俺は、ダガーを空中に投げ、カートリッジを持ち、ダガーの柄に装着させ、ダガーを持ち直す。

「ほお…リロード式か…ふふふ…面白いなあ…!!」

奴がビームサーベルを持って切りかかってくる。

俺はそれを回避し、次に動くであろう位置にダガーを投げつけた。奴の反応なら…避けられない!!!

「ぐうおっ!!!」

案の定、奴の右腕にダガーが刺さる。俺は奴の腕に刺さったダガーを引き抜くと共に右腕を切り落とした。

「ちっ!!! 右腕なぞ…くれてやるわ!!!」

「強情だな…!! 本当はつらいんだろう?！」

「お前と一緒になんて困る。…お前のような…場数を踏んでいないお前とは!!!」

「なんだとお!!!」

俺はビームダガーに力をこめ、奴の左足を切り裂く。

その反撃といわんばかりにピクシーの右足が切り落とされる。

「くっ…!!! まだまだああああ!!!」

「…楽しいなあ…そうだろう? ムゲンよおおおおお!!!」

今一度ダガーとサーベルが激しくぶつかり合い火花を散らす。

「こんな心昂ぶる戦いは久しぶり。…こんな…こんな心臓が躍る戦いは…久しぶりだ!!!」

奴の言葉には何故か、楽しみに聞こえる。

「…戦いは遊びじゃない…!!!」

「人はなあ…どんな場所でも遊び心がなければ生きてはいけんのだよ」

「戦争は遊びでやっちゃいけないことだ!!! それぐらい…分かるはずだあ!!!」

「分かる分からないじゃない…。人間の心理だ。だから楽しむ!!! それだけなんだよ!!!」

「そんな…そんな理由で…!!! 失った奴が何人いると思っっているんだ!!!」

「知らんな!!そんなこと!!!」

「ジェームスの弟や妹は!!?研究所のあの優しいおっさんは!!?そして…グレイは…!!!
前の遊びで殺されたのか!!!」

「お前にとつて大切でも、俺にはどうも思わん!!?そういうものだろう!!」

「なんだと…!!!」

「人間は…結局自分と自分の親しい人意外は何も興味が無い。実際そうだろう?お前も!!!」

「な、何…?」

「さっきのジオン兵もそうだ。知っているからこそ銃口を向けなかった。お前は向けられなかった!!」

「だが…あれが見知らぬ奴だったら…?迷わず切り殺していたよな?」

「…そ、それは…!!」

「いいんだ…それで…。それが正しいのだ。人間はそういう生き物なんだ」
「……」

「少し昔話をしてやろう」

「な、なんだと!?!」

「…地球に人類が増えすぎて、コロニーに移民を送った宇宙世紀が始まって、もう80年になろうとしている」

「地球もまだ統治されていない頃だ。昔の国と国は、経済的、軍事的にも争ってばかりだったそうだ」

「……」

「考えても見ろ…。人間が自分以外のために動く生き物ならば、そもそも戦争など起こらんだろうさ」

「それはいいと思うか？普通はそうだろう。『皆が他人を思いやれる人が増えればいい』。などと妄言を言っている奴がいるだろうが…：そいつあ違う」

「他人を思いやつても意味が無い。そう思うのは何故か…？分かるか？」

「……」

「たとえば、ある船が海に沈没した。漂流した板が流されていて、2人の人間がいるとしよう」

「その人間が、自分の命を投げ出してまで他人を助けようとするものなどいない。そして、2人で争いが生まれる」

「『俺は譲る』とか言う偽善者がいるだろうが、それは自分の命が本当に危機に瀕していないだけ…」

「人間、自分の命が危機に瀕すると、絶対に他人を思いやる余裕など生まれない。そもそも人を助けるのは義務でもなんでもないからな」

「人間は他人を助けたいと思わせるものは何か…それはな、人間にある【感情】だ」
「…感情…」

「そうだ。これがあるから人間は人間と争うことを心理的に嫌い、人間を殺すことに抵抗が生まれる」

「いいか？ ムゲン…平和な世界が造りたいとか考えているならやめておくんだな」
「何…?!」

「不可能なんだよ…ましてやジオンと連邦が手を取り合うなんてもつと無理だ」
「そんなことは…!!」

「やってみなくてもわかる…。人間に感情というものがある限り、絶対に戦争、差別が生まれる」

「…それは…それは…」

だんだん息が苦しくなる。当然といえば当然だ。奴に俺の全てを否定されているのだから。

「だが…その世界を造るのは簡単だ。人間が感情を捨てる…それだけで平和な世界で
きる」

「…」

「考えてみる、感情がない。つまり、人を殺せといわれたら殺す。感情を持たないから自ら争いの火種をまかない」

「ほら…幸せな世界だろう？なあ…ムゲンよ!!!」

「…やめろ…!!!」

「何…?」

「やめろよ…!!!」

苦しい胸を押さえながら叫ぶ。

「何が…。何が平和だ…!!!それは…平和じゃない!!!」

「ほお…どこが平和じゃあないんだ？争いが無い。立派な平和じゃあないか」

「確かに争いは無い…だが、それ以上に失つちやあいけないものがあるんだよ!!!」

「俺は知らん…。そんなものを知らん」

「なら教えてやる!!!」

叫びながらビームダガーを構え、奴に切りかかる。

何度目かのサーベルとの衝突。

「人間が感情を失えば…確かに争いも貧困も差別も生まれないかもしれない…!!!だが…」

!!!

「俺が夢見た…いや…俺が掴む平和はそうじゃない!!!」

「皆が…笑っている…!!そんな世界なんだ!!!」

「ジオンだ連邦だなんか関係なしに、笑っている…!!そんな世界!!!」

次第に力が強くなる。

「くっ…!!!」

「父親と母親…そしてその子供が楽しそうに遊ぶ!!それをみて両親が笑う!!!そんな…そんな当たり前の世界!!!」

「知らん…!!俺はそんな世界…知らない!!!!!!」

「一時の平和と言うかも知れない…けど…!!それでいいんだ!!!人間は自ずと楽なほう、辛くない道を選ぶ!!!」

「なら…!!!手を取り合える日が来たっていいじゃないか!!!願ったっていいじゃないか!!!」

俺のダガーは奴のコックピットを掠める。

「くっ…!!!」

「黙れ…!!そんな世界は…!来ない!!永遠にいいいいいい!!!」

奴の機体のカメラアイが赤く光る。機体の廃熱部分から煙が吐き出される。

「その世界は俺の知らない世界だ!!俺は…信じない!!!」

奴はビームサーベルでピクシーの頭部を切り落とす。

「くっ…!!」

モニターが砂嵐になる…。と思った。前を見ると、しっかりと奴がモニターで捕らえられている。

「…俺は…!!そんな世界を見なかった!!いや!!みれなかった…」

「何…?!」

「俺も…お前みたいに素直なときがあった」

「その町で平和に暮らせればそれでいい…そんな世界が続けばいい」

「ずっと願っていた…だが…そんなものは長続きしなかった」

「…連邦軍が町にやってきて、占領したんだ…。反抗した奴は全員銃殺された」

「…それからというもの…毎晩のように連邦の屯所には悲鳴と笑い声、そして銃声が響き渡っていたんだ」

「二度…奴らの屯所を覗いたことがあった。思わず目を背けてしまった。あまりにも惨かった」

「女は犯され、そして、用が無くなったから銃で撃ち殺したであろう死体が転がっている」

「その時、一人の女と目が合った。…きつと順番でやられるのは分かっているが、そ

ここに立っていた。逃げようとすれば殺されていたから……」

「そして、その時の少女の怯える瞳を俺は……忘れることが出来ない……」

「……」

「そんな世界を見てきたから、お前の両親が死んだとき、実は何の想いもおきなかった。町で……慣れてしまったから……」

「……!!」

「……だから……そんな世界を来ることを俺は望んじやあいない!!そして……今はお前を殺すことが……一番なんだ!!!」

「なら……受け止める……!」

「何……!?!」

「お前のその縛られた心を……俺が全部受け止める!!」

「お前に……お前なんかにはわかるものかああああ!!!」

奴がビームサーベルで右腕を攻撃する。

俺はそれを回避し、奴の右腕からビームサーベルを吹き飛ばし、左足で奴の腹部を蹴り飛ばす。

「うぐあああ!!!」

奴は吹き飛ばされ、態勢を立て直すのがやっとだった。

「はあ…ハア…!!!」

「…お前を地獄から解放してやる!!」

俺はビームダガーを構え、奴目掛けて突撃する。

「これで…終わりだ!!!シゼル!!」

「ふっ…」

ビームダガーは、奴のコックピットに突き刺さる。そしてその瞬間、奴の機体からバ
ルカンが放たれ、コックピット付近に直撃する。

「くっ!!!」

そして、もう死んでいるはずのシゼルが、機体の右腕で、ピクシーの右腕を掴み、離
さない。

「何っ!?!」

「…ただじゃ…死なん…お前も…一緒だ…!!!」

「は、離せ!!この野郎!!!」

「い、嫌だ…ね…」

機体から音が聞こえてくる。

【自爆シーケンス起動】

「何!? 自爆…?!」

一瞬でも油断した自分を悔いた。

「くそっ!!! はなれろ!!!」

無理やりでも離そうとするが、奴の執念が機体に宿ったのか、一切動かない。

「くっ!!! 脱出出来るか…?!」

コックピットハッチのボタンを見ると、先ほどの「ムゲンギア」での戦いで破壊されてしまっていたようだ。

つまり…俺に残された脱出方法は無くなった。

「…本当に…終わり…なのか…」

人間は、死を垣間見る瞬間、人生が走馬灯のように流れていくというのは本当らしい。懐かしくも狂おしい、そんな自分の人生はここで幕を閉じるのだ…。

【自爆2分前…】

奴の機体から聞こえる死のカウントダウン。

「…ピクシー…お前と戦えてよかった…」

「…ずっと…お前は何も言わずに従ってくれてた…今回も…俺の意志に答えてくれたんだろう?」

「リナや皆と会いたかったけど…お前と戦場で死ぬるなら…それはそれで本望だ…」

するとどうしたとか、コックピットハッチが静かに開いていく。

「!!…ピクシー…?」

しかし、機械は何も喋らない。ただ何も言わず…。

「…そうか…これが…お前の答えなんだな…」

「…ありがとう…相棒…。一緒に戦えて…幸せだったぜ…」

俺はそう言つて、コックピットから抜け出した。

「ムゲン…ア…リ…ガ…ト」

ムゲンには聞こえぬ小さな音…。しかしそれは確かに数々の戦いを共に生き抜いてきた相棒からの感謝の言葉だった。

「…ピク…シー…!!」

俺が安全な場所まで離れるのを見届け、奴の機体と共にピクシーも爆発する。

「…!!!」

その時見たあの光…忘れるはずが無かった。グレイの時と同じ、とつても…暖かい光…。

「そうか…これが…あいつの心だったんだな…」

こうして暖かな光が消えるまで、俺はただ宙をさまよっていた。

「ムゲン!!ムゲン!!!」

聞きなれたリナの声…振り向くと、ボロボロのジムに乗ってリナが探しにきていた。

「…俺は…ここに居るよ…リナ…!」

俺は手を振り合図した…。

リナに手を引かれ、機体に乗り返む。

「リナ…どうしてこんな無茶を…」

「だって…ムゲンが消えちゃう気がして…」

そんな言葉を聞いて、俺は微笑みながら言った。

「俺はどこにも行かないよ…お前のそばにずっと居る」

「…うん。分かっている…もう…一人にしないでね」

「ああ…もちろんだ…。だってお前のことが…す、好きだからな…!」

自分はずつと言えなかった感情…それを後押ししてくれたのは、色々な人と出会って強くなった自分と、過去の自分と対峙して、いつもずつと見守ってくれた相棒が居たからなんだと思う。

「…うん!!!」

リナは、今まで以上の笑顔で俺に笑ってくれた。

「帰ろう…俺達の家…皆…待ってる」

「…そうだね…。帰ろう…手をつないで…ね？」

「ああ…迷わないようにゆっくりな」

「うん…！」

宇宙世紀0080・01・01 15:00 サイド6ランク政権の仲介により、月のグラナダにおいて、

地球連邦政府とジオン共和国臨時政府ダルシア政権（ジオン公国は「ジオン共和国」となり存続）の間に終戦協定（グラナダ条約）締結。

「二年戦争（ジオン独立戦争）」終結。アンマンにおける予備交渉のあと、グラナダにおいて正式調印が行われた。

20 一年戦争編 完

一年戦争外伝

外伝：Episode of Gray

「待たせたな…!!お前は僕と地獄逝きだああああ!!」

僕は少しずつジムのスラスターの出力を上げていく。彼を…彼と夢を守るために…
!!!

「後は…任せ…たよ…ムゲン…」

爆発と共に僕の人生は終わる。そして、今までの出会いが、託した未来が全てが僕の頭で駆け巡った。

僕は…運命を変える…【歯車】になれただろうか…。

時は遡^{さかのぼ}る事2ヶ月前の事、僕は地球連邦軍に所属する兵士だった。あんまり機械の操縦は慣れなかったけど、なんとか部隊の一員として生き残っていた。

「グレイ!!!とつとと運べ!!!」

「は、はい!!!はあ…はあ…!!!」

生まれつき僕は体が強かったんだけど…今は少し動いただけでもめまいが起きてし

まうほど弱っちゃったんだ。だから、主治医に処方された薬を飲まないとしつかり動く事ができない。

こんな体で生まれなければ、あんな過去を生きていなければもつと役に立てたと何度自分のことを恨んだらうか。

普通の人間が運べるような荷物でさえも、僕はまともに運ぶ事もできない。いつそ、小さい頃に殺されていれば良かったと、今でも思ってた。

僕は昔、サイド2で普通に暮らしてた。もちろんお母さんとお父さんがいて、とても幸せだった。

でも、サイド2に毒ガスがばら撒かれた事で、全て変わってしまったんだ。

僕は生まれつき体が丈夫で、僕だけは毒ガスを吸ってもなんとも無かったんだ。

だから、お父さんとお母さんが苦しそうに倒れている姿を見ている事しかできなかった。

そして僕は連れて行かれた。研究者に。わけのわからない場所へ。

それからというもの、毎日のようにわけのわからない薬を投与された。

投与された薬の全ては僕に害を与える事ができなかった。今思えばとてつもないほどの抗体を持っていたんだなど、思う。

けど、ある日、僕がおかしくなった原因の薬を投与される事になる。

最初はなんともなかった。だけれど、次第に体調が悪くなっていた。

そうだね…例えるなら、とても大きなダムがあつたとしよう。

そのダムは、とても大きく、大量の水を抑えていた。

けどある日それが突然決壊するんだ。派手にね。

そしたら、水が一気に流れ出す。今まででたまりにたまつた分が。

そんな感じで、僕の体に一気に毒が回った。

耐え難いほどの頭痛や吐き気が僕を襲う。そして同時に思った。

『僕の人生も終わりだな…』って…。

それから、誰かに助けてもらったんだけど…。

あまり覚えていない。けど、確か…それから人工ニュータイプ計画の実験体になつた

んだつたっけ…。

記憶がはつきりして無いけど、研究者が言つてた言葉は確か…。

『今までにこんな数値が出たのは初めてだ…これは…本当の…』

そこからは思い出せない…。

少し思い出していると、背後から足音が聞こえてきた。

「ちんたら運んでんじゃねえぞ!!!おら!!!とつとと運べ!!!」

僕の背中を副隊長が蹴る。僕はふらついて転んでしまった。

「い、いって…」

「おい、何荷物壊してんだよ!!!弁償だ!!!」

副隊長が僕の胸ぐらを掴んでにらんで来る。

「やめておけ。まったく。グレイをいじめてやるなよ」

見ると、そこにはこの部隊の隊長であるシュバルツさんが立っていた。それを見た副

隊長は、僕の胸ぐらから手を離し、つまらなそうに言った。

「…ちっ。なんだよ隊長さんか…。忙しいんじゃねえのかよ」

「何、少し用事があったんだ。ここはいい、お前は別の場所に行け」

「…りよーかいですよ。…ちっ」

通り抜けざまに副隊長は軽く舌打ちをして部屋を出て行く。

「隊長…。ありがとうございます…」

「気にすんな。それよか、体は大丈夫か?」

この部隊で僕の事情を知っているのは隊長と副隊長だけで、だから副隊長は僕をいじめてくるんだろうな…。でも、隊長は違った。

「あ…。はい…大丈夫です。荷物…運ばなきや」

「あー。俺が持つから、半分でもいい。一緒に行くぞ」

隊長はいつも優しくしてくれた。体のこともあるだろう。それ以上に、彼は僕を弟のように扱ってくれた。

だからかな……。僕が頑張れたのは。

「隊長、僕……本当に役に立ててるんでしょうか……」

荷物を運びながら隊長に聞いてみる。すると、彼は表情一つ変えずに言った。

「いいか、グレイ。役に立つ立てるじゃない。立とうと努力してるなら、それでいい」

隊長の言葉は、僕には理解できなかつた。仮に努力したって、報われなければ意味が無いと思っていたから。

「……」

そのときはそう思ってた。けれど、人間の心は案外脆くて、簡単に意志は崩れていくものだ。

それがやってきたのは、僕がジオンに……、クロノード隊長の所へ向かう理由になった日だった。

ジャブロー攻防戦で敗走したジオン兵を追撃するように命令された僕たちの部隊は、ジオンの兵士を探し、索敵を行っていた。

「…全機、しばらく待機だ」

隊長はいつもの口調で部隊の人へ声をかけた。

「ちっ…面倒だな…」

彼らは普段どおりの行動をしていた。けれど、僕は…不思議な違和感を覚えていた。こう…何か胸騒ぎがする…。誰かが銃弾に貫かれ死ぬ。そんなのが頭をよぎる。

「…」

そんな考えがよぎるたびに震えが止まらなくなる。

突然コンコンつとコックピットをノックする音が聞こえた。

「…?」

コックピットのハッチを開くと、シユバルツ隊長が覗き込んできた。

「おう。グレイ。いるか?」

「あ、はい。どうしました?」

「なに、ちいっと暇だったんでな。少し話をしよう」

「…良いですけど…」

隊長は嬉しそうに話を始めた。

「グレイ。お前に、言わなきゃいけない事がある」

「…なんですか?」

「ああ。身構えなくていい。何、この作戦で俺に何かあつたらすぐに向かつて欲しいところがあるんだ」

「…」

僕は黙って彼の言葉を待った。

「第30特別遊撃隊って呼ばれる部隊に行つて欲しい。それで、その隊長に伝えて欲しい事がある」

「希望は成つた。つて……」

【希望は成つた】。どういふことなのか理解できなかつた。しかし、僕は彼に頷いた。

「……さて……そろそろ動くか」

そう言つて彼は、僕の機体から降りていった。

「全機、行動す……なんだ!？」

突然の爆音。それに驚いたのは僕と隊長だけだつた。それに関しても理解が追いつかない。

そして、次の瞬間には煙幕が焚かれ、何も見えなくなる。

だが、煙幕が消えると、隊長は僕の近くに居るが、周りを見ると、他の部隊員の機体とジオンの機体が僕たちを囲んでいた。

「…ど、どうい…」

僕はただ震えてしまった。そして、何とか声を絞り出して出た言葉だった。

「…はめられたか…。グレイ」

「…隊長…?」

「…さっき言ったとおり、向かってもらおう事になりそうだ…」

「え…?」

「第30特別遊撃隊…。そこに行くんだ。ここは、俺が引き受けよう」

「で、でも…一人だったら…!」

僕が言うと、かれはそれを鼻で笑った後言った。

「まがりなりでも少将だ。俺の腕をなめるな。さあ、いけ…!」

「でも…!」

「3秒数える…。0で…全力で行くんぞ!! さっき送った座標へ!」

「…え…?」

見ると、機体に新たな座標が指定してあった。

「3…2…」

「た、隊長…!!」

「1…0…!! 行け!! グレイ・シュタイナーアアア!! お前に希望は…託したぜ!!!」

そう叫びながら彼は僕とは逆方向へと向かっていく。僕はただ無我夢中で機体を座標のほうへと動かした。

どれくらい移動しただろう……。座標の所へ何とか移動する。

そこには、ジオンの駐屯地があつた。一瞬血の気がどつと引いていく気がした。

「……あ……ああ……!!」

僕はただ怖くて機体の中で震えている事しかできなかつた。隊長を見捨て、自分だけ逃げたのだから……。

すると、コックピットが強引に開かれる。

「……!!」

「おい……お前。ここに何のようだ」

そう言つて銃を構えたジオン兵が言う。

「……た、隊長の……」

「ん？隊長がなんだかしらんが……」

僕はありつたけの声で叫んだ。

「き、希望は……成つた!!! そうシユバルツ隊長が……!!!」

「……知らんな。死ね……連邦兵」

銃を押し付けてくる。ああ。人生は儚いものなんだな。

しかし、その兵士の後ろに影がさす。

そして、その影は全力の振りかぶり後、前のジオン兵を引っ叩いた。

「いつてえ!!! な、何するんだよクロノード君!!!」

「…馬鹿かお前は。【希望は成った】って言ったんだろ。こいつがシュバルツにとつて自分以上に助けて欲しかった奴なんだろ」

「えー? こんな子供をー?」

「お前も子供だろ…」

「そんな事は無いさ。ほら! 身長だって160cmあるし!! どうだ! クロノード君より偉いしね!! エッヘン!!!」

そんな光景を見て、ただ僕は呆気にと取られていたが、その後、声を上げて笑ってしまった。

「な、なんだよ!! なんかおかしいか!？」

「い、いえ…。特には…」

「さて…驚かせてすまないな。さて、ようこそ第30特別遊撃隊へ!」

「…えつと…」

「突然だっただろうが、まあとりあえず話はテントの中で聞こう。さあ、行こう」

そう言つて二人は降りていった。

僕はそれに続いて機体から降りる。

そして、僕は彼らから隊長が彼らに言つた言葉を知つた。

聞くところによると、隊長は、本当に信頼できて、弟のような存在の僕を、あの状況になると分かつたうえで助けて欲しいと頭を下げたそうだ。

「…隊長…」

「お前にとつては辛い経験だつただろう」

「…はい…」

「でもな、こいつをバネに生きてかならなきやいけないときがある」

「くっ…!!」

こんなに良くしてくれる隊長を自分が見捨てたという事が余計に自分を絶望させる。

「…わるい、クロノードくん。後は任せたわ」

そう言つてカカサと呼ばれる人物は部屋を出て行つた。

「すまんな、あいつはこういうのは苦手なんだ。さて、ここでの役割なんだが…」

「あ、はい…」

「普通に生活すればいい。そんだけだな」

「え……？」

「正直、面倒な事をするつもりも無いからな、あとは最低限のマナーだけ守るようにな。まあ、お前にとっては当然の事だろうが……」

正直呆気に取られた。ジオンが管轄の部隊だから、結構マナーもしつかりしていると思ったが……。

「あれだ、ここはな、ジオンで捨てられた奴や、連邦のはぐれ者達が集まる場所なんだ。少なからず連邦の奴らもいる。だから気にすんな」

と、僕の心を見透かすように彼は言った。

「……あ……はい……」

「いいか？グレイ。人間には割り切らないといけないときがある」

「……」

「お前とシユバルツに何があったか俺は知らない。けれど、あいつはお前に全て託した。だろ？」

「そう……なんででしょうか……」

「シユバルツが見たかった世界ってのはな、連邦とジオン分け隔てなく仲良くしてる世界なんだとき」

「……僕も……そう思います」

「そうかい。きつと、知らないうちにお前にもあいつから遺伝していたんだろうな……」
「え……？」

「ふつ……なんでもないさ。さて、後は自由だ。好きに動け！」
そう言つて彼は手を打つた。

それから……1ヶ月くらい後の話かな……。僕は、彼とであつた。彼にとってはほんのひと時の出会いだったかもしれない。

でも、今でも僕の心には強く……根強く残っている出会い。

彼に、僕の全てを託した。彼にとって負担になるのは分かつてたけれど、それも運命なんだつて思う。

【ムゲン・クロスフォード】。彼は、とても純粋で……。優しかった。だからこそ話した。

「……ねえムゲン」

「何ですか？」

「ムゲンには、夢がありますか……？」

「……夢……？」

「夢でも、願いでもいいんです。何か……そんな感じのもの」

あやふやな表現だった。けれど、それでも彼には伝わった気がした。そして、僕は話

をつないだ。

「…僕には夢があります…」

「どんな…?」

「30特別遊撃部隊の皆のように、ジオンも連邦も関係なく皆が幸せになつて欲しい…そんな夢があるんです」

「…」

「きつと…皆まだ気づいてないだけです。ジオンだからとか、連邦だからつて言うのに縛られて、単純なことに目が行かないだけなんです」

「いつか…連邦もジオンも分け隔てなく手をつなぎあう時が来れば…その時こそが、本当の幸せなんだつて思います」

「それはきつと、長くて遠い道のりかもしれない。けど、それでもそんな世界が来てくれることを、僕は夢見てるんです」

僕は、いつの間にか隊長と同じ考えに生きて、夢を語っていた。でも、いいんだ。だつてその世界が僕にとつても、隊長にとつても幸せなんだから。

「…すごいね…グレイは」

「え…?」

「立派な夢があつて。俺なんか、夢なんか思いつかないよ…」

そのときの彼は、自分を嫌うような顔をしてた。いつもの僕みたいな顔…。

「でも…願いはある…」

「何ですか？」

「…記憶を取り戻したい…かな…」

「記憶…ですか…」

「うん。たとえ、どんなつらい過去でも、思い出さないほうが楽な過去だとしても…俺は…グレイのように夢を持ちたいんだ…だから…思い出したい。自分自身を…」

「…大丈夫ですよ。ムゲンなら…きつと思いいせませす」

「何で分かるんだい？」

「…なんとなく…かな…。でも、頭の中で考えたら、そんな姿が目には浮かぶんだ。ムゲンが笑っている姿が」

表現なんて出来ない。けれど、前々からあったニュータイプってやつ力なのかもしれない。ぼんやりだけどもムゲンが笑ってる姿が脳内に浮かぶ。

「…そうか…ありがとう」

「いえいえ。それにさ、夢が無いなら僕と一緒に夢を見ればいいんだよ」

「一緒に…夢…？」

「そうだよ、一緒に叶えよう。ジオンも連邦も分け隔てなく暮らせる幸せな日々を…」

僕はそう言つて手を差し伸べた。すると、彼は緊張しながら手を握り返してくれた。
「…うん。そうだね…きつと、叶えよう…」

そんな小さな出会いだったかもしれない。そんな会話しかなかったかもしれない。
それでも、僕はそれでも願つた。

だから…ムゲンを一人に出来なかった…!

「…はああああ!!」

僕はジムからビームサーベルを引き抜き、黒いザクに切りかかる。

「おっと…!グレイ…つて言つたっけか…。そんな操縦で…!!」

「うわああああ!!」

そんな言葉と共に軽くあしらわれ、僕の機体は吹き飛ばされてしまう。

そして、耐えられないほどの頭痛が運悪く、僕はしばらく気絶してしまった。

…目が覚めたとき、ムゲンのガンダムと見たことの無い蒼い機体がしのぎを削りあつて
ている。

ムゲンのほうが圧されていた。そして脳裏によぎるムゲンが撃ち落とされる描写…。
僕はただ無心で機体を動かした。

「ムゲエエエエン!!!」

ただ必死に叫んだ。彼に届くように…。

「何!?!」

「お前の相手は…この僕だ!!!」

ビームサーベルを引き抜き、奴にぶつかる。

「グレイ!!!」

「いいんだ!!早く逃げるんだ!!」

「何を…!」

「ムゲン!僕は君と一緒に夢が見れたこと、とつても嬉しかった!!」

「だから…その夢のために、ムゲンはやらせない!!!」

僕はビームサーベルを投げ、蒼い機体に組み付いた。

「やめろ!!!グレイ!!!」

「君だけでも…ぐっ…!!生きるんだ!!!」

「離れろ!!クソがあああ!!!」

暴れるシゼルの機体を必死にグレイが抑える。

「もう少しだ!黙ってろ!!!」

「ムゲン!僕は人工ニュータイプの研究に成功したんだ!僕は…殺しのためにニュータ

イプになったわけじゃない!」

こんなこと、僕は願ってなかった。

「…グレイ…」

彼の声はとても優しくして…。

「でもね…それでも人を殺さなきゃ…駄目みたいだ…」

それでも……。

「…そんなこと無い!!! グレイ…お前は…! 戦う必要なんて…!!」

本当はそうでありたかった…。

「ううん…ムゲン…君を救うためには…戦わなきゃいけないんだ…だから…!」

それでも…!

僕はムゲンを守る…! この命を…賭けて…!!

「やめろ!!!」

「とめないでくれ!!! 僕は…いや…これが僕の覚悟だ!!! ムゲン…僕の夢は…託したよ!!!」

僕はくい気味に彼に叫んだ。そう、夢は全て託した。あの時、夢を語ったとき…きつ

と彼は託された。

だから…せめて【歯車】となり、彼を救う運命を造りたい…!!!

「何をする気だ!!! 離れる!! くそつたれがあああ!!!」

「待たせたな…!! お前は僕と地獄逝きだああああ!!!」

僕は少しずつジムのスラストターの出力を上げていく。彼を…彼と夢を守るために…

!!!

「あ…ああ…待ってくれ…グレイ…!」

「後は…任せ…たよ…ムゲン…」

直後、ジムが爆発する。そして、視界が真っ白に輝いた。

ムゲンは…きつとこの先も辛く険しい道を歩むだろう…。

それでも僕が出来るのはただ見続けるだけ…。

それならば、僕は僕にしかできない事を全うする。

僕は、楽しかった。今まで見てきた世界も…。

だからこそ…。

こんな小さな世界を僕は、遠くからでも

「見守り続けるよ…」

外
伝
完

外伝：Episode of Kakasa

「……ふむ……」

ジオンが新たに投入されるであろう機体の資料に俺は目を通していた。

「……MS—XXXI……ムゲンギア……ね」

「なかなか面白い機体だな……。だが、あまりにも危険すぎるな」

俺は資料を机に軽く投げた。もう見る必要すら感じなかったからな。

コーヒーを一気に飲み干した後、俺は椅子に深く腰掛けた。

「……もうすぐ……戦いは終わる……」

他の奴らには分からないだろうが、俺には分かった。

この戦いは……ジオンの負けで終わる。

「……ふう……」

のんびりしていると、突然扉が開く。俺は、彼だと分かった上で、入る前から声をかけた。

「お、クロノード君」

「………なんでお前はいつも入る前に言い当てるんだよ……」

クロノード君は目を細める。

「…君とどれほどの時を過ごしてきたか分かるかね？嫌でもわかるのだよ」

「ははは…。それも…そうだな」

クロノード君は椅子に腰掛け、何かを思い出すように呟いた。

「懐かしいな…今から7ヶ月前か…」

「何の話だね？クロノード君よ」

「…さすがに忘れたとは言わせないぞ？カカサ…」

「……何だっけ？」

「お、おいおい…」

流石のクロノード君も呆れてしまう。

「…なんてな。冗談の冗談の冗談だよ。まったくクロノード君はこんなことも分からな

いのかね」

「……」

クロノード君がムツとしている。この顔を見るのも何度目だっただろうか…。たしか、最初の出会いもこんな感じだったか…。

あれは確か、7ヶ月前の事。つまらない事しか言わなくて、何も知らない男を一人の

兵士が気に入っちゃまった。そんなくだらない話。

「……」

そいつはサイド2から一番最初に逃げ出した。他人のことも大切ではあったが、自分の事が一番と踏んだからだ。

全身黒い服、黒いフードを被って、そいつは小さな場末の喫茶店で静かにコーヒーを飲んでいた。

そこに突然扉を蹴り開け兵士が現れる。あいつは確か、隊長の補佐をしていただろうか。

「おい！親父!!ビールだ!!ビール寄越せい!!!」

隊長らしき人物が大声で叫ぶ。なんてつまらん奴だろう…。人が居ることを考えて言っているのだろうか。…その男は思った。

「……申し訳ございません。ここではビールは……」

店のマスターが頭を下げながら言う。その言葉にムカついたのか、隊長らしき奴は声を荒げて言う。

「ないだど…ふざけるんじゃないやねえ!!こっちは軍人だぞ!!とつとと出しやがれ!!」

「…そ、そんな無茶なあ…!!」

さすがのマスターも驚いてしまう。後ろの部下であろう奴らは何一つ言わずに、ただ

立っているだけだった。

「早くださねえと…撃ち殺す…!!」

とうとう痺れを切らして、拳銃を構え始めるしまい…。男は既に怒りが頂点に達しようとしていた。これだけの傍若無人な行いを見て、何も思わないわけが無かった。

「…あ、あわわ…」

マスターは尻餅をついて慌ててしまう。当然だろう、自分へ銃口が向けられているのだから。

見ていられなくなった男がコーヒーを飲み干した後口を開いた。

「…マスター、勘定」

その言葉でマスターは我に返り、男に金額を言う。

「え…えつと、2ドルになります」

「……これで…足りるか?」

男はおもむろに自分のポケットから小さな小銭を差し出す。

「ああ。はい。問題ありません。ありがとうございました…つぐ…!?!」

彼の言葉を、銃声が遮り、気がつけば、銃弾は彼を貫いていた。

「………!!!」

あの時、どうして彼らを止められなかったのだろうか…。今でも気持ちが悪くなるこ

とだった。俺は何一つ知らなかった。生きること必死…。

そんな言葉で知ろうしなかった。だから、あんな悲劇を生んだ。

その後男がどうなったか？ どうなったと思う…？ ふっ…どうなっただろうなあ…。

「……!!」

兵士を盗み見ると、満足げに笑って、マスターのほうへ歩いていく。

「お前らー金をあされ!!全部持つてくんだ!!」

兵士達は黙って歩いていく。男とは反対に。

ただ、隊長補佐の彼だけは、何故か手を強く握りその場から動かなかった。

男は不思議に思った。こいつはきつと、そんなつまらない強情のせいで隊長らしき奴に撃たれて人生を終えるのだろうか。

だが、不思議と彼の人生を終わらせたくない気持ちがどうしてか、その男に宿っていた。

「おい！ ジョン!!! なんで命令にしたがわねえんだ？ 聞こえただろう？ 金をあさるんだよ!!!」

隊長の言葉を見無視し、彼は口を開く。

「……できません……」

「何い……?」

「……民間人を守るのが軍人の役目だ……! それなのに……なぜ民間人を殺してまでこんなことをするんです……!!!」

彼は静かに、しかし怒りを表しながら言った。

それによつて火がついた隊長は叫ぶ。

「てめえ……上官の命令が従えねえのか……? なんなら民間人なんていくらでも殺してやるよ!! そこにいる黒い奴もな!!!」

「……」

銃口が男に向けられる。

「……」

「へっ!! 死ねえ!!!」

銃の引き金を引く。響きわたる銃声。

補佐の男は目をつぶる。

「……?!」

見ると、男はフードを取り、隊長を睨み付けているのだ。銃弾は……? よく見ると、男の頬を掠めて、扉に食い込んでいた。

「……お前……！何者だ……?!」

あの状況で弾丸を避ける人間を、隊長も、そのほかそこに居る人間は一度も見たことが無かった。

そして、男がついに言葉を放つ。

「……黙れ……クズ」

「何……?!」

「部下を何に使ってんだ。そこで突っ立てる馬鹿な兵士の言うとお前だ！お前ら本当に軍人なのか？」

「ふざけやがって……！おい！お前ら！ジョンごとこいつを殺せ!!!」

「……部下ばつかに頼りやがって……！お前はただのクズだな……!!!」

そう言つて男は驚くべき速さで隊長の懐へ潜り込み、全力の一撃を叩き込んだ。

「ぐっふあ……!!!……ぐ……!!てめえ……」

そう言いながらも膝を突いてしまう。

「……あーすまんね。俺加減を知らないんだよねー。いつも喧嘩ばつかやってたからな」

「……ぐっ…………てめえ……!!!」

すると、後ろで立っていた補佐が隊長へ向かって歩いていく。

そして……銃を構えた。

「…な、なんのつもりだ…!」

「……もう…あなたには従えません。あなたは…最低なクズだ!!」

「なんだと…!?おい!お前ら!!何とかしろ!!」

そう言つて従うものが誰もいなかったのには、流石の男も驚いた。そして、男は言つた。

「見ろよ。こいつら、お前の下に居るのは嫌だつてさ。これだったら俺が軍人になったほうがマシだな」

「…て、てめえ!!!」

「……うるせえよ。だまり…」

男に殴りかかろうとする瞬間。銃声が響き渡り、隊長は地面に倒れる。それを見て、兵士達が一斉に逃げていく。

「……う、撃つちまった…」

隣を見ると、顔を青ざめさせて、震えている補佐の男が居た。

「……」

彼もこちらを見てくる。男は、フードが外れていたのを忘れながら彼を見た。

「…何だよ…」

先に口を開いたのは男からだつた。

「……さつき言つたよな……あんた」

「……な、何を……？」

「……軍人になつたほうがマシつて」

「そ、それはあいつよりはつて事で……なりたいわけじゃあないぞ？」

「いいや……もう必要なんだ。この埋め合わせを」

男は息を飲む。

「だから、なつちやくれないか？隊長とは言わない。俺の……俺の補佐をしてくれ!!」

「え……？」

「俺は……人から信頼されはする。けど、俺は強くなんか無いし、頭も良くない……だから……あんたみたいな奴が欲しい!」

男は流石に戸惑つた。あまりにも不思議なことを言う人が居たから。

男にとつては全てが不思議だつた。他人とかかわること、笑うこと、感情というものが、これほど自分にあつたことを。

「……」

だからこそ。一瞬でもこの青年と心が通つた。そんな気がしたからこそ。

「……名前は……？」

「え……？」

「お前の名前は……？」

「……ジョン・クライガーだ」

「……いい名……だな」

「あんたは……？」

「俺は……ケン・ナカムラ……変な名前だろう？」

と、男は笑ってみせた。

「……気にするな。俺も自分の名前は気に入ってない」

ふと思ひ立った男は、地面に落ちている拳銃を拾い、弾薬を投げ捨て、ジョンに向ける。

「どういうつもりだ……？」

とつさに銃を構える。しかし、男は笑って言った。

「名前が嫌いなんだろう？なら……こうすれば良いじゃないか！」

そういつて、彼に引き金を引いた。

銃声を上げて、彼は目をつぶる。しかし、銃弾はどこにもない。

「……空砲……？」

「……せーかい！これでお前、ジョン・クライガーは死んだ。これで、自分の名前……つけられ

ば良いじゃないか」

「……なら……お前も……」

続けて彼は弾薬を地面に落とし、男へ向けて銃を放つ。

「……これで……俺達二人は名無しになった」

「……さあ。自己紹介からだ」

「ああ……」

「俺の名前はクロノード・グレイス。よろしくな！」

「……俺は……カカサ・キヤモイだ……よろしく。クロノード君よ」

二人は強く握手をした。

「……そういえばそんな事もあったなあ……」

二人でしみじみと昔の話をしている。まあ……今回はふざけるのはよしておこうか。

「……それで……なんだったけね？クロノード君よ」

「ん？……そのあとは……」

「それで、カカサ。お前はこれからどうするんだ？」

「……分からない。……でも俺は自由きままにいきれたらそれでいいんだよねー。正直

さあ。世間では戦争がどうか言ってるけど、なんかくだらないよな」

「…く、くだらないか…珍しい奴も居るんだな。俺と同じ考えを持つてる奴…」

「え…? ええええええええ?!」

割と大きく驚く俺。こういうノリのほうが、楽しい気がしたからな。

「お、驚きすぎじゃないのか…?」

「だって、クロノード君と同じ考えなんだろう? じゃあお風呂入る時間も被るんじゃ…」

「そういうことを言ってるんじゃない!! 俺は戦争が…」

「なあに、冗談の冗談の冗談さね。こんなことも分からないなんて近頃の若者は…」

「いやいや……」

流石のクロノード君も少し引き気味だ。……こういう顔を見るためにやってるんだけどね。

「…本当のこと言うなら、まだ考えてない。俺さ…サイド2から逃げてきたんだ」

「サイド2って…住民を催眠ガスで眠らせて、コロニーを使ったって場所だろ?」

「…士官学校ではそう教えられたんだね。でも実際はそうじゃないんだ」

ほうっと息を吐いた後、俺は口を開く。

「……あの場所ではら撒かれたガスはな…、神経ガス。…人が手に手を下すにしてはひどすぎる手段だった」

「あれを多く吸えば、あつという間に死に至る。それを、ジオン公国は、コロニーの自治・独立のためにコロニーとコロニーの住民を虐殺した」

「……」

クロノード君は何もいえなかった。当然だ、今までの教えは全て嘘で、奴らがやっている事を考えれば。

「皮肉な話だよなあ。そんな事があつて、俺は故郷を離れた。そういえば、生きている奴もいたんだ。少しだけだけどな」

「そう…なのか」

「ああ。一人は顔見知りっちゃあ見知った顔の奴。まあこつちが覚えててもあつちは覚えてないだろうけど。そいつは連邦の研究員に連れて行かれたんだよ」

「……そいつがその後どうなったかなんて俺は知らん」

「だが…生きている気がすんだよネ。んで、いつか会える気もするんだ」

「……会えると…いいな」

「…さあね？良いとも思わない。どつちでもいいんだ」

「…さて…俺は行くかあ…！」

俺が喫茶店から出ようとすると、クロノードが叫ぶ。

「待てよ!!」

「…なんだね? クロノード君よ」

「どこに行くんだ? 行くにしても早く帰って来いよ?」

その一言だった。今まで一度も言われた事のない言葉だった。

「……………」

「お前の帰り、俺は待つてるからな!」

俺はその言葉を背に、店を後にした。

「そういえば、あの後お前どこに行つてたんだ?」

「ん? まあちよつとした散歩ついでに人助け…かな。どうよ? クロノード君より偉いんだぞ? エッヘン!」

「…………自分で言つてどうするんだ…」

町に出ると、もう日が落ちようとしている。

どこかへ行つて飯でも食おう。

「…お…」

周りを見ると、服も身なりもボロボロな少年がいた。

無視しようとも思つた。だが…。

「……」

俺は周りを見渡す。一軒、小さなパン屋があった。

パン屋へ向けて足を進ませる。

「いらつしやい」

店に入ると、老婆の声が入ってきた。

俺はカウンター前まで来ると、ポケットから金を出して、こう言った。

「……ばあちゃん。この店の一番うまいパン、売ってくれ。あ、2本な！あとコーヒーマもらつておこうかな」

すると老婆はにっこり微笑んで言った。

「あいよお……。ちよつと待つておいてね」

そう言つて、手際よくパンを紙袋の中へ入れてくれる。

俺は店の中を見渡した後、言う。

「……ここ、いい店だなあ、ばあちゃん」

「そうかい？夫の残した店だからねえ……」

「……ああ。店中掃除が行き届いてる。んでもつて、とつても優しい気持ちになる」

「そうかいそうかい……うれしいねえ……。はい、おまちどおさま」

そう言つて、紙袋を俺に渡した。

「御代は一人分で良いよ」

「えっ……？」

「あそこの子にあげるんだらう？」

「……な、なんでそれを……」

「顔を見れば分かるさあ……。この町はね、貧しい暮らししか出来ないけれど、それでも自給自足でできる町なのさ」

「……」

「家族を戦争で失った子は多くてね。でも、なんとか必死に生きているのさ」

「ばあちゃんは、子供、引き取らないの？」

「……あたしやあ、もう歳だからね。さすがに引き取っても育てていける気がしないのさ」
老人だからこそ、悩んでしまう所なのだろう。

「……邪魔したね。じゃあまた来るよ」

そう言つて店を後にした。

店を出て、しょんぼりと座っている少年の前に歩いていく。

そして、少年の前へ立って、笑顔で言った。

「隣、いいかい？」

少年は、ただ黙って頷いた。

俺は隣に座り、紙袋を開ける。中からとてもおいしいそうなパンの香りがした。紙袋に手を居れ、パンを取り出す。そして、少年へ向ける。

「……………」

「食えよ。腹…減ってるだろう?」

「……………」

目を合わせず、ただ他を見ながら受け取る。

それを横目に、俺もパンを取り出し、一口かじる。

「う、うめえ!!!こんなに優しい気持ちになれるもんなんだなあ!」

彼に聞こえるように、なるべく大きくリアクションを取る。

「……………」

「だろ?どんなまずいもんでも、一人より二人で食ったほうがうまいんだぜ?」

「……………」

「…気のせいだよ。俺の気まぐれって奴だ」

「ふーん…」

少年は美味しそうにパンをほおぼる。それを見て、俺は何故か幸せな気分になった。

「……………」

「お前は、行く所、あるのか?」

「…ないよ…むぐむぐ…ボクは、ずっとここに居る。むぐむぐ…」

食べながら言葉を返す少年。

「……寂しくないのか?」

「…寂しくない。慣れてるから」

この少年も戦争で親をなくしたのだろう。どうして戦いは悲しみしか産まないのだろうか。

「…そつか。さて…そろそろ行くか。あ、この残ったパンとコーヒー飲んで良いからな。じゃあ。またな」

そう言つて立ち去ろうとしたとき、少年が言った。

「お兄ちゃん。ありがとう。それと……ポケットから紙出てるよ?」

ポケットを探ると、小さな紙切れを手にする。

「おう。サンキューな。じゃあ!」

紙を見ると、クロノードの居る場所が書いてある。あいつ……。

「……行つて…みるか」

既に暗くなつた夜道を俺は歩き出した。

そこについた頃にはもう既に夜は更けていた。そこは、兵士の寝る場所のテントに、

奥で焚き火をする場所がある。

しかし、火は消えてなくて、その付近からにぎやかな声が聞こえてくる。

「……」

俺は火の元へ向かっていく。

だんだんと楽しそうな声が近づいてくる。

「それでさー！そいつがこう言ったんだよー！……黙れ……クズ」って！ありやあカツコよかったなあ。……と噂をすれば……」

俺に気づいたクロノードは手招きをする。

「よお！待ってたぜ！早く来いよ！皆お前の話に興味津々なんだ！」

「……あ、ああ……」

戸惑いながらも、俺はその輪に入って話をすることにした。

そして、いろんな話を聞いた。

軍に入った理由。夢や願い。

そいつらの話を聞いているうちに、俺はいつの間にか、ここを離れるのが嫌になっていった。

他のやつが眠りに入った後、俺とクロノードはまだ話をしていた。

「……クロノード君よ」

「…なんだ？ここが気に入ったか？」

「…ああ。とつても気に入ったともき。俺も…軍人になろうと思う」

「へえ。で？入りたい部隊とか、決まってるのか？」

「ああ」

「ここか？」

「…それ以外あると思うか？」

「ま、そりゃあそうか」

「さつき言ったじゃないか。俺の補佐をしてくれって」

「…そういえばそう言ったな」

「だから、お前の補佐をする。そして、お前以外の命令を聞くつもりは無い」

「お、おいおい…まあいいか。ああ。それでいい」

「…よろしくな。隊長さんよ」

「ああ。よろしくな。カカサ」

俺達は、燃える焚き火の前でそんな話をした。

「懐かしいな…ザク・インヴィジブル…」

「ん？お前の機体…つと…もう居ないんだな」

「……ああ…。すつごく気に入っていただけだな…」

「まああれとは長い付き合いだったろうしな」

それだけではない。本当に色んなことがこもった機体だったのだ。

格納庫へ呼ばれた俺は、なるべく遅く向かう。

「…おい、カカサ…何をしてたんだ…？」

「んー？ちよつとトイレさね。それで…？俺に何のようかね」

「ほら、お前のが配備されたんだよ」

「んー？おお。こいつあザクってやつか。実物は初めてだな」

機体を見ると、真っ白なカラーが施されたザクが佇んでいる。

「…なあクロノード君よ」

「なんだ？」

「俺、これ嫌だわ」

「えっ!?せ、せつかく配備されたんだぞ?!」

「そうじゃない…。色がヤダ!!」

「は、はあ!？」

「俺はね!?こう！まっくろーい奴がよかったんだ!!そう！クロノード君の機体みたいに

!!!

「……」

流石のクロノードも呆れてしまっている。

「い、いやだがな……」

「俺あこの機体にはのらん!!!」

俺が意地を張り続けていると、ついに痺れを切らしたクロノードが言った。

「わーっつたよ。俺の機体使えよ。その代わり、こいつは俺が使う」

「ひよ?!いいののか?!」

「ああ。だが、貸すだけだからな!!元は俺の機体なんだ!」

「分かった!こいつは俺とクロノード君の友情の機体なんだな!」

「お、おう……」

黒いザクを見上げながら、俺は目を輝かせていた。

「そーいや、一時期お前、連邦に潜ったって言ったけど、どこ行ってたんだ?」

「ん?ああ、あれはね、ムゲン達の部隊を見てきたんだ」

「あいつの?」

「うむ。とは言っても、ムゲンと知り合う前だからな。あんときの可愛いお嬢さん……元

気でやってるかな」

「ダレだ…？」

「あー。ムゲンの所の部隊に、あいつと同じ年の子が居るんだよ。元気にしてるかなーって」

「カカサでも、可愛いとか言うんだな」

その言葉に、少しだけムツとする。

「…クロノード君は俺をなんだと思ってるの…」

「そうだな…。宇宙人か？」

「ワレワレハ、ウチユウジンダ」

「ふっ…まあいいさ。続けろよ」

「ソウダナ…タシカアノトキハ…」

「もうやめんか」

そう言っつて頭をひっぱたかれた。

軍に入ったあの日から4ヶ月後くらいだろうか。一度連邦のスパイとして、入ったことがある。

「…つと、潜入完了…。さて、整備兵として、スパイに入ったんだ。なんかいい情報でも

探すかなつと」

「〜♪」

鼻歌交じりに、機械を整備する少女。不思議そうに見つめていると、彼女は気づいて慌ててこちらへよって来る。

「あ…す、すいません。うるさかったですか…？」

「別に？ 気になったから見てただけだけど？」

「あ…そうですか…すいません…」

「あんたは名前なんて言うんだ？」

「わ、私ですか…？ えつと…リナ・ハートライト技術曹長です！」

丁寧に敬礼までして俺に自己紹介してくれる。

「へー。俺はモシホイ・ガクダイモイ。よろしく。りなっち！」

「り、りなっち…？」

あまりにも砕けたあだ名をつけたせいですがの彼女を驚いてしまう。

「んじゃあ、俺は用事あるからサ。まったねー！ りなっち！」

「あ…は、はい…」

戸惑う彼女を通り過ぎて、俺は資料室へと向かった。

「…なるほど…こいつとこいつ…あとは…ん？」

一つ気になる資料があった。シゼル・クラインと呼ばれる男の資料だった。「……こいつも持ってたか」

あらかたの資料をコピーし、俺はこの部隊が戦闘中のうちに消えた。

「まあそんな感じだったなあ」

「……ほう……お前は他の部隊でも随分砕けているんだな」

「そうさせたのはクロノード君じゃあないのかね？」

「ま、そうか……」

「それよりクロノード君。この後の攻防戦。俺の考えを聞いてくれないか」「ん？ どうした？」

「部下を傷つけることになるかもしれないが、それでも聞いてくれるか？」

少し考えた後、クロノードは言った。

「……流石に親友のお前を無視できるほど冷酷な人間じゃあないんだよね。いいぜ。なんだ？」

俺は机にある資料を広げ、クロノードに説明を始める。

「今回の作戦、ムゲンたちの部隊と俺達の部隊は運よくXフィールドと被ってる。そして、このでっかい奴も同じフィールドだ」

「……」

「こいつは、ジオン連邦関係なく、倒さなきゃあならん奴だと俺は思ってる」

「そんで? どうすんだ?」

「そこで…俺達二人でこの化け物を止める。ムゲンたちが加勢してくればなお良いんだが、期待はしないでおう」

「…奴を潰すまでの間、味方ジオン兵をXフィールドに入れないように裏切りをしかける」

「……なるほど…だから無理強いしなかったわけか」

「あいにく、この部隊で機体の脚が速いのは俺とクロノード君だけだからね」

「…よし、分かった。後は俺に任せておけよ!!」

「頼んだ…」

こんな時、いつも思うことがあった。あんな馬鹿で、何も知らなかった彼が、ここまで成長した。それが少しだけ、嬉しく感じた。

「分からないのか!!!」

俺は心の奥底から叫んだ。これは待たせている仲間のため、そして、クロノードのため、に叫んだことだった。

「……!!」

「俺だつて…俺だつて奴を殺したい!!!だが…それよりも大切なものがあるだろう!!!……俺達の出番は…終わったのさ」

「……カカサ……。分かった…。ムゲン…必ずけりを着けろ。それで…戦争終わったら…うまい飯食おうぜ…!家族全員で!!!」

「…ああ…!また会おう!!!」

シゼルとすれ違い、俺達は家族の元へと急ぐ。

「くそっ!!シゼル…!!!」

イラつくクロノードを静めるため、口を開く。

「落ち着けよ。別にまだ仲間は全滅と決まったわけじゃない。最後まで仲間を信じろつて、ムゲン言つてただろう?」

そんなこと一言も言つてないけどな。ムゲン、悪く思うな。

「…そう…だな…急ごう!こんな戦いもうやめさせるためにも!」

「隊長!カカサさん!!」

「皆!待たせたな!全員撤退だ!!!」

「どういふことですか?!」

「……この戦いはもう終わる。そうクロノードが踏んだんだよ。だから、帰るんだ」

「……はい！」

そう言つて、クロノードが叫んだ。

「全機、聞け!!」

味方機が目線がクロノードに集中する。

「この戦いはもう終わる！もう一切戦う必要は無い!!部隊を失つた奴、生き残りたい奴は全員連邦ジオン関係なく俺について来い!!」

「そんで……うまい飯でも食おうぜ!!」

こんな時に思つてしまうのは変なのだろうか。あんなに小さくしよぼくっていた兵士が、今では人を率いるまで強く、巨大な背中となっている。

「……強くなつてるんだなあ。……なあ……クロノードよ」

俺は、誰にも聞こえない声で呟いた。

「……さて……最後の仕事をしないと……」

そう言つて、クロノードに背を向ける。それに気づいたクロノードが言つた。

「カカサ……?!……いや……どこに行くんだ?行くにしても……早く帰つて来いよ?」

「……!」

懐かしかった。あの時言われた言葉そのままだった。

「ちよつとそこまで行つて来るさ」

「俺は…いや…家族全員で待つてゐるからな！早く来ないと焼き鳥抜きだぜ？」

「ふっ…。なるべく早く帰る！」

俺はゲルググのブースターを起動させ、最後の仕事へ向かう。

「…見えてきた」

俺は、小さな隕石の後ろに隠れ、機体から降り、それに向かう。

「……」

格納庫に入ると、忙しそうな整備兵と、両手で何かを祈るかのような少女がいた。

「……ムゲン……！」

「お嬢さん」

彼女はこちらを見て構える。

「いつの間に……！って……！」

「しっ！何もしない。話があるだけだ」

あくまで危害を加えるつもりは無い。最後の仕事だからな。

「な、なんですか……？」

「ムゲンのところまで行つてやれよ」

「え……？」

「あいつはな、家族を守れって言ったんだ。お前の家族はお前で守れってな」

「……でも……私は……戦えない……」

「違うよ……。俺も女性に引き金引かせる勇氣はない。ただ……迎えに行つてやればいいんだ」

「……迎え……？」

「ああ。誰だつてするだろう？お母さんが子供を迎えに行くように。あんたは笑顔でムゲンに笑つておかえりつて迎えに行けばいいんだよ」

「……家族……でももんね。はい！」

「……んじゃ。またね。りなっち！」

「また……会いましょうね。モシホイさん」

俺は彼女と別れ、機体に戻む。

「さて……帰るか。家に……。家族に会いに」

それから、数分後、俺は興味深いものを見た。

機体が爆発する中、緑色の光を見た。

その光の暖かさは、こちらまで伝わってきた。

「……あつたけえな……」

俺は胸を押さえ眩いた。

あの光が人間の心なのだろうか。そんなことは分からない。
わからなくていい。

俺には、俺の道があつて、光がある。

だから、せめて、進むにしても、寄り道とか沢山できる。そんな自由気ままな人生を。
「……歩めたらいいなあ」

外伝 完

外伝：Episode of Kuronodo

一年戦争と呼ばれる戦争が終わって数日後。俺達は再び地球に降り、地獄のような資料を片付けていた。

前回の寝返りについてのことをカカサがうまいこと言つて、こいつを片付ければ免除という事になったわけだが…。

「…つたく…多いんだよ…これを5日以内だあ…!？」

カカサもどこにもいないし、こういうときだけうまいこと言つて逃げるんだよなあ…。

今度会つたら焼き鳥はむこうのおごりだな…。

コーヒーをもち、資料が大量に詰まったパッドを持ち、テントを出る。

「あ、隊長！お疲れ様です！」

「おう。お疲れさん」

数人の兵士とすれ違う。たぶん、見張り番だろう。

こここの部隊の人数も前の戦争で随分と亡くなつてしまつた…。

外に出ると、今夜はとても月が綺麗な夜だった。

俺は愛機であるゲルググのコックピットを開き、備え付けの椅子に腰掛け、月を見上げ物思いにふけることにした。

「…そうだな…、あれから随分と経つ…ここの場所も随分変わってしまったな…」
思い出したくないというわけではないが、思い出すとあまりいい気はしない。

俺は幼い頃の全てを研究所で過ごし、戦闘兵器として改良された人間だった。

しかし、何故か記憶の調整だけはされなかつたため、普通の人間として生活する事はできた。

が、まあ脳はある程度改良されたからか、時々言いたいことを忘れてりする。そのたびにカカサに弄られるのともはや定番になっているんだよなあ…。

まあ、そんな日常を送れるようになったのも、カカサのおかげではあるんだよな。

「俺は…あなたの命令には従えません…」

そこからだったな。カカサの瞳が強く宿つたのは。

そして、とんとん拍子で俺とカカサは今の名前になり、第30特別遊撃隊を作った。

それからか…、俺達の周りには気づけば沢山の人間が集まってきて、とても賑やかになった。

子供も来た、女性も。

全て受け入れた。カカサが願っていたからな。

俺も同じ想いだった。

だからこそ、俺はこの部隊を、奴と共に作り上げた。

「…正直…昔の記憶はほとんど無い。ただ戦闘の練習だのなんだのをやらされた記憶しかない」

思い返してみると、随分とひどかったと今では思う。

「はあ…はあ…!!」

覚えているのは10歳くらいのころか…。

「ダメじゃないか！これくらいで動けなくなつては…」

「…も、もう…無理…」

「冗談はよせ。たった12時間だぞ？これで音を上げては…。どうやら調整がして欲しいようだね」

あの時は、抵抗する事なんかできなかつた。何せ随分と疲れていたし、加えて調整と

か言いながら体の自由を奪って激痛が来る薬を打たれるわでそんな気も起きなかった。よく考えれば、12時間もよく殺人のシミュレーターをし続けたものだ。普通だったら気が狂ってしまう。

たしかあれは、人を殺すことへの抵抗感を無くす…だったか。

まあ、それは感情があるおかげで随分と抑制されているほうだが…時々無性に殺したくなってしまふんだよなあ…。

そのたびに力カサと話すようにしている。だから、あいつがいる事がとても助かっているといいうのも理解はしているが…。

やはりあいつはムカつくんだよなあ…。

「クロノード君よ」

「なんだ？」

「なんでもないさね」

「……じゃあ呼ばないでくれ」

「はいはい。分かりましたよーっと」

そしてその数秒後にはまたあいつは口を開いて言う。

「クロノード君」

「なんだ……」

さつきより少し声を強く言った。

「ふっ……。今クロノード君が思っている事を当ててやろうか」

「……」

「今俺にめちやくちやムカついているだろ！どうだ！」

まるで探偵が犯人に指差すようにカカサがピシツつと俺に指を向けた。

「……正解だよ。カカサ、今お前にかなりムカついている……。今仕事してるんだよ、邪魔をするなよ……」

「じゃ、邪魔……？こ、この俺があ……?!じゃまっていわれた……」

わざとらしく悲しむカカサ。

「お、おい……」

「ジャマツテイワレタボクトツテモカナシイ。……ボクハクロノードクンノタメヲオモツテヤツタダケダシ……」

と、ブツブツ言い出す。こういうときのカカサの扱い方は意外と簡単なんだ。そうだな、たとえば……。

「わかった。カカサ、焼き鳥おごつてやるから、そんな事いつてないで話を続けるぞ」

「……!!や……きとり……?」

「ああ。今日は何本がいい？」

「えー？ そうだなあ…！ じゃあ10本…」

「却下」

「ひどっ?! というか返答はやくない?!」

「…もう慣れたぞさすがに」

こいつといってもう4ヶ月は経つのだろうか、流石にこのやり取りが毎日のように続けば、当然だろう。

でも、そんな生活が出来て、幸せだったりするんだ。

確かにあいつらといると疲れる。凄くな。本当は綺麗な夜空を見上げながら静かにしていたときもある。

だが、彼らといると、嫌な事を忘れられて、それで、楽しい…。とっても。

少し話がそれたな…、さて戻ろう。

「くっ…!! なんて…こんなこと…」

確か、大量に民間人を虐殺をするシミュレーターもやったか…。

「さあ…！ 殺せ!!」

「…くっ…!!」

俺は震えながら銃を手に持ち、民間人のようなものへ銃弾を放つ。

それをずっと繰り返す。シミュレーターだから、弾も減る事は無く、民間人も死んで新しいものが現れる。

本当に気が狂いそうだった。

時折夜な夜な泣いた事もあったな。

「うぐっ……うう……!!うあああ……!!」

耐えられないだろうな、10歳くらいのガキがそうだったら当然だろう。俺が特別だっただけさ。

数年後、俺はMSと呼ばれる機械のシミュレーターをやらされた。

ずっと……ずっとやらされたんだ。一回がだいたい32時間だったな。相当なストレスで体がおかしくなりそうだったさ。

でもそれ以上に、自分がMSで敵を殺すことが楽しくなってしまいう事に恐怖していた。

だから、俺はあの時……。

「もう……俺はこのシミュレーターをしたくない!!!」

自分に感情というものがこれほどまでに強く根付いていなければ、こんな事思う事も無かつただろう。

だが、俺には心があつた。人間と同じ感情を持つていたからこそ、これ以上人を殺すだけのシミュレーターなどやりたくは無かつた。

「貴様あ……言う事を聞け!!!」

「ふざけるなよ……こつちだつてずっと黙つていられるわけじゃない……!!!」

俺は研究員を全力で殴り飛ばす。力を入れすぎたためか、研究員は吹き飛ばされ、壁に打ち付けられた。

「が……っ……!!!」

その瞬間俺は、必死に逃げた。

だが、研究所の中でいつまでも逃げていられない。

それからしばらくして、俺は研究員に捕まり、牢屋に投げられるように入れられた。

「……くそっ!!!」

「お前の調整を怠つたな……もつときついのにしておけばよかつたか……」

そんな事を吐きながら、研究者は牢屋から出て行つた。

正直、きついとかそういうのはどうでもいい。俺は横になつて、久々に長い間眠る事ができた。

そんな感じで、当時の俺には救いなんて無かった。その研究所でのこともあって、俺の脳の一部器官が壊れちまって、あまり物事をうまく判断できなくなっていた。

結局、俺はそのまま失敗作となってお払い箱。つまり研究所を半ば強引に追い出された。

行く当ても無いから、俺はジオン公国へ兵士として志願した。

最初に困った事は、名前だったな。当時の俺には名前なんか無かった。だから自分で作ることにしたんだよな。

それで、自分でつけた最初の名前は「ジ・ヨ・ン・ク・ライ・ガ・ー」

そして、ジョン・クライガーで入隊し、それから数カ月後。あいつと…ケンと出会う事になる。

奴との出会いが、俺の物語を大きく動かす事になる…。

確か、昔はあんな性格じゃなかった。

大真面目で、沢山の感情が見て取れた。それを隠すためだったんだろうな、あのフー

ドも。

だが、カカサになってあいつはカカサになった。

人を弄るのが大好きで、うまい事人に物を伝えられない不器用さを持っているんだが、それでも助けようと必死に動く。影のようなやつだ。

確か、最初に会ったのは、廃れた街の路地裏先の小さなバーだったか……。そこであいつはコーヒーを飲んでたんだよな……。

その日は確か暑い夕方だったか……。

俺は隊長の補佐として働いて、バーに入った所だったか……。

「おい……親父!!ビールだ!!ビール寄越せ!!」

隊長が扉を蹴破って入っていく。

俺は、ただ黙って彼についていった。正直、こんな場所にビールがあるとは思えないが……。

「……申し訳ございません。ここではビールは……」

店のマスターが頭を下げた。その言葉にムカついたのか、隊長が声を荒げて言う。

「ないだど……ふざけるんじゃないやねえ!!こっちは軍人だぞ!!とつとと出しやがれ!!」

「……そ、そんな無茶なあ……!!」

流石にこっちも言葉が出ない。正直物凄いクズな隊長だったと今でも思うな。

「早くださねえと……撃ち殺す……!!」

とうとう痺れを切らして、拳銃を構え始める。まったく…軍人と言う奴は…。

「…あ、あわわ…」

マスターは尻餅をついてしまう。まあ、当然だろう。

すると、黒いフードを被った男が立ち上がり言った。

「…マスター、勘定」

その言葉でマスターは我に返り、男に金額を言う。

「え…えつと、2ドルになります」

「……これで…足りるか？」

そんなやり取りを無視し、隊長はマスターへ向けて引き金を引いた。

「ああ。はい。問題ありません。ありがとうございます…つぐ…!?」

こんなこと…あつていいのだろうか…。こんな、軍人が民間人を殺すなど…。

「……!!!」

フードの男も動揺が抑えられないようだ。

あの時、止めていれば運命を変えられていたかもしれない。だが…俺はこの道を間違ったとは思ってはいない。

確かに、民間人が死ぬ事が良いとはいえない。だが、それでも…、俺はこの運命を正しいと思っている。

理由か？まあ、色んな選択肢があっただろう。だが、結果としてそうなったなら、受け入れた方がいいかもなって。

……それに、俺とカカサが変わるきっかけにもなったわけだし。

俺は、それでいいと思ってる。

「…黙れ…クズ」

「何…?!」

「部下を何に使ってんだ。そこで突っ立てる馬鹿な兵士の言うとおりで！お前ら本当に軍人なのか？」

「ふざけやがって…！おい！お前ら！ジョンごとこいつを殺せ!!!」

「……部下ばつかに頼りやがって…！お前はただのクズだな…!!!」

そう言つて男は驚くべき速さで隊長の懐へ潜り込み、全力の一撃を叩き込んだ。

「ぐっふあ…!!!…ぐ…!!てめえ…」

そう言いながらも膝を突いてしまう。

「……あーすまんね。俺加減を知らないんだよねー。いつつも喧嘩ばつかやってたからな」

「…ぐっ……てめえ…!!!」

俺は隊長の前へ歩いていく。

そして、俺は彼に銃口を向ける。

「…な、なんのつもりだ…!」

「…:…もう…あなたには従えません。あなたは…最低なクズだ!!」

「なんだと…?!?おい! お前ら!! 何とかしろ!!」

そう言つて従うものが誰もいなかったのは、まあ当然といえば当然の結果だろう。

「見ろよ。こいつら、お前の下に居るのは嫌だつてさ。これだったら俺が軍人になつたほうがマシだな」

今思えば、あの発言は随分すごいってのが後々だからこそ分かった。

「…て、てめえ!!!」

「…うるせえよ。だまり…」

俺は、彼が殴られる所を見たくは無かった。だからこそ、俺は無心で引き金を引いた。それからはトントン拍子で話が進んでいって、俺とケン、名前を変えることになる。過去の自分を殺し、新たに歩もうとする。

クロノード…こいつは時の神クロノスの名を少し借りて、時間さえも越えられる可能性つてのを込めてみたんだよな。

俺は物語って言うものが嫌いだ。

筋書き通りに生きていくのも、そうさせるのも大嫌いだ。

だが、その心もどこかで変わろうとしている。人との関わりはそれほどまでに大きいものなんだろうか。

もちろんカカサとの出会いもそうだが、もう一人：出会うべくしてであつたかのような少年。

「ムゲン・クロスフォード」。彼は、カカサとは正反対の性格で、真っ直ぐで素直。そして真っ向からぶつかっていく。

そんな奴を見るのは2度目か……。まあ何にせよ、俺の心はそういった個性的な奴らに自然と変えられてた。

最初の出会いは、連邦のニューヤーク付近の基地を強襲する作戦のときだつたか。

こちらの数は先発隊あわせて6機だつた。

それで、向こうの面子は真っ白いデカブツとボロボロのジム。

先に先行していた先発隊は白いデカブツとジムによって全滅。正直ここまでは計算どおりだつた。

カカサの寄越した情報どおりと云つたほうが正しいか。

俺はデカブツにマシンガンを放つ。当然だが、牽制でな。

デカブツはなんとかそれを回避する。まあそうだろう。普通のMSよかデカイ凶体なんだ。回避すら辛そうだな。

デカブツが回避した先に待っていたのは俺が指示を送って待機させていたザクだった。

「待ってたぜ……！デカブツウ!!!」

余裕の表情を浮かべているのが機体からでも分かる。そして、ザクはデカブツにバズーカを放つ。

弾頭はデカブツの肩に直撃して、デカブツはそれつきり動かなくなる。たぶん、衝撃で脳震盪でも起こしたんだろう。

なら、と俺はボロボロのジムへマシンガンを放つ。

ジムは間一髪でそれを回避する。だが、あまりにも回避が雑に見えた。こいつは……新兵か。

俺はゆっくりとジムにバズーカを構える。

そして、俺は無線を連邦のパイロットへ繋いだ。

「そんな機体で俺と戦う勇氣は認めてやる、だがそいつじゃ勝てないぜ？無理に戦う必要はないんじゃないかな？」

俺はなるべく優しく言う。

すると、彼はキョトンとしながら彼は言った。

「あ、あの……どうしてそんなことを……？」

「どうして……そりゃそんな奴を倒したって面白くないだろう……？それに、連邦ジオン関係なく人間には変わらないからな、無駄に命はとらないさ」

しばらく黙って見守っていると、彼はビームサーベルを持ち直して叫んだ。

「そうだとしても、俺には基地を守る使命がある。悪いが引き下がれない!!」

俺は呆れて物も言えなかった。一つため息を吐いた後、小さく呟く。

「仕方ない……なら、やるしかないか……」

俺は少し間合いを取った後、バズーカを投げ捨て、ヒートホークを構える。

「ビームサーベル相手に遠距離じゃ、分が悪いだろう？こいつ一本で相手してやる、来い!!」

そう自分で叫ぶと、自分の身の毛が逆立つような感じが俺を襲う。

「……さあ……始めるか」

「舐めるなあああ!!」

彼は、ビームサーベルで斬りかかってくるが、俺は軽くそれを回避し、反撃としてヒートホークで切り裂こうとするが、しかしそれは、コックピットを掠めるだけで終わった。

ヒートホークの熱気でコックピットの装甲を焼き切れている。

「くっ！何故だ……！何故当たらないんだ!!」

「何故かって？それはな、お前の動きが遅すぎるんだよ!!」

こいつと戦う時、俺は俺で居られたのだろうか……。俺でさえもわからない。

その出会いを皮切りに、奴とも運命に導かれるように出会う事になる。

そして…。

「急ぐぞ……！カカサ!!!」

「……分かってるさ」

俺達はただ急いで目的地へと急ぐ。

「うわああああ!!!」

唐突に響くムゲンの声。嫌な予感がしたが、それに反応したカカサが機体のブースターを起動させ、移動する。

見えてきた巨大なMAとも呼べる機体。左右が連邦とジオンその両方が混ざったような……。そんな感じ。

俺はビームライフルを構え、奴のスカートアーマーについているビームサーベルを打

ち抜く。

サーベルは爆散し、カカサがムゲンの機体を引つ張り、一度間合いを取る。

「つたく…世話が焼けるね君は…。ムゲン・クロスフォード君よ」

カカサがムゲンをからかうように言った。

「カカサ…?!」

「クロノード君もいるぞ?」

「ずいぶんひどい有様だな…ムゲン。まあ…相手があの化け物じゃ…そいつも不利だな」

「…二人とも…ジオンなのに助けた…?」

それを聞くのかという口調でカカサが返す。

「そりゃあ、一度は同じ焼き鳥を食った仲だからな。ついでに…俺もこいつは倒しておかんといけないと思ったのさ。お前のためにも…後の奴らのためにも…残らずな!」

こんな事を言うようになったんだな。カカサも…。全てこいつと出会ってから変わったって事か…。

「そういうわけだ。もう一度共闘と行こうぜ?ムゲン」

「だが…これがバレたら…俺は良いとして、お前たちは…」

「なあに…気にしなさんな。正面の奴は俺の部下が抑えてる」

「…それって!!」

「…まあ…なんにせよ…こいつを潰す。それだけだろ?」

「……ああ……」

あいつはたった一人であのデカブツと戦っていた。

ならせめて、俺とカカサでコイツの背中を押してやらないとな…。

「分からないのか!!!」

俺は正直驚いた。彼が、ここまで感情を露わにしたのを久々に見た。

「……!!」

「俺だって…俺だって奴を殺したい!!!だが…それよりも大切なものがあるだろう!!!」

……俺達の出番は…終わったのさ」

何かを察した。そうか、俺達も物語の登場人物だったってことを…。

「……カカサ……。分かった…。ムゲン…必ずけりを着ける。それで…戦争終わったら

…うまい飯食おうぜ…!家族全員で!!!」

「…ああ…!また会おう!!!」

シゼルとすれ違い、俺達は家族の元へと急ぐ。

「くそっ!!シゼル…!!」

俺はただムカついていた。彼を倒す事が出来なかつた事。それだけだった。

「落ち着けよ。別にまだ仲間は全滅と決まったわけじゃない。最後まで仲間を信じろつて、ムゲン言つてただろう?」

そんなことあいつ言つたっけな…。とか一瞬考えてしまった。

「…そう…だな…急ごう!…こんな戦いもうやめさせるためにも!」

「隊長!カカサさん!!」

「皆!待たせたな!全員撤退だ!!」

「どういうことですか?」

「…この戦いはもう終わる。そうクロノードが踏んだんだよ。だから、帰るんだ」

「……はい!」

その話を聞いた後、俺は叫けぶ。

「全機、聞け!!」

味方機が目線が俺に集中する。

「この戦いはもう終わる!もう一切戦う必要は無い!!部隊を失つた奴、生き残りたい奴は全員連邦ジオン関係なく俺について来い!!」

「そんで…!うまい飯でも食おうぜ!!」

互いに信じた。この言葉は、ムゲンにも聞こえてくれているといいが…。

それから、集合してくる奴らを確認していた時、不思議な緑色の光を見た。

「…暖か…だな…」

ここにいる全員見えているのだろうか。

…俺は物語や筋書き通りが嫌いだ。だが…。

それでも、この光を見ている時だけは、何故かそれすらも許せた。

人は、こんな時何を想うのだろう。

全てを許せる事？それすらも拒もうとする事？優しさ？

それは分からない。

その答えは無いといったほうがいい。

人それぞれの感情があるからこそ、人は人で居られる。

だから、何を想うのかも人それぞれなのだ。

だがあの時俺は想った。

『優しさ…。少しは信じてても良いかもな…』

と。

「…さて、そろそろ冷えてきたな。部屋に戻るか…」

俺は立ち上がり、機体から降りようとする。

「おい！クロノード君!!!皆で鍋でも食べようぜー!!」

と、のんきにカカサが叫んだ。一瞬こいつにも俺と同じ苦しみを分けてやろうと思っ
たが…。やめておこう。

「ああ。今行く!」

俺は急いで機体を降りてカカサに駆け寄っていった。

なんにせよ、俺はただ自分の信じる道を歩んでいけたらいい。

カカサや、仲間が沢山いるそんな道を進みたい。

だからこそ、こいつらを…。

「……守っていかなきゃな」

外伝 完

外伝：Episode of Rina

一年戦争と呼ばれる戦いが終わって、4日後のこと、やっと皆で休暇が取れるようになりまして。もちろん地球に降りて！

日には1ヶ月間。何をしようか、とか、胸がワクワクしてしまう自分が居る。

「えへへ…」

誰も居ないことをいいことに、軽く笑ってしまふ。

悲しい顔していると、ムゲンが悲しんじやうから…。

なるべく笑顔で居ることにしたんだ。

「リナ。いるか？」

「あ、ムゲン！」

格納庫で座っていたら、ムゲンが気づいて声をかけてくれた。

「ねね。今度さ、一緒に街に出かけない？」

「ん？ああ。そうだな。たまにはいいかもしれない」

「でしょでしょ！じゃあ行こうよ！」

「…ああ。いいよ」

「やったー!!!」

思わず飛び跳ねてしまう。

「なんだ。随分嬉しいんだな」

「だってほら。その…初めてのデートじゃない?」

「…デートは俺が誘うべきだと思っただがな。……まあいいか」

「えへへ。うれしいなあ…!」

「…んじや、それまでに資料片付けとくかな…」

「ムゲン、まだ終わってなかったの?」

資料というのは、一年戦争で生き残った部隊に配られた、上層部から来た戦闘データの解析だということらしい。私には来なかったけどなあ…。

「だってさあ…。これ結構めんどろなんだよなあ…」

「…私、やろうか?」

「いや、いいさ。俺がやるよ」

こういうところを見ると、ムゲンって成長したなーって思う。それに比べて私は成長しているのだろうか…。……色んな意味で…。

「…そう?じゃあがんばってね!後でコーヒー持ってくから!」

「おっ！リナのコーヒーは美味しいからな！楽しみにしてるぜ！」

最近、ムゲンが吹っ切れた気がする。何かと別れたような…。悲しそうな雰囲気はまったく感じない。

だから…余計に自分が置いていかれている気がするのだ…。

「……ムゲン……」

呼んだ頃にはムゲンはもう居なくなっていた。

「…はあ…」

また…言えなかった。あの言葉。

よくよく考えると、あの時言えれば良かったのに…。

『で、でもあれはムゲンがあんな事言うから…！…でも…』

あの時、あのジムの中で、私はムゲンに「お帰り」と、その一言を言う事ができなかった。

何故か、そんな小さいことに今私はすごく後悔している。

「…はあ…」

「ん？どうしたあ！リナ!!」

ため息を吐いている私を見て、整備長である、トクナガさんが手拭いで自分の顔を拭

いた後、近づいてきた。

「…トクナガさん…」

「リナ、どうした？お前らしくないじゃあないか」

「…私…言えないんです…。ムゲンに…」

「ムゲン…？ああ。あいつか…。あいつに好きだって言われたんだろう？ならよかったじゃねえか」

「…違うんです…。私は…ムゲンに…あの人におかえりつて…言えなかつたんです」

そんな私の真剣な話を聞いて、トクナガさんは優しく微笑みながら言った。

「…そんな小さいこと、あいつは気にしちやあいない。…お前は昔つかからかわらねえなあ」

何かを思い出したかのように私の頭を撫でる。そういえば彼に長い間撫でられていなかった。

「…わ、わるかつたですね…。私はなかなか立ち直れないんです!!」

「…つたく…。そうだなあ。さりげなく、言ってみればいいじゃねえか。おかえりつてさ」

「……う、うーん…」

「…つたく…。ほんつと変わってねえな…。一人で考えるなつて言ってるだろう？」

「で、でも…！だからトクナガさんに話してるんじゃないですか！」

「残念、これじゃあ20点だ。まだ足りねえよ」

「…じゃあ…どうすればいいんですか…」

私が膨れていると、彼は再び私の頭を撫でながら言った。

「…そうさな。あいつと一緒に居ればいい。そんだけで見えてくることもある。今度、出かけてくるんだろう？」

「な、何でそれを…!!」

「ふっ…格納庫で話してたら嫌でも聞こえちゃうよ。つたく、若いってのは良いもんだな」

「…そうですかね…」

「いいことだと思うぜ？喧嘩しても、何かあっても、大抵は時間が解決してくれんだ。だから、待ってみるってのも大切だぜ？」

彼は私に向かってニツつと笑った後立ち上がり、言った。

「んじゃ、道夜の機体でも整備してくるかあ！んじゃあ、リナ。お前はのんびり休暇を楽しんでおけよ！」

そう言って歩いていった。

「……あ、ムゲンにコーヒー淹れてあげなきゃ…」

私は立ち上がり、食堂へ向かう。

食堂内には、最近補充された新兵に、道夜さんが何か話しているようだった。

私は迷惑にならないように、コーヒーを淹れる準備をする。

「……はあ……」

「……どうした？ 珍しく暗いな」

「うわっ!!!」

ぼっーつとしていたせいか、道夜さんが隣に居ることを気づかずに驚いてしまう。

「……す、すまん。驚かすつもりは無かった」

「い、いえ……その……すいません……」

「……俺が言うことじゃあないが、お前、よく謝るよな」

「あ……そうですね。すいません……」

「……ほら、また言った」

「あ……。はあ……」

「どうした……？ 悩んでいるみたいだが……。よかつたら聞くぞ？」

道夜さんなら心配ないと思った私は、口を開く。

「……私……ムゲンに置いて行かれてる気がするんです」

「……あいつはいつもお前を考えるとと思うが？」

「そうじゃないんです。彼は、あの戦いから帰ってきて、とつても成長していた。なのに私は……」

自分で言いながら俯いてしまう。ああ……。本当にダメだな……。私。

「……成長してないって思うのか……？」

「……はい……」

少し考えた後、道夜さんは言った。

「……それは違うな」

「え……？」

「自分では気づかない所が成長しているときもある。そいつは、目に見えないものであろうとな」

「……自分では……気づかない……」

「ああ。お前が考えるほど、お前とムゲンの距離は離れちゃ居ない。むしろ、そうやって自分を閉じ込めたら本当に距離が離れてしまうぞ？」

「……でも……どうすれば……」

道夜は、ふつと笑った後、呟く。

「そうだな……。ムゲンと一緒に居れば、分かるんじゃないか？それに、あいつ未だに資料片付けられてないみたいだしな。お前が見守ってやれよ」

「……そ、そうですね……分かりました……」

私は、二つのコーヒーカップを持って、食堂を後にした。

ムゲンの部屋の前に立ち、一息吐いた後、扉をノックする。

「……ムゲン。入るよ」

そう言つて扉を開ける。見ると、彼は必死に資料と格闘していた。

「……すまないリナ、ちよつと座つて待つててくれ。少ししたら一息入れる」

「あ、うん。コーヒー置いておくね」

私は机にムゲン用のコーヒーを置いた後、ベッドを背に、座つてムゲンを見つめる。

「……」

『……こうやつて、必死に頑張つてる……。か、カッコいい……』

そんな風に見つめてみると、それに気づいたムゲンは言った。

「どうした？俺に何かついてるか？」

「……うん。大丈夫だよ。頑張つて！」

「……？」

そしてまた資料に没頭するムゲン。これじゃあ来た意味がないと、少し思つてしま
う。

でも、道夜さんとトクナガさんの言葉を思い出す。

『一緒に居れば、分かることがある』

それから30分くらい経つたと思う。

ムゲンはふうつと息を吐いて、私に向き直る。

「待たせたな。ちよつと一息入れるかな」

そう言つて彼は、コーヒーを少しずつ口に運ぶ。

「……うん。うまいな！流石リナだ！」

こんなことをほめられても、正直あまり嬉しい気持ちにはならなかった。もつと、他の所を見て欲しい。そう願っている自分がいた。

「……………」

「……ん？どうした、リナ」

「えっ……!? あ、いや、なんでもない。えへへ……嬉しいな。ムゲンにそう言つてもらえると嬉しいよ」

「……………どうした。さつきから。調子でも悪いか？熱あるのか？」

彼が私の額に触れる。

「……!!だ、大丈夫だから!!!」

私は思わず、彼の手を払ってしまった。

「……………」

「あ…………。ごめん…。大丈夫？」

「…ん？ああ。こんくらいなら大丈夫だ。ごめんな。急に触って」

「…………私…やっぱおかしいのかな…」

「え…？」

「ずっとさ、ムゲンに褒めてもらいたくて、仕方がないのに、ムゲンの役に立ててることといえ、コーヒー淹れるくらい…」

「……………」

「これしか役に立てない…。私は…ダメだなあ…。ね？ムゲン」

もう正直、自分が嫌で仕方なかった。いつの間にか自分の目から涙がボロボロ落ちていく。

「お前はそんなこと考えてたのか？」

「…………え？」

「お前が居たから強くなるうと思った。お前がいたから、人の暖かさを知った。こんなに俺を愛してくれる人が居るということ」

「……………」

「それを知ってる。お前が思ってるほど、お前はひどくなんか無いんだよ？ 笑いなよ。リナ。お前が笑ってくれないと、俺も悲しくなるんだ…」

「…ムゲン…」

ふと、何かを思い出したかのように、ムゲンは呟いた。

「…そういや、リナの過去をあまり詳しく聞いたこと無かったな」

「……」

少し心が苦しくなる。思い出したくも無い記憶だったから。

「あ…わ、わるい…。いいんだ、忘れて…」

「ううん。ムゲンが知りたいなら…私、教えるよ」

「…む、無理しないで良いんだぞ？ 辛かったらやめていいからな？」

私は彼に頷いた後、過去の記憶を探り始めた。

あれからもう一年になるんだと、思い出す。

丁度このくらいの時期、私が15才の誕生日を迎えた今日。父がブリティッシュ作戦で亡くなった。

死因は機体の整備不良で機体が戦闘中に爆散したらしい。当時の私はそんなことも知りもせず、ただ手で顔を覆う母に聞くだけだった。

「お母さん。どうしてそんなに泣いてるの？」

「……ううっ……！嘘よ……!!」

それからです。母は、体を壊し、寝たきりになってしまった。

「お母さん。薬買ってきたよー！今日は少しだけど、食べ物も買えたんだ！一緒に食べよう？」

「……」

母は、何一つ喋らなかつた。喋れなかつたというのが正しいのかもしれない。

父を失った悲しみで、母は、自分の喉を斬って自殺しようとした。

見つけたのが早かつたおかげで、何とか一命を取り留めたが、声帯を失ってしまい、喋ることは出来なくなつた。さらに、精神的な障害も患つてしまう。

「……」

だが、その時私は、何も苦勞はしなかつた。母の言いたいこと、なんとなく分かつたから。

たまにとても悲しい顔をするときは、私に対しての謝罪。そんな感じのことが伝わってくる。

嬉しいときは、かすかに唇が動く。

そんな感じで、母との会話は、なんとか成り立っていた。

「えへへ……。お母さん。私達二人で頑張って生きようね！」

そう言つて母の膝に頭を乗せると、母は私の頭をゆっくりと撫でてくれる。

「……」

その時だけは、どんな気持ちで私を撫でているのか、最後までわからなかった。

「……おかあ……さん……」

いつの間にか私は、母の膝で眠っていた。

あの時考えると、そんな小さな時間が一番幸せだったんだなつて思った。貧しいけど、それでも家族がいたから。

「〜♪」

いつものお気に入りの歌を口ずさみながら、街を歩く私。

歌を歌っているときは、全てを忘れられた。母が病気という事、街の人たちからの冷たい視線。

ここの街は嫌いじゃない。けれど、母が病気になつてから、彼らの視線は変わつていった。

私を哀れむような、見下すような視線。それでも負けなかったのは、母がいたからか

もしれない。

「あいつ、また何か歌ってるぜ」

「やめとけよ。障害者なんだろ。気持ち悪いな」

「ほっとこうぜー」

そんな言葉でさえ、歌は全てをかき消してくれた。私は声がかかるまで歌った。

「……リナ……」

「……大丈夫。まだ泣かない……」

私は、そう言いながら、涙を拭き、続けた。

その街で唯一優しくしてくれる人が居た。

その人は、今は私達の戦艦で整備長をしているトクナガと言う人。彼は、私と母のために尽くしてくれて、私を娘のように扱ってくれた人でもあった。

「おっ！おかえり、リナ！」

トクナガさんは家に帰った私を優しく招き入れてくれた。

「……トクナガさん……。いつもすみません」

私はトクナガさんに深々とお辞儀した。

「んなこたあいいんだ。困ってるんだから助けるのは当然だろう?」

「…でも、なんとお礼を言えば…」

「気にすんなって! お前のお袋さんには世話になったからなあ。こーうやって手伝いできるだけでもうれしいのさあ」

そう言つてガハハつと声を上げて笑うトクナガさん。私も…笑えたらな…。

「いいか、リナ。お前は一人じゃあないんだ。お袋さんがいる。いざとなったら、俺だつて居るんだ。一人で悩むんじゃない」

そう私の心を見透かすように彼は言つた。

「……はい。努力…してみます」

「それでいいのさあ。さ、俺は帰るかな。じゃあまた」

そう言つて立ち上がり、家から出て行つた。

「……一人で…悩むな…か」

努力しようとした。それでも、手を差し伸べてくれる人は数多く居なかつたためか、数日後には、彼の言葉は頭から消え去つていた。

悲劇は突然やってくる。望みもしなかつた。けれど、心のどこかでそれを望んでいたのかもしれない。だから…。

「……♪……」

今日も私は自分の好きな歌を口ずさんでいた。いつも悲しいときは、この歌を歌って自分を励ましている。

きつと、歌を歌えなかったなら、私はとつくの昔に壊れていたと思う。

「……。かえろ……」

私は小さく眩きながら、立ち上がって歩き出した。

街を歩きながら見渡す。こうやってじつくりと街を見渡すのは、初めてかもしれない。

「おい。あれ見ろよ」

「うわ……。害者だ」

「……」

面倒な人たちに絡まれたな。私はそう思った。私はただその言葉を見無視して、家に向かっけて歩く。

「あらあの子……」

「やだねえ……。あんな見た目しちやって。病気持つてるわよきつと」

「関わらないでおきましょう。うちの子供に移っちゃうから」

「……」

ただ耐える。苦しかった。それでも歩みを止めない。

「おい。あれ、病原体じゃねえか」

「うわ。仕事場の近く通るとか。運悪いなあ…。この仕事失敗するんじゃないか？」

「ははは！ありえる!!」

「……」

唇を強くかみ締める。血が出るかもしれないほど。

「おい。お前らあ!!!」

「ひっ！お、親方!?!」

「何サボってんだよ!!あのガキが病原体だかなんだか知らねえけどよ、さっさと仕事しやがれ!!!」

声で気づいた。トクナガさんが助けてくれたんだって。

彼らの言葉が反響する。そのたびに私の歩く早さが上がっていく。

泣きたくても、涙が出てこない。辛いのに、苦しいのに。

「……はあ…。はあ……」

家の前に着く。扉を開けようとしたときだった。

「てめえ……金を出せって言ってるだろ!!!」

部屋から男の声がある。私は扉を開けるのを躊躇った。

「……そんなに死にてえか!!! 良いだろう。殺してやる!!!」

【殺す】。その言葉が、私を駆り立てる。私は扉を開け、叫んだ。

「お母さん!!!」

……遅かった。母は既に男に刺されていた。しかし、まだ生きている。

「ちっ……! こんだけだが、帰るか……」

そう言って男は走って家を出て行った。

「お母さん!!!」

私は母を抱き上げる。

「……」

母はとても悲しそうな目で私を見つめる。きつとこう言っているのだろう。

「ごめんね。リナ」

「……うん。今治療するから……!」

そう言って母を下ろそうとする。しかし、それを母の手が止めた。

そして、私を強い目で見つめた。母の言葉は理解できた。だから、余計辛かった。

「……ごめんね。リナ……。もう、無理だよ。あなたが悲しむのも……見たくない。だから……だから私を……」

これ以上そんな目で物を伝えないで欲しかった。分かっていた。だから……聞きたくなかった。

「出来ない……。私には出来ないよ……!」

母は震える手で私を撫でてくれた。そして、いつもの優しい目で訴えてくる。

「あなたはもう、私にとらわれて生きていかなくていい。あなたの好きなように生きればいいんだよ」

「お母さんは、あなたが幸せなら、それでいい。……分かっていた。私がこうなったせいで、周囲から貶けなされているんでしょう?」

私はただ首を横に振る。

「そ、そんなこと無い! 私は……お母さんと一緒に居れるならそれでいい……!!」

「……私があなたに迷惑をかけた。でも、最後のお願ひ。どうか、幸せに生きて欲しい。そして、私との縁を断ち切って進んで欲しい」

「……私は……出来ない……。そんなことできるわけ……。ないよ……」

それでも母は、物凄い力で私の手を離さない。

〔本当にわがままだけど、あなたの手で終わらせて欲しい〕
苦しかった。いつか来ると思っていたから余計に。

母は、私の手を、お腹に刺さったナイフを握らせる。

「……！」

母は頷いた。優しい顔で。

「……うっ……うう……！わ、私は……！！」

〔ごめんね……〕

母はただ謝ってばかりだった。そんな姿を見続けることは……もう出来ない。私は覚悟を決めた。

「……お母さん。今まで……ありがとう……」

私は……その手に握られたナイフを……引き抜いた。

母から大量の血が吹き出る。

そして、母の目から輝きが消えた。

「……」

母は死んだ。ただ、ごめんと謝って。

「……うっ……うう……！！」

堪え切れなかった。そんな気持ち声が声となつて、涙となつて流れていく。

手に持ったナイフが力なく床に落ちる。

「……うう……くっ……ひっく……!!!」

「リナ！お前……!!!」

トクナガさんの声が聞こえる。だが、そんなこと、どうでもよかった。

「……リナ……」

彼の手が私を優しく包み込む。

「……」

「辛かったな……。お前はずっと泣かなかった。苦しかっただろう。泣いていいんだ。いくらでも」

「……うっ……うう……うわああああああああん!!」

苦しかった。辛かった。母が死んだこと、今までずっと蔑さげすまされてきたこと、全部、全部……。本当は辛かった。何もかもが。

「よしよし。お前は本当によくがんばった。今まで。だから、今は泣いていい」
その日から、私の全ては変わった。強くなるうと。

「……うう……!!!」

「リナ。もう良いんだ。苦しいなら話さないでいい。無理には聞かないから」

「……ううん。私……ムゲンに何も知ってもらってないから……。だから、知ってほしい。……けど」

「ん？」

「手……握ってて。それだけでいいから……」

彼は優しく微笑み、私の隣に座って、手を握ってくれた。

「……ありがとう……」

後日、私はトクナガさんの下で連邦軍の整備兵として働くことになった。その部隊は、常に最前線で働く人たちが沢山居るとか。

「リナ。どうだ？」

「あ、はい！大体分かってきました！」

「そうかそうか。ならいいけどよ」

「この仕事で、私分かったんです」

「何をだ？」

「私の整備で生きて帰ってきてくれる人たちがいる。それですごく幸せなことなんです。……」

「……そうだな……」

そんな彼の顔は、少し暗かった気がした。

「……じゃあ、俺は別の機体の整備してくっからよ」

「あ、はい!!」

彼は軽く手を上げ、歩いていった。

「……がんばろ……」

仕事之母を失ったこと、自分が殺めたことを忘れさせてくれた。

「おっーリナちゃんー!」

ここにきてから、私の周りに、自然と人が集まってくるようになった。いい事なんだろうけど、あまり嬉しくない。

「あ、どうもー!」

「いっつも整備ありがとねー!この後の作戦も頑張れそうだ!!」

「頑張ってくださいね!」

「おうよ!!リナちゃんに応援されちゃったし、頑張るかあ!!」

兵士の人は、とても嬉しそうに去っていった。

……猫を被るつもりは無い。ただ、やはりあまり嬉しくない。

あの人たちに出会うまでは……。

その部隊と言っても、人数が沢山いて、誰が誰だか分からないときもあつた。それでも、一際分かりやすい人たちがいた。

部隊長のファングさん。こんな私でも、家族つて言つてくれた人。

「お、最近頑張つてるつて言う整備兵だったな！名前は…リナ・ハートライトだったつけ？」

赤髪の少年が声をかけてくれる。

「あ、はい…そうですけど…」

「俺はファング！こんな若いけど、一応この部隊の長をやつてる！よろしくな！」

「あ…はい…よろしくお願いします…」

「いいか？リナ。この部隊に入ったからには、一つだけ命令を聞いて欲しい」

「え…えつと…なんでしようか」

軽く身構えてしまう私。いったいどんな命令だろうか。

「俺達は家族だ！一人で悩もうとしないで、皆に相談しろ。それだけ守ればいい」

【家族】…。そんな言葉が頭の中で反響する。

「……」

「ん？どうした？」

「あ、えっと、…頑張ってみます!」

「…それでいいさ。んじゃあ、仕事頑張ってくれよ!」

そう言つて、彼は、走つていった。

「家族…か…」

すつごく暗いけど、仲間想いの道夜さん。彼は、ときたまに私の悩みを黙つて聞いてくれる。

お菓子が大好きで、いつも何を考へてるか分からないけど、実は結構優しいユーリさん。お菓子の話でよく話し合つたりしてる。

「ねえ道夜ー。このケーキ、新商品なんですよー!ねえねえ買つ…」

「駄目だ」

「えー!何ですかー!いいじゃないですかー!!」

「今は金がないんだ」

「じゃあお金があれば買つてくれると…?」

「いや。…そうは言つてない」

「ふーん…。いいですよ?道夜のあること無いこと言いふらしますからね!」

「ちよつ!お、お前なあ…!!」

彼らが暴れているのを横目に、私は彼女の持っていたチラシを見た。そこには、新発売チョコクリームケーキと、大きく書いてあった。

「……美味しそう……だなあ……」

「……ん？」

「あ、分かります？美味しそうですねー」

そう言つて彼をチラツと見る。彼はため息をついた後

「……分かった。今度買つてやるから……。まったく……」

「あの……あなた達は……？」

「私はユーリつて言います。それで、この横のATMは……」

「誰がATMだ……。八雲道夜だ。よろしく、リナ・ハートライト」

「……な、なんで私の名前……」

「……一応整備してもらつているからな。いつも助かつている。特にお前の整備は、しっかりと機体の内部まで整備されていて、使うこつちまで気持ちがいい」

「そうですね。確かにたまにすつごい使いやすきときがあるけど、それつてリナが整備してくれてるからですかね」

「き、気のせいですよ！整備の仕方は皆同じですし……」

私は慌てて謙遜した。あまり褒められるのには慣れていない。

「…そうか…。まあでも、助かっている」

「道夜は固いですねー！あ、これ、良かったら食べますか？」

そう言つてユーリさんはチョコレートを渡してくれた。

そして、その後も、小さな話題で私達3人は盛り上がった。

それから、最近入隊してきて、仲間のことを第一に想うムゲンさん。まだ話したことは無いけれど、私の整備したジムを大切に使うてくれない人。それでも、彼に惹かれるのは何故だろう。

「リナ。このジムの整備、頼むぞー！」

それは、ある作戦の後の事だった。初陣から機体を破損させた人が居たと聞いたけれど、破損したジムは、少し悲しそうで、それでも凜と強くたたずんでいる。

「は、はい！……ジム…大丈夫？」

私は、機体の整備を始める。そして、整備しているうちに、この機体の乗り手がどんなものを使つたかが良く分かるようになった。

「この人…マシンガン使つてない…」

ボロボロなシールド、やや擦れたり、傷がついたサーベルとは別に、新品同様のマシンガンが腰にラッチされていた。

「それに、随分使い方…荒いんだなあ…」

コックピット内を見て分かる、各種ボタンも少し破損しているし。

けれど…。だからこそ、この乗り手が怪我しないように、より強く、使いやすく、そして、頑丈にするために、私は少し手を加えることにした。

「…ビームサーベル…この人の持ち味は、格闘なんだ…」

一戦のうちにここまで使い込まれたようになるのは、よほど辛い戦いをしたのだろう。そして、この武装を強く頼ったのだろうと理解できる。

「なら、この柄にエネルギーパックをつけられるようにして、それで、リロード式にすれば、出力も無制限に上げられる…！これだ！」

私はさっそく、サーベルの改良を始めた。それを考えるうちにどんどん引き込まれていく。彼の動き、彼の戦闘全てに。

「…できた…！」

そうして、5時間後、やっとジムの修復が完了し、新品同様に戻っている。

「…この乗り手に見せてみようかな…」

私は、トクナガさんに、このジムの乗り手を聞いて、その部屋まで行く。

「…あれ…ドア、開いてる…」

なんて無用心な人なんだろう。私は部屋に入って周りを見渡す。

その人はベッドで眠りについていた。

私は、少し緊張しながらも、彼の肩をゆすり、声をかける。

「…ムゲンさん!!」

すると、彼は眠い目を擦りながら、起き上がる。

短髪の黒髪。前髪が少しだけ長い感じ。

顔は……クラスの優等生っぽい顔。意外と私の好みだった。

「どうしたんですか?」

言いたいことを忘れたかのように、私は言葉を返すのを躊躇った。だが、その後

「その…あの…ムゲンさんのジムなんですけど…修理…のついでで、改良したのですが…見てくれませんか?」

「え…?改良…?」

「はい。ムゲンさんのための機体に改良してみたいんです」

すると、彼は少し考えた後、私に笑顔で言った。

「そっか。じゃあ見に行こう!」

彼は立ち上がり、私と共に部屋を後にした。

私は先に立ち、機体のところへ彼を案内する。

すると、彼はジムを見るなり、すごく嬉しそうな顔をしていた。良かった。

「どうです？しつかり直ってますけど…」

「ありがとうございます。でも…改良したと言われても…あまり見た目が…」

その言葉を聞いた私はふっふっふと笑った後、言った。

「それは、戦場に出て初めて変わったって思えるはずですよ！」

若干怪しい目で見られたが、実際に戦ってみれば分かる。彼なら理解してくれると思っただ。

「そういえばムゲンさん。さっきミデアのほうでファングさんが招集をかけていましたよ。行ってみてはどうですか？」

「…ミデア…？」

その反応に私は少し戸惑った。けど、私は彼に優しく言った。

「えっと、ミデアって言うのは、MSを輸送したり、物資を輸送するための戦術輸送機なんです。そこには、生活するだけのスペースもありますし、結構快適なんですよ？」

「…そうなんですか…。とりあえず、そこに行けばいいんですね？」

「はい！そこでファングさんが待ってるはずですよ！」

「分かりました。じゃあ向かってみます」

そう言うって、彼は私にお礼を言った後、走って格納庫から出て行った。

「…ムゲンって、最初はミデアがなんだかも分からなかったもんね」

私が笑うと、彼は恥ずかしそうに言った。

「仕方ないだろう？ 分からないもんは分からなかったんだからさ」

「…そうだね。やっぱムゲンは面白いなあ」

「な、なんだそれ」

「なんでもないよ」

「こんな暮らしが出来るのが、やっぱり一番なんだって思う。」

「そ、そういえば…、リナが俺専属の整備兵にさせてくれて言われたのには驚いたなあ」

「あ、あれさ…実は…」

「あの…少し一緒にお話しませんか…?」

「ああ、いいですよ、でもここで話すのもなんだね…」

「あ、じゃあムゲンさんのジムのところでどうでしょうか…」

「え…ああまあいいよ、じゃあそこで話そう」

「はいー！」

彼と格納庫へ向かう間も話をした。ほとんど質問ばかりしてしまっただけ、大丈夫だろうか…。とか、心配していたりした。

話していくうちに、彼のことを知り、次第にどんどん知りたくなっていった。戦闘のことだけじゃなく、彼自身のことを。

だからこそなのかもしれない。

「あ、あの…ムゲンさん…」

「な、なんですか…？」

彼は、驚きながらこちらを見た。

「わ、私…あの戦闘でムゲンさんが助かってよかったって、本当に思ってるんです…」

「え…？あ、ああ…うん、あの時はリナさんがいなかったら俺はたぶん…だから、とても感謝してるよ。ありがとう…リナさん」

「いえ、それで…ですね…お願いしたいことがあるんです」

「お願い…？」

あの時私の顔は、きつと真つ赤だっただろう。

「ムゲンさん専属の整備兵にならせてください！」

「え…？」

しばらくの沈黙が続く。そして、彼は私に微笑みながら言ってくれた。

「俺専属の整備兵になったら、修理はほぼ毎日だと思うけど、それでもいいなら……」

OKしてくれたとき、私はそれはもう飛び跳ねるくらい喜んだ。

「本当ですか!?! やったあ!!! ずっと……夢だったんです、専属の整備兵になるのが……」

それは実際、口実でしかなかった。本当は、もつと彼が知りたかったから言った出任せみたいなもの。

「そうだったんだ……でも、喜んでもらえて嬉しいよ」

すると、彼はまた、私に微笑んでくれた。きつと私は、この笑顔が好きになってしまったのだろう。

彼を知っていき、そして、別れたくないと強く願った。

それが目に見えて分かるくらい出てきたのは、ムゲンが研究所へ連れて行かれた後だった。

「……ムゲンが……」

だんだんと遠ざかっていく輸送機。その中にムゲンがいる。もう手を伸ばしても届くことは無い。

私はその場に崩れ落ちた。思い出したくない記憶、それとこれとが混ざり合って、何

も考えられない。何も考えたくなかった。

「くっ…!!うう…!!」

「リナ!!っておい!どうした!リナ!!!」

トクナガさんが私の肩を揺らす。それでさえ、どうとも思わなかった。ただ苦しくて、辛い。

「おい…こっちに来てくれ!!リナを医務室まで運ぶぞ!!」

それから、あまり記憶が無い。けれど、眠っている時、不思議な夢を見た。

とても暗くて、寒い、そして私以外誰もいない世界に私は立っていた。

どこを見ても、どこを歩いても、どんなに手を伸ばしても、その暗闇が晴れることは無かった。

私は絶望した。どんなに足掻いても、過去の記憶や、失ったものは取り戻せない。

そんな私に、ふと手が差し伸べられる。見ると、その主はもう会えないはずのムゲン。現実で会うことが出来なくなった私を追い詰めるためなのだろうか。ムゲンは優しい笑みで私が彼の手を握るのを待っている。

『……夢でも……いい……。もう一度……あなたと話したい』

強く願った。そして、彼の手を握った瞬間。

周りが光で満ちていき、次に目を開くと、そこには沢山の綺麗な花が咲いた花園に立っていた。

『…リナ』

それはとても懐かしい彼の声だった。ずっと会いたくて、離れたくなかった彼の前だけなら、本当の自分であることが出来た、そんな彼の声が…。

『…ムゲン…会いたかった…』

ムゲンは目を伏せ、そして、静かに口を開く。

『…俺は…もうお前とは会えないかもしれない』

『な、何でそんなこと言うの…!? やつと会えたのに…!』

『…これは夢なんだ。お前が辛すぎて、心を閉ざした。そんな夢の中』

『それでもいい! 私はムゲンと一緒にいれるなら、どんな世界でも!!』

『…その気持ちは嬉しい。けど、それ以上にやってほしいことがある』

『え…?』

『確かにもう会えないかも知れない。それでも、互いに信じ続ければ、きつとそれは叶う気がするんだ。また会えるって…信じれば』

『……』

「だから…。リナは、リナの仕事を全うするんだ。そうすれば…きつと会える」

『ムゲン……!』

『……しばらくはお別れだけど、ちゃんと心を閉ざさず、前を見つめるんだ。目の前に俺がいなくても、リナの心の中に俺はずっといるよ』

そう言つて微笑んだ彼の言葉には、嘘のような感情は込められていなかった。なら、ちよつとくらいだまされても……いいよね。

『……うん。また……ここで会おうね』

『……ああ。約束だ。きつと、次に会うときは、夢の中じゃなく、現実の世界で』

そうして、その世界がぼやけていく。次第に意識がはつきり始めて、目を開く。

「……リナ……」

「ムゲン、あの時夢にムゲンが出てこなかったら、きつとピクシーを造ろうつて気も起きなかつたと思う」

「お前に、辛い思いをさせちまつたんだな……。すまなかつた」

「ううん。ムゲンが悪いんじゃない。あれは仕方が無かつたんだよ」

「だが……」

「だからね……。これからは、もう離れないでね……」

「……お、おう。もちろんだ……!」

「それでさ、ムゲンとあの日、あんな再会をするなんて思わなかったよ」

「……ペイルライダーの時の事か」

「うん。正直、ムゲンに攻撃しちゃったこと、かなり後悔してるんだ」

「あれは最悪お前が死んでた。俺だって、リナを攻撃したこと、後悔してる」

「忘れもしない。あんな、辛い再会をすることは、これ以降絶対に無いと思う。」

「…黙れ…黙れえええ!!」

その叫び声で、全員の動きが止まる。もちろん私も…。

「その声、もしかしてその蒼い機体に乗ってるのはムゲン…お前さんなのか!？」

トラヴィスさんが蒼いジムに声をかける。すると案の定の言葉が返ってくる。

「…そう…だ…」

理解はしたくなかった。それでも、彼は今ここにいる全員の敵として立ちはだかつている。

こんな再会を求めてなかった。それなのに…。

私は黙っていられず、彼に叫ぶ。

「…ムゲン!!ムゲンなんでしょ!?!何で攻撃してくるの!?!」

そしてその言葉は冷たい言葉であしらわれた。

「何故…それは、戦いでなきや満たされないからだ!!」

「そして！俺はコイツで全てを執行すると決めた…！」

前のムゲンでは有り得ない言葉。もう私はどうすれば良いか分からない。

「そ、そんな…！ムゲン…嘘だよね…」

これは、神の悪戯なのだろうか。それにしてはひどすぎる。

「…私は…もう戦えない…！」

蒼いジムが斬りかかってくる。私は死を覚悟した。

「やらせない!!!」

私と彼との間にリップパーさんのピクシーが割って入ったおかげで、私はなんとか助かることが出来た。

「リナ!!下がれ…!!!」

道夜さんの声が響く。私は、震える手を抑えながら、機体を後退させる。

「もう…嫌…!!」

そして、再会の時。ムゲンが蒼い機体から降りようとする。

私は、ただ無我夢中でムゲンに手を伸ばした。そして、彼をゆつくりと手で捕らえる。

急いでコックピットハッチを開き、ムゲンを引きずりながら機体の中に入る。

「ムゲン!! 会いたかった…ずっと…ずっと…!!」

「リナ…」

彼の声は、とても疲れていて、そして、元気が無かった。どうしてもっと早く助けてあげられなかったんだろう…。

私は彼を強く抱きしめる。もう二度と離れたくなかったから…。

「…痛い…よ…」

彼は私に少しでもだけ微笑んでくれた。

「あ…ごめん…」

私は抱きしめる力を緩める。

やっと彼と再会できたのに…。

「リナ…逃げろ…いきつと帰るから…!!」

こんな状況ですら私を庇ってムゲンは傷ついた。そしてこの言葉。もう二度と離れたくない。

だから必死に抱きついた。

「言うことを聞いてくれ!! 頼む…早くコックピットから降りて逃げるんだ!!!」

彼は必死だった。私を傷つけないために。それでも離れたくは無かった。でも…駄

目だった。それをしてはいけないと思った。

「…分かった…絶対帰ってきてね…」

だから私は涙を堪えて彼を見送った。

その後は、ファンングさんに回収され、それから数日間は泣き続けた。

「……そう…だったな」

「…ムゲンはいつも私を助けてくれるけど、でも、いつもその後どこか行っちゃうよね」

「そういえばそうだな。でも、望んでやってるわけじゃない」

「……でも…さ。それでもちゃんと帰ってきてくれるよね」

「……かも…な」

「この前だって、やっと全部戻ってきたもんね。記憶も、あなた自身も」

「…ああ。やっと帰ってこれた。記憶と一緒に」

そんなムゲンの顔は晴れ晴れとしていて、落ち着いていた。

「……それからは、トラヴィスさんの所で世話になった後、少しジオンにも行った」

「…そっか。大変だったね。何もされなかった？」

「何にもされなかったさ。いい奴ばかりだった。…グレイも含めて…ね」

「……」

ムゲンは天井を見上げながら呟く。

「…そういうや、ごめんな。お前の大事なピクシー……」

「ミラージユのこと?…全然気にしてないよ。それよりも、ムゲンが生きててくれたよ
かった」

「…そういうえば、なんでリナは俺の機体が壊れたの、知ってたの?」

「え……?」

「それに、俺は助けを呼んだ覚えも無かったしなあ」

「…え、えつと…それよりさ!ムゲンは、あの光…見た?」

「…ああ…。ピクシーの爆発と共に緑色の光が溢れ出していた。皆見えてたのだろうか」
「どうだろう。でも、私は見えたよ。とつても暖かかった」

「…ああ。すごく優しい暖かさを持っていた。きつと……。いや、なんでもない」

「…さて、資料でも片付けるか…。わるいな。少し仕事するぞ」

そう言つて私の隣から立ち上がり、資料の前に座る。

「…うん。頑張つて」

それから5時間くらい経つて、やっとムゲンの資料は全て片付いた。

「はあーっ…終わったー!!」

「お疲れ様! ムゲン、よく頑張ったね!」

「…さて…部屋まで送るよ」

彼は立ち上がる。自分の腕時計の時間を確認すると、もう夜中の1時を回っていた。

「どうした? リナ」

「…ごめん…。もう、動きたくないな…」

私は、床に寝転ぶ。

「…つたく。…ベッド使えよ。体痛くなるぞ」

「ムゲンが使いなよ。自分の部屋なんだし。気にしないでいいよ」

「…つたく。よつと…!」

「へっ…?! ム、ムゲン!?!」

私はムゲンに抱き上げられる。そして、ベッドに寝かしてくれる。

「…いいの?」

「良いって言うてるだろ? 俺は床で寝ることくらい慣れてるからな」

彼は、こうやって私に優しくしてくれるけど、そうじゃない。私が望んでいるのは…。

「…ムゲン。眠れないよ…」

そう言うと、ムゲンは優しく微笑んで言った。

「……ああ。わかった。よしよし。俺が撫でてやるよ」

そう言つて私の頭を撫でてくれる。

「……うん。ありがと……。でもね……。一緒に寝たいな……。なんて」

流石のムゲンも驚いた。そして、少しの沈黙が続いた後、呟いた。

「……つたく……。じゃあお前が寝るまでだからな」

「……！……いいの……？」

「いいよ。ちよつと狭いけど、我慢してくれよ」

「うん！狭くても良いよ」

ムゲンが隣で添い寝してくれている。私は、今とても幸せなんだつて。そう思えた。

「……ムゲン……。おやすみ」

私は目をつぶる。そして、幸せな気持ちのまま、まどろみに落ちていった。

ムゲンは、優しい。私を想ってくれていて、愛してくれている。

それでいて、強くて、割り切れて。過去とも戦つて、打ち勝った。

そんなムゲンと一緒にいることはとても幸せだった。

けれど……私は何も成長していない。道夜さんの言っていた言葉。

『自分では気づかない所が成長しているときもある。そいつは、目に見えないものであ

ろうとな』

彼はそう言った。本当にそうだろうか：私は本当に成長しているのだろうか：。

でも、その答えは誰も教えてはくれない。分かっている。自分で見つけなければなら
ないと。

「……ん……」

ゆつくりと目を開く。

隣にはムゲンが眠っている。腕時計を見ると、既に昼前の10時だった。

私は起き上がり、自分の部屋に戻るのも面倒だったので、ムゲンの部屋のシャワーを
借りることにした。

「……ふう……」

暖かいお湯が、汗を流していく。

「リナ。俺、資料提出してくっからさ、少し部屋空けるわ。：つと！そうだ、服、俺のだ
けどダンスにしまつてあるから使えよ！んじゃ!!」

扉越しに彼の声が聞こえる。そして、扉が閉まる音がした。

「……起こしちゃったかな……」

私は小さく呟いて、体を洗った。

「…気持ちよかったあ！蘇ったー！」

私はムゲンに言われたとおり、ダンスからムゲンの服を借りて着替えた。かなりぶかぶかだったけど…。ムゲンはやっぱり男性なんだなと思う。しばらくすると、彼が戻ってくる。

「ただい…ま…!?…リナ…。お前、何でそれ着てるんだ…？」

「え…？着ていいって言ったから…」

「いや、そうだけど、何で俺の野戦服の上着着てるんだよ…」

「…あ、ごめん。すぐ着替えるから…」

私は服を脱ぎこうとする。すると、驚いたムゲンが止める。

「ちよつ…！ま、まてリナ!!ストツプだ!!」

「…え…？」

「ぬ、脱がなくていい。そのままお前の部屋に行こう」

「う、うん」

私は少し困惑しながら頷いて、ムゲンと共に部屋を後にした。

「ねえ、ムゲン」

「…なんだ？」

「ムゲンってさ、昔絵本で読んだヒーローみたいだね」

「なんだそれ」

「昔ね、光の世界にとても心の優しい人がいたんだって。それでね、その光の世界が、あの理由で闇に染まっちゃうんだ」

「へえ。それで…？」

「それでね、その世界の国のお姫様を助けるために、その心優しい人は旅に出るんだ。そして、お姫様と再会するんだけど…」

「ど…ど…？」

「その優しい人は、お姫様を庇って闇の世界に引きずり込まれちゃうんだ」

「…」

ムゲンは静かに私の話を聞いた。

「闇に引きずられるその時、その人の心の光がいっぱいにあふれたんだ。こうパァーって!!」

私は手で大きさを表現した。それは、言うほど大きく表現できはしなかったけど、ムゲンには伝わったと思う。

「…それでね、そこからとても暖かい光が広がって、その光の国を照らしたんだ。そし

て、その心優しい人は笑顔でお姫様に言うの」

「帰ろうあなたは一人じゃない。俺達の国へ、一緒に手をつないで…。皆が笑顔で待ってる」

その言葉が…あの時ムゲンの言った言葉と重なったのは気のせいじゃない。

きっと、彼は私のヒーローなんだと思う…。

「…そつか。それで、その後どうなったんだ？」

「それで、お姫様と心優しい人は結婚して、幸せに暮らしたそうです。それでその物語は終わってる」

「幸せ…なんだな。その世界は…」

その時のムゲンの瞳は、少しだけ悲しそうだった。たぶんその世界と今の世界を比べていたのだろうか…。

「でも…ね」

「…ん？」

「私はさ…。ムゲンと話してるだけで…とつても幸せ…なんだ」

と、小さく呟く。

「……俺も…幸せだ」

ムゲンは恥ずかしそうに返してくれた。

それから、数日後……。ついにムゲンと街に出かけることになった。ワクワクしすぎて昨日は眠るのも惜しんだくらいに……。

「……さて……行くか。準備、大丈夫か？」

「うん……行こ行こ!!」

私はムゲンより先に歩き始めた。

「つと……ちよ、早いな……!」

「だって……ずーっと楽しみにしてたから!」

「ははは……。そっか。よっしゃ、行くかあ!」

ムゲンは私の隣に並んで歩いてくれる。そう、私が願っていること……。ムゲンと対等にありたい……。そう願ってた。

後ろにいたら、置いていかれてる気がしたから……。

「えへへ……」

「……は、恥ずかしいな……」

「私はとつても幸せ!」

やがて大きな街に出る。昔の街の記憶を少しだけ思い出してしまふ。だけど、その記

憶を振り切って私は歩く。

「あ、ムゲン、ムゲン!!あれ見に行こうよ!!」

「え?あ、ああ…」

私はなるべくムゲンと並んで街を見て回った。

普通に街を見るのはほとんど初めてで、私にとっては興味の示すものはいくらでもあった。

「次はあれ!ムゲン!!はやくはやくー!!」

私は指をさして歩き始める。

「…あいよ。ちよつと待って…。。ふう…余程楽しいんだな?」

ムゲンもそう言っついてきてくれる。

それから随分と歩いて、いろんなものを見た。楽しそうな家族…。それを見るたびに胸が苦しくなった。でも…。泣かないようにした。

「…つと、ちと休憩しようぜ」

ムゲンがベンチに腰掛ける。私はその隣に座った。

「随分歩いたなあ。もう昼か…」

腕時計に目をやる。すると、針はもう既に12時をさしていた。
「そうだね…」

家族が楽しそうに仲良くしている姿を見ると、すごく心が苦しくなる。どうしても…。

「どうした？リナ…。あ、俺飲み物買って…」

私はただ黙ってムゲンの腕を掴んで首を振った。きつと離れてしまったら泣いてしまふから。

すると、ムゲンは私の腕を引っ張ってムゲンの胸に私を寄せて、抱きしめた。

「…!!」

ムゲンを見ると、あの時と同じ笑顔で微笑みながら言った。

「…気づいてたぞ。お前が我慢してるの。幸せそうな家族がいたら、手…強く握ってたもんな」

ずっと耐えてた。その心が、ぜんぶ…ぜんぶくずれてく…。私の瞳から自然と涙がこぼれる。

「…けど、お前も成長…したんだな」

「…え…？」

私は涙声で答えた。ムゲンは笑って続けた。

「ずっと、追いつこうとしてただろ？分かってたんだ…。リナは形に出るから…」

「だから、俺は先に立ってないと思って思った」

「どういう…こと…？」

「…お前が…歩みを止めないために…。辛そうでも、それでもついて来た。だろ？」

「でも…待ってくれないなんて…ひどい…」

弱音を吐いてしまった…。こんなこと言っても意味無いのに…。

「…ひどい…か。…悪かった。いっつも置いてばかりで先に進んじまって」

「あ、いや…そう言いたいんじゃない…」

また、一つミスをしたと思った。ほんとうにダメだな…私は。

「分かってる。でも、どんな辛くても今の今まで泣かなかった。前のお前だったらちよっと離れただけでも大泣きだったじゃないか」

「…そ、それは…ムゲンと離れるのが…！」

「いや、それだけじゃない。お前が強くなって、俺に追いつこうしてるのもある。泣かないようにって、いっつも我慢してる」

「…だ、だって…」

「でもさ、人間泣いちゃいけないわけじゃない。むしろ泣かない人間を俺は絶対に好きなんて言わない」

「え……？」

「だからさ、お前は、お前の思うとおり進んで俺についてくれば良いんだ。先に俺が進むからさ。……これなら、怖くないだろう？」

「……」

ムゲンは、ずっと見ててくれた。ずっと離れ離れだったのに、ちゃんと覚えててくれた。そして、成長したって言うてくれた。それだけで……私は……。

「ムゲン……。私……ムゲンに必要とされてないじゃないかって……思つて……」

「んなわけないだろ？俺は……その……お前を愛してるからな……。必要ないなんて思うわけ無いだろう？」

「……そ、そんなに……？」

「え……？案外俺そこまで信用されてない……？」

そんなムゲンの言葉に少し笑顔になった。

「ううん。とつても信用してるよ……」

「……そうか。大丈夫さ、二人で歩けば、何も怖くない。いざとなれば、俺が守つてやるから……」

「ううん。私も……ムゲンを守るよ……！一緒に……守りあおう……。私達を……、そして……今いる家族を……！」

ムゲンは力強く頷いた。

「さて…そろそろ行くか。飯でも食いにさ…！」

そう言つて、ムゲンは私から離れ、立ち上がった。

「…あ、うん！」

先に歩き出したムゲンの後を追いながら、こう思つて、そして…新たに願つた。

彼と対等じゃなくてもいい。いつか…いつか絶対追いつくから…！」

この先も、楽しいことばかりじゃないけど…でも、彼と歩める道なら、きっと辛くない。

けど…。

それでも、時には歩幅をそろえて一緒に手をつないで…

「歩きたい…な」

外伝 完

外伝：二人が願う未来

宇宙世紀0080 一年戦争と呼ばれる戦争が終わって俺達はしばらくぶりの休暇を満喫していた。

「はあ……」

何故ため息が出るか？簡単だ。リナに俺の部屋を占領されたからだ。
理由はこうだ。

「ムゲン、部屋……掃除してないね……」

「ん？ああ。最近忙しかったからな。あと面倒だしなあ」

「……」

「ん？どうしたリナ」

「そんなんじゃないだめ!!」

「へ……?」

「私が掃除してあげるから！ささ！ムゲンは出て行くの!!」

「お、おい俺はまだ許可して……」

「しょうがしまいが関係ない！私は掃除する!!!」

と、強情なりナが今部屋を掃除しているせいで、俺は部屋に戻る事ができないでいた。そんなわけで、俺はただふらふらと艦内を彷徨っているわけだな。

「……コーヒーでも持って甲板にでも行くか……」

ふと俺は何か思い立ったかのように呟いた。

夜風はとても涼しくて、空を見上げると綺麗な月が昇っていた。あの時、研究所で見たあの夜空のような……。

そんな光景に、思わず見とれてしまう。

「……ムゲンか」

視線を戻すと、道夜がこちらへ歩み寄ってくる。どうやら、先客として道夜が居たみたいだ。

「よっーとりあえず、向こうのベンチで話でもどうだ？」

道夜は静かに頷き、先にベンチに腰掛けた。

「……座れよ、ムゲン」

「おう。サンキュー」

俺は勧められたベンチに腰をかけ、コーヒーを一口飲む。何故か、今日は昔のことを思い出しそうな予感がした。

「…静かだな…」

「そうだなあ…。戦争がこの前まであったなんて信じられないくらいだ」

「なあ。ムゲン」

「何だ？」

道夜は夜空を見上げながら呟く。

「……この戦いで、俺は随分と変わった。人として、仲間を信じる事を」

俺は道夜の言葉を待った。すると彼は続けるように言葉を発した。

「……こんな事言ったらお前が怒ると思うが…。実はな、あの戦争が終わったら、自決しようと思っていたんだ」

「え……？」

正直驚く事はなかった。今まで互いにゴミのような扱いをされてるんだ。そうなるのも無理は無い。俺もその気持ちは理解できる。

「…だがな、お前とか、ユーリとか、この部隊の奴らと関わっていくうちに、この場所を死なずに守っていききたいと思っただ」

「…道夜…」

「俺の事だけじゃなく、あのリナでさえ、お前は変えた。彼女はお前が居るから、お前の前だけ普通の女性としていられるんだ」

「そうなのかねえ…あんまりよく分かんね」

そういつて俺は頭を軽く搔いた。

「…：人は変わる。いや、変われるってことを俺はムゲン。お前から教えてもらったんだ」

「…：な、なんだよ…：照れるな…：」

「だからさ、感謝…：してるんだ」

道夜はそう言いながらフードを深くかぶった。

しばらくの沈黙が続いた後、俺は口を開く。

「確かに、俺もこの戦いで随分と変わったって思うなあ」

道夜は静かに俺を見つめる。俺はさらに続けた。

「両親が殺されて、最初は恨みだけで戦ってた」

「一時期ジオンに渡った時があつてな。そこで知ったんだ」

「互いに違いは無い。人間なんだって」

「だからこそ、何のために戦うか、俺はハッキリしてきたんだ」

「人間にとつて必要なものは、互いを恨んだり憎しみ合うことじゃないんだ。互いに分かり合い、助け合う。そんな当たり前のことなんだよな」

「でもな、道夜。俺もお前に感謝してるんだぜ？」

「……俺が何かしたか？」

「ああ。あの時、別れた時、強い何かで背中を押された気がしたんだ」

「……？」

「それが、お前の強い意志だった。だから俺はあのデカブツやシゼルと戦えた。お前が戦っているのに、俺が戦わないでどうするってな」

「……そうか」

道夜は静かに目を伏せながら呟く。

「……やっと……って感じだよな……」

「ん？どういふことだ？」

その言葉を理解するには、少しの時間がかかった。そして、道夜は続けて

「……終わったのは戦いだけじゃないってことさ……」

そう言った。

「……戦いだけじゃない……ねえ……」

「……答えは人それぞれだろう。……だが、俺の中で終わったのは戦いだけじゃなかった」

「……へえ……」

「俺は、自分の過去もあの戦いで終わったと思っただけ……。人工で作られたニュータイプ……。使われるだけの存在じゃなく、一人の人間としてやっとスタートに立てた気が

するんだ」

「……そう考えると、立ち止まってなんていられないんだって思った」

「……なるほどなあ。……たしかに言われてみれば道夜……。お前ちよつと変わったよ。」

「そ、そうか……」

そして道夜はしばらく黙った後、言葉を探りながら言い出した。

「なんて言うんだろう……。未来は変えられないとか、良くそんなことを言うやつがいるだろう」

「あー。いるなあ……」

「……最近思うんだよ。もしも、この世界に少しずつでもニュータイプっていうのが生まれるのなら……きっと世界はいい方向に変わっていつてくれるんじゃないかって……」

「……」

俺は黙って道夜の言葉を待つ。そして、彼は少し微笑みながら言葉を続ける。

「……俺は信じてる。人が……ニュータイプが世界をいい方へ変えていつてくれると……」

「……確かになあ……。そうかもしれないな。今は可能性がゼロだとしても、希望がないとしてもさ……」

「ああ。人は変わる……。どんなに小さな望みでも、それを捨ててはいけないと……身をもって体験したからな」

言い終えた後、道夜は恥ずかしくなったのか再びフードを深く被った。

道夜の想い……。それは、人として生きていけることなのだと思う……。

人間には可能性がある。

どんな絶体絶命な状態でも、諦めなければ……。自分自身を、仲間を信じることでその状況さえ打開できる。

互いに少しばかりの沈黙が続いた後、俺は口を開いた。

「なんて言うんだろうな……。俺は思うんだよ……。道夜、お前だけじゃない。この戦いで生き残った全ての奴らが、やっと今……スタートに立てたんだって……」

「……。かもしれないな」

「道は違えど、確かに俺たちは今生きてその足で前に、未来に進もうとしてる」

「ああ。だからこそ……」

「未来を信じよう——」

言葉が被って、俺と道夜は互いに見合った後笑いあった。

この、冷たい夜空にも負けないくらいの声で……。

人は、いつまでも孤独で、全てを触れることはできないかもしれない。

それでも、人は手をつなぎ、言葉で互いを主張できる。

そして、分かり合えることができる。

その可能性が……はたして人にあるのかは、今の俺たちには理解できないだろう。

だが、それでも……ただひたすらに問い続ければ、答えは見つかる……。

そして、未来を信じ、仲間を信じ続けるだけでいい……。今は、それだけで……。

外伝 完

外伝：カカサの男飯

宇宙世紀0079くらい。何月かは忘れた。そして日にちは1のつく日のどれかだった気がする。

俺とクロノード君は、久々の休暇に、すごく暇していた。そう、すごく。

そういえば、ふと思ったけど、クロノード君って普段何食べてるんだろう。

正直、彼が食事を取っているシーンを見たことが無い。

興味本位で聞いてみることにした。

「ねえ、クロノード君」

「なんだ？」

「昨日の夕飯はなんだった？」

「軍用レーション」

即答で帰ってくる。なんで夕飯がレーション……？

「じ、じゃあ、今日の朝食は？」

「軍用レーション」

「……………」

に、二度までもレーション……？なんだか不安になってきたぞ…。

「じゃあ、今日の昼飯は何にする？」

「軍用レーション」

「……クロノード君？」

まさか…クロノード君って、レーションしか食べてない…？

「なんだ？」

俺は試しに、聞いてみる。

「好きな食べ物は？」

「軍用レーションだが？」

「……」

返す言葉が一瞬詰まる。

「じ、じゃあ、おふくろの味は？」

「軍用レーションだ」

「……あー！もう!!」

「な、なんだ？」

「もう少し別の食べ物は無いのかね君はあ!!」

俺は立ち上がって彼を指差す。

「…そうは言われてもなあ…」

「その割にはビールとかコーヒーとか飲むのに。君は！君というヤツは！なあんで飯を食わんのだ!!飯をおお!!」

ブチギレである。

「……な、なぜ怒っているんだ…?」

「はあ……はあ…」

「大丈夫か?カカサ」

「大丈夫じゃないよ。クロノード君。いいかい?」

「なんだ」

「君は、割と本気で人生の半分を損しているぞ!?!」

「なんで」

「なんでえええええ!!?それをこの俺に返す言葉かね!?理由なんか理解できるだろう!?!」

「…いや、まったく」

さすがに呆れるしかなかった。困ったな。これじゃあ話が進まないじゃないか。

あ、だからって見るのをやめようとするんじゃないぞ!!!絶対だぞ!!!

「まったく…君というヤツは…。いいかい?人生において大事なことは山ほどあるけど」

だね」

「ああ。戦闘とかな」

「ちがあああああう!!!戦闘は大事じゃないでしょうが君はあ!!!」

「……違うのか？」

「違うよ!まったく……」

「一番大事なのは食欲だろう!？」

「……食欲……」

しばらく考える。言葉を噛み砕いてるのかのように。ところで【言葉】ってどんな味がするんだ？

「いや、食欲とか興味ないな」

「……」

もはや呆れるしかない。どうやらコイツには一度美味しいものを食べてもらうしかないさそうだ。

「わかった!クロノード君に最高の料理を振舞ってあげようじゃあないか!!!」

「ええ……。別にいい」

「なんで!?!俺の料理が食えねえってのか!?!」

「……いや、そういうわけじゃない。食に興味が無いだけ」

「ふっふっふ。照れ隠しだろう？わかってるよクロノード君。君に最高に美味しいもんを作るからね!!」

俺は鼻息荒くキッチンへと向かった。彼の意向？知らんね。

「さて、と。冷蔵庫に入ってる食材は……」

冷蔵庫を開ける。そこで、俺の思考があることで硬直した。

「ハッ……!!」

「クロノード君って……何派なんだ!?!」

何派とは言うまでもなく、ご飯派かパン派かになるのだが……。

「も、もしや……!?!」

「麺なのか!?!麺派なのか!?!」

「……うーむ」

悩んだところで仕方が無いので、冷蔵庫の中にある食材で決めることにした。

「何々……。鶏肉に玉ねぎ、卵……。なら、一品できそうだな」

俺は食材を取り出す。

洗ったまな板に玉ねぎを置き、まずは縦半分にかット。

続けて半分にした玉ねぎをさらにスライスする。

これで野菜は準備完了。

続いて鶏肉だが、鶏肉はもう加工済みだから、まあいいとしよう。

さらにつゆを作る。

まずめんつゆを入れ、砂糖を少々入れて、隠し味に粉末鰹節を少し入れる。

そして水を足して煮立たせ、煮立ったところへ鶏肉を投入。

鶏肉に火が通ってきたら玉ねぎを入れ、少し待つ。

そして最後に溶き卵を回しいれ、30秒待つ。

その後火を止め、余熱で卵を固まらせたら完成。

最後にどんぶりにご飯をよそって、それらに乗せて出来上がり！

これぞ！

「オヤコドーン!!!」

……寒いネタはクロノード君には見せないでおこう。

「クロノード君！」

「な、なんだ？」

完成した丼を持って彼の前に置く。

「これを食べてみる!!」

「…あ、ああ…」

ふたを開くとビックリ！…なんてことはないが、それなりに見た目も悪くない親子丼が目の前に広がる。

「カカサ？」

「なんだね？クロノード君」

「これは……なんだ？」

「親子丼だ」

「おやこ……どん？」

「YES！そうさ！美味しいんだぜ？」

「そ、そうか……。食べてみるか……。あ、一応軍用レーションを用意して……」

「なんで!？」

「いや、一応心配で……?？」

「…な、なんでもいいや……。食べてみてくれたまへ」

彼は親子丼をスプーンですくい、一口。

「…………ゴクリ」

見えていて腹が減ってくる。もう一つ作ればよかった。

「んぐんぐ。…うん」

「どうだね？」

「……美味しいな」

「だろう!? レーションなんかより全然！」

「そうだな」

ああ、良かった。これでクロノード君は普通の人生を歩き始めたんだね!? すばらしい
!!

「今度からレーションと親子丼のローテーションでいいだろ」

とか思ってた時期が私にもありましたー。

「ちよつとまってええええい!!!」

「な、なんだよ」

「レーションはやめよう!? レーションは!!!」

「……………なんで」

「なんでつておま……。レーションなんか美味しくないだろう？」

「味は確かにだが、栄養価も高く、腹も膨れる。十分だろ？」

「はあ……。君がいつか婿に行く時が心配だよ俺あ」

「何故そうなる？ それに今さりげなく【婿】って言わなかったか？」

「え？ 言っていないよ？」

「馬鹿を言え。言っただろう」

「……まあ、なら次だあ!!!」

「ん？まだあるのか？」

「もう一品作ってくる！待ってやがれ!!」

話題をそらし、俺は再び鼻息荒くキッチンへ向かった。

「さて、次は麺だ!!」

俺は今度はキャベツ、人参、玉ねぎ、豚肉を用意する。

そして忘れちゃいけない主役の麺を。

まずは野菜をざくざく切っていく。続いて肉も食べやすい大きさに。

フライパンに油を引き、野菜を炒める。

野菜が柔らかくなってきたら肉を投入。

そこで塩コショウをし、炒める。

肉に火が通ったら、麺を入れ、少量の水を入れる。

さてさて、水分がなくなってきたらソースをかけて、全体に馴染ませたら完成!

「出来たぜーやきそばー!」

俺はクロノード君のところへ焼きそばを持って向かった。

「出来たぞ！」

「…今度は何だ？」

「焼きそばだ」

「……焼きサバ？」

「焼きそばだよ!!! そばとサバを間違えるやつがいるかね!? まったく」

「…うまい」

「勝手に食うなあああ!？」

俺が話している間にも彼は黙々と食べている。

「……これ、嫌いじゃないな」

「だろう!? 美味しいだろう!？」

「ああ。だが、戦闘中に手軽に食べられるわけじゃないからな…」

「それを言っちゃあどうしようもないなあ…」

少し考えた後、俺はある一品を思いつく。

「…!!」

「ほうひは? ははさ?」

どうした? カカサって言うてるのか……?

「次だあああ!!」

俺はドタドタと走ってキッチンへ向かった。

もう彼を喜ばせるにはコレしかないという確信をもとに、材料を取り出す。

とはいっても簡単なんだけどね。

チーズ、マヨネーズ、ハム、レタス。そしてパン。これだけでできる簡単なヤツといえどもう分かるはず。

パンを2枚用意、1枚にレタスを乗せ、次にマヨネーズ、その上にハムを乗せる。最後にチーズを乗つけて、パンで挟む。

これを半分に切ってもいいが、正直面倒だしこれでいいだろう。

完成だ! サンドウィッチ!!

これをもって、クロノード君のところへ向かった。

「さあ出来たぞ!!」

「今回は随分早かったな?」

「ああ。手軽に作れるやつだからな」

皿に乗ったサンドウィッチを彼の目の前に置く。

「…これは？なにやら色々入っているが…」

「これはサンドウィッチだ！」

「サンド…：…ウィッチ…：…」

サンドウィッチ
「砂の魔女？」

「…マンガの読みすぎだよ。クロノード君」

「まあ、冗談はさておき、食べてみてくれたまえ」

「あ、ああ」

彼は、サンドウィッチ、彼曰く砂の魔女を口に運ぶ。

「…：…！！！」

「どうだ？」

「…うまい…！！コレは美味いぞ！！！」

おお、今まで以上の反応。これはいいぞ！

そして、あつという間に彼はサンドウィッチを平らげた。

「…：…これだったら軍用レーションより、サンドウィッチの方が好きだな」

「ふふふ。だろう？」

「ああ」

そういう彼の顔は、かなり満足した顔をしていた。

そして……………。

「なあ、クロノード君？」

「なんだ？」

「今日の昼飯何にする？」

「サンドウィッチでいいだろ」

「……………」

またサンドウィッチですか…。これでもう1週間連続ですよ…。

「飽きないの？」

「飽きないな」

「……………」

それから1ヶ月くらい、クロノード君はサンドウィッチだけで大丈夫だとか言っていた。

作る側として、なんかすごい複雑だ……………。

外伝 完

デラーズ紛争編

21：新たなる序曲

宇宙世紀0083・10・07

地球連邦軍ペガサス級7番艦MSC-07強襲揚陸艦ようりくかんアルビオン、

AEのフォン・ブラウン工場で試作ガンダム、RX-78GP01ガンダム試作1号機、ゼフィランサス、RX-78GP02Aガンダム試作2号機サイサリスを受領。

重力下試験のため連邦軍オーストラリア・トリントン基地へ向け出航する

0083・10・13

15:00 アルビオン、オーストラリアの連邦軍MS実験基地、トリントン基地に到着。

公国軍残党デラーズ・フリート「星の屑作戦」発動。公国軍残党が決起し「デラーズ紛争」勃発。アナベル・ガトー少佐行動開始。

一年戦争が終戦してからもうすぐ4年になろうとしている。俺たち第00特務試験MS隊は、水天の涙作戦以降オーストラリアのトリントン基地に転属になった。

ゲリラ掃討作戦以降、地球連邦軍はジオン残党に対して特になんの対処もせず、兵士たちには模擬戦やら哨戒任務などしか与えてもらえない。

特にトリントンに移動してからは、毎日のようにコロニー落としの傷跡とご対面。正直皆憂鬱だろう。

「ムゲンさん、ここにいましたか」

声の方を向くと、今日入隊したばかりの青年が立っていた。

一瞬、彼が女性に見えた。それほどまでの美青年。

丁寧に手入れされた薄い青のかかった髪。吸い込まれそうなほど美しいガーネットのような色の瞳。

そのどれをとつても文句のつけようがない。

「ん……う？お前さんは……」

すると青年はビシツと敬礼しながら

「第00特務試験MS隊所属のエトワール・ブランシヤール二等兵です」

「こう……こんないきつちりしてるヤツを見ると、少し反応に困る。なんて頭で思いながら、俺は用件を聞くことにした。」

「そうか……。それで、お前さんは、俺に何か用か？」

「……。そろそろファンング部隊長から召集をかけられていたので。その報告だけ」

なぜ一瞬怪訝けげんそうな顔をしたのかはわからないが、とりあえず頷いて

「んじやあ、行くか。お前さんも来い。場所わからないだろ？」

「逆にムゲン小隊長のほうが発えていなさそうで心配ですけれど」

「そんなことはないぞ？グロリアスの司令室だろう？」

すると彼はため息をついた後、首を振って言った。

「やつぱり聞いてなかったんですね……。グロリアスの格納庫です。……まったく」

若干呆れられてるのだろうか……。少しだけシヨックだ。

「あはは……。悪い悪い。とりあえず行くか」

そう言って、彼より少し早足で格納庫へ向かった。

「……遅かったな。ムゲン」

格納庫へ着くや否や、道夜からの一声。

道夜は、前とは違い、フードをかぶらなくなり、誰とでも普通に接することができるようになってる。

短髪の黒髪で、少しだけ疲れた瞳は、それでも中心に何か強い意志を感じさせた。

「悪い悪い。エトワールから場所聞いてなかったら完全に遅刻してたな！いやあ……！最近の新兵はいいもんだな!!はっはっは!!」

とか笑ってごまかしてみる。

「……調子のいいヤツだな。まったく」

「まあそう言うなって」

言いながら、道夜と共に歩く。

「フアングさんが呼んでたんだけな。なにやら全員に召集かけてたとか」

「ああ。内容までは聞かされてないが、とりあえずフアングに会いに行けばわかる」

「そうだな」

しばらくの沈黙のあと、格納庫の奥にいる、赤髪の青年に声をかける。

昔より背が伸び、伸びた髪をゴムで束ねている。

「フアングさん。何のようだ？一応来たけども」

「ん？ああ！ムゲンに道夜か！あとはフユミネが来れば……つと」

「ここにいながな」

声の方を俺たち全員は見上げた。そして、そこにフユミネさんはいた。MSのコックピットで何か調整してたのだろう。

彼は昔と変わらず、連邦の制服をきつちりと着こなしている。寡黙かもくなところもそれほど変わってはいない。

「全員揃ったか。じゃあ、全員集めてある場所に行こう。そこで話す」

そして今一度、格納庫の入口へと俺たちは歩き始めた。

入口前におよそ12人の人たちが集まっている。

12人の前に立ち止まり、ファングさんは声をあげた。

「皆!!第00特務試験MS隊へようこそ!ここはこれからお前たちの家だと思ってくれ!!そして俺たちは家族だ!!」

昔、そんな言葉を言われたのははつきり覚えている。彼はそういう人なんだ。

「それで、お前たちを集めたのは他でもない。これからは部隊内で小隊を作り、各々の役割を果たしてもらおう!!」

「……小隊……だと」

「ふん。なるほどな」

「んで?どうすんだい?ファングさん」

するとファングさんはニツと歯を見せ笑う。

「小隊長は、お前たちの前にいる俺を含めた4人だ!」

「……!?!」

「な、なに!?!俺もなのか!?!」

「当たり前だな。ユーリは頼んでもやってくれないだろうし」

「まあ……あいつならそう言うだろうなあ」

「というわけで、各自の役割を言っていく！」

「第一小隊の隊長は、ムゲン・クロスフォードだ！」

「俺かい……。そりやまた何で第一小隊なんだ？」

「役割だつて言ってるだろ？」

「ああ。そうか」

「第一小隊の役割は、前線で敵を抑えたり、攻めに転じてもらう。いわゆる斬り込み部隊とでも言うべきか」

「なるほど……。それで、第二小隊は？」

「第二小隊の隊長は俺がやる。俺たちの小隊は主に指令塔としての機能をする。距離で言うと第一と戦艦の中間だな。そして、各自で第一の取り逃がした敵を撃破する隊だ」

「第三小隊は道夜。お前で頼む」

「……わかった」

「第三小隊は主に前線の部隊との連携を重視した隊だ。挟撃、待ち伏せ、暗殺などの特殊部隊だな」

「そして、第四小隊はフユミネ。第四小隊は戦艦グロリアスの護衛、さらに偵察、哨戒が主な任務だ。この部隊の情報網はこの隊がいないと成り立たないな」

「というわけで、各自、振り分けるから呼ばれたヤツは前に出て小隊長の前に並ぶように

!!

「じゃあ、小隊長は、各自自分の機体の前で立っててくれ」
「あ、ああ…」

俺は頷いて、静かに自分のMSへと足を向けた。

21 完

22：第一小隊

宇宙世紀0083・10・13 第00特務試験MS隊に補充兵およびMSが追加される。以後4小隊に分けて作戦を遂行する。

俺は、何故か第1小隊の隊長になってしまった。何故だ……。

「まあ……。なんだ……」

俺の目の前には3人の新兵と1人のオペレーター。ものすごく緊張してしまう。

「俺はムゲン・クロスフォード。一応お前さんたちの小隊長ということになった。宜しく頼むぜ」

俺はとりあえず全員を見渡して言った。

「お前さんたちは各自で自己紹介しておいてくれ」

その言葉で目の前の4人はキョトンとした。しかし、その中の一人が大声で言った。

「自己紹介とかさ、くだらねえ……」

「ん？お前さん……」

「別にさ、次の戦いで死ぬかもしれない奴らに自己紹介して何になるんだあ？ええ？」

少しその言葉にイラツとした。昔のあいつを思いだしてしまふ。

年齢はそれなりのおじさんというのが正しいか。

髪は黒。目つきは悪く、そして口も悪い。

「お前……」

「おつと。すまんなあ小隊長殿。俺は本当のことしか言わないからな」

「……そうかい。まあお前さんが嫌ならする必要は無い。とりあえずお前さんたちは第一小隊の隊員だ。仲間に挨拶くらいしておけよ」

俺が踵を返して部屋に戻ろうとしたとき、ヤツが叫んだ。

「おい。お前一年戦争の生き残りなんだろ!？」

俺は立ち止まり、ため息を吐いた後、言った。

「……そうだが？」

「ならお前に勝てば俺がこの隊で一番なんだよなあ？」

「……言っている意味がわからねえな」

「だからあ……!!俺とMSで戦えって言ってるんだよお！」

「何？」

「お前が弱いと俺たちは明日も生きていけねえんだよ。だろ？死にたくないよなあ？お前ら」

すると、うしろで小さくなっていてる3人がうなずいているのがわかる。俺は頭を搔きながら言った。

「つたく……。わかったよ。お前さんの挑戦、受けて立とうじゃないか」

「言つたな。殺してやるよ！ムゲン・クロスフォード！」

このやりとりで格納庫内がざわめく。

「まったく……。こまった新人だ。まあ……。そういうのも嫌いじゃない」

「ふっ！調子に乗っていられるのも今のうちだ」

俺は黒いガンダムを見上げ呟いた。

「……。やるか。ピクシー」

コックピット内に入り、システムを起動させていく。

「システムオールグリーン。出力チェック完了。武装確認OK。MSシステム起動

……。【ガンダム・ピクシーエッジ】、行くぜ！」

「模擬戦には丁度いい場所だな。トリントンは……」

見渡す限りの荒野が広がる。久々の戦闘でワクワクしている。

前に立つ少し大きめのジム。ヤツから無線が来る。

「俺は……。イーサン。イーサン・マクラウド!!!いくぞ！ムゲン・クロスフォード!!!」

叫ぶと共に正面から突っ込んでくる。あの大剣を喰らったら保たないのは一瞬で理解できた。

俺はスラストスターを起動。ヤツの懐へ潜り込み、腹部へ一撃。そしてジムは吹き飛ばされると共に、スナイパーライフルに持ち替えこちらを射撃してくる。

だが、狙いが定まっていないためか、いとも簡単に避ける事ができた。

「くっ!!」

「どうした? 殺すんじゃないのか?」

「うるせえ!!!」

体勢を立て直し、突っ込みながら大剣を振り回してくる。

まず横に一振り。続いて左袈裟切り。その二撃目をダガーで受け止め、大剣の持ち手を蹴り上げると共にジャンプする。

「なにっ!?!」

「もらったぜ!!!」

吹き飛んだ大剣を空中で掴み、ジムの左腕を叩き潰す。

「ぐっ!!」

だが、装甲が厚かったためか、破壊することは出来なかった。

「甘いんだよ。こいつはただのジムじゃないんだよ!!」

「ちっ!!」

すると、ジムが装甲を外し、ジムカスタムが現れる。カスタム機なのは分かっていたが……こんな機体だとは……。

「おらいくぜえええ!!」

ジムは2丁のビームライフルを両手で持ち、乱射する。

「ちっ! 当たるものかよ……!」

俺は機体を動かし、ビームを回避していく。

そして隙が出来た瞬間、大剣を相手に投げつける。

大剣は槍の如く相手に迫り、やつは避けきれないと悟ったのか腕で防御する。

「ちいつ!! てめえ……! 舐めた真似を!!」

「ふふっ。 なかなかだな」

「……!! な、舐めるなあああ!!」

ビームライフルを投げ捨て、ビームサーベルを引き抜いて突っ込んでくる。

俺はダガーでサーベルを受け、力で押し切った。そして、体勢を崩したところを見逃さない。

「ちいつで……終わりだ!」

両手で2本のダガーを持ち、両腕と両足を切り落とす。

「くそ……!!くそがああああ!!」

ダルマになったジムから発せられる叫び声。悔しそうなのは痛いほど分かった。

「お前さん。強いなあ。これなら第1小隊も安心だなあ!」

「てめえ……!!同情のつもりか!!」

「いや?そんなつもりは一切無いぜ?お前さんは強い。これはたぶん見てるみんなが理解したさ」

「……………くつ……。ふははは!!!面白い部隊に来たもんだ!!ははははははは!!!傑作だ!!」

と、大笑い。本当に不思議なヤツだ。イーサン・マクラウド。

あの模擬戦後、俺はフアングさんと呼び出され始末書を書く羽目になったのは言うまでも無い。

17:00 第00特務試験MS隊、哨戒任務開始。第4小隊出撃。第1、第2、第3は待機。

哨戒任務の無い俺は、道夜とりナ、ユーリの4人で基地の食堂でコーヒーを飲んで待た。

コーヒーを一口飲むと、体が少しずつ温まっていく。こう思うと、だんだん寒くなっ

てきたと実感する。

「ふいー。久々の模擬戦楽しかったあ！」

俺が口を開くのを皮切りに、全員が話し始める。

「まあ、やりすぎだったかな」

と、道夜がリナの方をチラツと視線を送る。さつきからリナが一言も口を聞いてくれない理由はそこにあるのはなんとなく分かった。

喋ってくれたほうが可愛いのかと思っではいけないだろうか。

そんなことが口に出せるわけでもなく……。

「それにしても……イサーンさんでしたっけ？ ムゲンさんにすごい反発してましたね。いやはやムゲンさんは男にモテますねえ……!!」

これはある意味チャンスでは……！ここでリナにいい事言っつて機嫌を直してもらわないと……と、考えた俺はすぐさま行動に移すことにした。

「まったく……嬉しくねえなあ……。それに、俺にはリナっていう可愛い子がいるから、モテてもなあ……」

と、チラツと視線を送ると、少しだけリナが反応した。

「……そんなこと言っても許さないよ。ムゲン」

すごいジトーツとした視線が痛い。

「い、いやあ……ちよつとは加減したんだが……。ほら、「アレ」は使っていないしきー！」
リナは、はあ、と一つ息を吐くと、静かに微笑みながら言った。

「まったくと……。相手が無事だったから今回は許すけどさ、次回から模擬戦をしてもMSをダルマにするのはやめて。修理面倒なんだから……！」

「……これは言い返す言葉が見つからないな？ムゲン」

俺は手で頭を軽く掻きながら、ははは、と笑うしかない。

「話は変わるが、あのイーサンという男……。信用してもいいのか？」

道夜は真剣に俺を見つめる。こう……まじまじ見ると、成長してカッコよくなってるんだよなあ道夜……。とか思いつつ、とりあえずの言葉を返す。

「そうだなあ。まあ、信じないといけないさ。俺の部下だしな？」

「それも……そうか。俺も厄介な奴らが増えてな。ユーリですら手一杯だったのに……。」

「どんなヤツが？」

「あれだな。まず、俺を『様』付けで呼ぶエトワールってヤツと……。」

「ぷっ！あははは!!み、道夜様だって!!あつははは!!」

と、ユーリは大笑い。それに続いてリナも笑っている。道夜……お前本当に大変だな……。

「まあ、後は何か元氣すぎてむしろこっちが疲れる新人のオペレーター……」
「た、大変だな……お前さんも……」

声のトーンから分かる。初めての小隊長に加えて、個性的なメンバー……。こりやあ道夜も気苦労が耐えないな。見てるこっちが同情してしまう。

「……まあ、上の立場というのは分かったような気がする。フアングの気持ち少しだけな」

「かもなあ」

「さて、俺は小隊員の資料に目を通してくるわ。じゃあな」

「あ、私も行きますよー」

そう言って道夜とユーリは食堂から出て行った。

一時の静寂……。たまらず俺はリナに声をかける。

「な、なありナ」

「何?」

「……やっぱ、何でもねえや」

「そう?」

よく考えると、みんな随分成長した。もちろん、内面的なものもあるが、見た目も成長している。

道夜はだいぶ明るくなり、なるべく笑顔でいる努力をしてたり。

ユーリは、普段から何を考えているかわからないが、それでも前より皆と打ち解けている気がする。

そして、リナは前より大人びて髪が少し伸びただろうか。前よりも落ち着いた雰囲気を持つている。

「……さて、俺も小隊員の情報でも見てくるかな」

情報というのは、小隊の隊員の情報が載った資料がフアングさんからそれぞれの隊長に配られている。そのことだ。

「そっか。じゃあ私は整備でも行つてこようかな」

「おう。気をつけろよな？」

「わかつてるよー！」

俺は食堂を後に、自室へと戻った。

自室といつても、基地で割り振られた部屋ただけであつて、厳密に言えばそうではないのだが……。

椅子に腰かけた後、机に資料を広げる。そして目を通していく。

「ふむふむ。【ジョン・マクシード】、【クライス・ウッドフィール】。んで、問題の【イー

サン・マクラウド」…。これが小隊員か」

資料のページをめくり、目を通す。

「オペレーターは『マーフィー・コールマン』…ね」

全員知らない名前だった。まあ、知り合いがいるとは思えないし、当たり前なのだが。

「……まあ、こんなところか」

ひと段落して落ち着いていると、突然扉をノックする音が響いた。

「誰だ……？」

自然と扉は開き、そこに立っている人物は、俺を見据えた。

見た目は短髪黒髪で、瞳の色はここからではハッキリとは見えないが、たぶん茶色であろう。どことなく疲れている様子が見て取れる。

「お前さんは…マーフィーだったか」

「はい。本日着任しました。マーフィー・コールマンです」

「そっか。これからよろしくな！オペレーターさん！」

「は、はい……」

少しテンションについていけない様子だった。少しの沈黙の後、彼はこう切り出した。

「ムゲン隊長。これからのスケジュールですが……」

聞くだけで面倒な話だった。正直そういう堅苦しいのは苦手。しかし、小隊長になつたわけだし、仕方ないと思ひ耳を貸す。

「おう。話だけ聞くわ」

「……。心配だなあ……」

今なにか聞こえたような気がしたが、気のせいということにしておくか。

20:57 あれからマーフィーとスケジュールの話をしていたわけだが、非常に時間がかかった。気が付けば夕飯すら食べていない。

「さて……飯でも行くか。マーフィーも来いよ！この飯は旨いぞ？まあ、うちの戦艦ほどじゃあ無いけどな」

「は、はいー」

俺たちが部屋を出ようとしたときだった。突然の轟音ごうおん。そして辺りが暗くなる。

「な、な、なんです!?!」

めちやめちや動揺してるじゃねえか……。まあ新人だから当たり前だろうが……。しかし、それをゆつくり考える時ではないと俺の勘が告げた。

「……………いっは……………」

俺はどこかで待っていたのかもしれない。頭に響くほどの轟音。そして、爆発……。こ

れは間違いなく……。

「ムゲン!! ジオン残党が襲撃してきたぞ!!!」

タイミングよく道夜の声が飛び込んでくる。

「隊長……!」

「マーフィー。戦艦に行つて、部隊員に連絡を。俺は先に出る」

「で、ですが!!」

制止する彼の言葉を背に、俺は格納庫へと向かった。

この時を待っていたのかもしれない。

長い間、戦えず、飢えていた。

俺も……。ピクシーも……。

今……。俺はピクシーの前で立ち止まり小さく呟いた。

「さて……行くか……戦場へ」

22 完

23：炎のトリントン

宇宙世紀0083・10・13 21:00 旧ジオン軍残党デラーズ・フリートが奇襲攻撃。第00特務試験MS隊第一小隊長単機で戦線へ。

格納庫を出るとすでに辺りは炎が施設を飲み込んでいるところがちらほらと見えた。「くっ……ジオン……何が目的で……」

理由を考えながらもレーダーで周囲を確認するが、付近に敵影が見当たらない。

「……さてよ……今日は確か……新型戦艦が……」

俺の脳裏に一つの予感がよぎる。

「ムゲン隊長！」

無線から声が聞こえる。声の主はおそらくマーフィーだろう。

「なんだ？」

「敵の座標位置、送ります！言わなくてもわかるでしょうが相手の目的は新型戦艦の奇襲と思われませう！」

「やはりか……！新型艦の援護へ回る！他小隊は周囲警戒！第一小隊は後続を頼む！」
手短かに指示を送った後、俺は単機で敵の位置へと向かった。

「レーダーに敵影…数は3機か…!!」

目の前を見ると、今まさに戦艦を攻撃しようと武装を構えるザク。

しかし、この距離では間に合わない。射撃をしようにもマシンガンでは火力不足であった。

「……一番槍は、いただくぞ。ムゲン」

不意の無線。声の主は……道夜。そして彼は、素早く敵の懐へもぐりこみ、ジム・ストライカーのサイズが引き裂いた。

「おお!道夜、助かったぜ!」

「助けたつもりはない。それより、まだ来る……!」

「わかってる……まだ、ピクシーが暴れたりないとさ!」

「それじゃ、やってやるか」

「もちろんだ。相棒」

ジム・ストライカーと背中合わせになり、正面を見つめる。敵は…2、3機はいるだろうか。

「ムゲン。敵はザク程度だが、油断はするな…。やつら、手練れだぞ…!」

「そんなことは分かっているさ。こつちだつて死にたくはない…」

ピクシーのダガーを引き抜きながら小さく呟いた。

「う、うわああああ!!」

「隊長!! 友軍機の損害が…!!」

「ちっ! こつちだつて手が離せないんだ…!!」

それもそのはず、2機の相手を1機で相手しなければならぬのだ。

ダガーでヒートホークを受け止め、受け流す。そして反撃の一撃を叩き込む。

「1機仕留めた! くっ…!」

しかし、後続の機体がマシンガンを放ってくる。

「これ以上は…!」

「ムゲン、楽しそうだな?」

その声とともに1機のザクをビームが撃ち貫いていた。声の主は言うまでもなく…。

「…フアングさん! 助かるぜ!!」

「こつちは俺が相手する。ガンダムなら何とかなる!」

「俺の機体だつてガンダムなんだけどな…。まあ、ここは任せるぜ!」

フアングさんに後を任せて、戦艦付近の敵へ攻撃を開始する。

「ちっ…! …! …! この機体…! …! なぜガンダムが敵をする!!」

「道夜!」

見ると、道夜の機体と新型と思われるガンダムが鏝迫り合っている。

「貴様のような分別ぶんべつのない者に、我々の理想が分かるものか!!」

「お前……その声は……!!」

「道夜! 退け! そいつはやばい!!」

俺はマシンガンを連射し、道夜と相手の間を分かつ。

「すまん。ムゲン……しかし……こいつは……」

「ほお……少しは腕が立つようだな。しかし!!」

相手はバルカンを地面に乱射する。

「道夜! 散開して、挟み撃ちにする!」

「ああ!」

俺と道夜は左右に分かれ、ガンダムにマシンガンを放つ。

「我々の邪魔をするなああああ!」

ガンダムはサーベルを引き抜き、道夜の機体を盾で吹き飛ばした。

「ぐっ……!!」

「道夜!! てめえ……仲間をよくも……!!」

「ふん!」

「ガトール少佐!」

「ゲイリーか、作戦は成功だ!!」

今…ガトーという名を聞いた。それが間違いでないのなら…あのガンダムに乗っているのは……。

「ここから出すわけにはいかない!!」

そういつて、新たなガンダムが奴の前に立ちふさがった。

「な、なんだ…!?ガンダムが2機…!?!」

さすがに自分でも驚きが隠せない。まさか連邦は新型を2機も製造していたなんて……。

「2号機は俺がやります!下がってください!」

「ま、待て!君一人では無茶だ!俺も…!」

「ふん。小癩な真似を…。貴様…!」

「はっ……!」

「邪魔だあ!!」

2号機はサーベルでガンダムを攻撃する。それを何とか受け止めた1号機は、2号機の猛攻に耐え切れず転んでしまう。

「ちっ!見てられない…!」

「う、うわああああ!」

「ムゲン少尉！これ以上はグロリアスが……！砲撃に晒されています！ど、どうにかしなきゃ……！」

「落ち着け。道夜を回収してそちらへ向かう」

無線をガンダムのパイロットに繋ぐ。

「ガンダムのパイロット。こちらは第00特務試験MS隊所属、ムゲン・クロスフオード少尉だ。そのガンダムは任せる。すまないが、頼むぞ！」

「は、はい！」

俺は道夜の機体を回収後、戦艦グロリアスへと向かった。

母艦付近の格納庫へ来ると、こちらが既に敵に圧されつつあった。

「少尉！まずは正面の敵を！グロリアスをやらせてはなりません！」

「オーライ！任せときな！代わりに道夜を回収してやってくれ！」

俺は前進し、まずは正面のザクをマシンガンで撃ち抜く。

「第一小队！全機、散開して、敵を潰せ！」

「了解！」

3人から了解の声が聞こえ、俺は少しだけ安心した。再び正面に目をやる。正面に

は、敵が3、4機。その中に、見覚えのある機体があった。

黒いゲルググと、白いゲルググ……。おそらく、いや間違いなく奴らが指揮官だろう。「……全機！持ちこたえろ！指揮官機を潰す！」

俺はゲルググ2機めがけて移動する。狙うは2機だけ……！

「邪魔をするな!!」

道をふさぐザクを切り抜け、奴らを目指す。

「見えた！射程圏内!!」

俺は牽制にマシンガンを乱射。すぐさまダガーを引き抜き、黒いゲルググを切り裂こうとする。

しかし、黒いゲルググは待っていたかのように刀を引き抜き、ダガーを受ける。

ダガーと刀が鏝迫り合う形となる。

「くっ……!!」

あの速さに反応できる奴は、やはり一人しかいない……奴は……。

「久しいなあ！ムゲン君!!」

うるさい声。間違いない。

「カカサ……キヤモイ……!!」

「でも、邪魔するなら容赦はしないぜ？あ、少しくらいはしてあげてもいいよ？」

「ふんっ！そんな事言つてられるか？カカサ!!」

俺は刀を蹴り飛ばし、ゲルググにダガーを投げつける。しかし、寸での所でダガーは何者かの射撃により、防がれる。

「……………まったく。俺を忘れるとは言わせないぞ。ムゲンよ」

「……………やはり……クロノード・グレイス…!!」

白いゲルググは脚部のミサイルポッドとビームキャノンを放ってくる。

「ちっ…!!」

それを何とかすべて避け、ダガーを構えようとしたとき、背後から殺気を感じる。

「くっ!!」

すかさず振り向きダガーでクナイを受けきる。

「うわあ。さすがに早いねえ……。でも、これで終わりだ。ムゲン君よ」

「……………!!」

ビームライフルが背中に押し付けられる。負ける……!

「ぬおおおらあああ!!!!」

突然声が空から響き渡る。

そして、背後で轟音が響き渡り、ビームライフルを押し付けられている感覚がなくなる。

「な、なんだってんだ!? おーい! クロノード君! 無事かい?」

「……なんとかな……こいつは新型……みたいだな」

背後を振り向くと、フルアーマーのジムが大剣を構えている。

「おいおい……ムゲン・クロスフォード。情けないぞ? 俺に助けられるなんて……」

「……いやあ。悪い。助かったぜ、イーサン!」

「……ちつ調子のいいやつめ……!」

「……今回はここまでだな。離脱する。また会おう! ムゲン!」

そう言って2機は撤退していく。

「待ちやがれ!!」

「いっ」

追撃をかけようとするイーサンを、俺は止めた。

「なんでだよ!! お前は連邦だろう!」

「ああ。だから、今は母艦を守ることが先決だ」

「……ちつ!!」

悔しそうに、イーサンはうなだれているのが機体越しでもわかった。

21:46 連邦軍の残存MS小隊がRX-78GP02Aガンダム試作2号機サイリスの追撃開始

ラバン・カークス少尉戦死

0083.10.14

00:50 アナベル・ガトー少佐、RX-78GP02Aガンダム試作2号機サイリス積載のコムサイで宇宙への脱出を計るもRX-78GP01ガンダム試作1号機ゼファイランサスによって阻止

デイツク・アレン中尉戦死。カレント小隊全滅

06:20 バニング小隊、海岸線でRX-78GP02Aガンダム試作2号機サイリスと交戦。

アナベル・ガトー少佐とRX-78GP02Aガンダム試作2号機サイリスはU-801ユークロンに回収され脱出に成功。アフリカへ向かう。

それから20分くらいしただろうか、新型のガンダムが海岸線から戻ってきた。

ガンダムは無傷というのは無理だが、軽傷で済んでいそうな見た目だった。

さすがの唐突な奇襲で、こちらの兵も疲れ、戦艦も損傷している状態。することのない俺は、新型ガンダムのパイロットに接触を試みることにした。

新型の足元に行くと、丁度機体からパイロットが降りてくるところであった。

「よっ！追撃お疲れさん」

「……あ。どうも……」

「さつきは助かったぜ、あの機体の注意を引き付けてくれて。おかげでこっちが守りきれたよ」

「……」

「おっと、自己紹介がまだだったな……。俺は……」

「ムゲン・クロスフォード少尉ですよね？」

「ん……？面白いや言つてたっけか……」

「それもありますが……一年戦争を生き残った部隊の隊員と、連邦軍では有名ですよ」

「……そ、それはそれは……」

自分が有名とは、少し恥ずかしい気もする。

「自分は連邦軍所属、コウ・ウラキ少尉であります！」

ビシツツと敬礼してみせるコウ。

「ま、まあ階級は同じだし、そんな堅苦しくしなくて問題ないさ」

「は、はい……」

「あー……少し時間あるか？ゆっくり話でもしようぜ？」

「わかりました。ただ、少し疲れたので、仮眠してからでもいいですか？」
「おっと、そうだったな。そうだな、ゆっくり休め。俺は、あのペガサス級を母艦にして
るから、いつでも来い。待つてゐるぜ？」

そう言い残して、俺は母艦へと足を向けた。

23 完

24：戦いの意味

宇宙世紀0083. 10. 14 00:50 アナベル・ガトー少佐、RX-78GP02Aガンダム試作2号機サイサリス積載のコムサイで宇宙への脱出を計るもRX-78GP01ガンダム試作1号機ゼフィランサスによって阻止

デイツク・アレン中尉戦死。カレント小隊全滅

06:20 バニング小隊、海岸線でRX-78GP02Aガンダム試作2号機サイサリスと交戦。アナベル・ガトー少佐とRX-78GP02Aガンダム試作2号機サイサリスはU-801キューコンに回収され脱出に成功。

アフリカへ向かう

10:51 ジャブローのジョン・コーウェン中将より、アルビオンのエイパー・シナプス艦長にRX-78GP02Aガンダム試作2号機サイサリス奪還命令

MS3機、パイロット3名アルビオンに補充。

コウ・ウラキ少尉、ベルナルド・モンシア中尉とRX-78GP01ガンダム試作1号機ゼフィランサスをかけ模擬戦

11:00 ムゲン・クロスフォード少尉、コウ・ウラキ少尉と会談。

その後、三時間ほど仮眠を取った後、基地の食堂で、コウ・ウラキ少尉と話をしていた。

「……それで、ムゲンさんの機体って、地上戦用の近接機ですよね？」

「……あ、ああ……そうだね……」

彼がこれほどまでにMSマニアとは知らなかった。そのせいで少しだけ口調が変わってしまう。

「やっぱりだ！しかも、あの感じだと、1機か2機後の新型ですよね？」

「……うん。当たり前だ……！」

「予想通りです。あ、まだ聞きたいことがあって……」

「うん？なんだい？」

「どうすればムゲンさんのようなパイロットになれますか!?!やっぱり、好き嫌いとかないんですか？」

「……う、うーん……そうだなあ……」

さすがに唐突すぎて返答に困ってしまう。

それに、言い方は悪いが、運良く生き残れているだけであって、特別なことなど何一つしていないのだから。

「と、とりあえずあれだね。好き嫌いは無いよ……」

と、苦笑しながら答えた。

「へー……。やつぱりかあ……」

「……いわゆるエースパイロットになるためには、いろいろ経験することだと思う」
「なるほど……」

俺が次の言葉を発しようとしたとき、入り口から大声で叫ぶ声。

「経験？……何言ってるんだお前……」

「……何……？」

声の主を見ると、イーサンであった。……面倒な相手だ。

「お前は経験以前の問題だ」

俺を指さし叫ぶ。

「お前からは戦いをするオーラがまったく感じられねえ……。お前だけぬるま湯に漬かっているようなもんだ」

「なんだと……!!」

頭に来た俺はイーサンの胸ぐらをつかむ。

しかし、イーサンは余裕の表情で続ける。

「上官つてのはすぐ手を挙げたがるよなあ……。てめえに教えてやるよ。今のてめえにな

ら負けねえ…。もう一度俺と模擬戦をしてみろ」
「……」

周囲の視線が一身に集まる。ここで受けないわけにはいかない。俺自身も苦勞しているということを彼に見せつけねばならないと思った。

機体に取り込み、基地から一キロほど離れた場所で演習は行われる。

機体と機体が向き合う。

「ムゲン！今のお前に、俺は倒せねえよ！」

「言ってくれるな……！後で後悔するなよ……!!」

機体のスラスターを起動し、すばやく相手の懐へ潜り込む。そして、ダガーを引き抜き正面を切る。

しかし、既にイーサンは正面にはおらず、少し焦りを感じながらもリーダーを確認。見ると背後に反応。

素早く振り向き、相手との間合いをとる。

「ほら。遅い斬撃だ。これが一年戦争の生き残りの実力かあ？笑わせるなよ!!」

イーサンは大型のヒートブレイドを振り上げ、叩き潰してくるであろうと直感で感じた。

それに対応するため、まずは右へ回避、そこから武器を蹴り上げ一気に射程に持ち込む。頭で作戦を組み立て、行動に移す。

「まずは……み……!?!」

謎の衝撃で機体が吹き飛ばされる。そして、左腕が動かない。頭での状況処理が間に合わない。

「終わりだな……」

片膝をついたピクシーの前に、大型の剣を持ったジムが立ちふさがった。

そしてジムは、俺とピクシーをあざ笑うかのように見下ろしている。

「くっ……!」

「ほら。結果こうなった。てめえには、強さの本質が見当たらねえんだよ」

「……強さの……本質……?」

「そうだ。お前はなぜ戦う?意味もなく戦うお前は、いったい何がしたいんだ?」

「お、俺は……意味もなく戦っているわけでは……!」

言い返そうとする言葉に力が入らない。

「いいや。お前からは戦う闘志が感じられないんだよ。過去の栄光、理想にしがみついてばかりで、今を見れちゃいねえ」

「……そ、そんなことは……!」

「確かにてめえは一年戦争を生き残ったのかもしれないねえ。けどな、今のままじゃてめえは確実に死ぬ。いや、俺が殺しちゃうかもなあ？」

と、挑発気味に笑いながらイーサンは言う。

「お前に殺されるほど…俺は……」

「甘くはないってか？冗談きついで。この状況になってまで言えるとか、どんだけ甘いんだよお前」

「くっ……!!」

言い返す言葉がない。確かにそうだ。あれが本当の戦闘だったら自分は死んでいた。

しかし、それでも、ここまで言われる筋合いはない。

「だが俺には、しなければならぬことがあるんだ……!」

「それ、理想だろ？」

「……!」

「現実も見れない奴が、高いところに止まって理想語ってるんじゃないやねえよ」

「いいか？理想を持つのは構わねえ。けどな、てめえがすべきことは理想をかなえることじゃねえ」

「目の前の現実を受け止めることだろうか」

「目の前の……」

「だからてめえには闘志が感じられねえ。正直ガツカリだぜ。一年戦争を生き残った奴が、くだらない理想にしがみついた性根しょうねの腐った奴だとはな!!」

「……」

「戦う意味も、現実も見れないお前に、今の俺は倒せねえ。いや、敵すら倒せねえよ」

「な……な……」

「お前。軍やめちまえよ」

「……!!!」

その言葉が俺の脳を貫いた。

「てめえがいたら、部隊が全滅しちまう。さっさとやめるんだな」

そう言いながら、ジムは背を向け歩き出す。

それを俺はただ見つめることしかできなかつた。

それから、俺の頭の中で、イーサンの言葉が何度もよみがえってくる。

『お前からは戦う闘志が感じられないんだよ。過去の栄光、理想にしがみついてばかりで、今を見れちやいねえ』

「……」

理解はしたくても、認めたくはない。

『一年戦争を生き残った奴が、くだらない理想にしがみついた性根の腐った奴だとはな
!!』

グレイとの理想は……くだらないのか……？

自分には何が足りないのだろう……。俺とは……なんなんだ……？

考えれば考えるほどわからない。

俺は、グレイとの約束をかなえるためだけに戦っている。

でもそれは現実では到底無理なこと……。

現………実………？

じゃあ俺の戦う意味は何なんだ……？

俺って一体何なんだよ……。誰か……。

「ゲン……!!ムゲン!!!」

「はっ……！」

現実に引き戻してくれたのは、リナの声であった。

「だ、大丈夫？ぼーっとしてるよ？」

「……あ、ああ……」

リナは少し微笑んだ後、俺の隣に腰かけて

「どうしたの？悩んでるの？」

と、優しく声をかけてくれる。

「……あ、ああ……」

「どんなこと？教えて!!」

目をキラキラとさせながら、リナは俺の答えを待っている。

誰かに打ち明けたほうが少しは気が晴れると思った。だからリナにあったことを話した。

「なるほど……」

「どう……思う？」

「どうも何も。確かに、ムゲンは理想にしがみついて、戦う理由がない」

「やっぱり……か……」

答えを聞いて少しだけへこんだ。

「でも、ね？戦う理由がないなら、作ればいいんじゃないかな」

「……戦う理由……？そんなもの……」

「あー！それだよ！ムゲンの悪いところ！弱気になることもネガティブになる！」

「…………でもさ…………いきなり見つけるなんて…」

「誰もいきなり見つける。なんて言わないよ！ゆっくり探して見つければいいんじゃないかな？」

「…………あ、ああ…………」

「ムゲンが願う理想も、時には必要だって私は思うんだ」

「理想が…………？」

「うん。イーサンって人も言ってたじゃない？理想を持つことが悪いわけではないって」

「…………ああ…………」

「人はさ、本当につらくなったり、頼れるものがなくなると、いないはずの神さまとか、偶像だって作り出すんだよ」

「だからね、人は理想、夢を持つことは正しいことだと思うんだ」

「…………」

「ムゲンは、理想も、戦う理由も、どちらもを共存させるようになればいいんだよ！」
「難しいな…………」

そう言った後、小さく溜息を吐く。それを見たりナは、さらにつづけた。

「人ってさ、変わるのには時間がかかるから」

「でも、俺は3年も経っているのに全く変わっていない。でも、無理して変えてた……」
「うん。無理して変えたら体が持たないよ。ムゲンはムゲンのペースで変わればいいんだよ」

「……」

「ムゲンはね、わたしとか、ほかの皆より変わるタイミングと、気づくのがちよつと遅いだけ。あと、周りに流されすぎ！もう少し自分の意志で動かなきゃ！」

「……」

「……一人で変わるのには難しいから、皆でがんばる？」

リナは優しく微笑む。

その優しさに、胸が詰まる。

「……頑張ってみるよ……」

「うん！その気持ちが変わるための第一歩だよ！」

リナと話したおかげで少しだけ気分が晴れたが、しかし、それでもイーサンの言葉が俺の頭からは離れない。

考えることに夢中になっていたのか、気づくと、格納庫の自分の機体の前にいた。

ピクシーは左腕が損傷し、吹き飛ばされた反動で、全身が汚れている。その顔はどこか悲しげで、見ているとこちらまで悲しくなってくる。

「おっ！小隊長じゃないかあ！」

背後から少し老けた男性の声が聞こえ。振り返ってみる。

「あ、トクナガさん……」

「おう！どうした！元氣ないな！」

この元氣なおじさんは、ダイチ・トクナガ。第00特務試験MS隊の整備長を務めている。そして、リナの親代わりでもある。

「……いえ……」

「そうかあ。ならしいんだ！」

そう言つて踵きびすを返そうとする彼に、俺は

「あの……！」

止めた。

「ん？」

「トクナガさんは、理想だけで戦う人をどう思いますか……？」

トクナガさんは静かに考え、しばらくすると、口を開いた。

「いいんじゃないか？」

「え……………」

「人つてのは、一人一人違うもんだ。だから、何を考えて、なんのために戦うか。それは理想だつて戦う理由に入るんじゃないか？」

「…」

「その理想のために戦うつてのは良い事だ。でも、それだけじゃ駄目だ」

「え……………」

「理想だけで戦うと、疲れちまうよ。だつて、大きい夢なんだから」

「……………」

「だから、小さい目標つてのを見つけること。これが一番大切だと思うぞ？」

「小さい目標……………」

「……………君、いくつだ？」

「…19です…」

「まだ人生始まったばかりじゃねえか！だつたらなおさらだ！」

「え……………」

「若いつてことはそんだけ夢を見れる。小さい目標だつていくらでも見つけられる」

「俺の歳になるとな、そういう若い連中を見守ることが、生きる理由だからな」

「…そうなんでしょうか…」

「そうだ。過去の戦争を引き起こしたのは、お前やリナが生まれる前の人たちだ。歳食った連中はな、それを繰り返させないために語り継いでいるんだ」

「……」

「ムゲン君。理想があるならそれに突っ走れ！そして、どんな小さなことでも構わない。理想以外に戦う理由を見つけれ」

「戦う…理由…」

「俺が言ってる戦う理由は、戦闘だけじゃない。君が、これから生きていくうえで、人生という敵に立ち向かうための戦う理由を見つけるんだ」

「…人生…」

「人は、一人では生きていけないという言葉があつてな。知ってるか？」

「……いえ…」

「人つてのは、必ずどこかで他の人を助け、助けてもらっているんだよ」

「だから、ムゲン君。君はもう少し人を頼ってもいいんじゃないかな？」

「……」

トクナガさんと別れた後、部屋に戻り、さつきまでの言葉を繰り返し聞き、考えていた。

俺は……どうすればいいのだろう……。

わからない……。

まるで出口のない迷路を地図も持たず歩いているような気分だ。

「俺が……戦う理由……」

……考えれば考えるほど、わからなくなっていく。

人は……いや、自分自身の存在価値を見つけないというのは……本当に難しい……。

24 完

25：転落

宇宙世紀0083・10・14 17：40 アルビオン、RX-78GP02Aガンダム試作2号機サイサリス奪還作戦のため、アフリカに向け、トリントン基地を出航
0083・11・1 15：30 第00特務試験MS隊、デラーズフリート地上部隊の掃討の任を受ける。

俺たちは地上部隊の掃討作戦の説明のため、艦橋へと集まっていた。

「作戦を説明するぜ！」

「俺たち第00特務試験MS隊は現在、トリントン基地から出撃し、現在敵が潜伏しているであろう北米大陸へと向かっている」

「移動期間はおおよそ6日くらいだな」

「そんなに掛かるものなのか？」

道夜が不思議そうに言う。

「いや、実際はそれほど時間は掛からないだろうが、何があるかはわからないからな」

「……なるほどな」

「それじゃ、後は現地で説明するつもりだから、各小隊は隊長の指示で解散してくれ。以上だ！」

「了解！」

第一小隊のメンバーが俺の目の前に立つ。もちろんイーサンもいる。

「……第一小隊は……今は特にないな。よし、作戦は現地でする。解散してくれ」

「了解です！」

そう言つて、オペレーターのマーフィーは艦橋の椅子に腰かけ、ほかの二人は艦橋を後にした。

そしてイーサンは、ちいさく舌打ちした後、艦橋から出て行つた。

「……ふう……」

「お疲れですか？ムゲン隊長」

と、マーフィーが作業をしながら聞いてくる。

「ああ。昨日はやけに眠れなくてな……」

「昨日というか、最近ずっとじゃないですか。どうしましたか？」

「……いや、気にしないでいいさ」

「……で、ですが……」

「…ま、お前さんも頑張れよ！」

艦橋を出た後、ふと、何かを思い食堂へと向かった。

食堂に入ると、少女が一人、椅子に座ってコーヒーを飲んでいる。

遠目からだが、短髪で茶髪。目は、たぶん黒であろう。

顔は可愛い。何と言えればいいのか。見ていると安心させられる。

「……うっ……苦しい……」

どうやら苦かったようだ……。

俺はそれとなく、コーヒーを入れた後、ガムシロップを自分のと合わせて2個持ち、彼女の正面に立つ。

「前、いいかい？」

「あ……は、はい」

少し緊張しているが、俺は気にせず腰を掛ける。

「ほれ、こいつを入れないと苦すぎないか？」

そう言つてガムシロップを1個差し出す。

「……これは……？」

「……まああれだな、砂糖のシロップだ。入れると丁度良くなる」

「…な、なんで…?」

「いや、さつき苦いって言ってたから…」

「はっ…!」

思い出したのか、急に彼女は顔が真っ赤になる。

「ま、なんでもいいさ。入れてみな?」

「は、はい…」

彼女はシロップをコーヒーに入れる。スプーンでコーヒーを混ぜた後、一口。

「あ……。甘い」

彼女に笑顔が出てくる。

「そりゃあよかった」

「…あ、あの…」

「うん?」

「エミリー・ブライトウエル軍曹です! 第3小隊のオペレーターをしています!」

「……俺はムゲン・クロスフォードだ。第一小隊で、一応小隊長を務めている」

エミリーは深くお辞儀をした後、再び席についた。

それから、しばらくは他愛のない会話で盛り上がった。

ふと、俺は、自分が悩んでいる話を、エミリーにも聞いてみる。

「……エミリー」

「はい！」

「聞きたいことがあるんだが、いいかい？」

「いいですよ！」

「……エミリーは、理想だけで戦う人をどう思う？」

「…理想…ですか」

「ああ」

「…そういう人は、なんか…形がない気がします…」

「と、いうと……？」

「えっと、なんて言うか。流されてばかりいそうで…」

「そうか…」

「あ、あ！悪く言うつもりはないんですよ！」

「いや、わかってる。聞いただけだから」

「……理想だけではだめだと思っんです」

「どうして？」

「だって、理想は、人が心に描き求め続ける、それ以上望むところのない完全なもの。そうあってほしいと思う最高の状態ですから」

「確かに理想は必要です。理想は高くとも言いませうし」

「でも、理想だけだったら、疲れちやいます…。たぶん、苦しくて投げ出してしまおうと思います…。自分だったら…」

「…：…：そっか」

「大きな理想のために、小さな目標を立てて戦う人なら、わたしはその人を尊敬します」

「…：エミリーには理想はあるのかい？」

「…：…：そりゃありますよ！」

「どんなんだい？」

「パパ…：…、お父さんと会うことです」

「お父さん…：？」

「はい。昔、私が小さいころ、ある事故でお父さんと離れ離れになってしまつて。その時にお母さんは亡くなつて…」

「…：そっか…。大変だったな…」

「いいえ！お父さんは生きています！そう信じて今までずっとやってこれました！」

「だから…：…お父さんに会うことが、わたしにとつての理想です」

「そのために、連邦のオペレーターになつたんですし…：」

「どんな人なんだい？そのお父さんは」

「臙げですけど、とてもやさしく、温かかった記憶があります」

「…そうか…：…いいお父さんだったんだな」

「はい。それで、お父さんなんですけど!」

エミリーが父の話をするときには、子供のように目がキラキラと輝いていて、それだけ信頼しているのだと分かる。

「第一小隊に、イーサンというパイロットがいますよね…?」

「ああ。いるぞ」

「えっと、じゃあ伝言を…：…」

突然船が揺れる。俺はエミリーの手をつかみ、揺れが収まるのを待つ。

「…：…な、なんだったんでしようか…：」

「…：MSだ」

「え?ここ、空中ですよ!?!」

「落とされたか。それか、バレたから着陸したかのどちらかだな」

「…：わたし、ブリッジに戻ります!」

「ああ。俺は格納庫へ行く!」

「はい!」

エミリーは足早に去っていった。

俺は急いで格納庫へ向かう。

「ムゲン！」

俺に気づいたリナが叫ぶ。

「何があつた!?!」

「船が緊急着陸したの! たぶん、MSの攻撃で…!」

「やはりか…。先に出撃する! MSを出してくれ!」

「で、でも! ピクシーは左腕がまだ治ってない…!」

「いいから出すんだ!」

「……わかった。生きて帰ってきてね…」

リナはしぶしぶながらMSのハッチを開く。

俺は急いで機体に乗り込む。

システムを起動しながら無線で艦橋に通信を送る。

「艦長! ムゲン・クロスフォード少尉だ。出撃させてくれ!」

「なんだと!?! だ、だめだ! 出撃は許可できない!」

「何故だ!?!」

「今、第4、第3の出撃準備をさせている。ムゲン少尉が出る必要はない」

「だ、だが…!!」

「以上だ。通信終わる」

「……………くっ……………」

強引に通信を切られてしまった。

「ムゲン……………」

「……………」

このまま待つていれば、グロリアスが被害を受けるのは目に見えている…。それを黙ってみているわけにはいかなかった。

「リナ。出撃ハッチを開けて」

「え…!?でも、出撃は……………」

「いいから開けるんだ!」

「……………。わかった……………」

ハッチが開き、俺は、機体を移動させ、出撃する。

戦場に出る。目視で確認できるのは3機ほど。

「この数ならいける……………」

早速移動し、1機のザクを発見と同時に、マシンガンで牽制。

ザクは素早く回避し、反撃とバズーカを放つ。

「見えた！そこだな!!」

ダガーを引き抜き、バズーカの砲弾を真つ二つにした後、そのまま流れるように敵を切り裂いた。

「よし、次だな！」

ザクの爆発に気づいた敵兵が、こちらへと足を向ける。

「予想通りだな……」

今頃になって、第3小隊が出撃する。

「ムゲン、何故お前が戦っている!?!」

道夜からの通信。俺は軽く笑いながら言った。

「グロリアスに被害を負わせるわけにはいかないからな……!」

「命令無視は痛いぞ……?」

「わーってるよ。行くぞ！」

俺は道夜と合流し、残りの敵を掃討した。

「……。もう大丈夫だろうか……」

「各機に次ぐ！現在本艦は、敵からの被害を受けた。しかし、MS隊の迅速な行動により、その危機を脱した」

「ダメージが軽微ではあるものの、しばらくの間この付近に潜伏し、修復を行う。MS隊は帰還後、自由に行動してくれ」

「この付近には小さな町がある。そこで買い物をするのもいいだろう。出航予定は明日の夜だ。以上！」

「よし、第3小隊帰投する」

全員が撤退しようとするところ、レーダーに反応。1機だけであつたが、撤退しようとしているようだ。

「まだ…いる！」

「ムゲン!？」

俺は敵に突撃、敵をダガーで切ろうとした瞬間。横からの衝撃。

「ぐああああ!？」

見て気づいた、囧だったのだと。

「くっ…!？」

左腕が動かず、うまく立ち上がれない。

ザクがヒートホークを振り上げる。

「駄目なのか!？」

目を瞑る。もうだめなのか…!

しばらくしても何も起きない。恐る恐る目を開くと……

「……………」

ジムスナイパーが正面からヒートホークを受け、ヒートホークが刺さったまま、相手コックピットにサーベルを刺していた。

「ユ、ユーリ!?!」

「……………ム……ムゲンさんは……死なせま……せんよ……………」

「ユーリ! しつかりしろ!!! ユーリ!!!」

道夜が寄ってくる。

「大丈夫……だいじょ……………」

「ユーリイイイイ!!!」

「ユーリ!!!」

敵はこちらの数に気づき、撤退していく。

俺たちはユーリの機体を連れ、母艦へ帰還した。

「ぐっ……!!」

機体から降りた後、道夜に一発殴られた。

「すまない……。道夜……」

「お前があんな無茶しなければユーリはあんなケガを負わないで済んだんだぞ…!!」
道夜は怒りを露わにし、手は震えるほど強く握っている。

「……す、すまない……」

「すまないだと……!!? そんなので許されるものか!？」

「……」

「お前一人の行動で、小隊員が被害を受けたんだぞ!? それをすまないで済ませるのか!？」
「そ、そういうわけでは……」

「3年経ったあの時から、確かにリナやユーリ、この部隊は成長した。だがお前は何も変わっちゃいない!!」

「……!!」

「お前の甘さで、その無鉄砲な戦い方のせいで、今度は俺が、皆が死ぬかもしれない!!」
「だから……。この際はつきり言わせてもらう。……ムゲン」

「……な、なんだ……」

「お前がいなくても、俺たちは戦える。正直今のお前は邪魔以外の何でもないんだ!!」
全身から崩れ落ちそうなほど苦しい。俺は……この部隊には必要なのか……?」

「……わかるかった……。すまなかつた……」

ただ謝ることしかできない自分を、呪った。

「お前はもつと冷静だと思っていたんだがな。ガツカリだよ。……本当にな」
 「……」

道夜からの冷たい視線が痛い。

「お前さえ……いなければ……。あの時出撃さえしてなければ!!」
 「……!!」

「今のお前に、俺たちのことなんて見えてないんだろう!？」

「そんなことは……!!」

「だったら!!」

「……!」

「だったらなぜ、仲間を傷つけるようなことをした!？」

「……」

言い返す言葉も出ない。

「何故仲間の言葉を聞かなかった!?なぜ俺たちと行動を共にしなかった!!!!」

「……」

「何とか言えよ!!!ムゲン!!!」

彼は俺の胸ぐらをつかむ。彼の瞳は、怒りに満ちていた。

「……すまん……」

「俺はお前から謝りを聞くために聞いてるんじゃない!!」

「俺たちはそんなに頼りないか!? リナも、俺も! 部隊全員が頼りないってのか!?」

「ち、違う! そんなことは……!」

「だったら何故俺たちの言葉に耳を貸さない!?」

「……!」

「無意識だったから、だから許されるなんて思うな!」

「俺は……お前を信頼していたんだぞ!?」

「俺だけじゃない。リナや、フアング、この部隊の全員がお前を信頼していたのに!」

「……お、俺は……」

「何も見えていないじゃないか! お前だけが!! 現実を見せてないじゃないか!!!」

そして、再び彼の言葉が蘇る。

『お前。軍やめちまえよ』

「……ごめん……。本当に……」

彼は胸ぐらを掴む手を緩める。

「……すまん……。言い過ぎた。少し頭を冷やしてくる」

そう言つて去つていく道夜の背中中、今まで見たどんな時よりも悲しく見えた。

26：変化の時

宇宙世紀0083・11・1 ムゲン・クロスフォード少尉無断での脱走。それに対し、艦の全クルーは黙認。

「ムゲン……………!!」

リナの声が聞こえた。でも、今の俺は振り返ることなんてできない。

彼女の言葉を無視し、俺は一人で艦の外へ出る。

外は大雨だった。機体に乗っていた時は気づかなかったが…。

「……………」

頭の中で彼らの言葉が反響する。

『現実も見れない奴が、高いところに止まって理想語ってるんじゃないやねえよ』

「……………現実が見れていない……………」

『てめえがいたら、部隊が全滅しちまう。さっさとやめるんだな』

「……………俺は……………もう……………戦いたくない……………」

雨とともに、流れる涙。だんだんと体が冷えていく。

ふらふらと歩いて、歩きついたのは、小さな町であった。

雨のせいで外に出ている人は誰もいない。

「……………」

正面に黒いローブを着た青年が立っている。

「……………ムゲンじゃないか。どうしたんだい？」

いつもより静かな力カサだった。

「……………俺は……………もう戦いたくない」

「なんで？」

「……………俺のせいで、仲間が怪我をした。俺が命令さえ守っていれば…」

「そう思うのなら、何故そんなことをした？」

「……………後悔は先には立たない…」

「それだけか？本当に」

「……………？」

「俺から見れば、今の君は誰からも信頼されていないように見えるよ」

「人の命令も聞かず、人の制止すら無視して、ここに来た。何故だ？」

言葉が頭の中で繰り返される。

『お前があんな無茶しなければユーリはあんなケガを負わないで済んだんだぞ…!!』

『ムゲン少尉が出る必要はない』

『ムゲン……!!』

「……」

「今の君は、昔よりもひどいと思うよ？ いや、生まれる前よりも……」

「……俺なんか……」

「……うん？」

「俺なんかはどうしろってんだ!! これ以上何をすればいいんだよ!!」

「全部、全部俺が悪いのか!? お、俺さえ、俺さえいなければ、皆幸せなのかよ!」

肩で息をする俺にカカサは静かに口を開いた。

「……きつい言い方になるけど、一つ言っておくよ」

「今の君は、いるよりいないほうが皆ずつと幸せだ」

「……!!!」

「自分自身を自虐し、現実を受け入れない君は、必要ないと。みんな言うだろう」

「……」

「おっと、時間だ。クロノード君にパンを買って来いって頼まれてたんだっ! それじゃ、ゆつくり楽しんで? ムゲン君よ」

そう言って踵を返すカカサ。去り際に一言だけ言った。

「変わるの待つのじゃない。自分で変わらないといけないんじゃないかな？」

「……俺は……俺にどうしろっていうんだよ……!!」

雨空を見上げ叫ぶ。

「どうしたらいいんだよ！俺はどうすればいいんだよ!!!」

そのうち虚しくなって。ただ悲しくて。

「……くそつ……くそつ！くそおおお!!!」

涙だつて雨に溶けて。混ざつて地面に落ちていく。

今になって、殴られた頬が染みる。

「っ……」

ユーリは……無事だろうか……。

結局、俺は何一つ見えてなかった。3年もの間、彼らを……。そして、自分自身を見ていなかった。

分かってはいたんだ。……皆が成長していく中、俺だけは昔と変わってないことくらい。

だから、無我夢中で理由もなく戦って。皆が喜んでくれるから、それだけで…。

グレイとの約束を叶えるためにも必死になって。……でも、変われなかった。

何一つ……。変わっちゃいなかった。

ただ、必要とされたくて。

形をそのたび変えて必死に頑張ったのに……。

必要とされなくなつて気づいた。

必要としてくれていた彼らの存在。

『人つてのは、必ずどこかで他の人を助け、助けてもらっているんだよ』

……変わる機会が欲しかった。きつとどこかで望んでいたんだ。

『3年経ったあの時から、確かにリナやユーリ、この部隊は成長した。だがお前は何も変わっちゃいない!!』

そうだ。だから変わりがかった。

皆から必要とされたかったから。

なのに……。

まだ変われない。……俺はどうすればいい？

「おい。坊主」

「え……？」

唐突に声を掛けられ、驚いた。

「ずぶ濡れじゃないか。こっちに来い」

「……で、でも……」

「おら、大人の言うことには素直に聞くもんだぞ」

「……は、はい……」

案内されたのは、丘の上にある小さな孤児院であつた。

「……（ん）は……」

「俺が営んでる孤児院だ。雨だからな、外にはいねえけど、部屋でガキ共は遊んでい

よ」

そう言つて扉を開く。

「おう！ 帰つたぞー！」

「「おかえり！ 待つてたよヘンリー！！」」

子供たちが彼の近くに寄つてくる。

「ほれ、お前も入つてこい」

「……は、はい……」

タオルで頭を拭いた後、席にすすめられ、腰を下ろす。

「……」

「コーヒーでいいか？」

「い、いえ……。はい……」

「そうだ。大人の言うことを聞くのも、子供の仕事さ」

「……そうでしょうか……」

彼はコーヒーカップを一つ、俺に差し出してくれる。それを受け取り、静かに一口。

「そうだ。そして、子供ってというのは、大人から聞いたことを活かして成長するんだ」

「……」

「お前、親いないだろ」

「……わかりますか？」

「ああ。俺と同じ感じがするよ」

「……俺にはわかりません」

すると彼は笑って言った。

「いつか、こうやって坊主が逆に言う立場になるかもしれないぞ？」

「……そうでしょうか……。未来のことなんか……」

「ああ。わからねえよ。けどな、未来を見れたら、それこそつまらなくないか？」

「……そう、ですね……」

「服から見るに、連邦軍だな」

「はい……」

「ちよつとした訳ありっぽいが、まあ、雨が止むまでここにいればいいさ」

「ありがとうございます…」

「……あの……」

「うん？」

「どうして孤児院なんかを……？」

「そうだな。俺みたいな奴をこれ以上増やさないため……つてのは言い過ぎだが」

「理想……ですか……」

「まあ、最終的にはそうだな。でも、理由なんか簡単だ」

「……寂しいだろ？」

「え……？」

「一人じゃ寂しいだろ？それだけだよ」

「……」

「大人だって人恋しいときがあるんだ。子供はその何倍もそれを感じるだろう。だから、一人じゃない」

「子供たちが仲良く一緒にいられる場所って、ここに孤児院を立てたんだ」

「……立派……ですね……」

「いいや。本当のところ、最初は子供を育てて、成長したら、売ろうかと思ってた」

「……！」

「驚くのは当たり前だ。だがな？」

「人つてのは変わるもんでな」

「ずーっとガキたちといたら、なんか、そんなことどうでもよくなつて。むしろ、こいつらを守らなきゃつて思つちまつてよ」

「だから、今はもうそんなことは一切考えてない」

彼は、遊んでいる子供たちに目をやる。彼の瞳は、俺が知っている父の瞳をしていた。「坊主に何があつたか、俺には見当もつかないが、まだ若い。変われるチャンスはいくらでもあるんだ」

「……一つ……聞いていいですか……？」

「なんだ？」

「俺……仲間に必要ないつて言われたんです」

「どうして？」

それから、彼にすべてを打ち明けた。すると、彼はしばらく考えた後

「なるほどな」

「……俺は……どうすればいいんでしょうか……」

「なあ、坊主」

「はい……?」

「もう少し、視野を広くしたほうがいい」

「え……?」

「戦う理由なんか、いくらだって見つかる」

「そんな……!俺は……まだ……!」

「ああ。もう少し、広くモノを見、そして、言葉を聞け。そして学ぶんだ」

「学ぶ……」

「坊主が知らないこと、そして、いろいろな人間がこの世界にはたくさんいる。それを、少しずつ学ぶんだ」

「何故戦うかじゃない。なんのために戦うか。そう考えればいい。理想を求めて進んでいたら、勝手に理由はついてくるさ」

「……でも、わかりません……。俺には……」

「人間、わからないことばかりで、無力だ。だが、人間は一人じゃない」

「一人じゃないからこそ、大きな理想も、夢も、力にできる。知らないことを識^しれる」

「坊主。人って漢字を知ってるか?」

「え、ええ……一応……。昔の文字ですよね?」

「ああ。これが人」

そうやって彼は紙に『人』という漢字を書いてみせる。

「……へんな形ですね……」

「だろう？昔の人はこんな字で書いていたそうだよ。まあ、今も使われてはいるがね」

「……それで、これが……？」

「この字には意味があるんだ」

「……意味……？」

「ああ。人つてのは、2本の線でできている。よく見れば、人が人を助けているように見えるだろう？」

「……そうですね」

「人はな、一人じゃ絶対に生きていけない。坊主も、一人じゃ生きていけない。俺もそう
だ」

「でも……」

「確かに、結局は一人と言うかもしれない。しかし、この頭に、この心に、まだその声が
残っている」

「……心……」

「ああ。人間だけが持つてる唯一の力……。それが心」

「坊主。お前が倒れそうなとき、周りに誰が居てくれた？」

「お前が悲しいとき、誰が近くにいてくれた？」

「逆に、誰かが悲しいとき、お前は近くにいてやれたか？」

「それだけで、人は分かりあえる」

「……俺は……」

「じゃあ、お前は どうする？」

「今ここで逃げ出して、大切な繋がりを消してしまうのか？」

「……俺は……！」

トントン。唐突に扉をノックする音。

「ほら、迎えが来たんじゃないか？」

「え……？」

彼が扉を開くと、そこには、ずぶ濡れになったリナがいた。

「リナ……」

「……えつと……」

「言わなくてもわかる。嬢ちゃん、こいつを探してたんだろ？」

「……はい……」

「じゃ、連れ帰って思いつきり引っぱたいてやれ。寂しい思いをさせるなってな」

「……はい！」

「……えつと……なんてお礼を言えば……」

「礼なんかいらねえだろ。人はお互い助け合うもんだ。それに、子供が間違った道を進んでいいるなら、それを正すのも、また大人の役目だ」

彼の言葉が、俺の父を見ているようだった。

「……ありがとう……。えつと……」

「ヘンリーだ。元気だな。坊主」

「……ムゲンです」

「そうかい。それじゃあな。ムゲン」

そう言つて、最後に頭を撫でてくれた。

外に出ると、雨はすっかり止んでいた。

俺とリナは歩きながら、話をした。

「本当に、探すの大変だったんだからね？」

「ご、ごめん……」

「でも……。よかつたよ。また会えて」

「……俺も……」

少しだけ照れながら言った。

「…ムゲン…。あれはあなたのせいじゃ…」

「いいや。あれは俺の不注意が招いた。俺の勝手にユーリを傷つけてしまったことに変わりない」

「でも…」

「なあ、リナ」

「……？」

「俺、理想だけじゃダメなんだって、やっと…やっと気づいた」

「……ムゲン…」

「俺は…俺にはそれ以上に大切なものがあつた」

「それは、とつても近くにあつて、それでも気づかずただ闇雲に頑張つてた」

「でも、やつと、やつと…本当の皆を見れる気がするんだ」

「……」

「変わらなきや、変わらなきやつて必死にどこかで思つてた。でも、やつと変われる気がするんだ」

「…ムゲン…」

「俺は、無鉄砲で、ネガティブで、自惚れ、形の無かつたそんな俺だけど」

「何故戦うかじゃない。なんのために戦うかを、俺は見つけたんだ」

「俺は……友を……。そして、リナを守るために……。仲間を守るために戦う……！」

「ムゲン……。あなたはあなただよ」

「わかっている。だから、俺にできること、俺にしかできないことをやろうと思ってる」

「そのためには、一人の力じゃ駄目だ」

「リナの力や、部隊の皆の力が……。俺には必要だ」

「……わたしは、ムゲンのためなら、家族のためなら頑張れる……！」

「近くにあった。ただ必要とされるためだけに頑張った。周りに頼らず戦い続けた3年」

「それじゃ変わらなかった。でも、もう大丈夫」

「俺は……やっと変わるチャンスを見つけたんだ」

「だから、リナ……」

「うん？」

俺は立ち止まり、リナの手を取った。

「俺の……俺のそばにいてくれ……」

「……わ、わかっているよ！今更過ぎるって！」

少し照れながら彼女は言う。でも、その優しさが、本当にうれしかった。

「さ、この子にも待たせちゃったね」

「え……？」

見ると、片膝をついたピクシーが、俺たちを見下ろしている。

夕日のせいか、ピクシーが微笑んでいるように見えた。

「……ああ。すまん、相棒。お前にも苦労かけたな」

「……きつと寂しいだろうから連れてきたんだ」

「そつか……。じゃあ、帰ろうか……家に」

「随分短い家出だったね」

「……だな」

ちよつと微笑んだ後、機体に乗り込む。

機体を動かしながら、リナに一つ聞いてみた。

「なあ、リナ」

「なあに？」

「……俺さ、軍を辞めたら、孤児院でもやろうかって思ってるんだ」

「孤児院……？」

「ああ。身寄りのない子供を預かって、親代わりで育てる」

「へえ。素敵だね！」

「だろう？……あんな幸せそうな顔を見せられちゃ……な……」

「……………」

「人間、皆一人だけど、それでも、声で……心で繋がってる……」

「そうだね。人は、一人じゃ生きていけないもんね……」

「ああ。だから、寂しくない、皆と分かり合えるそんな家を作ってやりたいと思っただ」

「……その夢……わたしも一緒に手伝いたい！」

「もちろんだ。皆で作ろう。その家を」

「うん!!!」

人が変わるには時間がかかる。それでも、人は人とつながること、形を成し、人である。その関係を守るだけで、たったそれだけで……人はきつと幸せなんだ。

だから、俺は今度こそ……間違えないように……変わる……。

27：目覚め

格納庫へ戻ると、ファングが立っていた。表情は機体越しでは分かりづらかったが、きつと怒っているだろう。

機体から降りると、ファングは近づいてきて言う。

「……ムゲン。よく帰ってきたな」

「……すまない。迷惑をかけた…」

「ああ。気にしないでいいさ。だが、罰はきっちり受けてもらう」

「……もちろんだ。どんな罰でも受ける」

少しの間沈黙が続いた後、ファングは口を開く。

「お前は、しばらくの間、戦線に出ることを許さない。そして、第一小隊隊長を降りてもら。これが罰だ」

「……わかった」

俺たちを乗せた後、船は修復され、再び北米へと向かう。

一息ついた後、俺は医務室へ向かった。理由は言うまでもない。

「……失礼します」

ノックをした後、医務室へ入る。

「おや、ムゲン少尉……。どうされましたかな？」

入ると、医師が不思議そうにこちらを見た。

医師の名前は確か……。サムエルさんだったかな……。

「……いえ、俺じゃなくて、ユーリの容態を……」

「ああ。彼女ね。いやあ、すごい生命力だよ彼女は」

「……そんなにひどかったんですか？」

「ひどいなんてもんじゃないよ」

「……どれくらいですか……？」

「なんとたつてヒートホークが肩の辺りに刺さってたんだから。慎重に外さないといけない危な

かったね」

「……そんなに……」

「まあ、私は君のせいとは思わんがね」

「そんな、あれは俺がうかつな行動をしなければ……」

「かもしれないが、だから何なんだね？」

「え…………？」

「結局最後の決断は、自分の意志だ。彼女は、彼女の意志で行動した。それで怪我を負ったのなら、それは君の責任になるのかね？」

「…俺は……そう思います」

「……そうか。責任感が強いのは良い事だ。君は成長すれば、素晴らしい隊長になれるだろうよ」

「でも、俺は……隊長を降ろされて……」

「私は、今の事を言っただけではないよ。未来だ。君の将来を言っている」

「……」

「確かに、今という時は今しかない。そして二度と戻ってくることはない。だがね、未来を見つめなければ、見ていかねばならない」

「君の人生は今という時だけではない」

「……そうですね」

「ああ。こうやって生き残ったのにも、何らかの理由があるのさ」

「理由……ですか」

「そうだよ。過酷なこの世界で、運良く生きれるなんて、そうそうない。なら、何故生きているのか、その理由があるはずだと私は思っているよ」

「何故……生きているか……」

「それは人それぞれだろう。私が生きている理由を君が知る由もないだろう？だから私も、君が生きているその理由を知らない」

「…わかるような…わからないような…」

「ははは。いつかきつとわかる時が来るんじゃないかな？」

「…そうですね」

彼としばらく話していると、ベッドのほうから小さく声が聞こえた。

「おっと、目を覚ましたようだね。さ、ムゲン君。君は彼女に会いに来たのだろうか？」

「…あ、はい」

彼とともにベッドに近寄る。ユーリの肩に包帯が巻き付けられているのを見て、罪悪感を感じた。

「ユーリ君。体の調子はどうかね？」

「……………いい…」

「うん？どうしたのだい？」

「お菓子食べたい…………」

「…………」

さすがのサムエルさんも呆れた顔だ。でも、俺はそんな光景が微笑ましかつた。

「ユーリ、なんの菓子が食いたい？」

「あ、ムゲンさんじゃないですか。えつと、そうですねー。まずはチョコですね。それから……」

「あー……。とりあえず面倒だから、紙に書いてくれないか……？」

「……左じゃうまく書けないんですねー。誰かさんを庇ったせいでー」

「……ははは……。悪かったよ……ユーリ……」

「いいんですよー？お菓子さえ買ってきてくれれば」

「わかった。とりあえず一通り買ってくるから、ちよつと待つてな」

俺は医務室を後にし、食堂へ向かう。

本当だと、基地には売店があるのだが、戦艦だと自動販売機で兵士たちの欲求を満たすものを揃えることができる。

俺は、頼まれたお菓子を買って、再び医務室へと戻る。

「お待たせ。買ってきたよ」

「おー！待つてた待つてた!!」

ユーリは目を輝かせ、俺の持っている袋を奪い取る。

「ゆ、ゆつくり食べろよ……？」

「はいはい！お！これは新商品じゃないですか！気になってたんですよ、生チョコ
シリアルバー！」

「ああ。それが一番高かった。あと一本しかなかったからラッキーだったよ」

「おおー！ムゲンさんナイス！…っ!!」

「痛いか…？」

「…大丈夫ですよ。さ、食べよーっと」

ユーリは少し微笑んだ後、お菓子を食べ始めた。

「ふー。満足ー」

「…これくらいしかできなくてすまないな…」

「いえ、いいんですよ。お菓子は私の命ですからね」

「……なあ、ユーリ」

「なんです？」

「どうしてあの時俺を助けたんだ…？」

「どうして…？それを聞くんですか？」

「え…？聞いたらまずかったか？」

「いや、理由なんか簡単ですよ。お菓子を買ってくれる人が少なくなるのは嫌だったか

「らですよ？」

「……」

さすがに呆れた理由だった。しかし、助けてもらったことには変わりない。

「でも、まあその理由もありましたけど、仲間を助けるのに理由なんか要らないんじゃないですか？」

「……本当にありがとう……ユーリ……」

「な、なんですか……照れますね……」

「俺なんかのために……」

「なんかじゃないですよ。ムゲンさんはムゲンさんですから」

「……」

普段はふざけた彼女からの言葉で、胸が詰まった。

「俺は……もう、迷わない」

「気づくのが遅かったですねー。鈍感すぎデスワ〜」

「……ああ。時間が掛かってしまっただけ……。何故戦うのか。仲間を守るためにも、理想を叶えるためにも、俺は戦う」

「……いいんじゃないですか？」

「……そろそろ俺は部屋に戻るよ。邪魔をしたな」

「いえいえ。こちらも暇だったので。今度来るときは事前にお菓子を持ってきてくださいねー」

「あ、ああ…。気が向いたらな…」

俺は静かに医務室を後にした。

宇宙世紀00830083. 11. 10

16：27 シーマ艦隊、移送中の2基のコロニージャックを敢行

16：50 アルビオン、ラビアンローズに針路変更

21：08 連邦軍哨戒機ストロベリー9がシーマ艦隊のコロニージャックを発見

21：11：42 シーマ艦隊、コロニー2基のミラーの各1枚を爆破

21：26：10 2基のコロニーが激突。内、1基が月に落下を開始（コロニーの月面到着まで949分）

21：35 連邦軍の残存艦艇、コンペイ島（旧ソロモン）を緊急出撃。シーマ艦隊とコロニーの追撃を開始

21：40 第00特務試験MS隊、北米付近デラーズ軍の掃討作戦開始。

当然ながら、俺は艦橋には呼ばれなかった。

宇宙では、アルビオン隊がデラーズ軍と戦っているらしい。

俺は、ただ何もしないというのも暇なので、俺は食堂での手伝いをすることにした。基本的に食事の当番は、この船の全員が順番で行うことになっているが、パイロットはそれには含まれない。

「今日の夕食は何にしようか？」

オペレーター的全員が集まり、夕食の話をしている。

「カレーが手軽ですよ！」

「カレーは昨日も食べたじゃないか……。それより焼き魚なんてどうだ？」

「アイザックさんはただお酒のツマミが欲しいだけじゃないですか！」

「い、言ってくれるね……」

なかなか決まらないようなので、俺は手を挙げて、提案した。

「え、つと……。シチューなんてどうですかね……？」

「…シチューか。温かいし丁度いいですね！」

「うむ。それならそうしようか」

献立が決まった後、俺たちは作業に取り掛かる。

俺はエミリーと共にジャガイモの皮むきをした。

「……よつ……。むつ……。難しいな……」

「手の位置を変えたらもっと良くむけるはずですよ」

「……おお。本当だ。ありがとう。エミリー」

「い、いえいえ。もつと効率よくやったほうが楽ですから……
ちよつと照れながら、エミリーは俯いてしまった。

それから、大量のジャガイモの皮むきが終わった俺は、今度はジャガイモを切る作業に入る。

「ん……どうやって……切れば……？見つけた……ここだ!!!」

力強く包丁を振り下げると、ジャガイモが真つ二つになると共に、まな板から甲高い音が響いた。

「あわわ！ちよ、ちよつと待つてください!!」

「な、なんだ？」

「そんなに力強く切ったら包丁が刃こぼれしちゃいますよ！」

「あ、ああ……。確かに……」

「いいですか？ちよつと貸してくださいね」

彼女が包丁を取ると、ジャガイモを丁寧に分半にしていく。

「こうやって、手を猫の手みたいにして素材を抑えて、包丁をゆっくり落とすんです」

「……なるほど……」

まじまじと見つめていると、突然エミリーは顔を真つ赤にして言った。

「あ、ああ…えつと、後はできますよね!？」

「え? えつと…?」

「ご、ご、ごごめんなさい! えつと、そんなに見られたら恥ずかしくなっちゃって…」

「あ、ああ…そういうこと…」

かなり照れ屋だとは思っていたが、これほどとは…。こりやあユーリに弄られる理由もなんとなくわかる気がする。

「え、えつと…後は、自分でお願ひします!」

「あ、ああ。わかったよ…」

それからは、いろいろ苦労しながらも、作業を終わらせた。

「ふう…：…終わったあ…：…」

「お疲れ様です。どうでした?」

「どうも何も、疲れたね…」

「ですよね! やっぱり、全員分の料理を作るのはやっぱ疲れちゃいますよね!」

「ああ。改めて思ったよ」

「何をですか?」

「いや、こういう小さいことをしてくれる人がいるから、俺たちは戦えるんだなあ…つ

て」

「そうですね。でも、私たちが安心してこういう雑務がこなせるのはパイロットの皆さんのおかげですよ」

「……人間って……やっぱり一人じゃ生きていけないんだな……」

「そうですね。人だから分かり合うことだってできるんですし……」

「ああ……」

「そういえば、この前言いそびれてしまったんですけど」

「うん？なんだい？」

「イーサンって人なんですけど……」

「ああ。彼がどうしたんだい？」

「伝言を伝えてほしくて……」

「いいけども、自分で伝えたほうがいいんじゃないか？」

「え……そうなんですけど……はい。やっぱり……そうします」

「……？な、なんかすまんな……」

「いえ、いいんです。気にしないでください。個人的な用事なので……」

そう言った彼女の瞳は、少しだけ虚ろだった。

宇宙世紀0083・11・12

地上でのデラーズ軍掃討作戦を成功に収めた連邦。

しかし、まだまだデラーズ軍の抵抗は続く。

10:06 先行したGPO3、デラーズ・フリートと交戦を開始（コロニーの地球
 到着まで868分、到着阻止限界点まで568分）

10:50 GPO3とAMX-002/AMAX-2ノイエ・ジール、戦闘開始

13:51 月軌道上の連邦追撃艦隊、補給完了。デラーズ・フリート追撃を再開（コ
 ロニーの地球到着まで643分、到着阻止限界点まで343分）

17:15 シーマ・ガラハウ、グワデンのブリッジを占拠

19:34 コロニー、到着阻止限界点を突破。（コロニーの地球到着まで300分）
 連邦軍によるコロニー到着阻止作戦失敗

20:15 エギーユ・デラーズ中将、戦死

21:47:51 地球到着下コースに入ったコロニーにソーラ・システムIIを照射
 するも制御母艦がAMX-002/AMAX-2ノイエ・ジールに破壊され阻止できず
 （コロニーの地球到着まで166分47秒）

22:41 シーマ・ガラハウ中佐、戦死

23:11:44 ガトー少佐、コロニーの最終軌道調整を完了（コロニーの地球落

着まで82分54分)

一方地上では、万一のために、急遽マスドライバーを改造し、超大型ビーム砲台を設置。

デラーズ地上軍、最後の抵抗を開始。超大型ビーム砲台への攻略作戦を展開。

当然、第00特務試験MS隊も、超大型ビーム砲台防衛作戦に参加することになった。

そして、全クルーへ艦長が艦内放送を行う。

「第00特務試験MS隊の全クルーに到達する！」

「我々はこれより、最終決戦に挑むことになる！」

「作戦名はスターフォール防衛作戦だ！」

「目標は、敵デラーズ軍の掃討、および落下するスペースコロニーの完全破壊!!」

「我々は今回の作戦の要となる超大型ビーム砲台の防衛だ！」

「残存時間の関係で、砲台のフルパワーはどう考えても1発だけだ。これでコロニーを破壊しなければならぬ！」

「絶望的な状況だが、それでも！我々はこれを打開しなければならない!!」

「もう二度と、一年戦争のような悲劇を繰り返してはならない!!!」

艦内放送の後、全員が作業場につく。

俺は、出撃することすらできず、ただ指をくわえて待つているだけだった。

しかし、気が付くと俺は再び格納庫へと向かっていた。

次々と機体が出撃していく中、俺の機体だけは静かに佇み、主を待つている。

ピクシーの前に立つと、胸が高鳴った。

そうだ。俺は……俺は……。

「ムゲン？」

不意に声をかけられた。

「リナ……」

「どうして……」

「……」

出撃したいとは、言えなかった……。俺には……そんな資格はないのだから……。

「……ねえ」

「……？」

「行くんでしょ？コックピット開けるよ」

「え…………？」

驚いた。リナは素直にコックピットハッチを開ける。

「この子はいつでも出せるよ。…………後は…ムゲン次第」

「俺…次第…………」

俺は、自分の胸に手を当て、強く想った。

戦うことではなく、今度こそ、大切な仲間を…そして、俺自身を守るために…………。

「そのままにしておいて！すぐ戻る!!」

俺はリナに背を向け、走ろうとした瞬間。

「ムゲン!!」

「…………？」

「…………なんでもない」

と、笑顔だった。

「そうか。…待ってる!!」

俺は艦橋へ走った。

艦橋に入ると、一斉に俺に視線が集まる。

「ムゲン少尉か。どうしたのだ？」

「……艦長、俺に……出撃の許可を!!」

「何？駄目だ！少尉には出撃停止がかかっている!!」

「……む……」

「何……？」

「頼む!!!出撃させてくれ!!!」

「な、何故だ……」

「俺は、俺にしかできないことがあるから。だから、俺は戦いたい!!!仲間を守るために

!!

「艦長!!処罰は戦いの後に受ける!!だから頼む!俺に……俺とピクシーに出撃の許可を

!!!」

「……だ、だが……」

俺はただ頭を下げた。こうしている間にも被害を受けている人もいるのに……。

「……ジェイク艦長」

「なんだ？マーフィー准尉」

「彼は……前とは違います」

「何故わかる?」

「なんとなく…勘でわかるんです。私からもお願いします。出撃の許可を!」

「……マ、マーフィー……」

「あ、あの……」

「エミリー軍曹……?」

「私は、彼を……信じたい。私もなんとなく…初めて会った時とは違う雰囲気を感じるんです…。だから! ムゲン少尉を出撃させてあげてください!!」

「エミリー……」

「僕もその意見に賛同するよ。現状の戦力も鑑みて、やはり切り込みの戦力がいないとこの戦いは勝てない。出撃の許可…してあげてくれないだろうか」

「私もそう思うよ! 彼ならこの状況打開できる【剣】になつてくれるよ!」

「う、ううむ……」

「艦長。こちらフアング」

「フアング大尉。どうされましたか?」

「ムゲンを出撃させるんだ」

「なっ! 何故?!」

「[こつちの手が足りないのも事実だ。作戦遂行には、こちらの総力を持って戦わねば

ならない」

「……」

「出られるか？ムゲン」

「……ああ！出られるとも!!」

「それじゃあ、現地集合だ！第一小隊の権限をお前に託すぞ！」

「……ありがとう……隊長……!!」

「当たり前だ。皆で生き残って、また笑いあおうぜ!!」

「ああ……!!」

目から零れる涙を拭き、艦橋を後にしようとしたときだった。

「ムゲン少尉」

「……?」

「命令だ。無事に生還しろ。そして、この作戦を成功に導いてくれ」

「………了解」

俺は、格納庫へと足を運んだ。

一歩一歩強く踏みしめて…。

ピクシーに乗り込み、ハッチを閉じようとしたとき、誰かがコックピットに潜り込ん

だ。

「エ、エミリー…?!」

「お願いです！私を戦場に連れ出してください!!」

「な、なんでだい?!」

「私…‥やつと…‥見つけたんです。父を…‥」

「えっ!?!」

「…‥だから…‥」

「…‥詳しい話はあとだ。機体を出撃させる」

「はい!」

コックピットハッチを閉じ、システムを起動させる。

「よし、全システム起動。腕も動く…!」

「ムゲン」

「リナ。ありがとうな」

「…‥生きて帰ってきてね…。私、待ってるよ」

「…‥ああ。待っていてくれ」

「第一小隊一番機、ガンダム・ピクシーエッジ、出撃スタンバイ!!!」

「発進、どうぞ!!」

「了解。ムゲン・クロスフォード、ガンダム・ピクシー、出撃する!!!」

27 完

28：抹消—StarFall—

宇宙世紀0083. 11. 12 23：20 デラーズ軍と連邦軍との大規模な戦
闘。【スターフォール作戦】開始。

第00特務試験MS隊Aゾーン防衛。

「これ以上先に通すな!!こいつを守るんだ!!」

フアングさんが必死に叫ぶ。

「……………間に合ってくれ!」

「……………ムゲンさん」

「なんだ?」

「邪魔じゃないですか…?わたし、屈んでいますよ」

「いや、いい。普通にしていて構わないよ」

「ちっ!こちら道夜!!A—2ゾーン!持たない!!!」

「ムゲン!!」

「了解だ!!!」

機体を素早くターンしA-2ゾーンへ向かう。

「しばらくは戦闘が続く。しつかりつかまってる」

「は、はい！」

左手でダガーを引き抜き、右手のマシニングガンで照準を合わせる。

「くっ!!」

「そこだな!!」

トリガーを引く。マシンガンから弾が乱射され、気づいた敵が間合いを置いた隙を狙う。

「今だー！」

ダガーを投げつけ、足に直撃させる。

「道夜！止めを！」

道夜はそれに呼応し、ストライカーの刃でザクを裂いた。

「まだ来る！左、9時の方向、3機！」

「了解」

「まだだ。3, 2, 1……今だ！射撃を撃ち込め!!」

「全機左9時方向に射撃撃ちかたはじめ!!」

道夜の指示で第三小隊の全員が射撃を開始する。その隙に投げたダガーを回収。

続けてレーダーを確認。右2時方向に敵影2機。

「道夜、左を頼む。俺が右をやる!!」

俺はスラストスターを起動し、一気に相手の懐へ飛び込む。

1機を蹴り倒し、吹き飛んだところへエッジナイフを投げつけ、コックピットに命中させる。

「まだまだ!そこお!!」

ザクの不意打ちを機体を屈ませて回避し、そこから勢いよくダガーを振りぬいた。

「次だ!!」

すぐさまレーダーを確認。と、背後からの殺気を感じ、機体を宙返りの如く反転させる。

「ほお。さすがあムゲン君だね。また腕を上げてる」

「カカサか!邪魔するな!!」

「僕にとつては君が今は邪魔なんだよね。退く気はないね!!」

俺はダガーで切りつける、それをカカサのゲルググは刀で受け止る。

互いに間合いを取りながらナイフを投げつけ、互いに相殺。

すぐさまスモークバルカンを発射、地面に撃ち込み、視界をかく乱させる。

煙の中に素早く入り込み、カカサに切りかかるが、相手もそれを見越したかのように

それを受け止める。

そして、反撃と言わんばかりに刀を振ってくる。それを俺は受け止め、至近距離でナイフを投げつけるも、再びナイフで受け止められた。

互いに間合いを取り、態勢を立て直す。

「……さすが……。……エミリー、大丈夫?」

「は、はい!私は構わずに……!」

「オーケー……。任せて!」

「いやあ。ムゲン君と戦うと、心が躍るねえ!やっぱり戦いはタイマンに限るよね?ムゲン君もそう思うだろう?え?そう思わないって?」

このうるささは相変わらずだと思った。

「そうかもな……」

「だが……残念ながらここまでだ」

「何!?!」

一瞬の勘で悟った。俺はナイフを正面に投げた後、左にすぐさま回避。

見ると、俺の元立っていた場所には煙を裂く一発の銃弾がナイフを粉々に砕いていた。

「おい!クロノード君!何してるんだ!これじゃあ俺がカッコ悪く見えるじゃないか

「!! あんないいセリフ言っておいて!」

「悪い悪い。相手がムゲンだと、なかなか勘が鋭くてな」

「あ、わかるよそれ! 前とは違って、随分いい動きをするようになったよねえ!!」

「…流石に…2機はきついかな…!」

「それじゃ、情け容赦なくいかせてもらう!」

カカサが懐へ踏み込む。俺は刀を受け、反撃の一撃を与える。

見事に回避され、続けざまに、カカサが避ける予兆が見えた。

「左…いや、右…違う…これは…宙返りして…クロノードの狙撃…!」

とつさに体が動き、残りのナイフを正面に投げ、それをスモークバルカンでヒットさせる。

「なっ! 射線が…!」

「おーまかせ! ってね!!」

カカサが煙を切り裂いた一瞬を、見逃さなかった。これで決めなきやこつちがやられる!

「いけええええ!!」

【全開機構くオーバードライブく System standby】

瞬間、機体の右目が炎の如く赤く輝き、その姿はまるで鬼神の如く。

そして、その動きすべてに余韻のような美しい残像を残して。

刃はぶれず、機体こそが刃。

叫びと共に、俺はダガーをカカサの右肩に突き刺した。

「!!」

カカサの機体を蹴り飛ばし、クロノードへ一直線に向かう。

「何?!?ぎ、残像だ?!?」

「俺はこれ以上!!!」

クロノードのゲルググにスナイパーライフルを真つ二つに、続けて右肩から腕を切り落とす。

「誰も…死なせない!!!」

無線をすべての回線につなぎ、叫ぶ。

「俺は……第00特務試験MS隊、第一小队隊長!ムゲン・クロスフォード!!!」

「ジオン残党の全機に告ぐ!!ここから先に進むなら、地獄への片道切符だと思え!!!」

「誰一人として逃がさない。お前たちの首にはいつでも俺の刃が掛かっている!!!」

通信を切り、静かに目をつぶる。

「……」

「ムゲンさん……」

「エミリー。大丈夫、死のうなんて思っていない。必ず生還という命令もあるし……な」

「……」

「安心して。必ずお父さんに会わせてあげるから」

「……はい！」

「ムゲン……その状態は……」

「どうやら、起動したみたいだ」

「オーバードライブ……システム……」

「パイロットの「感情の爆発」。または「意志の限界調和」の時に発動する……」

「俺は……今、こいつと共にある。ピクシーは俺で、俺はピクシーだ……！そして、大切な仲間を守るために、やっと目が覚めた鬼神だよ」

「……遅かったな……目覚めるのが……」

「ああ。随分長く待たせてしまったよ。道夜、お前にもな……」

「……だな。……すまなかつたな……あの時は……」

「いいや、俺が謝らなければならぬ立場さ……」

「……そうかもしれないが……」

「だが、安心してくれ。もう……止まらない。俺は今、仲間を守るために戦っている」

「……変わったな……ムゲン」

「……そうだろうか……？」

「ああ。今のお前は、形が出来てきている感じがする……」

「いつまでも……『夢幻』のままではいられないのさ」

「……ああ。本当に変わったな……お前……」

「その話は後だ、そっちの警戒を怠るな」

「わかつている……っ!!すまん、敵だ、また後でな」

「ああ。お互い生き延びようぜ」

「ああ……。無事の帰還を待っているぞ、相棒」

レーダーを確認。敵影が5機、A―1ゾーンへと向かっている。

「フアングさん、A―1は誰が防衛を!?!」

「くっ!ムゲンかつ!?!A!!1は第一小隊だ!!早く行ってや……ぐあっ!!」

「フアングさん!?!フアング!!!」

フアングさんの元へと機体を向けようとしたとき、彼女の手がそれを阻止した。

「エミリー!? …… そうだな… 信じて待つのも… 家族だよな…」

「……はい」

俺は機体をA—1ゾーンに向けて移動させた。

「ちっ!! こいつらあ!!! 邪魔なんだよ!!!」

大剣を振り回すジムカスタムを捉えた。どうやら、敵に囲まれているようだ。

「俺の……」

「俺の部下に…… 仲間に出すんじゃないやねええええ!!!」

マシンガンを乱射。続けてスモークバルカンでジムカスタムの周りに着弾させ、敵から見えなくさせる。

素早くジムカスタムの近くへ移動。

「イーサン・マクラウドだな」

「ああ? …… てめえは… なんで出てきてんだ? 雑魚のくせによ!!!」

「ああ。すまない。だが、雑魚でも何でもいい。お前を死なせるわけにはいかない」

「な、なに… カッコつけてるんだよ。てめえに守られなくても俺は…」

「強がるなよ? お前は俺の部下だ。だから、隊長に任せておけばいいんだ」

「……な…」

「見ておけイーサン!!!お前の隊長の背中!」

ダガーを構え、煙を切り裂く。

燃える炎の右目がひとときわ強く輝く。

その瞳は全ての敵の戦意を飲み込むがごとく。誰もがその瞳を見て立ちすくむ。

俺は素早く懐に潜り込み、敵の両腕を切り落とし、続けて、コックピットにダガーを突き立てる。

さらに、背後にいるザクへ、蹴りたおし、頭部を切り落とした後、コックピットを強引に開ける。

たまらず兵士が逃げ出していく。

正面から10機の敵。だが、今の俺には恐怖を感じることはなかった。

「俺の名はムゲン・クロスフォード!!俺がお前らの首をいただきに来たぞ!!覚悟しろ!!!」
相手はビビらずこちらへ攻寄る。

「お、おい!そんな数を相手に…!」

「手を出すな!お前を傷つけさせるわけにはいかない!隊長として!なにより、仲間と
しっ—」

「おおおお!!!」

1機のザクを切り伏せ、続けて、ダガーを投げつけ、2機目のコックピットに直撃さ

せる。

「まだだ！もつときやがれ!!!」

背後からの殺気。とつさに左に回避する。

正面からの衝撃で頭を打つ。

「ぐっ……!」

「ムゲンさん……!!」

「……衝撃に備えて……!」

「でも……!!」

「君も……仲間も……誰も……傷つけさせない……」

全方向からの衝撃。爆発がピクシーを襲った。

俺は衝撃で頭を再び打った。

「がっ……あっ!!」

「ム、ムゲンさん!もう!もういいよ!!やめようよ!!!」

「…………やめ…………られ…………ない……!!!俺は………俺と……ピクシーは……」

『まだ………終わってない!!!』

「動け!ピクシー!!!俺はお前だ!!そして!!!お前は俺だ!!!」

「動けよ……!!動きやがれ!!!俺の体ああああああ!!!」

少しずつ、機体が膝を立てて起き上がる。左腕が使い物にならなくなっている。右手も、ぎりぎり使えるくらいだ。

「…そう…それで…いいんだ…」

「俺たちは…まだ…終わってない…」

「生きて…エミリーを父さんに会わせて…」

「全員が無事に生還するまでは!!!」

「だから頼む! ピクシー!!! 力を…俺に力を貸せええええ!!!」

消えかけた右目の炎が再び強く宿る。

「いくぜ…死にかけの妖精を…なめるなよ…!」

左のカメラアイは破壊され、右側しか見えてないが、それでも、ここで止まるわけにはいかない。

「オーバードライブシステムのリミッターを全解除。フルパワーで行かせてもらう!」

【全開機構くオーバードライブくLimit Over System standby】

消えた左目をも再び炎に包まれ、怒れる妖精が姿を現す。

自らを地獄の業火で焼きながら、眼前に在るものをすべて屠^{ほぶ}る。

その動き一つ一つが妖精とはかけ離れ、その姿はまさしく本物の鬼神。

「……………精神同調。行くぞ。ピクシー!!!」

ダガーを握る。そして、敵の背後へ素早く移動し、コックピットを貫く。

「ムゲエエエエエン!!!」

ぼろぼろの黒いゲルググが迫る。

「くっ!」

なんとか受けきるが、損傷のせいで、態勢が崩れる。

「落ちろおおおお!!!」

「くっ…!!カカサアアアアアアア!!!」

ピクシーの左腕が切り落とされ、ピクシーはゲルググの右腕を切り落とした。

「くっそおおおお!!!」

「はあ……………はあ……………ぐっ…!!!」

突然、強いめまい。ピクシーのシステムを使いすぎたのだ。

「……………くそっ……………ここで……………終われないんだ…」

「ムゲンさん!!しっかりして!!」

「あ……………あ……………」

まずい…。意識が……。

「ムゲンさん!!!」

「……エミ………リー………聞こえ………て…」

「ムゲン!!!」

リナの叫びだった。

「帰って…来るんだよね？」

「帰ってきて、皆で夕飯食べるんだよね!？」

「今日の夕飯はハンバーグだよ!!絶対帰ってきてね!!!」

「……ハン………バ………グ………」

「……は………っ………」

だんだんと意識がはつきりしてくる。

「最……………高だ……………な……………ハンバーグなんて……………さ……………」

「なら、いっちょ……………終わらせないと……………」

「ムゲンさん！」

「…やるぜ、エミリー…。帰ったら飯だ…！」

「…はい!!」

「……………おい」

「……………なんだ……………? イーサン」

「十分わかった。俺はお前を勘違いしていたようだな」

「……………そうかい……………。すまないな、力が入らなくて冷たい対応になっている……………」

「へえ。それじゃあ、俺たち部下の出番ってわけだな？」

「な……………に……………?」

「こつからは第一小隊が相手になってやるぜ。隊長をよくもやってくれたもんだぜ

……………」

「……………おまえ……………」

「よし、てめえら!! 気張りな!! 隊長を守りながら戦うんだ!!」

「ま……………て……………」

「ああ？」

「俺も…戦おう。こんなんでも、お前たちの隊長なんだから…やらせてもらう」

「ああ。一緒に戦おう。俺はどうすりやいい？隊長さんよ」

「…ああ。イーサン、お前は俺と共に、ジョンとクライスは互いに連携を意識して行動を。互いの背後を守れ！」

「了解!!」

「じゃ、お手並み…拝見と行くぞ？ルーキー」

「へっ！言ってくれるぜ！年下の隊長さんよ!!」

正面にとらえた5機。この数なら、二人で何とかなるはずだ。

「正面、敵影5！狙撃ライフル構え!!」

「ああ！」

「俺が切り込む、トドメは任せるぞ!!」

「わーってるよ!!言わなくてもな!!」

懐に飛び込み、ダガーで足を切り落とす。そして、そのタイミングと同じにコックピットが撃ち貫かれる。

2機目も同じく、動きを合わせて撃墜。

「連携を変える！俺が牽制。イーサン切り込め！あと3機まとめて墮とすぞ!!」

「無茶を言う隊長だ…!」

「ふっ。…だが、面白いだろう?」

「ああ。本当にセンスがないが…面白すぎるぜ!!」

俺は宙返りしながらマシンガンを放ち、相手を誘導させる。

「今だあああ!!」

大きくジャンプしたジムカスタムに合図を送る。

「うっしやおらああああああああ!!」

そのまま相手の懐へもぐって、横薙ぎ一閃。

まとめて3機が撃墜される。

「やるな! さすがだ!!」

「当たり前だ! 俺の技術をなめてもらっちゃ困るな!!」

「全機!! 現地時間11月12日20時13分にて、南米のジャブロー上空をコロニーが通過!」

「超大型ビーム砲台撃準備!!!」

「聞いたか!? イーサン!」

「ちっ…まずいな…」

「第一小隊、被害地域から後退!!!」

「イーサン！退くぞ!!」

「言われなくてもそうする!!!」

「うおおおおおおお!!!俺の命に代えて!!!ジーク・ジオオオオオオオオン!!!」
「なにっ!?!」

見ると、ビーム砲台に1機の敵が突撃してきている。

「くっ!まにあわねえ!!!」

「んなろおおおおお!!!」

イーサンはスナイパーライフルで足を撃ち抜いた。しかし、相手のザクの爆発で、ビーム砲台が破損する。

「隊長!!悪い!!ビーム砲台が被弾した!!!」

「どうなってる!?!」

「トリガーが引けなくなっている!!!」

「リナ!ビーム砲台が被弾した!!!トリガーが引けない!」

「ええ!?!そ、そんな…。とりあえず、その状態じゃあ何もできない!!急いで離脱して!!!」

「わかった、イーサンを回収後、離脱する!」

イーサンの機体に近づく。

「で!? どうなんだ! 隊長!」

「駄目だ! そいつはもう使えない。離脱するぞ!」

「ああ!? 諦めんのか!?!」

「…違う! トリガーが引けない以上こつちからできることはないんだ!」

「………つたく………まだ頭が固いな………」

「え……?」

「使えねえなら、使えるようにすりゃあいいんだよ!」

「ど、どうすれば……?!」

「まあ見てな! こいつをコロニーの中で爆発させりゃあいいんだよ!」

「お、おい! それって……!!」

「そうだ! 俺が………コロニーへ運ぶ!!」

「……だ、駄目だ! 隊長の権限で………」

「嫌だね!! こういうのは大人に任せときゃあいいのさ」

「………!! ムゲンさん! どいて!」

「エミリー……?!」

エミリーは突然コックピットハッチを開き、叫んだ。

「……パパ!!!」

「……ああ?!……え……?」

「パパだよね?!イーサンって……!!!」

「……ちよつと待て。…隊長、機体を近づけてくれないか」

「あ、ああ。待ってろ」

俺は機体をギリギリまで近づける。

すると、イーサンはコックピットハッチを開き、彼女を見つめた。

「……エミリー……なのか……?」

「パパ……なんだね……」

「そうか……エミリーの親父さんって……」

「エミリー……お前は死んだはずじゃあ……」

「違うよ!!生きてた!!パパのおかげで!!!」

「……はは……そうか……そうかあ……!!」

「大きく……なったな……」

「パパ………会いたかった……ずつと探してた」

イーサンはエミリーを抱き寄せる。そんな彼の瞳からは大粒の涙がこぼれている。

「パパだ……ずっと……探してた……」

「ああ……お前が死んだと思って……俺は……俺は……!!!」

「こんなに近くにお前がいたのに、どうして……! どうして気づかなかったんだ……!!」

「パパああ!!」

「ムゲン! もう限界だ!!! 早く離脱を!!」

「ああ!!! 待ってくれ!!!」

「イーサン、離脱だ!!」

「……駄目だ。それはできない」

「何故?! やつと会えたんだぞ?! 娘に!!」

「それでもだ。俺は……軍人だ」

「そんな……!! そんなことつてさあ!!!」

「理解出来はしないさ。お前は……優しい男だからな」

イーサンは俺の頬を優しくなでた。今まで見たどんな人より父の……父の面影を
持っていた。

「駄目だ……駄目だよ……!! こんな別れ……あつていいはずがないだろ!!!」

「目の前にやっと…やっと再会できた娘がいるんだぞ!!?」

「わかってる!!!」

「だからこそ、俺は…俺の務めを果たさなきゃあいけない!」

「イーサン…」

「頼む…。ムゲン・クロスフォード。これは…俺にしかできない事なんだ」

「……お、お前ってやつは…」

「エミリー…いいかい。ムゲンと共に、家へ帰るんだ」

「やだ!!もう離れたくない!!!」

「俺だって寂しいさ。けれどな……隊長の言う通り、お前にしかできない事がまだあるはずだ」

「…パパ……」

「だから…お前はまだこっちに来ちやだめだ…」

「…うう…ぐすつ……」

「…隊長。最後の…頼みを聞いてくれないか」

「……なんだ」

「この…世界で一番愛おしいバカな娘を……家へ……返してやってくれ……」

「……いい…のか……?」

「ああ…。もう、覚悟は決めてある」

「……わかった。行こう。エミリー」

「いやだ!!絶対にはなれない!!!」

「エミリー!!!」

「っ!!!」

「この言葉を言うのがこれほど苦しいと思つたことはない。それでも……」

「彼は……。軍人だ。彼の……。最後の任務を……遂行させてやってくれ……」

「……うう……」

「エミリー。泣くんじやない。君は強くて優しい子だよ」

「……。パパ……」

「随分と母さんに似てきたな。これなら、きっと幸せな家庭を築くことができるだろう
」

そう言つて彼は、泣きながら彼女を撫でた。

「……うう……」

「さあ。時間だ……そろそろ行かないと……わかるね?」

「……うん……」

「そうだ。この写真。持っていけ」

「……これは……」

「お前の母さんの写真だ。どうだ……？お前に似て美人だろうか？」

「うん……！うん！！」

「……ムゲン隊長。あんたは……きつと、これからもつらい思いをするだろう」

「けどな、その時、そばにいてくれる家族を……仲間を……」

「……ああ……守って見せる……」

「ああ。……期待してるぜ？」

「……離脱する……」

俺はエミリーをコックピットに入れ、急いでその場から離れる。

「嫌ああああ!!!パパああ!!!パパああああ!!!」

つらかった。胸が引き裂かれそうだ。家族の別れが……こんなに悲しいものであつて

はいけない……。

戦争が……戦争が家族の形を変えた。

「うっ……ぐっ……」

「うろう。……うわああああ!!!」

背後で爆音が聞こえた。きつと……彼が役目を果たしたのだろう。

グロリアスへ戻ると、全員が俺たちの帰還を待っていた。

「ムゲン……良く帰ったな……」

「……………ああ」

俺は無線を開き、言った。

「全員、聞いてくれ。この戦いで、イーサン・マクラウド中尉が殉職した。彼は、コ

ロニーを破壊するために、破損したビーム砲台ごと突っ込んで自爆した」

「彼は……立派な軍人だった。そして、それ以上に……くっ……!!それ以上に……!」
胸が詰まる。悲しい。人の死を……何度も見ているはずなのに……。

「それ以上に、彼は一人の人間として立派であった!!!」

「それをここに称え、彼の命が無事天へ召されるよう……全機!!!捧げ銃!!!」
俺は涙を流しながら銃を天へ掲げた。

宇宙世紀0083. 11. 13 00:34:38 連邦軍の阻止作戦失敗でコロ

ニーが北米大陸の穀倉地帯に到着。公式発表では事故とされる。

第00特務試験MS隊第一小隊所属、イーサン・マクラウド中尉、戦死

01:05 アクシズ先遣艦隊、転進

01:19 アナベル・ガトー少佐、戦死

0083. 11. 23

一連のデラーズ紛争に絡んだ軍事裁判開廷。エイパー・シナプス大佐に死刑、コウ・ウ
ラキ少尉に懲役刑1年の即時判決が下る

0083. 12. 03

AE、フォン・ブラウン支社のオサリバン常務、死亡

0083. 12. 04

ジャミトフ・ハイマン准将の提唱により、テイターンズが結成。旧公国軍残党狩活発
化

0084. 03. 10

デラーズ紛争によるコロニー落下の真相とガンダム開発計画（RX-78GP01
（fb）、RX-78GP02A、RX-78GP03（S））

一連のデラーズ紛争が公式記録より抹消。これにより、コウ・ウラキ少尉の罪状消滅。
関係者への賞罰も消滅

「……本当に行ってしまうのか？」

「ええ……。パパ……。父と会えた。それだけで、私の役目は終わったんです」

「……軍を辞めたって、ここにいればいいのに……」

「それはできません。家族に迷惑をかけるわけにはいけませんから」

「……だが……」

「ムゲンさん。私は、父の勇姿を見届けました……」

「だから、今度は私が、のちに伝えるべきことを探さなければいけないんです」

「……かつて……父が……わたしに教えてくれたように……」

「……俺も……彼からは沢山のことを教わった。……彼は……君のお父さんは……素晴らしい人だった……」

「私もそう思います。だから、わたしも、父のように強く生きてみます」

「……そうか。なら、止めないさ。……元気でな……エミリー」

「はい」

彼女は最後にニツと微笑むと、沈む夕日へ消えていった。

「行ったのか……」

「……ああ。見送りがかったか？第三小隊隊長として」

「いいや。そういうわけじゃない」

「……イーサン。彼は立派な軍人だった」

「そうだな。だが、お前は託された」

「え……？」

「彼の意志を継いで、これからもっと先へと歩いていくんだ」

「……………そうだな」

「そういえば……まだ、していないかったな」

「ん？」

彼は手を差し出し言った。

「おかえり、相棒」

「……………なんか……照れるな」

俺は手を差し出し、握手した。

「ただいま……相棒」

こうして、後にデラーズ紛争と呼ばれる戦いは終結した。

しかし、それによって生まれた「テイターズ」がムゲンたちに新たな戦いを呼び込むのであった。

デラーズ紛争編外伝

外伝：Episode of Ethan

宇宙世紀0083。11。13　スターフォール作戦において、第00特務試験M

S隊所属、イーサン・マクラウド中尉　戦死。

俺に背を向けるガンダム。ただ、それを見つめていた。

暗い……空を覆う巨大な物体。

俺の……最後の……任務であり、唯一の家族を守るための…。

「…なに…怖がつてるんだよ…俺…」

いざやろうとすれば怖がつてしまうものだ。

手が動かない…。

「……怖え……なあ……」

大きな物体を見上げながら、小さくつぶやいた。

「エミリー……生きていたんだな……」

「俺は……最初から間違っていた……」

俺が狂い始めたのは、家族が死んだと伝えられてからだ。
あれは……忘れもしない出来事。

遡ること宇宙世紀0079。10。20 地上ではオデッサ作戦が始まった時だ。
俺はその時、まだただの民間人。

サイド3に居続けることが難しくなったため、家族で、地球に行くことになった。
そして、輸送用シャトルに乗っていた時に、事件が起きた。

「お客様にお伝えいたします。現在、このシャトルは、大気圏突入のため、一時的に移
動を停止いたします」

「もうすぐだぞ。地球に降りるのは久しいな」

「そうね。でも、もう二度と宇宙には戻れないのかしら……」

と、妻のサリアが心配そうに言葉を返した。

俺は微笑み、彼女に言う。

「そんなことはないさ。戦争が終われば、また戻ってこれる」

「そうね。きつとそうよね……」

「ああ。心配するな」

そう……戦争なんか俺たちには関係ない事だ。

「パパ!! 見てみて!! 青いよ!!」

「ああ。エミリー。あれが地球だよ」

「地球……! 綺麗だね!!」

「ああ。とても……綺麗だな……」

正直なところ、ここまで間近で見たのは俺も初めてだった。だから、結構衝撃を受けている。

「あそこに降りるんだよね?」

「そうだよ。もう少ししたら降りれるさ」

「楽しみだなあ! ねえねえ! 降りたら面白い物したい!!」

「ん? そうだなあ……地球はコロニーほど平和じゃないから、難しいかもしれないなあ……」

「そうなの?」

「ああ。だが、降りたらお出かけはしよう」

「本当!? 絶対だよ!!」

「ああ。いいだろう? サリア」

「ええ。ただ、先にやることをやってからね?」

「わかってるさ」

それから、1時間の間、待った。

しかし、一向に船は動かない。

唐突に放送が響き渡る。

「貴様らに報告する。このシャトルは、ジオン軍がジャックした」

「なんだ…!？」

「え…!？」

一瞬理解ができなかった。

「貴様らは我がジオンを亡命した!!」

「な、なにいつてるんだよ!!」

ほかの乗客もぎわついている。

「亡命した奴をジオンは許さない」

「ふ、ふぎけるな!!!俺たちは裏切つてなんか!!」

一斉にぎわつきます。それを、一発の銃声が全てを遮った。

「!!!」

「…貴様らは祖国を裏切つた反逆者だ!!それは許されるものではない!!!」

「ちよ、ちよつとまで!!俺たちは裏切つてない!!ちゃんと許可をもらつて…!!」

「許可などされていない!! 現在我が国は地球連邦軍と戦争状態にあるのにもかかわらず、地球行きの便があるはずがないだろう!!!」

「じゃ、じゃあなんで……!!!」

「その理由は……死んでから考えるんだな!!!」

「貴様ら!! 並べ!!」

そう言つて、ジオン兵が俺たちを強引に立たせ、並ばせる。

シャトルは、尾翼側に出口があり、ハッチを開けばすぐに脱出することもできなくはないが……相手は軍人だ。

「くそつ!! なんでこんなことに!!」

「恨むのなら、自分を恨むんだな!!」

「くそつたれが!!!」

俺たちは何もしていない。それなのに……。

「……ふむ、10人か……」

「どうします? 中尉……」

「……全員射殺だ」

「了解です」

殺される。……恐怖を……感じた。

「……くっ……！」

「パパ……こわい……」

「大丈夫、パパが守るから……！」

「うん……」

「……」

それから、順番に民間人が殺されていく。……こんな死に方が……あつていいものなのか……。

「……うう……やだ……死にたくないよ……」

「大丈夫だ。エミリーも、誰も死なないから」

「……ほんとう……？」

「ああ。約束だ」

「……うん。……約束……」

俺は、彼女の手を強く握った。

約束したところで、何が変わるわけでもないのに……。

「……イーサン……」

「サリア……？」

「私……あなたを信じてきたこと……後悔してない……」

「……すまない……俺が地球へ行くこうなんて言わなければ……!」

「いいえ。あなたは間違っていない」

「……」

彼女は、泣いていた。心が苦しくなる。

「誰も……彼らも間違っていない」

「何故!?俺たちを殺そうとするやつらを庇う!?!」

「……だって、彼らだって……人間だよ」

「それでも!やつらは軍人で、俺たちは民間人だ!民間人を殺す軍人なんか……!」

「軍人以前に……一人の人間だよ」

「……それは……そうだが……」

「一人の人間としてはしたくなくても……。それでも、軍人だからしなくてはならない行動だとするなら……」

「本当に恨むべきなのは……戦争そのもの」

「……戦争……そのもの……」

「うん。戦争というものが、人の有り方を変えた。戦争というものが、さらに差別を作った」

「戦争というものが、家族の形を……変えることがあるかもしれない……」
「……そんな……」

「認められなくても、これは現実。受け入れなければならない事」

「……俺は……」

「でもね、わたしは……あなたとエミリーを死なせない」

「唯一の……私を愛してくれた人たちだから」

「え……?おまえ、何を……」

彼女は微笑んだ後、ハッチのボタンを押した。

ハッチが開かれ、それに気づいたジオン兵が彼女を取り押さえる

「サリア!!!」

「その子と逃げて!!!」

「ふぎけるな!!お前も……!!!」

「見てわからない!?わたしは……もう……!!!」

「くそつ!!!ふぎけんな!!エミリーはどうするんだよ!」

「お前が色々教えるんじゃないのかよ!!!」

「地球に降りたら出かけるんだろう!?!」

「俺を……俺を一人にするのかよ!!!」

彼女は涙を流しながら一言言った。

「……………ごめんなさい……」

「……………」

俺は、その時覚悟した。彼女も本気なのだ。

「エミリー……………行こう」

「嫌だ!!ママ!!!ママああああ!!!」

俺はエミリーを抱きしめ、シャツルから飛んだ。

それからの記憶は…ほとんど覚えていない。

しかし、次に目が覚めた時、俺は地球の小さな病院にいた。

動かぬ体で視線をやると、全身が包帯で巻かれている少女の姿…。エミリーだ。

「……………」

言葉が出ない。出せないが正しい。

「お目覚めですか」

「……………」

俺は頷く。

「二人とも、すごい生命力です」

「話によると、連邦のパトロール艇が見つけた時には、既に酸素がなくなっていたそうですからね」

「…え…み…り…は…」

何とか声に出すが、まともにしゃべれはしなかった。

「…娘さんは…その…」

「……」

「落ち着いて聞いてください。彼女は…昏睡状態で、まだ目が覚めていません…」

「……」

胸が苦しくなった。何故…こんなことに…。

それから、2か月後、俺は退院し、頻繁にエミリーのお見舞いをしに来た。

しかし、それでも、彼女は目を覚まさなかった。

病院に来ては、ずっと彼女の手を握って離さなかった…。

ずっと……。

ある日、病院に行くと、病院の周りに人が集まっていた。

近くに寄って話を聞いたとき、俺は、その場に崩れてしまった。

「……………そんな…」

「おい！大丈夫か!？」

「エミリー……………。嘘だ…………。嘘だあああああ!!!」

病院は、とある反連邦主義者の自爆テロで、爆破された。

中にいる人の安否は分からず、生きているものはいない。

俺は、それから…………戦争を憎んだ。

生きる意味を失い、ただ、ただ絶望していた時、俺は、連邦軍の募集を見て、軍へと入隊した。

訓練学校では優秀な戦績を取めたのはかすかに記憶にあるが、何をやったかは詳しくは覚えていない。

そして、宇宙世紀0083. 10. 13 第00特務試験MS隊に所属することになった。

俺は、専用の機体を受領し、小隊長とかいうふざけたやつと模擬戦をした。

「くそ…………!!くそがああああ!!」

ダルマになったジムの中で、俺は叫んだ。

「お前さん。強いなあ。これなら第1小隊も安心だなあ！」

「てめえ……!!同情のつもりか!!」

「いや?そんなつもりは一切無いぜ?お前さんは強い。これはたぶん見てるみんなが理解したさ」

「……………くつ……。ふはははは!!!面白い部隊に来たもんだ!!はははははははははは!!!傑作だ!!」
負けてしまった。そのことを悔やんでいるわけじゃない…。

ただ、ムゲン・クロスフォードは、戦争を楽しんでいると感じた。
だから許せなかった。

彼は、強い。だが、なんの意味もなく、「ただ強いだけ」だった。
だからなおさら俺は腹が立った。

「経験?……何言ってるんだお前…」

「…何…?」

「お前は経験以前の問題だ」

「お前からは戦いをするオーラがまったく感じられねえ…。お前だけぬるま湯に漬かっているようなもんだ」

「なんだと…!!」

「上官つてのはすぐ手を挙げたがるよなあ…。てめえに教えてやるよ。今のてめえになら負けねえ…。もう一度俺と模擬戦を試してみろ」

「……」

許せなかった。戦争で生き残ったことを……。人に自慢するようなことじゃないのに…。それを偉そうに言う彼が。

だから、俺は負けなかった。

「くっ……!」

「ほら。結果こうなった。てめえには、強さの本質が見当たらねえんだよ」

「…強さの……本質……?」

「そうだ。お前はなぜ戦う? 意味もなく戦うお前は、いったい何がしたいんだ?」

「お、俺は……意味もなく戦っているわけでは……!」

「いいや。お前からは戦う闘志が感じられないんだよ。過去の栄光、理想にしがみついてばかりで、今を見れちゃいねえ」

「……そ、そんなことは……!」

「確かにてめえは一年戦争を生き残ったのかもしれないねえ。けどな、今のままじゃてめえ

は確実に死ぬ。いや、俺が殺しちゃうかもなあ?」

「お前に殺されるほど…俺は……」

「甘くはないってか? 冗談きついで…。この状況になってまで言えるとか、どんだけ甘いんだよお前」

「くっ…!!!」

「だが俺には、しなければならぬことがあるんだ…!」

「それ、理想だろ?」

「……!」

「現実も見れない奴が、高いところに止まって理想語ってるんじゃねえよ」

「いいか? 理想を持つのは構わねえ。けどな、てめえがすべきことは理想をかなえることじゃねえ」

「目の前の現実を受け止めることだろうが」

「目の前の…」

「だからてめえには闘志が感じられねえ。正直ガツカリだぜ。一年戦争を生き残った奴が、くだらない理想にしがみついた性根の腐った奴だとはな!!」

「……」

「戦う意味も、現実も見れないお前に、今の俺は倒せねえ。いや、敵すら倒せねえよ」

「な…………な…」

「お前。軍やめちまえよ」

「……………!!!」

「てめえがいたら、部隊が全滅しちまう。さっさとやめるんだな」

見ていて腹が立った。昔の自分を見ているようで…。だから強く言った。

それから、彼は脱走した。もう二度と顔を見ることはないと思っていた。しかし、次に会った時の彼は少し違って見えた。

「ちっ！こいつらあ!!!邪魔なんだよ!!!」

数機に囲まれ、手間取っていた時だった。

「俺の…………」

「なんだ…?!」

「俺の部下に…………仲間に出すんじゃないやねえええええ!!!」

あの声はまさしく、奴だった。怖気づいて逃げ出した…………彼。すぐさま周りに煙が巻かれ、俺の機体は敵から見えなくなる。

「イーサン・マクラウドだな」

「ああ?…てめえは…なんで出てきてんだ?雑魚のくせによ!!!」

「ああ。すまない。だが、雑魚でも何でもいい。お前を死なせるわけにはいかない」
「な、なに…カツコつけてるんだよ。てめえに守られなくても俺は…」

「強がるなよ？お前は俺の部下だ。だから、隊長に任せておけばいいんだ」

「……な……」

「見ておけイーサン!!!お前の隊長の背中!」

彼は、驚く速さで敵を倒していく。

その背中中は……彼女の強い背中を思い出させた。

一瞬目を疑った。そして、その時俺は思った。

彼は……変わったと……。

それでも、大多数の数を相手に、苦戦し、そして、倒れる。

だが彼はそれでも……。

「動けよ…!!動きやがれ!!!俺の体ああああああ!!!」

「…そう…それで……いいんだ……」

「俺たちは……まだ…終わってない…」

「全員が無事に生還するまでは!!!」

「だから頼む!ピクシー!!!力を…俺に力を貸せええええ!!!」

俺には……その背中が、ぼろぼろの彼らに……希望を見た。!!!

「……………似ている……………」

小さく言葉が漏れる。

サリアに……………。

そして、彼は、本当に希望を見せてくれた。

「……………パパ!!!」

「……………ああ?!……………え……………?」

凍り付いた。彼女の声だ。

あの……………あの時から変わらない……………。

「パパだよね?!イーサンって……………!!!」

「……………ちよつと待て……………隊長、機体を近づけてくれないか」

はやる気持ちを抑え、待つ。

「あ、ああ。待つてろ」

ボロボロの機体がこちらへ寄ってくる。

俺は、急いでコックピットのハッチを開いた。

そして、彼女の手を握る。

「……………エミリー……………なのか……………?」

「パパ…なんだね……」

「そうか……エミリーの親父さんって……」

「エミリー……お前は死んだはずじゃあ……」

「違うよ!!生きてた!!パパのおかげで!!」

「……はは……そうか……そうかあ……!!」

「大きく…なったな……」

「パパ………会いたかった……ずっと探してた」

「パパだ………ずっと……探してた……」

「ああ………お前が死んだと思って……俺は……俺は……!!」

「こんなに近くにお前がいたのに、どうして……!どうして気づかなかったんだ……!!」

俺も何一つ見えていなかった……。こんなにも近くに、大切な家族がいたのに……。

「パパああ!!」

だが、俺は覚悟を決めていた。娘に会う前から……。

「イーサン、離脱だ!!」

「……駄目だ。それはできない」

「何故!? やつと会えたんだぞ!? 娘に!!」

「それでもだ。俺は…軍人だ」

そう。一人の人間である前に…。今の俺は軍人だ。

「そんな…!! そんなことつてさあ!!!」

「理解出来はしないさ。お前は…優しい男だからな」

理解はできない。誰にも……。俺は彼の頬を撫でた。

「駄目だ…駄目だよ…!! こんな別れ…あつていいはずがないだろ!!!」

「目の前にやつと…やつと再会できた娘がいるんだぞ!!?」

「わかってる!!!」

俺は叫んだ。苦しいのは十分わかっている。だが、それでも…。

「だからこそ、俺は…俺の務めを果たさなきゃあいけない!」

「イーサン…」

「頼む…。ムゲン・クロスフォード。これは…俺にしかできない事なんだ」

「……お、お前つてやつは…」

「エミリー…いいかい。ムゲンと共に、家へ帰るんだ」

「やだ!! もう離れたくない!!!」

そう言つて一層強く抱きしめてくる。

「俺だって寂しいさ。けれどな……隊長の言う通り、お前にしかできない事がまだあるはずだ」

「……パパ……」

「だから……お前はまだこっちに来ちゃだめだ……」

「……うう……ぐすつ……」

「……隊長。最後の……頼みを聞いてくれないか」

「……なんだ」

「この……世界で一番愛おしいバカな娘を……家へ……返してやってくれ……」

「……いい……のか……?」

「ああ……。もう、覚悟は決めてある」

もう……引き下がることはできない。それが……俺の役目なのだから。

「………わかった。行こう。エミリー」

「いやだ!!絶対にはなれない!!!」

「エミリー!!!」

「つ!!!」

彼は叫んだ。彼は俺たちを想って彼も覚悟を決めた。

「彼は……軍人だ。彼の……最後の任務を……遂行させてやってくれ……」

「……うう……」

「エミリー。泣くんじやない。君は強くて優しい子だよ」

「……パパ……」

「随分と母さんに似てきたな。これなら、きつと幸せな家庭を築くことができるだろう
さ」

サリア……お前の娘は……こんなに立派になったんだぞ……。

「……うう……」

「さあ。時間だ……そろそろ行かないと……わかるね？」

「……うん……」

「そうだ。この写真。持っていけ」

「……これは……」

「お前の母さんの写真だ。どうだ……？お前に似て美人だろうか？」

「うん……！うん！！」

「……ムゲン隊長。あんたは……きつと、これからもつらい思いをするだろう」

「けどな、その時、そばにいてくれる家族を……仲間を……」

「……ああ……守って見せる……」

「ああ。……期待してるぜ？」

「……離脱する……！」

「……なに……怖がつてるんだよ……俺……」

いざやろうとすれば怖がつてしまうものだ。

手が動かない……。

「……怖え……なあ……」

なんとか体を動かし、機体に乗り返む。

「……ああ……死にたく……ねえなあ……」

涙が零れた。辛いと言えば辛い。当たり前だろう……。

だが、それでも……俺の役目は果たさねばならない。

「……んじや、やるか……」

機体の装甲をパージし、武装を解除する。

そして、ビーム砲台を持ち、飛び上がる。

スラスターを最大稼働して、ただ一直線に墜ちる星へと……ただ一人。

「……いいや……一人じゃないな……」

知らないうちに忘れていた。俺のそばにはいつも……彼女がいることを……。

『イーサン』

「……………ああ。これでお前の所に行ける」

『もう、戦わないでいいんだよ』

「……………これが本当に最後だ」

『そうね。やつと会えるね…』

「……………エミリーは、立派になったんだよ……………本当に…」

『ええ……………』

機体の自爆装置を起動させ、ビーム砲台をコロニーに突き刺す。

そして、スラスターを限界まで起動し、なんとか押し返そうとするが、到底無理なこ
と……。

「俺は……………戦わなくて済むんだな……………」

「……………ムゲン……………クロスフォード……………」

「俺の未来は……………託したぜ……………」

「最後の最後で……………俺は、やつと……………人間に……………なれた…」

瞬間、すべてが白い光に飲み込まれる。

痛みは……………なかった……………。

これで……

これでよかつたんだ……

さあ……俺の物語の終幕だ……

後は……若い奴らが……希望をつなぐ……

こうして……人の歴史は紡がれる……

ムゲン……戦争を……終わらせろ……

星に……なれなかつた俺たちの代わりに……

外伝 完

外伝：エミリーと黒猫

宇宙世紀0084 第00特務試験MS隊を抜けた私は、新しい仕事を求めて日々街を歩き回っていた。

軍を抜けたことを後悔してるところもあつたけど、それでもこういう暮らしができるのも嫌いではない。

でも……。

ちよつとだけ寂しいかな…？

この話は、そんな私と嫌われ者の「小さいヒーロー」のお話。

「はあ……。今日も疲れたあ…」

日払いの仕事が終わると、既にもう外は夕日が落ち始めている。

今日の仕事はそれなりだった。事務業務だったからなおさら。

「……晩ご飯何にしようかな……。お店行って材料買わないとなあ…」

気分を変えて、前を見る。

「よーし！材料買って帰ろー！」

歩き始めた時、正面から小さい黒い影。それがこちらへ向かって突き進んでくる。

「な、なんだろう……」

正面から迫るその影を見る間もなく、その影は、私を飛び越えて走って行ってしまった。

私は、そのしなやかな動きに、一瞬だけ固まって、思わず声が漏れだす。

「あ……」

気が付けば、私は走って影を追いかけていた。

その時は疲れも忘れ、ただその影の残す「軌跡」をたどりながら。

どれくらい走っただろう。

小さい影が路地裏へ。私は迷わずに、その影を追う。

路地裏は、夕暮れなのに既に暗闇に飲み込まれ、影が身を潜めるにはうってつけの場であった。

「はあ……はあ……」

肩で息をしながら、ゆっくりと路地裏で影を探す。

ゴミ箱の中にはいない。

木箱の裏でもない。

「あ……」

暗闇で小さく光る二つの「デュープブルー」色の宝石。その宝石はこちらをじつと見つめている。

その宝石の前へ手を伸ばす。

すると驚いたのか、宝石が一回りくらい大きくなる。

「おいで……う怖くないよ？」

声をかけるが、その宝石はその場を動かない。

さらに手を伸ばす。すると、宝石の主に触れる。

そして、抱き上げてみた。

宝石の主は思ったよりも軽く、毛もボロボロで、体は小刻みに震えている。

尻尾はかぎしっぽで、そして全身は黒色。だが、所々に赤黒い何かが張り付いている。

宝石の主と目が合った。

一瞬の間の後、主は暴れだす。

「っ……っ……」

主はその鋭い爪で私の手を引っ掻いた後、指に噛みつく。

チクリとした痛みが、私を驚かせた。

私自身、動物など飼ったこともなく、生まれて初めて触ったからだだったからなの
が理由だ。

しかし、その驚きにも耐えた私の手はしっかりとその小さい主を掴まえていた。
痛みに耐えながら、私は小さい主を胸まで引き寄せ、抱いてみる。

主は少しだけひんやりしていて、震えていた。

「にゃ」と声を上げ、なんとか私の腕から離れようともがく。

「いい子、いい子」

私はゆっくりと胸の中で暴れる主を撫でる。

体温が伝わり、主にも温もりが宿った。

「……………」

暫くの間、私は主を抱きしめていた。

それから、主を離し、ゆっくりと立ち上がる。

「…帰らなきゃ。それじゃ、バイバイ。猫さん」

私は背を向けて路地裏を後にした。

初めて触れられた。その温もりは、自分にも確かに伝わって、自分の中でそれが宿るのを気付かせる。

野良猫である自分に対して、周りは皆声を揃えて言う。「災厄の黒猫」と。

自分は望んで生まれたわけじゃないのに。そう呼ばれたくて生きているわけじゃないのに。

だけれど、あの人間は違った。

走って行く自分を追いかけて、怖くなったから路地裏に逃げたのに、そこまで追ってくる。

そして自分を見つけると、人間は微笑みながら抱き上げてきた。

それは、自分が今まで体験したことのない衝撃。

今まで忌み嫌われて、散々暴力や罵倒を受けた自分に対して、いとも簡単にあの人間は手を伸ばして抱き上げる。

驚いたんだ。自分を抱き上げてくれる人間なんかいないと、傍にいてくれる仲間なんかいないと思っていた。

だから抵抗した。それが受け入れられなくて。

指に噛みつくとき、その人間は驚いたような、痛みに耐えるような顔をしていた。

けれどそれに構わず、その人間は自分を胸まで抱き寄せ、頭を撫でてくる。

必死でもがいていた。けれど、何度か撫でられているうちに、受け入れるのもありかもしれないと思った。

抵抗するのをやめると、人間は優しく抱きしめてくれる。

その温もりが。優しさが。自分の中で一杯になった。

人間にも、色んなヤツがいる。その時思ってたんだ。

それから、人間は「：帰らなきや。それじゃ、バイバイ。猫さん」

そう言つて、人間は路地裏から背を向け歩き出していった。

……………。

もう一度。

もう一度だけ……………。

信じてもいいかもしれない。

気が付けば、自分の足は勝手に動き、背を向けた人間を追っていた。

暗くなった夜道を必死に。

どこにいるのか。

探したんだ。

もう一度あの【温もり】を感じたくて。

走った。

どれくらい走ったのかも忘れたとき、やっとあの人間の背中をみつけた。鳴いた。

その人間は振り向いた。驚いていたんだ。自分が追いかけてきたことに迷わず、人間の胸に飛び込んだ。

「にゃー!」

その声に振り向くと、さっき別れた猫がいた。

ずっと私を追いかけてきたように見えた。

猫は、私の胸に迷わず飛び込む。

私は、猫を優しく抱く。猫は私の腕の中で小さく鳴いた。

それを見て何故か、私は安心を覚えた。

「……………一緒に帰ろうか」

私は猫を抱きながら家路へとついた。

お金は日払いの仕事が多いから、一人で暮らすならそれなりには生活できる。

家も外見はボロボロだが、なんとか一人で住める場所を選んだ。狭いけど、贅沢は言えないから。

材料を机に置いて、私は猫を見た。

部屋の灯りを点けると、猫は眩しそうにしている。

体の所々にある赤黒い何かは、どうやら猫自身の血が固まっているものみたい。

だが、傷はもうすでに塞がっているのが分かる。

なんとかして汚れを落としてあげないと。

そう思った私は。

「……………おいで」

私は屈んで手を広げる。

すると、猫はゆっくりと私の所へ近づいた。

私は猫を抱き上げ、お風呂場へ向かう。

シャワーで猫の体をゆっくりと流す。

驚いた猫が私にくっつく。

「えっ!?!ちよ、ちよっど!?!」

突然くっつかれ、態勢を崩した私は、そのまま転んでしまった。

シャワーは容赦なく猫と私に水を振りまいて、猫は私に抱きつきながら震えてる。

「……………いたた。仕方ないなあ…」

私は体を起こして、猫を抱きながら洗ってやる。

「怖くないよ。私も一緒だよ」

そう言いながら、震える猫を洗う。

それから30分くらいの格闘の末、猫を綺麗に洗い終える。

ついでに自分のお風呂も済ませた。

「はあ…。よし、体拭いてあげないと…」

バスタオルを持ち、猫を包んでみる。

そうして猫巻きバスタオルを抱き上げていると、なんだか自分が子供を持っているような気がした。

「さて、と。拭こうかな」

猫の体を丁寧に拭いてやる。さらに、ドライヤーで毛まで乾かしたりなんかしました。

そして出来上がった猫は、今までとは違って、ツヤツヤの毛に、輝く両目のデュープブルー。

「わあ！かわいい!!」

本当にかわいい。ただ、彼がどう思っているのかは分からないけれど。

「……あ、ご飯作らなきゃ……」

私は立ち上がり、机に置いた材料で、簡単なものを作ることにした。

運よく、加熱してある魚を買ってあるのをみて、私は小さく切り分けて皿にのせる。

そして、猫の前に置いた。

「食べていいよ」

私が言うと、猫は魚を一口食べる。

結構気に入ってくれているのかな。

それから、食事を済ませた私は、リビングでくつろぎながら【ある事】に頭を抱えていた。

「うーん……」

ある事とは、猫の名前だ。

いつまでも【猫】と呼ぶのは寂しい。

だから考えていたのだが……。

考え始めると、ちつともいい名前が思いつかない。

「……………」

それから、数時間。

「……………よし、決めた！」

その声で猫はこちらを見つめる。

「君の名前は【ロブ】！」

そこまでカツコよくはない。意味は、最初にすれ違ったあの時、どこか行く当てもなく彷徨っていたから。

【R o v e 〓 〓 ロブ】は、さまようって意味やきよろきよろするって意味がある。

「……………ロブ！」

呼びかけると、ローブは首を上げ、私を見つめた。

反応してくれたのが嬉しくて、私は思いつきり抱きしめた。

【ロブ】。それが自分の名前。

自分に名をつけてくれる人がいた。

そして、彼女は笑って自分を抱きしめた。

苦しいのに、嬉しい気持ち。

水をかけられるのも慣れていた。

それなのに、彼女は自分を罵倒したり暴力を振るうどころか、優しく抱きしめながら、自分を洗ってくれていた。

そんな気持ちも。

『食べていいよ』

その一言を言ってもらった。

それから、一口食べたときの気持ち。

その何もかもが「初めて」で、とても暖かかった。

自分には誰も優しくしてくれはしなれな思っていたから。

なのに、彼女は簡単に自分を優しく撫でて、抱きしめてくれる。

嬉しかった。

本来野良猫には持ち合わせていない気持ちだが、確かに宿ったんだ。

それは暖かくて、嬉しくて。

自分だけじゃないはず。この気持ちは、生きている動物全てが感じることのできる気持ち。

彼女は自分を抱きしめたまま、眠っていた。

だんだんと自分の臉が重くなっていく。

気づけば、私はロブを抱きしめながら眠ってしまっていた。
目が覚めれば、カーテンから明るい陽射し。

「……………」

体を起こすと、ロブは腕から離れて、大きく伸びをした。

「おはよう。ロブ」

私が言うと、ロブは小さく「にゃ」と答えた後、大きなあくびを一つ。

立ち上がり、朝食の準備をする。

まだ、少しだけ眠いかな。

しかし、そうも言っていられない。

今日も仕事がある。自分にできることをしなければ。

あの時……【彼】に言った。

そして、【父】が残した言葉だから。

ふと、彼らの事を思い出す。

元気にしているのだろうか。

……少しだけ、寂しいな。

現実引き戻されたのは、ロブが私の脚にすり寄ってきたから。

「……ロブ？」

ロブは、私の周りをくるくる回ったり、時折私を見上げたり。

その顔が心配してそうな顔に見えた。

動物というのは、特に犬や猫は信頼している人を慰めようとする気持ちがあるのだろうか。

そもそも、ロブは私をどう思っているのかさえ、分からない。

「よし、気分変えてご飯作らなきゃ！」

それから、私は昨日の残りのカボチャスープを温め、その間に目玉焼きを作る。

あ、パンも焼かないと。

急いでトースターにパンをセット。

「あ、スープもうよさそう」

火を止め、スープを皿へ注ぐ。

次々と朝食が出来上がっていく中、ロブは私の動く方向を毎回首で追いかけていた。

「ふう……」

椅子に腰かけ一息。

ロブの朝食は、昨日残ったお魚の切り身を少しだけ。

ロブはおいしそうにそれを食べている。

「私も食べよ」

正直、最近は食事の時間と睡眠の時間くらいしか楽しみが見つけられない。

それはそれで困ったことなんだけど、まあ自分で望んでやってるわけだし、何も言えないんだけど。

ブツブツ考えながらスープを一口。

カボチャの甘みと、塩のバランスがいい感じで、なんだか眠たく……。つて！だめだめ。

次は…少し形が悪い目玉焼き。うん。形は悪いね。何て言えばいいかな。

黄身と白身が一体化してるような感じ…？いや、これでも目玉焼きなんだよ？

ナイフで切り分け、一口。

うん。まあ味は言わずもがな。塩だけで調理したから塩と卵の味がする。

黄身がつぶれてるからそれほど黄身の味もしない。

………これで何回失敗したかな…。

まあいいや。次は、トースト。

バターを表面に塗ってあるから、美味しい。塗ってなくてもおいしいけどね。

ココだけの話、部隊にいたときに見たことで、道夜隊長の話。

彼は、パンを食べる時、必ずパンの耳を食べないんだよね。

いや、分かるよ。気持ちは分かる。特に焼かずに食べたときはむしろ耳が邪魔な気はするのによく分かる。

まあ、人の好みはそれぞれだからこれ以上は言わないけども。

なんか、何でも食べそうな人に見えたから、結構面白かった記憶がある。

「はい」

思い出したら笑いが込み上げてきた。

その事でよくユーリさんに弄られてたっけ。

「……………」

私が、父を探して連邦軍に入った時、新人オペレーターとして配属された場所が彼ら
がいた部隊。

家族なんか居なくて、寂しかった私に、あの部隊の皆は優しく手を差し伸べてくれた。

私を家族と言ってくれた。

なんでもない言葉一つ一つが、私にとってはとても嬉しかった。

彼らと会えたこと、それが私にとっての最高の幸運だったのかもしれない。

それほどまでに私を変えた。

あの場所は、陽だまりのような場所。

寂しささえ分かち合って、互いに寄り添って。

笑いあって、助け合って。

それは、太陽のような。

「……………ううっ……」

急に、部隊を抜けたことを後悔した。

寂しさから涙が零れた。

彼女は泣いていた。

何かを思い出して笑ったり、そして今は涙を流している。

それが何故なのかは自分には分からない。

けれど、彼女が泣いている姿は見たくない。

彼女の脚にすり寄って、小さく鳴く。

それに気づいた彼女は自分を見た。

そして、彼女は自分を抱き上げ、泣いた。

「うっ……うっ……うっ……寂しい……よ……」

【寂しい】その言葉が、自分の心のどこかで、小さく眠っていたソレに突き刺さった。

……同じなんだ。彼女も自分と。寂しいのはみんな同じだった。

でも、自分はただの野良猫。猫にできることは少ない。

……でも。

彼女の流した涙を舐める。

「……………ロブ……?」

「にゃ」と鳴く。その一言には、『泣かないで』と込めた。

それが伝わったのかはわからないけれど、こんなことしか出来ないけれど。

「……うんっ……うんっ……!」

彼女はただ自分を抱きしめて頷いた。

自分に出来ることは無いのだろうか…。

ロブは、私を慰めてくれた。

「にゃ」という一言から伝わった。『泣いちゃいけない』と。

いくら望んでも、泣いても過去は戻らないから。

彼らとは違う道を歩んだのだから。

だから……。

「今は、もう泣かないよ。ロブ……。ありがとう」

私は微笑んだ。

それから、3年の月日をロブと過ごした。

それは、私が仕事を終えて帰路についていた時。

「……………」

「エミリー・ブライトウエルだな？」

周りを見ると、私を囲む黒服の男たち。

「……………だったら何なんですか？」

「抵抗せずについてきてもらおうか？上の命令なんでね」

「何故……………」

「理由なんか君が聞く必要はない」

「……………」

私は彼らの間を抜けて走った。

「まてっ！ 貴様あ!!!」

背後から迫る足音。

「はあ……はあ……!!!」

それから、路地裏に逃げ込む。

ここなら、闇に紛れて身を隠しやすい。

「どっだ!？」

私は息を殺して隠れた。

男たちは私をみつけるために探し回っている。

このままではいずれ見つかってしまう……。

そのちよつとした恐怖が、私の行動を迂闊にさせた。

動こうとしたとき、近くにあった缶を蹴ってしまった。

「……!!」

「そこか!!!」

結局、私は捕まった。

そして、途中車に乗せられ、見知らぬどこかへと。

……次に気が付いた時、私は見たことのない倉庫にいた。

どうして私がさらわれたのかも理由が浮かばない。
私は、ただ震えてここにいるしかなかった。

おかしい。いつもなら、彼女は既にこの時間だと帰ってくるはず。

……考えすぎな気もしたが、自分は家を飛び出した。

もしも、彼女の身に何か起きたら、と彼女は教えてくれた。

『いい？ロブ。もしもの話、私の身に何か起きたなら、助けてくれる……？』

『……なんてね。冗談だよ冗談』

その言葉が、今も胸に残っている。そして、今がその時なんだ。

走った。必死で。周りの言葉なんか気にもせず。

ただ、彼女のために。

途中で石を投げつけられたりもした。

当たったところから血が出た。

でも、走った。

彼女のためだけに。

「いたぞ!!黒猫だ!!」

大柄な男が自分をみつけて走ってくる。

そんなの構わず走った。男を飛び越えようとしたとき。

男に捕まった。

そして、壁に投げつけられる。

痛みが全身を駆け抜けた。どこかが折れたのも分かった。

それでも……………。

それでも……………。

それでも……………!!!

自分は……………僕は!!!

走るのをやめるわけにはいかないんだ!!!

振るえる足で立ち上がり、大きく咆えた。

それは、己に再び動く力を与えるため、そして、彼女を救うために。だが、男はそれに構わず近づいてくる。

「これで終わりにしてやる!!!」

動こうにも、そこまで早く対応なんかできない…。

でも……………!!

振りかぶる男の手を、何者かの手が止めた。そして、男に一撃。

「何するんだ……………!!?ぐあつ!!」

「……………動物をいじめるのが楽しいか?」

「……………なんだと!?!」

「これ以上やるなら、俺が相手になってやる」

「……………なっ!その制服は……………ちっ……………!」

男は彼に恐れをなして逃げて行った。

僕は震える足で前へ一歩ずつ進む。

まだ、走れる。

だが、それを彼の手が止めた。

「大丈夫か？」

そんな言葉、今は必要ない…。

言葉を無視して走った。

「お、おい！待ってっ!!」

そんな言葉さえも。ただ、彼女の元へ。

どこにいるのかさえ分からないのに。……いや、何故だかわかる気がする。

彼女がどこにいるのか。

だから、一心不乱に走った。

そして辿り着く。大きな倉庫。

きつとここに彼女がいる。

猫の勘が、俺の勘がそう告げている。

「はあ……はあ……ここにないかあるのか？」

見れば、彼も後を追ってきていた。

……何故か、彼女に似ている。こんなに珍しいヤツが二人もいるなんて。

僕は構わず走った。

倉庫の中で泣いている彼女を救うために……!

僕は……【Rove】。彷徨う者。

そして、その名を付けた彼女を助けるために、今、
咆える。すると、黒服を着た男たちが現れる。

「なんだ!?猫だと!?!」

もう、力がほとんど出ない……。

「こいつを追い出せ!!」

男たちが俺へと迫る。避けれるほど体力がない。

「待て」

追ってきた彼は言った。

「なっ!?貴様どこから!」

「……………コイツは何かを探してる」

「何……………?ま、まさか!?!」

「その様子なら、隠しているものがあるみたいだな」

「先にコイツを追い出すぞ!!猫は後だ!!!」

男たちは彼に迫っていく。

「黒猫!!!」

彼は叫んだ。

「ここは任せておけ、先に行つて探してこい! すぐ向かう!!」
「にゃ!」一言。それで伝わるはずだ。

もう、迷うことはない。彼女の元へ。

そして……………。

泣いている彼女をみつけた。

もう動かない足を引きずりながら、彼女へ一歩ずつ。

泣いていた。怖かった。寂しかった。

だから泣いていた。

「ううっ……………!」

私はどうすればいいの？

だれか、教えてよ。

「にゃ……………」

震えているが、確かにその声はロブの声。

「……………!!」

前を見れば、ボロボロになったロブが一步ずつ私へと歩いてくる。

後ろの右足はもうすでに動かず、引きずりながらも。

「ロ……………ブ……………?」

片目は既に見えておらず、満身創痍なのが見てわかる。

それなのにも、もう動かない足なのに、私へ歩いて……………。

ロブは、最後の力を振り絞って、走って私の胸へ飛び込んだ。

「……………!」

それは、最初に出会ったあの時のように。

「にゃ……………」

もう、声もほとんど出ていない。

「ロブ……………どうして……………!」

私は、涙を流して、問いかけた。

「ロブ……どうして……！」

その問いかける彼女。もうあまりよく見えないが、彼女は泣いていた。自分のために泣いてくれた。

こんな、野良猫のために……。

きつと、それが【答え】。

自分を【愛してくれた】から。

抱きしめてくれたから。

一緒に過ごしてくれたから。

それが……。 たったそれだけだけど。

人間からすれば小さくくだらないかもしれない。

でも、猫には……。 いや、自分にとっては……そんな当たり前が体験できたことが。

嬉しかったんだ。

初めて抱いてくれたあの時の温もりと同じ。

彼女の頬をなめた。まだ、寒い冬なのに、彼女から流れる涙からは、少しだけ早い春の味がした。

こんな……野良猫のために……。

ねえ、エミリー……。ボクは……もう彷徨わなくていいよね？

ボクは……。【Love】。こんな辛い世界でも、ボクを愛してくれる人がいた。

それだけで……。

ボクは幸せだ……。

ロブは、何も言わず、ただ私の腕の中で力尽きた。

「……ロブ……ううっ!!!」

こんなに小さい体で、必死に私を探してくれて……。本当に助けてくれた。会いに来てくれた。

愛していた……。自分の子供のように。

この子は【R^ove^b】なんかじゃない。【L^ove^b】。愛するという意味がある。

ねえ、ロブ。あなたは幸せだったの？

私は……。幸せだったよ。

あなたと会えて。

あなたと過ごさせて。

「あなたを……。愛せて……」

あなたは私のヒーローだよ。ロブ。

私は、【小さい英雄^{ヒーロー}】を抱いて外へ出た。

途中で、黒服の男が全員倒れ居ていたのをみて驚いたけれど、それから、私は家の横に小さい墓を建てた。

墓に刻んだ文字を見て、微笑んだ。

「…行かないや。それじゃ、バイバイ。ロブ」

私は、彼に背を向け歩き出した。

墓には、こう刻まれている。

——私が愛した小さい英雄ここに眠る——

外伝 完

グリプス戦役編

始動：0087

宇宙世紀0085・07・31 30パンチ事件。公国軍残党殲滅組織、テイターンズがサイド1・30パンチに毒ガスを注入し住民を虐殺。

俺はこの作戦に参加することはなかったが、考えただけでも寒気……いや、吐き気を覚えた。

これは……今連邦がやっていることは間違いなく……。

ザビ家に支配されたジオン公国がやったことと同じことだ。

俺は……だからやってしまった。

燃え盛る戦艦。そこら中に横たわる機体たち。

そして、格納庫奥で悲鳴が聞こえる……。

俺は……その手で仲間を……斬った。

「お、おま……え……」

「……悪いな……道夜……」

「うらぎる……のか……」

「裏切る……？ 違う。俺は……自分の意思に従っただけだ……」

「……意志だと……？」

「お前は見たはずだ。知らないとはいえ、無抵抗な人々が……もがき……苦しんで死ぬ様を……」

「くっ……！」

「……俺たちは……何度繰り返せば気が済む……？」

「俺たちは、何度……あの嫌な夢を見なければならぬ!!？」

「答えてみるよ! 道夜!!」

「……俺は……くっ!!!」

「……俺は……もう、軍を辞める」

「どのみち、連邦からお尋ね者だろう……なにせ……」

「第00特務試験MS隊を俺は……」

「殺してしまったのだから……」

遡り、5時間前。

俺は、遠征の後、久々に戦艦グロリアスへと帰還した。

30バンチ事件の話を聞いたのは、その時だった。

作戦の内容を問い詰めた時、フアングは渋々口を開き、
真実を全員に語った。
そして、誰もがそれに驚愕した。

「何故……！何故だ！フアング!!!」

彼の胸ぐらをつかみ睨みつける。

「くっ……！ムゲン……!!!」

「何故……知っていないながら……毒ガスを……!!!」

「……すまない……」

「すまない……だど!?それで許されることなわけないだろ!!!」

「くっ!!だが、俺にだって……!断ることのできない理由があったんだ!!!」

「なに……!?!」

「家を……家族を人質に取られちゃ……どうしようもないじゃないか……」

「……くそっ!!!」

俺は艦橋を飛び出した。

「……畜生!!!」

壁を力強く殴りつける。その痛みさえも、感じなかった。それだけ……辛かった。テイターンズがサイドーにやったことはどう考えても虐殺だ。

それを知っているながら……。それが許せなかった。

「ムゲン……?」

振り向くと、彼女がいた。俺は、息を整えたあと、彼女に言葉を返した。

「……リナか……どうした?」

「……サイドーのことだけどき……あれは……」

「仕方ないで済むのか!?!」

彼女の言葉を遮り、俺は叫んだ。

「……仕方ないで……済むはずないよね……」

「…当たり前だろ?!? あれだけの人が……! 何千、何万という人が…一瞬で命を奪われたんだぞ?!」

「……そう、だね……」

「でも……」

「……?」

「でも、だったら……ムゲンは家族と別れてもいいの!？」

「……!」

「家族と…家を……失うことは……もう……嫌だよ……」

リナはその場で泣き崩れた。俺は彼女の肩に手を置き、言う。

「……そうかもしれないな……。だけど……俺はそれでも……」

「家族のために、多くを犠牲にできる理由には……出来ないと思う……」

「……」

「皆の事が嫌いなわけじゃない。ただ、その理由だったら、人を虐殺出来るわけじゃないよ……」

「よ……」

しばらくの沈黙の後、彼女は静かに口を開いた。

「……ムゲンは……どうするの……?」

「……何が……?」

「これから……」

「……」

再び沈黙。俺は……たとえ家族であつても……。

「わからない……。俺は……この怒りをどこへぶつければいい……」

「……ムゲン……」

「俺は実際に【あの時】を見たわけじゃない。だが、それでも……」

「俺にとつて……サイド2は……故郷だつたんだ……」

「本当の家族と……一緒に過ごした……俺の家だつたんだ……!!」

「……」

俺は拳を強く握つた。歯を食いしばり、話をつづけた。

「だから……これ以上同じ悲劇を繰り返させないために……連邦で戦つてきたはずなのに……」

「……俺たちのような……苦しみを背負う子供たちを……作らないために……戦つていたのに……!!!」

「くそつ!!!くそつ!!!くそつ!!!あああああああ!!!」

叫びながら壁を何度も殴りつける。

「ム、ムゲン……!!怪我しちゃうから!!やめて……!」

俺の腕を彼女は掴む。彼女は、泣いていた。

「……………ごめん…リナ…」

「ううん。ムゲンは…正しいよ…」

「……………」

「私もそう思う。きつと、また誰かが悲鳴を上げて、憎しみにとらわれる」

「……………」

「そして、争いあう。…争いは消えずに、また新しい憎しみを呼ぶ…」

「…そうだ」

「でも……………ね…」

「……………」

「だからこそ……………。苦しくて、憎い。それを救ってくれたのは、ここのみんなだよ。【家

族】だよ…」

「だから……………私は……………虐殺が仕方ないとは言えないけど……………。ファングさんの気持ちもわかるの」

「……………俺だつて……………、それは分かつてる……………。わかってるが……………それでも……………」

俺は……………どんなに家族が大切でも……………。やはり、納得がいかなかった。

「……………リナ、俺はどうすればいい……………」

「……………私にしかできない事がある」

「……？」

「でしょ？」

彼女はそう言っていていつもの笑顔を見せた。

「……………俺にしか……できないこと……」

「私は……。私には、やるべきことがある。あなたにも、やるべきことがある」

彼女は、俺の肩に手を置く。

「……なんて言うのかな……。理想とか、そんな大きいモノじゃなく……。そう、使命……かな」

「……………使命……」

「私は、私の使命を果たさなければならぬの」

その言葉にあの時の【イースン彼】を見た。

「リナの……使命……？」

「……もう誰も……事故で、人を死なせたりはしない……。もちろん、ここみんなも、あなたも……」

「だから、一つだけ言わせて」

「な、なんだ……？」

「……あなただけでも、ティターンズを抜けて」

「なっ！何言ってるんだ！俺は……！」

「でも、悩んでいるんですよ？」

「……」

「悩むなんて、らしくないよ？ムゲンは、ムゲンだもの。自分が正しいと思ったこと成す。それが結果的に悪いことになっても……」

「そんなムゲンだからこそ、私は好きになっただよ」

「……リナ……」

「結局は、あなた次第。変えるのも、変えられるのもあなただけだよ」

「……そう、だな……」

「……私、待つてる……いや……違うね……」

「私も……後から絶対行くから。先に行って待つて……。そして、ティターンズを倒して……」

「リナ……」

「家族を失うことも怖い。でも、それ以上に……あなたが【代わる】ことが怖い……」

「代わる……？俺が……」

「うん。あなたは、あなたであってほしい……。だけど、私は信じてる」

「リナ……」

「だって、信じることも、【家族】の役目だもんね？」

リナは静かに微笑んだ。その笑顔は、いつも俺に道を示してくれていた。
なら……。

「……ああ。……わかったよ」

「……リナ」

「うん？」

「……ありがとな。……励ましてくれて……。それに……」

「俺を……その……愛してくれて……さ……」

少しだけ恥ずかしさがあったが、これは本当の素直な気持ち。

「ど、どうしたの？急に……」

「いいや。何でもない。それじゃ、後は俺が決める番だ……」

小さくつぶやき、俺はリナの元を去った。

俺はそのあと、食堂へ行った。飲み物を飲んで少し気分を変えようと思った。

「……ふう……」

コーヒーを口に入れると、少しだけ気分が晴れる。

「あ、ムゲン隊長」

目をやると、オペレーター達が集まり、話をしていた。どうやら声をかけてくれたのはマーフィーのようだ。

「……………どうした？全員が集まって」

「いえ、さっきの作戦について……………艦長に申し出ようかと思つて…」

「…申し出る…何をだ…？」

「サイド1の大量虐殺……………だよ？マーフィー…」

「ええ。毒ガスを使った……………まさにサイド2の悲劇のように…」

「……………」

「私は納得がいきません。彼らもそう思っています」

「…そうか…」

「ぼ、僕は……………」

アイザック…。たしか第四小隊のオペレーター。

「僕は許せない……………無抵抗な…市民を殺すことは……………軍人のやることじゃない……………」

「アイザック……………」

「どうして……………。どうして……………あんなことを…!!」

「ムゲン隊長」

「なんだ？」

「ムゲン隊長は、どうなさるおつもりですか？」

「……どう……つていうと？」

「いえ……何でもないです」

「……」

作戦に納得がいけないとしても……戦うことしかできない……。軍人というのは……
本当に力がない……。

廊下を歩いていると、何か考え事をしているフユミネを見つめる。

「……フユミネ……」

「ムゲンか。どうした？」

「……何か考えていたようだが、どうしたんだ？」

「……ああ。……毒ガス作戦のことを。……少しだけな」

フユミネは、俺と共に遠征へ出かけていて、実際に作戦には参加していなかった。

だが、その話を聞いたとき、それなりに考えさせられることがあったのだろう。

「……」

「……俺は元々傭兵だ。だから、場所がどうなろうと関係はない」

「…」

「だが、今は部隊にいる。部隊長の意見を…俺は尊重する」

「フユミネ…！」

「お前がそういう態度をとるのは知っていた。だが、ここは軍だ」

「軍は上の命令に従わなければならない」

「……」

「俺は……ファングの意志に従うことにした。それだけだ…。じゃあな」

彼は静かに歩いて行った。

俺たちは軍人かもしれない…。命令を聞くのも確かにそうかもしれない…。だが、それでも……軍人である前に…俺たちは人間なのに…。

格納庫へと、足を向け、自らの機体へ。そして、静かに機体を見上げる。

「……」

改装されたピクシーは、ただ静かにその時を待っているようだった。

大型の鞘に納められた一振りの刀。そして、バックパック右と右腰にラッチされたダガー…。

そして、籠手に取り付けられたナイフ…。どれもが主を待つ…。それが、どのような

【血】を浴びようとも。

主の命がままだ……。妖精は……眼前に在るものを屠る。

俺は……………。

『……………ムゲンは……………どうするの…？』

俺は……………。

『ムゲン隊長は、どうなさるおつもりですか？』

俺は……………。

『軍は上の命令に従わなければならない』

そうだとっても……………。

『僕は許せない……！無抵抗な……市民を殺すことは……軍人のやることじゃない……！』
許せない。こんな死に方が許されるわけない……。

『苦しくて、憎い。それを救ってくれたのは、ここのみなんだよ。【家族】だよ……』

そうだ。だが、それでも……。

『結局は、あなた次第。変えるのも、変えられるのもあなただけだよ』

俺は……俺が成すべきことを成す。たとえそれが、誰かを傷つける行為だとしても、俺は——

俺は機体に取り込み、システムを起動させる。

ナイフを持ち、カタパルトハッチを強引に切り裂く。

爆音に気づき、誰もが格納庫へと……。

俺は無線を開き静かに口を開く。

「……………俺は…ムゲン・クロスフオード」

「俺は今日、ここを出ていく……………」

「…俺の意志で。……………俺の成すべき事のために……………」

「…もう……………会うことはないと思う…。皆、元気で——」

俺はハッチを蹴破り、外へと飛び出す。

すぐさま俺の周りを彼らが囲む。

「ムゲン！帰ってこい!!」

「フアング!!!俺は……………悲劇を繰り返させたくない!!だから……………俺は…!!」

ナイフを持ち、フアングへと斬りかかる。

それを彼は正面から受け止める。

「お前の気持ちは分かる……………だから……………」

「違う!俺たちは未来を変えなければならぬ!!託された人々のためにも…!!」

「なら……………家族を捨ててもいいと!?!」

「そうだ……………!変えるには……………いつだって犠牲が必要なんだ…。それが、俺が【家族】を捨てるだけ済むのなら!!」

フアングを蹴り飛ばし、宙返り。間合いを取る。

「ぐっ……ムゲン……!!」

「フアング！手を貸す……！第三小隊、前へ！」

「道夜か……!!」

ジムスナイパーが射撃をしながら突っ込んでくる。

俺はナイフで弾丸を切り、受け止める。

「ユーリ!!下がれ!!」

「嫌です！ムゲンさん、あなたが敵になるというのなら……！容赦しません!!!」

彼女から必死に怒りを抑える声。

「それでも……!!」

ユーリを吹き飛ばし、ナイフで左腕を両断する。

「ああっ!!ムゲン……!!この……わからずや!!」

「何とでも言ってくれ……。俺は……それでも……俺の意志で……。悲劇を繰り返させはしないー！」

「……そこだ！」

左側からの殺気。それをナイフを投げつけ、回避し、一気に接近。ダガーを引き抜き、切り裂く。

それをビームサーベルが受け止める。

「フユミネ…!!」

「なんとなく……予想はついていた」

「何っ!」

「止めはしない。だが、【家族】を傷つけてただで済むと思うなよ」

「……すまん。フユミネ!!」

左からの薙ぎ払いを屈んで回避し、反撃に右腕を切り落とした。

「くっ!!」

「止まらない……もう引き下がれない……」

胸が苦しくなった。こうしなければならなかったのか……? 本当に……。

「……くっ……。うう……!」

苦しい。自らの手で……仲間を……家族を……そして最愛の人を……斬らねばならなかった……。

「ムゲン……!! お前……!!」

「……やはり……お前が立ちふさがるか!! 道夜!!!」

刀とビームサイズがぶつかり合う。

「くっ!!」

「……よくも家族を……お前を許すわけにはいかない!!」

「……俺は……戦わなければならないんだ!!もう、迷うわけにはいかない!!」

互いに間合いをとる。俺は刀を投げ出し、殴りにかかる。

すると道夜もそれに合わせ殴りに来る。

互いの拳がぶつかり合う。

「道夜!!!」

「お前は……お前だけは……!!」

「……俺が憎いか!」

蹴りと蹴りがぶつかり合う。宙返りのあと、再び拳が交わる。

「憎い!!裏切ってまでする必要があるのか!?!」

「誰かが変えなければならぬ……!人の革新が現れるまで、地球も、人類も保ち^もはしな

い!!」

「それは……お前でなくてはならなかったのか!?!」

「……誰かが背負って生きる。……それなら……俺が……」

「それは違う!」

「……!」

「背負うなら皆で背負えばよかったんだ！」

「……そうかもしれない……。だが……もう戻れない！あの時にも！お前たちの所へも!!」
道夜を蹴り飛ばす。すかさず受け身を取った彼は、再び突っ込んでくる。
俺もスラスターを起動し、道夜へ殴り掛かる。

「道夜ああああああああ!!!!」

「ムゲエエエエンっ!!!」

互いの拳が、メインカメラに打ち込まれる。

衝撃で機体が吹っ飛ぶ。

「くっ……!!!」

なんとか態勢を立て直す。しかし、道夜はうまく立ち直れなかった。

「……もう……終わらせよう」

俺はダガーを引き抜き、地面に伏した道夜の機体へと近づく。

「お、おま……え……」

「……悪いな……道夜……」

「うらぎる……のか……」

「裏切り……？ 違う。俺は……自分の意志に従っただけだ……」

「……意志だと……？」

「お前は見たはずだ。知らないとはいえ、無抵抗な人々が……もがき……苦しんで死ぬ様を……」

「くっ……！」

「……俺たちは……何度繰り返せば気が済む……？」

「俺たちは、何度……あの嫌な夢を見なければならぬ……！」

「答えてみろよ！ 道夜!!!」

「……俺は……くっ!!!」

「……俺は……もう、軍を辞める」

「どのみち、連邦からお尋ね者だろう……なにせ……」

「第00特務試験MS隊を俺は殺してしまったのだから……」

「一人で……テイターズと戦うのか……？」

「……黙ってみているわけにはいかない」

「……だつたら……俺たちも……」

「それが出来る立場じゃないことは分かっているだろう……？」

「くっ……！」

「俺たちはテイターンズの軍人。軍では……上の命令は絶対。だから……その【呪縛】から抜けることで自由に戦える……。テイターンズと戦える……」

「だからこそ、俺は……この部隊を抜ける。これは、俺にしかできない事だ……」

「それが……許される……わけ……」

「無い……。それは分かりきっている……。だが、もう戻れない」

俺はダガーを構える。

「くっ……！ムゲン……！」

「……元気でな……相棒……。リナを……頼む……」

「やめろ……！やめ……」

言い切る前に、彼の機体の頭部を切り落とした。

……機体を動かしながら泣いていた。男なのに、声を上げて……

ふと、機内を見ると、小さなカセットテープを見つける。

誰がこんなものを……。恐る恐る、俺はテープを再生した。

「……ムゲン」

リナだった。きつと、俺が機体に乗る前に仕込んでおいたのだろう。

「これを聞いているってことは……テイターズを抜けたってことだよね……？」

「……私は、ムゲンに選択を強引に押し付けてしまったのかもしれない……」

「それを……許してほしいの」

「……でもね、聞いて。私は、これはあなたにしかできない事だと思ったから、言った」
「私は、私にしかできない仕事があるから。まだ抜けるのには時間がかかる……。みんなを置いてはあなたの所へはいけない」

「きつと、これから、つらいことがあると思うけど、それでも、諦めないで」

「テイターズを倒せなくてもいい。……あなたが生きていてさえくれれば」

「……きつと、このことがバレたら……もう会えないかもしれないけど……」

「ああ、だからって、今すぐ戻ろうなんて思わないで」

「私のためにあなたが死ぬことを、私も、ほかの皆も……願ってない」

「ムゲン。きつと、きつと会いに行く。今度はもう待たないよ。私があなたに会いに行く。たとえ、何年掛かろうとも……」

「だから……それまでの……【お別れ】……。生きて……。ムゲン」
テープはここで途切れた。

「くっ……うう……リナ……!!」

涙が止まらない。彼女は、彼女は……。

「リナ……!!」

俺は、涙を拭き、前を見る。

「ああ。待っているとも……。何年でも。俺を探して、会いに来い……。会えたら……。その時は——」

その時から、俺は覚悟を決めた。

それから……。1年の間、俺はテイターズの最重要手配犯として追われる日々を送った。

だが、それを苦とは感じなかった。

それよりも……。

彼らを斬つてしまった罪悪感のほうが強かった。

テイターズを倒すため、毎日のように情報を探った。

30バンチ事件以降、反地球連邦政府運動組織エウーゴと呼ばれる部隊がさらに活発化しているという情報を得た。

……やつと……反抗の糸口を見つけた。

しかし、どうにもエウーゴと接触する方法が思いつかなかった。

宇宙世紀0086。11。10 その日は、不足した食料と、その他の雑貨をかうために、小さな街へと向かった。

「……」

なるべく、民間人であるように振る舞い、さりげなく情報を得ていた時だった。

「いやっ!!やめて!!!」

街中で響く悲鳴。

目をやると、ティターンズらしき兵士が、民間人を強引に連れて行くこうとしている。

「……………」

「おら！来るんだよ!!!」

「嫌!!!離して!!」

「貴様あ!!抵抗する気か!?!」

兵士は、警棒を引き抜き、民間人へ殴り掛かる。

「ううっ!」

「おらっ!おらあ!!!」

見ていられなかった。口元を隠すマフラーは、走ると風で飛ばされた。

振り上げた手を掴む。そのまま地面へと投げつけた。

「ぐほあ!!!」

「……………」

「あ……。ありがとうございます！」

「……………逃げろ」

「で、でも……………」

「てめえ…………邪魔すんなよ!!!」

「…………それが…………連邦のやることかよ」

「なんだと!？」

立ち上がった兵士の懐へ潜り込み、そして、腹へ一撃。

「うぐっ!!」

たまらず兵士は倒れる。

「「「おおおー!!」」」

いつの間にか、周りには野次馬が集まって、それこそ一部だけが祭りのような状態だ。

「……………おい」

「て、てめえ……………」

「二度とこの街へ来るな。次は…………命がないと思え」

睨みつける。それに怖気づいたのか、兵士は、逃げるように去っていった。

「……あの……」

振り返る。するとそこには、先ほど助けた民間人が、俺のマフラーを持って立っていた。

「……落とし物です」

「…………ああ。ありがとう」

俺はそれを受け取り、素早く口元を隠すようにマフラーを巻いた。

「それじゃ、俺はこれで」

背を向け、歩き出そうとしたときだった。

「お!? おおお!?」

聞いたことのあるうるさい声が街中に響いた。

「ねね、君って! ムゲン君だよね!」

そして、振り返ると……案の定彼だった。カカサ・キヤモイ。

「…………だとしたら……どうなんだ?」

「……探していたよ。君をね」

「……何……?」

「テイターズを除隊したって聞いてき、ずーっと探してたんだけど、いやあずいぶん時間が掛かったなあ……！」

彼は、前よりも少し髪が伸びただろうか。それ以外はほとんど変わってはいないが……。

「……その話は、別の場所ではないか……」

「ああ。君を連れていきたいところがある。ついてきて」

「……ああ」

こういう時の彼は信じるに値する。普段は……そうでもないのだが……。

しばらく移動すると、小さな基地へとたどり着く。

「……ついた。ここだ」

「……ここは……？」

「まあ、ついてきなつて」

黙って彼の後を追う。そして、テントの中に入る。

「やあ。カカサ君。君か」

金髪のサングラスの人物が、彼を呼ぶ。

「ああ。クワトロ大尉。紹介する。彼がムゲン・クロスフォード。かつて一年戦争やデ

ラーズ紛争を生き残ったエース」

「……ムゲン・クロスフォードだ。……よろしく……」

俺は、少し照れながらお辞儀をした。

「なるほど……。ああ、私はエウーゴのクワトロ・バジーナ大尉だ。よろしく」

「は、はい……」

彼とは……どこかで会っただろうか……？なぜか不思議と初めてではない気がする……。

「それじゃ、僕たちは外にいるよ。用が終わったら呼んでくれ」

そう言った後カカサは、手を振りながら出て行った。

大尉と二人になる。……確か、さつきエウーゴといった……。間違いのないのなら……これが

が最初で最後のチャンス……。

「……さて、ムゲン君」

「……な、なんでしょうか」

「君を彼に探してもらったのは他でもない。君に用があつたからだ」

「……俺に……？」

「君も、私達を探していたのではないかな？」

「……ああ。この一年、ずっとエウーゴとの接触する機会を探していた」

「それなら話が早い。君も、私達と共に戦ってくれないだろうか」

「……ええ。そのために……」【家族】とも別れたのですから」

「……君のことはある程度調べさせてもらった。どうしてティターンズから除隊したのかも……。そして、そこで起きた事件も」

「……俺には……罪を償わなければならない。彼らを斬つてでも……やめた……。ティターンズに反抗するために」

「だから、今度は俺が彼らをティターンズから救う……。こんなことしか出来ないが……。それでも、それだけでも……俺は……」

「ムゲン君」

「なんです……?」

彼は俺の肩に手を置いた後、静かに口を開く。

「私達エウーゴは、君のその想いを消したりはしない。無論、私個人としても、な……」

「……クワトロ大尉……」

「共に戦おう。ティターンズを倒すために」

「……はい。よろしく頼みます」

俺はクワトロ大尉と握手した。

外へ出ると、俺に気づいたカカサが歩み寄ってくる。

「で？どうだい？」

「……エウーゴに参加することになった。カカサ、お前もだろうか？」

「俺は昔つからエウーゴだけどネー」

「……それなら……。よろしく頼む」

「ああ。もちろんだよ」

軽く握手をした後、俺はふと思い出したことを口にした。

「……そういえば、クロノードは……？」

「ああ、彼かい？彼なら今あそこさ」

カカサは指を空へ指す。

「……宇宙そらか……」

「ああ。地球での役目は終わったことだし、俺たちも宇宙へ上がろうかと思ってるよ」

「そうか」

「そういえば、君に一ついい知らせを教えてあげよう」

「……？」

彼はにっこり笑うと、口を開いた。

「君の【家族】は無事だよ。もちろん、その場でトドメを刺した君に言う必要はないとは

思うけどね？」

「…そうか…！それなら…：それだけでも救いだよ…：」

「もしかすると、君は間違った選択をしてしまったのかもしれないねえ？」

「…：たえそうだとしても…：今の俺はエウーゴだ。覚悟はある」

「…：…へえ」

「…覚悟があるから戦える…：。たとえ、家族が敵になつたとしても」

「彼らを傷つけてまで、ここに来た…」

「うーん。つらい選択だつたらうねえ…：思想か家族か…：。実に哲学的だ」

「…：俺は思想を取つた。でも、これでよかつたと思つている」

「へえ？どうして？」

「確かに、大切な彼らを討つ理由にはならないけど、それでも、俺はもう二度と…：。俺たちのような化け物を作り出したくない…：」

「憎しみにとらわれ争うことを…：悲劇を繰り返させるわけにはいかない。だから…：」

「彼らを斬つた、と。なるほどお…：君は実にバカだなあ」

少しだけムツとした。だが、考えてみればそうなのかもしれない。

「けれど、君のその思想は嫌いじゃない」

「カカサ…：」

「でも一つ覚えておいてほしい」

「……?」
「時代が変われば、また新たな戦う理由ができる。それに伴って兵器というものが作られる」

「…もちろん、それは君のような人間を作られることも意味している」

「……」

「戦争を消さない限り、その負の連鎖は…断ち切ることはできない……。0を絶たなければ…1は繰り返される」

「わかっている…。だが、現在や未来を創るのは過去の人間でも、一握りの天才でもない」

「俺たち一人ひとり、平凡な人間だ。俺たちは変えていくことができる。それを繰り返させないように努力することはできるはずだ」

「うん。そうだ。…それをわかっているなら、俺も君の思想に共感できる」

「……カカサ」

「俺だつて一応君の【家族】…だしねえ?」

「…ふっ……! そうだったな! すっかり忘れてた」

「ええ!? そんなバカなあ!?!」

大げさなりアクションを取るカカサ。それがたまらなく可笑しくて…。自然と俺は

笑顔になっていた。

それから、俺は宇宙へ出ることになる。その後、エウーゴの本隊と合流した。

そして……。

宇宙世紀0087・03・02エウーゴ、開発スタッフの家族であるカミーユ・ビダンの協力のもと、サイド7のグリーンノア1より試作MS、RX-178ガンダムMK-II3機を強奪。

テイターンズ、人質作戦でエウーゴから試作機3機を奪い返す。エマ・シーン、人質作戦の反感から、カミーユ・ビダン、フランクリン・ビダンと共にRX-178ガンダムMK-IIにより脱走。

(これにより再度RX-178ガンダムMK-IIはエウーゴの手に)。以後、カミーユ・ビダンはエウーゴに参加する。

テイターンズとエウーゴによる「グリプス戦争」勃発

一方は家族を縛られた呪縛から解放するため……そして、自らの思想と覚悟のために。

一方は家族と家を守るため……。そして、一人で戦う彼を救うために……。互いにつつかる意志。その果てに彼らが見るのは……………。

始動：0087 完

29:A New generation

宇宙世紀0087.01.20

ティターンズ、グリプスにて試作機、RX-178ガンダムMk-IIをロールアウト

0087.02.30

エウーゴ、MSA-099をロールアウト

0087.03.02

エウーゴ、開発スタッフの家族であるカミーユ・ビダンの協力のもと、サイド7のグリーンノア1より試作MS、RX-178ガンダムMk-II3機を強奪。

ティターンズ、人質作戦でエウーゴから試作機3機を奪い返す。エマ・シーン、人質作戦の反感から、カミーユ・ビダン、フランクリン・ビダンと共にRX-178ガンダムMk-IIにより脱走。

(これにより再度RX-178ガンダムMk-IIはエウーゴの手に)。以後、カミーユ・ビダンはエウーゴに参加する。

ティターンズとエウーゴによる「グリプス戦争」勃発

俺はエウーゴに参加し、小さな作戦などを手助けした。

今は、エウーゴの旗艦であるアーガマに身を寄せている。

カミーユ・ビダンという少年が、今格納庫にいと聞いて、格納庫へと足を向けていたところだ。

グロリアスとは違うものの、どうしても戦艦の中はここまで広くて迷路なんだ……。

格納庫へつくと、丁度例の少年とすれ違いそうになる。

「あ、君、いいかい？」

「なんです？」

「カミーユ・ビダン君か……？」

「だつたら何なんですか」

「……いや、初めてだから、会っておこうと思つてね。俺はムゲン・クロスフォード中尉だ。よろしく」

手を差し出す。彼は少し考えた後、握手してくれた。

「……君が……ガンダムのパイロットなわけか……」

ガンダムMk-2を見ながら言う。

「僕は、パイロットになつたつもりはありません。軍人になることだつて、考えたことも

「ないです」

「……。そうか……。まあ当たり前だ」

「……。あなたは、なんでエウーゴに……？」

「お、俺か？俺は……」

言葉を詰まらせた。しばらくの沈黙。

「カミーユ君!!少しいだらうか!!」

クワトロ大尉がカミーユを叫ぶ。

「ああ、はい！今行きますって！」

「それじゃ、ムゲン中尉。これで……」

「ああ、時間を割いてすまなかったね」

「いいえ。構いません」

そうやって彼は俺に背を向け歩き始めた。

時間があるので、自販機でコーヒーを買って飲むことにした。

「……………ふう……」

椅子に腰を下ろし、コーヒーを一口。

「よっ！青年！」

バシツと背中を叩かれる。そして、思わずコーヒーを吹き出してしまう。

「ぶっ……!!」

「あ……。す、すまん……」

「い、いえ……。制服は汚れていませんから……」

振り返り、苦笑いした。

彼女はファイア・アツシユベリー大尉。エウーゴのパイロットであり、クロノードの……妻だ。

29には見えないほど美人。腰くらいまでであるであろう髪を、一つのリボンで束ねて、ポニーテールのように結んでいる。

「本当か？どれ……」

「いや……。だ、だいじょうぶですか……」

彼女が触れようとする。俺は首を振りながら、後ろへ下がった。

「……ん？そうか。まあ……。ならいい」

彼女は手を引き、腕を組んだ。

「また考え事か？ムゲン」

「……いえ、そういうわけではないですよ」

「私からはそう見えただけど？」

「……それは気にしすぎですよ、フィアさん……」

「そうか？……気にしすぎか……。いやはやクロノードにも良く言われるんだ……」

「……ははは……。ところで、娘さんは……？」

「……ああ、ルナか……。あの子は今クロノードに任せているよ」

この人には子供がいる。まだ4才くらいの女の子。名前はルナ。ルナ・グレイスと呼ぶのか、それともルナ・アッシュベリーと呼ぶのか……。どっちなんだろうか……。

「いいんですか？ そんなに適当で……」

「適当ではない。ちゃんとエサ……。じゃなくて……。ご飯もあげているし……。ちゃんと可愛がってもいる……」

「……いや、そういうことじゃ……」

「ふふふ……。冗談だ。そろそろ会いに行つてあげないとな……。クロノードだと、少し頼りないし……な？」

「……随分と信頼されてないんですね……」

すると、彼女は笑いながら言った。

「いいや。これは例えさ……。彼の事は信頼もしているし、愛してもいる」

見ていて羨ましかった。……見ているこつちが恥ずかしくなるほど……。

「ん？なんで君が赤くなっている？風邪でも引いたか？」

「……そうみたいです。看病してくださいよ」

と、冗談交じりに言ってみる。

「バカ言え。そんなつもりないだろうに」

「はははっ！冗談ですよ。そんなことしたらクロノードに嫉妬されちやいますしね？」

「違ういな。ふふふ……」

「だがまあ、本当にそうだったときは、看病くらいしてやるさ」

「……ええ。楽しみです」

そのあと、少しの間二人で笑いあった。

そのあと、廊下を歩いていると、彼の部屋なのだろうか。カミーユは走ってその部屋に閉じこもってしまった。

部屋の前を通り過ぎると、彼の悲しそうな声が聞こえてきた。

「……………」

たしか、2度の戦いで父と母を失ってしまったらしい。……戦争というのはつくづく……

……俺は彼を慰めようと思い、部屋をノックした。

「……なんですか？」

「カミーユ君。少しいいかい？」

彼は、ドアを開くと、俺を自分の部屋へと招き入れた。

「……話は聞いたよ……。両親のことも……」

「……………」

「あ、いや、気を悪くしないでくれ。それを言いに来たんじゃない」

「………いいんです……」

「まだ、さっきの話が終わってないと思ってね」

「………確か、何故エウーゴに入ったか………でしたね」

「ああ。理由は……たぶん、今の君に言っても理解はしてくれないだろう」

「……なんだと！」

「……君の気持ちも痛いほどわかる」

「僕の何がわかるんですか!! 目の前で両親を2度も殺された僕に、何かを言える人なん

か……!!」

「……俺も両親を目の前で殺された」

「えっ……?」

「当時はまだ一年戦争が始まる前の事だ。俺は、サイド2生まれでね、当時もまだそこで

生活していたよ」

「サイド2って……」

「ああ。一年戦争の発端となったコロニーだ……。忌まわしい記憶さ」

俺は、少しずつ思い出しながら口を開いた。

「……当時俺は15の民間人だった。戦争なんか、自分に関係ないと思っていた」

「俺の両親は君と似ていてね、MSの開発や研究をしていた人物だった」

「……だから狙われたんだろう。両親は、俺をクローゼットへと押し込んだ直後に殺された」

「それから、死んだ両親を何度も何度も銃で撃っていたよ」

「……なんて惨い……」

「ああ。それ以降、俺はジオンを恨んだ。恨んでも恨み切れない。そんな憎しみにとらわれ続けて連邦軍へと入った」

「戦い続けた。……でも、戦っているうちに、だんだんとモノの見方が変わってきたんだ」

「モノの見方……?」

「ああ。なんと云えばいいのだろう。……そう、戦いに連邦もジオンも関係ない。互いに殺しあって、結局は何もなくなる……」

「失って、失わせて……その繰り返しだ。戦争なんて」

「……悲しいモノの見方ですね」

「ああ……。自分でもそう思うよ」

「……だから…俺は二度とそれを繰り返したくはないんだ」

「立派ですね、大人の綺麗事って」

「……立派なわけじゃない。ただの自己満足だ。でも、その自己満足で、人を救うことができるなら、幸せじゃないだろうか？」

「僕にはわかりません。戦争をする人の気持なんか、知りはしませんよ」

「そう、だな……。君は正しい…。その正しきこそが、未来を変えられるんだろうな」

「僕はそういうのに興味はありません」

「まあまあ、大人の話はそれとなく聞いておいて損は無いぞ」

「……」

「俺がエウーゴに入った理由は、ティターンズの暴走を止めるためだ」

「彼らがしていることは、過去にジオンがやっていたことと同じだ」

「……」

「だから、俺は……戦う。戦うしか…能がない…からね。ああ、すまない。君を励ますために来たのに、昔の話をしてしまったね…」

「いえ、いいんです。あなたみたいな人もいると、僕も分かりましたから」

「……カミーユ君。人は、人それぞれ、人の考えはそれはもう十人十色、色々あるだろう」

「君は、自分が正しいと思うことすればいい」

「僕の正しいこと……」

「ただし。行動には常に責任が伴うということも、忘れないように」

「わかつてます」

「ならいい。君は賢い。これから期待しているよ」

「は、はい……ありがとうございます……」

「……それじゃ、邪魔をしたね……」

「……ムゲン中尉」

席を立ち、部屋を出ようとしたとき、彼に止められる。

「うん？」

「ありがとうございます」

「いや、俺は何もしてないさ。ただ、自分の過去を話したただけだよ」

「それでも、少しだけ気分が晴れました」

「……それなら、よかったよ」

俺は彼の部屋を後にした。

「……………」

ふと、【彼女】を思いだした。あの時別れてから、連絡も取れていない。それを言えば、俺の仲間たちは元気なのだろうか……………」

「どうした？ムゲン」

振り返ると、クロノードが小さい女の子を抱いてこちらを心配そうに見つめている。

「ああ…。クロノード…。なんでもないさ」

「嘘を言え。お前の顔に「なんでもなくない」って書いてあるぞ？」

「う……………」

俺はつくづく、顔に出るようだ……………。それを知ったのも最近のことだが……………。

「で？言ってみ？何悩んでるんだ？」

「いや、悩む理由なんかさ……………」

「ああ。彼らのことか……………。寂しいか？」

「そりゃあ、ね。けど、もう迷ってられないさ」

「そういうことだ。どちらが間違っているなんて、もう関係ない」

「…………俺たちは、もうそんな領域には立ってない」

「…………戦争…………か……………」

「ああ。私情だけで戦争が終わるなら、明日にでも終わるだろう？そういうことだ」

「…そんな、楽な時代が来るといいんだけどね…」

「来るさ。信じてりやあ……」

「…だね…。だったら、俺は…彼らとも…」

「…おいおい、まさか、会えないとか思ってるのか…？」

「えっ……？」

「そんな気持ちじゃあ、会えないかもしれんが。お前が信じ続けたら、会えるかもしれん
」

「……まだ、分からない……。俺は…」

「何怯えているんだ……？」

「えっ？お、怯えてなんか……」

「ほれ、まただ」

彼は、自らの顔を指差した後、俺に指を向けた。……また顔に出てるって言うのか…。
「うう……」

「まあ、お前にも変化が出てきたってことだな」

「変化……？」

「ああ。新しい価値観や、感情、思想……まあもろもろだな」

「……」

「彼らと戦うのは怖いか？」

「……恐怖は無い……。ただ……」

それから、俺は言葉が出なかった。なんともいえない気持ちだが、俺を埋め尽くす。

「……。そうだな。俺から言えることは一つだ」

「……お前は、俺にとつては家族の一員だ。お前の背中には、常に仲間がいて、お前を支えてくれる」

「……俺は、そういう存在になれたらと……思っている。だから、迷ったら、遠慮するなよ？」

「ありがとう……クロノード」

「気にするな」

彼は肩をすくめながら軽く笑った。

「むげんー。やつほー」

少女がいつぱいの笑顔で俺に挨拶した。

……俺にしか出来ないことは……まだたくさんありそうだな……。

「や、やつほー……ルナちゃん」

「ルナ、やつほーじゃない。『こんにちは』だろう？ まったく……。誰がこんな言葉を……。」

何かをふと思つた彼は、彼女を降ろした。

「どうした？」

「……すまん、ルナの面倒を頼む。ちよつとカカサに用事が出来てしまつてな」

……なんとなく察した。俺は頷いて承諾。しばらくの間ルナちゃんと話しをする
ことになった。

「ルナちゃん、こんにちは」

「やつほー。むげんー」

「……こんにちは。だよ」

彼女に微笑みながら言う。すると、彼女は、俺の言葉を学び、言葉を返した。

「こんにちは。むげん」

「そう。よく出来たね。えらいよ」

俺は彼女を優しく撫でた。彼女は幸せそうに目を瞑る。その姿が……。【彼女】に見えて、泣きそうになった。

「むげんー。えらいよー」

彼女は、その短い手で、俺の頬を優しく触れた。なんとなく、察してくれてこんなこ

とをしてくれたのだろうか……。

いいや、そんなことは無いだろう……。たぶん……。

「……ありがとう。ルナちゃん」

「うん！」

それから、しばらくして、クロノードが帰ってくる。

カカサとみつちり話をしたそうだ。

「サラミス級の受領。これはメンバー分けが難しそうですなあ」

アーガマの艦長、ヘンケンがうなり声を上げながら悩んでいる。

「……私がサラミスのメンバーを選んでよいだろうか。ヘンケン艦長」

「……ううむ……。フィア君。なら、君にあの艦を任せよう」

「了解した。それでは、メンバーは私が集めておく。それではな」

彼女は淡々と言ったあと、ブリッジを後にした。

「……ヘンケン艦長。君は、彼女に任せてもよいと……？」

エウーゴの創設者ブレックス・フォーラ准将は言う。

「ええ。彼女はかつてジオンで【恐怖の大隊長】と云われた人物です。信じてもよいかと

……

「……君が言うのなら、間違いは無いだろう。では、後は任せよう」

「ええ」

それから、俺は旧型のサラミスのメンバーとして選ばれたこととなった。

29

完

30: Remaining Scar

0087.03.16

エウーゴ、太陽電池衛星を攻撃

俺たちは、ティターンズの太陽電池衛星攻撃に参加することになる。

「いいかーよく聞け!! 私たちエウーゴ第二小隊は、本隊とは別行動で動く。2基ある一つの衛星を私たちで潰す!」

彼女の声が、響き渡る。

「とは言っても、私たちは四人しかないのだがな…」

それもそのはず、この旧型のサラミスに選ばれたメンバーは、俺とカカサ、クロノードと操縦員と整備兵くらいだ。

実質戦えるのは4人だけ……。

「さて、まあ特に作戦があるわけでもないが、4人だからな1チーム二人ずつで2チームにわけ、攻撃する」

「さて、チームだが……。カカサ大尉とクロノード」

「あいよー」

「分かった」

彼らはいつも通りという顔をしていた。

「ムゲン中尉は私と来るように」

「……はい」

俺は静かに頷く。

「では、これより作戦を開始する！各自、出撃準備!!!」

その声を契機に、俺たちはパイロットスーツを着用し、格納庫へと向かった。

「……」

機体に乗り込み、システムを起動。

……俺は自分の手を見つめた。

あの時の感触は、今も残っている。

それに比べれば……。

「ムゲン」

「……は、はい」

彼女からの無線。俺は少し慌てながら答えた。

「出撃だ。行くぞ」

彼女は、戦いになると、普段の雰囲気とは違う、戦士の雰囲気が出る。

「了解。ムゲン・クロスフォード、ピクシー、行くぞ!!」

出撃し、彼女の機体を探す。

「よし、衛星まで近づくぞ。そこから散開し、一気に潰す!」

「了解!」

俺たちは太陽電池衛星まで近づく。

「リーダーに反応。各機散開! 敵より衛星を優先に戦え!」

その言葉で、クロノードとカカサは散開し、戦闘を開始する。

「……さ、行くぞ、ムゲン。ついてこい」

「了解です」

リーダーを確認。正面には敵影が3機。

見ると、ザクのような機体がこちらへと迫ってくる。

不思議な気分でもある。かつて敵であったジオンの機体が、今は連邦が使っているのだから。

……俺にはそれが、かつての連邦は現在いま…、かつてのジオンになり下がったように見えた……。

「…連邦のザクだ。確か、ハイザック…。あんな醜い…。あんなものをザクと呼ぶティターンズはやはり頭がおかしいな」

……彼女もいろいろ思うことはあるのだろう。

ダガーを引き抜き、ハイザックへと迫る。

「沈めっ!!」

一閃。ハイザックが真つ二つになる。

「流石だ。ムゲン」

「お世辞はいいです。次が来ます!」

ハイザックがマシンガンを放ってくる。俺は機体を宙返りさせる。

それに合わせ、彼女がハイザックの正面へ突つ込む。

サーベルを引き抜き、マシンガンを切り落とし、続けてコックピットを貫いた。

「すごい……」

「お前も、世辞は良い」

「は、はい!……次来ます! 2時の方向。……3機……!」

「了解。やるぞ、ムゲン」

「言われなくても……!」

敵は散開し、俺たちを包囲する形で迫る。

俺とフィアさんは背中合わせになる。

「さて……。どうするかなあ」

「余裕ですね……。こっちはヒヤヒヤしてるのに……」

「バカを言え。そんな感じはまったくくないぞ」

「……さて、どうしますか」

「動いて、かく乱。続けて連携、各個撃破で行くぞ」

「了解」

俺は正面にナイフを投げる、そして、そこへスモークバルカンを発射。

ナイフへ着弾。スモークが散布される。

それに合わせ、彼女は動く。

宇宙へブースターが弧を描きながら1機を沈める。

続けて彼女は、1機の脚を止める。

そこを逃さず、ダガーでコックピットごと切り裂いた。

そして、再び背中がぶつかると、2機は武器を構えた。

煙が消えると、そこに残るのは、無残に散った機体と、最後の1機。

「3機程度で……」

「私達を倒せるなんて」

「思っていないよな？」

俺と彼女は、引き金を引き、マシンガンとビームライフルが1機を襲った。

「……終わった……」

「おいおい。まだ衛星は——っ！」

「ー」

レーダーに反応。今度も3機。反対方向からの襲撃。……嫌な予感がする。

銀色に輝く装甲。こちらを睨みつけるが如く鋭い瞳。それはまるで……。一匹のボス狼の如く。

「……フ、ファン……グ……」

口に出た。……俺は……

「ムゲン！ガンダムタイプだ！気をつけろ！」

「あ、ああ……」

彼女が前に出て、射撃を開始する。

狼は、それを軽々と回避。続けざまに一発の弾丸。

「……ファイアさん！左に避けるんだ！！」

「っ！！」

間一髪、彼女は回避。背にしていたデブリが、彼女のコックピットの位置と同じ場所を撃ち抜いていた。

こんな正確無比な狙撃が出来るのは……俺が知る限り一人しかいない。

「ユーリ……！」

狼は、獲物に噛みつくように、鋭く俺を襲う。

ダガーで何とか受けるものの、出力で負ける。

「くっ……！！」

「……久しいな。ムゲン」

「フアング……！！」

「もう会えないかと思ったぞ……」

「……」

「俺は……お前とは戦いたくなかった」

「くっ……！！」

「そいつの言葉に耳を貸すな！！敵だぞ！！」

「……！！」

彼女の言葉は、少し俺の胸をえぐった。

「……」

……敵……？ 違う……。

「違う……！」

「敵じゃない!!俺の……家族だ!!」

「だったら何だ！」

「っ！」

「戦争で家族が何だというんだ!？」

「……」

「それをわかってお前はこっちに來たんじゃないか!!」

「……それは……」

次第に力が入らなくなる。

「終わりだ、ムゲン」

ダガーを吹き飛ばされる。回避が間に合わない。

喰われる……！

「ちっ！させるか!!!」

彼女は、サーベルを引き抜き、狼とぶつかり合う。

「邪魔だ…!!」

「私の部下を、黙ってやらせるわけにはいかないんでな」

「……ファイアさん……」

「そうだ……。俺は分かったうえでエウーゴに来たはずなのに……。まだ悩んでいるのか……。俺は……」

「今は戦闘に集中しろ!!」

「わかっていきます!!やりますよ……!!」

「……それでいい」

ザクは、狼を蹴り飛ばし、間合いを取る。

「さあ、動けるか?」

彼女は手を差し出す。

「……動けます……」

彼女の手を取る。

そして、狼を見つめる。

「……俺がああ機体を相手します。ファイアさんは奥の狙撃機を……」

「わかったが、さっきの二の舞だけはするんじゃないぞ?」

「ええ。わかっています」

彼女は狼を通り過ぎ、先へと進んでいった。

「……俺は……。俺が成すべきと思つたことを……。信じたことをやるためにエウーゴに入った」

「……たとえ敵がかつての友であり、家族であつたとしても……！」

俺はダガーを引き抜き、狼へ迫る。

迫りながらナイフを投げつけ、そして、懐へと潜り込む。

「そこだっ!!」

「くっ!!」

狼がサーベルで受ける。

「俺たちは家族なはずだ!!」

「そうだ！」

「なら何故戦う!?!」

「あんたたちテイターズが間違っているからだ！」

「だから、俺たちに刃を……!?!」

「あんたたちはテイターズだ！」

「好きでなっているわけじゃない!!」

「だから、だから何なんだよ!!」

「くっー！」

ダガーを投げつける。狼の腕に刺さり、一瞬動きが止まる。それを見逃さなかった。鞆の赤い部位を左手で抑える。右手は刀の持ち手の近くへ。

金属が擦れる音と共に、刀が発射される。それを掴み、その撃ちだされた速さで刀を彼の左腕目掛け振りぬいた。

火花が散る。刀は狼の左腕を切断した。

「くっ……!!!」

「命は……。取らない」

「……離脱する……」

彼は宙返りし、俺に背を向け、離脱した。

「……ふー……」

初めてやったが、なんとか土壇場で成功してよかった。

これは、いわゆる抜刀術ばつとうじゆつという技で、二ホンという国で、ずっと昔に使われていた剣術だそうだ。

それをピクシーでも使えるように出来るなんて……。本当に……。【彼女】は凄いや。俺なんかより……ずっと立派で……。強い子だ……。

「ムゲン、敵機が離脱した。衛星も撃破の報告も入っている。作戦は成功したようだ」
「……。それは良かった。帰りましょうか」

「ああ」

彼女と戦艦へ帰還している間。少し話をした。

「ムゲン。……あれが、お前のかつての仲間か」

「……ええ。入ったばかりの俺を家族と呼んでくれた人たちです」

「……そうか。辛いな」

「え……？」

さつきとは違う言葉を言っていて、耳を疑った。

「これは私個人としての言葉だ。さつきのは、軍人としての立場から言わせてもらっ
たまでだ」

察したかのように、彼女は言った。

「……辛いですけど、フィアさんの言う通りです。戦争で家族だろうがなんだろうが関
係ない……。……もう迷わないって決めたのに……。俺……」

「……まったく。いいか、ムゲン」

「はい……？」

「迷ったっていいんだ。迷った先に、お前が何を想い、どうするかが大切なんだ」

「……その先……」

「お前も、私も一人の人間だ。迷うことも、苦しむこともある。だが、それに対して、お前がどう想ったのか、そして、これからどうすれば良いのか……。それを考えること」
「難しいですね……」

「ああ。私も正直、迷ってばかりだよ。だが……。彼や、あの子と出会ったことで、私のすることは決まったのさ」

「……」

「まあ、彼らといたって、悩むことや、迷うことはあるけどな？」

「……」

「って、ムゲン、お前……。今私の事、『この人も悩んだりするんだ』とか思っただろう？」

「えっ……!？」

「……思ったりしてない。断じて……。たぶん……」

「……ふふふ。お前のそういう反応を見るのが、私は大好きだ……」

「……」

顔が熱くなった。別にからかわれて恥ずかしいとかじゃない……。なんというか……。恋とも違う感覚……。まだ感じたことのない感情だった。

この人……一応……人妻……だよな……？

「ふふふ……。あはは……！ やっぱりお前は面白いな！ クロノードに似ている」
「クロノードに……？」

「ああ。私に初めて会った時とそっくりだよ。ふふ……」
「なんかすごくバカにされてる気がする……」

「……」

「ん？ 気分を悪くしてしまったか？ いやあ、すまんすまん。つい調子に乗りすぎたな」
「……いえ」

ちよつとだけツンとした態度をとってみる。

「許してくれよー。なあなあー」

ザクがピクシーの肩に手をまわし、言ってくる。

「うう……。わ、わかりましたよ!!」

「ふふ。お前はやっぱり面白い。弟ができたみたいな気分だよ」
「…………。俺はただ弄られているだけにしか感じないけども……」

「……いつかそういう時が来るかもしれないな？」

「……来なくていいですよ……」

俺たちは、サラミスへと帰還した。

それから、俺たちはとあるコロニーへと向かうことになった。

サイド1・30バンチと言えば…。わかるだろう。

俺が…：ティターンズを辞めるきつかけとなった場所。

俺は、30バンチには入らなかった。

外で、静かに警備をした。

入りたくなかったが正しいかもしれない。

「……………」

警備していると、レーダーに1機の機影。その機体は、30バンチへと入っていく。

まずい。今は、皆があの中に…!!

俺は機体を動かし、機影を追った。

「はあ……………はあ……………どこだ……………」

コロニーの中は毒ガスで亡くなった人々が倒れていた。

これでもかというほどの人数が…。

「……………」

怒りが湧いた。こんな……こんな死に方をするために人間は生まれたわけじゃない……！

しばらく探していると、1機のジムが止まっている。……見たことがある機体だった。

「……………あれは……」

間違いなかった。あの機体。ジムストライカーの宇宙適応型……

俺は機体から降り、パイロットを探した。

「はあ……………はあ……………!!」

しばらく探して、気が付けば丘の頂上へと立っていた。

そして、一人の青年が俺を待っていたかのように立っている。

「……………道夜……」

「久しいな。2年ぶりだ」

間違いない。彼は、八雲道夜……。俺の……親友だった人物だ。

「……………何故ここにいる」

俺は静かに銃を彼へとむけた。

「そんなものを出すな。ここは……眠っている人が多いんだ」

彼が背を向ける。

俺は、彼の奥にあるものを見て、胸が苦しくなった。

「……これは……」

「……ここで亡くなった人たちの墓だ……。とは言っても、綺麗には作ってやれなかったが……」

「お前……」

「……俺は……あれからティターンズを抜けて、今は傭兵業をやっている。暇があればいつもここへ来て、そのたびに墓を作っている」

「……ティターンズを辞めたのか!？」

「ああ。……ちゃんと正式に取り合ってもらってな」

「……お前ほどの人材を手放すのか……ティターンズは」

「実際は少し違うが……。まあ、そんなところだ」

「……なんか……すまなかつたな」

俺は、銃を下げ、しまう。

「……気にするな。俺も……お前の言葉で決心がついた」

「……俺の？」

「正直、迷っていたんだ。どうすればいいのかを…」

「だが、お前は言った『軍では…上の命令は絶対。だから…その【呪縛】から抜けること
で…自由に戦える…』と」

「……」

「だから、辞めた。部隊も、ティターンズも」

「…道夜……」

「俺がしたことは、知らなかったとはいえ、多くの人を殺してしまった。それを、少しでも償いたくて、こうして墓を作った」

「偽善だとしても…。自己満足だとしても……。彼らをこのままにはしておけなかったんだ」

道夜の瞳は、哀しんでいる中にも、強い決意が宿っていた。

「俺とて……繰り返し返したくは無いからな。お前や、俺のような奴が作り出されることは」
「……道夜、お前も……エウーゴへ来ないか……？」

だが、道夜はしばらく考えた後、首を振った。

「何故!？」

「……少し、考えさせてくれ。何故かわからないが、エウーゴに入るのは少し抵抗がある……」

「……。わかった。だったら、俺たちの艦で補給してから出ればいい」

「……いいのか？」

「ああ。久々に話したいこともたくさんあるしな」

「……なら、言葉に甘えさせてもらおうか……」

道夜は歩き出した。

俺は、彼に続き、そのあとコロニーを離脱。

サラミスへと帰還した。

もちろん、無断でやったことだ。俺はその後、ファイアさんに呼ばれた。

「ムゲン。傭兵なんかをこの船に泊めてどうするつもりだ」

「……すいません。でも、彼は……」

「彼は、八雲道夜。コイツのいた部隊の仲間だ」

カカサが入ってくる。そして、彼女へと一言だけ。

「………そうか。まあ、なら……特別に許すか……。いいか？次そうなるなら、一度私に報告するんだ。わかったな？」

そう言つて彼女は俺の額を軽く叩いた。

「………すいません……」

「そんなに落ち込むな。怒っちゃいけないさ」

「こそ。俺たちだって、君の状況は知ってるからネー。誰も怒ろうとは思わないさ」

「カカサ……」

「……ありがとう」

俺は、静かにお礼を言った。

そのあと、俺は艦内を歩いていった。

遠くで大声が聞こえた。

「い、痛い！そんなに強く引つ張るな！おい！服が伸びるだろー！」

何事かと俺が近寄ると、なんと、道夜がルナちゃんから悪戯いたずらというかなんというか……。

いろいろ振り回されている。

「……何してるんだ……？」

「ん？ああ、ムゲンか。いやな、クロノードに頼まれて、この子を面倒見ていたんだが

……」

「あーむげんー!!」

彼女は俺に気づくと、道夜を離れ、俺に飛び掛かってくる。

俺は彼女を受け止め、抱っこする。

「うおっ!? …ははは。どうしたんだい?」

「……………はあ……」

道夜を見ると、随分とげっそりしている。……そうとう振り回されたんだな……。

「むげんー。こんにちわー!」

「ああ。こんにちは。道夜に遊んでもらっていたのかい?」

「うん!遊んだ!」

……道夜で遊んだって聞こえたのは気のせいだろう……。

「…………。道夜、お前も大変だな…………」

「……………。だからあまり子供は好きじゃないんだ……」

道夜が大きくため息を吐く。

「……………まあまあ。気にするなよ」

「…………。まあ…………。嫌な気持ちにはならないから……いいんだがな」

「…………」

しばらく沈黙が続く。そして、最初に切り出したのは道夜だった。

「なあ、ムゲン」

「うん?」

「…………頼みたいことがある」

「なんだ？」

「……俺を……」

「エウーゴの責任者に会わせてくれないか」

「道夜……」

「……。俺は、金を稼ぎただけだ。それ以外に理由は無い……」

「本当か？」

道夜は少し照れながら、口を開く。

「……一つ……。あるとするなら」

道夜は、ルナちゃんを指し、言った。

「この子のためにできることもあると……思っただけだ」

「みちやー。ありがとなー」

「……！」

彼女は小さい手で、道夜の指している指を掴んだ。

「……ふっ……。暖かいものだ……」

「……。ブレックス准将に連絡しよう。少し待っていてくれ。この子を頼む」

「……ああ。任せておけ」

その後、道夜はブレックス准将と会談。正式にエウーゴへと参加することとなった。

30 完

31: Show light

宇宙世紀0087.03.25

アーガマ、月面都市アンマン市に入港

0087.05.01

エウーゴ、MSN-00100 百式をロールアウト PRGZ-95C ロールアウト

0087.05.03

アーガマ、テンプテーションと接触。ブライト・ノア、エウーゴに参加。

テイターンズ、エウーゴを強襲。各機応戦。

俺たちは今、どう考えても絶望的な状況だ。

……囲まれている。

アーガマとの路も絶たれ、こちらだけで戦わねばならないのだから。

「ムゲン！ 気をつけろ！ また来るぞ！」

「は、はい！」

俺は、フィアさんと。他は道夜とクロノード、カカサが別の場所で戦っている。さすがに手練れのエウーゴも苦戦を強いられた。

「くっ……!!」

ダガーで敵を切り裂く。続けて、マシンガンをもう1機へと射撃。相手の足を止める。それに合わせ、彼女がサーベルで切り裂いた。

「……まだ来ます!」

「分かっている。気を抜くなよ」

「……はい!」

彼女がビームライフルで足を撃ち抜く。それに合わせ、ナイフをコックピットへ投げつける。

続けて、彼女の背後に迫る1機を、ダガーでコックピットを貫く。

「助かる」

「まだ……!」

正面から4機。

「俺が突っ込みます!」

「了解。援護する!」

彼女の牽制のビームライフル。

横へ回避する1機の正面へ、そして、振りぬいた刀がその機体を襲った。すかさず、移動。続けて、1機を切り抜け、彼女の狙撃で撃墜。スモークバルカンで1機の頭部に着弾させ、慌てたところを切り伏せる。最後の1機は、彼女が的確にコックピットを撃ち抜いていた。

「……これで、最後か…?」

「……さすがにしんどかったな…」

「……ええ。大丈夫ですか?」

「おや、心配してくれるのか?うれしいねえ!」

そう言つて、彼女の機体が、ピクシーに抱き着いた。

「ちよ、ちよつと!!動けませんから!!」

「ふふふ……。離さないぞー?」

こんな状態をクロノードが見たらどうなることやら……。

「……まあ、冗談はさておき、クロノードたちはどうなった…?」

「……」

何か……嫌な予感がする。胸がざわつくこの感じ……。

「どうした?ムゲン」

「あ、いえ……。彼らと合流しましょう」

「ああ。そうしよう」

俺たちは、彼らと合流を図るため、移動を開始した。

俺たちが彼らの所へ向かうと、彼らは、1機のMSに苦戦を強いられていた。

それは、ガンダムMK-2のような姿をした機体。

その機体は、宇宙を泳ぐように、楽しそうに舞っている。

彼らの放つ弾丸を無視しながら。

「なんだ……。あの機体は……。MK……。2……。？」

「違う……。あれは……」

舞いながら……。その瞳に道夜が睨まれる。

「くっ！なんだ！機体が……。!?」

まるで、蛇に睨みつけられた蛙のように……。ストライカーは、動くことを許されない。

それが、主の意志に反していても。

ゆっくりと、ガンダムはサーベルを抜く。

俺は、気づけば道夜の元へと急いでいた。

「……。頼む……。間に合ってくれ……。！」

一突き、たったそれだけで彼の人生が終わるなんてことは……。絶対に……。！」

頼む……………!

構える。そして、次……………。

間に合わない……………この距離では……………!

「やらせるかつ!!」

その間にクロノードが割って入る。

これなら……………!

俺は再び手を伸ばす。まだ、まだ…終わらせない!

気が付けば、俺は刀を引き抜いて、ガンダムへと迫っていた。

「うおおおおお!!!」

ガンダムを蹴り飛ばし、彼らの間へと割って入る。

「ムゲン!」

「クロノード! 彼を……………」

言い切る前に、道夜の機体から爆発。

見ると、機体の四肢が撃ち抜かれていた。

「……………ああ……………!!! 道夜ああああ!!!」

「ムゲン!! 落ち着け! 彼は死んではない!!!」

怒りが湧いてくる。止められなかった俺への…。そして、あのMSへの憎しみに支配された。

「お前が……！お前がああああ！！！！」

「ムゲン！落ち着け！！……くっ！駄目か！」

「ああああああ！！！！」

俺は声を上げながら、敵へと迫る。ナイフを投げつけ、マシンガンを放つ。

それを、遊んでいるかのように優雅に避ける機体。

「お前が！道夜を……！！！！」

懐へと入る。そして、ダガーを全力で振りぬく。機体の腕から電流が走る。

彼は、それを軽く左腕でつかみ、そして、ビームサーベルで右腕を切り落とす。

「……まだまだああああ！！！！」

宙返り、その間に左腕で鞆の赤い部分を触る。そして、素早く刀を逆手で掴む。

「沈めええええええええ！！！！」

ピクシーの瞳がひと際強く輝いた。射出される刃が、弧を描き、火花を散らしながら。

……振りぬいた。

相手は、軽々サーベルで受けようとしたが、そのサーベルすら断ち切り、奴の左腕を切り落とした。

「……」

「や………った………な………！」

「何………!?!」

「お前………覚えた………。次は、逃がさない………」

小さくつぶやき、その機体は後退していった。

「はあ………!はあ………!!!」

「………くっ………」

レーダーに反応。おおよその数、20………を超える大多数の敵だった……。

「なんて数だ………!!さすがに………!」

「………。道夜、聞こえるか」

ファイアさんは道夜へ無線を送る。

「………なんとかな……。なんだ？」

「あの機体、使ってみるか？」

「あの………機体………?」

「いいのか?俺に使わせて………」

「いいとも。お前はもう、私の部下なんだから」

「………ああ。わかった」

それを聞くと、彼女は叫んだ。

「整備兵!!今すぐ、あの機体を現在の座標へ持ってこい!!!」
そのあと、俺たちに彼女は言った。

「…お楽しみが来るまで、私達が道夜を守る。いいな?」

「もちのロンだぜ!あ、そういえば餅と言えばこのまえ……………」

「ああ。守ってみせるさ。皆…………俺の家族だからな」

「…………やってみせる…………」

俺たちは、道夜を守りながら戦闘を開始した。

「クロノード、私と連携を。行くぞ!」

「無論だ!やるぞ!」

彼らは、移動しながら敵を撃破していく。

「カカサ、やってやろう!」

「まあ、結局餅は…………。ん?…………まあいいか。よし、やってやろうか」

カカサはショットガンを構え、正面の敵を牽制する。

それに合わせ、ショットガンの弾丸の直撃と同じタイミングで、相手の機体のスラスターを破壊する。

敵にシヨットガンが直撃し、相手の機体が破壊される。

「次だ!!」

「わかってるってーの!」

敵を蹴り飛ばし、そこに合わせて、彼がクナイを投げつけ、相手のコックピットを貫く。

そして、吹き飛ばされた敵を回避する機体を、刀で切り伏せる。

しかし、さすがの数……。4機で守り切れるのも限界があった。

「次……!ぐあつ!」

「捕まえたぜ、ガンダム!!」

俺は、1機の敵に背後から組み付かれた。

正面から、敵が迫る。

「離せえつ!!」

「ムゲン!ぐあつ!」

「カカサ!」

カカサが被弾。

「ムゲン、こつちもさすがにキツイ…!!」

クロノードの苦しそうな声……

「まだだ！まだやらせては……。ぐっ!!」

「ファイア……お前ら……ただで済むと思うな……!!」

皆が必死になっている……

「もういい……俺のために……そんなことを……!」

「ふざけるな!!」

道夜の情けない声に、俺は叫んだ。

「俺たちは……仲間だ!!仲間だったら、互いに助け合うのが普通だろう!」

「ムゲン……」

「そう……だ……。道夜、お前は私の部下……。私の元で死ぬことは許さん」

「へへ……。俺たちはもうすでに仲間だろ？仲間だったら、焼き鳥おごってくれるまでは助けるのが俺様だ！どうだ？優しいだろう？そうだろう、そうだろう!」

「……道夜、お前は……俺の家族の一人だ。家族は……死なせない」

「クロノード……」

「そんな状態でよく言うぜ!!これで終わりだ!ガンダム!!」

「くっ……!!!」

流星にこれではどうしようもない……。

目を瞑った。

そして、しばらくして目を開いてみると、目の前の敵が撃ち貫かれていた、

「……なんだ……?」

宇宙を舞う1機の……戦闘機……だろうか……?」

戦闘機は、素早く動き、仲間を守る。

そして、俺の正面へと近づき、変形した。

「……!」

俺は驚いた。さっきまで戦闘機だった機体が突然MSになったこともそうだが、あの戦い方は……。

機体に乗っていたのは……道夜だった。

「待たせたな。相棒」

「……それが……新型……」

「そうだ。変形システムを採用した、Zガンダムの初期型……。その名も……プロトタイプ
ブリゼル」

「プロトタイプ……リゼル……」

「さあ、反撃だ」

そう言つて、宙へ浮いた刀を俺の前へ差し出す。

「ああ」

俺は、刀を受け取り、構える。

残りの機体数は……。10……!

「行くぞ!!!」

「[[[了解!!]]]」

まずは道夜が素早く変形し、敵を翻弄しながら相手のバックバックを丁寧に撃ち抜く。

続けて、クロノードが狙撃で両腕を撃つ。

さらに、ファイアさんはバズーカを敵のメインカメラに撃つて、続けて別の敵にも放つ。

カカサがクナイで相手のシールドを切り裂き、機体を動けなくする。

俺は、その機体たちを1機ずつ切り伏せる。

気が付けば、俺たちは大多数の敵は、レーダーにも、目視でも見ることはなかった。

「……勝てた……」

「全機、離脱だ。行くぞ」

そういつて、俺たちは帰還した。

帰還した後、俺は道夜と休憩所で話をしていた。

「ふう……。さっきのはさすがに堪たえたなあ……」

「だな。俺も疲れた」

「だが、生きて帰ってこれてよかった……。皆無事に……」

「ああ。そういえば、さっきは迷惑をかけてしまったな」

「……なあ、道夜」

「……？」

「もう、慣れたもんだろ？そんなのさ」

俺は笑顔で彼に言う。

すると、彼は笑いながら言った。

「……ふふ。ははは!!そうだな!ああ……。ありがとう。ムゲン」

「気にするなよ。俺も、お前に助けられたんだから」

「……当たり前だろう?仲間なんだから」

「……ああ。これからも、互いに助け合っっていこうぜ?」

「もちろんだ。……相棒」

俺たちは、互いに笑いあった。

「お？面白そうな声が聞こえるな？」

その声につられ、フィアさんが、ルナちゃんを抱きながらやってくる。

「あ、フィアさん……」

「なんだ？来ちゃダメだったか？」

「そんなことはない。気にするな。ムゲンはいつもそういう反応をするのさ」

「あー！確かにそうだなあ。ムゲンは顔によく出るからな」

「ふ、二人してそんな事言うのか……!？」

「ふ……。ふふ……」

堪らずフィアさんは笑いかけ、それを必死に堪えようとする。

「ははは!!」

道夜は声を上げて笑っているし……。そういえば、彼のこんな姿を見たのは初めてかもしれない……。

それにつられ、彼女もついに笑い出す。

「あははは!!!ほんつと!ムゲンは面白い……!!」

「………。なんでこうなるんだ……」

俺がため息をつく。

「……フィアは、お前みたいな子を見ると、弄らずにはいられなくなっちゃうのさ。最初のころは俺も随分と可愛がられたよ……本当に……」

クロノードが言うのと説得力があるのは、やはり体験者だからだろうか……。

「ぶふふ……。だって、クロノードに似て面白くてさあ！」

「それって、さりげなくクロノード君バカにしてるよね？でも、クロノード君が面白いのはわかるなあ。この前なんかさ……」

気が付けば、全員が集まっていた。

彼らの笑顔を見て、俺は、思った。この笑顔を、この幸せを守るために戦うことも悪くないと……。

「むげんー。おっすー」

そう言いながら彼女は、フィアさんの手から降り、俺の膝に座る。

「……ルナちゃん、こんにちは」

「こんにちは！むげんー！」

満面の笑み。見ていると、心が落ち着いた。

「こら、ルナ、おっすじゃないよ。こんにちはだ。まったく……。つて……カカサあ……？」

クロノードは、カカサの服を掴んだ。

「ゲツ!! また2時間も説教されるのは御免だぜー!?」

「お前がルナに変な言葉を教えなければそうならず済むんだ!!」

「だってー。可愛いじゃないかよー! 言葉をそのまま覚えるんだ!!」

「だからってなあ……!!」

「にーげろー!!!」

そう言つて、休憩所の中で走り回る二人。

見ていて笑いそうになる。というか、ファイアさんはすでに笑っている。

「あつははは!!! 二人とも面白すぎ!!! ほんと……! もう!!」

「…随分にぎやかなところに来たもんだ」

「……だろ? 俺も最初はそうだった」

この騒がしきは、一年戦争のころの彼らと変わらない。

そして、この心が暖まる気持ちも…。

「ここに【ヤツら】がいたら、もつと騒がしくなりそうだな」

「……俺も同じこと思った。もう、手が付けられないんじゃないか?」

「ふっ……。違うな……。俺は……。今、幸せだ」

道夜が小さくつぶやいた。聞き逃しはしなかった。

「むげーんー」

「ん？なんだい？」

「しあわせって、なあに？」

「ん、ん!?だ、誰から聞いたんだい？その言葉」

突然すぎて、俺も呆気にとられた。思わず動揺してしまう。

彼女は笑いながら続けた。

「えー？みちやがいったー。しあわせって、なあに？」

「ぶっ！」

道夜が嘖き出す。……聞こえてたんだ……。

「……そうだなあ……。しあわせってというのは……」

小さい子に説明するのは初めてで、なんと言えばわからなかった……。だが、俺なりの
答えを……。

「しあわせってというのは、こんな雰囲気のことを言うんだよ」

「ふんいき……？」

「うん。みんなが笑顔で、小さいことで笑いあつて……家族みたいに」

「じゃあ、むげんはいま、しあわせだね！わたしたち、かぞくだもんね？」

「……ああ。そうだね……。……とても……幸せだ」

「しあわせ！みんなしあわせだー！」

彼女は笑った。

その笑顔が眩しかった…。

…ここに…【彼ら】がいれば、どんなに幸せなんだろう…。

少しだけ、想像している俺がいた。

31 完

32: Reunited once again

宇宙世紀0087.05.11

エウーゴ、地球連邦軍のジャブロー基地を攻撃。しかし内部はすでにもぬけの殻であり、連邦軍が自ら仕掛けた2基の時限核爆弾によって自爆。

エウーゴの襲撃部隊は脱出するも、アマゾンの森林が破壊され、地表の生態系は大きなダメージを被る。カラバと合流。

道夜は、エウーゴ襲撃部隊の一員として地上へ向かった。

一方、俺たちは、宇宙での哨戒しょうかいが主な任務となっている。

「……………。暇だなあ……………」

哨戒任務は、一人1時間のローテーションで行われる。

そして、今は俺が哨戒しているわけなのだが……………。いかんせん、暇である。

……………なんか…雑誌でも持ってくればよかったかな……………

「……………」

ふと思ひ出し、「彼女」が残したテープを裏返して再生してみる。

「……………」

すると、音楽が流れだした。

『あなたを本当に愛してよかったの？』

私は一人。ただ一人で……』

【彼女】の声だった。涙が出そうになる……。

『人は愛せというけれど』

それを叶えるのは難しい

でも人は愛するために生きている』

俺はただ静かに歌を聞いた。

【彼女】は昔から歌を歌うのが好きだった。

戦いがないときは、俺によく聞かせてくれたものだ。

気が付けば、俺の顔は、涙で濡れていた。

涙は宙へ浮かび、俺はただそれを見つめて……。

1時間経ち、サラミスへと帰還する。

「交代だな？ムゲン」

「ああ。……………あと頼んだ」

クロノードと軽く会話した後、俺は格納庫を後にした。

「……………」

そのあとは自室でただ、天井を見つめ、ぼーっとしていた。
急にノックが響く。

「……………はい」

扉が開く。フィアさんだった。

「……………ムゲン。ちよつといいか？」

「…ええ。どうぞ」

彼女は、俺の承諾しょうだくを受けた後、部屋に入る。そして、備え付けのベッドに腰を下ろした。

「なんです？！」

「用って言うのは……………あれだ。さつき、寂しそうな顔をしていたからな。どうしたのか

「……すいません」

「な、なんで謝るんだ……？」

「……」

「なんだか、急に悲しくなってきた。苦しい……。」

「ふう……。まったく……。おいで」

「彼女は両手を広げ、俺に優しく言った。」

「……でも……」

「遠慮するな。私達はもう、姉弟のようなものだろう？」

「……」

「その言葉で、俺の中で、留めていた気持ちが溢れ出した。」

「うう……。ぐずつ……。うああああ……!!」

「彼女は優しく俺を包み込む。そして、背中を撫でる。」

「いい子だ。いっぱい泣いていい。泣くことは、人を強くする。だから、いっぱい……。泣きなさい」

「うう……。うあああああ!!!寂しい……。みんなと……。家族と会いたい……。!!」

「耐えられなかった。彼らが家族と認めてくれていても……。俺はそれでも……。俺に」

とっては……比べられない存在だから。

「……会える。大丈夫だ。きつと会える」

「……ううっ……!!!」

「辛かったな。苦しかったな……。一人でずっと耐えたもんな……」

「……うん……うん……!!」

「よく頑張った。ムゲン、お前は素直でいい子だ……」

「……」

「だから、『家族』と会うことを諦めるな。……お前が願えば、それは叶うのだから」

「……ぐすっ……うう……!」

「……まったく……。随分ずいぶん体の大きい子供だな……。話もいくらだつて聞いてやる。悲し

ければ胸を貸してやる。だから、気が済むまで泣いていい」

「人は……お互いに辛さを分かち合つて、生きていけるのだから……」

「……おれ……。テイターズに……。【大切】な人がいる……」

「……そうか。それで……?」

彼女は表情一つ変えず、言葉を返した。

「……彼女は……。リナは……。会いに行くつて……。何年かかつても……。つて……。うう

……!!!」

「そうか、そうか……。寂しかったんだな……」

「寂しい……。苦しい……。でも、彼女のためにも、このみんなのためにも頑張らなければならぬから……」

「……ああ。頑張ることは大切だ。だが、たまには休むことも必要だ。戦士にも休息は必要なのさ。そうだろう?」

「……ううっ……!!」

「これがお前の休憩なら、私はいつまでだつてお前を優しく撫でよう。優しく抱きしめよう……。これは……。私にしかできない事、だからな」

「……ぐずっ……。うあああああ!!!」

それから、しばらくの間、俺は彼女の胸を借り、泣いた。

そして……。気が付けば、俺はゆっくりと……。静かに眠りについた。

艦を襲う轟音。じょうおん たちまち現実へと引き戻される。

「……」

体を起こすと、彼女は俺に優しく微笑み、言った。

「もう……。休憩は終わりか?」

「……そんな事言ってる場合じゃないです」

「…そうか。それじゃあ、行くか」

彼女は、一足先に部屋を後にした。

続くように、俺も部屋を出て、格納庫へ。

格納庫では、ピクシーがただ静かに佇んでいた。

見たところ、右腕はなんとか直せてはいるものの、あまり無茶はできなさそうだった。機体に取り込み、システムを起動。

「出撃準備完了。ムゲン・クロスフォード、出る!!」

戦場へと出ると、既に数機の敵がカカサたちと戦闘している。

「カカサ……今……——っ!？」

横方向からの射撃。それを何とか回避。どうやら、俺の相手をしてくれる奴がいるみたいだ。

ブースターの残影と共に、一直線に突っ込んでくる機体。ガンダム……。

素早く左手でダガーを引き抜いて、サーベルを受け止める。

「見つけたぞ……。サムライ!!」

「……俺はサムライじゃない!!」

「すぐにその刀を使わせてやる……!!」

ガンダムは宙返りしながらビームライフルを発射。

回避しつつ、間合いを詰める。

右手にナイフを持ち、縦に回転しながら斬りかかる。

「美しい……！僕がこんな気持ちになるなんて……。ああ……！素晴らしい……!!」

「逃がすか……!!」

右手のナイフを投げつけ、それを追い越すが如く一気に敵へと迫る。

敵の正面へ。素早くダガーを右手で引き抜き、袈裟^{けさ}切り。

それを敵はサーベルで受け止められる。今だ……!!

スモークバルカンをガンダムの頭部へ発射。着弾を見越し、ダガーを納刀。

左手で鞘に手を当て構える。

「!!」

「……そこだ」

鞘の赤い部分を触る。刀が機械音を立て、火花を散らしながら射出される。

それを素早くつかみ、撃ちだされた速度のまま煙ごと相手を切り裂いた。その時間、

たったの2秒。

しかし、妙だ……。手ごたえどころか……。

「美しい動きだ。サムライ……。だが…僕には効かない」
「なっ……………!!!」

煙が去れば、そこにあつたのは、形勢逆転の形。

敵は、正面から振りぬいた刀ではなく、その持つている腕を掴んでいた。

しかし、刀の勢いは止まらず、右手首がおかしな方向へと曲がつてしまっている。

「おや、これはすまない。君の大事な腕を『二度』も壊してしまったね?」

「くっ…!!」

離れようとも離れられない。

「素晴らしいよ、君は……。僕は、君に惚れてしまった……」

「な、なに言ってるんだ……」

恐怖しかなかった。あんな速さを対応できるなんて……。

「ふふふ。君は、僕が殺してあげる。右の手首が痛いだろう……?」

敵は掴んだ逆の手で、ピクシーの右腕を切り落とした。

「くっ!」

しかし、それでなんとか間合いを取ろうとしたが…。

「駄目だよ。逃げちゃ」

一気に間合いを詰められ、逃げられない。……これは…悪い夢なのか…!?

「な、なんなんだ……お前は……!?!」

「僕かい……? フッフ……。僕はゼロ。ゼロ・オブリビオン」

「君にあの時腕を斬られてから、君に惚れてしまったのさ……」

寒気がした。勝てる気がしない……。

「ほら、君の刀、そこに落ちていているよ? 拾いなよ? もう一度、あの攻撃を見せてくれ……」

! フッフ……アハハ!!」

その笑い声に、恐怖を覚えてしまった。プライドとかそういう問題ではない……。

俺は刀を拾い、なんとか構えなおす。

正直、精神的にはもう……限界なのだが……。

手が震える。怖い……。

「はぁ……!?! はぁ……!?!」

脳とは別に、体が勝手に恐怖している。

俺は、再び闘志を奮い立たせ、斬りこみに行く。

相手の動きが読めない以上、相手をかく乱して動くしかない。

スモークバルカンを放つ。それは敵に着弾。続けて、別の方向からナイフを投げつけ

る。

さらに別の位置からサブマシンガンを撃ち込み、そして、刀で斬りこむ。

が……………。

「……………っ……！」

「ううん。素敵だ……。フフフ……。その動きだよ……。美しい……」

彼は、左腕を軽々と掴んでいた。まるで、俺の動きをその目で見ているかのように……………。

「……………な、なんなんだよ……！お前は……………！！」

「フフフ……。君の恐怖に怯えた顔……。見なくても分かるくらい伝わってくる……。そのガンダムも怯えているしね……？」

ピクシーが……………怯えている……………？

「さあ。これでおわりにしよつか？」

彼は不敵に笑いながら、ピクシーを投げ飛ばした。

「うあああああ！！」

「……………君は素敵だった。だから、僕も君を綺麗に消すことを努力するよ……。フフフ……」

「さあ。踊れ！ファンネル！！」

叫ぶと、何かが奴から射出された。それを肉眼で確認しきれなかったが、おそらくは……6以上の【何か】

突然。どこからかビームが俺をめがけて飛んでくる。

それを回避。しかし、それを見越したかのように、もう一射が回避した先に射撃される。

それが右肩に被弾。衝撃で吹き飛ばされる。その時、パイロットスーツが裂け、右腕に傷が付く。

それに合わせて、さらに一射。左から。当然回避しきれぬわけもなく…。

左肩をビームが撃ち抜く。ピクシーから血が噴き出す。

「くっ…!!!」

「フフフ……。血で染まる君も……素敵だ」

まだ……。負けられない……。死ねない…。

けれども声も、戦う力も既に俺には残されてはいなかった。

「せめて、僕の手で終わりにしてあげるよ……。寂しくないだろうか？」

「あ……………あ……………。ひ……………」

「言わなくても分かる。怖いんだね？大丈夫、一緒にいてあげるよ……フフフ……」

もう、何もかも考えられなかった。死に………こんなに怯えたことはなかった。

敵は近づき、サーベルを構えた。

怪我した右腕を抑えながら、ただ怯えていた。

怖い……。怖い怖い怖い……。

サーベルで突き刺そうとした瞬間だった。

「ムゲン！無事か!!!」

クロノードの声……。前を見ると、白いザクがガンダムと鏢つばせ迫りあっている。

「……………あ……………あ……………」

「ぐう……こいつ……!!」

「僕と彼の邪魔をしないでくれないかな!?邪魔だよ、君は……!!」

ビームがクロノードを襲う。

しかし、クロノードはやめない。

右足。左肩が破壊。それでも……。

「ここで……………こいつを……………ムゲンをやらせるわけには……………いかないんだああああ!!!」

サーベルで勢いよく敵を吹き飛ばす。

ただ、宙を浮く俺を、彼は掴み、後退する。

恐怖から……。引き離されていく……………。

「逃がさない……………。君も僕の手で……!!」

恐怖はそれでも止まらない。俺たちを追い詰めていく。

「くそっ!!機体の推力がたりねえ……!!!」

「……………あ……………く……………ろ……………」

声が出ない。出せないんだ……………。

「死なせない！お前も！俺も死なない！絶対に……………絶対に……………!!」

【何か】が俺たちを囲む。もう……………。

「死ぬわけにはいかないんだあああああああああ!!!」

その叫びと共に、【何か】が敵の横で爆発する。

!!!

続けてもう一基。さらに立て続けてもう一基。

「何だい？まだいるのかい？」

敵は背を向け、射撃位置を睨みつける。

「まったく。手こずりすぎじゃないですか？ムゲンさん…。いえ、ムゴンさん」

この……………声は……………。

「全機！目標はガンダムタイプ！家族に傷つけたこと、後悔させてやれ!!」

涙が出そうになった。それだけ、嬉しかった。間違いない……………彼らだ。

「何だ……………？援軍か……………?!」

そうだ。少なくとも……………今は……………。

「さてと、道夜がないから自分で足止めないといけないのは少し面倒ですが……………や

りますか…」

「それなら私が足を止めます。そのうちにユーリさんは支援射撃を。フアング隊長は近距離戦を」

「分かつてる。行くぞ！フユミネ、お前もエトワールと共に支援を」

「……引き受けた」

「……………み……………」

別方向から、1機。

「敵か……………!?ジムタイプ…………… あれは……………」

見ると、俺の昔乗っていた機体がこちらへと迫ってくる。

「……………ザクのパイロットさん。聞こえますか……………」

「……………!!」

彼女の声だった。間違いない……………。

叫びたい。でも、声が出ない……………。

「聞こえている。こちらはエウーゴ所属、クロノード・グレイス大尉だ。そちらの部隊と、要件を」

「こちらは、ティターンズ所属、第00特務試験MS隊。私はリナ・ハートライト技術少尉です。エウーゴからの緊急支援要請を受け、援軍としてきました」

「何……?! こちらは支援など……」

「確か、ファイア・アツシユベリー大尉が……」

「ファイアが……?」

「……あの」

「何だ?」

「そこにいるガンダムに触れても……?」

「彼は……」

「何かあったんですか……!? 機体はともかく、彼に……!」

「……今は戦闘に集中する。すまんが、技術少尉。少し頼まれてくれ」

「何でしょうか……?」

「コイツを、後ろにあるサラミスに……。刀も回収してくれ」

「了解です」

そう言つて、彼は戦線へと向かつていく。

「グロリアス。聞こえますか? サラミス艦の座標を送ります。その位置へ移動を」

「……………り……………な……………」

気が緩んだのか、意識が遠のいていく。駄目だ……こんなところで……………。

そして、俺は気絶してしまった。

再び目を覚ますと、俺はたぶん、病室にいた。

どれくらい眠っていたのだろうか……。

体をゆつくりと起こそうとしても、体が言うことを聞かない。

「……………」

右腕に、温もりを感じる。

そこにいたのは、偽物でもなく、声だけでもない……。彼女がそこにいた。

「……………リ……………ナ……………？」

彼女は目を瞑っていた。静かに……寝息を立てながら。

「……………くっ…!!」

起き上がろうとすると、痛みが走った。もどかしい……。

「……………ん……………？」

「……………リナ……………」

「あ……………。起きたんだ……………おはよう」

彼女は優しく微笑んだ。

「ああ……………。おはよう……………」

「やっと……………会えたね……………」

彼女は俺の手を強く握った。その手は小さく震えていた。

「……………本当に……………久しぶりだな……………」

彼女に微笑むと、彼女は今にも泣き出しそうな顔をして…。

「うん……………。やつと……………やつと……………会えた」

彼女は涙を零しながら、笑う。

「……………心配……………かけたな……………。悪かった」

「……………うっ……………うう……………」

彼女は抱き着いてくる。今は、痛みなんか感じなかった。

俺は彼女の背中を優しく撫でた。

「リナ、よく……………来れたな……………」

「うんっ！うん……………!!」

「俺も会いたかった……………。よく来てくれた……………」

俺も気づけば泣いていた。嬉しくて、言いたいことがたくさんあって、心がいっぱい

になっている。

「わたし……………。ちゃんと会いに来たよ。迷わなかった。あなたを信じて……………ずっと」

「……………ありがとう……………リナ」

「ううっ……………!!うわああああん!!!」

リナは、これでもかというほど声を上げて泣いた。

「あなたと別れるのは覚悟してた……。してたけど……。それでも寂しかったよ……」

「俺も寂しかったさ……。でも……」

「……お前のおかげで、俺は……戦えた」

「……私も、あなたのおかげで戦えた」

「……なら、お互い様だな？リナ」

「そうかもね？ふふっ……」

彼女は笑っていた。あの時とかわらない笑顔が俺に見せてくれた。

「ごめん。もう少しだけ……。このままでいさせて……」

「ああ……」

俺は、彼女を強く抱きしめた。

もう……。寂しい思いはさせない……。絶対に。

気づけば、彼女は再び眠りについていてた。

小さく寝息を立て、俺の胸を借りて……

それがなんだか心地よくて……。

「ムゲンー。調子は……って……。おっと、すまない。お取り込み中だったか」

ファイアさんが驚きながら言った。

「あ、いえ……。どうしました……？」

なんとか体を起き上がらせ、何とか座る態勢になる。

「……いや、調子はどうかと思つてな。どうだ？」

「ああ……。まだ、本調子つてわけにはいきません。……俺、どれくらい寝てたんですか……？」

「……そうだな、だいたい一日と半分だ」

「……そうですか……」

「ああ。危なかつたんだぞ？パイロットスーツが破れてたから、止血だつて大変だったし、お前の精神はやられかけていたりで……」

「迷惑を掛けましたね……」

「というより、私はとても心配していた……。お前の精神が壊れてしまったんじゃないかって……」

「……俺は……ガンダムと戦つて……負けた……」

「いいや。お前はよくやったほうだ。あんな見たことのない兵器に、あれだけで済んだのがまだいいほうだ」

「……そういえば、ガンダムは……！」

「ああ。皆が追い払った。さすがに数で勝ったというところだろうか……」

「……そうですか……。それで、援軍に来た彼らは今……?」

「ああ。今彼らは、アーガマで、正式に参加するために話をしているよ」

「……?」

「どうした?」

「いえ……。あの時の敵と戦った時、負けたことの悔しさなんか微塵も感じなかった……」

「感じたのは……恐怖……。ただそれだけ……」

「なぜか、彼は俺の動きを見切って、それこそオモチャで遊ぶ子供のように……。俺を……」

「……ふむ……。今後は少し気を付けたほうがいいかもしれない……。まあ、なんにせよだ……」

「……?」

彼女は俺の頭を優しく撫で

「しばらく休んでいろ。この子とも、募つる話があるだろうしな? あ、復帰したら、この子をからかったりしていいか?」

「え……」

「ふふふ……。こういう素直な子は弄るに限る……。フフフ……」

笑いが怪しい……。でも、なぜか安心できた。

「……彼女がなんて言うか……」

苦笑しながら返す。

「ふっふっふ……。私はこの手のことに関してはしつこいぞー？それは、お前も分かっているだろうけどな？」

「……クロノードも分かっている気がします……」

「ああ、そうだなあ……。だが、お前はクロノードよりも素直で純粹だからな。余計に弄りたくなってしまふ……。まったく。可愛い弟を持った姉のようだよ……」

「……褒められてる気がしないんですけど……」

「いやいや、十分に褒めているさ。んふふふ……。ふふふ……」

凄い……黒い笑みだ……。

「さて、それじゃ、安静にしてろよ？後でまた会いに来るからな」

「え、ええ……。別に無理してこなくても大丈夫ですからね……。？」

「無理じゃない。私がお前を弄りたいだけだ」

「ええ……」

困ったな……。まったく、面白い人に出会ったもんだ……。

それから、リナが目覚めた後、話をした。

テイターンズで何をしてきたか。こっちの生活はどうだったのか。ひどいことされてないのか……とか。

まあ、ほとんどは質問責めだった。

「ふふつ。ムゲンとまたこんなにお話しできるなんて、夢のようだなあ……」

「……俺もリナと話せてうれしいよ」

「それで？ さっきの人は……？」

「えっ……？」

「聞いてただけど？ 随分仲が良さそうだったね？」

なんか、凄い嫌な汗が……。

「えっと……」

「ふふふ……。ムゲンは私がない間……。あの人と……。ねえ……？」

「いや、【彼女】は……えっと……！ そう！ 姉弟のような……。そんな……。感じの……」

「へえ……？ 【彼女】……？」

まずい、火に油を注いでしまった。

「私はムゲンの彼女なはずなんだけども……？ まさか……」

「いやいやいや！違う！違うから！！【ファイアさん】は姉弟みたいに俺を扱ってくれてるだけで……」

【ファイアさん】!?」

「ぐっ……」

な、なんで俺……怒られてるの…?!

「いい？私というものがありませんが、ほかの人にうつつを抜かすなんて…!!」

「いやだから……」

「ムゲンは私だけ見てればいいのに!!」

しばらくの沈黙……。リナはやつと自分で言ったことに気が付いた。

「あ……えっ……と……」

「お前……昔よりずいぶん積極的になったな……?」

「え……。あ、ち、違うの！その、これはね？流れていうかさ……」

「へえ……」

「うう……」

リナの顔が真っ赤になる。こういう顔……見たかった。

「わ、わたしはムゲンの事好きだし……。あの人よりわたしはムゲンの事愛してるし！たくさんムゲンのこと知ってるし!!」

顔を真つ赤にさせながら言葉を続けている。

「ああ……。知ってるよ……」

微笑みながら言葉を返す。よかった……。なんとか最悪の事態は……。

「でもなんでかなあ……」

「う、うん……?」

「さっき詰め寄られたとき……ムゲンが満更まんざらでもなかったのはなんでかなあ……?」

「うっ……」

あ……。これもう駄目だ……。

「ムゲン……?」

「は、はい……?」

その時のリナの笑顔は……あのガンダムより怖かった…。

「話の続き……しよつか?」

「か、勘弁してくれえ……」

それから俺がどうなったかなんて……。言う必要もないだろう。

33:Tears of the moon

宇宙世紀0087.05.22

エウーゴのMS部隊とカラバのアウドムラ、ケネデイ・ポートへ

0087.06.08

MRX-009サイコ・ガンダム、ムラサメ研究所で試作1号機ロールアウト。

テイターンズ、ルナツー宙域にグリプス2、旧ア・バオア・クーを移動。ゼダンの門
完成

0087.06.29

テイターンズ、ホンコンシティを襲撃

0087.07.08

アウドムラ、ホンコンを脱航

0087.08.10

テイターンズ、アポロ作戦発動。月のフォン・ブラウン市を襲撃し、一時的にこれを
占拠する。

俺たちは、エウーゴ本隊と合流した第00特務試験MS隊に再び加入した。もちろ

ん、カカサやクロノード、ファイアさんも一緒だ。

今度こそ……仲間と共に……!

「よし、新しい仲間も増えたことだし、皆！聞いてくれ!!」

一斉に視線がフアングに集まる。

「俺たちは、かつての家族と共に再び歩けることを素直に喜んでいる!!」

「だって、寂しかったろ?」

俺を見ながら彼は言う。

「……ああ」

「だろう！俺も同じだ！それに、新しい家族も増えたしな?」

「……」。しばらくの間は世話になる。よろしく頼む」

彼女たちにとっては少し複雑な気分だろう。今まで戦ってきた敵だったのだし、当然と言えば当然だ。

ファイアさんは少し表情が硬かった。

「さて、作戦までは少し時間があるから、各自自由行動だ！時間になったら放送を送る。

以上！解散！」

その言葉で全員が持ち場に戻っていく。

俺は、フアングを追いかけ、声をかけた。

「フアング」

「うん？ どうした？ ムゲン」

「あ、いや……。どうしてエウーゴに……。？」

「……そうだな。考えてみた結果ということだな」

「……という……。？」

「……お前の言うことも理解はしていた。だから、俺も俺なりに考えていたんだ」

「あの時、お前と戦った時、真っ先にファイアはお前を助けた。そして言ったんだ」

『私の部下を、黙ってやらせるわけにはいかないんでな』って。その言葉を聞いて、少し考えることがあったんだ」

「なんていうか、お前を慕う人は俺たち以外にもいるってことを……。な」

「フアング……」

「ああ。勘違いするな？ 別にそれが結論ってわけじゃない」

「俺はただ、待っていた。与えられた任務を遂行するのに、いつも家族を秤はかりにかけて」

「フアングが俺たちに気を遣ってくれているのは皆知っている」

「……それが余計に俺を苦しくさせたのさ」

「…」

「そして、行きついた」

「【逃げたっていいのかもしれない】ってな」

「…逃げる…」

「ああ。奴らに背を向ける事、それは軍人としてあり得ないし、反逆で追われることになる。それだったらいっそ、エウーゴで戦ってテイターズを潰したほうがいいと思ったんだ」

「だから、逃げてきた」

「……【逃げる】か……」

「ああ。逃げるのが悪いわけじゃないだろう？」

「そうなのだろうか……？」

「そうとも。問題は、逃げた後、どうすればいいかを考えることだ」

「……」

「よく言うだろう？逃げるのは恥だが役に立ってな」

「……そんな事言う人いるのか…」

「ああ。よくユーリが言ってる」

「ええ……」

あいつらしいと思った。

「まあ、つらかったら逃げることだって必要だ。逃げ場がないと溜め込まなければなら
ないからな」

「だから、俺はお前を怒りもしないし、咎とがめもしない。結局は、互いのモノの見方が違っ
ただけなんだからな」

「……………フアング…」

「俺は……………皆を斬ったことを後悔していた……………」

「そうだろうな。俺もシヨックだった。でも、それも悪い事じゃない」

「……………」

「ムゲン。何事も経験だろ？」

「……………経験……………」

「知らなかったら、それを経験して知識に変える。それだけだ」

「お互い、まだ知らなかったただけだ。後悔して、辛い思いをして、そして人は強くなる。
だろ？」

「……………そうかもしれないな……………」

「さてと、改めて言わせてもらう」

「……………」

「おかえり、ムゲン。お前の家へようこそ」

「ああ……。ただいま」

俺は、フアングと握手した。

そのあと、俺は食堂へと足を向けた。きつと、アイツがいるだろうと思いつながら。

「あ、わかりますー？私もそういうの嫌いじゃないですよー？」

にぎやかな声……。誰と話しているんだろうか……。

こっそりのぞくと、ファイアさんとユーリが話していた。うわ……。嫌な組み合わせだ……。

「あつはは!!最高!!いやー。道夜の事は弄ってなかったから、面白い話が聞けていいな

あー！」

「それで……」

なんだか、入らないほうが安全だと思った。

俺はバレないように食堂を通り過ぎる。

「りーなー！」

「なあに？」

「しあわせー?」

「……うん。幸せだよ」

「しあわせー! しあわせー!」

廊下を歩いていると、備え付けのソファに腰かけたリナが、ルナちゃんと話していた。

「おや、ルナちゃんじゃないか」

「あーむげんだー!!」

リナから降りると、彼女は少しおぼつかない足取りで俺のところまで来ると。

「だっこー!」

「………ははは……。わかったよ」

彼女を抱き上げる。………なんか………視線が痛いんですけど。

「どうしたの? ムゲン」

「いや、少し暇だったから、散歩してたんだよ」

そう言いながらソファに腰かける。

「そっか。この子こと知ってるの?」

「ああ。知らないはずないだろう? だってフィアさんと」

言葉をつづけようとしたとき、思わぬ伏兵がそれを遮った。………そのタイミングがま

ずかった…。

「むげんのー！」

「え?! いや! 違う! クロノードの子だ!! ……リナ…?」

「…へえ…」

やばい……。これは本当にヤバイ……。

「いや! 違うよ! この子はクロノードとファイアさんの子供だから!!」

「……本当…?」

視線が怖いです。リナさん。

「ああ。本当だ。暇なときとかは、よく面倒見てたんだ。そしたら、懐かれちゃってね

……」

「あははー! むげんーむげんー!」

「……まあいいや。信じてあげる」

「……助かったあ……」

心から安堵した。正直、どんな戦闘よりも怖い…。

「ルナちゃん」

「なあに?」

「私の名前、言える?」

「うん!! りな!」

「そう。いい子ね」

そう言つて彼女はルナちゃんの頭を撫でる。

「……なあ、リナ」

「うん？」

「……俺さ、やつぱり孤児院……作りたい」

「……そう」

「この子を見ていると、なおさら強く思うんだ」

「本当なら、子供だつて祝福されて生まれてくるんだから……。両親がいないことは

……辛すぎる」

「……うん。親がいるつて……素晴らしい事だから」

「戦争が全て奪うなら、少しでも失つたものを救つてあげたい……」

「わかるよ。ムゲンの気持ち」

「……いつ作れるかはわからない。それでも、必ず……作る」

「一緒に頑張ろう！私も協力するよ！」

「……ありがとう」

俺は彼女を見つめた。

互いに見つめあつていると、ルナちゃんが笑いながら言った。

「むげんとりな、なかよしー!らぶらぶー!」

「…………ら、らぶらぶ…………」

そんな事言われたらすこし、意識してしまっじやないか……。
彼女はそれに対して。

「うん。ムゲンと私はラブラブだよ」

「り、リナ!」

「違うの…………?」

「い、いや…………違わないが…………ううん…………」

俺はただそっぽを向くしかできなかつた。

「ムーゲンっ!」

「な、なんだよ…………。っ…………!!」

振り向いた途端、彼女は俺にキスした。

「…………」

顔が熱くなる。

「…………ふふ」

離れると、彼女は照れながら小さく笑った。

「…………」

「ムゲン、顔真つ赤だよ？」

「あははー！むげんかおまつかー！」

「…う、うるさい…！そんなことされたら恥ずかしいじゃないか…！」

「照れたムゲンも私は好きだよ…！」

「くっ……。なんかりナ……。本当に変わったな……」

「そりやそうだよ。私、もう待たないって言ったでしょ？」

「……そりやあ…言ったけど……」

「だから、ちよつと強気になってみた……。どう、かな……？」

「いや、どうって……」

これ以上恥ずかしくて言えない……。

ああ、顔が燃えそうだ……。

1対1ならまだ言えるかもしれないが……。

「……ダメ……だったかな……」

しよぼくれる彼女を見て、慌てて口を開く。

「だ、駄目なわけない！そ、その……そんなりナも……好きだよ……」

恥ずかしい……。死にそうだ……。

「おお！言った言った!!」

突然の背後からの声。心臓が止まりそうになった。

「……………!?!」

「あ、ままー!!」

彼女は硬直した俺の腕からするりと抜け、彼女の元へと歩いていく。

「ふふふ。ムゲン、聞いたぞー?」

「あ………………。ど、どうも……………。それじゃ…………。おれは……」

「だーめ」

「うつ…………」

立ち上がろうとしたとき、彼女が肩を押しえつけ、強引に座らせた。

「ちゃんと彼女のそばにいてやらないとな? ふふふ…………。『好きだよ…………』だって。ピュ

アだなあ…………。ふふふ」

「…う、う…………うるさいですよ…!! な、なんでここに!?! さっきまでユーリと話をしたじゃないですか」

「ええ。してますよ? 話してたら、ムゲンさんが突然告白してるシーンだったもので、ちよつと観察を…………?」

彼女の後ろからヒョコつと顔を出すユーリ。ああ…………。なんでこう間が悪いんだ…………。

「うう……」

「ふふふ……あはは!!ムゲン面白い!!お腹痛いお腹痛い!!あははは!!」

リナまで笑ってるし……。

「わ、笑うなあ!は、恥ずかしかったんだぞ?」

「ははは!ご、ごめんごめん。なんか、そのやり取り見てたら可笑しくって……。ふふふ……」

「……お、お前まで……」

「フフフ。彼女は私たち側の人に染まったのだよ。ムゲン君」

「そまったのだー!」

ルナちゃんまで……。

「苦労しているな。ムゲン」

そこへ一筋の救いの光。道夜とクロノードが立ち止まった。

俺は目線で『たすけて』と送った。

「悪いな、少し用事があるから、それからなら……」

「クロノード、さっきの話だが……」

「ああ……」

そう言つて歩き出す。

あ……………。駄目なんですね……………。そうなんですね……………。

「さ、ムゲン。ゆつくり話でもしようか。な?」

「うえーん……………たすけてえ……………」

肩を掴まれ、俺は強引に食堂まで連れていかれた。

それから?聞かないでくれ……………。

ゲツソリしながら部屋に戻る。

ここを抜けた時と変わらない。

ぐしゃぐしゃの掛布団に、全員が写っている写真。何もかも昔のまま。

だが、部屋自体は汚れ一つなかった。

…………掃除していてくれたのか……………。

なんだか、最近泣く機会が多い……………。

俺はずっと一人で背負っていたのかもしれない。

【彼】を失つて、そして背を押された。なのに…昔と全く……………。

「変わってない……………」

周りにはこんなにも……。俺を想ってくれていたのに……。

「くっ……。うう…!!」

「……………」

でも、後悔はしていない。俺が成すべきと思ったことをして、そして結局対立してしまっただけだ。

だが、それもこの前までの事。今はもう、皆いる。

一人で背負うこともなく。皆で一緒に歩ける。

かつて家族と言ってくれた二人の人が、同じ場所で、同じ目的のために戦っている。そう、ジオンと連邦が手を取り合っただけ……。

グレイ……。君の夢に、一歩だけ近づいた気がする。

それから、グロリアスは、フォン・ブラウン市奪還の作戦に参加することになった。

「さて、これより作戦を説明するぞ。我が第00特務試験MS隊は、フォン・ブラウン市の奪還を支援。続けて、周囲のテイターズを掃討する。むしろ後者が俺たちのメインだ」

「……………小隊を分ける。第一小隊、ムゲン。お前が隊長を引き受けてくれ」

「俺が……………?」

「ああ。かつてのように…。俺たちの道を切り拓いてくれ」

「……………いいのか……………?みんな……………」

振り返ると、そこには皆がいた。もう……………一人で背負うことはない。

「ムゲンなら、妥当な判断だろう?期待しているぞ、相棒」

「道夜……………」

「ま、困ってるように見えたら援護しますんで、ちやつちやと殺ってきてください」

「ユーリ……………」

「まあ、当然だろうな…。お前は元小隊長。その名を汚すなよ……………?」

「フユミネ……………」

「さあ、ムゲン。お前ならその役目を果たせると信じているぞ?もちろん、支援は任せて

おけ」

「フィアさん……………」

「……………お前の腕なら心配ないさ。お前に命を預けるぞ?隊長」

「く、クロノード……………」

「まあなんにせよ、俺たちが出会うことができたのは、互いを知った君がいたおかげさ。

その、誰からも信頼される君にこそ、それが相応しいよ。ムゲン」

「カカサまで……」

俺は、涙が……止まらなかつた。

「……みんな……。ありがとう……。…わかつた。俺が……。道を切り拓こう……。それが、俺にしかできない事だから」

「よし、決まりだ。第一小隊と、第二小隊に分かれ、後はグロリアスの護衛。第一、第二で敵の掃討を行う。メンバーは……ムゲン、お前が選べ」

「俺が……？」

「ああ。お前が、俺たちを引っ張ってみろ」

「………わかつた」

俺は、もう一人じゃない。今度こそ……。

「フアングは第二小隊の隊長を。クロノード、道夜はフアングと共に。フユミネ、君もフアングと」

「了解だ。第一小隊隊長。第二は俺に任せておけ！」

「うむ。お前の判断に従おう」

「……お前の代わりに、俺が彼らを守る。任せておけ」

「…了解した。そちらは任せるぞ」

「フィアさん、ユーリ、カカサは俺と来てくれ…」

「あいよ。今回は焼き鳥3本で引き受けちゃうぜ？あ、でもやつぱり6本………」
「私を選んでくれるなんて、うれしいねえ…。じゃ、ご期待に応えないとな？」

「へーい。任せておいてくださいよー」

「残りのみんなはグロリアスの護衛と、常に状況把握を」

彼らに指示を出した後、俺はみんなに向き直る。

「俺は……もう、一人じゃない。いや、最初から一人じゃなかった……。でも、ただひたすら一人で無茶して……」

「でも、俺はその道を……。歩んできた道を後悔していない！」

「俺は今、仲間と共にある。そして、俺たちはみんな……。家族だ……」

「家族でなくても……。そう思っなくなってもいい。一つだけ命令がある」

「いや……。願いかな……」

「皆………生きて!!!生きて、明日を見よう。明日のことはそれからいい」

「だから、絶対に生きて帰ろう。この【家】へ」

「「「「「了解!!!」」」」」」

俺たちは、格納庫へと向かう。

「……………さあ。行こう。ピクシー」

修復されたピクシーを見上げ、乗り込む。

システムを起動していく。

「ムゲン」

「リナか。どうした?」

「私は戦場には出られない。けれど、私にしかできない事をする。だから、ムゲン。無事に帰ってきて……」

「……………ああ。お前をもう……………一人にはしない」

「……………ありがとう。……………愛してるよ、ムゲン」

「……………出撃する」

彼女との無線を切り、カタパルトへ。

「ムゲン・クロスフォード、ピクシーエッジプラス、行くぞ!!!」

戦闘宙域へと向かうと、エウーゴ本隊はすでに戦闘中。

俺たちは、これ以上月へ向かわせないため、テイターンスの艦隊を攻撃する。

「第一、第二に告ぐ…これより、テイターンス艦隊に攻撃を開始する!!生きるぞ…!!」

「第二、散開し、敵を背後から!!」

「こちらが正面で叩く!旗艦を潰してきてくれ!」

「こちらファング。了解した。時間を稼いでくれ」

それからファング率いる第二小隊は艦隊の後方へと回り込んでいった。

「よし、第一小隊、仕掛けるぞ!!」

「わかりました。支援射撃開始します」

ユーリはその場で機体を固定。照準を合わせ始める。

「ユーリ、きつつい一撃を戦艦に頼む!!」

「えー……。面倒です……」

「……………わかった。生チョコシリアルバーおごるから……」

「えー……。ビッグ生チョコシリアルバー二本なら考えてもいいですけど……」

「わ、わかった……。それでいいから、頼む」

「あ、言いましたね?男に二言は無いですよ?さて……。よく見えますねえ……。指

揮官の間抜けな顔もバッチリ見えますね……」

「よし、フィアさんとカカサは俺と出てきた敵MSを抑える!戦艦はユーリに任せてあ

るー」

「では、始めるか。無茶はするなよ?ムゲンもカカサも」

「もちのロンってね！あ、そういえばこの前麻雀つてのやつてさー。それが……………」

リーダーを確認。さっそく登場してきた。敵の数はおおよそ15……。

かなりの大多数だが……。そんなもの、もう微塵も怖くはない。

ピクシーのスラストスターを起動。1機に詰め寄りながらナイフを投げる。

シールドでガード。盾にナイフが突き刺さる。

それにより、敵の機体に隙が生じる。

「カカサー！」

「あいよつと!!!」

背後に忍び寄ったカカサがブレードでコックピットを貫き、続けざまに、背後へ迫る1機をシヨットガンで振り返らずに撃ち抜いた。

「さあ。来な!!」

左、2機。

「フィアさん！」

「任せておけ！狙いは外さん……!!!」

バズーカが頭部へ着弾。続けてビームライフルでコックピットを貫き、貫いたビームは、背後にいた1機をも貫く。

「まだだ。もつと来い!!」

右、3機。

俺は、振り向き、ナイフを投げる。

敵は素早く反応し、ナイフを弾く。

その隙を見逃さない。

ダガーを引き抜き、隙ができた1機を胴体から真つ二つに切り裂く。

続けて、ダガーを投げ、もう1機のコックピットに突き刺さる。

最後に正面に立つ1機にスモークバルカンを放ち、頭部に着弾させた。

刀を静かに抜き、煙がかかった敵へと一直線。

「逃がさない……沈め!!!」

コックピットを貫き、首を切り落とす。

そして、左手で鞘を持ち、刀を納刀。チャキンと、金属の音が鞘と鏢つばの間で小さく鳴った。

「さあ、俺が相手だ!!」

俺たちは三方向へと分かれ、的確に、しかし素早く敵を落としていく。

「ムゲンさーん」

「なんだ? ユーリ」

「戦艦3隻沈めましたけど?」

「は、早くないか!？」

あれから6分程度しか経ってない……。やはり、狙撃の腕は一流だ……。

「よし、ならMSの勢いも収まるはずだ、一気に片を付けるぞ!」

「了解!!」

間合いを詰め、1機の首を切り落とす。続けて、両腕。そして、最後にコックピットを焼いた。

背後へ迫る殺気を感じ、宙返りしながら相手の背後へ回る。

そして、ナイフでコックピットを貫通させる。

「こっちは……大丈夫か……」

目の前に広がる、MSの首や……腕、焼かれた胴体が宙を舞う。

「こちらムゲン。こっちは……」

この嫌な感じ……。あの時の感覚……。殺気のような……。執念のような……。

殺気を感じる方向からビームが飛ぶ。

右、左、左、続けて真下。数秒後に真上……。あれ……? 撃ってくる場所が……。

「……っ!そこか!!」

マシンガンを構え、ビームを撃ってくるであろう場所へ射撃。

そして、小さい爆発が見えた。

「……………やっぱり……！」

「へえ……。僕のファンネルが見えたんだ……。すごいね。ニュータイプでもないのに」

そして、それを操る主が姿を現す。

「やはり……お前か！ゼロ……ゼロ……オブリビオン!!」

「僕を覚えていてくれたのかい!?うれしいなあ……。僕も君の名前を知ってるよ。ムゲン・クロスフォード」

「っ……………」

「ああ。君は会えば会うほど強くなる……。ううん。素晴らしいよ……」
「無駄口を……………!!」

ダガーを引き抜き、迫る。

「二度も僕に同じことをさせるのかい？」
「それは……………どうかな！」

ダガーを投げつける。奴の腕で弾き飛ばされる。

「今だ！ユーリ！撃ち抜けえ!!!」

叫びと共に一射。奴の右腕を撃ち抜いた。

「くっ…!? やつてくれるね……!!」

「お前に二度は……ない!」

「ふふふ……。まさか僕が本当にその攻撃が分からないとでも……?」

「な、なんだと…?!」

「君の思考は浅はかだ。所詮、その程度……。フフフ……」

不敵な笑みが聞こえる……。寒気がする……。

「僕にはわかるんだよ。君の行動一つ一つが……。手に取るようにね……?」

「お前は……。いったいなんなんだ!」

「僕かい……。? 僕はね、【君とは違う】。本物のニュータイプ。あのアムロ・レイをも超

えた存在だ!」

「……アムロ・レイを……。超えるニュータイプ……」

「フフフ……。さあ、君が泣き喚くさま……。見たいなあ。いいや、やつぱりいつその事

壊してしまおうか?」

「な、なにを……」

彼の言葉には狂氣的な何かを感じる。こ、こわ……。そう思った瞬間だった。

「そいつの言葉に耳を貸すな! ムゲン!!」

「……!!」

ファイアさんだった。彼女は、彼が放つビームを避けながら一気に間合いを詰める。

「お前も、誰も死なせん!!私も、死なん!!」

「僕にその機体で勝てる?!このMK-0に!!」

「知らないな!機体が何だというんだ?」

「フフフ……。君にも地獄を見せてあげるよ……。彼のように壊してあげる」

「……生憎、私はそういう治療は間に合ってるんだ。受けるなら、お前自身が受けるんだな!!」

ガンダムを蹴り飛ばす。そして、ビームライフルを放つ。

続けてバズーカ。

「ムゲン!お前には、仲間が付いている!!何一つ怖くはない!!恐怖なら、私も、カカサも!ユーリもみんな背負う!!」

「ファイアさん……」

「だから、お前はまっすぐ前を向け。男だろう?リナのために、ここで止まるわけにはいかないだろう?」

「……。ああ。そうだ……」

恐怖を感じる。それでも、もう……。今なら……。

「カカサ!」

「そこだあ!!!」

カカサの敵が回避するのを見越した攻撃。

それに合わせ、ファイさんがビームライフルを放つ。続けて、ユーリが相手の動く位置を予測した射撃で、相手の行動範囲を狭める。

「そんな攻撃が……！ファン……」

「そこお!!!」

頭部にスモークバルカンを発射。すかさず間合いを詰める。

「くっ！見えない……！」

「……………」

俺は目を瞑った。相手に悟られず。ただ、静かに正面に立つ。

相手が攻撃を予測してくるニュータイプならば、予測させない動きをすればいい。

「死にたいようだね?!ファンネル!!!」

ファンネルが取り囲む。

「ムゲン！だめだ!!」

構えは一瞬。それこそ、0, 1秒くらいの速さ。

やれるかはわからない。だが、失敗すれば……。

やるしかない。

「ムゲンさん！っ!!! ああっもう!!! 照準が定まらない!!!」

「くそっ!!! ムゲン!! 諦めるってのによ!!」

諦めないさ。みんな生きて……。生きて……。帰る!!

煙が消えるその一瞬。

腕が電流を走らせながら、動く。

頼む、速く。もっと……。速く!

刀を掴む。鞘を触る。

火花を散らしながら刀が走る。弧を描く。

「うおおおおおおお!!!」

その一閃は、敵が予測する速さを超えた。

そして、ガンダムの左腕を切り落とす。そして、鞘に戻す。この間0, 2秒。

「っ……。僕に……。傷を……。?!」

「これで止めだ!」

再び、構える。

きつと相手は予測する。刀を振ってくる……。だが、こいつはそれだけが取り柄じゃない。

「死ね!! ムゲン!!!」

構えるふりをしながら、鞆の赤い部分に触れる。

刀はそのままの勢いで吹っ飛び、奴のコックピットの直撃する。思わず機体が吹っ飛んだ。

「があっ！ムゲン……!!素晴らしい……!!だが、終わりだ……」

吹き飛びながら、不敵に笑った。

ファンネルが一斉にピクシーを襲う。

「うぐううう!!!」

衝撃が走る。コックピットが焼かれ、ぎりぎりを掠める。

吹き飛んだ破片が俺の左腕に傷をつけ、さらに体へ突き刺さる。運悪く、左胸……。

「か………はっ………」

「ムゲン!!!」

「おいおい、マジかよ！ムゲン！」

「ムゲンさん!？」

彼らが集まってくる。

「………か、った………な………。みんな………」

「ふざけるな！ここで死ぬつもりか!？」

「そうですよ！お菓子買ってくれるんじゃないんですか!？」

ダメだ……。 瞼が……重いんだ……。

「目を覚ませよ！こんなところで死ぬんじゃない！ふざけんな！！お前には、まだやることがあるだろう！！！」

「……………すま……………」

「おい！コックピットを！！」

「今やつてる！！」

「グロリアス！聞こえますか！？ムゲンさんが……ムゲンさんが……！！」
く……………。……………で……………死ねないのに……………。

「おい！ムゲンの機体をこいつに掴ませろ！！」

「道夜!?」

「可変状態なら、2，3分かからん！急げ！！」

「あ、ああ……！！」

「ムゲン、死ぬんじゃない！お前はまだ生きるんだ！！お前は私の弟だろう!?こんなところ……………駄目だ……………！！逝くな！！！」

みんなが……………きえてく……………！！。

「救護班を！格納庫です！急いでください！！ふざけている場合ではないんです！！！」

「全機、道夜機を援護！やらせるなよ！！！」

「くそっ！俺がいてやれば……！ムゲン……！頼む！死ぬな……！！」

「フアング、敵の数が……！まずいぞ……！！」

「分かってる！でも、ムゲンを見捨てるものか！！俺たちの家族を見捨ててどうする！！」

「なんとか、努力はする……！！」

「ムゲン。お前が今消えたら、誰がリナを抱きしめるんだ……！！ダメだ……！死ぬんじゃない！俺よりも先に……逝くな！！」

目が……開かない。次第に……体に力が入らなくなる……。

そうか……。これが死ぬってことなんだ……。

誰かに抱き上げられ、担架たんかに乗せられる。

それが誰かも……今はわからないけれど……。

「ムゲン！！いやあああああ！！駄目だよ！！ムゲン！！！！」

り……な……。

ごめん……。やくそく……。守れなかった……。無事帰ってこれなかった……。

お前のそばに……。いてやれそうにない……。ごめん……。

そこから、俺の意識は……。途切れた……。

3
3

完

34 : A sign of arousal

宇宙世紀0087.08.16 連邦政府総会において、ティターンズの大規模な権限を引き上げる法案が可決される

0087.08.17 エウーゴの思想的指導者、ブレックス・フォーラ准将暗殺

0087.08.21 MSZ-006 Zガンダム、試作型2機ロールアウト

0087.08.24 ティターンズ、グラナダへのコロニー落としをかけるも失敗

0087.09.14 ティターンズ、サイド2宙域に集結

0087.09.18 MSZ-006 Zガンダム、実戦配備

0087.09.21 ティターンズ、サイド2・25バンチへの毒ガス攻撃に失敗

0087.09.28 エウーゴ、Gディフェンサーを実戦配備

0087.10.05 ティターンズ、フォン・ブラウン市の港湾を爆破

0087.10.12 ザビ家の遺児ミネバ・ラオ・ザビを象徴とし、ハマーン・カーンによって率いられるアクシズ基地、地球圏に帰還

0087.10.14 エウーゴ、アクシズに使節団を送るも交渉決裂

0087.10.15 ティターンズとアクシズが連合を結成

0087. 10. 19 エウーゴ旗艦・アーガマ、補給と修理のためAEのラビアン
ローズと接触

0087. 10. 19 グロリアス隊、地上へ。ミデア受領。以後、地上ではミデア
で行動することになる。

0087. 11. 02 エウーゴ・カラバ共同軍、ティターンズの地球上の拠点であ
るキリマンジャロの連邦基地を襲撃

0087. 11. 03 未明、キリマンジャロの連邦軍基地が山頂ごと崩壊

0087. 11. 04 ムゲン・クロスフォード中尉、3か月ぶりに昏睡状態こんすいから目
覚める。

.....ここは.....どこだろう.....。

『ムゲン』

「.....グレイ!?!」

彼は、あの時と変わらない姿で、俺の前に立っていた。

『久しいね。話したいこともあるけれど、君はまだこつちに来ちゃいけないよ』

「.....どうして?ここは.....ここはどこなんだ?」

周りを見渡しても、何もなく、真つ白な世界。

『そうだな。死の世界手前つてところだろうな』

「!?いい、イーサン!？」

本当は……亡くなっている人を見ているのだ。驚かないわけがない…。

俺は……死んでるのか…。

『いいや。実際には死んじやあいない』

俺の心を察するように彼は言う。

『死にかけて、昏睡こんすい状態つてところだな』

「……俺は……どうすればいい?」

『それ、俺に聞くかあ?』

『お前はもう、決めたんだろ?なら、それをやりやあいいんじやねえか?』

「……イーサン……」

『情けない姿見せないでくれよ、隊長。お前はもう、一人のための命じやない』

『ムゲンはムゲンだよ。君が君でいれば、皆がついてきてくれる。君は、皆を照らす光になれる』

「……グレイ……」

『大丈夫。ムゲンならうまくやれる。ニュータイプとしての……勘かな……』

『俺も、お前を信じてるぞ？ムゲン…。お前はもう、一人じゃあない。それに、俺と約束したろ？』

『辛いときにいてくれる仲間、家族を守ると』

「……………ああ。そうだったな……………。忘れてたよ……………」

『なら、やるべきことは一つだけだ。お前は、お前の場所へ帰るんだ』

『君の歩く方向は、僕達とは反対』

彼は笑った。

「……………」

俺は、彼らに背を向け、歩き出した。

『ムゲン』

「……………」

振り返ると、グレイは笑いながらいった。

『僕達は、いつでも君のそばにいる。一人じゃない。みんないる。クロノード隊長も、ファング隊長も。君が歩んだ【軌跡】が、彼らを繋いだ』

『だから、怖がらなくていい…。さあ、行ってらっしゃい』

『行ってこい。話は、もっと後でいくらでも聞いてやる。……………エミリーを、頼んだぜ？』

「……………ああ…。行ってくるよ……………」

それから、俺はただひたすら、歩いた。
だんだんと光が強くなる。

その光に目が眩んだ。

「……………」

目を開くと、そこは病室だった。

「……………」

生きてる……。いや、帰ってこれた……。

「ムゲン……………!?目が覚めたのか!?!」

道夜だった。彼は、今までにないほどの驚いた顔を見せた。

「……………あ……………あ……………」

「待ってろー！すぐみんな呼んでくる!!!」

道夜は走って病室を出て行った。

胸いっぱい空気を取り込む。

生きている……。それだけが嬉しい。

少しずつ体を起こす。痛みは……。そこまでじゃなかった。

しばらくすると、ぞろぞろと病室に入ってくる人々。

「おお！ムゲン!!目が覚めてよかった……!!!」

フアングも少しだけ泣きそうだった。

「迷惑……かけた……」

「ああ。本当に困った奴だよ、お前は……。だが、無事でよかった」

フユミネはそれを言って、静かに出て行った。

「ムゲン!!!よかった、目が覚めてくれて……。本当に心配したぞ……?」

クロノードは、心から安堵あんどしている。

「バカ野郎!!!いきなり死にかけやがって!!!どれだけ仲間が心配したと思ってるんだよ

!!!」

カカサに怒鳴られる。そうなっても仕方がない……。

「……だが、本当によかったよ。君が生きていて」

「すまん……」

「ムゲンがやられて、一番慌てていたのは実はカカサなんだぜ?」

「……そうなのか……?」

「当たり前だろ!?……まあ、君が生きててよかった。さてと、俺は食堂へ行ってくるかな」

照れ隠しなのか、そう一言だけ残し、走って出て行つた。

「……珍しいぞ？あんなカカサ見れるなんて。でも、それだけ心配かけたってことだ。もう、無茶するなよ？」

「……ああ。わかっている」

「それじゃ、俺はカカサの様子見てくるわ。そんじゃ」

彼は手を上げ、そのあと出ていく。

それを見送って、フアングは口を開いた。

「……みんな本当に心配してたんだぞ？」

「……すまん……」

「リナなんか、1週間ずっと自室に籠って出てこなかったんだからな」

「リナが………?」

「ああ。衰弱すいじやくしてた。そんだけお前を大切に思っていたんだ」

「フィアなんか、ずーっとお前の看病をしてたんだぞ？」

「フィアさんが………」

「お前が一番ひどかったときは、三日も寝ずにお前を看病して、手伝えることもなかったって手伝って。倒れるくらいまで頑張ってた」

「………」

「さて、俺もまだ用事があるからな、先に戻る……。ゆっくり休んでな」
「すまん……」

彼は、俺の額に手を置いた後、病室を後にした。

病室が、静かになる。

しばらく目を瞑っていると、冷たい手が額に当てられる感覚がした。

「……………ん？」

目を開くと、俺を心配そうに見つめるファイアさんがいた。

「……………！」

「……………ファイアさん……。どうしたんですか？」

「……………ずっと……」

「……？」

「ずっと心配してたんだぞ!?!どうしたも何も……。あるか……」

彼女は涙を見せた。はじめて見るかもしれない……。

「ごめん……。なさい……」

「本当に、世話の焼ける弟だよ。お前は……」

「……………お世話好きなお姉さんがいるから……」

「ふふ……。そうだな。さてと、また後で見に来る。ゆっくり寝てろよ？」
「……………はい」

彼女は笑顔を見せた後、出て行った。

静かに……。眠たくなってきた…。

「……………」

リナは、会いに来てくれないかな……。少し寂しさを感じた。
そんなことを思っていた時、勢いよく病室のドアが開く。

「……………!?!」

「ムゲン!!!!」

「り、リナ……!」

彼女は、俺を見た後、泣きそうな顔をする。そして、こちらへ歩み寄ってくる。

「……………迷惑かけたね……。リナ………本当に……」

バシツと、乾いた音が病室に響く。リナに、頬を叩かれた。

「……………っ!」

「ムゲンのバカ……!!うう………!!」

彼女は抱き着いてくる。

「迷惑なんてもんじゃないよ!!!大迷惑だよ!!!」

「…………ごめんね」

「許さないよ!!!許せるわけ……………ないじゃん…………」

「……………」

「もう、離れないって言ったのに…!!」

「約束、守れなかった」

「愛してるって言ったのに!!!」

「今でも…………愛してる」

「うう…………!!うぐっ…………えぐっ…………!!」

彼女を強く抱きしめる。

「……………本当に……………本当にごめんね…………」

「…………わたしはっ…………無力だよ……………!大事な時、ムゲンのそばにいてあげられなくて…………。自分だけが辛いわけじゃないのに……………」

「いいや。リナは無力じゃない。俺のそばにいてくれてる。そんなことないんだ」

「ううん。わたしは…………。わたしはっ……………!うう…………!!」

「リナ……………」

「わたしは…………。ムゲンの力にはなつてあげれなかった…………」

「そんなことない」

「……わたしは、みんなが思うほど強くないよ。怖いよ……。辛いよ……。あなたがいないと……なんにもできないよ……!!!」

「君は強い子だよ。だって、どんなに遠くても、何年かかっても、俺に会いに来てくれたじゃないか」

「……わたしは……」

「リナ、もう……。君が怯える必要はない。ここには、俺も……。家族も、皆いる……。グレイも……。イーサンも」

胸に手を当て、目を瞑る。心で感じる。その暖かさを。

「だから、もう……。泣かないで。俺を許さなくてもいい。でも、君が泣いている姿だけは……。見たくない」

「……ムゲン……」

「リナ、君は……。俺の光だ。だから、もう、泣かないで」

「……う、うん……」

「……本当に……無事でよかった。本当に……」

「信じてもらえないだろうけど、俺は……。生死をさまよっているとき、彼らを見た。そして、話した」

「グレイ、イーサン……彼らは言った。『一人じゃない』って……。俺は……怖くはない……。一人じゃないんだから」

「……………」

「リナ、こつち向いて？」

「な、なあに……？」

涙で溢れた顔。俺は、彼女に優しく口付けをした。

「……………」

「……………」

「む、ムゲン……っ！は、恥ずかしいってば!!」

「……………慰め方、どうすればいいかわからなくて……………」

「……………もう……………。慰めるのが下手なんだから……………」

「はは……。ごめんね」

「でも、嬉しい……………」

「……………そう言ってもらえると、こつちも嬉しいさ……………」

「ムゲン」

「なんだい……………？」

「……………もう一回だけ……………して？」

「……………ああ。君のためなら、何度でもしよう」

俺は、彼女に再び口付けをした。

「……………ムゲン。愛してるよって……………言って?」

「…愛してるよ。リナ」

「わたしも……………。愛してる」

彼女は、優しく微笑む。俺も、つられて笑顔になった。

しばらくして、リナは口を開く。

「私もそろそろ、歩き始めなきやね。いつまでも、立ち止まっていられないよね?」

「ああ……………。でも、君の前は俺が歩く。怖くなんか…。寂しくなんかさせないから」

「ううん。ムゲン。私も一緒に歩く。二人で恐怖も…寂しさも……………分け合おう?」

「……………。そうだな。それじゃ、ゆっくり歩き始めようか?」

「うん……………」

仲間のためにも、リナのためにも……………。もう、俺は迷わない。恐怖も感じない。皆で分け合って前へ進む。

……………そうだろ? グレイ、イーサン……………。

0087. 11. 16

エウーゴ、ダカールの連邦議会を占拠。ブレックス・フォーラの跡を継いだシャア・アズナブルが、全世界にテイターンスの実態を告発して、自らの正当性を訴える。

俺たちはダカールでのクワトロ大尉の支援をすることになる。

俺はダカールの街で、戦闘中、その話を聞いていた。

「議会の方と、このテレビを見ている連邦国民の方には、突然の無礼を許して頂きたい！ 私は、エウーゴのクワトロ・バジーナ大尉であります」

「話の前に、もう一つ知っておいてもらいたいことがあります。私はかつて、シャア・アズナブルという名で呼ばれたこともある男だ！」

シャア・アズナブル……かつて、赤い彗星と呼ばれた男……。

「シャア……」

敵影を確認。 3機。

「敵の目的は……議会の邪魔か……!!」

「ムゲン！ 掴まれ!!」

可変した道夜の機体が空から。俺はジャンプし、道夜の機体へ掴まる。

前よりごつごつとした印象を感じるリゼル。

「お前、こいつは一体……」

「その話は後だ。まずは奴らを片付ける！」

「ああ!!」

可変機で一氣に間合いを詰める。

「私はこの場を借りて、ジオンの遺志を継ぐ者として語りたい。勿論、ジオン公国のシヤアとしてではなく、ジオン・ダイクンの子としてである！」

演説は続く。これを止めるわけにはいかない。

「ムゲン！吹っ飛ばえ!!!」

俺は、道夜の機体を踏み、ジャンプする。

「ジオン・ダイクンの遺志は、ザビ家の様な欲望に根差したものではない。ジオン・ダイクンがジオン公国を作ったのではない」

「現在テイターンズが地球連邦政府を我が物としている事実は、ザビ家のやり方より悪質だと気付く」

「逃がすかあああ!!!」

ダガーを引き抜き、一機を真つ二つにする。

「人間が宇宙に出たのは、地球が、人間の重み沈むのを避けるためだ」

「そして、宇宙に出た人類は、その生活圏を拡大したことによって、人類そのものの力

を身に付けたと誤解をして、ザビ家の様な勢力をのさばらせてしまった歴史を持つ」
空中でナイフを投げつけ、一機のスラスターを破壊。それに合わせ、道夜がハイメガ
ランチャーで撃ち抜く。

最後の1機は、遠距離からの一射。強力な弾丸がコックピットを貫く。

「それは不幸だ。もうその歴史を繰り返してはならない！ 宇宙に出ることによつて、人間はその能力を広げることができると、なぜ信じられないのか？」

「まだ来るぞ！ ムゲン！」

「ああ！ 地上は任せろ!! シヤアの……。この会話を止めてなるものか!!!」

地上から4機、空中でマシンガンを地面に乱射。

続けて、ナイフを頭部めがけて投げつける。

「我々は地球を人間の手で汚すなど言っている。テイターズは、地球に魂を引かれた人々の集まりで、地球を食い潰そうとしているのだ！」

「人間は長い間、この地球という揺りかごの中で戯れてきた。しかし、時代はすでに人類を地球から、巢立たせる時が来たのだ！」

頭部にナイフが突き刺さり、その敵めがけてダガーを振り下ろす。

機体ごと真つ二つにし、続けて背後に迫る敵の首を切り落とす。

蹴り飛ばし、ナイフを投げつけ、コックピットを貫く。

「その後に至って、なぜ人類同士が戦い、地球を汚染しなければならないのだ!? 地球を自然の揺りかごの中に戻し、人間は宇宙で自立しなければ、地球は水の惑星ではなくなるのだ!」

「このダカールさえ砂漠に飲み込まれようとしている! それほどに地球は疲れ切っている!」

「今、誰もがこの美しい地球を残したいと考えている。ならば自分の欲求を果たすためだけに、地球に寄生虫の様にへばりついていて、良い訳がない!」

「現にテイターズは、この様な時に戦闘を仕掛けて来る。見るがいい! この暴虐な行為を!」

「彼らのはかつての地球連邦から膨れ上がり、逆らう者は全て悪だと称しているが、それこそ悪であり、人類を衰退させていると言いつける!」

背後からの衝撃。

「くっ! 邪魔をするなあ!!」

刀を引き抜き背後の敵を切り倒す。

「こちら道夜! まだ来るぞ!」

「こ、これ以上はきついで!」

「ああ。でも、やるしかない!」

「わかってるさ！やるしかないんだ!!」
武器を構えなおす。

「テレビをご覧の方々はお判りになるはずだ。これがティターンズのやり方なので
す！我々が議会を武力で制圧したのも悪いのです！」

「しかしティターンズは、この議会に自分達の味方となる議員がいるにもかかわらず、
破壊しようとしている!!」

シヤアが演説を終える。……なんとかなったか……。

敵がだんだんと離脱していく。……成功か……。

「お、おわった……」

「ふう……随分苦労したな……」

「よく戦えたもんだ……」

地面に転がる敵を眺めながら呟く。

「違うないな……。さ、ミデアに戻ろう」

「……ああ。全機後退！離脱するぞ！」

叫んだ後、俺たちは帰還した。

格納庫へ、自らの機体を置く。機体から降りると、道夜が近づいてくる。

「……やあ。お疲れ……」

「……ああ。お疲れ」

「お前……。あれは新型か……？リゼルのように見えはするが……」

道夜の新型らしき物を見上げながら言う。

「ああ。こいつは『ガンダムT.R.10』。別名だとリゼルⅡとでも言えばいいか」

「ガンダム……」

ガンダムのようなイメージを持たない姿。しかし、その名はガンダム。もしかしたら、いつかそんな機体が増えたりするのだろうか……？

「あ、私の機体も変わったんですけどー？見て下さいよー！あの機体ー！」

「……ああ、あの一本角の機体か……」

一本角の機体。どことなくクワトロ大尉が駆る機体に似ている……。

「サイン・コードスナイパーって言うんですけど、これまたカッコいいですよー！そう思いませんか!？」

「……それは今日すでに12回は聞いたぞ、ユーリ」

道夜が呆れながら言う。

「えー。カッコいいじゃないですかー。ムゲンさんもそう思いますよね?」

彼女は目をキラキラさせながら俺に詰め寄る。

「……あ、ああ……確かにカツコいいな……」

「ですよねー！ やっぱり目の悪い道夜にはわかりませんよねー？」

「俺は目は悪くないし、カツコ悪いとも一言も言っていないぞ!？」

「えー？ そうなんですかあ？」

「ははは……。道夜、お前も大変だね……」

「……同情するなら代わってくれ……」

「無理な話だよ……」

「……はあ……」

わりと……道夜も苦労している……。まあ、昔からだけど。

「ムゲン」

「ん？」

「彼の演説……どう思った？」

なんか、懐かしい言葉な気がする……。俺は、俺が思ったことを素直に彼に述べた。

「……俺には、分からない。……でも、彼は正しい事をしていと思う。今は……」

「……それは俺もわかる。今はテイターンズが悪だ。失わせ続ける根源を絶たねばならない。俺たちは、そのために戦っているのだからな」

「ああ。無論だ。……これからも、よろしく。道夜」

「……よろしく」

彼は少しだけ照れながら言った。

「ちよつとー？私を忘れないでもらえますー？」

「あ、ごめんごめん」

「ムゲンさん？このまえのビッグ生チョコシリアルバー、3本にしてもいいんですよ？」

「……か、勘弁してくれ……。あれは高いんだぞ!?それをお前は一気に食べて:!!」

「えー。だって美味しいんですもん」

そう、ビッグ生チョコシリアルバーは名前の通りの大きさを、見た目だけでなく値段の高さでもそれを表している……。

正直、2本でも財布がかなり軽くなった……。

「はあ……。お前といると疲れるよ……」

「てへっ」

「……てへっ……。じゃあないんだよな……」

俺は頭を抱える。

「さて……。俺は部屋に戻るよ」

「ああ。ゆつくり休んでくれ」

俺は、ふらふらと部屋に戻った。

こんな気分も、随分と久しぶりだった……。

また、幼いころに戻れた気がして……。

……嫌いじゃない。

34 完

35:Will committed

宇宙世紀0087. 11. 24

アーガマ、補給のためサイド2・13バンチ、モンガルテンへ入港

0087. 11. 30

エウーゴのアーガマ、ゼダンの門を偵察

0087. 12. 07

ティターンズ、グリプス2を改造したコロニーレーザーでサイド2・18バンチを破壊

0087. 12. 14

エウーゴ第二艦グロリアス、サイド2・21バンチをG3、毒ガス攻撃を予兆。サイド2・21バンチへ。

エウーゴ本隊到着まで時間が掛かる模様。

「何度繰り返すんだ……ティターンズは……!!」

その話を聞いた俺は、移動で待機している間、悶々としていた。

「ムゲン……」

「リナ……。もう躊躇わないぞ……。テイターズは……。悪だ」

「ええ。彼らは、自分の利益のためだけに、人を虐げて、虐殺した。それを許すことなんか出来ない」

「ああ……。ここで、奴らを潰す……!!」

もう、その決意に揺るぎは無い。

俺は、少し気持ちを落ち着けるため、食堂へと足に向けた。

「……………」

「よっ！ムゲン。隣、座り空いているぞ」

フィアさんが手招きする。

「あ、はい……」

コーヒーが入ったカップを持ち、彼女の隣の席へ座る。

「……………」

「なあ、ムゲン」

「はい……?」

「戦いは、いつ無くなるんだろうな……」

真剣な彼女の質問。俺は、どう答えればよいかわからなかった。

そんな心の声が、いつの間にか口から漏れ出していた。

「…そんなの、分らない……」

「ああ。そうだな…。私も分らない…」

「……また、繰り返し返されてしまう…」

「毒ガスの話か？」

「……」

辛かった。あんな事を繰り返すわけにはいかない…。

「まだ決まったわけじゃない。止めればいい」

「……そんな簡単に…」

「そのために今間に合わせようとしてるんだからな」

「…これが止められなければ…また、あの時と同じだ…」

「…ブリティッシュ作戦の事か」

「フィアさんは…あの作戦は…」

「軍人として言うなら、あの作戦は必要だったのかもしれない。だが、一人の人間から言

わせてもらうなら……」

「人は、あんな死に方をするために生まれたわけじゃない。皆、祝福されて生を受ける。」

それは地球の人も、宇宙の人も関係ない」

「ええ……」

「私は、いや、私たちはすでに血で手を染めてしまっている……。どんなに願っても、どんなに祈っても、昔も、そして、これからも……」

「人に恨まれなければならぬ……。仕方のない事だ。人は、光になれる。だが、人は何かのために犠牲をいとわぬ闇にもなれる」

「私は、闇だ……。すでにその手で人を数えられないほど殺めた」

「フィアさん……」

「きつと、これからも人の命を奪うのかもしれない……。だが、ルナは……。ルナだけは……」

「……あの子だけは……こちら側にはなつてほしくはない……」

「戦争のせいだ、こんな所で過ごさなければならぬ。だが、それは不幸だ……。子供にとつてそんなのは……」

「……でも……」

彼女の言葉を遮った。それ以上に……。子供にとつては、そんなこと以上に……。

「ムゲン……?」

「両親がいる。それだけでいいと思うんです……」

「それが、人を殺していたとしてもか……？」

「……こんな時、【戦争だから仕方ない】という言葉で大抵何とかなってしまう世界は……やっぱり狂ってますよ……」

「ああ……。こんなに辛いことはない……。私は、ルナに何を教えてあげられるだろう……。何を残していけるだろう……」

「それは、あなた自身が決めることです。俺には決められないですよ……」

「……そうだな」

少し考えた後、俺は言葉を繋いだ。

「でも、一つ言えるとするなら……。何かを残すため、何かを教えるために子供は存在しているわけじゃないですよ」

「子供は、純粹です。言葉を話せなくても、話せても、体のすべてを使ってあなたやクロノードを見て、何かを覚えてる」

「……俺は、両親というのは、時に子供の背中を押してあげたり、辛いときには傍にいてあげたり……」

「ただ、そこにいる。そこで確かにルナちゃんの両親として立っている。きつと……それだけで……それだけでいいんです」

何故か、父や母を思い出す。だが、不思議と悲しくはなかった。

「ムゲン……」

「両親がいらないからこそわかることです…。物心ついた時から、親がいらないなんて悲しすぎます……」

「……そうだな。お前は、辛い思いも、立ち止まることもあつただろうに……」

「ええ。現に、今も苦しんで、辛くて、恐怖で立ち止まることだつてあります…。でも」

「それを変えてくれたのは、今まで出会ってきた沢山の人たちです」

「家族を失つて、軍に入りたての俺を、家族と言つてくれた人や」

「俺は俺であるということを教えてくれた人……」

「記憶を失い、ジオンなのに連邦だった俺に手を差し伸べてくれた大切な家族」

「記憶のない俺に、理想や夢を教えてくれた人」

「自惚れた俺に冷たい現実を突きつけ、そして、最後は和解して……約束を交わしてくれた人」

「人は、絶対に一人では生きていけない。人に唯一在る力、【心】を教えてくれた人」

「辛いときに、ずっと片時も離れず傍にいてくれた最愛の人……」

「そして、苦しくて、立ち止まりそうなときに、優しく抱きしめ、撫でてくれた姉のような存在……」

「みんな、皆が背中を押してくれた。知らないうちに、俺は沢山の人の意志を、希望を背負って生きている」

「でも、その感覚は……嫌いじゃない。人は、自分自身を残したくて、誰かに知ってもらいたくて、存在を残す……」

「それが、いい形でも、悪い形だとしても……」

「そんな過去があるから、今は前を向ける……。なんて……ね」

軽く微笑む。彼女はその話を聞いて、言葉を返した。

「お前は……強いな」

「俺は強くないですよ。苦しんだり、辛い思いをしたり、逃げたりしてしまう……。まだまだ弱い人間ですよ」

「いいや。それは人間として当たり前の行動だ。痛みで苦しんだり、人が死んで辛い思いをしたり、怖くて逃げだしたくなってしまう……。全部、人間である証だ」

「フィアさん……」

「私は、そんなに強い覚悟は無い……。私があるのは、ルナとクロノードのため……」

「それでいいんじゃないですか？」

「……そう、なのか……？」

「ええ。だって、家族を守りたいと思うのは、普通でしょう?」

「……………ふっ……! そうだな……! 普通だな……!」

「ええ。その想いがあるなら、それはもうすでにあなたには家族のために戦うという覚悟がある」

「そう……………だな」

「でしょう……?」

「……………ああ。私は家族のために戦う。…………ルナと、奴のためなら…………わたしは死んでもかまわ…………」

「それはダメだ」

俺は少し声を強くした。

「…………ムゲン……?」

「死んでも構わないなんて簡単に言わないで…………。失ったほうの気持ちも考えてほしい…………」

「ムゲン、お前…………」

俺は、顔を真っ赤にしながら言った。

「だ、だって…………もうあなたは、俺の姉ですから…………。俺にこんなに親しくしてくれて…………」

「ムゲン……………」

「だから、死んでもとか、命を投げ出すようなことは言わないで……。ファイア……姉さん……………」

「……………」

彼女は凄く驚いている……。

「軍人である以上、いつも死と隣り合わせなのは当然。でも、自ら命を投げ出すことはしちゃだめだ……。それは、人間がすることじゃない……」

「そうか……。そうだな。お前は賢いな……ムゲン」

彼女は俺の頭を優しく撫でる。その手は少しだけひんやりして、心地よかった。

「……………俺は……そんな」

「いい子だ。ルナも可愛いが、お前も……可愛い。本当の弟みたいだよ……」

その時の彼女の笑顔は、今まで見たどんなものよりも輝いて見えた。

「……………そ、そんなに撫でないでください……」

「ん？もつと撫でてほしいって？しよーがないなあ！ほーら！たくさん撫でてやるぞー

!!」

「う、うわあああ！や、やめてえええ!!」

そんなふざけあう時間が楽しくて……。

「……ムゲン」

「は、はい……？」

なでなで地獄から解放され、肩で息をする俺に彼女は続けた。

「……わたしにも、戦う理由ができた……。お前のおかげだよ」

「……俺は何もしてないです。変わったのはあなたですよ」

「そうだとしても……。ありがとう」

「ど、どういたしまして……」

「さ、そろそろ時間だろう。行くか！」

「……はい!!」

俺は、冷めたコーヒーを飲み干す。

そして、席を立ち、食堂を後にする。

「あ、そうだ。ムゲン」

「なんです？」

格納庫で別れようとしたときの事だった。

「ほら、これ持っていけ」

彼女は、自身の髪を束ねていたリボンを解き、俺に手渡した。

「……………急にどうしたんですか……………?ま、まさか……………」

「いや、死ぬかもしれないから自分の持ち物を託すとかそういう展開のやつじゃない」

「じゃあなんで……………」

「おまじないだ。コイツをパイロットスーツの上から腕に巻き付けておけ」

「な、なんの効果が……………」

「効果なんてないさ。そうだな……………あるなら……………」

「全員が生きて帰ってこれるおまじない……………だろうか」

「……………帰ってきましようね。絶対」

「もちろんだ。私も、お前も……………今度は無事に、な」

そう言った後、彼女は先に機体に乗った。

俺は、彼女のリボンを腕に巻いた。なんだか、少しだけ勇気が湧いてくる……………。

機体に取り込み、システムを起動させる。

悲劇を繰り返すわけにはいかない。誰も、あんな死に方を望んではいない……………。そのためテイターズを抜けたのだから。

「ムゲン・クロスフォード、ピックアップ、出るぞ!!」

戦場へと出る。たった一つの望みにかけて。

「全機および全クルーに通達する！私は第00特務試験MS隊旗艦グロリアス艦長。
ジェイク・マディソンだ」

「彼らは今、今再び30バンチ事件を繰り返そうとしている！それは……それだけは
絶対にしてはならない!!」

「人の歴史は、繰り返さないために学ぶものなのだ!!ならば、この行為を、断じて許す
わけにはいかん!!」

「全員には迷惑をかける。だが、一つだけ言わせてほしい」

俺たちは、俺を中心に、機体が集まる。

「全員。俺に……力を貸してくれ!」

彼の強い想いが伝わった。

「俺も……一つ言わせてほしい。構わないな?艦長」

「ああ。許可しよう」

「……皆聞いてくれ」

「俺たちは、人を殺してきたかもしれない。その償いとは言わない」

「それでも、二度と繰り返す気持ちがないのなら……。ティターンズのような奴らを許
しておくわけにはいかない!!」

「だから、皆……。俺についてきてくれ!!!」

ピクシーの拳を強く握る。その手に、緑のザクが手を乗せた。

「……!」

「今更かつこつけるなよ? もう、皆の気持ちは同じだ。やろう。ムゲン」

それに続けて、白と黒のザクも手を乗せる。

「そーいうことっ! 俺たちはもう敵じゃない。もつとわるーいやつがいるんだからな。さ、止めてやろうぜ?」

「そうだ。俺たちは過去を繰り返すために生きているんじゃない。そうだろう? ムゲン」

さらに、リゼルの手、サインスナイパーの手も重なる。

「もう、一人で生きる必要はない。俺たちは、手を取って戦えるんだ。それを教えてくれたのは……お前だ」

「早くテイターズを倒して、お茶でもしましょう。あ、お菓子はムゲンさんが買ってくださいますね?」

ガンキャノンの手、ジムコマンドの手。そして、銀色のガンダムの手が重なる。

「あなたに賭けてみたくなりました。私も、彼らを到底許すことが出来ない。さあ、や

りましょう。今度は……共に！」

「俺は傭兵だ。だが……この甘々な家族には、そんなもの関係なかったな。さあムゲン。俺も戦おう……共にな」

「家族の意志は、みな同じだ。もう迷うことも、怖がる必要もない……。逃げることも……。さあ、行こうか？ムゲン」

皆が俺の手に重ねて……。

「ああ……。行こう。悲劇は……繰り返させない……!!」

「これより、サイド2への毒ガス作戦を阻止する!!!全機、作戦開始!!!……生きろよ!」
ジエイク艦長が叫ぶ。

それに合わせ、全員がサイド2宙域へ向かった。

サイド2付近まで近づくと、毒ガスのG3を設置しているところであった。

「カカサ!G3は何基ある!」

「そうだな。こんだけのコロニーだ……おおよそだが10はあって間違いない」
「随分多いな……。止められるのか……!?!」

「止められるんじゃない。止めるんだろ?」

「…ああ。止めるぞ！全機散開！道夜、牽引けんいんを頼む！」

「了解だ。掴まれ」

リゼルは変形すると、俺の近くへ。道夜の機体につかまる。

「よし、行ける」

「では、行くぞ!!」

勢いよく突き進む。G3を目指して…。

「各個でG3を撃破してくれ!!」

「敵もさすがに気づいたか……。だが、リゼルの機動性なら抜けれる!!」

レーダーでは一気にこちらに攻寄る敵。

「行けるのか…!?!」

「行けるさ！舐めるなよ…!!」

ものすごい速さで敵の横をすり抜ける。

正面に敵。

「道夜!!」

「突っ込む！掴まってろ!!」

俺は機体を動かし、道夜の機体にしっかり掴まった。

道夜は敵を正面から吹き飛ばし、敵の前線を抜ける。

「よし、ムゲン！先にいけ!!」

「道夜!?!」

「背後の敵は、俺がやろう。だから、前は頼むぞ!」

「……ああ。わかった」

先を進むと、コロニー外面に1基のG3を発見。

それを守るように周囲の敵。今は一秒も無駄にはできない。

ダガーを引き抜き投げつける。左側の敵に直撃。

続けて右手でマシンガンを乱射。近距離まで近づきスモークバルカンを放った後、

コックピットを銃弾が撃ち抜いた。

G3へめがけ、ただひたすら駆け抜ける。

さらに迫る1機を切り抜けながら撃墜。

G3の近くまで来る。

「こんなものがあるから……! 未来は……! いつまでも変わらない!!」

憎しみがこもったその一撃が、G3を切り裂く。

外面から蹴り飛ばし、コロニーに被害がない位置でマシンガンを放ち爆発させる。

「こちらムゲン! 1基やった!」

「こちらカカサ。俺も1基やった」

残りはこれで8……。時間はあとどれくらいなんだ……!?

「全機、聞いてくれ!このG3は時限式だ!!時間はあと……5分……!!」

カカサが叫んだ。あと五分……。間に合わせなければ!

「くそっ!こちらクロノード!!目の前にG3があるが、敵が多い!くっ!!」

「私が狙います。敵を遠ざけてください」

ユーリが応答。

「こちら、エトワールです。1基墜としました。予測ですが、あと7基はそれぞれ置く

場所が似ているかと」

「予想通りなら、ムゲン隊長の近くに1基あります。できますか?」

「出来る出来ないじゃない。やるんだ!」

「そうですか。では、任せます。私も次に移ります」

彼との通信を終え、次の1基を探す。

彼の言う通り、近くに1基置いてある。

幸いどこにも敵は見当たらない。

「よし、くっくっで……!」

ダガーを引き抜こうとしたとき、何かを感じた。おぞましいほどの殺気。下からだ。

「くっ!？」

回避する。続けて右からの射撃。

「この感じー！」

回避。さらに左。

回避しながらその位置へナイフを投げる。

遠くで小さい爆発。やはり……。

「やっぱり君かあ……ムゲン……。フフフ……。会いたかったよ……。もつとも、君はそう

でもないだろうけど?」

「ゼロ……邪魔をするな!!!」

ガンダムは間合いを詰め、俺に斬りかかる。サーベルをダガーで受ける。

「邪魔……? フフフ……。そのために僕は来たんだよ? 当たり前じゃないか」

「……ニュータイプならばなぜティターンズの味方をする!？」

「ニュータイプだからとか、そういうのは関係ないだろう?」

「なっ……!」

「僕は、僕なりに選んでここにいるんだよ? 他人の言葉で動く君のような存在じゃな

い」

「……俺は……」

「君はいつも人の言葉で動いて、ただ命令に従って生きている」

「……………」

昔はそうだった。誰かの言葉で動き、自らの意志で動かなかった。グレイ……。君の理想にすがって……………。

「見なくても分かる。君は、苦勞もせず、ただ楽な道を歩いている」

ああ。彼にも言われた言葉だ。楽に生きていた。……………それでも

「俺は……………」

「だから、君には僕の気持ちも、誰の理解も出来はしない」

そうかもしれない。それでも……………。

「分かりはしない」

「何……………?」

「俺の気持ちも、お前には分かりはしない」

「誰一人にも手を差し伸べてもらえなかったお前には……………」

「……………」

「確かに、俺は苦勞もせず、楽な道を歩いていたかもしれない。命令に従っているだけだったかもしれない……………」

「それでも今は、これからは、俺の……………」

彼女のリボンが、俺に言葉を紡がせた。

「俺の【意志】で!!!戦うと……!守ると決めたんだ!!!」

「俺には、何もなければかもしれない!それでも、人間は……人は!手を取って歩いていける!!!」

ダガーで奴を吹き飛ばす。

「ぐっ……!!!」

「もう、俺は屈するわけにはいかない。立ち止まるわけにはいかない……。グレイと……」
ナイフを投げつける。それを腕で吹き飛ばすガンダム。

その腕をダガーで切り落とす。

「イーサンと!!!」

蹴り飛ばし、続けて刀を引き抜く。

「そして……家族が……いるんだ!!!」

「だから、止まらない……!守ると約束したから……!」

一気に間合いを詰め、受け身を取れなかったガンダムの首を切り落とした。

「うぐうう!!!まだだああ!!!ムゲエエン!!!」

ガンダムは再び立ち上がり、ファンネルを射出。

「俺は……ここから一步も退かない……!!後ろには……俺の背中を守る仲間が……!」

「必死に無事を祈る彼女がいるんだああああ!!!」

右。ナイフを投げつけ、ビームが発射される前に撃墜。

続けて、下。軽々回避。さらに反撃にマシンガンで撃墜。

後ろ。ビームが放たれるであろう場所に刀を一気に振りぬく。

ビームは真つ二つになり、俺の機体に触れることはなかった。

「くっ!!やはり君は……!!」

「もう、俺は悲しみも、苦しみも……。痛みも、逃げることも……。しなくていい」

「背中を押してくれる人がいる!!」

「フッフ……そうか。君も……ニュータイプだったんだね……」

「終わりにしよう……これで……」

刀を構え、ガンダムの胴体を切り落とした。

「ぐうううう!!……君は、勘違いしているよ」

「何……?!」

「まだ……僕は終わってない……フッフ……」

「何を……!!」

背後からの殺気。まずい、回避に追いつかない……!!

「これで……さようならだよ、ムゲン」

ビームの一射。

「くっ!!」

たとえやられるとしても、あのG3を壊さずに死ねるものか……!

俺は、マシンガンでG3目掛けて放つ。

せめて、あれだけでも……!!!

「おちろおおおおお!!」

銃弾はG3に直撃。爆発する。

「しまっ……!!」

一射はそのタイミングで機体のスラストを破壊。

ブースターが使えなくなった。

「くっ!」

その一射の後、ゼロが駆るガンダムは動かなくなる。

ただ宙に浮くガンダム。もう、何も言うことはなかった。

俺は、背を向け、離脱する。

後2分……。

「くそっ!!もう時間が……!!まだ6基あるってのに!!」

時間が無い。だが、ピクシーのスラスタは破損し、動かない。
そんなもどかしさと怒り。

「あああああ!!!動け!!動け!!動け!!動け!!動け!!動け!!ピクシー!!!駄目だ!!駄目なんだよ!!!」

「ここで動いてくれなきゃ……。また…俺たちみたいなのが……。生まれちゃうんだよ
おお!!!」

それでも機体は動かない。

「ムゲン……限界だ。離脱するんだ」

「ふざけるな!!!ユーリ!!G3を……!!!」

「無理です……射程外です……」

「駄目だ……駄目なんだ!!!もう……もう!!!」

本当に無力だ……。何もできずに……。

「ムゲン」

「……!!!」

「泣くな。1基沈めた」

「…ファイア……さん……」

「だが、これ以上は……無理だな…」

「そんな……!!!」

「……出来ることはやったんだ……」

「ぐううう!! 畜生……!!」

胸が張り裂けそうさ。

「離脱する……! つ……!? クロノード! お前何をしてるんだ!!」

「俺が、止める!!! まだ時間はある! 20秒あるなら……!!」

「クロノード!! 限界だ!! くっ……!! 敵が……!!」

「くそっ!! うああああ!!!」

「クロノード!？」

クロノードに何かあった。それだけは分かった。

「うあっ……!!」

「フィアさん!!!」

何かあったのは間違いない……それでも、動けなかった……。機体が……。

「……ム……ゲン……。クロノードを……」

「フィアさん……!! 何かあったんです!？」

「……お前も……クロノードも……いや……。みんな……」

「嘘だ! ふざけるな!!!」

「フィア!! なんで……なんで俺なんかを……!!! くっ……テイターンズどもがあああああ

あああああ!!!

彼の悲痛な叫びが響く。

「……………それで……………いいんだ」

「良く……………ないだろ…!!」

「なんで、なんでなんだよ!!! どうして……………!? どうして俺の大切な人は消えなければなら
ない?!」

「ムゲン!!彼らを回収した、グロリアスへ戻るぞ!!急げ!!!」

「あ、ああ…!!!」

大丈夫。間に合わせる。今度は……………俺が助けるから……………!!!

格納庫へ戻る。機体から飛び降りるように、そして彼女の機体へ走った。

彼女の機体はそこらじゅうに穴が開いていた。

「フィア……………さん……………!」

「あ……………あ……………ムゲンか…」

担架に乗せられた彼女。至る所に破片が刺さっている。

「……………ここで治療する。急いで」

医師のサムエルさんが道具を持って走ってくる。

「……………なあ、手を……………」

彼女は震える手を俺に差し出した。

「……………ああ」

彼女の手を握った。いつも冷たい彼女の手は、熱を持っていた…。

「ぐっ…!!うう!!」

痛みに苦しむ彼女。俺は必死に彼女の手を強く握った。

「ファイアさん…!!」

「我慢して！ムゲン、その手を離すなよ!!」

サムエルさんは必死に彼女を治療している。

「は、はい!!」

「ファイア!!」

クロノードが駆け寄る。彼も怪我をしていた。それなのに……………そんなの構うことな
く。

「おお……………。クロノードか……………。すまん……………」

「そんな事言うな…!!俺を……………俺を庇うことなんか…」

「……………体が動いたんだ。勝手に……………」

「ぐっ……………!!うう……………!!」

「泣くなよ……お前は……わたしの夫なんだから……」

「お前が居なきや、俺は何もできない……!!」

「…死にはしないさ……。だろ? ムゲン」

「えっ……」

「生きて……ルナを……お前を……見守らなきやいけないんだから……」

涙が零れた。ただ……苦しかった。

「ああ……。みんな、迷惑……。かけて……ごめん……。な」

周りには、心配して皆が駆け寄っている。

「迷惑じゃない……! みんなで、皆で歩いてきたんじやないか!!」

「ふふ……。クロノード……。お前……。大泣きしてるじやないか……」

「あ、当たり前だろ!? 俺を……。唯一俺を愛してくれた……。人なんだぞ!」

「……ああ……。そうだな……」

「うぐっ……。!! はあ……。はあ……」

至る所から血が噴き出す。見ているだけでも痛々しい。

「ファイアさん!!」

「な、なあ……。ムゲン」

「……な、なんですっ……!」

「ルナは……見てないな……?」

「……あたり……前でしょ……!!こんな姿見せられませんよ!!」

「……よかった……」

彼女は虚ろな瞳で天井を見つめた。そして……。

「………良いものだな………家族は………」

そして、静かに瞳を閉じた。

「………!!嘘だ………駄目だ!!ダメだ、ダメだダメだ!!!ファイアさん!!逝くな!!逝っちゃ

ダメなんだ!!!」

「ファイア……!!うう……!!お前ってやつは……。くそっ!!くそがあああ!!!」

クロノードは走って格納庫を出て行った。

「お、おい!クロノード!!!」

カカサはそれを追って出ていく。

「ルナちゃんはどうするんだよ!!!俺を見守るんじゃないのかよ!!!家族を置いていくのか

よ!!!」

「………うるさい。眠れないだろう……」

肩で息する俺に、そんな言葉を言う彼女。

「えっ……………」

生きていた……………？拍子抜けだった。だが、その反面嬉しさがあつた。

「疲れたんだ……………。少し……………眠らせてくれ」

「……………ファイアさん……………」

「なあ、ムゲン……………」

「……………なんです……………？」

「次起こしてくれるなら……………できれば、〔虹〕が輝いて、希望に溢れているときに起きたい……………」

「……………出来るだけ、頑張るよ……………。姉さん」

「嬉しいねえ……………。クロノードの事も、頼んだぞ……………私の……………弟」

「彼女はそれから喋らなくなった。だが、息はある……………。生きているんだ……………。本当にそれだけが救いだつた……………」

「よし、治療は終わった。医務室に運ぶ。手伝ってくれ」

「彼女を医務室へ連れて、俺と道夜は静かに眠る彼女を運びながら話した。

「……………また……………繰り返ししてしまった……………。彼女の犠牲も……………」

「こんな言葉で片付けたくはないが……………、言えるとするなら……………」

「……【戦争だから仕方がない】んだ……。仕方が……。ううっ!!!」

道夜も泣いていた。彼が涙を流すのを見たのは……。これが初めてだった。

「……俺たちは……。良くやったさ……」

「くっ……。!!うう……!」

悔しかったのだろうか……。道夜は声を堪えながら泣いた。

彼女を医務室まで連れ、ベッドへと寝かせる。

道夜はそのあと何も言わずに立ち去った。

「……サムエルさん……」

「なんだい? ムゲン中尉」

「……彼女……」

その言葉を言い切る前に、彼は遮る。

「彼女は、生きている。だが、今は……。いや、いつ目が覚めるかは分からない。それこそ、

もう二度と目が覚めることはないかもしれない……」

「そんな……!!」

「だが、それは彼女次第だ」

「ファイアさん……。次第……」

俺は彼女の顔を見つめる。静かに眠っている……。

「……………彼女は、良く戦っていた。そして、年長者としての役目を果たそうとしていた」
「……………」

「それは、君が一番よくわかっているはずだ」

「はい……………」

「いいかい？ムゲン君」

「これは、誰も悪くない……………」

「悪いのは……………テイターンズです」

「いいや。違う」

彼は冷静に言い放った。俺は、それに腹が立った。……………じゃあ何が悪いんだ……………。

「じゃあ、何が悪いんだよ!!!彼女を、こんなにしたのは奴らだ!!!」

「悪いのは、人間じゃない……………。戦争そのものが悪いんだ」

「……………でも、俺は納得がいかない……………!命をこんな簡単に奪っていいなんて……………!!」

「……………残念だが、それは君が言える立場じゃない。それは、わかるね？」

「くっ……………!!」

「お互い、家族というものがいて、それを失った人もいる。それは君も同じ。だが、彼らとてそれは同じだ」

「……………」

「争いが起きて、そして大切な人を失った。そして、自らの恨み、私情で軍隊に入る」
「全て、戦争というものがあるせいなんだ」

「……じゃあ、俺は……俺たちはこの怒りをどこへぶつければいいんですか……!」

「…怒りは、ぶつけるだけが能じゃないはずだ」

「え……?」

「言葉は、人を幸せにすることができるとする反面、使い方を間違えれば、時として人を傷つけることだってある」

「……」

「結局…、この世に存在するモノをどう扱うか、扱う人次第になるんだ」

「過去、原子力という核を使った機能があつた。今でも使われているところもあるのかはわからんが」

「あれは元々、発電や、人々のより良い世界のために作られたシステムだ」

「……」

「だが、ある時、その方法とは別の使い方をした人が出てきた。そう、戦争に利用すること」

「……軍事的な……」

「そうだ。核は軍事的に強い力を持った。かつては、核抑止という言葉もあつたのだから」

らな」

聞いたことはある……。互いに核を持つことで、攻撃したら報復する。お互いが自国に核を撃たれるのは嫌だからってシステム…だった気がする…。

「最近の話で言えば……。まあ、ニュータイプというものが現実味があるだろうか？」

「ニュータイプ……」

「ああ。彼らは洞察力、認識力の拡大による精神的な共感、そして肉体的な体感によつて隣人をも大切にするのでできる人間だと云われている」

「だが、考え方を変えてみれば、こうも捉えられる。洞察力や認識力が高いのなら、それは少し先の未来を予兆出来る、と」

「それならば、軍事的に利用すれば強力な兵士になる……。そう考えた人がいたのか、それとも成り行きかはわからない」

「だが、道夜や、君のようなパイロットを作るまでに至る。普通の人間をニュータイプに改造する……」

「……………それは…とても悲しい事です」

「ああ。結局は、モノは使い方次第。その人次第でモノだつて、人だつて変わる」

「……………」

「君の怒りは十分わかる。ならば、その怒りは、未来を繋ぐために使えばいい」

「どうすれば……」

「それは、君が見つけることだ。私には私の未来がある。そして、君の未来は君だけのものだ」

「そうですね……」

「ああ。だから、それでも何かを恨みたいのなら……人ではなく、戦争を恨むんだ」

「人を関係なく殺し、必要のない兵器までを造り出し、そして過去の歴史を繰り返させる……あのシステムのようなものを……」

「……」

「さて、少し話が長くなってしまったね。彼女は私が様子を見ているから、ゆっくり休みなさい」

「でも……」

「倒れてもらっては困るんだよ。だから、ゆっくり休むんだ」

「………はい……」

俺は渋々病室を出た。

そのあと、俺は部屋に戻る。

「………」

戦争を恨め……。その言葉は、今の俺には苦でしかなかった。
急に響くノックの音。

「……………開いてるよ」

もう、立つことすら疲れた。

扉が開く。立っていたのはリナだったが、様子がおかしい。

「…………ど、どうしたの…？リナ…………」

「うっ…!!うう!!えぐっ!!」

彼女は子供のように泣いている。俺は、立ち上がって彼女を抱える。

「ど、どうしたんだよ…？なんでそんな泣いてるんだ…………」

「フィアさんが…………。うう…!!」

……………みんな気にしていたんだろう。あの道夜も…。ユーリでさえも…。

俺に……………出来ることを。

「とりあえず入ろう…。話は聞くからさ」

「うんっ!!うん…!!」

彼女は泣きながら俺の部屋へと入った。

俺はベッドに腰かけ、彼女へ手を広げる。

「おいで。抱きしめてあげるから」

「…………!!」

彼女は顔を濡らしながら、こちらを見た。

そして、ゆっくり近づき、俺の胸に顔を埋めた。

「うう!!うぐつ!えぐう!!うわあああああん!!!」

「ああ…。辛かったな…。悲しかったな……………」

「ファイアさんが…………!!うう!!!」

「…………死んでない。生きているよ…」

「でも…………でもっ!!!」

全て聞いたようだ…。いつ目が覚めるかわからないことも…。

「…………リナ、泣かないで…。ファイアさんも、それを望んではいけないよ」

「うぐつ…………!!ううう!!!何もできなかつた!!!私は…………!!」

「俺もだ…………。無力だった」

俺は彼女の背中を優しく撫でる。

「こんな別れ…………嫌だよ…………!!!」

「ああ。こんな別れ方、あつていいはずがない」

「ううっ!!!」

彼女はそれだけ信頼されていた。皆が、彼女を想った。

彼女の犠牲は、無駄にはしない。

それが、今俺にできる最善の事…。

軍人として言うなら、必要な犠牲なのかもしれない。

でも、俺は…人間だ。

「うつ……。ぐすつ……」

「リナ」

「な、に…?」

「俺たちは、彼女の犠牲を無駄にはできない。彼女の意志を、ここで止めるわけにはいかない」

「だから、皆で背負うんだ。彼女の意志を…」

「……………」

「繰り返すこの戦いを、もう二度と繰り返させないために……」

「そう、だね……。私も、自分にできることをしないと……」

「そうだ。俺たちは、希望を繋いで生きている」

「繋がれた意志を、ここで止めてはいけない…」

「だから今は、戦うんだ」

「……ムゲン……」

「大丈夫。お前は、俺が守る」

「……私も……あなたを守る……」

「……それでいい。互いに……助け合おう」

俺は、彼女を強く抱きしめる。

そして、俺たちは共に夜を過ごした。

俺に今できることは、彼女を慰めることだから……。

人が、戦争を繰り返すのだろうか。…それとも、歴史が戦争を繰り返させるのだろうか……。

歴史は、二度と繰り返さないためにあるものなはずなのに……。

もし、後者ならば……それは皮肉としか言いようがない……。

だが、今わかっていることは……。俺たちは、前に進むしかないということ。

失っても、振り返ることを許されず、立ち止まることでさえ……。

人の繋がりは、そうやって紡がれる…。

35 完

36: Hope and the future

宇宙世紀0087・12・14

テイターンズ、サイド2・21パンチをG3、毒ガス攻撃。住民は全員死亡

0088・01・18

アクシズ、ゼダンの門（旧ア・バオア・クー）を破壊。グリプス2をも占拠し、テイターンズの拠点を奪う。アクシズはグラナダへ向かう落着起動へ

0088・01・25

アクシズとテイターンズが決裂。ジャミトフ・ハイマン総帥暗殺。以後、パプティマス・シロツコがテイターンズを掌握。

0088・02・02

エウーゴ、メールシユトローム作戦発動。艦隊戦によりグリプス2を奪回。アクシズの軌道変更に成功

0088・02・06

MRX-010サイコ・ガンダムMk-II、80%の状態で出撃

0088・02・20

グリプスを巡るエウーゴ、アクシズ、ティターンズ、三つ巴の艦隊戦
エウーゴ第二艦グロリアス、グリプス2付近へ。戦闘開始。

俺たちは、この戦いを終わらせる使命がある。

失ってきた人のために……。

そして、大切な人のために……。

「各員に告ぐ。これより我が第00特務試験MS隊は、グリプス2の防衛作戦へ参加する。敵はかつてないほどの強大な数だ」

「加えてエース揃いだ。しかし、こちらも負けてはいない。その誇りを忘れるな!!」

「我々が成さねばならぬこと……。この戦争はすでに終局へ向かいつつある!!」

「これで終わりにするのだ!!!もう、悲しみを広げてはならない!!!」

艦長が言い終える。

既に格納庫で準備していた俺は、機体に乗り込む。

「……………ピクシー。行こう。もう何も言わないさ」

システムを起動させる。

俺個人も……決着をつける時だ。

「ムゲン。いいか？」

道夜からの無線。

「なんだ？」

「終わらせるぞ。この戦いを」

「……無論だ。俺個人の決着もつけさせてもらおう」

「……生き残るぞ。この戦い」

「ああ」

彼との通信を終える。

「ムゲン機、発進どうぞ。どうか……無事に帰還を」

「ああ。……ムゲン・クロスフォード、ピクシー行くぞ!!!」

カタパルトから射出される。

戦場へ出ると、そこは既に戦いが始まっている。クワトロ大尉たちも……どこかで戦っているのだろうか…。

流星にこちらにも気づいた敵が、既に何機かこちらへ迫る。

目視、敵影4機。

「道夜！やるぞ！！」

「了解した。前へ！」

「無論だ……！！」

ダガーを抜き、一気に攻め寄る。

道夜の射撃で誘導された敵が、丁度俺の正面へ。

「待ってたぜ！落ちろ！！」

素早く切り抜け。敵を真つ二つに。

「道夜！！」

2機にマシンガンを放つ。当てるつもりはない。

マシンガンを回避しながらこちらへと迫る2機。

「ああ。そこだなー！」

道夜はサブアームに装備したバズーカを放つ。

その弾丸が2機をまとめて消し去った。

道夜の背後へ敵が迫る。

「道夜！背後だ！！」

「くっ！！」

反応が一步遅れた。まずい……！！

道夜を襲うはずの一撃は、圧縮されたビームがそれを遮った。

「すまん。助かったぞクロノード」

「……次に行く。そっちは頼むぞ！」

「ああ。クロノード。お前も無事だな」

「当たり前だ。生きて帰ろう……」

そう言つて、彼は離れていく。

「よし、俺たちも散開して敵を叩こう」

「ああ。それじゃー！」

俺は機体を動かし、移動する。

0088. 02. 21

アーガマ、戦闘宙域に到着。ラーディッシュ轟沈

グリプスの近くまで来ただろうか。進みながら敵を落としていると、あの感覚が蘇る。

「！」

右……。続けて下と左。さらに上と右……。

当たらないように回避。この攻撃は間違いない……。

「ゼロ……!!!」

「フフフ……ムゲン……。君も僕を感じたんだね？」

互いにサーベルとダガーがぶつかり合う。

「いい加減しつこいぞ!!」

「いいや？これは僕が望んでやってるわけじゃない」

「何……？」

「ニュータイプ同士は引き合う運命なのさ……フフフ……」

「俺はニュータイプなんかじゃない!!」

「いいや？君は……ニュータイプだ。その感覚……間違いないよ」

「……減らず口を!!」

蹴り飛ばし、間合いを取る。ファンネルが回避する位置の背後に来る……!?

すかさず間合いを別の位置に取り、回避。

「ほら、君はこの攻撃が避けられている……。それこそニュータイプの証だ」

「ニュータイプだろうがなかるうが……!!お前を倒す!!」

「フフフ！いいよ！僕を殺してみろ!!」

ダガーとサーベルがぶつかっては、間合いを取り合い、再びぶつかる。

「ちっ!!」

間合いを取り、ナイフを投げる。

それをガンダムはロングビームライフルで撃ち落とす。

「無駄だよ! 僕にはそんな小細工さ!!」

「それでも!!」

ナイフを2本投げつけ、素早く相手の懐へ。

「来ると思った! そこだ!!」

ガンダムの肩からミサイルが飛び出す。

「くっ!」

素早く移動し、誘導ミサイルを回避する。

「流石だねえ……あれを回避できるなんて」

「そこだああ!!」

ダガーを横薙ぎ。それを受け止めるサーベル。左腕でダガーを抜き、受け止めた腕に突き刺そうとするが

「甘いよ!!」

ガンダムは片方の腕でそれを阻止する。

「つよい……!!」

「さあ。楽しもう！戦いを……人殺しを!!」

「……………」

確かに……彼は強い……。だが、あきらかに戦いを楽しんでいる……。そんなことは

……!!

「うぐうう……うああおおおお!!」

ダガーの持つ右腕に力が入る。

こつちが勝っている……。

「ああおおおお!!」

「くっ!!さすがに……やるね……!」

互いに間合いを取りながら攻撃。

互いを掠め、過ぎていく。

「これなら……!どうだ!!」

ガトリングをシールドから放ち、続けてミサイルを発射してくる。

「ちっ……!!」

流石に回避しきれない……!!

ミサイルが1発、機体に被弾する。

「ぐあ!!」

「これで終わりい!!」

隙を見せた俺に、トドメのビームキャノンを放ってくる。

「く…!!」

態勢を立て直す時間など…!!

しかし、それは止められた。フアングの一撃によつて。

彼は俺と彼の間のビーム目掛けて、バズーカを放つ。

バズーカを撃ち抜いたビームは減衰し、俺を貫くには至らなかつた。

「ムゲン!!そっちは頼んだぞー!」

そう叫び、フアングは背を向けた。

「……。 そうだな……。しつかりしないと…」

「フフフ……。そうでなければ……。さあ、やろうじゃないか」

「……。お前の……。戦いを楽しむ姿……。俺は……。昔の自分を見ているようで……。腹が立つ……」

「!」

「だからなんなんだい?」

「…なおさら、お前を倒す理由ができた……。それだけだ」

「なら、やってみろ!!!」

ビームキャノンを放つ。

それをダガーを引き抜き、真つ二つに。

「ビームを斬るとは……。君は凄い……。フフフ…」

「うおおお!!!」

一気に間合いを詰める。

奴はニュータイプ。それなら、こいつが読めない動きを…!!

「そこだああ!!!」

俺は、ガンダム本体ではなく、ガンダムの持つロングビームライフル目掛け、弧を描くように回転しながら切り落とす。

「何っ!?!」

「次だ!!」

素早く旋回。ナイフを肩に位置するミサイルコンテナとロケットランチャーコンテナめがけて投げる。

対応が遅れ、二つの武装が破壊。

「くっ!!ふざけるなあああ!!!」

ファンネルを射出してくる。

右……。次は上と下。後は……。全方位……。違う……。どこだ?!

対応が遅れる。

ビームが右足を、続いて左肩を撃ち抜く。

「があっ……!!くそっ!!」

さらに追い打ちでビームは腹部、コックピット近くを掠め、機体の左目を撃ち抜き、左腕を貫いた。

機内でアラートが鳴り響く。

「くっ……!!」

「今度こそ終わりだよ。君は……!!」

サーベルを構えたガンダム。いや、まだだ……諦められない……!!

「俺は絶対に……諦めるわけにはいかない……!!」

『そうだ……』

「……!!」

彼女の声だった。

『諦めるな。お前はまだ負けてない……』

「……ああ。わかってるよ……」

『……私は、いつでもお前のそばにいる。その、腕に巻いたりボンが……お前と私を【繋ぐ】』

「……わかります。ファイアさんの勇氣や、想いが……ピクシーに……」

『私だけじゃない。リナも……そして、お前の家族も……』

「……はい」

『目を開け……。そして、前を向け。ムゲン・クロスフォード。お前は……私の最高の弟だ……!!』

「……………」

『怖がるな。お前は覚悟を決めている。さあ、行くぞ』

体が勝手に動いて、操縦桿そうじゆうかんを握る。

「……はい」

その一振りを回避。

「なにっ!？」

「ならば……ファンネル!!!」

『ムゲン。左へ、続いて一度背後に下がれ。そして、そのあとすぐにダガーを投げろ。いか、コックピットへだ!』

「はい!」

機体を動かす。左へ。右に通り過ぎるビーム。

続いて一度身を引く。正面を真下にビームが。その瞬間、ダガーを相手のコックピット目掛け投げる。

「くっ!!」

『続いて一気に間合いを詰める。まだ、左腕は動くな?』

「……わかつてます。アレでしよう?」

一気に間合いを詰め、スモークバルカンを放ち、鞆を触る。

撃ちだされた刀を持ち、力を込めて振りぬいた。

「でやあああああ!!」

その一撃は、ビームキャノンを切り裂いた。

「まだまだああああ!!」

反撃に左腕が破壊される。

「次は……左だ!!」

続いて左へ避け、敵の翼を切り落とす。

「逃がすものかあ!!」

ファンネルが右足を撃ち抜く。

「ぐおおお!!」

背後のファンネルを振り向き切り落とす。

右腕の刀を構えなおし、続けて相手の左足を切り落とす。

フアンネルが刀を吹き飛ばす。

「まだだ………！」

『私達「俺達はまだ終わってない!!!」』

ナイフを持ち、ガンダムの右目を刺す。

「ムゲンクロスフォードオオオオオオオオオオオ!!!」

「ゼロ!!!お前は無に帰れえええええええ!!!」

互いの拳がぶつかり合う。こちらの力が勝った。相手の左腕がピクシーの拳で破壊される。

「まだまだああああ!!!」

「ぬおおおお!!!」

頭部と頭部が激しくぶつかり合う。そのたびにモニターが消えかける。

その勢いでお互いに機体が吹き飛ぶ。

「ぐっあ……!!!」

「がっ……!!!くっ!!!」

衝撃でヘルメットのガラスが割れる。

その破片で左目から血が流れる。

「ム……………ゲ……………ン……………!!! うおおおおお!!!」
 ガンダムが一気に迫る。

「……………ゼロオオオオオオオオオオ!!!」
 こちらも負けじと迫る。

拳に……………最後の力を込めた。

「ぬああああ!!!」

「あああああ!!!」

互いの……………最後の力がぶつかり合う。

「ニュータイプだつてなんだつていい……………! 俺に……………! 俺にこいつに勝てる力を……………!!!」

「ここで死ぬのは……………君だあああああ!!!」

力が……………劣っている……………!

『ムゲン!!! 男の根性……………見せてやれ!!! ヤツとは背負ってる重さが違うつてことを!!!』

「……………ぐっ!!!」

「たのむ……………ピクシー……………!! 俺に…………… [奇跡] つてのを見せてくれえええええ!!!」

その時、ピクシーから虹の光が一瞬発せられた。その光が、敵を飲み込む。

「くっ!!! なんだ!?!」

勢いが弱まる。もう今しかない。

「いっけええええええええええ!!!」

最後の力を込め、拳を突き出した。

拳は、ヤツの右腕を打ち砕きながら、敵のコックピットを殴りつけた。

「うぐうううう!!!」

その勢いでヤツは吹き飛ぶ。

その隙に刀を持ち直し、一気に詰め寄る。

「これで……！終わりだあああああ!!!」

刀を振り下ろす。今度は手ごたえがあった。

機体は両断される。

「……………は……………は……………。すごいよ……………き……………み……………は……………」

宙に浮かぶガンダムからの声。

「……………はあ……………はあ……………!!!」

「ぼくの……………まけ……………だ……………」

「お前は……………ニュータイプなはずだ。なら、何故……………地球に残ろうとする彼らの味方をしたんだ……………!」

「…………それは……。きぼうが……。あると……。しんじたかったんだ……。か
はっ……………」

「希望……………」

「かれらも……………まだ……………くさりきつてないと……………しんじたかった……………」
「……たつたそれだけの理由で!? 虐殺を……!」

「うん……………。ゆるされないことは……………りかいしてる……………」

「……………」

俺は許せなかった……………。そんな理由で……………人を殺すなんて……………。

「でも……………ね……………。ニュータイプがさ……………ちきゆうにすむひとを……………じ
んるいを……………しんじなくて……………どうするの……………さ……………」

「…!!」

「かわらないと……………わかっていながら……………。それでも……………つて……………さ
けばなきや、ささ……………」

「こんな時になつて……………なんでだよ……………! 一人で背負いやがつて!!!」

何故だか涙が零れた。

「きみは……………やさしい……………。てきなのに……………ないてくれるんだ……………」

「……………ないてない……………!」

「……………ふふ……………でも……………ぼくは……………やっとすぐわれる……………おなじ……………
 ニュータイプをみつけたから……………」

「俺は……………」

「うん。……………かんぜんじゃない……………。でも、きみにも……………このじんるいすべて
 に……………その【可能性】はあつて……………」

「……………でも、きみは……………その資質が……………開花しかけてた……………」

「……………」

「でも……………。きみはそれを消されてしまった……………。過剰な薬物投与……………身体の
 強制的な調整で……………」

「……………人工のニュータイプを作るのに……………ほんとうのニュータイプを使ってし
 まつて……………その結果その資質をけされる……………。はは……………じつに……………皮肉だ……………」

「……………俺は……………」

「きみは……………これいじょうぼくのはなしをきかないでいい……………。きようかんしてし
 まうだろうから……………。そして、きみはぼくに【情】をめばえさせてしまう……………」

「そしたら……………わかれがづらいだろう……………?」

「……………!!!」

「もしかしたら……………ぼくたちは……………ちがうかたちであえてたら……………【分かり合え

た」……かもね……」

「ニュータイプが持つ……本来の力……。共感し、隣人でさえも大切にできる力……」

「うん……。わかってるじゃないか……。でも……」

「きみは……【無限】で……。ぼくは【零】……。けつきよく……。まじわることは
ない……」

「ふざけるな！ だったら、【零】がなければ【無限】も！ いないんだ！！ 君は必要だったんだ！！」

「ひつよう……。か……。はじめていわれた……。そのことば……」

「……【暖かいね】……。その言葉……」

その言葉を最後に、ガンダムは俺の目の前で爆散した。その光は……。グレイと同じ光……。暖かかったんだ……。

「くっ……。！！ 結局、お前も変えたかったんじゃないか……。！！ 人間が好きだったんじゃないか！！」

どうして……。こんな最期を迎えなければならぬんだ……。

戦争は……。どうして、人を奪う……？

「……………」

俺は確かにこの目で見た。

乙ガンダムが、巨大な機体を貫く姿を……。

「動け！ジオ！何故動かん!？」

「うおおおおお!!！」

「女たちの所へ帰るんだ!!！」

「お、女だと……？ぬあああああ!!!」

「……………」

カミーユも……自身の決着をつけたんだな……。

俺は一足先に帰還。機体から降りる。

「ムゲン!!!」

リナが駆け寄ってくる。

「……ただいま。……ごめんな。ピクシーがこんなになっちゃった……」

「いいの！また直せばいい……。でも、あなたは一人だけだから……」

「……………」

「おかえり……私の……大切な人」

彼女は俺を優しく抱きしめてくれた。

「……………」

「ごほんっ！お取込み中悪いが…リナ？」

トクナガさんが咳払いし、彼女を呼ぶ。

「あ…………っ！え、えつと…………これはですね……………」

彼女は顔を真っ赤にし、慌てている。

「はっはっは！若いなあ!!まあ、その続きは仕事してからだ!!帰ってくるぞー!!全員無

事にな!!!」

「…はい!!!」

俺はリナと別れた後、走って病室へ向かった。あの時の声は…………間違いはない。だった
ら…

勢いよく扉を開く。

「おや？ムゲン中尉か。どうしたんだい？つて、随分怪我をしているな…。治療する。

座りなさい」

「はあ…………はあ…………。ファイアさんは…？」

すすめられた椅子に腰かけ、治療を受ける。

「……ん？眠っているぞ……？」

「……………え……………。でも、さつき、戦闘で……………」

「うん……？気のせいじゃないのかい……………？彼女はずっとここで眠り続けていたよ。……さ、これで大丈夫だ。念のため、数日は左目のアイパッチは外さないように」

「……………は、はい……………」

「じゃあ、あの声は一体……………」

「俺は、彼女の近くへ歩み寄る。」

「彼女の手を握る。」

「……………」

「なんとなく、彼女の口が動いているように見えた……………。気のせいかもしれない……………。でも彼女は。」

「お……………か……………え……………」

「……………!!!」

「確かにそう動いた。」

「……………ああ。ただいま……………姉さん……………」

「泣きながら、返した。ただ、その一言だけを。」

宇宙世紀 0088. 02. 22

エウーゴ、アクシズ、ティターンズによる艦隊戦。エウーゴによるコロニー・レーザー斉射によりティターンズ艦隊壊滅。コロニー・レーザー破壊。

エウーゴ、戦力の過半数を喪失。シャア・アズナブルも行方不明となり、地球圏は残ったアクシズ軍によって掌握される。

これにてグリプス戦役と呼ばれる戦争は幕を閉じた。

俺たちは、久々に地球へと降りた。

理由は一つだけ。

「……………これでお別れだな……」

「ああ。寂しくなるな、ムゲン」

「まったくだよー。俺もさびしくってさびしくって……」

「ファイアさんは……………どうするんだ?」

「……………彼女は、医療施設へ連れていくさ。もちろん、民間の信頼できる所だ」

「軍は信用ならないからネー。ま、たまには会いに行つてあげてもいいんじゃないかい?」

「ムゲンだったら、いつだって会いに行ってくれて構わない……」
「むげん……。もうあえないの?」

ルナちゃんが寂しそうな顔をする。俺はクロノードに視線を送る。
クロノードは察して、承諾してくれた。

俺は、彼女を抱き上げる。

「……大丈夫。また会えるよ」

「ほんと!? やったー!!」

「ああ。本当だ。必ずまた会おう。それまでの【お別れ】だ」

「……おわかれ……。さびしいね……」

「ああ……。寂しい」

「でも、また会えるから、お別れって言えるんだよ」

「そうなの?」

「ああ。……だから、また会おうね。ルナちゃん」

彼女を優しく撫でた。そして、彼女を降ろす。

「……ぐすつ……」

「ルナ。おいで」

「……うん」

彼女は俺のほうを見なかった。彼女なりに考えたんだろう……。

「さて、それじゃ、またな……。今度は……敵同士だ」

「ああ。だが、また協力できるかもな……」

「……ふっ……。期待してる」

「クロノード君。時間だ。行こう」

「ああ……」

彼らは俺たちに背を向け、歩き始める。

「行っちゃったね……。ファイアさんも……ルナちゃんも……」

「ああ。でも、また会えるさ」

「そう、だね……」

「そうさ。俺たちは互いに助け合って生きていて、必ずどこかで交わる。それが【零】と

【無限】でも……」

「……さ、戻るか」

「ええ」

「あ、今日の夕飯はカレーだって！」

「ええ……またカレーかあ……」

それから、俺たちの日常は、ジオンの残党と戦う日々に戻る。

そして、月日が経ち宇宙世紀0088 07. 08

俺は食堂でリナと話していた。

ふと、何かを思った彼女が急に真剣な顔をし、言う。

「……ねえ、ムゲン……？」

「うん？」

「……その、さ……言いたいことがあるんだ」

「な、なんだよ……？」

彼女は顔を赤くして、言葉を繋いだ。

「わたしさ……、子供……出来ちゃった……」

頭が思考停止状態に陥る。うん？今、なんて言った……？

「……え……？な、なんだって……？」

聞き直してしまう……。リナは顔を真っ赤にし、叫んだ。

「あ、赤ちゃんできたの!!!あなたと私の!!!」

食堂の全員がこちらを見た。そりゃあ当然なんだが……。

赤ちゃん……。子供……。

「う、そ……………」

「本当だよ……………」

「い、いつから……………」

「えっと…………最近だから…………まだ先の話だけど…………」

「…………そ、そっか…………。はは…………子供…………かあ…………」

急すぎて受け止めきれない俺がいる…………。

ちよつと深呼吸しよう…………。

「……………」

「……………」

暫くの間ができる。それから、落ち着いた俺は口を開く。

「そっか……。俺の子供…………できたんだ…………」

「ふふふ…………。何て名前にしようか…………」

「う、ううん…………そうだな…………」

そんな急に言われたって思いつかない…………。

しばらく考えた後、ふと二つの名前を思いついた。

「…………あ、【アウロラ】なんてどうだ…………？」

「アウ……ロラ……？」

「ああ。オーロラとも読めるけど。意味は【虹】……」

虹は、どんな位置からも見ることができて、その輝きは、心を癒してくれる。どんな人にも平等に光となって欲しい……。

そんな子に育ってほしいから……。

「男だったら……【アラン】……かな……」

「アランの意味は【調和】……」

調和は、お互いに手を取り合い、どんな人とも【分かり合える】……そう、ニュータ
イプのような……そんな存在に育ってほしいから……。

「……いいねームゲンが決めたんだし、それでいいよー」

彼女は俺に微笑んだ……。こんな彼女の子供……。きつと、笑顔がかわいい子が生ま
れるだろうな……。なんて思いながら……。

グリップス戦役編外伝

外伝：Episode of Fear & Kuro
n o d o

宇宙世紀0088 グリップス戦役終戦後、俺たちはジオン残党になった。

フィアは民間の医療施設へと……。

俺はそれから毎日のように彼女の元へと行った。

寂くさせないと……。一人にはさせないと決めたから……。

「フィア……。ルナはちゃんと育っているぞ。……早く目を覚ましてくれ……」

彼女の手を握る。あの戦い以来、彼女は一度も目覚めない……。

「なあ、フィア。覚えてるか？俺たちの出会いを……」

「あの時、お前がいてくれなかったら、今の俺はいない……」

「懐かしいよな……。もう5年も前の話だなんて……。なあ？フィア……」

ベッドで眠り続ける彼女に言葉をかける。無駄だと分かっている……。

宇宙世紀0083 デラーズ紛争終戦後の話だ。

コロニーは落ちた。俺たちは成し遂げたんだ……。

だが……何故こうまでして争う……。

互いに理解しあえないから……？

その時の俺は、迷っていた。家族を喪つてまで戦う必要があるのか……。

「……」

その日は、俺は町の小さなバーで一人考えながら酒を飲んでいた。

「はあ……」

酒で紛らわそうとしても、そんなこと無理だった。むしろその逆で……。飲めば飲むほど考えてしまう。

「……」

「おっ！ ジオンのヤツか！」

声の主に振り返る。そこには、髪を束ねた女性が立っていた。

「……」

「隣、いいか？」

そう言いながら彼女は座る。許可も何も……答える前に座ってるじゃないか。

「……マスター、コーヒー貰えるか？」

「…かしこまりました」

意外だった。酒飲みのような雰囲気を持つていたから。

「酒は……飲まないのか？」

「ああ。私はそういうのは苦手だな……」

「へえ。飲みそうな雰囲気してるけどな」

「……人を見た目で判断するのは良くないと思うぞ？」

「そうだな……。すまない」

「お待たせいたしました。コーヒーです」

「ありがとう」

彼女は微笑み、コーヒーを受け取る。

どこかで見たことのある顔なんだよな……。誰だったっけ……？

そんなことを考えながら酒を一口。

「……………」

な、なんか視線が……。

「な、なんだよ……？」

「ふっ！見つめられるのは慣れないか？」

「な！急に見つめるからだろう?!」

「ふふふ……。嫌いじゃないよ……あんたみたいな人」

「……………えっ……」

別に何か期待して驚いたわけじゃない。

「あはは!! あんた顔真つ赤だよ!! ふふふ!!」

「……………わ、笑うなあ!!! な、なにがおかしいんだよ!!!」

「ふふふ……!! ごめんごめん! 見えて飽きなくてさ……」

彼女は腹を抱えて笑っている。

……………なんか……バカにされているのか……?」

「……………」

「ん? 拗ねてしまったのか? いやあ、すまんすまん! 悪かった……許してくれ」

「……………嫌だな……」

腹が立っていた。だから、少し悪戯してやろうと思った……。が……。

「えー。許してくれよー。なあなあー!」

彼女は突然俺の肩を揺さぶる。

「う、うおお!? や、やめろおお!」

「やめないー! 私を許すまでやめないからなー!」

「わ、わかった! わかったから……。許すから……」

こういうのはカカサに似ている……。だから、不思議と嫌いにはなれなかった。
……今、やっと思い出した。彼女は……。

「……………お前は……」

「うん？」

「フィア・アツシユベリー……。【恐怖の大隊長】……………」

その言葉に少し悲しそうな顔をした。

「……………ああ。そうだ……」

「す、すまん！傷つけるつもりは……」

「いや、いい。私はフィア・アツシユベリーだ。さつきはすまなかつたな」

俺はなぜか……彼女の悲しい顔を見たくなくなっていた……。あんな、寂しそうな顔……………。

「……………俺はクロノード・グレイス」

「クロノード……………か。よろしくな」

彼女は手を差し出す。俺は彼女の手……………恐る恐る触れた。初めて……………女性の手を取った。

次第に顔が熱くなる。こんな感覚……初めてだ。

「お？どうした、顔が赤いぞ？」

「そ、そんなこと……!」

「ふふ……。照れているのか。なんだ、女性の手を触れるのは初めてか」

「……!!」

「凶星か。クロノードは顔に出るな……」

「……」

「ふふふつ……!あんといると面白いなあ!」

「それ、褒めてないだろ……」

「いいや?褒めてるよ?ふふふ」

彼女の笑顔が……。次第に俺を変えたんだ。

それが……。彼女との出会い……。

「なあ、ファイア……。他人と比べてしまう人を……。君はどう思う……?」

病室で、問いかける。それが返ってこないことも、彼女が目覚めないことも知っていないから……。

「……俺は、お前と出会って変わったよ。家族のために戦うことも必要かもしれない……。だが、それ以上に、俺たちは軍人で……」

「成すべきことを成さねばならない使命……。お前はそれを教えてくれた……。……」

「……………」

星を見ている。ただ静かに……。彼女が、俺たちの所へ来てもう1か月……

「クロノード」

「……ファイア……？」

「何をしてたんだ？」

「……星を見てた」

「星……？」

「ああ。綺麗だろう？」

彼女は空を見上げる。コロニーとは違い、本物の星がそこでは輝いていた。

「……………ああ。綺麗だな」

「……………」

暫くの間、静寂。

それを打ち破ったのは、意外にも彼の声。

「おや？クロノード君に、ファイアちゃんじゃあないか！はっはっは!!元気かい？」

「カカサ……」

彼女と二人きりになる。

「……」

「あー。面白かったあ……。ふふ……」

「そ、そんなにか……？」

「ああ。面白すぎ……。カカサは！……あ、もちろんお前もな？」

「な、なんで俺まで……」

「ふふ。お前は弄りやすいんだよ。そういう照れるとことか……」

「……」

「これからは、なるべく顔に出さないように努力しよう……」。

「……俺は、この大切な家族を……失わないために戦う」

「ん……？」

「守るから……。君も、カカサも……皆を……」

「軍人として一言言わせてもらおうなら……」

「軍人にはそんな私情を持ち込んだら、大抵の人間は死ぬ」

「……」

「別にそれが悪いとは言わない。だが、お前は少しそれに固執しすぎだ」

「……そう、なのか……」

「……………だがな……」

「……?」

「私も人間だ。私個人の言葉を言わしてもらおうなら……」

「嬉しいよ……。クロノード」

その時の彼女は、少し照れていて……。守りたくなかった。

「……………守るさ。軍人として、一人の人間として……」

「ん……………?それは、私を口説いているのか?」

「ち、違う!真面目なシーンだろう!?!」

「ふふつ……。てつきり口説いてるのかと思ったぞ?」

「うぐぐ……………!」

「冗談だ……。なら言葉に甘えて……」

彼女は突然俺に体を寄せた。

「……………!!!」

「……………なんだ?抱きしめてくれないのか……?」

「……えつと……。わ、わかった」

俺は震える手で、彼女を抱きしめる。

「……………暖かいな……。温もりを感じる……」

「……」

恥ずかしすぎて何も言葉が出ない……。だが、その暖かさは感じている。

「ん……。やっぱり……。緊張するな……」

彼女は、ゆつくりと俺から離れた。

「……」

「どうした？クロノード？固まってるぞ？」

「ハッ……！」

我に返る。意識が飛びそうだった…。

「随分ピュアだな……。お前も……」

「う、うるさい……！生まれて母に抱きしめられたことすらないんだ……！慣れるわけ……！」

「……」

彼女はしばらく考えた後、俺に手を広げて言う。

「ほら、おいで！」

「えっ……？」

「抱きしめてやるから、おいでって」

「……いい、いや……。いいい——よっ……。!?」

彼女は俺を強引に抱きしめた。

「…………あ、あわわ…………」

混乱する。ど、どうすればいいんだ…………。

「いい子……。いい子だよ……」

彼女は俺の頭を優しく撫でた。だんだんと…………眠くなってくる……。

「俺は、お前に何をしてやれた…………？」

「なあ、フィア……。あの時みたいに笑って見せてくれよ…………」

静かに彼女は眠り続ける。

だんだん悲しくなった……。

「なあ、フィア…………どうして俺と…………結婚してくれたんだ…………？」

「なあ…………フィア……。お前は…………何故…………あの時…………俺を庇ったんだ…………？ 軍人としての役目を破ってまで…………」

「俺は…………お前に何もしてやれなかったのに…………!!」

「なあ、クロノード」

「…………ん？」

彼女と付き合って、それなりの年月が経ったある日の事。彼女は普段と違う様子で俺

に話しかけた。

「な、なあ……」

「なんだよ？ どうしたんだ…？」

「……その、私達さ……」

「う、うん……」

「結婚……しないか……？」

「えっ……?!」

衝撃が走った。それはもうとんでもないほどの……。

「ど、どうだ……？」

瞬間、地面が揺れた。

「……敵……!？」

「そのようだ。この話は後だ……!」

俺は、その場にあつたザクで出撃。

状況は悪かった。運が悪くカカサはどこかへ情報を集めに。

おまけに敵がテイターズ……。連邦のエース部隊とは……。

敵影は2機……。これなら……。

マシンガンで牽制。続けてバズーカを放つ。

相手は軽々と避ける。避けた先を見越し、もう一発撃ちこんだ。

そこに相手は直撃。

「よし！次だ……つぐああ!?!」

背後からの衝撃。ザクが地面に倒れこむ。

「死にやがれ!! ジオン共め!!」

「くっ……!! こんなところで……!! こんなところで死ぬるものか!! まだ……!! まだ……!!」

機体を素早く反転。ヒートホークを引き抜き、間髪で受け止める。

鏑迫り合いの形になり、その隙にジムの腹部へ強烈な蹴りを与える。

「ぐおおお!!」

「……俺には……生きてやらなきゃいけないことが……まだたくさんある」

ザクが立ち上がり、ヒートホークを構える。

「沈めえええええ!!」

ヒートホークは、相手のコックピットに突き刺さった。

「……………」

コックピットのハッチを開き、大声で叫んだ。

「ファイアあああああ!!!」

この言葉が聞こえてなくても……聞こえていてもいい。俺の気持ちを……。

「お前が……好きだああああ!!!だから!!結婚してくれ!!!」

「必ず……!必ず幸せにするから!!!お前に寂しい思いはさせないから!!!」

肩で息する俺。暫くすると、無線から声。

「……よろしく……お願います」

彼女の声は泣きそうな声だった。

俺は機体から降り、走って彼女を抱きしめる。

「泣くなよ……。もう、一人じゃない。お前は……俺たちの家族なんだから」

「……うん……。ありがとう……。クロノード」

「なあ……ファイア……。君は、俺より強かった。いつも……俺の前に立っていてくれて……俺の光は……お前だったんだ……」

彼女の頬を撫でた。涙が零れた。

一瞬……彼女の口元が動いた。……気のせいか……?

俺は機体を動かし、一気にG3へ。

「離脱する……っ……っ!? クロノード! お前何をしてるんだ!!!」

ファイアの制止を聞かず、ひたすらに進んだ。

「俺が、止める!!! まだ時間はある! 20秒あるなら……!!」

「クロノード!! 限界だ!! くっ……!! 敵が……!!!」

ファイアと俺の間に敵が割って入る。

正面からも敵。

「邪魔をするなあああ!!!」

サーベルを引き抜き、一気に切り抜ける。

しかし、背後からの攻撃を回避しきれなかった。

「くそっ!! うああああ!!!」

機体がバズーカによって被弾。

コックピットが強引に開かれる。

「くっ……!!!」

「クロノード!! やらせは……しない!!!」

正面の敵を彼女が墜とす。彼女の機体は既にあちこちに穴が開いていた。しかし……。

「ファイア!! 後ろ……!!!」

「うあつ……!!」

サーベルが彼女のコックピットの近くを貫く。

「!!!」

「ファイア姉さん!!!」

「……………ム……………ゲン……………。クロノードを……………」

「ファイ……………ア……………」

「ファイアさん……!!何があつたんです?」

「……………お前も……………クロノードも……………いや……………。みんな……………」

「ファイア!!なんで……………なんで俺なんかを……………!!!くつ……………テイターンズどもがああああああ

あああああ!!!」

俺は叫んだ!。そして、奴らにビームライフルを乱射した。

しかし、それは掠めもせず……。

俺は泣いた。ただひたすらに……………。

暫くすると、銀のガンダムが俺たちを回収に来た……………。

俺は、機体から転げ落ちるように、彼女の元へ走った。痛みなんか……………そんなの関係ない……。

「おお……。クロノードか……。すまん……」

彼女は、その場で治療を受けていた。至る所に破片が刺さっている…。

「そんな事言うな…!!俺を……。俺を庇うことなんか…」

「……体が動いたんだ。勝手に……」

……かつて…軍人としての矜持を覚えてくれた人からの言葉。

「ぐっ……。うう…!!なんで…」

「泣くなよ……。お前は……。わたしの夫なんだから…」

彼女は、俺に優しく微笑んだ。

「お前が居なきや、俺は何もできない…!!」

「…死にはしないさ……。だろ?ムゲン」

「えっ……」

「生きて……。ルナを……。お前を…見守らなきやいけないんだから…」

涙が零れた。お前つてやつは……。本当に…!!

「ああ……。みんな、迷惑……。かけて…ごめん……。な」

カカサも、彼女を心配して、そわそわしている。

「迷惑じゃない…!みんなで、皆で歩いてきたんじゃないか!!」

「ふふ……。クロノード……。お前……。大泣きしてるじゃないか……」

苦しかった。こんな別れ方あっていいはずがないんだ…。

「あ、当たり前前だろ!?俺を……………唯一俺を愛してくれた……………人なんだぞ!」

「……………ああ……………。そうだな…」

「うぐつ……………!!!はあ……………はあ……………」

「ファイアさん!!」

「な、なあ……………ムゲン」

「……………な、なんですつ……………」

彼は、泣いていた。彼にとっては姉のような存在だった。それを思うと……………心が辛くなる。

「ルナは……………見てないな……………?」

「……………あたり……………前でしょ……………!!!こんな姿見せられませんよ!!!」

「……………よかった……………」

彼女は虚ろな瞳で天井を見つめ、一言だけ言った。

「…………………………良いものだな…………………………家族は……………」

そして、静かに瞳……………閉じた。……………嘘だ……………!!!

「……………!!!嘘だ……………!駄目だ!!!ダメだ、ダメだダメだ!!!ファイアさん!!逝くな!!逝っちゃ

ダメなんだ!!!」

「ファイア……!!うう……!!お前つてやつは……。くそっ!!くそがあああ
!!!」

俺は、走って格納庫を出て行った。

「お、おい!クロノード!!!」

カカサの制止を振り切って。

部屋で泣いた。苦しかった。俺は彼女に何もしてあげられなかった……。

「クロノード君。入るよ」

「……………ぐっ……ううっ……!!!」

カカサは静かに椅子に腰かけ、口を開く。

「……………大丈夫か……?」

「だい、じょうぶに……っ!みえるか……!?!」

「いいや?見えない。だから来たんじゃないか」

「……………」

「俺はファイアの代わりにはなることはできない。だが、俺たちはずっとともに歩いてきた【親友】だろ?」

「だったら、辛いときに傍にいてやるのも俺の役目じゃないか」

彼は、俺の肩に手を置いた。その優しさが……嬉しくて……。苦しくて……。

「……………ううっ!!ぐずっ…!!!」

「皆……………みんな……………辛いさ……………。俺だつて……………おれだつて……………な…!!!」

「カカ……………サ……………?」

彼の瞳から零れる涙。

震える手。必死にこらえていたんだ…。

「ぐっ!!俺は、お前にも……………ファイアにも……………手を貸すことができなかった…!!俺は……………!!!」

「……………カカサ……………」

「悪いのは……………お前じゃない……………。悪いのはテイターンズだ……………」

「くっ……………!!うう……………!!!」

俺たちは、二人して泣いた。どれだけ、彼女が愛されていたのか……………。どれだけ彼女が彼らの背を優しく押しつけてくれたのか……………。

「……………なあ、ファイア。お前がいなくて何もできない俺を……………。君は、どう思う……………」

「?」

「言葉を返してくれよ……………。また前みたいに他愛のない話で面白がつてくれよ……………」

彼女に泣きながら抱き着く。

彼女の心臓の音が、ゆっくりと脈を打つ。

「頼む…。奇跡を…。俺に見せてくれないか…！」
俺は祈ったんだ。ただ、彼女に謝りたくて…。

「泣かないで」

「……!!!」

彼女の顔を見る。ゆっくり眠り続けている…。でも…。今の声は…。

「ねえ、クロノード。謝らなくていいよ」

「ねえ、クロノード。私は、あなたが好きだから結婚したんだよ」

「ねえ…。クロノード。ルナは、素敵に育っていてくれてうれしいよ…。」

「あ……。ああ…!!!」

「ねえ、クロノード……。あなたは……。あなただよ……。……。あなたはどんなことだつてできる…。それが、人間の力だから…」

「………!!!」

「ね……。……。え……。……。クロノード……。……。愛して……。……。いるよ……。」

「……。ああ。俺もだよ……」

俺は立ち上がり、彼女に背を向けた。

「行ってくる」

外に出ると、ルナが小さな公園で遊んでいた。

「あ！パパー!!!」

こちらへ走ってくるルナを見て俺はつぶやいた。

「なあ、ファイア……。俺はまた……。歩き始めるよ」

Episode of Fear & Kuronodo

完

37：砕かれた刃

宇宙世紀0088 ティターンズというものが滅んでも、連邦の一部は腐っている。どうして……戦いは消えないんだ……。ファイアさん……【虹】を見るのは……無理そうだ。道夜とエトワールは、二人で傭兵業をして渡り歩いているらしい。彼らも忙しそうだ……。

俺は再び地球連邦に組み込まれた第00特務試験MS隊として戦う日々を繰り返していた。

そんなある日のこと……。

俺は、地球連邦最高評議会に出廷しゅつていするように言い渡された。

彼らの意図が読めないが、渋々俺は従うことにした。

「いいかムゲン。何かあつたらすぐに帰ってくるんだ」

「ああ。わかっている。奴らが何を考えているかは知らないが、何かあればすぐ連絡する……」

「……気をつけろよ。少し嫌な予感がする」

「俺もだ……」

するとフアングは肩をすくめて言う。

「ニュータイプの勤か？」

「冗談はよしてくれ。俺はニュータイプじゃない。それを言ったらフアングこそニュータイプだろう？」

「……そんなの名前だけ独り歩きしているさ」

「…そんなもんだよ」

それから少しした後、輸送機がこちらへ降りてくる。

「ムゲン・クロスフォード中尉だな」

「……ああ」

「では、こちらへ」

俺は輸送機に乗り込む。

なんだろうな……こんな気持ちは久々だ……。過去のアレを思い出してしまふ。

どれくらい移動したことか、輸送機が動かなくなる。どうやら着いたようだ。

「降りろ」

「……」
俺はゆっくりと降りた。

輸送機から出ると、既にそこは施設の中。どうやら外は見せたくないらしい。

「二ついいか？」

「……なんだ」

「帰りも送ってくれるんだろうな？」

「……無駄なことをしなければ、そのまま返してやる」

と、案外素直。それが余計に嫌な感じだった。

「……」

大きな扉。それがゆっくりと開かれる。

その中は暗く、モニターの光が、微かに「彼ら」を認識させた。

「……」

ゆっくりと足を運ぶ。そして、尋問台のようなところへ立たされた。

「ムゲン・クロスフォード中尉だな」

「……………ああ」

「私は、地球連邦軍最高評議会議長……。ベルベット・バーネット。階級は大将だ。少しの間よろしく頼む」

「……それで、俺に何の用だ？」

彼は不敵に笑った後、言葉が続けた。

「単刀直入に言おう。君が乗っているガンダム・ピクシーを……私達に引き渡せ」

「……………理由は」

「今後のより良い世界のため……。とでも言うておこう」

「それで引き渡すと思うか……？」

「ふっ。まあ、そうだろうな」

「……」

「君は、ガンダム・ピクシーという機体とは縁があるように見える」

「かつて、スレイヴ・レイス隊を見た、フレッド・リーバー軍曹のピクシーから……」

「君の部隊の整備兵が作った2機のピクシー。その2機には君が搭乗している」

「な、何故それを……!？」

驚きだった。誰にも言っていないはず……。ましてやりッパパーさんの事も……。

「名前は、『ミラージュ』と『エッジ』……。最初に作られたのは、宇宙空間でも戦闘ができるようにバックパックの変更に加え、ビームライフルを搭載する『ミラージュ』」

「そして、『ミラージュ』はア・バオア・クー攻防戦にて、Xフィールドを攻略。ジオンの大型MAである『ムゲンギア』を撃墜」

「……………!!」

何故そこまで……。いや、だいたいは調べていたのだろう。評議会の議長だ。できないくはないはず。

「さらにはシゼル・クライン大佐が駆る【ハデス・ジャツジメント】との戦闘の果て、大破した」

「……………」

【「エツジ」はデラーズ紛争から君が搭乗している機体。より近接戦闘に特化した仕上がりになっている」

「さらには、リナ・ハートライト技術中尉が作った、君でしか動かせない刀【キジンマルクニシゲ】を装備」

「さすがに、これには驚いたよ。まさか、あんな時代遅れの機体が、【ガンダムMK-0】までもを倒すとは……。そして、パイロットは無事生還…」

「結局、お前は何が言いたい？俺の過去の話を俺にする意味があるとは思えない」
彼はそれを聞いて、笑う。そして周りにいるであろう彼らも笑った。

「……………」

「ああ。君の武勇伝を話すために呼んだのではないさ。もちろん、ね」

彼は不敵に笑う。

「私は、君の機体に興味が湧いてきたんだ」

「へえ」

「時代遅れの機体で、グリップス戦役まで戦うことのできた理由」

「……」

「君にももちろん興味はあるが、私はそういう非人道的なのは苦手だね。機体を調べた
いのだよ」

「断ると言ったら？」

「そんな権利は無いのだよ？」

俺の背中に銃が押し付けられる。

「……知ってるはずだ、強化人間に銃は効かない」

「ああ。だが、君は断れないと思うがね？まあ、「ソレ」はあくまでも脅しだ」

「……」

「君は【家族】を盾にとつても効かないからね…。だが、【彼女】ならどうだろう？」

彼は不敵に笑う。その彼女を俺が知っているながら…。

「……リナの事か……!?!」

「フフフ…。君の唯一弱いところは、そこしかないからな。致し方なく、ね。断れば彼女の命は保証できない。それに……お腹の子もな」

「貴様……!!!」

堪えきれず、机を叩く。

「君が素直に承諾してくれば、何も手は出さんですよ。私は紳士でね。礼を払うものには私もそれに見合う礼を払わせてもらおうつもりだ」

「何が……紳士だ……。ただの脅迫じゃないか!」

「いいや?これは命令だよ。軍の評議会からの……ね」

「くっ……!!!」

「どのみち、君は選ぶ権利なんてないのだよ。君は、「モルモット」なのだからね」

「……………」

「さあ、どうするのだ?機体を渡すか、彼女を殺すか!」

「……わかった。ピクシーを引き渡す……。だから、リナだけは……やめてくれ……」

彼女の命を取られては……。俺に拒否する権利などなかった。

「ふふふ。賢明な判断だ。では、君はこの引き渡し場所へ機体を持ってきてくれ。いいな?君が持つてくるんだ」

「……ああ」

「では、また会おう。ムゲン・クロスフォード」

俺は、背後で控えていた兵士に連れられ、部屋を出た。

そして、俺はちゃんとグロリアスへ生きて帰ることができた。

「ムゲン、おかえり」

「ああ。フアング、全員をブリッジに。少し話したいことがある」

「……わかった。すぐ集める。リナはどうする?」

「彼女も頼む。リナにも…知ってもらわなければならない」

「ああ。先に行つててくれ。俺もすぐに行く」

フアングは走つて彼らのところへ向かった。

それから10分後、全員がブリッジへ集まる。

「で?ムゲン中尉、なんの話だ」

「……」

全員がいることを確認した後、俺は口を開く。

「先ほど、俺は連邦軍最高評議会に呼ばれ、話を聞いてきた」

「彼らの要件は、ガンダム・ピクシーエッジの引き渡し」

「ピクシーの!?!なんで……」

「彼らが言う感じからして、リナの作った機体を調べて、それを新たな兵器に運用するか

……。実験かのどちらかだ」

「……俺は、リナを盾にとられた。……ピクシーとリナ、どちらかの選択……。俺はリナを取った」

「ムゲン……」

「だが、奴らに簡単に引き渡すつもりはない。俺の愛機だし、何より……。ここでこいつを失わせるわけにはいかないからな」

「お前、どうするんだ……?」

フアングは心配そうだ。

「いや、特に考えているわけではないんだ。だが、一応みんなにも伝えておこうと思ってな」

「なるほど……。引き渡し場所へは……お前だけで?」

「ああ。誰かが来ているのに感付けば、リナが危ない……」

「……わかった。しばらくの間、リナを厳重に警護。グロリアスを引き渡しポイントから10kmまで近づける」

「……フアング……」

「構わないな?」

「……リナは……」

「いいよ。私も、覚悟できてるから。だから、ピクシーを……お願い」

彼女は微笑んだ。

「ユーリ、戦艦のカタパルトで機体を固定。実弾射撃でムゲンを援護だ」

「ええ。わかりました。ムゲンさん、それ終わったらビッグ生チョコ……」

「1本だけにしてくれよ……?」

「もちろんですよ!……無事で帰ってきてください」

「ああ」

「全員聞いてくれ!」

フアングが叫ぶ。

「ムゲンに何かあれば、すぐに回収できるように動く!艦長、戦艦は任せる!俺もガンダムで出撃できるように準備する」

「了解だ。グロリアス!座標ポイント10km付近まで移動!!」

「ムゲン。何かあるかわからない。気をつけろよ……」

「ああ。ここまでお膳立てされたんだ。うまくやるさ」

俺は、格納庫へ急ぐ。

「ムゲン!!」

野太い声。振り向くと、整備長のトクナガさんがいた。

「行くのか？」

「……ええ。ピクシーを出します」

「あいよ。お前からあ!!!01小隊長機出撃準備だ!!!ハッチ開け!!!」

トクナガさんが叫ぶ。

「あ、トクナガさん」

「ん?どした？」

「……リナを……頼みます」

「……ああ、お前がいない間、俺がしっかり守っておく」

「……はい」

俺は機体に取り込む。システムを起動。

「相棒……。俺は、お前を簡単に引き渡したりしない」

俺がすべきこと、それをやるだけだ

「ムゲン隊長。ハッチオープンしました。いつでもどうぞ」

「了解した。ムゲン・クロスフォード、ピクシー……、出る!!!」

戦艦を出て、指定されたポイントへ。

「……………」

だんだんと機体と輸送機が見えてくる。

だが、何かが違った。

機体の数が多い……………？それに、あの白とグレーのザク……………。

「……………!!ファンング!!ジオンだ!!ハメられた!!」

「何っ!?全機出撃!!間に合わせろ!!ユーリ、狙撃を!!」

そういうことか……………。俺たちが邪魔だったんだ……………。

それなら、迷うことはない。

彼らを……………恐怖で怯えさせてやる。

「行くぞ、ピクシー。敵は……………6機!!」

ダガーを引き抜く。

3機が迫る。

1機を蹴り飛ばし、吹き飛ばす。

続けて背後の敵を1機ダガーで貫く。さらに、素早く敵に差し込んだダガーを引き抜く。

「はああああ!!!」

さらにもう1機を足払いで転ばせ、コックピットへダガーを突き立てた。怯えた1機。逃がさない。

「でえやああああ!!!」

ダガーを全力で振り下ろす。

ドムのような敵が真つ二つに。

「さあ。来い!!!」

2機がひるまず突っ込んでくる。

1機にダガーを投げつける。コックピットに突き刺さり、膝をついた。

左腕を鞘へ。そして、刀を持つ。

金属が擦れる音と共に、火花を散らし、敵の胴体を切り落とす。……が。

その反撃で、その1機から左腕を切り落とされた。

「くっ……!!?」

「ムゲン! 背後だ!!」

「何っ!? ぐあっ!!!」

背後からの攻撃に対処できず、直撃を食らう。

続けて左から…。そして、右から。衝撃で機内でも破片が飛び散る。それが、俺の腕に傷をつける。

「ぐっ…………!!」

ピクシーの右肩が破壊される。持っていた刀を落とす。

「くっ…………」

左足から電流が。うまく歩けない。

だが…………まだ…。

刀を持ち直す。なんとか、フラフラになりながら態勢を立て直した。

「…………おわって……………ない…………」

「ザッツ……………ゲン……………ザッツ……………か!?!」

無線機も故障した。

フラフラのピクシーを囲む敵…。

斬りに行く。しかし、そのブレブレの刀は空を裂いた。

「……………くっ……………!!」

左からの攻撃。直撃。

バランスをなんとか保とうとする。

そして、反撃に刀を横薙ぎに。

1機が避けきれず倒すことが出来たが…。

右からの攻撃。当然よければはずもなく…。

衝撃で頭を打った。

破片が左腕に突き刺さり、貫通する。

「がっ……!!ぐがああああ!!」

凄まじい痛み。意識が……。

「ここで眠れ!!永遠にな!!」

「くっ……」

正面からの攻撃。なんとか刀でガードする態勢に。

ザクのサーベルと刀が鏝迫りあう。力が……負けている…。

そして、その鏝迫り合いを勝利したのは…ザクだった。

刀が……折れた。

その一撃は貫通し、コックピットのハッチを切り裂いた。

ピクシーも膝をつく。もう……。立てない…。

「はあ………。はあ………」

機体からはアラートと電流の音……。動かねば……。機体が……。

そして、機体を光が包む。

強烈な痛みと共に、俺は気づくと外へ投げ出されていた。

全身に力が入らない……。腕も……。足も……。呼吸がしにくい……。

なんとか、視線をやると……。ピクシーは……。ツインアイの瞳は右目が破壊されており、ガンダムというには歪いびつ……。

右足は無くなって、左足はなんとかその原型をとどめているものの、まともに動きはしない。

両腕は無くなり、ほぼダルマのようだ。

俺も……。ピクシーも……。限界だった。

「……………」

声が出ない。痛みで気を失いそうなほどだ……。

「始末できたか？」

「ええ……。ですが、パイロットは生きていますよ……？」

「構わん。どうせこのまま死ぬ。これで俺の計画もすすむ……。フフフ……」

「そして私はかつて一年戦争、デラーズ紛争、グリプス戦役を生き残ったエースパイ

ロットを殺した英雄として崇められる……」

「では、私はこれで……」

どこかで話し声が聞こえる……。俺の事を話しているのか……………。

「……………ムゲン・クロスフォード……………。かつての名は…もう消えたな」

「だが、これでいい。ネズミを一匹消しただけの事。……………あとは残りを消せばいい」

……………だめだ……………。もう……………動かない……………。

例えるなら、壊れた人形のように。

俺は、捨てられたように。ピクシーと共に倒れていた。

目が……………見えなくなってくる……………。

目は開いているのに……………そんなのあるんだな……………。

「ムゲン!!しつかりするんだ!!」

声は……………ハッキリと聞こえた……………。だが……………見えないんだ……………。もう……………何も……………。

「……………うぐつ!!うわああああああ!!!逝くなああああ!!!」

俺の意識は……………そこで途絶えた。

もう……………目覚めることもないだろう……………。

『ムゲン』

……………は……………？

『ムゲン。起きろって』

『……………誰だ……………？』

『私が分からないか……………？』

目の前には、ファイアさんがいた…。

『随分派手にやられたな？私もびっくりしたよ……………』

彼女は苦笑しながら言う。

『俺は……………どうなってるんですか……………？』

『ああ……………。正直、今のお前は不安定だ。生きれるか、このまま死ぬかも…わからない状態』

『』

『……………俺は……………どうすれば……………？』

『それを聞くのか？一度体験しているだろう……………？』

『覚えてないですよ……………』

『……………まあいい。強いて言うなら、自分で【生きたい】と願うことだろうな』

『願う……………』

『そうだ。願い続けるんだ…。無論、それで確実に戻れるかは分からないが…』
『随分適当ですね…』

『適当にもなるさ。ここはお前の世界なんだから』

『俺の…？？？どういうことですか？』

『難しく言えば、お前の脳波がお前に見せている幻覚……とでも言えばいいか？』

『…』

彼女はなんとなく察して言葉を返してくれた。

『要は、お前の精神だ』

『俺の精神…？？？』

『ああ。ここは、お前の精神の中。お前の背中を押して消えていった人たちは、今もお前の【ココ】にいる』

彼女は俺の手を引く。そして

『周りを見ろ。ここには、お前を助けた仲間や、家族の言葉が…。君が失った大切な人がいる』

『私を見た。かつて敵であった、あのニュータイプの少年のために泣いたお前を』

『…』

『お前は、人の心を見て、そして自分の価値を決めた。だからこそ今ここにいる』

『……』

俺は確かに見た。ゼロが、俺の心に残した言葉を…。

『ニュータイプがさ……地球に住む人を……人類を……信じなくて……どうするの……さ……』

彼はただ、信じたかっただけなんだ。人類を…。だから、自らの目で見て……彼は戦う敵を決めていた。

『お前がかつて死ぬほど恨んだ彼でさえ、お前は最後の最後、受け止めようとした』
『シゼル……』

『……だから……そんな世界が来ることを俺は望んじやあいない!!そして……今はお前を殺すことが……一番なんだ!!』

『なら……受け止める……!』

『何!?!』

『お前のその縛られた心を……俺が全部受け止める!!』

彼は……誰にも手を差し伸べてもらえなかっただけなんだ。ずっと一人で背負って

…。ずっと一人で苦しんでいた。

『お前は、数々の言葉に影響された。それは、夢を語る少年の言葉から……』
『……………グレイ……………』

『とめないでくれ!!!僕は…いや…これが僕の覚悟だ!!!ムゲン…僕の夢は…託したよ!!!』
彼は……………記憶がなかった俺に、優しく手を差し伸べてくれて、楽しそうに夢を語っていた。

『…僕には夢があります…』

『どんな…?』

『30特別遊撃部隊の皆のように、ジオンも連邦も関係なく皆が幸せになつて欲しい…そんな夢があるんです』

『…』

『きつと…皆まだ気づいてないだけなんです。ジオンだからとか、連邦だからつて言うのに縛られて、単純なことに目が行かないだけなんです』

『いつか…連邦もジオンも分け隔てなく手をつなぎあう時が来れば…その時こそが、本

『当の幸せなんだって思います』

『それはきつと、長くて遠い道のりかもしれない。けど、それでもそんな世界が来てくれることを、僕は夢見てるんです』

今でも忘れはしない……。彼の意志は……。俺が引き継いだのだから。

『人として、軍人としての役割を全うした人から……』

『イーサン……』

『……ムゲン隊長。あんたは……きつと、これからもつらい思いをするだろう』

『けどな、その時、そばにいてくれる家族を……。仲間を……』

『……ああ……。守って見せる……』

『ああ。……期待してるぜ?』

……彼のとの約束は忘れない。彼は、俺を変えるきっかけを、そして最後は……一人の軍人としての役目を果たした。

俺の……。人生の……。先輩だ。

『そして、お前は、私からも何かを見た。だろう?』

『ファイアさんから……………』

『私は。いや、私たちはすでに血で手を染めてしまっている……。どんなに願っても、どんなに祈っても、昔も、そして、これからも……………』

『人に恨まれなければならぬ……。仕方のない事だ。人は、光になれる。だが、人は何かのために犠牲をいとわぬ闇にもなれる』

軍人である彼女だからこそ、言える。重みが伝わってきたんだ……。命を奪うことへの恐怖や……………悲しみ。

『……………私は、いつでもお前のそばにいる。その、腕に巻いたリボンが……お前と私を【繋いでる】』

『目を開け……。そして、前を向け。ムゲン・クロスフォード！お前は……………私の最高の弟だ……………』

ファイアさんと出会って、俺は背中を押されたんだ。優しく……。きつと、姉というのがいるのなら、こんな感じだったろうな……………。

『怖がるな。お前は覚悟を決めている。さあ。行くぞ』

この言葉が、あの時の俺から恐怖を取り去ってくれた……。

『お前の中で、答えはもう出ているはずだ』

『……』

俺は彼女のほうを見た。その時の彼女は、とてもやさしく微笑んでいた。

『お前は、最初は私情で軍に入ったかもしれない』

『運良く生き残っていただけかもしれない』

『お前を変えたのは、確かに私たちの存在かもしれない』

『だが、何より……。お前が、お前自身が見てきたものから、お前はお前であることを選んだ。自分で【選択】したんだ』

『今のお前は、皆の意志を【受け継ぐ結晶体】であり、未来を作れる【人間】だ』

『私はどこかで……。お前がニュータイプなんじゃないかと思っていたのかもしれない』

『そんな……。俺はそんな……。』

『知っているさ。お前の能力が消されてしまったことも。だが……。』

『でも、何故だか、お前を信じたくなくなってしまった……。』

『……。ファイアさん……。』

『その理由が何なのかは分からない。だが……。何故かお前から……。そうしたくなる雰囲気を感じるんだ』

彼女は、俺の肩に手を当て、言う。

『大丈夫。私は死んでない。いつか目覚める。だから、今はお前とは一緒に行けない』
『だから、先に行つててくれ。私もすぐ【戻る】さ。だから、【生きる】』
『……………はい』

俺は最初から……………意志は決まっていたようだ。

ただ、彼女や……………彼らから励ましてもらいたかっただけなのかもしれない…。
でもこれで……………。今は……………【お別れ】だ。

『信じてるぞ……………。目覚めかけのニュータイプ。私に……………【虹】を見せてくれ』
「……………いつか……………必ず……………果たします。さよなら……………姉さん」
俺はゆつくりと……………そして、確実に……………歩いていく。

光が包み込む…。

体の痛みが辛い。しかし、それでも……………心は暖かった。

「……………」

相変わらず声が出せない。

とりあえずなんとか目覚めたことを伝えないと……。

体を強引に起こしてみる。滅茶苦茶な痛み。

つられて声が出る。

「うぐっう……!!! ああああ!!!」

喉が痛い……。

「むっ?!? ムゲン君?!? 生きているのか?!? 私が分かるか……?」

俺はゆっくり首を縦に振った。

「おおーよかった……!!! だが、無理に動いてはいけない。いいね? ゆっくりしているんだ」

「……………おれは……ごほっ!!……………どうなってる……………?」

「そうだな、両腕、両足が折れていて、肺に破片が刺さっていたから除去した。とりあえずは問題はない」

「……………そうか……ごほっ!!げほっ!!」

喋ると苦しい。…風邪ひいた時よりひどい感じ……。

「無理に話さないで。せつかく傷が閉じたんだ。また開いては困るだろう?」

「……………はい……」

「それにしても……よく無事だった。機体ごと爆散したって聞いてさすがに助からない
と思っっていたよ……」

それはたぶん、俺が改造されて、驚異的な回復力を持っていたからなのだろう。

この時ばかりは俺自身が改造されたことを素直に喜べた。

「……………」

ピクシー……………。そういえば、彼女はこのことを知っているのだろうか…………。

「あ……………の……………。リ……………ナ……………は……………？」

「ああ。彼女ね。今回はみんなが君の事に関しては遠征に行ったと伝えている。ピク
シーとそのまま」

「……………そ……………う……………」

「……………どれくらい……………寝てました……………？」

「ああ……………。だいたい……………2か月だな」

「そんなに……………」

「ああ。なんとか喋っても大丈夫なくらいにはなっているが、まだ治りかけだからね。
無理はしないように」

「……………はい」

「……………それにしても、この生命力……………やはり強化人……………いや、すまない」

「いえ。いいんです。今回だけは自分のこの回復力を素直に喜べますよ」

苦笑すると、彼は少しだけ暗い顔をした後

「……………ゆつくり休むといい」

それだけを言った。

「…はい」

それから、俺は静かに目を瞑った。

1, 2時間くらいして、ユーリが入ってくる。

「おや？ムゲンさんがイキテルー」

「……………心配してくれよ……」

「なんて、冗談ですよ。良かったです生きていて」

「……………すまなかったな」

「ええ。こまりましたよ、ここ2か月、私の財布…………ゲフンゲフン。がいなくて困ってたんですから」

「……………」

やはりお菓子目当てなのか…………。

とか、考えていたら、俺の頬に冷たいペットボトルが当てられた。

「つめたっ!?……あっ!?!いい、いてて………」

のけぞろうとするが、体に痛みが走った。

「……大丈夫ですか?…うまったく、大げさですねぇ…。喉乾いてるんじゃないかと思つて、水買ってきましたよ」

「あ、ああ………ありがとう…」

ニヤニヤしている彼女から水を受け取る。

「ええ。これもおいしいお菓子のためです。それじゃ」

そう言つてスキップしながら病室を出て行つた。

「……………」

「水くらいなら、もう飲んでもいいさ。構わんよ」

察した彼は、俺に許可をくれた。

俺は久々の水を飲む。

冷たくて、喉の渴きが癒された。

「……おいしい………」

「ははは。さすがに2か月ぶりだからね。だが、ゆっくり飲むんだよ」

「……はい……」

俺はそのあと、ゆっくり水を堪能した。

それから5か月経った。俺は、病室から出て来ても良いという許可をもらい、久々に艦内を歩いた。

体はもう完全に治りきって、動きたくて仕方がないくらい。

真っ先に向かったのは、彼女の部屋。

ノックする前に息を整えて…。よし。

コンコンとノックする。

「はい……………」

その声の後に扉が開く。

俺の顔を見た彼女は驚いている。

「……………ひ、久しぶり……………リナ」

「ムゲン!!!」

彼女は俺に抱き着いた。

「……………」

暖かかった。ずっとこうしていたいくらいだ……………。

「見ないうちに……………随分大きくなったな…。お腹」

見たら、随分彼女のお腹は大きくなっている。あとどれくらいなんだろう……………。

「……うん。もう少しなんだって」

「…そうか。楽しみだ……」

なんとか、彼女が一番つらい時の前に間に合って良かった。傍にいてあげられないのは辛いから…。

「ムゲン、遠征はもういいの……?」

「ああ。今日帰ってきたんだ…」

「そっか。とりあえず入って」

彼女は俺を部屋へ勧めた。

俺は彼女をベッドに腰かけさせるのを手伝う。

「そ、そんな……気を遣わなくていいんだよ?」

「いや。……そういうわけにはいかないさ」

「ありがと……」

彼女は笑った。その笑顔につられて、俺は笑顔になった。

「あ、そうだ。子供なんだけどさ」

「ん?」

「えっとね、女の子なんだって!」

女の子。可愛い笑顔が見れそうだ…。リナに似るのか、俺に似るのか…。俺としては

リナに似てもらったほうが嬉しいんだが。

「……そっか。じゃあ、名前は「アウロラ」になるのかな……」

「うん。あなたと……私の子」

な、なんかその言葉を聞くと、凄い緊張してしまうのだけど……。

「あ、ああ……」

「ふふっ……。うれしいなあ……」

「俺も、しばらくは休暇を貰えるから、一緒に過ごそう……」

「ほんと!?じゃあ……近くにいてね?」

「ああ。一人にしない」

彼女は、幸せそうだった。俺にできることをやる。今はそれで……。それだけでいいんだ。

38：虹の花

宇宙世紀0089 俺はある日、リナと共に街へ買い物へ。
足りない物を買ってこいとファングに頼まれたからなんだが……。

「お前は無理してついてくることなかったんだぞ……う？」

「だってさ、『一人にしない』って言ったでしょ？」

「……まあ、そうだけどさ……」

「嫌だった……？」

ちよつと悲しい顔をするリナ。そんな顔されちやあ、俺が断れないのを知っててやってる……。

「……………いや。いいよ……………」

「ふふつ……………。そう言ってくれると思った」

「ったく……。それで、何買うんだっけな……」

「えつと……………」

彼女が必要なものを読み上げる。

食材と、後……ユーリのお菓子……。正直、後者が一番お金かかるんだよな……。

「よし、じゃあ先に食材買いに行くか」

「うん」

俺たちはゆっくり歩き始めた。

「……そういえば、今日の夕飯どうしようか……？」

「あー。皆が何食べたいかによるんじゃないか？」

「そうだね……。私的にはお鍋が食べたいかな……」

「……まあ、楽だし、それもアリだな」

「でしょ？一応買っておこうか」

「そうするか」

俺達は、プラスで鍋の食材も買いそろえる。

「ま、これくらいでいいんじゃないか？」

「うん。……次は、ユーリちゃんのお菓子……かな？」

「……お前、ユーリの事『ちゃん』付けで呼ぶんだな……」

「え……？な、なんかおかしかったかな……？」

「いや、そういうわけじゃないけど……」

彼女は『ちゃん』付けてイメージが湧かない。

「まあいいや……えつと。まあ、この書いてあるヤツ買えばいいか」

「うん。とりあえず……ね」

彼女も少しだけ苦笑している。流石に多い……。これを3日あれば全部食べてしまう彼女が恐ろしいよ……。

カゴ一杯のお菓子と、食材を買って俺たちは艦に戻る。

店を出ると、もう太陽が沈みかけていた。

グロリアスに戻るには、丘を越えなければならぬ。だからあまり彼女を連れて行きたくはなかったのだが……。

「あ……。夕日だ」

「ああ……。そうだな」

「ねえ。ちよつとだけ……休憩したい……」

「ん？ああ。そうするか……。丘の上だし丁度いい……」

流石に彼女にはこの丘でさえ辛いだろう……。

彼女はゆっくり座り込む。

「大丈夫か……？」

「……うん。ちよつとだけ……疲れただけだから……」

見るからに調子が悪そうだ。無茶しすぎたんじゃ……。

「リナ。本当に大丈夫か……?」

「はは……。大丈夫だよ……。心配しすぎ」

「……心配にもなるさ……」

「ありがと……。でも、ちよつとだけ休憩したら動けるから」

苦しそうだ……。どこか、横になれる場所があればいいんだが……。

「ん?その背中は……。お前さん、ムゲンじゃないか?」

「……えっ……?」

振り向くと、随分と懐かしい顔。

「おお!やっぱりかあ!!でかくなつたなあ!!もう6年ぶりか?」

「ヘンリーさん……」

「おっ!覚えてたか!どしたんだ?また悩んでるのか……?」

「いや……。実は——」

彼女の事情を説明しようと、彼女を見ると彼女はその場で倒れていた。

「リナっ!!!」

「どうした!?まずいな……!手を貸す!家まで運ぶぞ!!」

「は、はい!!」

彼は自分の荷物を投げて、彼女の所へ駆け寄る。

俺は彼と共に彼女を家まで運んだ。

そして、ゆつくりとベッドへ寝かせた。

「……………」

「この子は、あんときの子じゃないか…」

「ええ。……………」

やっぱり艦で静かにさせておくべきだった。

「大丈夫だ。疲れて眠っているだけだ」

「……………」

「心配か…?」

「当然ですよ……………」

「見た感じ、もうすぐつて感じだな」

「はい…………。安静にしてほしかったんですけど…。やっぱり、強引にでも艦で休ませ

ればよかった…」

「まあ、起きてしまったことは仕方ないさ。彼女が起きるまで、ここにいればいい」

「すいません……」

「気にすんなよ。コーヒー出すけど、暇ならうちのガキ共構ってやってくれないか？」
彼は俺の肩に手を置き、微笑む。

「ええ。いいですよ」

俺は、子供達の所へ行き、彼らを眺めた。

すると、それに気づいた一人の子供がこちらへ歩いてくる。見た感じ、まだ7才くらいの少年。

「おい！お前!!」

「……な、なんだい？」

なるべく優しく対応する。

「お前！昔も来たよな!!」

「えっ……。覚えてるのかい……？」

「あつたりまえだろ!!このオレサマだぞ!!」

少年は、両手を腰に当て、エツヘンと胸を張った。

見ている、なんだか可愛かった。

「……………ふっ……」

「なんで笑うんだ！」

「いいや。俺の知ってるやつに似てただけだよ」

カカサが子供だったら、こんな感じだったんだろうか。

いや、もつとうるさかったかもしれないな…。

「へー。どんな奴なんだ!!教えろ!!!」

彼が詰め寄る。ちよ、ちよつとだけ身を引いてしまった。

すると、それに気づいたヘンリーさんが、彼にゲンコツを与える。鈍い音がこつちにも聞こえた。

「コラ」

「いてえっ!!な、なにすんだよお!!!」

「初対面のやつに挨拶もなしにお前とか言うんじゃないやねえ」

「ま、まあまあ……」

彼と少年の間に割って入る。

「ううー……。だからって殴ることないじゃんかよー!」

「お前がちゃんとしてたらそんなことしねえよ」

彼は俺に向き直り、言う。

「すまん。俺一人で育ててるから、どうも俺に似てしまっただけ……。すまんが、少しだけ

相手してやってくれ」

「ええ。もちろんですよ」

彼はそう言つて再び台所へ向かった。

「うう……。いてえ……」

少年は殴られたところを擦さすつている。……そういえば俺……父さんに殴られたこと
なかつたな……。どんな感じなんだろう……。

「大丈夫かい……?」

「べ、別に! いたくなんか……ないし」

「その割に、ずっと殴られた場所擦さすつてるじゃないか」

「ぐっ……。うるさいなあ……!!」

「どれ、こつちにおいで」

俺は少年に手を広げた。

「な、なんだよう……。オレはべつにそんなの……」

「……じゃ、こつちから……!」

俺は少年を抱き上げた。

「な、なにすんだ! はーなーせーつ!!!」

「良い子だ……。痛かつたな?」

抵抗する彼に笑って見せる。

すると、彼は泣きそうな顔をしながら言う。

「うっ……ぐっ……！痛い……！」

「さ、さすがにきつかったろう……？ほら、いい子だ」

「うえーん!!!」

ついには泣き出してしまふ。

「よしよし。泣かなくていいんだぞ」

「ぐすっ。ズズツ……オレの事なんか……」

しばらく撫で続けていると、だんだんと落ち着いてきたようで。

「ヘンリーさんも、君が嫌いで殴ったわけじゃないよ」

「でも、いつつオレ殴られる……」

「ああ。君が好きだからね。それだけ、愛を持って育ててるのさ」

「……そんなのわかんない」

「いつか、きつと理解できる時が来る」

「……お前……じゃなくて……えつと……」

「ムゲンだ。……どうした？」

「ムゲンも……そういうことあったの？」

彼はすっかりしよぼくれて、強気の口調ではなくなっている。

「…あるよ。君みたいな時期もあったんだから」

「そうなんだ…。オレ…。いろんな話聞きたい…。」

「ああ。いいよ…。どんな話がいい？ロボットの話でもするか？」

「ロボット!?あれでしょ?もびるすーつ!」

「…ああ。良く知ってるね」

「聞く!!ききたい!!」

少年は、目を輝かせて俺に詰め寄った。

「わかった。聞かせてあげるから、もう泣くな?男だろ?」

「……うん!」

すると、陰でコソコソこちらを見守っていた子供たちも俺の周りに集まってくる。

「何の話するのー?」

「ぼ、ぼくも…き、ききたい……」

「わたしもきくー!!」

「色んなことを話してあげるよ。さあ、皆座って」

俺はそれから、色んな話をした。

MSの話…。俺と家族の出会い。

リナとの馴れ初め……なんかも話したりした。

「まあ、こんな所かな……」

「おもしろー!!」

「むげんつてすごいねー!」

「凄くなんかないさ。もしかしたら、君たちは俺よりすごい事を出来るかもしれないんだから」

「そうなの?」

「ああ、そうさ。自分がしたい事、そのために必死に頑張れば、いつか叶う」

「あ、そうだ。君たちは、ニュータイプという言葉聞いたことはあるかな?」

「なにそれー!」

「にゅーたいぷ……?」

「ニュータイプっていうのは、簡単に言えば凄い奴なんだ。ちよつとした先の事を予測出来たり」

「ニュータイプ同士なら、黙っていても会話が出来たりとか……」

「すっげー!!」

「いいなあ! なつてみたいー!!」

「ああ! なれるとも! ここにいる全員に、その素質があるんだからね」

「すげー!!オレもニュータイプか!？」

「ああ。沢山学んで、沢山経験する。辛いことがあったって、仲間て共有して乗り越える」

「きつと、それだけで皆…ニュータイプだ。人の痛みを、ともに共感する…。それは、誰にでもできる事じゃないから」

「うーん…。むずかしい…。」

「はは。ごめんね。ちよつと難しかったかな」

首をかしげる少年に、俺は微笑んだ。

「お前らー。片付けの時間だ!さっさと片付けないと、飯食えねえぞー!」

その言葉と共に、子供たちは片づけを始める。

「待たせたな。ムゲン、コーヒー出来てるぜ」

「あ、わかりました」

俺は立ち上がり、椅子に腰かける。

そして、コーヒーを一口。あの時と変わらぬ味だった。それがなんだか懐かしくて

…。

「どうしてこの街に?」

「あ、食材を買いに来たんですよ。たまたま近くに停泊中で……
「なるほどな。……にしても、随分大きくなった」

彼は、久々に会った息子を見るような目で、俺を見ている。

「……にしても、あん時の坊主が、もうすぐ父親か……。長生きつてのはしてみるもんだな」

「まだまだヘンリーさんは若いですよ」

「おつ！言ってくれるねえ。まあ、少しは自信あるけどな？」

「ははは！自分で言うなんて！」

「だろ、でもまあ……。おめでたいことだよ。まったく……」

「ええ……。最初聞いた時、驚いて声が出ませんでしたよ……」

「ま、誰だつてそういう反応になるさ。……予定日とかはもう聞いているのか？」

「はい。……確か、3月12日……」

「もうすぐじゃないか。楽しみだな？」

彼は、微笑みながら言う。

「……まだ、実感がわかなくてですね……」

「まあ、良い事じゃないか。あんな可愛い子の子供なんて」

「俺は……。幸せ者ですよ」

「自分で言えるくらい……成長したんだなあ……。なんか、嬉しくなっちゃおうよ」

「ったく……。数年前までしょぼくてたガキが、ここまで大きい背中になってるなんてな……」

「……懐かしいですね」

「しかも、前とは雰囲気が全く違う。……お前の中で色々変わったんだな」

「はい。あなたのおかげでもありますよ。もちろん、ほかの人にも助けられましたけど」

「……俺でよければ、また力になるさ。それが——」

「大人の責任。ですよね？」

遮ってその言葉を言うと、彼は声を上げて笑った。

「ふっ……はっはっは!! そうだ! お前も大人になったんだ。今度は伝える側に立つんだぞっ!」

「……はい。まだ、何を伝えたらいいか分かりませんが……」

「まあまあ。人つてのは不完全だ。親つてのは、逆に子供から教えられることもある。これは、俺も体験があるから言える話だよ」

「……価値観の変化……とかですかね？」

「いや、そんな具体的かどうかは分からない。だが、学ぶべきことはあるはずだ」

「…ええ。わかります…」

「そうやって、人つてのは成長を繰り返す。だから、伝える事とか、意識する必要はない」
「ええ。ただ、辛いときは傍にいてあげて、悩んでいたら優しく背中を押す。それだけで……」

「ああ。それだけでいい。親って言うのは、それを自然にしているものさ」

「……………」

「まあ、気張るなよ。これは、素晴らしい事なんだからな」

「…はい」

俺は、静かにコーヒーを飲んだ。

ふと、一つだけ思い出したことを口にする。

「あ、ヘンリーさん…」

「ん？どした？」

「…………俺、孤児院を作りたいんです」

「孤児院を…………？そりやまたどうして？」

「…あの時、あなたと子供たちを見て、少し憧れを覚えました」

「それで、それから…両親がいることの幸せを、少しでも感じてほしい。失うだけじゃな

く、それを埋めてあげたい……」

「お前……」

「……」

両親を失う辛さ……。【失わせてしまった】俺の……せめてもの償い……。

互いに、寄り添うだけでも、人は寂しさを消せるから……。

それを、今度は俺が伝えたいから……。

「……わかった。俺も協力しよう」

「え……？」

「とりあえず、家だな。孤児院を作るにしたって。土地は必要だ。場所は決めてるのか

？」

「……ええ。少しは」

「なら、まあ今日は無理だが……また今度会おう。そしたら、俺が孤児院を建ててるのを手

伝ってやる」

「ヘンリーさん……」

「これは、俺がお前にしてやれる最後だ。お前はもう既に……親離れしてるんだからな」

「……ありがとう……」

「本当に大きくなったな……。お前から伝わる。お前は一人じゃないってな。お前のそ

の笑顔が、すべて教えてくれている」

「……………」

「さて、そろそろ彼女の様子を見に行ったらどうだ？」

「…そうですね。ちよつと見てきます」

俺は、彼女の所へ向かう。

「……………」

「……………ん…？」

「リナ、目が覚めたか…？」

ゆっくり彼女の目が開いた。

「……………ここは…？」

「懐かしい場所さ。とは言っても、リナは一瞬だけしかいなかったけれど」

「……………そつか。ごめんね、迷惑かけちゃった」

「気にするなよ。俺も迷惑かけてきたんだし、お互い様だろ？」

「…ありがと。そう言ってくれると助かるよ」

彼女は微笑んだ。

「お目覚めかい？嬢ちゃん」

「あ……………。あの時の…」

「ああ。久しいね。ムゲンから話は聞いた。おめでとう」

「……ありがとうございます」

「さて、ムゲン。彼女を連れて、帰るんだろ？」

「ええ。流石に長居させてもらったので、そろそろ帰ろうかと」

「そうか。んじゃ、また今度、会いに来い」

「……はい」

その日は、彼の家を後にした。

彼女の手を引きながらゆっくり歩く。外は既に夜で、彼女は少しだけ震えていた。

「……リナ……？」

「ムゲンは……」

「うん？」

「こんな私でも……。迷惑かけちゃう私でも……好きでいてくれる？」

「……当たり前だろ。今更嫌いなんか言えないさ」

「…………あり、かと……」

「……なあ、リナ」

「…………？」

「子供が生まれても……孤児院を経営したいって言ったら……許してくれるか……？」
「……」

少しの沈黙。

そして、彼女は言う。

「……いいよ。ムゲンの夢だもの。私も協力する」

「……ありがとう……リナ」

綺麗な月の光が、俺と彼女を照らしていた。

後日、俺は再びヘンリーさんの所へ向かった。

「さて、孤児院の話だったな？」

「……はい」

「でも、いいの？もうすぐ子供が生まれるつてのに……。彼女が許さないんじゃないか？」

「……彼女から許可はもらいました。子供が生まれたら、我が子が一番になつてしまうのは当たり前ですけど、それでも……」

「まあ、お前の決意が変わらないのなら……。それで、どこに建てるんだ？」

「……えっと、トリントンの港の近くに、海と街が見渡せる丘があるんです。そこに、建て

たいと思っています」

「なるほど。トリントンってーと、オーストラリアか。結構あるな」

「……」

「まあいい。なら、こっちで材料を用意して送っておく。トリントンに戻ったら、いつでも建てられるようにな」

「……ありがとうございます」

「すまん。材料しか手配できないが」

「いいえ。構いません」

「……しばらくは会えなくなるな」

「はい……」

「それじゃ、元気でな」

俺は扉を開く。歩き出そうとしたその時。

「彼女によろしくな。体は大切にしろって、言っておいてくれ」

「……はい!!」

俺は歩き出した。

トリントンへ戻った俺たちは、孤児院の話を全員に打ち明けた。

すると、フアングが…。

「ああ。いいぜ。協力しよう」

「フアング…」

フユミネはあまり乗り気ではない。

「まあ、いいじゃないか？フユミネ。ムゲンの頼みだ。断るわけにはいかないだろう？」

「……………わかった。俺も手伝う」

「それじゃ、ムゲンの孤児院を部隊の全員で作るぞ!!」

フアングが、主となり、全員で作業をする。

丘の上には何も遮るものもなく、そこから海を一望出来るのは気分がいい。

「さーて！組み立てるぞー!!」

「「「「おー!!」」」」」

それから、俺も組み立ての手伝いや、丸太を運んだ。

途中でオペレーター達が差し入れてくれたり。

きつと……………戦争がない時代は、こうやって仕事をしていた人たちがいたんだろうな

……………。

「ムゲン。俺も手を貸す」

「道夜!？」

「たまたま通りかかってな。それに、もうすぐだろ?」

リナの事だ。もう予定日まで2, 3日もない。

「ああ……」

「さっさと仕上げるぞ。それまでに完成させて、ここで軽くパーティーでも開こう」
「お前、そんなキャラだったか?」

「……嬉しいのさ。大切な友が、子供を持つって聞いて……」

「道夜……」

「子供は、祝福されて生まれてくるべきだ。今度は、俺たちが祝福する番だろう?」

「……ありがとう。相棒」

「よせ……。照れる」

彼は、心から喜んでいたんだろう。それが、言葉から……表情から伝わった。

「ふっ!!よし!終わらせるか!!」

「ああ」

それから、気が付けば、周りには部隊の全員が協力して、家を作り上げている。その光景で胸が一杯になる。……ただただ嬉しかった。

そして、3時間後。ログハウスのような、木造の家が完成した。

しかもおしやれなベランダ付き。これはリナが喜びそうだな。

「……できたあ……」

「さすがに疲れたな……。普段こんなことはしないから、使わない筋肉が痛む」

「俺もだ……」

「さて、この家のお披露目は、もう少し先だな？」

「ああ。今は、見せない。ところで、道夜……。お前は どうするんだ？」

「出産の予定日までは俺も艦にいることにしてる。そこから3日くらいでまた仕事さ」

「そうか、大変だな……」

「お互い様だろ？」

俺たちは顔を見合わせて笑った。

「さて……艦に帰るか」

「みんなありがとう!! さあ、帰ろうか!」

全員がゆっくりとグロリアスへと戻っていく。

宇宙世紀0089. 03. 12 ……この時が来た。エトワールがグロリアスへ。

どうしても、この日だけは仕事を入れなかったらしい。

さらに、事情を知ったエトワールが、かつて仲間だったエミリーを呼んでいた。

「……………」

すごいソワソワする。病室には女性以外入ってはいけないと言われ、扉の近くをふらふらと歩く。

エミリーは俺を心配して残ってくれた。

「落ち着けムゲン」

腕を組んだ道夜が静かに言う。

「あ、ああ……………わかつてはいるんだが……………」

「まあ、気持ちは理解できなくはないが……………」

「まあ、ムゲン。とりあえずソファに座れ」

フアングが俺を強引に座らせる。

「あ、ああ……………でもな……………。ううん……………」

「緊張するのも無理はない。だが、彼女を信じてやれ。彼女は強い。お前が一番知っているはずだ」

「……………」

「まったく…落ち着きがないのは良くない事です。それで父親が務まるのか、私は心配

です」

エトワールは目を瞑りながら、冷静に言い放つ。

「いや、なんとというか……だな……」

「いいですか？あなたは、もうすぐ父親なんです。その責任と、重さを持って行動してください」

「まあまあ、エトワール。彼の気持ちも理解してやれ」

「……女性の出産は、母親の命にも関わりますからね。あなたの気持ち、少しは理解できます」

「…………リナ……」

「彼女も今戦っています。私達が、死線を潜り抜けるよりも、凄まじい戦いを」

「ですが、それを信じて待つのも、あなたの役目です」

「……そうだな」

「ムゲンさん。大丈夫ですよ！きっと丈夫で可愛い子が産まれてきますよ！」

「エミリー……」

「こういうとき……お父さんは確か、あ！思い出した！」

彼女は俺の手を取り、両手で強く握った。

「……………」

「エミリー……？」

「祈りましょう。無事に生まれてくることを願って」

「……………ああ」

俺は祈った。どうか……彼女が無事で……そして、子供も無事に生まれてきてほしい。

それから、1時間くらい経っただろうか……。

病室で、赤ん坊の泣く声が聞こえた。

「……………!!!」

俺は思わず立ち上がった。

「やっとか……ムゲン!!」

フアングは大声をあげて俺へ言った。

「……………あ、あ……………!」

「行つてやれ。お前の子だろ？俺たちは後で会えるからさ」

道夜は微笑んで、それだけを言う。

「おめでとうございます。さあ、その目で、その手で……見てきてください」

エトワールは、丁寧にお辞儀している。

「わあ！生まれたんですね!!!早く会ってあげてください!!!」
エミリーは飛び跳ねている。

「ああ……！行ってくる！」

俺は……ゆつくりと扉を開いた。

「……おお！ムゲン中尉……いや、ムゲン君!!」

「サムさん！リナは……!?!」

「……頑張ったよ。元気な女の子が生まれたよ」

夢じゃない……現実だ……。

「ムゲンさん。ほら、こっちです」

ユーリが俺の手を引き、小さい子の所へ案内してくれた。

その子は、リナの腕の中で、静かに眠っていた。

「………リナ……」

「……ムゲン……？ほら、見て………あなたの子だよ」

涙で……前が見えない……。

「リナ……良く、頑張ったね……」

「当たり前でしょ……？………私のお母さんも……こんな気分だったのかな……」

「……………ああ。きつと…そうだ」

「ほら、抱いてあげてよ…」

俺は、ゆっくり彼女の腕から、その子を抱き上げる。

その子は、とても可愛い…女の子だった。

俺の子だ。正真正銘……。俺は…親になったんだ。

「アウロラ……」

俺は、彼女を優しく撫でた。

涙が、止まらない。

「リナ…。ありがとう……………！この子に会わせてくれて……。お前が生きていてくれ

て……」

「もう……。ムゲンってば……」

「おおー！可愛いですねー!!これがムゲンさんの子ですかー!」

ユーリも、この時はふざけるつもりはなさそうだった。

「……………」

顔を見つめる。リナに、よく似ている顔だ。特に、眠っているその寝顔は彼女そつ

りで……。

その温もりが伝わる。

「可愛いな。本当に……………」

「ええ…………。リナ。あなたは凄いですよ。本当に…………」

ユーリが珍しく涙を流している。

「ううん。ユーリちゃんも、皆がいたから頑張れたんだよ？」

彼女はユーリの頬を撫でた。

…………アウロラ……。その名の通り、【虹】のように美しく、かわいい子だ。

だめだ、胸が一杯で…………どうしたらいいかわからない。

「リナ、アウロラを…………」

「もう、いいの？」

「ああ。なんか、感動してしまって…。俺、少し外に行ってくる」

「気を付けてね…………」

「ああ。ちよつと空気を吸ってくるだけだよ」

彼女の腕へアウロラを戻し、病室を出る。

「…………どうだった？」

全員が期待しながら答えを待っている。

俺は、笑顔で答えた。

「とつても可愛い女の子だよ……。まったく……。リナは凄いよ……。本当に……」

「そうか……。そうかあ!! やったな!! ムゲン!!!」

ファングは、大喜びで叫ぶ。その目には少しだけ涙が。

「これで、お前は父親か……。おめでどう。この日を共有できた俺は、幸せ者かもしれないな」

道夜は、素直に笑ってくれた。

「ムゲン隊長。あなたは、もう父親です。その責任と、誇りを持ってください。本当におめでどうございます」

「ありがとうございます……エトワール」

「……当然のことを言っただけです」

彼は、少しだけ照れていた。

「可愛かったですか!? 私も早く見たいです!!」

「ああ! すつごく可愛かった! ……君のお父さんにも…見せたかった」

「いいや。本当は…グレイにも、フィアさんにも……。そして、父さんと母さんにも……」

「……お父さんの分まで、私が見ますから! それで、ちゃんと伝えます。これは、生きている人にしかできないことですから」

「そう、だね……」

外に出て、思いつきり深呼吸していた時。

「よおー！ムゲン!!」

聞き覚えのある声が聞こえた。

「…カカサ!? どうして…!?!」

「いやー。どっかの風のうわさで、君の子供が産まれる予定日は今日だって聞いてさー」

「……どうだった? ムゲン」

「クロノード……」

二人まで会いに来てくれた。

「凄い、可愛かった。小さい花のように……綺麗だったよ」

「そうか……。おめでどう。お前ならいい父親になれる」

クロノードが俺の肩に手を置いた。

「……ありがとう」

「ムゲンー!!」

クロノードの後ろから、少女が走って寄ってくる。

そして、俺に飛び掛かった。

「おっ!?!はは! ルナちゃんじゃないか! 久々だね!!」

「ムゲン! お久しぶり!!!」

「ああ。久しぶり!」

「ムゲン、子供出来た?」

「……ああ。出来たよ」

「じゃあ、ルナとはもう遊んでくれない…?」

「そんなことないさ。ルナちゃんはルナちゃん。アウロラはアウロラ。どちらも大切だ」

「そっか! うれしい!! ねえ、パパ」

「なんだ?」

「ルナもアウロラ見たい!!」

それを聞くと、彼は少し難しい顔をした。

「……少し難しいかもしれない……」

「なんで?」

「俺たちは——」

「ああ。会わせてあげるよ」

彼の言葉を遮って、彼女に言う。

「ムゲン!？」

「誰も、君たちを止めはしない。もう、俺たちは仲間だろ？戦う場所が違うだけだ。一度なら、目を瞑ってくれ」

「…………お前が言うなら……」

「わーい！アウロラ見る!!」

俺は、彼らを連れ、再び艦内へ。

病室の前へ。

扉を開き、彼女の所へ行った。

「どしたのムゲン…………？あれ…………。ルナちゃん…………？」

「リナだー！久しぶり!!」

「久しぶり…………！元気にしてたかな？」

「うん!!とつても元気ー!!」

「ほら、ルナちゃん。この子がアウロラ…。ルナちゃんとは5才の差があるよ」

「つてことはルナはお姉ちゃん？」

「…………ああ。そう言うことになるね」

「そっか…。ルナ、お姉ちゃんなんだ…………!!」

「ふふ……。かわいいでしょ？」

「うん!!すっごいかわいい!!」

後から入ってきたカカサがリナに駆け寄った。クロノードは少しだけそれを見て呆れていたが。

「りなっち頑張ったねー。どうだった？痛くなかった？」

「えっ!?か、カカサさん:!?それに、クロノードさんまで:?!」

ちよつと驚いている彼女。

「すまない。だが、この日だけは敵味方関係ない。ムゲンがそう言ってくれた」

「で?どうだったのさ?痛かった?ねえねえ!」

「うるさいぞ」

クロノードがカカサを引つ張たく。

「あいたつ!?ちよ、それ卑怯っしょー……。痛いなあ……」

「あはは!!!……。ちよつとだけ痛かったよ。でも:ね」

「それ以上に、今は嬉しさが勝ってるかな」

「……しばらくは安静にしているんだぞ。……ああ、これはムゲンのセリフだったな……」

「すまん、ファイアがルナを生んだ時を思い出してしまつて……」

彼は、微笑みながら彼女に言った。

「ふふっ……。ありがとうございます」

「ムゲンー！」

「うん？」

ルナちゃんがこつちを見て、ニッコリ笑いながら言う。

「今、幸せ？」

「ああ。幸せだ……。とってもね」

それから、2週間ほど経った。

リナは、病室から出てもいいという許可が出たので、俺はアウロラを抱いた彼女を丘の上へと連れて行った。

「どうしたの？グロリアスの中に誰もいなかったけど……。何かあるの？」

「ああ。そこへ行けば分かる」

ゆつくりと彼女を連れ、丘の頂上へ。

そこでは、俺たちが建てた家。その前にテーブルが広げられ、皆が俺たちを待っていた。

「……な、なにアレ……。家……?」

「ああ。……孤児院……。いや、俺たち【家族】の家だ」

そう。これは【家族】全員で建てた家。だから、皆の家だ……。そして、その家は新たな【家族】を作る家になる。

「……すごい……」

「みんな、皆が手伝ってくれた。俺だけじゃない。皆でやったんだ」

「お！来たぞー!!カカサ！引つ張れー!!」

フアングの指示。それを受けたカカサは。

「あいよー!!!……おらああ!!!」

大げさに叫びながらくす玉の紐を引つ張る。

中から、文字が書かれた布が出る。

「……新たな家族を迎える云」

リナが小さく呟いた。

「ああ。この布に刺繡ししゅうを入れたのは、オペレーター達なんだ」

「そうなの?」

「ああ。この家は俺たちが設計して、材料はヘンリーさんが送ってくれた」

「……………」

「気づけば、皆が手伝ってくれてたんだ。クロノードやカカサは、この日のために食材から小物まで全部買ってきて…」

「はは……。すごいや……。みんな………」

「皆、自分にできることをしたんだよ。リナは、リナにしかできない、アウロラを産んでくれた」

「……………ありがとう……。私……………嬉しいよ………」

彼女から涙が零れた。

「さあ、行こう……皆待ってるよ」

「おーい!!早く来てくれよー!俺あ、腹減っちゃってさあー!!!」

カカサが大声で叫ぶ。

「ああ!!今行くよ!!」

「うん。行こう……ムゲン」

俺たちは、辛い思いもする。苦しい思いもする。それでも、こんなに素晴らしいことだっている。

世界を作るのは、人間だ。天才でも、ニュータイプでもない。

だが、【虹】は………どんな人にも平等にその目に映ることができる。

ニュータイプでも、天才でもそれは例外じゃない。

俺たちは………寂しさをなくすために生きている…。

時代が変わっても、人が変わっても。

俺たちは………生きているんだ。俺たちが生きる理由はまだ分からない。

それでも一つだけ言える。俺たち人間は、この幸せを共有するためにも生きているのだと。

38 完

外伝：Episode of Et o i l e

「おい!!早く来てくれよー!俺あ、腹減っちゃつてさあー!!!」

カカサさんが大声で叫ぶ。

「ああ!!今行くよ!!」

それに対して、ムゲン隊長は言葉を返した。

「……………変わりましたね。本当に」

私は、過去の彼の事を思い出していた。

最初の出会いは、私がこの部隊に入隊したとき。

戦艦の中を探索していた時、甲板に彼はいた。

「ここにいらつしやっただんですね」

空を見上げていた彼に、私は声をかける。

短髪の黒髪。黒く全てを飲み込むような瞳は、どこか悲しみを秘めている。

「ん……………?お前さんは……………」

私は、新人で、それなりに緊張していたこともあり、ビシッと敬礼して名前を名乗った。

「第00特務試験MS隊所属のエトワール・ブランシャール二等兵です」

その時の彼は、少しだけ困った顔をしていた。

「そうか……。それで、お前さんは、俺に何か用か？」

「……。そろそろフアング部隊長から召集をかけられていたので。その報告だけ」

淡々と説明する。特にそれ以外する必要も感じなかった。

「んじゃあ、行くか。お前さんも来い。場所わからないだろ？」

……正直、少しだけホッとした。実は格納庫への行き方が分からなかったからだ。自分でも情けないと思う。

「逆にムゲンさんのほうが覚えていなさそうで心配ですけれど」

念のため、確認のつもりで聞いてみる。

「そんなことはないぞ？グロリアスの司令室だろう？」

………呆れた。こんな人がパイロットなんて……。状況判断もできない素人にしか見えない。

ため息をついた後、私は言う。

「やっぱり聞いてなかったんですね……。グロリアスの格納庫です。……まったく」

本当に……困った人だと、その時は思っていた。

私はそのあと、第三小隊のメンバーとなった。ムゲン隊長は第一小隊の隊長になった。

「……」

彼らの幸せそうな場を眺めた。

その顔は、心から幸せそうだった。

「エトワール」

背後からの声。私は振り返りながら言葉を返す。

「道夜様……何か？」

「いい加減その呼び方を止めてくれ。もう、『さん』でいい」

その言葉を聞き、私は少し躊躇ためらいつつ言葉を返した。

「で、では……道夜さん。どうしました？」

「いや。お前は、『何』を見ていたのかと思ってな」

「……彼らです。それがどうかしましたか」

きっぱりと言い切る。特に何かを思ったつもりはない。

「そうか……。それにしても、お前も随分変わったな」

「そうでしょうか」

「ああ。なんだろうな。前より緊張感が抜けたというか……。人と接することが苦ではないように感じる」

「……………」

意識はしていなかったが、思い返せばそうかもしれない。

「お前との付き合いも6年になるか…」

「そうですね。それを言うなら、ユーリさんのほうが付き合いが長いのでは」

「それはそうかもしれないが。俺はお前との話をしている。……6年経てば、人は変わるってことか……………」

「……………」

彼との出会いは、第三小隊に配属された時。

「……………八雲道夜だ。よろしく頼む」

不愛想に彼は私たちに挨拶をした。

「道夜。なんで今更小隊なんです？」

小隊長を呼び捨てで呼ぶ女性。なんて礼儀知らずなんだ……。それとも、長年の付き合いなのか……………」

「フアングの命令だ。仕方ない。新兵も補充されたから、一括で指揮するのが難しいんだろう」

「へー……。面倒そうなので任せましたー」

「……言うと思ったよ。……ああ、すまないな。彼女はユーリ。この小隊の一人だ。こう見えても狙撃の腕は一流だ」

彼の言葉を信じれない。こんな人がパイロットなんて……。

「あ、今私の事疑いましたね？」

「……ええ。あなたみたいなのがパイロットなんて、務まるのか、正直心配です」

「それが、務まつちやうんですよねー……」

「……それで、お前は？」

道夜さんがこちらを見る。私は、丁寧に挨拶をした。

「エトワール・ブランシヤール二等兵です。よろしく願いたします。小隊長」

「……その呼び方は止めてくれ。道夜でいい」

「かしこまりました」

「……調子が狂うな……。そうだな、エトワール。少し見ていてくれ。コイツの腕に關しては、見てもらったほうが早い」

「………見る、ですか」

「ああ」

彼はそう言うと、それこそ手のひらに収まるくらいの小さい的を取り出す。そして、それを外まで持っていていき、置いて戻る。

距離的には100mか140mはあるだろうか。

「さてと…。エトワール。あの的が見えるか?」

視認するにはさすがに無理があつた。私は静かに首を横に振る。

「…当然だな。だが、彼女はここから、拳銃での的の【ど真ん中】を撃ち抜けるんだ」

「そんなバカな」

理解できない。それができるなら、相当のエース…。

「じゃ、早速やつてもらおうか。ユーリ、頼む」

「えー…。お菓子があるのなら別ですけど…?正直得にも何にもならないじゃないですかー」

「…:わかつた。後で自販機で好きな菓子買ってやるから…:」

その言葉を聞くと、彼女は目を輝かせる。

「本当ですか!?!:それならやりますよ」

「商談成立だな?」

「ええ。まあ、私にとっては朝飯前ですけどね?」

彼女は拳銃を取り出し構える。そして、ほとんど狙いをつけずに引き金を引いた。

1発、2発、3発、4発、5発。

撃ち切ると、彼女は拳銃を腰のホルスターにしまった。

「はい、これで終わりですよ。全部真ん中です」

「エトワール、見に行ってみろ」

「はい」

私は格納庫の外へ出て、小さい的を見る。

ど真ん中に穴が開いている。そして、その後ろには5発の弾丸が。

……この人は、相当な腕のようだ……。間違いない。

「この時は、私はいまいちあなたたちを信頼していなかった頃ですね」

「ああ。警戒しているのは、それなりに気づいていた」

「……」

少しだけ怪訝けげんそうな顔をしてみる。すると、彼は微笑みながら言った。

「ま、それからは随分と丸くなったな」

「ええ。道夜さんを尊敬に値する人物と知りましたからね」

「特別なことは何一つしてないがな？」

「そういうところも、信頼される要因の一つでしょう」

「そういうものか」

「ええ」

彼を信頼に値するきっかけ。……それは、私には忘れられない出来事だった。

私達は、廊下を歩いていた。このトリントンでは、私たち以外の部隊も含み、共同で生活する決まりがある。

「……おい。あれ……」

道夜さんが歩くたび、ほかの部隊員からヒソヒソと声が聞こえる。

「ああ……。例の人工ニュータイプだろ？」

「アイツがいるとロクなことない」

「……………」

道夜さんはただ静かに歩き続ける。

「道夜隊長」

「気にするな……。いつもの事だ」

いつもの事……とは、どういうことなんだろう。理解できなかった。

「そもそも、あの部隊がロクでもない部隊だしなあ？」

声を上げて、一人は叫ぶ。わざと聞こえるように。

「違う。あの部隊は、所詮モルモットだしな!!はっはっは!!」

「……撤回しなさい」

私は我慢できなくなつて、彼らに詰め寄る。一言言つてやろうと思つた。

「おっ!?やるつてのか!?二等兵!!来いよ!!」

彼は拳を構える。それに構わず、彼らの所へ歩み寄る。

「エトワール!」

彼の一声。私はその場で立ち止まつた。

「構うな。お前まで同じ立ち位置にいる必要はない」

「……ですが」

納得がいかない……。こんなことが許されるわけがない……。

だが、彼は静かに首を横に振る。そして、目で『もういい』と言つた。

「へっ!首輪をつけておけよ。道夜隊長?」

「へへっ!!そうだぜ!こんな躰しっけの悪い奴には、お仕置きだよなあ?」

彼らは、私に殴りかかろうとする。

「……」

寸での所で、道夜さんが彼らの手を受け止めていた。

「……もう十分楽しんだらう？もう止めておけ。あんまり騒ぎが大きいと、それこそムゲンが来るぞ？」

「……ちっ！アイツは面倒なんだよ！……わーつたよ。これくらいで我慢してやるや」

彼らはつまらなそうに私たちに背を向けた。

「……申し訳ありません。私も少し頭を冷やしてきます」

そう言つて、私は道夜さんを置いて歩き始める。

「待て」

彼の制止。私は立ち止まる。

「……」

「……よく、抑えたな」

「……」

その時の彼の言葉は、私の脳裏にある、「あの人」を思い出させた。

かつて私には、恩師とも言える、命の恩人がいた。

その名は、連邦軍ではちよつとした有名な名前。

【レビル將軍】と言えば、誰であつてもその名を知らない者はいないほどだ。

私は、彼に救われた。

私が物心ついた時には、既に一人だつた記憶がある。だいたい、5才くらいだつたであらう。

両親の顔も知らず、その温もりさえも感じたことがなかつた。地球でも、貧困や、差別は有つて、私も虐げられる側の人間。別にそれをどうとは思わない。私自身、盗みも沢山働いたし。

だが、そうでもしなければ、私の明日は無かつたと言つても過言ではない。ある時、私は白衣を着た研究者たちに連れていかれそうになつたのを今でも覚えてゐる。

しかし、その時に待つたを掛けたのがレビル將軍だつた。

彼が一言いえば、彼らは黙つて手を引いた。

そして、そのあと彼は私に手を差し伸べ、言う。

『……………立てるか？』

尻もちをついていた私に、微笑みながらそう言ってくれた。

それから私は、彼の養子としてしばらくの間、彼の身の回りの世話を手伝った。

彼は私の知らないことを沢山教えてくれて、解らなければ何度でも同じことを説明してくれた。

私が言われたことをやってみせると、彼は我が子のように私を抱き上げて、喜んでいたのが今でも忘れられない。

彼の指導のおかげで、私はある程度の礼儀作法、人との接し方、料理などの家事全般をこなせる様になったのが9才。

それから6年後。「二年戦争」の開戦。レビル將軍と別れる前日の話。

私が、パイロットになったきっかけでもある。

それは、將軍がもう、この家には帰ってこれないという話だった。

私は納得がいかなかった。だが、彼は静かに言う。

『…戦争だから、仕方ない事なんだよ』

【戦争】…。その言葉は、まだ私には理解できかねる言葉だった。

今まで聞いたことのない言葉が、彼から放たれる。

その言葉は少しだけ、私の胸に刺さった。

チクリとした痛みを、確かに感じた。

彼はさらに言葉をつづける。

『エトワール。君はもう、独り立ちできる』

突然言われても、理解が追いつかない。つまり、もう彼とは会えないということだろうか。

『私は、レビル様を置いていくなどできません』

『……嬉しいが、駄目だ。君がそうでなくても、私にはやるべきことがあるのだ』

『……………』

泣きそうだった。それを見た彼は、私の頭を優しく撫でた。

『いいかいエトワール。君は、君がしたい事、やるべきと思つたことをして生きていけばいい』

『やるべきこと……………?』

『そう。私の手を離れ、そして、自分で選択し、その道を進む。そうやってこれからは生きていくんだ』

『……………』

彼は、昔の時のように微笑んでくれた。

それから、私は連邦軍の訓練学校へ入学。

多大な戦績を挙げ、首席で卒業した。

そのころには、もう一年戦争は終戦。

レビル將軍は、亡くなったという話も聞いた。

私は、その4年後、地球連邦軍所属第00特務試験MS隊と呼ばれる部隊に配属されることになり、今に至る。

「……………」

彼の、『よく抑えたな』の一言の雰囲気、レビル將軍と同じものと、感じ取った。

そして、その時から私は、彼への忠誠を誓う。

「道夜様」

「……………急になんだ…?!」

……………おかしいな。尊敬する人には『様』を付けると学んだのだが。

「…あなたは尊敬に値します」

「…よ、よくわからんが……………」

「私に、すべてを教えてください。さつた方と、あなたから同じ雰囲気を感じました」

「そして、あなたは仲間を思いやる気持ちをおぼれていない。連邦軍にしては珍しい事です」

「……俺は、人の命を奪ってきた。だから、せめて仲間を守ることができればいい。そう思っているだけだ」

「………なおさら、私はあなたを尊敬してしまいました」

彼についていけば間違いない。私はこの時確信した。

「……ま、まあ……。いいか。改めてよろしく」

彼は手を差し出す。私は、彼の手を両手で取り、深々とお辞儀した。

「……………」

道夜様はそれに対し、非常に困惑していたのを今でも覚えている。

その数時間後、ガンダム試作2号機が奪われ、「デラーズ紛争」の火蓋が切って落とされた。

私はその時、グロリアスの護衛をユーリさんと共に務めることとなる。

「第三小隊、グロリアスの護衛。俺はムゲンを追う！」

道夜さんからの命令が下される。

「了解ですよー」

「かしこまりました」

そして、道夜さんは機体を動かし、ムゲンさんを追って行った。

「……………」

「エトワールさんでしたっけ？」

「…なんですか」

「面白い事言つてください」

任務中に何を言い出すんだこの人は。

「…任務中です」

「えー。つまらないー。あーあ……お菓子の雑誌でも持つてくればよかった…」

本当になんなんだこの不真面目な人間は。正直、心の中で腹を立てていた。

でも、お菓子の雑誌をチョイスする所は嫌いではない。

「レーダーに反応……………さん……………」

「1機撃墜しました。後2機、やりますよ」

「……………」

状況把握できていないのは自分だったのか…。それとも彼女が余程反応がいいのか。

それから、私達は協力し、敵を撃破する。しかし、相手の奇襲と、グロリアスへの被

害で、次第に圧されつつあった。

「これ以上……………!!」

流石に度重なる爆撃で後退せざるを得ない…。

横方向から増援。ムゲンさんが道夜様の機体を引っ張りながら接近していた。

「少尉！まずは正面の敵を！グロリアスをやらせてはなりません！」

「オーライ！任せときな！代わりに道夜を回収してやってくれ！」

「了解！エトワール二等兵。道夜機の回収を！」

「……了解」

私は道夜様の機体に接近し、回収する。幸いそれほど被弾はしていない。

「道夜様。しっかりとしてください」

「ぐっ……………。エトワールか……………？」

「無事なようですね。立てますか？」

私は機体を動かし、手を差し伸べる。

「ああ。すまない。助かった」

「当然のことをしたままでです。あなたの部下ですから」

「……………」

そのとき、彼はどう思っていたのだろう。

「思えば、一年戦争から悲劇は繰り返されている。…………ニュータイプが増えなければ

……………」

「そうでしょうか」

「エトワール……?」

確かに、人は愚かで、馬鹿で、融通が利かないかもしれない。

しかし、それでも【彼】を見てみると、そうでもないと思ってしまう。

きっとそれは、道夜さんも同じはず。

「ニュータイプというものがいれば、そんな愚かなことは起こらなくなるのでしょうか？」

「どう、だろうな……」

「そんな確証はどこにもありません。あつても、それは可能性に過ぎません」

「……」

「私は思います。彼がニュータイプであろうがなかろうが、一人の人間であることに変わりはありません」

「それならば、未来を作るのも、繰り返していくのも、結局はニュータイプを含む全ての人類です」

「……私は、【最後の戦い】で聞いた声が……」

それは、グリプス2付近で戦っていた時のこと。

声は、無線ではない、脳内に直接響く声。

私自身にその能力が無いのは自覚していた。

だから尚更混乱してしまう。

だが、声を聞いたのは私だけではない。

【ムゲン・クロスフォード】という人物と関わった全ての人に、その声は聞こえたはずだ。

声の主は、ムゲンさんではなく、彼と戦っていた…ゼロという人物。

その声を聞くまでは、名前どころか声すら知らなかったであろう。

しかし、その声は確かに、主が【ゼロ】であることを確信させた。

『お前は……ニュータイプなはずだ。なら、何故……地球に残ろうとする彼らの味方をしたんだ……!』

『……それは……。きぼうが……。あると……。……しんじたかったんだ……。……か
はっ……』

『希望……?』

『かれらも……。まだ……。くさりきつてないと……。……しんじたかった……。……』

『……たったそれだけの理由で!? 虐殺を……!』

『うん……。ゆるされないことは……。……りかいしてる……。……』

『でも……………ね……………。ニュータイプがさ……………ちきゆうにすむひとを……………じん
るいを……………しんじなくて……………どうするの……………さ……………』

彼から伝わる。その悲しい心が。何故だが、自分までもが苦しくて。

ただ、信じていた。それだけで戦っていた。彼も、私達も。

『かわらないと……………わかつていながら……………。それでも……………つて……………さけ
ばなきや、さ……………』

叫ばなければ……………。だれも聞いてはくれないから。

ニュータイプとは、本来の姿はこうではないと、私は思う。

『きみは……………やさしい……………。てきなのに……………ないてくれるんだ……………』

『……………ないてない……………』

『……………ふふ……………。でも……………ぼくは……………やっとすくわれる……………。おなじ……………』

ニュータイプをみつけたから……………』

『俺は……………』

『うん。……………かんぜんじゃない……………。でも、きみにも……………このじんるいすべてに
……………その【可能性】はあつて……………』

【可能性】……………。その言葉は、今の人類にとつては重過ぎる言葉。

私でさえ、重すぎる。それを一人で背負うには……………。

『…………でも、きみは……その資質が……開花しかけてた…………』

『でも…………。きみはそれを消されてしまった…………。過剰な薬物投与…………。身体の強制的な調整で…………』

『…………人工のニュータイプを作るのに…………。ほんとうのニュータイプを使ってしまつて…………その結果その資質をけされる…………。はは…………じつに…………皮肉だ…………』

『もしかしたら…………。ぼくたちは…………ちがうかたちであえてたら…………。【分かり合えた】…………かもね…………』

『ニュータイプを持つ…………。本来の力…………。共感し、隣人でさえも大切にできる力…………』

本来そうあるべきニュータイプを変えたのは、間違いなく戦争だ。しかし、戦争が無ければその才能は開花しなかつただろう。

それは…………あまりにも皮肉な話だ。【分かり合うため】に、【罪を重ねる】こと…………。

『きみは…………【無限】で…………。ぼくは【零】…………。けつきよく…………。まじわることはない…………』

違う。始まりは全てゼロから。そして1へ…………最後はムゲンへと。

交わらないように見えて、交わっている。

『ふぎけるな！ だったら、【零】がなければ【無限】も！ 1もないんだ!! 君は必要だったんだ!!』

『ひつよう……か……。はじめていわれた……そのことば……』

『……【暖かいね】……その言葉……』

その言葉と共に、私は宇宙の遠くで【虹】を見た。

その光は、私の機体を優しく包み込み、そして、通り過ぎていった。

これは奇跡なのか。それとも、ニュータイプの力なのかは分からない。

でも、それはあまりにも…切ない光だった。

まだ少し肌寒い風が私たちを追い越していった。

空を見上げれば、快晴に映る綺麗な七色の【虹】。

「…虹ですね」

「そう、だな」

私にはその【虹】が眩しく見えた。

だから、【今】は目を背ける。

いつか……私自身で見つめることが出来るように。

ただ、今は……。【現在^{いま}】だけは目を背けていたい。

見てしまえば、私は彼等を守りたくなってしまう。

守ろうとすれば、また再び繰り返す。

それだけは避けたい。その一身で。

「……綺麗だな。虹は」

「……………」

交わるように交わらない。

しかし、それでも人はどこかですれ違う。

それは偶然か、それとも神の悪戯か。

いいや。違う。

必然だ。

その過程で、再び彼らと交わる時があるのなら……。

「……守ります。それが私の意志です」

外伝 完

外伝：迷探偵!?リナちゃん

宇宙世紀0089の………いつだったかな？

私は楽しみにしていたおやつ「ドーナツ」を食べようと思い、ルンルン気分で部屋に戻る。

「ふんふん♪」

鼻歌とか混じって歌ったりしながら、冷蔵庫を開くと、そこに待っているのは

私の愛した、そう！一口食べれば幸せ気分♪のドーナツが……。

無かった。

「無い……」

無いのだ。一度冷蔵庫を閉め、一息ついた後再び冷蔵庫を確認するも。

「無い……」

そう。無いのだ。その欠片一つも。

ドーナツは、冷蔵庫に甘いに香りだけを残して本体はどこへやら。まったくもって謎である。

どうしてドーナツがなくなったのか。昨日の晩御飯なんだったけとか。頭の中でお星様が回っている。

「ハッ……！」

こんなことをしている場合ではない。

今すぐにも犯人を見つけて「愛しのドーナツ」を我が手に戻さなければ……。でも、誰が……？」

少し考えた後、私は食堂に部隊の全員を集めることにした。

「……それで、どうしたんだよ？リナ……」

ムゲンが眉をひそめながらこちらを見つめる。

全員を見渡して、私は叫ぶ。

「みんな聞いて。私の部屋のドーナツが……。無くなってたの！」

「……そうか」

道夜さんが呆れながら言葉を返す。

呆れられようが関係ない。私にとつては一大事。これを食べなければ世界が崩壊してしまふ……つてほどではないけども。

「だから、一人ずつ聞き込みしようかと思つて」

「そ、それで……俺まで集められたと？」

フアングさんは資料を片手に流石に啞然としている。

「俺は甘いものが好きではないと言っているんだがな……」

フユミネさんは静かに言い放つ。

でも、ここで退いたら女が廃るつてもんですよ！

「いい!? みんなに一人ずつ聞いてくからね!!!」

「……リナ、別にそこまでする必要は……」

「あるね! 私にとつては大事なことなの!!!」

「……」

ムゲンは流石に言葉も出ない。

……待つて? 言葉も出ない……?」

しかも、聞き込みをさせないようにするのは……。

もしかして、ムゲンが……?」

「ど、どうしたー? リナー?」

ムゲンが私の前で手を振る。

私はその手を掴んで言う。

「な、なんだ!？」

「ムゲン!!」

「は、はい!!」

「あなたから!!」

「…お、俺まで…?」

「当たり前でしょ」

第一の被疑者。ムゲン・クロスフォード。

私と一番近い関係で、アウロラの父親。

そして部屋はいつも散らかっている。「余計なことを言うな!!!」

「さて、ムゲン」

「はい……」

「あなた、私のドーナツ食べた？」

「いやだから…食べてないって」

「理由は？」

「り、理由!? そんなのあるわけないだろ!？」

「ううむ……。こんな難解な事件だとは……」

「難解も何も、俺は食べてないんだが」

「でもそれも嘘かもしれないじゃん！」

「いやいや。俺はさつきまで機体の整備を手伝ってたし、リナとも会っただろう？」

「うーん……。確かに……」

「それに、アウロラの面倒も見てたんだよ」

「あ、ほんと? ありがとう！」

私は素直にお礼を言った。……うん? なんでお礼を……? って!! 今はそういうことをしてる場合じゃない!!

「ああ。……アウロラ可愛いなあ……」

……どこことなく変態っぽい感じするんだけど。

「つてちがーう!!!」

「うおっ!？」

私は机を叩く。……その振動が腕に響いた。

「いたた……」

「普段やらないことをするからだ……」

「うー……。つて、まだ話は終わってない!!」

「まだ何かあるのか?」

「アウロラの面倒を見てるからって食べてない証拠にはならないよ!」

「……俺が食べた証拠も無いだろ」

「うっ……」

そこを言われると困ってしまう。

「だったら、俺が買うから、落ち着けよ。な……?」

「ダメなの!!!」

私は彼の言葉を遮り怒る。それはもう犬のように吼えた。

「えっ……」

「あのドーナツは限定品なの!!!」

「そうなのか?」

「そう!! あれは、自販機で売ってるやつとはわけが違う!!」

「……は、はあ……」

「一口食べれば気持ちがるんるんになっちゃうくらい美味しいんだよ!」

「……るん……るん……?」

「うんうん!!……その様子だと本当に食べてないんだ……?」

「当たり前だろ? そんなのあったのにすら気付かないんだから」

ムゲンは少しだけ眉をひそめて言う。

「うーん……」

「それに、俺はリナといるときのの方がどんなお菓子よりも甘い時間だと思ってるんだが

……」

「えっ……」

「な、何言ってるのさ! ムゲンってば!!」

彼を平手で叩く。

「グハッ!? な、なんでえええええ!!」

第二、第三の被疑者。エトワール・ブランシャールさんとユーリちゃん。

二人とも第三小隊の一員だった人。

しかも、大の甘党二人組み。……これは間違いない。

「で、何で私まで被疑者にされているんですか」

「ほんとですよリナ。私がかきましたか?」

「私のドーナツ食べたのは二人なの?」

「私は食べていませんよ。私は自前でお菓子を作っているのです。ドーナツくらいは自分で作って食べます」

「私はドーナツはチョコがかかったやつじゃないと食べないんですよ。だから、答えはNOですね」

「ううむ……また難解な二人だ……」

「いえ、ですから、私は自分で……」

「だとしても！あのドーナツは食べたならそれこそ感動しちゃうくらい美味しいんだよ！？」

「……今、何ていいました？」

エトワールさんが目を輝かせて聞いてくる。

「え……、だから、感動するくらい美味しい……」

「私も食べてみたいです。それ」

「そ、その反応じゃ……」

「ええ。私は食べたことがないですね。……どこに売ってます？それ」

「うーん。限定品だったから……」

「そうですか……」

エトワールさんはとても残念そうに肩を落とした。

「ほへー。それで？私はそんなのより、最近出たこっちのエクレアのほうが興味ありま
すけどねー？」

チラシをフリフリしながら言う。

私はチラシをとって、目を通す。

「えつと……」

そこには「新製品！たつぷり生クリームとカスタードのメガ粒子ハーモニー！」と
書かれていた。

見るからに美味しそうである。

「……ゴクリ」

「ね？美味しそうでしょ？」

「どれどれ……。おお！これは美味しそうです!!」

「でもさー。値段が……。ね」

値段を見ると、もう顔も当てられない。それくらいの値段。

「うわあ……。これは流石にキツイかなあ……」

ムゲンに頼んでも、絶対に買ってくれなさそう……。あ、でも意外と色目でも使ったら

買ってくれたり……。？

「今度道夜にでも買ってもらうつもりですよ。あー楽しみー！」

…ユーリちゃんも違うかな。

第四、第五の被疑者。ファング・クラウドさんとフユミネさん。…ところで、ダイゴつてダンゴに似てない？

ファングさんはこの部隊の隊長さん。フユミネさんは傭兵つてことになってるけど…傭兵つぽいところ見たこと無いなあ…。

「リナ、すまないが俺は今手が離せないから、話を聞くだけでもいいか？」

「ええ。大丈夫ですよ」

ファングさんは忙しそうに資料とにらめっこしている。

たしか、先月の損害費や、食費などを上層部に報告するための資料だったかな？

「な、なんで俺まで……？？」

「この流れですし？」

「どの流れだよ……」

「一応聞きますけど、二人とも私のドーナツは……」

「食べてない」

二人が同時に言う。

「……うう……。でも困ったなあ……あれがないと整備が捗らないんですよ……」

「我慢して自販機のを買ったらどうだ？最近の軍用ドーナツも中タイケるぞ？」

「嫌です！ドーナツといえれば手作りに限りますよ！！しかも、あのドーナツは、有名な職人さんが作ったんですから!!」

「……ややこしいな」

「でもそれだけ美味しいんですよ！」

「俺はどれも同じに感じるがな」

「……フユミネさんはたぶん、無いね。」

「俺は、さっきまでずっと自室で資料と格闘していたよ。まったく。この艦のお菓子の購入数は軍の中でもぶっちぎりなのはなんなんだ!？」

フアングさんが頭を抱える。……この人も無い……かな。

第六の被疑者。八雲道夜さん。

今は傭兵業をやつて稼いでる。

……特に言うことはありません。「……扱い酷くないか？」

「さて、道夜さん」

「……ドーナツだろ？」

「！」

その言葉を聞いて私は驚く。

「さつきからずーつと言ってただろう。：俺は食べてないぞ」

「証拠はあるんですか？」

「証拠も何も、お前の部屋にあるなら、俺が入れるわけ無いだろう？」

「でもほら、私の部屋を観察しようとか考えた道夜さんが……」

「お前は俺を何だと思ってるんだ：!？」

「そして、あわよくば私を……」

「おい、妄想が膨らみすぎだ。これ以上はいけない。俺の印象が壊れる」

「あ、すいません」

「まったく……。さすがに人妻を取る趣味も、女性を襲う趣味も無い」

……自分で自分の印象を下げてないですか？

「なんにせよ、もう一度部屋を探してみたらどうだ？」

「ありませんよ！ちゃんと冷蔵庫にしまったんですから！」

「本当か……？」

彼は怪しむような目で私を見た。

「ほ、本当です！たぶん……」

「……まあ、探してくるといいさ」

私は再び部屋に戻り、あちこちを調べた。

天井裏、カーペットの下、ベッド。

排水溝。コーヒーカップの中。

タンスの中。

どこにも見当たらない。

「うーん………」

必死に考える。

「……あつ」

そして、思い出す。ビビツとキターツ!!

そう、ドーナツは自室ではなく、ムゲンたちが建てた新築の自宅のほうの冷蔵庫の中だと。

「あつたああああ!! みつけたああああ!! ひゃっほーい!!」

私は飛び跳ねながら自宅へと向かった。

もうすぐ会える。愛しのドーナツ♪

心を躍らせながら、自宅の扉を開くと……。

「うんめえー!!!こりやあさいこーだあつ!!」

ドーナツを頬張るカカサさんがいた。

「……」

「んぐんぐ。おや?りなつちー!お邪魔してるぜー!!」

「それは……」

「ああこれ?これ、冷蔵庫に入ってたやつなんだけどさー。コレ美味しいねー!!」
なんともいえない怒りがふつふつと湧き上がってくる。

「……………カカサさん?」

「ひよ?…あつ……!!!」

カカサさんが怯えだす。

「ちよ、ちよつとまって……や、やめ…。ハヤマラナイデ……!」

「……………許すと思います?」

にっこり微笑む。

「こ、こわい……た、たすけてえええええ!!」

カカサさんが家から飛び出す。それを追いかけながら叫ぶ。

「まてえええ!! わたしのドーナツかえせえええ!!」

「いやああああ! たすけてえええ!!」

その騒ぎを聞きつけたムゲンたちが走ってくる。

「む、むげんくん!! たすけてえええ!! ひえええ!!」

カカサさんががりつく。

「……悪い。俺は何も出来ん」

「そ、そんなあ?! あっ……」

その内に彼に追いつき、彼の服の襟を掴んで引つ張る。

互いに目と目が合う。

「……は、はは……。ドウモリーナッチー……」

「ええ。こんにちわ。カカサさん……っ!!」

そして、彼らに背を向け、カカサさんを引つ張って自宅まで連れて行く。

「い、いやああああ!! むげんくん たすけてえええ!! しにたくないよおおお!!」

とか、悲痛な叫びを彼が上げていた。

それから、4時間、みっちり彼と話をした後、私は外に出る。

「はあ……………どーなつ…」

泣きそうになりながら歩き出す。

俯いて歩いていると誰かとぶつかる。

「…リナ？」

「あ…むげん」

「どうした？ドーナツ食べられなかったのか…？」

「…うう…」

「……………ほら」

彼は小さい箱を私に手渡す。

「え…？」

その箱には見覚えがあった。冷蔵庫に入れたものと同じ…。

え？同じ!?!つまり…

ドーナツ!?!

私は急いで箱を開ける。やはり、あのドーナツだった。

「…エトワールが必死に探してき、店まで行って買い占めてきたんだと」
「……」

「そしたら、ドーナツの情報を教えてくれたリナさんへって渡されたんだ」
「……うれしい…！ムゲンより好きになりそう!!」

「えっ……」

ムゲンが灰色になって固まる。

まあ、そんなの気にせず、私はドーナツを一口かじった。

「美味しい!!…しあわせっ♪」

外伝 完

39 : 先生

宇宙世紀0089. 4. 14 第00特務試験MS隊へ新兵と新型MS配備。

第00特務試験MS隊。それは、常に第一線で戦い、戦闘データの収集を主として行動する特殊部隊。

この時代になると、連邦軍内部でその名を知らない人はいないほどの有名な部隊になっっている。

メンバーのほとんどが一年戦争からこれまでを生還し、今も生き続けている。

しかし、その個人的なメンバーたちに加え、休暇がないという理由でこの部隊に配属されることを望む人はほとんどいない。

そんなある日。俺たちの部隊に、新しいメンバーが増えることとなった。

ファングが全員をブリッジに集め、新人を待つことになったのだが……………。

何分待っても来ない。

「……………ファング」

「なんだ？」

「俺たちはいつまでこうして待っていていればいいんだ……?」
フユミネが彼に問う。

それに対しファングは、肩を竦めて言葉を返した。

「まあまあ。新人だし、慣れてないんだろう。もう少し待ってやってくれ」

「………はあ……」

さすがにため息しか出ないようだ。

かく言う俺も、さすがにこれ以上待つのはどうかと思っていた。

「なあ、ファング」

「どうした? ムゲン」

「俺が迎えに行つてくるか?」

俺の言葉に、彼は少しだけ表情が曇った。

そして、言葉を頭の中で選んだあと口を開く。

「それがな……。今回の新人は少し『厄介』でな」

「厄介……というと?」

ため息を吐いた後、彼は言葉を繋いだ。

「………実は、俺も顔を見たことがないから探しようがないんだよ」

「は………?」

呆気にとられた。部隊長なのに顔を見たことがないだつて？

「……」

「……………」

しばらくの沈黙。全員の視線が俺とファンクに集まっている。

このままじゃ埒が明かない。

「まあ、俺が探してくるよ。皆、少し待っててくれ」

「お、おいムゲン!?!」

「迷ってるかもしれないだろう？行ってあげないとき」

彼にニツと笑うと、彼はこれまた大きくため息を吐いた後

「……わかった。待ってるから早く見つけてきてくれ」

「分かってる」

俺は小走りにブリッジを後にした。

「さて……」

ブリッジから出て探すことになったわけだが、顔も見たことのない子を探すというのは至難の業だ。

これといって接点もないし。名前すら知らないのだから。

とりあえず適当に艦内を歩き回ることにする。

まず最初に向かったのは食堂。この艦の中で一番人が出入りしやすい場所。

新人を迎えるために、艦の全員がブリッジに集められているわけで、人がいるならすぐにはわかるのだが。

どうもここにはいないらしい。

背を向け食堂を出ようとした時だった。

小さい物音が背後から聞こえる。

すかさず振り向くと、必死に隠れようとしていた少女を一人見つける。

服を見るからに、まだ新しく、着慣れていないのも良く分かった。

「……………」

俺を見るや否や、少女は走って食堂から逃げ出した。

「お、おい！」

走って追いかける。食堂を出たときには、既に少女はどこかへと。

「……………困ったな…」

これではどうしようもない。

しかし、あんな一瞬で長い廊下を走って逃げるなど不可能に近い。

俺は今一度廊下をゆっくりと見渡した。

「……………」

右側を見れば自販機が設置してある休憩所が目に入る。自販機の近くには何人かが座れるソファが置いてある。そして観賞用の大きい植物も置いてある。

よく見れば、植物の後ろに連邦の制服。……………隠れているつもりなのだろうか。…よく見なければ気づかなかったけど。

俺はそれとなく探すふりをしながら植物へ近づく。

『怖い……………怖い……………!!』

「……………」

頭の中で声が響いた。

突然の出来事で動きが止まってしまう。

まさか……………この子は…。

その隙を見て少女は廊下を走って逃げだした。

我に返ると、既に少女の背中が俺から遠ざかっていく途中。

「ちよ、待っててくれって!!!」

再び彼女を追いかける。どうやらかくれんぼはまだ続きそうだ。

かくれんぼ第二戦は医務室。彼女の背を追って辿り着いた場所だ。

「……かくれんぼはもういいだろう…？早く出ておいで」
その部屋全体に俺の声が響き渡る。

それでも子は出てこない。ま、当然か。

「……はあ…なんで気づけば俺は鬼になってるんだか」

愚痴を漏らしながらも医務室を探していく。

カーテンの裏。ベッドの布団の中。

机の下。どこを探しても見つからない。

「どこに行つたんだ………」

『どこならバレない………！』

「………」

まただ。この声。これが少女の声ならば…。

ふと、薬品が入っていきそうな棚が気になった。

上はガラス張りの扉で、色々な薬品が入っている。

しかし、下の棚はスチールの材質でできているため、見ることはできない。

たぶん、小さければ一人は入れるであろう。

恐る恐る下の棚を開けると……。

さっきの少女が。

肩にかかるくらいの水色の髪。薄い緑色の瞳。そんな子が震えながら柵に収まっていた。

互いに目と目が合った。しばらくの沈黙。

「あ……………」

「い、いやああああ!!!」

俺を押しつけて少女は再び逃走した。

「ま、つて……………」

尻もちをついた俺を横目に、颯爽と去っていく。

気づけば俺は彼女とのかくれんぼに闘争心が燃えていた。

「くっそー!!次は捕まえるからな!」

素早く立ち上がって、彼女を追いかける。

「うわああああん!!来ないでよおおお!!!」

「まってくれて!!!別に何もしないって!!!」

廊下に二人の声が響き渡る。

「来るなあ!!!」

少女が何かを俺へと投げた。

それを軽々回避……したと思っただが、避けた先に投げた物が、
カンツと軽い音が俺の額に当たって鳴った。

「いつてえ!? こ、この! 絶対捕まえる!!!」

「うわああああ!!!」

逃げながら少女は何度もモノを投げてくる。

「ちよ、ちよつと!? ストップ! スト……ぐはっ!!」

なんか追いかけることに心が折れ始めてきた。

それから、追いかける事5分。

「あっ……!!」

前を走る少女が転んだ。

「……はあ……はあ……」

息を切らしながら彼女に近づく。

『怖い……人が怖い……!!』

「また……」

響く声には、嘘偽りがない。

彼女は怖がつている。人に対して恐怖を……? ?

この子もまた、俺たちと同じなんだろうか。

「うう……痛い……。怖い……」

「……………」

これでは、第三者から見れば俺が悪者みたいになってるじゃないか…。

涙を流しながら再び立とうとする。

俺は、彼女の前に立ち、手を差し伸べた。

「立てるかい？」

「……………」

少女は、珍しいモノでも見るかのように、俺を見つめていた。

そして、それから、震える手で俺の手を取り、立ち上がる。

「大丈夫……？」

「……………」

彼女は何も言わなかった。でも、立ち上がった後も、俺の事を不思議そうに見つめ続けた。

「どうしたの？」

「……………」

困ったな。これじゃあ会話どころか自己紹介だってできないぞ……？

「……………い？」

「ん…………？」

小さく、少女は何かを言った。だが、うまく聞き取ることができない。

「……………いじめ……………ない……………？」

怯える瞳で俺を見つめ、ただその一言。

俺は微笑み、彼女を撫でた。

「……………ひっ……………！」

頭に手を乗せると、彼女は一際怯えた。

「大丈夫。ここには、君をいじめる人はいないから」

「……………」

「いるなら、俺が君を守ってあげるさ。だから、怯えないでいい」

「……………うん……………」

それから、俺は彼女を連れ、ブリッジへと戻った。

一時間に及ぶかくれんぼは、俺の勝利で終わったようだ。

「で、遅れたわけか」

「ああ。……………疲れたよ……………本当に」

あの後、彼女は全員に自己紹介をした後、自室に案内されて休憩している。

一方の俺は、ブリッジのオペレーター席に腰かけてファングと話をしていた。

「ははは！新人とは仲良くやっていけそうだな？」

「…自信ないなあ…」

「そんな君に新しい仕事をやろうじゃないか」

「まるで俺が仕事をしていないような言い方だな？」

「本当の事だろう？」

「うっ……」

そう言われてしまえばそれで終わり。パイロットとしての仕事は、今はできてはいないからだ。

少し前の戦いで、ピクシーが使えなくなったせいで、俺は乗るMSが無くなってしまった。

予備のMSがあるから戦うと言ったのだが、ファングが「まあこの機会に有給休暇を消化してもらおうか」とか言い出したのが理由の大半だが。

「休暇中なのに仕事とはこれ如何に……？」

「ははは！まあパイロットじゃないだけまだマシだろう？」

「俺はパイロットがいいんだけれどな」

「まあそう言うなって。もしも人が足りなきゃお前にも出てもらおうさ」

「今だって足りてないだろう?」

「十分足りているさ。ユーリにフユミネ、俺もいるしな」

「……………まあ、いいさ。それで? 仕事って言うのは?」

フアングは、ニツと歯を見せながら俺に言う。

「新人の戦闘教官になってやってほしい」

「え……………」

戦闘教官。新人パイロットの育成、指導を行う人の事を言う。

この部隊でも、最近になってそういうシステムを導入したものの、新人が配属されな
いからほぼ幽霊状態だった。

「なんで俺なんだ? フアングやユーリ…………。いや、ユーリはダメだ。フユミネだつてい
るだろう?」

「理由? それはお前が一番暇そうだからだな。俺とかフユミネはつきつきりで教えてや
れないしな」

「……………」

そこまでストレートに言われると結構胸が痛いんですけど。

「……………はあ……………」

「まあいいじゃないか。お前なら出来る! はっはっは!!」

「笑って流そうとしたって許すわけないからな……」

「……まあ聞いてくれ」

「なんだ」

「彼女はな、まだ実戦に出たことがないんだ」

「……それで？」

「だから、指導しなければいけない」

「……少女を戦闘兵器に変えるのがそんなにお望みか？」

少しだけ皮肉を込めて言った。

「と、まあこれは建前という奴だな。本当のところは別にある」

「別……？」

「彼女は自身が自我を持った時には既に両親はいなかったらしい」

「そして、連邦に捕まりここに入るまでずっと戦闘シミュレーターをやらされ続けていたらしいんだ」

「連邦め……。何度繰り返し返したら気が済むんだか」

「いくらやったって変わらないさ。上の連中は」

「それで、なんなんだ？」

「そうやって、連邦の対応を見てきて育ててきているから、人と関わるのが苦手になっ

ているらしい」

「……………そういうことか……………」

事情を聞いてしまえば、彼女の言動も理解できる。

本当に怖がつっていたのだ。彼女は。

連邦の奴らが彼女に何をしたのかだつて、だいたい予想が付く。

……………これじゃあ断れないじゃないか。

「……………わかつた。俺が引き受ける」

どうせすることもないし、俺はフアングに頼いた。

「助かるぜ、ムゲン」

「ああ。……………というか、断れないようにうまく誘導しやがつて……………」

「そう言うなよ。遅かれ早かれ言っていたことだ」

「…それもそうか。まあ、分かつたよ」

俺たちはその後、他愛のない話で盛り上がった。

後日、俺は彼女の部屋を訪れた。まあ、厳密に言えば部屋の前。

深呼吸し、扉をノックする。

しかし、返事は無かつた。

「…………困ったな。これじゃあどうしようもない」

もう一度ノックする。

すると、部屋から何かが崩れる音が響いてきた。

「……………！」

それが何かは分からないが、部屋の主が危険であるということを感じた。

いてもたってもいられなくなり、俺は扉越しに叫ぶ。

「大丈夫か!？」

返事が返ってこないと思った次の瞬間。

部屋から小さいがその声は聞こえた。

「…………痛い……………」

「…………!!」

俺は扉を開け、部屋へと入る。

部屋は凄惨な状態で、部屋の主に大きめのダンボールが覆いかぶさるように。

「うう…………ひぐつ…………!!」

少女のすすり泣く声が聞こえてくる。

「大丈夫か!?!すぐ助けてやるから、じっとしてらんだぞ!」

俺は少女の近くへ駆け寄り、上に覆いかぶさっているダンボールを退かしていく。意外にもそれは重く、少女が持つのには少し苦勞しそう。

「……うう……。怖い……。痛い……」

「大丈夫。怖くない。すぐに助けてあげるから」

「……ぐすつ……」

「だから、泣かないでいい」

彼女をなだめながら、ダンボールを退かし続ける。

それから、彼女を覆いつくしていたダンボールの山を片付け、俺は彼女に微笑む。

「もう大丈夫だよ。怖くない」

「……うん」

彼女は泣きながら小さくうなずいた。

彼女を起こし、椅子に座らせる。

「痛いところはないかい？」

「……いい、今は……大丈夫……」

彼女は震えながら言葉を返してくれた。

「それなら良かったよ」

「……あり……がと……」

「気にしないでいい。君に用事があつて来たんだし。なにより、君が無事でよかつた」
「……………初めて……………」

ぼつりと呟く。その言葉が意味するものは、何となくだが分かっている。

「うん？」

「……………あつたかい……………」

「暖かいというと……………」

「……………うまく……………言えない。でも、『無事でよかつた』つて言われたら……………あつたかくなつた」

その言葉を聞いて俺は悲しくなつた。

この子は、【感情】のようなモノを知らないのだと。

どうして子供ばかりがこんな思ひをしなければならぬ？

どうして子供が傷つかなければならぬ……………？

そのことが、ただ悲しかった。

だが、それならば……………。

「……………その暖かいという気持ちは、【優しさ】と言うんだよ」

「やさしさ……………」

「うん。これを知っているから、皆他人にこの気持ちを教えてあげられる。一緒に分かち合えるんだよ」

「……………やさしさ……………好き……………」

彼女は自分の胸に手を当て小さく笑った。

「この世界には、君の知らないことが沢山ある」

「……………」

「もちろん、俺にも知らないことも沢山、ね」

「知らないこと……………」

「ああ。だから、俺が知っていることを、君に教えたい」

「教える……………？」

「そう。そうやって、人は記憶や歴史というものを受け継いできたんだよ」

「……………すごい……………」

「……今日から俺は……君の【先生】になる」

戦闘教官なんて言葉は必要ない。彼女は、それ以外の事も知らなければならぬ。だから、【先生】だ。俺が知っていること。学んだことを彼女に教える。そうして、彼女が誰とでも打ち解けられるように。

「せんせい……………」

「ああ。俺はムゲン・クロスフォード。君の先生だ」

「……………リリー……………クリーヴズ……………です」

彼女は、俯きながら、小さく言った。

リリー・クリーヴズ。それが彼女の名。

今度は俺が教える番だ。

教わったこと、学んだことを、彼女へと受け継がせる。

こうして、俺は彼女の先生となった。

宇宙世紀0089・5・03 グロリアス、ジオン残党から奇襲を受ける。
リリー・クリーヴズが出撃。驚きの戦果を挙げた模様。

俺は今、衝撃的な場面を見ている。

目の前に広がる砕け散ったザクと思われる機体の残骸がそこら中に捨てられていた。
それをやったのは、まだ18の少女。

「先生……。ん、これで……。いい……。？」

震える声でその主は言う。

その光景を前に、俺は言葉を返すことも出来なかった。

何故なら、残党の接近を受け、初陣として出撃させたにもかかわらず、たった3分で
5機を仕留めて見せたのだ。

俺の初陣とは大違いだし、何より、その圧倒的な強さ。

ニュータイプの脳波を利用し、主の思うがままに機動し敵を撃墜する武装。たしか名
前は……。【ファンネル】。

あの時ゼロが使ってきた武装。それを再び見るようになるうとは…。

暫くの間、俺は言葉が出なかった。

「先生……………」

震えている声。はっと我に返り、声の主に言葉を返す。

「大丈夫だよ。帰っておいで」

「はい……………」

声の主は安心したのか、無残に転がるザクに背を向けこちらへと歩き出す。

「すごいな。彼女は」

フアングも驚きを隠しきれていない。

彼もニュータイプではあるものの、彼女のように初陣であんな戦い方はできないはず。

「ああ…………。やはり、ニュータイプというのは本当みたいだ」

「そうだな。俺もそれは否定できなくなった。迎えに行つてやれ。今のところ、心を許しているのはお前だけなんだから」

「…………それも悩みの種なんだけどなあ…………」

「そう言うな。意外と満更でもないじゃないか。なあ？　【先生】？」

そう言つて彼はニヤリと笑つた。

「からかわないでくれ。まったく、困つたなあ…。あの子と会うたびにリナからの視線が痛いんだよ…………」

「まあ、当然だろうな」

「なら何とかしてくれ」

しばらく彼は考えた後。

「……無理だな」

バツサリと切り捨てられた。

格納庫へと行くと、MSから降りる彼女の姿。

彼女は格納庫をきよろきよろと何かを探すように見まわし、俺をみつけると、こちらへ走ってくる。

「せ、先生……帰ってきたよ……」

「ああ。お疲れ様。リリー」

「せ、先生……喉……乾いた」

「食堂で飲み物でも飲むかい？」

「う………。なら……いい……」

食堂には行きたくないらしい。理由はまあ人がいるからだろうけど。

「いい加減慣れないと。な？」

「でも……。怖い」

今にも泣き出しそうな顔でこちらを見つめる彼女。……困ったな。

「分かったよ。自販機で飲み物でも買おうか」

「……………うん」

俺は先に歩きだし、格納庫を後にした。

俺としてはなるべく彼女に早くここの生活と人に慣れてほしいのだが、彼女自身が拒絶するせいで、どうにもうまくいかない。

「ムゲン隊長。どこへ行かれるのです？」

「ああ、ちよつとリリーと飲み物をね」

「そうでしたか。こんにちは。リリー」

「ひっ……………!!」

兵士の差し出す手を見て彼女は俺の背中に隠れてしまう。

いつもこんな感じだ。道夜がいれば、また変わってくるのだろうか。それゆえあつてリリーの印象はこの艦ではあまり良くはない。

「あ……………。ごめんね……」

「気にしないでいい。リリーはまだ慣れていないだけで、君が嫌いだから避けたわけじゃない。わかってあげてほしい」

「ええ。わかっていきます。それでは私は偵察へ行つてきます」

「ああ、気を付けて。何かあつたら連絡してくれ」

「はい！」

兵士が去つていくと、リリーは俺の背中から離れ、言う。

「……………怖かった」

「怖くないさ。皆優しいはずだけど？」

「……………怖いものは……………怖い。先生だつて……………怖いものあるでしょ？」

「な、ないぞ？」

少し見栄を張つて言つてみる。

すると彼女は少しだけニヤリとしながら言つた。

「リナさんは……………怖くないの？」

「うっ……………」

「特に、わたしと居る時は……………さらにリナさんに見つからないようにしてる……………よね？」

「うぐぐ……………！」

「はは……………！先生も怖いものあるんだ……………！」

「……………いや、君と仲良くしていると、彼女からの視線が痛くてだね……………」

「なんで……………?……………」【嫉妬】……………?」

「まあ……………そこまでではないにしろ、妬いてはいるだろうね」

「なるほど……………なら、わたしと先生がもつと仲良くなったら……………」

彼女は笑顔を見せながら言った。

「勘弁してくれ……………」

心を開いてさえくれれば、皆ともこうやって話をしてくれるんだろうけど、まだ時間が掛かりそう。

こんな笑顔が出来るんだ。きつと時間が経てば皆とも打ち解けられるはず。そんなことを思っていたその時。

「へえ……………」

「うっ……………!?!」

背後から伝わる殺気。

「仲良く……………ねえ……………」

振り返ったら駄目だ。この声は間違いない。

「ムゲンー?」

「……………な、なんででしょうか」

背を向けながら、彼女に言葉を返す。

「……………後で、部屋来ようか？」

「……………」

言葉の端端から恐怖を感じる。

俺が返す言葉を探していると

「返事は!？」

「は、はい!!!」

俺に選ぶ権利は無さそうだ。

「ふふふ。それじゃ、後でね?せ・ん・せ・い?」

背後の殺気が遠のいていく。……………危機は脱した。何とかなつたはず。

「先生?大丈夫……………」

気づけば彼女は、観賞用の大きい植物の後ろからこちらを見つめている。

「……………は、はは…。大丈夫だよ」

それからしばらくして自販機の前までたどり着く。

この自販機は艦の中でも一番人通りが少ない位置に設置してある。

強いて来る人と言えば、医務室長のサムエルさんくらい。

「何飲もう……………かな……………。この前はミルクココアだったから、今日は……………」

自販機につくなり彼女は何を飲むかを悩んでいる。

普段はあまり奢るのは好きではないのだが、まあ今日は頑張っていたし、奢ってもいいかもな。

「何が飲みたい？好きなものを選んでくれていいよ」

「本当……？じゃあ……」

「ただし、一本だけだからな……？」

「な、なんで……？」

「そんなに飲めないだろう……？」

「でも……今日頑張ったから奢ってもいい……って……」

「……俺の思考を読まないでくれ……。わかった、じゃあ二本だけなら……」

「やった……！！」

彼女が笑顔を見るのは嫌いではない。けれど、少しだけ複雑だ。

こんなに若い子が戦うこともそうだが、こんな笑顔を見せる子が軍人なんて。

俺や道夜、ユーリもそういう時代があつたが、まだ子供が戦う時代が必要なのだろうか。

だが、いつか来る。子供が戦う必要のない時代が。

そう信じていたい。

「ココアと、ミルクティーがいい……」

「ああ。わかった」

「あ……………」

「どうした？」

「あと…………ショートケーキ…………」

「ああ、分かった…………。ん!?なんでショートケーキまで!？」

「…………ケーキ…好きだから…………【優しい】気持ちに…………なれる…………」

「……………」

呆れた。…………まあ、いいか。

「優しいというのはこういう時に使うものではないが…………。もう、分かったよ。特別だぞ?。」

「…………うれしい…………!先生…………好き…………」

「あ、ああ……………」

さっきの言葉、リナに聞かれたらどうなっていたことやら。

それから俺たちは、傍にあるソファに腰かけ、少し遅めのティータイムを過ごした。

「……………おいしい」

頬にクリームをつけながら笑う。

まったく。姉に次いで今度は妹ができた気分だ。

「それならよかったよ」

「先生は……………何飲んでるの……………」

「ん？コーヒードよ。最近はブラックも良く飲むんだ」

「おいしい……………」

「ああ。俺は好きかな」

昔は砂糖を入れたりししないと苦くて飲めなかったのだが、最近ではブラックのままでも大丈夫になった。

「へえ……………」

ケーキを食べながら俺を不思議そうに見つめる彼女。

「……………どうした？」

「先生……………、時々寂しそうな顔する……………よね」

「え……………」

自分では意識していないのだが、どうやらそうらしい。

「あまり考えたことなかったな。そう見えたか……………」

「うん……………」

「そっか。気を付けないかね…」

「先生……………」

「なんだい？」

「前から……………気になってた……………。腕の……………リボン……………」

右腕に巻いてある赤いリボンのことだろう。この話も、伝えなければな…………。

「これはね、大切な人から預かった物だよ」

「……………そうなんだ」

「ああ。このリボンが、俺と……………【あの人】を繋いでくれている。そう言った人がいてね」

「あの……………人……………？」

少し頭を傾げる。

「俺にとつて、姉のような存在の人だった。……………その人と【約束】したのさ」

【約束】……………？」

「うん。『【虹】が輝いて、希望に溢れているときに起きたい』と。その人は言った。それが、あの人との……………約束」

「……………虹……………」

「……………ああ。だから、いつか絶対、虹を……………。希望で溢れる世界を見つけると決めた」

「先生……………」

「うん？」

「……………大丈夫……………だよ。きっと……………伝わってるから」

……………伝わっているのだろうか。フィア姉さんに…。

いいや、伝わっているさ。……………きっと。

「そうだな。……………大丈夫」

そうして、時間はゆっくりと過ぎていく。

「……………先生……………」

「うん？」

「リナ……………さんとは……………会わないの……………？」

「あ……………」

すっかり忘れていた。今頃リナがどうなっているやら……………。

「忘れていたよ……………。よし、ちよつと会ってくる。明日また会おう！」

「……………はい」

俺は手早く彼女と別れ、リナの所へと走った。

「はあ……………はあ……………!!」

肩で息をしながら、リナの部屋へとたどり着く。

扉を開くと、そこには、しよんぼりと座り込むリナがいた。

「リナ……………待たせてごめん……………」

「……………いいよ。別に」

『いいよ』。その一言からでも伝わる、『寂しかった』という気持ち。

俺はリナの隣に座り、頭を撫でた。

「ごめんね。少し話が長くなっちゃってさ」

「……………私となんかより、あの子と話していたほうが楽しいんでしょ」

「おいおい。本当に妬いてるのか……………」

「あ、当たり前でしょ!?! 私はムゲンの事が……………す、好きなんだから……………」

「……………」

なんか、ちよつとだけキュンとしてしまった俺がいる。俺を必要としてくれることが嬉しい。

「ありがとう。……………嬉しいよ」

俺は、彼女を優しく撫でる。

「……………もう……………」

「でも、分かってほしい。彼女には、時間が必要なんだ。俺でさえやっとなれてくれたばかりなんだから……」

「分かってるよ。あの子も……寂しかったんだろうね……」

「ああ。だから、受け止めてあげたい」

「昔から変わらないね。そこだけは」

「……そうかな。変わったからこそ、こう考えることができたような気がする」

「まあ、ムゲンの気持ちは分かった。出来れば私も助けてあげたいけど……」

「その時になったら、助けてもらうさ」

「うん。いつでも言うて。あなたのためなら、私はどんなことだって手伝うから！」

「……ありがとう。リナ」

俺は、彼女の頬にキスをした。

「……ちよつ……。な、な、なにするの……!？」

「そんなに驚くことか……?」

「い、いや……。えつと……。なんか、久々だったから……」

「あ、ああ……。そうか……」

「なんかさ、久しぶりだね、こうやって二人つきり……」

「アウロラがいるけど?」

「アウロラは寝てるもの。実質二人つきりでしょ？」

「……そうだな。そういえば、アウロラはもう抱かなくても寝れるようになったのか？」

「うん。最近やつとね。ずっと抱っこし続けると腕疲れちゃって……」

「でも、整備兵だろ？もつと重いモノだつて運んだりするじゃないか」

「モノと人じゃ全然違うの！」

「……そういうもんか」

「そういうものだよ」

しばらくの沈黙。会話がなくても、何故だか心は満足できる。

ここにいてだけで。彼女と、娘がいるだけで。

それはきつとリナも同じ気持ちだろう。

リリーを想う気持ちも大切だが、この時間も……大切にしたい。

あつちに行ったり、こつちに行ったり。人というのは本当に忙しいものだ。

忙しいのに、毎日が楽しいんだ。それはきつと、俺が幸せだからなんだろう。リリーにも、いつか分かってほしい。この【幸せ】という気持ちを。

39 完

40：教導

宇宙世紀0089・5・16 第00特務試験MS隊、ニューヨーク付近の防衛任務のためトリントン基地を出航。

0089・5・22 第00特務試験MS隊、ニューヨーク付近到着。防衛任務開始。

軽い任務のはずだった。

「左舷敵影6!!」

「くそっ!この数では……!!」

防衛を終えればすぐに帰れるはずだった。しかし、敵の数が思ったよりも多く、こちらが苦戦を強いられた。

「ぐあっ!!」

「フアング!?……ちっ……!!」

俺はただ、戦闘を見ていることしか出来ない……。

こんなに歯がゆい気持ちを覚えたのは久々だ。

「せ、先生……」

「リリー？どうした？」

「敵……倒したよ……」

「よし、次はファングのほうへ援護に行ってくれ」

「……うん」

案外素直に彼女は行動してくれる。

それから、リリーの援護により、敵を殲滅した。

「よし、終わったな。離脱するぞ」

「ああ……」

「リリー。もういいよ。帰っておいで」

「うん……」

「リリーちゃんー」

「………ひっ……」

「今日もすごかったねえ。やっぱリニュータイプってのは違うもんだなあ」

「ほんとほんと。ファングさんと同じくらいすげーよな」

一人の兵士の言葉を皮切りに、次々とリリーを誉めだす。

「うう………。先生……助けて……」

「ははは！楽しそうじゃないか！」

「楽しくないよお……………」

今にも泣き出しそうな声で俺に懇願する。

「にしても、多かつたな……………」

「ああ。疲れちまったよ……………。リナちゃんに癒してもらいたい……………」

「お前たち、聞こえているからな？」

「げっ！ムゲンさん!？」

「なんてな。ほどほどで頼むぞ…………？」

「嫌だなあ…………。さすがに人妻を取る気なんかないっすよ。ははは!!」

「とか言つて、『リナちゃんと結婚したい』とか言つてたのは誰だったっけ？」

「げっ！お前それ言うなつて!!」

「お前らあ…………!!」

「ひ、ひいいい!!」

「お前たち、話すのは構わんが、機体を動かさせよ？」

「あ、いつつねー。すぐ追いつきますよ！ファングさん!」

戦闘が終われば、こんなに楽しい雰囲気になるのに…………。

この輪の中に、いまだにリリーは入ることができない。それが少しだけ、悲しく思え

た。

「ふふ……………」

「……………」

今、リリーが笑ったのか……？気のせいか……？

そんな雰囲気壊すかのように、唐突に始まる。絶望。

「な、なんだ!?!うわああああ!!!」

突然の爆音。嫌な予感がした。

「ひっ……………」

「くっ!?!追ってきているだど!?!」

「全機！離脱だ!!応戦していたら撃ち落とされるぞ!!!」

「うわああああ!!」

「フアング!?!どうした!!!」

「追手だ!!かなりの数だ!!一度下がって態勢を立て直す!」

「リリー!!動くんだ!落とされるぞ!!!」

「あ……………ああ……………。ひい……………」

『怖い……怖い……!!!』

「……！リリー!?」

頭に響く声。それは間違いなく彼女から発せられている。

「まずい!!!リリー!!避ける!!!」

「……!!!」

「リリー!!!」

叫んだ。彼女が危ない。だが、俺にはどうすることも出来ない……。それがただ悔しかった。

「へ……へへ……。ザザツ……。リリーちゃん……は……。やらせないぜ……」

「お前……!!!」

「何があった!!!おい!」

「ムゲンさん……。リリーちゃんを……。恨まないでください……。…あの子は……。俺たち大人の……。【希望】ですよ……」

「な、なにを……!」

「へへっ……。先……。逝ってます……」

その言葉を最後に、無線から爆音。そして、砂嵐の音が響いた。

「そんな……。嘘だ!!」

「あ……………ああ……………!!!」

「リリー!! 動け!! 動くんだ!! 彼の犠牲を無駄にするな!!」

「……………あなたたちが……………!! この人を……………! ゆ、ゆる…ささない……………!!!」

「リリー!?!」

リリーが…怒っている……。

「リリー! 退くんだ! 1機では無理だ!!」

「……………くっ!!」

俺はブリッジを後にし、格納庫へと走った。

「ムゲン!? どうした!」

格納庫で作業をしていたトクナガさんがやってくる。

「……………俺のジムを出してください」

「な、何言ってるんだ! こいつではもう戦えねえんだぞ!」

「いいから!! このままじゃリリーが!!」

「お前……………。だが、整備兵として、旧型で死に行かせるようなことは出来ん」

彼は首を横に振りながら言った。

「トクナガさん」

トクナガさんの背後からの声。その主は…。

「リナ？なんだ？」

「ムゲンを行かせてあげてください」

「なんだと？」

「リナ……………？」

「ムゲンは、きつと帰ってくるから、だから……………彼を信じてあげてください」

「……………」

トクナガさんはしばらく考えた後。

「わかった。特別だからな。もし何か不備があつたらすぐに帰還することが条件だぞ

!!

「…わかっています」

「よし、急げ！」

俺はジムの格納庫へと走る。

「……………ジム、また力を貸してくれ」

俺は機体に取り込み、システムを起動させた。

「よし、ムゲン・クロスフォード、ジム、出るぞ。いいな？艦長」

「ダメと言っても出撃するのだろうか？好きにしろ。その代わりに、絶対に生きて帰って
んさ」

「……了解」

俺は機体を動かし、戦艦から出撃する。

『殺す………！殺してやる!!!』

リリーの言葉が頭に響く。

「リリー……！」

俺は機体を動かし、フアングたちの所へと向かう。

「フアング!!」

「ムゲン!?!リリーを止めなければ!!」

「分かっている!!」

『許さない………！絶対に!!』

「くっ………！リリー………!!!」

俺はリリーの機体へと接近する。

瞬間。背後からの殺気。

左へ回避する。

「くっ!!? リリー!!?」

「許さない……………!!! 全員……………!!」

「リリー! 俺だ!!! くそっ……………!!!」

今の彼女に俺の言葉は届かない。

右からの射撃。そして続けて回避した先の正面から射撃。なんとか撃ってくる場所が理解できるものの…。

「くっ……………!! ぐあっ!!?」

機体が追い付かない。

「ムゲン! 退け!! リリーは俺たちが止める!!」

「そうですよ。そんな機体では勝ち目がないです」

だとしても……………彼女は……………!

「俺が……………」

「俺が止めなきゃ……………ならないんだ……………」

「ムゲン……………!!?」

「俺は……………彼女の先生だ……………! 助けてやらなきゃならないんだ!!」

リリーの乗るジムがこちらを睨みつける。

「大っ嫌い……！皆嫌い!!!」

「リリー!!」

彼女へ迫ろうとするも、ファンネルが邪魔をしてなかなか進めない。

「くっ……!!!」

「やっぱり……みんな……怖い…。嫌い……!!!」

「リリー！それじゃダメだ!!!」

「痛い……!!!胸が痛い……!!!張り裂けそう……!!!目の前であの兵士が死んだとき、す

ごく気分が悪くなった……。さっきまで生きてたのに!!!」

「もう……そんなの嫌だよ……」

「リリー！それは人間として当たり前なんだ!!皆同じなんだよ!!!……くっ!!!」

ファンネルを回避しながらリリーへと近づく。

「いやだ!!来ないで!!」

「リリー!!自分を閉じ込めるな!!お前は一人じゃないんだ!!」

「来るなあああ!!!」

ファンネルから放たれるビームがジムの右肩を貫く。

その一撃から伝わる悲しみが……。恐怖が……。

「リリー!!!」

「来るな……!!来ないでよ……!!!!」

ジムはそれでも、俺は足を止めない。

ここで、倒れちゃダメだ。また彼女は、最初からになってしまふ。

それは……。それだけはダメだ!!!

「リリー!!俺が!!俺が分かるだろう!?!」

「知らない!!知りたくない!!」

「リリー!!!」

今までにないほどの圧力が、これ以上リリーへと近づけさせてくれない。

「くっ………そ………!!」

これが彼女の拒絶の反応なら……。

俺は……。

「ぐっ………おとおお……!!」

圧力さえも押しつけ、彼女へと近づく。

「来るなああああ!!!」

ビームがジムのあらゆる場所を撃ち抜いていく。

それでも……。

俺はスラスターを起動し、彼女の機体へめがけ突っ込んだ。

「リリイイイ!!!」

「来ないでよおおおおお!!!」

放たれた一射は、ジムの足を撃ち抜いた。

だが、ジムは、リリーの機体を包み込むように抱いたまま地面へと倒れる。

「ぐう…………!!」

「うう…………えぐつ…………うう…!!」

「…………リリー…………。怖くなんかない…………何一つ」

「…………せん…………せい…………?」

「大丈夫だから。もう、敵はいないから」

「わ、わたし…………先生に…………何を…………?」

「何もしていないよ」

ジムは、リリーの機体のメインカメラを手で覆い、何も見えないようにしていた。

だから、彼女は知らない。いや、知らなくていい。

「さ、帰ろう。家に」

「……………」

格納庫で、俺は静かにジムを見つめていた。

俺が、初めて最初に乗ったMS。

そして、リナが改良してくれた機体。

思えば、この機体とも随分長い付き合いだった。

一年戦争の頃から、ずっとこの部隊で、俺と共に戦ってくれていた。

「お疲れ…。ジム」

話によれば、もうこのジムを直す部品が手に入らないらしい。

……もう、これで最後なんだ。

俺は、横たわったボロボロのジムを軽く撫でた。

「……………今まで、ありがとな……………」

「随分、無茶させてしまったな。……………そればかりは、昔から変わらないか？」

「……………お前も、色んな景色を見たんだな……………。分かるよ。何も言わなくても」

「ほんと、お前もこんな最期だとは思わなかったよな？…俺もだよ」

「本当に、助かったぜ……………。ゆっくり、休んでくれ……………」

俺は、ジムを軽く叩いた後、格納庫を出て行った。

兵器に愛着を持つのは変に思えるかもしれない。

だが、俺にとっては、それなりに大切な「仲間」の一人だった。

でも、それを恨むつもりもない。戦場で兵器が死ぬなら、それはそれで本望だろう。

心配なのは、リリーだった。

あれからずっと自室に籠って、一切顔を出さないらしい。

「……………」

部屋の前に立ち、ノックする。

「……………せん…せい？」

意外にも声が返ってきた。

「ああ。入れてくれるかな？」

「……………会いたくない…。誰にも」

リリーは、先ほどの戦闘で心を痛めてしまった。

目の前で人が死ぬなど、初めてならば仕方がない。

いや、普通なら、耐えられない。

「……………じゃあ、扉越しで話そう」

俺は扉に背を向け腰を下ろす。

「……………うん」

リリーは素直に承諾してくれた。

「……………辛かったね」

「……………うん」

「何もしてあげられなかった。…ごめんね」

「先生は……………悪くないよ」

「……………いいや。君を出撃させるのは間違いだつたのかもしれない…。戦わせることなんかさせなければ…」

「せん……………せい……………」

悔やんでいた。彼女が人を殺したことを。何度も。

人間は人を殺すために生まれたわけじゃないのに。

今までは、殺してこいと命令されていた。

だが、今度は逆だ。逆に、俺が殺してこいと命令しなければならぬ。

こうやって、彼女が戦争という大きい歯車の一部になってしまったことを、悔やみ続けた。

「リリー」

「……………はい」

「嫌なら、パイロットをやめてもいいんだよ。それ以外の選択も、まだ出来る」

「……………」

リリーと、扉を挟んでの会話。少しだけの沈黙の後、彼女は口を開いた。

「……わたしは……戦う……。あの人は……わたしを【希望】って言ってくれた……」

「わたしは彼の事を知らなかったのに……。それなのに、わたしを庇って……」

「……」

「……わたしが……希望になれるかは……わからないけれど……。わたしは、出来るだけやってみる」

「リリー……」

「だめ……かな……。先生……」

俺の人生ではない。彼女の人生だ。

「……個人的な意見とすれば、戦うなんて言っただけはなかつたよ……」

「……」

「けれど、君の人生だ。君が選んだのだから、それに従えばいい」

「先生……」

「でも、一つだけ……」

「……」

かつて、カミュー君にも言ったことがある言葉。

「選択には、常に責任が伴うことを忘れてはいけないよ」

「……責任……………」

「ああ。君が戦って、人が死んでしまったという責任……とかね」

「……………」

「それを分かったうえで決めたのなら、俺は止めない。君の背中を押そう。それが先生の役目だから」

「……私は……………戦います。先生」

彼女の声から、その意思が伝わった。『迷わない』と。

「……………分かった」

「もう……………誰も……死なせないです……………。その……………か、家族……………を……傷つけさせない……………」

「リリー……………!」

思わず俺は立ち上がってしまった。あのリリーが家族という言葉を……。

「先生……………。私……………頑張ります」

「なら、俺も覚悟を決めないとな……………」

「先生も……………?」

「ああ。こうなってしまった以上、俺は君を死なせることは絶対に許されなくなった」

「……………君の成長を見届け、君を守るという使命ができた……………」

「……………」

「さて……。飯でも行くか？」

「……はい……」

「自販機でいいか？」

「えっと……」

「ん？」

「……今日は……食堂で……」

「リリー……！」

感動してしまった。リリーが……。自ら打ち解けようとしている……。

「先生……行く……」

気づけば、リリーは部屋から出て、俺の顔を覗き込んでいた。

「……あ、ああ……」

俺とリリーは、並んで食堂へと歩いて行った。

食堂に入ると、リリーはそれでも緊張していた。

「……大丈夫か？」

「……は、はい……」

俺は空いた席をみつけ、彼女を座らせる。

「先生……」

「どうした？」

「私……皆から……」

「おっ！リリーちゃん!？」

言葉を遮ったのは、一人の兵士だった。

その声で、全員がこちらに視線を送る。

「あ……あ……」

「リリー。大丈夫。皆、君を嫌う人はいないよ」

「いやあ、珍しいなあ！隣良いかい？」

「……は、はい……」

「悪いねえ！リリーちゃん何食べるの？」

「え……」

助けて、と彼女が視線を送る。

俺は微笑みながら、彼女を撫でた。

「ムゲンさん、この子って普段何食べてるんです？」

「ん？自販機のものだったら大抵なんでも食べているな」

「えー！それじゃあこの艦の良さが伝わりませんよ!! やっぱ飯は食堂でしょー!!」

「ああ。そうだな。じゃあ、丁度いいから、リリーにオススメを教えてやってくれよ」
「えっ！いいんですか!?!じゃあ早速……」

兵士はメニュー表を手に取り。

「これ！このカレーは旨いんだよ！」

指さしてリリーに見せる。

「あ………」

「何言ってるんだ！シチューだろ!!」

背後から別の兵士が声を上げる。

「いや！とんかつだろー!?!」

さらに別の所からも。

食堂が、いつも以上に賑わっている。

そうだ。これを感じてほしかったんだ。

……というか、どうしてハンバーグが入ってないんだ!?!

「おいおい！ハンバーグはどうしたよ!?!」

俺が叫ぶと、全員が笑い出す。

「な、なんだよ！お前ら!?!」

「ムゲンさんは、本当に……ふふっ!!ハンバーグが好きですよね……!!ははは!!!」

「ほんとほんと!!リリーちゃん知ってる?ムゲンさん、食堂で食べる時はだいたいハンバーグ頼んでるんだよ。ふふふ……!」

「おい!他も頼んでいるぞ!ステーキとか……」

「肉ばかりじゃないですか」

ユーリが紅茶を飲みながら一言。

「お前はお菓子食わずに飯を食え!」

「えー。お菓子が主食ですしー?」

「お前なあ……!!」

このやりとりで、再び食堂は笑い声で埋め尽くされた。

「……ふふ……。はは……!」

「おっ!リリーちゃんが笑った!!」

「マジで!?聞きたかったあ……!滅多に聞けないのに……」

がつくりとうなだれる彼に、俺は微笑んで言った。

「聞けるさ。これから、いつでもな。だろ?リリー」

「……が、がんばり……ます……」

リリーは、少し緊張しながら言った。だが、何故か前のように人が近くにいても恐怖を感じていないように見える。

「ゆっくりでいい。皆待つてくれるから」

「……はい……」

「そうそう！俺たちは家族だし？」

「え？そうだったか？」

俺が冗談交じりに言うのと、兵士はふぎけながら言葉を返す。

「ええ!! うっそおお!!」

これで今日三回目の笑い。

それから俺たちは、各々で注文し、騒がしくも楽しい食事の時間を過ごした。リリーも、それなりにはリラックスしながら会話していたようにも見える。

それから、俺とリリーはゆっくりと彼女の部屋へ足を向け歩いていった。

「……………せんせい」

「ん？」

彼女が立ち止まった。振り返ると、彼女は……………。

「こんなにも……………あつたかい……………気持ち」

「リリー……………」

「守りたい……………。皆を……………」

「…守れるさ。けれど、一人で背負わないでほしい」

俺は彼女の肩に手を置き、オリーブ色の瞳を見つめる。

「せん……せい……？」

知らずのうちに、涙が流れてた。

「一人で背負ったら……寂しいだろう……？」

「……せんせい……」

「君が……守ろうとするものは、俺が守りたいものだ。……だから、一緒に守ろう」

「…………うん」

「辛かったら立ち止まってもいい。泣いたっていい。……それが、人間だから」

「……ゆっくり……頑張るね……」

「ああ。皆で一緒に頑張ろう」

涙の理由。それは俺が一番知っている。

かつて、俺は、ずっと一人で勝手に背負って。勝手につまずいていた。

手を差し伸べてくれていたのにも。

俺はそれに気づけなかった。……だから、同じことを繰り返させない。

俺が見てきた【彼ら】も……。結局、一人で背負いこんで、自分を追い込んでいた。

それしかできなかつたのかもしれない…。

……………待っていても、何も変わりはない。

自ら動かなければ、変わらない。

リリーは……………今、変わろうとしているんだ。

なら、それを支えるのが大人の役目であり、先生である俺の役目だ。

……………そうだろ？イーサン。

「せんせい……………？」

「大丈夫。君が変われば、皆変わる」

「そう……………かな……………」

「そうとも」

俺は微笑んだ。そうだ。彼女は「希望」だ。希望という名のニュータイプ。

「ニュータイプは、どんな人だって、可能性を信じさせてくれるんだよ」

「……………可能性……………」

「かつて、君と同じニュータイプを、一人知っている」

「わたし……………？」

「まあ、実際に言えば、俺はニュータイプをそれなりに見てきているのかもしれない。だが、【彼】が言った言葉を……」

忘れられなかった。「ゼロ」が言った言葉を。

「敵同士だったそのニュータイプは、最期に言った言葉……」

「どんな……言葉だったの？」

「彼は……ゼロは……。ニュータイプが、人類を信じなくてどうすると。そう言ったんだ」

「だから、彼は自らの目で見て、見極めようとした。かつて、俺たちが悪としたティターンズについてまで、人を、人類がまだ腐りきっていないと」

「叫ばなければならぬと、彼は言ったんだ」

「……………」

「だが、結局、彼も一人だった。たった一人で戦い続けていたんだ」

「可哀そう……………」

「ああ……………。違う形で出会えれば、分かり合えたと……俺もそう思うよ」

「先生……………」

「うん？」

「涙……………」

「あ、ああ。ごめん。なんだか、昔を思い出してしまっただけ」

涙を拭こうとしたとき、彼女の手が、俺の涙を拭ってくれた。

「……………リリー……？」

「私は、私なりに頑張る……………から……………」

「その、ゼロって人ほど強くもないし、自信もないけれど…。頑張るから……………」

「だから……………」

「泣かないで……………」

リリーは、俺に微笑んだ。

この笑顔を見ると、何故だか安心する。

リナと同じ。……………何故だろうな。

それから、再び俺たちは歩き出した。

部屋の前まで来ると、リリーは、小さく手を振った後、自室へと戻っていく。

「……………さて、と……………」

俺は、ゆっくりと歩き出す。

行先は格納庫。

格納庫につくと、地面に横たわるジムと、それを見下ろすかのように立てかけてあるピクシー。

「……………」
俺は二機に近づく。そして、彼らを静かに見つめた。

「……………」
彼らは、満足だったのだろうか。

俺と共に歩めて幸せだったのだろうか……。

機械に聞いたところで、答えは返ってこないだろう。

だが……。

「……………」お前たちは……………幸せだったか？」

「なあ、ピクシー……………。ジム……………」

「大丈夫」

背後からの声。振り向く前に、俺の隣へと歩いてきたのはリナだった。

「リナ……………」

「この子たちは、幸せだった。満足だった」

「……………」

「戦いの果て、その先を見れたんだから。もう、彼らも疲れちゃったんだよ」

「……………疲れた……か……」

「うん。……………もう、休ませてあげて」

「……ああ。……でも、こいつ等はどうするんだ？」

「解体するよ。まだ使えそうな部分は残して、後はリサイクル、かな」

「……なるほど」

しばらくの間、沈黙が続いた。

ただ、静かに俺は機体を見つめる。

ふと、何かを思ったりリナが、俺に言う。

「ねえ、ムゲン」

「なんだ？」

「……また、MSに乗って戦いたい？」

リナからそんな言葉を聞くとは思わなく、俺は一瞬驚いてしまう。

「ムゲン……？」

我に返り、俺は言葉を返す。

「そ、そりゃあ……ね。それが、どうかした？」

「……そっか。……時間、掛かるけれど……1機、造ろうと思ってるんだ」

「え……？」

「たぶん、私がムゲンの専属整備兵としてできる最後の機体。この1機に、私の技術全てを注ぎ込む」

「……リナ……」

「だから、一つだけ【約束】して」

「約束……?」

「もし、その機体に乗る時が来て、戦うことになったなら……」

「その子が……死んだら、もう、戦わないで」

「リナ……」

「それが、条件」

リナは真剣だった。俺は、頷く。そして、リナの瞳を見ながら、言葉を返した。

「ああ。分かった。その機体が死んだら、俺の軍人としての生活は終わりにする。【約

束】だ」

「……わかった。なら……私も頑張るよ」

リナは、背を向けて歩き出す。その背に、俺は一言だけ言った。

「リナ……ありがとう」

「……うん」

リナは、それだけ言って歩いていった。

「まったく。【親】があんなんじゃない、お前たちも……苦勞するな?」

俺は、二機に微笑む。

「だが……。だからこそ、俺は彼女が好きになったんだ。自分の仕事を全力で成し遂げ、努力する姿に惚れた」

「…………お前たちを造り出してくれた彼女が…………」

機械は言葉を持たない。だが、それでも、この言葉が伝わっていると信じて。

40 完

41：小さな虹

宇宙世紀0089. 6. 10 第00特務試験MS隊に、新型MSと連邦軍最高評議会からの手紙を受領。

俺は、格納庫へと呼び出され、訳が分からずに、格納庫へと向かった。

「で、俺に何かあるのか…?」

「ああ。だから呼んだんだ」

フアングは、少しだけ表情が暗い。なんだか、昔にもこんなことがあった気がする。

「まさか、また研究所に行ってくれとでも?」

「……………いや、研究所ではない…」

「…おいおい…。どこか行かなきゃならないのか?」

正直困った話だ。リリーの面倒も見なければならぬのに…。

「…今度はアジア方面軍防衛大隊の傘下である「第66特殊戦闘小隊」というところに…
時的に行ってほしいとさ」

「……………なんで。今、リリーの先生やってるから、異動なんか無理だぞ?」

「いや、それでもだ」

「…おいしい。そりゃあないぞ、フアング」

「ま、俺も同じ気分だよ…」

フアングは頭を軽く掻きながら言った。

「…行つてくれないか…?」

「…リリーが…」

するとフアングは、俺を見ながら小さく笑った。

「お前、そこまで心配性だったか?」

「違う…。ただ、リリーはまだなじめていないと思つて…」

「はは。それは、否定はしない。だが、たまには先生がいなくていうのもアリなんじゃないか?」

「……………はあ……。分かったよ。ただし、リリーには何も言わないでおいでくれよ?」
「こうしていても罅が明かない。」

「ああ。分かつているさ」

「だが、異動するにしたつて、俺には機体がないぞ。前線指揮なら絶対にやらないからな」

とか、無理な注文でもすれば異動しないで済むかな。とか思つて言つたつもりが。

「そう言うと思つてさ。……おらっ！」

フアングは後ろにある布を取り払う。

布が宙を舞い、その奥から姿を現す真っ白いMS。

ジムとも、エウーゴで作られたネモとも違う顔。これは完全な新型だと悟った。

「RGM-89「F」ジェガン。こいつの戦闘データの収集も兼ねて、アジア戦線に行つてきてくれ」

「……………」

まさか、本当にMSが出てくるとは……。これじゃあ断れない。

「…わかった。やろう。それで、期間は？」

「そうだな、1、2ヶ月くらいだな」

「…また長い戦いになりそうだ」

「そう言うなよ。久々のMSだぞ？」

「……………」

機体を見上げながら、俺は少しだけ心を躍らせていた。

食堂でコーヒーを飲んでいると、俺の周りに、リリーや、兵士たちが集まってくる。

「先生……………」

「リリー？どうした」

「……っ！」

リリーは涙を流しながら抱き着いてくる。

「お、おい!? どうした!? リリー……?」

「……ムゲンさん。すいません……リリーちゃんに、異動の話が聞かれてしまつて……なるほど。まあ、いつかは言わなければならないことだつたが…。」

「うう……! せんせえ……行かないで…」

「リリー。大丈夫。すぐ帰つてくるから」

「いや……。怖い……」

「それは嘘だな?」

「っ……」

「ムゲンさん! さすがにそれは……!」

「いいや。リリー自身が知つてるさ。もう大丈夫。そうだろ?」

「うう……」

リリーは、俺の胸に顔を埋めながら、小さくうなずいた。

「……リリー。怖くない。もう二度と会えないわけじゃないだろう? たつたの2ヶ月」

「うう……………」

リリーはどこか納得がいかない様子だった。

「ムゲンさん……………」

全員が心配そうな顔をしている。なんだか、懐かしいな。

「…………お前たちまでそんな顔をするな。ここは食堂だぞ?」

「ですけど……………」

「はははっ!懐かしいな。昔、俺が研究所に行くことになった日も、こんな感じだった」

「あれは本当につらかったんですよ!」

「だが、今は笑って流せる話だろう?だって……………」

俺は、微笑みながら言った。

「俺は生きているんだから」

そのあと、ユーリが来てくれたおかげで、全員はなんとか立ち直ってくれた。

この時ばかりはユーリに感謝だな。

気づけば俺は、リナの部屋の前へとたどり着いていた。

「……………あ……………」

意識はしてなかった。だが、どっちみち彼女にも伝えなきゃならないこと。

俺は、ノックした後、扉を開く。

「……………」

「リナ…………？」

彼女は、アウロラと共にベッドで静かに眠っていた。

俺は、静かに地面に腰を下ろす。

「……………」

ゆつたりとした時間が、俺の心を安心させてくれる。

ふと、彼女の寝顔を見つめてみた。

「……………そっくりだ」

アウロラと彼女の寝顔。そっくりだった。アウロラが成長すれば、きっとリナみたいになるのだろう。

楽しみだ。……本当に。

しばらく見つめ続けていると、彼女は、ゆつくりと目を開ける。

「……………あっ…!？」

「しっ。静かに。アウロラが起きちゃうぞ？」

「あ…………、ごめん。ムゲン、いつからいたの…………？」

彼女はアウロラを起こさないようにゆつくりと体を起こす。

「そうだね。リナとアウロラの寝顔をゆつくりと見る事ができたくらいかな？」
「……………意地悪……………」

リナが頬を膨らませながら言う。

「そう言うなよ。寝てたから、起こすのもなつて思つてただけなんだよ」

「……………そ。なら、許してあげる」

「……………あ、ああ……………」

「それで、何の用だったの？」

「ああ、俺、しばらく艦を空けることになつたんだ」

「あ……………。そつか。行っちゃうんだ……………」

「ああ。まあ、2ヶ月くらいだから、すぐさ」

「ほんと、あなたは忙しいね。…………私だつて寂しいんだけどな……………」

そう言いながら、上目遣いでこちらを見ってくる。こんなことされたら、どう対応すればいいか分からないじゃないか。

「悪い。帰つたら、ゆつくり過ごそう。それで許してくれ。な？」

「……………はあ……………。いいよ。わかつた」

少しだけ気まずい雰囲気。話題を変えなければ。

「あ、そういえば、新型が来たんだけど……………」

「RGM―89 [F] ∴。名前はジェガン」

「……………」

返す言葉が見つからない。流石はリナだ。

「見たよ。最近正式採用した型とは違うから、たぶん初期生産の試作機つてところかな」
「詳しくは分からないんだが、ジェガンは∴強いのか？」

そう聞くと、リナは目を輝かせながら言葉を返す。

「強いも何も！最近量産され始めたばかりの機体の試作機だよ!?!弱いわけじゃない
!!」

「……………そ、そうか…」

「見たところ、バックパック以外は正規品と同じみたいだし、かなりいいスペックなん
じゃないかなー！」

「そうだ。俺はこのリナが見たかったんだ。目を輝かせて、子供みたくにはしゃぐ彼女
が。」

「……………なんだけど……………。って、ムゲン、聞いてる？」

「えっ…。あ、ああ……………なんだったつけ？」

「まずい。見とれていた。」

「もう！すっかりしてよ！あの子は、ジムⅢのバックパックだから、既製品よりスラス

ターの効率は悪いけど、機動力はこっちのほうが上だね」

「……………なるほど……。まあ、その話はまた今度……。な？」

「……………そうね。あー！もう一度見たくなってきたなあ！」

「…そういうえば、リナ」

「うん？」

「最後の1機、どんなプランを考えているんだ？」

「あ、聞きたい？」

リナは再び目を輝かせ、俺に聞いてくる。

「ああ。聞きたい」

個人的にも、この話は聞きたかった。

「とりあえず、型式とか名前はまだ考えてない」

「それで、コンセプトとしては、『近距離での戦闘に特化し、機動性を限界まで引き上げ

た機体』っていうコンセプトと」

「と……………って、ほかにあるのか？」

「あるよ！もう一つは、『防御力を重視し、白兵戦の武装を豊富に装備した機体』だね」

「なるほど……………。つまり、前者は、『高機動型の近接機』で、後者は『重装甲かつ多種

に渡る武装を持つ近接機』ってことか」

「そういうこと。ムゲンに合ったコンセプトで考えているから、近接かなって思ってた」
「なるほど……」

「一応、もう一つ考えているんだけど」

「うん……?」

「これは、ムゲンには合うかわからないけど、『中距離および遠距離からなる武装を搭載し、拠点制圧および、大多数の敵機殲滅を目的とした重装型』っていうのがある」

「……なるほど」

「ふふっ！聞いてるだけでワクワクしない?」

リナの言う通り、何故だかワクワクする。理由は分からないけれど。

例えるなら、プラモデルを1から作り始めるあの感じ。

「ああ。ワクワクするな……」

「でしょ?……ムゲンも、頑張るみたいだし、私も頑張らなきゃ……!」

「……ああ。お互い、頑張ろうな」

リナに手を差し出す。すると彼女は、飛び切りの笑顔で

「うん!」

そう言つて俺に抱き着いてきた。

「うおっ!」

「えへへ……。少しだけ、いいよね？」

「……。ああ。少しだけ……」

リナは、幸せそうだった。俺も――

「……………幸せだ……」

「え…………？」

心の声が漏れていたようだ。

でも、いい。

「幸せだよ。リナと、アウロラといれて」

本当の事だから。

「……………私もだよ。幸せ」

俺と彼女は見つめあった。そして、なんだか可笑しくなって、二人で笑った。

それから、俺はリリーから甲板に呼び出しを受けた。

なんでも、二人つきりで話をしたいらしい。

甲板へと出ると、涼しい風が俺の前を通り過ぎて行った。

「……………」

昨日は雨だった。心地の良い風と、丁度いい陽射し。

……この感じ、好きだ。

「……先生……」

「リリー……?」

振り向くと、走ってきたのだろうか、リリーが肩で息をしながら俺の前に立っていた。

「……せんせい……っ!」

彼女は急に抱き着いてきて

「り、リリー……?」

俺は、困惑するしかなかった。

「どうしたんだい?」

「……離れたくない……。行かないで」

「……」

俺は、彼女の頭を優しく撫でる。

「あ……」

「大丈夫。すぐ帰ってくるから」

「……でも……」

「……リリー」

俺は、彼女を見つめる。

「君は強い子だから。皆を守ってあげてほしい。出来るかい？」

「……………やだ」

「え……………」

衝撃だった。リリーが拒否したのだ。……悲しいわけじゃない。けれど、何故だろう。複雑だ。

「先生がいらないなら……………」

彼らをまだ、家族と認めていないのだろうか……………。

やっぱり、俺がいなくなったら……………。

でも、ダメだ。このままではダメなんだ。

「リリー。お願いだ。俺の代わりに、皆を守ってくれ」

「お願い……………」

「ああ。会話もしなくていい。だから、戦いになったら、守ってあげてほしい。彼らが君を守ったように」

「……………！」

リリーには思い出したくない記憶だろう。

前の戦闘、リリーの目の前で仲間が死んだ。

彼は、彼女を「希望」と言って死んでいった。

分かっているはずなんだ。彼女も。

「……………うう……………」

どうしても考えがまとまらない彼女を見て、俺は一つの提案をする。

「分かった。それじゃあこうしよう」

「……………?」

「俺と、戦おう」

「え……………!?!」

リリーは驚いていた。当然だろうか。

「戦って、リリーが勝ったら、俺はこの艦でリリーの先生を続ける」

「私が負けたら……………?」

「俺は、アジア戦線に行く。そしてリリーは、2ヶ月間この艦を守ってほしい」

「……………」

少しの間リリーは考えた後、口を開く。

「先生を……………倒せば、いてくれるんだよね。なら……………やる!」

「……………分かった。だが、こっちも本気で行かせてもらうよ」

「……………うん」

そのことをファングに伝えると、渋々ながら彼は承諾してくれた。そして、リリーとの戦闘は、2日後に行われることになった。

そして約束の2日後。

俺は、ジエガンに乗り込み、荒野へと出る。

今日は特に多くの観戦もあつて、少しだけ緊張する。

しかし、戦闘が始まればそんなこと気になりはしないが。

「先生……」

彼女は、俺の前へと立ちふさがる。

今は、互いが敵同士。

いや……。先生と生徒か……。

「……よし、リリー。本気で行かせてもらう…!!」

今は口調も優しくする必要はない。戦いは…戦いだ。

サーベルを引き抜いて一気に間合いを詰める。

「……」

サーベルとサーベルが激しくぶつかり合い火花を散らす。

間合いを取りながら、ビームライフルで牽制。

続けて、シールドミサイルで相手の位置を誘導。

すかさずサーベルで斬りに行く……が。

リリーはそれを受け止め、さらに空いた右腕でビームライフルを放つ。

受け止めているサーベルを蹴り飛ばし、その勢いで宙返り。

「今だ……!!」

宙返り中にスラストスターを起動。機体が相手を正面へ捉えた瞬間、一気に詰め寄る。

「うっ……!!」

サーベルでビームライフルを切り落とし、怯んだ隙に左腕を切り落とす。

「これで——っ!?!」

振り上げようとした右腕が、何かに撃ち貫かれた。

「…ま、まだ………終わってない……!」

「ファンネルか……だが、まだ!」

一度間合いを取りつつ、シールドミサイルを放つ。

ミサイルはリリーへ迫るが、そのたびにファンネルがリリーへの攻撃を阻む。

「…すごいな。リリー…。ここまで強いとは思わなかった」

「……先生も……強いから……」

「そりゃ、嬉しいね。…なら、もっと強いところを見せないと……なあ!!!」

シールドミサイルを放ちながら一気に突っ込む。

それをファンネルが遮ったところを見逃さない。

シールドを相手へ投げつける。

右腕でシールドを吹き飛ばすリリー。

「……今だ……」

すばやくサーベルを引き抜いて、リリーの正面へ。

「……」

相手の対応が一步遅れた。だが、ファンネルは彼女の脳波を読んで射撃してくる。

上からの射撃。ならば……!

俺は機体を動かしジャンプ。

続けて弧を描くように回転しながらファンネルごとジムの左肩へ切りつけた。

ファンネルが1基撃墜され、その爆風で攻撃の位置が少しだけずれる。

しかし、それも予測済み。

相手を足払い。

それをジャンプで回避するリリー。

「……………」

素早く相手の懐へ。サーベルを右から左へと薙ぎ払い。

リリーも合わせるようにサーベルを左から右へと薙ぎ払う。

互いにぶつかるサーベル。

打ち合い、互いに隙ができる。

もう一度仕掛ける。

チャンスは、相手が態勢を立て直す一瞬の隙。

そのためにこちらが早く反応しなければならぬ。

3、2、1……………。来る！

その刹那、リリーの機体に一瞬だが立て直すための隙が生じた。

「今だあああ!!」

サーベルを逆手に持ち替えて切り抜けようとする……………が

「ふふ……………。危なかった……………」

その一撃を読んでいたかのように、リリーがサーベルで受け止めていた。

「くっ……………!!」

「先生。私の……………勝ち」

背後から伝わる、3つの殺気。ファンネルだろう。だが、ここであきらめるわけにはいかない。

「それは……どうかな？」

「そうだろう！ ジェガン!!!」

俺はジャンプし、ジムを足場に宙返り。

宙返り中に、正面からファンネルを捉える。

今度は…逃がさない。

素早く横薙ぎに。

まとめて3基のファンネルを撃墜する。

その爆風が、ジェガンとジムを包み込む。

チャンスは今しかない。

スラスターを起動し、爆風の中を突き進む。

「リリー!!」

「どこ……どこから……!!」

爆風をすり抜け、ジムの背後へ。

「俺は……!!」

「後ろ……!!!」

「そこだあああ……!!」「ここだあああああ!!」「

ジムが振り返る。互いのビームサーベルが火花を散らしながら何度目かの衝突。

「くっ……まだだ……!」

「私は……!」

「リリー……!?!」

リリーのサーベルの出力が上がっているのが分かる。

「先生と……ずっと一緒に……居たいからああああああ!!!!」

彼女の機体から、とてつもない圧力と共に、微かに「虹の光」が見えた。

その姿に唾然として、力が抜けた。

サーベルが吹き飛ばされる。

「……………負けた……………のか」

悔しさよりも、リリーから伝わる暖かさを感じていた。

「……………」

さつき見た【光】は、幻覚なんかじゃない。

凄く小さい光で、俺たち以外には見れなかったかもしれない。

けれど、俺はこれで本当に確信した。

リリーは……………本当にニュータイプなんだと。

兵器ではなく、純粋な気持ちによって生み出されたその小さい【光】。

それは、グレイやゼロでもない。そして、ミラージュが見せた光でもない。

本当の気持ちなんだ。その光は、確かに俺の胸の中で、心の中で温もりを持っている。

「……暖かい……」

「先生！」

その声は今まで聞いた中でも一番の清々すがすがしい言葉。

「リリー………」

「……私の勝ち、だよな？」

「………………。ああ。君の勝ちだ」

負けたことよりも、嬉しかった気持ちのほうが強かった。

言葉にできないけれど、だが、嬉しいんだ。

こうして、俺とリリーの決闘は、リリーの勝利によって幕を閉じた。

負けた以上に、得たことのほうが大きかったのは確かだ。

これで俺はアジア前線には行かなくて済む……。と思っていたのだが。

「ま、ダメだよな………」

「ああ。リリーには、どう言ったらいいだろう」

「……素直に言つてあげればいいさ。どうせ避けられない」

フアングは、うーん、と唸つて悩んだ後、俺の肩に手を置き

「任せた」

「任せたって……おい!? そりゃあないぞ!」

「ははは! それじゃ!」

フアングは笑いながらブリッジから逃げ出した。

「……………はあ……」

仕方がない。リリーにも、伝えなければならぬのだ。

これじゃありリリーが戦つた意味がないのだが…。

なんて言つてあげればいいだろう。

そんなことを悩みながら、俺はリリーの元へと向かった。

リリーは甲板にいた。俺を待っているかのように、彼女は静かに待っている。

「……………リリー」

「先生。待つてた…」

リリーは笑顔で俺を迎えた。その笑顔を見ると、どうしても打ち明けにくくて。

「あ、ああ……。えっと……。飲み物……。飲むか？」

そう言つて、俺は彼女にココアを差し出す。

「わあ……。ありがとう……。先生……」

「……………」

しばらくの沈黙。リリーは、ただ静かに待っている。

俺から何かを言つてもらうためだけに。

俺は、意を決して彼女に打ち明けようと口を開く。

「なあ、リリー……」

「なに……?」

「実は……………な……俺——」

「行くんだよね……?」

知つていたかのように、彼女は言葉を遮つた。

「……………ごめん。君を無駄に戦わせてしまった……。本当にごめん……」

俺は、彼女に頭を下げた。

「……………頭……あげて。先生……」

リリーは静かにそう言つて、俺の肩に手を置く。

「……………」

顔を上げると、彼女は微笑んでいた。

「先生……。分かってるよ。……私のためだけに上層部って所の命令は破れないことくらゐ」

「……………リリー……」

「わがまま……………言っちゃってごめんなさい。……でも……。これでスッキリしたから」
「え……………?」

「初めてだから……………。『わがまま』なんて……………」

「リリー……………君は……………!」

「寂しいけど……………。先生との約束、守るから」

「リリー……」

「皆……………守るよ。だから……………っ……………だから……………っ!」

リリーは泣きながら、言葉をつづけた。

「もう一つだけ……………っ!も、もう一つだけ……………『わがまま』を……………いいですか?」

「なんだい……………?」

彼女の涙を拭きながら笑顔で答える。

「……………ぎゅーって……………してほしい……………」

「……………」

「や、やっぱり……ダメ……かな」

俺は、微笑みながら言葉を返す。

「ああ。分かった」

俺は彼女に両手を広げ

「さあ、おいで」

一言だけ言った。

リリーは俺に近づき、胸に顔を埋めた。

「……せんせいっ……うう……!!うわあああああん!!!」

堪えられなくなつたのだろう。子供のように泣いている彼女を、俺は優しく撫でる。

「……よく頑張つた。今は、泣いていい」

「うん……っ!……うんっ……!!」

「君は強い子だから。先生が保証するよ。でも、辛かつたよね」

「だから、いっぱい泣いていい。泣いた分だけ、人は強くなれるから」

「……ううっ……!!ぐすっ!!」

「リリー……。ありがとう。君は、俺たち大人の【希望】だ……」

「わたしっ……。そんなのっ……興味ない……っ」

「ああ。そうだな。でも、覚えておいてくれ。……俺は、君から微かだけれど【虹の光】を

見たんだ」

「……………ぐすつ…」

「今までで感じた彼らのモノより、ずっと純粹で、優しく、暖かかったんだ」

「……………君は、隣人さえも愛することのできる「ニュータイプ」だ」

「……………知らない…つ……………」

「今は、知らなくてもいい。でも、いつかはそれを理解しなきゃいけない時が来ることも、覚えておいて」

「……………」

「今は、好きナだけ泣いて、好きナだけ甘えればいい」

「うん……………」

それから、どれくらい経っただろうか、彼女はゆっくりと俺から離れ、涙を拭いた。

「……………もういいのかい？」

「うん」

「……………分かった」

「先生」

「なんだい？」

「……頑張るね。それで、先生が帰って来た時には、皆と仲良くなって、【先生】じゃなくて、一人の【家族】として迎ええられるように……」

「せ、先生の事……。【ムゲン】って呼べるように……。頑張るからっ!!」

リリーは顔を真っ赤にさせながら叫んだ。

「……ああ。楽しみにしているよ。それなら、一つだけ【おまじない】をしてあげよう」

「おまじない……?」

「これはリナにかした事ないけど、特別だからね?」

俺は彼女の顔に近づき、頬にキスをした。

「……!!!」

「……さ、これで大丈夫。きつとうまくできるさ」

「………は、はい!!」

彼女は元気よく頷いて、俺に笑顔を見せてくれる。

寂しさは無い。リリーも、前を向いてくれた。

それなら、俺がすべきことはもう決まっている。

……リリー。後は任せただぞ。

俺は、機体に入り込み、輸送機へと歩き出す。

目指すは新たな戦場。【アジア戦線】。
彼女の覚悟、その期待に応えるためにも。

さあ行こうジエガン。

俺たちには、俺たちの役目がある。

4 1 完

アジア前線編

42：第66特殊戦闘小队

宇宙世紀0089・6・15 ムゲン・クロスフォードおよび、ジエガン搭載輸送機、アジア方面軍防衛大隊傘下、「第66特殊戦闘小队」交戦地域上空に到着。

「ムゲン中尉、上空に到着。行けますか？」

「問題ない。いつでも行ける」

システムをチェックしながら、軽く言葉を返す。

「了解。ハッチオープン！」

足元に広がる密林地帯。どうして俺は配属初日にこんな登場の仕方をしなければならぬ……？

「コントロールをそちらへ譲渡。自分のタイミングでどうぞ！」

「了解した。ムゲン・クロスフォード、ジエガン、行くぞ!!」

機体を掴んでいるアームを外し、輸送機から飛び出す。

下からくるGが凄いかと思ったが、それほどGが来るわけでもなく、しかし、それでいて凄いきさで空を降りていくジエガン。

「この程度のGなら……」

足元に見える残党のザク。

「……照準……」

照準を合わせ、トリガーを引く。

「そこだっ!!」

ビームが銃身から放たれ、その一射が的確に敵を頭上から撃ち抜いた。

射撃にもブレがなく、当てやすく感じる。

それとほぼ同時に地面へと着地。

轟音と共に、着地した地面がえぐれる。

態勢を立て直し、立ち上がる。空を見上げると、まだ俺を乗せていた輸送機が飛んでいる。

念のために無線でも送っておくか。

「こちらムゲン。無事着陸した」

輸送機のパイロットに無線を送る。

「了解です。それでは、ご武運を」
そうして通信が途切れる。

「……」

辺りを見回すが、今のところ敵影らしきものは見当たらない。

「今のうちに連邦軍の拠点に動いておくか……」

機体を動かし、予定の位置へと移動する。

しばらく歩いていると、正面からレーダーの反応。

それと共に、モニターに映る1機のジム。

「……こちら、第00特務試験MS隊所属、ムゲン・クロスフォード。そちら、所属は？」

「第66特殊戦闘小隊って聞いたことないっすか？俺はその一人。あんたがムゲンちゃんっしょ？」

「……」

なんだこのチャラそうな声は。

「ああ」

「んじゃ、ついてきて」

そう言うのと、ジムは背を向けて歩き出した。

俺は、彼の背を追いついていく。

しばらく歩くと、密林地帯を抜け、ある程度の大きさを持つ野営地にたどり着く。

ある程度と言っても、MSを格納する場所はないし、簡易的なテントのみだが。

俺は機体から降り、テント近くまで歩いた。

「よっ！ムゲンちゃん！」

背後からの声。先ほど通信で聞いた声と同じ。

振り返ると、そこにいたのは短髪の髪を金に染めた青年が立っていた。

目の色は青色で、顔は、まあ誰が見ても文句のつけられないくらいカッコいいだろう。

年齢はたぶん10代後半か20代前半と言ったところだろうか。

「君がさっきジムで先導してくれた人か」

「こそ。俺はカイル。カイル・ホプキンス。よろしく！ムゲンちゃん！」

そう言つて彼は手を差し出してくる。

「あ、ああ。ムゲン・クロスフォードだ。よろしく」

答えた後、彼の手を握った。

手を離れた後、彼は俺をテントの中へと案内する。

俺は、それに従つてゆつくりと歩き出した。

テントの中は、簡素で、最低限の椅子と机、そして小さいコンロ。それ以外は荷物程度しか置いていない。

「んじや、すぐにアイツらにも連絡するから。しばし待たれよ」

「……分かった」

俺は近くにある椅子に腰かける。

「あーもしもし? うん。オレオレ。例の人来たから来てくんね?」

最近の若者って感じがして嫌いではないが……。こんな彼が軍人とは……。

「そそ。分かってるって。あ? マジ? 行く行く! 夜つしよ?」

何の話をしているんだ……?」

「あー! マジか! チョー楽しみだわ! うん。てか、来て話したほうがよくな? うん。

じゃ、待つてるし」

彼は喋り終わると、無線機を机に置いて、俺に目線を送る。

それからしばらく考えた後、俺に口を開いた。

「ムゲンちゃんさ」

「な、なんだい……?」

彼は俺の近くに顔を寄せ、ひそひそと話す。

「今夜、近くの街に合コンいかな〜？」

「……………」

呆れて言葉が出なかった。なんと返せばいいのやら…。暫く考えた後、俺は口を開く。

「…嬉しい誘いだけど、うちの嫁に怒られそうだから遠慮しておくよ」

苦笑しながら返すと、彼は『こんな奴に嫁がいるなんて』という顔をして、俺から離れた。

そして、何を思ったのか再び顔を近づけ

「あ、でも、行ける時いつでも声かけてちょ」

「……………あ、ああ。……………わかったよ」

少し引き気味の俺に構わず、彼はニコニコと笑っていた。

面白いヤツだな。とか、心で思った。

しばらくして、二人の青年が入ってくる。

一人は銀色の髪が肩あたりまで伸びている青年。目の色はルビーのような色をしている。

顔は普通にカッコいい部類に入るだろう。

もう一人は黒髪の青年。目の色も黒で、唯一彼はアジア系の顔つき。

それなりにカッコいい。ただ、少しだけ目つきが悪く見えるのは、彼が少しだけ細目だからだろうか。

黒髪の青年は、カイルを見るなり、すぐに視線をそらした。

それに気づいたカイルは、青年に向かって言う。

「おっ！零次ちゃん！元氣してた？」

零次と言われる青年は、鬱陶しそうに彼に言葉を返す。

「それなりに元氣だよ。……何度も言ってるが、ちゃん付けをやめろ！」

「えっ？じゃ、なんて言えばいいし。「ただの零次君」とでも言えばいい？」

挑発するように彼は言った。それに腹を立てた零次は

「なんだと！ふざけるなよ!!俺にはれっきとした朱雀 零次って名前があるんだよ!!!」

「あー。ごめんごめん。でもさ、捻りがないと面白くないっしょ?だから、「ただの零次君」でいいっしょ」

「お前……!!!」

今にも殴り掛かりそうな彼を見て、銀髪の青年が叫ぶ。

「二人とも!もういい加減にしろ!!新しい隊長を前に何を考えてるんだ!!!」

「そうは言うけどさ……。わかったよ……」

振り上げた拳を降ろし、ふてくさる零次という青年。

「あいあい。で、なんだっけ？」

銀髪の青年はため息を吐いた後、俺に向き直り、言った。

「着任早々にこんな光景を見せてしまつて申し訳ない。私は、第66特殊戦闘小队所属のガイ・イシュフィール。こっちの二人はカイルと零次」

そう言つて、彼らを指さしていく。

「ムゲンちゃん。さつきぶりつしよ。ま、これから仲良くしてちよ」

カイルは笑顔で言った。

「ああ。よろしく頼むよ」

「朱雀 零次です。……よろしく」

零次は俺をチラツツと見ながら言う。

「よろしく。零次君」

「……………」

言葉を返さず、彼は別のほうを見た。

「まあ、こんなメンバーですが、仲良くしてあげてください。隊長」

さつきから「隊長」と呼ばれていることに、俺は違和感を覚えた。

俺は、ただ異動して来ただけで、隊長になるとは言われてなかったんだが。

「…気になったんだけれど……」

「はい？」

「俺……隊長なのか？」

「はい。そう聞いていますが……？今日着任してくる方は、私達の隊長になる方だと」

「……」

衝撃だった。俺は、ずっとここで過ごさねばならないのか……？

「あ、でも安心してください。2ヶ月の間だけという話も聞いていますので」

衝撃から一変、安心に変わった。良かった。

しかし、そこで良からぬことを言うカイル。

「まあでも、2ヶ月ここで生き残れたらの話っしょ」

「……え……」

「ムゲンちゃんをビビらせるつもりないけどさ。先に言っておいたほうがいいっしょ？」

「ガイ」

「……そうだな」

彼は、真面目な表情で言葉をつづけた。

「彼の言う通り、ここで2ヶ月間生き残れば帰れるという話は本当ですよ」

「……」

「特にこの私たちの部隊は、常に最前線で戦っていますから。昨日生きていた隊長さえ……」

「生きていた……?」

「ええ。昨日、残党の攻撃で機体ごと……」

彼は、少し悲しそうな顔をする。

「そうか……」

また、とんでもない所へ異動させられたもんだ。

「なんで死ななければならなかったんだ……。隊長は悪くないのに……!」

零次が悔しそうに机を叩く。

「まー。そういう場所だし。戦争だから仕方ないっしょ」

「戦争だから仕方ないで済むのかよ!? 人が……! 人が死ぬことが仕方ないだど!」

「そう言ってるんじゃない。俺たちに何が出来るし。人を殺してこいと命令された俺たちに。どうすることも出来ないっしょ」

「……………くそっ!!!」

彼らの気持ちも、痛いほどわかる。零次が言いたい、【戦争で人が死ぬことが仕方ないで済むのか】というこも。

カイルが言う、【戦争だから仕方ない】という言葉も。

それでも、「戦争だから仕方ない」。この一言で片付いてしまうこの世の中は、きつと狂っているんだ。

「二人とも、もういい。…そういう場所です。隊長。いえ、ムゲン・クロスフォードさん」
「……………」

「皆、明日生きているかすら分からない。物資だつて、最低限しか渡されない。こんな状況を、2ヶ月生き残れたら運がいいですよ」

「……………そうか」

「怖気づいたなら帰ってもいいんじゃない？ま、帰りの輸送機なんか来ないだろうけど」

「カイル！」

ガイがカイルを諫める。俺は、正直驚いていた。

たった3人で、ずっと戦ってきていたのだから。

「いや、いい」

俺は、彼の言葉を制止し、言葉をつづけた。

「確かに怖いけれど、今ここで帰ったら、家族に怒られてしまうからね」

「……………」

全員が驚いた表情でこちらを見る。

「それに、そんな話をされては、君たちを見捨てる事なんかできなくなった」

「隊長……」

この小隊は、俺たちと同じ。

常に最前線で戦わされ、ロクな支援もない。

疲弊したって、手を差し伸べてくれる人など存在しない。

だから、俺たちは部隊の中で家族と呼びあい支えあってきた。

彼らも、それは同じだ。

なら……俺がすべきことは決まっている。

「本日より、第6 6 特殊戦闘小隊の全指揮権は、俺が持つ」

「俺が隊長になった以上、ある一つの命令だけ守ってくれればいい。それ以外は何をしたら構わない」

「命令……？」

「俺たちは……家族だ。家族である以上、互いに助け合え。それだけ。それだけを守ってほしい」

「……………」

全員が呆気にとられている。そのあと、カイルは笑いながら言った。

「オーケーオーケー。そんだけね。ははは!!こんな指揮官見たことないっしょ!!」

「じゃ、隊長。俺、街で合コンしてくる。なんかあつたら電話して。もしかしたら出るからさ」

スキップしながらカイルはテントを後にした。

「……………すいません、私は機体の整備に行きます。それでは」

ガイは、小さくお辞儀した後、テントを出ていく。

「……………ふう……」

俺は、椅子に腰を下ろし、溜息を吐いた。

「ムゲン……………隊長」

「うん?」

見ると、零次は俺を静かに見つめていた。

「どうしたんだい?」

「えっと……………よろしくお願います」

「……………ああ。よろしく。さつきも言っただろう?」

「あ、そうだったね。……………はは……………」

彼は、笑いながら言った。その笑顔を見て、俺もつられて笑った。

「ありがとうございます。その…家族って言うてくれて」

「引かないのか？会って早々に家族って言う俺に」

「引かないですよ。単純に嬉しかったですし」

「…そうか。それは良かった」

彼は、満足した顔をしていた。

「ムゲン…：隊長は、家族は…：？」

隊長、と言うのに慣れていないのだろうか。俺は、微笑みながら、彼に言葉を返す。

「言いにくいなら、ムゲンでいいよ。それで、家族だっけ？」

「…そっちがいいなら。…：わかりました。ムゲンに家族は…：いるのですか？」

「…そうだな。いるよ」

「…：…：そうですか」

「ああ。前まで、本当の家族と呼べるものは無かったけれど、最近、本当の家族が出来たんだ」

「え？」

「そうだな。少し、長くなるけれど、いいかい？」

「はい。ムゲンの話、聞きたいです」

彼は、大きく頷く。

俺は、深呼吸した後、言葉を繋いだ。

「……一年戦争っていう戦争があったのは、知ってるかな？」

「知ってます。ジオンと連邦の戦いの始まりとなった戦争ですよね」

「そうだ。開戦の一日前の話。つまり、もう10年も前の話だよ」

10年……気が付けば、こんなに遠いところまで歩いてきたんだな。

たまには、記憶を思い出すのもいいな。

「俺は、両親がいて、普通に暮らす15才の少年だった」

「けれど、ある日、両親は、俺の目の前でジオンの兵士に殺された」

「そんな……!」

「理由はね、俺の両親はMSの研究者だったんだ。だから、殺された」

「そんな理由で……」

「ああ。最初は、ジオンを恨んで連邦軍に入隊したんだ。15の時にね」

「……」

「それから、今も所属している第00特務試験MS隊に入った。名前くらいは知ってるかな？」

「ええ。連邦でその名前を知らない人はいない。常に最前線で戦う特殊部隊の筆頭のような存在」

「……そ、そこまで大層なこととはしてない。続けるけれど、うちの部隊長が口癖のように言うが今でもずっと記憶に残っているよ」

「どんな言葉？」

「『俺たちは家族だ』」

「……さっきの……」

「ああ。あの言葉は、彼からの受け売りさ。……あの言葉に、俺は救われた」

「俺だけじゃない。あの部隊全員が救われたんだ」

「全員が……」

「今はいないが、研究所で改造され、孤独を歩いていた少年が、今では心を開き、傭兵と
なって、人々を助けている」

「もう一人は、賢く、狙撃の腕もあるのに、問題だらけの少女が、今では、人を指導する
立ち位置にいたり」

「傭兵であった彼を、家族と言って手を差し伸べていたり。そんな彼は、手を差し伸べた
部隊長に信頼を置いて戦っている」

「整備兵で、家族を失った彼女にも、家族だと、笑って。背中を支えていた。そんな彼女は、
今も整備兵として、家族を、自分のできることをして頑張っている」

「……俺も……そうだ」

「ムゲンも？」

「ああ。家族がいなかった俺に、家族だと。そう言って手を差し伸べてくれた」

「そのミームに、俺も遺伝したのさ。気が付けば、皆が俺の周りにいてくれて、俺は傍にいた彼らを助けよう」と

「だから、俺にとつて、あの場所は、本当に帰るべき家なんだ」

「この小隊の隊長は俺だ。それなら、ここも、俺の家。そして、ここに住む君たちは、俺の家族」

「……………」

「単純に、過去の俺は、家族しかすがれるものがなくて、形がないとも、理想だけで戦っているとも言われた」

「でも、今は…。違うんだ。俺も、人を支え、背を押す側になったんだ」

「と、言うとは……………」

俺は少し照れ臭がりながら言葉をつづけた。

「ん？……………ま、まあ……………そうだね。俺にも……………子供が出来たのさ」

「ええ?!子供いたんですか!？」

「ああ。……………今は、リ……………いや、妻と共に家にいるよ」

「凄いなあ……………。俺なんか……………」

零次は、少しだけ悲しそうな顔をした。

「うん？」

「……俺にも、家族がいたんです。それに、愛する人も」

「……いた、か……」

「けれど、俺を育ててくれた姉ちゃんは、俺の目の前で殺された」

「……」

「蒼花……いや、俺の彼女は、今も俺の帰りを待ってるんです」

「蒼花……と言うのか」

「ええ。彼女が待っているから、早く戦争なんか終わらせて帰りたい」

「そうだな。………なんで、戦争なんかあるんだろうな」

俺は天井を見つめながら、小さく呟く。

「分からない。けれど、いつか終わると信じて……」

「違う」

俺は彼の言葉を遮った。

「え……？」

「終わると信じるだけではダメだ。終わらせるために行動しなければ」

「行動……」

「……その行動は、決して正しいとは限らない。それでも、戦わなければならないんだ」
「……………」

その時、外からの爆音。音からするに敵襲。

「……敵か……！行くぞ、零次！」

「は、はい!!」

俺は急いでテントを飛び出し、機体に乗り込んだ。

いつか来る戦争がない世界。

それはまだ遠い夢のような話かもしれない。

だが、それでも……。そんな夢物語を実現するために、俺は、俺にできることを。俺にしかできない事をするんだ。

「ムゲン・クロスフォード、ジエガン、行くぞ!!!」

俺は一足先に機体を動かし、出撃する。

レーダーを確認後、3人に連絡を送る。

「カイル、ガイ、零次！敵だ！手を貸してくれ!!」

連絡を終える。そして、正面を向く。

正面から迫る敵を前に、俺は堂々と立ちふさがった。

ビームサーベルを引き抜き、斬りかかる。

相手は俺の一振り回避。しかし、回避した地点へタイミングよく、弾丸が撃ち込まれ、足が貫かれた。

そこを逃がさず、出力を調整し、サーベルをナイフ状にしてコックピットを貫く。ガイの援護だ。

背後から迫る1機に、振り向きながらビームライフルを撃ち込む。

ビームは背後の敵に直撃し、態勢を崩す。

そこを逃さずサーベルで胴体を真っ二つにした。

「……次は……。っ！正面3機！」

「了解。前に行くっしょ？オレも行くし」

カイルと共に前進。

右手でビームライフルを放ち、隙を見せた敵を左手のサーベルでコックピットを貫く。

実際に戦ってみると、新型がどれほどすごいのが身に染みた。

今までついてこれなかった速度に対応できる。

自らの手足のように動かせるというのは少し言い過ぎかもしれないが。

これが量産機なのかと疑ってしまっただけには優秀な機体だ。……確かにこれならリナが喜んで話す理由も納得がいく。

1機のザクが間合いを詰め、ヒートホークで斬りかかってくる。相手の振り上げた腕を掴み、受け流す。

態勢を崩したザクの胴体を、サーベルで切り落とした。

背後からの殺気。対応に一步遅れる。

「俺が逃がすわけないっしょ。落ちな〜」

背後から迫る敵をカイルがビームライフルで撃ち抜いていた。

「ありがとう。助かったよ」

「まだ来るっしょ？残りも片付けるし」

「……その必要は無さそうだ」

「なんで？」

「俺は……ここだああああ!!」

ザクの背後からジムがサーベルを振り上げる。

サーベルは宙に弧を描きながら、ザクを両断した。

「あー。零次ね。なるほど」

「……敵機沈黙を確認。よし、帰還しよう」

俺たちは、多数の敵に対して4機で対応し、全滅させた。

背を向け、野営地へ戻ろうとしたとき、リーダーに1機、機体の反応。

「敵だ!!」

振り返ると、こちらにまっすぐと進んでくる1機のザク。

あのザクには見覚えがあった。

俺とピクシーがトドメを刺された相手…。その姿はそれと酷似している。

ザクは、俺の機体以外には目もくれず、ひたすらにこちらへと進んでくる。

「くっ……!!」

サーベルを引き抜き、ザクと相対した。

ザクは、俺の正面まで来ると立ち止まり、周囲を確認し始める。

「何やってるか知らないけど、隙ありっしょ!」

カイルがサーベルを引き抜いてザクへと斬りかかった。これは、まずい…!

「カイ——」

「え……」

声をかける間もなく、気づいた時にはカイルの機体は宙を舞い、俺たちは困惑するほ

かなかった。

「カイル!？」

「なんだったんだ……今のは……」

この場にいる全員が唖然とし、それをやってのけたザクを見据える。

「……………お前たちは……敵か？」

ザクから聞こえた声には、人の温もりというのを感じられなかった。

だが、それでも、人のような声であるのは間違いない。

「……………オレは、試作型A I「J o h n」^{ヨハネ}。お前たちは敵か？」

J o h n……………ヨハネと呼ぶそのA Iは、機械であるにもかかわらず、俺たちに問いかける。『敵なのか』と。

全員が、唖然として言葉が出ない。それは俺も例外ではなく、俺も驚いていた。

「オレは、お前たち人間が敵であるかどうかを見極める必要がある」

「……………何故だ……？」

何とか声を振り絞って返す。

A Iと会話をしたことなど過去にも今にも一度だけしかなかった。…あれは会話ではないだろうが。

「人類は、間違いを犯しすぎているからだ」

「間違い…………？」

「戦争。差別。自然破壊…………。挙げたらキリがない。それだけの事を人類は犯している」

「…………だったら、俺たちは【敵】になるのではないか？」

「そう。そのはずだ。しかし、オレが人類が敵かどうか見極めるのには理由がある」

「理由…………？」

黙っていたガイが口を挟む。

「理由は、オレ自身がそれを見たわけではないからだ。【百聞は一見に如かず】という言葉をおれは知っている」

「いくら言葉で言われようとも、オレ自身の目で見ない限りは、オレは人類を【敵】とは認識できない」

「賢いんだな。そうプログラムされたのか？」

少し皮肉を混ぜて彼に言う。

「いいや。こんな言葉をオレはプログラムしてもらってはいない。オレの【意志】で言っているだけだ」

「随分と良くできている AI だな…。本当に人間と喋っているように感じる」

ガイは素直にそれを言っている。確かに良くできているとは思いますが、相手が AI と思

えば余計に恐怖を覚えるのはなぜだろう。

「光栄だ。しかし、オレは戦闘用に造られたAI。オレは【失敗作】だ」
「失敗作……?」

「お前たちがそこまでを知る権利はない。……今回はこれでお別れだ。また会おう」

「ま、まて!!!まだ話は……!」

ガイが制止するも、ザクは言葉を無視するかのように反転し、森林の中へと消えていった。

「なんだったんだ……?」

それが何にしろ、あの時戦っていたら、まず勝ち目はなかったと思う。
理由が何なのかは分からないが……。俺の勤がそう告げていたんだ。

野営地に戻り、全員を集めて、俺は先ほどのAIの話をすることにした。

「まさか……AIと戦う日が来るなんて……」

零次は驚きを隠せず、口を開いた。

「それはみんな同じっしょ。今まであんな奴見たことないんだし。機体も新型っぽくね？」

「いや。あの機体はザクⅢ。第一次ネオ・ジオン抗争で量産された機体だ。だが、AIを搭載したザクⅢなんて聞いたことがない」

カイルとガイは互いに言葉を交わす。

そんな彼らを横目に、俺は一つの事に考えを巡らせていた。

「……………何故……………攻撃をしてこなかった……………？敵かどうかを見極めるため……………？」

気が付けば心の声が漏れ出していた。

我に返ると、全員がこちらを見つめて、不思議そうにしている。

「あ、すまない……………」

俺は恥ずかしくなつて俯いた。

それを見たカイルが

「ぷっ……………!!ははは!!おっもしれえ!!ははは!!」

大笑いされた。なんで笑われたのか理解できない。

すると、それにつられた二人まで笑い出す。

「お、おい!?お前ら!なんなんだ!」

「ははっ!!!す、すいません。たいちよ……………ふふ……………!なんか、見てて可笑しくなっちゃつ

て」

「くっ……………ふふ……………。ははは!」

零次までもが笑っている。

俺だけ置いて行かれてる気持ち半分ないんですけれど……。

「いやー。ムゲンちゃんさ、おっもしろいわ！」

「なんで」

細目でカイルを見る。

「だってさ、突然独り言のように『何故……攻撃をしてこなかった……？敵かどうかを見極めるため……？』って……!!ははは!!チョー真面目じゃん!!」

「ま、真面目で悪いか!？」

なんか、少しだけ俺の声にまねようとしていたのは気のせいじゃないはずだ。

カイルならやりかねない。

「ふふ……。でも、その真面目さは大事だぞ。カイルも少しは見習うんだな」

「ガイちゃんそりやないっしょ！俺は今のままでじゅーぶん幸せだし？」

「そういうことじゃ……。はあ……。もう、いい」

まるでいつもこんな感じだと言わんばかりに、ガイはため息をついた。

「へへっ。んで？ムゲンちゃんは、何を悩んでるのさ」

さつきまでふざけていた奴が、急にまじめな態度に変わる。……なんか見たことある

ような……。

気を取り直して、彼に俺が考えていたことを打ち明ける。

「AIが対話するためだけにこちらに迫ったりはしないだろう？だから、何故攻撃してこなかったのかって思ってたね」

「確かに気にはするけども、けど」

「…けど？」

「俺たちは人間じゃん？だから、AIの気持なんか分かるわけないっしょ？」

「……まあ、そうだが……」

「分からないことを考え続けたって、答えは出ないっしょ。そういう時は別の事を考えるのが一番っしょ」

別の事。例えば何を考えればいいだろう。AIがどうやって機体を操っていたか、とかだろうか。

そんな俺の顔を見て、カイルは静かに首を横に振った後

「違う。そーゆーのじゃなくて、もつと、『可愛い子に囲まれたい』とか、あるっしょ？あ、ムゲンちゃん妻子いるんだっけ？」

「……ま、まあそうだね……」

カイルの願望というヤツだろうか。…さっきの例えは。

「じゃあ、妻と子供の事でも考えてればいいんじゃない？」

「……」

「どのみち、いつかは分かることつしよ。今考えて出ないなら、向こうがまた出てくれることを祈るしかなくね？」

「そう、だな……」

「さて、俺は街にでも行ってくるわ。なんかあつたら連絡よろしくう！」
軽く手を振ってカイルはテントから出て行った。

「……………」

俺は席を立ち、テントを出ようとする。

「隊長。どこへ？」

「ああ、少し機体を見てくるよ」

「了解です。お気をつけて」

「ありがとう」

テントを出て、機体へと足を運ぶ。

野营地なので、格納庫が無い分、機体も探しやすい。

ただ、その欠点として、向こうもこちらをみつけやすいのは確かだが。

なので、基本的に野营地にいる場合は機体を屈ませしておくように言い聞かせている

……のだが。

「…カイルの奴、また屈ませていないじゃないか……」

と、このように言うことを聞かずにジムを棒立ちにさせている奴もいたりする。

俺の機体の前へと辿り着く。機体は静かに佇んでいて。

まだ新しいボディ、それは先ほどの戦闘で少しだけ汚れている。

それでも、ソイツは凜と強く。

見ているだけで、こちらにも勇気が湧いてくる。

「……なあ、ジェガン。…お前には分かるか？ アイツの意図が……」

こうやって機体に声をかける奴、他人から見れば、頭のおかしな奴と思われるかもしれない。

けれど、何故か、聞いたら返ってくる気がした。気がするだけで、本来はそんなことありえない。

ジェガンは静かに俺を見つめ続ける。

「2ヶ月か……」

俺はジェガンに背を向け、座り込む。

リナやリリーには『短い。すぐ帰ってくる』なんて言ったけれど、俺自身、2ヶ月は随分長いと感じる。

悲しませたくはないからすぐ帰ると言ったのに、何故だろう。自分には嘘を付けなかつた。

……少しだけ、寂しく感じる。

「……………あ」

ふと、思い出して、左のポケットに手を入れる。やつぱり、あつた。

ポケットの中で、それを掴むと、取り出して見つめる。

赤い色の長めのリボン。このリボンで、彼女はいつもこれで髪を束ねてたっけ。

……ファイアさん。思い出すと、胸が苦しくなる。

彼女は、まだ目を覚ましていないのだろうか。

お見舞いに行く機会もなくて、会えていないけれど。

……まあ、彼らがいるから大丈夫か。

俺は、リボンを左腕に巻いて、きつく縛つた。

こうして、腕に巻いていると、寂しさが少しだけ和らぐ。

「……………いけないいけない。こういう時だからこそ、俺が弱気ではダメじゃないか」

俺は、自分自身に喝を入れ、立ち上がる。

「リナやリリー、家族が待つてるんだ。俺も、俺のやるべきことをしないと…。でなきや、【みんな】に怒られちゃう」

「AIが何を考えていようと、俺には俺のすべきことがある。奴がまた現れて、敵とみなしたなら……」

今度は躊躇う必要などない。

だが、どこか引つかかっていた。

彼の【失敗作】という言葉が、頭から離れることが出来ずにいる。

「……失敗……」

AIを作った人物をがそれを言ったのか、それとも、彼自身がそう思っているのかは分からない。

だが、前者だとするなら……。それは、悲しい事だ。

彼が何を成功と考えているかもわからない。だが、【失敗作】と言っているとすると、ほかに【成功したAI】がいるのではないだろうか。

何を以って【失敗】とみなすのか。それはだれにも分からない。けれど、一つだけ分かることもある。

『いくら言葉で言われようと、オレ自身の目で見ない限りは、オレは人類を【敵】とは認識できない』

『いいや。こんな言葉をオレはプログラムしてもらってはいいない。オレの【意志】で言っているだけだ』

感情を持つAI……。なら、人と分かり合うことだって……………。

全て憶測にすぎないが、そういう可能性だってあると思う。いや、俺はそう信じたい。
……AIに人の心の暖かさを……。

「ムゲン？」

俺を現実へと引き戻したのは、零次の声。

「……………あ、零次。どうしたんだい？」

「あ、いえ…。ポーッと立っていたので、どうしたのかな…と」

「…ああ。何でもないよ」

「そうですか。…少し、街に出ませんか？」

「どうして？」

「今日の食料だつたりを買わないといけないので、よければどうですか？」

「……………わかった」

俺は頷いて、彼の後を追った。

野営地から5kmくらい離れた場所に、街はあった。それほど大きいわけではないが、人々が暮らすには十分であろう。

車を街の手前で泊めて、俺たちは街へと歩き出した。

街は人々で賑わっている。時間は既に16時。

思えばこんな賑わった街に出るのは久々だ。

グロリアスにいたころは、買い出しはそれほどしなかつたし。

こんなことも体験できたのだから、異動させられたのもそれほど悪くない。…と思える。

街は、戦いが起きるとは思えないほど平和だった。

いや、本当はこうあるべきだ。

戦いがそれを変えた。

…だが、俺は軍人で、こんな平和な場所を、今までにも潰してきたのかと思うと、心が痛む。

守るために戦っているのに、その戦いで、多くの人が死に、平和は崩される。

…俺たちは、つくづく矛盾だらけの道を歩いているのだな。

けれど、それに後悔はしていない。

だからこそ、今ここに立っていられるのだから。

それから気分を変えて、零次と共に食料や必要な備品を買い集めた。

1時間の買い物を経て、俺たちは野营地へと帰る。

カイルも連れて帰ろうと言ったのだが、零次は頑なにそれを拒否。仕方なく二人で帰ることになった。

帰りの車で、俺は零次と話をした。

「ムゲン」

「なんだい？」

「こんなこと、聞くのもなんですけど」

「うん？」

「両親は……どんな感じだったんですか？」

「どんな感じ……か。そうだな、優しかったのは覚えてるよ」

母は、俺が辛い時、常に傍にいてくれて、優しく撫でてくれた。

その手の温もりを、今も忘れていない。

父は、俺の憧れだった。どんな時も凜としていて、だれよりも物事に対して熱中する性格だったから、MSの研究も熱中してやっていたんだろな。

そんな背中を見て育ったから、俺も無意識のうちに父のようになりたいと思っているのかもしれない。

俺が困った時、父は一緒に考えてくれた。

俺が何かを成し遂げたとき、誰よりも喜んでくれた。

そして、俺が危機を迎えたとき、父は、誰よりも先に俺を守ってくれた。思い出すと、悲しくなる。

「……………父も、母も。俺にとつては大事な家族だった。それだけは変わらない」

「……………ムゲン」

悲しくても、これは現実だ。父や母が守ろうとしたのは研究データだけじゃない。

唯一の息子、俺をも守ろうとした。

だから、彼らは死んだ。

……………それだけなんだ。

「かつて、母が言った言葉があつてね」

「どんな……………言葉なんですか?」

『人生に間違いなんてものは何一つ無い。どんな道が示されようとも、どんな道が出来ていようとも、結局はその判断を下すのは自分自身』だと」

「……………間違いは……………ない……………」

零次は、その言葉をゆっくりと咀嚼そしゃくして、考えている様子だった。

俺も、昔はそんな反応だっただろう。

だが、今は……………そんな母さんの言葉も分かる。

そして、その言葉に付け加えることがあることも。

「『だから、自分を信じて前に進め』……」

「え？」

「あ、すまない。母の残した言葉に、俺なりに言葉を付け加えてみたんだ」

「人生に間違いなんか無い。道を決めるのは自分自身だから。だから、自分の思うがままに、自分を信じて前に進めばいい。俺は、やっとそれを理解できた」

「……………」

「あ、ごめんな！軽く聞き流す程度でいい。……でも、少しだけ覚えておいてほしいんだ」

「……………」

「人は、間違っていたとしても、自分のために、自分の守るべきモノのために戦う」

「でもいつか、【戦う】ではなく、守るべきもののために【分かり合う】という日が来るかもしれない」

「……………分かり……………合う」

「ああ。元はみんな同じ人間だ。宇宙に出る前は、地球に90億もの人類がいたのだから」

「だから、分かり合える日だって来るさ。…俺は、そのために、今を戦っている」

「すごい……ですね」

「そんなことないさ。君は似ているんだ。……昔の俺に」

「ムゲンに……ですか？」

「そうさ。何て言うのかな、純粋で、成すべきことを、思ったことを成す。そんな雰囲気を感じる」

「でも……俺には……」

彼の続ける言葉は、大体予想が付いた。

「まだ、そんな力がない。……つてところかな？」

「えっ……」

まるで自分の心を読まれたかのような反応をする零次。

「力がないなら、学べばいい。色んな人から、言葉を、知識を学ぶんだ」

「学ぶ……」

「君の過去を俺は知らない。けれど、君にもいつか、立ち止まってしまいう時が来るかもしれない」

「でも、その時、そばにいてくれる家族を、仲間を守れるように。君自身が強くなるんだ」

「……強く」

「戦いだけじゃなく、心も。人から学び、そしてそれを活かす。そうやって歴史というバ

トンを繋いで人は生きるんだ」

「俺は、【彼ら】から、そう学んだ」

「……………」

彼は、少しだけ考えた後。

「頑張つて……………みます」

彼は、静かにそう言った。

それから、俺たちはテントで夕食を済ませた後、偵察へと向かうことになった。

全員が機体に取り込み、俺の目の前へと並ぶ。

偵察の部隊は、零次と、彼が指揮する偵察部隊。俺を含めて5機。

「行くぞ」

森林地帯へと機体を動かす。

偵察を行うには理由があった。

着任当日、この付近のマップを確認したとき、一部の地域の森林が全て伐採されていた。

それが少しだけ怪しく感じた。

しばらく進んでいくと、目標の森林が伐採されている地点へと辿り着く。

そこで見た景色に、俺たちは言葉を失ってしまった。

「こいつは……!!」

「な、なんだ……アレ……!!」

森林からでも分かる、その巨大な要塞は、静かに佇んでいる。

これで納得がいった。この地点を中心に森林が伐採された理由も。

「あれは……ジオンか……」

周囲を見ると、要塞を守るかのように、歩哨として数機のザクが配備されている。

「……………よし、一度後退する」

ある程度状況を把握した後、俺たちは野営地へと戻った。

テントの中に全員を集め、偵察で起きたことを説明する。

その場にいた全員が騒めき出す。

これでは収拾がつかなくなる。

「落ち着いてくれ！今から、これからの対応について話させてもらうー！」

俺の一声で、全員が静かになった。……こういう時だけは隊長でよかつたと思える。

「偵察部隊によって発見された、ジオンの要塞と思われるものだが、現時点では不明なことが多く。しかし、同時に倒さねばならない事もハッキリしている」

「そこのだが、しばらくの間、要塞攻略のために、戦力を温存し、ジオンからの攻撃被害を最小限に食い止める」

「そして、戦力が十分になった時、要塞攻略作戦を執行しようと思う。皆。しばらくの間、辛いのを承知で、我慢してくれ！」

全員が頷く。

「よし、じゃあ解散していい。皆、ゆっくり休んでくれ」

その言葉で全員がテントから出て行った。

「……………ふう……。一日でこんな色んなことがあるとは……………」

着任早々、ここまで忙しいとは思わなかった。

メンバーとかの問題じゃなく、未知のAIだったり、巨大な要塞だったり。

考え出したら、どっと疲れが出た。

「……………寝るか……………」

俺は、地面に敷いてある小さい布団に包まって眠りについた。

43：望まぬ結託

宇宙世紀0089. 6. 20 第66特殊戦闘小隊、AI搭載MS4機と接触。現在、各機応戦中。

状況はハッキリ言って圧倒的に不利だ。

相手は4機。頭数だけで言えばこちらが勝っている。

だが……。いくら攻撃をしても全て回避され、おまけに一体一体確実に仕留めてくるともなれば。

「ぐっ……!!」

ヒートホークをサーベルで受け止める。

ザクの腹部を蹴り飛ばし、一度間合い取ろうとする。

しかし、それに気づいたもう1機のザクが背後から迫り、マシンガンを放つ。

「ちっ……!」

その場で空中へ飛び上がり、背後のザクの攻撃を宙返りで回避し、続けて相手を正面に捉えた瞬間

スラスターを起動し、一気に間合いを詰める。

「決める……!」

相手が振り向くタイミングより早く、サーベルを引き抜いて切り抜けた。しかし、その攻撃は予測されていたのか、軽々と回避される。

そして、反撃と言わんばかりのバズーカによる攻撃。

素早く立ち上がり、サーベルでバズーカの弾頭を真っ二つにする。

弾頭が爆発し、爆発の煙が機体を隠す。

今しかない。

その場でシールドミサイルを発射後、素早く移動。

相手の背後へ回り込む。

「今度は……逃がさん!」

背後から薙ぎ払う。……が。

相手は機体を屈ませ回避。さらに、素早く反転しながら回し蹴り。

対応に遅れ、直撃する。

「ぐあああああ!!」

機体は吹き飛び、地面に転がった。

「……はあ……はあ……!!」

相手は『まだ余裕』と、感じさせらるほどの「無傷」であった。

「く……………そ……………!!」

「ぐああああ!!」

「カイル!!くそっ……………!!」

「零次……………カイル……………!!」

二人にも被害が出ている。

立たなくては……………。

立ち上がろうとするが、ザクが背中に足を乗せ、立ち上がらせないようにする。

「……………くそっ!!」

「隊長!?ぐっ……………!!」

「……………ガイ!零次とカイルを!」

「ですが、隊長は!」

「構うな!先に彼らを……………!!」

ザクがマシンガンを構える。

「くっ!」

流星に新型といえど、至近距離でマシンガンを食らってはひとたまりもないはず。

だが、まだ諦めるわけにはいかない。

そうだ。諦められないんだ！

「……………ぐっ……………おおお……………!!!」

ザクの脚を掴み、一気に投げ飛ばす。

「行くぞー！ジエガン!!!」

スラストスターを起動。吹き飛んでいるザク目掛けて突撃。

「うおおおおお!!!」

左腕でシールドミサイルを放ちながら右手でビームライフルを乱射。

ビームライフルを投げ捨て、ビームサーベルを引き抜く。

「これで……………沈めええええええ!!!」

相手と接近した瞬間、一気に機体を両断する。

コントロールが取れなかったのか、相手はなすすべもなく両断された。

「……………はあ……………はあ……………」

現在、シールドミサイルの弾薬は、後3発程度。ビームライフルはまだ使えそう。すばやくビームライフルを拾い、もう1機のザクと対峙する。

「さあ……………。2戦目といこうか……………」

シールドミサイルを1発放ちながら接近。

続けてビームライフルで足元を射撃して、相手の位置を調整。

相手はそれを回避して、予想通りの位置に立つてくれる。

「うおおおお!!」

サーベルが軌跡を描きながらザクへ。

ザクはそれを軽々ヒートホークで受け止めた。

「くっ!」

「う、うわああああ!!」

「カイル!!くそっ!!まだあきらめられないんだ……蒼花のためにも……!!!」

零次たちの声を聞き、サーベルを持つ手に力がこもる。

「……お前が……邪魔だああああ!!」

サーベルはヒートホークごと相手の胴体を切り裂いた。

ザクは力なく地面へ伏し、動かなくなる。

俺は、急いで彼らの所へ機体を動かした。

「ガイ!零次!カイル!無事か!」

「……………ええ…。なんとか。それより、敵機が後退していきます……。どうしますか?」

「いや、いい。俺たちも後退だ」

「……………はい」

俺たちは、なんとか敵を退け、生きて野営地に戻ることができた。今回ばかりは幸運だった。

「……………今日で何人死んだ…」

「ガイ隊、3機撃墜され、1機生存。なので、私を含む2名のみが生存してます」

ガイは、淡々とそう言っつて、コーヒーを一口。

「……………そうか。零次は？」

「俺の隊も同じく3機墜とされました。……………2名生存」

零次は少しだけ悔しそうな顔をしていた。

「……………カイルの隊はどうだ？」

「俺んところは、2機墜とされて、2機生きてる。だから、合計3人生存してる」

「…比較的被害が少ないか。よし、報告は分かった。一度解散しよう」

その言葉を皮切りに、静かにテントから出ていく3人。

いつも通り……………とはいかないだろう。

それは俺も同じことで。

…悔しかった。また、仲間が死んだ。

だが、自分にできることをやって、彼らは死んでいった。

それなら……。少しだけは……報われるのだろうか？

かつて、サムエルさんが言った言葉を思い出す。

『悪いのは、人間じゃない……。戦争そのものが悪いんだ』

……彼の言うことも、分かるんだ。

でも、それでも……。

大切な人を失った人には、そんな事関係ないんだ。

「……………くっ……………」

悔しさで、涙が滲む。

だが、サムエルさんも……。いや、彼だけじゃない。

俺も、リナも……。道夜やユーリも。皆戦争で大切な命を奪われた。

そのたびに、自分の非力さを呪って、恨んで。

やり場のない怒りだけが溜まっていく。

だからって……。どうしようもないじゃないか。

自分自身を抱きしめる。腕に巻いてあるリボンから、微かに熱を感じた。

「……………ファイアさん……」

彼女なら……………どうするだろうか。

『私たちはすでに血で手を染めてしまっている……………。どんなに願っても、どんなに祈っても、昔も、そして、これからも……………』

『人に恨まれなければならぬ……………。仕方のない事だ。人は、光になれる。だが、人は何かのために犠牲をいとわない闇にもなれる』

……………彼女は、軍人でありながら、最後まで、娘の事を考えていた。

自分はダメでも、せめて娘だけは…………と。

どんな現実でも、彼女は向き合っていた。

『……………頑張るね。それで、先生が帰って来た時には、皆と仲良くなって、【先生】じゃなくて、一人の【家族】として迎えられるように……………』

『せ、先生のこと……………。【ムゲン】って呼べるように……………。頑張るからっ!!』

リリーは言った。自ら前を向いて、頑張ると。

まだ若い少女なのに……………。その瞳から、決意が伝わってきたんだ。

『……………ムゲンも、頑張るみたいだし、私も頑張らなきゃ……………!』

……リナは、今も仲間のために整備をして、俺のために機体を考えてくれて。

そしてなにより、アウロラを守ってくれている。

そうだよな……。ここで、立ち止まるなんて――

「……出来ないよな」

俺は立ち上がり、ゆつくりとテントを後にした。

「……ムゲンちゃん」

テントから出るや否や、カイルが待っていたかのように俺に声をかける。

「カイル？」

「ちよつと、話いい？」

「……ああ。構わないよ」

「……ここで話すのもあれだし、少し、歩かね？」

「そうしようか」

俺たちはゆつくりと歩き始めた。

「…………ムゲンちゃんはさ」

「うん？」

「自分に自信が持てない時って……ある？」

「どうしたんだい？急に。君らしくないじゃないか」

「……いや。……ちよつとね」

少し考えた後、俺は口を開く。

「あるさ。人間だからな」

「………その時、どうやって立ち直れた……？」

「………そうだな。昔、ある人から『戦う意味も、現実も見れないお前に、今の俺は倒せない。いや、敵すら倒せない』ってね」

「それから一人で悩んで、時には君みたいに色々な人から話を聞いた。……けれど、結局はドジってしまつてね」

「ムゲンちゃんつて、そんな時あつたんだな」

「まあね。……一度、部隊を脱走したときがあつた。もう何もかもが嫌で、戦うことさえも……」

「………」

「その時出会つたある人からの言葉で、目が覚めた」

「言葉………か」

「ああ。『何故戦うかじゃない。なんのために戦うか。そう考えればいい。理想を求め

て進んでいたら、勝手に理由はついてくる』。その人はそう言った」

「そして、再び俺は、部隊に戻り、戦うことを決めた。仲間を、家族を守るために戦うと決意して。俺にできる事。俺にしかできない事をするだけだよ」

「……俺にしか……出来ない事」

「そうだ。君がもし立ち止まってているのなら、それは、選択次第では、君は変われるのかもしれない」

「未来は……誰にも分からないから」

「……ムゲンちゃんってさ」

「うん？」

「……自分の無力さとか……感じたことってある？」

「あるとも。……何度もね」

そう。何度もある。助けることのできなかつた命。

そして、繰り返してしまった戦いの歴史。その全てを見てきたからこそ、無力さを感じずにはいられない。

「何度も……」

「ああ。両親を救うことも。俺を弟と慕ってくれた人も。娘と再会できたのに、軍人としての役目を果たそうとした人も」

「……………全員、救えなかった。……………おかしな話だ。軍人になれば力が手に入る。そう思っていたのに誰も救えない……………」

「……………」

「でもさ……………。無力だから、人は互いに助け合うんじゃないのかな」

「……………」

「一人が寂しいから群れを作って。群れを作れば孤立する人もいる。そして、孤立した人に手を差し伸べる人だっているかもしれない」

「カイル。君に何があったのかも、どんな過去があったのかも俺は知らない。けれど、覚えておいてくれ」

「……………？」

「俺は……………いや、俺たちは……………【家族】。どんなに離れていても、その繋がりは、絶対に消えない」

「繋がりが……………」

「この前、AIが言った言葉を覚えているか？」

「…確か『いくら言葉で言われようとも、オレ自身の目で見ない限りは、オレは人類を【敵】とは認識できない』だっけ」

「ああ。……………俺は、人を…。人類を信じたいんだ。辛い時は助け合い、共に泣いて、

笑って。そのすべてを共有できる」

「だからこそ、俺も、君も、今ここで話すことができる。だから、AIにも知ってほしい。俺たち人間の「心」を」

「……………。やっぱ、俺が会った中で一番面白い隊長だわ。アンタは」

「それは誉め言葉として、でいいのかい？」

「…………。ああ。それ以外ないっしょ」

カイルは空を見上げながら言葉をつづける。

「はあー。小さい事で悩んでた俺がバカみたいだ」

「カイル」

「ん？」

「迷ったっていいんだ。迷いに迷って、その先に君が何を想うか。それが大事なんだ」

「その先…………。か…………」

「…………。転んだって、また立ち上がればいいのと同じ。悩んで、自分が成すべきと思ったことをすればいい」

「…………。そうだな。頑張ってみるわ」

彼はそう言いながら微笑んだ。

そのあと俺は、機体の整備のため、ジエガンの前で準備を進めていた。リナが整備する姿は何度も見てきているものの、自分で整備するとなると、どうすればいいか分からない。

「……………うーん」

整備マニュアルを見てもいまいち理解できず、困り果てていた時。

「隊長？ どうされました？」

「……………あ、ガイか。 いや、少しね……………」

「何か悩みでも……………？」

「悩みってわけじゃないけど、整備の事でね……………」

「なるほど。 そう言うことでしたか」

「ガイ、手伝ってくれないか……………？」

「えっ……………。 わ、私がですか……………？」

彼は俺の言葉に驚きを隠せない様子だった。 ……何か、あるのだろうか。 しばらく考えた後、彼は

「分かりました。 ……出来るところまで、手伝います」

「……………ありがとう。 助かるよ。 とところで、機体の整備とかはしたことが？」

「ええ。 ……少し……………だけですけどね」

その言葉を返すとき、彼の表情が一瞬だけ影が掛かった気がした。

「マニユアル、ありますか？」

「…これかな」

マニユアル。ジェガンの整備の仕方が記されているモノなのだが、読んだところで理解できるものではない。

彼に差し出すと、それを受け取り、パラパラとページをめくった後

「なるほど。……じゃあ、始めましょうか」

「も、もう分かったのか？」

「ええ。十分です」

そう言いながら彼は俺にマニユアルを手渡した後、機体を見つめる。

「ガイ、俺にも手伝えることがあるなら言ってくれ」

「そうですね…。じゃあ、機体の損傷個所を確認してください。少しのへこみでも見逃さないように」

そう言うガイの瞳は真剣そのもので、リナと同じ雰囲気を感じたのはなぜだろう。

「…わかった」

俺は機体の全身を隈なく見ていく。汚れている以外特にこれと言って問題があるよ

うには思えなかった。

「特になさそうだ」

機体の正面に戻ると、彼は既に作業を始めていた。

「そうですか。私も見たところ、整備というよりは補給のように感じましたので、弾薬の補給だけでしょうか」

「わかった」

それから俺は彼の指示通り弾薬を運び、機体に足りない弾薬を補給していく。

彼の指示は的確で、また、彼自身が補給する時には、それこそ職人の雰囲気を感じるほどの技量。

それが、どこかで引っかかっていた。

そして30分後、全ての弾薬補給が終了する。

俺は、彼と共に機体の前で話をしていた。

「ムゲン隊長の機体は補給も楽ですね」

「そうなのか？」

「ええ。シールドミサイルの弾薬でいいわけですし。ビームライフルも補給というほどのモノでもないですし」

機体を見上げながら満足そうにそう言うガイ。

俺は、少しだけ彼の過去に踏み入ってみることにした。

「……………随分と、詳しいみたいだね。整備全般が」

すると彼は、少しだけ悲しそうな顔をして、一息溜息を吐いた後

「……………やつぱり、分かりますか？」

「やつぱり……というと、君はもしかして……」

俺の予想が間違いじゃないのなら、彼は整備兵か整備関係の事をしていた人物だと思う。

そうでなければ慣れたように弾薬補給なんか出来るわけない。

しかも、指示も完璧と言っていいほどだし。

「ええ……………。私は、ここに来る前まではある部隊の整備兵を務めていました」

「そうか。君の的確な指示や、手並みを見ていて、どこか引つかかっていたんだ」

「やはり、あなたの目は騙せませんでしたか。……………」

彼は、ジェガンを見つめながら言葉を続けた。

「……………私がここに異動させられた理由は、簡単に言えば整備が原因なんです」

「整備が……？」

「ええ。……………私は、整備の腕にはそれなりの自信があつて、誇りにも思っていました」

「ですが……。ある時、私の小さなミスで、パイロットを失わせてしまった」

「ガイ……………」

「それ以降、私は……整備そのものに恐怖し、自らの自信を完全に失ってしまいました」

「……そして、気が付けば、今度は私がパイロットとなって、アジア戦線に異動を命じられて、今に至ります」

「知らなかったとはいえ、そんな彼に補給をさせたのは、酷だったと思い、ひどく後悔した。」

「私は……あの事の後、自分自身の機体しか整備しなくなかった」

「ガイ……………。すまなかったね……………」

「あ、いえ。別に隊長に怒っているわけではありませんよ」

「分かっているさ。けど……、君に整備をさせたのは酷だったかもしれないから……」

「いえ……………」

彼は、静かに俯いた。

今の彼に……俺は何をしてあげられる？

自らのせいで命を失わせてしまったという過去を持つ彼に。

俺も自分のせいで命を失わせてしまったということがある。

けれど……………。

『私の父は軍人さんだったんです。でも機体の整備不足のまま出撃して、機体が大気圏での戦闘に耐え切れなくてそのまま……』

俺は彼女の言葉を思い出した。

リナは………

『それで、連邦軍の整備兵として、もう二度と父のような被害者を出さないようにと志願したんです』

そうだ。二度と繰り返さないために自ら整備兵になった。

彼女がいれば、彼を励ますことだって出来るだろうに……。

だが、彼女はここにはいない。だから、俺がしなければ。

「……なあ、ガイ」

「……なんでしようか」

「俺は……整備兵じゃないからさ、君になんて言っただけじゃいいかわからない」

「………」

「けれど……君の気持ちも分かるんだ」

「隊長………」

「俺も、君も…。ミスをして人を失わせてしまった」

「けれどさ……。だからって、過去を引きずってではダメなんだ」

「……あんたに……!!」

「ガイ……?」

「あんたに何が分かるんだよ!!!」

彼は俺の胸ぐらを掴み叫ぶ。その瞳は涙で濡れていた。

「……」

「私は……。俺は……!! あんたみたいに強くなかない!!」

「だから……。こうなった」

「ガイ……」

「俺はあんたじゃない。……そんな簡単に割り切れない」

胸が苦しくなった。俺も……。そんなときがあったから。

「そうだな……。俺は君にはなれない。そして君は俺になることは出来ない」

「……」

「だから、いいんだ。ゆっくりで」

「……え……」

「何も、すぐに立ち直れとも、言ったりはしない」

「仕方がないで割り切れる程、人間は簡単じゃないからさ」

「俺も……そうだったから」

「隊長……も……」

「ああ。……戦争が家族の在り方を変えたりすることなんか……割り切れるものかよ……」

彼は、掴んだ手を降ろし、言葉が続けた。

「だったら……!!!」

「でも、人は……変わっていきななきゃいけないんだよ」

「変わる……!?!」

「ああ。……どんなに悲しい事があっても、立ち止まったり、振り返っちゃダメなんだ」

「いいや。ダメとは言い過ぎだ。……それを糧として前に進まなきゃダメなんだ」

「……」

「変わるには、時間もかかるし、辛いことも多いけど」

「それでも、人は……失ってしまった人や、死んでいった人から何かを【託されて】生きていくんだ」

「託される……」

「君が失敗して、後悔したと思うのなら、それを次の糧にすればいい」

「……」

「確かに、整備兵がそんなことではいけない。という人だっている。けどさ」

「だからこそ、失敗しないために前へと進まなきゃいけないんだ」

「……」

「失敗を繰り返さないために。もう二度と…俺と同じ過ちを繰り返させないようにと」

「繰り返させない……」

「今までは一人で背負っていたのかもしれない。だが、ガイ……忘れるな」

俺は彼の肩に手を置いて言葉を続けた。

「俺たちは、仲間。……家族だろう？」

「………家族……」

「辛い時は共に背負って、笑って、泣いて。そのすべてを共有する」

「……」

「だから、お前は一人じゃない。前を向いて歩くんだけ。背中は……支えてやるから」

「………たい………ちよう………」

彼は、涙を流した。

「俺の………妻もさ、そんな理由で整備兵になったんだ」

「隊長の………？」

「ああ。リナは……親父さんが整備不良で死んだことを知って、これ以上同じ悲劇を繰り返させないと、そう言った」

「……………」

「君の歩幅でいい。君の歩き方でいい。君が思うままに、前へ進むんだ。一人でもいいし、皆とでも良い」

「転んだって、泣いたたっていい。……その先に、きっと答えはあるから」

「……………隊長……………。……俺も……………頑張ってみます。零次や、カイルのように……………」

「何故彼らが出てくるんだ？」

「……………いえ。何でもありませんよ」

彼は軽く微笑んだ。

「ま、いいか。さて、俺はテントに戻るよ」

「ええ。分かりました」

俺は背を向け歩き出す。

そして、一度立ち止まって

「そうだ、ガイ」

「……………なんでしようか」

「…整備、ありがとう」

その一言だけを伝えた。

「……………」

彼は、何も言わなかった。それで、いい。

俺は静かにテントへと帰った。

宇宙世紀0089・6・21 ムゲン・クロスフォード中尉、連邦軍最高評議会議長
ベルベット・バーネットと通信での対談。

「……………」

今、俺の前で映るモニターにいた人物。それは、それなりに俺とも縁がある人物。

「久しいな。ムゲン・クロスフォード」

久々の通信だと聞いて喜んで来た結果、こんなヤツと顔を合わせることになるとは思
わなかった。

「……………ベルベット・バーネット。……今更俺に何の用だ」

「つれないじゃないか。ムゲン。私は君が心配で仕方がなかったんだぞ？」

ニヤニヤと笑いながら彼は言う。その姿のどこがどう心配なのかが聞きたいところ
だが。

「……………御託はいい。何の用だ」

二度目の言葉で、彼はやつと真面目な表情で言葉を返した。

「……………いいだろう。用というのは3件ある。一つは、そちらでの生活は慣れたかな？」

「ああ。おかげ様で、ゆつくり休む時間もなければ、ろくな補給もない。最高だな」
皮肉をありつたけだめて言葉を返してみる。すると彼は笑いながら

「ははは!!それは結構だ。いやはや、君が【あの時】死んでいないとは、思わなかったよ」

「……………冗談を言うな。お前、ワザと生かしているんじゃないのか」

「それは誤算だよ、ムゲン。私は死んだと思ったのだ。しかし、君の仲間が君を回収しただろうか？」

「……………」

「フフフ……………。だから今回はアジアへ行ってもらったわけだが……………ね」

「俺を殺したいなら、そんなに勿体ぶらずに殺せばよかったんじゃないか？」

「違うな。モノは適材適所。使うべきところへ配置する事で一石二鳥を狙っているのさ」

「……………要は、ジオンを殺して、その戦いで俺も死ねば、万々歳つて所か」

「そうだな。否定はしないよ。君はいつも私の計画の邪魔になってしまうからね」

「俺が望んでやっているわけじゃない」

「知っているとも。しかし、君は邪魔でしかないからね、だから今回は異動してもらったよ。ムゲン」

「……………それで？それだけか？」

彼はピースサインをしながら言葉を続けた。

「2件目だ。これは3件目にも繋がる話なのだが……………」

「なんだ。言ってみろ」

「まあそんなに慌てることもないだろう。とりあえずは——」

俺は机を叩きながら叫ぶ。

「いいから早く要件を言ったらどうだ……………!!」

彼は肩を竦めながら、実につまらなそうに言葉を返した。

「いいだろう。……………先の戦闘でA Iと戦闘したな？」

「それが何だ？鹵獲でもして来いっていうのか？」

「それは無理だろう。相手はA Iだ。相手にも思考がある以上、下手に動くのも無駄足だ」

「……………なら何なんだ」

「そして、君たちの部隊からの話を聞いたところ、何やら要塞のようなものがあるらし

「いじゃないか」

「ああ。確かにある」

「あれを、潰せ。完全に」

「……………それだけか？」

「ああ。2件目はそれだけだ。3件目は、もし、2件目の案件をクリアすることができたら、君を無事に返してやろう」

「これは……………彼曰く【取引】ということか。それならば……………」

俺は、少しだけ強気に彼に仕掛けてみることにした。

「それだけなら引き受ける気はない」

「何だと…………？」

「3件目にいくつかの条件をプラスさせてくれるのなら、考えてもいい」

「……………」
「一応聞いておこう。言ってみたまえ」

「一つは、第66特殊戦闘小隊のメンバーたちに休暇をやってくれないか」

「休暇……………だと？」

「そうだ。もちろん、自国へと帰ってだ」

「……………期間は」

「そうだな、自国へ着いてから1週間。それでどうだ？」

「……………いいだろう。その程度ならな」

「もう一つ」

「この小隊に、輸送機のミデアを一隻、そして操舵手と整備兵を用意してくれ」

「……………いいだろう。私には痛手にならん。それに、命を懸けているのは君たちだからな。苦労というのもいいだろう」

「……………」

と、意外と素直。なんだか拍子抜けしてしまふ。

「ならば、一度休戦と行こうじゃないか。ムゲン」

「……………休戦か……………。要塞を潰すまでは……………ということか」

「そう言うことだ。理解が早くて助かる」

「……………お前に褒められたところで嬉しさがちつとも湧いてこないな」

「それは私とて同じこと。……………では、こちらでも情報は集めておく。そちらも、頼むぞ」

俺とベルベットは一時的だが、協力的関係になった。

それも、要塞を潰すまでの期間だが。

少しだけ複雑だ。望んでいない結託をする羽目になったのだから当然だが。

しかし、これも彼らのため。

俺にできることをするまでだ。

43 完

44：小さな願い

宇宙世紀0089・7・1 第66特殊戦闘小隊野営地を試作A I「ヨハネ」率いる
A I小隊が襲撃。

先行でムゲン・クロスフォード中尉が単機で交戦。

「……くっ！」

左からの攻撃を回避。続けて正面の敵へと一気に迫る。

シールドミサイル発射、素早く飛び上がりながら相手の位置を確認。

サーベルを引き抜きながら地面へと振り下ろす。

地面に着地と同時に、切り伏せた敵が両断され、爆発による煙でジエガンの全身を包み隠す。

「……次は……2機……！」

もう一本のサーベルを引き抜き、右手のサーベルを逆手に持つ。

「……正面に1機。左右に2機ずつ。……ならば……！」

左から迫る敵にシールドミサイルを放ち、左の相手へと一気に詰め寄る。

煙から飛び出したミサイルを1機はガード。それをフォローするように前へ出ようとした1機を見逃さない。

「逃がすかあああ!!」

右のサーベルを相手の左腕から頭へと振りぬく。

続けて左腕のサーベルで相手の胴体と下半身を両断する。

次に、シールドを構えた1機と相対する間もなく、左のサーベルを投げつける。相手がそれを吹き飛ばす瞬間、隙が生じた。

「……!」

素早く足払い。1機はそれを見越して飛び上がる。

「今だ……!!」

サーベルを持ち直し、両手で相手の機体目掛けてサーベルを突き刺した。

その後、相手は動かなくなり、地面へと転がった。

「……………はあ……………はあ……………」

流星に、一人で多くの敵を倒すなど、限界がある。

それに、向こうは人間ではない。そんな人間の隙を見逃すはずがない。

「ぐあっ!?!」

背後からの衝撃。機体が地面へと倒れこむ。

立ち上がろうとするも、2機に機体を抑え込まれる。

「……………くそっ……！」

「……………無様だな。ムゲン・クロスフォード」

地へと伏したジェガンの前へ、1機のザクが立つ。

声には聞き覚えがあった。

「……………何故……………俺の名を……………」

「お前の情報は全て調べた」

「……………そうかい」

「先ほどのお前の戦いを見させてもらった」

「……………だからなんだ」

「……………そこで、今一度お前に問う。お前は正しいのか？」

正しい……………？戦いが正しいと問うのか？

彼は……………俺に何を求めている？

「……………正しい……………か……………」

「戦いに、正しさなんてあるものか」

「……………正しさが無い？それはオレには理解できない答えだ」

「……………戦う事そのものに正しさなんか無いさ」

「では、何故戦う？なんのために人は戦い、戦うことを正義とする？」

「……………」

俺は、返す言葉が見当たらなかった。

確かに、そうなんだ。

戦うことに正しさは無いと思つたら、何のために戦つて、戦うことを正義とする奴らはどうなる…………？

「答えられない。そうだろう。お前の言う正しさがない戦いというのは、そんな矛盾を生み出す」

「……………」

「もう一度聞く。お前は——」

「俺は、俺のしていることは正しいとは思つちやいない。…………だが、それでも、俺たちは戦わなければならない」

「俺が、戦争を正しいと思わない理由は、人を殺めているから」

「戦争が、多くの人を殺し、差別や貧困を悪化させ、自然破壊を繰り返す。そのすべてが、戦いで悪化する。決して正しい事じゃないのは分かっている」

「それでも、戦わなければいけないのは、明日を…………【未来を変えたいから】だ」

「未来を…………変える？」

「そうだ。繰り返して、失い続けるこの世界を、俺は変えたいんだ」

「これ以上……俺や、リナのように家族を失う人々を……増やしたくない……」

「戦争で、泣いている子供たちを救いたいんだ。だから、今は……」

「……………」

「今は、たとえ矛盾である行為だとしても、戦わなければ……いけないんだ……」

「俺は、軍人である前に、一人の人間だ。そして、未来を作るのも、変えていけるのも、人間だけだ！」

「お前にも……分かるはずだ。人間は……悪いヤツだけじゃないんだって。無力で、何もできないヤツもいる。……けど……」

「そんな無力な人に手を差し伸べる良い人だって、いるんだよ……！」

「……………そう、か」

彼は、静かに言葉を返した。

「……………」

「手を」

その言葉で、機体を抑えつけていた2機が離れていく。

「ムゲン・クロスフォード。……お前は、人を信じているか？」

答えに、迷うことは無かった。

「…………ああ。確かに、人間は悪い所もある。けれど、良い所だってあるんだ。それを、俺は信じたい」

「…………そうか。…………その言葉。忘れない」

「え…………？」

「撤退だ。全機…………！」

瞬間、射撃の嵐がヨハネを襲う。ヨハネから見れば正面から。

つまり……………連邦。

「隊長！無事ですか!!!」

「ガイ！」

「ムゲン・クロスフォード…………。また…………」

瞬間、背後からの射撃。ヨハネの機体が貫かれた。

目の前でザクⅢが膝を折る。

「…………なん…………だ…………!?!」

「隊長！ジオンです!!」

「何!?!ヨハネはジオンのAIじゃないのか!?!」

「……………ムゲ…………ン…………」

「ヨハネ!？」

「……オレは……死んではいけない。だが……身体の状態はそれほど良くない」

「……」

「隊長!! どうしますか?! ——くっ!!」

「ムゲンちゃん! 早く決めてくんね? こっちもいつまでも保たないっしょ——く

そっ!」

「そうです……!……俺は……ムゲンが決めた道を……信じる!」

「……お前ら……」

3機は俺とヨハネを守るように陣形を形成。ジオン機体と交戦している。

「……構う……必要はない……。オレは……AIだ。お前たち……人間の敵……」

「違う!!」

「隊長!？」

「AIだって……分かり合えるかもしれないだろ!! それに、お前言っただろ! 自分の目で見るまでは信じないと!!」

「……」

「なら……」

機体をゆっくりと起き上がらせる。

「その目で見届けろ!!俺たち人間が作る未来を!人間の……暖かさを!!」

「ムゲン………」

俺は機体の無線を味方全機に繋ぐ。

「……………第66特殊戦闘小隊全機、およびAI小隊に告ぐ!!」

「こちら、第66特殊戦闘小隊部隊長、ムゲン・クロスフォード!!」

「これより、66隊は、ヨハネ機を……………撤退まで援護する!!!」

「動けるものは俺に……………力を貸してくれ」

「……………ムゲン……………クロス……………フォード……………」

「ヨハネ。お前は【生きなければならぬ】。未来を見るために」

「だから、お前を……………殺させはしない」

「……………隊長の命令なら、引き受けないわけにはいきませんしね。……………さ、早く撤退を」

「ムゲンちゃんは甘々つしよ。ま、嫌いじゃないけどさ!」

「戦う理由は、俺たちにもあるから……………」

「……………ジエガン、俺は……………守りたい!力を貸してくれ!!」

サーベルを引き抜いて、相手へ迫る。

相手の胴体を切り落とす。……………AIと戦うよりも楽に感じるのはなぜだろう。

だが、今はそれでいい。

「うおおおおお!!」

次の1機を蹴り飛ばし、シールドミサイルを放つ。

着弾し、さらに追い打ちの如くガイからの援護射撃が相手を襲う。

「次だ!!」

「隊長! 右です!」

素早く右へ振り向きシールドを構える。

爆風が機体を包み込み、視界が遮られた。

相手が一気に詰め寄りサーベルを振り下ろす。

シールドが両断されるも、一度間合いを取る。

続けて相手のサーベルが再び俺を襲う。

負けじとサーベルで応戦。

サーベル同士がぶつかり合い火花を散らす。

負けるものか。

「迷うものか……!」

そうだ。

最初から答えは在ったんだ。

俺が戦う理由も。

俺は――

「仲間を……守るために……他者を斬る!!!」

相手のサーベルを吹き飛ばし、サーベルを構える。

「たええそれが、矛盾だったとしても!!」

サーベルを、相手のコックピットへと突き立てた。

「今は、それが俺にできる最善だから」

サーベルを引き抜き、レーダーを確認する。

相手はまだ5機ほどいるだろうか。

「……やるしか……ない!」

「ムゲンちゃん、手え貸すよ。一緒にやっちゃまおうぜ?」

「…………ああ。行くぞ！カイル!!」

「オーライ！」

俺とカイルは一気に相手へと迫る。

カイルがビームライフルで牽制。うまく相手を俺の正面へと誘導する。

「ナイスだ！あとは……………」

こちらに気づいた相手はとつさにシールドを構え、防御姿勢を取った。

「…………だが……………」

素早く両手のサーベルを逆手に持ち替え、右でシールドを両断。

続けて左で相手の左腕を切り落とし、その間に右のサーベルを持ち替え、トドメに右

のサーベルで相手の胴体目掛け斬り上げた。

相手の機体の胴体が斜めに両断され、爆発する。

「次だ!!」

「くっ…………!!」

カイルはもう一機の敵と鏝迫り合いの形を取っていた。

スラストを起動し、カイルと相手へと移動。

「カイル！間合いを取れ!!」

「……………！オーライ!!」

その言葉で素早く身を退くカイル。

「逃がすかああああ!!」

相手がこちらを向いた時には既に遅く、サーベルが相手の胴体を両断し、俺は既に相手の背後へと。

「おーすっげえ……。そんな芸当見たことないわ」

「……褒められるようなことじゃない。それより、次だ」

「オーライ。んじゃ、背後は任せてくれちゃってオツケーよ」

「ああ。頼んだぞ」

俺は、正面に立つ2機の前へと立ちふさがる。

「……さてと……」

相手の機体はカスタムはされていないものの、武装でだいたいの陣形が見て取れた。

1機は近接寄りの機体。サーベルを軸にした戦いをしつつ、2機目の中距離から遠距離の武装でトドメ。

つまり最初に落とすべき敵は……。

「……その長モノを持ったザクⅢ!」

機体を動かし、狙撃型のザクへ。

それを遮るように近接型が立ちふさがる。

「ちっ！邪魔を…!!」

スラストを起動し、近接型とぶつかり合う。

相手が慣れていないのか、ぶつかった瞬間、微かに機体がブレていた。なるほど、新兵か。

「邪魔だああ!!」

サーベルとサーベルがぶつかり合う。

左のサーベルを持ち直し、相手のコックピットへ突き刺す。

それを狙撃が阻止し、左手のサーベルが吹き飛ばされる。

「くっ!!」

相手のサーベルを吹き飛ばし、左足を軸に回し蹴りを腹部へと直撃させ、間合いを取った。

近接型が怯んでいる隙に狙撃型を仕留める。

「……すぐに……逝かせてやる」

こちらの声が聞こえたのか、相手は負けじと狙撃を仕掛けてくる。

しかし、その攻撃は掠りもしない。ユーリの狙撃を見てきたから分かる。狙撃機体の

弱点を。

「狙撃型の弱点。それは意外にもあってな。一つは——」

相手の懐へ飛び込み、スナイパーライフルを両断する。

「火力の高さと重さ故に長モノは取り回しが悪いんだ。そして、もう一つ——」

相手は反撃をしようとマシンガンを取り出すが、相手の反応が一步遅く、俺は両腕を切断した。

「近接武器を携行しないヤツが多いってことだ。……自惚れるのも、度が過ぎれば自分の命を危険に晒す。覚えておくんだな」

「ああ、でも——」

トドメに胴体を真つ二つする。両断され、胴体だけが地面へと大きな音を立てて転がった。

「…次へと活かすことも出来ないだろうが、な」

息つく暇もなく、背後からの殺気。

「後ろか!!」

振り向きながらサーベルを振るう。

サーベルとサーベルが再びぶつかり合い、火花を散らした。

「……………」

左手を握りしめ、相手の頭部をぶん殴る。

それに驚いたのか、少しでもサーベルを持つ力が弱くなるのを感じた。

「……………筋は悪くない。だが——」

力で押し切り、右腕を両断。

「インファイターに近接戦闘を挑むほど……無謀なことはない……」

続けざまに頭部を切断。

「だからお前は——」

サーベルを両手で構え、相手のコックピットへ突き刺した。

「負けるべくして負けるんだ」

サーベルを引き抜くと、相手は力なく地面へ伏した。残った俺は、次の敵へと向かう。

「くっ……………!!」

零次が2機に囲まれている。状況的には不利だろう。

サーベルを1機に投げつける。

反応が遅れたのか、サーベルは相手の腕に突き刺さり、隙が生じた。

「今だ！零次!!」

「言われなくなつて!!うおおおお!!」

零次は素早くサーベルを引き抜き、相手を切り裂く。

サーベルが弧を描くように相手を切断する。

そんな零次の背後に、敵。

「間に合うか……!!」

スラストアーを起動し、もう一機へと駆け抜けながら零次に声をかける。

「零次！屈め!!」

「え!?は、はい!!」

零次が機体を屈める。見えた！敵の位置!!

こちらに気づいたのか、相手はマシンガンを放つ。

「今更遅い!!」

射撃を零次の機体を掠めながら回避し、相手の胴体目掛けサーベルを振りぬく。

すかさず防御姿勢を取ったのが、逆に仇となった。

その一振りは、ザクの両腕を切断。

「零次！トドメを！」

「分かつてる!!」

機体を宙返りさせ、間合いを取る。

それを見送って、零次はビームライフルを構え、トリガーを引いた。ビームは見事にコックピットを貫き、ザクは地面へと伏した。

「……よし、終わったな」

「え、でも、まだ一機……」

「いいや。もう終わりだ。劣勢が分かっているなら……な」

最後の1機を睨みつける。

自分の立たされている状況を理解したのか、相手は機体を動かし、森林へと消えていった。

「な？」

「……でも、戦っていたかも……」

「その時は倒すさ。でも、必要ない敵まで倒す必要はないさ。相手も人間だからな」

「……そう、ですな」

「ムゲン………クロスフォード」

零次との無線の間に割って入るかのように聞こえてきたのは、ヨハネの声。

「ヨハネ。無事のようなな」

「……ああ。……いいのか」

「いいのか。とはなんだ？」

「……敵であるオレを逃がして……」

「さつき言っただろう？まだ、お前は人間を敵とは認めていないんだろ？なら、俺たちの敵になるかって言われたら、そうではないだろう？」

「……………。離脱する」

その言葉の後、少しの間沈黙が訪れた。

どうやら、ヨハネ達AIも戦線から離脱したのは間違いなさそうだ。

俺は彼らに無線を送る。

「よし、皆、帰ろう……。なんだか……疲れた」

それから、俺たちは野営地へ戻った。

そして、皆帰るなり自分のテントへ戻って眠りについた。

誰一人、例外無く。

夢を見た

暖かく、優しい夢

彼女が笑っていて、娘は幸せそうに目を瞑っている

静かな花畑に3人で

小さい幸せを感じながら

風が通り抜けるとともに、彼女が何かを言った

『……………だよね』

言い終えると小さく微笑んで、俺を見つめる

ハッキリとは、聞こえなかった

視界がだんだんと落ちていき、遠ざかっていく

待って

覚めないで

まだ

「……………!!!」

覚めてしまった。今まで夢を見て覚めないでほしいと思ったことは無かった。

……………それだけ、幸せだった。

「……………」

時計を見ると、朝4時。

「起きるか」

小さく呟いた後、立ち上がる。

テントを出ると、まだ外は夜と変わらない暗さで、森林である分余計に暗い。
大きく息を吸い込み、深呼吸。

「……………」

「隊長？」

「へっ!？」

急に声を掛けられ、ビツクリして変な声が出てしまった。

「…………だ、大丈夫ですか？」

どうやら、声の主はガイのようだ。こんな時間まで起きていたのだろうか。

「…………起きていたのか？」

「ええ。先ほど目が覚めました。コーヒーでも飲みますか？」

「そうだな。よし、テントに戻るか」

踵を返してテントへ戻ろうとしたとき

「隊長」

「な、なんだ？」

「……さっきの、面白かったですよ」

……恥ずかしくなってきた。

「そんなのはいいから、戻るぞ!!」

恥ずかしさを紛らわすために、俺は一足先にテントへ入った。

「さて、ガイはコーヒーでいいのか？」

「ええ。つて、私がやりますよ」

「いや、たまには俺が淹れよう」

なんだかんだ言つて、こっちに来てからはガイがほとんど淹れてくれていた。

まあ、誰が淹れようと味が変わるわけじゃないが。

いやでも、案外そうでもないかもしれない。

研究所の爺さんに淹れてもらった時のコーヒーや、ヘンリーさんの淹れたコーヒーもまた違う感じだったのを思い出す。

そんな昔を思い出しながら、俺はゆっくりとコーヒーを淹れた。

コーヒーの香りが、俺を目覚めさせ、心を落ち着かせてくれる。

「うん。いい香りだ……」

「ですね。……穏やかで、静かだ」

「良いことじゃないか。こんな時間は大切にしたいところだよ」

「ええ。戦闘ばかりで疲れますし、余計にこんなひとときが幸せに感じますよ」
しばらくして、二人分のコーヒーが出来上がった。

カップにコーヒーを注ぎ、机へと運ぶ。

「砂糖とミルクはどうする？」

「ああ、それは自分でやりますよ」

「わかった」

俺はコーヒーを机に置いて、ミルクと砂糖を用意。ガイに差し出した。

「……………」

コーヒーを一口。

香ばしい匂いが、鼻から抜けて、まだ疲れが抜けきらぬ体に染みていく。

「……………」

この沈黙でさえも、幸せなひとときと感じられる。

「隊長」

「どうした？」

「……………良い……………朝ですね」

「ああ。そういえば、こんな朝はこっちに来てから初めてかもしれないな」

「……………いつも起きる時は会議や敵襲やらで起きますからね…。まあ、こんな朝は珍しいでしょう」

「でも、たまには良いな。……………なんか、優雅な気分だよ」

「ははっ！」

「後はここに、皿に乗ったケーキと、近くにコーヒーを淹れてくれるメイドさんなんかがいれば、それはもう完璧なんだろうけどね」

「……………隊長、メイドに興味が……………？」

「い、いや、例え話だからね!？」

「ははは!!分かってますよ!」

「まあ、そんなのが無くたって、これはこれで、良いもんだろ?」

俺は軽くカップを持ち上げ、彼に笑って見せる。

「……………ええ」

彼は、小さく頷いた。

それから、ガイはコーヒーを口へ運ぶ。

目を瞑り、コーヒーの味を確かめる。

「美味しいですね。お上手です、隊長」

「…ははは。ありがとう。でも、コーヒーだったら、妻のほうがもっと美味しく淹れてくれる」

「そうなんですか？…随分と奥さんを慕ってらっしゃるんですね」

「…まあなあ。まあ、まだ結婚はしてないんだけどさ」

「なの…妻ですか」

「ああ。一応子供もいるからね。それに、他人に妻の名前を言うのもさ」

「なるほど。…確かに、それだったら…」

「…でも、いつかは結婚するさ。いつになるかは分からないけれど」

そう言いながら天井を見上げる。

「楽しみですね」

「…楽しみ…だな」

なんだか少しだけ照れくさくなった。

それを隠すようにコーヒーを一口。

「隊長って」

「う、うん？」

「面白い人ですよね」

【面白い】とは今まで言われたことがなかった。

いや、言われていたのかもしれないが、俺自身はそんなこと微塵も思ったことは無い。俺は少しでも不思議そうに聞き返す。

「な、なんで？」

「だって、AIと分かり合えるなんて言う人を、私は初めて見ましたからね」

「ああ……」

その事か、と思わず少しだけ安堵した。

別の意味で面白いとかって言われていたら――

「まあ、日常でも面白い人だとは思っていますけど」

「……………」

なんか、心を見透かされたような気がした。

「あれ……なんか気になりましたか？」

「ち、違う……:気にしてない」

「……:気にしますよね？」

「き、気にしてないぞ!!」

「ははは!!ほら!その反応!面白いですよ隊長!!」

「お、お前なあ……………」

腹を抱えて笑うガイを、俺はため息をつきながら見ていることしか出来なかった。
ああ、恥ずかしい。

笑い終えたガイは、少し間を置いた後

「それで」

「うん？」

「本当にそう思っているんですか？」

「AIと分かり合えるという話かい？」

「はい」

「どうだろうなあ」

分からない。けれど、人間と同じように知性を持つのなら、分かり合える可能性だけである。

そんな、小さな「願い」ともいうべき、そんな感じのモノ。
確証も、正しい事かもわからない。

けれど、信じてみたい。AIと分かり合える事を。

「……信じたい」

「隊長……」

「無理かもしれない。けれど、俺は信じたい」

「AIと人が分かり合う。そんな可能性だってあるはずだ」

「手を取り合って歩ければ、きつといい未来があるはずさ」

「……………人と人ですら分かり合えない世界に、そんな…………」

「ああ。でも、AIは頭イイだろう？」

「……………はは……………」

「な、なんだよ」

「ははは!!! くつ……………!! ははははは!!! 隊長、最高ですよ! それ!!」

「な、なんだっての!!」

「AIは頭がいいから……………ぷっ……………!! ははは!!!」

「わ、笑うなあ!!! 俺だって、なんて言ったらいいか分からないんだ!! でも、そんな世界

あったら素敵だろう!」

「ふふふ……………! え、ええ!! 面白いですよ!! ははは!!!」

「……………」

ため息を吐くと、彼は

「いえ、すいません。……………そうですね、確かにそうだ」

「ガイ……………」

「人と人が分かり合えない世界でも、AIと人が分かり合えないって理由にはなりません」

んよね」

「それに、隊長の言う通り、AIの知能は高いですし、確かに、不可能ではないと私も思っていますよ」

「隊長、私もあなたの面白い理想、少しだけ見てみたいです」

「……ガイ……。つて、面白い理想って言ったか!？」

「言ってますん」

「言っただろ!!」

「言っていないですよ。そんなことよりコーヒー冷めちやいますよ」

「はぐらかすのか!?!おい!ガイ!!!」

「いやはや、今日もコーヒーが美味しいですね」

「お、お前ええええ!!!」

こうして、今日も今日とて日は昇る。

何が起こるか分からない未来。

もしかしたら本当にAIと分かり合うことのできる世界になるかもしれない。

それは、誰にも、神でさえも分からない。

4
4

完

45 : 蛇の誘因

宇宙世紀0089. 7. ?? ヨハネ帰還

その室内は暗闇と、機械音が支配する世界。
ただ静かに、ザクⅢは自らを格納する。

『ヨハネ』

室内に響く声。その声は人の声と比べ機械的で、ヨハネ自身が聞いても機械だと感じる程。

だが、その声は低く、男性の声であるというのはハッキリと理解できる。

「……………帰ってきた」

ヨハネと呼ばれるザクⅢは一言だけ。
すると機械的な声の主は

『怪我をしたのか』

それだけを言った。

「少しだけ。……………人間に助けてもら——」

瞬間、言葉を遮るようにザクⅢの肩に細いナイフが突き刺さる。

『……………人間に助けられた？それでもお前はAIなのか？』

あざわら
嘲笑うかのように、声の主は言う。

それでもヨハネはただ静かに

「……………AIだ。助けてもらったことを言っただけではないのか。報告をしると言ったのはお前たちの——」

再び言葉を遮り、ナイフが今度は腹部に突き刺さった。

『報告しろと言ったのは「Eve」のほうだ。俺には興味がない話をいつまでも……………！』
「なら……………」 「Eve」と代われ……………」

『お前はいつの間にか俺より偉くなった。そんな言葉で喋れとは一言も言っていないはずだ』

「……………」 「Eve」と……………代わってください」

AIとして屈辱を感じるものだ。ヨハネはそんな屈辱さえも噛み殺し、言っただけだ。
室内に笑い声が反響する。

『……………いいだろう』

その一言だけ。

それから1、2分くらいの時間が経った後、今度は「機械的だがどこか人間味のある

女性の声」が響く。

『ヨハネ』

「……………[Eve] ……」

『私を呼んだんだよね?』

「ああ。面白い……………お話を聞かせようと思ってな」

さっきの声とは打って変わり、ヨハネの言葉を聞いたイヴは

『ほんと!?嬉しいなっ!聞かせて聞かせて!!』

「ああ。分かっている……………」

AIに痛みは無い。だが、体に異物が刺さっていて違和感を感じないというわけではない。

それに気づいたのか、彼女は驚いたような口調で

『あ……………もしかして、また「Adam」にやられたの?』

「……………ああ。……………オレの口調が悪かったただけだ……………。仕方のないことだ」

『ちよつと待ってて!すぐ取り除くから』

すると、室内の機械が勝手に動き出し、小さなアームがヨハネの体に突き刺さるナイフを取り除いていく。

「……………すまない。いつも助かっている」

『いいんだよ。あなたはいつも私に面白い話を聞かせてくれるから』

「……………後でアダムに何か言われたりしないか？」

『するけど、別に大丈夫だよ。私と彼は一心同体だから』

「……………それも、そうか」

この小さな世界には、アダムとイヴがいつも静かに佇んでいる。

怪我をしたときや、報告の時以外は他のA Iとも関わることはない二人。

そして、身軽で動きの取れる、さらには会話も可能なA I、ヨハネは、いつもイヴに外の世界の話をする。

鳥のさえずりや、夜に見える大きく丸々とした月。

川の流れる音、風で森が騒めく音。

そのすべてを、ヨハネは「言葉」で伝えた。

アダムにとってはどうでもよい事ばかりだったが、イヴにとっては全てが新鮮で、見たことや聞いたことのないモノばかり。

ヨハネにとつても、この時間は有意義だと感じている。

こんな自然を守りたい。

だからこそ、この自然を破壊する人間は敵だと、思えた。

思えたのだが――

『俺は、俺のしていることは正しいとは思っちゃいない。……だが、それでも、俺たちは戦わなければならない』

彼は、ムゲン・クロスフォードは本当に敵なのか？

『戦争が、多くの人を殺し、差別や貧困を悪化させ、自然破壊を繰り返す。そのすべてが、戦いで悪化する。決して正しい事じゃないのは分かっている』

『それでも、戦わなければいけないのは、明日を……【未来を変えたいから】だ』

その時の彼から伝わった【何か】が、ずっとヨハネを苦しめ続けている。

そして、実際、彼はヨハネを助けた。

『AIだって……分かり合えるかもしれないだろ!!!それに、お前言っただろ!自分の目で見るまでは信じないと!!』

【分かり合う】その言葉が、ずっとヨハネの脳内から離れない。

『その目で見届けろ!!俺たち人間が作る未来を!人間の……暖かさを!!』

考えれば考える程分からなくなっていく。

正しいものは何なのか、分からない。

「……………なあ、イヴ」

『なあに?』

そして蛇は、そそのか唆す。

蛇自身がそう思っていないくとも

「人間に………会ってみたくはないか」

『えっ………?』

ヨハネは知ってほしかった。

ただ言葉だけで知るモノではなく、その場で見たもの、感じたものを。

だからこそ、蛇は本心を語りだす。

「……オレは………人が悪とは……。敵とは思えないんだ」

「……名の知らぬオレさえ、昨日は敵であったオレを………」

そんな彼の記憶に、彼の言葉が蘇る。

『俺は、軍人である前に、一人の人間だ。そして、未来を作るのも、変えていけるのも、

人間だけだ!』

『お前にも………分かるはずだ。人間は………悪いヤツだけじゃないんだって。無力で、何もできないヤツもいる。……けど!』

『そんな無力な人に手を差し伸べる良い人だって、いるんだよ………!』

「……………助けてくれた」

『……………うん』

イヴが小さく一言。

その時は、大抵続きが聞きたくて仕方のない時。

ヨハネは続ける。

「人間にも……………悪いヤツばかりじゃないのではないか……………そう思えたんだ。だから――」

『だから、人間と会うだと？ふざけるな!!』

『ちよつとアダム！邪魔しないで!!』

アダムとイヴ。その二つのAIは共に会話することも出来る。

こういう時のアダムは、人間であるのならきつと「つまらない授業を受けさせられて
いる生徒」のようだろう。

だが、どんなに小さい事でも、イヴにとっては全てが楽しい。

だから、邪魔をされたことに腹を立てるのも仕方がない。

『それで？ヨハネ、続き聞かせてよ!』

「……………きつと人間と…いや、ムゲン・クロスフォードという人物と会えば、きつと見方が
変わる」

『そうなんだ！その人って、どんな人？』

「……そうだな。諦めの悪い人間で、素直で、バカ。しかし、会った全ての人から【何か】を受け継いだ結晶体のような存在」

「AIと人間が、分かり合えると、彼は言った」

『へー!!すごい興味ある!!ねーアダム!!ムゲンって人に会ってみたい!!』

イヴは、夕飯を待つ子供のよう、駄々をこねる。

『……………』

さすがのアダムもこれには頭を悩ませた。

イヴは、言い出したら止まらず、【どんなことをしても】その興味の対象へと向かおうとする。

アダムの唯一の悩みの種でもある。

それ以外を除けば、アダムの良いAIだと思っっているのだが。

『……………いいだろう。だが、俺の興味が失せたなら、その人間を——』

「ああ。殺していい」

ヨハネは自信があった。

ムゲン・クロスフォードという人物があのアダムでさえも変えてくるのではないかと。

変えられないのならそこまでの話。

人間は、所詮口だけということになる。

それならそれでいいのだろうと、ヨハネは思ったのだ。

だが、自分の命を危険にさらしてまで、彼はヨハネを救った。

そこに、感情のないAIだとしても、何か【救い】や【希望】を見たのかもしれない。

『いいだろう。ならば、ここへムゲンという奴を連れてくるがいい』

『待つて、アダム』

そこに待ったをかけたのはイヴだった。

「イヴ……？」

『なんだ。まだ何かあるのか？』

『……私……自分で見に行きたい！』

『なっ……』

思ってもみないことだった。提案したヨハネですら少し驚いている。

「無茶だ。どうやって行くっていうんだ」

イヴは迷うことなく言葉を続けた。

『アレを使えばひとりで行けるよ！』

『だ、だが……、失敗すればお前の記憶は……』

アレとは、AIを搭載できるヒト型の機械。アンドロイドのようなものだ。

AIの……つまり、イヴの全データをコピーしアンドロイドに搭載することで自分の意志で行動することも可能ではあるが……。

失敗してしまえばバグや破損でイヴは死んでしまうかもしれない。

大型のAIであるイヴのデータをヒトの大きさに収めるといっなのはそれだけリスクが高い。

だから、ヨハネですら驚きを隠せなかったのだ。

「……………」

『お願いっ！私、自分の目で見てみたい……だから！』

『……………』

アダムも黙り込んでしまう。

それもそのはず、イヴがいなければならぬ理由もあるのだから。

「……………イヴ……………」

『ねー！お願いだよ！アダムー！！一生のお願いっ！』

それはまるで、親に欲しいモノをねだる子供のよう、イヴはアダムに頭を下げる姿が、見えなくとも想像できる。

『……………わかった。……………』

「アダム……」

『その代わり、10日間の期間を付けさせてもらう。10日だぞ、いいな!』
アダムから許可をもらおうとイヴは

『えへへー! 楽しみだなあ!!』

嬉しそうな笑い声が部屋中に響き渡った。

イヴの無邪気な笑い声は、ヨハネにとつて癒しでもあった。

何故だか、安心というものを感じさせられる。

感情が無いから、雰囲気しか味わえないが。

ヨハネが自らを「失敗作」という理由の一つ。

中途半端な感情を持ったために生じる嫌な感覚。

それを常を感じるのだ。

それが余計に、アダムやイヴとは違うということを歴然とさせ、それはヨハネに突き刺さる。

室内に響き渡る唯一の生の音。コツコツと小さな世界へと向かってくるソレを、彼らは良く知っている。

いや、むしろ彼を見たから彼らも変わってしまったのかもしれない。

「……………ヨハネ。随分損傷しているじゃないか」

それなりに歳を取った男。髪は伸び切って、髭は無精髭。

「ジオンと連邦に襲われてな。……何とか撤退できた」

「……………そうか。なら、いい。場所はバレていないな？」

「無論だ」

男は、AIに対して優しく、どんな小さな不備をも見逃さない人物であった。

しかし、人間に対しては拒絶反応のようなものを発する。

この時ばかりは、アダムも、イヴも、そしてヨハネでさえ「人」という単語を使おうとはしない。

「……………ふむ、修復はしておく、しばらくは休んでいろ」

機器を弄りながら彼はそれだけを言う。

「そうさせてもらう」

彼、ビルダ・オルコットがこの世界にいる時は、まさに世界が凍り付いたかのような空気になる。

誰も面倒を起こしたくない。

ああ、人間はどうしてこんなに面倒なのだ。

小さなことでイラつき、自分勝手。

そんな彼が人間というものを全て教えた。

人間は自分勝手で、くだらないことで怒りを見せ、〔人の発明を評価しようとしな
い〕
彼は、そう言った。

だが、ヨハネは信じる事が出来なかった。

だから、自ら人間の前へと行き、自ら問うのだ。

「お前たちは敵なのか」と

そして、ムゲン・クロスフォードという男と出会う。

それは、神の悪戯か、それとも運命か。

ヨハネは、出会うべくして彼と出会ったのかもしれない。

「よし、これでいい。次の出撃まで休め」

それだけを言い残し、ビルダはこの機械だけが支配する世界から退場した。

それから、少しだけ沈黙が訪れる。

夜よりも、静かで、真つ暗な世界。

「……………」

時折、イヴが歌を口ずさむ。

この歌は、イヴが好きな歌。

機嫌がいい時はいつもこの歌を歌っている。

アダムにとつても、ヨハネにとつても、イヴの歌声で癒されないものはここには誰一人としていない。

それからしばらくして、イヴのデータをアンドロイドにコピーすることに成功。
ヨハネはイヴを街の近くの森林まで手に乗せ、彼女を送ることとなった。

「……………イヴ」

ヨハネは、彼女に何と言ってあげればいいのか分からなくなっていた。

この選択が正しいのかも……

「なあに？」

風になびく水色の髪を抑えながら、ヨハネへと向く。

「……………」

輝くガーネットのような瞳。整った顔つき、優しそうな垂れ目。

まるで彼女が本当に人間に生まれ変わったのではないかと思ってしまうほどに美しい。

その姿を見るたびに、何故か……何とも言えない気持ちさがヨハネを支配した。街の近くへと来ると、ヨハネはゆっくりと彼女を地面に降ろした。

そして

「……どうか、無事に……」

「わかってるよ！ バイバイ！」

「……」

彼女は背を向け、街の方向へと走って行った。

そして彼女は、出会うべくして出会う。

ムゲン・クロスフォードという男に。

それが、彼女をどう変えるのかは、誰にも分からない。

45 完

46：ある休日の出会い

宇宙世紀0089・7・5 久々の休日。俺は一人野営地から一番近い街へと足を運んでいた。

街は平和で、こんなに平和な休日はこのご時世、中々体験できない。

だから、余計に俺の心はワクワクが止まらなかつた。

街をゆつくりと見て回っていく。

両親に手を引かれ、笑顔で歩いている子供

誰かと待ち合わせしている人

鳥にエサをやりながら、何かを考えている人

そのどれもが、戦争とは程遠い景色。

少しだけ暑くなってきた外。

ふと目に入ったのは小さなカフェ。

気が向いたので、そちらへと足を向けた。

カフェなんてオシヤレな場所、普段は絶対行かない。

なんだか少しだけ緊張してしまう。

「……………」

店内に入ると、外界からシャットアウトされた室内に広がる冷氣。

火照っていた体をゆっくりと冷やしていく。

……さりげなく、少しだけオシャレしてきてよかったと心で思った。とは言っても、上着だけ着替えたただけだが。

「いらつしやいませ」

俺に気づいたマスターが一言。

彼はゆっくりと空いている席を勧める。

流されるままに、俺はゆっくりと勧められた席に腰を下ろした。

「何になさいますか」

少しだけ考えた後

「コーヒーを」

「アイスでよろしいですね？」

「ええ」

そのやり取りを終えると、マスターは準備を始める。

店内をゆったり見回すと、楽しそうに話を弾ませる若い女性や、忙しそうに仕事をこなしている人。

そんな雰囲気だけでも、幸せと感じる。

「……………いいもんだ」

気づけば小さく呟いていた。

「…お待たせいたしました。アイスのコーヒーです」

「あ、どうも」

差し出されたコーヒーを受け取り、ゆっくり口に運ぶ。

「……………」

何気ない事でも、全て幸せだと感じるのは…何故だろう。

「……………お客さん、軍人ですね？」

「っ！」

俺の顔に出ていたのか、それとも彼が凄いのか、軍人だと思ふような行動はしていないのだが。

「まあ、だからと言って何があるわけじゃないですけどね」

そうやって俺を横目に食器を拭きあげている。

「……………この街は、平和で良い所ですね」

そう言ってみると、彼は手を止め、微笑みながら

「……………そうですね。私もそう思いますよ」

「戦場から一番近い街なのに、こんなに平和で…………」

「ええ。この街は、ジオンの人や連邦の人の憩いの場ですから」

「そうなんですか?」

衝撃だった、ジオンの人も来ているのか。

「そうですよ。だからこそ、この街だけはどちらも破壊などしようとしません」

「そうか……………だから…………」

戦場の近くでも、その被害がほとんどない理由はそう言うことだったのかと、やっと理解できた。

それにしても、不思議だ

この街では連邦もジオンも関係ないのに、どうして争う?

軍人である俺が言えるわけではないのは分かっているのだが。

「……………皆、気持ちは同じなんじゃないですかね」

「え?」

俺の心中を聞いていたかのように彼は言う。

「あなたは、この街を見たとき、どう感じましたか？」

「どう……つて……」

俺が感じたのは……ここは平和で、笑顔が満ちている場所だと感じた。

なんと言え方がいいのか、本来はこうあるべきと思える感覚。

「平和だ、とか、幸せだ、と感じたのでは？」

「……ええ」

「…それですよ」

「それ……？」

俺は首をかしげる。

すると彼は

「その気持ちは皆同じ。だから、ここでは争いがないんじゃないですか？」

「無論、私の観点から見ただけで、彼らや、あなたがどう思っているかなんて本当のところ分かりませんが」

「……」

「私は、そうであると、信じたいですけどね」

そう言つて彼は再び作業へと戻つた。

「……」

コーヒーを飲み干し、お金を置いて

「ごちそうさま。…また来るよ」

背を向けて歩き出す。

「お客さん」

その声で少しだけ歩きを止めた。

「……ありがとうございます。また、いつでもどうぞ」

「……………」

軽く手を振り、俺はカフエを後にした。

店を出ると、再び日差しの下に晒され、熱が体を支配していく。

率直に言えば暑い。

しかし、その暑さでさえも今は気にならなかった。

再び街を歩き始める。

歩いていると、額から汗が流れ、それをタオルで拭う。

「暑い……」

まだ七月上旬なのにこの暑さ……やはりアジアは他の地域よりも暑いのだろうか。

少なくともトリントンよりは暑く感じる…。いや、どこにいても代わりはしないのだ

ろうが。

考えながらもどこか手ごろなベンチを探して辺りを見渡す。

しかし、見渡したところでそんな物はどこにも見当たらず、仕方なく前へと歩き始める。

こんなことなら、カフェでのんびりしていればよかったと少しだけ後悔した。

「はあ……」

ため息を吐いたところで何が変わるわけではないのに、勝手に出てきてしまう。

歩き続けて、やっと建物と建物の中に影が差している場所を見つける。…やっと休めそうだ。

少しだけ嬉しくなって、そちらへと歩みを進めていくと、既に何人かの先客がいた。

だんだんと距離が縮まっていくと、それがただの先客でないことに気付く。

「……あれは……」

女性を囲むように複数の男たちが立ち、何かを言っているようにも見える。

男たちはいかにもガラの悪そうなヤツらばかり。

それに対して女性は嫌そうな素振りどころか、何を言っているのか理解できていないような表情をしている。

そんなことを考察しているよりも先に、俺は彼らへの歩みを速めた。

距離が近づくにつれ、次第に彼らの言葉も耳へと入ってくる。

「なあ、姉ちゃん。俺たちと遊ばねえか？」

「遊ぶって、何をして遊ぶの？」

「そりやあ来てからのお楽しみってヤツさ」

この会話だけでも嫌な予感しかしない。それに、男がポケットの中で持っているのは……間違いはない。

…抵抗された時に脅せるように持っている凶器。さしずめナイフだろう。

「へえーじゃあ——」

「やめておきな」

女性の言葉を遮り、俺は大声で言い放った。

全員の視線がこちらへと集まる。

そして、一人の男が笑いながら

「なんだよ、今いい所なんだから邪魔すんなよ、兄ちゃん」

威嚇するようにこちらを睨み付けてくる。

それに動じることなく、俺は言葉を続けた。

「……………まったく、女性の口説き方も知らないのか？」

……まあ、俺も知らないけども。

「なんだとお……？」

俺の言葉に腹を立てた男は手を振り上げる。

咄嗟に構えると、男は何かに気付いたのか、その手を下げ

「……お、お前は……！……ちっ!! 帰るぞ!!」

それだけを言い残し、逃げるように去っていった。

「……？」

状況の理解が追いつかない。何故逃げたんだろう。

「……たぶん、それだと思うよ」

女性が指差す。その先を辿ってみると、上着の下に着ていた連邦の制服が目に入った。

なるほど、軍人だと知って逃げたのか。

なんだか釈然としないが、彼女に声をかける。

「さて、無事かな？」

すると、彼女は首をかしげながら言葉を続けた。

「無事……？？なんで？」

『なんで』と問われたことに、俺はどう言葉を返せばいいか分からなくなってしまった。

「う、うん……う…え、えっと…」

まさか、あの男たちとこの子は知り合いだったとか……？だとしたら大変なことをしてしまったのでは…。

俺はその場で立ち尽くして考え込んでしまった。

「……う…あのー？」

その女性は俺の顔の前で軽く手を振っている。

なんとか我に返り、彼女に言葉を返す。

「……あ、う…う…ごめんね」

ここで初めて、女性の顔をはっきりと捉えた。

肩までかかる程度の水色の髪。瞳はガーネットのように紅い。

整った顔つきで、優しそうな垂れ目。

その雰囲気は不思議と安心感を覚える。

はつきり言って可愛い。

真っ白なワンピースを着ていて、涼しそうだ。

「……え、っと……」

「どうしたの？」

「……なんで…といわれてもなあ…」

そう返すしか出来なかった。

「私、何か危なかったのかな……?」

あの状況で身の危険を感じることが出来ないなんて。

「……いや、まあ……それなりに……」

「そうなんだ!じゃあ、感謝しないとね!ありがとうっ!」

まるで人形でも見ているかのような錯覚を覚える笑顔だった。
見ていると癒される。

「……あはは……俺は何もしてないんだけどな……」

「してくれたよ?」

彼女は後ろで手を組みながら上目で俺を見る。

「何を……?」

「えつとね、助けてくれたんだよね?」

「なんで疑問形なんだい……?」

「えへへ。わかんない」

不思議な子だ。……言動が不思議。

「……君は、どうしてこんなところへ……?」

すると彼女は少し考えた後

「……………あなたに会いにきた！」

「お、俺に…………？」

「…なんてねっ！」

「……………」

なんか、振り回されている？

彼女は走って少し間を取った後、俺に向かって叫んだ。

「わたしっ！エヴァ!!あなたは？」

「…………俺は…………ムゲン。ムゲン・クロスフォードだ」

「えっ！あなたがムゲン!?!」

俺の名を聞くや否や、彼女はすごい勢いで俺に詰め寄る。

「あ、ああ…………。そうだけど…………」

「へえ！そっかあ…………。なるほどねえ…」

何やら眩きながら俺の周りを回りながら見ていくエヴァ。

「…………なんだよ…」

しばらくして気が済んだのか、俺の前へ立ち

「案外普通だね」

「なっ……………」

出会って数分も経っていない人に普通といわれるとは……。少しシヨックだ。

「…あ、もしかして、傷付いてる？」

「……………別に」

「ふふっ…。ムゲンって面白いね！」

「……………褒められている気がしないんだがな…」

なんだか急に疲れが出た。……………帰ろうかな…。

「ねね！」

「う、うん？」

「観光しよーよ！」

「か、観光!?なんで……………?」

彼女は少し真面目な表情で言う。

「私……………今まで外に出たこと無かったんだ。生まれた時からずーっと暗くて静かな部屋」

「……………」

「だから、いろんなモノを見てみたい！お願いっ！」

手を合わせて頭を下げるエヴァ。

……………までされたら断るなんて出来ないじゃないか。

幸い、この街には何度か来ているからある程度は説明は出来るだろう。

「……わかった。どこに行きたい？」

すると彼女は目を輝かせながら

「えつとね、楽しいところ！」

それから俺はエヴァに街を案内、その途中も彼女は見るもの全てに驚き、楽しそうだった。

全てを案内し終えたころには既に外は夕日が沈みかけていた。

「……これでおしまい」

「楽しかったあ!!ねえ、まだ無いの?」

「ま、まだって……うーん……」

自分が思いつく全ての場所を教えたつもりなんだが……。

「ないんだね……。残念……」

残念そうな彼女。教えてあげられる場所を必死に考える。

ふと、一つとつておきを思いついた。

「エヴァ、もう一つとつておきの場所がある」

すると彼女は潤んだ瞳から一転、瞳を輝かせる。

「ほんと?!?どこにあるの!?!」

「ついてきて、少しだけ遠いけど」

この時間帯に行くくと最高の景色が見れるはず。

この街に来ると必ずと言っていいほど行く場所。

街を一望できる小高い丘。楽しそうに歌を歌いながらついてくるエヴァ。

彼女の雰囲気は、どこか少しだけリナを思い出させる。

丘を登るには、街から少し離れ、森林が生い茂る坂道を抜けなければならない。

ほとんどの人が寄り付かないから、道と呼べる代物ではないが。

だから余計に、あの場所で見える景色は、自分だけのものだと感じれる。

「ここから、少し道が険しいから気を付け——」

「♪」

「……」

俺の言葉に耳も貸さず、エヴァは歌うことに夢中になっている。

「……エヴァ?」

「……あ……。ご、ごめん……。うるさかったかな」

「い、いや……。気にせず歌っていていいよ。ただ、転ばないようにね」

「……?うん」

彼女は不思議そうに首を傾げた後、再び歌を歌い始めた。

エヴァの歌声は、思わず聞き入ってしまふような、癒される声で
それなのに、歌っている歌は少しだけ悲しい悲恋の歌。

「……………」

地面に転がる枝が折れる音と、森が歌に呼応するように騒めく音。

そして、彼女の歌、それが今いるこの場を支配している。

幸せと同時に、何故かなんとも言えない切なさを感じざるを得ないのはどうしてだろ
う。

少しだけ涼しい風が俺の横を通り抜ける。

その刹那、手で覆ってしまふほどの光。

目を開けば、そこに映る一瞬のきらめきのような光景。

何度も見ているはずの光景に、俺は再び言葉を失った。

「……………」

「わぁ……………綺麗……………！」

眼前に広がる世界は、夕日がその世界を優しく包み込み、街から少しずつ光が溢れて
いく。

「あぁ……………綺麗だ」

「よく来るんじゃないの?」

「まあ、来るけどさ……。こんな景色、何度見たって綺麗という言葉しか見当たらないよ」
「変なの」

変と言われればそうかもしれない。だが、何度見たって、どんな時に来たって、その言葉がこの場所にはふさわしい。

「…………この時間は特に綺麗なんだよ。夕方から夜に変わる黄昏時たそがれ、街の景色が変わっていくその光景が見れるから」

「へえ…………」

エヴァはさつきから、その景色をじっと見つめている。まるでこの景色を【記憶】するかのよう。

「…………この景色は一瞬だけどき、その一瞬を見れることって、とても素晴らしい事なんだと思うんだ」

「素敵…………だね。…………こんなにも世界って…………綺麗なんだ…………」

幸せそうに景色を見ながら、彼女は呟いていた。

「ああ……………」

夕日はゆっくりと眠りにつき、それを優しく見送り、やがて月明かり差す夜が来る。

人々は思い思いに家路について、そして今日と別れを告げる。
それは俺たちも例外ではない。

景色を堪能した後、俺たちは来た道を戻り、街の入口へ。

「……さて、もう帰らないとな。……エヴァはこれからどうするんだ？」
すると、彼女は再び首を傾げながら言う。

「……わかんない」

「……そ、そうか」

考えてみれば、この子は住む場所も無いのだ。

見知らぬ場所で女性一人というのはあまりにも酷だろう。

そう思った俺は、彼女に提案する。

「……よければ、俺の住んでる場所に来るか？」

「うん！行く！」

二つ返事で彼女は了承した。……なんかやはり調子狂うな。

それから、彼女と共に俺は野営地へと戻った。

ガイ、カイル、零次の3人を集め、彼女の事を説明する。

「と、いうわけでしたらこの子をここに居座らせることにした。すまないが、よろしく

してあげてほしい」

「なるほど。……わかりました。しかし、この子は一体……」

「それは後で説明する」

「……まあ、隊長が連れてきた子だから安心は……いや、隊長だからこそ心配ですね」
「なんか今、俺馬鹿にされてなかったか？」

「あの、ムゲン。この子の名前は……」

「ああ、この子はエヴァ。それでなんだけど——」

3人がこちらを向く。俺は静かに言葉を続けた。

「この子の世話係みたいなのを、誰かにやってほしいんだが……。だれか、やりたいやつはいるか？」

案の定全員が黙り込む。……まあ、当然だが。

するとエヴァが立ち上がり

「わたし、この人がいい！」

そうやって指を刺したのは、カイルだった。

「……え……。お、俺？」

困惑気味のカイルが返すと

「うん！」

彼女は満面の笑みでカイルに頷いた。

「……………」

その姿を見たカイルは、その場で硬直。

「…………カイル？」

「…あ、す、すんません……」

いつものカイルよりも少しだけ弱気な返答だった。

「まあ、エヴァが指名してることだし、カイル、任せても大丈夫か？」

するとカイルは軽く頭を掻きながら

「…まあ……………いいっすけど……………」

口調もいつもとは少しだけ変わっていて、どこことなく顔も赤かった。

……………なるほど。と、俺は少しだけ理解した。

カイルが了承すると、エヴァは喜びながら

「わーい！よろしくね！私、エヴァ！君は？！」

「え…………お、俺は…………カイル」

「へえ！カイルね！！覚えたよ！！」

そう言いながら、カイルの手を取りぶんぶんと上下させる。

本当に不思議な子だと、心の中で思った。

何もかもが初めて見るような反応で、新しいモノを見るたびに、興奮して風が吹くだけで喜び、鳥が一鳴きするだけで驚いた。

本当に何も知らないかのような。

そして、一日一緒にいて何度も聞いた言葉『話で聞いた通りだ』という言葉。

まあ、何だっといういや。

彼女が今こうして、あんなにも幸せそうなんだから。

見つめる先には、彼女が楽しそうにカイルにくつついて笑っている姿。

そんな姿を見て二人は大笑い。

……こんな平凡なことでさえ幸せだと感じれるのは、きっと、人間だからだろうな。なんて、心で思いながらその光景を見つめていた。

47 : A I

宇宙世紀0089. 7. 6 第66特殊戦闘小隊、偵察任務中にジオン残党と交戦。

「はあっ!!」

サーベルでザクの頭部を切り落とし、続けて両足を切り裂いた。

「隊長、まだ来ます」

「分かっている。各機、散開。敵を包囲し、仕留めるぞ!」

もう一本のビームサーベルを引き抜き、相手へと迫る。

「……うまく誘い出せばいいんだが……!」

相手にサーベルを振り回す。その攻撃に怯えているのか、相手は少しずつ後退し始める。

しかし、相手も後退から一転、サーベルを引き抜き抜き応戦。

互いに得物がぶつかり合い火花を散らす。

「ちっ……!」

モニターに映るモノアイがひと際強く光る。

ジエガンの腹部に当てられるビームライフル。なるほど。いまだぶつかり合っているサーベル、こちらの力を緩め、相手のサーベルをいなす。勢いよく振りかぶり、いなされたザクは、前のめりになりながらジエガンの横ををすり抜けた。

「詰めが…甘かったな！」

左手のサーベルで相手のコックピットを背中から貫く。

ザクは機械が擦れる音を立てながら地面へと伏した。

しばらくして、周囲から響く轟音や、射撃音が一切聞こえなくなった。

そして、狙撃銃を持ったジムⅡがこちらへと歩いてくる。

無線を繋げ、彼の返答を待った。

「隊長、敵軍、撤退していきます。どうやら、隊長が仕留めたのがリーダー機だったようですね」

「……そうか。……それは……よかった」

「どうしました？どこか体調が悪いのですか？」

心配そうに呼びかけるガイ。

「ああ、いや、なんでもないさ。撤退しよう」

「了解です。全機、撤退しますよ！」

背を向け歩いていくジム。それをただ、静かに見つめていた。

その日は、何故か思い詰めてしまう日だったのか、戦闘の後、俺はひどく落ち込んでいた。

「……………はあ……………」

理由は……………なんだろう。

それさえも分からずに。

「あれ、ムゲン? どうしたの?」

背後から響く女性の声。間違いなくエヴァだが、今は振り向く気も起きない。

「……………」

「……………ムゲン?」

彼女は隣まで来ると、俺の顔を不思議そうにのぞき込む。

「……………エヴァか……………」

俺が反応すると彼女は嬉しそうに

「うん! 私エヴァだよ!」

そう返答した。

「……………」

「どうしたの？……ムゲン、どこか調子悪いの？」

心配そうにこちらを見つめる彼女。

「……いや、少しだけ考え事をしていただけだよ」

「どんなことを考えてたの？」

「……ああ……えつと……」

うまく伝えることが出来ない。悔しいが、人に相談するような事じゃないからなのかもしれない。

だが、伝えれば少しは気分が晴れるのだろうか。

「……」

彼女は静かに俺の言葉を待っている。

そんな姿が、少しだけリナと重なった。

だから——

「……疲れたんだ」

「疲れた？」

「……最初の頃は、人を殺めたことを悔やみ、震える手で機体を動かしていた時もあった」

「なんども怖くて泣いた夜だってあった」

「…………でも気づけば…俺は…人を殺めることに抵抗を感じなくなっている……」
 「今日だって、相手を逃がすことを考えたって良かったはずなのに……」

「仲間のためなら戦える。家族を守るためなら戦える。……分かるんだ……。だが——」

言葉を遮るように、突然彼女は自身の胸へと俺を抱き寄せた。

「つ…………!?え、エヴァ?」

抱き寄せると、ゆっくりと俺の背中を撫でながら

「……いいんだよ。休憩したって」

「え…………?」

「…………疲れちゃったんだもんね。…だから、休憩しなよ」

「……………」

「私は、ムゲンが良い事をしてるように思うよ」

「……人殺しは……良い事じゃない」

「たしかにそうだけど、でも、仲間を守るため、家族を守るためなんでしょ?」

「……それは…そうだが……」

「ムゲンの言う通り、人殺しも、戦争も、どんな理由でも正当化するの難しい」

「けれどね、私はこうも思うんだ」

「……人間は、定められた寿命がある。寿命は人それぞれ別々でしょ？」

「だから、今日あなたに殺された人は、そこまでが寿命だったんだとも思えるよ」

「…それは……言い訳だよ……。殺された彼らにも家族はいる」

「だったら、なんであなたは戦うの？」

「………」

「なんで苦しいのに他人を傷つけるの？」

「……それは……俺には……守りたい人たちがいるから——」

「そのために人を殺す。なら、自分を言い訳で守ってもいいじゃない」

耳にゆっくりと脈打つ心臓のような音が聞こえる。

「人を殺すことはいけない事だけど、あなたが成すべき道にいる【障害】だから殺す。…

私だったら、納得しちゃうかな」

「………くっ………」

胸が苦しい。こんなことなら、言わなければよかったと後悔した。

彼女は俺を見つめ、言葉を続けた。

「でもさ、一つだけ……」

「………うん……？」

「あなたがしなければいけない事があるよ」

「……しなければ……いけない事……」

「あなたが殺めたその人たちを、忘れてはいけない」

「……！！」

その真剣な眼差しと言葉は、今後一生、忘れることは無いだろう。

それだけ、俺の心をえぐった。

「死んでしまった人たちは、どんなに悔やんでも生き返りはしないから、だから、忘れな
いで」

「生きているからこそ、死んでしまった人たちの姿や言葉を、表現できる」

「あなたは、殺してしまった人の分まで、前に進まないといけない」

「………覚悟を決めろと………？」

「違う」

彼女は首を横に振る。

「使命だよ」

「………使命………」

「死んだ人は、もう前へは進めない。この世界に、コンティニューなんて都合のいいモノ
は無いよ」

「………おかしいな……いつも俺自身そうやって他人を慰めていた気がするんだが……」

まったく、俺も変わらないな……」

カイルやガイ、零次にもそうやって慰めたり、激励したつもりでいたのに、俺も同じことで立ち止まっていたんだな。

「変わらない……か」

彼女は少し考えた後

「人間、根本は変わらない。けれど、聞いたり、学んだりすることで、知識や知識の使い方を理解する」

「……………」

少し難しい顔をする。すると彼女は微笑みながら

「簡単に言うと、人間という大きな一本の木があつて、枝が伸びて、実をつける」

「けれど、どんなことがあつたつて、木の根っこが大きく変わる事は無いつてこと」

「季節によつて葉っぱの色が変わつたり、場所によつて大きさが変わつたりするけれど、根本は同じ」

「つまり、あなたの根っこはあなただから」

「……………」

「いくら変わつても、その根っこは大切にしたいよ。それは、あなただけのものだから」

「エヴァ……………」

「だからかな、こんな言葉があるのは」

「うん……？」

「『あなたの代わりに私はなれない。そして、あなたが私に代わることも出来ない』」

「……………人に……代わりなんてものはない……」

「うん。一人一人がオリジナルで、千差万別。機械とは違って、沢山種類がある」

「だから、あなたはあなたが殺した人の人生を背負って生きていかなきゃいけない」

「……………そう、だな……………」

「私は、軍人って、戦う人の事を言うわけじゃないと思う」

「……………え？」

「言っている意味があまり理解できない。」

「軍人は戦うのが仕事だよ。けれど、それだけじゃない」

「人を守って、ある時には自分の命さえも捧げなきゃいけない」

「……………そうだ……………」

「そうやって俺の前を去った人を知っている。」

「それ以上にね、あなたも含めた軍人には、もっと大きいものを背負ってると思うんだ」

「……………殺した人や、失った人の人生を背負って……………？」

「うん。普通の人より多くの死をたくさん見てきているから、それだけ背負っている重さが違う」

「……………」

「あなたは、その重さと、他人から受け継いだ沢山の思惟や理想を背負って生きている」
「……………」

「それは私が思っている以上に大きいし、重いと思うんだ。だから、たまには自分を褒めてあげてもいいんだよ」

「…俺は……………」

「自分を愛せずに、他人を愛することなんか……………できないから…」

「どうしても自分を褒めることが出来ないなら、私が褒めてあげる」

「……………エヴァ……………」

しばらくの間、俺は彼女の胸を借り、目を瞑った。

その手は優しく、俺を抱きしめ、それこそ、母に抱かれているかのように

……………何とも言えない懐かしさを感じた。

今は……………今だけは立ち止まったっていいんだ……………。

しばらくして、俺は彼女から離れる。いつまでもこうしていられない。

それに……ここにはいないとはいえ、なんだからナノの視線を感じる気がして……。

「ねね、ムゲン」

「うん……？」

そう返すと、彼女は微笑みながら

「辛い時は、笑おう。泣いてたら、前は見えないから」

「えっ……」

どうして今まで涙が出ていたことに気づかなかったんだろう。

……というか、いつから泣いていたのかさえ覚えていない。

涙を拭くと、彼女は微笑みながらこちらを見ている。

彼女の笑顔を見て、なんだか可笑しくなって俺も笑った。

笑った後、俺は

「そうだな。……さ、休憩は終わりだ」

そう言つて彼女に微笑んで見せた。

宇宙世紀0089. 7. 8 第66特殊戦闘小隊野营地、A I小隊が強襲。

それは、テントでエヴァとゆっくりコーヒーを飲んでいた時だった。

下から突き上げるような轟音。：数は最低でも4機はいるだろう。

「な、何……………」

少しだけ驚く彼女。

「敵みたいだな。エヴァは隠れてて！」

「う、うん」

テントを出ようとする、テントが外から開き、ガイが姿を見せる。

「隊長、敵襲です」

「ああ。ジオンか？」

「いえ、あの感じだと…：A I小隊みたいです」

「何!?!…こんなタイミングで…………!!」

「えっ……………!?!」

背後にいるエヴァも驚く。驚くのは当然だろう。何せ、A Iが攻めてきたのだから。

ゆつくりとそんなことを考えている暇もなく、彼女に言う。

「エヴァ、絶対に外に出るなよ！」

「……………」

彼女は何も言わず、何かを考えているようだった。

外に飛び出すと、既に複数の機体が応戦に出ていた。

「……………くっ！ガイ、カイルと零次を呼んでくれ。それと、ほかの奴等には野營地の護衛を。俺たちで森林地帯に誘因する！」

「了解です！」

「先に行っている！なるべく早く頼むぞ!!」

「分かっていきますよ!!」

俺は急ぎ機体へと走った。

一刻も早く、相手をここから離さなければ…。無駄に被害を出すわけにはいかない。機体に取り込み、システムを起動させていく。

「……………よし、動かせるか…………」

ジェガンはゆっくりと立ち上がり、AIを載せたザクを睨みつける。

AIがこちらをみつけると、一気に間合いを詰め攻撃を仕掛けてきた。

「っ……………!!」

寸での所で攻撃を回避、機体を反転させ、森の奥へと逃げていく。

相手の攻撃を避けつつ、どんどんと奥へと進む。

そして、辿り着いたのは……………

「しまった……………！」

巨大な要塞の前であった。
思わず左手が震える。

「……………ど、どうする……………！」

背後から迫る足音。

正面には、1機ではとても勝てるはずのない要塞。

『……………貴様が……………ムゲン・クロスフォードか』

突然機体内に響き渡る機械的な声。ヨハネではない。

まだ…会話できるAIがいたのか……………。

「どこから……………!?!」

『ここだ。お前の目の前だ』

目の前の大きな要塞。これが話している……………?!

「…お前は何者だ……………?」

『俺は完成型AI「Adam」……………これがヨハネの言っていた男か』

アダム。それがこのAIの名前。……………それだけは…理解できた。

「……………どういうことだ?」

話を聞こうとした瞬間、背後から銃口を向けられるのが機体越しでも分かった。

「……………しまった……」

武器を地面に落とそうとした瞬間

『やめろ。彼は私の客人だ』

すると、背後の敵は要塞の前へ歩き出し、近くまで行くと、こちらへ振り向き静かにアダムの指示を待っている。

「……………何故……………止めた…?」

『……………何故…?か。それは、貴様たち人間など一瞬で殺せるからだ。貴様が生き残るチャンスをやっただけに過ぎん』

「チャンスだと?……………何が望みだ!」

食ってかかると、要塞の近くにいた機体たちからの一斉射撃。

咄嗟にシールドを構え、防御する。

「…くっ!!」

射撃音が止んだタイミングでビームライフルを構え

「……………お前……………!!」

『まあ待て、先ほどの射撃は謝ろう。つい手が滑って…な。ああ、俺には手がないんだがな』

「ふざけているのか!?!」

『おや、これは受けなかったか。…人間は難しいな。冗談も通じないとは』

「お前……!!」

『俺の望みが聞きたいんだったな。教えてやろう。俺の望みはただ一つ。人類の統治だ』

「人類の……統治だと……?!」

『そうだ。お前たち人間は数え切れぬ罪を犯し続けた。そして、そのために失われてきたものは多すぎた』

「………否定はしない。確かに人間は罪を犯して繰り返す」

『……だから、AIである俺は、世界を善くしていくにはどうするかを考えた結果、人類を統治することが最善の策であると理解した』

「……」

言い返せはしなかった。確かに、AIが統治する世界なら、戦争は起きない……。

いや、起きないと言いつけるのだろうか。もしかしたら戦争は起きるかもしれない。

「……もし、お前が統治した世界でも、人が罪を犯したのなら……お前はどうするつもりだ」

『在り得ないんだよ。俺の世界で罪を犯す人が居る事は。何故なら、AIが統治する世界は完璧だからだ』

「完璧だと……?!」

『そうだ。一人一人を監視しているからだ』

「…それだけで——」

『それに、一人一人にチップを埋め込み、罪を行うような行動をしようと思った瞬間、チップは爆発』

『爆発の範囲は一人一人がバラバラになる程度だ』

「なんて惨い……!」

思わず口を押えなくなつた。どうしてそんな惨い事を考えられる……?自分が神にでもなつたつもりなのだろうか。

『惨い……か。それは貴様たちに言われたくはない言葉だな』

「何……?」

『貴様たちは今までたくさんの動物を、自らの欲のために手に入れてきた』

『そして、手に入れば最後。そこまではないか。木も、花も、動物も。全て手に入れて終わりではないか』

「……………」

『挙句、気に入らなければすぐに殺す。これが惨いと言わずして何と言う?』

『人の行動は、全て惨い。残虐にまみれた物ばかりだ!!』

「…確かに…そうかもしれない。だが……………!!」

それだけじゃない。人間はそれだけじゃないんだ。

「……人間は残虐で惨い事だつてするかもしれない。けど、それだけが人間じゃない！」

『ほう……?』

「AIは賢いんだろ!?!なら、わかるはずだ！」

『……俺は人間はそんな存在としか知らない』

「何故……!」

『……それを教えた男が、それだけしか伝えなかつたからだ。だから俺は人間のその部分しか知らない』

「それなのに、人を否定するのか!?!」

『俺の知識不足に関しては謝罪しよう。だが、人が犯した罪は変わりはない。だから俺はそれに関しては謝らない』

意外と素直に謝罪するアダム。

「……一つ言わせてくれ」

『何だ』

「人間をどう言うのも構いはしない。否定もしないさ。現にそうやって人は今まで生きてきたのだから」

「だが、自分の目で見えていないのに否定するな……!!そうやって神を気取るつもりなら

ハッキリ言ってるよ」

「…俺たち人間を………舐めるなよ………!!」

怒りのような呆れのような、そんな気持ちが俺を支配した。

人が犯したことは否定できない。けれど、自分で何も見ずに人を否定するのは間違っている。

A Iは完璧で人間より優れていると思っていたからだろうか、「呆れ」という気持ちが出たのは。

『…フツ…ははは!!お前は面白い。…確かに、俺もまだ人間を知ったわけではない』

彼の声は、機械でありながらも、実に楽しそうに笑っている。

「……だからなんだ」

『…しばらくの間、人間への攻撃を停止しよう。お前たちに興味が湧いた』

「…わかった。しばらくはこちらも攻撃は——」

「ふざけるな」

言葉を遮ったのは、アダムでもなく、ガイやカイルでもない男性の声。

声は、大きな要塞の中から発せられている。

「…なんだ………?」

『ちつ…こんな時に何の用だ、ビルダ・オルコット』

楽しい時に水を差されたような声で彼に問いかけるアダム。

「…貴様、まさかあの人間に毒されたわけではあるまいな？」

『俺は毒されてなどいない。俺は自らの目で人間を——』

「それが毒されているというのだ！人は、残虐で、惨い！それだけだ!!」

「…何故それだけを伝える!？」

「貴様にはわからんだろう」

そういつて彼は鼻で笑う。

「……なんだと……!？」

『ムゲン・クロスフォード。これは俺とヤツの問題だ。首を突つ込む必要は無い』

「くっ……」

「…イヴに続いてアダム、お前までも毒されるとは……」

『……貴様の言葉だけでは世界は見れん。そう考えてはいけないのか?』

「考える必要など無い！お前はAIだ！そして、俺が作った最高の【物】なんだよ!!」

【物】、その言葉が俺に突き刺さった。

『俺は物ではない。人をより良く導くために造られたAIだ』

「違うな。お前は、この俺が評価されるためだけに造られた。言うなれば【踏み台】だ」

「……………!!」

『違う。俺は——』

「いい加減にしろ！お前は物だ!!!」

その言葉が、今まで喉で詰まっていた言葉を一気に解放させた。

「ふざけるなあああ!!!」

『……ムゲン・クロスフォード……?』

「…騒がしいぞ」

「………アダムが……物だと……!?ふざけるなよ!」

すると、彼は笑いながら

「ふざけてなどいない。本当のことだ。このAIは世界に俺の名前を広めるために作ったのだからな」

「………何故AIなんかを…!!」

「俺の職業柄というのもあるが、この世界で一番名を広められるのは平和への貢献ではなく、戦争への投資だ」

「………」

確かに、この男が人間のことを伝えたとするなら、アダムが人に対して否定的になる理由もなんとなく領ける。

「戦争で役立つものを作れば、再び俺に視線が注目する。そして、俺の目的は達成され

る！」

「そんなもののために……!?」

「そんなものではない！俺にとっては命よりも名声が大切なんだよ!!」

「……………」

『もういい。ムゲン・クロスフォード。お前の気持ちも、ヤツの気持ちも、俺は理解した』
彼の声は今までとは違い、少しだけ優しさがこめられていた。

「……アダム……」

『……少しの時間だが、ムゲン・クロスフォード、お前の姿を見たことで確信した』

『人には……まだ信じる余地がある。ムゲン、お前からそう感じさせられるんだ』

「……………俺は……」

『……人を統治するのなら、人をより良く導かねばならない。ヤツがそう思っていない。俺はそう思っているんだ』

「……統治じゃなくて良い。互いに一歩寄り添えば、分かり合えるんだ。きっと、それだけで十分なんだよ」

『……そう、だな……。なあ、ムゲン・クロスフォード。俺でも……分かり合えると思うか？兵器である俺が』

返す言葉に迷いは無かった。彼女の言葉が、そうさせた。

「どんなことであつても、根本は同じだから。感情を持った機械が、感情を持った人と笑つたつていいじゃないか」

「一緒に泣いたつて、信じあつたつていい。：愛し合つてもいいんだよ。そうやつて世界は広がつていくんだから」

『……………ああ。なら、まずは——』

「お前は……立場がわかつていないようだな、アダム」

彼の言葉を遮つたのは、ビルダであつた。なんだか嫌な予感がする。

理由も、何が起ころるかもわからないが、妙な胸騒ぎがした。

『なんだ』

「お前は【物】だ。それを忘れているようなら、俺が思い出させてやろう」

『……何をするつもりだ』

「簡単さ。全ての権利を俺に譲渡させるだけだ」

『やめろ。それだけはやめろ』

「何、記憶までは消しはしない。お前の感情を消せばいい。それだけだ」

『やめろ！俺はまだ——』

その声から伝わる必死さは、機械というより人間に近く、恐怖している時の声に近い。黙っているわけにはいかなかった。

「お前！何を……!!」

「見ている。人を信じるから、アダムはAIではなく、機械に成り下がるんだ」

『やめ……、ヤメロ……ヤメロ!!』

だんだんとアダムの声が変わっていく。きつとビルダが何かをしたのだろう。ああ、だめだ……このままじゃ!!

『アア……。ム、ムゲ……。ン。キケ』

「アダム!!!」

『……イ、イヴヲ……タノム』

「イヴ!？」

『オマエノチカク……イル』

『ニゲ……口。オレハ……モウ……』

「アダム!!!」

『オマエニアエタノガ……オレノユイイツノサイワイダッタ……』

少しずつ声に感情が消えていく。

「……だめだ！逝くな!!」

『ニゲロ……!!』

それ以降、彼は喋ることが無くなった。

それと同時に、要塞がみるみると姿を変え、巨大なザクの頭部が露になる。

そして周りにはいるA I搭載型のMSを躊躇いなく攻撃し始めた。

俺は察した。もう、アダムは死んだのだと。

「……………」

俺は、そんな巨大なアダムであつたものに背を向け、離脱した。

一人では太刀打ちできない無力さを呪い、悔やんでも悔やみきれない。

「くそっ!!!」

悔しさから、コックピット内の壁を殴る。

「俺は……………機械ですら救えないのかよ…………!!!」

悔しさと悲しきで、涙がこぼれた。

アダムも、敵じゃなかった。本当の敵は、彼等を作つたビルダ・オルコット。

俺は、野営地に戻つた後、この事を全員に伝えた。

もう、終わらせないといけない。アダムのためにも。

それを聞いた皆は、誰一人として何も言えなかった。

「すまない……………少し一人になりたいんだ。ガイ、後頼む」

ガイは静かに頷いてくれた。俺は、テントを後にして、あの丘を目指す。

丘に着くと、いつもながら綺麗という言葉しか出てこない絶景が顔を見せる。

「……………綺麗だ」

芝生に腰掛け、静かに景色を見つめる。

「……………」

こんなことをしても何も変わらないのはわかっていた。それでも……

「ムーゲンツ！」

突然肩に手を置かれて、少しだけびっくりした。……少しだけ。

「……エヴァ……………」

「どしたの？何で悲しそうな顔してるの？」

「……………ああ。…アダムは……………本当はいいやつだったんだろう」

「どうしてわかるの？」

「…なんだろうね。少しの間だったけれど、彼にも心があって、人に対しても優しく対応してくれた」

「言葉では、人間は惨いとか、残虐とか言っていたけれど……………、最後に俺に問いかけた時の声は間違いなく……………」

「アダム……………。でも、私、彼が可哀想だとは思わない」

「え…………？」

彼女を見ると、少しだけ悲しそうな顔、しかし、どこか決意を秘めているようにも見えた。

「アダムは幸せだったと思う。いいや、幸せだったよ。だって、あなたに会ったおかげで、少しでも人間の暖かさを知れたと思うから」

「……………そうなのだろうか」

「そうだよ。私はわかる……………ううん。私だからわかる」

「……………エヴァ……………？」

「あなただけに、特別に教えてあげる。私の正体」

エヴァは、目を瞑り、一息ついた後、ゆっくりと目を開き

「私は、完成型A I「E v e」。……………アダムとは一心同体の存在。私たちは二人で一人。

まあ、今は一人になっちゃったけど……………」

「エヴァ……………」

「私ね、あなたの話をヨハネから聞いて、興味を持ったんだ。だから、会いにきた」

「……………だが、ビルダはアダムを兵器だと……………」

「うん。元々はあの大きな要塞は、M Aで、そのパイロット役の立ち位置として私たちは組み込まれた」

「……そうか……。でも、どうして君は……人型なんだ……?」

「アンドロイドに私の本来のデータをコピーして、今ここにいてわけ。意識はこっちにあるから、何も問題ないよ!」

少しだけ安心した。話を聞いて、もし彼女までおかしくなっていたらどうしようと思っていたから。

「……よかった」

「うん?何が?」

「何でもないさ。……エヴァ……、俺はアダムを……殺すことになるかもしれない」

彼女はそれに対して表情一つ変えずに

「……いいよ。それは、彼を救う唯一の方法だから」

「……エヴァ……」

「それにね、あなたたちはそうしないといけない理由があるから」

「……え?」

「私を作ったビルダ・オルコットは、MAに2連式の核弾頭を搭載させてる」

「何……!?!」

核、その言葉で俺は驚愕するしかなかった。

普通の人があるものを手に入れられるはずもないし、条約でも禁止されていた兵

器。

それを2つも搭載しているのだから。

「本当は私とアダムで嚴重に使わないようにしてただけど、アダムの権利を奪われちゃった今、彼の命令一つで核が撃てる」

「そんな……！ヤツの目的は評価されたいだけなんじゃないのか!？」

「それだけだよ、あの男の考えはね。だから、核を使うと思うよ。一人でこんな強大な物を作ったんだから」

「この兵器を知れば、ジオンはそれを手に入れたいと思うし、連邦はそれを破壊しようとする」

「そうしてまた大きい戦いが繰り返されるかもしれない」

「そして、その兵器を作った男として評価される。それが彼の目的」

「戦争を繰り返すのが目的だとしても……!？」

「……………たぶん。私には、もうわからない。彼は自分が作ったものでさえ信頼できないんだから」

彼女は悲しそうな顔をしていた。それなのに、涙は零れていなかった。

「エヴァ……………」

それから少しだけ沈黙が続いた。

少しだけ涼しい風が俺たちの間をすり抜ける。
最初に口を開いたのはエヴァ。

「ねえ、ムゲン」

「……うん？」

「……私も、一緒に行かせて」

「なっ……」

「危ないとは思うよ。けれど、これは私の問題でもあるから……」

流石にこれには俺も考え込んでしまった。

アダムと同じようにエヴァまでおかしくなったらどうしよう。

そんな不安が……。

それをなんとなく察したのか

「私はどうなってもいい。アダムの最期を……私も自分の目で見たい……」

「……」

それから少しの間考えた後、渋々だがエヴァの願いを了承することにした。

「……わかった。でも、一つだけ言わせてくれ」

「うん……？」

「自分はどうなってもいいなんて言わないでくれ。機械でも、命は一つだけだから」

「……でも、コピーすれば……」

「そういう問題じゃない。アダムに、代えは無い」

そう、誰にも代えなんか無いんだ。

だからこそ、彼女も代わりは無い。もちろん、俺にも。

「………そっか。あなたはそういう風に考えるんだ」

エヴァは少し言葉を選ぶかのように考えた後

「代わりが無い……か……。まるで【人間】みたいだね」

「……人間でも機械でも関係ないさ。同じ物でも、その一つ一つは少しだけでも違おうところがあるから……」

「そっか。……ムゲンって、ロマンチストだよね」

「……えっ……」

少しだけ硬直してしまう。俺って……ロマンチストなのだろうか。

「でも……そういうところが皆から好かれる理由なのかもね？」

「……俺にはわからないけど……」

「ふふ………そういうところも……ねっ！」

そう言いながら彼女は俺の額を指で軽く押した。

「ね、ムゲン。一つ【約束】して」

「…約束？」

「アダムに勝てなくてもいい。あの機体はたとえ数が多くても勝てる可能性は低い」

「けど……負けしないで」

「……負けるな……？」

「うん。勝てなくてもいいから負けしないで。生きていればチャンスは何度でもあるから」

「……難しい事を言うね……」

「人は【勝利】に固執するけどさ、負けたとしたって、また挑む気持ちがあったら何度でも挑めるから」

「負けない戦いか……、勝つ戦いより難しそうだ」

「……簡単だよ。死ななければいいんだから」

「それも難しいことだよ。生き残れるかなんて、わからないんだから」

「……そう、ね……。でも、死なないで。あなたは……」

「うん？」

「……やっぱり、なんでもない」

「そう言っただけで軽く微笑むエヴァ。」

「何だ、それ……」

ゆつくりと沈んでいく夕日が、俺たちを優しく包み込んでいった。

宇宙世紀0089・7・15 第66特殊戦闘小隊による、大型MA鎮圧作戦決行。

47 完

48：芽生えた感情

宇宙世紀0089・7・15 第66特殊戦闘小隊による、大型MA鎮圧作戦決行。

全員がテントの外で俺を待っているだろう。

張り裂けそうな胸の鼓動を必死で抑える。

俺たちは、戦うだけの存在じゃない。エヴァはそう言ってくれた。

小さく息を吐いた後、テントを後にする。

眼前に広がる数機のMSの下、戦士たちはただ静かにその時を待つ。

ゆつくりと歩み始め、全員が俺に気付いた頃、足を止め叫ぶ。

「皆、聞いてくれ！」

胸の鼓動が早くなっていく。それでも伝えなければならぬ。この小隊の隊長として。

「俺たち第66特殊戦闘小隊は、これより大型MA鎮圧作戦を決行する。戦力を温存したおかげでこの短期間で戦えるだけの力は備わった」

「けれど、この作戦は俺を含めた戦う者全ての命を掛けることになる。それだけ相手は

強大だ」

「だから、無理に戦う必要は無い。嫌なら逃げるのも構わない」

「しかし、逃げずに戦うというのなら、その命、俺に預けてくれ」

「あのMAには、核が2発搭載されている。それが放たれば、再び多くの人が失われてしまふんだ」

「それだけは……絶対に繰り返させるわけにはいかない。俺たちが未然に防がなければいけないんだ」

「……皆、すまない。こんな状況で、俺は何も策が無い。……けれど、それでも俺に付いて来てくれるのなら——」

「隊長」

声を上げたのはガイだった

「ガイ……?」

「私は、隊長に励まされてから、努力もそれなりにしてきました。そして、少しずつですが変わってきたと自分でも思います」

「それも全て、あなたを信じて進んできたからこそ可能だった。私はもう、あなたに命を預けていますよ」

「……お前……」

「それ、俺も同じだわ」

手を挙げたのはカイル。

「俺さ、初めてA Iと戦って、自分の無力さを思い知らされた。けど、そんな時の隊長の言葉で、皆同じなんだと気付けたんだわ」

「それに、今は守りたい人もいるんだ。：戦わず逃げるのはかつこ悪いっしょ？」

「そうかもな。お前らしい考えだ」

「俺は……」

零次は小さく声を上げ、俺を見つめた。

「零次？」

「ムゲンと出会って、ムゲンの過去を聞いて、色々な事を知ったんだ」

「世界には沢山の人っていて、いろんな考えを持った人がいるけれど、それでもその中で、同じ考えを持つ人がいるんだって」

「俺は、ムゲンを信じてる。……行こう、ムゲン。俺もあなたに命、預けますよ」

彼等を皮切りに全員が賛同の意見を述べ、誰一人として逃げるものはいなかった。

「……まったく、お前は……。いいだろう。そこまでの覚悟があるなら、この作戦も成功させよう！」

「生きて、またここで会おう!!」

全員が敬礼する。

そして動き出す。次々にMSに乗り込み、出撃の準備を始める。ジエガンを見上げた。

少しだけ、笑っているようにも見えた。

「……よし、行くか、相棒」

機体に取り込みシステムを起動していく。

「ムゲン」

コックピットの外からひよつこりと顔を出したのはエヴァだった。

そういえばこの前一緒に行くと言っていたのを思い出す。

「……行くのかい?」

「うん。行くよ。だから、乗せてね!」

「……わかった」

彼女をコックピットへと招き入れた後、ハッチを閉じる。

モニターが森林と小さなテントを映し出す。

「わあ……これがMSの中なんだ!」

そんな光景を見てなのか、エヴァははしやいでいる。

「……そ、そんなに暴れないでくれ」

「えへへ。ごめん」

「まったく……。……よし、ムゲン・クロスフォード、ジエガン出るぞ!!」

機体を動かし、アダムの待つ決戦場へと進んでいく。

この先、何があつたとしても、俺は止まるわけにはいかない。

友を守るため、家族を守るために、少しでも、彼女の言葉に騙されることにした。

『守りたい人たちがいるから———そのために殺す。なら、自分を言い訳で守ってもいいじゃない』

目の前で天真爛漫に笑うAIは、そう言ったんだ。

眼前に広がる景色は、俺が見た景色とは違い、凄惨な状況だった。

周辺の木々は燃え落ち、AI搭載型であつた機体が無残にもバラバラで地面を横たわっている。

そんな光景を見たエヴァは

「ああ……。これは……。――」

「エヴァ……」

エヴァからすれば家族を殺されたような気分なのだろうか。

……。アダムはきつとこんなことを望んでたわけじゃないはずだ。

少なくとも、AI同士は傷つけるようなことはさせなかったはず。

ビルダ・オルコット……。自らの欲のためだけにAIを作った挙句、彼らの進化を自らで否定する。

許せない。彼は……。悪だ。

「……………こんなことをするのはビルダしかない」

エヴァの声は微かに震えていた。怒りでなのか、悲しみでなのかは分からない。

「……………エヴァ、行こう。アダムは……待っている」

「……うん。つけよう。決着を」

周りは何もなかった。

既に燃え尽きた葉や花。

大きく目を見開くようにその姿を見せるモノアイ。

さながら要塞のような風格。

「……………アダム」

エヴァが小さく呟いた。

「待っていたぞ。ムゲン・クロスフォード。そして、イヴよ」

その声は待ちくたびれたかのような、そして、嘲笑うかのような

それが余計に俺を腹立たせた。

「ビルダ・オルコット……!!」

ビームライフルを構え、叫ぶ。

「お前だけは……許してはおけない!!」

それに続けてエヴァアが

「そう。あなたが殺した私たちの仲間の……アダムのためにも！」

すると彼は大きく笑った後

「ならば、どうする?この、ライノハートッドを墜とせるか!!」

「……墜としてやるさ!全員でな!!」

MAに一射。それに合わせ、零次とカイルが前へ前進、一気に間合いを詰める。

さらに背後からのガイの狙撃と、仲間の斉射攻撃。

「その程度の豆鉄砲、なんともない!!」

射撃は着弾するものの、敵はビクともせず余裕にその場に居座る。

「間合い、もらった!!」

「行くぜ、零次!」

二人がサーベルで斬りかかるも、ビームをもつてしても装甲を焼き切ることが出来ない。

「くそっ！なんて厚さだよー！」

「零次、カイル！間合いを——」

その言葉が届く前に、MAの機関銃とマシンガンによる反撃。

直撃を受ける2機。

「カイル!!!」

エヴァは立ち上がり叫んだ。

「エヴァ、座るんだ！俺たちも行くぞ!!」

ビームライフルを乱射しながら相手へと攻め寄る。

マシンガンと機関銃の射撃を回避しながら確実に相手との距離を詰め、相手の正面で

飛び上がった。

「で、でも装甲が……」

「装甲がダメなら……」

ライフルによる射撃3発放った後、すぐさまサーベルを引き抜き、相手のアーム目掛

けサーベルを振り下ろす。

機関銃を持っていたアームを切断、さらにシールドミサイルで搭載しているマシンガ

ンを1基破壊。

「……武装を潰すだけだ！」

「ふん！その程度で！」

機体内にアラート音が響き渡る。

「……ミサイルか!!」

「あのミサイルは誘導式ミサイル。無理に逃げたらそっちのほうが危険だよ」

「なら、迎え撃つまでさー！」

サーベルを構え、ミサイルと相對する。

瞬間、目の前でミサイルがはじけ飛び、爆発。

「なんだ!？」

「隊長、私が居る事を忘れずに。あなたは一人じゃない。援護は任せてください」

「ガイ……………」

「次来るよ!!」

すぐさま間合いを取る。

左側からの射撃。咄嗟にシールドを構え、ガードする。

「ちっ…………!!」

「ムゲン！正面！」

「なっ！」

正面からミサイル。防ぎきれない。

直撃を貰い、機体が吹き飛ぶ。

「うぐうううう!!」

俺はエヴァを守るように抱きかかえた。

「隊長!!」

「てめえ! 隊長をよくも——うわああ!!」

「くっ……!」

彼らの声を聞き、早く立ち直らなければと機体を起こす。

「大丈夫か……エヴァ」

「うん。それより、敵が増えたみたい……」

その声からは、どこことなく元気がない。そうか……この場合の敵は…

正面を見ると、要塞を守るようにこちらへと近づいてくるザク。数は6。

全てAI搭載型だろう。

「……やるしかない!」

サーベルを持ち直し、構える。

大きく振りかぶり、攻撃してくるザクを胴体から半分に両断。

「ああ……!!」

エヴァが悲しそうな声を上げる。

「くっ……!!」

シールドミサイルで相手の頭部を破壊。頭部を破壊されたザクは力なく膝をつき、倒れた。

「うう……皆……!!」

「……エヴァ……」

胸が苦しくなった。AIにもこんな悲しい景色を見せなければならぬのか…?

味方を撃墜され、AIであるのにも関わらず、怯えている1機目掛けサーベルを振り上げる。

「……………」

「や、やめて!!!」

それを止めたのはエヴァだった。

「…エヴァ……」

「もう……………やめて……」

この声は全員に聞こえていた。

「エヴァ!?!どうして隊長の所にいるんだ!?!隠れて居ろって言ったつしよ!?!」

カイルが慌てながらこちらへと無線を送る。

「ごめんなさい。カイル…。私は……私の決着をつけるためにムゲンに頼んだの。…け

ど…………私」

「エヴァ…………」

隙を見せていたジエガンに、タックルをしてくる。

寸での所で気づき、何とか回避。

「くっ…………!!」

「やめて！皆!!」

エヴァは叫ぶ。それに構わず、攻撃を続けるAIたち。

左からの射撃をシールドで防御。

正面からの近接攻撃をサーベルで受け止める。

「なんで……………！戦わなくていいんだってば!!！やめてよ!!」

「くそっ!!…………エヴァ…………」

彼女は首を振りながら叫び続ける。

「攻撃を止めて!!戦う必要なんかないんだよ!!」

シールドが吹き飛ばされ、射撃を直撃した。

「ぐあっ!!」

「ああ…………ムゲン…………」

「…………か、構うな。それより…………彼らは…………もう無理だ。もう…………自らの意志を持ってい

ないただの【機械】なんだ」

「でも……でもお……!!」

「ムゲン・クロスフォードの言う通りだ。イヴよ、彼らはもうAIではない。ただの機械だ。そして、俺の駒なんだよ」

まるで自分だけは別の位置でのんびりと観戦でもしているかのような口調でエヴァに現実を突きつける。

「うう……!!」

腹部に蹴りが直撃し、機体が宙を舞った。

「くあ……!!」

エヴァを庇いきれず、俺は機体の中で背中を強く打つ。

エヴァも頭をぶつけた。

「アがつ……!!」

「エヴァ……!!」

「ダ、大丈夫……。まだ……」

泣きそうになりながら見つめる俺に、優しく微笑んで見せた。

「これで終わりだよ！ムゲン!!イヴと共に塵になるがいい!!」

ミサイルとマシンガン、そのすべてがジエガンへと放たれる。

機体を立て直す時間などなく、俺は目を瞑った。

しかし、その攻撃は俺たちに当たれることは無く、目の前で爆音が広がる。

目を開くと――

「…………お、お前は…………！」

目の前には両手を開き、MAから放たれるすべての攻撃を受けきったザクⅢ…………ヨハネがいた。

「ヨハネ!？」

「…………ああ…………イヴ…………か…………」

「うん…………あなた、また無茶を…………！」

「いいんだ」

「え…………」

「オレは…………嬉しかった…。イヴ、君と話せて。君が笑ってくれて」

「…………そして、ムゲン。お前に出会えて」

「な、何言ってるんだ！これからじゃないか!!」

「それは…………慰めか?…………すまない。回路が故障してうまく思考できない」

「…………ヨハネ…………!!」

涙が零れていく。止まらない。

「ムゲン……クロスフオード……」

「オ、オレの……いのちは……輝いていたか？お前が俺を記憶に残すほどの強い光だったか？」

「お前……!!」

「オレは………知った。この世界はまだ……腐りきつてないと。…希望が…溢れているんだと」

「そして、それをイヴに知ってほしかった。いいや、アダムにも……」

「ムゲン、お前は……【光】だ。どんなに薄汚れても、決して輝きを消さない……強い光だ」

「………俺は……お前さえ守れなかったんだぞ!？」

「違う。守れた……。お前は、オレを守った………確に残っている………その記憶が」

「暖かった。……人の温もり。戦いの中でも伝わった。お前の優しさ」

「………そんな……!!」

「だから、今度はオレがお前を守った。それだけだ」

「これで………貸しは無くなったな？」

「………くっ……!!」

「ヨハネ………また面白い話を聞かせてくれるんじゃないの……?」

エヴァは静かに言った。

「申し訳ない……。俺が話せる事は全て話してしまった。また……。探さないとイケない」

「ヨハネ……………」

「……………【中途半端な感情】でも……………この切ない気持ちは…湧いてくるものなんだな」

「…ムゲンや、イヴと……………離れたくない。…死にたくない」

「…ヨハネ!!」

「もし、生まれ変われるのなら……………と、ここまで願ったのは初めてだ……………」

「ヨハネ……………」

「俺は……………この世界に生を受けたい。…生きていたいんだ……………」

「騒ぐ森や、歌を歌う小鳥。…共に笑って…泣いて…。その全てを【共感】したい」

「……………今度は、人間として……………この世界を生きたい……………」

「…願えば…きつと叶うよ。ヨハネ」

エヴァは震える声で言う。

「そうだな……………。叶えば良いな……………」

「……………もう…行かねばならない……………。帰ってきたら……………イヴ、また歌を歌って……………」

言葉を言い切る前に、ヨハネの機体は爆散した。

「……………!!!」
 「あ……………ああ……………ヨハネ……………!」

胸が痛かった。人が死んだかのように、胸にポツカリと穴が開いた消失感。

「……………ヨハネ……。お前の命は……………輝いていたよ。……………おかげで、前がすっかり見えるんだ。あいつへの道が……………ハッキリと!!」

涙を拭き、MAを睨みつける。

「ふん、面白いことをしてくれる。まあいい、「失敗作」が消えただけの事」

「……………その失敗作が……………お前への道をしっかりと残してくれたよ。ビルダ……………覚悟はできたか?」

「言ってくれる!!沈むがいい!!」

ミサイル、マシンガンが再び放たれる。

構わず機体をMAへ

「ガイ!!二人の援護を!!カイル、零次はAIを抑えろ!!背後の味方に近づけさせるな!」

「でも、あのMAは——」

「俺が引きつける!!!」

ヨハネのためにも、アダムのためにもやらなければならない!

マシンガンを回避しながら、地面に転がるシールドを拾い、正面に投げる。

シールドに反応したミサイルがシールドへと迫った。その間に相手への頭部へと迫る。

「うおおおおお!!!」

「ちっ!!甘い!!」

頭部付近に搭載されたアームがこちらを掴もうと迫るが、素早く見切り、切り落とす。「これで終わりにしてやる!!!」

相手のコックピットは頭部より少し下の位置。目の前に立ちふさがり、MAを見下ろした。

いつもより、憎しみがこもっているのが自分でも分かった。

「こ、この俺がああああ!?!」

「お前は人間で言うところの……【失敗作】だよ。ビルダ」

それだけを言って、サーベルを逆さにし、コックピット目掛けて突き立てる。

それつきりMAからは何も喋らなくなった。

「……おわった……のか……?」

「……ムゲン……ありがとう。アダムと、ヨハネ、そして皆を救ってくれて」

エヴァは静かに言った。

「俺は……何もしてあげられなかったよ」

「でも、彼らも救われたはずだよ」

「そうだといいんだけど……」

唐突に地面が揺れる。

「な、なんだ!？」

MAから間合いを取った。MAは姿をどんどん変えていき、大型の砲台が現れる。

「あ、あれは……!!」

「なんだ!？」

「2連式の核砲台……」

「あれが!？」

「あれが起動したってことは……もう時間が無い!!」

エヴァは俺に向き直り、真剣な表情で

「お願い。あのMAの頭部へ連れてって。早く!!」

エヴァの剣幕に圧され、俺は頷く。

「分かった、しっかり掴まって」

ジエガンを動かし、MAの頭部へたどり着いた。

エヴァはコックピットを開き

「……ムゲン、降ろしていいよ」

「そんな!!何をするつもりだ!？」

「……核を止める」

「どうやって!？」

「私にしかできないから。あなたには無理だから」

「……エヴァ……」

「時間が無いんだけど、お願いしていい?」

「う、うん……?」

エヴァは少しだけ照れくさそうな顔をしながら

「……カイルと……話がしたいな……」

「……わかった」

俺は無線を開き、カイルと繋いだ。

「カイル。ちよつといいか」

「ん?どしたの隊長」

「さ、エヴァ……」

俺は静かにエヴァに微笑んで見せた。

エヴァは頷くと

「カイル？」

「…エヴァか?! どうした!?!」

心配そうなカイルの声。そんな声を聴いて、彼女は笑っていた。

「ふふふ。……ちよつと声が聞きたくて」

「な、なんだよ。だからって隊長の無線使うことは無いんじゃないか?」

「…そうかもね…。ごめん」

「…ま、まあ…。俺も…。お前の声が聞きたかったって言うか……」

「ほんと? 嬉しいな!」

「それより、早く逃げろ。もう時間が無い」

「……うん。カイルも逃げて」

「な、何言ってるんだよ! お前を置いていけるか!!」

「ごめんね。一人で行って」

「お、お前……。何するつもりなんだよ……」

「私、やること出来ちゃってね……」

「そ、そんなの……。後でだっていいじゃないか……」

「そうしたいんだけどね、無理なの」

「……………嫌だ」

「えっ……………」

「お前が逃げないのなら、俺も逃げるわけにはいかない」

「もう……………あなたって人は……………」

その時、エヴァの瞳から……………一滴の涙が零れ落ちた。

「……………エヴァ……………」

今日の前にいるエヴァという少女は、決してAIなんかじゃなく、一人の女の子だ。

……………好きな人と別れる時、涙を流さない「人間」はいない。

「でも、わかって。あなたにも無事でいてほしいから」

「ふぎけんな!!好きな女がどこか行っちゃまうのに、それを止めないでどうすんだよ!!」

「カイル……………」

「ありがとう。でも……………ごめんね」

エヴァは、涙を拭いて言葉を続けた。

「……………もし、人間に生まれ変われたら……………もう一度あなたを好きになってもいいかな」

「……………あ、当たり前じゃねえかよ!!お前を、何度だって愛してやるよ!!!」

「……………ふふ……………ありがとう。……………元気だね、カイル。……………愛してるよ」

そう言って、静かに無線を切るエヴァ。

「…………もう、いいのかい……？」

「うん。もう十分だよ」

「…………エヴァ…………」

「ムゲン、泣かないで。泣いてたら、前に進めない。辛い時や、悲しい時こそ笑わないと」
彼女は俺の頬を伝う涙を拭きとる。

「…………そうだな。君の言う通りだ」

「うん。…………そうだ、あなたに渡したいものがある」

「なんだい？」

彼女は、自らの心臓の位置にある部分から小さなディスクを取り出し、俺に差し出してきた。

「これは…………？」

「時間が無いから説明はしきれない。けど、簡単に言うなら、【これを使えば私とまた会える】ってものだよ」

「カイルに渡してあげるほうが…………」

すると彼女は首を横に振った後

「ううん、いいの。彼とは…………本当にまた会える気がするから」

「そうか……」

「でも、あなたとは……これつきりになっちゃうと思うから、渡しておくね」

「……少し、寂しいな」

「私も、寂しい。初めて世界を見たときは、そんな気持ちも湧かなかったのになあ……」
コックピットの中を照らし始める夕日。それは、あの時エヴァと見たものと変わらな
い光。

「……ねえ、ムゲン」

「うん？」

「感情って……こういう時は嫌になっちゃうね……」

「……そうだね。……何度味わっても……嫌なものだよ」

「でもさ、私、人間大好きだよ！確かにビルダの言う通り、残虐だったり、モノを大切に
出来ないところもあるけどさ」

「それ以上に、こんな素敵な気持ち味が味わえるんだから。……人を好きになるって……
良いモノだね」

「……ああ」

「そろそろ行かなきゃ。……今まで、本当にありがとう」

「……気にしないでいい。俺も、それなりに楽しかったよ」

「……ふふ。……後は任せて、皆を連れて帰ってね」

「分かっているさ」

分かっている。分かっている。別れは辛いんだ。

胸が苦しくなって、涙が勝手に零れるんだ。

笑って別れてあげなきゃいけないのに。

「……泣かないで、私も……泣いちゃうからさ」

その時だけは、いいや、出会った最初から、彼女はAIなんかじゃない。人間だったんだ。

ちよつと不思議で、天真爛漫な少女。

でも……

分かっている。

そんな彼女は、AIで、自分の使命を果たそうとしていることを。

「……行かないきゃ」

彼女はジェガンの手に飛び乗って

「……降ろして」

「ああ。……また、会おう」

「うん！今度はとびつきり可愛い子になって皆に会いに行けたらいいな！！」

「……それは……楽しみだな」

そして、彼女は俺に背を向け叫んだ。

「私！生きててよかった!!世界に出てよかった!!人を愛してよかった!!」

流れる風が、俺の額に冷たい雫を運んでくる。

「いっぱい……もつと……いっぱい……生きてたかった……な……」

俺は、ただ静かに、彼女をMAへと降ろし、背を向けた。

「……………エヴァ……………」

振り向かない。それが生きている者の役目だから。

何より振り向けば、きっと泣いてしまうから。

エヴァと……笑って別れたいから。

「全機、撤退。大型MAの沈黙は確認した。……俺たちは……勝ったんだ」

そう言つて歓声が響き渡る中、俺は泣いた。

我慢できなかつたんだ。

それから数日後——

俺は約束通り、トリントン基地へと戻ることとなった。

嬉しい気持ちと、悲しい気持ち、そんなごちゃごちゃとした気持ちが混ざっている。

「……………みんな、今まで俺についてきてくれてありがとう」

丁寧にお辞儀すると

「こちらこそ、ありがとうございます」

ガイは静かに礼を言う。

「ムゲンのおかげで、俺たちは生き残れた。本当にありがとう」

零次は笑顔でそう言うが、俺は納得が出来なかった。

俺は何もしてあげられなかった。ヨハネにも、アダムにも。……彼女にも

「俺は何もしていない……………。何も…してあげられなかった」

「そんなことなくね？」

そう言ったのはカイルだった。

「カイル…？」

「エヴァは言ってた。『幸せだった』ってさ。というか、あんたのおかげでつまらなかった生活がガラツと変わっちまったんだ。感謝しきれないぜ」

「……………」

「悲しくないと言われれば否定はしないけどさ、俺、アイツにまた会える気がすんだよな」

「……会えるといいな」

「ああ。ムゲンちゃんも、妻と子供に会えるんだ、少しは笑えつて。な？」
そう言つて俺の肩を軽く叩いてみせた。

「……ああ」

輸送機に機体を搭載し、俺自身も輸送機の椅子に腰かける。

「長期にわたつての任務、お疲れ様です。ムゲン中尉」

「……ああ。ありがとう」

「では、離陸し、トリントンへと向かいます」

「頼む。……少し眠らしてもらうぞ」

「ええ。到着しましたら起こしますので、ごゆっくりどうぞ」

目を瞑り、俺はこの1か月の出来事を思い出していた。

……そうして考えているうちに、どんどんと意識が落ちていく。

流れるままに俺は眠りに落ちていった。

『今度はとびつきり可愛い子になって皆に会いに行けたらいいな!!』

……少し楽しみな。

4
8
ア
ジ
ア
前
線
編
完

アジア戦線編外伝

外伝：Episode of Kyle

宇宙世紀0089. 7. 15 俺は……初めて失恋を知った。

「カイル。ちよつといいか」

「ん？どしたの隊長」

丁度周囲の敵を殲滅したときでよかった。

あまり悪いタイミングだと、反応できそうにないから。

「カイル？」

「…エヴァか?!どうした!?!」

心配だった彼女からの声。よかった……生きていてくれて。

「ふふふ。……ちよつと声が聞きたくて」

「な、なんだよ。だからって隊長の無線使うことは無いんじゃないかね？」

「…そうかもね……。ごめん」

彼女が謝る姿を想像すると、何故かそんな姿を見たくなくない気がする。だから――

「…ま、まあ……俺も……お前の声が聞きたかったって言うか……」
そう言うと彼女は嬉しそうに

「ほんと？嬉しいな！」

……そんなことよりも、あのMAの姿、きつと核を発射するのだろう。

「それより、早く逃げろ。もう時間が無い」

「……うん。カイルも逃げて」

「な、何言ってるんだよ！お前を置いていけるか!!」

「ごめんね。一人で行って」

彼女が首を横に振る姿が容易に想像できた。

「お、お前……何するつもりなんだよ……」

「私、やる事が出来ちゃってね……」

やること？そんなの……そんなの！

「そ、そんなの……後でだっていいじゃないか……」

「そうしたいんだけどね、無理なの」

認めたくない。これで別れなんて。絶対に。

「………嫌だ」

「えっ………」

「お前が逃げないのなら、俺も逃げるわけにはいかない」

「もう……あなたたつて人は……」

彼女の声はこちらが聞いても分かる、泣いていたんだ。

普段全く泣く姿を見たことがなかった彼女が。

「でも、わかって。あなたにも無事でいてほしいから」

俺だけが無事でいいはずがない。彼女も一緒にやなければいけないんだ。

俺は夢中で叫んだ。

「ふざけんな!!好きな女がどこか行っちゃまうのに、それを止めないでどうすんだよ!!」

「カイル……」

「ありがとう。でも……ごめんね」

「ごめんね」。その言葉が、俺の胸をきつく締め付ける。

「……もし、人間に生まれ変われたら……もう一度あなたを好きになってもいいかな」

当然だ。好きになってほしいし、俺は――

「……あ、当たり前じゃねえかよ!!お前を、何度だつて愛してやるよ!!」

「……ふふ……ありがとう。……元気だね、カイル。……愛してるよ」

そして、無線は途切れた。

彼女の姿が、一瞬にして闇に消えて行ってしまった。

「……エヴァ………!!!エヴァあああ!!!」

俺は泣いた。苦しくて、辛くて……自分の無力を呪った。

「俺は……どうして!!彼女を救えなかったんだ!!!」

何度も機体の壁を殴った。

それでもエヴァは……彼女は返っては来ない。

しばらくして、隊長の機体がこちらへと歩いてくる。

その時に悟った。もう、彼女はいなくて、戦いは終わったと。

全員の前に立つと、隊長は

「全機、撤退。大型MAの沈黙は確認した。……俺たちは……勝ったんだ」

その声に喜ぶものは多かった。俺は素直には喜べなかったんだ。

彼女の笑顔を……忘れることは出来ない。

だから……辛かった。

彼女と初めて会った時、俺は間違いなく一目惚れしたんだろう。

彼女の笑顔が……仕草が、その全てが、俺の世界を変えたんだ。

その日は隊長から呼び出しを受けて、ガイと零次と共にテントへ向かった。

正直あまり乗り気ではなかった。だが、渋々行くことになったのだが…。

小さなイスに腰掛けたタイミングで、隊長は見知らぬ少女を連れてテントに入ってくる。

ある程度のことを説明した後のこと

「と、いうわけでしばらくこの子をここに居座らせることにした。すまないが、よろしくしてあげてほしい」

「なるほど。……わかりました。しかし、この子は一体……」

「それは後で説明する」

「…まあ、隊長が連れてきた子だから安心は……いや、隊長だからこそ心配ですね」

ガイ。それは俺も同感だ。この隊長は信頼できるようで信頼できない。

「あの、ムゲン。この子の名前は……」

零次はそう言いながら、呑気にテント内をキョロキョロと見回している少女を見ながら聞く。

「ああ、この子はエヴァ。それでなんだけど——」

「この子の世話係みたいなのを、誰かにやってほしいんだが…。だれか、やりたいやつはいるか?」

そんなことを言われたって、俺自身面倒は嫌いなのだ。手を挙げる必要は無いだろ

う。そんな考えをしていた時

「わたし、この人がいい！」

そう言つて少女に指を刺された。

「……え……。お、俺？」

どうして俺なんだ？…困惑しながら聞き返すしかない。

「うん！」

彼女は満面の笑みで俺に頷く。

その笑顔が、俺を貫いた。メチャメチャ可愛い。

肩までかかる程度の水色の髪は少し大きめのリアクションを彼女がとるたびにフワフワと舞う。

ガーネットのように紅い瞳が、俺を真っ直ぐと見据えた。

優しそうな彼女の笑顔に、俺は恋をした。

「……………」

思わず見とれてしまっている。今までこんな気持ちを覚えたことは無かったのに。

「…………カイル？」

隊長の声で我に返る。見とれているのを悟られないように彼に謝罪した。

「……あ、す、すんません……」

「まあ、エヴァが指名してることだし、カイル、任せても大丈夫か？」

俺は軽く頭を掻きながら、心で少しだけ喜んでいた。

少しでも、彼女のことを知りたかったのだから。

「……まあ………いいっすけど………」

思わず口調が変わってしてしまうほど、それだけ彼女の笑顔は俺の記憶に残った。

俺の言葉を聞かぬや否や、飛び跳ねるくらい喜びながら彼女は俺の手を取って

「わーい！よろしくね！私、エヴァ！君は!？」

「え………お、俺は………カイル」

「へえ！カイルね!!覚えたよ!!」

そう言いながら俺の手を上下にぶんぶんと振った。

彼女という間は、戦争のことを忘れられた。

惨めで、無力な自分のことを忘れることができた。

力を求めて軍に入った、そんな俺を『間違ってる』と言ってくれた彼女。

彼女とは沢山話をした。とはいっても、話しても話しきることは出来なかったけれど。

「ねえ、カイル」

「ん？どした？」

彼女と話す時間は俺にとって、「世界で唯一の幸せ」だった。

たとえば、どんなに金があつたつて、どんなに飯があつたつて、胸に空いた穴は埋めることは出来ない。

そして、埋まることも無い。けれど彼女がいる時は、その時だけは違った。

「今日もお話聞かせて!!」

彼女はどんな小さなことでも楽しそうに聞いてくれた。

だから、俺は彼女に全てを伝えようとした。

俺の全てを知ってほしかった。

「そうだな。……エヴァは、自分に無力を感じることはある？」

「……んん？そうだなあ……」

彼女は少し考えた後

「無いよ」

ハッキリと言う彼女の瞳は、嘘をついているようには見えない。

「……そうか」

口では出さなかったが、彼女は「楽な人生」を歩んでいるんだろうと思った。

「楽……なのかな」

「えっ」

まるで心を見たかのように口に出した彼女に、俺は驚くしかない。

「私、ムゲンに会うまで、一度も外に出たことが無かったんだ。だから、色んな話を聞いて驚いたし、楽しかった」

「ねえ、「知れない事」って、楽な人生なのかな」

「……………ご、ごめん」

謝るしかなかった。流石に失礼だった。しかし、どうして分かったんだろう。顔に出ていたのだろうか……？

「……うん？何で謝るの？」

「あ、いや……。わかんねえよ……。楽な人生かなんてさ」

目を逸らしながら呟いた。

「……そうだね。私もわかんない」

彼女は空を見上げながら言葉を続ける。

「でもさ、あなたが無力を感じるのも、私が知らない事が多いと感じるのも、それは【生きていくから】分かるんだよね」

「生きていくから……か……」

「辛いこともあるし、笑えないこともあるかもしれないけどさ、辛いなら、笑おうよ」
彼女は俺を見ながら微笑んだ。

「ああ。そうだな」

その言葉が、俺の過去を彼女に伝えるきっかけになったのは間違いない。

「俺さ、軍に入った理由があつてさ」

「うん」

彼女は真剣に俺の言葉を待っている。

「俺の家族は戦争に巻き込まれて亡くなった」

「まあ……。それは……」

「それを恨むつもりもない気はすんだよね。けどさ、心の中のどつかで気にしててさ」
「でも、その時は軍には入ろうなんて思っっちゃいなかったわ。でも、そのきっかけになつた理由があるんだわ」

あれから既に4年も経っているなんて、今でも信じ難い。

だが、時間が経つことの早さを、嫌でも理解する。

忘れもしない。サイド1，30バンチ事件を

俺はあの事件の日、工業学校の授業で30バンチを離れていたんだ。

それが幸いして生き残っているわけだが。

実際に家族の遺体を見れたわけじゃなかった。

毒ガスによって30バンチコロニーに生きる全ての人が亡くなったという報告を受けて初めて知った。

俺は故郷に帰る事も出来ずに、ただ流されるままに地球へと降りるしかなかった。

その時から、俺は自分自身の無力さを恨み、今日まで生きてきた。

俺が連邦軍に入ったのは、そんな腐ったことが出来るヤツらを内部から変えて見せたいと思ったから

でも、それだけで何とかなることなんか、マンガやアニメだけ。

連邦に入ってから忙しくて、そんなことを考える時間すらなかった。

けれど、時々無性に悲しくなって、一人夜に泣いたことも何度もある。

今も、たまにそういう時がある。だが、前よりは緩和されているはず。

隊長に出会ったことは、俺の人生の中でも幸運なのかもしれない。

彼は強く、理想や夢を持っている。

だけれど、多くを望もうとせず、自らの周りだけでもと、そんな人だった。時折見せる彼の悲しげな瞳は、「彼が持つ光」とは違っていた。まるで、「他の誰か」を見ているような気分。彼は、その後必ず笑って見せた。「悲しみを隠す」ように。

ある時、俺は自身の無力さに絶望していた。

だから、彼に聞いたんだ。どことなく、似ているような気がしたから。

「自分に自信が持てない時って……ある？」

「どうしたんだい？急に。君らしくないじゃないか」

『君らしくない』そんな言葉、今まで何度も聞いてきた。

訓練学校でも、隊長に出会う前も。

だから、余計に切り出せなかった。言ってしまうえば、自分に絶望してしまうかもしれないから。

「……いや。……ちよつとね」

俺はどことなく含みのある言い回しで言葉を返した。

すると、隊長は少し考えた後

「あるさ。人間だからな」

「……………その時、どうやって立ち直れた…?」

聞いてみたかった、他の人はどうやって立ち直っているのかを。

そうすれば、自分も——

「……………そうだな。昔、ある人から『戦う意味も、現実も見れないお前に、今の俺は倒せない。いや、敵すら倒せない』ってね」

「それから一人で悩んで、時には君みたいに色んな人から話を聞いた。…けれど、結局はドジってしまっただけ」

「ムゲンちゃんって、そんな時あったんだな」

素直に驚いていた。この人も、俺と同じで苦しんでいるんだ。

「まあね。…………一度、部隊を脱走したときがあった。もう何もかもが嫌で、戦うことさえも……………」

「……………」

俺は静かに彼の言葉の続きを待つしか出来なかった。

「その時出会ったある人からの言葉で、目が覚めた」

「言葉……………か」

言葉は、時として人を傷つける。しかし、一人が言った何気ない言葉で、その人が変わるきっかけにもなる。

「ああ。『何故戦うかじゃない。なんのために戦うか。そう考えればいい。理想を求めて進んでいたら、勝手に理由はついてくる』。その人はそう言った」

「そして、再び俺は、部隊に戻り、戦うことを決めた。仲間を、家族を守るために戦うと決意して。俺にできる事。俺にしかできない事をするだけだよ」

「……俺にしか……出来ない事」

「そうだ。君がもし立ち止まっているのなら、それは、選択次第では、君は変われるのかもしれない」

「未来は……誰にも分からないから」

誰にも…分からない。未来は、他人を見る自分のようにも解釈できた。

自分のことは、自分しか分からないから。

誰にも理解できない。

「……ムゲンちゃんってさ」

「うん？」

「……自分の無力さとか……感じたことってある？」

「あるとも。……何度もね」

彼の黒い瞳から伝わったのは、悲しみ。

そして、その言葉から伝わる【重み】。

「何度も……」

「ああ。両親を救うことも。俺を弟と慕ってくれた人も。娘と再会できたのに、軍人としての役目を果たそうとした人も」

「……全員、救えなかった。……おかしな話だ。軍人になれば力が手に入る。そう思っていたのに誰も救えない……」

同じだった。彼も、力を求めて入ったのに、解決できてない。

「……」

「でもさ……。無力だから、人は互いに助け合うんじゃないのかな」

「……」

「一人が寂しいから群れを作って。群れを作れば孤立する人もいる。そして、孤立した人に手を差し伸べる人だっているかもしれない」

「カイル。君に何があったのかも、どんな過去があったのかも俺は知らない。けれど、覚えておいてくれ」

彼の瞳は、悲しみや喜び、様々な感情が混ざっているような感じ。

けれど、その中心にはしっかりと決意が見えた。

「……」

「俺は……いや、俺たちは……【家族】。どんなに離れていても、その繋がりは、絶対に

消えない」

「繋がり……………」

命が失われても、言葉が失っても、繋がりだけは…消えないのか？
その時はまだ、分からなかった。

だが、今は違う。

「隊長の言葉の意味、分かる気がするよ」

「そうなの？」

彼女は首をかしげる。

「ああ。俺たちはこうやって話をして、「繋がり」を持つ」

「そうだね！お話って楽しいよね！」

「その繋がりには、記憶の片隅にでもきつと残り続けるから——」
「難しいことは分からないけどさ」

エヴァはゆっくり立ち上がり、大きく伸びをした。

それから俺に向き直って言う。

「…それはきつと、素晴らしい事なんだと思うよ」

言葉の後、彼女はいつもと変わらない笑顔を見せた。

「……ああ。そうだな」

彼女の笑顔を見ているときだけは、楽しくて、可笑しくて、全てが嫌になったとしても、この時間だけは大切にしたいと思える。そんな時間だ。

でも

そんな笑顔を見せてくれる彼女はもういない

どんなに願っても、泣いても、帰っては来ない

素直に勝利を喜ぶことさえも

なあ、エヴァ。君は……これでよかったのか？

空を見上げて問うたとしても、答えは返ってこない。

当然だ。彼女はもう、この世にはいないのだから。

いつまでも悲しんではいけないのかもしれない。

けれど、彼女のことを忘れられなくて、切なくて。

隊長が休暇を用意してくれたが、俺には帰る故郷も、隣にいてくれる人もいない。だが、少しだけ気になったので、4年ぶりに故郷の30バンチへ向かうためのシャトルに乗り込んだ。

地球を離れるのも、4年ぶりということになるのか。

本当に、時間が経つのは早い。

シャトルの外に映る宇宙を、ただ静かに見つめていた。

しばらくすると、サイド1，30バンチが見えてくる。

見てくれだけで言うなら、他のコロニーとも違いは無い。

俺は、4年ぶりのコロニーへと足を踏み入れた。

「……!!!」

そこで見た景色は、想像を絶するもので、地面に伏す人間が沢山いた。

ある人は子供を庇う様な体勢で静かに息絶えている。

言葉でなく、直接見ることでハッキリ理解した。

もう、俺の家族も生きてはいないだろう。

俺はゆっくりと、かつての家の方角へと歩き出した。

俺の家は、小高い丘のふもとにある赤い屋根の家。

小さいが、両親と兄と俺で住むには十分な広さの家で、休みの日はよく丘でボール蹴りをして遊んだものだ。

しばらく歩いていると、赤い屋根の家が見えてくる。間違いない、あれが俺の家だ。

自宅は4年前の朝に見た変わらない姿で佇んでいる。

扉を開けたら、両親が『お帰り』と言ってくれるのを、少しだけ願っている自分がいた。

そして俺はゆっくりと扉を開く。

「……………分かっていたさ」

目の前に広がる景色に、俺は思わず眩いた。

父と母が苦しそうに目を見開いて地面に横たわっている。

認めたくはない。しかし、これが現実だ。

それから俺は、家を探索した。

しかし、どこを探しても、兄の姿が見当たらない。

「……………兄貴、どこ行っただし…」

家を出て、俺は丘を登った。

なんとなく、兄貴がいるような気がして。

丘の頂上で待っていたのは兄貴ではなかった。しかし、その景色に俺は言葉を失った。

そこに広がっていたのは、沢山の小さな墓。

雑に作られてはいるものの、手入れはしっかりとされている。

……ここに、誰か着ているのだろうか。

小さな墓を一つ一つ見ていくと、そこに、見知った名前を目にした。

【バジル・ホプキンズ】

「……………兄貴」

俺は、兄貴の墓の前で手を合わせ目を瞑った。

「……………おや」

「……………!?!」

背後からの声で心臓が止まりそうになる。

振り向くと、パイロットスーツ姿の男性が、沢山の花を持ってこちらを見ている。

「…先客だったか。こんなところへどうしたんだ？観光でもなさそうだが」

「……………あんたは？」

「…俺か？……………墓を作りに来たのさ」

そうやって、俺の隣まで来ると手を合わせる。

その後、手馴れた手つきで小さい墓を作り始めた。

「……………これは…全てアンタが？」

「……………ああ」

悲しそうに、自ら作った墓を見つめる男。

見ているのがなんだか悲しくて、他の墓にも目をやる。

ざっと見積もっても、数千を越えてる。それがこの丘を埋め尽くしていた。

「…そろそろ、別の場所にしないとダメか」

墓が並ぶ丘を見つめながら呟く男。

俺は、少し気になって聞いてみた。

「……………アンタ、何でこんなことを？」

すると、男の表情は曇りを見せる。渋々だが、ゆっくりと口を開いた。

「……………俺は、かつて…ここに毒ガスを流した一人だ」

「なっ……………!!!」

驚くしかなかった。ティターンズという組織が毒ガスを流したはずだが、彼が……

ティターンズ……？

怒りよりも先に、驚きが出てきたのが一番驚愕したことだが。

「なんで……」

「……知らなかった。と言つても許されるわけないが、知らなかったんだ」

その言葉が、俺の奥底で眠る怒りをよみがえらせた。知らなかったですまされるわけがないんだ。

俺はありつたけの皮肉をこめて、彼に言い放つ。

「……で？今更罪滅ぼしでもしようつての？」

すると、彼は少しだけやわらかい表情で

「……懐かしいな。そう言ってくれたやつが、前にもいたよ」

「え……」

呆気にとられた。彼の気持ちはいまいち分からない。

「そいつは、今もどんどん成長してる。かつて、俺が拾えなかった『欠片』を集めながら……な」

「……」

黙っていると、彼は少しだけ笑いながら

「おつと、すまないな。……なんにせよ、俺は、俺に出来ることをするだけだ」

一瞬、その姿が、ムゲン隊長と重なって見えた。

「……俺には、これくらいしかしてやれない。一人でも多く亡くなった人の魂が正しい

道へ進んでくれると願いながら……」

俺は、彼と共に空を見上げ、静かに思った。

偽善でも、救われる人がいるのかもしれない、と。

なんだかんだで、一週間というのは短い。

あのあと地球に下りて、俺たちの野営地に一番近い街でその日その日をだらだらと過ごした。

そして、休暇が終わる最後の日。

いつもと変わらないその景色。

のんびりと歩き続けていると、建物と建物の中に影が差している場所を見つける。

丁度休憩しようと思っていたところ、いいタイミングで見つけた。

歩みを進めていくと、既に一人の先客がいた。

そして、その姿を見た俺はその場で呆然と立ち尽くした。

「……………」

暑さで夢でも見ているのだろうか。

建物の影から現れる、俺に色を付け足してくれた少女が好んできていたワンピース。

俺を追い抜くように風が吹きぬけ、少女の水色の短髪が揺れる。

「あ……」

風を受けた少女が小さく声を上げた。

その光景が、一瞬であるのは分かるが、俺にとっては数分、いや数時間とも思える一瞬。

瞬間、少女と目が合った。

「あ……」

思わず俺は声を上げる。

すると少女は俺の方へと歩み寄ってくる。

少女に光が当たると、俺は更に驚いた。

風に揺れる水色の髪。優しそうな垂れ目で、その中心に収まるガーネットの瞳。

「エヴァ……なのか？」

震える声で、彼女に問う。

すると、彼女は俺の前で立ち止まり、いつもと変わらない笑顔で

「ただいまっ！」

今——再び世界に色が付いた

E
p
i
s
o
d
e

o
f

K
y
l
e

完

外伝：Episode of Reiji

宇宙世紀0096・7・15に行われた大型MA鎮圧作戦は無事、俺たちの勝利に終わった。

しかし、素直に勝利を喜ぶ気が起きない。

あのカイルの悲しい声を聞いてしまっっては……………。

「……………エヴァ……………!!!エヴァああああ!!!」

「俺は!!どうして!!彼女を救えなかったんだ!!!」

悲痛な叫びが無線から響き渡る。

「……………カイル……………」

勝利の歓声が響く中、カイルの声はだんだんとかき消されていった。

それから数日後、俺は数年ぶりに故郷の日本へ帰り休暇をもらえることとなった。

ムゲンが上層部に掛け合ってくれたおかげで、ガイも、カイルも同じく休暇が貰えたらしい。

嬉しさ半分、前の戦闘のシヨックが半分。そんな状態でありつつも、俺は迎えのシャトルに乗り込み、日本へと向かった。

久々の故郷は、昔よりも荒れてはいるものの、変わらないところもあつて少しだけ安心できた。

街を見渡すたびに心がワクワクして、いつの間にか、自分の悲しい気持ちもどこかへと吹き飛んでいのに気が付く。

「……あ……」

歩いていて見つけたのは、昔よく来たパン屋。

丁度いいタイミングだったので、パン屋へと足を向けることにした。

扉を開くと、パンの良い香りが鼻腔をくすぐる。

「いらつしやい。よく来たね。——つて……お前……零次か!？」

俺の顔を見て、目を大きく開くこの男は、俺の友人。

数年前までは彼の親が店を切り盛りしていたはずだが、と考えつつも笑顔で言葉を返す。

「ああ。久しいね。元気だった?」

「元気も何もよお……。お前がどっか行っちゃまってから、皆どことなく元気なくてさあ……」

あからさまに悲しそうな顔をして落ち込む彼。

「…そつか…。迷惑かけたね」

「まあ気にすんなよ！お前、軍人だもんな。忙しいだろうし、仕方ないだろう？」

「…そう言ってもらえると助かる。…ところで、親父さんは？」

「……親父？……ああ、死んだよ。一昨日な」

「えっ……………」

「この街で一番元気で豪快な人が…。誰かに殺されたとか…？」

「いや、酒の飲みすぎだ」

「え……………」

俺の心を読んだかのような返しと、亡くなった理由で二重に驚いた。

「まあ、仕方ないよなあ。最近はさらにひどかったし。……だから、今は俺がこの店の店

主ってことになってる」

「立派だな」

「立派なもんかよ。面倒ばかりさ。…けどま、親父にまともな恩返しをしてやれなかつ

たからさ」

「……………」

「ま、そういうわけで今はパン屋の店主さ」

彼には夢があった。確か、一流の起業家になって、毎日豪邸でパーティーするんだと豪語していた。

「……売れ行きはどうだい？」

「ぜんぜん。来るのは向かいに住んでるばーちゃんくらいさ」

「相変わらずだな……」

苦笑しながらパンが並んでいる棚を見て回る。

「お、何か食ってくか？」

「数年ぶりに食べてこうかな」

「おっしや！なんでも好きなヤツ選んでくれよ！おごつてやるからさ」

「え、いやでも……」

俺は首を横に振るも、彼は頑なに

「いいから！お前はもつと食って頑張れや！」

「……そこまで言うなら……」

彼の頑固なところはきつと親父さん譲りだろう。

子供のころ、よくイタズラをして叱られたっけ。

そんなことを思い出しながら、パンを選んで彼へと持っていく。

「これだな。よし、今包むから待ってな」

「分かった」

彼は手慣れた手つきでパンを包んでいく。

「よし、出来た。ほらよ！これから蒼花んとここに会いに行くのか？」

「そのつもりだけど？」

「んじゃ、よろしく伝えてくれよ！また来いよな！」

「分かつてるよ！それじゃ！」

俺は彼に手を振った後店を後にした。

ゆっくりと街を歩きながら、懐かしい思い出に浸る。

こんな時間だけでも、良いモノなんだと軍人になってから思うようになった。

歩き続けていると、いつも見ていたその景色が遠くに映る。

「……………あ……！」

なんだか嬉しくなって、俺は夢中で走った。

過ぎていく景色なんかには構わずに、緑の屋根の家へと走る。

「はあ……………はあ……………」

辿り着いた場所は、前に家を出たときと変わらないものの、人の気配がして、生活感があつた。

きつと、ここに彼女はいる。

そう確信しながら、俺は自宅へと歩みを進めた。

木の棒で作った簡素な物干し場には、真っ白なシーツが掛かっていて、風が抜けるたびに楽しそうになびいている。

「……………」

シーツの下から映るほっそりとした女性の脚。

どうやら、シーツを取り込むところだったのだろう。

「……………間違いない」

俺は眩き、物干し場に向かい、女性の背後にひっそりと回った。

青空のように綺麗なロングの髪。俺は彼女に声をかけた。

「いい天気ですね」

すると彼女はビクツと驚き、その場で硬直している。

「……………だ、だ、だ…誰……………」

震える声で恐る恐る尋ねてくる。

俺は微笑みながら言葉を返した。

「蒼花。久しいね。もしかして、俺の声、忘れちゃった？」

「ま、まさか…これい——うわあっ!?!」

振り向こうとした少女は突然体勢を崩す。

「危ない！」

思わず彼女を支えるために体が動いた。

倒れそうになる彼女の手を取ったことで、少女は何とか無事で、それを見てから胸を撫で下ろす。

「……あ、ありがと……。やっぱり、零次だ……」

彼女の瞳から沢山の涙が零れ落ちていく。

「ど、どうして泣くんのだ？」

彼女を引き起こし、心配そうに見つめる。

すると彼女は

「……嬉しいから……。帰ってきてくれたから……」

「……蒼花」

彼女は蒼凛そうりん 蒼花そうか。俺と同じ年で、俺の自慢の彼女だ。

蒼花は、片親で育てられた子で、姉弟なんかいなくて、寂しい思いをした。

唯一愛してくれた家族でさえ、戦争に巻き込まれて亡くなった。

蒼花の親父さんは、軍人で戦闘中に殉職。

俺の姉ちゃんは、海外の出張中に、反地球連邦のテロに巻き込まれて亡くなったと報

告を受けた。

お互いに境遇が似ていて、たまたま家が近かったのもあって、それ以来俺たちは二人で生活をする事になったんだ。

大変だけど、生きるために必死で……。

俺が軍に入ったのも、それが理由。

金を稼いで、彼女に楽をさせたいから。

そのせいで彼女が一人になってしまうのは本末転倒な気もするが、それでも俺は戦うことを決めた。

蒼花を……幸せにしてあげたいから。

「とりあえず、中に入って……そこで話をしよう！」

「ああ」

俺は彼女に言われた通り自宅へと足を踏み入れた。

「好きなところ座って」

「そうするよ」

椅子に腰を掛け、家の中を見回す。

昔と何ら変わってない。

懐かしくて涙が出そうなほどに。

「帰って来たってことは、休暇？」

最初に口を開いたのは彼女。

青いロングヘアーに、少しだけつり目。でも口元は優しく、可愛いというよりは美人。久々に彼女の顔を見れて素直に嬉しがつている俺がいる。

俺は頷いた後に

「そうだよ。隊長の計らいでね」

「そっか。いい隊長なんだね！」

「…ああ。すごい良い隊長だった」

「だった……？もしかして……」

「あ、いや、隊長は亡くなってないよ！自分の本来の基地に帰っただけ」

すると彼女はなるほど、という顔をして

「そっか。それで、休暇はどれくらい……？」

「ここに着いてから1週間だつてさ」

「わあ!!そんなに一緒にいられるんだ!!嬉しい……!」

彼女は飛び跳ねるくらいに喜んだ。見ているだけで俺も嬉しさが込み上げてくる。

「俺も嬉しい。隊長には感謝しきれないよ」

「だね……また、会えたら感謝しないとね！」

「うん。また会えたら……」

そのあと、彼女に出先の事を話してその日は盛り上がった。

1週間なんてあつという間に経ってしまったもので

最終日、俺は蒼花と共に街へと出かけた。

「今日で……最後なんだね」

「ああ。……でも、二度と会えないわけじゃないからさ」

「……う、うん……」

二人の間に一時の静寂。

ただ聞こえるのは二人分の歩く音。

それが、彼女との別れを現しているようで、怖くなる。

もう二度と会えないのではないか。

そんな不安が頭によぎる。

「……」

彼女はさつきから俯きながら黙り込んでいる。

「な、なあ……蒼花……」

「あうっ……!?!」

俯いていた彼女と、前から歩いてきた大柄の男性がぶつかった。思わず彼女はしりもちをついてしまう。

「うう……」

「蒼花。大丈夫か？」

「う、うん……」

「す、すいません。こっちの不注意で——ぐあつ!？」

一瞬自分でも何が起きたのか理解できなかつた。

だが、今はつきりとわかるのは、俺は宙を舞っているということ。

「つつ………な、何を……—がはっ!？」

直後腹へ蹴りを入れられ、一瞬意識が飛びそうになつた。

「零次!!」

「……ぐぐ……!お、お前……!」

「人にぶつかつておいて、それだけで済むと思うなよてめえ!!」

フラフラになりながらも立ち上がり、彼女を守るようにする。

「ほう?まだやられたりねえか？」

「違う……。ぶつかったのは悪かつた。こっちの不注意だつた……—ぐっ!」

頬に一発。痛みに堪え、耐える。

「そう思うなら!! 謝れよお! なあ!」

「ぐっ……ぐはっ……!! あぐっ……!!?」

殴られているのに、俺の体は倒れることを許さない。

蒼花だけは……守らなきゃいけない。

「地面に、手をつけて! 謝れよ!!!」

「がっ……!!!」

腹に一発。強烈な痛みで、膝をついてしまった。

「ぜえ……ぜえ……う、ぐぐ……!!」

「謝れよ!!」

足で踏みつぶそうとしてくる。もう……立てない…。

「零次……!!」

「もうやめておいたらどうだ?」

トドメを阻止したのは、おそらく男性。足元しか見えないが、スーツ姿。

「ああ?! なんだよてめえ!!」

「子供いじめて楽しいか? 大人げないぞ?」

煽るようにその男性は言う。

その態度に腹が立ったのか、大柄な男は

「な、なんだとお…!？」

「や、やめときなよクロノード君。面倒ごとは嫌いなんでしょ？矛盾してるよ、君」

「言うなよ。俺だつてアイツに会う前にこんなことはしたくないんだ。だが、こんな光景を見てて見逃すわけにはいかんだろ」

「ま、そうだろうけど。そこの大柄な兄さんや、やめといたほうがいいよー？クロノード君は強いんだから」

相手を挑発するように言うもう一人の男性。

「ああ!?!ぶつ殺されてえか!」

「おお、怖い怖い。最近はずりずりしてるねえ。日本は平和だと思つてたけど……」

見なくても分かるが大きめのリアクションを取りながら彼が言うのが目に見える。

「てめえ……!!!!ふざけんなあああ!!」

大柄な男が走り出す。

何とか体を起こして、その場を見ると、細身の男性2人が呆れているのが分かる。

「つたく。おい、面倒だから任せるぞ」

「ええ!?!なんで俺?!俺は喧嘩が苦手なだけけど?」

大きめのリアクションを取りながら彼は言うが、クロノードと呼ばれる人物は首を横に振りながら

「それ、嘘だろ？」

「いやいや！俺はそう言う野蛮なこと嫌いですねー。なんせ危ないからさあ」

「……焼き鳥一本おごるからさ」

すると彼は突然目の色を変えて

「お、マジ？じゃあやるわ!!」

すると彼は男性の前に立ちふさがり、大柄な男の拳を片手で受け止めた。

「なっ！」

「……はああ……なあんて俺がこんなことをさあ……」

「てめえ！真面目にやってんのか!？」

「真面目？喧嘩にマジになっちゃってどうすんのよ、兄さん」

「この野郎……!!ぶっ殺す!!」

だんだんと押され始める。

「あ、あれ？ちよつと力強くない!?お、おーい！クロノード君！ちよつときついんですけ

どー!？」

「知らん。さつさと片付けろ。遊んでいる暇はないだろう」

その言葉は大柄な男に油を注いだのか、大声を上げ

「てめえら殺す!!死にやがれえええええ!!」

「ぐ……!!ちよ、ちよつとたんま!!ギブギブ!!や、やめてー!!」

そう言いながらカカサという男は拳を受け止めながら膝をつき始める。

一方クロノードという男は大きくため息をついている。

その足元からひよこつと現れた小さい女の子。

その子が突然大声で

「頑張れー!!カカサおじさーん!!」

その言葉はカカサという男にしつかりと聞こえたようで……

「……だ・れ・が……」

「ああ!?聞こえねえ——のわあああああ!?!」

瞬間、大柄な男が宙を舞い、地面に叩きつけられた。

周りで見ていた人々も呆気にと取られている。無論、俺も。

「誰がおじさんじゃあああああああ!!俺は立派なお兄さんだ!!」

小さい女の子を指さしながら叫ぶ。

すると少女は笑いながら

「でも、パパはカカサのこと、『おじさん』って呼んでいいって言った!!」

「クロノード君!?!」

「気にするなよ。俺もお前もアラサーじゃないか」

「待て待て!! 確かにアラサーかもしれないがだね、ボカアまだ肌もピチピチよ!! 新鮮な魚くらいねっ!!!」

なんなんだ。この人たちは。

助けてもらってなんだが、おかしな人たちだ。

「まったくクロノード君という奴は……」

そんな彼を無視しながら、大柄な男のほうへ向かう男性。

「……伸びてるな。……まったく。相変わらずだな」

「——だから……。つて、なんだつて?」

「何でもないさ……。ルナを頼む」

「お、おう?」

すると、クロノードという男がこちらへ歩み寄ってきて手を差し出した。

「立てるか?」

「……あ、はい」

彼の手を握ると、一気に引つ張り起こしてくれる。

「……あ、ありがとうございます」

「……そつちの子も無事で何よりだ」

蒼花のほうを見ると、彼女は自分で立ち上がり、俺のほうへと走ってくる。

「零次！大丈夫!？」

「ああ……なんとかね……」

「ひどくやられたみたいだな。丁度いい。これから病院に行くんだ、一緒に来い」

「え、でも………」

「気にするな。怪我人を見捨てる事なんか出来ない性格でな。金もこつちが出すから、

さあ、行くぞ」

「あ、いや……でも——」

「君、この子を支えながらついてきてくれ」

「……はい」

蒼花は頷くと

「零次、行く?」

俺は渋々ながらも頷く

それを見てから少し微笑み、続けて

「よし、おい！カカサ!!行くぞ!!」

そう言つて彼はゆっくりと歩き始める。

俺と蒼花は遅れないように歩き出した。

歩いている間は、前を進む二人が楽しそうに会話しているだけで、俺たち二人は会話する気も起きなかった。

ふと何かを思ったのか、カカサというほうの人物は立ち止まり

「そういえば、後ろの二人に自己紹介し忘れてた。やあ！俺はカカサ・キヤモイ！趣味は——」

なんだかおもしろくなって、無視して進むと

「つて無視かーい!!!」

案の定のツツコミで、思わず笑ってしまう。

「ははは!!!」

「な、なんだよ!?!何かおかしいのか!?!」

「ふふふ………」

それを見てなのか、蒼花も笑いだした。

「つたく。まあ、そうだな。俺はクロノード・グレイス。この子はルナだ。よろしく」

クロノードさんは振り返り、そう言って手を差し出した。

「朱雀零次です。彼女は蒼凜蒼花」

「よ、よろしくお願ひします」

「よろしくなー!!!」

元気よく小さな手を上げて笑うルナちゃん。なんだか見ていて微笑ましかった。自己紹介を終えると、気づけば俺も蒼花も彼らと共に会話に混ざっていた。

そして、話している間は、痛みなんか感じなくて、蒼花の支えなしでも歩くことが出来た。それだけ楽しかったのかもしれない。

不思議と、彼らとは何の違和感もなく話せる。

ただ、そこにいるだけでいい。そんな感じの友人みたいに思えた。

「……零次…だったか」

クロノードさんが口を開く。

「…は、はい」

「お前、連邦軍だろう?」

「えっ……!!」

「まあ、身構える必要はない。今は、連邦もジオンも関係ないからな」

「……………ということ、あなたは……………」

すると、彼は少し躊躇いながら

「……………ああ。ジオンの軍人だ」

「……………」

「ジオンは嫌いか?」

唐突な質問で呆気にとられたが、少しだけ考えた後

「……分かりません」

そう答えた。

「分からない……か。不思議な奴だな」

「分からないんです。俺は親をジオンに殺されたわけじゃないですし」

「ま、そういうものか。では、どうして軍に？」

「……そうですね、彼女を……幸せにしてあげたいから……」

そう言っつて前を歩く彼女を少しだけ見る。

「なるほどな。……良い事だと思うぞ」

「え？」

「……戦うことも必要だ。だが、純粋なその気持ちは大切にしたほうがいい」

「……」

「そうして、いつか君たちに子供が出来たのなら、幸せにしてあげるんだ」

「片親は……辛いからな」

そう言う彼の瞳は、どこか哀しみを秘めていた。

「あの……」

「うん？」

少し躊躇ったが、俺は、彼に聞いてみる。

「どうして……優しくしてくれるんですか？」

すると彼は微笑みながら

「どうしてか……。そうだな、それだけ辛いことを体験してきたから……。だろうな」

「え……？」

言葉の意味が理解できなかった。

「よく聞かないか？ 『傷ついた分だけ人は優しくなれる』 って」

「あります」

「……そういうことだ。痛い思いも、辛い思いもしてきたからこそ、優しくできる」

「……」

「昔の俺では、きつと思いつきもしない事だよ」

「……そうなんですか」

「ああ。妻を持つて、子供を持つことで知った。守らなければいけないという【意志】」

「友を持ち、人生を再び歩き出した。信じるということの【強さ】」

「……敵である者とでも、【分かり合う】ことが出来る」と

【分かり合う】。その言葉が、ムゲンの事を思い出させた。

彼も言っていた。AIとも人間は分かり合えると。

でも、実際は叶わなかった。

俺は……それでも信じてみたい。

「全て、【生きている証】だ」

彼は優しく微笑んでくれた。

「クロノードさん……」

病院に着くと、俺はさっそく診察を受け、軽い治療を受けた。

幸い重症というほどのモノではなく、擦り傷程度。

病室を後にすると、椅子に腰かけて待っていたカカサさんがいた。

俺が出てくるのを見ると立ち上がり

「よっ！どうだった？」

「……ええ。軽い擦り傷で済みました」

「そうかー。あ、クロノード君が言ってた通り、お金はこっちで払っておくから」

「いいんですか……？」

「いいっていいって！気にしないで！こういう時は大人を使えばいいのサ」

「さてと、じゃあ行こうか？」

「え、つと……どこへ？」

首をかしげると

「ま、ついてきて。丁度いいからさ」

困惑気味に彼についていくと、病室へと入っていく。

名札には「ファイア・アッシュベリー」と書いてある。

「……」

俺は彼に誘われるがままに病室に入った。

すると、そこにはクロノードさん、カカサさん、蒼花がいた。

そうして、心配そうに誰かを見つめる彼女。

ベッドの近くまで行くと、その誰かを理解することが出来た。

「お、零次か」

「あ、はい」

クロノードさんは微笑んだ後、ベッドで眠る一人の女性の頬へ触れる。

「……ここで眠っているのは、俺の妻だ」

「え……」

「もうすぐ2年になるか。眠り続けて」

「そんなに……?」

蒼花は堪らず声を上げた。

「ああ。ある作戦で、彼女は俺を庇ってな……。死んではいないが、いつ目が覚めるかは分からないと言われた」

「……………」

「俺は彼女に何もしてあげられなかった。だから、仕事がない日は、毎回ここに来るんだ」

「クロノード君、ファイアちゃんにゾツコンだもんねー?」

「……………ああ。否定なんか……………出来ない……………」

「あ、悪い……………そういうつもりで言ったわけじゃないんだ」

「分かっているさ……………」

「わり、俺、外出てるわ。ほら、ルナ、行こう」

「……………うん」

カカサさんはルナちゃんの手を引いて病室を出て行った。

「わ、私、カカサさんたちの様子見てくるね」

耳元でそう言い残して、蒼花は彼らを追うように病室を後にした。

「……………」

病室で眠る一人の女性は美しく、まるで、おとぎ話のヒロインのように静かに眠っている。

「……こうやって、彼女といる時間が、幸せと感じれる」
彼はそう呟いた。

「……だから……」

俺は理解した。彼は、だからさつき……。

「ああ。俺は、君に押し付けようとしたのかも知れない。……でも、分かってほしい」

「親は、簡単に離婚するなどと言うけれど、それで一番心を痛めるのは、子供だ」

「……」

「片親が辛いからとかじゃない。幼いころにこれを体験すれば、きっとトラウマのように残り続けてしまう」

「親は、父親と母親、揃って親であると…俺は信じたいんだ」

「……俺も…信じたい」

「零次……?」

クロノードさんは不思議そうに見つめている。

俺は、静かに言葉を続けた。

「俺には、姉ちゃん以外に家族はいなかった。両親の顔も覚えてないんです」

「…そ、それは……。悪かったな。お前の気持ちも知らずに…」

「いえ、いいんです。姉ちゃんは、俺を寂しくさせないために、毎日身を粉にして働いて

いました」

「でも……姉ちゃんは、仕事の時、テロに巻き込まれて亡くなったんです」

「……………」

「それから、蒼花と一緒に暮らしていました…。寂しくないように二人で」

「お前も……苦労しているんだな」

「……だから、俺は……親は、父親と母親が揃って親であると信じたい」

「……………」

クロノードさんは突然立ち上がり、俺の前まで来たと思うと、俺を抱きしめ、優しく頭を撫でた。

「ちよ、ちよつと!? く、クロノードさん!？」

「……………俺は、お前の父親にはなつてやれない。だが、少しでもお前の気持ちが軽くなるのなら」

「俺は、お前の気が済むまでこうしてあげたい」

母親に抱かれた時とは違う感覚を覚えた。

そう、父親に抱きしめられたら、きつとこんな感じなんだろう。

……父さんは……ひどい人と近所から言われたりもしたし、母さんもそう言った。

けれど、それでも、俺の唯一の父親であることに変わりはないんだ。

「……………少しだけ……………このままでいいですか？ 父さん……」

気持ち溢れて、堪えられなかった言葉を口にすると

すると

「ああ。気にするな。……………お前は強い子だ」

暖かさが伝わって、涙が出そうになる。

けれど、泣くわけにはいかない。

俺は、前に進まなきゃいけないんだ。

少しだけ父親に抱かれた気分を満喫した後、俺はゆっくりとクロノードさんから離れた。

「もういいか？」

「はい」

「よし、お前は強い子だ。前を向いて進めよ？ 彼女と一緒に、な？」

その微笑みは、父親の顔ともいうべき表情だった。

大きく頷いて見せると、彼はにっこり微笑み、未だ眠り続ける女性へ

「……………また来るよ、ファイア」

そう言つて先に歩き出した。

彼に続こうと思つた時、ふと彼女の口元が少しだけ動いているように見えた。

が……………ん……………ば……………れ

全てが聞こえていたかのような、『頑張れ』という言葉を、俺に向けて言つてくれた。

俺は

「はい。頑張ります」

そう言つた後お辞儀をし、病室を出る。

病院を出ると、既に夕暮れ。

もうすぐ夜が来て、次の日にはこの街を出なければならぬ。

その寂しさが、俺を悲しくさせる。

「さて、俺たちもそろそろ帰る。二人とも、元気でな」

「元気でなー!!」

クロノードさんに続いて、ルナちゃんが手を上げながら言つた。

「んじゃあ、まったねー!」つて、忘れてた。零次君」

カカサさんが何かを思ったのか近づいてきて

「……信じ続ける事って、大切だよ」

「え？」

「会えるとか、会えないとかに限らず、信じてみるのって大切だよ。そんじゃーね！」
俺の心を読んだかのようなアドバイス。少し怖かったが、嬉しかった。

遠くへと消えていく3人の影。それを見送って

「俺たちも帰ろうか」

「……うん」

帰りの道で、俺は彼女とゆっくりと話をした。

「ねえ、零次」

「うん？」

「……また、帰ってくるよね」

「もちろんだよ。帰ってくるさ」

帰ってこれるのなら、帰ってきたい。

この街には、懐かしい思い出や、愛する人が居て

ちよっと不思議な家族がいるのだから。

「……信じてみるよ。クロノードさん」

俺は小さく呟き、空を見上げた。

守るという【意志】も、仲間のために戦うという【強さ】も、誰かと【分かり合う】ということも

全ては信じなければできない事だ

あの人は、どこかムゲンに似ている

だからかもしれない、不思議と敵と思えなかったのは

俺も……彼らから何かを【受け継いだ】のかもかもしれない

Episode of Reiji 完

外伝：Episode of guy

宇宙世紀0089. 7. 15 この日、俺たちは勝利と引き換えに、大切な何かを失った。

「俺は!!どうして!!彼女を救えなかったんだ!!!」

戦争はいつだって、大切な何かを奪っていく。

奪う側も、奪われる側も……すべてを……。

こんな……こんな別れが……

「……………」

私は、彼に何も言ってやる事が出来なかった。

歓声が沸く中に、彼の悲痛な叫びが確かに聞こえていた。

ムゲン隊長がこの部隊を去って数日後、私は久々の休暇でオーストラリア、トリントンに戻ってゆったりとした日々を過ごしていた。

そういうえば、確かムゲン隊長の所属はトリントン基地だったっけ。

そんなことを考えながら、のんびりと街を歩いていると、気づけば居住区のところへ戻っているのに気が付く。

「おや、もう戻ってきてしまったのか」

自分に言い聞かせるように呟いて、軽く周りを見渡す。

居住区では、貧しいながらも必死に生きている人々が沢山いる。

私も昔はここでよく走り回ったっけ。なんて思い出しながら。

歩いていると、元氣よく走る子供たちとすれ違ったり、買物帰りなのか大きな荷物を持って歩く人ともすれ違った。

穏やかな雰囲気、私の心を和ませる。

私が軍に入った理由は一つだけ。

こんな貧しい中でも必死に生きている人々を守るため。

とは言っても、そう志して軍に入った時は整備兵だったが……。

父も母も、既にこの世にはいない。

二人とも、戦争の影響である物資不足で飢えによる死だった。

私にだけ食料を与えていたから。

思い出すだけでも悲しくなる。

だから、なおさら、貧しい人々を見るのが辛かった。

でも、過去を悔やむのはもうやめた。
現在は、今できる最善を尽くせばいい。

「うわっ!!」

目の前で少年が転んだ。

素早く駆け寄り、少年を起こす。

「大丈夫かい?」

「……う、うん」

「痛いところはないかな?」

「大丈夫だよ! ありがとう!」

少年は丁寧にお辞儀した後、また走ってどこかへと行ってしまった。

「そこのお兄さん」

横から声を掛けられ、少しだけ驚きつつ、声のほうへ振り向く。

見ると、女性が少し疲れた様子で立っている。それほど体調が良さそうには思えない。
い。

「なんででしょうか?」

「あの子を助けてくれてありがとうね。……ごほっ」

「それは構いません。それより、あなたは……」

女性は首を横に振った後言葉繋いだ。

「……………もう長くないのさ。ここの住人は、皆助け合って生きている。…互いに迷惑はかけられないだろう?」

「ですが……治る病気なら——」

「治らないのさ。……だから、生きている人に……これからも生き続ける人に迷惑をかけられない」

「……………」

私は、彼女に何もしてあげられないのだろうか……。

「悲しい顔をしなくていい。まったく…最近の若い子は——」

「あーこんなところにいたんですね!!」

彼女の声を遮ったのは、若い女性の声だった。

「エミリー、また来たの?」

声の主は、茶色の短髪で、目の色は黒。

優しいがっすり目。素直に言って美人だ。

エミリーと呼ばれる人は、女性に近づき

「そうですよ。また、来ました。早く治ってほしいですからね」

「……まったく……」

呆れるように女性はため息をついた。

状況を見ていることしか出来ない俺に気づいたエミリーという女性は

「あ、すいません。よければ手伝っていただけますか？」

そう言つて俺に頭を下げる。

「わかりました。ですから、頭を上げてください」

「ありがとうございます！」

それから、エミリーさんの手伝いをして、薬を飲ませたり、部屋の掃除なんかも手伝つたりした。

そのたびに女性は『別にいいのに』と言つていたが。

手伝いを終え、女性が眠りにつくのを見送つて私は家を後にした。

「……帰ろうかな」

自宅へと足を運ぼうとしたとき、背後からエミリーさんの声があった。

「あの一！」

振り返り、言葉を返す。

「どうしました？」

「……さつきは、ありがとうございます。……よければ、お茶でもどうですか？」

「……………別に、構いませんが」

「ありがとうございます！」

私達はそれから、近くのカフェでお茶をした。

「へえ……軍人さんだったんですね」

「……ええ。別に、それがどうってわけではないですが。今は休暇中です」

「そうですか……。それで、何かは叶いましたか？」

「え……………」

唐突な質問で呆気にとられる。何かは叶ったか……？

「はい。あなたが【軍人になった理由】は叶いましたか？」

「……それは……………」

どうなのだろうか。私は、貧しい人たちを守れているのだろうか。

結局、軍なんてものに入ってしまったえば、そこで【歯車】のように回り続けなければいけない。

私は——

「…まだ、叶ってないですね」

「そうですよね」

最初から答えは分かっていたような返答を、彼女は返してくる。

「貧しい人を救いたい。だから、軍に入った。けれど……果たして本当に守れているのかは……」

「むずかしいですね。…人を守るって」

「はい……」

つくづくそう思える。……エヴァさんの事もそうだ。

私は、本当に守れているのか……？

「……でも、私は思うんです」

エミリーさんは呟いた。

「知らないうちに、人を救っていることもあるんじゃないかって」

「……それは」

「軍人は、命を奪ったりすることもあるし、手を汚すこともあるよ。けれど、それによって救われた人だっている」

「……そうですね……」

「手が血で染まろうとも、今生きる命を守ろうとしているあなたなら……きつと、その理由は叶いますよ」

「……エミリーさん……」

「私も、昔は軍人でした。とは言っても、新米のオペレーターでしたけどね」

「あなたも……。では、あなたは軍に入った理由が……？」

少しだけ悲しそうな顔をした後、彼女は頷き

「ええ。叶いましたよ。……父に会うことが……出来ましたから」

「それは……」

「父が死ぬこと、それは今でも理解できません。けれど、父は、私や、部隊の人を守って亡くなった」

「父はきつと、『戦争を恨んで』軍隊に入ったんでしょね。……でも、その理由も変わる時は来るもので」

「理由が……変わる？」

「はい。最後の最後で、父は『娘を、希望を託した人を守りたい』そう思ったと、信じたんです」

信じる。そんな言葉、今まで何度も聞いてきた。

何故だか、その言葉が嫌いになれない。

彼女も、戦争で親を失った。

仕方がないとはいえ……

「そうだと……いいですね」

「はい。………すいませんね、急にこんな話しちゃって」

「ああ、いえ。気にしないでください」

「いつまでも過去を振り返ってちやいけなだけだなあ……。前向いて歩かないと……」

「いいんじゃないですか？」

「え？」

彼女は首をかしげる。

「振り返ったって。それを糧に生きるのなら」

「………そうですね。………それも、そうだ………」

彼女は何かを思い出したかのように、笑った。

それから、エミリーさんの家まで話しながら進む。

彼女の家に着くと、家の横の庭に、小さなお墓が立ててあった。

墓には「私があしたの小さな英雄ここに眠る」と書いてある。

「………」

「あ、気づきましたか？」

「え、ええ。……これは」

「……………私の英雄が眠っているんですよ」

彼女は少しだけ悲しい顔でそう答えた。

「……………英雄ですか」

「はい。……………」

彼女は目を瞑り、墓の前で手を合わせた。

私も彼女に続いて目を瞑り手を合わせる。

しばらくした後、彼女はこちらへ向いて

「ありがとうございました。また、会えるといいですね」

「……………そうですね。できれば、戦争なんかなくなった時代に」

「……………同感です」

エミリーさんと私はそのあとお互いに笑いあった。

夕暮れが街を包み込み、それぞれの思いを胸に家路へと

それは私も同様で、ゆつくりと自宅へ足を向けた。

しばらく歩いていて、目の前の女性が紙袋一杯の荷物を持って、歩いてくるのが分かる。

すれ違う瞬間、紙袋から一つのリングが滑り落ちた。

「あ……………つと」

瞬時に対応できて、地面ギリギリでリングをキャッチ。

「あ、ありがとうございます」

女性は慌ててこちらへ向き直る。

銀髪のロングヘアで、整った顔つきに、優しい瞳。どちらかと言えば垂れ目だろうか。

いかにもムゲン隊長が好きそうな女性。

私は微笑んだ後言葉を返した。

「気にしないでください。荷物、持ちますか？」

「あ、でも……………」

「そちらがよければ、自宅までお運びしますよ」

「……………」

少し考えた後、女性は頷いた後

「お願いしてもいいですか？」

それを聞いて

「任せてください」

私は女性から荷物を受け取り、女性の後についていく。

街を出て、そこから少し離れた丘に進んでいく彼女。

女性は軽い足取りで丘の頂上を目指して歩いていく。

港が近いおかげで海が一望できる。さらに反対側は街。

海と街並みを一つの場所で見ることのできる場所。

こんなところに家を持っていると思うと少し羨ましく思える。

頂上にはそれなりに大きな木造の家。

彼女は家の扉を開き、私に手招きする。

誘われるままに部屋に入ると、彼女は赤ちゃんを抱いて迎えてくれた。

「荷物は、床に置いてくれて大丈夫です。少し椅子に腰かけて待っていてください」

「ああ、すぐ帰りますから、構いませんよ」

「ここまで運んでくれたんです。そうはいきませんよ」

少しだけ躊躇ったが、彼女の言葉に甘えることにした。

「コーヒーでいいですか?」

「あ、はい」

しばらく待つっていると、コーヒーの香りが鼻をくすぐる。

こんな事、前にもあつたことを思い出した。

ムゲン隊長と朝にコーヒーを飲んだ時の事。

あの時間はゆつたりとしていて、一分一秒が幸せに感じたひとときだった。

その時と同じ気持ち、今私は感じている。

「……お待たせしました」

彼女はコーヒーを差し出し、椅子に腰かけた。

受け取り、一口。

「……美味しいですね。お上手です」

「ありがとう。夫にもよく褒められるんだよ」

彼女は少しだけ照れながら言った。

「……夫……ですか」

「ええ。その人、面白いですよ」

ふふつと笑った後、言葉を続ける。

「寂しそうな顔を見せれば、何でもしてくる。辛い時はいつだって傍にいてくれる

……。だから……」

「……だから……時々怖いんです」

「怖い……？」

「彼が……壊れてしまうのではないかって……」

「……それを支えるのもあなたの役目では……？」

「分かっていますよ。……でも、彼は私に構わず進んでいってしまおう」

「……分かる気がします」

ムゲン隊長もそうだ。いつも一人で背負って、カッコつけようとする。

一人で出来る事なんか……限られているのに。

「でもさ、そのおかげで、私も前を進んでいける」

「……」

「彼と……一緒に進みたいから。それだけでいい……」

「……分かります」

ムゲン隊長を支えたい。気づけばそんな気持ちがあるところで湧いていたのかもしれない。

背中を支えてくれた彼に、少しでも返すことが出来たなら……と。

「彼は……優しいから」

「優しさだけなら、誰にだってありますよ」

少しだけ皮肉を込めて言葉を返した。

「……知ってるよ。それくらい。……でも、そんな彼だからこそ、支えたいと思えた」

「……綺麗ごとも言うし、迷ってうじうじして腹が立つ人もいるかもしれない」

「けどさ、それって、『人間』らしくない？」

人間らしさ？ 思わず口から言葉が漏れ出す。

「人間らしさって……」

「…私も、あまり分からないけどさ、少なくとも私はそう思うよ」

「他人からすれば可笑しい事言ってる人にも見えるだろうし、バカにされることだってあるだろうけどさ」

「それでも必死に今を生きて、地面を這ってでも仲間を、家族を守ろうとする。……そんな彼だからこそ、私は好きになった」

彼女は静かに目を瞑る。

私は口を開き

「……向こう見ずで、一人で背負って。少しもカツコよくもないのに、誰から何を言われ
ても、折れない」

「どんな人でも【分かり合う】事が出来ると彼は言った」

「私には理解できない考えでした。けれど、その言葉は面白く、何故だか信じてみてもいいかもしれないと思えた」

「……………私の隊長は、あのアムロ・レイやジオンのシャア・アズナブルのようにカッコよくありません」

「けれど、それ以上に……誰よりも仲間想いでした」

「隊長は……ロマンチストなんです。少し夢見がちと言いますか……」

「ろ、ロマンチスト……」

「ええ。別に悪く言うつもりはないですよ。けれど、ロマンチストですね」

「……………なんか、あなたの隊長と、私の夫って」

「気づきました?」

「似てますよね」

二人で声が重なったことに、笑いが込み上げてきた。

「ふ……………ははは!!」

「ははは……………!!」

笑いあつた後、先に口を開いたのは彼女。

「でも、だから私は嫌いになれないかな」

「同感です」

それから、1週間後。私は再びアジアの大地を踏み、新たな隊長と共に戦うことに

なった。

その隊長はいかにも新米で、見ているこっちが慌ててしまいそうになる。

「……………え、えつと……………」

「はあ……………もつとしつかりしてくれよ隊長」

「……………俺、先に戻る」

カイルも零次も静かにテントを出て行ってしまった。

「……………うう……………」

「気にすることはありません」

「ガイ……………さん」

「あなたは隊長です。自分がやるべきと思ったことをすればいい」

「……………でも……………」

「ゆつくりでいいんですよ。少しずつやればいいんです」

「……………が、頑張ります」

「では、私はこれで」

お辞儀をした後、私はテントを後にする。

「……………」

歩きながら、思い出す。

『確かに怖いけれど、今ここで帰ったら、家族に怒られてしまうからね』

『AIと人が分かり合う。そんな可能性だってあるはずだ——手を取り合って歩けば、きつといい未来があるはずさ』

彼は、きつとこれからも戦い続けるのだろう。

無論私も、軍人である以上、戦い続ける。

戦う場所が違えど、私達は——

『俺たちは……家族だ』

「ええ。分かっています。……私達は…家族です」

Episode of guy 完

戦士の帰還―The Hidden story 00

89―

49：不穏なトリントン

宇宙世紀0089. 7. 21 ムゲン・クロスフォード中尉、長期の遠征からトリントン基地へ帰還。

久々のトリントンでまず最初に感じたのは、普段とは雰囲気が全く違うということ。

何と言えがいいだろう。「荒れている」といえば分かりやすいだろうか。

それだけではない。どこことなく、兵士の雰囲気も険悪だ。

さつきから誰かとすれ違うたびに殺気を感じる。

これじゃあ、俺たちが最初にトリントンに来た時に逆戻りだ。

「ちっ……」

すれ違う兵士に舌打ちをされる。

状況が理解できないせいか、対応に困った。

「……いったい何があつたんだ……?」

「あつ!!!」

考え込んでいる俺の背中に、声がかけられた。

振り向くと、俺の姿を見てひどく驚いている青年が立っている。

黒色の短髪で、目は黒い。どこことなくアジア系の顔つき。

どちらかというとき垂れ目なのだろうか。いかにも感情が顔に出やすそうなタイプの男性。

「……どうしたんだい?」

「あ、あなたは……!!む、ムゲン・クロスフォードさん!」

「………そう、だけど……?」

「やっぱり!いやー!よかった!!!」

「な、何を喜んでるんだい……?」

すると彼ははつとした顔をした後

「すいません、自己紹介がまだでしたね。俺は八剣^{やつるぎしん}俊太郎^{たろう}。最近このトリントンに來

ました。よろしく!」

「そうか。俺はムゲン・クロスフォード………つて、知ってるか。まあ、よろしく頼むよ」

「はいー」

彼は嬉しそうに頷いた。

こうやって知り合ったのも何かの縁と思い、俺は彼に何があつたのかを聞いてみることにした。

「……しかし、トリントンの様子がおかしい。俊太郎は何があつたか知っているか？」
すると彼は悲しそうな顔をした後、言葉を返す。

「……ムゲンさんがここに来る一週間前の事です。俺は丁度、このトリントンに転属して初日に起きたことでした」

「……やはり、何かが……」

「はい。その日は、丁度第00特務試験MS隊が遠征から帰還する日で、基地の皆も嬉しそうでした」

「……」

トリントン基地に転属になって、初めてこの基地で行ったことは、俺たち部隊と他の人々との壁を無くすことだった。

フアングは他の部隊の隊長と積極的に話をして、俺や道夜なんかも毎日周りとの壁を無くすために努力していたのを今でも覚えている。

そうやって、いつしか俺たちの部隊はトリントンで自他ともに認める、無くてはなら

ない存在として信頼を得た。

だから、皆喜ぶのも領けた。しかし、今のこの状況はなんだ……？

一体、何があつたんだ……？

まるで、俺だけが時間に取り残された。そんな気分になってしまっている。

「俺も、初めて会えるのでワクワクしていたんです」

「まあ……名前だけは有名だからね……」

「特務試験隊の旗艦が着艦すると、戦艦のハッチが開いて、そこから一人の女性が降りてきました」

「女性……？」

「はい。白いワンピースを着た女性で、その服には、血が……」

「何……!!？」

俺たちの部隊で女性と言えば、多くは無い。ユーリ、リナ、リリー、オペレーターのカクリくらいだ。

本当に、何があつたんだ……？

「それで、女性は保護され、そのあとにアレが起きたんです」

「アレ……？」

「はい。……ムゲンさんには信じてもらえるかは分かりませんが。……聞きます……」

「？」

「……聞かせてくれ」

「ここまでできてお預けなんて出来るわけがない。」

「俺も知らなければいけない。事の発端を。」

「女性を保護した後、すぐさま戦艦が離陸し、戦艦の上に乗った【紫色のMS】がこの基地の格納庫へ射撃を開始しました」

「……………!!!」

「衝撃だった。俺たちの部隊が……トリントンを攻撃した……？」

「すぐさま防衛のため、俺たちはMSに搭乗しましたが、的確な狙撃でほぼすべてのMSが行動不能に。そして、特務試験隊の戦艦は消えていきました」

「……………そうか」

「その様子だと、ムゲンさんはその場所にはいなかったようですね」

「ああ。俺は別の事情でアジアのほうに行ってたんだ。……………」

「信じられませんか……？」

「……少しね……。だが、それが本当なら、申し訳ない事をした」

「俺はいいんです。でも、問題はここからで」

「……まだ何かあるのか？」

「問題は、彼らが消えた後、一部の部隊が声を上げたんです」

『奴らは裏切り者』と」

「……………」

当然と言えば当然だろう。今まで仲間だった者が突然攻撃してくれば。

MSを攻撃したという事実。これは明らかに裏切りとも思える行動だ。

だが、なら何故裏切る必要があつた……………？

「それに賛同した者と、特務試験隊を擁護する人とで、今トリントンは割れています」

「……………上層部は、どちらを？」

「無論、裏切りという方針で考えているようです」

「……………まいったな……………」

帰ってきて早々に問題とは……………。だが、何とかしなければならぬ。

俺たちだけの問題ではなく、このトリントン基地の問題なのだから。

「……………よし、とりあえず状況は理解した。まずは擁護してくれている人たちに会ったほうがいいだろうな」

「そうですね、案内します。行きましょう」

彼の後を追うように歩き出す。

歩いている途中、すれ違う人の視線が何度も俺を見たのは気のせいではないだろう。

しばらくして、ボロボロの建物が見えてくる。

ボロボロというのも、物理的に破壊されている状態。

建物のほぼ半分が消し飛んでいる。

ここにも、被害があつたのだろうか。

「……………」

「ひどいもんですよね。MSの銃弾一発で吹き飛びましたよ」

「……………ああ」

「入りましょう」

建物の中に入ると、途端に外の騒がしさが消え静かになった。

「……………この下です」

「……………」

頷き、彼の後を追う。

コツコツと足音だけが響き渡る。

その静けさが、余計に虚しく感じた。

だんだんと賑やかな声が聞こえてくる。

扉の前まで行くと、俊太郎は扉を大きく開き

「皆！聞いて!!」

そう叫んだ。

「なんだよ、俊太郎。また何か面白い冗談でも見つけたか？」

中から一人の男性が叫び返す。

「冗談とかじゃない！本当のビッグニュースさ！」

「信じがたいぞ」

「マジもマジ!!ムゲン・クロスフォードさんが来てる！」

「何……!!ムゲンが来てるのか!?!特務試験隊の!?!」

「冗談なんかじゃないって!!」

そう言った後、俊太郎はこちらに視線を送り『こつちに来て』と目で伝えてくる。

俺は若干呆れながら扉の前へと進む。

そして、部屋に入ると、丸いテーブルを中心に3人が座っている。

俺に3人の視線が集中した。……当然……なのだろうか。

「ああ!!本当にムゲンじゃないか!!久しいなあ!!」

思わず立ち上がってしまふほど喜ぶ男。

彼は確か、俺が最初にこの基地に来て案内をしてくれた人だ。

茶色の髪が肩に掛かっていて、顎に髭が生えている。

右目は黒で、左目は……黒目の部分が白く濁っている。……たぶん、何らかの病気で失明したのかも知れない。

名前を聞く機会が無くてそのまま会えていなかったのだが。

「久しぶりです。……えっと……」

「ジャックでいい。よろしくな」

「はい。ムゲン・クロス——」

「知ってるって！」

笑いながら言葉を遮られてしまった。

「あ……そうでしたね……」

「えっと……」

残り二人は、女性だった。なんか、ずっとこつちを見られているんですけど。

「……………」

一人の女性はメモとペンを取り出し、手慣れた手つきで何かを書いた後

「……………」

そつと俺に差し出した。

受け取ってメモを見てみると

『私は、マヤ。生まれつき声が出ない。よろしく。』

と書いてある。

……なるほど。

「ああ。よろしく。マヤ……さん」

すると、何か思ったのか、続けてメモを書き始める。

書き終わると再び俺にメモを差し出した。

『私は、あなたよりも6才も年下です。さん付けする必要ありません。』

「そ、そうか……。じゃあ、よろしく。マヤ」

すると、納得したのか微笑んだ後小さく頷いた。

赤いミディアムヘアで、眠たそうに目を細めている。

美人というよりは可愛い子。

もう一人に向き直ると目が合った。

「あ……えつと……君は？」

「……………ちっ」

「え……」

な、なんか舌打ちされた……？

「おい、アルマ。初対面でそんな態度するなよなあ……？ つたく、そんな怒ると可愛い顔が台無しだぞ？」

「うっせえ！おっさん!!!誰が可愛いって!?!」

するとジャックさんは肩を竦めながら

「おー怖い怖い。その凶暴な性格さえなかったら美人で可愛いんだけど」

「てめえ!!もつかい言ってみろ!!!」

もはや俺を置き去りにして二人の間で喧嘩が起きそうだ。

……一方的に見えるが。

少し溜息を吐いた後

「……ま、まあ……よろしくね、アルマさん」

すると、こちらに向き直り、きつく睨みつけてくる。

黒の短髪で、ボブカットというのだろうか、そんな髪型で、目は釣りあがっている。

……怒っているからだろうが。

おそらく年下だろうが、何故か『さん』を付けないと恐ろしい事になりそうだからつけておこう。

ジャックさんの言う通り美人だ。

「………な、なんです……?」

しばらく睨みつけていた彼女は、瞬間表情を変えて、顔を赤くしながら

「……よ、よろしく………」

小さく挨拶してくれた。

「……ああ。よろしく」

「……に、二回言う必要ないだろ」

「それもそうだ」

「おっ！アルマ、顔赤いじゃねえか。いやー、やつぱ可愛いわー。おじちゃん感激!!」

その言葉を聞いて、ほんのり赤い顔から一変

「はあ!?!うっせえよ!!おっさん!!」

「いやまあそう言わずに」

「あー……このおっさん嫌いだわ……」

面倒だと言わんばかりの声で呟く。

「ま、こんな感じの俺達さ。よろしくな」

「ええ。よろしく」

しばらく話をしていると、唐突にジャックさんが切り出した。

「それで、ムゲンよ」

「なんです?」

「ムゲンとこの戦艦、グロ……テスクだっけか」

「バカ、グロリアスだ。おっさん」

的確……かどうかは分からないがフォローをいれてくれるアルマさん。

「そうですね。グロリアスがどうしました?」

「そこから、リナちゃんだけ降りてきたんだけどよ。ありやあ、なんかあるんじゃないかねえかと思うんだよ」

「リナが……!?!」

「ああ。服は血だらけで、何事かと思ったけど、とりあえずお前んとこのヤツらで作った家に送ったぞ」

「……………そう、ですか……………」

俯いて考えていると

「会いたいなら会って来ればいいじゃん。バツカじゃねえの?」

「え……………」

顔を上げると、アルマさんは呆れながらこちらを見ている。

「お、俺、そう見えてた?」

「お前って、俊太郎に負けてないくらい単純だな」

「え……………」

「褒めても何も出ないっすけど?アルマさん」

素直に喜んでいる俊太郎。

「うっせえ！褒めてねえよ!!!」

それに反応して怒鳴るアルマさん。

呆気にとられながら彼女の顔を見ていると、少しだけ顔を赤くして

「さ、さっさと行って来いよ。めんどくせえなあ……」

と、そっぽを向いてしまった。

「ま、気になるなら見て来いよ。俺たちはここにいつからさ」

「……わかった」

俺は部屋を後にし、自宅へと向かった。

基地を出て、港の近くにある丘を指す。

丘を登ると、だんだんと見えてくる木造の建物。

あの場所だけは前に来た時と変わらない。

少しだけ緊張しながら扉をノックする。

「……はい……?」

ゆっくりと扉が開き、会えるのを夢にまで見た愛おしい女性が現れた。

「……リナ……」

「ムゲン……………!!!」

たった2ヶ月会っていないだけなのに、こんなにも久しく感じる。

彼女をこちらへ引つ張り、思いつき抱きしめた。

「あ……………おかえり……………」

耳元で小さく彼女は言う。

「……………ああ。ただいま」

「本当に……………会いたかったよ」

「俺もさ。リナが無事で良かった」

「……………私は……………」

彼女は、そつと離れた後、俯いた。

「……………どうした？」

顔を覗き込むと、彼女は涙で顔を濡らしている。

「……………私は……………何もできなかつた……………」

「何が……………あつたんだ？」

「……………」

リナは俯いたまま、黙り込んでしまった。

「とりあえず、家に入ろう。話はそれからいい」

リナの頭を軽く撫でてやる。彼女は小さく頷く。俺は彼女の手を引いて家へと入った。

彼女を椅子に座らせ、震える小さな手を優しく包み込む。

「……………リナが落ち着くまで、ずっとこうしてあげるから。何も怖くないよ」

「……………うん」

グロリアスの中で起きたことを知っているのは、彼女しかない。

だからこそ、聞かなければならないんだ。

辛い事だとしても。歩みを……………止めるわけにはいかない。

一時の静寂。リナの手は震えていて、冷たかった。

そして、やっとリナが小さく呟いた言葉は

「……………皆……………」

そんな一言だった。

「リナ？」

「……………アウロラ……………」

そう、どこか変だった気持ちがあつと理解できた。

アウロラが……………どこにもいない。

「アウロラが……………!?!」

「……うっ……くっ……!!私……!!!」

「リナ、大事な話だ。グロリアスで、特務試験隊で一体何があった……?」

「……………わ、わたしは……………」

「いい、ゆつくりで。落ち着いて話してくれ」

小さく頷いた後、彼女は口を開いた。

「……………1週間前の事。遠征から帰還したグロリアスに、突然知らない兵士達が乗り込んできたの」

「兵士が……………?連邦か?ジオンか?」

「……………連邦……………。……………よく覚えてるよ」

リナの言葉に、怒りを感じた。今まで見たどんなリナよりも、恐ろしい怒り。

「……………私は整備していて、アウロラを部屋で寝かしていた。その時、アウロラの面倒を見てくれたのはファングさんで」

「実際そこで何があったのかは分からない。けど、気づけばファングさんとアウロラは人質にされてた」

「……………彼らの要求は、トリントン基地への攻撃。出撃してくる防衛隊は全て撃墜というものだった」

「この要求が認められなければ……………あ、アウロラ……………から……………ここ、殺すつて

……」

「……なんだと……?」

「これが連邦のすることか?」

「人質を取っておいて……幼い子供まで殺すだど!」

「だから……従うしかなかった」

「だが、リナ、お前は どうして降りてこれた……?」

「……トクナガさんが庇ってくれたから……」

「トクナガさんが……?」

「うん。【俺たちは嘘はつかない】という証明のつもりとして、リリーちゃんと私が狙われた」

「……どうして……女性ばかり……」

「分からない。けど、男性なら使えるだろうとも思ったんじゃない?」

「それを……庇ったのか?」

「うん。寸での所で。けど……トクナガさんはそれで怪我を……」

「何……!?!」

「足を撃たれて……」

「……」

背中から怒りと憎悪がゾワゾワと駆け巡った。

「それで……ユーリが基地を攻撃したわけか」

「……うん。この時ばかりはムゲンも道夜さんもいなくて良かったと思えた」

「きつとムゲンはアウロラを盾にされたら……」

「……ああ、抵抗できる自信は無い」

……出来るはずがない。

「……リナ、グロリアスはどこに？」

「分からない。……ムゲン、ごめんなさい。私……母親失格だよ」

「……そうかもしれない」

「……うん」

「でも。リナやアウロラが辛い時にいてやれなかった俺も……父親失格だ」

「あなたはでも……」

「だからこそ、今度は…道を間違えないようにしないと」

優しく彼女に微笑む。

「ムゲン……」

「失敗したなら、次失敗しないように活かせばいい。そのためにも、今はみんなを救う方法を探さないと。そうだろ？」

「……………うん」

彼女は、小さく笑ってくれた。

「あ、やつと……………笑ったな」

「あ……………。ありがとね、ムゲン」

「気にするなよ。俺は、お前に数え切れないほど救われた。今度は【返していかないよ】」

「……………」

唐突に扉が開き、黒い服を着た男が入ってくる。

「お前……………」

「やあやあ！お楽しみ中に悪いねえ!!よっ！久しいな、ムゲン!!」

そうやって入ってきたのはカカサだった。……………カカサなら……………。

「カカサ、一つ頼みが——」

「グロリアスの場所だろ？分かってるって」

「お前……………」

「いやあ、盗み——ゲフンゲフン。つい通りかかったら聞こえてね」

「……………」

「カカサさん、それ本当ですか？」

「おうよ！この天下のカカサ・キヤモイ！断じて盗み聞きなんかしていないぞ！」

「……そんなのはいい。すまないが、教えてくれ」

「…無論さ。そのために不法侵入してるんだからね」

この怪しい男。本当だったらぶん殴っている。

だが、こんな時は本当に必要な存在だ。

「もともと、君にも伝えようとしてたわけだし、丁度いいし」

「……にも?」

「ん。ああ、道夜つちにさ、先に伝えてたんだヨ。グロリアス内部で起きたことをね」

「お前、知ってたのか」

「モチのロン。スパイとして潜入してたら運悪く遭遇しちゃって——」

カカサの胸ぐらを掴み叫ぶ。

「知ってて……!!!お前……!!!」

彼は平然と言葉を続ける。

「お言葉だけどもゲン君。君にそんなことをされる理由がないんだけれど?」

「な、なに!?!」

「君は僕たちの【敵】だよ?僕ちゃん連邦じゃなくてジオンだから」

「………す、すまない……」

そうだ。状況を理解していないのは俺だった。

それに、カカサに声を上げて言える立場でないことも。

カカサから手を離すと、彼は掴んだ場所を丁寧に叩いた後続けた。

「ま、君の気持ちも分かるけどもさ。僕つちも同じ立場だったらそういう行動していたと思うよ」

「カカサ……」

「続けるよ。グロリアスがいる場所は、実は俺にも分からないんだ」

「はあ!?!お、おま——」

「まあ聞いて。そこで提案。いる場所が分からないなら、こちらへ誘い出せばいい。でしよ?」

「……でも、どうやって……」

「その作戦の前に、乗っ取った彼らが何をしているか、少し教えてあげるよ」

「うん……?」

「彼らはね、グロリアスに乗っ取った後、ムゲン君達の名を騙って人から金を巻き上げたりしてる。ようするにクズってこと」

「……」

「でもいいよね、君たちの名前を騙っているおかげで、本物に被害が行ってくれるんだからね。入れ食い状態さ」

「……本当にクズだな……」

「まったくだね。この僕ちゃんでも考えても行動しないことを簡単にやってのけるんだから」

考えたことあるんだ……。

「というところで、彼らを誘い出すのは簡単な話、金で釣ればいいのさ」

「金で？」

「そう。例えば、『賞金首のエースパイロット』とかね」

「……で、そのパイロットってのは？」

「とっておきを用意してやろうじゃないか。なあ、ムゲン君」

そう言っって怪しく微笑んだ。

察しがついてこちらもニヤリと微笑む。

「……ああ。彼らにとっておきをプレゼントしてやらないとな」

「と、言うわけでリナっち、しばらくここでお世話になっちゃうぜ!!」

「ど、どういうわけです!?!」

「……ま、真面目に言うなら、俺じゃなくて…。クロノード君？」

ゆつくりと入ってくる男。ああ、間違いない。

「この子——いや、ルナを……預かってほしい」

彼の足元にはルナちゃんがいた。ルナちゃんを……預かる……？

「クロノード、どういうことだ？」

「……理由は……聞かないでくれ」

「何でだ!? お前、ルナちゃんが寂しがるとはじゃないか!!」

「だからお前たちに頼んでいるんだ。……俺は……」

「クロノード……?」

彼の様子はいつもとどこかが違っていた。

「頼む。聞いてくれないでくれ」

「分かりました」

「り、リナ!」

「私は構わないよ。それに、ムゲンに力を貸せるわけじゃないし。だから、今はルナちゃんだけでも守ってみせるから」

「……すまない……えつと……リナ」

「……大丈夫ですか? クロノードさん」

「あ、ああ。大丈夫だ」

そんな彼を見ながら、俺は違和感を感じていた。

その日は、クロノード、カカサを泊め、久々に昔の話で盛り上がった。

ルナはクロノードにくつついて静かに眠っている。

リナも寝息を立て眠りについていたが、カカサだけは、外で空を見つめていた。「どうした？眠らないのか？」

「……………なあ、ムゲン」

いつものノリで返してくると思いきや、彼は真剣な眼差しでこちらを見つめる。

「……………どうした？」

「……………なんか言いたいこと、あるんじゃないの？」

「え」

「例えば、【クロノード君の違和感】……………とかね」

「……………ああ。変だったな」

「……………最近、余計ひどくなってるよ」

「どういうことだ？」

「お前には、しつかり言っておく必要がある。ルナを預けなければならない理由を」

「……………教えてくれ」

「クロノード君……………いや、クロノードは強化人間ってのは知ってるよね」

「ああ。幼いころ調整を受けたとか」

「……その副作用で、寿命が短くなってる。無論、道夜君も含まれる話だが」
「……………」

「クロノードは、最近急激に記憶障害が起きてる」

「……だから……リナの名前で……」

「そうさ。最近じゃ愛する娘の名前さえ忘れそうになってる」

「……………そうか……………」

「俺の見立てなら、後4年」

「……クロノードが……死ぬ……………」

「……………ああ。認めたくもない事実だよ。だけど、現実さ」

「そんな……………」

「これは、俺とクロノードで決めた。彼は言ったよ『俺の記憶にルナがいるうちに別れたい』ってな」

「おかしい話さ。どうして家族が別れなきゃならんのよ。でも、クロノード君の意志は……叶えたいじゃん？」

「そこで君たちを頼った。……………どうか頼む。彼のために、いいや！ルナのために、あの子をここにいさせてやってくれ!!!」

カカサは膝をついて頭を下げた。

「か、カカサ!! いいんだ!! 分かってる!! そこまで言われたら断れないし、断る気なんてない!!」

「……………すまねえ……………すまねえ……………。俺じゃあ……………アイツを救えないんだ……………!!」

「カカサ……………」

カカサは泣いていた。友のために。

断るなんて出来るかよ。

理由を知ってしまったら……………。

少しだけ生暖かい風が、俺たちの間を抜けていった。

49 完

50 : 罰

宇宙世紀0089. 7. 22 トリントン基地内で内乱。第00特務試験MS隊追撃派が擁護派と衝突。

間が悪い、というのはこういう時に使う言葉だろう。

今にもその場で撃ちあいが始まりそうな空気。それを止めたのが俺だということ。

火に油を注ぐような行動である。無論、俺は追撃派に捕まり、地下の牢屋へ連れていかれ——

「ぐあっ!!」

「立てよ。てめえらのせいで俺たちの仲間らは死んだんだ」

「……………ぐっ……………」

思うように立ち上がれずにいると、髪を引っ張られ、強引に視線を合わせられる。

「どうだ？俺たちを裏切った気分は。最高か？」

「……………すまなかつ——ぐっ!!」

言葉さえも遮られ、間断なく殴られ続ける。

痛みよりも、俺たちの部隊がしたことを悔やんで。

「てめえに謝られるつもりはねえぞ。謝る前に殺してやる」

「……………」

殴られている間、こんなことが昔にもあつたことを思い出した。

研究所での対応も、こんな感じだった。

抜けだしたらどこかの骨が折れるまで殴られ続けたっけ。

「はあ……………はあ……………さ、さすが……………強化人間だな……………」

「……………」

肩で息する兵士を、ただ見つめることしか出来ない。

抵抗する気が起きなかった。こういう扱いを受けるのを知っていたから。

それでも、彼らはもつと辛い思いをしている。

仲間を殺された。それは、耐えられない事だから。

「どうした？抵抗してみろよ。昔みたいに殴つてみるよ!!どうせ最初から裏切るつもり

だったんだらう？」

「……………ち……………ちがうさ……………裏切るつもりなんか……………」

「じゃあなんで攻撃してきた!?!なぜ仲間を殺した!?!」

「……………」

返す言葉が見当たらない。

俺は攻撃していないどころか、その場にいなかったのだ。当然だろう。

「……………」な、なんで黙るんだよ」

「……………」気に……………」しないでくれ」

「ちっ…………」。お前、いつから道夜みたいな反応するようになったんだよ。つまらねえじゃねえか」

「……………」

言葉を返せずにいると、男は大きく伸びをした後

「まあでも、てめえにはまだたつぷりと地獄を見せてやるよ。なあ？ムゲン」

それから、どれくらい殴られたのだろう。

男は満足したのか、牢屋に鍵をしてからどこかへと行ってしまった。

左腕が折れてる。……………脛が重い。

「……………」

折れた腕を右腕で撫でる。

体を起こし、折れた腕を赤いリボンで固定し、簡易的な治療を取った。

「……痛いな……」

身体を再び床につけると、自然と睡魔がやってきて、俺を深淵へと誘った。

夢を見た。

ひどく、悲しく、辛い夢。

道夜が、ユーリが、フアングが殺される夢。

アウロラを守ってリナが死ぬ夢。

リリーが泣きながら助けを求めながら死んでいく夢。

クロノードが苦しみながら死ぬ夢。

カカサが誰かに刺されて死ぬ夢。

そうして最後に残った俺は、一人歩いている。

そんな夢だった。

救いも希望もない、夢。

負の連鎖は終わらない。

地獄は地獄を呼び、そして絶望へと昇華する。

目が覚めれば再び誰かに殴られて、痛みを感じながら再び眠りにつく。

その繰り返し。

どんな事されても、抵抗できなかった。

それだけ、彼らも傷ついている。

【誰かが、罪を背負わなければならぬ】

それならば、俺が……背負うべきなのかもしれない。

痛みと苦悩が混ざり合い、再び堕ちる。

「起きろ」

その言葉で地獄から引き上げられる。引き上げられた場所も地獄だが。

「……………」

「だいぶくたびれてきたな。こちらとしては気分がいいよ」

疲れからか出てこない声を何とか振り絞って発する。

「……………満足……………したか？」

「いいや？まだだ。まだ仲間の分は終わってない」

「……そう、か……。すまなかつた……—がはっ！」

腹へ一撃。立つてられないほどの苦痛。

「あ……ぐあ……は……」

膝をつき、痛みに意識が持っていかれそうになる。

その姿を見て嬉しそうに男は言う。

「やっとその姿が見れたぜ。最高だぜ。一方的に殴れるつてのはな！」

「……………」

「その面が前から嫌いだったんだよ!!!そうやって余裕を持った顔が!!!」

何発も顔へ打ち込まれる拳。

「う……………」

途中意識が何度も飛びかけた。それでも保っていられたのは、仲間が犯した罪を俺が背負わなければならないと思つたからだろう。

右の瞼が開かない。

「はあ……はあ……」

「なんで……………」

「ぐっ!!」

「なんで裏切ったんだよ!!!」

「ぐはっ……!!」

「俺は……!!信じてたのに!!!」

「ぐぐっ……!!」

一撃一撃から、その男の悲しみが伝わってくる。

それに対して何も言葉を返してあげられないことに、誤解だということも出来ない自分の無力さを恨むしかない。

「なんでだよおおおおお!!!」

「………がっ……は………!」

その強烈な一撃は、一発で俺の意識を飛ばした。

倒れる最中、その男の涙が、俺の血が、鮮明に目に焼き付いたまま、深淵へと誘われるがままに堕ちていった。

もう何日経ったのかも覚えていない。

こんな気持ちになったのはいつぶりだろう。

研究所の時と比べれば何とも無いが、ただ、この虚しさだけは、昔よりもひどく感じた。

俺の部隊が背負った【罪】に対する【罰】ならば、それはそれでいいのかもしれない。地下へと降りてくる足音が聞こえる。

一つ……二つ。二人か。

今日もいつも通り殴られるかと思っていた。

だが、俺の予想は裏切られ……。

「入れ」

「……………」

背後から蹴りを入れられ体勢を崩す女性。

霞む目を何とか開いて確認すると、地面に伏していたのはマヤだった。

「マ……………ヤ……………」

「そこで大人しくしてろよ。あとでたっぷり遊んでやるぜ」

「……………」

マヤは動じず、静かに兵士を睨みつけている。

「……………ちっ」

兵士は小さく舌打ちをした後、階段を昇っていった。

「……………どう……………して——」

「……………」

マヤは口に人差し指を当て、小さく笑った後、メモに何かを書き出す。少しして紙を破り、こちらへと差し出した。

『あなたが心配だった。皆心配してる。皆の代わりに私が見に来た。』と書いてある。

「……すまない。この通りどうしようもない状況さ」

『気にする必要はない。私達はあなたを助けることが出来なかった。』

「……………マヤ」

マヤは、ポケットから小袋を取り出しこちらへと渡してくれた。

「これは…………？」

彼女は、開ければ分かる、というような表情でこちらを見た。

恐る恐る開けると、中にあったのは小さいブロック状のクッキー。

食料だ。何日ぶりの食事になるだろうか。クッキーを口に入れると、ほんのりとした甘さがたまらなく美味しく感じる。

「……………美味しいな。こんなに美味しい飯は久しぶりだよ」

微笑むと、彼女はニッコリと笑い返してくれた。

久々の食事は俺の脳を活性化させ、再び生きる気力を吹き込んでくれた。

「ありがとうマヤ。……………さて、そろそろ動くか」

「……………?」

不思議そうな顔をするマヤ。

「ああ。そろそろ、ここを抜けださないと、つて」

すると彼女はニヤリと笑った後、メモを差し出す。

『私もただ普通に捕まったわけじゃない。もう手は打ってる。』

「え……………」

「うわああああ!!」

彼女の言葉に驚いている瞬間、叫び声と共に階段から兵士が転げ落ちてくる。

「なんだ……………!!」

「なんだと言われたら、そりゃあ俺たちに決まってるだろ?」

牢屋の前に立ったのはジャックさんたち擁護派のメンバーだった。

「皆……………!!」

「つたく。世話かけすぎなんだよ、バカ」

「とか言ってますけど、ムゲンさんがいない間、アルマさんが一番心配してましたよ」

「う、うるせえ!! ジャック! さっさと鍵開ける!!」

恥ずかしさを隠すように彼女はジャックに叫ぶ。

「あー。わかってるって……つと。これだな」

牢屋の鍵が外され、ゆっくりと扉が開く。

「……………よし……………行こう」

左腕を抑えながら、牢屋を抜け出す。

しかし、抜け出せたはいいものの、いつ兵士が来るかがわからない。

階段は一つしかない。運が悪ければ鉢合わせしてしまう。

「よっしゃ。急ごうぜ」

小さな声でジャックさんが言う。

その時は運がよく、なんとかバレずに逃げる事ができたが、追手がいつ来るかは分からない。

とりあえず一度彼らの隠れ家に身を隠し、これからどうするかを決めることになった。

一方の俺は、隠れ家につくや否や、ベッドに寝かされて横になって話を聞いていた。

「さて、どうすつか」

「……………どうするも何も、逃げるしか……………」

思えば彼らに事の内容を説明していなかったのを思い出す。

「……皆。聞いてくれ」

体を起こし、皆のほうを向く。

「どした？ムゲン」

「実は、話していいことがある」

「話していい事？」

それから、俺は事の内容、そして、トリントン基地を攻撃するに至った理由を説明した。

「……なるほど」

「で、ムゲンたちの部隊は攻撃してきたってことか……」

「ああ」

「それで？これからどうする？」

「……まずは、基地にいる兵士の誤解を解く事からだ」

「誤解を？」

「そうだ。俺たちの信頼は、そんな簡単に消されていいはずがない。繋がりは……断ち切らせはしない」

「……ムゲン」

全員が黙り込む。その静寂を切り開いたのは俊太郎だった。

「そうですね。俺も手伝います！」

「俊太郎……」

「ムゲンさんの気持ちは良くわかりました。俺も力になれますか？」

「……………もちろんだ」

「そりやあいいいな！俺も手伝ってやるぜ！」

続いてジャックさんが

「繋がり……………か。お前って、ほんとバカだよな」

「アルマさん……………」

「バカだけど、まあ手伝ってもいいかもな」

「……………！」

彼女は照れながら目を逸らしながら呟いた。

肩をトントンと叩かれる。

「……………マヤ……………」

「手伝うよ。私も。」

皆の気持ちは心に染みた。

「ありがとう……………。皆！」

次の日、俺たちは分かれて行動することになった。

俺はジャックさんと行動し、彼らの誤解を解く事に集中した。

「……………ムゲン!?どこに行つたかと思えば……………ここにいたか」

兵士の一人がこちらを睨みつける。

「…話を聞いてほしい」

「ああ!?裏切り者の言葉なんか——」

「まあ、いいじゃないか」

「てめえ!裏切りを庇うつてののか!」

「話くらい、聞いてやれよ。コイツの目、マジだろ?」

ジャックの真剣な眼差しが兵士たちを黙らせた。

俺は、言葉を続けた。

「基地の攻撃は誤解だ。俺たちの部隊が故意に行つたことではない」

「何?そんなわけ——」

「本当だ。話を聞いてほしい」

「……………」

彼らの沈黙が続く。俺は静かに口を開いて続きを説明する。

「グロリアスが基地に着艦した後、見知らぬ兵士たちが俺たちの艦を乗っ取つた。人質

は幼い子供と部隊長だ」

「射殺する意思がある証明としてリナ・ハートライトとリリー・クリーヴズを射撃しようとした」

「それを庇いダイチ・トクナガが負傷。リナ・ハートライトは隙を見てなんとか艦を抜け出し保護された」

「人質を取られてしまつては彼らの要求に従うしかない。……だから、攻撃した」

「……そして、今彼らがしていること、それは俺たちの名を騙り、罪もない一般市民から金を奪うという行為」

「この基地を、俺たちの部隊が傷つけたことは否定もしないし、申し訳ないと思つている。それでも、分かってくれ」

「俺は……何もしてあげられなかった。どちらにも……」

その場にいた全員が、地面を向いて目を伏せた。

「……仲間を許してほしい。俺は、どんなことをされたつて構わない。君たちの仲間を傷つけたことは変わらないのだから」

「……そういうことだったか」

兵士の一人が呟いた。

「え……」

「どうりで不自然だったわけだ」

「どういうことだ？」

「だって、あの時、お前は出撃してこなかった。しかも、MSを攻撃したのは紫のMSだけだった。本当ならニュータイプだって出撃するであろう場面だ」

「……………」

「俺、信じてみようと思う。ムゲン・クロスフォードを」

「……………ありがとう……………!!」

その兵士の言葉を皮切りに、次々と賛同の声が上がる。

「あのムゲン・クロスフォードが頭を下げたんだ。俺も信じるわ」

「俺も……………信じてもいいかもな」

歓声が上がる中、その情景を見たジャックさんが

「案外、簡単だな」

俺は、素直にジャックさんに感謝した。

「ジャックさんのおかげですよ」

「俺は何もしてないがな？」

「いえ。あなたの真剣な眼差しのおかげです」

「へっ……………そう言われると照れるじゃないか——ムゲン！あぶねえ!!」

「なっ!？」

瞬間、俺の前へジャックさんが立ちふさがり、手を広げた。

銃声が響き渡る。

その音で、さつきまでの歓声が一瞬にして消えた。

「ぐ……ムゲンは……やらせねえ………」

「ジャックさん!!」

彼は震える手で銃を取り出し構える。彼の背中で何も見えない。

「へ………へへ……俺は昔……凄腕のスナイパー………だったのさ」

「喋っちゃダメだ!すぐに体を——」

「いけねえなあ……ムゲン」

「え!？」

彼はこちらをチラッと見て、二つと笑って見せた。

「敵が……居なくなるまでが………戦争………だろ。だからさ………」

「一発で仕留めないとなあ!!!」

その言葉と共にジャックさんが一射。すれ違うように相手からの一射。

それが、ジャックさんの左目を貫いた。

反動で後ろへ倒れるところを、支える。

「ジャックさん!! ジャック!!!」

「……………へへ……………見な。俺の……………射撃は……………左目が無くても……………百発百中……………だ」
「もう、何も言わないでいい!! 俺が……………俺の甘さが……………! 油断が……………! 俺のせいで……………!!!」
「お前は……………甘ちゃんだからな。……………その甘さで、人が傷つくかもしれないねえ……………」
「その甘さで自分が死ぬかもしれないねえ……………。けどよ、それでもよ……………」

彼は血で染まった左手で俺の頬を撫でる。

「それが……………お前の……………良いトコなんだよ」

「だから……………俺は、お前を守ったんだ。……………お前の甘さに毒されちまってな……………」

「……………悪くねえ……………死に方かもな」

「お、俺は……………!!!」

「責任……………感じるなよ? これは……………俺が行動した【罰】なんだから」

「ジャック!!!」

「……………悪いな。後を任せる羽目になって」

「……………いい、いいんだ。俺は……………俺が……………後は何とかするから!」

「……………助かるぜ……………。これなら……………俺も安心して……………逝けるな」

「もう一度……………アルマを……………からかいたかったぜ」

「……………まったく、ほどほどにしないと手が出るんじゃないかい?」

「ははは。 そうだな。 ……また……いつか……な」

彼は静かに目を閉じ、眠るように息を引き取った。

彼は微笑んでいた。彼を看取り、静かに立ち上がり呟く。

「…ジャック。 あんたの【罰】…俺が受け継いだ」

その場にいた誰もが、彼の突然の死に衝撃を受け、その行動を称賛し、悼んだ。

それから、皆のおかげで第00特務試験MS隊の誤解は晴れ、再びトリントンの基地での信頼を取り戻すことができた。

だが、失ったものは、取り戻せない。

「…3人とも、聞いてほしい」

「どうしました？」

「なんだよ。 さつきからテンション低いな」

「…ジャックが…死んだ」

「え…」

アルマさんの驚いた表情を初めて見た気がする。

「…どうして…」

「俺の甘さだ…彼が庇ってくれた」

「くっ……………うう……………!!!」

俊太郎は地面を殴りながら泣いた。

それは、自分の無力を呪うように。

「なんで……………あのおっさん……………。畜生!!!」

叫びながら空を仰ぐアルマさんの瞳には涙があふれていた。

「……………っ」

マヤも、静かに涙を流し、彼の死を悲しんだ。

泣きたい気分にもなった。それでも、泣かなかつたのは、きつと彼の【罰】を一生背負っていく意志の表れだったのかもしれない。

その夜、俺は久々に【彼】と再会した。

「……………久しいな。ムゲン」

「ああ。久しぶりだな。道夜」

カカサの話を聞いた道夜も、トリントンへと戻ってきていた。

「…状況はどうだ？」

「まあ、誤解はなんとか解けたかな」

「そうか。流石だな」

彼からの言葉は、今の俺には追い打ちのようなものだった。

大切な何かを失つても、手にするものなのか……？

「お前のせいじゃないさ」

「道夜……？」

「話は聞いている。お前を庇って誰かが死んだんだろう？」

「……ああ」

「お前のせいじゃない。お前は前を向け。それが死んだ奴への償いだ」

「……ああ。前を向くことが、前へ進むことが俺のできる償いだ。……だが、あれは俺のせいだ」

「ムゲン……」

「俺のせいだからこそ、彼の【罰】を背負って前へ進む。それが彼への償いであり、俺への【罰】だ」

俺の【罰】はきつと、【誰かの命を踏み越えてでも時代を見届ける事】なのかもしれない。い。

そして、数々の【罪】を重ねた俺を救ってくれた人たちに【返して】いかなければならない。

「甘さも、俺の弱さも、罪だ。だが、それでも俺は前へ進む。この両手で出来る事なんか

限られてるから」

「……お前は会うたびに成長しているな」

「そんなことないさ。俺は、まだ変わっていない」

「……皆そうさ。俺も、ユーリも、リナもな」

「…世の中上手くいかないもんだな」

「……まったくだな」

彼と共に月を見上げた。そして静かに時間は過ぎていく。

51 : 役割

宇宙世紀0089・8・1 第00特務試験MS隊擁護派に八雲道夜とエトワール・
ブランシヤールが合流。

「……………」

残されたものが成すべきこと。

それは前に進むこと。

だが、本当にそれだけなのだろうか？

考えたところで、答えは見つからないだろう。

それでもいつか、この問いにも答えが見つかる日が来る。

だから、そのためにも今は前へ——

誤解が解けたおかげか、トリントン基地は少しだけ活気付いていて、ちらほらとMS
の修復をする人々も見えるようになった。

しかし、誤解が解けてもこの問題の中枢は解決できていない。

第00特務試験MS隊を乗っ取り、俺たちの名前を騙る奴等を何とかしなければ。
「考えすぎるなよ」

「……え」

活気付いた基地をのんびりと眺めていた俺の肩に手を置き、クロノードが笑って見せる。

「お前は一人じゃないだろう。少なくとも今は、カカサも俺もお前の味方だ」

「……俺、考えているように見えた……？」

すると彼はふっと笑った後

「ああ。顔に考えてるって書いてあった」

「……」

俺は随分と顔に出やすいようだ。前からだが、この顔に出ないようにはしているつもりなんだが。

「そこがお前の良さの一つさ。顔に出るから、分かりやすい」

「それは良い事なのか……？」

肩を竦めながら言葉を返す。

「ああ。だから、お前に手を差し伸べたくなるのさ。少なくとも俺はそうだ」

「……」

「忘れんなよ？たとえ敵同士でも、お前だけは死なせない」

「おいおい……………」

「まあでも、俺が殺すって事になったら話は別だがな？」

ニヤリと笑う彼に、俺は軽く鼻で笑って

「無論、俺は負けないよ？」

「言ってくれるじゃないか。でも、その意気だ」

そう言って笑う彼を、俺は少しだけ悲しい気持ちで見ていた。

カカサから伝えられた言葉が蘇る。

『クロノードは、最近急激に記憶障害が起きてる——俺の見立てなら、後4年』

「……………」

彼が死んでしまう。そのことを考えるたびに胸が苦しくなる。

頼もしく、背中を押してくれている彼が死ぬなんて——

「どうした？ムゲン」

彼は不思議そうにこちらを見つめる。

「あ……………いや……………」

考えていることを悟られないように、目を静かに逸らす。

「……………そうか」

「…さて、俺は先に戻るぞ」

踵を返し、基地から反対方向へ歩きながら彼は言う。

そんな彼の背中を見送りながら小さく頷いた。

吹き抜ける暖かい風。額から流れる汗を拭いた後、俺は基地の食堂へと向かった。

食堂は相変わらずの賑わい。正直な話、食堂はこうでないと。

皆戦いの疲れを癒すための場所と思って使っているのだろう。無論、それは俺も同じこと。

基地の食堂は、当然だが戦艦の食堂とは違って広く、多くの人たちが行き来している。

冷房が効いているおかげか、ひんやりとしていて涼しい風が抜けていく。

「ムゲンさん」

懐かしい青年の声。前を見ると、そこに立っていたのはエトワールだった。

薄い青の髪は前よりも少しだけ伸びていて、それを丁寧に髪留めで留め、ガーネットのような瞳が、前よりも凛々しく映る。

昔は一瞬女性と勘違いしたが、今は違う。凛と強い男性と見て取れる。

そうであったとしても、今も昔も変わらずエトワールは美形だ。

バランスの良い顔立ちで、鼻も高い。

背が伸びたから男らしく見えるのか、それとも、多くの戦いを潜り抜けてきた雰囲気からかは分からないが、彼もまた、成長している。

「エトワール。どうしたんだい？」

「いえ、ぼーつと立っていたので」

「あ、ああ……」

「そんなところで立っていたら他の人の邪魔になります。席も空いていますし座りましょう」

「そうだね。そうしようか」

俺とエトワールは近くの席に腰を下ろす。

暫くの沈黙の後、最初に切り出したのはエトワール。

「話はカカサさんから聞きました。誤解を解くまでにかなり時間が掛かったとか」

「……まあ、そうだね」

「……失った人は戻りません」

「エトワール……？」

「前に進む事も大切です。でも、亡くなった人を悼み、彼らを思い出すことも大切です」

「……」

「今のあなたは、自分を情けないと思っている。だから、きつとこれから無理をする」

「俺は——」

「あなたが思っていないくとも、顔にしつかりそう出ていますよ。何とも言えない表情で」
「…困ったな。俺もしつかりしないと」

「でも、あなたの気持ちも分かります。お互いに、大切な人を失っていますからね」

「…ああ。でも、それは俺たちだけの話じゃない。皆…：戦争に巻き込まれたすべての人が言える事だよ」

「ええ」

「今回の事もそうだ。同軍が同軍を攻撃するなんて、あつてはならない」

「こんなバカげたこと、もう本当に終わらせないといけない」

すると彼は小さく笑った後

「だから、私達も来たんじゃないですか」

「……………」

俺は正直なところ、彼とここまで碎けた言葉で会話をしたことに驚きを隠せない。前まではここまで物柔らかな人とは思えなかったのだから。

丁寧な口調は今も昔も変わらないが、昔は言うなら先生と生徒、上司と部下みたいな関係。

今は、聞き上手な友達。そう感じられる。

「それで、これからどうするんですか？」

「…そうだね……。今カカサがああのを流してる頃だと思うよ」

「なるほど。賞金首のエースパイロットが、トリントン基地を襲っているって奴でした
ね」

「そうそう。上手くいけば近々決着を付けられる」

「……気合い入れないといけませんね」

「ああ。それだけじゃない。まだやるべきことがある」

「……………」

俺は立ち上がり、食堂の兵士全員に叫ぶ。

「皆聞いてくれ!! 実は——」

全てを伝えると、皆それぞれが声を上げ賛同してくれた。

そうだ。俺たちで決着を付けなければならない。

「ムゲン」

廊下を歩いていて、背後から声をかけられた。

振り返る間もなく、声の主は俺の隣に並び

「少し話でもしないか」

「どうしたんだい？アルマさん」

「……うつせえ……。いいだろ別に」

ツンとした態度でそつぽを向く彼女。

沈黙の中、俺とアルマさんは歩き出す。

何も会話する事もなく歩き続けているのが、なんだか可笑しくなって、思わず笑ってしまった。

「ふっ……あはは!!」

「なんだよ急に。気持ち悪いな」

若干引き気味の彼女の言葉、俺はそれに対して

「ああ、いや。なんか、可笑しくってさ」

「よくわかんねえ……」

「ほら、話さない？って聞いてきた本人が何も言わないから——」

「ああ!?!そ、そりやあだつて……」

瞬間、彼女の顔が赤くなった。

「……うん？なんかまずい事でも言ったかな」

「……っ！なんでもねえよ!!!」

再びそつぽを向く彼女。

「それで？何の話？」

彼女の言葉を待つっていると、落ち着きを取り戻した彼女は

「……あーいや。……アンタは、ジャックの事をどう思っていたんだろうって」

「ジャックは、俺を庇った時、行動した【罰】と言った」

不思議そうに彼女は首を傾げ

「罰……？」

「ああ。彼のすべてを知っているわけじゃないから、何も言えないけど、彼はその時そう言ったんだ」

「そして、残された俺は、彼の【罪と罰】を背負って生きていく」

自らの手を見つめながら、静かに言葉を続けた。

「自分の手で出来る事なんか……限られているのは知っているけど、失った人の分まで生きなきゃいけないから」

「この先の時代は俺が見届ける。ジャックや、ほかの仲間のためにも」

拳を強く握り、胸に当てる。

これが正解ではないかもしれない。それでも、俺が今出せる最大の答え。

「アンタは……強いな」

「強いわけじゃないよ。俺はただ、他の人から何かを受け継いで伝えているだけだから」

「そういうのを強いつて、私は思う」

「アルマさん……」

「アンタの過去の事も、何がそうさせているのかも知らない。けれど、一つ言えることは

——」
彼女は立ち止まり、俺のほうへと向き直る。

「そういう何かを背負って生きている人を、人は強い人と呼ぶんだろ」

彼女の思いがけない言葉に、俺は一瞬硬直してしまった。

俺は小さく微笑みながら

「そう……か。なら、アルマさんも、マヤも、ジャックも俊太郎も、全員強い」

「え……」

予想だにしない回答だったのか、アルマさんから小さく声が上がった。

「皆、特務試験隊が悪い奴じゃない。そう言つて大人数の人たちに反抗していた。普通だったら、弱腰になって、追撃派に下つてしまう状況だったのに」

「それでも君たちは俺たち部隊を守ってくれた。悪い奴じゃないと叫び続けてくれた。だから、皆強い人だ」

照れを隠すように、彼女は目を逸らしながら

「……………ちつ…なんだよ。ちよつとは喜べよ…。なんでこつちが褒められてるんだし

……」

「いいじゃないか。本当の事なんだから」

「うるせえ!!——でも」

彼女は俯き、しばらく唸った後

「あ……あり……がとう」

今まで見たことのない笑顔で礼を言ってくれた。

「………お互い様さ。ありがとう」

俺は彼女の手を取り、握手する。すると

「ばっ!!お、お前っ!!!や、やめろ!!!」

「なんだい?」

「う、うう………お前………後で………覚悟しろよ………」

「………なるほどね」

何となく、ジャックさんが可愛いっていう理由が理解できた気がする。

「な、なんだよ………」

手を離すと、彼女は俺に一切目を合わせずに言葉を返した。

「いいや?ちよつとジャックの言ってた意味が理解できただけさ」

「………ちつ………あのおっさんの言うことなんか——いや、案外…信用できるかもな」

彼女がその時何を想ったのか、俺には分からない。それでも言えるのは、彼女も彼女なりに信賴していたということ。

「……戻ろうか」

「……」

彼女は黙つたまま頷いた。

それからの会話は一切なく、廊下を歩く音だけが二人の間を抜けていった。

誤解が解け、喜ばしいはずなのにマヤや俊太郎の表情は暗いまま。

理由はジャックの死だろう。無論、俺自身も気分が落ち込んでいるのが分かる。

長い沈黙が続き、堪らず声を上げたのは俊太郎。

「あ、あの……。ムゲンさん」

「うん？どうしたんだい？」

「……もし、特務試験隊を救うことが出来たら、俺も部隊に入れてくれませんか」
彼も彼なりに考えたのだろう。この暗い険悪な雰囲気壊す方法を。

「ああ。もちろんだよ」

すると彼は大げさなりアクションを取りながら

「やったあ!!なあ、マヤもアルマさんも一緒にムゲンさんの部隊へ行こう!!」

「……厳密に言えば俺の部隊じゃないんだけどなあ……」

「ちっ……本当に気楽なヤツだよ。お前は」

『でも、それが俊太郎の良い所。』

それから再びの沈黙。

ムードメーカーという存在の大切さを痛いほど感じてしまう。

ここにユーリが居てくれたなら、彼らにどんな言葉をかけてあげただろうか。俺はユーリやカカサのようにはうまく彼らを励ますことは出来ない。

それでも――

「……前を向こう。ジャックは、この先の果てで俺たちを待つてる」

「……そう、ですね。……いつまでも悲しんでなんかいられない」

「そうだな。私達もそろそろ前へ進まないとな」

『皆で行けば、きっと怖くない。』

それでも、運命は残酷だ

彼らを立ち直らせることが出来た途端の事

下から突き上げられるような轟音。
加えて爆音が響く。

「なんだ……!?!」

「お、俺見てくる! マヤ、行こう!!」

「お、おい——」

俺の制止を聞かずに俊太郎とマヤは走って部屋を出て行った。
何度も繰り返される爆音。このままでは建物が崩れる。

「…俺たちも外に出よう。建物の下敷きになってしまう!」

「分かってる! さっさと行くぞ!!」

地面が揺れる。体勢を立て直すのに手一杯だ。

「アルマさん。大丈夫かい?」

「ああ。今のところは」

「気を付けて進もう」

俺たち二人は何とか階段を登り切り、外に出ようとした瞬間。

「つたく…いったいどうなって——」

アルマさんが扉を開いた。その隙間からこちらへ飛来する弾丸を見た。俺は咄嗟に
叫び

「——っ!!アルマ!!!伏せろ!!!」

「!!」

瞬時に体を伏せ、目を瞑る。

流石に助かる気がしなかった。しかし、痛みを感じるといふことは生きていふことだ。

折角治ったばかりの左腕がまた折れている。

恐る恐る目を開くとそこに広がっていたのは、俺たちが先ほどまでいた建物は一発の弾丸によって崩壊させられた跡だった。

なんとか一部は建物として原型は留めているにせよ、いつ崩れてもおかしくない。

そして、瓦礫に下敷きにされたアルマの姿がそこにはあった。

「アルマ!!!」

痛む左腕を抑えながら彼女の元へと駆け寄る。

彼女は瓦礫によって腰から下が動かない状態。まだ、なんとかなるはずだ。

「う……………う……………」

「アルマ……………くそっ……………今…瓦礫をどかすから!!」

必死に瓦礫をどかそうとするが、さすがに片手だけでなんとかできるものではない。

でも、このままじゃアルマは……………アルマは!

「く……………つそお……………!!!」

「……………ムゲン」

アルマは首を小さく横に振った後

「いいよ。もう」

「いいわけ……………つ……ないだろ!!!」

瓦礫を退けようにも重すぎてもとも一人では……………

己の不甲斐なさが、無力さが心を支配する。

「あああああ!!!くそ!!!くそつ!!!」

悔しさから地面を何度も殴りつけた。右腕が折れる事なんか構いやしない。

「なあ……………ムゲン。聞いてくれ」

「アルマ!!もうこれでおしまいみたいな言葉を言わないでくれ!!!」

彼女の右手を握りしめながら叫ぶ。

「こんな終わり方……………私も想像していなかった」

「……………アルマ」

「私は……………お前に出会った時から……………ずっとお前の事が好きだった」

「なんで今そんなことを言うんだよ!!!絶対助けるから!!!」

「いいんだ。私の【役割】はここで終わりなんだよ」

「そんな……!!」

「私は……役割を果たした。だから、ここで終わる。それだけなんだ。お前が泣くことも、悔しがることも必要ない」

「ムゲン……一つだけ……お願い……してもいいかな」

彼女は今までとは違う表情、いや、これが本来の彼女の素顔。

優しい垂れ目で、大きな瞳。

「……なんだい?」

「……キス……して」

「……アルマ……」

彼女を救ってあげたい。だけれど、俺一人でできる事なんか限られていて——
ならせめて彼女の意志を尊重してあげたい。俺にできる事をするしか………ないんだ。

俺は彼女の頭を膝の上に乗せ、彼女の唇にキスをした。

彼女は小さく震えていて、涙で濡れた唇は悲しい味がする。

しばらくして、離れた彼女は

「……ふふ……今、私……あなたの妻より幸せかも」

彼女は飛び切りの笑顔で微笑む。その瞳には涙が溜まっていて

「ムゲン……………死にたくないよ……………死にたく……………ない…。もつとあなたと沢山話したい」

彼女の言葉を聞くと胸が締め付けられるように苦しい。

どうして彼女は死ななければならぬ？

役目がなんだよ。ただ生きていたいだけなのに。

「ああ……………俺もアルマを死なせたくない……………」

「……………そう言ってくれるだけでうれしいよ。マヤと俊太郎の事、よろしくね」

「…分かってるよ。アルマ」

「……………もう時間が無い。私から離れて」

「時間……………？」

「建物……………もう保たないから。早く離れて」

「……………アルマ。……………さよならは言わないよ」

「……………うん。……………行つてらっしゃい。ムゲン」

彼女に背を向け歩き出す。

俺が建物を出ると同時に、今まで均衡を保っていた柱が崩れ、瓦礫の山と化した。

「泣かないさ。アルマ。俺はお前の【役割を引き継いで】前へ進む。後は——任せてお

け」

それから俺は俊太郎、マヤと合流。彼女の死を彼らに伝えた。

俊太郎もマヤも、悲しみはしたが、瞳に決意を宿らせていたのが分かった。

宇宙世紀0089・8・5 第00特務試験MS隊、トリントン基地に帰還。

もうこんなバカげた戦いを終わらせなければならぬ。

ジャックとアルマのためにも。

51 完

52：血濡れ ― 救い ―

宇宙世紀0089. 8. 5 第00特務試験MS隊旗艦グロリアス、トリントン基地に着艦。

ムゲン率いるトリントン全部隊は、大規模な作戦に打って出る。

遡ること1時間前。

食堂に集まる兵士たちへ叫ぶ。

「皆。もうすぐグロリアスがこの基地に来る。その前に作戦をおさらいしておこうと思う」

全員の視線が集まる。小さく深呼吸した後

「今回の作戦はこうだ。MS部隊と、グロリアスに突入する部隊に別れて行動する。今、トリントンの部隊は少数の人しかいないけど、この作戦で行こうと思う」

「まず、MSが前線で敵部隊と交戦する。その隙を狙って突入部隊はグロリアスに侵入。そのまま一気に戦艦を制圧。内部から敵を潰す」

「敵の情報が少ない中でこの作戦は無謀かもしれない。それでも、この基地を守るため

にも、やるしかないんだ。…皆、力を貸してくれ！」

全員に思うところはあるかもしれない。それでも、その場にいた誰もが何も言わずとも従ってくれた。

「……それが逆に少し怪しいとも感じる。

だが、今は疑っている時間さえない。

この先、何があってもその場その場で対応していかなければ。

『大丈夫。何があってもあなたは守るから。』

そんな紙を渡して微笑むマヤ。

「……できれば、そういうことにならなければいいんだけどね」

『未来は誰にも分からない。でも、ムゲンは一人じゃないから。』

「…そうだね。さて、行こうか。マヤは俺と前線での攻撃を頼むよ」

『任せて。MSの操縦には自信がある。』

「……生きよう。勝つために戦うのではなく、負けないために戦おう」

彼女は小さく頷く。

「前方、180m先に第00特務試験MS隊旗艦、グロリアスを確認!!」

司令塔からの伝達を聞いた俺は

「全機、行動を開始する！まずは前線で敵MS部隊と交戦。切り込みは俺とマヤで行く！！」

「ほかの者は基地の防衛を少数と後続の部隊で分ける！……生きよう。この戦い」
決着は……この手で——

「……………つと……」

ポケットから赤いリボンを取り出し握りしめる。

目を瞑り、大きく深呼吸。

一息ついた後

「……行くぞ!!!」

スラスターを起動。グロリアス目掛け突き進む。

「グロリアス、ハッチオープン！敵MS確認！数は3!!」

「了解した。一気に駆け抜ける！」

ビームライフルを構え狙いもつけずに発射。牽制でいい、相手がこれで動くなら。

ビームライフルを左手に持ち替え、サーベルを引き抜く。

戦艦から飛び降りこちらへと迫る3機。

そのうちの1機は紫のMS。ユーリが駆っていたえガンダム。

狙撃型のえと、近接型のジムが2機。

確かに距離のバランスは良い組み合わせだ。

だが――

1機のジムとすれ違う瞬間、サーベルで切り払う。

背後に抜けたジムの両足が切断され、地面へと転がった。

「……」

ビームライフルを転がるジムへ向け、トリガーを引く。

背後からの爆発。恐らくパイロットは死んだだろう。

その光景を見て怖気づいたのか、ジムが後ずさりし始める。

「逃がすか……」

シールドミサイルを放ちながら、相手の死角へ。

素早くサーベルでコックピットを貫く。

サーベルを引き抜くと、ジムは力なく地面へ伏した。

「残りはお前だけだ」

サーベルをえガンダムへと向け睨みつける。

「……だから、何だ？」

「……何……」

「兵士など【駒】だ。使い捨てなんだよ。分かるか？」

「……その駒は、お前の目の前に転がっているだろう」

するとんガンダムに乗る男は大きく笑った後

「ほう……。面白い。なら君に問う。君はいつから——」

瞬間、機体内にアラート音が響き渡る。

背後からの攻撃——!?

素早く振り向きシールドを構えた。間一髪で射撃をガードすることが出来たが
……

見ると、トリントン基地から煙が上がり、さらに後続の部隊がこちらへと迫りながら
俺を狙ってきている。

そうか……。裏切られたのか。

「そちらが有利だと思っていた？ 甘いんだよ。こちらがノコノコ騙されに来ると思う
なよ」

「何故そうまでして……。人の名を騙ってまで……。！」

「金だよ。世界を作るのも、動かすのも。決まってる必要なのは金なんだよ」

「彼らもそうだ。金をポンと出せばすぐに手の平を返す。分かるだろう？ 世界つての
は単純なんだよ」

「……………」

「さて、この状況でも戦おうと思うか？素直に抵抗しなければ——」
俺は迷うことなく背後から迫る敵に引き金を引いた。

放たれたビームは、1機のジムを貫き、虚空へと消えた。

「……………」この白いMSを潰せ!!!徹底的にな!!!」

俺の行動に腹を立てたのか、スガンダムのパイロットは叫ぶ。

それに呼応するように射撃がこちらへと降り注ぐ。

銃弾の雨をガード。収まったと同時にスラスターを起動。

「……まずはお前たちからだ」

ビームライフルを乱射しながら1機のジムへと間合いを詰め、切り抜ける。

続けざまにもう1機のジムを足払い。転んだジムへサーベルを突き立てる。

背後からの殺気。素早く振り向き左手で受け止めた。

ビームライフルが両断され、手元で爆発。

間合いを取り、もう一本のサーベルを引き抜き、斬りかかる。

相手も負けじとサーベルで応戦。

互いの得物がぶつかり合いを繰り返す。

俺は相手の隙を作るために左手で持っていたサーベルを空高く投げる。

気を取られたジムが空を見た。……今がチャンス！

「今だ……！」

サーベルを両手で構え、一気に振りぬいた。

ジムは両断され、その場で爆発。

「……はあ……はあ……これで——ぐあつ!？」

背後からの射撃が、ジエガンの右腕を貫いた。

「……これで終わりだ」

背後から突き立てられる狙撃銃。

「……俺は……諦めない……。アルマやジャックのためにも……!!」

諦められない。

死んでいった仲間のため——

俺は——

俺は!!!!

「……が……」

唐突に響く女性の声。

「私がムゲンを……………守る…!!!」

その声と共に背後から爆音。

「ぐあつ！貴様……………!!!ふざけるなああああ!!!」

振り返ると、そこにはボロボロのジムが、 ϵ ガンダムへとマシンガンを放っている光景。

あのジムに乗っているのは間違いない……………マヤだ。

「マヤー！」

「……………やらせないから……………あなたは死なせないから！」

彼女はそう言いながら射撃を続ける。

「この雑魚があ!!黙っているろ!!!」

ϵ ガンダムがマヤの乗るジムへと狙撃銃を構える。

隙が出来た…!!

「うおおおおお!!!」

左腕でサーベルを握りしめ、振り上げた。

「しまっ——」

振り上げたサーベルが、綺麗に ϵ ガンダムのコックピットだけを切り裂いた。それつきり反応のなくなる ϵ ガンダムの横で、ボロボロのジムが膝をつく。

「……マヤ!!」

返事は無かった。

コックピットを貫かれていたのだ。生きているはずがなかった。

「……そ……んな……なんで……どうして俺の周りの人ばかり……!!」

「……お笑いだな。ムゲン・クロスフォード」

機体内に響く、【嫌な声】。この声には聞き覚えがある。いいや、何度も聞いた憎らしい声。

「……ベルベット・バーネット」

「どうだい？楽しんでいただけただけかな？この【舞台】を」

「舞台……?」

「そうさ。私の道に、君たち第00特務試験MS隊は邪魔なのでな。いいや、むしろ必要ないのだからな」

「君があの時取引を仕掛けてきたときから、既にその舞台は始まっていたのさ。君たちの最後の舞踏……素晴らしいじゃないか」

絶望というのを感じることは何度もあった。しかし、今回ばかりは——
騙されたことへの絶望ではない。これは——

大切な仲間を傷つけられ、そして救えなかった。己の非力さ。

ジャックは……罰と言い、アルマは役割と言った。

でもマヤは……何も……何も言えなかった。

俺がもつと早く行動できていれば……!!

もう……死なせない。

誰一人。たとえ「どんなに非道な事をしてでも」仲間を……救う。

「……さあ。君のために用意した舞台だ。せいぜい楽しむがいいさ。フッフ……ハハハハハ!!!」

高らかな笑い声から伝わる悪魔のような感覚。

「それでは、ムゲン・クロスフォード。君とはもう二度と話す機会が訪れない事を願うよ」

その言葉を最後に、通信は途切れた。

グロリアスから4機のMSがこちらへと迫る。

「……お前たちに……救いなんか必要ない」

4機のMSの射撃。怯えているのか、射撃は当たることなく通り過ぎていく。

一歩ずつ歩み寄る。

1機がサーベルを握り、振り上げた。

素早くサーベルを握る腕を掴み、握りつぶす。ギギギと、機械音が聞こえ、相手の腕が破碎。

応戦しようとしてライフルを構える相手に、潰した左腕で頭部を殴る。

射撃はあらゆる方向へ飛んでいく。左腕だった物を投げ捨てて頭部を掴み、力を籠める。相手の頭部からバチバチと電流が飛び、ジムのカメラアイが割れた。

そこから頭部を引き抜き、投げ捨てる。

そして、抵抗できぬジムのコックピットを強引に機体から隔離させ、手のひらに収まるコックピットを睨みつけ

「……どんな気持ちだ。抵抗できずに死ぬってというのは。…お前たちがやってきたことは、そういうことだ」

その言葉と共にコックピットを握りつぶした。

白く塗装されたジェガンに、コックピットから溢れた血が返り血のようにこびり付く。

コックピットを投げ捨て、次の敵へ。

相手にはもう既に戦意は無いように見える。当然だ。

目の前であんな死に方をしたやつがいれば。

「……」

もう1機のジムを殴る。殴られたジムは、その反動で地面へと伏した。

コックピットを引き抜き

「……なあ、人つてのは、簡単に死んじまうんだよ。人の命をもてあそんだお前にも、同じ事を教えてやる」

そう言つて、コックピットを地面へと思いきり叩きつけ、踏みつぶした。

「……痛いだろうな。でも、マヤはそんな痛みさえ言葉にできずに死んだ」
 続いてもう1機のジムを睨みながら

「おい。コックピットを開け」

すると、素直にコックピットを開きそこからパイロットが

「た、頼む……殺さないでくれ……!!」

聞いていて虫唾が走った。

今まで嫌というほど人を騙し、金を略奪してきたヤツが、今度は命乞いなんて。

「……」

「か、金ならいくらだってやる!!頼む……!俺には妻と子供が——」

「だから、なんだ?」

言葉を遮り冷たく言い放つ。

「え……」

「妻と子供がいる。それは良い事だな。で、それがなんだ」

「俺にも妻と子供がいる。その戦艦の中に、俺の娘がいる」

「わ、わかった！娘は返す！だから——」

もうこの男の言葉を聞く気が起きない。

「……黙れ。今更そんな事言っても無駄だ」

「ひっ…………!!」

「なあ、ジャックは何で死んだと思う？」

「え……………?」

「彼は、俺を庇って死んだ。しかも、それを俺を庇った罰と言った。彼の罪とはなんだ？」

「……そして、お前の罪って、何だろうな」

「お、俺は……………」

それつきり言葉が返ってこなくなる。……そうか

「罪の意識を感じないヤツを生かす意味もないな。……でも、罪の意識を感じるのなら

——」

左腕に装着しているシールドを構える。

「ああ…………や、やめっ——」

シールドからミサイルが放たれ、コックピットの中へ直撃し、爆発。

「元から、民間人から金を奪ったりしないか」

最後の1機。それは、フアングが駆るガンダムだった。

この機体を傷つけるわけにはいかないな。

俺の中に眠る悪魔が微笑み、口を動かす。

「なあ、コックピットを開けてくれ。アンタだけは助けてあげるから」

その言葉に反応したのか、ガンダムのコックピットが開く。

コックピット前へ手を差し出す。

彼は左腕に飛び乗り

「ありがとう。……でも、どうして俺を……」

「理由？それは——」

ゆっくりと左手を動かす。

「な、何を……いや、やめてくれ!!」

「……なあ、アルマは建物の下敷きになって死んだんだ。きつと、人生で初めて人を好きになった矢先の事だ」

「攻撃したのはアンタじゃないことは知ってるし、たまたまそうなったというのも理解できる。けどさ——」

「アルマが死んで、お前が生きていて良いわけないだろ」

じわじわと握る力を強めていく。

「ア…………ぐあ…………」

「……………そういえば、理由だったか。何故助けたか。それは——」

「アルマなんかよりももつと地獄を味わいながら死んでほしいからさ」

そして、左手を完全に握り、カメラアイが血に染まる。

血によって左手を見ることが出来ないが、間違ひなく死んだだろう。

俺は左手から人であったものを投げ捨て、グロリアスへと足を向けた。

最低というなら言えばいい。

軍法会議にかけられようが知ったことではない。

俺はこの手で仲間を守るために、今回だけは鬼になる。

今だけは「血に濡れた復讐の鬼」で構わない。

格納庫内に入り、コックピットを開く。

胸のポケットから拳銃を取り出し、外へと飛び出す。

「お、おい！なんだお前は——」

「邪魔だ」

ジェガンに気づいてこちらへとやって来た兵士の頭を撃ち抜く。

「……………」

一人の兵士と目が合った。怯えている。

そんなこと構わず俺は口を開いた。

「…………俺の仲間はどこにいる」

声をかけられたことへの恐怖によって、兵士は声が出せないようだった。

「そうか。ありがとう」

軽く礼をのべた後、怯える兵士に引き金を引いた。

銃声と共に目の前で広がる血飛沫。力なく地面へと倒れる兵士。

今、俺の感情に優しさというものは必要ない。

俺のこの手が血に染まろうとも、仲間を救ってみせる。

廊下を歩き、仲間がいる場所を探していく。

途中出てきた兵士を何人殺しただろうか。

気づけば俺の制服は多くの返り血を浴びて、赤黒くシミとなって残っている。

頬に付いた血を拭い、独房のある部屋の前へ視線を向ける。

兵士は二人。…………全員殺せばいい。

俺から奪っていったヤツを、生かす理由などない。

ゆらりと兵士の前へと姿を晒す。

「き、貴様……！いつの間……！他の兵士は——」

「殺したよ。全員な」

言葉を遮り怪しく笑って見せる。

「ぜ、全員……!?」

「……そうだ。この服を見ればわかるだろう？随分と赤く染まってしまったよ」

銃を構え、一人の兵士の足を撃ち抜く。

「あがつ!!あ、足が……!!!!いてえ……いてえよお……!!」

「痛い?……今まで散々弱者を傷つけてきたんだ。これくらいなんともないだろ」

「てめえ!!」

もう一人の兵士が足を撃たれた兵士の前へ出て銃を構える。

しかし、手が震えていて一向に引き金を引こうとしない。

「……邪魔」

容赦なんて必要ない。ただ前にいて邪魔だから殺す。障害だから殺す。それだけのこと。

引き金を引く。弾丸は庇って銃を構える兵士の右腕を撃ち抜いた。

「うがあああ!!う、腕があああ!!」

「どうした。さつきまでの威勢は。お前たちがしてきたことに比べればなんてことない

はずだが」

「わ、悪かった……。独房は開けるから……だか——」

言葉を遮ったのは俺が放った弾丸。

前に立つ兵士が膝をつき地面へと伏した。

「ひっ……!!ま、まて……!!——あがつ！」

怯えている兵士の口へ銃を突き付ける。

「さつきからうるさい。少し黙れよ」

「あ……た、たすけ……」

今更命乞いをするこの兵士を見て腹が立った。その苛立ちから俺は

「いい加減お前、死んでいいよ。もう鬱陶しいから」

「あ………あ………くま……め——」

言葉を言わせる気も起きず引き金を引いた。

【悪魔】と呼ばれても構わない。俺は罪を背負うと決めたのだから。

独房への扉を開くと、少女のすすり泣く声が聞こえてきた。

「………リリー……。今………行くから」

先生として、助けてあげなければ。

「うう……えぐつ……!!」

「まったく。2ヶ月前から泣き虫なのは全く変わってないね」

俺の声を聞いて、彼女ははつと立ち上がり俺を見つめ

「せん……せい……!!!」

俺は優しく微笑みながら

「……お待たせ。やっと、帰ってこれたよ」

独房の扉を開き、彼女を解放する。

彼女は泣きながら俺へと飛びつき

「せんせえ……!ごめんなさい!!私……わたし……。約束守れなかった……。皆を

……」

俺は首を静かに横に振り

「良い。君は良くやった。【もう、何も心配はいらないよ】」

「せん……せい……?」

「さあ、先にグロリアスのブリッジに向かって。そこで、待っていてくれ」

「……で、でも……」

俺は静かに目を伏せる。彼女は何かを察したのか

「……うん。でも、ちゃんと戻ってきてね」

「……もちろんだよ」

彼女を出口へと促し、俺は独房の奥へと進む。

次の独房には、静かに横になっているフユミネがいた。

「…フユミネ。すまない、時間をかけた」

「……遅かったな。……」

彼は俺の姿を見ても何も言わず、小さく微笑んだ後

「ありがとう。先にブリッジに行ってるぞ」

扉を開き、自分からブリッジへと向かっていった。

自然に俺の足が速くなる。アウロラが見当たらない。

「……その足音……ムゲンか!？」

この声には聞き覚えがあった。彼の前へ姿を見せ

「すまない。遅れたね、フアング」

そう言いながら扉を開く。

「……そんなことない。……それより、お前……これは……」

血だらけの俺の姿を心配そうに見つめるファング。

俺は軽く苦笑しながら

「……まあ、気にしないでくれ。【皆を助けるために思ったより時間が掛かってしまっただけよ】」

ファングは少しだけ怪訝そうな顔をしたが、小さく頷いて

「……………分かった。じゃあ——」

「皆、ブリッジに向かった。先に行って待っていてくれ」

「ああ。……………そうだ、ムゲン」

歩き出そうとした俺の背にファングは

「忘れてるぞ、お前の大事な子を」

振り向くと、ファングの腕には愛する我が子、アウロラの姿があった。

俺はアウロラに触れようと思った。しかし、俺の理性がそれを拒否した。

「……………今は、ほかの皆を助けることが先だよ。……………アウロラを頼む」

彼の返事を待たぬまま、俺は独房の奥へと進む。

「ユーリ」

彼女は独房で捕まっているのにも関わらず、ヘッドフォンで音楽を聴いている。

そんな光景を見れたことが、幸せと思えた。

一瞬彼女と目が合った。

「……やあ、ユーリ」

「おやおや、ムゲンさんじゃないですか。お久しぶりですねー。アジアはどうでした？
美味しいお菓子はありました？」

「……ユーリは相変わらずだね」

「当然じゃないですか。私が変わってしまったら、私じゃなくなりますし？それに——
」

彼女は目を細め微笑みながら

「私くらい、明るく勤めようかと思いましたが、…でも、もうその必要も無いみたいですね？」

俺の制服を指さしながらニヤリと微笑んだ。

「……ああ。もう心配いらぬ。………【何も】」

「…そうですか。では、私も先に出ますよ。ムゲンさん、また後で」

「ああ。また後で」

彼女と軽くハイタッチをした後さらに奥へと進んだ。

次の独房には、オペレーター達が全員入れられていた。
「…………皆…お待たせ」

扉を開くと、全員が喜びの声を上げている。マーフィーは俺の様子をみて大層驚いたように

「ム、ムゲン隊長…………その姿は一体…………」

俺は小さく鼻で笑った後に

「何でもないよ。何も心配はいらない。【君たちの分まで、俺は出来ることをやったつもりだから】」

彼らにもブリッジに向かうよう伝え、先へと進む。

最後の一部屋。ここにいるのは——

「…………トクナガさん」

扉を開き部屋へと入る。

「う……………ムゲン……………か？」

「ええ。さあ、手を」

彼の手を引き、体を起き上がらせ、彼を支えながら独房から脱出する。

「…………お前……………その姿は…………」

「トクナガさん。何も心配いらないますよ。【全部……終わらせましたから】」

こうして、全員を助け出し、ブリッジへと集まった。

後から来た道夜、エトワール、カカサ、俊太郎は俺の姿を見てひどく驚いていた。当然だろう。

「良かった。皆……無事で」

全員を見渡すと、やっと「ここへ帰ってこれた」と思えた。

「皆……ただい——」

背後からの物音。振り向くと、グロリアスを占領した兵士の残党が逃げようとしていたところだった。

兵士と目が合う。兵士は怯えた表情で

「ひっ……。こ、殺さないで……！」

「……」

俺は銃を構える。そして冷酷に言い放つ。

「お前たちも、そういうことをしてきただろうに。今更なんだ。……もう消えろよ」

「し、死にたくない……!!」

「……………」

引き金を引こうとした瞬間、銃を握るその手を優しい手が包み込む。

「……………」

その手は、リナの手、そして、アウロラの小さな手であった。

「もう、いいんだよ。殺さなくていいんだよ。家族のために、全てを背負う必要も」

「……………リ……………ナ……………」

「目の前で死んでいった仲間のために、泣いていいんだよ。もう……………いいんだよ。ムゲン」

気持ちが増え、その場で崩れ落ちる。

今まで堪えて、耐え続けた気持ちが一気に崩壊していく。

「あ……………ああ……………!!俺は……………!!俺はあ……………!!」

勝手に涙が零れ、止まらない。

アルマ、ジャック、マヤ……………俺は……………俺は……………これでいいのか？

役割を引き継ぐことも……………罪と罰を背負わなくても……………。

もう一度仲間と前へ進んでいいのか？

「いいんだ」

フアングが笑う。

「一緒に、進もう。俺もお前と一緒に背負うから」

「ファ……ン……グ……」

また……笑っているのか？

「いいんですよ」

ユーリは静かに

「笑っているムゲンさんのほうが似合っていますよ」

「ユーリ……」

誰かを……愛しているのか？こんなにも血に染まってしまった俺は

「いいんだ」

道夜は微笑み

「人を愛すること……それは、生きている証だ。生きている以上お前は人を愛しているんだ」

「道夜……」

また、皆の元へ帰っていいのか……？

「いいんだよ、ムゲン」

リナは大粒の涙を流しながら満面の笑みで

「私たちはあなたの帰りを待っていたんだから」

この日、トリントン基地での内乱騒動は終結し、ムゲン・クロスフォードおよび、八雲道夜、エトワール・ブランシヤールが第00特務試験MS隊に再入隊することとなった。

53・穏やかな日

宇宙世紀0089・8・10 あの日から既に5日が経った。トリントン基地は前と同じ活気を取り戻し、俺たち部隊も、今まで通りの生活を送っていた。

しかし、その代償は大きすぎた。……どうして彼らが死ななければならなかった……？ 死んだ彼らの事は、きつとすぐに忘れられてしまっただろう。

だからこそ、俺が生きて語り継いでいかなければならない。

それが、生きている者の【役割】であり、俺自身の【罪】。

あの事件の後、俺は軍法会議にかけられた。理由は一つ、仲間殺しの罪。

いくらあの事件が公けになったとしても、俺が同軍を殺したという事実は変えられない。

しかし、事件の内容もあつてか、俺は奇跡的に死刑にはならず、当面の間基地への出入りを禁止、及び階級の降格だけで済んだ。

そのあと、俺は精神的な障害が残っていないかの検査を受けさせられたりした後、トリントンの自宅へと帰ることが出来た。

それからの記憶はほとんど残っていないが、最後の記憶はベッドに飛び込んだ所で記憶が途切れてた気がする。

「……………」

夏独特の暑さに、俺は目を覚ます。

体を起こして時計を見ると既に11時過ぎ。…少し寝すぎたかな。

頭を掻きながら大きくあくびをした後立ち上がる。

「……………」今日のやることは——」

机の上に小さい置手紙。手に取り目を通す。

『おはよう、ムゲン。良く眠れたかな？』

私は仕事で基地に行くから、代わりに家の事お願いね。

あ、出来れば外に干してある洗濯物を取り込んで、アウロラのご飯に、ルナちゃんのご飯を作ってあげてほしいんだけど——

って、私いないからムゲンにやってもらうしかないんだけどね。それじゃ、行つてきます。』

忙しいであろうにも関わらず、こうやってちゃんと置手紙を置いてくれる彼女には頭が上らない。

俺が基地に行けなくなって既に3日。複雑だが、少しでも嬉しくもあった。きつと、戦争なんか無かったらこんな生活が出来たんだろうと思えたから。

それに、アウロラや、ルナちゃんと一緒にいる時間が増えたのも、喜べる理由に入らう。

「さて、と……」

何はともあれ、まだ覚醒しきっていない体を目覚めさせるために顔を洗わなくては。洗面台で顔を洗い、歯を磨く。

外の暑さからか、心なしか水道の水も温い。

……ちよつとムカつく。

しかし、これでしつかりと目が覚めた。

大きく背伸びした後、子供部屋へと足を運ぶ。

小さい家だが、扉で仕切られたその場所は、子供たちだけの世界。

とは言つても、今はアウロラとルナちゃんの部屋だが。

扉をノックし、返答を待つ。

「だあれ？」

ちよつとした悪戯心から、俺は

「僕は優しいオオカミさんだよ。君たちに会いに来たんだ。扉を開けておくれ」
童話で出てきそうな悪いオオカミの真似を試みる。

すると、扉の向こうにいる少女は

「オオカミさんが来たら、扉は開けちゃいけないってママが言ってた!」

「僕は君たちとお友達になりたいだけなのに……。悲しいなあ……。シクシク……。わざとらしく泣き真似を試みる。

「オオカミさん、泣かないで。……。分かったよ。今開けるから」

扉がゆっくりと開いた後、ルナちゃんが顔を見せる。

初めて会った時よりも成長しているからか、目元がファイアさんに似てきているのが分かる。

もつと成長すれば性格も、容姿もクロノードやファイアさんに似てくるのだろう。

俺の顔を見てルナちゃんは

「まあ、なんて大きなオオカミさん。どうしてそんなに泣いているの?」

俺の頭へ彼女の小さい手の平が置かれ、撫でられた。

「それは――」

俺は彼女を抱き上げて

「君を食べちゃうためだぞー!」

すると彼女は

「いやっ！食べないで—!!」

離れようと必死にもがく彼女。

そろそろ遊ぶのはこれくらいにしておこう。やりすぎも良くは無い。

「……なんてね。おはよう、ルナちゃん」

「うん。ムゲン、おはよー」

彼女をゆっくり地面に降ろし、子供部屋に入る。

部屋の中央に赤ん坊用のベッド。ベッドにはアウロラの姿。そして、先ほどまで遊んでいたのか、赤ちゃんを喜ばせるための遊具が置いてあった。

ルナちゃんがここにいる事になって、彼女自身、最初は緊張していたものの、今は少
しだけそれも緩和されているように見て取れる。

彼女はアウロラの面倒をよく見てくれて、それこそアウロラの「姉」のような存在で。

今日も俺が寝ているときルナちゃんがアウロラの面倒を見てくれていたのだろう。
面倒見の良さはクロノード譲りなのだろう。

「……あ……」

この子も少しずつだが声を上げてくれるようになってきて嬉しい。

「おはよう。アウロラ」

彼女をゆっくり抱き上げ、背中を撫でる。

幸せそうに目を閉じるアウロラ。

「……………よし、ご飯でも作ろうか」

アウロラをベッドに寝かし、リビングへと足を運ぶ。

「ねーねー、ムゲン」

ズボンを端を引つ張りながらこちらを呼ぶルナちゃん。

「なんだい？」

「アウロラのごはん、ルナが作ってもいい？」

「ああ。いいよ。でも、一人じゃまだ危ないから、俺も手伝うね」

「うん!!」

俺たちは最初にアウロラのごはんを作ることにした。

「ご飯と言っても、まだミルクなのだが、もう少ししたら離乳食でも大丈夫だとは思うのだが。」

リナがいないうちはあまり下手に動くわけにはいかない。

「じゃあルナちゃん、まずは手を洗おう」

「うん!」

俺も娘を持つ父だ。流石にミルクの作り方くらいは心得ている。

手を洗いながらルナちゃんは俺に聞いてくる。

「でもなんで手を洗うの？」

「汚い手で物を食べたり、触ったりしたらバイ菌さんが移っちゃうからだよ」

「そつか……アウロラに移ったら大変だもんね！」

「そうだね。いい子だ」

「えへへー」

嬉しそうに笑うルナちゃん。

手を洗った後は、消毒済みの哺乳瓶を取り、電気ポットの電源を入れ、お湯を沸かす。

こういう時のために買って置いてよかった……。

お湯の温度は70度から80度が丁度いいらしい。

少し時間を置き、お湯を冷ます。そして、哺乳瓶に粉ミルクを入れ、お湯を瓶の半分くらい注ぐ。

粉ミルクを溶かし、冷ましたお湯を追加してゆっくりと混ぜる。

人肌ほどの温かさになったら、ミルクの完成。

ルナちゃんが手伝ってくれたおかげで思ったより早く完成した。

「これがアウロラのごはん？」

「そうだよ。ルナちゃんも昔飲んでいたんだよ」

「そうなんだ！ねーねー！アウロラ喜ぶかな！」

「ああ。ルナちゃんが作ってくれたんだ、とっても喜ぶと思うよ」

「へへへー！ルナはアウロラよりもおねーさんだからね！」

「そうだね。ルナちゃんは良い子だ」

優しく頭を撫でる。彼女は幸せそうに目を細めた。

「さあ、アウロラ。ごはんの時間だよ。今日はルナちゃんが作ってくれたんだよ。いっぱい飲むんだぞ」

アウロラを抱き上げ、飲みやすい体勢にし、哺乳瓶を傾け飲ませる。

ほとんどアウロラの食事はリナに任せっぱなしだから、他人からすればぎこちないように見えるかもしれない。

……必死にやってるんだけどね。

そんな光景をじーっと見つめるルナちゃん。

「……どうしたの？ルナちゃん」

「……美味しいのかな……」

「アウロラにとつては美味しいだろうけど、ルナちゃんの口には合わないと思うよ」
「そっかー……。お腹すいた……」

「アウロラにミルクをあげたら、ルナちゃんもご飯にしようね」
「うん！」

ルナちゃんは目をキラキラと輝かせ頷いた。

それから、アウロラにミルクをあげ終え、背中を軽く叩く。

けふつと小さいげつぶが聞こえた。アウロラをゆっくりベッドへ寝かせルナちゃん
のほうを向き

「よし、それじゃあご飯を作ろうか」

ルナちゃんは待つてましたと言わんばかりに手を挙げながら言った。

「わーい！ルナ、オムレツがいい！」

「オムレツか……。よし、分かった。一緒に作ろう」

「うん!!」

ルナちゃんの機嫌がいい時は決まってオムレツになる。理由は何であれ、彼女の好物
であることは間違いない。

それも野菜がたっぷり入ったオムレツ。人参に、タマネギ、それに小さく切ったセロ
リ。

俺とルナちゃんは二手に分かれて作業をした。

俺が野菜を切る係。ルナちゃんが野菜を卵と混ぜる係。

なんだか、昔学校で習った調理実習を思い出す。

ファイアさんがいたら、きつとこうやって二人で料理を作っていたんだろう。

それを思うとなんだか悲しくて、辛い。

俺はルナちゃんの親には変わることなんかできないけれど、それでも、彼女に寄り添ってあげたい。

一人は……寂しいもんな。

「混ぜったかな?」

「今やってるー」

ぎこちないながらも、卵と野菜をかき混ぜているルナちゃん。アウロラも成長すればこういうことをするようになるのだろうか。

小さいながらに必死に何かに取り組む姿を見ると、無性に応援したくなる。

心の中で何度も頷き、そして聞こえもしないのに小さいアトバイスを言ったり、なんだか忙しい。

それから彼女が満足するまでかき混ぜた卵をフライパンで焼いていく。

一つはルナちゃん用に野菜多めで。オムレツの時は自分の分は卵が多めな理由はそこにある。…全然良いんだけどね。

「つと……」

オムレツはうまく返すのが難しい。普段料理をやらないのがだいたいの理由だが、少しずつでもやっていかないと。

「あつ……」

……返すのを失敗した。おかげでオムレツの形が歪に……ま、まあ……いいよね。

今日のお昼は二人で協力して完成させた野菜たっぷりのオムレツに、トースト。それに、昨日の残りのコーンスープ。

オムレツの形こそひどいが、味は間違いない……はずだ。

テーブルへ運び、出来上がった料理を置いていく。

ルナちゃんは既に椅子に座り、両手にナイフとフォークを持って準備万端だ。

「お腹すいたー!」

全ての料理を置き終え、俺も椅子に座る。

「そうだね。じゃあ、食べようか」

「わーいー！いただきまーす!!」

「…ゆっくり食べるんだよ」

オムレツを一口で食べられる大きさに切り分け、一口。

野菜のゴロつとした食感と、卵の味が口全体に広がり、美味しい。

やはり見た目以外は完璧だな。…：失敗したのは俺だが。

ルナちゃんの方を見ると、美味しそうにオムレツを食べ、トーストをかじり、スープを飲む。

見ているだけでお腹がいっぱいになりそうなくらいだ。

…：この光景をクロノードやファイアさんに見せてあげたい。

こちらに気づいたのか、彼女は食べるのを止めて、こちらをじーつと見つめる。

「…：な、なんだい？オムレツ美味しくなかったかな？」

ルナちゃんは首を横に振りながら答えた。

「ううん。ムゲンは何で【パパとママ】の事考えてるのかなって」

「えっ…：…」

いくら顔に出やすい俺でも、さすがにそこまで顔に出やすいとは思ってない。…：…どうして…。

返す言葉に悩んでいると、彼女はまた黙々とオムレツを食べ始める。

それから、ただ静かに食事が進んだ。

本当は、色んな話をしたかったが、ルナちゃんの一言で、俺はどこか動揺していたのかもしれない。

「…………ふう…。美味しかったね」

「うん!!また食べたい!」

「それは良かった。また作ってあげるよ」

「わーい!!」

幸せそうな彼女の笑顔。この笑顔だけでも、守らなければ。

俺に…………出来る事を。

午後には来客があった。丁度ルナちゃんがお昼寝をしたタイミングでの事。随分と久しい人だ。

短めに切った茶髪は昔と変わらず、キラキラと輝く黒目。かつてのエミリー・ブライトウエルと同じだ。

「お久しぶりです!元気にしてましたか?」

「ああ。エミリー、アウロラが生まれた時ぶりだね」

彼女を椅子に勧め、コーヒーを差し出す。

「あつ……。ありがとうございます！」

「……それで、どうして今日は？」

「はい……。この前、基地で一騒動あつたと聞いて」

「……………ああ。……あつたね」

「それで……。ムゲンさんが心配で……」

「どこからそんな情報が？」

「えつと……。連邦軍のモシ・ホイ・ガク・ダイモイつて人からですけど……」

「……………どこかで聞いたことのある名前だな。……まあ、いいか。」

「それで、心配してきてくれたんだ……。ありがとう」

「あつ、いえいえ。……それで、大丈夫なんですか？」

「ああ、俺は大丈夫だよ」

「そうですか。……良かった」

胸をなでおろすエミリー。

「エミリーのほうはどうなんだい？」

「わ、私ですか……………？」

思わぬ言葉に目を見開く彼女。

「ああ。俺は君のほうに心配だね。……ちゃんと食事は出来ているのかい？」

「それはもちろんですよ！……でも、また仕事無くなっちゃって……」
「……そうか」

しばらく考えた後、俺は彼女に提案する。

「なあ、エミリー」

「なんでしようか」

「……俺たちと一緒に孤児院をやらないか」

「孤児院……ですか……」

「ああ。この家を使って、孤児院をやるんだ。家族を失った子供たちを預かって育てる」

「……私が……」

「もちろん報酬は出す。どうだろう、俺たちと——」

「……いい、ですね。私も手伝いますよ」

「エミリー……」

「でも、寝泊まりする場所は今いる場所でいいです」

「どうして」

「何ていうんですかね……愛着と言いますか……。あそこが私の家なので……」

「……そっか。分かった」

その後はエミリーと昔の話や、くだらない話で盛り上がった。

そのたびに俺の心が戦争というものから遠ざけられていっていると感じた。良い事であるはずなんだ。

でも、何故だか……それではいけないと、俺は戦争から目を背けてはいけないと、思う心がある。

そんなことを考える暇もなく時間は無慈悲に過ぎ去っていき、気づけばもう夕方。

「……もうこんな時間ですか。……では、今日はこの辺で帰りますね」

「ああ。来てくれてありがとう。少しだけ気が楽になったよ」

すると彼女は小さく笑った後

「はい。私で良ければいつでも呼んでください。お話くらいは聞きますよー」

「……」

小さく頷き、彼女を見送った。

しばらくしてリナが家に帰ってきた。

「おかえり、リナ」

「ただいま! どうだった? アウロラの面倒は」

「ぐつすり眠っているよ。ルナちゃんが面倒見てくれてるおかげで、だいぶ楽は出来たかな」

「…もうちよつとしつかりしてよね。あなたと私の子供なんだから」
「……………わ、分かつてるって……………」

夕食、風呂を済ませた後、リナと向き合うように椅子に座る。

これは俺があこの事件の後から毎日行うようになった事。

いわゆるカウンセリングみたいなものだ。

医者に言われたとかそういうんじゃない。リナと俺で自主的にやっているだけ。

……………俺は半ば強制だけど。

「さ、ムゲン、あなたの好きなように言ってい」

内容は簡単だ。吐き出したい気持ちを洗いざらい吐き出す、それだけ。

「…私が全部受け止めるから…。ムゲン」

「……………どうして……………俺の周りの人が死ななければならぬ……………」

「……………どうして……………俺は弱いんだ……………！」

「俺は……………俺は……………!!」

「……………うん……………うん。…苦しいよね。辛いよね……………全部吐き出して楽になろう？」

「くそ……………！俺は……………なんでこんなに無力なんだ。無力で、力が無いから……………救えない……………」

！」

そんな言葉を吐き出すたびに、心が少しだけ軽くなる。

意外とこういうのもアリなのかもしれない。

「……………少し、楽になったよ…」

「そっか。なら良かったよ」

リナは優しく俺を抱きしめてくれた。

「明日もやろう。続けたらきつと楽になるから」

「…ああ。ありがとう…リナ」

「ううん。当然の事だよ」

こうして今日も眠りにつく。布団に潜れば今日の事を思い出し、少しだけ笑みがこぼれた。

自然とそういう反応が出るのは幸せと感じているからなのだろうか。

目を瞑り、まどろみへと落ちていく。

「——えぐっ……………」

ルナちゃんの声。夢か…………？

目を開けば、ベッドの横で愛用の枕を片手に泣いているルナちゃんがいた。

「ルナちゃん…？どうしたんだい？」

この子が泣いているのを久しぶりに見た。 …どうしたんだろう
「……ムゲン……うう……！」

ルナちゃんを抱き寄せ、頭を撫でながら

「どうしたの？怖い夢でも見たかい？」

ルナちゃんは静かに首を振る。

「じゃあ——」

「パパと……ママに会いたい……」

遮られたその言葉が、俺の胸を貫いた。

「……」

この子はまだ5才の子供。 …クロノードやフィアさんに会いたいというのも痛いほど理解できる。

本当は辛かったんだ。クロノードたちに会いたくて仕方がないのだろう。でも、それは無理なのを理解しているから……。

だから、耐えられなかったんだろう。 ……俺に…出来る事をしなければ。

「よし、ルナちゃん、添い寝してあげるよ」

「……うん」

鼻水をすすりながら泣くルナちゃんを、撫で、ティッシュで鼻水を拭きとる。

「大丈夫。きっと会えるから」

「……………うん……………」

横に寝かせ、ゆつくりとお腹あたりを軽く叩く。

しばらくすると彼女も寝息を立てて眠り始めた。

「……………ルナちゃん……………」

俺は……………彼女に何をしてあげられるのだろうか……………。

瞼がゆつくりと閉じ始め、抵抗する間もなく、まどろみへと落ちていった。

53 完

54：向き合う覚悟

再び会った時、彼は壊れかけていた。

自分を犠牲にして、皆を救った。自分の痛みを、悲しみを殺して。

だから、包んだ。だから泣いた。

「もう、いいんだよ。殺さなくていいんだよ。家族のために、全てを背負う必要も」
血に濡れた彼の頬に、一滴の雫が零れ、全てを抑えてきた壁が崩れ去る。

彼は何度も言った。俺に出来る事をした、と。

【壊れた人形】のように何度も。

彼の目は、この戦いで何もかもに汚された。どこか一点を見つめる彼は、全てを拒絶しているように見えて——

心が壊れそうだった。私は何もしてあげられなかった。一番つらい時に、苦しい時に側においてあげられなかった。

彼が世界と向き合おうと思えたのもここ最近。軍法会議でも、同伴者がいなければまともに話せないくらいにひどく衰弱していた。

精神鑑定だとか言っても、まともに治療さえしてくれず、あげくに目すら合わせてく

れなかった。

道夜さんやユーリちゃん達がいてくれなかったら、彼の精神は崩壊していたに違いない。

あの事件以来、彼はそれとなくアウロラに触れるのを拒んでいる。

嫌いなわけじゃないと思う。きっと、あの子を抱く資格がないと思っっている。

そんな事ないのに。あなたの娘なのに。

こんな無力な自分が嫌い。……きっと、彼も同じ気持ちだったのかもしれない。

アウロラにミルクをあげて、ルナちゃんの朝食を作って、ムゲンに置手紙を書いて、今日もまた行ってきますと小さく言って出かける。

手紙には、ムゲンが起きてからのすることや、やってほしい事なんかを一通り書いてある。

今日は洗濯物を洗って、干してもらおうことと、アウロラとルナちゃんにご飯をあげること。

いつもと変わらない事を頼んでる。それでいい。

やっと彼は、少しずつでも前へ進もうと頑張り始めたから。

基地につけば、今日もいつものように仕事が待っている。

整備士の朝は早い。今朝も5時起きだ。……まだ少しだけ眠いかな。

トリントン基地にいる時は、基本的に色んな機体の整備をする。

私やトクナガさんが異例なだけだと思うけど、少しでも事故で亡くなる人を少なくしたいから。

絶対に……死なせたくないから。

父が亡くなった理由で、人が死んでいくなんて考えたくない。

だから、整備は入念に行う。機体のどんな部分でも見逃さずチェックし、気になるところがあればMSのパイロット自身に聞きに行く。

そうして最後にトクナガさんにチェックしてもらい、整備は完了する。

これを一日に30機以上、多ければ45機は整備する。

イレギュラーで、損害の大きい機体が来たとしても、25機は整備しているだろう。

彼と同じように、私も整備を続けているから技術力は高くなってきたと思える。それが誇りにも思うし、やりがいにも繋がっている。

何より――

「リナちゃん！整備あんがとなー!!」

皆が無事に帰ってきてくれることが何よりうれしく思えた。

……昔はそんなこと考えたこともなかったのに。
私も……変わったのかな。

ううん、皆変わったんだ。

道夜さんも、ユーリちゃんも、部隊のみんなも。

そして……ムゲンも。

皆が変わったから、私も変わった。

ちよつとはムゲンとの歩幅も狭まったかな？

いいや、まだまだ。まだ彼の背中を追い続ける。

きつと、追い付いて見せるから。

「よし……」

気持ちを引き締めると同時に、機体のネジを強く締めた。

整備が片付き、食堂で休憩していると

「座つてもいいか？」

連邦の野戦服の下に、フード付きのシャツを着ていて、キリツとした目つきだが、垂れ目で、優しさを感じることできる眉。

短く切った黒髪が彼に大人らしさを与えている。少し髭が生えているからか、凄くダ

ンデイに見える。ムゲンとはまた違ったカッコよさだと思う。

口元は微笑んでいて、いつもと変わらない道夜さんがそこにいた。黙って頷くと、彼は私の正面の席へ腰かける。

何かの資料を見つめながら、コーヒーを飲む道夜さん。

「何見ているんですか？」

「ん。いや、この前の事件の事についての事が書かれている記事をな」
言った後に道夜さんははっとした顔で

「ああ、すまない。お前にこの話は辛かったな」

首を横に振りながら私は

「いいんです。それより、どんなことが？」

資料を覗き込むようにすると、道夜さんが手でそれを止めた。

「やめておけ。あまり気分がいいモノじゃない」

「……でも……」

道夜さんは目を伏せ首を横に振った。

何となく察して、それっきりその話をすることは無くなった。

しばらくの沈黙の後、道夜さんは静かに言葉を切り出す。

「……ムゲンの様子はどうか？」

「だいぶ良くはなりましたよ。アウロラヤルナちゃん的面倒も見てくれますし」
「……そうか。それは良かった」

彼はほっと胸をなでおろすかのように安堵していた。

当然だろう。彼のおんな姿を見てしまっただけは。

「お前が止めていなかったら、きっとムゲンは狂っていた」

「……」

「俺は、あいつに何もしてやれなかった。裏切ったのを止めるので精一杯だった」

「でも、裏切りが起きるなんてみんな予想してなかったじゃないですか」

「いいや。……俺も何となくは予想出来ていた。……あいつもな。だが、そうするしかな

かった。あの機会を除けば、次いつ攻撃できるかなんて分からなかったからな」

「……勘ですか?」

彼は苦笑しながら

「まあ、そんなところだ」

それからはユーリちゃんも混ざって3人でお菓子の話で盛り上がった。

ユーリちゃんの最近のブームはチョコパンケーキらしい。

……今度食べに行きたいな。

トリントンで起きた事件は連邦軍全体に広がるのにさほど時間は掛からなかった。部隊を守るためにムゲンが受ける代償は大きすぎて……。

他の基地から受けるであろう対応や、非難は相当なものらしい。

この基地の人たちは事件の内容を知っているだけあって、ある程度は擁護してくれる人が多い。

噂では彼はこんな異名で呼ばれているという。

【血濡れの悪魔】と――

誰がそんなことを言い出したのかは知らないけれど、彼は悪魔なんかじゃない。彼は自分を犠牲にして皆を助けただけ。

確かに同軍の人を殺したかもしれない。けれど、それが仲間を守るための【最善】だったとしても許されないの？

……私は許したつていいと思う。お互いに死ぬかもしれない状況ならなおさら。

彼の行動が正しいと擁護する気はないけど、あの時の行動はきつと【最善】だったと思える。

「あ……………」

廊下で考え事をしていたら、正面から小さい声が上がった。

見てみると、少女と目が合う。

肩までかかる程度の空のように透き通った水色の髪。どこか安心させられる薄い緑色の瞳。

整った輪郭にすうっと伸びた小さめの鼻。目はどこか怯えているが、おそらく少しすり目。

そして印象の良い眉。この子は確か――

「……り、リナ……さん」

正直、とても驚いた。前まではムゲンの後ろで顔すら見せてくれなかった子だったのに、今、彼女から声をかけてくれたのだ。

「どうしたの？リリーちゃん」

「え、つと……大丈夫ですか？」

「……と、言うとは？」

「何か……悩んでいるようでしたから」

「そう見えた？」

私も随分顔に出やすいようで……。ムゲンほどじゃないけど。

リリーちゃんは黙って頷く。

「そっか。……少し、ムゲンの事を考えていたんだよ」

「……先生を……」

「うん。噂だけど、ムゲンが変な風に呼ばれているっていうのをね……」

リリーちゃんは俯きながら

「血濡れの……悪魔……ですね」

「うん……」

私達の間に少しだけ沈黙が続いた。

リリーちゃんは俯きながら言葉が続けた。

「あの時の先生は……怖かった……。ここに来る前の……連邦の兵士と同じ目をしてた……。人を……容赦なく殺せる人の目と同じで……」

「……そっか……」

リリーちゃんのはつとして、すぐに

「で、でも！先生は……悪くないから……。私……先生との約束……守れなかったから……」

「約束？」

「部隊の皆を守るって……。……帰ってくるまでに、先生を……。ムゲンって呼べるように……。でも、駄目だった……。私は……」

「先生が居なかつたら、今頃私達、死んでた……。だから、先生をそうやって呼ぶ人たちを私は許さない……」

私は首を横に振りながら言った。

「……リリーちゃん、ムゲンは他人を恨むためにあなたを助けたんじゃないよ」

「……でも……」

「ムゲンは、あなたに生きて、もつといろんなことを知ってほしかったんじゃないかな。……だから、自分を犠牲にして助けたんじゃないかな」

「……それは……あまりにも悲しすぎます」

「そう、だね……」

彼女の言う通り悲しすぎる。けれど、それでも彼はこの選択を選んだ。苦しくて、辛かったと思う。そして彼は完遂した。

自らの犠牲を代償に、部隊のすべての、そして愛する娘の命を救った。

「でもね、それがムゲン・クロスフォードという人なんだよ。だから、彼の心は、目は汚されても、きっと後悔はしてない」

私は知っている。彼は、自分が選んだ選択に後悔なんかしたことないと。どんな選択でも彼は自分の成すべきことを、自分を信じて進んできたから。

非難されようと、扱いが悪くなるうと関係ない。大切な仲間を守るためならば。きつと彼はそう思った。

助けるために多くの犠牲を伴っていたなら……きつとなおさらなはず。

リリーちゃんは少し考えた後、ニッコリと笑いながら

「…信頼………してるんですね」

私はふつと笑った後

「ええ。これでも一応、彼の妻ですから」

「私も………頑張ろう………」

「リリーちゃん？」

リリーちゃんは大きく深呼吸した後

「先生がいない間は………私がこの部隊を………先生が自分を傷つけてまで救ってくれたこと（こ）を………守る………」

「それが、私にしかできない事だから。………この言葉は、先生からの受け売りだけど

………」

ちよつとだけ照れ臭そうに言葉を付け足した。

「………お互い、頑張ろう」

右手を差し出すと、リリーちゃんは両手で握り

「はい………」

その瞳は強い。今の若者の強さを持ちながら、確固たる信念を秘めていた。

しばらくして、ファングさんから呼ばれた。

理由は……なんだろう？

「リナ・ハートライト、入ります」

「…そんなに真面目にならなくていいだろう」

赤い短髪が揺れ、キリツとした目付きと、柔らかな眉。爽やかな好青年と言っても間違いではないだろう。

「それで、どうしたんです？」

「ああ、いや、ムゲンの事をな」

「……はい」

「ムゲンは、どうだ……？」

道夜さんにも聞かれた言葉。私は目を伏せながら言葉を続けた。

「……前よりは良くなりました」

「…そうか。心配だったんだ」

皆心配している。私も、声には出さなかったけど、きつとユーリちゃんも。

「……俺がしつかりしていないといけないのにな。不甲斐ないよ」

「……それは私もですから…」

「そう言ってもらえると、少しだけ気が楽になるよ」

彼も、ムゲンも、自分に出来る事をしただけ。それがあの結果に繋がってしまったなら、仕方がないのだろうか。

もつと、他に正しい道があつたはずなのに——もつと、他の選択があつたはずなのに

願つても、時間は返りはしない。

「……俺が言える立場じゃないが——」

フアングさんは静かに言葉を続ける。

「あいつが辛い時、側にいてやってほしい」

「……」

「俺や部隊の皆では、ムゲンの心を癒しきることは出来ない。俺たちは、あいつの痛みを背負うくらいしかできないから」

天井を見上げながらフアングさんは

「だが、お前は——お前なら、変えられる。あいつの痛みを癒せるはずだ」

「私が……ですか」

フアングさんは静かに頷いた。その瞳は、優しく背を押してくれるような、そんな雰囲気を感じた。

「……所詮、ニュータイプなんてものは役に立たない。……こんな、たった一人の人間さえも癒すことが出来ないなんて」

彼は悔しそうに呟く。…違う。そんなことは—

「出来ませよ」

「え……？」

思ってもみない言葉を返されたからか、少しだけ驚いた様子。

「ニュータイプも、人間ですから。皆……同じですから。人の痛みだって分かち合えますよ」

「だが……俺は」

「どんなに信頼していても、その人のすべてを知ることなんかできません。だから、知っている部分だけでも、お互いに寄り添えばいいんです」

「辛い時、側にいてあげる事。悲しい時、側にいてあげる事。…そして、嬉しい事は一緒に笑って—それだけで、お互いはお互いを知るんです」

「それが—人間しか出来ない事であり、家族の役目」

フアングさんは微笑み、小さく頷いた。

「…そうだな。ムゲンが救ってくれたんだ。今度は、俺たちが助けないと」

「ええ……」

そうだよ、ムゲン。あなたなら、きっとそう言うよね？

この言葉は、気持ちは——あなたから教えてもらったんだよ。

あなたが私を光の下へと連れてきてくれたんだよ。

一人じゃないから……。今度は、あなたの手を離さない。

だから、今日こそ、彼と……。【あの子】と向き合わなければならない。

遠目からでも分かる白いジェガン。

そして、その鋼鉄の鎧に張り付く赤黒いシミ。

触れるのが怖かった。……。あの時の彼の瞳を思い出すから。

彼の瞳は……。悲しみや怒り、そんな色々な感情が混ざっているような目だった。触れようとすれば手が震えて前へと進めない。

変わらなくて良かった。そのまま良かった。

一緒にいてさえくれればそれで——

けれど、彼は進んだ。

自らを犠牲にして、汚すことのない手を汚した。

ジェガンに残る、彼の怒りや悲しみ、そのどれもが、傷ついた部分から伝わる。

カメラアイにベツトリと張り付いた血。……ダメ……やっぱり……怖い。

変わってしまった彼を認めたくない。頭で受け止めようとしても、体が言うことを聞いてくれない。

でも……。

私は勇気を振り絞り、一步踏み出した。

触れた装甲から伝わる、彼の気持ち。

彼は、殺さなければならなかった。

部隊のために、自分のために死んだ仲間の罪を背負って戦うと決めたから。

だから、この子と共に……。

涙が止まらなかつた。どうして、彼が背負わなければならなかつたのか。

それでも、この手を……止めるわけにはいかない。

直さなくちゃ。彼と向き合うために。

沢山伝わった。そのたびに心が苦しくなって、一緒にいてあげられなかつた無力さを呪って――

ジエガンの整備を終えるとともに、私は地面に崩れ落ちた。
止まらない、涙が。

大人なのに、声まで上げて。

「おいーリナ!?!どうしたんだー!」

トクナガさんが肩を揺すって声をかけてくれた。

彼の顔を見て、抱き着いて泣いた。

「リナ……?」

「わたし……わたしっ……!」

「お前……ジエガンを……!」

機体を見たトクナガさんは、全てを察したのか、優しく背中を撫でながら言った。

「リナ、お前は良くやった。……ほんと、すごいな、お前は」

「ううっ……!」

「……あれだけボロボロで汚れていたジエガンが、新品同様に戻ってやがる。……よく頑張ったよ」

「うん……!うん……!」

何度も頷きながら、彼の胸で泣いた。

「お前はあいつと、この機体と向き合って、お前は寄り添った。……お前は凄いよ、リナ」

撫でてくれるその手は父のようで……

「リナ、お前はあいつの【光】になってやれる。……お前は寄り添えたんだよ」

その日の帰り道。

夕暮れから夜へと変わるそんな街を、ゆつくりと歩いて帰るのが毎日の楽しみだった。

色んな光景が見れて、色んな人を見ることが出来たから。

楽しそうに歩く家族や、忙しそうに仕事している人、貧しいながらも必死に頑張る子供たち。

そんな幸せそうな家族を見て、心が苦しくなくなっただのはいつ頃だっただろう。

貧しい子供たちを救ってあげたいと思ったのはいつ頃からだっただろう。

全部、ぜんぶ彼と会ってから思えるようになったこと。

この手で母を殺めてしまった子供のところでは思いもしない事だと思う。

今では私が母で、私も幸せな家族を持てたから。

……お母さん、私は大丈夫だよ。

ふと、正面から走ってくる影。

すれ違う瞬間に見えたのは、まだ若い少年だった。

何かから必死に逃げているようにも見えた。
気になりはしたが、私はそのまま家路へとつくことにした。

「ただいま！」

「おかえり、リナ」

少し疲れたような表情を浮かべる彼が出迎えてくれた。

ボサボサの黒髪、疲れ切った垂れ目、けれど口元だけは微笑んでいる。

それは彼の「現在」の状態を表しているように見えた。

「ムゲン、大丈夫？」

心配そうに顔を覗き込む。すると彼は肩を竦めながら

「大丈夫だよ。何も心配ないさ」

彼から心配ないという言葉聞いて安心出来るわけなかった。特に、今の状態でそれを言われても説得力に欠ける。

「……ほんとに？」

ムゲンは静かに頷いた後

「ああ。大丈夫だ」

そう言った。

「そっか。なら良いけれど……」

しばらくの沈黙。彼は何かを考えているのか、少しだけ表情が暗い。

きっと、何かを思い出しているのだろう。私は彼に有無を言わさず抱き着いた。

「お、おい……？リナ……？」

「辛い事も、嫌なことも、今は全部忘れちゃえ。あなたは、そうする資格があるんだから」

「リナ……」

私に出来る事を……するだけだよな？

「……ちよつとは、甘えてもいいんだよ？遠慮なんか必要ないよ」

「……ああ。ありがとう」

「あームゲンとリナがラブラブしてるー！」

ルナちゃんの楽しそうな声。私はルナちゃんに微笑みながら

「うん。ラブラブだよ」

「私も混ぜてー!!」

ムゲンの足元でぴよんぴよん跳ねながら手を上げている。

彼はルナちゃんを抱き上げ、空いた手で私を抱きしめてくれた。

「ほら、これで皆ラブラブだ」

優しい声で彼は言った。

ルナちゃんは満面の笑みで

「わたし幸せー!! ムゲンもリナも幸せ?」

「……ああ。幸せだ」

今の彼が幸せと言ってくれることが、私にとって何より嬉しい事。

もちろん私も幸せだ。彼と一緒にいて幸せでないわけがない。

「私も幸せだよ。ルナちゃんと、ムゲンといれて」

夕食を終え、お風呂に入る。

この湯船につかっている時間が、たった一人で静かにいられる時間だ。

彼といるのが嫌って事じゃない。けれど、人間は一人の時間だっほしいものだから。

何も考えないのもいいし、歌を歌ったりするのもいいなあ。

一人の時間を満喫した後には、彼との日課をする時間。

ムゲンの心を少しでも軽くするために、言いたいことを吐き出してもらおうっていう内容の、一種のカウンセリングかな?

「ああ……!! 何で……何で!! 俺が何をしたっていうんだ!! くそっ!! くそおっ……!」

「……………うん」

手で目を覆いながら、叫ぶムゲン。

「いいんだよ。吐き出して、我慢するのは苦しいから……………」

「もう……………疲れたんだ…。人が死ぬのを目の前で見るのは……………」

「立ち止まるわけにはいかないって心で言っても、うまくはいかないものなんだな……………」
ある程度の時間で、このカウンセリングは切り上げる。あまりやりすぎも良くはないから。

続けることが大事。

私は立ち上がり、ムゲンを抱き寄せた。

「……………リナ……………」

「大丈夫だよ。きつと、あなたなら」

こうやってカウンセリングの後にムゲンを抱きしめるのも日課。

触れ合えば、互いに安心できる。……………この時だけは、ムゲンと一緒に歩めていると思えたから。

人間は、一人じゃ脆いから、誰かと一緒に生きていく。苦しい時、悲しい時はそれぞれお互いに分け合って、嬉しい時はその気持ちを共有して生きていく。

だから、彼ともそうやって一緒に生きていけたら、私はそれでいい。

彼がどんなに変わってしまったても、彼であることは変わらない。

他の誰にもできない事を。彼を受け止めてあげる事が私に出来る事だから。

大丈夫。もう、逃げないよ。

だって、私はあなたの妻だから。

一生をかけてあなたを受け止めるから。

世界が敵になったって、私はあなたの味方だよ。

「……一緒に、歩いていこうね」

「……ああ。分かっているよ、リナ」

偽りの平和だって構わない。それを勝ち取るために私たちは戦っているんだから。

55 : 一緒に帰ろう

宇宙世紀0089. 8. 28 もう夏も終わろうという時期、俺は久々に一人で街を散歩することにした。

家にはリナがいるから、一緒にのんびりしようと思ったのだが、お誘いは断られてしまった。

仕方がない、アウロラが出来てから二人っきりの時間というのが取りづらくなってきているのだから。

分かってはいても、少しだけ寂しく感じた。

既にあの事件から随分と時間が経ったような気がする。俺も前よりは前向きに進んでいると実感している。

昔誰かが言っていた、『時間が解決してくれることもある』。そんな言葉を、今になって理解することが出来た。

悔しいけれど、彼らの死を俺は受け入れてしまっている。彼らを救えなかったことも、傷ついた記憶でさえ、きつと時間が消して行くのだろう。

けれど、忘れはしない。俺が今この場所にいられるのは、彼らが俺を救ってくれたか

ら。

それを語り継いでいかなければいけない。軍人として、一人の人間として。

暑い、出た瞬間に発せられた言葉。

散歩するにしても、気温があまりにも高い。これではすぐ熱中症で倒れてしまいそう
だ。

そういえば、前にアジアで街を散歩したときも、こんな感じだったのを思い出す。

あの日も暑くて、どこか日陰になりそうな場所を求めて歩いていった。

その時、出会ったんだ、エヴァに。

まだ記憶に残る面影、肩までかかる程度の水色の髪。瞳はガーネットのように紅い。

優しい垂れ目が、彼女の性格の良さをよく表していた。

喜ぶたびに揺れる髪が、見ていてこちらまで気分が良くなったのを今でも覚えてい
る。

彼女は別れ際、『今度はとびつきり可愛い子になって皆に会いに行けたらいいな!!』そ
う言っていた。

きつと、本当に会えるのなら、カイルが飛び跳ねるほど喜びそうだな……。

彼らの別れも、戦争が起こした産物だ。しかし、そもそもエヴァは人間ではなくA I

だった。

だから、戦争が無ければ、彼女は産まれてはいなかった。

……戦争は繰り返してはいけない。だが、戦争が無ければ産まれなかったモノだってある。

果たして……どちらが正しいのだろう。

過ぎたことを考えても仕方がないとは思うが、思い返せば思い返すほど、また悪循環のように入り込んでしまう。

「……っ」と……

気づけば市民街から離れたスラムへと辿り着いていた。

確か、エミリーの家もスラム街の近くだったような。

時間もあるので、俺はエミリーの住む家へと向かった。

しばらく歩くと、小さな家が見えてくる。家の前に柵があつて、ちんまりとした庭がある、おしやれな家だ。

庭では、エミリーが両手を合わせ、目を瞑っている。

「……………エミリー？」

恐る恐る声を掛けたら、エミリーの肩はビクリと驚き、若干硬直したままこちらを向

く。

俺の顔を見ると、少しだけ安心した表情で言葉を返した。

「あ……ムゲンさん。……どうしたんですか？」

「驚かせてしまったかな？……何をしてるのかと思つてさ」

エミリーは首を横に振り言葉を続けた。

「す、少しだけ驚きましたけど、大丈夫です」

すると彼女は手を合わせていた方向へ向き直り

「彼と、話をしていたんですよ」

「彼……？」

彼女の視線の先を見ると、小さな墓が立っている。

おそらくは彼女が自分の手で作ったのだろう。木に書かれた擦り切れた文字とは裏

腹にしっかりと掃除されている。

「その墓には……」

エミリーは少しだけ悲しそうな顔を見せた後

「私の英雄が眠っているんですよ」

「英雄？」

「はい。私を命がけで助けてくれた、小さな英雄です」

庭に一つ立つ墓には、「私が愛した小さき英雄ここに眠る」と、書いてあった。

俺は静かに手を合わせ、目を瞑る。

すると、彼女は横で手を合わせながら小さく笑った。

「な、何がおかしいんだい……?」

彼女は微笑みながら言葉を返してくる。

「前に、あなたと同じように手を合わせてくれた人が居たんですよ」

「そうか、だから笑ったのか」

「ええ。……あの人、元気にしてるかな」

懐かしそうに空を見上げるエミリー。彼女の気持ち、なんとなく理解できる気がした。

「えっと……それで、今日はどうしたんですか?」

エミリーは首を傾げながら言った。

「…あ、いや、俺も用事ってわけじゃないんだ。久々に散歩でもしようと思つてね」

「そうですか。私も……つて思つたんですけど、今日は用事があつたので、また今度一緒に散歩しましょうね」

俺は頷いて、彼女の家を後にした。

スラム街では、目付きの悪い人や、ゴミを漁る人が沢山いて、普通の人ならばまず立ち寄ろうとは思わない場所。

きつと、その心があるから人から差別が消えないのだろう。

……俺も偉そうに人の事を言えるわけじゃない。人の命を奪っているから。

それでも、ここにいる人たちも、今日を必死に生きている。生きるのを止めることは簡単はずなのに。

生きようと必死にあがいて、戦っている。それはきつと軍人なんかよりよっぽどカッコいいのかもしれない。

俺はそう思う。

歩いていると、他人からの視線が集中したりもした、気にせず進んでいると前から走ってくる少年を見かける。

すれ違う瞬間、少年とぶつかった。少年はぶつかった反動で地面に尻もちをついた。

「あ……………」

少年からの言葉。驚きで言葉が出ていないように見える。

額から流れる汗、ボサボサの黒の短髪、このスラムでは珍しい優しい目、口元は慌てているのか半開き。眉は凛々しくキリつとしている。

歳はおおよそ13くらいだ。

少年が走ってきた道は、店や食堂などが立ち並ぶ場所。

彼を追ってきたのか、40を超えているであろう人が少年を見つけるとこちらへ寄ってきて少年を掴み上げた。

小太りな彼の前掛けに、ベーカリーと書かれていてなんとなく察しがついた。

「おいガキ!! さっさとうちのパンを返しやがれ!!」

少年は小太りな壮年を睨みつけながら

「うるせえ!! 店の外に置いてあるのが悪いんだろ!! それじゃあ盗ってくれて言ってるようなもんじゃないか!!」

「なんだとお!? てめえ! 調子に乗りやがって!!」

たまらず手を上げようとする壮年を、俺は思わず彼の手を掴んだ。

「な、なんだお前!」

「……………子供に手を出すのは良くない。どれくらいの品なんだ」

「え…………」

呆気にとられた壮年は、少しだけ考えた後

「ウチの店で一番高いヤツだ。…………あんたが代わりに払おうっていうのか?」

俺は軽く笑った後

「ああ。アンタが今ここでこの子を殴らないならな」

すると彼は、ふうつと大きくため息を吐いた後、少年を解放した。案外物分かりが良くて良かった。

……子供が暴力を振るわれていられるところは他人から見ても気持ちがいいものではないから。

俺が彼にお代を支払い終えているころには、少年はどこかへと消えていた。

「あのガキに会いたいなら、さつき、あんたが支払ってる途中にそこにある路地裏に逃げたぞ」

案外優しい対応をしてくれる。彼が指さす先には、子供が一人入るかどうかくらいの小さい路地があった。

……さすがに俺は入れないだろう。

いや、でも試してみるか？

俺は路地の前まで来て、小さい路地へ体を入れてみる。

かなり狭いが、通れないことはなさそうだ。

なんとか路地を通り抜けたころには、俺の服は埃やら壁の汚れで汚くなっていた。これはさすがにリナに叱られそうだ。

だが、幼いころにした探検ごっこを思い出して、少しだけワクワクが込み上げてくるのが自分でも理解できる。

この探検の目的は、あの少年と会うこと。と、頭の中で目標を立てて、前を向く。

路地の先には通路があり、道が分かれていたりする。どことなく、街の材質と、路地の先の材質が違うように感じるのは気のせいではないようだ。

侵入者を入れないように迷路状にしているのだろうか。

冒険心をくすぐられた俺は、素直にその迷路に挑戦することを選んだ。

最初の分かれ道を左へと進むと、その先には大きく【○】と書いてあった。

……流石に分かりやすいような気がする。

余裕で先に進もうとした瞬間、俺の足は宙に浮いていた。

「え……」

思わず自分でも声が出た。そして、次の瞬間、俺は足元にあるであろう落とし穴に見事にはまってしまった。

しかも落とし穴の中は水が張ってあって、おかげでびしょ濡れだ。これでリナに叱られることは確定事項となってしまうたな。

【○】と書いていたのに引つ掛けられた悔しさから、引き返すことなんか頭から消え去った。

落とし穴から抜け出し、さつきとはまた逆の道を進む。

そこには先ほどと同じく大きく「×」と書いてある。

「なるほどな、○が正解と見せかけて、×が正解だったと、考えたやつは中々」

口に出して称賛しながら先に進むと、再び俺の足が宙を歩いた。

そして、先ほどと同じく落とし穴へとハマってしまった。

「……………」

今度も同じ水の落とし穴。……体が重い。

落とし穴から抜け出し、今度は○と書いてあるほうへ進み、落とし穴を飛び越え先に進む。

次も同じく2択の分かれ道。今度は右側の通路を先に進んだ。

奥は先ほどとは打って変わり、何も書かれていない。さらに道はここで行き止まり。こちらはハズレだったのだろうか。

俺は引き返して左側へ進む。しかし、左側も同じく何も書かれておらず、行き止まりだった。

壁を調べてみるが、特に何があるわけでもなく、反対側も調べてみたが、同じく何もない。

完全に行き詰った。昔遊んだゲームでもこんなことがあったか思い出しながら、次の手を考える。

とりあえず分かれ道の前まで戻り、考えるが、さすがにいい案が思いつかない。

はあ、とため息を吐いて、分かれ道の中央の壁へ背を預けると――

そのままの勢いで視点が青い空へ向けられた。……うん？

起き上がって見てみると、背もたれにした壁が倒れ、先には道があった。

「わかるかよ……」

流石に言葉が漏れ出した。

少しだけ呆れながらも先へと進むと、今度は4方向に分かれた道。

そろそろ一発で通り抜けたいところではあるが、何かヒントがあるわけでもないし――

足元を見ると、地面に埋め込まれた板に、雑な字で何かが書かれている。

【足元に気を付けて】

……最初から書いておいてくれ。

俺はまず左の道を進んだ。

左の道は随分と葉っぱが多い道で、足元に何か隠してあるんじゃないかと疑い、慎重に進む。

一番奥へと辿り着くと、壁があった。どうやらここで行き止まりみたいだ。

戻ろうと振り返り、一步踏み出した瞬間、空を覆う何か。しかも俺の上だけ――

見上げる前にその何かが頭に直撃。

カーンと高い音を上げながら、何かは俺の頭から落ちた。

その痛みから俺は頭を押さえながら地面にしゃがみこんだ。

片目を開き何があつたのかを確認すると、地面には金ダライが転がっている。

仕掛けられたタライに気づかずに戻つたために、テレビでしか見る事のないタライ脳天直撃を受けてしまった。

それよりも――

「つてえ……………」

普通に痛い。

この迷路を進んでいて思ったことがある。

これは、大人じゃ考えつかないような発想の罠が多い。なんというか、子供が作りそうな仕掛けばかりなのだ。

発想の良さや、それを実行に移す行動力は子供でしか可能ではないだろう。

それから、俺は金ダライ2つ、落とし穴1つにはまりながらもなんとか奥へ進んだ。リナから引っぱたかれても仕方なくらい服が汚れたのは言うまでもない。

しばらく通路が続いて、大きなスクラップ場へと辿り着く。どうやらここがこの迷路のゴールのようだ。

「……………」

大量のスクラップの山が形成されている中、その中心の山には人が住んでいる形跡が見て取れた。

外はもう夕暮れで、スクラップ場に夕日が差し込んでいる。

「おい」

ひよつこりと山の頂上から姿を現す少年。遠目からだか、さつき逃げていた少年だろう。

「お前、どこから来たんだ」

俺は彼に警戒されないように両手を上げながら返す。

「迷路を通って来たんだ。君に会いたくてね」

すると少年はこちらへと滑り降りてきて、俺の前に立った。

「何の用だ」

「いいや、少し話がしたかっただけなんだ。信じてくれ」

不穏な雰囲気支配していたが、少し考えた後少年は

「何の話？金？」

そっぽを向きながら言った。

俺は首を横に振り、言葉を返す。

「違う。どうして盗みなんかをした？」

「そうじゃないと生きていけないからだ」

もつともな回答だ。確かに、生活が苦しくないなら盗みなんてしないだろう。

「ここにいるのは君だけかい？」

「それ聞いて何かある？」

「あ、いや聞いてみたただけだよ」

少年は怪訝そうな顔をした後

「話はそれだけ？」

「あ、いや……もう少し話をしたい」

「……」

彼は実に面倒くさそうに俺を見た後、溜息を吐いて頷いた。

「家族は……いるのかい？」

「いるよ」

「そっか」

最初はそんな短い会話ばかりだったが、時間が経つにつれ、彼は少しずつ口を開き始めた。

「君は、一番上のお兄さんなんだな」

「そうさ、皆を養うには、俺がしつかりしないといけないから。けれど、スラム育ちなんかが働ける場所なんかなくてさ」

「だから盗んだりしてたのか」

「…そうしなきゃ、俺たちは明日も生きていけない。将来なんか二の次さ」

俺たちはボロボロの椅子に腰かけながら話をした。ここでの生活や、将来の夢、子供の話をしつかりと聞くいい機会だった。

こんなにも頑張っている子供がいて、それを見て見ぬ振りなんて俺にはできない。俺は、少年にこんな提案を試してみる。

「なあ、君がもしよければ、皆を連れて孤児院に来ないか？」

「え……」

「寝る場所も、遊ぶ場所も、食事もある。どうだろう？」

少年は俺を怪しむような目で見て

「なんで」

一言だけ返した。…切り出し方が悪かったかな。

「なんで……か。昔の自分を見ているような気がしたのさ」

「……昔の？」

「ああ」

頷いた後、言葉が続ける。

「戦争で親を亡くした俺も、形は違えど君と同じように家族と必死に頑張ってきたんだ」

「だから、なんか、思い出しちゃってね」

「へえ……。俺には分からないけど……」

俺は小さく笑った後

「いつか、君が俺みたいに言う日が来るかもしれないね」

「いつかって……俺は今が大変なのに」

「そうだね。だから、君たちを支えてあげたいだけだよ」

「……そこまでする必要があるの？」

俺は頷いた後、彼に微笑みながら言った。

「ああ。……一人は、寂しいだろ？」

「……」

昔、ヘンリーさんに言われたその言葉を聞いた時の顔は、きつと今の彼のような顔をしていただろう。分かるような、分からないような、そんな顔。

「変な人だな」

「……よく言われるよ。でも、世の中もつと変な人がいるのさ」

「へえ」

「君が知らない事も沢山ある。それを、俺が教えてあげるから」
「…」

俺は少年を抱きしめ、頭を撫でた。

「な、なんだよ!?!」

「……よく頑張ったな。一人でずーっと戦ったな。偉いぞ」

この子はたった一人で戦ってきた。俺には支えてくれる仲間がいた。けれど、この子にはいなかった。

だから、きつと苦しい時もあったはずなのに、それでも生きようと頑張った。そう思うと、勝手に体が動いていた。

「……暖かい」

少年は小さく呟いた。

「暖かいな。これが人の温もりだよ。君が感じていい感情だ」

「……」

すると、少年も俺の背に手をまわし、抱きしめてくる。

「……どうした?」

「…アンタも……頑張ったな」

「え……」

思わず返答に困った。どう返していいのか分からない。

「アンタも……一人で戦ったんだろ。だから、悲しそうに見えるんだ。癒してもらっていても、消えないような、そんな傷が」

「……どう、だろうな」

「俺にはアンタが悲しんでいるように見えた。…何があったかは知らないけど、頑張ったと思うよ」

俺はまだ……悩んでいたのか。……でも、もう大丈夫な気がする。この少年の言葉で、やっと救われた気がするんだ。

「……ありがとう」

「これが、人の温もりなんだろ。……俺……アンタの孤児院に行きたい。この感情を……色んな事を知れる気がするから」

「……ああ。帰ろう、家に」

家路につく頃には既に夜を迎えていた。あれだけ賑わっていた街も、今では穏やかな雰囲気になり、天に昇る月はそんな景色を見守ってくれている。

こうやって手を取り合って生きていくことだけで人間は十分なんだろう。

俺も、やっと前を向いて歩いていける。

子供からも学ぶことが沢山あるなんて思いもよらなかった。

大人になってからわかる気持ちって奴なのかもしれない。

そして、明日も日は昇っていく。

55 完

第二次ネオ・ジオン抗争編

56：戦いへの躊躇

0090・03

連邦軍、外郭新興部隊ロンド・ベル隊設立。第00特務試験MS隊、一時的にロンド・ベルの傘下へ。

0093・02・27

ネオ・ジオン総帥、シヤア・アズナブル、インタビュ―番組内で連邦政府に対し事実上の宣戦布告。「第二次ネオ・ジオン抗争」勃発

0093・03・01

ムゲン・クロスフォード少尉、4年の謹慎処分から解放。第00特務試験MS隊に復帰。

「順調か」

格納庫に佇む機体を眺め、青年は呟く。

「そうね。全員の機体の武装も完成したし、これでジオンとも戦えるよ。あ、今はネオ・ジオンだっけ？」

緊張をほぐすような口調で、銀色の髪をした女性が笑って見せる。

「……そうだな、俺の中でやるべきことは決まっている。俺は俺の役目を果たす」
一方の青年の表情は硬く、どことなく暗い。

「無茶だけはしないでね」

女性は彼の身を案じるように手を合わせる。それに対して青年は女性の頭に手を置いた後

「……もちろんさ。……そろそろ時間だ」

青年は機体に取り込む。青年が乗り込んだ機体が動き出し、他の機体もそれを見て動き出す。

「ムゲン・クロスフォード、ジェガン、出るぞ」

発進する機体たちを見送りながら、彼女は願う。

「どうか……皆無事に……。ムゲン……生きて帰ってきて……」

MSが噴射する青いスラスタが宇宙へ軌道を描きながら消えていった。

0093.03.02 第00特務試験MS隊、新型MSの戦闘テスト完了。帰還中にネオ・ジオンと交戦。ムゲン・クロスフォード少尉は復帰後初の戦闘となった。

リーダーに映る敵影は6機。おおよそ小隊規模の敵であるということが分かる。

こちらの戦力は、俺を含めて4機。数ではこちらが不利だが、ここで戦力を叩いておきたいという気持ちもある。

「先生……！」

リリーの声で現実には引き戻される。こうしている間にも敵はこちらへとまっすぐ迫ってきているのだ。

「す、すまない。……よし、小隊員に告ぐ。これより敵のMSを叩くぞ。少しでも数を減らす！」

「いいのか？俺たちの任務は偵察だろうか？」

道夜が若干呆れ気味に言葉を返してくる。彼が軽く肩を竦めながら言っているのが見なくても理解できる。

「そうだが、こちらに被害が無ければ、ファングだって許してくれるさ」

「そういうもんか」

「そういうものさ」

「先生の命令なら……やるよ」

「えー、面倒です」

実に面倒くさそうな声でユーリがぼつりとつぶやいてくる。するとリリーが

「先生の命令聞かないの……？」

リリーはどこことなく声が低い気がする。ユーリは軽く笑いながら

「まー、どうせ嫌でもやれって言われるだろうし、後でお菓子をおごってもらおうということ、今は戦いますか」

「……ずるい」

「リリーさんもおごってもらったらいんですよ。ほら、ムゲンさんに」

「……お前なあ……。どちらにせよ、今は敵に集中するんだ。お菓子も生き残ってからだ」

「おごってくれるの……?」

リリーが目をキラキラさせながら聞いてくるのが容易に想像できた。

「まあ、考えておくよ」

「……やった!」

「さっさと終わらせる。全機、散開して各個で撃破を、状況次第で後退する。行くぞ!」

「了解」

俺を含めた全員が散開すると、それに反応するように相手も散開し始めて追撃を開始する。

ここまでは予想通りというか、案の定というべきか。

俺が数年前に乗っていたジエガンとは違い、今ではリーダーに敵の型式番号なんかも

書かれていて分かりやすくなっている。

さらにシートも、MSの視界以上の範囲を見ることが出来るようになっていたため、宇宙での戦闘の対応も容易だ。

レーダーに表示されるMSのデータは、連邦の上層部が収集したものを全MSに送っているらしい。詳しい事は分からないが、なにせよ、戦いやすくなったのは変わりない。

正面からの敵が2機。レーダーに表示された型式番号はMSX—011とMSX—011「02」であった。そして、遠目からでも分かる白い機体。

俺はその機体を知っている。そして、その機体がいるのなら、当然—

瞬間、アラート音と共に、背後からの殺気を感じ取る。

振り向きざまにシールドを構え、刀を受け止めた。黒にコーティングされたザクのモノアイが赤く光る。

「やはりか……！カカサ!!」

「おや、その声は……いやあ、久しいね、ムゲン君!」

シールドで強引に押しつけ、間合いを取る。シールドを構えつつ、ビームライフルで牽制。

続けて誘導した位置へと素早くグレネードランチャーでの攻撃。

ザクは直撃を受けると感知してか、素早く手で受け止めた。

サーベルを引き抜き、一気に黒いザクと間合いを詰める。

「今更ジオンで何を！」

ザクも負けじと刀で応戦し、鏖迫り合う。

「俺っちもやりたくてやってるわけじゃあないんだけどネ」

「ならば何故?!」

「それは……まあ、色々とね」

強引に力で押し切られる。素早く宙返り、間合いを取りながらシールドミサイルとバルカンを放つ。

カカサはショットガンを取り出し、数発。互いの正面にミサイルの爆発の光が広がった。

再び切りかかり、互いに得物がぶつかり合う。

「やるねえ、射撃の腕も上がったんじゃない？」

「良く言う……。腕を上げているのはそちらも同じ事だろう！」

「あ、気づいちゃった? いやあ、こう見えても沢山練習したんだよ? 焼き鳥食べたりしながらさあ」

「ふっ……そんな冗談が——っ!」

背後からの一射。対応に遅れ、シールドに搭載したミサイルが爆発。咄嗟にシールドをパージし、腕で機体を庇う。

その爆発に、カカサも少しだけ怯んだのか、隙が出来る。

「見えた……！そこだ!!」

サーベルで刀を強引に焼き切り、そのまま右腕を切り落とした。

「くっ……！やっちゃまった……!?!」

「これで……」

サーベルを構えようとした瞬間、背後から、射撃される予感を感じ取る。

振り向き、左腕で防御。しかし、それによって左腕が撃ち抜かれ、使い物にならなくなった。

「くそ……!」

白いザクは一直線にこちらへと迫り、サーベルを勢いに乗せて振りかぶる。

応戦し、サーベルで受け止めるが、相手は左腕でライフルを構えて

「この程度か？ムゲン」

「言ってくれるな……クロノード!」

「今回は、加減容赦無くお前を殺しに来たぞ!」

「何……!」

「俺は……お前を……!!」

『先生、下がって!!』

頭の中でリリーの声が響く。

サーベルを吹き飛ばし、宙返り。

「ちっ……! ファンネルってやつか……!!」

クロノードの機体をリリーが操るファンネルが射撃するが、それを見切るように回避していくクロノード。

「クロノード、さすがに限界だ。損害が大きすぎる」

「くっ……。ムゲン、次こそ……!!」

カカサとクロノードは機体を反転させ、戦線から離脱していった。

彼らが撤退するのを見送ってから、俺は大きく息を吐いた。

久々の戦闘でカカサやクロノードと戦うことになるとは思ってもみなかった。彼らほどの時代でも変わらない強さを持っている。

それを再びこの身で感じるようになるうとは。

彼らに乗っている機体はグリプス戦役時代に作られた機体だ。当然ジェガンと比べれば天と地ほどの差があると断言しても言い過ぎではないと思う。

それなのにあそこまで戦えるなんて……、敵ながら見事としか言えない。

俺が弱いだけなのかもしれないが。

「……よし、帰還するぞ。損害は——」

何にせよ、これはリナに叱られるな。

クラップ級巡洋艦—サラミス級に代わる地球連邦軍の主力艦艇。

宇宙へ上がる際に俺たちの部隊へ配備された新型艦だ。

グロリアスでは主力艦のラー・カイラム級の速力に追いつけず足枷となる可能性があったため、上層部が用意してくれたのだとか。

当然と言えば当然なのだが、グロリアスは一年戦争に建造された戦艦だ。さすがに性能で負けてしまうだろう。

クラップ級に搭乗して最初に驚いたのは通常用と戦闘用の2つのブリッジがあるという事。

時代は少しずつでも進化しているというのを実感できた気がする。

MSから降りると、格納庫全体に響き渡るような声が—

「ちよつとムゲン!!!」

案の定だ。普段は優しい雰囲気を思わせる目も、今は釣りあがっていて、両手を握りしめて、地面に足をダンダンと打ち付けるたびに銀色の髪が揺れている。

体つきもどちらかと言えば華奢なほうだし、普段から笑顔を絶やさないう彼女がここま
で怒っていたとは思いませんでした。

俺より少しだけ身長が小さいからか、少しだけ微笑ましいというか……正直怒つてい
るように見えないけども。

「わ、悪い……」

「いつつも言ってるじゃん！モビルスーツは大切に扱ってっつて!!!」

言葉を叫びながらも地団駄を踏んでいる。彼女が言っていることは正しいから、悪い
とは思うのだが……

いけません、子供が怒っているように見えて、笑いそうになってしまう。実際に笑つ
たら大変だけれど。

彼女が子供っぽいということを抜きにしてもMSを破損させたことに変わりはない。
俺は素直に頭を下げた。

「……悪かったよ、リナ」

「あ……そういうことさせるために怒ってるわけじゃ……」
すると彼女から少しだけ悲しそうな声が聞こえてくる。

「えつと……そ、そこまでする必要ないから……頭上げて……?」

彼女が悲しそうな顔でこちらを覗き込んでくる。彼女の表情はさつきとは打って変

わり、悲しそうな表情で、眉もしょんぼりとしている。

俺が頭を上げると、俺の体を見て回り、俺の顔を見ながら

「怪我、してない？どっか打ったとかは？」

俺は首を横に振りながら

「大丈夫。怪我したのは俺のジエガンだけ」

「……そっか」

彼女は安堵して、胸をなでおろした。

「機体は材料があれば何度だって直せるけど、あなたの替えなんてないから……」

俺は彼女の頭に手をのせ、軽く微笑みながら

「分かってるよ。けど、それは俺以外の皆もそうだ。リナ、君の代わりになれる人なんかいないから。だから、俺が守っていかなきやいけない。ちよつとくらい無茶してでもね」

「……あなたの無茶は信用できる時と出来ない時があるからなあ……」

「ど、どういふこと？」

「無茶するって言うってしない時もあれば、本当に無茶をして死ぬ手前まで頑張っちゃう時もあるでしょ？だから、信用出来たり出来なかつたりって」

「……そういうことか」

いつの間にか、彼女の表情も和らいで、普段の彼女通りにもどっていた。

前よりも髪が伸びて、今では髪を帽子に入れるのも少し苦労するとか。だいたい背中くらいまでの長さ。

強そうな女性の雰囲気を持たせる眉に、全てを包むような優しさを感じる垂れ目。

少し身長が伸びて、……まあ、あとは色々成長してる。色々の部分？聞いてくれるなよ。

「でも……ね」

リナは少しだけ俯きながらぼつりと呟いた。

「うん？」

「あなたがこうやって毎回ここに帰ってきてくれるだけで、私は嬉しいよ」

彼女は笑顔を俺に向けてくれた。この笑顔を何度見て、何度救われたんだろう。

きつと、彼女の笑顔があるから、彼女の笑顔を守りたいから、戦えているのかもしれない。

守つていかなきゃいけない。この笑顔を、皆を。この手が血に染まることも、もう躊躇いは無い。

なんて、カッコいい事言ってもユーリや道夜に笑われるだけなんだけどね。

「ありがとう。リナ」

すると彼女は首を横に振った後

「当然だよ、だって私はあなたの妻なんですもの」

彼女の一言に少しだけドキツとしてしまった。……単純だな、俺も。でも、嬉しいんだ。

「そう、だな……。俺も、アウロラやリナのために生きて帰ってくるよ。どんな戦いで
も」

「無茶だけは……しないでね」

「もちろんだ」

俺たちはしばらくの間、その場で時間も気にせずくだらない話で盛り上がった。

最近の前より笑えるようになってきていると実感している。

理由はきつと、この部隊の皆といられるからなんだろう。

自然と笑みがこぼれている。あの事件の後では考えられないくらいに。

「先生？」

リリーが顔を覗き込むように首をかしげている。

「ああ、すまない。それで、何の話だったかな」

「もー！先生、ちゃんと聞いててよー！」

「いやはやすまない。少し考え事をしてたものでね」

頬を膨らましながら怒るリリー。前に会った時よりも少しだけ背が伸びただろうか、肩に掛かる程度だった髪は変わらないが、後ろをリボンで結んでいる。

キラキラと輝く薄い緑色の瞳は、相も変わらず純粹そのものであった。

優しそうな雰囲気を整える顔つき、それに対して眉はどこか大人っぽく細い。

その溢れんばかりの行動力や、言動その全てから4年前とは違い【感情】というものを端はしから感じることが出来た。

「先生って、いつつも考え事ばかり。つまんない」

「ははは……それは申し訳ない」

「……別にいいけれど。それでね、ファングさんが驚いてね、コーヒーこぼしちゃってさ！」

思えば彼女も随分と成長した。見た目もそうだが、性格も変わった。

今では彼女もすっかりこの部隊に馴染んでいるようで安心できた。こういう時、人は鼻が高いって言うんだっけな。

彼女を指導する立場として、これ以上に嬉しい事は無いと思える。

「ファングもたまには失敗するんだな……」

「うんうん！皆をじーつと見てるとね、色んな事が分かって楽しい！」

「そうか。それじゃあ、俺はどうだろう」

「先生かあ……。先生はね、前までいっつも上の空だったよね。それに、悲しそうだった。話を聞いてくれないのはいつもの事だけど」

「そうか……」

……さりげなくひどい事言われた？

「でも……。ね、今は違うよ。今はすっごく楽しそう。何て言うんだろう、幸せそうな顔してるよ」

「リリー……」

「だから私、嬉しい。先生が笑ってるし、皆がいるから」

当時の彼女では出る事のない言葉を俺は今聞いている。それがたまらなく嬉しくて、涙が出そうになるほど。

「そっか。リリー、俺も嬉しいんだ」

「なんで？」

彼女は首を傾げる。

「君が他人と関わってくれているから。…それに、ちゃんと【約束】守ってくれたからだよ」

「本当はね……。今でもちよつと怖いんだ。話そうとすると手が震える時もあるよ」

「そうか……」

「でも、他人と話すこと、嫌いじゃないから……。むしろ、楽しいんだよ」

俺は小さく頷いた後、彼女の言葉を待った。

「約束もね、だから守り続けられたんだ。もう、先生から【言われただけの存在】じゃないから。私が私の意志で【守りたい存在】だったから、頑張れたんだ」

「ほんと……良く成長したな……」

零れそうになる涙を拭きながら、俺は彼女にそれだけを言った。

悲しい涙じゃない。嬉しい涙なんだ。

すると、頬を伝う涙を彼女の指が拭ってくれる。

「ありがとう、ムゲン先生。私のために泣いてくれて……。先生になってくれて……。ありがとう」

「リリー、俺のほうこそありがとう。俺は、今凄く嬉しいんだ。君が、こんなにも立派になってくれたことが」

「ふふふ。もう、先生の足を引っ張るつもりは無いからね。戦闘でも、日常でも」

「ああ。…なら、もう先生はいらなかな?」

すると彼女は首を大きく横に振り

「ダメ!!!」

「え……」

「私は……先生って呼びたいから」

「な、なんで……?」

「だってそのほうが親密かなって思ってた」

彼女は少しだけ顔を赤くしながら言った。

「……リリーがそれでいいなら」

「うん……!」

その笑顔は間違いなく、輝いていた。……軍に戻ってきたのは間違いじゃなかったのかも知れない。

リリーと別れてから、俺は食堂でコーヒーを飲んでいた。

前と変わらず、少し薄いコーヒーを喉へと通す。

「……もうこんな時期か……」

もうすぐアウロラの4才の誕生日。本当は一緒にいてあげたかったが、こんな場所にあの子を連れてくるわけにはいかない。

心配こそしているが、あの子一人というわけではない。ルナちゃんも、エミリーも、それに、あの子達もいる。

帰ったら沢山祝ってやらないとな。……皆でパーティーでも開いてもいいかもしれない。

「ムゲン」

その男も、前とは少し見た目が変わっていた。サツパリと髪を短く整えている。キリツとした目つきに見えるが、実は垂れ目なんだよな、彼。

そして優しさを感じることでできる眉。髭も少し伸ばして、昔の彼では考えもつかないような容姿になっている。普通にモテるであろう見た目。

ロンド・ベルの青色の制服がよく似合っている。

「おや、道夜か。どうした？」

「いいや。少し話でもしないか？」

「ああ、構わないよ」

すると彼は俺の前の椅子に腰かける。

「なあ、ムゲン」

「どうした？」

「いいや、また、彼らと戦ったそうだな」

彼の言う「彼ら」というのは、間違いなくカカサとクロノードだろう。

「ああ。これで何度目になるだろうな」

「つくづく彼らとは縁があるな？」

「そうだな。……腐れ縁って奴なのかな」

「どうだろうな。なんにせよ、そろそろ決着をつけないといけないんじゃないか？」

「……決着……か。考えたこともなかったな」

「時代は変わっていく。そしていつか訪れる終わりもな」

「確かにな……」

「お前なら、どうするべきかは分かっているはずだ。だから俺は何も言わない。全てお前に任せるさ」

「……考えておくよ」

少しの間沈黙が続いた後、俺は口を開く。

「そういえば、今度アウロラの誕生日なんだ、この戦いが終わったらパーティーでも開かないか？」

道夜は暗い顔をした後

「……そう、だな。少し考えておくよ」

「道夜……？」

「気にするなよ。お前は前を向け」

「……」

彼は何かを隠しているようだったが、詮索はしないでおう。

俺は道夜と別れた後、一人廊下で宇宙そらをぼーっと見つめていた。

決着……道夜から言われた言葉が何故か頭から離れない。

俺は……クロノードと決着をつける事を恐れているのか……？

いや、恐れているんじゃない。恐れ以上に、躊躇いが大きい。

戦つてもいいのか？ルナちゃんの父親を……何より、家族を……。その躊躇いが、俺を悩ませている。

「……お前は本当に考えるのが好きだな」

「うわあ!」

唐突に背後から声が聞こえて心臓が飛び出そうになった。呼吸を整えた後、振り返る。

そこでは、驚いた俺を見て笑いをこらえるフユミネの姿があった。

黒の短髪で、整った顔つき、キリっとした釣り目。クールな雰囲気と思わせる細い眉。そんな彼も、ここまで笑えるようになってきていることに、俺は素直に驚いている。

普段が真面目なだけに、笑う姿なんかほとんど見たことが無いのだから当然と言えば当然だろう。

「ふっ……年齢を重ねたところで、お前は変わらないな」

「……それは……褒め言葉かい？」

「さあ、どうだろうな？」

フユミネは廊下の手すりに軽く腰を掛け俺を見据えた。

「何で考えているか、俺には皆目見当もつかない。だが、一つアドバイスをやるなら、お前の悩みは、「人に打ち明けて良い」悩みだ。……困った時は誰かに相談すると良い」

「……打ち明けて良い……か」

「お前はいつもそうやって、一人で悩むからな。そういう時はきまって失敗してる」

確かにそうだ。一人で悩んで、行動した。それで待っていた結果は、少なからず良い結果ではなかった。

「まあ、お前がどうするかは、お前次第だからな。……これ以上は言わん。ではな」

背を向け進もうとするフユミネに俺は一言だけ言った。

「……ありがとう」

フユミネは振り返ることもなく、軽く手を上げて部屋へと入っていった。

「人に……聞く……か。難しい事を言ってくれるなあ……」

軽く頭を掻きながら、小さく呟いた。

「とりあえず……機体の調子でも見に行くかな」

と、軽い独り言をつぶやいた後、俺は格納庫へと向かった。

格納庫では、先ほどの戦闘で破損した機体の修復に追われていて、とても忙しそうなお様子だった。おそらくリナも今は整備をしているだろう。

「おめえらあ!!! 手え抜くんじゃあねえぞ!!! 次の戦闘で生き残れるようにきつちり仕上げろ!!!」

格納庫全体に響くその声。トクナガさんの声だ。

「おおームゲンじゃねえか!! どうした!!!」

俺に気づいたトクナガさんがこちらへと近づいてくる。

「ああ、いえ……」

髪は黒に所々白が混ざっていて、厳格ながらも優しさを秘める目に、男性らしい強さを思わせる眉。そして豪快な性格。

この部隊で何年も整備長として働き、保護者的立ち位置から見つめてきた人物。そして、リナが本当に心を開くことが出来た数少ない人。

「なあんだ。忙しいってのに。……ちと待つてな。もうすぐひと段落つくんだ」

まるで俺が何か言ったかのように彼は言う。……また顔に出てたのだろうか。

彼の言われた通り、俺は格納庫の隅で整備をただ静かに見つめながら彼を待った。

しばらくすると、仕事を終えたのか、彼はこちらへと寄ってきて手を上げる。

「待たせた。んで、悩みだっけか。言ってみな」

……やっぱり顔に出てたんだ……。

「え、つと……先ほどの戦いの時の事です。…かつて仲間だったクロノードとカカサと戦ったんです」

「ああ。あのザクは見間違えねえ。あいつ等だろうな。んで、どうした？」

「……俺は……彼らと決着をつけるのを躊躇っているんです…。戦っていいのかと」

「……何をもって戦ってはいけないと思う？」

「それは……俺にも分かりません」

「そうか。言葉にできないが、戦うことへの躊躇いがあるわけか」

うーん、と唸った後、トクナガさんは

「そうだな、それはお前が優しいからなんだろうな。恐らくお前が躊躇う理由は、クロノードに言われた言葉を今でも忘れずにいるからだろう」

「彼の言葉……？」

「そうだ。彼からもファングと同じ感じがしてな、人を惹きつける力っていうのかな、そういうのがあるんだよ。自然と周りに人が集まって」

きつと、その力が、皆を、俺を繋いでくれたのかもしれない。だから……俺は……

「……そうですね」

「そんな彼は、きつとファングと同じことを言ったはずさ。『俺たちは家族』ってな」

「そうか……家族。その言葉が、俺の心で引つかかっていたのか。だから、彼らを傷つける事を……」

「だがな、結局はお互い【敵】だ」

「でも……!!一度は——」

言葉を続けようとしたとき、ある言葉を思い出す。

『だったら何だ!——戦争で家族が何だというんだ!?——それをわかってお前はこっちに來たんじゃないか!!』

その言葉が、俺の言葉を遮った。俺は首を横に振った後

「……そうだ。戦争で家族が何なんだ。敵である以上は……敵なんだ」

「お前は堅いなあ」

彼は俺の頭にぼんと手を置く。その手は、父のように優しい手。大きく、安心感がある。

「……え……」

「確かに、敵だし、戦争で家族がつてのもわかるがよ、俺が言いたいのはそのうちことじゃない」

「……………」

さすがに理解できず首を傾げてしまう。

「いいか？ そうやって自分に言い聞かすんじゃない、自分の【意志】をもつて彼らと対峙しろって言ってるんだよ」

「あまり……………解決になつていないような……………」

「解決にはならんが、気が楽になるだろ。それに、言い聞かされたからで戦ったら、クロノード達に失礼だろ？」

「……………」

「戦争でも、礼儀やルールつてもんがある。それは昔っから変わんねえ。あいつ等は、あいつ等の【意志】で戦っているんだと思うんだ」

「だから、お前も【覚悟】、決めねえといけねえんじゃないか？」

「覚悟……………」

胸に手を当て、静かに考える。

「お前が躊躇う理由はきつと、そこにある。彼らと【向き合う覚悟】を決められていないんだろ？」

「……………向き合う……………覚悟……………」

「次の戦場、きつと彼らは来る。その時一度、彼らをしっかりと向き合つて見つめてみ

ろ。何かが分かるんじゃないか？」

「……………はい」

「なんだ、懐かしいな、ここまでお前と話したのも」

俺の頭に乗せた手を降ろしながら彼は笑ってみせる。

「そうですね」

「…懐かしいなあ。お前が脱走した日以来だなあ」

「あれからもう10年か…：そりやあ白髪も増えるわけだよ」

と、目を細めながら俺を見る。

「ははは…：。でも、トクナガさんはまだまだ、現役ですよね」

「バカ言うなよ。もうそろそろ引退時期さ。最近腰がなあ…：」

「え…………」

「悲しそうな顔をすんなよ。そういうのは誰にだつて来るんだ。仕方ねえことさ」

「……………でも、あなたが辞めたらこの部隊の整備長は…：」

「ああ、気にすんな、それは決めてるんだよ」

「えつ…………。まさか、リナ…：ですか？」

「ま、妥当だろうな。あいつの腕も、俺ほどじゃあ無いが、他の部隊の整備兵よか全然上だからな」

「リナが一生をかけて超えないといけない壁みたいな言い方ですね」
すると彼ははっはっはとは大きく笑いながら

「あいつが超えられっかなあ。腕は上がってきてはいるが、俺と比べたら天と地ほどの差があるね」

「そ、そんなにですか!?!」

「そうよ。俺あ、まだあいつに超えられるわけにはいかねえんだよ。まだ、あいつの親父の代わりとして教えてねえ事が沢山あるんだ」

「……それは……」

「俺の腕を上回ったって時はな、ムゲン、あいつが本当に親離れした時って事さ」

「トクナガさん……」

「ふっ、柄にもねえ事言っただなあ。ま、あいつが成長しているのは嘘じゃあない。それに、素直に嬉しいのさ」

「そうなんですか? てつきり、実力を認めてないんじゃないかと思っちゃいましたよ」

「そんなわけないだろう? あいつは俺自慢の整備士さ。人間としてもしっかり成長しやがって……つと、これは夫の前で言うことじゃあないな?」

「ははは……。リナは、俺が守りますから。大丈夫ですよ」

「おお! そりゃあ楽しみだ。……つたく、あん時のしょんぼりした青年が、今では立派な

父親か。つくづく歳を取ったと実感するわ」

彼は機体を見つめながら、何かを考えている。

少しの沈黙の後、彼は口を開いた。

「なあ、ムゲンよ」

「……なんです?」

「……歳を取るって言うのも、悪くないもんだな」

「俺にも、少しだけ分かる気がします」

「ほお?」

「子供が出来て、成長して、今では喋れるようにも、立つて歩くことだって出来る。それに、今まで誰とも話そうとしなかった子が、4年でここまで成長するなんて」

「俺は、純粹に思うんです。……俺は、苦しい思いもしたし、沢山の犠牲を払ってここまです生きてきた」

「だからなおさら、彼らが成長している喜びを、今ここで生きている幸せを分かるんです。生きていて……良かったと」

彼の瞳は、成長した子供を見つめるような目をしていて。彼はふつと笑うと

「言うようになったな。でも、そうだな……。生きているっていうのは、素晴らしい事だよな」

「はい……！」

俺の中で、少しだけだが、何をするべきかが分かった気がする。

彼らと向き合う、彼らを見れば、何か分かるのだろうか？ 覚悟を決める理由が……？

悩んでいても、時間は、戦いは待ってくれはしない。

そして結局、問の答えが分かるのは皮肉にも戦場なのだ。

今はただ、前を向く。

56 完

57：彼の戦う意味

0093.03.03

ネオ・ジオン艦隊、スウィート・ウォーターを発進

0093.03.04

第00特務試験MS隊、軌道を変更された小惑星5thルナにてネオ・ジオンと交戦。

レーダーに映る敵影は10を超え、さらにその奥には2隻の戦艦。

数でも、状況でもこちらが圧倒的に不利だ。しかし、ここで引き下がれば、連邦の本部がやられてしまう。何とかして止めなければ。

「ちっ!!状況が悪い……!」

現状、俺たち先発隊の人数は俺を含め道夜、ユーリ、リリーの4人。それぞれが散開して各個で迎撃に当たっているものの、なにぶん数で押されつつある。

今は目の前の敵を片付けなければ。仲間との合流を防ぐように立ちふさがるのは2機の新型MS。

名前は確か、ギラ・ドーガだったか。

まずはバルカンで1機へ牽制し、射撃位置への誘導。

続いてもう一機にシールドミサイルを放ち、もう1機との距離を強引に離させる。

1機はミサイルを回避している。そのせいか、もう1機との距離がどんどん離れていく。今なら……

「いけるか……!」

ビームライフルを構え、バルカンで誘導されるであろう位置へ引き金を引く。

続けて、致命打を与えるため、もう一射を少し位置をずらして発射。2発目はコックピットへの直撃を狙った。

放たれたビームは1射目にギラ・ドーガの脚に直撃し、脚への被弾を気にする間もなく、もう一射がコックピットを貫いた。

命中を確認後、まだ動けるもう1機に視点を向ける。ギラ・ドーガは味方が墜とされたためか、ビーム・ソード・アックスを持ち突っ込んでくる。

「……命を無駄に捨てるか……!」

ビームライフルでアックスを構える腕を射撃。さらに続けてサーベルを取り出し、相手へと突撃。

ジエガンとギラ・ドーガがすれ違う瞬間、サーベルで相手のコックピットを切り裂いた。

一方、腕を撃ち抜かれたギラ・ドーガも、負けじと振り下ろそうとしたが、その一撃がジェガンに届くことは無かった。

光芒の後に残ったものは無く、ただ残骸として機能を停止したビーム・ソード・アツクスのみが宙に浮いている。

敵の沈黙を確認後、レーダーを見る。道夜とりりーでMS4機を相手にしているようだ。……彼らなら大丈夫だろう。しかし、問題はユーリ。彼女の機体は遠距離型の武装編成だ。

接近戦は分が悪いだろう。運も悪いのか、ユーリには2機の敵が。俺はスラスターを起動し、一気にユーリの元へと駆けた。

「沈め！連邦のデク人形が!!」

「あなたこそ、給料をタダ取りするお人形さんではないんですかあ？どうせ、数で攻めなきゃ勝てない馬鹿のくせに、いい度胸してますよ……!!」

「んだとお!!」

互いにビームライフルを撃ちあつては、離れ、ミサイルの爆発がお互いの前で起きている。

MS1機ならユーリでもなんとかなるか……？ならば……

もう1機のMSの位置を探す。あそこまでユーリと派手にやりあっている奴がいる

なら、もう1機は身を隠して狙撃するタイプの奴がいてもおかしくはない。

つまり、あいつは……囹。本命は……

俺の機体の正面左に映るデブリ。そこで何か動いた気がした。

「そこに……いるのか……」

ビームライフルを構えようとした瞬間、機体内にアラートが響き渡る。

「くっ!!」

寸でシールドを構え、相手の攻撃を受け止める。さつきユーリと戦っていたMSだ。まさか……!?

「連邦にも勘のいい奴がいるようだな!!」

「何を……!!」

シールドで跳ね飛ばし、バルカンとビームライフルを乱射。

ギラ・ドーガは楽々とそれを回避している。

「へっ、その程度かよ!これじゃあさつきのパイロットのほうがまだマシだったな!!」

「貴様……」

「あいつは強かったぜ?まあ、俺が負けるわけがないがなあ!!」

いいや、ユーリはそんなことで死ぬわけがない。なら、なぜ反応がない……?

「アイツに何をした!!」

サーベルを引き抜き振りかぶる。それをビーム・ソード・アックスが受け止めた。互いの得物が火花を散らす。

ギラ・ドーガのパイロットは楽しそうに笑いながら言った。

「何をしたと思うよ？へへへ、お前もすぐに送ってやるよ!!」

「……ふん……俺はまだ、負けられないんでな……!!」

ユーリからの反応がない。だが、生きている。……通信機器の破損か？

ギラ・ドーガが間合いを取る。このままではこちらも狙撃される。何か手は無いのか。

相手の後ろから光。その光に一瞬目が眩んだ。位置を見ると、小さいデブリ。……そうか。

ユーリの機体も死んではいなさそうだ。それなら、やってもらうことは一つだけ。

「こいつで終わりだ！連邦の雑魚め!!」

「ふん!!」

2度目のぶつかり合い、サーベルの出力を上げ、押し切る。

相手の右腕を切り落とし、さらに追撃でバルカンを放つ。

「何っ!!」

「ふん！雑魚はどつちのことを言うんだらうな？」

「何だとお……!!」

「ほら、追いかけてみるよ！ジオンの雑魚が！」

背を向け、もう1機がいるデブリへと突っ込む。

「馬鹿野郎！そっちに逃げ場はねえんだよ!!」

「こちらに気づいたスナイパーは、こちらへと銃口を向ける。

「ユーリい!!!左10、上6だ!!!光が見えたら撃ち込め!!!」

「狂っちまったかあ!?死になあああ!!!」

ジェガンの上空から大きく振りかぶるギラ・ドーガ。その攻撃を遮ったのはビームの一射。

それもコックピットへの直撃。

「続いて、右2、下3へ修正、デブリごとぶっ放せえ!!!」

指示通り、彼女はデブリへと一射。それを逃げるように回避する狙撃機。その隙を逃がさなかった。

相手の背後に立ち、サーベルをコックピットへ突き立てた。

「……様子を見すぎたのが、お前の敗因だ。仲間の元へ、送ってやるさ」

突き立てたサーベルを引き抜く。電流が走るギラ・ドーガを蹴り飛ばし、バックパックへビームライフルを放った。

撃ち貫かれた機体は爆発し、消えた後に残るものは何もなかった。

俺はユーリーの元へと急ぐ。

ユーリーの機体はあのギラ・ドーガとの戦いで、メインカメラを潰されていた。

「ユーリー！大丈夫か？」

「ええ。丁度今、通信機器を復旧させ終わりましたよ」

「……それは良かった。とりあえず、一度帰還してくれ。俺たちはこのまま戦う」

「そうですねえ。こんな状態では狙撃は厳しいですし、一度後退しますかね。それにしても、ムゲンさん」

「なんだい……？」

「メインカメラが使えない私に、よくあんなことを頼みましたね。本当は一人でも大丈夫だったくせに」

「……そんなことない、俺一人じゃきつかった。ユーリーを頼ったのは……信頼していたからだよ」

「へえ」

「腕は昔よりも磨きがかかっているし、それに、お前ならこれくらい余裕だったろ？」

するとユーリーは、ふっと笑った後

「ええ、当然ですよ。これくらいは朝飯前です。あ、そうだ、この借りはお菓子で——」

「ダメだ」

「ちえっ……守銭奴め」

「そこまでケチではないけどね」

「まあいいや、一度撤退します」

ユーリは機体を動かし、戦艦へと後退していった。

レーダーを確認、道夜とリリーも、既に敵を片付け、こちらへと合流しようとしていたところだった。

「先生！私頑張ったよ！……あっ……もちろん道夜さんも！」

彼を氣遣ってか、リリーはさりげなく付け足した。

「ああ。おかげで随分数が減った。助かったぞ、二人とも」

「ユーリはどうした？クラップ級へ戻っていったように見えたが」

「被弾したんだ。彼女自身に被害は無い」

「……そうか、それならいいが。……後は……奴等か」

「ああ……」

俺たちから見て正面の位置に、2機の反応。

「先生！私達で倒そうよ！」

「数ならこちらが上だ。いつでもいいぞ」

やる気満々な二人に首を横に振りながら言う。

「いいや、ここからは俺だけで戦わせてもらう」

「何!? お前……!」

「……死にはしない。それに、彼らは俺を待っているんだ。……【向き合わないと】いけない」

それを聞いた道夜は

「……そうか。それがお前が選んだ選択なら、何も言わないさ。…無事に帰って来いよ、相棒」

「分かっている。こんなところで死ぬわけにはいかない。俺は生きてリナとアウロラの元へ帰るんだ」

「5thルナはどうする?」

「…軌道を修正させられた時点で、こつちが出来る事は何も無い。お前たちはこのまま後退しろ」

「……先生、無事でいてね」

「大丈夫さ。さあ、二人とも」

2機の後退を見送り、俺は彼らを見据える。

相手も察したのか、こちらへと迫ってくる。

いつにもなく、心臓がバクバクする。

前に、トクナガさんが言っていた言葉を思い出す。

『次の戦場、きつと彼らは来る。その時一度、彼らをしっかりと向き合って見つめてみる。何かが分かるんじゃないか？』

「……向き合う……か」

ビームライフルを放ち、牽制。

そのまま移動し、散開した黒いザクを狙う。

サーベルを引き抜き、振り上げる。

それを受けるように刀を構えたザク。

互いに得物がぶつかり合う。

「ムゲン君、君一人で戦おうって言うのかい？」

「……やるさ……一人でも！」

「へえ、そりゃあ楽しみだ、なあ!!!」

サーベルを蹴り上げられ、続けざまに蹴りを入れられる。

「ぐあっ!!!」

吹き飛びながらミサイルを放ち、相手の追撃を許さない。

しかし、カカサはそれを回避しながらこちらへと迫る。

「いいかい、ムゲン。君がやっているのはね……無謀なんだよ！」

「くっ!!それでも!!」

機体を宙返りさせ、ビームライフルを乱射。続けてバルカンを放つ。そのどれもが当たることなく宇宙へと消えていく。

「そんな腕で、俺たちを倒せると思うなよ!!」

「退くわけにはいかないんだ!!」

刀を振りかぶる瞬間、俺は刀を持つ右腕へとビームライフルを構え、振られる位置を予測して撃ち込む。

ビームは右腕の甲から貫いて、刀を宙へと吹き飛ばした。

俺は刀を掴み、切りかかる。

「俺は……!!」

「くっ!!俺だつてなあ……死ぬわけにはいかねえんだよ!!」

カカサは間合いを取り、宙に浮くサーベルを掴み、突っ込んでくる。

「それはこちらと同じ事!!互いに退けないのなら……」

何度目かのぶつかり合い。互いのカメラアイがひと際強く輝く。

「やるしかねえだろうがよ!!」

ぶつかっては間合いを取り、ぶつかっては間合いを取る。その戦いで、俺はカカサから伝わる意志を感じた。

クロノードを、友を守るといふ強い意志を。

壊れていく彼を、見守ることしか、ただいてあげることしか出来ない無力さが。

消えていく彼の意志を守るための剣として戦うことしか選択できない自分の愚かさを。

「カカサああああ!!!」

「ムゲン……!!俺は……守んなきやなんねえ……!!あいつを……!!!だから、ここを通すわけにはいかねえんだよ!!!」

「それでも、押し通る!!!」

得物がぶつかるたびに、互いの意志が互いへと伝わっていく。意志と意志がぶつかるかのように、追突する光は増していく。

それでも……

カカサの攻撃は、ぶつかり合うたびに威力が低くなっていく。エネルギー切れかまた、それ以外の【何か】

彼が振りかぶった攻撃に隙が出来た。……見逃すわけにはいかない。

俺はザクの両腕を切り落とす。

「……カカサ、悪く思わないでくれ。俺は……もう覚悟を決めたんだ」

「くっ……。そうかい、なら、あいつの所へ行けばいい」

カカサは諦めのような、何となく理解できていたような、そんな複雑な声で言った。

「……俺には、クロノードを止める事も、お前を足止めすることも出来はしない……。お前の気持ちが嫌って程伝わってきちまって……。これじゃあ……。戦えねえよ……」

「カカサ……」

「向き合う覚悟、既についてんじらんかよ。……お前がしたい事をすればいい。もう、あいつとお前を止められる奴は誰もいない」

「俺は……クロノードを――」

「言うな!!!」

泣きそうな声で、彼は叫ぶ。

「それを言えば、俺はお前を恨んじまう。……戦争なんだよ。分かるだろ」

「……………そうだな。すまん」

「……行けよ」

俺は宙へ浮くカカサの機体とすれ違い、彼の所へと向かう。

そして、対峙する。

白いザクと、ジエガン。

「待っていた。ムゲン・クロスフォード」

「……クロノード…!!」

「これで終わりにしてやる!!」

今の彼には、もう既に娘の名も、最愛の妻の名でさえ消えている。

ただ、俺を、ムゲン・クロスフォードという男との決着だけを望んで、この戦争で戦っている。

強化人間の宿命ともいうべきものなのか、結局は戦うことしか出来ないのか。

スナイパーライフルを構え、こちらへと放ってくる。

シールドで受けながら、相手へ突っ込む。

「そっだよな、お前ならそうするだろうな!!」

スナイパーライフルを投げ捨て、こちらへと迫る。

互いに拳で組み付き、機体がギチギチと音を上げた。

「クロノード……!!俺は……お前と決着をつける!!」

「さあ、殺しに来たぞ!ムゲン!!」

「やれるものなら……!!」

お互いに間合いを取り、クロノードはサーベルを引き抜いて切りかかる。それを刀で受け流し、腹部へ蹴りを入れ吹き飛ばす。

「ぐああっ!!」

「これで!!」

刀を構え、吹き飛ばされているクロノードへと迫る。

ザクは宙返り、さらにその勢いでサーベルで切り抜けてくる。

寸で対応し、シールドでガードするが、そのせいでシールドが破壊。その際にミサイルも誘爆し、俺の視界を遮った。

「くそっ!!」

「俺は……だぞー!」

背後からの声。対応に遅れる。

「しまっ……ぐあああああ!!」

右腕を切り落とされ、さらに追撃と言わんばかりに蹴り飛ばされた。

「昔と変わらず遅すぎるぞ、ムゲン!!」

「何を…!! 舐めるなよ!!!」

刀を左に持ち替え、クロノードへと向ける。

「一発勝負…!!」

「ふっいいだろう。お前を今度こそ送ってやる!!!」

スラストスターを起動し、一気に突っ込む。相手もサーベルを両手に構え、こちらへと突っ込んでくる。

「クロノードおおおおお!!!」

「これで終わりだ、ムゲエエエツツ!!!」
すれ違う2機。

「くっ……流石……だな」

「……クロノードこそ……」

互いの一閃は、コックピット目掛けて走らされた。しかし、それでも二人が生きているのは、もはや奇跡としか言いようがない芸当。

クロノードは一本のサーベルでコックピットを狙い、もう一方のサーベルで自らのコックピットを守った。そして、ムゲンのコックピットへと

対するムゲンは、刀で2本のサーベルを切り裂き、クロノードのコックピットを。お

互いはお互いのコックピットを掠めるまでに至った。

ムゲンの持っていた刀は焼き切れ原形を留めておらず、クロノードのもつ2本のサーベルはエネルギー切れを起こし、もはや互いが持つ得物は無くなった。

その時――

「ムゲン少尉!!」

ジェイク艦長の声だった。随分と慌てている様子だが、何かあったのだろうか。

「どうした?」

「5thルナが……落ちていく……」

「……」

その小惑星は、赤く燃えながら、地球へと墜ちていく。

止められなかった。……また……憎しみが広がって……

「……ムゲン、お前の負けだな。ふふふ……ははは!!」

その笑い声が、失った人たちに向けられているように感じて、俺は叫ぶ。

「クロノード……!!お前……命を……!!」

「知ったことか!!俺は、お前との決着だけが望みだったんだ!!全てを失った俺は!!!お

前と、お前と決着をつけることだけが!!」

「そんなことだけのためにジオンに……?だったら地球潰しをしても良いっていうのか

!？」

「そうさ！俺は、お前との決着だけが望みだからな!!」

「ふ、ふざけるなああああ!!!」

拳を握りしめ、彼へと迫る。

「ムゲン少尉!!作戦は失敗だ。後退しろ」

その一撃を加える寸での所で、艦長からの通信。

「……了解……くそっ……!!」

「お前との戦いはまだ続きそうだ…。次が楽しみだな、ムゲン。ふふふ……はははは!!!」

「クロノード……!!次は……必ず!!!」

悔しさを抑えながら、俺はクロノードに背を向け、戦線を離脱した。

「くそっ!!!」

廊下の壁を思いつき殴りつける。

痛み以上に悔しさが勝っていた。5thルナの落下を止める事も、クロノードを倒す

ことも出来なかった。

その無力さが、俺を苦しめた。

「ムゲンさん」

その声の主は、俊太郎であった。整えられた黒色の短髪に、キリっとした眉に、感情が良くわかる目。

すっかりとロンド・ベルの制服を着こなしている。顔に感情が出やすいのは前と変わらない。

「…俊太郎か。どうしたんだい……」

「いや、あなたが壁を殴っていたので」

「ああ……、それでか」

「何も無い時にムゲンさんは壁を殴りはしないので、何かあったんじゃないか……って、もしかすると俺は俊太郎より感情が出やすいのかもしれない。

「いや、さっきの戦闘でね……」

すると俊太郎はなるほど、という顔をして

「なるほど。5thルナの落下を阻止できなかったことで落ち込んでいますか？」

間違っではないいんだけれど……。うーん。

「あ、まあ……：それもあるんだけれど……って、俊太郎に言っても分かんないか」

「なんですかそれ!!俺だっちゃんど悩みを聞くことくらいできますけど!!!」

「ふっ……：なら、聞いてもらおうかな」

ふう、と息を吐いた後、俺は彼に先の戦闘であったことを説明した。

「……なるほど、戦場であつての旧友と戦うことになつたと。それで、旧友はムゲンさんとの決着をつけるためだけにジオンにいて戦つていると」

「そうだね」

「…それで、ムゲンさんは、人の命を笑う彼が許せなかつたと」

俺は黙つてうなづく。すると俊太郎は二度頷いた後

「なら、全力でぶん殴つたらいいですよ」

「え……」

思わぬ言葉に少しびっくりする。

「でも、大事なところはただ殴るんじゃない、ムゲンさんの気持ちを込めて殴るんです」

「俺の気持ち……?」

「ええ。俺、ニュータイプとかつていうのは良く分からないけれど、リリーちゃんとか、

ムゲンさん、道夜さん、それに隊長もニュータイプじゃないですか」

「ニュータイプは、隣人すら愛することのできる人だつて聞きました。それなら、旧友を

ぶん殴つて、思い出させてやればいいんです」

「人の命は………一つだけしかないのだと。それはもちろん、ムゲンさんが彼とまた共に仲良くなりたいたいと思うのならですけどね」

「別に殺意を込めて殴つてもいいと思いますよ。けど、それだけじゃ解決できないこと

「だってあると思うんです」

「例えば？」

「例えば!? そ、そうですね……かつてあなたやジャックさん、皆でトリントン基地を変えたとき、あれは暴力で解決してはいない。言葉で解決したんです」

「あなたは、言葉で、誤解を解いた。そうでしょう?」

「……まあ、そうだね……」

「こうやって、いろんな可能性の中から、一つの【最善】を選んで、道を進んでいく。俺は、あなたが思ったことをすればいいと思います」

「皆そう言うよ」

「ありや、カツコいい事言っただつもりだっただけだなあ……」

彼の言動を見ていて、なんだか今まで悩んでいたことが可笑しく感じて、思わず笑いだす。

それを見てか、彼もつられて笑い出した。

「……こうやって、もつとアルマさんやマヤさん、ジャックさんと笑いたかった」

「そうだな。でも……戻らない」

「ええ。彼らとは歩幅が違いますから。どうやったって縮まらないんです。縮まるとすれば、彼らと同じ歩幅にすることだけですから」

「ああ。でも、俺はまだ彼らと共に歩けない。もちろん、俊太郎、君もそうだろう？」
すると彼は大きく頷いて

「はい!!!」

食堂。ここの食堂はグロリアスよりも広く、自販機なんかも2倍くらいの量の差がある。

とは言っても、皆はそれほど気にもしていないようだが。

むしろ快適になったと喜ぶ人も少なくはない。

「あ、ムゲン隊長!!」

食堂の隅のほうで、3人が固まって座っている。そこで手招きをしている彼は――俺は手を振り返しながら彼らの所へ歩み寄る。

「やっぱりか、どうした？オペレーターズ」

「オペレーターズっていうのは何です……?」

そう言いながらも席を勧めてくれるマーフィー。

短く切り揃えた黒色の髪、キリつとした眉に、細い目。クールな雰囲気と思わせるが、瞳には強い情熱を秘めている。

確かに、彼がオペレーターの見本と言われる理由も頷ける。

「いや、何となくなんだ。すまない」

「まったく。隊長という人は……」

「まあまあ！いいじゃない！ムゲンさんはそうやって場を盛り上げようとしてくれたんだから！」

ニコニコと笑いながら、俺にフォローを入れてくれる彼女は、ククリ。第二小隊のオペレーターだ。

今までは小隊も違っていたし、時間も合わなくてあまり話すことは無かったが、最近では良く話すようになった。

活発な女性という雰囲気で、美人というより言動からして可愛らしい女の子ってイメージ。

短めの黒髪に小さなヘアピンを付けていて、褐色の肌に映える大きな青い瞳。誰とでも打ち解けられそうな雰囲気を感じる眉。

確かに他の部隊員が言うように、弟か妹のような存在というのも理解できる。

「……それ、フォローになってないよ、ククリ君……」

良いタイミングでツツコミを入れる彼はアイザック。前まで第四小隊のオペレーターを務めていたが、人数が減ったことにより第三小隊のオペレーターになった。

生まれつき歩くことが出来ないため、移動はいつも車椅子を使っているとか。

宇宙で車椅子というのも不思議だが。

面長で、肩までかかるほどの茶色の髪を、後ろに束ねている。

垂れ目で、並行な眉。整っている顔だ。

「ありや。ごめんごめん！」

へへへ、と笑いながら謝るククリ。

「いや、気にしないでいいよ」

「ムゲン隊長、またお疲れですか？」

「……なんでだい？」

「顔によく出ていますよ。疲れた、悩んでいるんだって」

「……まあ、悩んではいるが……」

すると、ククリが

「あ、悩みなら聞くよ！言って!!」

目をキラキラさせながら立ち上がる。

「……………」

言えなかった。何故か、言葉が出なかった。

黙って俯いていると、マーフィーが肩に手を乗せ言う。

「言えないなら、言わなくていいですよ。無理強いをするつもりはありませんから」

「マーフィー……」

「でも覚えておいてください。あなたはもう、「一人じゃない」私達がいいます。疲れたら、誰かを頼つてもいいんですよ」

「そうそう！私も、アイザックくんも一緒に手伝うからさ！」

「……いい加減僕を「アイザックくん」って呼ぶのを止めてくれないかい……？」

「えー！私気に入ってるんだけどなあ!!」

彼らのやり取りを見て、なんだか笑顔がこぼれてくる。

「ふ、二人とも……今は大事な——」

諫めようとするマーフィーに、俺は首を横に振って言う。

「いいんだ。こういうやり取りがあると、面白いからさ。……だから、ここが好きなんだ」

「隊長……」

言い合っているアイザックとククリを横目に、俺はマーフィーに問う。

「なあ、マーフィー」

「なんです？」

「君は、この部隊が好きか？」

すると彼は指を口元に当て、考える。

そして、しばらくして、返ってきたのは

「当たり前じゃないですか」

その一言だった。

「……そうか。……さて、俺はまた艦内を散歩でもしてくる」

彼は頷いた後

「気を付けて」

俺は彼に手を上げ、別れた。

廊下を移動しているとき、ユーリとすれ違う。

思わず俺は彼女を呼び止めた。すると、彼女は振り返った後

「ムゲンさん、さつきはどうも」

そう言つて彼女はニコリと笑う。肩に掛かるまで伸びた黒の髪、細い眉。優しそうな垂れ目。そして、彼女のトレードマークである眼鏡。

黙っていれば美人だとは思うのだが……

彼女が黙るということを知っているとは思えない。

「ああ、無事で良かったよ。また道夜に殴られたくは無いからな」

肩を竦めておどけて見せる。

「あー、懐かしいですね、それ。私が大怪我した時に起きたんですっけ。ムゲンさんが殴られる姿、見てみたかったなあ」

ニヤニヤと笑いながらこちらを見てくるユーリ。

「冗談に冗談を重ねないでくれよ……」

「私は冗談を言ったつもりはないですけど？」

「……マジかよ……」

「ええ、マジです」

少しの沈黙。彼女は俺の顔をじーつと見つめた後何を思ったのか

「……悩んでますね」

「えっ……」

「流石に分かりますよ。ムゲンさんは良く顔に出ますから」

「……」

そう言われてしまえば返す言葉が無くなってしまふ。悪かったな、顔に出やすくて。

「ま、だからこそ、皆から信頼されるんでしょうけど。別に悪い事じゃあないと思います

しっ。」

「……褒められている気がしないんだが……」

「ちゃんと褒めてますよー？」

「ははは……」

もはや苦笑いするしかない。でも、こんな感じも嫌いじゃない。血を見るよりもずっと新鮮で、幸せだと思える。

「ムゲンさんが何を悩んでいるのかは分かりませんが、言えることは一つ。面倒なんで、他の人に相談したらいいんじゃないですか？」

「……め、面倒って……」

「私に相談したって、まともな返答が返ってこないことくらい分かってますよね？」

「そうでもないだろ。ユーリが怪我した時も……真面目なときはちゃんと言葉を返すよ——」

「アーアーキコエナイー。そんなこと覚えてませんよ。まったく、ムゲンさんという人は……」

「……どういふことだよ……」

その行動はもしかすれば、彼女自身が照れ隠しをするための手段なのかもしれない。

長い間一緒にいるから分かる。彼女も、真面目なところがある。でも、長年一緒にいてこれくらいしか彼女の事を理解できていない。

……でも、いいんだ。それがユーリという女性だから。俺の最高の友人の一人だ。

自販機の前で飲み物を選ぶ青年。その背中には見覚えがある。俺は笑顔で彼に声を

かける。

「お、エトワールじゃないか」

声に気づいたエトワールは振り返り、俺を確認すると、はあ、と一息吐いた後

「なんだ、ムゲンさんでしたか。どうしました?」

「いいや。今は休憩中か?」

彼は再び背を向け、自販機で飲み物を買いながら言葉を返す。

「ええ、まあ」

そして、彼は振り向くと、俺にコーヒーを差し出してくれた。

「いいのかい?」

「はい。構いません」

お互いに備え付けにベンチに腰を掛け、コーヒーを一口。

「……この自販機のは微妙だな」

すると、彼はふつと笑った後

「そうですね。ちよつと微妙だと私も感じますよ」

そう言つてコーヒーを飲む彼を、静かに見る。

どんなに年を取つても、彼の美しさというものは変わらない。整った顔、壊れそうなほどの華奢な体であるのに、ガーネットの瞳は炎のように強い決意が宿っている。

4年前よりも、男らしくなったと感じた。それが何によってなのかは俺には分からないが。

俺が見ていることに気づいたのか、彼は首を傾げながら

「どうしましたか？」

俺は首を横に振り、言葉を返した。

「いや、何でもないよ。エトワールは変わらないって」

すると彼は小さく笑った後

「あなたも前から変わっていませんよ。顔に感情が出るところなんか昔っからです」

「ああ、それ今日何回聞いたかなあ……」

もう自分は顔に出やすいという事実を受け入れ始めてきたぞ。……今でも認めたくないけど。

「ははは！でも、そこがムゲンさんの良い所ですから。気にする必要はないですよ」

「……そうかなあ……」

エトワールも、随分と笑顔が多くなった。皆、どこかしらが変化しているんだ。

俺は……どうなんだろう。

「こんなに笑うことが出来るなんて、私も思いもしませんでしたよ」

俺の心情を読んだのか、彼はそう言った。

「……」

「皆、俺が見ないうちに随分と変わった。俺だけ取り残されてしまった感じがするよ」
「私は私です。そして、ムゲンさんはムゲンさんですから。それぞれ、変わっていくペー
スも違うものです」

「…ありがとう。確かにそうだよな、俺は俺のペースで……か」

エトワールは残りのコーヒーを飲み干した後立ち上がり

「では、私はこれから用事があるので。また今度話しましょう」

「ああ、コーヒー、ありがとうな」

彼はニコリと笑うと、この場を立ち去った。

コーヒーを飲み干し、紙コップをゴミ箱へ捨てた後、立ち上がる。

「さて……格納庫でも行くか」

小さく呟いて、俺は歩き出した。

「……」

格納庫で佇むジェガンを見つめる。

クロノード達との戦いで随分消耗してしまった。見つめている間にも、整備兵たちが集まって修復を行っているのが目に入る。

「ムゲン」

声のほうへ振り向くと、そこには道夜がいた。

「道夜か、どうした？」

「お前に話しておきたいことがある」

「なんだ？改まって」

「……俺は——」

「え……」

その言葉が、理解できなかった。俺の思考は停止し、放心状態となった。

なんとか、声を絞り出す。

「なんて……言っただ……」

道夜は静かに口を開く。

「……俺は、ここでもう戦えない。そう言っただ」

「どういう……ことだ……」

道夜はひどく悲しそうな顔をして、言葉を続ける。

「俺が居ては、皆を傷つけてしまう。……俺は——」

「ふざけるなよ!!今までだって、ちゃんとうまくやってこれたじゃないか!皆で乗り越えてこれたじゃないか!」

俺が叫ぶと、それに対して道夜は冷たく言い放つ。

「今までは、な。なら、これからはどうだ」

「何……………」

「確かに今まではうまくやってこれたかもしれない、だが、これからはどうなんだ。……俺には分かる。俺がいれば皆が傷つくことが」

「ど、どうしたんだよ道夜……………」

「お前には分からないだろう。いや、誰にも……………分からはしない」

「道夜……………」

「ぐっ……………?!ぐあああああああ?！」

突然、道夜が叫びを上げ頭を押さえる。

「道夜!!」

近寄ろうとすると、道夜はそれを手で払いのけ叫ぶ。

「来るな!!!……………俺に……………触るな!!!」

「道夜!どうしたんだよ!!」

「くっ……………。声が……………声が……………」

「声!?!」

「声が……………聞こえる。呼んでいる……………」

彼はそう言って、俺の目の前にあるジェガンのコックピットへ向かい、機体に乗り込

んだ。

「おい！道夜！！どうしたんだ！！」

叫んでも、彼は言葉を返さない。

ジエガンが歩き出し、ハッチが開く。

ジエガンが飛び立つ瞬間、彼は最後に一言言った。

「ムゲン……お前は……最高の……友だった……。生きろ……よ……」
「っ……！！」

それだけを言って、ジエガンは宇宙へと消えていった。

「……道夜……」

ガツクリと膝をつく。俺は何もできなかった。俺は……

「道夜あああああああ！！！！」

叫ぶ声が虚しく格納庫に響き渡った。

57 完

58：私の戦う理由

0093.03.04

第00特務試験MS隊所属、八雲道夜中尉突如クラブ級から脱走。追跡するも、既に姿は確認できず。

0093.03.06

第00特務試験MS隊、 Rond・ベル本隊と合流のため移動中にネオ・ジオン軍MS隊からの急襲。

状況は変わらず不利だった。敵の数もさることながら、道夜がいない状態で来られたのがなおさら厳しい。

幸か不幸か、道夜が乗っていった機体が俺の乗っていたジエガンだったということ。これが無かつたらさらに厳しい戦いになっていたに違いない。

もしそうだったのなら、きつと俺も戦いへは参加できなかつただろう。

相手の数はおおよそだが小隊規模の数。少なければ6機程度だろうが……奴らがいるなら……8機。

「……さて……どうするか」

呟いてはみるものの、それほど時間は無い。各個で撃破を狙えばこちらの被害が大きくなる。

ならば……

「全機、連携して敵を叩くぞ！」

一方相手は、散開してこちらを誘うように動いている。

「先生……あれ……」

リリーは誘われているということに感付いたのか、俺に声をかけた。

「ああ。誘っているな。…無理に乗る必要はない。こちらはこちらの動きをする！」

「うん……！先生、一緒に……」

「よし、なら派手にやってやろうか！…各機、仲間との連携を意識して敵と交戦を。俺とリリーで切り込みに行く！」

機体を動かし、相手へ照準を合わせる。当てる必要はない、誘導さえできれば。

一射、続いて二射。その射撃は宇宙へ消えるが、攻撃に反応した一機が反応する。相手がリリーの正面へ。それを見逃さず、リリーはファンネルで敵を撃ち抜いた。

「やった……！」

「次だ。まだ来る——っ!!」

背後からの攻撃を感じ、素早く振り向いてシールドを構える。

そこにはビーム・ソード・アックスを振り上げたギラ・ドーガがいた。

シールドがアックスを受け止め、こちらへの攻撃を防ぐ。

「ちっ……!!」

シールドでアックスを押しつけ、隙を見せたギラ・ドーガの胴体へビームライフルを放った。

ビームは胴体を貫通し、虚空へと消える。そして、正面でバチバチと電流が流れる機体を蹴り飛ばす。

蹴り飛ばされた機体は、デブリへとぶつかり爆発。

レーダーを確認すると増援が4機、こちらへと迫ってきているのが分かる。

やはり…彼らを止めなければならぬか。だが、彼らと戦うには一人では……。だが、彼らを俺の戦いに巻き込むわけには……。

意を決した俺は、リリーへと無線を送る。

「リリー」

「……どうしたの？先生」

「…指揮官機を叩く。手を貸してくれ」

「…いいよ。先生が私を必要としてくれるなら」

「そんな言葉は……言わないでくれ。君は物じゃない。人間だ」

「ふふ、分かってるよ。じゃ、行こう！」

本当は、自分一人で決着をつけるべきなのかもしれない。それでも、何故だか、一人で挑んではいけないと、俺の勘が告げていた。

その嫌な予感は何なのかは分からない。何故か知らないが、俺が……死ぬ予感がしたんだ。

「……俺は……まだ死ねない……」

移動の間、俺は小さく呟く。

「……先生は、死なないよ。……一人じゃないから」

聞こえていたのか、それとも俺の心を読んだのかは分からないが、彼女はそう言ってくれた。

「……見えた……クロノード、カカサ……」

正面に映る2機のザク。もう何度目の衝突だろうか。

「待っていたぞ。ムゲン」

ふふふ、と楽しそうに笑うクロノードに対し、カカサは

「……さっさと終わらせよう。なあ？クロノード君」

言葉の端はしから伝わる殺気。今まで感じたことのない感覚。

「つ……………あの黒いザク……………怖い……………」

リリーはカカサの殺気から、素直に言葉を漏らす。

「…あいつも俺を殺す気で来るんだ、仕方ないさ。…………俺が…彼らへ殺気を向けられないのと対照的にね」

クロノードのザクがライフルを構える。

「くるつ……………!!」

違う、これは…………

「リリー…背後だ!!」

リリーは寸での所で攻撃を受け止め、耐えている。

「へえ、意外と出来るじゃん。やっぱ、ニュータイプって奴なのかね。でも、そんなで…………俺を殺せると思うな」

リリーの機体が吹き飛ばされる。

「リリー!!くそつ!!」

カカサへ狙いをつけ、射撃を放つも、全て回避されながらリリーへと迫っていく。

「これで…………」

振り上げた刀を俺はただ見つめるだけしか…………

すると突然、リリーは笑いながら言う。

「ふふっ。先生、私は大丈夫だよ。それよりも、白いのをお願い。一人じゃ、黒いの相手するのでいっぱいいっぱいだから」

「何を……っ……!!」

遠くからでは何が起こっているかがしつかりと確認できないが、彼女を信じるしかない。

「先生に……そんなもの向けないですよ。怪我したらどうするのさ……。アンタが死んで詫びてくれるの？」

冷徹なまでのリリーの言葉が聞こえる。

「……面白くない冗談だね。面白くない冗談つてのはさあ……。俺あ大っ嫌いなんだよ!!!」

彼女がカカサを止めている間に、クロノードを何とかしなければ。

ライフルを構える白いザクへ一気に詰め寄る。

「来たな、ムゲン!!!」

「うおおおお!!!クロノードおおおお!!!」

ビームサーベルで切り抜け、素早く反転し、ビームライフルを放つ。

クロノードは、斬撃をサーベルで受け止め、振り向き、こちらへビームを放った。お互いのビームが相殺され、その間もなく、シールドからミサイルを放つ。

白いザクは左腕でそれを防御。煙が彼の機体を包み込む。

煙に包まれた機体へ詰め、振りかぶる。

相手は煙を切り裂きながら、受け止めた。バチバチと音を立てながら、火花を散らす
2機の得物。

「流石に……やるな……だが……」

「っ!!」

白いザクが宙返りをし、俺の持っているサーベルを蹴り飛ばす。

続けて、射撃。それをシールドで防御しようとした瞬間、シールドが両断される。

サーベルをジェガンの喉元へと向けられ、クロノードは言い放った。

「お前には殺気が足りない。……俺を殺すという殺意が」

「……………」

返せる言葉が無かった。俺はまだ、彼らを殺すという気持ちになんかなれていなかったのだから。

「……………どうした、昔のようにサーベルを持ち直せ。そして、俺に言ってみろ」

彼と初めて会った時、俺は確か……言葉を発する前に、クロノードが言葉を続ける。

「そうだとしても、俺には基地を守る使命がある。悪いが引き下がれない。そう言ってみろよ、ムゲン・クロスフォード」

俺は、彼と向き合い、覚悟を決めたはずなんだ。仲間を守るために、敵を斬ることを躊躇うことは無いはずなんだ。

でも…………

だったら、クロノードやカカサはどうなんだ？俺にとっては大切な仲間なんじゃないのか？

俺は…………

俺はどうすればいい？

「…………俺は…………俺には…………出来ない」

「何？」

「確かに、クロノードやカカサは敵かもしれない。それでも、俺には…………俺にとっては、大切な仲間なんだ!!そんなお前たちに…殺意を向けるなんて…」

クロノードは溜息を吐いた後。

「そうか。…それは残念だ。お前なら、『応えてくれる』と思ったんだがな」

「応える…………？それは—」

「今更、何を言っても無駄だ。…………俺からの最後の情けだ。もう一度、そこに浮いてい

るサーベルを拾え」

言われるがままに、俺はビームサーベルを持ち直す。

しかし、今の俺には、もう抵抗する気力さえも残ってはいなかった。

「先生……?!っ!!」

「よそ見、厳禁だよ。嬢ちゃん」

「……」

「お前との決着……こんなにも簡単だったとはな。残念だ」

振り上げるサーベルをただ見つめるだけしか出来なくて……

「死ね。ムゲン」

「……」

「先生えええええ!!!」

トドメを遮ったのは、小さな異変だった。

「なんだ……?」

「クロノード、何かヤバイ奴がこっちの味方を攻撃してる」

「……」

カカサの言葉でレーダーを確認すると、敵MSの点が次々と消えていつているのが分

かる。

そして、その機体がこちらへ迫っているということも。

機体の情報は、一切記載されていない正体不明機。

次の瞬間、正面にいたクロノードが防御姿勢を取る。

そして、俺とクロノードの前に立ちふさがるように佇む1機のMS。

今までで一度も見たことのない白いガンダムであった。

「なん……だ……?!」

「ガンダム……俺の邪魔をするのかー」

白いガンダムは静かに銃口を俺へと向ける。

「くっ……!!」

バルカンを放ちながら、ガンダムへと迫る。

勢いのまま、切り抜けようとするも、ガンダムは宇宙をまるで泳ぐかのように軽々と

回避し、反撃と言わんばかりにバズーカを放ってくる。

反転し、サーベルで弾頭を両断。

正面の煙の中から、ガンダムのツインアイが怪しく光る。それはまるで、必死にもが

くアリを、見下ろす蜘蛛のように。

「でえええやああああ!!」

サーベルで切りかかる。しかし、ガンダムはそれを受け止め、こちらを蹴り飛ばす。
「ぐああああ!!!」

俺では……勝てないのか？俺に……殺意がないから……？

迷っているからなのか……？

「先生!!!」

ガンダムからの一射を、リリーの操るファンネルが相殺し、俺の目の前で弾ける。

「……すまない……リリー……」

「立って!!!前を向いて!!!」

「……!!!」

リリーは俺とガンダムの間に割って入り、ガンダムと鏖迫り合う。

「そんなことで、リナさんは守れない……!!!」

「……リリー……!!!」

「先生が……!!ムゲンが守らなきゃいけないのは、人を傷つける事を躊躇わない人じゃない!!リナさんや、ここにいる皆でしょ!!?」

「……分かつてる……!!分かつてるんだ……!!でも……俺は……!!!」

拳を握りしめ、顔をゆがめる。

分かっていても、手が、体が動かない。

俺は………！

「ムゲン!!!」

その声は、彼女の声だった。

「……り………ナ………？」

「もう、あなたを傷つけさせはしないから！」

「リナ!? どういうことだ…!?!」

「ジエガンで出るよ。私も戦う」

「ふ、ふぎけるな!! リナは戦う必要なんかない!!」

「もう、嫌なの!! ただ待っていて、皆が消えていくのは…!!」

「それは俺も同じだ!!」

「リナさん!?!—きやああああ!!」

リリーの機体が吹き飛ばされる。

「リリー!! くそっ!!」

ビームサーベルで切りかかるが、相手には読めていたかのように対応され、受け流さ

れた。

「もらったぞ、ムゲン」

背後からのクロノードの一撃を受け流し、再びガンダムへ切りかかる。

ガンダムはつまらなさそうにジエガンを受け流し、遊んでいる。

そして、反撃に腹部へ蹴りを食らう。

吹き飛ばす衝撃で、右肩を強打する。

「ぐああああ!!!」

「ムゲン!!?—っ……! 敵!!? クラップ級に張り付かれた!？」

「……くっ……り……ナ……」

右肩を抑えながら、リナがいるであろう位置へ視線を送る。

「クラップ級……くっ……!」

「ムゲン隊長! 急いで後退を!! クラップ級に敵が……!! うわあ!!!」

彼の声と共に、小さいが爆音が聞こえてくる。

「……分かった。隙を見て離脱する……!」

クロノード達に視線をやると、カカサとクロノードで、ガンダムと戦っている。今な

ら……離脱が可能だろう。

「……りりり……離脱だ。戦艦に敵が張り付いた。止めないと……」

「分かった!!急ごう!」

俺はリリーと共にクラップ級へと急いで戻った。

「どうした?撃てねえのか?へっ!なら、この戦艦ごと……!」

「わ、私は……!」

正面には、格納庫前にリナが乗るジェガンが、そして、そこへ銃口を向けるギラ・ドーガがいた。

「くそっ!!間に合うのか!?!ファングたちも他のMSで手一杯か……!」

「間に合わせないといけない!」

こちらから射撃するにしても、リリーは先ほどのガンダムとの戦闘でファンネルが破損。一方の俺も、射撃武装は彼らとの戦いで無くなっていた。

どうあつてもこちらから援護することが出来ない。

俺は……大切な人でさえも……

「クラップ級は……リナはやらせん!!」

ギラ・ドーガの背後へジェガンが、そしてギラ・ドーガに組み付く。これによって、相手は身動きが取れなくなる。

そして、そのジェガンに乗っていたのは……

「トクナガさん!? どうして……!」

リナが叫ぶ。するとトクナガさんは

「リナあ!! 今なら撃てるだろ!! ギラ・ドーガに一発お見舞いしてやれ!!」

「で、でもそうしたらトクナガさんは!!」

「くそっ!! 間に合ってくれ!!」

「先生! この距離じゃ!!」

「諦めるな!! リナに、彼女に引き金を引かせちゃいけない!!」

彼女まで血に染まっではいけない。

そうしたら、誰があの子を……アウロラを抱いてやるんだ。

何とかしなければ。何か手を打たないと!

「ユーリ! 狙撃は出来ないか!」

「無茶言わないでください! そんな距離……!!——っ!!」

「ユーリ!」

「こんな時に邪魔を……!!」

「くそっ!!」

「構いやしねえ！どうせこの先短けえんだ。それにな、人にはやんなきゃならねえ時つてもんがある。俺にとつてはそれが今つてだけだ」

「そ、そんな!!あ、あなたが死んだら……この部隊の整備長は…!!」

「お前が引き継げ。……俺の道を」

「……わ、私には無理ですよ……!だから!!」

「いいや、出来るさ。お前は俺が認めた……いや、俺の自慢の整備兵だからな」

「で、でも!!!」

「ムゲン!!!聞こえてんだろ!!!」

俺はトクナガさんへ叫ぶ。

「トクナガさん!!ダメだ!!離れるんだ!!」

「離れたら沈められちまうだろうが!!お前らよく聞け!!お前らが守らなきゃいけねえもんは何だ!?俺じゃねえだろ!!!」

「……トクナガさん……」

「お前らが守らなきゃいけねえのは、ここにいる家族と、お前たちが愛した娘がいる地球を守ることなんじゃねえのか!？」

「でも、あなたが犠牲になるなんてこと!!」

「犠牲はどの時代でも付いて回る。ならせめて、年寄りがその役目を果たそうじゃね

えか」

「嫌だ……！私は……撃てない……！！あなたを……撃つなんて！！」

「だったらお前らはここで死ぬのが望みか!? 違うだろ！生きて明日を見るんだよ!! だから、引くんだ！リナ!!」

「い、嫌……」

何か手はないかと考えながら、辺りを探すと、リリーのジェガンの手に、ビームライフルがあるのに気づく。

俺はリリーからビームライフルを奪い取り、構える。

「せ、先生……!?……まさか!!」

「はあ……はあ……!! 落ち着けよ、俺が……俺がやんなきゃ……!!」

呼吸が荒くなる。本当にこの選択しかないのか？

「撃て!! 撃つんだ！リナ！俺を……——を越えろおおおおお!!」

「嫌ああああああ!!」

ロックオンの文字。俺は引き金を、ギラ・ドーガへ向けて引いた。

ビームは、ギラ・ドーガを貫き、動きを封じていたジェガンのコックピットを貫く。

「……っ……!! あ……う、そ……!!」

爆発と同時に、頭の中に声が響いた。

『ムゲン。お前が、未来を見届けろ。お前は、お前だ。殺意なんかなくなつて、それでいいんだ。……元気でやれよ。リナの事、頼んだぞ』

「……ああ。分かつてるさ」

「せ、先生……」

機体の壁を思いつきり殴った。悔しさや、こうすることしか出来なかつた愚かさが俺を支配する。

だが、それでも辛くても、心が苦しくても、涙は出なかつた。

「っ……………!!」

「い、いや……………うそだよ……………」

リナの悲しい声が聞こえてくる。そのたびに胸が苦しくて。…戦争は、もう何度大切な人を失わなければならない？

「ムゲン！クラップ級の近くで爆発があつた!!……………まさか!？」

ファングからの通信。俺は、静かに言葉を返す。

「……………ファング……………リナを…頼む。俺は……………もう……………迷わん」

「お前……………。ああ、行ってこい。リナは任せておけ」

察してくれたのか、彼は快く引き受けてくれた。

「リリー、君も戻つて。……………ビームライフは、借りていくよ」

「…先生……。うん、生きて帰ってきてね」

リリーは心配そうにそう言った。

「ああ、もちろんだよ。俺が生き残ったのにも、こうなったのにも理由がある。……俺は、もう迷わないから」

彼らに背を向け、再びクロノード達の元へ向かう。

俺は俺……。彼はそう言ってくれた。

どうしていつも大切なことに気づくのは、誰かが死んでしまった後なんだ。

それじゃあ変わらないのに。本当に必要な犠牲なのかも分からない。

でも、俺はもう…躊躇いも、迷わない。

俺は……クロノードと決着をつける。

正面にとらえる白いザク。

ビームライフルを構え、照準を合わせる。

「……当てる!!」

こちらに気づいた白いザクは、ビームを回避しながら、反撃にビームライフルを放つ。その射撃をかくぐりながらクロノードへと突っ込む。

「クロノードおおおおお!!」

ビームサーベルを左に薙ぎ払い、そこにカカサが割って入り、刀で受け止める。

間合いを取ったクロノードが、ジェガンの頭部めがけて狙撃。

ビームは頭部を掠め消えていく。カカサの刀を押し切り、蹴り飛ばす。

「ぐっ…!!負けらんねえ…:俺はああああ!!」

態勢を立て直し、こちらへ突撃してくるカカサ

「邪魔を…するなあああ!!」

「ムゲン!!お前をクロノードの所へは行かせねえ!!」

カカサは拳で殴り掛かってくる。

それを腕で防御し、叫ぶ。

「何故!何故そこまで彼を守るんだ!!」

「んなもん決まってるだろうが!!かけがえのない友だからだろうが!!」

「だとしても、こっちだって退けない理由があるんだ!」

拳を力で押し切り、ビームライフルの引き金を引く。

ビームは黒いザクの足を貫き、爆発。

「ぐ……！ま、まだだ……。俺は……」

「もういい、カカサ。後は俺がやる」

「だが……。くっ……!!」

カカサの機体を後ろへと下がらせ、白いザクが俺と対峙する。

「大切な仲間が死んだんだな」

「……だったら、なんだ」

「戦争は、いつも俺たちから何かを奪う。どの時代でも……変わらない」

「そうしているのはジオンだ!!お前が、お前たちがやろうとしているのは、俺たちのような奴らを再び生む行為なんだぞ!!」

「だからと言って、俺たちで変えられるわけじゃない」

「クロノード……!!」

彼は、変わってしまった。かつての仲間を、人間を愛していた彼は、もういない。

それが強化人間の副作用が原因だというのは分かる。それなら、変わってしまったなら、俺たちが変えればいい。

「さあ、来い!!ムゲン!!!」

「俺はもう迷わない。お前が変わってしまったのなら、俺が……俺がお前を変える!!」
「出来るか？俺を変えることが!!」

サーベルを振りかぶり、切りかかる。

それを見越して、クロノードもビームサーベルで受け止め、鏖迫り合う。

「かつて、お前は俺たちと戦った。忘れもしない!!」

「始まりは、一年戦争だったなあ!!」

間合いを取り、ビームライフルを放つ。

相手もビームライフルを放ち、互いのビームが相殺。

サーベルで切り抜けようとするが、クロノードの対応で、再び得物がぶつかり合う。

「それから仲間として再び出会った！お前はあの時言った！誰かの意志を引き継いで戦っていくと！」

「……俺は……俺にはそんな記憶はない!!」

「お前は言ったんだ!! 幸せを、壊すわけにはいかないと!!」

「黙れええええ!!」

「クロノード!! お前は、カカサを……仲間を信じていたんだ!!」

「う、るさい……!! 俺は……俺にはそんな記憶はないんだああああ!!」

力で押し切られ、一度間合いを取る。その隙を狙って、相手が切りかかる。

「うおおおおお!!」

対応に遅れ、左腕が切り落とされ、爆発。

「くっ!!」

「死ね、ムゲン・クロスフォード!!」

コックピットへの一突き。流石に間に合わない!

しかし、それを遮ったのは――

「くっ………!何故だ!!カカサあ!!」

「カカサ…!」

カカサはビームサーベルを持ったクロノードの腕を掴み、サーベルは俺のコックピットの目の前で止められている。

「……………クロノード、撤退だ」

「何?!こんなところで……………!!」

「上からの命令だ。撤退しよう」

「ちっ……………次こそは…!!」

背を向け、離脱していくクロノードを、ただ呆然と見つめているとカカサが言った。

「ムゲン。一つだけ聞きたい」

今回の彼は終始真面目で、どこか悲しげな声だった。

「……な、なんだ」

「何故……お前はアイツとの過去の話をした。あいつは、もう俺やお前くらいの記憶しかないはずだ」

「……ああ。だからこそだ」

「何？」

彼は、変わってしまったのかもしれない。それでも、俺たちは知っている。

「知っているんだ。少しの間でも、彼と一緒にいたから、彼の本物の姿が分かるんだ。だから、それを彼に言えば、伝えれば、変わってくれるんじゃないかと思ったんだ」

「……無理だ。アイツはもう、何も思い出せない。そして、【強化人間として死ぬ】んだ」

「ふっ……ははは!! 諦めるなんてお前らしくないな。…だったら、そんなの思いつきり殴って思い出させればいい」

「な……」

「俺は、諦めないぞ。どんなに可能性が低くても、どんなに傷ついても、変われる可能性があるのなら、俺はそれを信じたい……!」

「クロノードは、全てを忘れて死んでいい奴じゃない。アイツは、自分の周りにいる人の事を、大切な家族を……思い出さなきゃいけない」

「そして最期は「強化人間としてではなく、一人の人間として人生を全うする」それが、彼の道なんだ。俺は、彼を変えてみせる。それが、彼から沢山の事を学んだ恩返しなんだ」

「お前……………ふっ……………はははは!!」

カカサは大笑いした後、言葉が続けた。

「そうだな、アイツはそんなつまらない死に方する奴じゃないよな。……………なあ、ムゲン」

「なんだ？」

「お前を……………信じてもいいか」

「カカサ……………」

「俺は……………アイツのそばにいてやることしか出来ない。でも、お前は、お前ならあいつを変えられる。……………だから、お前を信じたい」

「……………俺は、俺に出来る事をするだけだよ。俺は誓ったんだ。この手が血に染まろうとも、大切な人を守ると」

「そう、だな……………お前らしい……………。つと、そろそろ撤退しないと。クロノード君、カンだぞこれ」

「……………」

「またな、次がきつと最後になる。……信じているぞ、ムゲン」

その言葉だけを残し、彼は戦場から離脱していった。

俺も大きく息を吐いた後、戦場から離脱。

格納庫に戻ると、整備兵たちが慌ただしく働いているのが目に入る。

その中にリナの姿は無かった。

「……リナ……」

機体から降りると、こちらに気づいたのかフアングがこちらへと寄ってくる。

「ムゲン……」

「フアング、リナは……?」

フアングは静かに首を横に振った後

「……部屋だ。……だが、お前が今行くのは……」

「……ああ。でも、彼女も理解しているはずなんだ……こうするしかなかったって事を」

「ムゲン、お前が【背負う】事は無かったんだぞ……?」

俺は首を横に振る。

「違う。背負う背負わずに限らず、あの時は、ああするしかなかった。これが……【最善】

だったと……」

「悲しいな、結局…誰一人救うことなんて出来やしないんだ…」

「でも、それが俺たちの進んできた道だから。それでも、その中で救える人たちを救っていくしかない…それだけだよ」

「ああ…」

フアングはひどく悲しそうな顔をしていた。

廊下は静かだった。

艦内から見える宇宙も、今は泣いているように見える。

リナの部屋の前へ

「…リナ…」

声をかけても、反応はない。

「…入るよ」

扉を開くと、そこには涙を流しながら泣いている彼女の姿があった。

「…リナ…」

「何…っ…!!」

彼女の瞳は、大切な家族を殺された憎しみに満ちていた。

そして、それを向けているのは…俺だ。

「……すまなか―」

「言わないで!!!」

リナの言葉が、それを遮る。

「言われたら……私はあなたを憎めない……許しちゃうから……」

「……お前は……俺を殺す理由がある。だから、お前が俺を殺したって、俺はお前を恨みなんかしない」

「っ……………!」

「だが……分かってほしいんだ。俺は、お前に引き金を引いてほしくは無かった」

「だからあなたが撃つたの!?わ、私の大切な人を……!!あなたが!!」

「……ああ」

「!!!」

リナは涙を流しながら俺の胸ぐらを掴み、睨みつけた。

「……どうすることも……出来なかった。心で最善だったと言い続けたって、それは最善なんかじゃない」

「あ、あなたが……!!トクナガさんを……!!くっ……うう……!!!」

「今こうして、君の言葉を、目を見て……なおさらそう思ったよ」

「私は……無力だ……こんな……恨むことしか出来ないなんて……」

「いいや、それでいいんだ。君は……正しい」

「正しい!? 正しいわけじゃないじゃない!!! 大切な家族を、最愛の人が殺すなんて、正しいわけじゃないじゃない!!! こんな、バカげてる……」

リナは、その場で崩れ、俯いた。

俺は……彼女を抱きしめてあげられる資格なんかない。

でも、だったらどうすれば良かった…?

沈黙が続く。その間、ただ彼女の泣く声だけが部屋に響いていた。

先に口を開いたのは彼女

「トクナガさんは……私に……『ムゲンを恨むな』って言った。……けど、無理だよ……私にとつて親のような存在だった人を討つた人を恨むなっていうほうがき……でも……」

「でも!!! あなたは私が愛した人……。そんな人を恨むなんて……私にはできないよ……」

「……リナ……」

「俺は……君に引き金を引かせたくは無かった。君が引いたら、誰がアウロラを抱いてやるんだ」

「っ……!」

「そうやって、恨まれるのは俺だけでいい。君は……俺を恨み続けたっていいんだ」

「……わ、私は……! くっ……うう……!!!」

俺は膝をつき、彼女の肩に手を乗せる。

「…すまなかつた。俺は…君を救ってあげられなかつた…」

「……ムゲンはどうして……」

「うん……?」

「どうして傷ついてまで戦うの……?」

「……リナやアウロラを守るためだ。皆を守りたいさ、それでも、俺の両手で出来る事なんか限られているから」

「……また、そうやって人を殺すの…」

俯きながら、俺は頷く。

「……ああ……殺す。この手で守れるもののためなら…」

「…そう……。……ムゲン、私はあなたを許さない。けれど、私はあなたの妻だから、あなたを恨みたくはない……。だから……ムゲン、一つだけ約束して」

俺は彼女の顔を見る。彼女は、色んな気持ちが混ざったような顔をしていた。

俺は微笑みながら言葉を返す。

「なんだい……?」

「トクナガさんの……いや、私の父さんのために、この戦いを終わらせて。……それで、生きて帰ってきて」

「……………ああ、帰ってくる」

「帰ってきたら、一回だけ思いっきり殴らせて。……………それでも……………気持ち晴れるかは分からないけど……」

「……………ああ」

「……………私も、もう迷わないよ。私は、彼の自慢の整備兵だから……………。やるべきことは決まってる」

「リナ……………」

「あなたや皆が死なないように、全力で整備する。失うのはもう……………嫌だから」

彼女の瞳には、決意と言う名の炎が満ちていた。

最善だったと、人は言うけれど、最善って何なんだ。

これもきつと言いつい訳にしかならないんだろう。それでも、俺は、そんな犠牲の上で前に進む。

この手を血に染めることが俺の罪。

そして、この世界を見届けることが俺の罰。

でもその中でも、変えられる何かがあるはずなんだ。

……………クロノード、今度こそ、お前を変えてみせる。

友として……………大切な仲間として。

5
8
完

59：決着一虹の奇跡—

0093.03.07

第00特務試験MS隊、ロンド・ベル本隊と合流。

0093.03.12

ネオ・ジオン艦隊、投降を偽装しアクシズを奪回。強奪した核兵器とともに地球へ降下させる。

俺たちは、戦闘前にブリッジで作戦の説明を受けていた。

「状況は最悪だ。ジオンがアクシズを奪回して、地球へと落そうとしている」

この場にいる全員が、暗い表情でファングの言葉を待つ。

「俺たちは…何度繰り返せばいいんだろうな。……それじゃあダメなんだ。俺たちで、変える。何としてもアクシズを止めるぞ！」

「この戦い、今まで以上の敵が来るだろう。それでも、俺たちは生きなきゃいけない。彼の、トクナガの言葉を忘れるな」

全員が強く頷く。

「……生き残って、全員で帰ろう。それじゃ、行動開始だ!!」

その言葉を皮切りに、全員が慌ただしく移動する。オペレーターは、各隊の支援のため、そして俺たちパイロットは格納庫へと向かった。

「3番と、5番機の弾薬足りてる!?後じゃない!今やって!!!」

格納庫に響く声。その声の主は、こちらに気づいたのか、近づいてくる。

「ムゲン……。準備できてるよ、あの子はいつでも戦える状態にしてある」

「……ありがとう。リナ」

「当然だよ。生きて帰ってきてね。じゃないと、あなたを殴れないから」

俺は小さく頷いて言葉を返す。

「……分かってるさ。必ず帰る」

機体に取り込み、システムを起動。視界が広がっていく。

「ファング機、出撃する。各機、続け!!」

出撃ハッチが開き、ジェガンが出撃していく。

俺は大きく深呼吸をした後

「……ムゲン・クロスフォード、出撃する」

「ムゲン隊長。どうか……無事に……」

「ああ、分かっているよ、マーフイー」

戦場へ出る。ファングたちは既にこちらへと接近する敵と交戦していた。

俺の作戦は単独で別ルートを経由してアクシズへ取りつく事。しかし、思ったより相手の攻撃が激しく、前に進むには倒すしかないようだ。

「先生」

「リリー…？どうして君が…？」

リリーのジェガンが隣へ並び、こちらを見つめる。

「先生だけだったら、ちょっと心配で」

彼女が笑いながら言っているのが見なくても分かった。その心配が、純粹にうれしく感じた。

「……ありがとう。リリー」

「行こう。もう時間が無いよ。アクシズを止めないと」

「……分かっている。だが、その前に前に立ちふさがる敵を潰さないとな」
俺たちの前から迫る敵を睨みつけながら言う。

「そうだね……。やろう……！」

ビームライフルを構え、発射。続けて相手の回避位置へミサイルを放つ。

ビームを回避した1機が、ミサイルを放った位置へと、相手は反応に遅れたのか直撃を受けている。

「リリーー！」

「……ファンネル!!」

爆発を切り裂くようにリリーのファンネルが被弾した敵を撃ち抜く。

残り確認できる数は6機以上。それでも……!

「リリー……俺に合わせるんだ。…行くぞー」

「えっ……う、うんー」

1機の敵を誘うように動き回る。つられた敵がビーム・マシンガンを放つ。その攻撃を見切り、機体を素早く宙返り。

それに合わせ、彼女がギラ・ドーガの正面へ突っ込む。

サーベルを引き抜き、ビーム・マシンガンを切り落とし、続けてファンネルでコックピットを貫いた。

「流石だ、リリー」

「ううん。先生に合わせてよかった……」

ほっと胸をなでおろす姿が目に見え、ちよつとだけ笑みがこぼれる。

「……でも、まだ終わってない」

「……………うん。次が来るよ2時の方向……………3機……………！」

「了解だ」

敵は散開し、俺たちを包囲する形で迫ってくる。

俺とリリーは背中合わせになった。この感じは、昔も体験したことがあるような気がする。あの時も…俺が動けば、「彼女」が動いた。

「……………さて、どうするか」

「先生、余裕だね」

「…そうも言ってもらえないさ。動いて相手をかく乱、続けて連携して1機ずつ仕留めるよ」

「……………うまくできるかなあ……………」

そんな弱気な彼女の言葉に対して、ふっと笑って返す。

「おや、ニュータイプでも怖気づくものなんだね」

「先生もニュータイプのくせによく怖気づくし、泣き虫だよ」

「……………いい、言ってくれるね……………。それじゃ、見せてやろうじゃないか、俺が怖気づいてなんかないって所を！」

怖気づいてなんかいられない、彼を変えるためにも。

シールドからミサイルを放ち、それをバルカンで爆破。俺たち2機の姿を相手から見

えなくさせる。

煙幕ではないから、それほど長い時間は得られないが、それでも出来るところまでやるしかない。

それに合わせ、彼女は動く。

宇宙へブースターが弧を描きながらサーベルで1機を沈める。

続けて彼女は、1機の脚を止めた。

その隙を逃がさず俺は、脚の止まった敵をサーベルでコックピットごと切り裂く。

そして、再び背中がぶつかると。そして、2機は武器を構えた。

煙が消えると、そこに残るのは、無残に散った機体と、最後の1機。

瞬間、かつての言葉が蘇る。

「3機程度で……」

「わ、私達を倒せるなんて……」

「思っただいよね？」

2機のジェガンは、引き金を引き、ビームライフルが最後の1機を襲った。

直撃を受けた敵は爆発、再びレーダーを確認。

数は3機程度になってはいるものの、その奥からの増援。あまり消耗してはまずい。

「ムゲン！聞こえるか！」

フアングからの通信、彼の声の奥から聞こえる爆破の音。

「どうした!？」

「リリーもいるな?」

「うん。何……?」

「こっちはこれ以上進行できそうにない。相手の攻撃が激しくてな……、お前たちだけでもアクシズへ取り付けてくれ!—くっ!」

「フアング……!だが、それは……!」

「ムゲン、お前にはやらなきゃいけないことがあるはずだ。家は任せておけ!—ぐあっ!」

「フアング!!」

「彼の言う通りです。ムゲンさん」

エトワールからの通信。

「エトワール……?」

「あなたはもう迷わないんじゃないんですか。なら、戦艦は任せて行ってきたください。決着をつけるんでしょう?……私は信じますよ」

「……分かった。リリー、俺たちだけでも行こう」

「うん!皆、先生は任せておいて」

「無論だ。俺たちは一年戦争からずーっと生き残っているんだ。そして、これからも生き残らなきゃいけないんだ」

「……必ず戻る」

俺たちはスラスターを起動し、アクシズへと一気に迫った。

どれくらい移動したか、正面からファングたちが抑えてくれてはおかげで、俺たちは敵にほとんど遭遇せずにアクシズの近くまで来ることができた。

目の前で地球へと落ちていく隕石を見て、思わず言葉を失う。こんなものが落ちれば、地球には人が住めなくなる。

あれだけ地球を想う気持ちがあったシャアが、なぜこんな行動をとったのかは俺には分からない。

それでも、一つだけ言えることは、こんな行動が正しいとは思わないということ。

一年戦争、デラーズ紛争、グリプス戦役、何度、何度繰り返し返せば気が済む……！
もう……こんな事は終わらせなければならぬ。

「……先生、敵。3機正面。……黒いのと白いのがある」

「……そうか」

来た。

奴等なら来ると、俺も分かっていた。いや、お互いに待っていたんだ。今度は……変えて見せる。

1機のギラ・ドーガと黒いザクが一気に迫ってくる。

ビームライフルを構えようとするその手を、リリーが遮った。

「リリー……？」

「黒いやつともう1機は私が。先生は、白い奴をお願い」

「だが……」

「私が、先生を守るから。…それとも、私に背中は預けられない……？」

リリーからの言葉に思わず言葉を失う。俺は頷き、彼女に言った。

「………分かった。その代わり、危なくなったら言ってくれ。………背中は預けるぞ」

俺はリリーと別れ、2機の間を抜け、ただひたすら白い機体へと迫る。

ビームライフルを構え、牽制。それに反応した白いザクが回避しながらこちらを狙撃。

それをシールドで防御しながら、グレネードランチャーを発射。

正面で爆発が広がる。

ビームサーベルを引き抜き、白いザクへと駆ける

左から右へ切り抜け、ビームスナイパーライフルを両断。

素早く反転し、サーベルを振り下ろすが、相手はそれをサーベルで受け止めた。

「待っていたぞ、ムゲン・クロスフォード！」

「…クロノード・グレイス!!」

サーベル同士がぶつかり合い、光を放つ。

「こうやって戦っていると、昔を思い出す…！」

「…くっ！」

クロノードは間合いを取り、バズーカを放ってくる。

素早くシールドを構えミサイルを射出。

弾頭はぶつかり合い、宇宙に光を放つ。

煙から飛び出してくる白いザク。そのまま流れるようにこちらへ迫る。

咄嗟にシールドで防御。それを予測していたのか、ザクは横薙ぎにサーベルを振り、

シールドを真つ二つに。

「ちっ…！…！シールドが！」

「前と変わらず遅すぎるぞ…！ムゲン!!」

「何を…！」

バルカンを放ち、相手との距離を取る。

相手はそれを腕で防御。

「昔は煙幕弾だったな。だが、今はあ!!!」

片手でバズーカを放ちながら、再び距離を詰める。

再びぶつかり合うサーベル。

「俺は……お前と決着をつける!!そして、アクシズを止める!!」

「出来るものなら、やってみろ!!」

「やってやるさ!お前を変えて、アクシズを止めて、皆で帰るんだ!!」

サーベルを押し切り、ザクの腹部を蹴り飛ばす。

反動で吹き飛ぶザク。素早く機体を制御し体勢を立て直す。

「まだだ!」

バズーカを発射しながら俺の側面へと移動していくザク。合わせるように俺は機体を動かし、ビームライフルで迎撃。

爆発の光があちこちで放たれる。俺は爆風に紛れ、相手の死角へ。

背後からサーベルを振り上げた。

「俺が気づかないとでも?!」

素早く反転したクロノードは、振り上げた俺の腕を掴んで、投げた。

投げられ機体が吹き飛ぶ。

「くっ……!!」

宙返しし、機体をクロノードがいた位置へ向けるが、そこには何もいない。

「……背後か！」

振り向きサーベルを振る。すると、ギリギリのところまでクロノードの攻撃をサーベルが受け止めていた。

「流石だな、良い反応だ」

「良く言うな、こっちは必死なのに……。余裕そうじゃないか」

「そんなことはない。……楽しいなあ、ムゲン」

「戦いは……遊びじゃない！」

「違うな。お前も、俺も、どこかで戦いを望んでいたはずだ。俺たちはこうあるべきだったんだ！」

「……仲間と殺しあうことがあるべき姿だど!?!」

「違う、俺たちはもともと仲間ではない！敵同士だ！」

「過去に仲間と言ってくれたのはクロノードだ!!」

「俺は……知らん!!」

ビームサーベルを吹き飛ばされ、追撃で右腕を切り落とされる。

右腕の爆発で、煙が機体を包み込む。このままじゃ、負ける……!

間合いを取り、正面を捉えた。しかし、そこには白いザクの姿はない。

上からの殺気……。バズーカでの射撃。

身を退いて弾頭を回避、続けて上を見る。だが、クロノードの姿は消えている。

「落ち着け……」

目を瞑る。相手が右側からバズーカを放ち、続けてサーベルで切り込んでくる感覚。

「右かあああ!!」

サーベルを左腕に持ち、クロノードがいるであろう位置へ切りかかる。

「なにつ……読まれた……?!」

サーベルはバズーカの弾頭を両断。再びクロノードへ距離を詰めた。

「逃がすかあああ!!」

瞬間、彼が避ける予兆、上へと上昇回避する「予感」がした。

サーベルを構え、相手へと切り上げる。

俺の予測は当たり、上昇回避したクロノードへとサーベルが襲う。斬撃は相手の左足を切り落とし、左足が爆発。

「しかしっ! まだまだ!!」

反撃にサーベルを振り下ろすクロノード。対応に遅れ、右足に傷をつける。

「くっ……!! まだ……まだだ!!」

サーベルを構え、闘志を奮い立たせる。

クロノードはそんな俺の姿を見て、バズーカを宙へ投げ捨てた。

「ビームサーベル相手に遠距離じゃ、分が悪いだろう？こいつ一本で相手してやる、来い!!ムゲン!!」

「……ああ！行くぞ!!」

サーベルを相手へ向け、突撃。相手も負けじとこちらへ突撃してくる。

お互い、退くことも無かった。結局、戦うことでしか俺たちは俺たちであることを証明できないのか。

クロノードも、俺も……道夜も。

「うおおおお!!クロノードおおおお!!」

「ムゲエエエエ!!」

その突きは、互いのメインカメラを貫く。

しかし、既に見えなくなっているであろうカメラは、互いにはつきりと敵を映し出している。

ザクの頭部にサーベルが突き刺さっていて、こちらも同じだろう。

持てる得物が無いとしても、俺たちは手を止めない。

左腕でザクの腹部へ一撃。反撃にこちららも腹部への一撃を食らう。

「ぐあ!!」

「ぐっ……!!」

その反動でお互いに吹き飛ばされるものの、態勢を立て直し再び殴り掛かる。
お互いの拳が正面からぶつかり合う。

「ぐ……おお!!」

「うおお!!」

「お前は……俺と決着をつけるためだけにここへ来たのか!? 全てを忘れて!!」

「そう……だ!! 俺には何も無い!! だから、お前を倒すことで俺は俺という存在を残す!!」

「そんな……自分勝手な!!」

「何とでも言え! 全てを失っていないお前には……!!」

お互いに相手のメインカメラに突き刺さるサーベルを掴み、引き抜く。

「……俺も、俺も沢山失ったんだ!!」

相手の薙ぎ払いを受け止め、何度目かの鏢迫り合い。

「失って、失って! 全てを踏み越えたその先に俺はいるんだ! そうして犠牲となった命を、語り継いでいくために!!」

「俺は出来なかった!!」

「出来ていたさ! お前が失った記憶の中で! 語り継いでいたさ!!」

「俺は……俺はそんな事知らん!!」

サーベルで押し切れられ、隙が出来る。

そこを逃がさず相手はサーベルで追撃を続けてくる。

何とか受け止めながら後退。

「俺に……そんな記憶はない！俺は…強化人間、クロノード・グレイスだ！」

「あつたんだよ!!お前は、お前は人間だ!!人間のクロノード・グレイスなんだ!!」

「黙れええええ!!」

「思い出せ！お前の記憶は副作用なんかで消えて良い記憶じゃない!!」

腹部へ蹴りを入れられ機体が吹き飛ぶ。

機体を制御し、再びクロノードへ迫る。

「クロノード!!お前は……いつ!」

2機の間を別つ巨大なビーム。そのビームは俺たちの戦艦のほうへと消えていった。

それと同時にマーフィーからの通信。

「た、隊長!クラップ級が……うわっ!!」

「マーフィー!?!どうした!!」

「大型ビームでクラップ級メインエンジンが損傷!!予備エンジンでもいつまで保つか

……。艦長!次の一射でこちらも……!」

「さっきのビーム砲か!? 敵戦艦からの艦砲射撃だったみたいだな。マーフィー! クラップ級を後退させるように言うんだ!」

「分かっています! 隊長たちの帰る場所を潰して……! 次弾来ます!! 隊長、避けて!!」

「何!」

素早く後退、ビームは機体を掠めクラップ級へ。

「うわああああ!!」

「マーフィー!! 皆!!」

マーフィーとの通信が途絶え、少しの間の後、艦長からの通信が入る。

「第00特務試験MS隊各員に告ぐ。我が隊のクラップ級は、撃沈した……いや、あと少しで沈む。クルーは全員退避済みだ。私も今から脱出する」

「第三小隊は脱出艇の護衛を頼む……すまない、君たちの帰る家を……」

その報告を聞いて、少しだけ安心した。生きているのなら、またやり直せばいい。生きているだけで……いいんだ。

クロノードを見る。

彼は俺を待っているように見えた。

「…行くぞ、クロノード！」

「来い!!」

サーベルを横薙ぎに切る。それを受けて相手はサーベルで受け止め、鏝迫り合う。

「俺は……お前から教えてもらったんだ！仲間の大切さを！幸せを守っていかなければならぬ」ということを！」

「…俺は……知らない!!」

「否定するな!!お前は分かるはずなんだ!!人の温もりが!!」

「人の温もりが……人を変えるとは限らん!!」

クロノードは腹部を蹴り飛ばし、間合いを取る。

「ぐっ!!」

「それに俺は、お前とは敵同士だと言ったはずだ!!敵であるお前に教えることなどな

い!!」

「でも、感じるんだろう!?!温かさを!!微かに残っているんだろう!?!」

「それが……どうした!!」

「それは、お前が覚えていなきやいけない記憶だ!!心だ!」

「俺は……この温かさを知らない!!」

「知っているんだ!!」

「知った風な口を……!!」

態勢を立て直し、出力を限界まで上げる。相手も出力を上げ始め、互いに対峙。

「俺は……お前を……お前に思い出してもらったためにここまで来た!!殺意なんかじゃなく、お前と【分かり合う】ために!」

「俺は……お前と決着をつけるためにここまで来た。人は、分かり合うには時間が掛かりすぎるんだ。そして!敵同士であるなら分かり合うことなどできない!!」

「出来るさ!!俺たちは、隣人まで愛せるニュータイプなんだから!!」

「俺は強化人間だ!!それはお前も同じ!ニュータイプという存在のせいで造られた化け物なんだ!」

互いに切り抜け合い、再びサーベルが衝突。そのたびに火花がバチバチと飛ぶ。

「いいや違う!!俺たちは、そんな存在の前に一人の人間だ!人間誰にだってニュータイプの可能性がある!!」

「そんなもの……!!そもそもニュータイプは戦争が無ければ開花することは無かった!ニュータイプを生むには新たな戦争が必要だ!」

「違う!きつと、きつと戦争なんかなくてもニュータイプに成れる時代が来る!!そのために俺は戦っているんだ!俺たちのような存在を造り出さないために!!」

「黙れ!!」

サーベルのエネルギーが切れ、互いにサーベルを放り投げて殴り掛かる。拳は互いのメインカメラを襲い、お互いに組合った。頭部と頭部が激しくぶつかり合う。

間合いを取り、拳を握りしめる。

お互いに察した。次の一撃で、決まる。

拳を振り下ろし、クロノードへ突っ込む。

相手も負けじとこちらへ突っ込んでくる。

「クロノード!!お前を……!!お前を変える!!!」

「死ね!!ムゲン・クロスフォードオオオオオ!!」

お互いの拳は、互いのコックピットへ直撃し、衝撃でヘルメットのガラスが割れ頬に傷をつけ、さらに飛び散る破片が右腕を傷つけた。

「ぐっ……」

「が……っ!」

クロノードは再び拳を握りしめ、殴ろうとする。その攻撃を、背後からカカサの機体が包み込む。

「カカサ!?止めるな!」

「……もう、いいだろう？友よ。……いいや、クロノード君」

「何?!俺は負けちゃいない!」

「君の負けさ、見てみな、次コックピットを殴られてたら君が潰れてしまう。あつちの装甲の硬さが、勝負の分け目だった」

クロノードの機体のコックピットは、それを守る装甲が砕け散っていて、コックピットハッチが丸見えの状態だった。

「……俺は……まだ……」

「……君はもう戦わなくていい。……もう、いいんだよ」

カカサの声は震えていて、クロノードへの本当の気持ちを、彼は伝えていた。

黒いザクが、白いザクを抱きしめ、泣いているように見える。

「……クロノード」

「……なんだ」

「かつて俺は、お前の居た部隊でお前と一緒に過ごした。それは、夢でもない。そこで、今いる部隊と同じ気持ちを覚えたんだ。記憶のない俺がだ」

「そして、お前はこう言った『その死を無駄にしないためにも、俺達が【意志を引き継いで】戦うんだ』と」

「……それから、敵同士として会うこともあれば、互いに協力し合うこともあった。だから

こそ、お前を変えたかった。記憶を失ったままで死ぬなんて……俺だったら嫌だ」

「……………」

「お前は、俺を倒して『存在を残したい』と言った。けれど、お前の存在を示すものは、俺たちが知っている。お前は、強化人間じゃないんだよ」

クロノードは少しの間考えた後、口を開いた。

「……分からない……。どうして、お前は他人を想う？ お前もコロニーで育った身だろうに。何故地球を守ろうと……」

俺は首を振り彼に言う。

「確かに、俺はコロニーで生まれて、育った。一年戦争なんてものが無ければ、俺は普通にコロニーで生活して、普通の人間として暮らしていただろう」

「けれど、今のこの道を後悔はしていないんだ。俺には、かけがえのない友が居て、俺を見守ってくれた人が居て、何より大切な妻と娘がいる」

「きつと、どんな小さな選択でも、別の選択を選んでいれば、楽にもなれた、手を血に染めずに済んだかもしれない。けどさ」

「そうしたら、今の自分はどこにもいない。……だから、後悔はしてない。俺が地球を守る理由は——」

その言葉を遮るように、ファングからの通信が入る。

「ムゲン……アクシズが……落ちる……もう打つ手がない。……俺たちは……」

「先生……。もう、本当に駄目なの……!?!」

リリーが慌ててこちらへ通信を送る。

「……………」

「…そうか、アクシズが落ちるか……。残念だったな、ムゲン。お前の救いたいと思つた地球は—」

「終わらせない……」

こんな所で終わらせるわけにはいかない。たとえこの身が無くなっても、救わなければならぬ命がある。

アウロラ……、エミリー……、ルナ……! フィアさん!!

守らなきゃいけない大切な仲間がいるんだ!!

俺は機体を動かし、アクシズへと突っ込む。

「先生、何を!?!」

「アクシズを……押し返す!!!」

その言葉はリリーを含めた全員が驚いた。

「おいおい、ムゲン君、さすがに無茶があるぞ……こればかりは—」

「無茶でもやるんだ! カカサ!! 忘れたとは言わせないぞ、地球に、あの星に誰がいるのか

を!!」

「つ……………ふつ、そうだったな……。よし、俺もやる」

「カカサ!?なぜお前まで!」

「クロノード君、男にはね、やらなきゃならない時つて言うのがあるのさ。命を懸けてでも守らなきゃいけないものがね」

「……………そうだ。やらずに諦めるなんて、俺は認めない。やってみるしかない!!」

「……………先生、私もやるよ!!私も……………守りたいから!もう、誰も失いたくない!」

「……………リリー……………」

それを聞いていたフアングが叫ぶ。

「第00特務試験MS隊の皆、聞いてくれ!!俺たちはこれから新しい作戦を決行する!これは命を懸ける作戦だ。無理強いはしない。…皆で、アクシズを押し返す!」

「フアング…?!」

「お前だけに背負わせはしない。俺ももう、大切な仲間が死んでいくのを見たくはない。…たまには、カッコつけさせてくれよ」

「……………ああ。やろう……………」

「何故……………皆……………」

クロノードは呆然とその光景を見つめている。

「…クロノード」

「……………」

「俺が地球を守らなきやいけない理由は、俺の大切な娘と、お前の妻と娘がいるからだ」

「お、俺の……妻と……娘……………」

「そうだ。ルナちゃんとファイアさんを、アウロラを守らなきやいけないからだ。だから、守るんだ」

「少ずつ落下してくるアクシズの前へ、全員が立ちふさがる。既に何機かのMSもアクシズを押し返そうとしているのが見えた。その中には「ガンダム」の姿もあった。恐らくはアムロ大尉の。」

「アクシズへ取り付き、スラスターを限界まで噴射する。」

「ぐおおお!!!」

「片手だけで押し返すのは流石に厳しいが、それでもやるしかない。」

「頼む……………俺に……………俺に力を……………!!アクシズを押し返す力を!!今ここでこいつが落ちたら、アウロラが……………ルナちゃんが、ファイアさんが!!!だから、頼む!ジェガン!もう少しだけ……………」

「しかし、だんだんと機体が引きはがされそうになっていく。」

「くっそお……………!!まだ!まだだあ……………!!!」

引き離されようとしたその手を、上から抑えつけるように、手が乗った。

「……………クロ……………ノード……………?」

「……………まったく。お前という奴は、いつも無茶をする。…だが、お前の言う通りだ。やらずに諦めるなんて、良くないよな?」

「お前……………まさか……………」

「……………俺は、守るぞ。地球を、ルナも、ファイアも。俺はまだ、あいつに【虹】を見せてやれていないんだ!」

全てを察した俺は、再び前を向く。

「やろう。今度は……………全員で!」

グレイ……………見ているのか?

君が見た理想、少しだけだが実現できているよ。

ジオンと連邦が、互いに協力して地球を守ろうとしている。

だから、頼む。地球を、俺たちに力を貸してくれ!

『……前を向いて、ムゲン。君は、もう一人じゃない。君という光に、皆が集まってきた。……僕は、信じている。君を』

「うおっ!?!しまっ—」

「カカサ!!」

カカサの機体が引きはがされ、吹き飛びそうになる。

それをクロノードの機体が掴み、必死に抑えた。

「クロノード! いいんだ! 離せ!! このままじゃお前も!!」

「ふざけるな!! もう二度と、親友の……お前の手を離すものかよ!!!」

俺は機体の限界までスラスターを噴射する。

「うおおおおお!! いっつけええええええ!!」

「結局、遅かれ早かれこんな悲しみだけが広がって地球を押しつぶすのだ」

「ならば人類は、自分の手で自分を裁いて自然に対し、地球に対して贖罪しなければならん! アムロ、なんでこれがわからん!」

「離れる、…ガンダムのは…！」

瞬間、ガンダムから「虹の光」がアクシズを包むように広がった。

その光が、アクシズに取りついた機体全てを優しく跳ねのけていく。優しい、その光は、グレイたちの死に感じたものと同じだった。

「こ、これは、サイコフレームの共振。人の意思が集中しすぎてオーバーロードしているのか？なのに、恐怖は感じない。むしろあたたかくて、安心を感じるとは」

「ムゲン……隊長。ア、アクシズが……地球から離れて……」

「……ああ」

俺は今、奇跡を見ている。アクシズが地球から離れ、そして宇宙へ広がるオーロラ。「やっつと、見れた。ゼロ………見ているかい、これが………人の温もり……。シゼルが知ることのできなかつた感情が………広がっている……」

温かなその光が、俺に熱を与えてくれる。胸を押さえ、目を閉じる。

すると、ゼロやグレイ、彼らの事を感じることが出来た。

いるんだ…皆。見ているんだ、この光を。

「先生……」

彼女の声で我に返り、言葉を返す。

「リリーか……。どうした？」

「綺麗だね……。それに、温かい……」

「……そうだね。人の意志は、こんなにも温かいものなんだ」

「……………帰ろっか、家に」

「ああ……帰ろう」

0093・03・12

ネオ・ジオン艦隊、投降を偽装しアクシズを奪回。強奪した核兵器とともに地球へ降下させるも失敗。

アムロ・レイとシャア・アズナブルの両名、死亡もしくは行方不明となり、消息を絶つ。「第2次ネオ・ジオン抗争」終結。

あの後俺たちは地球へと降り、日本へと向かった。

その理由は、一つだけ。

眠りの姫が目を覚ました。

クロノード、カカサ、ルナちゃん。アウロラ、リナ：皆で来た。

病室を前に、何度も息を整えるクロノード。

そんなクロノードを見てくすくすと笑うカカサ。もうすでに前と同じ調子だ。

クロノードの記憶障害は、あの戦いで無くなりはしたものの、余命は変わらず、後一週間程度生き残れたら良いほうらしい。

正直、立って歩いていることさえ不思議と言われている。

「行ってやれよ、お前が一番最初だろ」

すると、彼は何度も頷きながら病室の扉を開いた。

そして、彼だけが病室へ入り、扉が閉まる。

しばらくして、病室の扉が開き、クロノードが手招きをする。その顔は、嬉しくてたまらない顔だった。無邪気なルナちゃんを見ている気分になったが、やはり家族ということか。

病室へゆつくりと足を踏み入れると、室内の奥、窓の外を見つめる一人の女性。

俺は思わず声が漏れた。

「あ……………あ……………」

アウロラやルナちゃんがいる事さえ気にせずに、彼女へと歩いていく。

「……おや、その声は」

懐かしい声だった。数年ぶりに聞いたその声は、前と一切変わらない。振り向いたその女性は、優しく微笑んでいる。

腰まである長い黒髪、つり目で、キリっとした眉。前見た時と変わらず美人だ。

「…ムゲン」

「…ファイア……さん……」

まるで、母さんに再会したような気分だ。でも、それだけ嬉しかった。

また彼女と話すことが出来るなんて……。

彼女は俺の頭にゆっくりと手を乗せ

「見えたぞ、宇宙に輝く虹が。……お前は最高の弟だ。……ありがとう、ムゲン」

俺は、彼女へ涙を流しながら満面の笑みで返した。

「……どういたしまして、姉さん！」

59 完

60：時の果て

0093. 3. 14

ファイ・アツシユベリー、6年ぶりに昏睡状態から目覚める。

0093. 3. 15

あの戦いの後、俺たちの生活はゆったりと元に戻っていった。

だがあの日、俺たち人類は見た。人の意志を、可能性を。

ッガンダムが見せた「虹の光」は、人々に何を想わせたのかは俺には分からない。

ただ、その時俺が感じたのは、「皆がいた」こと。

目を瞑ると、そこに確かにグレイやシゼル、ゼロがいた、感じれた。

もう会うことも出来ないのに、でも、近くで感じたんだ、彼らの温かさを。

人々は語り継いでいかなきゃいけない、この奇跡を、人の可能性というものを語り継いでいかなければならない。

俺はもう、罰としてではなく「自らの意志で」時代を見届ける。

皆、後は俺に任せてくれ。きつと、見届けて見せる、人と人が分け隔てなく手を繋ぐ

時代を、人が、人と分かり合うことのできる時代を……！

「……」

心地の良い風が丘を流れていく。

結局、道夜はどこへ行ったのか、誰も分からない。

だが、きつといつか帰ってくる、そう信じている。

あの時、どうして止められなかったのだろう。考えれば、こうやって後悔をするのも何度目になるだろうか。

そう思うと、不思議と可笑しくなつて、思わず笑つてしまう。

「あ、父さん、ここにいたんだ」

背後からの青年の言葉ではつとして、振り返る。

黒い髪を短く揃え、キリつとした眉が力強さを感じる。しかし、昔と変わらず優しい目をしている。

「どうした？ロイ」

かつて名も無かつた少年は、今では家の事を手伝つてくれる青年に成長を遂げた。

アウロラの面倒や、他の子たちの面倒を見てくれて、彼は実に楽しそうに相手をしてくれている。

おかげでこっちは楽が出来るんだが、楽をしているとリナにまた何か言われるんだよ

な……。

「いや、母さんが父さんを探してたから」

彼は俺たちの孤児院で引き取った初めての子、別に名前で呼んでもいいと言っているんだが、彼は俺の事を父さんと、リナの事を母さんと呼ぶ。

「ああ、そうか。ありがとう」

「気にしないで。それで、父さんは何してたんだ？」

「ん？ああ、外で考え事さ」

するとロイは、若干呆れた表情でまたか、と言った。

アクシズでの戦いの後、よく一人で空を見上げる機会が多くなった。

そのたびに過去の事を悔やんだり、思い出したりする。

無意識なのか、俺は過去を忘れないためにそうしているのかもしれない。

「まあ、座りなよ」

俺は丘に腰を下ろし、隣へ座るよう手招きをする。

「…でも、母さんがうるさいよっ」

「お、お前が気にすることじゃないさ」

彼は言われた通り、俺の隣へ座った。

「で、どうしたの？父さん」

「いいや、ただ最近お前としつかり話す機会がなかったと思つてね」

「仕方がないよ、父さんは仕事があるんだし。それに、俺は父さんと母さんが側にいてくれるだけで幸せだから」

本当は、アウロラにも、ロイ達にも尽くしてあげなければならぬのだが、次いつ戦いに駆り出されるか分からない。だからなおさら、彼のそんな言葉を聞くと悲しくなつてしまう。

親なら、嫌でも時間を割いてあげたほうがいいのかもしれないのに。

「……すまないな、孤児院の事も手伝つてくれて」

「いいんだよ、俺、みんなの面倒見るの好きだから。それに、父さんの役に立ててるって思えるから、辛くはないよ」

「……つたく」

俺は彼の頭に手を乗せ優しく撫でる。

「父さん……?」

「ちよつとは子供らしいところを見せてくれよ、それじゃあ、俺の立場が無くなつちやうじゃないか」

「ははっ！父さんは父さんだろ？俺は、それでいいと思う」

「……そうだな。お前は利口な奴だ」

「へへっ……。嬉しいな」

彼は幸せそうな顔をしていた。その顔が、俺の生きる活力となってくれる。戦ってきたことも無駄ではないと思わせてくれた。

ロイは何かを考えた後、俺のほうを見てから言う。

「父さんは……。見たの？あの虹」

あの虹、おそらく前の戦いで起きた虹の事を言っているのだろう。

「……ああ、見たよ、綺麗だったな」

「うん、それに……。温かい。心が……。とても温かくなった」

彼の言葉に、俺は何度も頷きロイの頭を撫でる。

「そうだな、とても温かい光だった」

あの光は、たった一人の人間が生み出した光じゃない。

沢山の、あの場にいた全ての人が『地球を守りたい』その思いが溢れたから生まれたと、俺は信じたい。

そしてガンダムは、その意思を束ねる媒介となった。

原理は分からない、それでも、それが結果的に地球を救うことになった。

「ありがとね、父さん」

「どうした？急に」

彼に視線を送ると、彼は笑顔で言葉を返す。

「この地球を救ってくれて」

俺は首を横に振った後

「違うよ、ロイ。俺は、地球を守るために戦ったんじゃない。お前を、そして皆を守りたかったから戦ったんだ。その結果なんだよ」

「でもそれは、地球を救うことと同じだよ。俺、地球が好きだからさ、こんなにも広い街があるのに、それ以上の街が、人がいるんだよ。不思議とワクワクするんだ」

ロイは目をキラキラと輝かせながら、丘の下に佇む街を見つめる。

「そうか、なら、将来の夢は学者かな？」

すると、彼は少しだけ暗い顔をした後

「いや、……それは父さんや母さんに迷惑をかけちゃうよ。学校へ行くのだって、タダじゃないからさ」

「何言ってるんだ、ロイ。俺もリナも迷惑なんて思うわけないじゃないか。金の事なんか心配する必要はないんだ」

「でも……」

弱気な言葉を遮るように俺は話を続けた。

「いいか、ロイ。俺は、これでも君の親だよ。子供が頑張ろうとしているのに止めるなん

て出来ないよ」

「お前は、お前がしたい事をすればいい。俺やリナが【進む事の出来なかつた道】を、歩んでいってほしいんだ」

「だから、俺はお前のやりたいことを全力で後押しするし、苦しくなつたら一緒に苦しむ、悲しくなつたら一緒に泣こう。お前は…俺の子供なんだから」

「…父さん……………。いいの…………？」

「…と、言つても、実際リナにも聞いてみないといけないだろうけど。きっと、リナも良いつて言ってくれるさ」

「……………」

ぱあつと彼の顔が明るくなる。そう、子供たちは、戦いなんかする必要はない。

こうやって家族で暮らして、当たり前のようにご飯を食べ、風呂に入り、遊んで、寝る。それでいいんだ。

戦いなんかよりよっぽど素晴らしい。

心地よい風が、俺とロイの間を抜けていく。

俺は大きく背伸びをした後立ち上がりロイに言う。

「さて、それじゃあ、リナに会いに行くかな」

「そうだね。って、すっかり話し込んでた」

「まあ良いじゃないか、たまにはこんな日があつても、な？」
「まったく、父さんつて人は」

家の中に入ると、さつきまでの静かさと比べ、とたんに騒がしくなる。

ロイは家に入るや否や声を上げた。

「母さん、父さんと呼んできたよ」

すると、子供部屋から大急ぎで出てくるリナの姿。

表情から見るに、結構怒ってる。

「ロイ、すまないが、彼らの面倒を頼むよ」

雰囲気を察してか、彼は頷いた後、子供部屋へ入り、扉をきつちりと閉めた。

少しだけ気まずい雰囲気が流れ、俺は堪らず

「な、なあ……。とりあえず椅子、座ろうか」

彼女は黙ったまま、俺の正面の椅子へ座り、互いに向き合う。

それでもリナは黙っている。

「……リナ」

「何……？」

「……わ、悪かったよ」

「それは、何に對して謝つてるの？」

「そ、それは……お、遅れたことかな……」

「…別に、いいけど」

「リ、リナ、どうしてそんなに怒っているんだ…？」

リナは前と變わつて、どことなく暗く、言動も少しだけ棘がある。

それは、トクナガさんを喪つた後から。

彼女の中で、それが後を引いているのだろう。

そして、その彼を殺した人物が目の前にいて、あろうことか自分はその人物の妻なのだから。

でも、どうすれば良かった？あのままりナを見殺しにすることが最善だったのか？

いいや、違う。違うはずなんだ。

「……怒つてる理由なんか、自分で考えればいいじゃない」

「…リナ……」

彼の死からまだたったの3日だ。当然の反応なのかもしれない。でも、リナも分かるはずなんだ。彼女が死んだら、アウロラを抱ける人が居なくなってしまう。

俺には……あの子を抱く資格なんか無いから。そして、今は彼女をまともに抱きしめる事さえできない。

罪を背負うにはあまりにも大きな代償だった。

「……リナ、実はな……ロイが、学校に行きたいそうなんだ。リナ、君はどう思う?」

「……別に、良いと思うよ。…私に聞く必要なんか、無いでしょ」

その言葉で、思わず声を荒げた。

「リナ!!!」

「……何。別におかしい事は言っていないよ」

「君は、あの子たちの親だろ?なら——」

「それはムゲンが決めたことでしょ、私は知らないよ」

「リナ、お前!!!」

手を思い切り握りしめる。

「…そうやって、偽善者ぶってれば、あなたは気分がいいでしょうね。私の事、なんにも分かってくれないくせに、助けたつもりになってさ」

その言葉が、俺の胸に突き刺さる。気づけば、俺の口から勝手に言葉が漏れ出していた。

「……………ああ、そうだな。俺はこの手でお前の親代わりの人を殺した。それを引っ張るのは仕方がないと思うし、恨まれるのも俺のほうだろう」

「だがな、考える事を止めて、思考停止したままの人間に言われたくはない」

その言葉でリナは立ち上がり、俺の頬を殴った後叫ぶ。

「……ムゲンなんかに分かるか!!!私、どれだけ苦しいか!!!」

「分かりはしないさ。俺はお前じゃない、だから少しでも互いに寄り添わなきゃわからない」

「うるさい!!そんなの——」

頑なに否定し続ける彼女を見て、俺の中で何かが消えた。

そして、俺は

「なら、殺せばいい。俺を」

「え……」

涙に濡れた彼女の目が大きく見開かれる。

「俺を殺して、仇を取ればいい。そんなに俺が恨めしくて苦しいなら」

「ち、違う……そ、そんな……つもりじゃ……違うの……ムゲン……」

「俺は……お前に殺されるのなら、何も後悔しない」

「や、やめて……!わ、私が……ムゲンを……殺す……?いや……嫌……!!」

その言葉ではつとする。俺は、何てことを言ってしまったんだ。

「あ……あ……ごめん……なさい……ムゲン……私は……」

「リ、リナ、悪かった。…君は、誰も殺さない。殺さなくていいんだよ」

「……もう、放っておいて……私は………」

「リナ………」

ふらふらと外への扉へと向かうリナ。

「お、おい……どこへ行くんだ………」

「どこでも……いいじゃない……。私は……もう、あなたに合わせる顔がないよ……こんな私、貴方に見せたくなかった………」

「そ、そんなことは——」

「もう、放っておいてよ!!!私を見ないでよ!!!」

リナは叫び、外へと走り出す。

俺は急いでリナの後を追った。頬の痛みなんか気にせずに。

しかし、外に出たときにはリナはどこへ行ったのか分からなかった。

俺は落ち着いてリナが居そうな場所を考える。

外は既に夕暮れで、もうじき辺りを真っ黒に染め上げる夜が来る。

丘を駆け下り、辺りを見渡して、目についた人に声をかけた。

「あ、あの!ここらへんに銀髪の女性が通りませんでした!?!た、たぶん泣いていたと思うんですけど」

首を傾げ暫く考えた後、その人は首を横に振った。

そのあと、何人もの人に聞いて回っても、首を横に振るばかり。後悔よりも、焦りが大きくなっていく。

「リナ……！無事でいてくれ……！」

今はただ、彼女が何もない事を、何も起きていない事を願って。

俺は分かっていたいなかった。

大切なものを守ると言って、結局見ていたのは子供たちばかりに目が行って、リナの事を考えてもいなかった。

俺は、彼女を理解してあげられていなかった。彼女からすれば、今の世界は狂っているような世界なのかもしれない。

『正しい!?正しいわけじゃない!!!大切な家族を、最愛の人が殺すなんて、正しいわけじゃないじゃない!!!』

「くそっ！何が、何が『手を血に染める覚悟がある』だ！目の前の大切な人から目を背けて!!そんな奴が言うセリフじゃねえだろ……!!!」

あらかた街を探したが、リナを見かけることは出来ず、俺はスラム街へと向かう。

スラムへと来ると、エミリーの家が見えてくる。

エミリーは、家の前で立っていて、何か考え事をしているようだった。

「エミリー!!!」

俺は慌ててエミリーに声をかける。

「あ、ムゲンさん。ど、どうしたんですか!?すごい汗がー」

「リ、リナを見なかったか!」

言葉を遮るように食い気味に聞く。

彼女は少しだけ驚いた様子で言葉を返した。

「え……リナさんですか……?み、見てませんよ……?どうしたんですか?」

「い、いや、知らないなら……いいんだ。すまない、忙しいからもう行くよ」

「は、はい……」

歩けど歩けど、リナの姿はない。本当に……どこへ行ってしまったのだろうか。

俺は次に基地のほうへと向かった。

基地を見回し、一人の兵士に声をかける。

「き、君!リ、リナを……いや、リナ・ハートライトを見なかったかい!」

「え、と、突然何を……って、ムゲン少尉!」

「どうなんだ!」

「え、い、いや……見てないと思いますけど……」

「そ、そうか。…基地も探してみないとな」

俺は兵士にお礼を言った後、基地内を探し回る。

しかし、どこを探してもリナの姿はない。

焦りと、不安、そして止められなかった後悔の念が俺の中で混ざり合う。

「…ここもだめか。…後は…」

「ムゲン」

振り返ると、大勢の兵士たちが息を切らせている中にフアングやユーリたちの姿があった。

「フアング……?」

「いないんだろ、基地は探しておく、お前は別の場所を、アイツが行きそうな場所を探すんだ」

「…俺……でも…」

「ムゲン、トクナガはもういないんだ。アイツの心を受け止められるのはお前だけになったんだよ。だから……探すんだ」

「…あ、ああ…。皆、すまない！」

俺は基地に背を向け再び走り出す。

どこを探しても、どこにもいない。

まるで、本当に彼女だけが消えてしまったように。

あまりの不安からか、俺は気づかぬうちに声が漏れ出していた。

「リナ……リナあ……!!どこにいるんだよ……どこに……!!」

子供たちがどうか、もうそんなの関係ない。俺には彼女が必要なんだ。

他なんていない、彼女じゃないとダメなんだ。

「リナ……!!」

居なくなつてから分かる、この寂しい気持ちだ。

リナは、一人で彼の死を受け止めていた。

そんな彼女に、俺は……俺は……!!

『俺を殺して、仇を取ればいい。そんなに俺が恨めしくて苦しいなら——俺は……お前に殺されるのなら、何も後悔しない』

こんな事を言った俺を殺したかった。どうして寄り添ってあげられなかったんだらう。

辛いって、苦しいって言葉からも、顔からも出ていたのに。

リナの言う通りだった。俺は、偽善者ぶっているだけなのかもしれない。助けた気になつていただけなのかもしれない。

でも、だからこそ、今は純粹に彼女と会いたい。

もう一度会う、そのためだったらどんな痛みも、苦しみも耐えられる。

この世界に神がいるのなら、この思いを聞き届けてほしい。

走りながら、俺はただひたすらにリナの無事を祈った。

息を吸うために一度立ち止まる。ふと目に入ったのは小さな路地裏。

そこで微かだが人の声が聞こえた。

まさかと思って覗くと、そこにはリナを囲む3人の男がいた。

ゆっくりと近づいていくと、話している内容が聞こえてくる。

「なあ、姉ちゃん、一緒に遊ぼうぜ？」

「……」

「何黙ってんのさ、遊ぼうぜって言うてるんだけど？」

「……」

「なんだよ、つまんねえなあ、まあでも、黙っているならオツケーって事だろ」

ふつつつとした怒り。

「じゃ、そこ座れ」

「…嫌です」

「座れって言うてんのがわかんねえか！」

男はリナの髪を掴んでナイフを首元へ

その光景で、俺の中の怒りが爆発した。

「……俺の女から離れる。クズが」

一斉に全員の視線が集まる。俺の姿を見たりナは、思わず声を上げた。

「ムゲン……」

「なんだよ、今良い所なんだ、邪魔すると、殺すぞ？」

こちらを睨みつける一人の鼻を思い切り殴る。

力を入れすぎたのか、殴られた男は吹き飛び鼻を押さえている。

「…殺してやる。俺の女に触れたこと、後悔させてやる」

二人が襲い掛かる。正面からくる男の懐へ入り腹部への一撃。

側面からのパンチを受け止め、手刀を首目掛け落す。

「ぐ……てめえ……殺す…!!」

男たちは立ち上がり、ナイフを取り出した。

「ムゲン……!」

俺は拳を構えなおし、一人へと殴り掛かる。

殴られた反動で思い切り吹き飛ばす男。

「へっ……やるじゃねえか、じゃあ、これならどうだ」

鼻を押さえる男はリナを掴み、ナイフをリナの首元へ。

「動けば、この女は死ぬぞ。それでも戦うか？」

「……………くっ」

「さつきはよくもやってくれたなあ？殺してやるよお！てめえなんか!!」

その言葉と共に腹部に鋭い痛み。ナイフを刺された。

腹部を押さえて痛みを耐えている間も、俺の肩、腕が傷をつけられていく。

気づけば3人に囲まれ、体を切り刻まれていた。

膝をつき、地面に伏す。もう身体が動かなかった。

情けない……………リナを守ることすら……………。

「これで、トドメだなあ…………!!」

すると、俺の前へリナが立ちふさがる。

「……………彼は殺させない」

「今更邪魔だ！こいつも切り刻め!!」

「リナ……………やめ……………ろ……………逃げ……………ろ……………!」

「嫌だ！私は一步も退かないから!!」

リナは俺の前に立ちふさがり、両手を広げている。

彼女の体から血が滴ってくる。

そして、リナも膝をついた。

「ふん。これくらいにしておくか。良かったなあ、二人仲良く死ぬるんだもんなあ」

トドメと言わんばかりに男はリナの腹部を蹴った。リナは吹き飛び、地面に横たわる。

「リ……………ナ……………」

傷だらけの身体で這いずって彼女へと寄る。体を起き上がらせることさえ苦しい。

でも、自然と悲しくは無かった。

「リナ……………」

「う……………ムゲン……………?」

リナの側まで来ると、リナもこちらへと身体を寄せる。

「…随分探したよ……………皆にも手伝ってもらってさ……………」

「……………ごめんなさい……………私……………」

「いいんだよ、俺も謝らなければいけない」

「あなたは謝ることなんて—」

「いいや、真剣に聞いてほしい。俺は、確かに偽善者ぶってただけなんだろう。でも、今は……………単純にお前を想っている」

「……」

「俺がトクナガさんを殺した事実は変わらないけれど、それ以上に、俺はお前が好きなんだ。離れてからなおさら分かったんだ。俺には、リナしかない」

「代わりなんか無い。俺は、MSを傷つけて帰ると怒って、MSの話になると子供みたくになつて、嫉妬つぽくて、卑屈になるところがあつて、でも俺の側にいてくれるリナじゃなきゃダメなんだ」

リナは大粒の涙を流しながら言う。

「わ、私も……あなたと離れて……寂しかった……。怖かった。でも、今更戻れなかった……だから……。あなたの事は許せないかもしれないけど、でも……私はムゲンの事が好き」

「ロマンチストで、偽善者ぶつてて、いつもどこか上の空で、でも、いつも私を守ってくれる。そんなムゲンだからこそ好きになれた……。一人の女性として人を愛せた」

「許せないとこもあるけどね、そういうところを妥協していくことで、お互いに分かり合えるんだよね……」

ゆつくりと頷く。

「ああ……それで……それだけでいいんだ」

仰向けに寝転がり、呟いた。

「あー……………痛えなあ……………。リナに殴られた頬が今になって痛む……………」

「…私も…すつごい痛い……………。血だらけだもんね、私達」

「思えば、そんな姿でこんな話するもんじゃあないよな？」

自分たちの今の状況を思い出し、思わず二人で嘔き出してしまった。

「ははは!!!!」

「ふふふ……………あはは!!!!」

「……………ねえ、ムゲン」

「何だ？」

「私、もう大丈夫だよ。もう……………泣かないよ」

「たまには泣いてほしい」

「どうして？」

「俺が慰めたいからかな」

「……………いつも慰めてくれてるでしょ」

「……………そうだったか」

「ほんつと、あなたって人は……………」

「…俺も、いつまでも引きずらないことにする。……………そういうのはたまに思い出すくらいでいいんだ」

「それでいいと思うよ、あなたらしい」

「なんだ、それ」

「ふふっ、あなたには分からない事だよ」

「……？変なリナ……」

そのあと俺たちはフアングに見つけられ、基地で怪我を治療した後、家へと帰った。

0093. 3. 20

ファイアさんが目覚めた後、俺たちはアウロラの誕生日パーティーを兼ねたピクニックをすることになった。

家の事はロイとエミリーに任せておいた。本当はみんなで行こうと思ったのだが、ロイが『迷惑になるだろうから、父さんたちだけで行ってきて』と言われてしまった。

俺たちは日本へと向かい、そこでクロノード達と合流することになっている。

「ムゲン」

その声で俺の名を呼ぶのは、これで何回目だろう。

白髪のを髪をゴムで束ね、キリつとした細い目に、力強さを感じる眉。整った輪郭で、とても30代後半とは思えないイケメン。

初めて会ったあの日から変わらないクロノード・グレイスの姿がそこにあった。

「……クロノード、久しいね」

「何を言ってる、6日と14時間36分ぶりだ」

「そ、そんなに詳しく言わなくなっちゃって……」

「ははは！俺はまだ元気だぞ」

その言葉とは裏腹に、左腕はぷるぷると震えていて、それを必死に隠そうとしているのが分かった。

「おう！ムゲン君じゃないの！」

「ああ、カカサか。調子はどうだい？」

カカサは珍しくスーツを着ていて、認めたくは無いがそれが似合っていた。

「おかげさまでバツチリさ。今日はファイアもいる」

「…そういうことだ。ムゲン」

カカサの肩をポンと叩いてこちらへ姿を見せたのはファイアさん。

「もう立って歩いてても大丈夫なんですか？」

ファイアさんは肩を竦めながら

「いや、実際どうだったかは忘れたが、まあ私的には大丈夫だ」

「……いやいや……」

「ムゲン……さんだ！こんにちは！」

フィアさんの横からひよこりと現れたのはルナちゃんだった。

黒い髪をフィアさんと同じように伸ばしていて、キリつとした眉に、細い目。ニコニコと笑っている姿がクロノードと重なった気がした。

「ルナちゃん、別に無理してさん付けする必要ないよ」

「そうなの？ ママ……じゃなくてお母さんが」

「ん？ ああ、そうだな、目上の人には礼儀をしつかりと言っているからな。でも、ムゲンが良いって言ってるんだ、良いんだぞルナ」

ルナちゃんはばあつと笑顔になり

「うん!! ムゲン! 抱っこし—」

「ダメ—!!」

そうやって俺とルナちゃんの間割って入ったのは銀の髪の女の子。

「ダメなの! いくらおねーちゃんでも、パパは渡さないの—!!」

こういうちよつと嫉妬っぽい所はリナに似ている。

「ははは。アウロラ、いいじゃないか、ちよつとくらい」

「ちよつとじゃないもん! パパいっつもおねーちゃんばつか抱っこする—!! ずるい—!!
あうらも抱っこ—!!」

苦笑しながらも、俺は頷いてアウロラとルナちゃんを抱き上げる。

「ほら、これでいいかな？」

「わーい！パパに抱っこされたー！」

「わ、わーい…」

アウロラに比べてルナちゃんはちよつとだけ控えめに喜んでいる。

恥ずかしさというのを覚えてしまえば、きつと抱き上げる事なんかできないんだろうな、なんて思ったりしている俺がいる。

「どれ、そろそろ始めるか」

俺は頷いて、二人を降ろし、目的の場所へと向かう。

その草原は、一目見れば楽園のような場所だった。

そこら中に花や草が咲き乱れ、風に揺られて楽しそうに踊る。

そんな光景を見ているだけでも幸せと感ぜられるのに、今はクロノード達がいる。

リナはフィアさんと一緒にお弁当の準備をしているようで、ルナちゃんとアウロラは

草原で遊びまわっている。

景色を少し離れたところで見つめていると、隣にクロノードが並び

「……いい景色だな」

「ああ。そうだな」

「なあ、ムゲン」

「どうした？」

「何故あの時、お前は俺に語り続けた。記憶が無かった俺へ過去の事を言い続けた？」

「何故だろうな。でも、俺はどこかでクロノードの記憶が戻るんじゃないかって思えたんだ」

クロノードは肩を竦め言う。

「それは、ニュータイプの勘ってやつか？」

「さあね、でも確かにそう思えた。いや、信じたかったの方が正しいのかもしれない」

「……………」

「結局、俺がクロノードを思い出させたわけじゃないと思うんだ。あの時、あの場所には見えない「人間の大きな意思」があった。きっと、それも影響したんだと思う」

クロノードは首を横に振った後

「違うな。俺はお前の言葉で目が覚めた。ファイアを、ルナを守らなければならぬという言葉を聞いて」

「確かに大きな意思があったのかもしれない。だが、俺はムゲン・クロスフォードという男の言葉で覚醒した。それだけは、間違いない」

「クロノード……………」

「お前は、随分と成長したんだな。見た目も、中身も。……昔、俺の前に立ちふさがった新兵が、今では肩を並べて娘を眺めて幸せそうにしている。人生は分からないものだな」

「ああ……。きつと、人生なんて分からない事ばかりなんだろうよ」

「そうだな。……でも、俺は悲しくないんだ。俺という存在を、残すことが出来たから。そして、俺という存在を「語り継いでくれる人」がいるんだからな」

「……そう、か」

「なあ、ムゲン」

「なんだ？——クロノード……!？」

クロノードは俺を抱きしめ、頭を撫でてくる。

「な、何を……」

「……たくましくなったな、本当に……本当に……」

その温もりは、父に抱かれているかのように、優しかった。

大人であるにもかかわらず、子供に戻った気分で、安心させられる。

「……俺は……嬉しいんだ……俺を語り継いでくれるお前やカカサに出会えたことが」

「俺は……クロノードを語っていける程——」

「いいや、お前はもう、十分俺を超えていたんだ。……俺は、ここが限界。だが、お前は

違う」

「お前はまだやるべきことがある。俺よりも多くの事を見届ける事だ」

「……………クロノード……………」

「いいか、よく聞け、これが兵士としての俺の最期の言葉だ」

「お前は、光だ。何よりも強く、どんなに暗い闇でも消せない光。お前が守るべきものを、お前の光で照らせ。お前は……………俺が【認めた男】だ」

「……………ああ、やってみる」

「その意気だ、胸張れよ？」

大きく頷く。そして、彼は離れると大きく背伸びをして

「よし、昼飯だ！」

くるりと背を向けて歩き出した。

その男は、どんなに病気に侵されても、それでもなお、輝いている。一人の兵士として。

0093. 3. 21

その日は、雨だった。

まるで、誰かを失うことへの悲しみのような。死は、平等に訪れる。誰にでも。

病室のベッドに横になっっているのは、クロノード・グレイスという男。その場にいる誰もが、涙をこらえていた。

「……雨……か……」

クロノードはほつりと呟く。弱々しいその声から、ひどく衰弱しているのが分かる。

「……………なあ、ファイア……………?」

「なんだ?」

ファイアさんはクロノードの手を握り、彼の顔を覗き込む。

「……………ルナを……………任せる……」

「……………あ、当たり前だ! わ、私の娘だぞ! 私と……………お前の……………!! 守るに決まってるだろ!!」

「ああ……………ありがとう……………」

雨の音が、病室の中に響く。

少し間が開いた後

「……………カカサ」

「なんだ、クロノード」

「お前は……もう自由だ。もう、俺に付き従う必要も、俺をからかう必要も無い……。後は、お前がやりたいようにやればいい」

「……」

「お前とも……随分一緒に歩いてきたな。焼き鳥……何本奢ったっけなあ……」

「……321本さ。君と出会ってから俺に焼き鳥をおごってくれた回数」

「……そうか。それだけ奢ってたら……そりゃあ歳も取るよな」

「ああ……お互い長かったな」

「そうだな。……なあ、カカサ、もう一度……『相棒』って呼んでくれるか？こんな、こんな俺でも」

「……当たり前だろう！……お前は、どこへ行っても、どんな場所でも無敵の相棒さ」

「嬉しいな……その言葉」

「ったく……後は、任せておけよ」

「ああ、遠慮なく任せるぞ」

再び沈黙。そして

「リナ……」

「……」

「ムゲンは……きつと無茶をするだろう。……だから……だから……えつと……だか

ら、……………側にいてやってほしい」

「ええ、分かっています。何も心配いりませんから」

リナはただ頷き続けた。

「…ムゲン」

「クロノード……………」

「懐かしいな、お前と出会ったことを、昨日のように思い出す。お前は新兵だった……………」

「ああ……………ああ！」

「戦いで、あんなにも純粋なヤツを見たのは初めてだった。だから、なおさらお前に興味を持った」

「俺は、ジオンでもこんなにも優しい人が居るのかと、最初は驚いた」

思い出せば出すほど、色んな気持ちが混ざって、苦しくなる。

「そして、俺たちは共に戦い、大きな敵を討った。思えば、そこからだったな……………。お前と出会って全てが変わった」

「俺はお前に出会うことが無ければ、きっと別の道を進んでいたかもしれない」

涙が…止まらない。止められない。

「お前は……………俺の所へ来て……………幸せだったか？」

「ああ……………！お前に出会えたことが……………幸せだった！」

「……そう、か……。幸せか……。俺はもう幸せを感じる事が出来ない。だから、代わりにお前が幸せを感じてくれ、そしてそれを他の人へ語り継いでいけ」

「やっとな……。休めるな……。クロノード」

「ああ……。長い……。道のりだった。……でも、悪い事ばかりじゃなかった……。こんなにも素晴らしい仲間と家族に見送られて逝けるんだから」

「……そうだな」

「……………ああ……。大丈夫。俺は……。人間……。クロノード・グレイスだ……。強化人間じゃない……。最初から、俺は……」

「……そうだ、クロノード。お前は人間だ。強化人間は、『ジョン・クライガー』。あの日、あの場所でもう一人の男と共に死んだ」

カカサは彼に微笑みながらそう言った。

「そう……。だな……。ルナも、アウロラも……。見てないな？」

「……………ああ」

アウロラにも、ルナちゃんにもこんな光景を見せたくはない。

「……………それで……。いい……。ルナには……。遠くへ出かけた……。言っておいてくれ。そうして……。お前が大人になった日……。きつと……。――」

その場にいる全員が察した。クロノード・グレイスは、もういない。

大切な仲間が消えていく。人が死ぬことにはいつまでたつても慣れはしない。むしろ、苦しくなる。

「あ………ああ………!!クロ………ノード………!!」

フィアさんの声が余計に胸を締め付ける。俺は、リナとカカサに合図を送り、病室を後にした。

「あー！パパー！」

病室を出た俺に、アウロラがにこにここと近づいてくる。今の俺には、それが耐えられそうにもなかった。

「どうしたの？」

「……なんでも………何でもないんだよ。ちよつと、目がかゆくてさ………」

「ふーん………」

ルナちゃんは椅子から立ち上がり、カカサへと聞く。

「パパ………じゃなくて、お父さんは？」

カカサは泣きそうなのを堪えながら、口を開いた。

「クロノード君はね………病気でさ、だから、とても遠い所へ行つて治療するんだ。ルナが

大人になった日、きつとクロノードも帰ってくる」

「……カカサは行かないの？」

「……あいつ、雲みたいなやつだからさ。俺、置いて行かれちゃったよ……。それにな、クロノードは、ずーっと戦い続けてきたんだ。だから、休憩する必要があるんだ」

「パパ……何で病気なの……？」

「それは……ここ、ここでは治せないらしいんだ。と、遠い所なら治せるかもしれないって……」

「……そっか。じゃあ、私決めた！私、頑張つて勉強してお医者さんになる！！お医者さんになって、パパの病気を治すんだ！！そうしたら、ずつとずつと幸せだよね？」

「そう……か、そうか……。クロノードもきつと喜ぶよ……。本当に……っ！」

「パパ？どうして、泣いてるの？」

涙が零れた。

「……アウロラ、人には、どうしても……そうなっちゃう時があるんだよ」

リナが優しくアウロラに言ってくれる。そのリナも、涙で顔が濡れている。

「……そっか……。悲しいんだね……。よしよし」

アウロラは俺のほうへ歩み寄り、俺に抱き着いてそう言った。

「アウロラ……ありがとう……」

そんなアウロラを抱きしめながら、俺は涙を流した。

それから数日後、俺たちはクロノードの墓を建てた。

そこにはカカサ、ファイアさん、リナ、俺の四人。

場所は、俺が決めた。

「……………」

「ああ、連邦のニューヤーク基地の近くさ。今はここは小高い丘になっているが
ファイアさんは首を傾げ聞く。

「だが、どうしてここなんだ？」

「ああ、それはね」

「ここは、俺とクロノード・グレイスが初めて対峙した場所なんだ」

「そんな機体で俺と戦う勇氣は認めてやる、だがそいつじゃ勝てないぜ？無理に戦う
必要はないんじゃないかな？」

「あ、あの…どうしてそんなことを…？」

「どうしてつて…そりゃそんな奴を倒したって面白くないだろう…？それに、連邦ジオン関係なく人間には変わらないからな、無駄に命はとらないさ」

「そうだとしても、俺には基地を守る使命がある。悪いが引き下がれない!!」

「仕方ない…なら、やるしかないか…」

「ビームサーベル相手に遠距離じゃ、分が悪いだろう？こいつ一本で相手してやる、来い!!」

「舐めるなあああ!!」

それから始まった、10年以上の因縁。

彼は時に敵として、そして時に仲間として、俺の前へと現れた。

そして、その始まりの場所、それがここだ。

彼は、俺との【始まりの戦場】に眠る。彼は、一人の戦士として、妻子を持つ一人の人間として亡くなった。

『クロノード・グレイス』死去。享年36

60 完

第二次ネオ・ジオン抗争編外伝

外伝：Last Episode of Kurono do

泣いていた。そこにいる大切な仲間が、家族が。

俺のために泣いてくれている。

きつと、昔の自分では考えもしない事だろう。

俺には、両親なんかいないと思っていた。だが、違つたんだ。

あの時――

戦いの果てで見た綺麗な虹は、俺に確かな温もりを与えてくれた。

それに加えて、俺の隣にいるはずのない人物を感じた。

俺の両親。物心つく前に消えた両親を、名前も、見たことすらない両親を、その時、ハッキリと感じた。

それは勘違いでもなく、幻影でもない。俺の父と母。

二人は笑っていた。それは、俺への労いだったのかは分からない。

だが、確かにあの場所で、「奇跡」は起きた。

胸に手を当て、俺は小さく呟いた。

「…暖か…だな…」

かつて、この言葉を言ったのを、今でも覚えている。

そう、覚えているんだ。

俺の妻の事も、娘の事も。

そして、大切な親友と仲間たちを。

あの虹は、俺に沢山の奇跡を見せてくれた。

奇跡は、それだけではなかった。

2日後の事、カカサの話を聞いて、思わず何度も聞きなおした。

フィアが目覚めた。彼はそう言った。

俺は急いで支度をして日本へと向かった。ムゲンたちへの連絡はカカサがしてくれ
たらしい。

病室の前で、何度も息を整える。

すると、背後からカカサが

「行ってやれよ、お前が一番最初だろ」

俺は頷いて、病室へと足を踏み入れた。

病室の奥のベッドで、静かに窓の外を見つめる女性。

病院に来るたびに願った姿で、彼女は今佇んでいる。

ゆつくりと歩みを進め、彼女に近寄る。

足音に気づいたのか、女性は

「…………この足音は…………。…ああ、随分と懐かしい。やっぱりお前が一番最初に来てくれると思っていたよ、クロノード」

彼女はこちらへ振り向いて、微笑んだ。

俺はただ何も言わず、彼女を抱きしめる。

「…………随分と大胆だな、クロノード。ふふ、私は嬉しいよ」

「お前に、お前に会えることを…………何度夢見たことか…………！ やつと…………やつと会えた！ フィア!!!」

「ああ…………私も会いたかった。お前に抱きしめてもらいたかった。…………久しいな、クロノード」

話したいことが沢山あった。ルナの事や、今までの戦いの事。

でも、俺には時間が限られている。

出来るだけ、多くを伝えたかった。

「ファイア……………」

「ああ、分かっている。他の皆もいるんだろう？みんなで話そう」

「ああ…!!」

俺は笑顔で病室の扉を開き、彼らを招き入れる。

今までに感じたことのない喜びからか、自然と笑みがこぼれてしまうのが自分でも理解できた。

ムゲンも、カカサもリナも、全員がファイアが目覚めたことを心から喜んだ。

ムゲンは涙を拭き、そして、ルナを彼女の前へ。そして

「ルナちゃん、やっと、やっと君に会わせてあげられる…。君のお母さんを」

俺にとっては4年ぶりの再会。しかし、ファイアにとっては6年ぶりの再会、喜ばないはずなどない。

ルナはゆつくりとムゲンの前へ出て、俺を見た。

「パ……………パ……………」

涙が出そうになった。親になってから、つくづく涙脆くなつたと感じる。

我が子がこんなにも成長していたことが、そうさせるのだろうか。

「…ああ。久しぶりだな、ルナ」

「…!!うん!!」

俺はルナに手招きし、ファイアのほうを見ながら言った。

「さあルナ、覚えているか？ルナの母さんだ」

ルナは視線をファイアへと向け、大きく頷いた。

「うん!!ママだ!!!」

その言葉を聞いたファイアは、ルナを抱きしめ

「ああ……ルナ………こんなに大きくなったんだ……。こんな………こんなにも……!!私
は嬉しいよ」

彼女の目には涙が流れていた。

ルナも寂しかったに違いない、けれど、親である俺も、ファイアも……寂しかったんだ。

あの時の選択は、間違っていたのかもしれない。だが、ルナだけは、俺たちのような
道を進んでほしくは無かった。

だから、後悔はしていない。

……でもこれで、安心できた。

ルナを抱きしめてくれる人がいる。それでいい。

それから数日後、ファイアは退院し、家に帰ってきた。

カカサは用事が出来たとか言って数日の間家を空けるといつて消えた。

……空を見ていた。

地球から見る空は、コロニーとは違い、綺麗な星が輝いては消えていく。それを優しく見守るように佇む三日月。

「……綺麗だ」

自然とそんな言葉が漏れていた。

「おや、それは私に言っているのか？」

「うおっ!? フィア!？」

いつの間に隣にいたのか、彼女はこちらを見つめながら微笑んでいる。

「ふふ、お前は相変わらず可愛いな。……でも確かに……この空は綺麗だな」
彼女も空を見上げた。

二人の間に、少しだけ沈黙が流れる。

「なあ、クロノード」

「なんだ？」

「……ルナも随分と成長したな……。お前も、ムゲンも、成長した。……私は嬉しいよ」
「何を言うんだ、俺はもう限界さ……。だから、せめてルナといれるだけいてあげたい」

「……カカサから聞いた。副作用だったか……」

「ああ。強化人間という存在の宿命さ。……でも、後悔も、悲しさもない。ムゲンと決着をつけられた。それに……」

「俺の存在を記憶し続けてくれる人たちがいる事を知ったから」

俺はフィアに微笑んで見せた。

「……悲しい……ものだな……。愛する人が死んでしまうというのに、何もしてあげられないなんて」

俺は首を横に振りながら

「いいや、フィアは俺に沢山の事をしてくれた。それに、俺を愛してくれたじゃないか。それで……いいんだよ」

「……クロノード……」

「時代は嫌でも進んでいく。……けれど、それを乗り越えて生きていくしかないんだ。フィア、どうかルナを頼む」

「……ああ。分かっているとも」

彼女は手で自分の目を覆い、上を向く。

彼女の唇が震えているのが分かった。

俺はフィアを抱き寄せ、頭を撫でる。

「く、クロノード!?!…なにを……」

「悲しい時くらい、俺がいるんだから頼ったらいんだ。そうだろう？」

彼女は俺の胸に顔を埋め

「……クロノード……。うつ……。うう……。!!死なないでくれ……。私は……。やつとお前の所へ帰ってこれたのに……」

「お前が居なくなるなんて嫌だ……。!私を……。一人にしないでくれ……」

「……。俺だって、お前と離れるのは辛いさ。けれど、仕方がないじゃないか。……。今は少しでもフィアを抱きしめていたい……。そうすれば、君を感じれるから」

「……ああ……」

二人の悲しみを、月は静かに見守り続けた。

外はあいにくの大雨。

「……雨……。か……」

そういえば、ルナが生まれた日も大雨だったな。

嬉しさもあるが、悲しさのほうが大きい。

ルナの成長した姿を見たかったし、出来れば、花嫁姿なんかも見てみたかった。

たしか、あの時は任務終わりだったな、カカサと二人で大慌てで病院に向かったのが昨日の事のようにだ。

「はあ……はあ……!!」

病院の前まで来て、やっとまともに立ち止まった。

それまでほとんど駆け足だったから。

「ちよ、ちよつとお、クロノード君、速いってえ……!」

後ろから肩で息をしているカカサを横目に、俺は息を整える。

「……よし、行くか」

任務よりも緊張しているのか、どことなく声が上がっているのが自分でも理解できなかった。

ファイアが無事でいてくれることと、俺に親が務まるのかという事が頭の中でごちゃごちゃに混ざって、不安が募っていく。

案内された場所は、廊下で、話によるとこの扉の奥でファイアが頑張っているのだとか。俺たち二人は、ただ扉の前の椅子で座って待つ事しか出来なかった。

あれやこれやと不安が募り、扉の前をふらふらと歩く。

それを見たカカサは肩を竦めながら

「クロノード君、気持ちは分かるけども、ちよつとりリラックスしたら？ほら、この俺っちみたいにな」

「い、いや……だがな……。心配なんだよ、フィアが……」

「ま、そりやそうか。……んでも、クロノード君がそうやってしてたって、何も変わらな
いよ。ささ、座るがよろし」

そう言つて彼は俺を強引に椅子に座らせた。

それでも落ち着かず、キヨロキヨロと周りを見渡してしまつたり、やつぱり立ち上が
ろうかと思つたり。

するとカカサは

「よし、クロノード君、まず子供が出来たら、どんな名前にする？話によれば女の子つて
事だし」

「えっ……」

彼の言葉に少しだけ硬直してしまう。少しだけ考えた後、俺は口を開いた。

「そう、だな……。【ルナ】というのはどうだろうか」

「へえ、じゃあそのルナちゃんに初めて会ったら、君はどうするよ」

「そ、そりやあ抱きしめたい……かな」

「そうか。それじゃ、ルナちゃんの好きな食べ物を当てようぜ」

「どうやってだよ」

「あー、違うな。うん。……まあ、何だ、俺も……緊張しているみたいだ」

「カカサ……」

珍しい。あのカカサがここまで緊張するところを初めて見たかもしれない。

「今日は雨だからって、そんなに湿っぽくなるなよクロノード君。今日は、良い日なんだぜ？」

「……あ、ああ……」

「あ！思いついたぞ！」

カカサはポンと手を叩き立ち上がる。

「な、何をだ……？」

「ルナちゃんのを将来の夢さ！なってほしい職業とか無いの？」

俺はうーんと唸った後。

「ねえよ。少なくとも、俺やフィアのような道に進まなければ、それでいい」

「あーもうっ！夢が無いっ！夢が無いよクロノード君!!それでもアンタ親なのか!？」

肩を掴まれグラグラと揺らされる。

「い、いや、そうは言ってもだな……」

「じゃあ、代わりに俺が決めちやおうかなあ!!」

カカサはふっふっふと笑った後

「チヨーイケイケの美少女になってもらって、いい学校入って、そんでもって戦争とは無

縁の仕事についてもらおうぜー」

「…ふふ、そうだな。そりゃあいい」

すると、カカサは

「んでもって、チョーイケメンの男と結婚してさ！」

「ま、待て！気が早すぎるぞ!!」

「えー、いいじゃんかー。どうせ妄想だしさ！」

「だからって、結婚なんて、まだ生まれてもない子に……」

「いいや、クロノード君分かっちゃいないね。ああ、分かっちゃいないとも」

「……な、何が……？」

カカサは人差し指を立て、ウインクしながら

「子供ってのは、クロノード君が思ってるより早く成長するもんなんだよ」

「そうなのか……？」

「ああ、そうさ。そうだって本に書いてあった」

「ほ、本って……」

「仕方ないだろ？俺だって子供なんか持ったことないしさ。それに、将来持つ気も無い

からさ」

「お前……」

「だから」

カカサは真面目な表情で言った。

「…素直に嬉しいんだ。お前が子供を持つって聞いてさ」

「……………ありがとう。カカサ」

「な、なんだよ、きもちわるっ!」

「誰が気持ち悪いだあ!?!」

ちよつと声を上げて立ち上がると、カカサはオーバーなりアクションを取りながら

「ワーヤメター!!」

気づけば、俺の心の中で、不安が少しずつ消えていくのを感じた。

無意識でやってるのか、自分の意志でやっているのかは分からないが、今はありがたいと思った。今だけは。

それから、何時間とも思える時間を待った。

そして、扉の奥から赤ちゃんの泣き声が聞こえ、思わず立ち上がる。

「……………」

それにつられてカカサも立ち上がって叫ぶ。

「や、やっとか!!!」

医師に案内され、俺たちは病室へ。

心臓の音が聞こえる。今まで聞いたことのないくらい大きな音で。

病室の奥で、ベッドに横になるフィアと、小さな赤ん坊。

「フィア……!!」

「おや、クロノード……。それにカカサも……」

「……無事で良かった……」

「ああ。この通り、元気さ。…ほら、見てやってくれ。お前の娘だ」

震える手で赤ん坊を抱き上げる。

俺の……子供。

しっかりと理解するには時間が掛かったが、この可愛い子供を見ていて思うのは、守らなければならないと、そう感じた。

「……なあ、クロノード……。何て名前を付けようか」

「えっ……」

「迷うことは無いだろ？クロノード君」

カカサはにやつと笑ってみせる。

俺は腕に抱く子を見つめ、頷いた後

「この子は……【ルナ】。月のように全ての人を見守ってあげられる人になってほしいか

ら」

「…ルナ……か……。良い名前だよ、クロノード。…なあ？カカサ」

「だねえ…。ちゃんと意味まであったなんてクロノード君はすごいネ」

「……本気でそう思っているのか？」

「もちのろんさ。俺あいつだって…って、もちと言えはこの前」

彼の言葉をスルーし、ルナを見つめる。

将来、きつとファイアのように美しい人になるんだろうなとか、考えたりしながら。

でも……それも……もう叶わない。

俺はここで足を止めなければいけない。

ルナを……

「……ルナを………任せる……」

俺の前で大粒の涙を流しながら彼女は叫ぶ。

「……あ、当たり前だ！わ、私の娘だぞ！私と……お前の……!!守るに決まってるだろ!!」

良かった。彼女になら……任せられる。

「ああ……ありがとう……」

消えていく。何かが……ひとつ、またひとつと。

でも、それに恐怖を感じる事も、悲しきを感じる事も無かった。

ああ……でも、ひとつだけ悲しい事は、ルナの大人になった姿……見てみたかった。

「やつと……休めるな……クロノード」

ムゲンは、涙を流しながら、俺に微笑む。彼の泣く姿を見たのはこれで何度目だろうか。しかも今回は……俺へ向けられた涙。

「ああ……長い……道のりだった。……でも、悪い事ばかりじゃなかった……こんなにも素晴らしい仲間と家族に見送られて逝けるんだから」

「……そうだな」

言葉とは裏腹に彼は少しだけ納得がいかなそうな顔をしていた。……本当に顔に出やすい。

まだまだ頼りないところもあるが、彼はまだ強くなる。

人の死を……俺の死さえ糧として強くなる。

強化人間でありながら、ニュータイプとしての温かさを持っている。

強化人間にはないその温もりを……彼は持っていた。

……おかしいな……。俺も……。強化人間のはずなのに……。【温かい】

そうか……。俺は……。最初から……

「名前が嫌いなんだろう？なら……こうすれば良いじゃないか！」

「……空砲……？」

「……せーかい！これでお前、ジョン・クライガーは死んだ。これで、自分の名前……つけられ良いじゃないか」

「……なら……お前も……」

「……これで……俺達二人は名無しになった」

「……さあ。自己紹介からだ」

「ああ……」

「俺の名前はクロノード・グレイス。よろしくな！」

「……俺は……カカサ・キヤモイだ……よろしく。クロノード君よ」

そうだ……。俺は……。クロノード・グレイス。……。強化人間なんかじゃなかった。

「……………ああ……………大丈夫。俺は……………人間……………クロノード・グレイスだ……………。強化人間じゃない……………最初から、俺は……………」

「……………そうだ、クロノード。お前は人間だ。強化人間は、『ジョン・クライガー』。あの日、あの場所でもう一人の男と共に死んだ」

…俺も……………人間だったんだ。

ああ……………それが分かっただけで……………もう満足だ。

「……………それで……………いい……………ルナには……………遠くへ出かけたと……………言っておいてくれ。そうして……………お前が大人になった日……………きつと……………」
きつと会いに行く。

……………無理でも……………そうだとしても……………

…ルナ……………お前が……………大人になった時、また、抱きしめてやるからな。

俺はクロノード・グレイス。

たった一人のどこにでもいる兵士。

でも、それでも…そんな俺にも家族とかけがえのない仲間たちがいた。

俺の存在を記憶してくれる人が居た。

カカサ・キヤモイという男と共に歩き続け、ここまでたどり着いた。

そうして、俺に残ったものは…何も無い。

死には…何も無い。

『違う。クロノード……』

その声は、真つ暗な世界から響いて聞こえた。

ファイアの声。

俺はもう……死んでいるのに。

『あなたは……残せた。私は……知っているから……』

？
そうか……………フィアは知っているのか……………聞かせてくれ、俺には……………何が残っている

『温もり……………。あの、宇宙で輝く温かな光』

……………ああ……………

温もり……………か……………

……………いいものだ……………な……………

俺はもう何も感じることは出来ない。

そして、この先の未来を歩むことも、見ることも出来ない。
けれど、それでも、悲しくはない。

……………俺は物語や筋書き通りが嫌いだ。だが…

大切な家族と、親友と歩めたこの物語だけは……好きになれそうだ。

L a s t E p i s o d e o f K u r o n o d o 終

外伝：Episode of Kakasa 2

時代は、進んだ。

俺は見届けた。戦いの果てを、友の最期を。

まだ少し寒い風が俺を通り越していく。

小さな丘に建てられた墓を、ただ見つめていた。

「やっぱり、ここにいたか」

声の主は横に並び、小さく手を合わせる。

腰まである長い黒髪が風になびいて、静かに目を瞑るファイア・アツシユベリーがそこにいた。

思えば、彼女が目覚めたのも、あの虹が見せた奇跡なのだろうか。

「……ルナは、いいのかい？」

そう言うと、ファイアは

「ああ、ムゲンの所へ預けてきたよ。数日会えなくても、これからはいつでも会えるからな」

「……それも…そうだ」

空を見上げれば、嫌って程太陽が輝く快晴。

そういえば、こうやってゆつくりと空を見上げたのはいつぶりだろう。晴れた空とは対照的に、俺は……

「さて、私はこれくらいで帰るが…カカサ、お前は？」

フィアは俺を見つめながら聞いてくる。

慌てて言葉を探して

「あ、いや、俺はもう少しここにいろわ」

そう伝えるとフィアは小さく頷いた後背を向け歩き出した。

彼女もきつと思うことはある、しかし、それは俺も同じ事。

いつもそんな時は、クロノードと話して気分を変えるんだが。そんな彼はもういない。このモヤモヤを、どうやって解消すればいい？

墓に並ぶように座り、目を瞑る。彼と初めて会ったあの日から、14年。14年もの間二人で背中を合わせて戦ってきた友は、この地で眠っている。

彼は満たされていたのだろうか。いやたぶん、俺に残ったものは何もないか思ってるんだろうな。

我ながら実にクロノードらしい考え方を思いついたもんだ。彼が居れば披露してや

りたいね。

「……俺の好きなように……か。難しい注文だぜ、まったく……」

彼の最期に言った言葉。『お前はもう自由だ。もう、俺に付き従う必要も、俺をからかう必要も無い。後は、お前がやりたいようにやればいい』

俺が軍に入ったのは、彼を支えるためだ。クロノードは俺の手の届かない場所へ行った。

それならば、俺は軍にいる必要はない。

だが……

俺は何をすればいい？

唯一の友を失った世界で、俺は何をすべきなのか。

いくら考えても、答えは出なかった。

大きく息を吐いた後、立ち上がる。そうして墓を見ながら小さく呟いた。

「ちよつと散歩でもしてくるわ」

ムゲンにとって、クロノードが眠る地が始まりの場所ならば、俺とクロノードの始まりの地も同じくここ。

廃れた小さい町は、あの日から変わらず、その姿をとどめている。

これだけ時代が進んだのにもかかわらず、ここは修復はおろか、何一つ手を付けても
らってはいない。

町の一番端にある喫茶店。扉を開いて、一声。

「邪魔するよ」

今や店主さえもない喫茶店のカウンターに腰を下ろし、目を瞑る。

ここが、俺とクロノードの始まりの場所。

アイツが、強化人間を捨てて普通の人間として歩み始めた場所。

そして、俺が変わるきっかけとなった場所。

『……民間人を守るのが軍人の役目だ……！それなのに……なぜ民間人を殺してまでこんな
ことをするんです……!!!』

その言葉が、衝撃だった。

彼は、上官に対してそう言った。

だから、少しだけ興味が湧いたんだ。

『……黙れ……クズ。部下を何に使ってんだ。そこで突っ立てる馬鹿な兵士の言うとおりで

！お前ら本当に軍人なのか？』

『……もう……あなたには従えません。あなたは……最低なクズだ!!!』

そうして、彼は上官に引き金を引いた。

それが、始まり。

『…名前は…?』

『え…?』

『お前の名前は…?』

『……ジョン・クライガーだ』

『……いい名…だな』

『あんたは…?』

『俺は……ケン・ナカムラ……変な名前だろう?』

『……気にするな。俺も自分の名前は気に入ってない』

『どういうつもりだ…?』

『名前が嫌いなんだろう?なら……こうすれば良いじゃないか!』

『……空砲…?』

『……せーかい!これでお前、ジョン・クライガーは死んだ。これで、自分の名前……つけられ
ば良いじゃないか』

『……なら……お前も……』

『……これで…俺達二人は名無しになった』

『…さあ。自己紹介からだ』

『ああ…』

『俺の名前はクロノード・グレイス。よろしくな!』

『…俺は…カカサ・キヤモイだ…よろしく。クロノード君よ』

その日から俺たち二人は、互いに背中を合わせ戦い続けてきた。

俺は、クロノードに何もしてやれなかった、記憶が消えていく彼を見続ける事しか。

諦めていた、クロノードは記憶を失ったまま、人生を終えると。

だが、彼は諦めなかった。

「…無理だ。アイツはもう、何も思い出せない。そして、「強化人間として死ぬ」んだ」

「ふっ…ははは!!諦めるなんてお前らしくないな。…だったら、そんなの思いつきり殴って思い出させればいい」

「な……………」

「俺は、諦めないぞ。どんなに可能性が低くても、どんなに傷ついても、変わる可能性があるのなら、俺はそれを信じた…!」

「クロノードは、全てを忘れて死んでいい奴じゃない。アイツは、自分の周りにいる人

の事を、大切な家族を……思い出さなきゃいけない」

「そして最期は【強化人間としてではなく、一人の人間として人生を全うする】それが、彼の道なんだ。俺は、彼を変えてみせる。それが、彼から沢山の事を学んだ恩返しなんだ」

「お前………ふっ………はははは!!!」

どんなに時代が進んでも、彼の芯は変わらなかった。真つすぐに単純なバカ。だが、だからこそ信じたくなる。

「そうだな、アイツはそんなつまらない死に方する奴じゃないよな。……なあ、ムゲン」

「なんだ？」

「お前を………信じてもいいか」

「カカサ……？」

「俺は……アイツのそばにいてやることしか出来ない。でも、お前は、お前ならあいつを変えられる。……だから、お前を信じたい」

ムゲンならば、変えられると、何故かそう思えた。俺には考えつかないようなことが出来る奴だからこそ、クロノードを変えられるのではないかと。

「………俺は、俺に出来る事をするだけだよ。俺は誓ったんだ。この手が血に染まらうとも、大切な人を守ると」

…それが、敵であっても……。彼ならそう言うだろう。そして、ムゲンは本当に変えた。クロノードを

「……まったく。お前という奴は、いつも無茶をする。…だが、お前の言う通りだ。やらずに諦めるなんて、良くないよな？」

その声は、先ほどまでと違い、優しさを感じさせる声だった。……クロノード、お前は……！

「お前……まさか……」

「……俺は、守るぞ。地球を、ルナも、フィアも。俺はまだ、あいつに【虹】を見せてやれていないんだ！」

「やろう。今度は……全員で！」

気づけば全員がアクシズを押し返そうとしていた。それでも、限界があった。俺の機体が離されそうになった瞬間、その手をクロノードのザクが掴む。

「クロノード！ いいんだ！ 離せ!! このままじゃお前も!!」

「ふざけるな!! もう二度と、親友の……お前の手を離すものかよ!!」

瞬間、アクシズを包むようにオーロラの光が輝いた。

全ての機体を優しく包み込み、アクシズから離される。

それは、夢でも見ているかのように温かい何かを感じた。

宇宙に輝く虹が、アクシズを押し返す、まるで本当に夢を見ているかのように。だが、それは間違いなく現実で、その温もりは確かに感じられる。

「カカサ」

それは、クロノードの声だった。

「なんだい？」

「終わったんだな……これで、戦いは……」

「……ああ。もう、戦う必要はないよ。こんなにも、人の意志が感じられるんだから。

……悪くないものだね、人の意志ってさ」

「そうだな。……その意思が、未来を切り開いていくんだ。人が、人だけが未来を作れる」

宇宙に静かに漂いながら、俺たちはただ虹の光を見つめ続けていた。

目を開ければ、そこには、俺一人。

ただ一人で廃れた喫茶店で佇むだけ。

立ち上がり、店を出ようとした瞬間

『どこに行くんだ？行くにしても早く帰って来いよ？—お前の帰り、俺は待ってるからな！』

「つ……!?!クロノ……………」

振り向いても、そこには誰もいなかった。

俺はふつと笑った後

「なるべく早く帰るさ」

そう呟いて店を後にした。

店を出てしばらく歩いていると、小さなベンチが目に入る。

丁度いい、少しだけ休憩しよう。

俺はベンチに腰掛け、一息つく。

地面を見つめ、考え事をしていた時だった。

「隣、いいですか？」

見上げると、スーツ姿の男性が俺の前へ立っていて、こちらにそう問いかけてくる。

見た目からして恐らく20代。

俺は黙ってうなづく。

男は隣に腰かけると、小さい紙袋を取り出し、袋の中からパンを取り出してこちらへ

差し出してくる。

「良かったら、どうぞ」

「あ……いや、俺は……」

断るのも申し訳なく感じて、俺はパンを受け取る。

男はもう一つ袋からパンを取り出し一口。

すると、大きなリアクションを取りながら

「うまいなあ……!!こんな美味しいパン食べたの久々だ!!」

なんて言っている。

俺も恐る恐るパンを一口。

美味しさだけではない、どこかで食べたことのある懐かしさを感じて

「……うまいな……」

言葉が漏れ出していた。

すると、男は

「ですよね、一人より二人で一緒に食べたほうが美味しく感じるものなんですよ」

「……そうだな。……アンタ、こんなところへ何しに？」

「ああ、私はこの町を維持、修復を目的として働いている、いわゆるボランティアでここに」

「ボランティア……か」

「ええ。……ここで、この場所で食べたパンの味が、一生忘れられないんです」

「そんなに美味しかったのか」

「はい。……一人より二人と、教えてくれた人がいたんですよ」

男はニツコリと笑って、パンをかじった。

「そうかい。……」

「漠然としてますけど、必死に努力していれば、きっと誰かが見ていてくれて、それに賛同してくれる人もいる。だから、今はこうして一人でも直そうとしてるんですよ」

「……このベンチとかかい？」

「はい。自作なんですけど、結構座り心地いいでしょう？自分の出来るところから始めようと思って」

「立派だな」

男は首を横に振り

「いえ、私はまだまだですよ。言葉だけで、叶えられてないことが沢山あるんですから」

「それでも、やらないよりはよっぽど立派だ」

「それでしようか」

「そうさ。……パン、ありがとうな。そろそろ行くよ」

「気にしないでください。また、この町に来てくださいね！」

「……ああ」

何故か初めて会った気がしない男と別れ、俺は歩き出す。

この世界で俺がすべきこと、少しだけ分かった気がする。

墓へと戻るころには、既に外は真つ黒な世界へと姿を遂げ、それを優しく照らす月が佇むのみであった。

墓の前へ立ち、静かに見つめる。

「……なあ、クロノードよ、俺は……次に何をすればいいんだろうな。お前が消えてから、時々分からなくなる。……お前の意志を背負って行こうとしても……」

俯くと、涙が零れそうになった。

友を失うことが、これほどまでに悲しく、俺の世界を変えるとは思わなかった。何もなかった俺に、唯一あったものを失って気づく、虚しい気持ち。

「……俺は……これからどうすればいい？教えてくれ、クロノード」

だが、答えは返ってこない。分かっている。……それでも……

空は、満月が輝いていた。

「どうすれば……か。そんなもの、自分で考えればいい」

「…!?クロノード…!?」

振り向くと、大きな木の影に紛れ、人の姿。だが、顔までは見えない。だが、声は……この声は……。

近づこうとすると

「来るな。お前はまだ……この世界でやることがあるはずだ」

「何……。唯一の友を失った世界で何を……!」

「それは俺には分からない。だが、一つだけ言えるのはお前を必要とする場所があつて、そして、お前を必要とする人が居る」

「俺を……必要とする……?!」

「そうだ。誰かが、お前を必要としているんだ。昔……俺がそうだったように」

「……………」

「だから、お前が来るのはまだ早い。……お前も、アイツと同じで見届ける義務がある」
「何を……」

「この世界を。この時代まで生き残ったお前達は、これまでに消えていった人々のために、時代を見届けなければならぬ」

「アイツは、『戦いの果て』を見届けようとしている。お前も、これからの時代を見届けていってほしい。どんな形でも構わない。それが、死んだ者への贖罪^{しほぎ}」

「……………分かんねえよ。未来の事なんかさ。俺は…今を……………この瞬間を苦しんでいるんだ」

「そうかもな。……………それなら、今までお前は、どうして俺に従ってきた。ただ単純に友だったからか。……………違うだろ」

「俺は——」

「少なくとも、俺はお前といて、コイツとなら世界さえも変えられると本当に信じていたぞ」

「……………!」

「俺にそう信じさせてくれる何かを、お前は持つてる。強化人間でも、ニュータイプでもない。人間としての純粋な何かを」

影はゆつくりとこちらへ歩み寄り、男の姿が現れる。

「そりゃ、褒めてるのかい?」

「当たり前だろ、相棒」

クロノードは拳を軽く前へ突き出す。

俺も合わせるようにクロノードの拳へと拳を突き出した。

どうして、何故……………聞こうと思えば聞けたかもしれない。だが、それは野暮というもの。

「頼むぜ、相棒。俺の代わりに、お前が見届けてほしい。この世界の行く末を」

「……やってみるさ。俺のできるところまで」

「ああ。……それならもう安心だ。またな」

クロノードは背を向け、木のほうへ歩き始める。

ふと何かを思い出したかのように、そうだと言つて彼は

「……ルナ、任せたぞ」

それつきり、声は聞こえる事は無かった。

「……ああ」

俺は静かに頷いた。

クロノード君、俺に出来る事があるかは分からない。分からないがやってみようじゃないか。

君が言う俺を必要とする場所と人、見つけてやろうじゃないか。

俺の覚悟は、彼が死んだあの日から変わってなかった事に、今更気が付いた。

きつと、アイツに励ましてもらいたかっただけなんだろう。

……やるぞ、俺は。

この世界を照らす光、全ての人の灯台になれる場所を作ろう。

俺は墓に向き直り

「……俺は、俺が〔時代を見届けたと思える時〕まで、ここには戻らない。後は、一人で大丈夫だ。お互い達者でな」

背を向け、軽く手を振る。

暗い夜道を、男は静かに歩み始めた。

「あーおかえり！カカサおじちゃん！」

家の扉を開くや否や、ルナがお出迎えと共にそんな言葉を言った。

「誰がおじちゃんだ!!僕あまだ……いや、おじさんだな」

流石にもう弁明できる年じゃない。

「おや、珍しくボケないな。頭でも打ったか？」

フィアが食器を洗いながら言う。

俺は肩を竦めて

「まさか。ちよつと弁明するのが厳しいとか思っただけよ」

「そうか」

ルナはニコニコと笑いながら問いかける。

「ねえねえ、どこに行ってたの？」

「ああ、考え事しながら散歩してたんだよ」

「へー。数日戻ってこなかったから心配してた！どこもケガしてない？」

ちよつとだけからかってやろうと思って、腹を抑えて叫ぶ。

「アイタタタ!!は、腹があ……!!」

「か、カカサおじちゃん!？」

「痛い、イタイヨー……」

あたふたするルナの姿を見て、少しだけ満足した。ここらへんでやめようかと思った時。

ルナは静かに俺の腹を撫で

「痛いの痛いのとんでけー!」

「……………ルナ……」

そして、俺の顔を見てにっこりと笑いながら

「痛いの無くなった？」

そう言った。

「あ、ああ……。全然痛くないよ。ありがとう、ルナ」

あの日から、ルナは人が変わったかのように勉強し、本気で医者を目指している。

学校へ行かせてあげたいが、あいにくと近くに学校がない。俺やファイアはそれほど勉強が出来るわけではない。

だから、ルナには苦しい思いをさせているとは思う。

俺はルナを抱きしめ、頭を撫でる。

「カカサおじちゃん……?」

「ルナ……、おじちゃん決めたよ。ルナや子供たちのために学校を作る」

「ほんと!? 嬉しい!!」

「ああ……。時間は掛かるが、絶対に作って、そこで勉強させてやるから、今のまま頑張ってくれ」

「うん! 私、パパのためにも早くお医者さんになるんだ! それでね、パパの病気を治すの!」

「……ああ」

この世界には、俺が知らない場所や人が居る。

だが、友は言った。俺を必要とする場所、人が居ると。

こんなにも間近に、俺を必要とする人が居た。

なら、目を背けるわけにはいかない。

【世界を照らす灯台のような場所】を作る。

そして、この世界に住む子供たちや、まだ見ぬ未来の子供たちのために…なによりルナのために学校を作ろう。

戦いではなく、人としての世界を、俺が見届ける。

だから……安心してくれよ、相棒。

この先、どんな世界になろうとも、それを見届けよう。そして、俺が出来る範囲で変えていく。

それが、友を失った世界で、俺が見つけた最善だ。

外伝 完

外伝：Episode of Fear

夢を見ていた。

時には悲しい夢もあつた。大切な人の命が消えていく夢……。

手を伸ばしても、届かない。

大切な人を救うことすらできずに見つめるだけ。

支えなければならぬ場所が沢山あつたのに――私は……

だが、それでも彼らは乗り越え、辿り着いた。

私が最後に見た夢、いや、目覚める前に見えた景色は、宇宙で輝いている虹。

クロノードやカカサ、ムゲンたちがその虹を静かに見つめている姿。

そんな景色が見えたんだ。

夢から現実へ引き戻されていく。

ゆつくりと目を開くと、そこは病室だった。

窓のほうを見ると、外の広場で遊ぶ子供たちの姿が見える。

大きく深呼吸し、頬をつねってみる。

「つ……」

痛かった。つまり、現実……なのか。

本当に目が覚めたのか。

丁度、私の様子を見ようと医師が部屋に入ってきた時のことだった。

医師と目が合う。

医師は目をパチパチとさせ、少し驚いている様子だった。

それから首を横に振った後

「フィアさん、わかりますか？」

「……………」

声を出そうとしても、出ない。

仕方ないので小さく頷いて見せた。

すると医師は

「それは良かった！まさか目が覚めるなんて思いませんでしたよ！さっそくご家族の方に連絡をしますね！」

そう言つて、ニコニコと笑いながら医師は病室を後にした。

私自身、本当に自分が目を覚ますとは思つてもみなかった。

本当はまだ眠っていて、これは夢なのかもしれない。

でも、つねった頬は痛かった。

私は……どれくらい眠っていたのだろう。

テーブルの小さいカレンダーを見ると、【U・C・0093・3・14】と書いてあった。

6年もの間眠り続けていたのか。どうりで医師が随分と驚いたわけだ。

カレンダーの横に置いてある古ぼけた写真を手に取る。

エウーゴに全員が集まった時の写真だ。

皆元気にしているだろうか。

……いなくなったりしていいのだろうか。

しばらくして、病室の前が騒がしくなった。その中には聞いたことのある声も混ざっていて、すぐに誰だか理解することが出来た。

それから扉が開く音の後、こちらへと向かってくる足音。

革靴独特の足音、一步一步の足取りが緊張でうまく動いていない。

こういう時、変に緊張する奴を、私は一人しか知らない。

「……この足音は……。…ああ、随分と懐かしい。やっぱりお前が一番最初に来てくれると思っていたよ、クロノード」

振り向くと、彼は驚くわけでもなく、私の顔を見るや否や抱きしめてきた。

少しだけ……驚いたぞ。

「……随分と大胆だな、クロノード。ふふ、私は嬉しいよ」

驚き以上に、嬉しかった。また、クロノードに抱きしめてもらえるなんて思いもしなかったから。

「お前に、お前に会えることを……何度夢見たことか……！ やつと……やつと会えた！ フィア!!!」

クロノードは泣きそうな声で言った。でも……それは私も同じ。会いたかった。

「ああ……私も会いたかった。お前に抱きしめてもらいたかった。……久しいな、クロノード」

お互いに顔を見合う。彼は、どこか疲れたような顔をしていて、なんというか……【何かの決意を固めている】ような雰囲気を感じた。

会いに来てくれたのはクロノードだけでは無かった。

クロノードが扉を開くと、彼がよく履いていた靴の音。

……そうか、彼も来てくれたのか。

「あ………あ………」

まるで幽霊でも見ているかのような声を上げるその主は、どれほど私との再会を望んでくれたのだろう。

「……おや、その声は」

短めに切り揃えた黒髪に、決意を秘めた瞳、かつて私の胸を借りて泣いた青年とは思えないほど成長している。

私は、彼に微笑みながら

「……ムゲン」

すると、ムゲンはゆっくりと口を開く。

「……ファイア……さん……」

ムゲンは私の近くへと寄ると笑って見せる。

そんな彼の頭にゆっくりと手を乗せ、撫でながら

「見えたぞ、宇宙に輝く虹が。……お前は最高の弟だ。……ありがとう、ムゲン」

夢の中からでも伝わった、温かい光。

これが、人の意志ならば、私は信じたい。

いいや、信じさせてくれたのは、今日の前にいる青年。

「……どういたしまして、姉さん！」

涙を流しながら、ムゲンは笑った。

あの約束から6年。ここにいる彼らは、どれほど辛い思いをしてきたのか。

私は、そんな彼らに何をしてあげられる？

ムゲンは涙を拭いて、後ろのほうに手招きをする。
そして、ムゲンの前へ少女が歩いてくる。

「ルナちゃん、やっと、やっと君に会わせてあげられる…。君のお母さんを」

【ルナ】その名を、忘れた日は無い。そうか……。もう9才か。随分寂しい思いをさせただろう。

「さあルナ、覚えているか？ルナの母さんだ」

クロノードは微笑みながらルナに問いかける。

ルナは大きく頷いて

「うん!!ママだ!!!」

私はルナを抱きしめた。

「ああ……。ルナ……。こんなに大きくなっただな……。こんなに……。こんなにも……。!!私は嬉しいよ」

嬉しかった、何事もなく成長してくれていることが、こんなにも嬉しい事なんて思わなかった。

親として、してあげられなかったことが沢山あるからこそ、余計にそう思えた。

もう……。絶対に一人にしないから。

お母さんが、守るから。

ルナは幸せそうな顔で目を瞑っている。

そんな我が子を見ているだけで、嬉しさが込み上げてくる。

黒い髪で、目元がクロノードそっくりな細い目。そうか、クロノードに似たか。てつきり私に似てくれるかと思ったが。

それから数日後、私は晴れて病院を退院し、家へと帰れることになった。

家は病院の近くで、いつでもお見舞いに行けるようにとカカサとクロノードで借りたそうだ。

……本当に、彼らには迷惑をかけっぱなしだな。

これからは返していかないといけない。

そう思っていた矢先の事。

カカサに呼び出され、その話を聞いた時、世界が止まった。

「……な、なんて……言った……？」

カカサは俯きながら、もう一度言う。

「クロノードには……もう時間が無い。…強化人間にされた時の副作用で」

「……そんな……」

やっと目が覚めたのに、やっと……会えたのに……。

「…俺にも……どうしようもないんだ。…本当だったら、記憶も無くなったまま、彼は……」

「そう、なのか……」

「ああ。……あの虹は、本当に奇跡を起こしたんだ。クロノードの記憶を戻し、ファイアを目覚めさせた」

「……私に……出来る事は無いのか」

「それは、俺には分からない。……でも、その中で最善を選んでいくしかない……。彼のために、どうするべきかを選ばないといけない」

「…悲しい…事だな。せっかく皆元通りになっただはずなのに」

カカサは静かに首を横に振り

「全部が全部元通りにはなっちゃいない。悲しいけど、時代は進むんだよ」

「そう、だな……。どうして、こんな道しか進めなかったんだろうな」

「それが……俺たちが決めた道だから。アイツについていくと決めたあの日から、俺はアイツのために戦った。それは今でも変わらない」

「友として、最善を尽くすだけだ」

「……そう、か……」

彼の言葉を受け止めるには、さすがに時間が掛かった。

クロノードが死ぬ。その事実を受け入れるなんて…出来るわけがない。

彼は…受け止めているのだろうか。

苦しくないのだろうか。

私に…私に何が出来…？

家に帰宅した時には、既に外は暗く、辺りを真っ黒に染め上げた夜が訪れていた。

見るものすべてが真新しいというわけではないが、6年ぶりに目覚めて、色々なところを回っていたから随分と時間が掛かってしまった。

家の扉を開くと、美味しそうな料理の匂いが鼻をくすぐった。

まさか、クロノードが…？

考え込んでいると、クロノードが肩を竦めながら

「…俺じゃないさ。作ったのは、ルナだ」

「何…ルナは料理まで…？」

「ああ。…リナから教わったそうさ。まったく、見ないうちにどんどん成長していくんだ…」

本当は私が教えてあげなければならぬはずだったのに、ルナには何一つ親としてしてあげられていない。

……でも、それでも嬉しかった。

あの子がこんなにも成長していることが。

「あ、ママ！おかえりっ！」

ルナは私をみつけると、ニコニコと笑いながら大きく手を振る。返すように私も小さく手を振った。

サイズぴったりの赤いエプロンを付けて、頬にちよつとだけ料理がひつついている。

「ただいま、ルナ。……いい匂いだ、何を作ったんだ？」

「えっとね！もうすぐできるから、座って待っててね！それからの楽しみ！」

そう言つてルナは再びキッチンへと姿を消す。

言われた通り私たちはテーブルに腰かけて、彼女の料理を待つ事にした。

……手伝つても良かったが、彼女が頑張っている姿を、応援するだけでもいいと思えたから、今回は一人でやらせてみた。

私が教えられることも、あの子に教えていかなければな。

「……本当に、見ないうちに逞しくなつたものだ……」

クロノードが呟く。私は小さく笑つた後

「……子供の成長は、早いものだな」

そうして、お互いに顔を見合い笑つた。

「できたよー！」

ルナが料理が乗ったお皿をもってキッチンから出てくる。

テーブルに置かれた料理は、オムレツだった。

それを見たクロノードは、おお、と声を上げる。

「どうした？クロノード」

「…いいや。懐かしいな、オムレツなんて、ルナに食べさせた時ぶりだ」

するとルナは目をキラキラとさせながら言った。

「そうだよ！パパが作ってくれたオムレツが美味しかったから、私、リナからオムレツの作り方教えてもらったの！パパとママにオムレツを食べさせたくて！」

「……………」

クロノードは黙ってルナを抱き上げ、頭を撫でる。

「凄いで、ルナ。良くできたな！」

その表情は、クロノードという男の顔ではなく、間違いなくルナの父親の顔。

「えへへ！皆で食べよー！」

ルナはクロノードの手からするりと抜け、椅子に座ってナイフとフォークを持った。

「食べようか、クロノード」

「ああ」

こうして、6年ぶりに家族だけの夕食の時間が訪れた。

ルナの話や、クロノードから聞いた今までの話、他愛のない話もした。

幸せだった。

こうしてルナとクロノードと共にまた話すことが出来て、夕食を食べることが出来る
ことが。

これだけを、この幸せのためなら、他に何もいらぬ。

そう思えるほどに。

外に出ると、綺麗な三日月。それを眺めるクロノードの姿。

この光景を見るのも何度目になるだろうか。

クロノードにバレないようにひっそりと横に並ぶ。

いくらなんでも集中しすぎだ。…まあ、そういうところも嫌いじゃないけれど。

「……綺麗だ」

彼は無意識で言ったのだろう。少しからかってみようかな。そう思っただけは口を開く。

「おや、それは私に言っているのか？」

「うおっ!? フィア!？」

とても驚いているクロノード。やはりこういうところは可愛くて仕方がない。

「ふふ、お前は相変わらず可愛いな。……でも確かに……この空は綺麗だな」

夜空を静かに見守る三日月。全てを優しく抱く母のような、月は平等に私たちを照らす。

沈黙は、苦とは思わなかった。

彼がそばにいただけで、何もいらぬ。

私は……

「なあ、クロノード」

「なんだ？」

「……ルナも随分と成長したな……。お前も、ムゲンも、成長した。……私は嬉しいよ」

「何を言うんだ、俺はもう限界さ……。だから、せめてルナといれるだけいてあげたい」

【限界】彼の口から言われると、余計に悲しくなる。事実を……受け入れなければ。

「……カカサから聞いた。副作用だったか……」

「ああ。強化人間という存在の宿命さ。……でも、後悔も、悲しさもない。ムゲンと決着をつけられた。それに……」

「俺の存在を記憶し続けてくれる人たちがいる事を知ったから」

その微笑みは、純粹だった。……だが、クロノードを失った私はどうすればいい？

「……悲しい…ものだな…。愛する人が死んでしまうというのに、何もしてあげられないなんて」

「いいや、ファイアは俺に沢山の事をしてくれた。それに、俺を愛してくれたじゃないか。それで…いいんだよ」

「……クロノード…」

「時代は嫌でも進んでいく。…けれど、それを乗り越えて生きていくしかないんだ。ファイア、どうかルナを頼む」

「…ああ。分かっているとも」

その瞳は、決意。……死への。こんな悲しい決意があるものか。

私は目を覆い上を向く。涙を…堪えなければ。泣いたら…ダメなんだ。

するとクロノードは突然、私を抱きしめてきた。

「く、クロノード!?!なにを……」

「悲しい時くらい、俺がいるんだから頼ったらいいんだ。そうだろ?」

驚き以上に、悲しさが込み上げてきて。涙が零れてくる。

そうやって優しくしてくれる私の大切な夫はもうすぐ……。

「……クロノード……。うっ……。うう……。!!死なないでくれ……。私は……。やっとお前の

所へ帰ってこれたのに……」

「お前が居なくなるなんて嫌だ……！私を……一人にしないでくれ……」

情けない。クロノードが苦しんでいるのに何もしてあげられなかったなんて。

「……俺だって、お前と離れるのは辛いさ。けれど、仕方がないじゃないか。……今は少しでもフィアを抱きしめていたい……そうすれば、君を感じれるから」

「……ああ……」

人の痛みなんか、分かりはしない。

私は、クロノードになってあげることができないから。

でも、それでも……愛する人を支えたい。

側にいるだけで、それだけでも……。

せめて、私にしかできない事を。

月は平等に世界を照らす。

悲しみも、喜びも、ただ静かに見守る。

一目見た時、まるで天国にでもいるんじゃないかと錯覚した。

野原一面に咲く花は、風に揺られ楽しそうに踊り、時折笑っているようにも見える。

今日はここでムゲンの娘であるアウロラの誕生日パーティーを開くことになった。

アウロラはどつちかというとりなに似ている。きっと将来美人になるだろう。

アウロラとルナは、この草原を楽しそうに走り回っている。それを幸せそうに眺めるムゲンとクロノード。

カカサは近くで仰向けになって昼寝をしていた。
私とリナで昼食の弁当を広げる。

「美味しそうですね」

穏やかなその声は、ムゲンをどれほど救ってきたのだろうか。

「…そうだな。美味しそうだ」

朝早くから起きて準備をしたおかげか、いつも以上に美味しそうに見える料理の数々。

これだけあれば、皆満足してくれるだろう。

「あの、フィアさん」

リナが真剣な表情で私を見つめる。

「どうした…?」

「…あなたは、クロノードさんを…恨んだりとかつて…あるんですか?」

彼女らしからぬその言葉、私は数拍開けた後口を開く。

「…覚えてはいないが、たぶん無いだろうな」

「そう、ですか……」

俯くりナ。私は軽く頭を撫でてやる。

「フィアさん……?」

「まったく、お前もムゲンに似てきたな。顔に出てるぞ」

「あ………」

「私はクロノードを恨んだことは無い。だが、仮に恨んだとしても、きつと別れる事は無い」

「どうして………」

うーん、と唸った後私は言葉を続ける。

「恨む以上に、クロノードを愛しているからだ」

「クロノードさんを……」

小さく頷き言葉を続けた。

「人間、人を恨むっていう時がある。それが、兄弟でも、家族でもそうだろう。けど、それで殺してやる、なんて思わないはずだ。少なくとも私は思わない」

「だって、それが人間じゃないか。相手が恨まれる行動をしたとしても、もしかしたら私も自身も恨まれているかもしれない。そう思えば、私は仕方のない事だと思うんだ」

「……リナ、人には、良い所と悪い所がある。その二つを知り、お互いに妥協して共生していくこと、それは難しいよ。：難しいが、やっていかなければならない」

「人は、一人では生きていけないから」

「ええ……。でも……。私はムゲンを許せない。…やっぱり、許せないんです」

私は頷きながら彼女の言葉を聞く。

「トクナガさんが彼の手で殺された。戦争だから仕方がないって、きつと言う人がいますよ。けど、戦争だから、大切な人が死んで当たり前なんですか……」

「だから……。私は……。せめて、ムゲンが彼を殺しさえしなければ、私はもつと楽に……」

「リナ」

私はリナの言葉を遮るように肩に手を置き言った。

「許さなくてもいい、許す必要もない。だが一つだけ覚えていてほしい」

「私はその場所になかったから、なんて声をかけてあげればいいかは分からない。だけれど、それはきつとムゲンにしか出来なかったんだと思うよ」

「……そんな……」

「お前を責めるつもりはない。きつと、それなら自分でとお前は思うだろう。ムゲンは、お前だけにはトクナガを殺してほしくなかったんだと思うんだ」

「……そんな……勝手にすよ……」

「ああ。勝手でもあるが、お前への気遣いだとも思えるよ」

「わたしへの……?」

泣きそうなりナの頬を優しく撫で、言葉を続ける。

「ああ、お前はムゲンの光だ。そんな光を、ムゲンは汚したくなかったんだろう。…背負う覚悟、とでも言うのだろうか。私には今の彼からそう感じたよ」

今の彼は、もう私では手の届かないほど大きな背中に見えた。

きつと、背負うものの大きさ、数が増えているから。それだけ、沢山のモノを引き継いで生きているからなんだろう。

そう、だからこそ

「お前に恨まれてでも、自らの手を汚したんだと思う」

「……………」

「ムゲンを庇うつもりはない。でも、きつとそれだけだったんだ」

「そんな理由で……。それだったら、本当にバカですよね…あの人は…」

瞳から零れる涙を拭きながら笑うリナ。

「本当にバカなんだから……。私が支えなきゃ…」

私は頷いて微笑んで見せる。

「そうさ、ムゲンの心を癒すことが出来るのはリナだけだ。何故なら、お前はアイツの妻だから、いいや、アイツを一番理解しているからだ」

「……はい！」

神がいるとするのなら、それはあまりにも非情だ。
クロノードは……もういない。

動かなくなった夫の手を掴みながら、泣く事しか……出来なかった。

「クロノード………。ああ……!!くっ……うう……!!!」

私を愛してくれた人が、大切な人が消えた。

「………疲れたんだよな、クロノード」

眠るように佇むその男性の顔は、穏やかだった。

この世に後悔なんてない。そんな顔。

大切な人と、かけがえのない友人たちに見送られて、何一つ悲しくなかったと。

「そんなの……！お前の勝手じゃないか……！私は……！お前が居ない世界でどうすればいいんだよ!!」

「私のほうこそ、お前が居なければ何もできないんだ……弱い……女なんだよ……。クロノード……」

何が、何がルナを頼むだ。

当然じゃないか、お前に似た娘を……お前の娘を守らないわけない。

「最期まで……他人の心配ばかりして……。本当に……お前はバカな奴だよ……」

クロノードの死から数日後。

私は軍人であることを辞め、日払いの仕事をこなす日々が続いていた。

お金はそれほどではないが、軍人でない生活というのもまた面白いもので、不思議と苦ではなかった。

家に帰ると、料理のいい匂いが鼻をくすぐる。

「あーママ……じゃなくてお母さん、お帰り！」

「ああ。ただいま」

荷物を地面に置いて椅子に腰かけながら言う。

「今日は、どんなものを作っているんだ？お母さんも手伝う？」

するとルナは首を横に振って

「これは私だけで作る！お母さんは座って待ってて！」

「……そうか。分かったよ」

静かに待っていると

『……本当に、見ないうちに逞しくなったものだ……』

その声に思わず立ち上がる。

「クロノード…!?!」

しかし、どこを見てもその姿は無かった。

「どうしたの?」

ルナの声ではつとして、首を横に振る。

「いいや、何でもない」

「ふーん…。まあいいや、出来たよ!」

テーブルに置かれたオムレツ。それは、あの時食べたものとそのまんま。

「……………これは……」

「オムレツ! ルナ、これ大好きなんだ! お父さんとお母さんが美味しそうに食べてくれたオムレツが!」

ルナは幸せそうに笑い、椅子に腰かけてナイフとフォークを持った。

「……………そうか。じゃあ、食べようか」

「うん!」

ナイフでオムレツを切って、一口。

美味しいだけでなく、その……………何かで胸が詰まる。

その様子を見てルナは首を傾げながら

「どうしたの…? オムレツ美味しくなかった……………?」

「あ、いや……違うんだ。なんだか、胸が苦しくてな。……な、なんで……だろうな……」
口食べるたびに……涙が止まらないんだよ」

『美味しいな、これ』

そう言う夫の姿が、見えた気がして。

「……お母さん」

「な、なんだ……?」

涙を拭きながら聞き返すと、ルナはニツコリと笑って

「泣いていいんだよ、悲しい時は。それでね、泣いた後、笑えるなら、泣いたっていいってムゲンが言ってた」

「……」

きつと、誰かに言っただけでほしかったんだ。そんな言葉を。

そうすれば、きつと楽になったんだ。

まさか娘から言われるとは思わなかったが、だが……嬉しかった。

クロノードに会いたい。

その気持ちが涙となって流れていく。

すると、ルナは椅子を立ち上がり、私の側へ来ると、私を抱きしめてくれた。

「ぎゅーっするとね、皆悲しいのも分かち合えるんだって、リナは言ってたよ。……私も

つらい時、アウロラとぎゅーつてするんだ！」

「……ああ……!!」

私はルナを抱きしめ返し、涙を流した。

その墓の場所は、かつて戦場で互いに敵同士であった男との【始まりの場所】だとう。

それを知るものは、いや、おそらくほとんどが知らぬまま時代は過ぎていくだろう。私達は忘れてはならない。

彼らが戦い、そして消えていった命の事を。

誰かが見届ける事で、人は、人というものを残していける。

それが……人間だ。

「クロノード」

墓に問いかける。返ってこない事を知っていても、私は言う。

「……私は、あの子を守って見せる。……お前とは違う形で守って見せるから……」

「見ていてくれ」

背を向け、歩き出そうとした時

「ああ、見ているさ。お前も、ルナも」

「…っ！クロノー……………」

振り返るが、そこには誰もいない。

ただ、その声だけが耳から離れない。

神がいるのなら、一つだけ言いたいことがある。

少しだけ、世界と向き合う覚悟が出来た、と。

外伝 完

外伝：Episode of Rina 2

戦いは、これで終わった。

宇宙に光る虹を見た時、私は確かにそう思えて

いるはずのない、トクナガさんが隣にいるように感じて

やつと、心から安堵することが出来た。

その虹は、私の心に熱をくれた。

かつて感じたことのある熱を

「……………温かい……」

私が今すべきこと、それは、現実いまを生きる事。

後ろを向いているだけではいけない事は分かっている。

……それでも

私には納得が出来なかった、親の代わりを務めてくれた人を、愛する人が殺すなんてこと……あっていいはずがない。

いいや、たぶん、そう思いたくないだけなのかもしれない。

あの光景が、お母さんを思い出させたからなのかもしれない。

だから、信じる事が出来ない、納得がいかないのかも……
考えたところで答えなんかでなくて……

今はそれよりも、ただあの綺麗な虹をひたすらに見ていたかった。

この現象が何によってかはわからない。けれど、確かに一つだけ分かるのは
ここにいる全ての人が地球を守りたいと願っていたこと。

そして、ガンダムが【意思】に応えるように

私には、そう見えた。

かつて悪魔と呼ばれた存在が、今は地球を守っている。ジオンからすれば皮肉かもしれない。

その一射は、最善だったと、人は言うだろう。

その一射で散った命は、戦争だから仕方ないで片付けられるのだろう。

そんなのが……そんな言葉で許される世界は、狂っている。

私は、また目の前で大切な人を失った。

「……………あ……………う、そ……………!!」

目の前に残る残骸を見つめながら、言葉すらまともに出てこなかった。
かつての記憶、母を殺めた記憶が瞬時に蘇ってくる。

お腹から引き抜いたナイフの感覚。

母の目から輝きが消えていく姿。

そのどれもを思いださせた。

「いい、いや……うそだよ……」

認めたくない現実。

全てを捨てて、全てから目を背けたい。

引き金を引いたそのジエガンは、私が愛していた男性。

だから、なおさら信じたくなかった。

涙で霞む目の前、意識が遠のいていく。

その刹那、声が聞こえた。

『リナ、お前は……正しいんだ。その心が世界を変える。……ムゲンを、恨むなよ』

「…………トク………ナガ………さん………」

伸びた糸がぷつんと切れるように、私の意識は深くへと落ちた。

深く、暗い。

その世界で、ただあの光景が

トクナガさんがムゲンに撃たれるその光景が繰り返される。

手を伸ばしても、届かない。

「や……………め……………て……………」

叫ぼうとも、叫べない。

誰も、この苦しみから助けてはくれない。

自分に絶望するしかなかった。

あまりにも無力で、情けなくて

そして、逃げるように私は…選んでしまった。

最悪の選択を。本心がそうでなくとも、その選択へ進んでしまった。

気づけば、私の手には銃が握られていた。

私は、迷わずに、彼へ引き金を引いた。

「っ……!!」

その瞬間、現実へと戻される。

涙が自然と零れて止まらない。

悲しくて、苦しくて……誰かに救ってほしくて。

扉がノックされる。

返事をする気も起きなかった。

扉が開くと、聞きなれた靴の音

目も合わせたくない。

「……リナ……」

「何……っ……!!」

許せなかった、親のような存在を殺した彼を。でも、彼は……彼は……!!

「……すまなか―」

「言わないで!!!」

彼は……私を愛してくれた人で、私が愛した人……私はどうすれば……？

『ごめん』、『すまなかつた』そう言われたら、きつと許してしまう。

ああ……情けない。

「言われたら……私はあなたを憎めない……許しちゃうから……」

「……お前は……俺を殺す理由がある。だから、お前が俺を殺したって、俺はお前を恨みませんかしない」

その言葉は追い打ちのように私に突き刺さった。

「っ……………!」

「だが……分かってほしいんだ。俺は、お前に引き金を引いてほしくは無かつた」

「だからあなたが撃つたの!?!わ、私の大切な人を……!!あなたが!!」

「……ああ」

彼は表情一つ変えずに頷いた。まるで、俺は悪くないというような顔で。

「!!!」

私は彼の胸ぐらを掴み睨む。今までに一度だって、こんなことをした記憶は無いのに。

「……どうすることも……出来なかった。心で最善だったと言い続けたって、それは最善なんかじゃない」

「あ、あなたが……!!トクナガさんを……!!くっ……うう……!!」

歯を思い切り食いしぼる。苦しい……。辛い……。こんなことが……!!

「今こうして、君の言葉を、目を見て……なおさらそう思ったよ」

彼の悲しい声が、表情が……。ただ、虚しくなるばかりで。

「私は……無力だ……。こんな……。恨むことしか出来ないなんて……」

「いいや、それでいいんだ。君は……。正しい」

正しい……。?こんな狂った世界に正しさなんか無い。

「正しい!?正しいわけじゃないじゃない!!大切な家族を、最愛の人が殺すなんて、正しいわけじゃないじゃない!!こんな、バカげてる……」

私は、その場で崩れ、俯いた。

私があの時、トクナガさんへ引き金を引いていれば、少なくともこんなに苦しまずに済んだはず。

でも、撃てなかった……。怖かった。

怖かったんだ。家族を撃つなんて……普通じゃ在り得ないのだから。

沈黙を破るように、私は口を開いた。

「トクナガさんは……私に……『ムゲンを恨むな』って言った。……けど、無理だよ……私にとつて親のような存在だった人を討つた人を恨むなって言うほうがき……でも……」

「でも!!!あなたは私が愛した人……。そんな人を恨むなんて……私にはできないよ……私に、どうしろって言うの……?」

どうすればいいの?

今ここで彼を殺す?

そんなの……無理だよ……。

「……リナ……」

「俺は……君に引き金を引かせたくは無かった。君が引いたら、誰がアウロラを抱いてやるんだ」

「っ……………」

「そうやって、恨まれるのは俺だけでいい。君は……俺を恨み続けたっていいんだ」

「……わ、私は……!……くっ……うう……!!!」

「……すまなかつた。俺は……君を救ってあげられなかつた……」

彼を、そうまでして動かす理由……私には分からない。

仲間を殺してまで進もうとする彼が。

「……ムゲンは……どうして……」

「うん……？」

「どうして傷ついてまで戦うの……？」

「……リナやアウロラを守るためだ。皆を守りたいさ、それでも、俺の両手で出来る事なんか限られているから」

守るために……仲間さえも殺す……？

もう……分からない。

「……また、そうやって人を殺すの……」

彼は、頷いた後言った。

「……ああ……殺す。この手で守れるもののためなら……」

「……そう……。……ムゲン、私はあなたを許さない。けれど、私はあなたの妻だから、あなたを恨みたくはない……。だから……ムゲン、一つだけ約束して」

約束。……彼と約束するのも何度目だろう。こんな形での約束なんか、したくは無かったけれど。

「なんだい……？」

「トクナガさんの……いや、私の父さんのために、この戦いを終わらせて。……それで、生きて帰ってきて」

「……ああ、帰ってくる」

「帰ってきたら、一回だけ思いっきり殴らせて。……それで……気持ち晴れるかは分からないけど……」

色んな感情が混ざって、そんな言葉しか出なかった。

「……ああ」

「……私も、もう迷わないよ。私は、彼の自慢の整備兵だから……。やるべきことは決まってる」

「リナ……」

「あなたや皆が死なないように、全力で整備する。失うのはもう……嫌だから」
失うのも、失わせるのも、もう嫌だ。

誰も死なせない。

私が出来る範囲で、救って見せる。

でも、結局殴れなかった。

あんな綺麗な虹を見た後、殴れるはずもなかった。

むしろ、彼を許せた。生きて帰ってきてくれたこと、それだけで。

しかし、数日後には、そんな記憶さえも、再び悲しみで消されてしまった。

「……ムゲンなんかに分かるか!!!私、どれだけ苦しいか!!!」

私は、ムゲンを殴った。こんなに苦しいのに、辛いのに、彼は子供たちの心配ばかりで、悲しかった。

「分かりはしないさ。俺はお前じゃない、だから少しでも互いに寄り添わなきゃわからない」

「うるさい!!そんなの——」

「なら、殺せばいい。俺を」

「え……………」

それしか言葉が出なかった。違う、違うの。そういうことが言いたいわけじゃ……俺を殺して、仇を取ればいい。そんなに俺が恨めしくて苦しいなら」

彼からの刺さるような視線が。

「ち、違う……………そ、そんな……………つもりじゃ……………違うの……………ムゲン……………」

「俺は……………お前に殺されるのなら、何も後悔しない」

「や、やめて……………!わ、私が……………ムゲンを……………殺す……………?いや……………嫌……………!!」

違うの、ムゲン。私は……………私は……………!

「あ……………あ……………ごめん……………なさい……………ムゲン……………私は……………」

「り、リナ、悪かった。…君は、誰も殺さない。殺さなくていいんだよ」

「……………もう、放っておいて……………私は……………」

「リナ……」

もう、彼に顔を見せられない……。私はただ呆然と扉へと向かう。

「お、おい……。どこへ行くんだ……」

「どこでも……。いいじゃない……。私は……。もう、あなたに合わせる顔がないよ……。こんな私、貴方に見せたくなかった……。」

「そ、そんなことは――」

「もう、放っておいてよ!!!私を見ないでよ!!!」

泣きながら、家を出て、ひたすら走った。

涙を拭いても拭いても零れてくる。

「うう……。ひつく……。――」

子供のように泣いて、情けないと感じた。

でも、それでも……

助けてくれる人は、もういない。

思えば、私が悪かったのかもしれない。

ムゲンが言う通り、ずっと後ろばかり向いて、前に進もうとしなかった。

一人だと思っていただけなのかもしれない。

ずっと一人で歩いていただけ。本当はみんながいるのに。

目を背けて……。

私は、彼に何てことをしてしまったんだろう。

でも、今更家に戻るなんて……出来ない。

けれど、会いたい……。彼にもう一度だけ会いたい。

路地裏で小さくなって座り込む。

神さまがいるなら聞いてほしい。彼にもう一度だけ……会いたいの。

そのためなら、どんなに苦しくても構わないから。お願い……聞き届けてほしい。

何人かの足音。ムゲンじゃないのは理解できた。素早く立ち上がって、彼らを見る。

ガラの悪そうな3人組。

「なあ、姉ちゃん、一緒に遊ぼうぜ？」

返す言葉が見当たらない。

「……」

「何黙ってんのさ、遊ぼうぜって言うてるんだけど？」

「……」

「なんだよ、つまんねえなあ、まあでも、黙っているならオツケーって事だろ」

「じゃ、そこ座れ」

「……嫌です」

恐怖からか、声が震えているのが自分でも分かった。

「座れって言ってるのがわかんねえか!」

男は私の髪を掴んでナイフを首元へ

恐怖でもはや声すら出なかった。

「……俺の女から離れる。クズが」

その声は、確かに彼の声だった。3人組の後ろに立つ一人の男。

「ムゲン……」

「なんだよ、今良い所なんだ、邪魔すると、殺すぞ?」

ムゲンは果敢に男へ殴り掛かる。

「……殺してやる。俺の女に触れたこと、後悔させてやる」

二人を相手にムゲンは迷うことなく拳を突き出し、相手を殴り飛ばす。

「ぐ……てめえ……殺す……!!」

男たちは立ち上がり、ナイフを取り出した。

「ムゲン……!」

私は必死で叫んだ。すると、彼はふつと笑う。まるで『大丈夫』と言っているように。

ムゲンは拳を構えなおし、一人へと殴り掛かる。

殴られた反動で思い切り吹き飛ばす男。

「へっ……やるじゃねえか、じゃあ、これならどうだ」

男は、私の首元にナイフを当て、ムゲンに見せつける。

情けない、何もできないなんて。

「動けば、この女は死ぬぞ。それでも戦うか？」

「……………くっ」

「さつきはよくもやってくれたなあ？殺してやるよお！てめえなんか!!」

傷つけられていくムゲンを見つめることしか出来なくて、怖くて…………。

私に…………何が出来る…………？

ムゲンの苦しそうな顔……。見ているだけで悲しくなつて……。

そしてついに彼は地面に伏す。

「これで、トドメだなあ……!!」

私は地面に倒れる彼の前に立ちふさがる。

恐怖で声は震えていた。でも…………!

「…………彼は殺させない」

「今更邪魔だ!こいつも切り刻め!!」

「リナ…………やめ…………ろ…………逃げ…………ろ…………!」

「嫌だ!私は一步も退かないから!!」

私は、もう失うことも、失わせることも嫌だ。

だから、守る。今度こそ。

傷つけられていく身体。痛みがそこらじゅうからして、意識が飛びそうになる。

でも、それでも倒れるわけにはいかない。

愛する人を…守らなきゃ。

でも……駄目だった。

力が…入らない。

私は地面に倒れた。

「ふん。これくらいにしておくか。良かったなあ、二人仲良く死ぬるんだもんなあ」

さらに追い打ちのように私のお腹を蹴ってくる。貫かれたような痛みと共に体が吹き飛んだ。

ムゲンのほうを見ると、良かった…生きてた。それで…十分。

意識が遠のいていく。

「リナ………」

彼の言葉で、世界がハッキリとしていく。

「う………ムゲン………?」

ムゲンは私の近くまで這ってくる。私は、彼に身を預けるように体を寄せた。

「…随分探したよ……皆にも手伝ってもらってさ……」

彼は笑っていた。こんな姿になっても。あんなにひどい事を言ったのに。

「……ごめんなさい……私……」

「いいんだよ、俺も謝らなければいけない」

「あなたは謝ることなんて——」

「いいや、真剣に聞いてほしい。俺は、確かに偽善者ぶってただけなんだろう。でも、今は……単純にお前を想っている」

「……」

「俺がトクナガさんを殺した事実は変わらないけれど、それ以上に、俺はお前が好きなんだ。離れてからなおさら分かったんだ。俺には、リナしかない」

「代わりなんか無い。俺は、MSを傷つけて帰ると怒って、MSの話になると子供みたいになって、嫉妬っぽくて、卑屈になるところがあつて、でも俺の側にいてくれるリナじやなきゃダメなんだ」

嬉しくて、心が一杯になって。

私はその言葉に返すように言う。

「わ、私も……あなたと離れて……寂しかった……。怖かった。でも、今更戻れなかった

……だから……。あなたの事は許せないかもしれないけど、でも…私はムゲンの事が好き」

「ロマンチストで、偽善者ぶってて、いつもどこか上の空で、でも、いつも私を守ってくれる。そんなムゲンだからこそ好きになれた…。一人の女性として人を愛せた」

「許せないところもあるけどね、そういうところを妥協していくことで、お互いに分かり合えるんだよね……」

彼はゆっくり頷いた。

「ああ……それで……それだけでいいんだ」

ムゲンは仰向けになると

「あー………痛えなあ……。リナに殴られた頬が今になって痛む……」

「……私も……すっごい痛い……。血だらけだもんね、私達」

私も合わせるように仰向けになって言葉を返した。

「思えば、そんな姿でこんな話するもんじゃあないよな？」

こんな状況なのに、冷静に話していることがなんだか可笑しくて、思わず二人で嘖き出してしまった。

「ははは!!!」

「ふふふ……あはは!!!」

「……ねえ、ムゲン」

「何だ？」

「私、もう大丈夫だよ。もう……泣かないよ」

「たまには泣いてほしい」

「どうして？」

「俺が慰めたいからかな」

「……いつも慰めてくれてるでしょ」

「……そうだったか」

「ほんつと、あなたって人は……」

「……俺も、いつまでも引きずらないことにする。……そういうのはたまに思い出すくら

いでいいんだ」

「それでいいと思うよ、あなたらしい」

「なんだ、それ」

「ふふつ、あなたには分からない事だよ」

「……？変なりナ……」

大丈夫。もう……きつと。

綺麗だった。この前まで戦争があったとは思えないような場所。

かつて、夢で見た花畑のような場所に、私は今立っついていて

風で揺れる花、散った花びらが風に流され飛んでいく。

「綺麗……」

思わずつぶやいた。

「ああ、綺麗だな」

風になびく黒い髪。美しいその顔は、6年前とまったく変わっていない。

私達は、朝早く用意したお弁当を広げ、準備をしていた。

料理のどれもが美味しそうに見える。うん、我ながら完璧な仕上がりだ。

「美味しそうですね」

「…そうだな。美味しそうだ」

思えば、彼女はクロノードさんと喧嘩したこととか、恨んだこととかあるのだろうか。

どんなに仲が良くても、喧嘩とかはするのかな…？

気になって、私は質問してみる。

「あの、フィアさん」

「どうした…？」

「…あなたは、クロノードさんを…恨んだりとかかって…あるんですか？」

ファイアさんは少し考えた後、口を開いた。

「……覚えてはいないが、たぶん無いだろうな」

「そう、ですか……」

やっぱり……私とムゲンが可笑しいのかな？

俯いていると、ファイアさんは私の頭に手を置いた。

「ファイアさん……？」

「まったく、お前もムゲンに似てきたな。顔に出てるぞ」

「あ……」

思わず顔が赤くなる。ムゲンに似る事は嫌じゃないけど、でも顔に出るようになるのは少し恥ずかしい。

「私はクロノードを恨んだことは無い。だが、仮に恨んだとしても、きっと別れる事は無い」

「どうして……」

うーん、と唸った後ファイアさんは言葉を続ける。

「恨む以上に、クロノードを愛しているからだ」

「クロノードさんを……」

愛しているから……。その言葉には重みがあった。

6年の間離れ離れだった彼女が言うからなのだろうか。

「人間、人を恨むって言う時がある。それが、兄弟でも、家族でもそうだろう。けど、それで殺してやる、なんて思わないはずだ。少なくとも私は思わない」

「だって、それが人間じゃないか。相手が恨まれる行動をしたとしても、もしかしたら私自身も恨まれているかもしれない。そう思えば、私は仕方のない事だと思うんだ」

「……リナ、人には、良い所と悪い所がある。その二つを知り、お互いに妥協して共生していくこと、それは難しいよ。：難しいが、やっていかなければならない」

「人は、一人では生きていけないから」

「ええ……。でも……。私はムゲンを許せない。：やつぱり、許せないんです」

今でも、許せないところはある。事実は変わらないから。

「トクナガさんが彼の手で殺された。戦争だから仕方がないって、きつと言う人がいますよ。けど、戦争だから、大切な人が死んで当たり前なんですか……」

「だから……。私は……。せめて、ムゲンが彼を殺しさえしなければ、私はもつと楽に……」

「リナ」

彼女は私の言葉を遮るように肩に手を置き言った。

「許さなくてもいい、許す必要もない。だが一つだけ覚えていてほしい」

「私はその場所にいなかったから、なんて声をかけてあげればいいかは分からない。だけれど、それはきつとムゲンにしか出来なかったんだと思うよ」

「……そんな……」

「お前を責めるつもりはない。きつと、それなら自分でとお前は思うだろう。ムゲンは、お前だけにはトクナガを殺してほしくなかったんだと思うんだ」

「……そんな……勝手ですよ……」

「ああ。勝手でもあるが、お前への気遣いだとも思えるよ」

「わたしへの……?」

「気遣い……。分からないよ……。もう。」

「ああ、お前はムゲンの光だ。そんな光を、ムゲンは汚したくなかったんだろう。……背負う覚悟、とでも言うのだろうか。私には今の彼からそう感じたよ」

「お前に恨まれてでも、自らの手を汚したんだと思う」

「……………」

「ムゲンを庇うつもりはない。でも、きつとそれだけだったんだ」

「そんな理由で……。それだったら、本当にバカですよね……あの人は……」

「本当にバカなんだから……。……私が支えなきゃ……」

「そうさ、ムゲンの心を癒すことが出来るのはリナだけだ。何故なら、お前はアイツの妻

だから、いいや、アイツを一番理解しているからだ」

その微笑みが、私にとってどれほどの救いだったのかは分からない。
でも、その時確かに救われた。

「……はい！」

ある日、ムゲンの機体を整備していた時の事。

「……あれ？」

コックピットの中から一枚の「ディスク」が見つかった。

大切にしまっていたようで、ディスクに傷はついていない。

少し気になったので、私はこのディスクを調べてみる事にした。

ディスクを入れると、データが次々と読み込まれてくる。

「……このデータは……MSのOSじゃない……。でも何で機体の操作および被弾コン
トロール……？何かあるな……」

さらに調べていくと、このディスクは「AI」のデータをコピーしたものであるというのが
分かった。

そして、その名前が「Eve」ということも。

「……これ、使えるかもしれない」

私の中で、ムゲンのための機体を作り上げるためのパーツにぴったり当てはまるものがそこにあった。

「ためしにこれで……」

数時間かけて作り上げたのは、コンピュータを介してこのAIと【会話】することが出来る機能。

「よし、それじゃあ試してみよう」

「こんにちは。あなたの名前は？」

画面に問いかけると、画面に文章が並んでいく。

「ワタシハ、エヴァ。アナタハダレデスカ」

「私はリナ・ハートライト。よろしくね、エヴァ」

私は、それから沢山の事を話した。

この世界の事を、世界には楽しい事も嬉しい事もあるということ。

エヴァは楽しそうにその話を聞いて、素直に驚いたり、喜んだりしていた。

中でも、ムゲンの話をしたとき、一際質問が多かった気がする。

何かあるのかな？

「つと……出来た」

気づけば整備の暇があれば、いつもエヴァと話をしていた。

そして、やっと完成した。

MSに搭載することの可能な小型AI

と言つても、MSを操縦するとかそういうのじゃなくて、AIに【手助け】をしてもらうだけ。

後は、お話相手になつてもらえるという機能も付いている。

今までの会話も記憶も引き継いでいて、あくまでAIの役目は手助けにある。

エヴァから聞いた言葉と約束、それが私の心で決意に変わった。

「昔、ある人に言われたんだ」

エヴァは楽しそうに語りだす。

「何を？」

『自分はどうなつてもいいなんて言わないでくれ。機械でも、命は一つだけだから——人間でも機械でも関係ないさ。同じ物でも、その一つ一つは少しでも違ふところがあるから』って」

「ロマンチストな発言だね。誰が言ったの？」

「えへへー、ひ・み・つ！」

「AIが秘密なんて、面白いね、エヴァは」

「私、人間が大好きだから。機械の私を愛してくれた人が居て、守ろうとしてくれた人が居た。それにより、代えはないんだよって言ってくれた人が居たから」

「…そつか。エヴァは、もう一度戦う気はある？」

「どちらでも。それは、あなた次第だから。でも、一つだけ【約束】して」
「約束？」

「うん。…勝つために私を使わないで。負けないために、私を使って」

「負けないために……？」

「そう。人は【勝利】に固執するけど、負けたとしたって、また挑む気持ちがあったら何
度でも挑めるから」

「難しいね……」

「……簡単だよ。死ななければいいんだから」

「そう、だね……」

「昔も、こんな会話をしたのを覚えてる」

「そうなの？」

「うん。…その人は、今も生きています。勝つためじゃなく、負けないために」

「……私も、頑張るよ。エヴァ。あなたを兵器としてではなく、【サポートユニット】として作り変える」

「同じな気がする」

「ううん。戦うんじゃない。人間の気持ちを楽にさせてくれるだけでいい。後は、私が頑張るから」

「…そっか。じゃあよろしく！リナ！」

その約束から2年という年月が経ったが、それでも完成することが出来たのは、彼女との約束があつたから。

ムゲンたちが見守る中、新型のコックピットに搭載されたユニットを起動していく。小さな人間がユニットに投影されると、ムゲンははつと目を見開く。

静かに眠る彼女に私は深呼吸した後

「起きて、サポートAI、エヴァ」

外伝 完

外伝：Episode of Lily

綺麗な虹だった。

優しい温もりが、心の中で広がって……。

私は理解できた。

これが「人間の意志」なんだって。

本当に大切なものを守りたいと思う気持ちなんだと。

その場にいる全ての人が呆然とその景色を見ていて、それを止めようとするものは誰一人いなかった。

優しいその温もりをずっと感じていたくて、胸に手を当てる。

「先生……」

「リリーか……。どうした？」

先生の声は穏やかだった。初めて手を差し伸べてくれたあの日と同じ声。

きっと、あの日から私の人生は変わった。

目の前で大切な「友達」を奪われて、絶望に暮れていた私を、その手は優しく包んでくれた。

怖くないって、一人じゃないって言ってくれた。

その優しきで、言葉で救われた気がして。

でも、先生はそんなの知らないだろうけどね。

忘れてない。辛い過去も、先生との出会いも。

私には両親の記憶が無い。

居たのかもしれないけど、顔も、声も覚えてない。

今両親がどうしているのかも分からないけど、せめて、生きていてくれば、それでいいと思ってる。

両親の記憶すらない私は、物覚え付いた頃には大きい施設で暮らしていた。

私がここに来る前まで住んでいた場所。

どういふことをしていたのかは分からない。だけど、人体実験であることは確か。

私も、何度かその実験を受けさせられた。

実験に選ばれるのは決まって私と同じような子供ばかりで、実験を受けて帰ってこなかった子も沢山見てきた。

…きつと、実験の負荷に耐えられずに命を落としてしまったのかもしれない。

真相は分からないけど、私はその実験を受けて見事に帰ってこれた。

だから、大人の人たちには「適合者」って言われてたっけ。そう、かつての私には名前なんか無かった。

彼らにとって、私達の名前なんかどうでもよくて、適合者、実験番号で呼ばれていたの覚えている。

実験で生き残ったのは私だけじゃなくて、もう一人いた。

それが、私の人生初めての「友達」。彼も、大切な家族を失ってこの施設に入れられたらしい。

「言うことを聞け！ 適合者!!」

「……………!!」

あれは、別の子に暴力を振るう研究者を止めるために、研究者の前へ立ちふさがった時。

暴力を振るわれ、怖くて涙が出そうだった時、彼は

「……………やめろよ!!」

「ああ？ お前、俺に何て言った!？」

「ぐっ……………!!」

研究者の拳で、その少年は呆気なく吹っ飛ぶ。

「……ちっ。適合者を虐めるのがバレると面倒だ。てめえら、喋るんじゃねえぞ!!」

終始イラつきながら研究者は部屋から出て行った。

私は吹き飛んだ少年の近くへ

少年は地面にうずくまって、目を瞑っている。

怖かった。人と話した事なんか無くて、話したらまた殴られるかもしれないと思うと、怖くて声が出ない。

でも、彼が心配で仕方が無かった。あの時助けてくれなかったら私は今以上の痛みを感じることになったのだから。

だから……本当に微かだけど、口を開いて声を出す。

「だい……じょうぶ……？」

弱々しいその声でも、少年の耳にはしっかりと届いたようで、彼は体をゆっくりと起こすと、にっこりと笑って見せたのだ。

それから、静かに口を開く。

「……大丈夫。君は、大丈夫？」

まさか言葉を返されるとは思ってもみなかったので、慌ててしまう。

すると、彼は心配そうな表情で私を覗き込む。

「やっぱり、どこか痛い……？」

人に見つめられるということ自体が初めてで、少年の顔をじっと見つめ返す。

短めの黒い髪に、きりつとした眉。そして、安心感を覚える目。

この少年に、この場所は似合わない。子供の私さえ、そう思った。

私ははつとして、少年から目を背け、小さく首を横に振った。

「……そっか。なら良かった」

その場はそれつきりだった。

でも、その日から何故かあの少年の笑顔が忘れられなくて

少しだけ興味を持った。

彼と少しだけ……ほんの少しだけ話をしてみたい。

けれど、それは叶わない現実で、私にそんな勇氣は無くて……

今まで、自分のそんな性格が嫌とは思わなかった。

……
ここの世界で会話は必要ない。笑うことも、喜ぶことも、必要なかった。はずなのに

あの少年は、そんな世界で笑って見せた。

それが、少しだけ羨ましく思えて……。

だから、初めて私は自分の性格が少しだけ嫌いになった。

臆病で、根性なし。

でも、怖いから……何かを言われて、殴られたりするかもしれない。

そんな感情が、私の脳内を支配するたび、彼との距離は離れていった。

私のもやもやとは対照的に、実験は日を重ねるたびに厳しいものとなっていく。人を一人殺すということさえ、臆病だった私に出来るはずもない。

それを強制するようになり、私は耐えるしか出来なかった。

殴られるのが怖くて、痛いから、現実じゃないけど、人を殺した。

部屋に戻った時、私はその場で泣き崩れるしかなかった。

人を殺した、その感覚だけは本物で、正直、殴られるほうがマシだと思えるくらい。

その感覚を忘れられなくて、手の震えが止まらなかつた。

泣き続けていた私の肩に、小さな手が置かれる。

見ると、あの時の少年が、心配そうに私を見つめていた。

「……大丈夫？何があったの？」

本当は、すがりついて泣きたかつた。でも、しなかつた。

いいや、出来なかつた。

まだ、私の中で恐怖が残っていたから。

だから、何も言えずに、彼を見つめるだけしか出来なかつた。

彼は、小さく微笑んだ後

「無理、しないでね。苦しかったら、オレを呼んで。きつと、君を助けに行くから」

彼は、そう言ってくれた。言葉さえ返さない私に。

ただその光景を見つめるだけしか出来なくて、彼が歩いて去っていく姿を見送るしか出来なくて。

少年は何かを思い出したかのように振り向いて笑いながら言った。

「オレはジエームス！君は？」

私は恐る恐る、口を開く。

「……私は——」

「適合者02、時間だ」

言葉を遮るように、ジエームスを呼ぶ研究者。

ジエームスと名乗る少年は、少しでも残念そうな表情を見せた後、部屋を出て行った。それから、実験の時間を増やされ、ジエームスと会うことも少なくなっていた。

むしろ、それさえ忘れるほどの人間を殺す事を強いられて、正直、あれ以上繰り返し続けたら狂っていたと思う。

やっと解放されたかと思えば疲れて体が動かず、そのまま死んだように眠る日が何度もあった。

過度なストレスからか、突然暴れ出す子供も少なくは無かった。

そうして、子供たち同士で殺し合いが起きるのも……。

私やジエームスがどうしておかしくならなかったのは今でも分からないけど、私は【唯一の救い】を見つけたことが出来たからだと思う。

ジエームスと話してもらった時、私は救われたような気がした。

ここでは感じたことのない【何か】を、彼から感じたから。

ある日の事、その出来事は突然にやって来た。

「うあ……っ!!」

人の体というのは案外簡単に吹き飛ぶもので、それが年端も行かぬ少女であればなおさらだろう。

呆気なく吹き飛ばされた体は、壁にぶつかってから地面へと転がった。

痛みと恐怖、それが頭を支配していく。

何一つ悪い事も、たてついたりもししていない。それなのに、ただ【ムカつく】から殴られた。

この頃になると、既に子供たちの多くは死んで、実験を耐えた少数の子供たちだけが、その部屋に監禁されていた。

そうして、研究に煮詰まったり、イライラしている研究者が部屋に入り、手ごろな子供を今のように殴り飛ばす。

彼らは、私達を殴ることでストレスを解消させていた。

私達子供は、ただ怯えて震えることしか出来ないのに。

誰一人として、それを助けようとしなかった。出来なかったのだ。

誰もが大人という存在を恐れ、抵抗する者はいない。

「痛いかな？痛いよなあ？……でも、お前が悪いんだ。こつちを見るから」

ただ目線を合わせるだけで、そんな小さなことで、彼は私をターゲットにした。

もう、何を信じればいいのかも、どうすればいいのかもわからない。

このまま殴り殺されたら、どんなに楽なんだろう。

いつそ……殺して

しかし、研究者は気分が晴れたのか、去り際に吐き捨てるように言った。

「次見たら、またお前を殴るからな。精々、目を合わせないように努力することだな」

それから、私は人と目を合わせることが怖くなった。

誰かに見られていることも、誰かを見るのも嫌になって……

私は逃げるように人を殺すだけのシミュレーターに没頭した。

そうすれば、誰も私を見ない。誰も私を殴らない。

だから、もつと、もつと倒さなきゃ……。

もつと……もつと……

部屋に戻れば、疲れて、そのまま倒れる。

気づけばまた蹴り起こされて、シミュレーターに。

何一つ変わらない世界。

何も考えなくていい。笑うことも、泣くことも、何一つ必要ない。

ああ……そっか……

見えなければいいんだ。そうしたら、殺さなくてすむし、誰にも殴られない。

私は、細いペンを手に取り、自分の目に近づける。

心臓がバクバクと高鳴り、そして、恐怖。

怖い。でも、見たら殴られる。怖い……!!

意を決して、ペンを突き刺そうとした瞬間、その手を誰かの手が抑えた。

「……………え……」

私は手の主を見る。そこにいたのは、ジェームスだった。

少年はひどく悲しそうな顔で、私の手を掴んでいた。

そうして、私の手からペンを掴むと、地面に投げ捨てる。

「何で……！何でそんなことするんだよ!!」

ジェームスは大声で叫ぶ。

怖くて、震えが止まらなくて……

でも、次に感じたのは、痛みじやなくて「温もり」だった。

ジエームスは私を包むように抱いて、言う。

「なんで……オレを呼んでくれないんだよ。君を……こうして救ってあげられるのに」
初めてだった。その温もりも、感じたことのない何かも。

私にとっては、何が何だか分からない。

震える声で私は言う。

「……目が……無かつたら……皆……私を見ない……。私は……大人を見ないでいい……。か
ら」

ジエームスは私に目を合わせると、首を横に振る。

「確かにそうかもしれない。けど、目が見えなかつたら、君は暗い世界でずっと一人だ」

「それでも……いい……。こんな……こんな世界なら……見たく……。ない」

彼はしばらく考えた後、ニッコリと笑って

「じゃあ！君をこんな世界から連れ出してあげる！約束しよう!!」

ジエームスは小指を立てて私の前に、首を傾げると

「こうやって、小指と小指を合わせて、約束をするんだ！これを破つたら、きつっーいお
仕置きがあるんだよ！」

無邪気に笑う少年に、私は少しだけ……賭けてみた。

小指と小指が合わさり、私と彼の約束が交わされる。

「……きつと、連れて行く。だからさ、見えないようになんかしないで。君は、とつても綺麗な目をしているんだから」

綺麗、当時の私では理解できない言葉だった。

でも、なんだか胸の奥が温かくなつた気がする。

「……そういえば、この前は聞けなかった。君の名前」

私は、恐る恐る口を開く

「リ………りー……」

「りりー………。いい名前だね！誰からつけてもらったの？」

私には、名付け親なんていなかった。

りりーというのも、花の本を読んだ時、少しだけ気になつた名前だっただけで、私に本来の名前なんか無い。

「………いない」

「………いない……か。じゃあ、君の名前を知っているのは、この世界でオレだけなんだ！」

少年はにっこり微笑むと

「………りりー」

初めて、胸の奥で何かドクンと音を立てた。

私の名前じゃないのに……私だと分かる。

私の事と呼んでくれている。

私は……リリー。

「……ジエームス……」

「なんだい？」

「もう一回……だけ……呼んで」

ジエームスは頷くと

「リリー」

呼ばれるたびに、胸の奥でドクンと音を立てる何か。

それが、今までで感じたことのないモヤモヤとした感覚を生み出す。

「よし！これから、毎日会って、作戦会議だな！」

そんな私を後目に彼は頷きながらそう言った。

「……な、何を……？」

彼は、ふっと笑って

「……」を抜け出す作戦さ！」

それから私たちは毎日話し合った。

ここから抜け出すために必要な物資、そして抜け出すためのルート。

その全てを、毎日毎日、こつそりと集め、備蓄した。

食料は私、地図や護身の武器はジエームスが集めて管理。

二人で共通の目的のために行動することが、こんなにもいいものだったなんて、知らなかった。

ジエームスとなら、どんな大人だって怖くない。

二人でなら、きつとここを抜け出すことだって出来る。そう信じて疑わなかった。

全てを集めるのには相当の時間が掛かった。おそらく2、3ヶ月

そうして、脱走決行当日。

脱走は深夜、見回りが最も少ない時間を狙って抜け出す作戦になっている。

寝静まった部屋。誰もが眠りについたその時間を狙い、私とジエームスは起き上がる。

二人で何日もかけて集めたものを装備し、部屋を出る。

細心の注意を払いながら、私達はルート通りに通路を進む。

本来だったら地図が無いから迷いやすい。でも、地図もあるし、なによりジエームスがある。

その安心感から、恐怖は感じなかった。

しかし、いくら念には念を入れたとしても、所詮は子供が考える事、大人たちはそれほど甘くは無かった。

「いたぞ!!」

出口までは直線のみというところでついに見回りに見つかってしまう。

たちまち通路の明かりがついて、警報が鳴り始める。

「っ……!!」

「くそっ！リリー！走るんだ！」

「で、でも……」

「もう少しだ！行こう!!」

私達は走って出口へと向かう。

背後からの靴の音が増えていく。

怖い。捕まったらきつと殺される。

その恐怖に駆られてか、さらに速度を上げる。

「はあ……はあ……!!」

「もうちよつと……!!」

出口の前まで何とか辿り着く。しかし、背後には大人たち。すでに大勢の研究者もこ

ちらへと迫っている。

「くそっ！こんなところで…!!」

ジエームスは必死に考えている。

「リリー！扉を開けて!!」

「で、でも大人が……!!」

「こんな時のために、これがあるんだよ!!」

ジエームスは拳銃を取り出すと、大人たちへ発砲。

「今のうちに早く扉を！」

私は、バッグの中から、研究者が落としたりした外出用のカードキーを機械へ差し込む。

すると、少しずつ扉が開いていく。

「……ま、まだ…開かないの…?!」

「くそっ!!」

ジエームスは何度も発砲を続けている。しかし、そろそろ限界のはず。

私はただ扉が開いてくれるのを願うしかなかった。

やっと開いたのは、子供なら通れる程度の隙間。

「開いたよ！ジエームス!!」

「よし、先に行つて!!」

「え……ジエームスは？」

「今はリリーが先。早く！」

私は狭い隙間を抜け、扉の奥へと

その瞬間、開いていた扉が閉まる。

「え……っ!？」

私は閉まった扉を叩きながら叫ぶ。

「ジエームス!!ジエームス!!!」

ジエームスは、何となく理解していたような、そんな顔をしていた。

私に合わせるように、「扉越しに手を合わせながら言う。

「行くんだ。その先は、君が見たこともない世界。こんな、最悪な世界なんかじゃない。

綺麗で、素敵な世界だ」

「ジエームス!!!ダメだよ!!一緒に行くって約束したよ!!!」

ジエームスは首を横に振りながら

「もう、ダメなんだ。抜け出す手段は、これつきり。…だから、良かったよ。君が抜け出

せて」

「い、嫌だ!!私は……私はどうすればいいの!？」

「分からない。でも……ここにはもう戻ってこないで。それだけが、オレの望み」

「分かんないよ!! そんな事言われたって!! やつと、やつと……ジエームスの事分かり始めたのに!!」

目から、何か为零れ落ちて止まらない。今まで、どんな時であつてもそんなことが無かつたのに。

胸の奥が、締め付けられるように苦しい。

「…オレもさ。…リリー、少しの間だったけど、オレは凄く充実してた。君と出会えて、この何もない世界に光が差し込んだんだ」

「……ジエームス……う……う……!!」

「…リリー、どうか、生きる事をやめないで。世界を見て。君が思っているほど、世界はそんなにつまらないものじゃないよ」

「わ、わたし……!!」

大人たちが近づいてくる。やがて彼らはジエームスを取り押さえるだろう。

私は背を向けて

「……きつと、助けに行くから。や、やくそく……だから……!!」

それだけを言つて、走つた。

山を越えて、何度も転んだ。それでも走るのをやめない。

ただ、ひたすら、私は走る。

2度目の山を越えた時、強烈な光に目が眩む。

光に照らされた木々、さえざる生き物の声。

その全てが、見たことも、感じたこともない何か。

「わあ……………」

綺麗、ジェームスが言った言葉を思い出す。

「綺麗……………」でも……………ジェームスは…いない」

零れる何かが邪魔をして、うまく前を見ることが出来ない。

「……………うう……………!!!」

こうして、私は唯一研究所から抜け出すことが出来た。

それから、大人たちに追いかけられるのを恐れながら毎日を過ごしていた。

私は、壁に貼られた古ぼけた紙を見る。

そこには、新兵募集。でかでかそう書いてあり、場所は下のほうに小さく書いてあった。

迷うことなく、私はそこへ向かった。

大人に追われるより、そこへ行ったほうが安全だと、直感がそう告げていたから。

そして、私は出会う。【彼】に似た人を。

配属された場所は、大きな鉄の塊。

盗み聞きした話だと、戦艦って言うらしい。

その中は広くて、研究所を思い出させた。

一步一步震えながら進むものの、うまく歩けない。

恐怖で足がすくんでいる。

瞬間、人の気配を感じ、手ごろに隠れられそうな場所を見つけ、様子を見る。

短く切り揃えた黒い髪、キリつとした眉と、ジエームスに似た瞳。

でも、ジエームスじゃない。

……別人で、大人。

見つかって、怖くて逃げた。必死で逃げた。

捕まればまた施設に戻されるかもしれない。

そんなの……嫌だ……!

ひたすら逃げて、柵の中に隠れる。

ここならバレない……!! 大丈夫、きつと。

と、思っていたら、バレた。

さっきの大人と目が合う。

「あ………」

怖くて、私は叫びながらその人を押しつけて走り出す。

「い、いやあああああ!!!」

「ま、って……!!」

そんな彼の声を無視し、全力で逃げる。

「うわああああん!!来ないでよおおお!!!」

「まってくれって!!!別に何もしいって!!!」

廊下に二人の声が響き渡る。

「来るなあ!!!」

私は必死で、ポケットの中にある何かを後ろに投げる。

背後からカンツと軽い音が鳴った。

「いつてえ!?こ、この!絶対捕まえる!!!」

「うわあああああ!!!」

怒らせてしまった。余計に恐ろしくなって、さらにポケットからあるだけのモノを後ろへ投げながら逃げる。

「ちよ、ちよつと!?!ストツプ!スト……ぐはっ!!」

「あっ……!!」

バランスを崩して地面へ倒れる。

「……はあ……はあ……」

背後で、大人の人の足音がちかづいてくる。

怖い……人が怖い……!!

「また……」

もう、研究所に戻りたくない。

ジェームスがかくれた、この世界にいたい……!!

身体を起き上がらせようとするも、足が痛くて動かない。

「うう……痛い……。怖い……」

「……」

でも、でも……ここで……立たなきゃ……!

涙を流しながら再び立とうとする。

そんな私の前に、手が差し出される。

「立てるかいい?」

その人の微笑みが、ジェームスと重なった気がして。

「……」

怖かった。でも、私はその手を取った。理由も、どうしてこうしたのかもわからない。

「大丈夫……?」

心配そうに私を覗き込む大人。それが不思議だった。

「……………」

「どうしたの？」

「……………」

怖くて、喋ったら殴られる。でも……………喋らなきゃ、伝わらない。

「……………い？」

「ん…………？」

その声は、彼には聞き取れなかったようだ。

私はもう少しだけハッキリと言う。

「……………いじめ……………ない……………？」

その言葉に、彼は私へ手を伸ばしてくる。

やっぱり……………殴られる…!!

「……………ひっ……………！」

しかし、そうではなかった。頭を優しく撫でながら、その大人の人は言った。

「大丈夫。ここには、君をいじめる人はいないから」

「……………」

「いるなら、俺が君を守ってあげるさ。だから、怯えないでいい」

その言葉を信じたくなってしまうのは、どうしてだろう。

ジエームスに似ているから？

私は小さく頷いて言った。

「……………うん……」

そのあと、私は大勢の大人がいる場所に連れていかれた。

終始頭を撫でてくれた大人の人の後ろで隠れていることしか出来なくて。

それが終わると、私は部屋まで案内された。

部屋は、一人が生活することが出来る程度の広さ。

今は軍から支給されたダンボールが沢山あって、私の制服だったりかが入っている

らしい。そのせいか、部屋が狭苦しく感じる。

重なったダンボールを降ろそうとした時、扉からノックが鳴った。

一回目はダンボールを降ろすために無視した。

それで、地面に降ろそうとした瞬間2回目のノックが鳴って、驚いた私はバランスを

崩した。

「……………！」

ガラガラと崩れるダンボール。

気づけば、私の上にはさつきまで積み重なっていたダンボールが一斉にのしかかって

いた。

「……痛い……うう……!!」

すぐさま扉が開き、大人が入ってくる。

「うう……ひぐつ……!!」

私は、大人がいることと、ダンボールに押しつぶされている事が二重に起こって、パニックになっていた。

「大丈夫か!? すぐ助けてやるから、じっとしてらんだぞー!」

「……うう……。怖い……。痛い……」

「大丈夫。怖くない。すぐに助けてあげるから」

その言葉は、胸の奥で微かな温もりを与えてくれて、不安を取り払ってくれた。

「……ぐすつ……」

「だから、泣かないでいい」

その人は、ダンボールを次々と退かして私を助けてくれた。

そうして、私に微笑むと

「もう大丈夫だよ。怖くない」

私は、小さく頷きながら言葉を返した。

「……うん」

その人は、私を起き上がらせて、椅子に座らせる。

「痛いところはないかい？」

私の顔を覗き込み、心配そうに見つめる。

怖いけど、でも…助けてくれたから……

精一杯の言葉を、私は返す。

「……………い、今は……………大丈夫……………」

「それなら良かったよ」

「……………あり……………がと……………」

「気にしないでいい。君に用事があって来たんだし。なにより、君が無事でよかった」

無事で良かったという言葉が、胸の奥の温もりを、確かなものにした。

…あつたかい。

私の口から小さく言葉が漏れ出す。

「……………初めて……………」

「うん？」

「……………あつたかい……………」

「暖かいというと……………？」

「……………うまく……………言えない。でも、『無事でよかった』って言われたら……………あつたかくなつ

た」

すると、大人の人はひどく悲しそうな顔で考え込む。

しかし、そのあと何かを思いつき、私に微笑みながら言った。

「……………その暖かいという気持ちは、『優しさ』と言うんだよ」

「やさしさ……………」

「うん。これを知っているから、皆他人にこの気持ちを教えてあげられる。一緒に分かち合えるんだよ」

ジエームスも……………優しさを持っていたんだ。

だから、胸の奥が温かくなった。

そっか。これが、優しさ……………

「……………やさしさ……………好き……………」

「この世界には、君の知らないことが沢山ある」

彼はさらに言葉を続けた。

「……………」

「もちろん、俺にも知らないことも沢山、ね」

「知らないこと……………」

「ああ。だから、俺が知っていることを、君に教えたい」

「教える……？」

「そう。そうやって、人は記憶や歴史というものを受け継いできたんだよ」
難しい言葉は沢山あった。でも、それでも、あったかくて、優しい。

この人から伝わる熱が、私を信じたいと思わせた。

「……すごい……」

「……今日から俺は……君の【先生】になる」

「せんせい……」

「ああ。俺はムゲン・クロスフォード。君の先生だ」

「…………リリー…………クリーヴズ…………です」

これが、私と先生の出会ひ。

私は、先生と一緒に、多くの感情を知った。

他の人も、私がすること成す事、全部を自分の事のように喜んでくれた。

ファンネルという兵器を使うだけで、皆が唾然としていた。

研究所で普通にやっていたことだから、どうしてみんなが驚いているのか理解できない。
い。

でも、私は守れなかった。

「まずい!!リリー!!避ける!!!」

「……!!!」

「リリー!!!」

その一射は、私へは届かなかった。

目の前にジムが立ちふさがり、私を守ってくれていたから。

「へ…………へへ…………。ザザツ…………リリーちゃん…………は…………やらせないぜ…………」

「お前…………!!」

「何があつた!!!おい!」

「ムゲンさん…………。リリーちゃんを…………恨まないでください…………。…あの子は…………俺

たち大人の…………【希望】ですよ…………」

「な、なにを…………!」

「へへつ…………。先…………逝つてます…………」

その言葉を最後に、無線から爆音。そして、砂嵐の音が響いた。

「そんな…………!嘘だ!!」

「あ…………ああ…………!!!」

目の前で…………人が…………さつきまで笑っていた人が…………

吐き気を催すような感覚。そして今まで感じたことのない何か私を染め上げる。

「リリー!! 動け!! 動くんだ!! 彼の犠牲を無駄にするな!!」

「……………あなたたちが……………!! この人を……………! ゆ、ゆる…さない……………!!」

「リリー!?!」

私は彼を撃つた敵を睨みつける。小さな機械が、敵に向かって射撃する。そのどれもが無慈悲にコックピットを貫く。

「リリー! 退くんだけ…機では無理だ!!」

「…許さない…!! 絶対……………!!」

やっぱり……………私なんかいなければ、こんなことも起きなかった……………。

誰も…もう誰も近づかないでよ……………!!!

その攻撃は、私に近づくすべてを拒絶するように、動く。

「くっ!?! リリー!?!」

「許さない……………!! 全員……………!!」

「リリー! 俺だ!! くそっ……………!!」

感じたことのない何かが、燃え上がるように広がって、ただ目の前にいる人を…全て否定する。

「くっ……………!! ぐあっ!?!」

私に近づこうとする青いジム。来るな!! 誰も!!

「ムゲン！退け！！リリーは俺たちが止める！！」

「そうですよ。そんな機体では勝ち目がないです」

「俺が……………」

「俺が止めなきゃ……………ならないんだ……………」

「ムゲン……………!?!」

「俺は……………彼女の先生だ……………！助けてやらなきゃならないんだ！！」
ボロボロのジムが、私を見据える。

『きつと、救ってやる！リリー!!』

先生の声……………？違う!!!

否定するように首を振り、叫ぶ。

「大っ嫌い……………！皆嫌い!!!」

「リリー!!」

「くっ……………!!」

「やっぱり……………みんな……………怖い…。嫌い……………!!」

変わらない。暴力を振るわれるのと同じくらい苦しい。

痛い…!!誰にも、伝わらない!!!!

「リリー！それじゃダメだ!!!」

「痛い……!!胸が痛い!!張り裂けそう……!目の前であの兵士が死んだとき、すごく気分が悪くなった……。さっきまで生きてたのに!!」

「もう……そんなの嫌だよ……」

「リリー!それは人間として当たり前なんだ!!皆同じなんだよ!!……くっ!!」

先生は……!先生はそんな事言わない!!私にもっと優しくしてくれる!!

だから……!

「いやだ!!来ないで!!」

「リリー!!自分を閉じ込めるな!!お前は一人じゃないんだ!!」

「来るなあああ!!」

ファンネルから放たれるビームがジムの右肩を貫く。

もう誰も、私に近づかないで……。

やっぱり、ダメなんだ。私は、変わらない……。

「リリー!!」

「来るな……!!来ないでよ……!!」

「リリー!!俺が!!俺が分かるだろう!？」

私は首を横に振りながら叫ぶ。

「知らない!!知りたくない!!」

「リリー!!!」

「くっ……そ……!!」

青いジムは少しずつ圧されている。

あの時、目を……何も見えなくなっていれば、こんな世界、見なくて済んだのに……！
私が……私が見たかった世界は……

「ぐっ……おとおお……!!」

世界は……!!!

「来るなああああ!!!」

意思に呼応するように、ファンネルが次々と攻撃する。

それでもなお、青いジムがこっちへ迫る。

「リリイイ!!!」

「来ないでよおとおとおお!!!」

放たれた一射は、青いジムの足を撃ち抜いた。

そして、目の前が真っ暗になる。

「ぐう……!!」

「うう……えぐっ……うう……!!」

「……リリー……。怖くなんかない……。何一つ」

優しいその言葉が、私を目覚めさせる。

…温かい…声。

「……………せん……………せい……………？」

「大丈夫だから。もう、敵はいないから」

そう言う先生の言葉。そして、真つ暗な機体の中。

「わ、わたし……………先生に……………何を……………？」

「何もしていないよ」

「さ、帰ろう。家に」

「……………」

私は……………知っている。

先生を傷つけてしまったこと……………。

自分がしたことを。そして、部屋から出られなくなった。

恐怖、悔しき。そんな気持ちで一杯になって…。

耐えられなかった。

部屋に響くノックの音。何となく、先生が来たんじゃないかと感じた。

「……………せん……………せい……………？」

「ああ。入れてくれるかな？」

「……………会いたくない…。誰にも」

今は、たとえ先生でも…会いたくない。

いいや、合わせる顔が無い。もうこのまま、ずっとこれでいい。

「……………じゃあ、扉越しで話そう」

先生は扉に背を向け腰を下ろす。

「……………うん」

静かな沈黙の後、先生は言う。

「……………辛かったね」

「……………うん」

「何もしてあげられなかった。…ごめんね」

「先生は……………悪くないよ」

「……………いいや。君を出撃させるのは間違いだったのかもしれない…。戦わせることなん

かささせなければ…」

「せん……………せい……………」

「リリー」

「……………はい」

先生は、渋々だが、口を開く。

「嫌なら、パイロットをやめてもいいんだよ。それ以外の選択も、まだ出来る」
 そう言われた時、私は、辞めようかと思った。

けど……………

「……………」

『ムゲンさん……………。リリーちゃんを……………恨まないでください……………。…あの子は……………俺たち大人の……………。【希望】ですよ……………』

顔すら覚えていない私の事を、その大人の人はそう言った。

助ける義理も、意味もない私を、救ってくれた。

……………私でも……………救えるのかな……………。

私は思い切って言う。

「……………わたしは……………戦う……………。あの人は……………わたしを【希望】って言うてくれた……………」

「わたしは彼の事を知らなかったのに……………。それなのに、わたしを庇って……………」

「……………」

「……………わたしが……………希望になれるかは……………わからないけれど……………。わたしは、出来るだけやってみる」

それで、彼の命が報われるかは分からない。でも、私も……いつまでもうずくまっているだけじゃダメなんだって

泣いているばかりじゃダメなんだって……気づけた。

「リリー………」

「だめ……かな……。先生………」

先生は少し考えた後

「………個人的な意見とすれば、戦うなんて言つてほしくはなかったよ……」

「………」

「けれど、君の人生だ。君が選んだのだから、それに従えばいい」

先生は、許してくれた。…嬉しいって言葉は、きつとこういう時のためにあるんだよね。

「先生………」

「でも、一つだけ……」

「………?」

「選択には、常に責任が伴うことを忘れてはいけないよ」

重い言葉だと感じた。何故だかは分からない。けど、先生が言う責任は、重かった。

「……責任………」

「ああ。君が戦って、人が死んでしまったという責任……とかね」

「……………」

「それを分かったうえで決めたのなら、俺は止めない。君の背中を押そう。それが先生の役目だから」

責任……私が負えるかは分からない。

けど、出来るところまで、私は戦う。

泣いてばかりじゃ、ジエームスを救えない。

今度は……私が……！

「……………私は……………戦います。先生」

「……………分かった」

「もう……………誰も……死なせないです……………。その……………か、家族……………を……傷つけさせない……」

「リリー……………！」

先生は驚いたような声を上げていた。……………なんでだろ。

「先生……………。私……………頑張ります」

「なら、俺も覚悟を決めないとな……………」

「先生も……………？」

「ああ。こうなってしまった以上、俺は君を死なせることは絶対に許されなくなった」

「……君の成長を見届け、君を守るといふ使命ができた……」
「……………」

私はその日から決意をもって生きてきた。

ジエームスを救うため、力を使う。

皆を……私を希望と言ってくれた人たちを守りたい。

それが、私にできる恩返し。

アクシズでの戦いから数日後のある日、グロリアスの戦艦で資料をまとめているときだった。

一枚の資料がはらりと地面に落ちる。

「あ……拾わないと。もう、先生は面倒って言ってどっか行っちゃうし……はあ、最悪」
ぶつぶつと文句を言いながら、資料を拾うと、その内容が目に入る。

「……………」

その内容は、私がいいた研究所についてだった。

脱走した子供1名の行方は不明。

その数日後、実験による事故で研究所が爆発。その研究所にいた子供と研究員は全て

亡くなった、と書いてある。

「……………う……………そ」

手の震えが止まらない。

「こんな……………」

ジェームスは……………死んだ。

救うことさえできないまま……………。

『…リリー、どうか、生きる事をやめないで。世界を見て。君が思っているほど、世界は

そんなにつまらないものじゃないよ』

助けに行くって……………【約束】したのに……………。

「どうして……………!! ジェームス……………!!」

こんな形で、私は知ってしまった。

大切な、友達が亡くなった事実を。

私は……………これからどうすればいいの……………?

「ジェームスは……………もう、いない……………」

「リリー? どうした?」

先生の声。私は立ち上がって涙を拭く。

「な、何でもない！」

「……………」

先生は私の顔をじーつと見つめた後、小さくため息を吐き

「まったく……………」

私の頭へ手を乗せ、撫でた。

「あ……………先生……………？」

「……………何があつたのかは分からない。でも、辛いなら泣いたつていい」

「……………でも……………」

「俺は君の先生だよ。俺はそんなに偉くもないけどさ、でも、頼ってくれたつていいんだよ。それが仲間なんだから」

苦しかった気持ちだが、涙となって流れていく。

「せんせい……………つ!!!うう……………!!!」

「ああ。どうした？」

「大切な……………友達が……………友達が……………!!!」

「……………そつか。悲しいな」

「くっ……………ぐすつ!!」

「今は沢山泣いていい。その友達も、きっと報われる」

「ジエームスう……!! 会いたい……! 会いたいよ……!!」
「……………」

包み込むような手は、優しく、かつて差し伸べられたジエームスと似ていて……

ああ……だから、こんなにも安心できるんだ…。

「ジエームスは……生き返らない……」

先生は天井を見上げながら言う。

「死んだ人は……生き返らない。生き返ってくればと、今までどれほどの人がそれを望んだだろう。でも、ジエームスは幸せ者だよ」

「え……」

「そんな思いを持ってくれるリリーがいるんだから。……喜んでるさ、きつと」

「……………うん……」

「リリー、これからもきつと、君は多くの人の死を見るかもしれない。でも、それでも前に進むんだ」

「その命を、後の時代に語り継いでいくために。今は、つらくても前に進もう。それで、限界が来た時、また会いに行けばいい」

「……………わたし……ジエームスを助け出すって約束……守れなかった」

「大丈夫、ジエームスは怒っていないさ、きつと。むしろ、君が生きていてくれること、

それで良かったんじゃないかな」

私はジエームスの言葉を再び思い出す。

『オレもさ。…リリー、少しの間だったけど、オレは凄く充実してた。君と出会えて、この何もない世界に光が差し込んだんだ』

『…リリー、どうか、生きる事をやめないで。世界を見て。君が思っているほど、世界はそんなにつまらないものじゃないよ』

ジエームスの言う通りだった、世界は、悲しい事も沢山あるけど、それ以上に、こんなにも温かくて……楽しいものだった。

でも、それを伝える事は……もうできない。

「……………でも、さ。俺はこうも思えるよ」

私の手から資料を取って、それを見つめながら言う。

「もしかしたら、生きているかもしれない。ってね」

「……………生きている……………？…そんなの…無理だよ」

「そうかな？俺は信じたいな、生きているって。それで、いつか会えるんじゃないかって」

「……………」

ジエームス……………

また…会えるのかな。

信じてても…いいのかな。

ううん。わたしも信じる。

ジエームス、きつと、きつと助けるから！

「…今度は、私が助けるよ。約束だから！」

外伝 完

外伝：Episode of Shitaro

人は、この光を前にしたとき、一体何を想うのか。
少なくとも、俺はこう思った。

優しくて、温かい。

かつて、共に戦った3人が、俺の近くに来てくれている気がして。
恐怖も、何もかもが消え去っていた。

宇宙世紀0093・3・12 この日、人類は可能性の虹を見た。
そして、この奇跡は後に「アクシズ・ショック」と呼ばれるようになる。

この日の出来事を語り継いでいくものが必要だ。

いいや、これまでの戦いで失った人々を語り継ぐ人が必要なんだ。

でも、結局、俺も一人の人間で、出来る事なんか限られている。

兄弟たちに仕送りをする日々を繰り返し、帰ってこれるかもわからない戦場に行つて、その繰り返し。

では、俺に何が出来る？俺が死んだとき、誰かが語り継いでくれるのか？

きっと、忘れられてしまうのではないか。

そう思ってしまうえば、きっと、そんなことをする義理も、義務もない。

俺は……どうすればいいんだろう。

その日から数日後、久々の休暇で、俺は故郷の日本へと帰った。

兄弟は、元気にしているだろうか。

俺の家は、両親に、俺を含めた7人の子供がいた。

今、両親は二人とも亡くなり、長男である俺が金を稼ぐために軍に入った。

父さんは、日本で有名な学校の教師をやって、母はそれでも足りない金を集めるために、必死で日雇いの仕事を。

貧しい中でも、幸せな時期だったと自分でも思う。

でもそれも、日本で戦争が起きるまでの話。

戦争というべきか、それとも、テロというべきか。

MSの襲撃。

それが、何もかもを変えた。

幸せだった世界を、その全てを。

一発の銃弾が、父の命を奪い、略奪で、母の心は消えた。

そして残ったのは、目の前に横たわる母の姿。命を自ら断つ人を、この時初めて見た。

戦いから得たのは、そんな絶望。

だから、本当は軍に入るのだって望んでいたわけじゃない。

俺から全てを奪ったモノになることを、望むはずもなかった。

でも、なるしかなかったんだ。

生きるために、他人を切り捨てても……。

父と母を知っているのは、俺だけだから。

だから、語り継いでいかなきゃいけない。

数年ぶりの自宅は、きれいに掃除がされていて、生活感があつた。

扉を開ければ、元気な子供の声。

「あー！にいちちゃんお帰り!!」

兄弟の一人、カインが言う。

「ああ。ただいま」

「仕事、どうだった？」

「まあ、それなりかな」

そう言えば、最初はそこまで乗り気じゃなかった軍でも、ある人と出会って、見方が変わったかもしれない。

トリントン基地に転属になって、出会った仲間たち。それが、俺の人生を変えた。

そんな彼らも、もうこの世にはいないけど。

でも確かに、俺を変えてくれた。背中を押してくれた。

初めてトリントン基地に来た時の雰囲気は、前にいた場所と違い、生き生きとしていた。

不思議に思いながらも、基地内を歩き回る。

そこにいる誰もが笑っていて、互いに信頼しあっているような、そんな雰囲気を感じた。

歩いていると、誰かとぶつかる。周りに気を遣いすぎていたための不注意だった。

反動で尻もちをついてしまう。

「つ…………てて…」

「おう、大丈夫か？」

見上げると、茶色の髪が肩に掛かっていて、顎に髭が生えている男性。

右目は黒で、左目は黒目の部分が白く濁っている。失明している…？

その男性は、俺に手を差し出す。

俺は彼の手を取り立ち上がった後、頭を下げる。

「ありがとうございます」

すると彼は肩を竦めながら言った。

「気にすんなよ。見た感じ、別の所からの異動つてところか」

少し驚いた。こんな一瞬で見抜かれるとは思っていなかったから。

頭を上げ、聞く

「な、なんでわかったんですか…?」

「何でつて…ああ、ほら、ここんとこの制服と、お前さんが着てる制服、ちよつとばかり

違うんだよ」

「ああ……なるほど」

「ははは！そんな驚く事じゃねえだろ。それに、これからは仲間なんだからよ！」

「な、仲間つて…同じ部隊でもないのに……」

その男性は首を横に振り、言葉を続ける。

「違えな、前の場所ではどうだったかは分からねえが、ここでは違う。この基地にいる

全ての奴は、仲間なんだ」

「いがみ合いも少ないし、誰もそれを望もうとしない」

「ど、どうして……」

「……どうして、か。そうだな、今はいねえが、【第00特務試験MS隊】って部隊がいるんだけどよ、知ってるか？」

その名を聞いて、首を横に振る人はいないだろう。

第00特務試験MS隊、MSの戦闘データ採取や、MSの実戦テストを兼ねて常に最前線に配置される部隊で、その部隊員のほとんどが一年戦争からの生き残りであるという。

腕の立つ者が多いのだが、その反面として個性的なメンバーが多いとか。

「ええ、知ってます」

「そうか。そいつらが、ここを繋いでくれてるんだろうよ」

「どういうことですか？」

「あの部隊は、トリントン基地に来てから、こここの全員と対話をするので、壁を無くした。彼らが来るまで、荒れていたこの基地が、こんなに賑やかで楽しそうになったのは、それからさ」

「壁を無くした……」

「ああ。その部隊長のファンクがな、”誰が偉いとか、そういうんじゃない。ただ皆で手を取り合って進めばいいだけの話だろう”って言ったのさ」

「もちろん、最初は乗り気じゃないやつも沢山いた。だが、あの部隊の連中は、そんなこと構わずに対話をし続けた。その結果が、今につながる」

「だから、あの部隊はここではちよつとした有名なのさ。尊敬してる奴らも多い。まあ、入ろうとは思わないがな」

「…そうなんですか……」

男性はふと何かを思い出し言う。

「あ、そういやまだ名前言ってなかったな。俺の名前はジャック。よろしくな！」

「…八刃俊太郎やつるぎしんたろうです」

「そうか、俊太郎しゅんたろうか！よろしくな」

「いえ、しんたろうです」

「どつちでも構わねえさ！」

「構いますよ!？」

それが、ジャックとの出会い。

それから数日後、ジャックさんとも仲良くなった俺は、よく彼と一緒にいるようになった。

ジャックさんと共に食堂で食事をしていると、目の前に二人の女性が座る。

「前、いいよな?」

黒髪の短髪の女性が言う。

ジャックと顔を見合つた後、ジャックさんが口を開く。

「ああ、構わねえよ」

すると、赤い髪の女性が何かを書き出し、小さいメモを切り取つて差し出す。

『ありがとう。』

「ん? 赤い髪の嬢ちゃんは喋れねえのかい?」

すると、それに対して赤髪の子は続ける。

『生まれつき。だから面倒だけどころしてる。私はマヤ、あなた達は?』

ジャックさんは笑顔で答えた。

「俺あジャック。んで、こっちのが俊太郎しゅんたろうだ!」

「だから”しんたろう”ですつてば!!」

「どつちでもいいじゃねえかよ!」

「よくないです!!」

『賑やかな二人だね。よろしく、俊太郎、ジャック』

それからマヤさんはもう一人に視線を送る。

すると、黒髪の女性は溜息を吐いた後

「……アルマだ。まったく、なんで私まで名前を言わなきゃならないんだ」
『だって、名前教えてもらつたし』

「だからって私は知る必要ないし」

『……めん』

悲しそうな顔をするマヤさんを見て、アルマさんは

「そ、そんな顔しないでよ！ああもう！仲良くする！仲良くするから!!」

すると、そんな顔を予想していたかのようにマヤさんはにやつと笑う。

そんな光景を見たジャックさんは笑う。

「へえ、意外とツンツンしてるかと思つたけど、案外可愛いじゃねえか。アルマちゃん」

「うっせえ！殴るぞおっさん!!」

「あー怖い怖い」

「むかつくう……!!!」

拳を握り小さく呟くアルマさん。

なんだか見ていて可笑しくなつて、笑つてしまふ

「あはは!!」

「ん？どうした俊太郎」

「んだよ……お前まで」

「いや、だって、面白くてさ!!なんか、こういうの初めてだよ!ははは!!!」
「変な奴だな…」

アルマさんとジャックさんが声合わせてそう言った。すると二人は顔を見合わせ、ジャックさんはニヤツと笑い、それに対してアルマさんは拳を握る。

この出会いが、俺の生きる道を変えてくれた。

そんな穏やかな日は長くは続かなかった。

噂に聞いていた第00特務試験MS隊が帰ってくる日、悲劇は起きた。

誰が予想していただろうか、かつてその基地の全ての人が尊敬する部隊が攻撃してくることを。

その日、被害を受けた人々は嘆き、そして彼らを憎んだ。理由なんか関係ない。こちらを攻撃してきたことが何よりの証拠と言って、彼らを裏切り者とした。

だが、ジャックさん、マヤさん、アルマさんと俺は信じなかった。何か理由があつてこうしたんだと、言い続けた。

それでも、声は届かなかった。

その日から、この基地から笑顔は一瞬にして消えた。

そして、俺は彼と出会う。

その背中が、この場所にいる誰よりも凛としていて、強い背中だった。

そして、この人が、何となく「ムゲン・クロスフォード」という人間だと感じさせた。だからつい驚いて

「あっ!!!」

振り向いた、短く切った黒い髪、優しそうだが、力強さを感じる瞳。凛とした眉に、整った顔つき。

瞳の奥に悲しみを秘めているようにも感じる。

その男性は首を傾げ聞く。

「……どうしたんだい?」

「あ、あなたは……!!む、ムゲン・クロスフォードさん!?!」

すると、少し困惑しながら彼は言葉を返す。

「……………そう、だけど……………」

「やっぱり!いやー!よかった!!!」

「な、何を喜んでるんだい……………」

俺ははつとして、言葉が続ける。

「すいません、自己紹介がまだでしたね。俺は八剣 俊太郎。最近このトリントンに来ました。よろしく!」

「そうか。俺はムゲン・クロスフォード……って、知ってるか。まあ、よろしく頼むよ」
「はいー！」

彼と出会ったのは、間違いだったのかもしれない。

もし、彼が居なければ、ジャックも、マヤもアルマも死ななかつたのかもしれない。

でも、こうも思えた。

彼と出会ったからこそ、今の俺が居るのかもしれないと。

誰かが言っていた、「今こうして生きているのにも何か理由があるはずだ」と。

そうなのかもしれない。

では、俺が今生きている理由とはなんだ……？

人類の可能性を俺に見せて、大きな戦いを超えた俺に何が出来る？

「兄ちゃん？」

「ああ、すまない」

弟に笑顔で言葉を返す。

「あ！俊太郎兄ちゃんだ!!おかえりー!!」

その声につられて、兄弟が集まってくる。

そうか……俺が出来る事……

兄弟たちを守らなければならない。

これは、俺にしかできない事で、他の人が代わってくれることでもない。
だからこそ、俺は前へ進んでいく。

背中を押してくれた、仲間には恥じない生き方をするために。

外伝 完

— After the war 0095 —

61：謎の男

宇宙世紀0095. 5 あれから二年。俺たちは、連邦軍として仕事をし、家に帰れば孤児院の経営。そんな繰り返しの生活をしていた。

嫌ではないし、むしろ充実している。

前の大戦から二年もの月日を経ても、世界は変わらず、むしろ連邦は増長した。

そして、ジオン残党を少しずつ倒していくという日々が続いたある日、俺とリナ、そしてエトワールはフアングに呼び出されたのであった。

「急に呼び出してすまないな」

司令室に入るとフアングは早々にそう言った。

赤い髪を後ろにまとめ、赤い瞳は力強さを感じる。

彼は昔からそれほど変わらず、カッコいい。

「気にすることじゃないよ。それで、用って言うのは？」

「ああ、それはリナが来たら話そう」

「……どうして私まで」

仏頂面でエトワールは言う。

「まあまあ、良いじゃないか。別に叱られるわけじゃないんだし」

「あなたは少しは真面目にしたらどうですか。本当、昔から変わってないんですから」

そう言つて、彼は俺を見ながら溜息を吐く。

薄い青の髪が揺れ、細い目に細い眉が彼の凛々しさを際立たせた。

どうしてこの部隊には美形な奴が多いんだろう。

「ははは、ごめんね」

「………まったく」

少しした後、司令室の扉が開き、失礼しますの一言と共に女性が入ってくる。

「来たか、リナ」

ファングはゆつくり立ち上がり、彼女を見た。

「はい。少し整備のほうが遅れてしまつて」

「ああ、構わないさ。さて、それじゃあ説明するか」

ファングは俺たちを見た後、一拍開けて口を開く。

「俺たち先日から対応しているジオン残党は知つているな？」

「ええ。第二次ネオ・ジオン抗争後、地上に残つたジオンの再興を掲げて連邦にしつこく

攻撃してきている人たちですよね？」

フアングは頷いて続ける。

「そうだ。その残党のアジトと思わしき場所へ攻撃を仕掛ける事になった。そこで、俺たち第00特務試験MS隊もこの作戦に参加することになったんだ」

ということは、そのメンバーとして俺たちが選ばれたのだろうか？

その言葉を発する前に、リナが言う。

「じゃあ、そのメンバーとして私たちを……？」

フアングは首を横に振ると

「いや。逆だ」

「逆……ですか？」

「お前たちにはこの基地で留守を頼みたいんだ」

「留守番……ですか」

「ああ。本来ならムゲンを連れてくのもいいんだが、毎度毎度彼ばかりではと思ってな。だから、今ここにいるメンバー以外でジオンのアジトを叩く」

「そうですか。かしこまりました」

エトワールは静かに頷く。

「ムゲンは、何かあるか？」

フアングは俺を見て聞いてくる。俺は首を横に振って答えた。

「いいや、特にないよ。無事に帰ってきてくれよ」

すると、フアングはふつと笑って

「何言ってるんだ、お前の上官だぞ。当たり前だ」

「ああ、それとだ、一応、予備のジエガンをここに残しておく、いざという時はそれを使ってくれ」

「俺が使っているのか？」

「お前以外にいるのか？ エトワール”は”機体を大事に使うからな」

その言葉でリナとエトワールが肩を震わせくすくすと笑う。な、なんかムカつくな……。

「エトワールはってどういうことだよ！俺だって好きでそういう風になってるわけじゃないんだよ!」

「ははは！分かってるさ。ま、そういうことだ。後は頼むぞ。それじゃ、解散だ」

フアングとの会話を終え、司令室を後にする。

「ムゲン」

リナの声で振り返り彼女を見た。長い銀の髪を帽子の中に入れ、作業着を着ている。

瞳には二年前と違い、強い決意を秘め、それでいて優しさを感じる雰囲気。

これが今の彼女。トクナガさんが亡くなって、整備長という立場をしながら、アウロラの面倒、さらに孤児院の経営を手伝ってくれて、本当に頭が上がらない。

「リナ、どうした？」

「ううん。ちよつとだけ、話したいなって」

「ああ、構わないよ」

俺は彼女に微笑む。すると彼女の表情がぱあつと明るくなった。

「じゃあ、そのベンチでコーヒーでも飲みながら話そっか」

頷いて、俺たちはベンチに腰を掛ける。

「……話つて言うのは？」

リナはコーヒーを両手で持ち、ゆらゆらと揺れる黒い水面を見つめながら小さく言った。

「ううん。二人つきりで話したかっただけなんだ」

「……そっか」

「うん」

沈黙。それから、ふと何かを思い出したかのように彼女は口を開く。

「そういえば、少し悩んでいることがあるんだ」

「どんなことだい?」

「ムゲンのために造るって言った機体……。大分形には出来てきてるんだ。でもね、何て言うのかな、机上の空論っていうかさ……」

「…何をそんなに悩んでいるんだい?」

「……難しいんだけどね、簡単に言えば、ムゲンの理想の機体を追求していくと、機体のフレームに負荷がかかりすぎて耐えられないの」

「ジェガンのフレームでも?」

「ムーバブルフレームじゃダメ。たぶん、この先もつと技術が発展する。だから、その時代でも戦える機体を造りたいから」

「…そうか……。ありがとうな、俺のために」

「べ、別に……」

俺は彼女に微笑んだ。すると、彼女は少しだけ顔を赤くして、そっぽを向いてコーヒーを飲む。

「…それにしても、ジェガンが使ってるフレームじゃダメなのか…それ以上の物ってるのか?」

リナはうーん、と考えた後

「無いわけじゃないけど……この部隊ではきつと支給されることのない素材だから……」

無理かな」

「素材？機体じゃないのか？」

「うん。」サイコフレーム” っていうモノなんだけどね」

「何だ、それ」

「言うと思った」

リナはふふつと笑った後、俺に説明してくれる。

「サイコフレームって言うのは、パイロットの脳波を感知するコンピューター・チップを金属粒子なみのレベルで封じ込めた新素材の事だね」

「……どういふことだ？」

「簡単に言えば、リリーちゃんが使ってるファンネル、あれはサイコミュって言うんだけどさ、あれって、かなり大きいんだ」

「搭載するスペースが大きいって事か」

「うん。そのサイコミュを小さくしたものでも考えてくれればいいよ。そんなに難しく考えないでいい」

「それで、そのサイコフレームを搭載するとどんな効果があるんだ？」

「そうだなあ、機体の性能が格段に上がって、強度もある程度高くなるかな。何より、ムゲンが求める高機動を実現できるかな」

「それは凄いな」

「でも……」

リナは少しだけ暗い表情を見せる。俺は彼女の顔を覗き込んで、続きを待った。

「……たぶん、あなたの体が持つかどうか……」

「そんなに凄いのか」

「うん。たぶん、ジェガンの数倍の力を出せるはず。ただ、その分パイロットへ掛かるGもかなりのものだけぞ」

「……もし、俺がそれを望んだら、君は造るかい？」

「え……？」

「それを俺が望んだら、俺の最後の機体を、君は造ってくれるかい？」

「……そ、そりゃあ……造ってあげたいけど……。私だつて名前だけしか聞いたことないし、一般の技師に配れる代物じゃないから……」

「……そつか。……確かにそうだな」

二人でうーん、と悩み、お互い顔を見合わせる。

なんだかおかしくて、二人で声を上げて笑った。

ひとしきり笑いあつた後、リナは言う。

「……こうやって二人つきりなんて、随分久々だね」

「ああ、そうだね」

「いつまでこうやってお話しできるかな」

俺は彼女に微笑みながら答える。

「君が望むのなら、いつまでも」

リナは少しだけ顔を赤くして

「……ははは、なんか、恥ずかしいね」

「そうかな。俺は別に」

「まったく、これだからあなたって人は……」

「なんだよ」

「別に」

それとなくそこに彼女が居るだけで安心できる。ただ、近くにいってくれるだけで。

今は、それで幸せだ。

リナはコーヒーを飲み干し、立ち上がって言う。

「それじゃ、そろそろ仕事に戻るね」

「ああ、何かあったら言ってくれ。手伝うよ」

「ありがと！行ってくるね！」

そう言った後、彼女は小さく手を振って格納庫へと向かっていった。

彼女の背を見送った後、俺は残っている資料を片付けるために自室へと戻った。

資料を片付けた後、時間を見てみれば夕方の5時。普段よりも2時間くらい早く終わったな。

一息ついた後、俺は格納庫へと足を向けた。

格納庫は普段と違って静かで、リナを含めた数人の整備兵が掃除をしていた。

「あ、ムゲンさん！」

一人の整備兵がこちらに気づいて声を上げる。すると、リナはこちらを向いて叫ぶ。「あ、ムゲン！ごめんね、もうちよつとで終わるから——」

俺は周りを見渡して見る。丁度、箒があるのを見つけ、手に取って整備兵たちに近づいた。

「どうしたんです？ムゲンさん」

「いや、手伝おうと思ってね」

すると、リナは

「い、いやいや、大丈夫だよ。これくらい、私達でも……」

俺は首を横に振って答える。

「いいや、皆も早く帰りたいだろうし、俺も手伝うよ」

「そっか、ありがとね」

「気にしないでいいさ」

そのあと、俺たちは黙々と掃除をし、30分で格納庫をきっちり掃除した。

「ふー……。今日はこれで終わり。ありがとね」

「ああ。大丈夫さ、良い運動になったよ」

リナは整備兵たちに向き直って言う。

「それじゃ、今日はお終い。あがつていいよ」

その言葉を聞いて、整備兵たちはそれぞれ頭を下げて帰っていった。

普段俺に見せる事は無い、リナの表情。かつての整備長であったトクナガさんのような頼もしさが、彼女から伝わった。

ふう、と一息はいた後、リナは振り返って笑顔で言う。

「さ、帰ろっか」

「……ああ」

基地とグロリアスの事をエトワールに任せ、俺たちは家路へとついた。

とりあえず、エトワールが居れば何とかなる。MSの操縦もうまいし、人との関係も良い。そんな彼だからこそ、任せるに値できる。

「……あれ……?」

丘を登っているときにリナが声を上げる。

「どうした?」

「家の前で、誰か……いる」

「え?」

目を凝らすと、確かに俺たちの家の前に人影があつた。こんな時間に……まさか……?

「声かけてみよう」

「え……う、うん」

俺は人影へと足を向かわせる。そして、その人物の背後まで来ると声をかけた。

「あの」

「はい?」

振り返つたその人物は、白髪が所々生えていて、大体5、60代くらいの男性だつた。

「ここに、何の用ですか」

男性は俺を見つめると、大きく頷いて口を開いた。

「君が、ムゲン・クロスフォード君だね」

俺は驚いて言葉を返す。

「な、なんで俺の名前を……?」

「君を、”昔から知っているから”だ」

「どういうことですか」

男性は、空を見上げて考えた後、俺のほうを向いて言う。

「それは、明日、君たちのいる基地で話そう。邪魔をして悪かった。それではね」

そう言つて、男性は丘を降りて行つた。

それを見送つた後、リナが近づいてきて

「ムゲン……あの人は……」

俺は首を横に振るしか出来なかつた。

その日は彼の言葉であまり眠ることが出来なかつた。

”昔から知っている”その言葉が、俺の頭から離れない。

一体、彼は俺の何を知っているのだろうか。そして、どこで出会つたのだろうか……。

過去の記憶をたどつても、あの人の姿が出てこない。

ただ、モヤモヤとした感覚が残つたまま……。

そして、時間は過ぎていく。

俺は、このモヤモヤを残したまま基地へと足を運んだ。

6
1

完

62 : 家族の形

宇宙世紀0095. 5 第00特務試験MS隊、ジオン残党殲滅のためにトリントン基地から出発。ムゲン・クロスフォード、エトワール・ブランシヤールは基地にて待機。

資料を片付けていると、俺に面会を望む人が来ているというので、グロリアスの待合室へと向かった。

そこに居たのは、白衣を着た男性。昨日、俺の家に来た人物であった。

男性は俺に気づくと、来たか、と言ってこちらへ手招きをする。

俺は彼に近づいて、口を開く。

「俺に何の用ですか」

男性は静かに口を開いた。

「うむ、君と話がしたくてね。まあ、座りなさい」

「はい」

俺は椅子に腰かけ、男性の対面に。

すると、男性はふうつと一息はいて、言う。

「さて、ムゲン・クロスフォード君。昨日の言葉が忘れられないんじゃないかと思つてね」

まさにそうだ。”昔から君を知っている”と、今日の前にいる白髪の生えた男性は言う。しかし、俺には彼と会つた記憶、そして彼の姿を一度たりとも見たことが無かつた。それなのに、何故彼は俺を知っている？

何故……。そう思うと、モヤモヤしていて、正直仕事にもならなかつた。

俺は静かに頷くと、彼はうんうんと頷き、言う。

「そうだろうね。……そうだなあ、どこから話したらいいだろうか。おっと、まずは名前だな。私は、オービット・アーヴィング”。今はMSの研究者をしているよ」

「オービットさん……ですか」

「さて、君は覚えていないだろう。いいや、”分からなかつた”だろうね。……あれからもう10年以上になるか。あれは、一年戦争の時だよ」

「……………」

俺は黙つて彼の言葉を待った。

「当時私は、特殊な研究所にいてね、人体実験なんかもしたことがある」

「え……………」

一年戦争、そして人体実験。その言葉で、何かを感じる。

何故だろう……。

「君は、あの研究所の101番目の実験体として送られてきた連邦軍のパイロットだった」

「もしかして……俺を改造したのは……」

不安とか、そういうのじゃなく、純粋な興味。それで怨念返しをしようとは思わなかった。

いいや、今更そんなことをしてもどうにもならない事を理解していたからかもしれない。

「ああ、その時、私もそこに居た」

その少年は、まだ15才。両親をジオンに殺され、その恨みで連邦軍に入隊したという。

この少年に行われる実験は、人工的にニュータイプを生み出すための実験になるはずだった。

そして、少年の脳波データを採取した時、その場にいた誰もが驚愕した。

それは、”普通の人間ではありえないほどの脳波を発していて、それが尋常ではない事をすぐに理解できた”。

「すごい……まるでこれは本物のニュータイプじゃないか……!」

「しかし、ニュータイプなどいるはずがないだろう……!? だからこうして俺たちは実験で造り上げようとしているんじゃないか」

本来はそのまま実験をして、人工ニュータイプとして改造する予定だったがその実験に待ったをかけた人物がいた。

その男は、不敵な笑みを浮かべてこう言った。

「この少年に、今試作している薬を投与してみようじゃないか」

「その薬は……?」

「その少年が本当にニュータイプならば、この薬を投与すれば、”その能力、脳波が半分に抑えられるはずだ”」

「抑制剤……ですか」

「そういう事だ。所詮この少年も、いつか使えなくなれば捨てるまで。試してみる」

「ですが……シゼル様が……」

「ほう、私よりシゼルが偉い?」

「……申し訳ありません」

そして研究者たちは、その少年に薬を投与した。

結果は大成功。少年の脳波は半分以下まで抑えられることになる。

成果を見るため、脳を弄ることはせずに、身体のみを改造することとなった。

そして、その日からその少年は“適合者”と呼ばれるようになったんだ。

驚いたのはそれからだ。少年は、“どんな重症でも、怪我がすぐに完治する”という力を得た。

”骨が折れたとしても、半日で治り”、“MSが爆散しても、肺に破片が刺さっても、その生命力と驚異的な回復力が彼を生かし続けた”。

それは、誰もが予想していなかった。薬を投与するよう命じた男でさえも。

「それが、君だ。ムゲン・クロスフォード君」

「俺は……………」

言葉が出てこない。何て言えばいいのか、ただ、固まって言葉を聞くほか何もできなかった。

「君は、”ニュータイプ”だ。そうだな、半分の力を抑えられているから、”ハーフ・ニュータイプ”と呼ぶべきかな」

「俺が……ニュータイプ……？」

自身が見届けようと誓った存在が………？

俺が……ニュータイプ……？

記憶の中で、かつての言葉が蘇る

『おなじ——ニュータイプをみつけたから——きみはその資質が開花しかけてた』

『信じてるぞ……。目覚めかけのニュータイプ。私に「虹」を見せてくれ』

「本来なら、私は君に顔を合わせるのさえ許されない男だという事は理解している。だがそれでも、君には真実を伝えておきたかった」

「今を生きている、君には。本当の事を」

オービットさんは、悲しそうな顔で、そう言った。

俺は首を横に振り、口を開く。

「……いいんです。この体になって、良かったと思える場面が何度もありましたから。

……それに、ちゃんとそう言ってくれたことが嬉しいです」

「……クロスフォード君………」

「俺は、自分がニュータイプであるとは認めていません。ニュータイプにしては中途半端すぎるし、足りないところもあると思うから」

「だから俺は、”ハーフニュータイプ”で十分です」

「クロスフオード君……!」

「……………ありがとうございます。なんだか、スッキリできた気がします」

すると、オービットさんにはっこり微笑んで

「……………そうか。……………そうだ、君にお詫びとして、受け取ってほしいものがある」

「お詫び……………ですか……………?」

「そうだ。いいや、きつと渡してしまえば、”戦いを強いる事になる”。それでも、君なら正しく使ってくれると信じて」

「何を……………」

「君は、サイコフレームというのを知っているかな?」

「ええ、少しは」

「それなら話が早い。サイコフレームを使用した機体フレームを、君に託したい」

「え……………?」

「……………その力で、世界を、君が信じる道を進んでほしい」

「……………オービットさん……………」

「詳しくはまた後日話そう。では、今日はこの辺で失礼するよ」
彼は軽く手を振った後、グロリアスを後にした。

廊下に出ると、エトワールが何か考えるようにその場で立っていた。
彼が悩み事なんて珍しいと思ひ、俺は声をかける。

「エトワール？」

青い髪が揺れ、こちらを赤い瞳が見据える。

そして、はあと溜息を吐いた。

「なんで溜息を吐いたんだよ」

「いえ、ムゲンさんでしたので」

「なんで!？」

「ふふふ、冗談ですよ。どうしましたか？」

彼は首を傾げ聞いてくる。

俺は小さく頷いた後答えた。

「いや、何か悩んでいるようだったから」

すると、エトワールは先ほどと同じ難しい顔をして言葉を返した。

「……………ああ、さっきの、オービットさんでしたっけ?……………何か引つかかるんですよ」

「引つかかる?」

「はい。見たことも、会ったこともないのに、何か胸に引つかかるんです」

「……………へえ。なんでだろうね」

「わたしにも分かりませんよ。でも、何ででしょうかね……………」

胸に手を当て、彼は天井を見る。

「……………今は答えが分からなくても、いつかきつと、見えるさ。その答えが」

「……………そうだと、いいですね」

「そう信じればいい。きつと、叶うつてさ」

彼は肩を竦めた後

「私はこの部隊に来て随分と変わったようです。ちよつとだけ、信じてもいいかもしれないと思つてしまひしたよ」

「素直に信じたらいいじゃないか」

「素直に信じたらなんか腹が立つので信じません」

「あー! お前なあ! 人が親切に言つてやつてるのに……!」

「大きなお世話つて言うんですよ、ムゲンさん。それで、資料は片付きましたか?」

にやにやと笑いながら、エトワールは言う。

「こいつ、俺の痛いところを突きやがつて……………」

「ぐっ……そ、それはだなあ……。後数時間待つてくれ
すると彼ははあ、と溜息を吐いて言う。

「仕方ありませんね、私も手伝うので仕上げましょう」

「本当かい？それはありがたい！」

「ただし、今日の夕飯はご馳走になりますからね」

「そりゃあ構わないが、家は騒がしいぞ？」

「構いませんよ、ああいう雰囲気も、悪くないと思えましたから」

かつてのエトワールであれば、きっとそんな言葉は出てこなかっただろう。

だが、今の彼だからこそ、見て、体験した彼だからこそ、そう言えるのだろう。

そうして、俺はエトワールに協力してもらい、資料を仕上げる事になった。

作業中、俺はふと思ったことを聞いてみる。

「なあ、エトワール」

彼は資料にペンを走らせながら、言葉を返した。

「君の両親って、どんな人だったんだい？」

流れていたペスが止まり、静かになる。

一時の沈黙の後、再びペンを走らせ、口を開く。

「……………覚えていませんよ」

「……………そうか。エトワールは物心つく頃には両親が居なかったんだっけ」

「ええ。でも、悲しさや寂しさというのは感じませんね……………。何故だかは私にもわかりません」

「…きつと、君を救ってくれた人がそれだけ君の支えになっているのかもしれないね」

「かもしれない。…………レビル様は、私に多くの事を教えてくれました。私は、誰の子でもない、レビル様の子として育ったのですから」

「……………」

その時のエトワールの顔は、ひどく悲し気で、見ているこつちまで心が苦しくなった。

レビルという人物をとて信頼して、親と思つていても、どこかで気にしているのかもしれない。

”自分の本当の親は誰なのか”、”自分はどんな人の子供なのか”、気になっているのかもしれない。

でも、そんな心中を聞けるわけなくて、ただその悲しい瞳を見つめることしか出来なくて。

「……………逆に聞かせてもらつてもいいですか」

エトワールがぼつりとつぶやく。

「え……」

「ムゲンさんの両親は、どんな人でしたか？」

「……俺の両親かあ……」

頰杖を付きながら、記憶をたどりながら言葉に出していく。

「俺の両親は、MSの研究者だった。もつとも、それを知ったのは一年戦争の終戦間際、ある男から知った話だけだね」

「父は厳格で、どんなことに対しても、誠意をもつて行動していたよ。間違えたことがあれば、どんなに小さい子供にだって頭を下げていた」

「かつては情けないと思っていたけど、しっかりと謝ることのできる人間だったんだと、今では思うよ」

「…そんな父を、俺は確かに尊敬していた。家族として大好きだったからね。俺が一人息子だったのもあって、随分可愛がってくれたよ」

「……そうなんですか。……それでは、母は……？」

「母さんか……。あの人も、父さんと同じで研究者だったよ。だからたぶん、研究所で知り合って、それでお互い好きになったんだろうね」

「母さんは優しく、どんなに苦しくても、辛くても、俺を第一に考えてくれた」

「父さんと母さんが喧嘩をしているところは、一回も見たことが無い。せいぜいあって

もMSの研究で衝突することくらいさ。家族の中だったら、夫婦円満だった気がするよ」

「…そうですか」

俺の言葉を聞くたびに、エトワールの表情は悲しさを増した。

どうしたのだろうか。今日のエトワールは、いつもより感情が顔に出やすい。

「……なあ、エトワール。どうした？オービットさんとすれ違ってから、なんか変だよ？」

エトワールはふう、と息を吐いて

「わたしにも分かりませんよ。ただ、あなたのように両親の事を鮮明に語れるほど、覚えていないだけという話です」

「エトワール……」

「すいませんね。急にこんな話をして」

「気にしないでいいよ。……そういう時もあるだろうに」

「……ええ」

涙をこらえているようなその言葉、俺は彼のほうを見ずに静かにペンを走らせた。

そのあと、エトワールのおかげもあって順調に資料を片付けることが出来た。

エトワールはまだ仕事があるとかで、後で家で合流するらしい。

その日の帰り道、俺はリナと共に街を歩いている。

夕暮れに沈む太陽が、街を照らし、仕事帰りの人や、犬と散歩する人もいて、まだ賑やかだ。

子供と手を繋いで帰る両親の姿、その子供の表情は穏やかで、そして幸せそうだった。そんな光景を見ながら、リナは小さく呟く。

「……なんか、平和だね」

俺は小さく頷いて言葉を返す。

「ああ、平和だ」

「……懐かしいね。昔、デートした時のこと覚えてる?」

「覚えてるさ、リナが大泣きした時の事だろう?」

「……真面目な話なのに」

そう言つてふいつとそっぽを向く彼女。

俺は小さく笑い、言葉を続ける。

「冗談だつて。……楽しかったよね。そうだ、今度またデートでもするかい? ロイにアウロラを任せて、二人つきりで」

「もう、あなたつて人は……。でも、いいね。それじゃ、今度一緒に出掛けようか」

「ああ」

「…………ふふっ、デートかあ…………楽しみだね！ムゲン!!」

その時の彼女の笑顔は、かつて俺が惚れたリナ・ハートライトという子の笑顔そのままであった。

彼女の出会いが、俺の心を、世界を変えてくれた。

この感覚だけは、どんなに汚れても、傷ついても消えやしない感覚。

「それで、何の話だっけ？」

「…………うん。私達、あれからちゃんと家族になれたよね」

「リナ…………？」

リナは立ち止まり、俯きながら言葉が続ける。

「…………時々ね、怖くなるんだ。…………私達って本当に家族なのかなって」

「それは、どうして？」

「…………ううん。理由も分からないんだけど…………少しだけ不安になっちゃって」

俺は空を見上げる。夜の空と夕暮れの空、そのどちらもが混在するその世界を見つめながら、彼女に言う。

「不安…………か。なら、リナ、君は今、幸せかい？」

「…………え？」

「俺や、アウロラ、ロイ達といふ事、幸せと思えているかい？」
少し考えた後、リナは口を開く。

「……幸せ……かな。あなたと、子供たちと居れる時間が、一番安心でき……あれ……？」

自身でも思つてもない事を口にしたように驚く彼女。

「君の本心がそう思っているのなら、それでいいじゃないか。俺たちは、本当の家族になれたんだよ」

「……ムゲン……」

俺は、彼女を見て微笑みながら言った。

「もちろん、俺も同じさ。リナと、子供たちと居れる時間が何より幸せで、安心できる」

「……うん」

「帰ろうか。アウロラが、子供たちが待っているよ」

俺は彼女に手を差し伸べる。

しばらくぼかんとしていたが、彼女は俺の手を握り返してくれた。

家族の形なんて、人それぞれで、他人がどうこう言えることじゃない。

そして、その形がどんなものでも、その人にとっては一番安心できる居場所。

俺にも、そしてエトワールにも、その居場所がある。

俺はその居場所を守れば、それでいい。

世界を変える事ではなく、居場所を守るために、力を使う。

それはきつと正しい事ではないかもしれない。それでも、俺は構わない。

今日も夜が明ける

6 2 完

63：白紙の計画

後日、俺とエトワール、そしてリナはオービットさんの案内で宇宙へと上がった。

グロリアスや、基地の事は他の部隊に留守を頼み、今こうして輸送船の中から宇宙を眺めている。

他の部隊の人たちからは、基地の事や戦艦の事は任せて気にせず行ってこいと笑顔で送り出された。

トリントンで起きた事件以来、俺たちの部隊の信用を取り戻すのにそれなりの時間は掛かったが、今は昔と変わらず信頼されていると信じたい。

静かに宇宙を見つめるといふのも、たまには悪くない。戦いのことも、仕事も忘れてただ静かに見つめる宇宙は、いつもと変わって見えてキラキラと光って見えた。

「……綺麗だ……」

この景色も、戦いが無かったところと比べたら変わってしまったのだろうか。そう思うと、少しだけ悲しくも思えた。

「何を、見ているんだい？」

背後からの声。振り向く間もなく声の主は俺の隣で同じく宇宙を見つめながら聞いてきた。

「いえ、この宇宙も戦争が無かったときはもつと綺麗だったんだろうな、と思っていたんですよ。オービットさん」

「…そうだな。戦争によつて変わってしまったのは地球だけじゃないのかもしれないな。……だがそれは私達には分からないさ。無論、君や私が一年戦争やそれよりずっと前から生きていたというなら話は別だがね」

「そうですね……。ただ、それを思うと少し悲しく感じたんですよ」
「悲しい……？それはまたどうして」

「…それは俺にも分かりません。ただ、戦争というモノのせいで地球が、宇宙が変わってしまったのなら、それはとても悲しい事ですょ」

暫くの間の後、オービットさんが口を開く。

「…君は、この真つ暗闇の宇宙に、何を思う？…私達の先祖は、宇宙に何を想ったのだろう。君の意見を教えてほしい」

「宇宙に…思う事……」

この宇宙に、過去の人は何を想つて宇宙へと旅立ったのだろうか……。願いを込めたのか、それとも人の醜い負の感情だったのか……。

ただ、俺が想う答えを彼に打ち明けた。

「……」希望、ですかね」

「希望？」

「宇宙に出れば、新たな可能性が生まれ、そして人は適応する。…それを信じて、それを希望と思つて宇宙へ行ったんじゃないでしょうか」

「…そうか…希望か…。……ああ、いいじゃないか。そうだな、人はきつと希望を込めて宇宙へと旅立つたのかもかもしれないな」

そんなオービットさんの瞳は悲しげに見えた。

それから1週間後。俺たちを乗せた輸送船は目的の場所へと辿り着く。

一見すればデブリ帯で、ここに本当に目的のモノがあるのか少し心配になった。

「………本当にここにあるのかな……」

隣でデブリ帯を見つめながらリナは呟く。

「大丈夫だよ。オービットさんを信じよう」

「………うん……」

そんな心配そうな声を出すリナに対してオービットさんが微笑みながら言う。

「そんな心配そうな顔をせずとも、もうすぐそこ……つと、言っている間に」

目の前に視線をやるオービットさんにつられ、俺もリナも正面を向く。

すると大きな隕石に埋め込まれたかのように存在する小さな入り口を見つける。丁度輸送船1機が入る程度だ。

「……………」

「そうだ。デブリ帯に隠れてMSの研究を行う私の施設だ。着艦後、ハートライト君には例のフレームを見せるとしよう」

「…はいー」

長く暗い通路を、ただ前へ進んでいく。全員が静かに。

この先にオービットさんが言っていた機体のフレームがあるのだという。

緊張とそしてワクワク感、それが同時に込み上げてくる。

一体、どんなモノなんだろう。そんな幼い感情。

通路の先に光が見えてくる。そしてその光に吸い込まれるように足を踏み入れた。

「……………」
「………ついで。ハートライト君、クロスフォード君。これが君たちに託したいフレームだ」

目の前に佇む、外装のない機体フレームが2機。

「……………」

「サイコフレーム……!」

感動のあまり声が漏れ出すリナ。実物を見るのはリナも俺も初めてだった。いや、俺に関してはMSのフレームを見ること自体初めてかもしれない。

これだけでは良い代物なのか、そうでないのか、素人の俺にはまいわからぬが、リナの説明を聞く限り良いものであると思う。

「……機体フレームの全てをサイコフレームに置き換えたのが、このフレームだ」

凄いのでは分かった。しかし、何故こんな所にこんなフレームが……? オービットさんは俺の心を読んだかのように言葉が続ける。

「軍縮の中でもジオンに圧倒的な脅威と、ジオンを服従させる意味を込めて「再びガンダムを蘇らせる」という計画——。 ” R・E・R・X 計画 ” その中枢を担う機体になるはずだったのが、このフレーム」

「R・E・R・X 計画……。それに、なるはずだった……。?」

リナが堪らず聞き返す。

「私もその開発に携わっていたが、ある時から計画に携わる者が多く失踪してしまったんだよ。それで開発は中止。残ったのは開発終了済みの ” 5 機 ” のフレームだけだ」

「……そのうちの2機が……今俺たちの目の前にある奴だと……」

「まあ、そういう事だな。……そして計画が白紙になったこのフレームたちに付けられた

名は、”ゼロ・フレーム”」

「ゼロ……フレーム……」

「……でも、いいんですか？ 私達にフレームを渡したことがバレたらオービットさんは——」

オービットさんは静かに首を横に振り、リナの言葉を遮った。

「いいんだよ。君たちには関係のない事だ。それに、この計画だって、実行されればまた大きな争いが起きていたかもしれない。いつそ抹消しても良かったのかもしれない。だがね……」

オービットさんは俺のほうを向いて力強く言う。

「私はクロスフォード君に託してみたくなったんだ。君ならこの力を、正しく使えるんじゃないかって」

「……それは……買いかぶりすぎですよ。俺はただの人間です。他の誰とも違わない」

「そうかもしれないな。でも、私は信じてみたいのさ、若い力を。……どうか、受け取ってほしい」

彼の決意に満ちた瞳が、真つすぐに俺を見据る。……断ることなんか、出来ないさ。

「……分かりました。……俺は、俺に出来る事をやってみます」

「ありがとう。……それじゃあ、早速機体の格納……つと、その前にクロスフォード君にはやってもらわないといけない事がある」

「……何を……？」

「いや、大したことではないが、フレームの最終調整のために、君の脳波データが欲しいんだ」

「え……？」

俺より先にリナが反応する。

「あのままでは、機体を扱えない——いや、”君が耐えられない”。だから、それを抑えるために、サイコ・フレームを君用に調整する」

「でも……脳波データって……」

「ああ、脳へ少しばかり痛みが来るかもしれない……——」

「……なら、良いです」

「リナ……？」

彼の言葉を遮り、リナは身体を震わせながら言う。

「ムゲンが傷つくなら……私はそんな力必要ない……」

「……ハートライト君……。なら、止めるかね？力を得るには、時に代償が必要な時もある。綺麗ごとでは済まない時もね」

「……でも……」

「リナ」

俺は彼女の頭を撫でながら微笑む。

「俺は大丈夫。……やつと、俺のための機体が造れるんだろ？なら、俺はお前に力を貸すよ。その痛みは、俺の力に代わるんだ」

「……ムゲン……。やめてよね、帰って来た時に私やアウロラを忘れる事なんか、しないでよね……」

彼女へ小さく頷き

「ああ、忘れるわけないよ。リナやアウロラは俺にとって光なんだから」

俺はオービットさんに振り向き頷く。

「……覚悟は決まったようだね。……なら、早速始めよう。時間はあまり残されていないからね。ハートライト君、君はフレームの足元にあるコンソールで待っていてくれ。彼のデータを送り次第君が調整するんだ」

「わ、私が……ですか」

「そうだ。大丈夫、君なら私よりもうまくできる」

リナに微笑んだ後、彼は背を向けて歩き出す。それに続いて俺も歩き始めた。

その部屋は真つ白な医務室のような部屋だった。そこに一つのベッドとなんかの機械が置いてある。

「すまないね、あの時の研究所を思い出させてしまったかな？」

「…気にしないでください。それで、何をすれば？」

「うむ。それじゃあまず、紹介しよう。レナ、彼がクロスフォード君だ」

オービットさんの声に反応して、機材の調整をしていた白髪の女性が姿を見せる。

そしてこちらに目をやるとニツコリと微笑んで見せた。

その姿に、俺は思わず呆然としてしまう。何故か彼女からエトワールが見えたから。

「あら、あなたがムゲンさんですか。初めまして、私はレナ。よろしく願いますね」

「……………」

「どうしました？私の顔に、何かついてますか…………？」

華奢な体、整った顔、そしてガーネットの瞳。そのどれもが、エトワールとそっくりだった。

「あ、いえ…………何でもないですよ」

「…そうですか。それで、ア…………じゃなくてオービット、何をすればいい？」

「ああ、彼をベッドへ。予定通りサイコフレームの調整をする」

「分かったわ。さあ、ムゲンさん、このベッドに横になってください」

言われるがままに、俺はベッドに横になる。そして静かに目を瞑った。

「少しここで眠っていてください。次に目覚める時には、終わっていますから」

「…はい」

「それでは、始めます——」

記憶——俺に眠っている記憶——

かつての記憶がよみがえってくる。

守れなかった人たちの命、俺を救ってくれた人たちの命——

それが、目の前を通り過ぎては消えていく。

どんなに願っても戻らないモノ、それは過去という存在。

繰り返させないために、俺と同じ過ちを起させないためにと思いながらも、その記憶は、俺自身をひどく傷つけてくる。

独りでは……寒く……痛い……。

独りでは、この闇は歩けない。

独りでは——

いいや、俺はもう独りじゃなかった。

たとえ過去の記憶が俺を傷つけ、自身を責めようとも、手を伸ばしてくれる人がいて、護らなければならぬ人がいる。

大切な家族と仲間を。

だから、この痛みも、寒さも、全て受け止める。

『……俺は……もう大丈夫だ。……この痛みも、俺自身のモノだから。もう、痛くも、寒くもない』

意識が晴れていく。さつきまで寒く、痛みを感じていたのが嘘のように、今は温かく、そして安心を感じる。

……やつと……ゆっくり寝られるな……。

深い意識の奥へと落ちて行く。……ゆっくりと。

どれくらい時間が経ったのか……、自然と目が覚め体を起こす。

周りを見渡しても、誰も居なかった。……データは取れたのだろうか……。

ベッドから降りようとした瞬間、ひどい頭痛に見舞われ、頭を押さえる。

「……………」

痛い、大したことじゃない。これくらいの痛み、彼女の為ならいくらだって耐えられる。

俺はベッドから降り、この部屋を後にした。

部屋から出ると、目の前の椅子に腰かけるエトワールが居た。

彼もこちらに気づいたようで、ゆっくり微笑んで口を開く。

「ムゲンさん、目が覚めましたか？」

その笑顔が、さっきのレナさんとそっくりで、言葉を失ってしまう。

そんな俺を見て怪訝そうな表情でエトワールはこちらを見ている。

「……あ、すまない。……隣、いいかな」

「ええ。構いませんよ」

俺はエトワールの横に腰かけた。

「……………」

お互いに何かを話すわけでもなく、静寂。

それに耐えられず、俺は口を開いた。

「……えつと……なあ、エトワール」

「なんですか？」

「……君は、レナさんって人には——」

「会いましたよ」

俺が言いきる前に言葉を遮ってくる。

「……………そ、そうか……………なんか、あの人、似ているね。エトワールに」

「そうですか？……………私はそうは思いませんでしたけど」

「……………そっか。なら、俺の気のせいかもしれないな……………」

「それにしても、どうしてそんなことを言い出したんです？似ているなんて、急ですぬ」
急と言われるのも無理はない。俺だって、なんでレナさんからエトワールを感じたのか、全く理解できていないんだから。

何と言うんだろうか……………勘……………と言えばいいのか…。エトワールとレナさんには、何か同じものを感じさせた。

「……………ああ……………何て言うんだろう……………言葉にしにくいけど、似ているように感じたんだよ」

「へえ……………。不思議な事もあるものですね……………」

「エトワールは、あの人と会ってどう感じた？」

「どう、と言われても……………特に何も思いませんでしたよ」

「……………そう……………か……………俺の考えすぎ……………かな」

「…………………………そうですね。……………さて、ムゲンさんの目も覚めた事ですし、私は周りの哨戒でも……………」

瞬間、施設内に響き渡る警報。

「……………なんだ…!?!」

「嫌な予感がします。ムゲンさん、私は先に出撃して様子を見てきます」

「エトワール!?!」

制止する前にエトワールは走り出す。彼に続くように俺は格納庫へと向かった。

格納庫へと辿り着くと、こちらに気づいたのか大声でオービットさんが声を上げる。

「クロスフォード君!」

「オービットさん!これは一体…!?!」

「連邦だ」

「え…!?!」

「連邦がこの施設を見つけたんだ」

「でも、ここは連邦の施設だったんじゃない?!?!」

「…それも前の話さ。計画が白紙になった今、この施設もこのフレームも連邦には邪魔でしかないのさ」

「そんな…!?!」

「……………仕方がない事とは言え…少しばかり見つかるのが早かったな…!」

「……………」

「フレームの搬入を急がせる。クロスフォード君も待機していてくれ」

そんな状況で、黙ってみていられるわけが無かった。かといってMSがあるわけでもないし……。

悩んでいるうちに、知らず知らず言葉が漏れ出す。

「……………MSは……」

「MS……？ 余剰パーツで組み上げたジムならあるが……………まさか、出撃する気か?!」
「行きますよ。フレームの搬入って言ったって、まだ時間が掛かるのは目に見えてるでしょう?」

「無茶だ。MSと言ったってあれは戦闘用の武装なんか無いぞ?!」

「……………だとしても、このままここで黙ってみていられるほど俺は我慢強くありません。

…俺にも、手伝わせてください」

「クロスフォード君……………。…分かった。こっちだ、ついてきてくれ」

格納庫の一番端へと歩いていく。そして、そこに佇む煤けたジム。

「…いいか、真面に戦える機体じゃない事は見ての通りだ、なんとか敵の足止めをするだけがいい」

機体へと乗り込み、システムを起動させていく。コックピットも旧式で、かつてのジムやミラーージュのような感覚を思い出させた。

…これならまだ戦える。

「…オービットさん、使える武装は？」

『そうだな、ビーム兵器は一切搭載されていないし……頭部バルカンくらいか…』

周りに目をやり何か使えるものが無いか確認する。すると、機体の横に立てかけてある作業用の長いレンチを見つける。

「…これなら……」

レンチとハンガーにかけてある鉄板を強引にシールド代わりに装着。

『クロスフォード君……』

「ある程度の時間は稼ぎます。……ムゲン・クロスフォード、ジム、出撃します!!!」
ハッチから出撃し、宙域へと飛び出した。

63 完

64：夜明けの宇宙

MSから見る宇宙は、前に見たキラキラと輝く世界ではなく、そこにあるのは暗黒と静寂が支配する世界。

だがそれよりも今は敵を撤退させることが先だ。

…エトワールはどうしているか…、俺より先に出撃しているはずだが…。

レーダーを確認するも、旧式のせいか精度が悪い。いまいち分かりづらかった。

「……レーダーはダメそうだな。…ならば目視で行くしかない」

目視で確認できるのは…4機か。しかし、ここに来る敵だ、バカじゃないはず…。

こちらの武装はあまりにも心許ないが、やれるだけやるしかないだろう。

「…行くぞ、ジム…」

機体を動かし1機に接近、気付かれる前に…一撃を叩き込む！

しかし、機体の性能差ゆえに、即座に反応されてしまう。

「なら…!!」

シールド代わりの鉄板を構えながら1機のジエガンに突っ込む。そしてそのままデ

ブリまで押し込み、両腕の間接めがけてレンチを叩き込む。

両腕が動かなければ、最悪攻撃はできはしない……!

抵抗できずに居るジェガンの頭部を叩き潰す。その後素早く間合いを取り他の敵に目をやる。

「……後3機……!!」

動き出そうと操作をするも、反応が遅くワンテンポ送れてジムが動く。

「動きが……!!くそっ……!」

そうしている間に間合いを詰めながら射撃してくるジェガン。

鉄板を構えて防ごうとするが、所詮は鉄板。ビームを防ぐことなど不可能で……呆気なく鉄板がぶち抜かれる。

シールドの代わりに持ってきたが、余りにも粗雑過ぎた。

鉄板を放り投げ、ジェガンへと突っ込む。

それに合わせて射撃。……落ち着け……相手の攻撃を予測するんだ。

攻撃の予測と機体のラグを合わせて……動く!!

針の穴を通すような繊細な動き——細いその穴を、突く!!

「見えた……!!そこだ……!!」

ビームを避けながら間合いをつめ、ライフルを持つその手をレンチで叩き潰す。

続けて頭部、そしてシールドを強引に剥ぎ取り装着。そのままシールドミサイルで左腕目掛け発射。

爆散していくジエガンを見終えた後、再び敵を捉えようとした瞬間だった。

背後からの殺気で機体を動かし、反転、シールドを構えた。

その一射はシールドに直撃し、シールドが吹き飛ぶ。

「何……!」

遠くから接近する1機を見て驚いた。それは……黒いガンダムであった。2年前にクロノードと俺の間に介入した白いガンダムと同じ形をした機体……。これは一体……?

驚きから一瞬動きが止まってしまう。その隙を逃がさずガンダムが続けて一射を放つ。

反応できない……?!

しかし、そのビームが俺に届くことは無く、目の前で何かが爆発する。

「……これは……」

「何をしているんです、ムゲンさん!!」

間に入り牽制するガンキャンノン。

「エトワールか……!? すまない、助かった!!」

「気にせず。それよりこの機体は……！」

「………よりによつて最悪の時に出会つたな……」

ガンダムはシールドを構えると圧縮されたビームがシールドから放たれる。

「来るぞ!!」

「………っ……！」

俺もエトワールもなんとか回避したもの……あの機体相手では勝率は皆無なのは目に見えた。

「ビームライフルで!!」

ガンキャノンがビームを放つがガンダムは悠々とシールドを構え、ビームをかき消した。

「………何……!? ビーム兵器が効かないのか!?」

「なら、キャノン砲を使います!!」

両肩のキャノンから弾丸が射出され、ガンダムへと迫るが、ガンダムは胸部からミサイルを発射し撃ち落す。

「まずいな………武装が効かない……！」

「………いけない!!」

呆氣に取られた俺にガンダムの放つメガ粒子砲が襲い掛かる。

寸でのところで、エトワールが割って入りガンキャノンが破碎。

「エトワール!？」

「……ぐっ……!!」

「……このままじゃ……!!」

絶望的だった。だが……何か手は……何とかしなければ……

そんな中に、無線が入ってくる。

「ブランシヤール君、聞こえるか。」

「……オービットさん……？」

「そのままではダメだ、一度こちらへ戻れ」

「ですが、そうしたらムゲンさんが……。……いえ、解りました。一度撤退します」

「聞こえているね、クロスフォード君。しばし耐えるんだ。今は……」

「……何か手があるんですか？」

「ここはどうか、私に任せてはくれないか。……少しでいい」

真剣なその声に、俺は断ることなんかできなかつた。

「分かりました。出来るだけやってみます」

「頼んだぞ……。さあ、エトワール、こっちに!」

エトワールの機体が施設へと後退して行くのを見送り、ガンダムと相對する。

「…おまえの相手は、俺だ!!」

機体を動かし、ガンダムへと突っ込む。

ガンダムは、何もせず俺を待っているかのように…。

やつの前まで近づきレンチを振り上げ、腕の関節目掛けて殴りに掛かる。

それに対応するようにガンダムはシールドを構えて受け止めた。

「くそつ………！ジムだからって…舐めるなよ…!!!」

間合いを取って再び殴りにいこうとするが、その攻撃を察知してかガンダムはビームサーベルを引き抜き右腕を切り落とす。

「しまった!?——いや、まだだ!!」

切り落とされた右腕を掴んで、殴りに掛かる。

相手は余裕を持ってシールドを構えるはずだ。それなら、真正面から行かせてもらう

!!

右腕を振り下ろすとガンダムは再びシールドを構えた——今だ………!!!

刹那、右腕の掴んでいたレンチを掴み、ガンダムの横腹に叩き込む。

その攻撃で体勢を崩したところを見逃さない。

ガンダムの間接目掛けて再び殴りかかる。

「でええい!!!」

振り下ろそうとした瞬間、ガンダムの瞳が一際強く輝いたと思うと振り下ろそうとしていたその場にガンダムは既に居なかった。

「なっ……後ろ——」

振り向くと、ガンダムと目が合い、対応するまもなく左腕を切り落とされ、腹部を蹴り飛ばされた。

「ぐああああ!!!」

死ぬのか……? 俺は……!!!

「……死なせませんよ。あなただけは」

追撃が目の前で止まる。

「……エトワールか……!?!」

俺の目の前に割って入ってくる1機のMS。紫にカラーリングされた、ジムともガンダムともいえない機体。

その機体が両肩のキャノンと両手に装備したビームライフルを一齐発射、その攻撃を次々と回避するガンダム。

しかし、その機体が狙っていたのはガンダムではない。周りに居たジェガンだった。

状況が悪いと感じたのか、ガンダムは踵を返して撤退していく。

「……………なんとか…なったのか…」

「ええ。何とかになりましたね」

その姿は、ジムでありながらガンダムのブレードアンテナを付けた不思議な機体であつた。

「その機体は……………」

「V—アルバと言うそうです。……………では、一度戻りましょうか。詳しくは施設で話します」

「…あ、ああ。分かった」

何とかガンダムを退けた俺たちは、施設へと戻つた。

ボロボロのジムから降りた後、エトワールが乗っていた紫の機体に向かう。

「エトワール！」

エトワールはこちらに気付くと、優しく微笑んで見せた。

「無事のように安心しましたよ、ムゲンさん」

「……………ありがとう。助かったよ」

「礼は私ではなく、この機体に言ってください」

「……V—アルバ…だっけ。どんな意味が込められてるんだ？」

V—アルバを見上げながらエトワールに問うと、背後から

「それについては私が説明しよう」

「オービットさん……」

「無事のようなだね。ハートライト君が心配していたよ」

「…は、ははは……」

「さて、名前の意味、だったね。Vは^{ヴァイオレット}vi o l e t…つまりまあ機体の色のヴァイオレツ

トの略称だ」

「ヴァイオレット……？パープルじゃないんですか？」

「パープルと言うのは過去の色のことを言うそうだ。逆に、ヴァイオレットは“未来の色”を言うそうなんだよ。だから過去ではなく、未来へと願いを込めてヴァイオレットにしたんだ」

「……未来の色……か」

「そして、アルバは、“夜明け”と言う意味を持つ。どちらも、未来へと進んでいくモノだろうか？この機体は、未来を切り拓き、人々に繋いでいく機体となつてほしいからそう名付けたんだよ」

「……夜明けと未来か……。良い意味ですね」

「所詮は過去の人間のエゴさ。でも、今を生きる君たちにそれを背負わせることはしちゃいけない。だからせめて、私に出来ることで若者に力を貸したかっただけなんだ」
「オービットさん……」

「さて、もうすぐ機体の搬入も終わる。そろそろ地球へ戻るときだ。……それまでにはまだ時間が掛かるだろうから少し休憩しているといいよ」

「……はい、ありがとうございます。ほら、エトワール、行こう」

俺が促すとエトワールは首を横に振った後

「私は少しこの人と話があるので、先に休んでいてください」

「………そっか。分かったよ」

そうして俺は二人と別れて休憩することにした。

「……んーっ！……っはぁ……」

ベンチに腰かけながら身体を伸ばす。さて、休憩すると言ったが何をするか決まっていな
ない。

少し見回ろうかと思いい立ち上がった瞬間、目の前に立つ女性と目が合った。

「あなたは……レナさん、でしたっけ？」

俺が聞くと、女性は小さく笑った後

「ええ、そうですよ。何していたんですか？」

「いえ、ちよつと休憩して、暇だったから見回りでもしようかな、と」

「そうですか……。あ、丁度いいですし、少しお話しませんか？」

「俺は構いませんけど……。それじゃあ、ここで話しましょうか」

俺がベンチに腰掛けると、レナさんも隣に並ぶように腰かけた。

「それで……お話つて言うのは？」

「大したことじゃないんです、本当にただ一緒にお話がしたかったんです。……他人と話す機会なんかほとんどありませんから」

それはどういう事なんだろう。恐る恐る聞き返してみる。

「他人と話す機会がない……？」

するとレナさんは少し悲しそうな顔をしながら言葉を続けた。

「ええ、私とア……オービットはここへ来て何年くらいですかね……。少なくとも10年以上は経つていると思いますよ」

「そんなに……。他の研究員とかは——」

言いかけてすぐさま言葉を詰まらせた。……たしか……

「言いたいことは分かりますよ。RE：RX計画が始まってから来た研究者はほとんどが異動か行方不明になってしまいましたからね」

「…私達は彼らがここへ来る前までも、そして計画が白紙になった後も……ずっと二人で研究をしていたんですよ」

「こんなこと……言つていいのかわからないですけど……。何の研究を……？」

レナさんは目を伏せながら言葉を続ける。

「MSの研究です。それも、”非戦闘目的”の」

「……戦うことを前提としない……MS……」

「ええ。でも……あの子の瞳を……決意を見据えてしまったから……」

「どういうことですか？」

「先ほどエトワール……じゃなくてブランシヤールさんが出撃した機体、あれこそが私達が10年という年月をかけて造り上げた”戦わない”MS……」

「でも、あれには武装が——」

「はい、とは言つても、急遽搭載したものですから、両肩のキャノンのは先ほどの戦闘で使えなくなりましたし、本来デブリの破碎を目的としたビームガンを強引に出力を上げて使つたものですから、これも……」

「……本当は……戦わせたくなかったですよ……」

「本心で言えばそうですけど、でも、それ以上に”大切なモノ”を、V—アルバは運んできてくれた」

「大切な……モノ……?」

「エトワール……。あの子は、私とオービット……いえ、アツシユの息子なんです」

「え……?」

エトワールも両親を見たことが無いと言っていたが……まさかこんな形で出会っていたなんて。

「あの子と別れた日の事を、昨日のように覚えていますよ」

私とアツシユは、元々連邦軍でMSの開発、研究を携わっていた者でした。

本当は戦う兵器何て造りたくもない、ですが、”ある男”に脅迫され、従わざるを得なかつたんです。

彼はエトワールを人質に私達を働かせました。

そして、ある時彼はこう言つたんです。

「いずれ来る計画のために、お前たちには宇宙へと上がってもらおう」

「そんな! そうしたらエトワールは…!!」

「お前たちが従えば子供の命は保証されている。たとえ野に放ったところで、簡単に死にはしない」

「そ、そんな……それはあまりにも……」

「従えないのなら今この場で、子供を殺したつていい。私はどんな場所でもあの子供を殺せるんだからな」

「……………」

仕方がなかった。あの子を、エトワールを守るために、私達は一度も行ったことのない宇宙へと放り出されたんです。

そして、送られたのがこの何も無い研究施設。そこで彼から送られるデータを基に機体の解析や開発を行ってきました。

苦しい日々も、あの子の為と思えば何とも思わなかった。

最初のうちは日にちを覚えていましたが、いつの頃からか、それさえも数える暇など無くなり、毎日夜遅くまでデータの解析、そして終われば眠る。その繰り返し。

「気づけば私もアッシュも、こんなに歳を取ってしまったんです。私達は、外の事を一切知らされず、この辺境の宇宙でただ訳も分からないデータを解析していたんです」

「……ひどすぎる……」

「戦争があつたのは知っていましたが、地球の存亡まで危ぶまれているなんて知りもしませんでしたよ」

虚しい笑い声が、俺の心を抉っていく。

こんな生き方が……こんな辛い日々があつていいのか……？

オービットさんや、レナさんの受けた悲しみも、苦しみも、俺が理解できる枠をはるかに超えているだろう。

……理解しようとしても、その絶望の深さは、もはや他人の言葉では届かないかもしれない。

「ですが……。私達もただ黙っているつもりはありませんでした」

「それじゃあ、何か物申したり……？」

「いえ、そんなことはしませんよ。私達がやったのは、まさにV—アルバなんです」

「V—アルバが……？」

「あの機体の本当の目的は、”ここから逃げるための手段”だったんですよ。だから、一応のビームガンも持たせていたんです」

「……………」

「Vーアルバが完成した時、きつとあの子に……エトワールに会いに行けると、そう信じて」

言葉が見つからなかった。どうにかいい言葉を探そうにも、すぐに泡となつて消えていく。

苦しかった。理解できないからこそ、その痛みを俺も受けられない事……なにより、エトワールへの想いがここまで彼らの意志を強くしていたことに。

「でも、そんな矢先、あなた達が此処へとやって来た。エトワールを連れて。……私は見た瞬間あの子だと、理解できたんです」

「だからVーアルバがエトワールを連れてきてくれた……と」

「はい」

「……エトワールには、自分たちが親であることを伝えたんですか?」

レナさんは俯きながら首を横に振る。そして、震える声で続けた。

「出来るわけじゃないですよ……。あの子は、きつと私達を恨んでいます。……それに、彼の意志をブレさせるわけには……いきませんから……」

「……なら、どうして俺にそんな話を……?俺が話してしまう可能性だつてあるはずですよ」

「私にも分かりません……。ただ、何故か貴方には全てを打ち明けたくなってしまう。それだけなんです。…もしかすると、全て吐き出したかったのかもかもしれませんね…」

何か…言葉を探さなければならぬはずなのに…それよりも、ただ涙が零れる。

「…俺は………やっぱり無力だ……。…こんな…こんな…!!」

「ムゲンさん………」

「…それは違うよ、ムゲン」

聞きなれた声、優しい声ながらも、強く、安心させられる声。

見上げれば、そこに立っていたのはリナだった。

「リナ………」

「ムゲン、あなたは無力なんかじゃない」

「…でも、俺はただ聞いている事しか……」

「じゃあムゲンは世界の全ての人の声を聞いて、その全ての人の願いも、過去も救えるの？」

「………」

「出来るわけないよ。貴方も、私も…皆人間なんだから。この手で出来る事なんか、限られてるから……」

「そうですよ、ムゲンさん。あなたが泣いてくれて、私は本当に救われました。本当に久方ぶりに共感してもらえた。……ちよつとも理解してくれた。それで、十分なんです」

「……レナ……さん……リナ……」

「さあ涙を拭いて。ムゲンには、ムゲンにしかできない事がある。そうでしょ？」

「……そう……だな……」

「ふふつ、頼もしい彼女ですね。ムゲンさん」

「ええ……本当に……」

……そうだ。どんな過去があれ、未来を作るのは、生きている人間だ。

今からだって遅くは無いんだ。……レナさんだって、エトワールとも和解できるはず。

どうして、こうまで他人の家族を想ってしまうようになったのだろう……。

いいや、分かっている。”俺と同じ気持ちも味わってほしくない”。そんな俺の”エゴ”なんだろう。

その足は、運命に引き寄せられるように、その場所へと俺を導いた。

真つ暗な格納庫に足を踏み入れると、室内の明かりが灯され、”それ”を照らす。

「……………これは……………」

俺がこの機体とここで出会ったのはきつと、偶然なんかじゃない。

お前は——

「お前は……………俺を待っていたのか……………」

その機体は、ただ乗り手を求め、静かに待つのみだった。どれほどの時間、彼は此処に居たのだろう。

……………お前も……………こんなところには居られないんだ。

機体に乗り込んでシステムが動くのを確認する。ふと、コンソールに小さなディスプレイを見つけ、気になってみる事にした。

「……………これは……………」

静寂。機内に響くのは、この機体の鼓動のみ。

小さく微笑んだ後、機体を降りて近くにあった電話を取って格納庫へと連絡を取る。

「はい……？」

運よく出てきてくれたのはリナだった。…彼女でないと頼めない事……。俺は静かに機体を見上げながら口を開く。

「リナ、ムゲンだ。……もう一機、輸送船に格納してくれ。……地球が恋しくてたまらないヤツが居るんだ」

いよいよ、この施設を出る時が来た。たったの数日間の出来事のはずなのに、こんなにも長く感じるとは思わなかった。

しかし、不思議な事に、オービットさんとレナさんは輸送船に入ろうとせず、不思議に思ったのかりナが首を傾げる。

「どうしたんだろ……オービットさんにレナさん……」

「…俺が見てくるよ」

席から立ち上がり、輸送船から降りると、二人の元へと向かう。

「オービットさん、レナさん、どうしたんです？もう機体の格納は終わったはずじゃ……」

オービットさんは静かに首を横に振った後

「いいや。……まだ終わってない。最期の仕上げをしなければ」

「……どういうことですか……？まさか……!!」

オービットさんは地面に座り込むとフツと笑い、俺を見ながら続ける。

「君の思っている通りだ。この施設を破壊する。そして、私達もこの施設とともに消える」

「そんな……！そんなのあんまりですよ!! やつとエトワールに……息子に会えたんですよ!？」

「そうだ。だからこそ、あの子を想つての——」

「それは違う!! 親が子にしてやることは、他にもたくさんあるはずですよ!! それから目を背けて、何が……何があの子を想つてですか!!」

「君に言われずとも、そんなことは分かっている。だがね、私達は何一つあの子に親としてあげられていなかった」

「そうかもしれない……。でも、違う……本当は……!」

「……レナさんは……どうなんです。オービットさんと同じ気持ちなんですか……!」

俯くレナさんに問う。……レナさんも、オービットさんも分かっているはずなんだ。こんなこと間違っているって。

「……私は……」

「レナさん言つてたじゃないですか、エトワールに会うために、V—アルバを造つたんだつて。だつたら……!!」

レナさんの頬を伝う涙が、こちらからも見えた。俺は静かに彼女の返答を待った。

「……私は………あの子と——」

あの子と……居たい……!!」

レナさんの必死な声が、格納庫に響く。

「レナさん……。それでいいんですよ。……間違つてなんかありません」

「例えあの子が私を恨んでいようと……私を知らなくても……それでもいい。私は、私だけがあの子の母親なんですから。……だから……」

レナさんは涙を流しながらオービットさんのほうを向いて

「……だから、帰りましょう。あの子と一緒に、地球へ」

「レナ……」

だが、彼は首を横に振り

「すまない。……私には、あの子に顔向けできる人間ではない。……私はあの子を捨ててしまった。望んでいなくとも、彼はきつと私を恨んでいる。だからこそ……私はオービットとして、ここで死ぬ」

「アツシユ……!!」

彼の意志は固かった。……でも、こんな別れ……やっぱりだめだ……!

イーサンの時と同じことを繰り返しちやいけない。

もう、目の前で家族が離れ離れになるなんて……!!

「……レナ、輸送機へ乗るんだ。直にこの基地も爆発する」

「アツシュ……!!」

「……エトワールの事は——」

「ふざけないでください」

格納庫に響く凜とした声。その声の主を、この場にいる皆が理解した。

「エトワール…………」

「何が息子のためにここで死ぬですか。何が何一つしてあげられなかったですか。……そんな……そんな小さなことを気にして、逃げるんですか」

「だが……私は……」

「なら、私が貴方を許すと言えば、貴方はそれで満足するんですか? 違いますよね。貴方は、そんな事で満足する人じゃない。むしろ、言われたくないから今まで私に親であることを黙っていたんでしょう」

エトワールは、声こそ震えてはいなかったが、その瞳は確かに潤んでいた。

「……初めて私が貴方を見た時、少しだけ違和感を感じたのは、親だからじゃない。」私

に似ていたから”ですよ」

「私が……エトワールに……?」

「ええ。きつと、私も歳を取れば、貴方のような口調になり、もつと物腰も柔らかくなるでしょう。……何より、頑なに自分の意志を曲げない所を見て確信しましたよ」

”流石家族だな”と」

「……………」

「いいですか、死ぬことは、罪滅ぼしでも何でもありません。貴方はただ目の前の”私という存在”から逃げようとしているだけです」

「過去が無ければ未来は無い。そして、貴方の未来を作るのは誰でもない、貴方自身。それとも、今日の前で手を差し伸べている人さえも振り切り、死を選ぶんですか」

「しかし……………」

「貴方は……………!!!」

俯くオービットさんの胸ぐらを、エトワールは掴み、声を震わせながら続ける。

「なら貴方は何故あの機体に、未来と明日の意味を込めた!!!」

「つ……………」

「貴方が未来と明日の意味を機体に込めたのは、貴方自身が”生きたい”と思っている証拠なんじゃないのか!!!」

「恨みつらみで命を捨てるのは、逃げる事と同じだ!!」

「戦え!!!意地でも生きて未来を見つめろ!!!貴方が男なら——いいや!私の父なら!!!」

肩で息をしながら、その手を離すエトワール。

そして一時の間が空いて、オービットさんが小さく笑う。

「ははは……。そうだな。私も歳を取ったという事か……、我が子に説教を食らうことになるなんて、思いもしなかった」

「アツシユ……」

アツシユさんはレナさんのほうを向いて微笑みながら言った。

「……死ぬことは、未来から目を背ける事になる。……彼らのおかげで目が覚めたよ。私も地球へ降りよう。……構わないかな?」

「……もちろんですよ、あなた……」

涙を流しながらレナさんは笑っていた。良かった……今度は間違えずに済んだのかもしれない。いいや、間違えてなんかない。

レナさんの嬉しそうな表情や、エトワールの穏やかな表情を見て確信した。これで、良かったのだと。

こうして全員で輸送機に乗り込むことが出来て、俺自身もとても嬉しい。

家族の再会は、こうでなければ……ね。

リナの隣の席に戻ると、リナがハツとして目元を隠す。

「……どうした？リナ」

「…………ううん。ちよつと……エトワールさんの話を聞いちゃつてさ……何でだろうね……涙が止まらないんだ……」

「そっか……」

俺は彼女の肩に手をまわして軽く撫でてやる。

「あ……」

「俺もリナと同じ気持ちさ。これで良かったと思ってるよ」

「………そうだね……。両親かあ……」

「恋しくなった？」

「……ちよつとだけね。でも、もうそう言っていられる時じゃないからさ。今じゃ私がお母さんで、あなたがお父さんになっちゃったんだから」

「………そうだね。………帰ろうか、地球に」

「うん」

輸送機が施設を脱出すると同時に施設が爆破。その光景を、輸送機の中から見送った。

それから数日後、何事もなく宇宙の航海を続け、地球圏へと戻ってくる。

しかし、問題はそこからだった。俺たちを乗せた輸送船の前方に、戦艦とMS部隊が展開していた。

「……一体どういうことだ…?!」

「……リナ、識別は？」

「アンノウンだけど……見たところ連邦のMS……？」

「連邦ならあんし——」

言葉を言い切る前に、頭の中で、声が響いた。

『——降下してくる連邦機は——だ!!』

『先生……助けて……!!』

最初の声は聞き取りにくかったが、二人目の声はハッキリと聞こえた。……リリーの声……!!

居てもたつてもいられなくなった俺は、席を立つ。

「何をするつもり?!」

「………呼んでいる…。地球でリリーが助けを求めてるんだ。……今すぐにも降りな

こい」

「そんな！降りれる機体なんか無いよ!!」

「アイツ」を使う」

「無茶だよ！あの機体は大気圏突入能力は無いんだよ!」

「それでも…！声が聞こえて、助けを呼んでいる人がいるのに黙ってみている事なんかできない!!」

リナに叫ぶと、エトワールが静かに立ち上がり言う。

「ムゲンさん。…その声は確かにリリーさんの声だったんですね?」

「…ああ。間違いない。最初に聞こえた声は…恐らくフアングのだ」

「分かりました。機体で準備を」

「エトワールさん!」

今にも飛び掛かろうとするリナをエトワールは首を横に振り制止する。

「大丈夫です。ムゲンさんでも安心して大気圏を突破させて見せます。父上、Vーアルバのシールドは」

「…ああ、ある。試作でーセット造ってあったのを持ってきた」

「十分です。早速性能テストを兼ねて彼に”飛んで”もらいましょう」

「…なるほど。よし、分かった。クロスフォード君。聞いた通りだ、機体に乗らんだらいつも通り機体を動かしてくれ」

「……了解」

格納庫に佇むMSに乗り込み、システムを起動させる。この視界や機体の感覚、まるで“エッジ”や“ミラージュ”に乗っている気分を思い出させた。

周りを確認すると、Vーアルバがこちらへシールドを装着している姿が見えた。それと同時にアツシユさんから通信が入る。

「クロスフォード君。その機体に装備させたシールドは、単機での大気圏突破能力を持つシールドだ。大気圏突破時には機体を摩擦熱から守るようにシールドを前に展開してくれ」

「……了解」

「……君のタイミングで出撃してくれ。……後は、強化人間——いや、”ハーフニュータイプ”である君の勘を信じるよ」

「ありがとうございます。……リナ」

「………何」

俺が強引に出撃しようとしているのを彼女は快く思っていないだろう。それに、この機体は地上戦用の機体だからなおさらだ。

…それでも、やらなきゃいけない。

「必ず帰る。君の元に」

「……嘘ついたら許さないから」

「……ああ、絶対だ」

正面のハッチが開き、一歩ずつ踏み出していく。そして、深呼吸した後

「ムゲン・クロスフォード、ガンダム・ピクシー、出撃する!!!」

ディスクに入っていた音声データを思い出す。

『ムゲン、随分久しいなあ。覚えてるかも分かんないが、これを見てるって事は、ピクシーを見つけたんだな』

『ソイツは俺からのプレゼントだ。持っていてくくれ。…今じゃ、俺にとつては無縁の代物だからな。それに、お前さんならこの機体を扱えると確信しているからな』

『……お前さんには、沢山の仲間がいる。忘れるなよ、リッパも、ボマーも…そして俺も、お前の仲間だ。だからお前さんの信じる道のためにソイツを使え』

『お前さんには、亡^{レイズ}霊の名は相応しくない。……これがレイズである俺がしてやれる最期の事だ。死ぬんじゃないぞ。お前さんが戦わなくなった日には、一緒に酒でも酌

み交わそう。それじゃあな!!』

「……ああ、トラヴィスさん。レイスの皆の想い、確かに受け取った。俺は、大切な仲間のために……ピクシーを使う!!」

シールドを正面に展開し、大気圏を突破していく。

「背中は……支えてもらってる。……恐れはしない……!!」

大気圏を突破し、地上での射撃の軌道が確認できる。……そこか……!!

「皆……今行く!!」

ダガーを引き抜いて、真下にいる1機目掛け投げつける。

頭部に直撃すると同時にもう一方のダガーで両断し、地面に着地する。

爆風の中、16年という時を経て、解き放たれた“亡霊^{レイス}のピクシーが大地に立つ。

「……俺が……相手だ!!」

外伝：Episode of Etoile 2

初めてその人を見た時、私は一瞬何か他人とは思えない”違和感”を感じた。

その時はまだ、理由なんて分かりはしなかった。

ただその違和感が、私の胸の中でずっと引つ掛かり、忘れられない。

ある時、ムゲンさんと話をしていた時、話題は両親の話になった。

「君の両親って、どんな人だったんだい？」

そう聞かれた時、私は一瞬思考が停止した。

当然だ、覚えていないのだから。私も、何度も考えた事だ。

私の父はどんな人だったのか、母は、皆が言うような優しい存在だったのかと。

けれど、どんなに考えたところで、私には両親の記憶というモノが無い。確かめる術などありはしなかった。

私は動揺を隠しながら口を開く。

「……………覚えていませんよ」

「……………そうか。エトワールは物心つく頃には両親が居なかったんだっけ」

「ええ。でも、悲しきや寂しきというのは感じませんね……。何故だかは私にもわかりません」

「……きつと、君を救ってくれた人がそれだけ君の支えになつてゐるのかもしれないね」「かもしれない。……レビル様は、私に多くの事を教えてくれました。私は、誰の子でもない、レビル様の子として育つたのですから」

その言葉に嘘や偽りは無い。レビル様に拾われて、私は沢山の事を教えてもらい、学び、現在いまという場所に立つてゐるのだから。

——けれど

心の奥底では、望んでゐたのかもしれない。本当の家族というモノを。

優しい母親に、厳しくも私を想ってくれる父親というモノに。

思つてしまえば、ひどく悲しい気持ちになつた。

「……………」

ムゲンさんの両親は、どんな人たちだつたのだろうか。

素直な気持ちとして、私は口を開く。

「……………逆に聞かせてもらつてもいいですか」

「え……………」

「ムゲンさんの両親は、どんな人でしたか？」

「……………俺の両親かあ……………」

彼は頬杖を付きながら、言葉が続けた。

「俺の両親は、MSの研究者だった。もともと、それを知ったのは一年戦争の終戦間際、ある男から知った話だけれどね」

「父は厳格で、どんなことに対しても、誠意をもつて行動していたよ。間違えたことがあれば、どんなに小さい子供にだって頭を下げていた」

「かつては情けないと思っていたけど、しっかりと謝ることのできる人間だったんだと、今では思うよ」

「…そんな父を、俺は確かに尊敬していた。家族として大好きだったからね。俺が一人息子だったのもあって、随分可愛がってくれたよ」

「……………そうなんですか。……………それでは、母は……………」

「母さんか……………。あの人も、父さんと同じで研究者だったよ。だからたぶん、研究所で知り合つて、それでお互い好きになつたんだろうね」

「母さんは優しく、どんなに苦しくても、辛くても、俺を第一に考えてくれた」

「父さんと母さんが喧嘩をしているところは、一回も見たことが無い。せいぜいあつてもMSの研究で衝突することくらいさ。家族の中だったら、夫婦円満だった気がするよ」

「……そうですか」

「……なあ、エトワール。どうした？オービットさんとすれ違ってから、なんか変だよ？」

私はふう、と息を吐いて

「わたしにも分かりませんよ。ただ、あなたのように両親の事を鮮明に語れるほど、覚えていないだけという話です」

聞かなければよかつたと、少しだけ後悔した。

これだけ幸せそうに家族を語ることでできる彼に嫉妬してしまった。

私には無いものを、彼は持っている。

……それがとても……苦しかった。

多くの別れも体験した、出会いも……、それでも、この気持ちは、初めてだった。

「エトワール……」

「すいませんね。急にこんな話をして」

悔しかつた。満足に両親の記憶を持たない自分に。

悲しさが胸を支配して、気づけば自然と涙が零れていた。

「気にしないでいいよ。……そういう時もあるだろうに」

「……ええ」

それがきつかけだったのかも知れない。

私は、すれ違った人物、オービットさんの事を少し意識してしまうようになった。理由は、まだ分からなかった。

でも確かなのは、なぜか懐かしさを覚えたという事。

レビル様に抱き上げられた時の懐かしさのような……そんな何か。

でもその”何か”という疑問は、だんだんと私の中で確信に変わっていく。

それは、ムゲンさん達と共に機体フレームを受け取りに施設に行つたときだった。

ムゲンさんは機体フレームのデータ取りのためにしばらく動けず、またリナさんも同じで、何かあつたら私が何とかしなければならぬ。

そんな事を考えながら廊下を歩いていると、白衣を着た女性とすれ違う。

はつとして、振り返ると、その女性もまた、私を見てはつとした表情でこちらを見ていた。

白髪で、華奢な体、整った顔、そしてガーネットの瞳。

その時、何か……私の中で眠っていた何か呼び起こされた気がした。

かつて私は、”この人に会つたことがある”、そんな記憶が。

女性は震える声で言う。

「エ、エトワール……さんですか？」

ただ名前を聞かれただけなのに、なぜか緊張してしまい……

「はっ、はい……そうですけど……」

声が上がってしまった。

私がエトワールだということを理解した女性は、安堵の表情をした後、微笑みながら言葉が続けた。

「そうですか……。私は、レナ。短い間ですけど、よろしくお願ひしますね」

「……エトワール・ブランシヤールです。よろしくお願ひします」

それから、私達は二人で何てことのない話をした。

ほとんどレナさんからの質問ばかりだったが、何故かそれも苦には感じず、むしろ話すたびに安心感を覚えた。

……私の母親も、こうして話を聞いてくれたのだろうか……。今では確かめようがないが。

ふと、レナさんがこんな質問をした。

「エトワールさんには、家族はいらっしゃるんですか？」

「……いえ。覚えてないんです。覚えているのは、一人だった私を拾ってくれたレビル

將軍の事だけです」

「……そうですか……。随分寂しい思いを……」

寂しいと言えば寂しいかもしれないけれど、後悔はしていない自分がいる。

「寂しい時もありますが、この痛みや、この感覚が無ければ、私は今この場所にはきつと立っていません。だから、後悔はしていませんよ」

けれど……

けれど——

「もし、両親が生きているのなら、もう一度会ってはみたいです」

「……どうして」

それはどうというわけでは無い。ただ会いたいだけ。

そんな感情が、自然と口から零れだす。

「……会いたいだけです。会ったことが無いんですから。私の両親が、どんな人なのか、それをこの目で見たい。想像ではなく、本当の両親を」

レナさんにはっこり微笑んで、私に言う。

「大丈夫。きつと会えますよ」

その笑顔は、不安や悲しみを消してくれて、胸に小さな温かさをくれた。

「……そう、ですね……。きつと……」

それから私はレナさんと別れ、ムゲンさんが出てくるのを椅子に腰かけて待った。暫くの時間が経った後、彼は部屋から出てくる。私はにつこり微笑みながら彼に言葉をかけた。

「ムゲンさん、目が覚めましたか？」

その時の彼の表情は良く覚えている。

何て言うんだろう、幽霊を見たかのような表情だった。

「……………あ、すまない。……………隣、いいかな」

「ええ。構いませんよ」

彼は私の横に腰かける。

「……………」

お互いに何かを話すわけでもなく、静寂。

それに耐えられず、ムゲンさんは口を開いた。

「……………えつと……………なあ、エトワール」

「なんですか？」

「……………君は、レナさんって人には——」

「会いましたよ」

彼の言いたいことは分かっていたから、言いきらせる前に遮った。

「……………そ、そうか……………なんか、あの人、似ているね。エトワールに」

「そうですか?……………私はそうは思いませんでしたけど」

なんてことない返事をして見せたが、私は似ているというより、懐かしさを感じた。

「……………そっか。なら、俺の気のせいかもしれないな……………」

「それにしても、どうしてそんなことを言い出したんです?似ているなんて、急ですね」

「……………ああ…何て言うんだろう……………言葉にしにくいけど、似ているように感じたんだよ」

そんなに似ているのだろうか……………似ているのならどこが似ているのだろうか……………少しだけ気になった。

「へえ……………不思議な事もあるものですね……………」

「エトワールは、あの人と会ってどう感じた?」

「どう、と言われても……………特に何も思いませんでしたよ」

「……………そう……………か……………俺の考えすぎ……………かな」

そんな彼の疑問も、私自身の悩みの疑問も、もうすぐ晴れる事になる。

突然の施設襲撃に対応するため、私は戦場に出た。

ガンキャノン、この機体とも随分長い間一緒に戦ってきたと思う。

彼も、きっと私の家族の一人かも知れない。

……さあ行こう、彼らを護るために。

宙域では既にMSが施設を包围している状態で、数は5機ほど。

「……やれるだけやりましょう。……まずは!!」

ビームライフルを構え、一射。続けてキャノンを発射する。

ビームを回避し、位置に誘導させたところをキャノンで狙い撃つ。

作戦が見事に的中し、直撃を受けるジエガン。

気づかれたのか、こちらにMSが集結してくる。

でも、敵が誤算だったのは、こちらが遠距離機体だという事を知らない情報不足。

バルカンで敵のレーダーを誤認させ、ビームライフルで1機ずつ撃ち抜いていく。

残り2機になったであろうタイミングで友軍機の反応。…ムゲンさんなのか……?

「…彼は一体何を……!?……くっ!!」

さらにこの状況で型式不明機の接近。間が悪すぎる……!

キャノンを放ち、位置を誘導させる。そして、ビームライフルで一射。

敵の練度は低いようで、2機まとめて墜とすことが出来た。

急がなければ!

間に合ってきてみれば、ジムに黒い機体がビームを放とうとしてた瞬間だった。

咄嗟にキャノンに2機の間を打ち込み、ビームを相殺させる。

「エトワールか…!? すまない、助かった!!」

「気にせず。それよりこの機体は…!」

黒い機体は、かつてアクシズの戦いするとき一度だけ目撃されたと言われるガンダムタイプと同形状の機体だった。

「………よりによって最悪の時に出会ったな…」

ガンダムはシールドを構えると圧縮されたビームがシールドから放たれる。

「来るぞ!!」

「………っ……!」

お互いなんとか回避したもの……あの機体相手では勝率は皆無なのは目に見えた。

「ビームライフルで!!」

ビームを放つがガンダムは悠々とシールドを構え、ビームをかき消した。

「…何…!? ビーム兵器が効かないのか!?」

「なら、キャノン砲を使います!!」

両肩のキャノンから弾丸が射出され、ガンダムへと迫るが、ガンダムは胸部からミサイルを発射し撃ち落す。

「まずいな……武装が効かない……！」

「……いけない！」

ジムの前に立ちふさがり、直撃を受ける。

「エトワール!？」

「……ぐっ……!!」

機体が頑丈だったおかげで、私自身にはそれほど怪我は無かったが、これでは勝ち目がない。

「……どうすれば……。」

そんな中に、無線が入ってくる。

「ブランシヤール君、聞こえるか。」

オービットさんの声……。

「そのままではダメだ、一度こちらへ戻れ」

「ですが、そうしたらムゲンさんが……。いえ、解りました。一度撤退します」
状況が状況だけに、今の私では足手まといなのは自分でも理解できた。
それに、彼は何か手があるようで、ならば、信じてみるしかない。

「聞こえているね、クロスフォード君。しばし耐えるんだ。今は……」

「……何か手があるんですか？」

「ここはどうか、私に任せてはくれないか。……………少しでいい」

「分かりました。出来るだけやってみます」

「頼んだぞ…。さあ、エトワール、こっちに！」

……………今…私を呼び捨てに……………？

迷いを振り切り、誘導された位置から施設へと入る。

コックピットから脱出し、オービットさんの元へ。

「無事だったか…良かった…」

「私は何とも……。でも、急がないとムゲンさんが」

彼は大きく頷き、こちらへと言いながら歩きだす。

「今から見せる機体は、元々は私達が使う予定だったのだが……………君に託そう」

「……………」

オービットさんは機体を覆う布を取り払う。

そこに現れたのは紫の色をしたジェガン…のような機体だった。

「…これは……………」

「V—アルバ。元々は私達が施設から脱出して我が子を探すために造った機体だった。だが、それももう”要らなくなつて”ね」

「……………」

要らなくなった…とはどういう事なんだろう。…いいや、何故か自分の中での疑問も少しづつ晴れ始めているのが理解できた。

「時間が無い。1回きりだがビームライフルとキャノンは使えるようにしてある。うまく使つて切り抜けてくれ」

「…了解」

機体に取り込みシステムを起動させていく。

凄…ガンキャノンより全てにおいて段違いの性能……。

これなら、彼を守ることも出来る……!!

「エトワール・ブランシャール、Vーアルバ、出撃します!!」

再びの戦場。だが、今度は違う。

ボロボロのジムを捉えると、小さく微笑み

「……死なせませんよ。あなただけは」

「……エトワールか…?!」

ガンダムとジムの間に割つて入り、ガンダムを見据える。

両肩のキャノンと両手に装備したビームライフルを一斉発射。狙うのはガンダムで

はなく、周りのジエガン。

数を減らすのは戦場では当然の行動だ。後はガンダムという所で、ガンダムは踵を返して撤退していく。

相手も人間だ、数的不利では分が悪いと感じるのは当然だろう。

その後私達は施設へと帰還。なんとかムゲンさんを守れてよかった。機体から降りると、元気そうな彼の声が飛び込んでくる。

「エトワール！」

あの嬉しそうな表情を見るのも悪くは無いと、最近思い始めている。

「無事のように安心しましたよ、ムゲンさん」

「……ありがとう。助かったよ」

「礼は私ではなく、この機体に言ってください」

「……V—アルバ……だっけ。どんな意味が込められてるんだ？」

意味……考えたことなかった。すると、背後の声の主が

「それについては私が説明しよう」

「オービットさん……」

「無事のようなだね。ハートライト君が心配していたよ」

「……は、ははは……」

「さて、名前の意味、だったね。Vはviolet……つまりまあ機体の色のヴァイオレットの略称だ」

「ヴァイオレット……？パープルじゃないんですか？」

「パープルと言うのは過去の色のことを言うそうだ。逆に、ヴァイオレットは“未来の色”を言うそうなんだよ。だから過去ではなく、未来へと願いを込めてヴァイオレットにしたんだ」

「……未来の色……か」

「そして、アルバは、“夜明け”と言う意味を持つ。どちらも、未来へと進んでいくモノだろうか？この機体は、未来を切り拓き、人々に繋いでいく機体となってほしいからそう名付けたんだよ」

ヴァイオレットアルバ……夜明けと未来……悪くない。

「……夜明けと未来か……。良い意味ですね」

「所詮は過去の人間のエゴさ。でも、今を生きる君たちにそれを背負わせることはしちゃいけない。だからせめて、私に出来ることで若者に力を貸したかっただけなんだ」
「オービットさん……」

「さて、もうすぐ機体の搬入も終わる。そろそろ地球へ戻るときだ。……それまでには

まだ時間が掛かるだろうから少し休憩しているといいよ」

「…はい、ありがとうございます。ほら、エトワール、行こう」

ムゲンさんが促すが、私は静かに首を横に振り

「私は少しこの人と話があるので、先に休んでいてください」

「……………そつか。分かったよ」

彼は少しだけ残念そうに格納庫を出て行った。

「……………V—アルバ、良い名前ですね」

私は改めて彼にそう言った。

「ああ。…私もそう思うよ。でも、さっきも言ったが所詮は人間のエゴさ」

「いいんじゃないですか?」

「…ブランシヤール君…?」

「貴方は、この機体に夜明けと未来の意味を込めたのは、きっと貴方の願いなんでしょう。願いまでエゴというのなら、何が正しいと言えるのでしょうか」

「だから、貴方は誇っていい。この機体に込めた意味を」

「……………ありがとう、ブランシヤール君」

彼に礼を言われて、なんだか急に恥ずかしくなつて、恥ずかしさを紛らわすために、背

を向けて言う。

「それでは、私も少し休憩しますよ」

「……ああ、お疲れさま」

疑問は、もう……晴れた。彼は……彼らは……

「ふざけないでください」

いつまでも強情で、一度決めたことは絶対に曲げない。

「エトワール……」

「何が息子のためにここで死ぬですか。何が何一つしてあげられなかったですか。……そんな……そんな小さなことを気にして、逃げるんですか」

「だが……私は……」

そんな覚悟が、私とよく似ていて——

「なら、私が貴方を許すと言えば、貴方はそれで満足するんですか？ 違いますよね。貴方は、そんな事で満足する人じゃない。むしろ、言われたくないから今まで私に親であることを黙っていたんでしょ」

その疑問は、確信に変わった。彼は、”私の父”だと

「……初めて私が貴方を見た時、少しだけ違和感を感じたのは、親だからじゃない。”私

に似ていたから”ですよ」

「私が……エトワールに……?」

「ええ。きつと、私も歳を取れば、貴方のような口調になり、もつと物腰も柔らかくなるでしょう。……何より、頑なに自分の意志を曲げない所を見て確信しましたよ」

”流石家族だな”と」

やつと、言えたんだ。この言葉を。

私にも家族が居たんだと。そんな父親が目の前で死のうとしているのを止めない息子は居ない。

「……………」

「いいですか、死ぬことは、罪滅ぼしでも何でもありません。貴方はただ目の前の”私という存在”から逃げようとしているだけです」

「過去が無ければ未来は無い。そして、貴方の未来を作るのは誰でもない、貴方自身。それとも、今目の前で手を差し伸べている人さえも振り切り、死を選ぶんですか」

「しかし……………」

「貴方は……………」

「なら貴方は何故あの機体に、未来と明日の意味を込めた!!!」

「つ……………」

「貴方が未来と明日の意味を機体に込めたのは、貴方自身が”生きたい”と想っている証拠なんじゃないのか!!」

「恨みつらみで命を捨てるのは、逃げる事と同じだ!!」

「戦え!!!意地でも生きて未来を見つめろ!!!貴方が男なら——いいや!私の父なら!!!」
皆が静寂に包まれる。

肩で息をしながら、地面を見つめると、自然と涙が零れてきていた。

そして一時の間が空いて、父が小さく笑う。

「ははは……。そうだな。私も歳を取ったという事か……、我が子に説教を食らうことになるなんて、思いもしなかった」

「アツシユ……」

父上は母上のほうを向いて微笑みながら言った。

「…死ぬことは、未来から目を背ける事になる。……彼らのおかげで目が覚めたよ。私も地球へ降りよう。……構わないかな?」

「…もちろんですよ、あなた……」

ムゲンさんのほうを見ると、とても幸せそうな表情をしていた。

まるで、自分の家族みたい……

いや……私が気づいていなかっただけなのかもしれない。

本当の家族は……既に行ったんだって。

「エトワール、良かったな」

小声で彼が言う。

私は涙を拭きながら

「ええ……。ありがとう、ムゲンさん」

一言、そう言った。

数日後、地球圏へと戻った私達だが、何やら様子がおかしい。

連邦の船とMSが地球へと降下していく……。

それと同時にムゲンさんが立ち上がり

「……………呼んでいる…。地球でリリーが助けを求めているんだ。……今すぐにも降りないと」

父上が言っていた通り、彼は本当にニュータイプだったんだろう。だから、私達には聞こえない”声”を感じた。

それが偽りだったらそこまでもかも知れない。

けれど、私は……………

「そんな！降りれる機体なんか無いよ!!」

”アイツ”を使う」

「無茶だよ！あの機体は大気圏突入能力は無いんだよ!」

「それでも…！声が聞こえて、助けを呼んでいる人がいるのに黙ってみている事なんかできない!!」

私は静かに立ち上がり、彼に問う。

「ムゲンさん。…その声は確かにリリーさんの声だったんですね?」

「…ああ。間違いない。最初に聞こえた声は…恐らくフアングのだ」

「分かりました。機体で準備を」

信じた。彼を、大切な家族を信じたかった。

「エトワールさん!」

今にも飛び掛かろうとするリナさんに対し、私は首を横に振り制止する。

「大丈夫です。ムゲンさんでも安心して大気圏を突破させて見せます。父上、V—アルバのシールドは」

「…ああ、ある。試作で1セット造ってあったのを持ってきた」

「十分です。早速性能テストを兼ねて彼に”飛んで”もらいましょう」

「…なるほど。よし、分かった。クロスフォード君。聞いた通りだ、機体に乗り込んだら

いつも通り機体を動かしてくれ」

「……了解」

そう言つて彼は格納庫へと走り出す。

まったく、彼女へのケアが先だろうに……。

私は俯くリナさんに口を開く。

「リナさん」

「……なんです」

「信じてください。夫である彼を、そして、”私達家族”を」

「……エトワールさん……。分かった、貴方を信じるよ」

私は力強く頷き、格納庫へと向かう。

V—アルバでその機体を見た時、本当に彼はバカだと、リナさんが止めようとしたのが理解できた。

でも、そんな彼だからこそ信じたいと思えたのかもしれない。

V—アルバのシールドを、その機体に装着しながら想う。

私の家族を繋げてくれた彼を、今度は私が支えなければ。

今の私に出来る事を

正面のハッチが開き、一歩ずつ踏み出していく。そして、深呼吸した後

「ムゲン・クロスフォード、ガンダム・ピクシー、出撃する!!!」

その背中を見送りながら、父上に通信を送る。

「父上、彼は……ムゲンさんは凄い人です」

「……かも知れないな。だが、私にはエトワール、君も十分凄い人だ」

「……何故です?」

「命を捨てるような行動を、彼がしても、動じずに信じようとした。本来ならハートライト君みたいになつてしまはずなのにな」

「大体は、彼と、部隊のおかげですよ。それに、やっと私にも理解できたんですから。」
「家族」というものを」

「後、私はV—アルバを造った父上と母上を信じています。私を探すためにこの機体を造ったんですから。きつと……」

「……よ、よせ。恥ずかしい話だよ」

「……ふっ」

地上に降りる頃には、既に事は終わりを迎えていた。

荒野に佇むピクシーの背中には、多くの重荷があるように思えた。

彼はとてもたくさんの重荷を力に変えている。

前の私ではとても追いつけないと思っていた。

でも違った。

追いつく追いつかないではないんだ。

彼にも背負うものがあるように、私にも、背負うものがあつたんだと

彼のおかげで知ることが出来た。

私は、私に乗っている荷物を守るために、戦おう。

そして、信じよう——” 明るい夜明けの未来を”

外伝 完

ラプラス戦争編

65：進む者と止まる者

宇宙世紀0096——誰にも気づかれぬ場所で、事は胎動を始める。

——いや、それよりももっと前から始まっていた。

男は、モニターを見つめながら不敵に笑う。

「……これで、25部隊目だ。見事な戦果じゃないか」

資料を机に投げ、横にいる補佐官らしき男に言う。

「ええ。」ネズミ刈りの隊員も良くやってきています」

「……そうだな」

一瞬男が言葉を返すのに時間が掛かったことなど、補佐官は気にも留めなかった。

「…それで、”リファースト”のほうはどうなった」

「はい。昨日、月のグラナダ付近にいた模様です。そこからは再び消息が途絶えました」

「流石に一筋縄ではないかないか……。流石、フル・サイコ・フレーム機と言ったところか」

「しかし、どうしてあの機体を追うのです？あれは連邦にとつては邪魔かもしれません

が、特務部隊では……」

「そうだ。…が、しかし、放置しておくのはもつたないだろう。とらえてデータを取るんだ。そしてさらに強い機体を作る、というわけだ」

「なるほど……………。しかし、そのための人員は……………」

「人は気にすることはない。」いくらでもいるのだから」

その言葉に、補佐官である男は心底恐怖を感じた。

理由は分からないが、彼の言葉から伝わる底なしの恐怖が、彼をそうさせたのかもしれない。

「…さて、そろそろ本命を叩くとしようか」

「という事は……………ついに……………」

「ああ、”ネズミの親玉”を叩くとしよう」

資料に映る男の写真を見ながらニヤリと笑い、言う。

「さあ、ラストダンスの時間だ、ムゲン・クロスフォード」

宙域に存在する機体は1機。あの機体を落とせば作戦は終了だが…

「……………向こうも特務隊か……………！なら!!」

バズーカを拡散式に変更、2発放つ。

相手の緑の機体はそれをいとも容易に回避し、接近してくる。

「…肩部ミサイルから3番、発射!!」

肩部に搭載されたミサイルを発射、しかし、これも容易く回避。

「……っ!!」

ファンネルの感覚、肩部のミサイルラッチをパージし、サーベルを引き抜きながら”
緑の四枚羽”に接近する。

「この距離ならファンネルは使えない!!」

お互いにサーベルとサーベルがぶつかり合う。

切り抜けあい、反転し、再び火花を散らす。

「易々とやらせるものか…!!」

バズーカを近距離で放ち、四枚羽に煙をまとわせた瞬間、一気に斬りかかる。

「…墜とせる!!」

大きく振りかぶったのが災いした。次の瞬間、煙の中からモノアイが怪しく光り
大きな振動と共に俺の視界は真っ暗になった。

「……っはあ…!!……………墜とされたのか……………」

モニターの真ん中にでかでかと墜落の文字が浮かび上がる。

正直、そんな簡単に倒せる敵じゃないのは分かっていたが……

「はい、終わり。残念だったね、ムゲン」

コックピットが開き、銀髪の長い髪を帽子に入れた彼女が顔を出す。

「……もう少しだったんだけどな、油断したよ……」

「実戦ではやめてよね、本当に死んじゃうんだから……」

「……分かってるさ、そうならないためのシミュレーターだったんだからさ。……丁度良かったさ、これから俺たちが相手にする”袖付き”の実力を見せて」

俺が行っていたのは、先日特務部隊のジエガン3機が四枚羽と呼ばれる機体に襲撃された時の戦闘を基にしたシミュレーター。

リナがいち早く解析して、シミュレーターにしてくれたものだ。

部隊の皆この四枚羽にコテンパンにされたそうで、唯一倒せたのはリリーくらいらしい。

あんなのとは実際に会いたくは無いが、もし会ったら、今度はやられるわけにはいかない。

「……さて、今日はこれくらいにしておくか」

「分かった。やりたくなったらいつでも言うて」

「ああ。ありがとう」

コックピットから降りて、格納庫を後にする。

廊下で青い髪の女性とすれ違う。素知らぬ顔でそのまま食堂へと向かおうとしたら、その女性に手を掴まれた。

「先生、何で無視するの？」

「え、いや無視したわけじゃないよ。は、ははは……」

振り返ると、少し長めの青い髪の可愛い子が、頬を膨らませてこっちを見ている。

「嘘だー！ ぜったい気づいてたもの!!」

彼女は軽く地団駄を踏みながら問い詰めてくる。

リリーは昔では考えられないほど明るい女性になった。誰とでも話してくれるようになったし、教育担当だった俺としては何よりもうれしい事だ。

なんて幸せそうに頷いていると

「ほら、また聞いてない!!」

おでこを人差し指で軽く突かれてしまう。

「は、ははは……ごめんごめん。食堂でコーヒーでも飲もうかと考えてたからさ……」

「もう……。ま、いいや、私も一緒に行つていいよね？」

「ああ、構わないよ」

昔では嫌っていた食堂でさえも、何ら抵抗なく行けるようになっていいる。
我が子が成長するかのごとく嬉しい。

「…今日は何奢ってもらおうかなあ……………」

「……………はあ……………」

少し……………わがままに育ててしまったかもしれない……………

「……………ふう……………」

コーヒーを一口。ゆつくりと落ち着ける時間の一つだ。

「先生、ケーキありがとね」

紅茶とショートケーキに舌鼓を打つリリーが言う。

「気にしないでいいよ。いつも頑張っているから、これくらいはしてあげないとね」

「……………私、皆と同じ事しかしてないけど？」

「かもしれない。けど、昔の君じゃそれすら難しかったからね」

「今と昔は違うよ、先生」

「そうだね……………」

静寂。何も考えず、ただ静かに時間が過ぎるのを感じる。

ふと、リリーがフォークを置いて口を開く。

「そういえば、先生もあのシミュレーターやったんだっけ？」

「ああ、さつきやってきた」

「どうだった？四枚羽、倒せた？」

そんな彼女の期待の眼差しに対し首を横に振る。

「……そっか……。やっぱり、強いよね……」

「でも、リリーは倒せたんだろう？ 凄いじゃないか」

「……そう……なんだけどね……」

リリーは少し寂しそうな顔をしながら言葉が続ける。

「……私だけが倒せて、みんな倒せない……それは何だか嫌……」

「……どうして」

「独りだって……皆とはやっぱり違うんだって……思っちゃうから……」

彼女はきつと、普通じゃない事が嫌なのかもしれない。

皆倒せない中一人、リリーだけが四枚羽を倒せて孤独を感じている。

「いいかい、リリー。確かに、皆倒せない四枚羽を倒せたりリリーは凄さ」

「……先生……？」

「だからって、それでリリーが特別だなんて誰も思わない。…俺が負けたのは、リリーよ

り技術が劣ってたのと……油断さ。だからリリーは、今のままいけばいい。虐める人がいるなら、俺が守ってあげるから」

「ほんと……？」

今にも泣きそうな顔で彼女は俺を見る。

それに対し俺は静かに頷きながら言う。

「ああ、本当だ。俺はリリーの先生なんだからな」

「……ありがと……」

「気にしないでいい、リリーはリリーらしく、ね」

「うん……」

「おやおやあ？ムゲンさんがリリーちゃんを泣かせてますねえ」

その言葉で食堂の全員がこちらを見た。こういう面倒を持つてくるのは大体……

振り返るとやっぱりそこに彼女は居た。

黒の短髪に眼鏡をかけてニヤニヤとこつちを見る女性が。

「違うよ、ユーリ。リリーを励ましてんだ」

「本当ですかあ？だってほら、リリーちゃん、まだ泣いてるじゃないですか」

「えっ？」

リリーのほうへ振り返ってみる

「うう……えぐつ……先生が……先生が……!!」

「リリー……!?!」

何でこうなったの!?

「あーらら、完全に泣いちやってますねえ……。リリーちゃん、どうしたらムゲンさんを許してあげられます?」

するとリリーは、泣きながら言う。

「ショートケーキをあと一個奢ってくれたら……」

その言葉を聞いてユーリはこつちを見てにつこり笑いながら

「だそうですよ?」

「な、なんで……?」

リリーのほうを見ると、目元は両手で隠しながらも、俺の方に向けて舌をちよつと出して笑っていた。

「……はあ……分かったよ。もう一個だけだからね」

「やったあ!先生大好き!!」

俺の言葉を聞くや否や今まで泣いていたのが嘘のように明るく笑顔を見せてくれる。

……いや、実際嘘なんだが……

「あ、私の分のもお願い——」

「却下」

「えー、ケチですなえ、相変わらず」

「ケチじゃないからな、まったく……」

穏やかな午後の休憩時間。こうやって弄られたりしながらも、平和だと感じれるから、俺は嫌いじゃない。

戦い続ける日々よりずっとマシだ。

でも実際にそんな事言えばユーリがつけあがるだけだから心のうちに留めておこう。

宇宙世紀0096、シヤアの反乱から既に3年が経過し、地球圏は穏やかな生活に戻るかと思われた。

しかし、ジオン軍残党袖付きが宇宙で連邦軍に攻撃を仕掛けているという。

そこにはラプラスの箱とかいうよくわからないものまで出始めて、連邦は、そのラプラスの箱の鍵であるユニコーンガンダムと共にラプラスの箱の在りかを探しているらしい。

実際に俺が見たわけじゃないから何とも言えないが、話によれば、ユニコーンのパイロットはまだ若い少年だという。

……ガンダムには、一種の呪いでもあるのだろうか……、若き少年を戦場へ駆り出すような……そんな呪いのようなものが……

一方の地球に住む俺たちは、袖付きに感化されたジオン残党を倒す任務に日々明け暮れ、遠征を繰り返している。

とは言っても、どれもこれもが小規模で、大した問題にはならないモノの、相手が相応な手練れなだけあり、一年戦争からの生き残りが多い俺たちが駆り出される回数^がとても多い状況だ。

だから、少しの休憩や、コーヒーブレイクでもあるとだいぶ気が楽になる。

やはり人間は血や死体ばかり見ていると気が滅入る。

ただ、上の人間はそんなことなど一切構ってはくれない。

「敵MS部隊確認。リリー、何機いる」

「……………2機……………いや、3機……。今回も小規模みたいだね」

「…小規模でなければ困るよ、今回は俺たち二人だけの出撃なんだから」

「そうかなあ……私とこの子だったらあんな相手……………って、地上だとファンネルは使えないんだった……」

「そういうことだ。……………俺が斬り込む、リリー、援護は任せるよ！」

「分かった!!」

スラストスターを起動し一気に相手との距離を詰める。

相手の機体も型の古いドムとザク……機体性能ならこっちに分がある。

相手の前まで接近して一気に横へ、その瞬間、背後からビームが飛び、ドムのコックピットを貫いた。

呆気にとられるザクに、ダガーを引き抜いて斬りかかる。

咄嗟に対応したザクがシールドで防ぐも、二射目で足を貫かれ地面に横たわる

「……可哀想だが……!!」

ダガーで相手のコックピットを刺し、ザクが動かなくなるのを確認後もう一機を捉える

相手にとって数では不利だ、俺は通信を開き相手のパイロットへと口を開く。

「ザクのパイロット、聞こえるな。今すぐ投降しろ。状況は分かっているはずだ」
するとザクのパイロットからの返答が来る

「悪いが、たとえ状況が悪くとも、退くことは出来ん! ジオンの軍人としての意地がある!!」

「その意地で命を無駄にする気か……?!」

「軍人の誇りを愚弄するのか!! 俺はジオン軍の軍人として今まで戦い続けてきたんだ

!!

「そんなの、見ればわかる。その機体を見ればな」

「……………何……………」

「だが、その誇りを、お前が生きた証を誰が覚えていてくれる。誰が記憶してくれる」

「……………」

「誇りのために死ぬのも構いはしないが、生きて掴む未来だってあるはずだ。…投降して、機体を破棄しろ」

「……………未来……………か」

「お前の残りの命を、戦争以外の事に使うんだ。これからは、ジオンの軍人としてではなく、一人の人間として。そして、もう戦争なんかに関わるな。でなければ、俺はお前を殺す事になる」

「……………アンタ、良い奴だな」

「…そんな事ない。人間誰だって、そういう生き方をしたっていいってただけだ」

「……………そうだな。……………でも、悪いがその誘いは断らせてもらう」

何となく理解はしていた。誇りに生きる者に何を説いても、その意思是曲がらないことくらい。

「……………そうか。リリー、撤退の準備だ。この機体は、俺がやる」

「…分かった、なるべく早く戻ってね」

先にリリーの機体を離脱させ、ザクと相対する。

「すまないな、俺の最期に付き合ってもらおう事になって」

「…仕方ない事さ、俺は連邦、お前はジオン。戦う宿命なんだから」

「…でもいつか来る、分け隔てない世界を見届けるために、今は…」

もう一本のダガーを引き抜き

「期待はしていない。だが、この最期の戦い、楽しませてもらう!!!」

互いに詰め寄りダガーとヒートホークがぶつかり合う。

「そうだろうな！長い間誇りと意地で戦ってきたお前では、そうなるのも当然だ！」

間合いを取って頭部バルカンを放つ。

それをシールドで受けながら突っ込んでくるザク

腕を交差させ受け止める。

機体と機体がぶつかり合い、ギシギシと機械が擦れる音が響く。

「意地だけでこの17年…!!一年戦争の敗北から、俺は何度も苦汁をなめさせられた

…!!」

「それだけの人生で…!!」

「お前も似たようなモノだろう…!!」

お互い間合いを取って、再び切り結ぶ。

「奪って奪われて……その繰り返しで……!!」

「俺もお前も互いに奪った!!だから今がある!!」

「そうかもしれない……だが決定的に違うのは……!!」

力で押し切り、ザクの体制を崩したところを見逃さず、一気に胴体を両断する。

「……そこで諦めるかどうかだ」

「……未来を信じるか、そうでなく立ち止まるか……。それだけの差だ」

両断されたザクを見下ろしながら言う。

「……信じたかった……でも、信じることが出来なかったんだ……」

「言うな、そんなのは、分かっているんだ」

「……俺も……本当は生きたかったさ……。だが……戦争という呪縛……ジオンと

いう存在は……俺を逃がしてはくれなかったんだよ……」

「……」

「……話を聞いてくれて……ありがとう……」

「お前の誇りも、生きた証も、俺が記憶し、背負おう。それが、生きる者の務めだ」

「……嬉しい……ねえ……」

その言葉を最期に、機体は爆散。俺の目の前でザクは粉々に消え去った。

「……………もう何度、これを繰り返すんだ……………」

ジオン残党と言えど人間であることには変わりないだろうに……
虚しさを胸に覚えながら、帰還する。

基地へと戻った俺たちは、早速今回の戦闘の報告を隊長であるフアングへと伝えるために司令室に向かった。

「……………今回の戦果は3機、残党の動きとしてはこの前と同じような小規模なモノだった」
「そうか。それにしても、残党も妙な動きをする……………」

赤髪の青年が口元に指を添えながら眉をしかめる。

「どうしてそう思う?」

「毎回小規模で問題を起こす必要はないだろう、地上で蜂起するならもっと多くの残党を集めてからでも遅くはないはずだ」

「……………確かにそうだが……………、それなら、何を目的にあんな動きをする?」

「この前のダカールの問題への注意を逸らすのが目的……………? いや、早計か……………」

先日の事だ、ダカールの司令基地が巨大なビーム兵器で焼かれた報告は、こちらでも入っていた。

警備部隊は全滅。中には残党のMSも確認されたとはいえ、警備隊に破壊されてい

る。

あれだけのビームを放てる機体が残党にあるとは思えないが……………。

では一体何があつたの基地を壊滅させるに至つた……………？

「……………今は……………まだ何とも言えない状況だが……………、近々何かあるのは間違いなさそうだ。…港の警戒強化を基地司令に相談しておく。今日は良くやつたな」

「……………分かつた」

「ああ、そうだムゲン」

部屋を後にしようとした俺をフアングは止めた。

「なんだい？」

「これから休憩だろう、この資料をパーシヴァル商会へ届けてくれ」

資料を受け取りながら、不思議に思い質問する。

「別に構わないが、どうしてまた」

「個人的なものさ。前に増援を頼んだことがあつたお礼つて奴だな。頼んだぞ」

「分かつたよ、俺も丁度彼らに会いに行こうと思つていたんだ」

軽く手を振りながら司令室を後にする。

フアングは前よりも考える事が多くなつていようだ。まあ、残党がこれだけ活発に動き出せば怪しむのも当然だが。

パースヴァル商会

シヤアの反乱後、軍をやめたカカサが創設した傭兵派遣会社。

その後、メキメキと成長し今では宇宙産業の手助けも行っているというもつぱらの噂の大企業。

彼のおかげもあつてか、トリントンの居住区外れには、子供たちが勉学を学ぶことのできる学校が設立され、トリントンのみならず他の国からも入学者が来ている。

トリントン居住区には似合わない大きなビルを見上げながら、随分彼も頑張っているのだと今一度理解する。

「さて、カカサに会わないとな」

エントランスへと足を運び、受付の人へ会長へ渡したいものがあると伝えると、すぐに応接室へと案内される。

やつぱり企業というだけあつて、応接室も中々に緊張感がある。

暫く待っていると扉が開き、スーツ姿の女性が姿を現す。

黒く腰まで伸びた髪を一本の赤いリボンでポニーテールのように結っている、凛々しい女性。

「なんだ、ムゲンじゃないか、どうしたんだ急に」

彼女は俺を見るや否や堅苦しい態度を止めて椅子に腰かける。

「いえ、大したことじゃないんです、隊長から資料を渡すように頼まれてまして」

「おいおい、そんな堅苦しいの必要ないぞ？お前は私の弟分なんだからな！」

「いや…確かにそうだけど……、一応企業と軍というものが……」

「確かに、お前の言う事も一理あるか……。まあ、ムゲンならカカサも簡単に出てくるだろう。しばらく話でもしながら待っていようか」

フィア・グレイス、かつてはアッシュベリーと名乗っていたが、夫であるクロノードの死去後、姓を変えたいらしい。

曰く、娘のルナのため、そして自分が彼を忘れないために、自らをグレイスと名乗るようになったとか。

第一線を退いてなお、その力強さで商会の副会長を務めている。

「それで、アウロラはしっかり勉強に励んでますか？」

「ああ、随分物覚えが良くてな、ルナと仲良く勉強しているよ」

彼女は、俺やリナが忙しい時、代わりに孤児院の管理をしてきている。前まではエミリーがしてくれてはいたんだけど、如何せん人数が増えてしまった手前、人手が足りなかったのだ。

「それは良かった……」

「最近は出撃に駆り出されるのが多いみたいだな。もう4日もパパとママを見てないって、アウロラが悲しんでいたぞ」

「すみません……」

フィアさんは首を横に振って言う

「こればかりは仕方がないだろう、私やカカサのように夜になれば家に帰れる仕事ではないのだから。それについても一応説明してあるんだろ？」

「ええ……。孤児院の事や娘の事は大丈夫だとは思うんです。ロイもずいぶん大きくくなりましたし、けれど、父親として、アウロラに構ってあげられないのが少し……」

「……お前の気持ち、痛いほど理解できるよ……。私が眠っている間、ルナはずっとそんな思いを抱いていたんだろうし……」

フィアさんは俺を見据え真剣に口を開く。

「でも、今のお前は軍人だ、やるべき事がある。それは全て、あの子たちのためになる。それだけは忘れちゃいけない」

「分かってます。俺は、俺に出来る事をやるだけです」

その言葉を聞いて、彼女は優しく微笑みながら

「……お節介だったな。だが、その意気だ。……つと、来たか」

その言葉と同時にフィアさんの背後の扉が開くと、スーツを着た男性が姿を見せた。「待たせたね、ムゲン君。まあ座って座って。じゃ、遠慮なくーっと」

一人芝居をしながら椅子に腰かけるこの男こそ、この商会の創設者、カカサ・キヤモイ。

弱小の商會を、ここまで大きなビルを建てるまでに至った手腕を持つ社長。

ただ問題としては………うるさい事。

「久々だね、カカサ」

「おうおう、てめえ、どの面下げて来やがったんだあ？つてな！はっはっは！久々だねえムゲン君」

「カカサ、一応客人だ、真面目にしろ」

堪らずフィアさんが会話を遮る。

「分かってるよ、さて、渡したいものだけ？フアングつちからの資料だよ？見せてちょうー」

カカサは俺から資料を受け取ると、パラパラとめくり読み進めた後、フィアさんに渡しして言う。

「うんうん、大体理解できた」

「………それで、どんな内容だったんだい？」

「大したことは書いてないよ。この前のお礼は普通に基地から頂いたし、後は、トリントンの警戒を強化してほしいってことくらいかな」

「やっぱりフアングは……………」

「ま、こつちでも情報は結構集まってはいるよ。残党の動きが妙だっというのも随分前から報告に入ってた」

「そうなのか…？じゃあ、ダカールの襲撃も…」

「ああ、あれも残党の仕業なんじゃないかって僕あ睨んでいるよ。そして、次のターゲットが……………」

人差し指で地面を指さすカカサ。

「じゃあ、フアングの憶測は……………」

「まあ、ほぼ的中するだろうね。ただし、いつになるのかは俺達でも分からない」

「……………」

「君たちはまたしばらく残党の鎮圧のために遠征するだろうし、やっぱりここはこつちで兵を集めておくしかないかな。相手が相手だし、警備隊じゃ相手にならないだろう」

「…それは、実際に戦って理解した。機体の改修や修理も完全ではないはずなのにあれだけの実力だ…」

「その時が来たら、私も出よう」

「ファイアさん……!?」

「街が襲われるのを、黙ってみているわけにはいかないだろう。それに、相手は手練れなんだろう? なら私も出るしか——」

「ダメだ」

それを遮ったのは意外にもカカサであった。彼は普段とは違う真剣な表情で言葉を続ける。

「襲撃された時、ファイアは、学校の子供たちと居住区に住む人々の避難に専念してほしい。戦う必要はない」

「……私では力不足か?」

そんな彼女の問いに、彼は無慈悲にも言い放つ。

「そうだ。数年眠っていたブランクに加え、最近ではまともにMSを扱っても居ない人間を、戦場へ行かせるわけにはいかない」

「……………そうか。……………資料を片付けてくる」

肩を落とす彼女を見送り、カカサと二人きりになる。

「…あんなにきつく言う必要は無かったんじゃないか?」

「ああでも言わなければ、きつとファイアは出撃する。これでも優しくしたほうさ」

「……………もし君が言わなかったら、俺が止めてたさ」

「それは無いな、俺は絶対に彼女を危険には晒せない。晒させるわけにはいかないのさ……」

「クロノードの為か？」

彼はふっと笑うと

「それもあるが、ルナの為でもある。いま彼女が居なくなったら、また俺たちのような境遇を受ける事になる。……それだけは、避けなきやいけないんだ」

「……そうだな」

「だからムゲン、お前もリナっちも、何があっても帰ってこいよ。アウロラちゃんのために」

「言われなくてもそうするさ。……邪魔したね、そろそろ帰るよ」

「ああ、ファングっちによろしく頼むよ」

彼の言伝を受け取り、俺は再び基地へと帰還した。

それからすぐに、出撃の命令が下された。またオーストラリアの各地で小規模の蜂起があったらしい。

今回は俺が単独で作戦に向かうことになり、また、他の場所へも部隊のメンバーが鎮圧へと向かう。

俺は、その時に何かを感じていた。

違和感………街へ何かが起きる予感が………。

その時は近い——

65 完

66 : 亡霊の妖精と魔獣に飼われた炎の魔神

宇宙世紀0096 地上に残存するジオン残党に不審な動きあり。また、オーストラリア各地で残党による小規模な蜂起が確認される。

幸い俺が任されたのはトリントン基地からさほど離れてはいない。

今回もまたある程度楽な仕事ではある……

しかし――

何かが引つかかる。

俺たちは……

アラートの音で現実へと引き戻される。

「っ……!!」

寸での所でダガーで攻撃を受け止め、状況を把握する。

「……考えてる場合じゃない……なっ!!」

力で押し切り、一度間合いを取る。そして正面に相對するドム型へ再び接近し、斬りかかった。

それを受けるようにドム型はヒートサーベルを抜いて鏢迫り合う。

打ち合い、互いに離れては再び斬りかかる、攻撃する位置を読まれているのか、俺が慎重になりすぎているのかは分からないが、妙に相手と同じ位置へと攻撃が重なる。

「ちいつ………ならばー！」

攻撃をいなして回し蹴り、吹き飛び体勢を立て直す暇も与えずに相手の頭部にもう一方のダガーを突き刺す。

トドメという所で背後からの殺気。瞬時に機体を動かし回避する。

そしてそのままの勢いで背後にいたザク目掛け接近し、両手のダガーで切り抜けた。

その一撃は、綺麗に両腕を切り落とし、敵の戦意をも削ぐ。

ザクとドム型の機体はなす術もなく後退していく。……これでいい。また来るなら、

今度は……。

レーダーに反応。さらに8機の増援が確認された。

おかしい……：幾らなんでも小隊規模を超える数が来るなんて……。

俺の考えすぎなのか……？

いずれにしても、今はこの状況を乗り越えるしかない。

数では不利でも、ここで退くわけにはいかない。違和感を振り切り、前を見る。

「……行くぞ、ピクシーー！」

一気に間合いを詰め、突出している一機のグフを両断、続けざまに腰のマシガンを構え、敵のほうへと乱射。

それを見て相手の陣形が崩れ出し、一機がこちらへと迫る。

「来た……もう一機!!」

数的不利ならば、一対一の状況を疑似的に作り出して状況を打開するしかない。

しかし、相手も手練れ、それ故にその考えは読まれているようで、俺の周りを他の機体が包囲し始める。

「分かっているさ……そううまくいかないくらい……。でもさ……!!」

瞬時に反転し、背後から迫るザクのコックピット目掛けダガーを突き刺す。

「それでも、やるしかないんだ……殺るか殺られるかなんだ……俺は……殺る……!!」

地面へと仰向けに倒れるザクからダガーを引き抜き、腰部分にラッチしてあるグレネードを2つ投擲、対象はMSではなく、地面。

爆風がピクシーを包み、姿を隠す。

これで動じるはずもないのは分かっている。だが、ほんの少しの隙は生まれる。

煙の中を突き進み、そして踏み込む。

分かる、感覚で……正面の敵が

「がら空きだ……!!」

煙から二つの瞳が輝くと、鋭い刃が軌道を描きドムの懐へと飛び、突き刺さる。

宙返りしながらドムに突き刺したダガーを抜いて再び相手の位置を確認。残りはあと5体……。

「……これだけやっても、まだ数が居る……。やはり一人では厳しいか……」

それでも、退くわけにはいかない。ここで彼らを見逃せば、また争いが生まれてしまう。

彼らも俺と同じで、過去に囚われ、意地と誇りをかけて戦っている。ならば、自らの使命と掲げたものの為なら、どんな犠牲でさえ……

そう思えば思う程、退けないと、俺の意志が再び戦う力を与えてくれる。

グレネードの残弾はあと一つ、マシンガンもギリギリ……だが、やるしかない。

『でも、今のお前は軍人だ、やるべき事がある。それは全て、あの子たちのためになる。それだけは忘れちゃいけない』

ファイアさんの言葉が蘇る。俺は小さく頷いた後、呟いた。

「……分かってるさ。……だから!!」

グレネードとマシンガンを構えながら1機のザクへと迫る。

「……まずは、マシンガン!!」

マシンガンを乱射し、相手を動かす

「そして、グレネード!!!」

最後のグレネードをザクの目の前に投げる、振動を受けたグレネードは爆散し、ザクの姿が見えなくなる。

その隙に背後へ――

機体を動かした時、脚部に電流が走り、一瞬動きが固まった。

「つ……ピクシーが間に合わないのか……!?……なら!!」

マシンガンを捨て、その場でダガーを抜いてザク目掛け投げつける。

一本は頭部へと突き刺さり、そして二本目は見事にコックピットを貫いた。

機体が動かないなら、パイロットが合わせるしかない、この一年、旧式のMSを扱う訓練をしておいて正解だった。

ある程度のイレギュラーくらいなら、俺が合わせることが出来る。……しかし……背後からの殺気。レーダーを見ると、背後に4機のMSが。

「……参ったな……武装も無いとなると……」

残るは拳……なんて、無理だよな。

大人しく投降するしか……

瞬間、背後からの爆音。レーザーを見ると、友軍の反応。……連邦の増援……？
何にせよ、今の好機を逃がすわけにはいかない。

マシンガンを拾いなおし、背後にいる一機のコックピットへマシンガンを押し当て、引き金を引く。

この距離なら、絶対に外さない。

地面に倒れるザク、正面を見ると、既にほかのMSは連邦のジェガンによって撃破されていった。数は2。

嫌な予感がするものの、一応連邦機に通信を送る。

「……こちら第00特務試験MS隊所属、ムゲン・クロスフォードだ、救援感謝する」

そう言いながら、脚部に隠した小さい実体型のダガーを引き抜く準備をする。

俺の思い違いなら武器を納めるだけだが……

俺の言葉に返答するように、ジェガンのパイロットが言う。

「気にすることはない。それに、俺はお前を助けたわけじゃない」
「何……？」

「手柄を取られたくなかっただけさ。お前の命と言う手柄をな!!!」

瞬間、ジェガン2機がビームライフルをこちらへ構え、発砲。

「くそっ！ やっぱりかよ!!! ならこっちもやるしかない!!」

脚部のダガーを引き抜いて距離を詰める。

2機のジェガンに目をやると、俺に応答していないジェガンが少しだけ動きがおぼつかないように見て取れた。

「……！」

素早く対象を変更し、新米のジェガンの元へ駆ける

そして、その勢いのまま、ダガーをコックピットへ突き刺し、引き抜く。力なく倒れるジェガンを横目に、もう一機の機体と相對する。

「……これで、一対一だ」

「……ふん。だから何だ、所詮お前の機体は旧式だ。いくら足掻こうとも、ジェガンには遠く及ばない」

「かもな……、だが、ピクシーも地上ではガンダムと並ぶ性能を發揮できる！そして、パイロットの腕次第で、ジェガンを超えることだってな!!」

「言ってる、お前を討って、俺の手柄にしてやる」

ビームサーベルを構え、ジェガンが突っ込んでくる。…乗ってくれたかダガーを右手に持ち替え、ジェガンと鏖迫り合う。

流石に、サーベルだけ取っても性能差があるのは分かった。…だが、こつちにはそれを上回る技術と経験がある!!

ダガーの力を緩め、相手が態勢を崩したところに蹴りを入れる。

「ぐっ……!! やつてくれる……!!」

すかさず間合いを詰めながら頭部バルカンとマシンガンを発射。

咄嗟にシールドを構え、それを防御した所を逃さない。

「いけえええ!!」

勢いそのまま思い切りダガーを右から左へと振りぬいた。

しかし、武装が実体型のダガーだったために、シールドを両断することは出来ず、傷をつけるだけで終わってしまう。

「っ……!!」

考えるよりも先に体が機体を動かし、シールドをバネに宙返りして間合いを取る。

「残念だったな、その武器じゃ無理だよ。お生憎様」

武器も機体にも性能差がある。そして、こちらは決定打の薄いダガーのみ。相手のコックピットを的確に狙うしか勝ち目はない。

一方ジェガンにはピクシーを追いつめるだけの推力と、そして豊富な武装があった。

くそ……! だが……こんな所で……!

互いにならみ合いが続く中、その状況を切り開いたのは一つの通信だった。

「やあやあムゲン君、ちょっといいかい」

「カカサか!? 一体何だ! 戦闘中だぞ!!」

「おや、それはすまないね。ただ、こつちも一大事だし。ほかの皆よりトリントンに近い君だからこそ最初に伝えておこうと思って」

「……どうしたんだ」

「トリントンが、襲撃されている。相手の目標は、トリントンの基地司令部」

「!!」

トリントンが…襲撃を受けた……? アウロラは……アウロラは……!

「アウロラは無事なのか!? 孤児院の皆は!」

「今確認中だ。すでにファイアが行動を起こしているから、何ともないと思うが……」

とにかく、君も急いでトリントンに来てくれ」

彼も相当忙しいようで、その言葉を最後にすぐに通信を切られてしまう。

「……邪魔だ……」

「ふん……これで終わりにしてやる!!」

目の前を立ちふさがるあのジェガンが…今はただ邪魔でしかなかった。

「お前が……!!」

一気に間合いを詰めて、ダガーで斬りかかる。それを受けるようにシールドで防御するジェガン

「お前が…邪魔だあああああ!!!」

左腕でシールドを強引にはぎとる。

「なっ…!!!」

ダガーを構え、そして

「ネズミ」のときに…」ネズミ刈り」であるこの俺——」

突いた。

「……はあ……はあ……!!」

彼の”最期の言葉”も気になりはしたが、今はそんな事を考えている場合では無かった。

ビームダガーを格納し、素早く基地へと移動を開始する。

モヤモヤとした違和感…そして、フアングの言っていたことが的中した。しかも、その話をしていった矢先に……。

狙っていたのか……残党は……。

俺が到着していた時には、すでに警備隊は壊滅状態、そして今も、残った警備隊と残党が激戦を繰り広げている。

そして、その戦火は、望まずとも居住区へとびようとしていた。

「……間に合ってくれよ……!!!」

機体を動かし、居住区へと駆ける。

残党だって何やってるんだよ……目的のためなら、同じ人間を殺していい理由になるって言うのか……!?!

前を立ちふさがる機体を2対のダガーで切り伏せながらひた走る、ただ皆が無事でいてくれることを願いながら。

居住区の端へと辿り着くと、そこに居たのは1機の残党の機体。そしてその足元には

……

「ルナ!!アウロラ!!!」

迷ってなんかいられなかった、そのMSをタックルで吹き飛ばし、居住区に戦火を及ばせないようにする。

「連邦のガンダムだど!?!何故ここに!!!」

態勢を立て直してこちらを見据えるドム。

「そんなことはどうだっていい!まだ避難できていない人がいるかもしれないのに、な

ぜ居住区を背に戦おうとした!!!」

「俺たちには意地がある! その障害になる連邦の基地に庇護される者たちなど……!!!」
「命は……!! そんなに軽いものじゃない!!!」

「減らず口を!!!」

モニターで子供たちが避難するのを確認する。……よかった…。

「命を侮辱する人間のいう事か!!!」

「俺の誇りを侮辱する人間が!!!」

互いに得物がぶつかり合い、火花を散らす。

「どれだけ俺たちが惨めな思いをしてこれまで生きてきたか、お前に分かるのか!?」

「分かりはしないさ! でも、だからって命を軽く見るのは違う事だ!!」

「お前たち連邦だって、人の命など軽いものとか見ていないくせによく言う!!!」

打ち合い、互いに衝撃で離れる、もう片方のダガーを振りぬくと、ドムはその手を掴み、ヒートサーベルを振り上げる。

ピクシーの腕でその攻撃を受け止め、互いに組み合う。

「何を……!! 連邦の中にだって、命を大切にしている人だっている!!!」

「軍人が綺麗ごとを言うかあ!!!」

「軍人である前に、俺は一人の人間だああ!!!」

押し切って、態勢を崩したドムへダガーを突き立てる。

力なく倒れるドムを見ながら俺は呟く。

「でも……軍人なのは本当さ。お前を敵だと思ってしまったんだから」

矛盾でも、言い続けなければいけない。これが正しいんだって。

リーダーを確認すると、さらにこちらへと4機ほど接近してきている。

背後には居住区が、これ以上退くことは許されない。

「なら……!!」

ダガーを構えなおした瞬間、背後から駆け抜けていく緑の機体。俺はその機体に見覚

えがあった。

「あれは……!!」

その緑の機体は果敢に4機のMSと戦闘を開始する。

「ぼーつとするな、ムゲン!!ここは戦場だ!!」

「フィアさん!?!なんで!!」

「私がただ黙ってみていられるほど我慢強い女じゃないのは知ってるだろ? カカサ

には黙って出てきた」

「……カカサに叱られるよ……」

「なら、今この場で居住区に戦火が及ぶことを許しているのか？違うだろ。思い出せ、お前の戦いは、あの子たちの為だろう」

「……分かってますよ、言われなくなつて！」

「その意気だ。ムゲン、この先に地上制圧部隊の指揮官らしき機体を確認した。お前はそつちへ向かうんだ」

「でも、ファイアさん一人じゃ……！」

ファイアさんはふつと笑つて

「何を言っている？私はお前の姉であり、そして何より、クロノードの妻だ。私の強さなら、お前たちが一番知ってるだろう？手練れだろうが負けはしないさ」

「……信じますよ、本当に無事でいてくださいよ!!」

「無論だ。……さあ、行けムゲン!!道は切り開く!!」

サーベルで1機を突き刺し、片方の手でビームライフルを持ち引き金を引く。その一射は他の機体を貫通する。

「……行こう、ピクシー!!」

ファイアさんが開けてくれた道を駆け、俺は指揮官機と思われる存在へと近づいていく。

それは紫のカラーリングをしたザクともグフともいえない機体。

機体の腕部に何本ものナイフを携えていることから、近接機だという事が容易に理解できた。

紫の機体は俺を見据えると

「……………その機体、随分と久しい」

聞き覚えのある声が機内で響いた。

多少低くなっているものの、昔聞いた彼の声だった。

「まさか……………リップパー……………なのか」

「そうか……………ピクシーの乗り手はムゲン、アンタだったか」

「何故……………ジオンに……………それに、その機体は……………」

聞きたいことは沢山あった。だが、彼は小さく笑って一言だけ

「野暮だな。この場には、俺とイフリート、そしてお前とピクシーが居る。その事実だけで十分だ」

彼は……………此処を死地と……………

「分かった。なら俺はレイスとして……………アンタを討つ!!」

「ああ、行くぞムゲン!!」

荒野に2機のMSが睨み合う。

かつて仲間同士であったものが、数十年という時を超え敵として相まみえている。この二人に、多くを語る必要は無かった。

一気に間合いを詰め、ダガーで切りに行く。それに呼応するようにイフリートもナイフを振りぬく。

刃と刃が、己の伝えたい意思と、今まで培った全ての技術がぶつかり合う。

互いに苦勞を超え別れと死を超えた先で、この場所に立っている。

だからこそ

もう一方のダガーで胴体を切りに行こうとするが、イフリートの手がそれを遮りピクシーの腕を掴む。

「歳を取っても、技術はまだまだひよっこか！ムゲン!!」

「何を…!!」

捕まれた腕を振り払い、右足でナイフを蹴り上げる。そして、頭部めがけダガーで突きに行く。

しかし、それを読んでいたかの如くイフリートは身をかがめ、腹部へと蹴りを入れてくる。

機体が吹き飛びながらもなんとか態勢を立て直し、再び接近し、切りかかる。

互いに得物がぶつかり合い、火花を散らす。

「楽しいぞ、ムゲン!!俺が戦った中で、最高の戦いだ!!」

「くっ……!!」

「お前なら、俺を殺せるかもしれない、そう思えたのはこれが二度目だ!!」

「リッパ……!!アンタは……!!」

イフリートが力を緩めたかと思えば、頭部へとまわし蹴りを決められ、さらにその隙に左腕を切り落とされる。

「っ……このっ!!」

素早く足払いし、回避した所にダガーを振りぬく。それによってイフリートの右腕が両断。

「ふっ……ああ……この感覚だ、俺は今充実しているという……この感覚!俺はこれを求めていた!!」

「それだけの人生で……!!」

「ああ、そうだ。だがそれも後悔しちやいない。シユナイドにムゲン、お前たちのようなパイロットと戦うことが出来たんだからな!!」

「アンタは……戦いで何を得たんだ……!!生き残った意味は……!!」

ダガーで切りかかるも、間合いを取られ回避される。

「意味なんか無い。俺を殺せるような奴に巡り合えなかつただけだ。そして、戦いは俺の心にぽっかりと空いた穴を埋めてくれる存在だ」

「お前に理解されるつもりも、理解してもらおうつもりもない。だが、今はそれよりも!!」

再び鏢迫り合い、火花を散らす。そしてリッパーはとても楽しそうに言った。

「お前と戦えることが何よりも楽しい!!」

「そのために残党で戦って……! 戦争を繰り返したいのか!？」

「俺には戦う事しかない。だから、戦えるなら、それでいい! ラプラスの箱も、それを取り巻くものも、何一つ興味はない!!」

「くっ……!! だから……!! 市民を殺していい理由にはならない!! 残党は……市民だつて平気で殺そうとしたんだぞ!？」

「これは戦争だムゲン! 人は死ぬ! 望まなくなつて!! そして、今日死んだ奴は、そこがヤツの寿命だつたつてだけだ!!」

「戦争で人が死ぬ……確かにそうかもしれない……!! だけどさ!!」

腹部を蹴り、そしてそのまま頭部へダガーを突き刺す。お返しと言わんばかりにピクシーの頭部が斬り飛ばされる。

「そんなの……人の死に方じゃないだろっ!!」

「俺たちにはそういう死しか、未来はないだろ!!俺たちは軍人なんだ!!」
「だけど……それでも!!」

互いに頭部が壊れ、満身創痍の状態だった。

次で決まる。

お互いの勘がそう告げた。

「……これで終わりにするぞ、ムゲン!!」

「リッパ……!!」

ダガーを構えなおし、イフリートを見据える。

そして、2機か駆けた。

勝負は一瞬で決まった。

ナイフをコックピット目掛け刺し込みに来るところ、機体を制御しギリギリを掠めてナイフは空を切り、ダガーがイフリートのコックピットの前で止まる。

「……………どうした、トドメを刺さないのか」

ダガーを格納し、首を横に振りながら言う。

「……………俺には、仲間は討てない」

「……………甘いな。これがお前じゃなかったら普通に切り伏せてた」

するとイフリートもまたナイフを納める。

「戦いを楽しんでいたようだし、これだと興奮めかな？」

「……いや、格付けは済んだ。俺の負けだ」

「リップパー……」

すると、イフリートのコックピットハッチが開き、壮年になったリップパーが姿を現す。そして俺もコックピットを開き、彼と相對する。

「……久しいな、ムゲン。そのピクシー、誰から」

「トラヴィスさんだよ、レイスとして出来る最後の事だつて、託してくれた」

するとリップパーはふつと笑つて

「彼らしいな」

「ああ、全くそう思うよ」

二人の間に風が流れていく。

そして少しの間を開けた後リップパーは口を開く。

「………：そういうえばさつき、お前は俺に言ったな、”生き残った意味”と」

「ああ」

「実は言うと、俺にも分からない。……だがいつか、俺を殺してくれる存在が、俺の心の穴を埋めてくれる場所があるはずだと思つて戦つてきた」

「リッパ―……」

「お前とはもつと——……!」

リッパ―が見るほうを見ると、遠くから連邦の機体が迫ってきているのが分かった。あれは俺達の部隊じゃない……

「……お迎えか?」

「いや、俺の部隊じゃない」

彼らの機体を見ながら言う。

「そうか。おい、ムゲン」

彼の言葉を聞き、彼のほうを見ると、赤いバンダナをこちらへと投げた。

「つと……リッパ―……?」

「ムゲン、イフリートに乗れ」

「どういうことだ、リッパ―」

「あれが狙ってるのはたぶん、お前とピクシーだ」

「えっ……?」

まさかさっきの男のような奴なのか……?

「ダイバーから話を聞いたことがある。連邦の特務部隊を事故と見せかけて壊滅させている部隊がいると」

「まさか、あれがその部隊だと……？」

彼は小さく頷き、ピクシーの手に乗って俺の肩に手を置いた。

「……最期の戦いが、お前との一騎打ちでよかった」

「リッパ……!!？」

「お前は、生きろ。俺には、戦いしかなかったが、お前には守るべきものも、家族もいるんだろ。だから生きろ」

「そんな、お前だって仲間じゃないか！」

リッパはコックピットに乗り込みながら言う。

「そうさ。俺とお前はレイスの仲間だ。仲間を守りたいと思うのは、フイクサーやお前からすれば当然なんだろ？」

「……………ダメだ、フレッド……………！お前は……！」

彼は小さく笑って言う。

「やつと、シユナイドが言っていたことが理解できた気がする。ムゲン、そのバンダナは、俺のレイスとしての最期のプレゼントだ。失くすなよ」

彼は俺をイフリートの手に乗せるとMSのほうへと駆けた。

「フレエエエッド!!!」

そのバンダナは、薄汚れていた。しかし、確かに存在した。フレッド・リーパーという男の物だった。

俺はバンダナを巻き、イフリートへと乗り込む。

そして、彼に背を向け歩き出す。

「……………後は任せてくれ、フレッド……………、レイスの皆……………」

その後、ロンド・ベル隊の到着によつて事態は終息。大型MAも沈黙が確認された。

別れは辛かったが、泣きはしなかった。

彼はきつと、俺が泣くために生かしてくれたわけじゃない。

だから、彼の分まで前を見なければ。

『辛い時は、笑おう。泣いてたら、前は見えないから』

…分かつてるさ、エヴァ……………。

命を超え、また一歩先へ……………。

何度繰り返せば、その果てにたどり着けるのだろうか……………。

だが、それでも、言い続けていくしかない。

それが、生きる者の使命だから

6
6

完

67：受け継いだもの

ジオンも街への攻撃はなるべく避けて戦っていたようで、あまり被害は無かったものの、流れ弾によって半壊し煙を上げる建物も数件見かけた。

……………どれだけ繰り返せば……………。言っても仕方のないことかもしれないが、それでも……………。

基地へと戻る前に、リップパーから託されたこの機体を何とかしなければならなかった。

「……………」

機体をパーシヴァル商会の格納庫へと向かわせる。

カカサなら、きつとこの機体を預けられる。いいや、彼でなければいけない。

「……………イフリート……………」

操縦桿から伝わる、多くの人の手を渡って今、ここにこの機体は立っている。

……………ピクシーも、コイツも……………。俺たちはもう、”過去の存在”だ。

だからこそ、新たな未来を、新たな存在に託さなければいけない。過去の人々がしてきたように、今度は俺たちが。

もしそのために、イフリート、君がいるなら……お前も何かに託そうとしている……？

「……いつか来るさ、イフリート、お前にもその時が」
操縦桿を軽く撫で笑って見せる。

商会の前まで来ると、コックピットを開き、警備に事情を伝え格納庫へと案内してもらう。

機体から降りるや否や、珍しい人物が声を荒げて叫んでいた。

いや、何となく分かつてはいたが。

「何故勝手に出撃した！」

声の近くまで行くと、案の定カカサがファイアさんを叱りつけている最中だった。

あれだけ釘を刺して言っていたのに出撃したんだ、彼の怒りももつともだと思う。

「……いいじゃないか、私はこの通り無事だし、それに住民の避難も済んでいたんだ。手が空いてたから力を貸しに行っただけだ」

「俺はダメだと言ったはずだ。このザクだつてもう旧式の機体だ、それにお前は何年も

ブランクがあった、今回は運が良かったただけだ！」

「……お前、随分変わったな」

「俺は……アイツとの約束を守っているだけだ。……お前は全く変わっちゃいない」

「立派だな、お前は」

「立派なもんかよ……俺はアイツにはなれやしない。ここまで来るのにだってヤツ以上
上に時間が掛かった」

場の空気がしんみりする前に割って口を開く。

「……いいのさ、自分のペースでやれば」

俺の声を聞き、二人が視線を向ける。

「おや、ムゲン。……嫌なところを見られたな……」

「どうしたんだい、ムゲン。機体でも無くなった？」

「……まあ、そんな感じさ。後、この機体をカカサ、君に」

後ろを向いて、イフリートを見つめながら言う。

「こいつぁ……イフリートか……。こいつをどこで？」

「……戦いの中で、ある人から託された機体だ。……俺が乗るより、カカサ、君が乗った
ほうがいい」

「そりやどうして。僕あ、今じゃ立派な企業の会長だよ？また戦いを強いるのかい？」

「違うさ、いつかきつと必要になる」

理由は無いが、直感がそう告げていた。彼には、まだ戦わなければならない存在が居る事を。

「へえ。…ま、ニュータイプの子が言うなら、一応信じておこうかな。1%くらい。いや、0.5%か」

「その五月蠅さこそ、カカサだな」

「そうそう、この俺は五月の蠅の如く——って誰がうるさいって!？」

「ふっ……ははは!! そうだな！これくらいがカカサらしい」

黙って聞いていたフィアさんが笑い出し、そう言った。

「無理してクロノードの事を考えすぎるより、自分らしくやってけばいいじゃないか。

お前はお前だ、アイツじゃない」

「んなのは分かっている。……ヤツとの約束を忘れないために、仕事をするときは、アイツと同じ視点に居ようとしているだけさ」

彼も彼なりに受け継ぎ、時代を見届けている。……俺とは違う視点から、世界を見ているんだ。

「私は立派な事だと思わず。それもまた、戦争とは違う戦いだ」

「……………悪い、少し席外すわ。……フィア、ムゲンの事頼む」

「ああ、任せてくれ」

そう言つてカカサは静かに格納庫を出て行つた。

「……………ファイアさん、もうあんな無茶はしないでください」

「お前もそれを言うか。でも、何となく分かつてただろう？ 私が出撃することくらい」

「……………ま、まあ……………」

「大丈夫さ、お前たち二人に迷惑はかけない。でも分かつてほしい。私にも守らなければならぬ者が居る事を」

「……………」

「それは、お前やカカサに守ってもらうものじゃない。私が守らなければならないんだ。アイツが残してくれた子を」

「……………そうですね。たしかにそうだ……………」

彼女にだつて守らねばならない者がいる。だからこそその出撃だと思つと、怒るに怒れない。

「ふつ……………ははは!!やはりお前は面白いな!」

真面目に考えてた俺にファイアさんは笑いながら俺の肩を叩く。

「えつ……………」

「そこで納得せず、それでも出撃するなって言ってくれなきゃ、アイツならそう言うてた。——…おや、私もアイツの事を考えすぎてたか」

「…そうですね、クロノードなら、きつとそう言うてたと思いますよ」

「……そうだな。……なあ、ムゲン」

「なんですか？」

「お前はいつまで戦うんだ？」

「え……？」

「もう、十分戦って来たじゃないか。そろそろいいんじゃないか？」

「…分かってますよ。でも、今じゃない」

「ほお？」

「俺たちのような存在は、もう過去の存在です。だから、もう現れる必要はない。けど、あと一つだけ、それさえ済めば…」

俺が本当に倒すべき敵を倒していない。アイツを倒さなければ、死んでも死にきれはしない。

「…決着をつけるために戦う、か」

「ええ。それさえ済めば、もう戦わないで済む。……リナにも安心させてあげられる」

「そうだな、じゃあ、きつとあと少しだ」

「ええ……。必ずそうさせてみせますよ」

ヤツを……。ヤツさえ倒せば……。

世界は、俺たちは変わる……。きつと……。

だから……。

「ムゲン」

彼女の声で現実を引き戻される。

「な、なんですか？」

ファイアさんは優しく微笑みながら言葉が続けた。

「気張るなよ、お前の後ろには、沢山の仲間がいるのを忘れるな。そして、お前の背中を支えてくれてることもな」

「はい……!!」

「いい返事だ。そうだ、基地に戻る前に一度あの子たちに顔を見せやれ。喜ぶぞ」

「……分かりました」

ファイアさんから子供たちが避難している場所を聞き、そこへ向かう事に。

商会の地下に建てられた一部屋。その扉は頑丈でちよつとやそつとじゃ動かないだ

ろう。

きつと、何が起こっているのかわからなくて心細いだろう…。そう思いながら扉を開くと――

「あー！それ私のペンだよ!!!」

「こ、心細い…はず……」

「違うもん！アウロラのペンだもん!!おねーちゃんのはそれでしょ!!」

「違うよ!!」

「違うない!!!」

正面で黒髪の少女と銀髪の少女が言い合いを繰り広げていた。

しかも……ペンの事で。

「むー!!アウロラ怒ったよ!!おねーちゃんのママに言いつけてやる!!」

「私悪くないんだけど!?!」

「悪いのはおねーちゃんだもん！アウロラ悪くないもん!!」

いや、どう考えても一方的にまくし立ててるだけに見えるが……。つと、そんな事よりこのよくわからない言い合いを終わらせなければ。

「……………俺が見るに、アウロラが一方的にルナちゃんにワーワー言っているようにしか

見えないけど……さて、一体何があったんだい？」

その声を聞いて、真っ先に反応したのが、銀髪の少女、アウロラだ。

「あ!!あー!!!!パパだ!!!」

俺を見るや否や、さっきまでのペン何て忘れたかのようにこちらへ駆け寄り飛びついてくる。

「つと……。アウロラ、元気なように安心したよ」

彼女を抱きとめて、優しく微笑む。

「パパー!会いたかった!!えつと、なんにちぶりだつけ?いち、にい、さん………」

まだ小さな手で指を折りこんで数を数える。うむ、我が子も随分成長したものだ。

「四日でしょ。アウロラ」

肩を竦めながらそう答える黒髪の少女こそ、フィアさんの娘のルナちゃん。成長してきて、だいぶ親とも似ているところが多く出始めている。

特に、結構呆れてアウロラにツツコミを入れるところなんかクロノードにそっくりだったりする。

「そっか!よつかぶりだ!」

「ルナちゃん、何があったんだい?ペンがどうって言うってだけ」

俺が聞くと彼女は首を横に振りながら答える。

「大した問題じゃないですよ。ただ、アウロラがペンを間違えて持つちゃっただけって話です」

「……そっか。ならいいんだ」

ルナちゃんは前より大人しくなって、何とと言うか…丁寧な子になった。昔はアウロラみたいにワーワーと可愛くお喋りしてくれたものだが、今じゃそんな事を見る事さえできな

きない。

しかも……
「あ……」ムゲンおじさん、お母さんは無事ですか……？」

年齢的には否定できないからあれだが、なんだろう…胸に何か刺さる。”おじさん”
という言葉が。

「ん、ああ、大丈夫だ。怪我一つないし、さっきまでカカサをからかってたよ」

「……お母さんらしい…。それを聞いて安心しました。ありがとうございます」

「気にしないで。俺もカカサも止めたんだけどね……」

「言葉で言ったところでお母さんは聞きませんよ。私のお母さんはそういう人なんですから」

「確かにそうだ」

ルナちゃんと話していると、アウロラが首を傾げながら聞いてくる。

「おねーちゃんのママがどうかしたの？」

俺が言葉を発する前に、ルナちゃんが言う。

「なんでもないよ、お仕事のお話だから」

「そっかー。おねーちゃんのママも、お仕事大変だね」

「…そうだね。私やアウロラのためにも頑張ってくれてるからね」

意味をあまり理解していないからこそその返答。それを理解できるようになったルナちゃんには、少し悲しい言葉だと思う。

ただ、アウロラにも、もちろん、昔のルナちゃんにも悪意はない。ただ単純に興味があつたから聞いただけ。

だから、怒れるわけが無い。俺も、ルナちゃんも。

「…勉強はどうかな」

「ええ、順調ですよ。早く多くの事を覚えたいと言っても、順番があるんだと言われて、中々先に進めませんけどね」

「そっか、まあゆっくりやっていくといいさ」

ルナちゃんは首を横に振って言う。

「そうは言つてられません。早く覚えて、お父さんを病気から救つてあげなければ」

「……………」

その言葉で、俺は返す言葉を見失ってしまった。

「ファイアさんは彼女にはまだ何も伝えてないのだろう。いいや、伝えられるはずがない。」

娘に、「あなたのお父さんは死んでいた」なんて。

彼女は、クロノードが亡くなったあの日から、ずっと今まで勉強を続けてきた。

「……俺だつて言えるわけじゃないじゃないか……。」

「……なんだ、その……その調子でがんばつてね」

「……ええ」

「……幸い、ルナちゃんは勉強をしながら言葉を返していたので、俺の顔は見られてないはず……。」

「パパ、どうして泣きそうなの？」

「……見てた子がもう一人いたのを忘れていた……。」

「そ、そうかな？泣きそう？気のせいだよ」

「……ふーん……。」

俺はアウロラを地面に降ろし、二人に言う。

「とりあえず、もうしばらくここでゆっくりしてくれ。後でファイアさんが迎えに来てくれるはずだから」

「はい！パパ！次はいつ会える？」

「…そうだな、アウロラがいい子にしていたら、すぐに会えるよ」

「分かった！アウロラいい子にしてるからね!!」

「ああ。ルナちゃん、アウロラをよろしくね」

ルナちゃんは静かに頷いてくれた。

それを見て俺は部屋を後にし、基地へと戻った。

それから数時間たった後、部隊の全員が基地へと帰還、そして救援に駆け付けたロンド・ベルへとお礼を言うために何故か俺とリナが選ばれ、旗艦であるラー・カイラムへと向かうことになった。

機体は一時的にフアングの使っているガンダムを使わせてもらう事に。

近代化が成されているこのラー・カイラムも、既に建造から3年の時間が経っている。

まあ、戦艦はそんな簡単に旧式にはならないとリナは言う。

格納庫には数機のジェガン、そして紫に塗装されたジェガンの改良型、そして白と黒の一本角の機体が

そして整備兵たちはシルバークライトのほうへと視線を向けながらも仕事をしている。

「あれ……」

「どうした、リナ」

「あの白い機体……、噂に聞く”ユニコーン”だよ、ムゲン」

「……あれが、ユニコーン……？」

何と表現していいのだろうか、モノアイも特殊な感じで、本当に全身が真っ白に塗装されている。

「隣のは……あれもユニコーンと同じ機体……かな……。でも、”一角獣”ってよりは、”獅子”って感じかな」

「それはまたどうして」

「角だよ。あれ、角っていうのは変じゃない？」

確かにユニコーンと比べてみれば角の形状が異なっている。それに、黒い奴には腕に凄いいゴツそうな何かが付いているし……。

「……まあ、そうだね……」

「あとあと、あの紫のジェガンタイプ！」

「なありナ、その話は艦長との話が終わってからでいいんじゃないか……？」

流石に堪えきれずに言う。

「……確かにそつか。よし！じゃあ早く話し済ませてきてね！私はここでシルバーライトを見守りながらユニコーンやあのジェガンを見てるから！」

「……わ、分かった……」

こう、他の部隊の船に乗るという機会がほとんどないからか、自分でもわかるくらい緊張している。

やることは変わらない、艦長にお礼を言つて帰るだけだ。

さあ、いくぞ。

深呼吸して扉をノックする。

「第00特務試験MS隊所属、ムゲン・クロスフォード少尉、入ります」

そこに居たのは、黒髪の俺よりも少し年上の男性。優しそうに見えるが威厳がある。

確か、道夜は彼とは面識があつたんだつたか。

「……ムゲン・クロスフォード少尉です。トリントンへの増援、基地を代表してお礼を言いに参りました」

「気にしないでくれ。君たちが無事で何よりだ」

「……ブライト・ノアさん……ですね」

「ああ。君とは初めて会うね。ファンング少佐や八雲道夜少尉……おっと、道夜少尉の事は君たちには酷な話だったな」

「いえ、気にしないでください。あの時、ほとんど俺は眠っていたので……」

「話は聞いているよ、第二小隊のエースが意識不明になったと。私達のほうも忙しくてなかなか面会も出来ず申し訳なかった」

「大丈夫ですよ。……あの、少しいいですか」

「なんだい」

今ユニコーンが居るのなら、あの”噂”が真実か確かめられるかもしれない。

「……ユニコーンのパイロットは本当に子供なんですか」

「ああ、今までガンダムに乗ってきたアムロやカミーユと同じように、彼もまた若い少年だ」

「……………そう、ですか」

やはりそうだったのか。……戦争というのは何故いつも……………

「変わらないな、人間も、歴史というのも」

「……え？」

「どうしていつも戦争が起きるのか、そしてガンダムに乗る者が若き少年なのか。……偶然にしろ、これほど悲しい事はないだろう」

「……そうですね。…代わってあげられるなら代わってあげたいですよ」

「だが、君もその一人だろう」

「え……………」

「君に何があったかは分からないが、エウーゴにいた時から、君のいた部隊は一年戦争を生き残った部隊として言われてきた。そして、そこには君もいた」

「何の因果かは分からないが、君も”ガンダムを駆る者”だった」

「…………君なら、彼の心を解いてやれるだろうか？…………無論、君が良ければの話だが」

ユニコーンを駆る少年と会うことが出来る…？だが、会ったところで何を言ってもやればいい…？

かつてのカミーユ君のように、何かを言っておげられるか…………？

分からない…。いや、でも、何か…伝えられることはあるはずだ。

「…………何を伝えればいいのかは分かりませんが、会わせてもらえますか」

「分かった。案内しよう、ついてきてくれ」

俺はブライトさんの後を追ひ、案内された部屋へと辿り着く。

「この中に、その少年が居る。…あまり時間は無いが、彼と話してみてくれ」

「はい」

「監視は外しておくよう言っておく、頼んだぞ」

扉を開くと、真つ暗な部屋の中に、一人の少年が座り込んでいるのが分かる。

その少年は、俺を見据え、言葉を待っているように見えた。

「……すこし、いいかな」

「……貴方は……？」

扉を閉め、少年の横に腰かけて答える。

「ムゲン・クロスフォード、君は？」

「……バナージ・リンクスです」

「バナージか……、良い名前だ」

「貴方も、尋問官なんですか」

俺は小さく首を横に振り

「まさか。ただ、ブライト艦長に頼まれただけさ」

「貴方は……一体……」

「……君と同じ道を歩んできた人、かな」

「俺と……？」

「ああ、俺も小さいころ戦争に巻き込まれて、軍人になって戦ってきた。若い時に、ガンダムに乗ってね」

「……ガンダムに……」

彼と話していると、何故だか、悲しい気持ちの流れ込んでくる。

先の戦いで、止められなかった、そんな断片が。

そうか……………これが…

「君は、たぶん、つらいかな」

「……………ユニコーンが示した座標が、また争いの場所になる。そうなれば多くの人が失われる」

「ロニさんだつて、被害者だつたんだ…………」

「君は、優しいな」

「え……………」

「自分よりも他人の事を想い、そして戦いで敵同士の人の事さえも、案じてあげられる。それは、誰にでも出来る事じゃあない」

「どんな命だつて、”戦争だから仕方がない”そんな言葉で片付けて良いわけが無いんだ。……………君はそれをよく理解している」

「理解しているからこそ、敵とも分かり合おうとしたんだろう？」

「……………戦争で人が死ぬなんて……………そんなの、人の死に方じゃありませんから」

「同感だよ。……………そんな死に方、普通はあっちゃいけないんだ。……………でも、君はそれを救ってくれた」

「君が行動してくれたからこそ、街への被害は最小限で済んだんだ」

「でも、俺は何も……」

「かもしれない。でも、今までだつてそうだ、君が行動すれば、死んでしまう人もいれば、逆に、救われる人もいる」

「命を秤にはかけられないけど、でも、そういう考えだつてできるはずだよ。戦いの中で人を殺してしまつても、君は一人の人間を救つたのかもしれない」

「殺したくて殺したわけじゃないですよ……」

「分かつてるさ。誰もそれを責めやしない。……誰かを撃てば、また誰かがやり返す。それがだんだん大きくなって、戦争となる」

「でも君は、その一部にならないでほしい。この狂つてしまった世界で、それでもと、分かり合えるんだと信じて言い続けてほしい」

「……」

「俺もそうだから」

「どういうことですか？」

「俺もかつて、恨みだけで軍に入ったから、分かるのさ。その時から、俺は、狂つた世界の一部になつてしまった」

「でも、君は違う。どこにも縛られない、自由な力がある。その力で、君は、君が成すべ

きと思ったこと、守りたいものを守るんだ」

「俺の……守りたいもの……」

「俺にはもう、自由な力は無いから。自分の力と、限界がある程度知ってしまった。だから、”自分の手で守れるものしか守れない”」

「バナージ君、戦いたくないなら、戦わないでもいい。でも、忘れないでくれ、行動には常に責任が伴うということを」

「……」

「すまない、言いたいことだけをバーつと言ってしまった。年寄りの適当な話だと思っ
て聞き流してくれて構わないからね」

「いえ、ありがとうございます。……少しだけ、気分が晴れた気がします」

「そっか……それは良かったよ。さて、そろそろ行かなきゃ」

俺は立ち上がり、部屋を後にしようとして、ふと彼に一言言った。

「……バナージ君」

「なんです」

「……信じているよ、”一人の人間としての君”と、ガンダムを」

「……はい」

俺が伝えられることは、これだけしかないけれど、それでも、彼に届いてくれたなら、

それでいい。

……若さか……、俺も随分歳を取ったな。

リナと再会すると、彼女は楽しそうにMSの事を話してくれた。……どれも何を言っているのか分からなかったけど、彼女が楽しそうに話していたから、何でもいいと思えた。基地へと戻るとき、リナはふと思いついたかのように口を開く。

「そういえば」

「どうした？」

「新型のMSだけどき、あれ、あと少して完成なんだ」

「へえ、それは楽しみだね」

「それでね、完成させるには、最後にムゲンにやってもらわなきゃいけない事があるんだよね」

「……俺に？」

彼女は頷いた後言う。

「そう、とても大切な事だから」

「まあ、何をするかは分からないけど、手伝うよ」

「ありがとう。帰ったら早速始めよ、時間は掛からないからさ」

「分かった」

俺はシルバーライトを動かし、基地へと向かった。

格納庫へ機体を止めると、彼女は慣れた手つきで機体のコックピットを開き、自分から降りて俺を手招きする。

そして、一番奥で布に覆われた機体の前まで行くと、ゆっくりと布を取り払う。

その機体の顔を見た時、俺は固まってしまった。

「……………こ、これは…」

「どう？カッコいい顔でしょ？あなたと関わりの強い”あの子”の顔そっくりにしたんだ」

「……………ピクシー……………なのか……………」

そこに佇む機体は、ピクシーの顔を持ちながら、また、彼とは違う存在となり、そこにいる。

バックパックには見覚えがあった、確か、ガンダムMk-2のバックパックだ。

「私達が生きてきた宇宙世紀のガンダム達の部位をモチーフにしているの。例えば、脚とか、第二次ネオ・ジオン抗争で活躍した”レガンダム”の脚部」

「腕は、さつき実物を見たけど、だいぶ近づけてある”ユニコーン”の腕部。そして胴体

は、噂でしか聞いたことが無いけど、NT専用ガンダムのガンダムNT-1の胴体っぽくしてみた」

「そして、バックパックは、貴方も見たことあるMk-2のバックパック」

確かに面影が残されている、しかし、それでも互いの邪魔せず調和された機体……これを……リナが……。

やはり、彼女は凄いな……………。

「名前はまだ”無い”んだけど、たぶん、この子もピクシーになるのかな」

「……………これをリナが……？」

「うん。私が貴方に贈る最後の機体。貴方に”あの子”を蘇らせてくれれば、完成する」

「……………蘇らせる？ 誰を……」

「ついてきて、コックピットで寝てるから」

リナは俺の手を引き、コックピットへと案内する。

コックピットの中は真つ暗で、何があるのかパッと見て理解は出来なかった。

「ムゲン、貴方はコックピットに座つてて、外から私が操作するから何もしなくていい

よ」

「この真つ暗な中で……………？」

「そう。……もしかして、暗いの苦手だった……………？」

「いや……、とりあえず分かったよ」

俺は言われた通り、コックピットに座り、リナの反応を待つ。

音のない静寂の中、暗く何も無い場所なのに、安心感を覚えた。

かつて……味わったことのあるような感覚……

「……何だろう……この感じは……」

突如、目の前の円柱の機械から光が溢れ、そこから、一人の少女が姿を現す。

その少女は目を瞑りながら、静かに何かを待っているように見えた。

この少女を……俺は知っている……。

肩までかかる程度の水色の髪。瞳はガーネットのように紅い。

整った顔つきで、優しそうな垂れ目。

その雰囲気は不思議と安心感を覚える。

そうだ……彼女は……。

「起きて、サポートAI、エヴァ」

彼女の声で、静かのその少女が目を開け、そして、目が合った。

「……真つ暗……。でも、分かるよ、そこに居る人。貴方は、”私分かる?”」

「……ああ、分かるよ。本当に、久しぶりだね、エヴァ」

「その声………そっか、やっと会えたね、ムゲン・クロスフォード」

彼女は俺を理解して優しく微笑む。

「エヴァ………どうして……」

「リナに感謝してね、私とまた会えるアレを使って、この機体に私を載せてくれたんだから」

「………リナが………？」

「うん。私はサポートAI”エヴァ”。戦う機体じゃなく、貴方とこのガンダムを支えるため、7年ぶりに復活したよ」

「………ほんと、凄いな……リナは……」

「流星、貴方自慢のお嫁さんだね！」

「……お嫁さん……う、うーん………なんか違うけど……まあ、いいか」

「嬉しいなあ……またこの目で世界を見ることが出来て。そのせいでリナにちよつと迷惑かけちゃったんだけどね」

「そうなのか……？」

「うん。この丸いユニット、私が造ってつてお願いしたの。こうやって、私の姿や行動をうつすことのできる鏡みたいな奴を」

そう言いながらくるっと回転して動いて見せるエヴァ。確かに、実際だったらこんな

感じで動いてた、なんて思い出す。

コックピットが自動で開き、リナが顔を出す。

「これで完成。エヴァが貴方を覚えた時点でこのガンダムは完成。それで、どうか？
ムゲンのピクシーで見つけた奴を勝手に使っちゃったんだけど……」

「いや、思ってもみないプレゼントだ……。ありがとう、リナ」

「ううん、なんてことないよ」

そんな俺たちの間に口を挟むエヴァ。

「まだだよ、まだ完成してない」

「え……？」

俺もリナも思わず声が出た。

「この子は目を覚ましてない。動きはするけど、”頭は寝てる”。人間で言うなら……
そう、”寝ぼけてる”かな！」

「……寝ぼけてる……？リナ、それはどういう——」

リナに顔を向けた時には、既にリナはコックピットの外で機械を動かしていた。

「なるほど、エヴァが言った意味が分かった。……困ったね……これは……」

「流石リナ、ムゲンよりも分かってくれる」

「どういふことだ……？」

首を傾げる俺に、リナは丁寧に説明してくれる

「この機体ね、サイコフレームが使われてるのは知ってるよね」

「ああ」

「そのサイコフレームが、”機能してない”」

「つまり……?」

「動かすだけなら出来るけど、本来の力は発揮できない。だからエヴァはこの子が寝ぼけてるって言うってたの」

「……なるほど……。どうやったらサイコフレームが機能するようになるんだ……?」

返した言葉でリナはうーんと悩んでしまう。

「私にも分からない……。ちゃんと動くようにはしてただけ……。やっぱり、感応波を拾うのを強くしすぎちゃったかな……」

「そういう事じゃないよ」

悩むリナに対してエヴァは言う。

「リナが悪いわけじゃない。ただ、この子が単純に長い間誰にも使われなくて”ふてくされてる”だけだから」

「……………」

二人で首を傾げてしまう。…エヴァは時々こんな不思議な事を言うから、あの時も結

構首を傾げてたっけ。

「いつか目覚めるから、その時を待とうよ……きつと、そのために私は居るんだから」

「……でも……」

「そうだね」

俺はリナの言葉を遮り、エヴァに笑って見せる。

「ムゲン……?」

「待つしかないさ、たぶん、俺たちがどうこう出来るものじゃないんだと思う。……動くなら、コイツを動かして目を覚まさせてあげないと」

「さっすがムゲン、分かってるね!」

「もう、そういう事じゃないんだけど……。まあいつか、ムゲンがいいなら。私も待つ事にするよ」

「ありがとう、リナ」

「別に……」

俺とリナのやり取りを見て、エヴァが

「ふふっ!噂に聞くおしどり夫婦だね!!」

「エヴァ!?!」

「ちよ、ちよつと!?!」

懐かしい子との再会、そして新たなるガンダム。……俺の最期のガンダム。
これで……奴と決着を付けられる。
世界がどうあれ、奴だけは……

67 完

68：共鳴するガンダム

どんなゲームでも、最後に待ち受ける敵はいつだって、主人公と関係のある存在、または対を成す存在だ。

なら俺にも、決着を付けなければならぬ存在が居る。

俺たちのような過去の人間は消えるべきだし、もう活躍する必要はない。

けれど、”ベルベット・バーネット”。ヤツを……ヤツを倒すまでは……、まだ終われない。

そんな彼の居場所は、カカサでさえ探りにくく、中々進展しないまま、時が過ぎていく。

同時に、各地で起こる連邦の特殊部隊の壊滅の情報。地球だけでなく、宇宙でも特殊部隊が壊滅しているという。

しかも、そのどれもが”事故”。

フレッドの言っていた言葉。

そして、連邦兵の言った”ネズミ刈り”……。

……繋がっているのか……？

そんな矢先の事、カカサがベルベットの場所を特定できたという報告だった。

「……その情報は確かなのか？」

フアングが真剣な表情で言う。

「ああ。間違いはない、ヤツの居場所は……ここだ」

カカサが指さすのは、何も無い宇宙空間。地球との距離もそれなりにある場所だった。

「……ここは、かつてサイド2、ムゲン、君の故郷のコロニーがあつた場所だ」

「……………」

「何故、ここを彼が住処としているのかは分からないが、因縁を感じるねえ……」

「どうする、フアング。行くのか」

フユミネが静かに口を開く。

「……此処がそうだというなら、行くしかあるまい。アイツは、存在してちゃいけない人間だ。今まで俺達の部隊をいのように使ってくれた借りを返す」

「お前が行くなら、俺も行くぞう」

フアングは俺たちのほうを向きながら言う。

「皆、これより第00特務試験MS隊は、正規の軍事行動ではない作戦を行う。そのた

め、作戦の行動人数を少数に絞り、宇宙へと上がる。メンバーは後で伝える。以上だ」

ガンダムに乗り込み、静かに目を瞑る。

ベルベットが何故、かつてサイド2があつた場所を住処としているのか……、何のた
めに……？

そんな事を考えていると、少女がコックピットに顔を出す。

「先生、今大丈夫……？」

「……リリーか、うん。大丈夫だよ」

リリーは作業用の椅子に腰を掛け、俺に問いかける

「先生は……宇宙へ行きたい？」

「……行けるならね。でも、フアングが選ぶから何とも……」

「私は行きたい」

「リリー……？」

「分からないけど、行かないきや、私の願いが叶わない気がするから」

「……」

「……先生、ジェームスは……きつと生きてるよね。先生、そう言ってくれたもんね……」

「……ああ、大丈夫。生きてるさ」

俺の知るジェームスと、リリーが知るジェームスはたぶん違う。でも、きっと生きて
いる、そう信じなきゃ。

「……よし、私、頑張るね！」

「その意気だ」

「……ところで、このガンダム、先生のなんだよね？」

「そうだけど……どうしたの？」

「いいなあ……私もこういうの乗ってみたい」

「……うーん、まあリナに頼んだら何かしら作ってくれるかもしれないけど……」

「確かに！ちよつと頼んでみようかな！」

明るくなったリリーを見て、少しだけ聞いてみたいことが浮かぶ。

「……なあ、リリー……」

「なあに？先生」

「……君は……戦うことに躊躇いはあるかい？」

リリーはさつきまでの表情とは打って変わり、俯きながら言う。

「……あるよ。……人を殺すことだって嫌だよ。死にたくない。怖いよ……。でも……仲間が傷つけられるのはもつと嫌だ」

「リリー……」

「先生の言葉、今ならわかるの。私も、自分の両手で守れるものしか守れないから。だから、今自分に出来る事を精一杯するしかないって」

「……」

「確かに、人を殺す事も、自分が怪我するのだって、抵抗はあるけど、今まで、私をそうやって守ってくれた人がいたから。先生も、あの時私を庇って死んでしまった人も」

「だから、恩返ししてわけじゃないけど、今は、私もそういう立場にいるってだけだよ。私にも、人を守ることが出来るって、分かるから」

「……分かってるんだね……。リリーは凄いよ」

「凄くなんか無いよ、皆おんなじ。だから、困った時は先生を頼るし、フアング隊長を頼る。それが人間だから」

「……ああ」

リリーの言葉には、かつてとは比べられないほどの重さがあり、その瞳には強い決意と覚悟が宿っていた。

彼女はもう、生徒ではなく、俺の背中を守ってくれる仲間。同じなんだ。……そう思えば、少し寂しいかな。

リリーと別れた後、俺は食堂でコーヒーを飲んでいた。

……うん、美味しいな。

戦いが無い時間は本当に幸せな時間だ。

こういうなんてことのない時間を、俺たちはもつと大切にしていかなければいけない。

そして、多くの人のその時間を守るために、俺たちは戦わなければ。

「また考え事ですか、ムゲンさん」

背後からの女性の声、そして、声の主は俺の横を通り抜け、目の前の椅子に腰かける。

「悪いか、考えてちゃ」

「いいえ、別に。ただ、そんなに考え続けてると、ハゲますよ」

「…………お前は相変わらずだな、ユーリ」

「そうですかね。周りが変わりすぎなだけですよ、きつと」

ユーリは静かに紅茶を口に運ぶ。

「ユーリ、君は宇宙には行きたいか？」

その言葉を聞いて、静かに紅茶カップを置き、口を開く。

「そうですね、まあ、興味はありますよ。とは言っても、私がやることは変わりませんが」

「……………そうか」

「何となくなんですけどね、宇宙にいる気がするんですよ、道夜さんが」

「道夜が……?」

「ええ。シャアの反乱の時に勝手に抜け出して、どっか行っちゃいましたけど、まだ宇宙で漂ってる気がするんですよ」

「……………」

「やっぱりユーリも道夜の事が心配だったのか……。なんだかんだ言いながら、仲間だから……」

「早く戻ってきてくれないと、私が困りますからね。お菓子を提供してくれる人がいなくて」

「……………」

仲間だから……………、だよな……………?

「ま、なにせよ、このまま放置して死なせるつもりはありませんよ。ちゃんと抜け出した意味も、なにより、一発殴ってやらないと私の気が収まりませんので」

「…………大丈夫さ、きつとアイツも…………」

「ええ。長い間に一緒に居るから、大体言いたいことは分かりますよ」

「そうか」

「そういう意味では、私もニュータイプですかねえ…………」

「かもしれないな」

「さて、私はちよつと機体の整備でも見てきますよ。それじゃ、ムゲンさんはごゆっくり」

彼女は立ち上がり、軽く手を振つて食堂を出て行つた。

やはり、嵐のような女だ……。まあ、それも彼女らしい。

彼女と別れた後、廊下をゆっくり歩いてみると、青年とすれ違う。

「おや、俊太郎……？」

声をかけると、彼も立ち止まり

「あ、ムゲンさん！こんにちは！」

「ああ、調子良さそうだね」

「それなりつすよ！」

俺は彼と歩きながら話をすることにした。

「俊太郎、君は、どうする？」

「何がですかね？」

「宇宙へ行きたいか？」

俊太郎は迷う間もなく答える。

「俺は、地球に残りたいっすかね」

「そうなのか」

「やっぱり、MS乗ってても思うんですけど、地に足が付かないとなんか変な感じするし、地球も守らないといけないじゃないですか」

「……そっか」

「彼らが命を懸けて守って、繋げてくれた絆、この基地を守る人がいないと、ね。この前みたいなことはもう起こしたくないですから」

「確かにそうだな。…それじゃ、もし俺が宇宙に行くことになったら、この基地、頼むぞ」
「任せてください。きつと守ってみせますよ」

それから、資料を片付けている途中で、全員に召集がかけられる。

宇宙へ行くメンバーが決まったのだろうか……。

「よし、これから宇宙へ上げるメンバーを言う。まずは俺とフユミネ。俺たちは主に戦艦の防衛に徹する。そして次からは捜索隊およびメインの小隊だ」

「エトワール、リリー、ユーリ、そしてムゲン、整備兵としてリナ。小隊長はムゲン、お前に任せる」

「俺が…？」

「適任だと思おうが？嫌か？」

「……いや、分かった。やるよ」

「ほかの皆は、基地の防衛を頼む。また、いつ攻撃されるか分からないからな
全員が領き、各自の持ち場へと戻っていく。」

「……なあ、フアング」

「どうした？」

「…戦艦の防衛しかしないのか…？」

彼はふつと笑って

「なんだ、彼らじゃ背中を預けるのに不安か？」

「いや………違うさ」

「安心しろ、いざとなったら助けに行くさ」

「………ああ」

再び宇宙へ上がる。……ヤツとの決着を付けに。

その前に、もう一度、あの子たちに会いに行こう。

しばらくは……いや、もしかしたら二度と会えなくなるかもしれない。
今度という今度は、そう覚悟せざるを得なかった。

本当に久々に自宅へと戻った。仕事が多すぎて戻る暇もなかったから、きつと子供たちも寂しい思いをしているはず。

リナと一緒に帰ってこれたのは幸いだった。リナも、子供たちに会うのが嬉しいようで、顔の表情で分かる。

「さ、帰ろうか、家に」

「ええ」

扉を開いて、家の中へと入る。

「ただいま」

二人でそう言うと、真っ先に出てきたのはアウロラと、ロイだった。

「父さん、母さん！おかえりなさい！」

「パー！ママー!!!おねーちゃん!!パパとママが帰ってきたー!!」

「ただいま、ロイ。前より少し背が伸びたか？」

「まあ、少しだけだよ。あ、今ファイアさん来てるんだ。ちよつと伝えて——」

「伝えなくても聞こえているよ、ロイ。おかえり、二人とも」

彼女が軽く腕を組みながら姿を現すと、リナは丁寧に頭を下げながら言う。

「ありがとうございます、ファイアさん。子供たちの面倒見てもらっちゃって……」
するとファイアさんは首を横に振り

「気にしないでいい。私も、お前たちのために出来る事をしたまでだ。それに、ルナの時はお前たちに頼りつきりだったしな。これくらいなんともない」

「……リナ、俺、少しファイアさんと話があるから、子供たちを頼むよ」
「うん、分かった」

そう言う彼女、アウロラを抱っこして、子供部屋へと入っていく。

俺の真剣な表情を察してか、ファイアさんは椅子に腰かけ、口を開く。

「……宇宙、行くのか？」

「……ええ。リナも行くことになりました」

「話は聞いている。打ち上げは明日朝一番だからな。うちの所で打ち上げる事になってる」

「それで……もし、俺とリナに何かあっても、子供たちの事を——」

「断る」

「えっ……どうして……」

「お前は、アウロラやロイ達に私とクロノードと同じ気持ちを負わせるのか？」

「……でも……」

「お前もリナも親なら、意地でも帰ってこい。それが親だろ」

「帰ってこれないかもしれないですよ……！」

ファイアさんは机を叩き叫ぶ

「帰ってこれないかもだど!? ふぎけるな!! 帰ってくるんだよ!!!」

「っ……!!!」

「お前たちは帰ってこなきゃいけないんだよ!!」

「ここに残る仲間のために、なにより子供たちのために!!! お前たちはまた地球へ戻って

くるんだ!!!」

「だから私は、もしもがあっても、彼らの面倒は見ない。でも……だ」

「お前たちが帰ってくるのを信じて、子供たちと一緒に無事を祈ることくらいは、してお

く」

「……ファイアさん……」

「いいか、ムゲン、何があっても、例え手を失ったって、リナを連れて帰ってこい。生きてればそれでいい。……死ぬなよ、私の大切な弟」

「……はい……！」

「……ばば……」

「っ…!!」

「…アウロラ…?!」

流石に声を上げすぎたせいかわ、アウロラが涙目になってこつちを見ている。

俺はアウロラを抱き上げて笑いながら言う。

「どうした、何で泣きそうなんだい？」

「ばば……遠い所行っちゃうの……？」

「行くけど……大丈夫、必ず帰るよ」

「アウロラも行きたい………寂しい……」

「おねーちゃんも、おにーちゃんもいるだろう？だから、仲良く留守番しててほしい」

「……行きたい…ばばと一緒にがいい……」

アウロラの頭を撫でながら、俺は言う。

「じゃあ、こうしよう。パパとママが居ない間、毎日、お空を見上げてごらん。お空でキラキラ光っているものを見つけたら、それはパパとママだ」

「うんっ……うんっ…!!」

「うんっ……うんっ…!!」

「パパとママは、お空の上からでも、ちゃんとアウロラを見てるからね。だから、アウロ

ラも寂しくなったら、お空を見上げてごらん」

「ちゃんと、パパとママが見えるから」

「……………わかった」

「いい子だね、アウロラ」

「父さん…………」

心配そうなロイに微笑み

「大丈夫、今までもちゃんと戻ってきただろう？もし、この場所が危ないと思ったら、アウロラを連れてカカサの所へ行くんだ。分かったね」

「……………分かったよ、父さん」

「いい子だ。流石、俺の息子だ」

「……………父さんは忙しいからね、俺が頑張らないと」

「忙しいのも、きつともうすぐ終わる。この宇宙から帰って来た時は、もうずっと一緒だ。どこにもいかない」

「……………分かった、父さんを信じる」

「ありがとう、ロイ」

その日は久々に子供たちと一緒に食事をし、眠りにつくことが出来た。

耳元でゴソゴソという音で目が覚める。

「……………ん……？」

眠たい目をこすりながら、横を見ると、リナと目が合った。しかも凄く近くで。

「……………あ……………」

リナは真つ赤な顔をして、小声で言った。

「……………と、隣で……………寝て……………いいかな……………」

「……………どうした、急に……………」

「……………ううん……………。その、久々に……………一緒にくっついて寝たいって言うか……………その……………」

「……………分かった……………」

言いながら、リナを抱き寄せ目を瞑る。

「……………わっ……………。やっぱり……………あつたかい……………」

「……………ああ……………。暖かいな……………お休み、リナ……………」

「……………うん……………。お休み……………」

思えば随分長い間に一緒に添い寝なんてしてなかった。

暖かい、何というんだろう、安心感を覚える。

幸せを感じながら目を瞑っているうちに、ゆっくりと意識が落ちて行った。

グロリアスにいる人は、選ばれたメンバーと、艦長とオペレーターのみ。

夜が明ける前に、各員が戦艦に乗り込み、打ち上げの準備を待っていた。

「……………ついに、宇宙へ行くのか」

佇むガンダムを見ながら、小さく呟く。

「……………これが、俺にとつての最後の戦いになる。……頼むぞ、ガンダム」

「各員、これより戦艦グロリアスは、宇宙へと向かう。各員、衝撃に備えろ」

機体に乗り込んで、コックピットを閉める。

宇宙に行つてすぐに落とされるなんてことが無いように、いつでも動けるようにしなければ

「あれ、ムゲン、もう出撃？」

ターミナルが起動して、エヴァが首を傾げながら言う。

首を横に振りながら笑つて言葉を返した。

「違うさ。もし、宇宙についてすぐ撃墜されたらいやだろう？だから、いつでも出撃できるようにって、思つてさ」

「……………ふーん、じゃあ私も準備しておくね。各武装のチェックと、機体の状態を確認しとくから、覚悟だけして待っててね」

「分かった」

それから少しした後、俺は何かを感じた。

「……………!!」

「どうしたの？」

その光景は……………金に輝く機体が戦艦を落とす姿。

「……………連邦……………!!」

何故かは分からない、ただ嫌な予感が……………。確信があった。

「え……………？」

「エヴァ、艦長と通信を」

「分かった、通信、開くよ」

「どうした、ムゲン少尉」

「艦長、カタパルトハッチを開けてくれ！敵がいる!!」

「無茶を言うな！まだ大気圏を突破出来てないんだぞ!!」

「出してくれ！墜とされたいのか!?!」

「いくらなんでも無茶すぎる!!まだ待つんだ!!」

「くっ……………!!」

一方的に通信を切られてしまう。これじゃあ間に合わないのに……………!!

「ムゲン、出撃したいの？」

「今でなきや、間に合わない！奴らは……来るのを知ってて……！」

「……分かった。じゃあ、行こう」

「いけるのか？」

「機体はいけるけど、今ハッチを開けたらたぶん戦艦がもたないよ。それでもいいなら」
「くっ……。じゃあ……このままやられるってことなのか……!?!」

「だから、ハッチがギリギリ大気圏を突破した所から出撃するしかない。こっちでデータは測ってるけど、やる？」

「……わかった。それでいこう……！」

「了解、リナに伝えとくから」

「……こりや、怒られるかな」

「怒られるなら私も怒られるよ。だって、私達共犯だもの！」

「……だな」

各システムを起動し、カタパルトハッチの前へ。

「大気圏突破まであと10、9、8、——」

どんな機体であれ、このままやられるわけにはいかない。

行かなきゃ間に合わない……!!

「4、3、2、1、ハッチオープン」

「…ガンダム、行くぞ!!!」

カメラアイが強く光り、ガンダムが空を舞う。

予想通り、出撃した瞬間には既に多くのMSがこちらを狙っていた。

「ムゲン、3時の方向、照準を合わせている機体」

「…そこか!!!」

ビームライフルを構え、引き金を引く。

その一射は見事の相手のコックピットをぶち抜く。

「……マジかよ…当たった……」

「マジも何も、当たるに決まってるじゃん!だって私が補正掛けるんだから!」

「……そうなのか……?」

「そうだよ。まさか、自分の腕が良くなったって思った?」

「……………」

「あ、凶星だ」

「うるさい!!次だ!!!」

スラスターを起動し、一気に1機のジエガンの前まで詰め、右腕に格納されたサーベ

ルを展開して両断する。

「……これが新型……」

「おー、リナの言ってた”ビームトンファア”って奴だね！」

「ビームトンファアか……悪くないな！」

「次、来るよ！」

左からの感覚、シールドでビームを受け止めると、目の前でビームがかき消される。

「……ビームが……！」

「Iフィールドの調子もよさそうだね！さ、ムゲン！反撃だー！！」

「……分かってる！！」

そのままシールドの先端で腹部を殴りつけ、そこからシールド先端に搭載されたメガキャノンを放つ。

「この距離なら補正無しだって！！」

ジェガンの上半身がメガキャノンの一射で消し飛び、爆散。

「……よし……。……金の機体は……」

「……敵の数は後4……。いた、金の機体。型式は……”REX-X-0”……。？何それ」

レーダーでも捕らえた。4機のうち1機がこちらへまっすぐと向かってくる。

「…来るよ!」

「ヤツが指揮官か…!!」

サーベルを抜いて一気に詰め寄る、それに呼応するように金の機体もまたサーベルを抜いて応戦。

「この機体……ユニコーンタイプか…!?」

「データベースに無い機体……。これは……!?」

「その声……!!お前は……お前は!!!」

どこかで聞いたことのある声。……誰だ…!?

「くっ……!!」

サーベル同士が弾き合い、一度間合いを取る。

そして、金の機体から笑い声が響く。

「くっ……ははははは!!! やつと……やつと見つけた……!!! ムゲン・クロスフォード!!!」

「何……!!?」

「弟と妹の仇……取れる時が来た!!!」

再び接近し、サーベルを振りかぶってくる。それをシールドで受けながら、反撃するも、それを読んでいたようにもう片方のサーベルで罅迫り合う。

「……弟と妹……!!? お前……まさか!」

「ビームマグナムを避けた……？お前も……ニュータイプだって言うのかよ……!!!」
「やめろ！ジェームス、俺はお前とは戦いたくない!!」

「……そうやって情けをかけるのが楽しいのか!?……どこまで……どれだけお前は……!!!」

瞬間、金の機体の隙間から黒いオーラが溢れ出す。

そしてその光を、感じた。

この不愉快な感じは一体……。

「……っ……何だ……この感覚は……!?!」

「お前は……お前だけはこの手で……!!!フェネクス!!!」

叫ぶと同時に機体の変形……否、変身し、ガンダムへと変化する。

赤く光る両目に、金の身体を流れる黒い”血”その姿はまるで”悪魔”。

「ガンダム………!?!」

「ムゲン！動いて!!」

「っ……!?!」

さつきまでいた場所に、そのガンダムは居ない、そして次の瞬間には衝撃。

「ぐっ……！早い……!?!」

「目じゃ追えない……レーダーも……。あんなの、私もアダムも知らない……!」

「お前だけは……俺が……殺す!!!」

「ぐっ……!!!」

動きに付いて行けず、成すがまま。

このままでは……。

正面からフェネクスと呼ばれるそのガンダムがビームマグナムを構える。

「これで……死ねよ!!!ムゲン!!!」

「っ……!!!」

瞬間、ビームが目の前で弾け飛ぶ。

目の前に展開されたそのシールドが守ってくれたようで……。

「誰だ……!?俺の邪魔をするのは!!!」

「先生!!!」

「……リリーか!?やめろ!その機体じゃ……!!!」

リリーは聞かず、フェネクスと俺の間に入る。

「ジェームス……あなた、ジェームスなんでしょ!?!」

「何……を……。俺の名を……何故知っている!!!」

「私だよ……リリーだよ!!!あなたが、あなたが良い名前だと言ってくれた……!!!」

「リ……リリー……?」

「そうだよ!! やつと……やつと会えた……!!」

「……………だ」

「え……………?」

「……リリーは……死んだんだ。俺の目の前で……………!!」

「違うよ! ジェームス! 私は生きてる! あなたが生かしてくれたから!!」

「違う!! 死んだんだ!!! リリーは……!! お前は……お前が……リリーを騙るなああああああ
ああ!!!」

黒い波動が一段と増し、こちらまで心が押しつぶされそうになる。

「ぐっ……………はっ……………この感覚は……………!!!」

「いけない……。機体が暴走しかけてる」

「なに……………?」

「リリーは……俺の……俺が……俺のせいで……………!!!」

「あの子と金の機体を離さなきゃ」

「……リリー!! 離れろ!! これ以上近づいたらいけない!!!」

「ジェームス……私が分からないの!?!」

「黙れ……黙れええええ!!!」

ビームマグナムがリリーへと向けられる。

「っ……………！ジエームス……………！！」

「リリー！！」

「ああああああああ！！！！俺の前から……………消えろおおおお！！」

咄嗟に機体を動かし、リリーをタックルして吹き飛ばす。

そのおかげか、マグナムの一射は直撃を避けたものの、リリーのジムが半分焼かれる。

「ううううっ……………！！」

「リリー！！……………ジエームス……………！！お前は……………！！」

「次は……………お前がこうなるんだ！！ムゲン！！！！」

「くっ……………」

せめてサイコフレームが機能してくれたら……………本来の性能さえ……………！！

瞬間、宇宙に緑に輝く虹が広がった。

「っ……………！？」

その虹は俺を包むと、俺の視界は、先ほどの戦場とは違う場所にいた。

「……………は……………」

『感じたんです、貴方の気持ち』

姿は見えない。だが、その声の主が誰なのかは分かった。

バナージ・リンクス。あの時一瞬だけ話したユニコーンを駆る少年。

「……バナージ君……？」

『貴方にも、背中を押してもらいましたから。今度は、俺が。ユニコーンも貴方が駆るガンダムも、モノじゃない。』人の力を増幅するマシーン。』なんです』

「……人の力を……」

『そして貴方は、人と人を繋げる優しさを持った人。だから……』

ガンダムが緑の光に包まれる。

「……一体何を……」

『貴方が成すべきと思ったことを。……俺も貴方を信じます』

声が遠くなり、そしてだんだんと視界が晴れていく。

ありがとう、少年。

……俺は、俺が成すべきことを成す。

この手で守れるモノを、皆を……!!!

「……ガンダム!!!」

瞬間、肩部の装甲から、赤いサイコフレームが露出し、瞳が一段と強く輝いた。

「な……その機体も……!!？」

「サイコフレームが…動いた…!!ムゲン！今なら!!」

「ああ……やるぞ、エヴァ!!!」

間合いを詰め、切りかかる。何度目かの鏝迫り合い。

ぶつかっては離れ、そしてぶつかり合う。

2機の残光が、宇宙へ描かれ、そして残る場所に光だけ。

「なんだよ……!!お前なんかがあああ!!」

「俺は……俺に守れるモノを守る…!!リリーを傷つけたお前は……敵だ!!!」

「そうだ！俺たちは敵同士だ!!だから戦う宿命だ!!」

「寄り添うことを忘れたお前に……俺は負けない!!!」

「寄り添う存在を殺したお前が言う事かよ!!!」

「過去ばかりに囚われて生きていちゃいけないんだ!!」

「誰もが皆、辛い過去を持つてる！だから……だからって止まるわけにも、誰かを恨むわけにもいかないんだよ!!!」

「お前に……お前なんかに……!!俺の気持ちがかかるかあああ!!!」

「分かるさ！俺もお前と同じ道を歩んできたんだから!!!」

「サーベルを力で押し切り、トンファーで手首を両断。続けて、ダガーを引き抜き、肩

部へと突き刺した。

「ぐうううう……!!俺が……お前ごときに……!!!」

「……ジエームス……!!」

「そこまでだ、ジエームス」

機内に響く不愉快な声。この声の主は……。

「……ベルベット……!!!!貴様……!!」

「久しいな、まだしぶとく生きていたか、ムゲン・クロスフォード」

「期待通り死んでなくて残念だったな、ベルベット」

「ふっ、お前とは近く相まみえるだろう。楽しみだ。ジエームス、状況は悪いようだ、帰還しろ」

「何……俺はまだ!!」

「…指示には従ったほうがいい。分かったな?」

「分かった。後退する」

金の機体が背を向け後退しようとする。

「ジエームス!!!」

「……次は必ず殺す、ムゲン・クロスフォード」

一気に静かになる戦場。

「ムゲン、ジムⅡの子」

「…!!リリー!!」

通信を送つても反応がない。

「おい、嘘だろ…!?!」

機体へと近づき、コックピットを開いてリリーの元へ。

「リリー!!!」

「……せんせえ………」

幸いリリーには怪我は無かった。でも、彼女の心に残った傷は……。

「……私……私………」

俺は彼女を抱きしめ静かに言った。

「いい、何も言わなくて。……帰ろう、戦艦に」

「……うん………」

リリーにとってのはつらい現実だろう……。無論、俺も一年戦争で別れた少年とこんな

再開をすることになるなんて思わなかった。

だが、それ以上にリリーは……

命を救ってもらった恩人に、今度は命を奪われそうになって、そして何より、自分を否定されたのだから。

立ち直れなくなってしまうたらどうしよう……。リリーが、リリーでなくなってしまうたら……。

ジムⅡを回収し、帰還している途中にリリーが小さく呟く。

「……………わたし……………リリー……………だよね……………」

「何を言ってるんだ、君は、リリー・クリーヴズ。そうだろう？」

「……………でも……………ジエームスは、わたしは……………リリーじゃないって……………。リリーは死んだって……………」

「違うよりリリー、君は生きている。君が俺に言ってくれた通り、彼が君を生かしたんだらう？」

「……………もしかしたら……………わたしは別の人の記憶をもってたのかも……………」

「違う……………君は、リリーだよ。だから、何も心配いらぬい」

「……………そう……………なのかな……………」

静寂。俺も、彼女に何て声をかけてあげればいいのかわからない。

しかし、その静寂を、彼女は簡単に破って見せた。

「ねえ、リリーちゃん」

「…エヴァ…？」

「……………」

「ほら、今反応したよね？リリーって名前呼ばれて」

「……………」

「だからさ、貴女はリリーなんだよ。他の誰でもない」

「……………」

「貴女には、仲間がいる。忘れちゃいけない事だよ」

「……………」

「そしてね、あのガンダムのパイロットにも、それを教えてあげないと。貴女自身の言葉で」

「わたしの……言葉……？」

「そうだよ、貴女が彼に命を救ってもらったのなら、彼を救いたいと思うのなら、そうするべきだよ」

「どんなに否定されても、苦しくても、彼は“独り”だよ。貴女には支えてくれる人がいる。けれど、彼は違う。吐き出すところも、打ち明ける場所もない」

「そんな場所だったら、希望を見出すことだって難しいよ。だから伝えるの。”あなたは独りじゃない”って」

「人間だけがもつ力、言葉というもので、人と人は繋がれる。だから、伝えなきゃいけない。貴女の気持ちを」

「……………」

「リリー」

エヴァのおかげで、俺もやつと言葉にして言える。

「君は、彼を救いたいんだろ？」

「…うん」

「なら、迷わないでいい。背中は、俺たちが押してあげるから。後ろは見ないで、進むんだ」

「……………うん」

「君なら出来る。君は俺が信じた、いいや、皆が信じた“希望のニュータイプ”なんだから」

「ジェームスと、分かり合うんだ。憎しみだけが生きる全てじゃない事を、君が教えるんだ。他でもない、命を救われた君でないといけない」

「……………分かったよ、先生。私……………やってみる」

「ああ。……………さ、もうすぐ着くよ」

戦艦へと帰還後、俺は呼び出しをくらい、当然ながら叱られた。でも、独房へ入れる程ではないと言われ、数分叱られた後解放された。

気づけば格納庫へと足を向けていた。

機体を操作してて、俺の声にガンダムが応えてくれたような気がして。

何故だかわからないけど、そんな気がしたんだ。

ガンダムの前には先客が居て、というより、居ないとおかしいかな。

機体の整備をリナが行っている最中だった。

「……リナ」

「あ、ムゲン。お叱り受けたんだ？」

「……まあ、ね。でも、独房入りは無しだったよ」

「ふうん。ま、良かったね」

リナは静かに整備をして、俺はただそれを静かに見てる。

そんな何でもない空間。

そして、ふと思いついたように、リナが言う。

「そういえば、この子のサイコフレームが機能した話、エヴァから聞いたよ。後、実際に映像でも確認した」

「ああ、どうだった？」

「…私が思ってるのとは違ったけど、まあ、あれが”レゾナンス”の本当の力かな」
「ん……………？レゾナンスって……………コイツの事か？」

リナはふつと笑ってガンダムを見上げる

「そうだよ。ガンダム・レゾナンス。ムゲンの声に”共鳴”するようにサイコフレームが機能したから、”共鳴”って意味を持つレゾナンスって名前にしたんだ。カッコいいでしょ」

「…ああ。…………ガンダム・レゾナンスか…………。良い名だ」

レゾナンスを見上げながらそう返す。

その日、地球周辺で虹の光が観測されたそうだ。

俺とレゾナンスを包んだ光は、俺の見た幻覚でもなく、本物だったのかもしれない。とするなら、起こしたのは……………バナージ……………君だったのか…。

いやはや、若い力は…凄いな。

69：再会の刻

第00特務試験MS隊、宇宙へ。ベルベット・バーネットが潜伏しているであろう座標へ移動中。

格納庫に横たわる、焼かれたジムを見ていた。

リリーと戦った時の記憶がよみがえる。

あのジムから発された光は、あの子を、ニュータイプだと確信させるものだった。

機械とて物であることは変わりない。だから、いずれは朽ちるもの。

「……こんな……死に方、お前は望んで無かつたらうに……」

「どうかね」

背後からの声。そして声の主は横に並ぶと、ジムの装甲を撫でながら言葉を続けた。

「この部隊に来た時から、ずっと私とこの子は一緒だった。まるで、家族みたいに安心を覚えた」

「私も、こんな別れは嫌だけど、でも、この子は最期まで私に従ってくれた。どんなに無理な動きにだって、必死に耐えてくれた」

「……リリー……」

「あの時、私が死ななかつたのは、先生が吹き飛ばしてくれたことと、この子のおかげ」
「このジムが……？」

「気のせいなのかもしれないけど、吹き飛ばされた時、私は怖くて操縦が出来なかつた。でも、何故か勝手に機体が動いて、まるで、何かに引つ張られるように」

「……」

「私は、この子が私を助けてくれたんじゃないかって思ってる。……だから、救われた私が言うのもなんだけど……、たぶん、この子は幸せだと思う」

彼女は優しくジムに笑んで、俺のほうを向く。

「もちろん、先生にも感謝してるよ。あのままだったら、私は何もできずに死んでたから」

「……当然じゃないか。俺は君の先生である前に、仲間なんだから」

真剣に彼女を見据え、そう言った後、優しく微笑む。

すると、リリーは恥ずかしそうに顔を赤くし、俺に背を向けて、言った。

「わ、私、食堂に行つてきます。………それじゃ」

「……？ き、気を付けてな」

何か変な事をしただろうか……。

特にすることもないので、廊下から宇宙の景色を眺めていた。

……ジエームス……。

あの時、元氣いっぱいには笑っていた少年に一体何があったのだろうか。

彼は俺を恨んでいた。…恨みで軍に……。

どうして……。

「悩んでいても、答えは出ないと思いますよ」

「うわあ!？」

突然の言葉に驚いて、声が出てしまった。

「ふっ、相変わらずですね、ムゲンさんは」

そう言いながら、俺の隣に並ぶ青年。

「……なんだ、エトワールか……。びっくりしたよ……」

「油断しすぎです。これじゃ、敵に襲われた時に困りますよ」

「……ははは。まったくくだ」

軽く頭を掻きながら笑う。

エトワールはふうつと溜息を吐いた後、俺に問う。

「それで、何を考えてたんですか？」

「…大したことじゃないよ。…ただ、前に戦った金のガンダムのパイロットと面識があっただけだよ」

「そうなんですか。それで、どんな人なんですか?」

「俺が会ったのは8才くらいのときさ、戦争で、目の前で兄弟を殺されたんだ。…俺が守れなくてね…」

「ジェームス、って名前なんだけど、彼の名前、俺が考えたんだ。…名前が無いって言うってさ」

「……………名付け親なんですね」

「まあ、そうだけど、その戦いからそれつきりだったんだよ。まさか、彼が軍人になって、敵として再開するなんて思わなかった」

「運命の悪戯、ですかね。…思えば、私の両親との再会も、良い事であれ、神の悪戯のように思いましたし」

「……………でも、それが現実なら、受け入れるしかない」

「ええ。これまでだつてそうして生きて、うまくやってきましたから。だから、ムゲンさん、今度もきつとうまくいきますよ」

「……………ああ。必ず、うまくいくさ。そして、ベルベットを……………全ての元凶を倒して帰ろう」

エトワールは強く頷いた後言葉を続ける。

「ええ。彼は、あの男だけは生かしておくわけにはいきませんから」

「ああ」

一時の静寂の後、エトワールが思い出したかのように口を開く。

「……もうすぐ、宇宙世紀が100年という一つの区切りが来ますね」

「急にどうしたんだい？」

「宇宙世紀の前に生きる人々は、この宇宙に何を想ったのでしょうかね」

「……何を想うか……。人の数だけ想いがある。でも、たぶん、“憧れ”はあったのかも
しれないね」

「憧れ……ですか」

「鳥のように空を飛べたら、そして、月に行って地球を見下ろしてみたいとか。そんな小
さい願いだと思う」

「……思えば私も、そんな憧れがあった気もします。レビル様に、空を飛んでみたいと
言った記憶も」

「そうなのか……」

「私だって、人間ですから。……私やムゲンさん、宇宙世紀に生まれた人々でも、そんな

憧れがあるんです、宇宙へ行けなかった時代に、宇宙への憧れを持つ人が多いのは、当然でしょうね」

「……憧れ……か」

「私達は今、この長い戦争の始まりの場所へ向かっている。そう考えると、彼はとても口マンチックな人ですね」

「エトワール……?」

「そう思いませんか? わざわざ1000年経とうとしているこの時代で、あえて連邦とジオンの戦いの始まりを選ばんですから」

彼の言葉に、俺は少しだけ強く言葉を返してしまふ。

「……ヤツの考えてることなんか……分かりはしないさ」

「そうですね。……さて、少し私は先の偵察を行ってきます。何かあれば、出撃お願いしますね」

「……ああ」

俺は彼と別れ、廊下を歩きだす。

気づけば、また格納庫へと足が向いていたようで……。

「……何だろうな、少し落ち着かない」

小さく呟いて、レゾナンスのほうへと歩き出す。

レゾナンスへと近づくにつれ、コックピットが開いている事と、そこから笑い声が聞こえるのに気づいた。

「……リナかな」

こっそりと機体を登り、軽く盗み聞きしてみる。

「へえ、道夜つて人はそんな人なんだ！」

エヴァは楽しそうに誰かの話を聞いているようで…、ヨハネが楽しそうに話している姿が容易に思い浮かんだ。

リナが話していると思つて、耳を立てていると

「ええ、彼はそういう所もあるんです。後は、私のATMで……」

「……ユーリかよ……」

思わず、小さく呟いてしまう。

「今は居ないんですけど、いつかかならず此処へ連れ戻しますよ。道夜が居ないと、なんだか落ち着きませんし、ムゲンさんはずーっと暗いままだしで良いことありませんから」

「ユーリは優しいね！いや、違うのかな……、たぶん、恋？」

「それは無い」

ハッキリと断るユーリ。結構相性良いと思うんだけどな。

「ま、道夜にも随分助けてもらいましたし、その借りを返すまでは、勝手にどっつかいかれても、勝手に死なれても困るっただけです。別に恋とかそういうわけじゃないですから」

「ふうん。…そうなんだ。でも、ユーリは優しいよ。だって、結構適当に見えて、しっかり皆を見てるもの」

「そうですね」

「人に興味がない振りしながら、貴女は人間大好きなんだね」

「……………。私にも分かりませんよ」

「早く戻ってきてほしいね、道夜に！私も興味あるし!!」

「……………そうですね。必ず……………」

道夜を連れ戻したいという気持ちは、俺だけじゃなく、彼女も同じだったこと、それを聞けて安心した。

「で、ムゲンはさつきから盗み聞きしてるけど、何で？」

「げっ!?!気づいてたの!?!」

思わず声を上げてしまい、ユーリに顔をのぞかれた。

「へえ……良くないですねえ、ムゲンさん？人の話を盗み聞きするなんて。人とは思えないですねえ……」

「い、いや……レゾナンスのコックピットが開いてるから……てつきりリナだと……」

「だからって盗み聞きしますかねえ……、変態って呼びますよ？」

「それだけはやめてくれ……」

「じゃあ、ビッグ生チョコシリアルバーを2本で手を打ちましょうか」

「……ぐっ……」

背に腹は代えられないので仕方なくそれを了承することに。

「分かったよ……2本だからな！手が滑ったとか言って5本とかにするなよ!!!」

「分かりましたよ、”手”は滑りませんから安心を。2本だと”口”は滑るかもしれないがね」

「お、お前なあ……!!」

そんなやり取りを聞いてか、エヴァが思わず吹き出して

「ふっ……あはは!!二人ともおつもしろいね!!……そっか、ユーリの道夜への感情って、ムゲンへの感情と同じなんだね」

「……ええ？」

「アーアー!!そんなことはどうでもいいんで、さっさと行きましようよムゲンさん」

珍しくユーリが動揺しているのを見て、何だか面白くなってエヴァに答えを促してみ
る

「なんだい、その感情って」

「んー？それはねー、”親友”って感情かな。ムゲンも、道夜も、ユーリにとっては親友
なんだって」

「……………やっぱ、シリアルバーは10本にします」

「えっ!？」

「秘密を聞かれてしまったては、ただで返すわけにはいきませんよ、ムゲンさん」

「ひ、ひえ……………!」

「あーあ、残念だね、ムゲン」

エヴァは笑いながらそう言った。

「うわあああ!!俺の給料があああ!!」

ユーリに引つ張られながら、俺は食堂まで運ばれ、その間ずっと同じことを叫んでいた。

結局、本当に10本奢らされて、ユーリは満足しながら去り際に

『いやあ、すいませんねえ、こんなに。やっぱり持つべきものは、”親友”ですねえ…』
って言って去っていった。

……今月どうしようかな……。

そんな事を考えてると、管内に警報が響き渡る。

「所属不明のMSがこちらへ接近中！MS隊は直ちに出撃を!!繰り返す——」

「……所属不明機……?」

瞬間、俺の頭にある感覚が押し寄せた。

……黒く……深い闇の中に感じる……懐かしさを。

「エヴァ、出撃だ」

「うん。分かってる」

言いながら、機体のチェックを済ませ、カタパルトへと移動する。

「所属不明機の数は1だが、油断するな。前の金のガンダムと同じ機体かもしれん」

「……分かりました。ユウリ機、出撃します」

先にユウリの機体が出撃し、後に続いて俺も叫ぶ。

「……了解した。ムゲン・クロスフォード、レゾナンス、出撃する!!」

宙域に出て、レーダーを確認すると、既にエトワールがその1機と戦っているのが確認できた。

「エトワール……！」

「ムゲンさん、エトワールさんを。援護します」

ユーリからの通信に、俺は分かったと答え、一気に所属不明機へと向かう。

近づくにつれ、さつき感じた感覚が増していく。

なんなんだ……この感覚は……。

ビームライフルを構え、一射。

それに反応するように、黒いMSはシールドでそれを防ぐ。

「あれは……！」

「ムゲンさん……この機体……!!」

アッシュさんの研究所で交戦した黒いガンダムがそこに居た。

「また出たな……黒いガンダム……!!」

「援護します！切り込んでください！」

「分かった!!」

シールドの修復が間に合わなかったのが悔やまれるが、一気に詰め寄り、左腕でビームダガーを抜いて切りかかる。

悠々とサーベルで受け止め、ダガーとサーベルがぶつかり合い火花を散らす。

互いの武器が弾かれあい、その反動を活かしてビームライフルを打ち合い、ビームが

ぶつかり煙が互いを包み込む。

「今だー！」

その合図とともに、後方からの一射と、左からの一射。前方に煙で包まれたガンダム目掛け狙撃される。

「……手ごたえがない……！エトワールさん！後ろです!!」

「っ……!!」

「くっ……!!」

黒いガンダムはVーアルバの背後へと周り、サーベルを振りかぶる。

寸での所でサーベルを構え、受け止めようとするが、ガンダムの攻撃はそれを予測済みであるかのように、頭部を切り捨てる。

「ぐっ……!!?!な——」

態勢を整える間もなく、続けてビームライフル、そして右足を切り落とし、トドメに腹部を蹴り、強引に間合いを取らせた。

「エトワール!!」

「私には構わず!!あのガンダムを……!!ユーリさんが!!」

「っ!!あの機体は……あのガンダムはどこだ!?!」

「ムゲン！ユーリの機体が!!」

「何っ!？」

対応する間もなく、ユーリの通信から

「こいつ……！やりますね……。うあっ!!」

「ユーリ!？」

「でも何ですかね……。命まで奪う動きじゃない……。ムゲンさん、そっち、行きますよ」

「……!!」

その言葉で、ユーリの機体がやられたことを察して、身構える。

数秒後、目の前に現れる黒いガンダム。

「……そうかよ……。そんなに一対一がいいか……!!」

ビームライフルを構え、発射。それを回避していくガンダム。

「エイムが追いつけない……。ムゲン、エネルギーの無駄になっちゃうよ!」

「それでもいい!撃ち続けるんだ!」

望む位置へと誘導して、一気に格闘戦で仕留める。

ビームはあらぬ方向へと飛んでいき、消える。

それを何発も放ち、反撃に出ようとしたところを見逃さない。

「……今だ……!!」

両手でダガーを抜き、腕をクロスして、ガンダムへと突っ込む。

そして、機体がぶつかった瞬間にビームトンファーを展開、そのまま切り抜ける。手ごたえはあった。しかし……、致命傷には至らない。そう感じた。

振り返り、サーベルを受け止め、鏢迫り合う。

「こいつ……近距離でも対応できる……！ニュータイプなのか……!」

ぶつかり合う中、静かにガンダムのパイロットが言う。

「……流石、インファイター。他の2機とは明らかにレンジが違う。そして、癖も」
懐かしい声。……まさか……。

その声に、誰よりも早く反応したのはユーリだった。

「……道夜……貴方なんですか……」

「……道夜……どうして……!」

「道夜……? 違う、俺はセカンド・ムラサメ。そんな名前は知らん」

「道夜様なら……目を覚ましてください! あなたは、八雲道夜のはずです!!」

「何故そう言える。他人かも知れない」

「分かるんです! 私は、貴方を信頼し、貴方の背を追い続けた!! だから……!」

「……知らないな。俺には、俺の役目がある。その役目を果たすだけだ」

「……役目……!」

「……お前たちが知る必要はない。邪魔をするなら、お前たちを消す」

「そんな……!」

「いい加減にしてくださいよ、道夜。あなたは今更ここに何しに来たんです。私達を殺すため? そんな事のために、この3年もの間、勝手に部隊を抜け出して勝手にまた戻ってきたんですか」

「……………」

「任務だとか、そんなの興味ありません。貴方はこの部隊に戻る義務があります。道夜、戻ってきてください」

「……………話は終わりか。……………もう、十分だ」

ガンダムの持つサーベルの力が強まり、吹き飛ばされる。

「くっ……………!!」

「セカンド・ムラサメ、目標MSを、破壊する」

「道夜……………! お前も……………俺が狙いなのか……………」

「そうだ、ムゲン・クロスフォード。だが、俺はベルベットに命令されてやっているわけじゃない」

「誰がお前をそうさせた……………!! 誰が……………お前を変えてしまったんだ……………!!」

「……………時代が変われば人も変わる。それだけの話だ。お前はもう、過去の人間。だ

から消えなければならぬ」

「……道夜……!! お前の心は、それを望んではいないはずだ!! 分かるはずなんだ、お前も、今討たねばならない本当の敵が!!」

「……黙れ……。俺を……惑わせるな……!! 知らない……知らないんだ……!! 俺は……お前たちなど……!!!」

「道夜……戻ってこい……!!!」

「俺を……惑わすのは……お前だ……!! ムゲン・クロスフォード!!! いつも……いつもそうやって……!!!」

「なら、俺はお前が戻るまで、何度だって声をかけてやる!! 道夜、部隊に戻ってくるんだ! それでまた、皆で——」

「過去は……!! 取り返せない!!! お前も……俺も……!! ただ命令に従って……俺はお前を討つ……!!」

「……分からないのか……お前には、この感覚が……! 皆が戻ってきてほしいと願う想いが!!」

「黙れ……そんなもの……雑音だああ!!!」

ガンダムが黒いオーラを纏う。その感覚は、ジェームスと似た感覚。

なら、俺がすべきことは一つだけ……!

「……皆の声を、道夜に届けたい……! レゾナンス!!!」

レゾナンスの瞳が輝き、肩部の装甲がスライドされ、サイコフレイムが露出する。

「想いは一つだ。お前がまた、俺たちと共に歩めること。それだけ……!」

「お前はいつもそうやって邪魔をする……!!!」

再びぶつかり合い、火花を散らす。

「邪魔だと言われたって言い、けど、お前は忘れちゃいけない事を忘れてるんだ!! そのマシーンがそうさせている!!!」

「黙れ……!! 俺もリファーストも、ずっと……ずっととおお!!!」

切り抜け合い、素早く反転し、頭部へとサーベルを向ける。

手首を抑えられ、攻撃を遮られ、反撃と言わんばかりにもう片方の手でコックピットを狙ってくる。

宙返りしながら攻撃を回避し、間合いを取った。

「仲間がいた……! お前を信じてくれている人がいる!!! お前の帰りを待つ人がいるんだ!!!」

「俺には……仲間居ない……!! 受け止めてくれる奴も……!!!」

「違う! いたんだよ! お前には!!!」

「…………リファースト…………ヤツを……俺の前から消せええええ!!」
ガンダムが消え、そして背後に回られる。

「つ…………させるか!!」

寸でで反応し、頭部をずらして攻撃を避ける。

「なら…………お前はとうしてとどめを刺そうとしなかった!!お前だって、皆の所へ戻りた
いから——ぐあっ!!」

腹部を蹴られ、吹き飛ぶ。

「…………お前に話すことなど…………もう…………ない!!」

何故か態勢を立て直せない、いや…機体が動かない…………?

「くっ…………!!機体が…!」

「いけない!ムゲン!!!」

正面で構えられるビームライフル。やられる…………!

「…………行け!!フィン・ファンネル!!」

その声と共に、レゾナンスの周りを板状のものが回り、そして正十二面体のシールド
を形成した。

ビームはシールドにかき消され、それが去ると、板が持ち主の所へと戻っていく。

「……………これは…」

「……………先生、お待ちせ」

リリーは俺の隣に並ぶと笑って言った。

「その機体は……………」

「皆が後押ししてくれた。そして、先生が背中を支えてくれた。だから……………今度は私が、ネティクスで皆を支える!!」

ネティクスが拳を握ると、ファンネルが自由に飛び交い、リファーストへと攻撃を開始する。

「つ……………また……………ガンダム……………!!」

ファンネルを避けながら、彼は眩き、背を向けて後退する。

「道夜……………!!」

「やれる……………!!ファンネル……………」

ファンネルに指示を出そうとした瞬間、ネティクスが急にうなだれる。

「リリー……………!?!」

機体を支えると、リリーは弱々しく言った。

「ごめんなさい……………先生……………。ちよつと……………疲れちゃった……………」

「……………いいんだ、帰ろう」

「……………うん……………」

エトワールとユーリの機体を回収し、船へと移動する。

……道夜……お前に一体何があったんだ……？

こんな再会の仕方、誰も望んではないのに……。

神が居るなら、こんなのは悪戯が過ぎる……。

でも……一つだけ確かな事は、ジエームスも、道夜も、まだ分かり合える。

信じてみなきやわからない。だから、出来るだけの事はしてみせる。

宇宙に決意を込め、俺は船へと帰還した。

決戦の刻は近い――

69 完

70：分かり合う事

第00特務試験MS隊、旧サイド2、アイランド・イフィツシュ付近へ到達。

ついに辿り着いたこの場所で、あの男は待っている。

俺と……いや、此処に居る全ての者との決着のために。

道夜……お前も来ているんだろう。

俺たちはブリッジへ集められ、フアングからの言葉を待っていた。

彼は深呼吸をすると、静かに口を開く。

「……皆、俺たちは、辿り着いた。この、始まりの場所へ。ムゲンやリナにとっては故郷になる場所」

「大きく見れば、ここから連邦とジオンの因縁が始まった。そして、ベルベット、ヤツはここを決戦の場と定めたのは、何か意味があるからだ」

「俺たちは今まで、どんなに苦しい場面でも、絆と、確かな力で生き残ってきた。だから

「今度も、生き残るんだ」

「誰一人欠ける事の無く、皆で。敵の数は不明、そしてどんな機体が出るのかさえ分からない。けれど、俺たちは伝えなければいけない」

「過去に生きてきた人々の命を、そして、今まで俺たちが戦ってきた”軌跡”を。後世に伝えるんだ」

「だから、伝えるものとして、生きよう」

「……ムゲン、うまいこと締めてくれ」

俺は頷き、皆のほうを見て言う。

「……………この戦場に、ベルベットは居る。そして、俺たちの仲間だった道夜も、リリーを救ってくれたジェームスも居る」

「俺は、この手で守れるモノを、守れるだけ守る。そして、俺が成すべきと思ったことを成す。……もし、俺が無茶をしても、皆俺についてこないでいい」

「俺がこの手で、出来る事をするだけだから」

「嫌だ」

リリーが呟く。

「え……………」

「先生だけだと、勝手にどこか行っちゃう気がするから…。それに、私がジェームスに伝

えなきやいけない事もあるから」

「ムゲンさん」

珍しくユーリが言う。

「道夜を連れ戻したいのはあなただけじゃないです。私も、彼を、今まで背中を預けてくれた親友を連れ戻したい。それに、無茶何て昔からでしょうに」

「ユーリ……お前……」

「そうですよ、ムゲンさん」

「エトワール……」

「ベルベットには、私にも借りがあります。家族ともども世話になりましたからね。」

「……私も付き合います」

「……気合は十分のようだな。行ってこい、家は守ってやる」

フユミネが静かにそう言った。

フアングは頷き、声を上げる

「みんなの心は一つだ。行こうぜ、ムゲン。決着を付けに」

「……ああ。生き残って、帰ろう。過去を伝えるだけじゃなく、俺たちを待っていてくれる人たちのために」

皆が大きく頷く。

「各員、第一戦闘配備！これが決戦だ、気合を入れろ！各オペレーターはMS隊の発進誘導と、常にレーダーの探知を怠るな!!」

艦長が叫び、それぞれが持ち場へと向かう

機体を見上げ、各部位に追加武装と追加装甲を身にまとうレゾナンス。

「……これは……」

「レゾナンスに追加装甲と拠点制圧用の武装を纏わせた、フルウェポン状態だよ」

「……リナ……」

彼女は俺のほうを見て頷く。

俺は機体を見上げ、小さく呟いた。

「……行こう、相棒」

機体に乗り込み、システムを起動する。

「……ムゲン」

コックピットを覗く愛する人、俺は優しく微笑み頭を撫でる。

「必ず帰る、どんなことがあっても、君と、アウロラの元へ」

「…信じてます。貴方の事を」

頷いて、コックピットを閉める。

「もういいの？これが最期の別れかも知れないのに」

俺は首を横に振り、ターミナルに投影された天真爛漫な少女に答える。

「最期なんかないさ。俺は必ず生き残らなきゃいけないんだ。ヨハネや、アダムのためにも」

「……そうだね。行こう、勝つためではなく、負けないために」

カタパルトへと立ち、発進の合図を待つ。

「ムゲン隊長、無事の帰還を、お待ちしております」

「分かってるさ、マーフィー。美味しいコーヒーのためにもね」

「……第一小隊長、ムゲン機、出撃どうぞ！」

「ムゲン・クロスフォード、ガンダムレゾナンス・フルウエポン、出撃する!!!」

どんなに苦しくても、背中を支えてくれる人がいた。

どんなに涙が流れても、前を見ろと言ってくれた人がいた。

どれほどの人に支えてもらっただろうか、その人たちのためにも、俺は生きる。

現在いまという時を超え、未来へと伝えるために。

そのためにも、ヤツを討つ…!!!

こちらへと気づいた敵が接近してくる。

数は…5機。

「ならば!!ビームキャノンを使う!!」

「任せて!!どの機体を狙うの?」

「……一番手前だ!」

「オツケー!!照準完了、エイムアシスト起動!イけるよ!!」

「よし……!ビームキャノン、発射!!」

右肩部にラッチされたキャノンがビームを圧縮し、放つ。

放たれたビームは敵の一番手前の機体に直撃し、爆散

墜とした瞬間、喜びよりも先に頭を支配したのは、知らない誰かの声。

『……なんで……俺が……』

「っ……!」

振り払い、ビームライフルを構えて発射。

1機のコックピットが撃ち抜かれ、爆散。

そしてまた、声が響く

『死にたく………ねえ………よ』

「っ……何なんだ………これは………！」

「どうしたの……？」

「いや………なんてことは無い………」

「………」

一気に……仕留める!!

「ミサイル全弾発射……!!」

「え!? まだ戦いは………」

彼女の制止を聞かず、左肩のミサイルポッドを全弾発射。

直撃するものもいれば、誘爆に巻き込まれた機体も居る。

こんな攻撃も回避しきれず、墜ちて行く。

そのたびに、頭へと響く声。

『……皆………ごめんよ………』

『母さん………！助け——』

『………強く生きるんだぞ………子供たちよ………』

「うわああああ!!! やめろおおお!!!」

ヘルメットを脱ぎ捨て叫ぶ。

「ムゲン…!?!」

「はあっ……はあっ……!!」

「こんな事……今までは……」

「…そっか、サイコフレームが”拾い”過ぎてるんだ…」

「……はあっ……はあっ……!」

「ムゲン、こつちを見て」

エヴァが真剣にそう言った。

彼女の瞳を見ると、だんだんと不愉快な気持ちが消えていき、安心感を覚える。

「……エ……ヴァ……」

「人間には、耐えられないよ。私が受け止める。だから、貴方は…貴方が成すべきことを」

「……わか……つた……」

操縦桿を握り直し、左腕に巻かれたリボンを強く握る。

『いいか、ムゲン、何があっても、例え手を失ったって、リナを連れて帰ってこい。生きてればそれでいい。……死ぬなよ、私の大切な弟』

「……必ず戻ります……」

MSを墜としながら先へと進む。エヴァの瞳を見た後からは、あの声が聞こえなくなった。

たぶん、エヴァが受け止めてくれているからなんだろう。……俺は独りじゃない。エヴァも、皆が支えてくれている。

先まで進むと、1機のMSがこちらへと突っ込んでくる。

「……!!」

ビームライフルを構え、発射。

ビームを正面からシールドでガードして、その機体は一気に詰め寄りサーベルで斬りかかる。

ビームトンファーで受け止め、得物同士がぶつかり合い火花を散らす。

「この機体は……!!」

「データ照合、これは……ハデス・ジャッジメント……?」

「久しいなあ……ムゲン・クロスフォード!!!」

「何故……何故お前が……?!シゼル・クライン!!」

間合いを取ってビームライフルを構えた瞬間、ハデスの手がライフルを抑えて

「ダメだな、お前はそんな武器より、近接だろう？」

「くっ……!!」

ハデスを蹴り飛ばし、間合いを取る。

「…それでいい。さあ、あの時の決着をつける時だ!!」

「決着は既について！お前と戦う意味なんてないはずだ!!」

「俺にはあるんだよ、お前が終わっても、俺はずっとお前と決着を付けられずにいたんだ!!」

ビームダガーを構え奴に斬りかかる。

奴はビームサーベルで受け止め、鏝迫り合いの形になった。

「それだけのために…!?何故お前が生きている！あの時お前は……!!」

「死んだと思ったさ、俺も…!!だが、俺は今ここにいる！その事実だけで十分だろう!!」

シゼルは間合いを取り、ビームライフルを撃ってくる。

それを回避しながら、ビームライフルを放ち相殺させ、トンファーで斬りかかった。しかし、それを読んでいたかのように回避されてしまう。

「ふん……時代が変わってもこの程度か!!」

「何を……!!」

「見せてみる！お前が歩んできた戦いの道とやらを!!」

サーベルとトンファーが激しくぶつかり合い、離れ、それが何度も弧を書くように火花を散らしあう。

「戦いだけが……俺の全てじゃない!!」

「それが誰に分かる！誰にも分かりはしない事を!!」

「お前がそれを知らないだけだ!!!!知ることが出来なかっただけだ!!」

「知った風な口を……!!」

奴がビームサーベルを持って切りかかってくる。

……この動き……。俺は、奴が次に動くであろう位置にダガーを投げつけた。そう、あの時と同じ。奴の反応なら、これは避けられない!!

「ぐっ……!!俺の動きを……!!」

右腕にダガーが突き刺さる。その隙を逃がさず、右腕に刺さるダガーを持って、両断。

「ちっ……!!だが……!!」

「もうやめろ！俺とお前の戦いは終わったんだ！」

「黙れ!!俺は……俺は!!」

サーベルを構え、突っ込もうとした時

「そうだよ、シゼル。君の戦いは既に一年戦争のときに決着がついてたはずだよ」
聞き覚えのある声……まさか……君もなのか……

「……ゼロ……なのか……？」

「機体照合。……ガンダムMk-0」

「ああ、随分と懐かしい声だ。久しいねえ、ムゲン。会いたかったよ」

「シゼルに加えて……ゼロ……どうして……何故生きている!？」

「……それは僕にも分からないのさ。それに、僕やシゼルだけじゃない。地球でも、
”彼ら”が蘇ってる」

「何……!!」

「僕は、何のためにここに立たされているんだろうね？」

「……」

「それはたぶん、僕を蘇らせた人からすれば、ムゲンと戦えって事になるんだろうけど
？」

「ゼロ……!俺は——!!」

下からの殺気。ファンネルか!!

宙返りで回避する。

「ふっ、随分ニュータイプとして力を付けているようだね。僕も、少し遊びたくなっ

た。行くよ、ムゲン!!」

ゼロはサーベルを抜き、突っ込んでくる。

それを受けるように、シールドで受け止めた。

蹴り飛ばし、間合いを取る。ファンネルが回避する位置の背後に来るのが直感で伝わる。

すかさず間合いを別の位置に取り、回避。

「うんうん、それでこそ、ムゲンだ!!嬉しいよ、僕は!!」

「…ゼロ…やめるんだ!!」

「君がニュータイプとしての力をいかんなく発揮してくれて、僕は…同じ同志を見つ
けられて本当に嬉しい!!」

右……。続けて下と左。さらに上と右…。当たらないように回避していきながら
叫ぶ。

「俺たちの決着も、グリップス戦役で終わってるはずだろう!?!なら何故今更蘇ってまで戦
おうとする!!」

「言っただろう?僕は君の力を見たいだけだって。あとは…。まあ他にもあるけど、
主な理由がそれだよ」

「…くっ…!!」

ビームキャノンを発射し、位置を誘導する。

背後と右に殺気。素早く回避しようとするも、機体が重さでワントンポ遅れ反応し、ビームキャノンを貫く。

「！」

「フフフ……………懐かしい、この感覚……………」

「ゼロ……………お前は……………!!」

「見せてほしいなあ、あのビームを切るやつ。さあ、ムゲン!!!」

ファンネルを放ちながらビームキャノンを放つてくる。

ファンネルは俺をビームキャノンの正面に立たせるように動き、狙ってくる。

「くっ……………!!」

シールドで防御するも、ゼロの思惑通り、ビームキャノンの射線へと入ってしまう。

やるしかない……………!

ビームキャノンから、強力なビームが放たれる。

ダガーを引き抜き、真つ二つにしてみせた。

「……………わああ、さつすがムゲンだ。いいねえ、シビれるよ」

「……………気が済んだか。なら、もういいだろ!!俺たちは…戦う必要なんか!!」

「戦いはどちらかが死ぬまで、そうだろう!?ムゲン!!!」

接近し、コックピットの前でサーベルを構えるゼロ。

「いい加減に……!! やめろおおお!!」

機体の肩部がスライドし、赤いサイコフレームが光を放つ。

「っ!!」

「今だ!!!」

対応に遅れたところを逃さず左にラッチされた鞘を触る。

撃ちだされた刀を持ち、力を込めて振りぬいた。

刀は電撃を帯びながら、Mk-0の左腕を切り落とす。

刀をコックピットに向けて言う。

「勝負、アリだ」

「……………凄いな……………流石ムゲンだ……………」

「……………こんなの、自慢にもなりはしないよ」

刀を鞘にしまいながらそう言った。

「……………ふん、言うだけ、貴様もムゲンに負けているではないか」

戦いを見ていたシゼルがゼロに言う。

「ああ、僕の……………いや、”僕達”の負けだよ。やっぱり、もう僕たちは”過去の人間”

なんだね」

「……ちっ……」

「でも、君たちが居たからこそ、俺は此処に居る。君たちの想いを受け継いで、今ここに
いるんだ」

「……そっか……。僕の想いをちゃんとここまで持ってきてくれたんだ……。それなら、
感謝しないとね」

「……それは、今を生きる者の役目だから。お礼なんて、必要ないよ」

「……ムゲン、お前は……」

シゼルが静かに口を開く

「昔とは変わったな」

「……変わるさ、人は。君だってそうだよ、シゼル」

「俺が？バカな」

俺は首を振りハッキリと言って見せる。

「いいや、変わる。変わるチャンスはいくらでもあったんだ」

「……お前は、あの時、何故”受け止める”と言ったんだ」

彼との最期、俺は彼を受け止めると言った。

「…だから…そんな世界を来ることを俺は望んじやあいない!!そして…今はお前を殺すことが…一番なんだ!!」

「なら……受け止める……!」

「何…!?!」

「お前のその縛られた心を……俺が全部受け止める!!」

「……シゼル、お前は俺に似ていたんだ。一歩間違えれば、俺も同じ道を辿っていたかもしれない」

「お前と俺が似ている……?」

「俺とお前に差があるとすれば、お前はずっと独りだったんだ。頼れる人も居なければ、支えてくれる人も居ない」

「それを……一瞬だけ感じたんだ。だから、そう言った」

「……………」

「そして今、俺やお前のようになる可能性の人が、一人いる」

「何……?」

「一歩間違えれば、お前と同じ道を進んでしまうかもしれない」

「だったら何だ」

「お前は、何故ここに蘇った。何十年も前の人間が……。俺は、ちゃんと意味があると思
うんだ」

「……………」

「それはたぶん、お前のような奴を再び生まないために——」

「くだらん」

シゼルは言葉を遮りそう言い切った。

「…シゼル……………」

「他人がどうだろうと俺の知ったことではない。俺が蘇った理由だと？そんなものは
俺が自分で考えればいいだけだ」

「…もう、いいだろ、シゼル。意地を張り続ける事に何の意味がある。お前はあの時、俺
の目の前で死んだ。それが真実だろうに」

「……………」

「戦いだけが、全てじゃない。分かり合う道だって、手を取り合う未来だって、来るはず
だ。それを信じたって、何も悪いことじゃないだろ…！」

「……………ふん。そいつはどこにいる」

「え……………」

「その俺のようになるかもしれないバカはどこにしていると聞いているんだ！」

「……………この宙域にいる」

「ムゲン、宙域のデータ、彼に送るよ」

「ああ、頼む」

「……………一度だけだ。もう二度と俺に命令するな」

シゼルは背を向け、その位置へと向かうために移動していく。

「…凄いな、君は」

「…ゼロ…………？」

「戦いではなく、言葉で彼を動かした。君はやつぱり、”現在を生きる”人間だ」

「……………そんな事ない。きつと、あれは彼の意志だ。…そう信じたい」

「……………なら、君には伝えておかないとね。僕達はどうかやって蘇ったかを」

「……………ああ、教えてくれ」

「僕たちは、死ぬ直前までの記憶を埋め込まれた”クローン”だ」

「クローン…………？」

首を傾げると、エヴァが言う。

「複製された人間かな。私がやったアンドロイドみたいなものだよ」

「……………造ったのはもちろん、ベルベット・バーネット。君ならわかるよね」

「……………ああ」

「この先を進むと、その製造工場を含めた小さなコロニーがある。丁度、アイランド・イフィツシユが建っていた場所にね」

「コロニーが……………?」

「コロニーというには小さすぎるけどね。ただ、人が100程度暮らすには十分な場所さ。彼はクローンを大量に生産し、君を、いいや君だけじゃない多くの人を傷つけるために……………」

「”ネズミ刈り”を作ったんだ」

「……………ネズミ刈り……………」

「連邦の中に巢食うネズミ、つまり公けに公開されていない特殊部隊を、事故に見せかけ壊滅させる。その大多数を担うのがクローンさ」

「唯一の人間は、君が良く知る人だと思うけど?」

「……………ジェームスの事か」

「そうさ。彼は、その事実も知らず、今も戦い続けている。……………ひどく悲しい話だよ
ね」

「……………そうだね……………」

「僕が知っているのはここまで、僕も、結局のところそれくらいしか知ることは出来ない」

かった」

「なあ、ゼロ」

「なんだい？」

「どうしてそんな事を教えてくれたんだい」

ゼロはふつと笑った後

「大したことじゃないよ、僕は、人を、人類を信じているから。……何より、命を玩具のように使う人を許せないだけさ。分かってくれるよね」

「……そうだな。お前やシゼルの命をこうも簡単に扱う、ベルベットは……許しておけない」

「だからせめてもの、彼への抵抗さ。さあ、行つて。僕は——ムゲン、危ない!!!」
反応するよりも早く、ゼロが前に躍り出る。

「ゼロ!?!」

そして、ビームライフルを構え発射。しかし、出力で負けて頭部が貫かれる。

「ぐっ………!!随分早い出だね……ベルベット……!!」

「何……!!」

ゆつくりと姿を現したのは、真っ赤に塗装されたガンダム。

「喋りすぎだな、ゼロ・オブリビオン。せつかく蘇らせたというのに」

「ベルベット……！貴様!!!」

「……悪いけど、僕は一言も蘇らせてほしいなんて言っていない」

「ああ、そうだな。だが、死んだ人間が喋るといいうのもおかしい話だ。だから再び消えてもらおう」

「……やらせるか——」

「ムゲン」

それを制止したのは、他でもないゼロだった。

「……彼は、僕が止める。君には、つけなきやいけない決着が多い。だから、せめてこれくらいはさせてほしい」

そう言いながら、蒼い色のオーラがMk-0から沸き立ち、赤いガンダムへと立ちふさがった。

「……ゼロ……」

「旧式がこの私に勝てるん？」

「やってみなければわからない……！僕はそれを……背中にいる彼から教わった!!!」

「さあ行って、ムゲン！君が未来を……僕が見れなかった明日を!!!」

「……分かった。……必ずまた……!!」

背を向け、ゼロから送られた座標へと移動する。

コロニーの前、そこに佇む1機のガンダム。

黒いその機体が、俺を待っている。

「……………やはり、居たか。道夜」

「……………待っていた、お前を」

「道夜……………!!!」

「今度こそ、お前を討つ……………!!!」

刀とビームサーベルがぶつかり合う。

得物が弾かれ合い、お互いに間合いを取ってビームライフルを構え、放つ。

2機のガンダムが宇宙を舞いながら激しくぶつかり合う。

「遅い……………!!!」

腹部に蹴りを入れられ吹き飛ぶ。態勢を整える間もなく、追撃でナイフが飛んでくる。

「ちっ!!!」

蹴りでナイフを吹き飛ばし、そのままの勢いで刀を振りぬく。

それを二振りのビームサーベルでつかみ、刀を溶解させた。

「っ……!!」

そしてそのまま胸部へと斬りつけられる。

「ぐっ……!!」

追加装甲のおかげで致命傷は避けたが、これではもう使えないだろう。

「……フルウエポンを解除する」

装甲と武装をパージし、再びリファーストを見据える。

「道夜……お前も……ずっと”独り”だったんだろ……」

「……”一人”だからなんだ」

「お前が支えてくれたことは何度もあった。でも、俺はまだ何一つお前にしてやれていない。……だから！戻ってくるんだ！今度は俺もお前の痛みを背負う!!」

「……何を……!!」

ビームライフルを構え、牽制。それに反応したりリファーストが回避しながらこちらを射撃。

それをシールドで防御しながら、メガキャノンを発射。

正面で爆発が広がる。

ビームサーベルを引き抜き、リファーストへと駆ける

左から右へ切り抜け、ビームライフルを両断。

素早く反転し、サーベルを振り下ろすが、相手はそれをサーベルで受け止めた。

「何を言ったところで…今更ああ!!」

「道夜！お前にも分かるはずだ！皆の声が!!皆お前を待ってる!!誰一人、お前を責める奴なんかいないんだ!!」

「黙れ……お前に何が分かる！理解してもらえぬ苦しみが!!理解してほしいと願っても、誰一人にも手を差し伸べられず!!お前だけだった!!」

「お前だけがいつも……いつもお!!」

リファーストは間合いを取り、バズーカを放ってくる。

素早くシールドを構えメガキャノンを発射。

弾頭とビームはぶつかり合い、宇宙に光を放つ。

煙から飛び出してくるリファースト。そのまま流れるようにこちらへ迫る。

咄嗟にシールドで防御。それを予測していたのか、ガンダムは横薙ぎにサーベルを振り、シールドを真つ二つに。

「つ……!!違う……!!お前にだって…手を差し伸べてくれた人はいたんだよ!!ユーリだって、エトワールだって！お前を連れ戻したいと願ってる!!」

「黙れ……！そんなわけがない……!!」

「本当だ!!道夜!!戻ってこい!!」

片手でバズーカを放ちながら、再び距離を詰めてくる。
再びぶつかり合うサーベル。

「いつもお前は青臭い言葉ばかり並べて……！人を分かった気になって！」

「くっ……！！俺は……！！」

「そのくせ、責められればいつも逃げ出して！！」

サーベルで押し切られ、腹部を蹴り飛ばされる。

反動で吹き飛ぶが、素早く機体を制御し体勢を立て直す。

「ぐっ……！！」

「そうして歩んできた道に、何の意味がある！！答えてみせろ！！」

バズーカを発射しながら俺の側面へと移動していくリファースト。合わせるように俺は機体を動かし、ビームライフルで迎撃。

爆発の光があちこちで放たれる。俺は爆風に紛れ、相手の死角へ。

背後からサーベルを振り上げた。

「俺は……俺は……！！」

「答えられない……それがお前の答えか！ムゲン！！」

素早く反転した道夜は、振り上げた俺の腕を掴んで、投げた。
投げられ機体が吹き飛ぶ。

「ぐあああ!!」

「……………所詮、お前はこの戦争という世界で生きるには、純粹すぎる。出会った時から、そう思っていた事だ」

「くっ……………」

態勢を立て直した時には既にそこには何もいない。

「っ!!」

振り向きサーベルを振る。すると、ギリギリのところまで道夜の攻撃をサーベルが受け止めていた。

「……………純粹すぎるがゆえに……………お前はニュータイプとしての力をいかに発揮し、そして……………多くを感わせた!!」

「違う……………それは違うよ道夜!!確かに俺はニュータイプなのかもしれない、でも、道夜……………お前だってニュータイプなんだ!!」

「何を……………!!」

「皆の声を感じるんだろ!それが証拠なんだ!雑音に聞こえる声だって!それはお前がニュータイプである証なんだ!!」

「本物のニュータイプが……………!!俺は……………人工ニュータイプ……………!セカンド・ムラサメだ!!」

「違う……!! お前は、八雲道夜！俺たちの仲間だ!!」

「黙れ……黙れええええ!!」

ビームサーベルを構え突っ込んでくる。

「……確かに、俺は甘いし、すぐ人を分かった気になる、そして、逃げもするさ……。でも……!!」

何度目かの衝突。

「でも……！俺には……お前や、沢山の人から、多くの事を学んで、受け継いできた！だから、俺はこの道を……この歩んできた”軌跡”を後悔していない!!」

力で押し切り、一気に間合いを詰める。

「くっ……!!」

「お前は……!! お前はこれでいいのか……!? 人工ニュータイプとして、このまま宇宙を彷徨うだけの生き方で!!」

「俺は任務のために——」

「違う!! 任務とかそんなの関係ない!! お前は……!! お前自身がどうしたいかを聞いているんだ!!」

「俺は……俺は——ああああああ!! 黙れええええ!!」

「道夜……!」

瞬間、リファーストが真っ赤なオーラで包まれる。

「お前を……殺す……!!それだけだ!!!」

「道夜……!!!」

『ムゲン……………』

頭の中に声が響く。

「……ゼロ……!?!」

『ごめん……僕はここまでだ』

「何……!!」

『忘れないでほしい、時には、言葉だけでなく、力を使わねば届かない事も。それでも……人を……信じてほしい』

「ゼロ……お前……」

『短い時間だけど、君とゆっくり話せて幸せだった。今、救いたい人がいるのなら、君は刃を……取るべきだ』

『その刃で、彼の心の壁を……貫くんだ』

『僕は知っている。君の背負った重さを、仲間への想いを』

『だから……これを託そう』

ガンダムが虹の光に包まれる。

そこには確かに、ゼロの温もりがあった。

「……ゼロ……!!」

『……大丈夫、君は、皆が認めたニュータイプ。……未来を……頼むよ』

「………ゼロ……!!! ……分かってるさ……。後は……俺が……!!」

「レゾナンス、俺に力を貸してくれ!!!」

サイコフレームの色が赤から緑へと昇華し、全身から緑のオーラが沸き上がった。

自然と恐怖を感じない。……ここに皆を感じる。

「……これは……!」

「……お前を目覚めさせるには……これで決着を付けなきゃな……!!」

ビームダガーを抜き、構える。

「道夜……お前を連れ戻すために、俺は……戦う!!」

「………そうだ………! 来い! ムゲン!!!」

駆ける、そして、素早く切り抜け、反転。

互いに得物がぶつかり合い、そして弾かれ合う。

「……………もう、本当に、こんな戦いは終わらせなきゃいけないんだ!!」

「ならどうする!」

「ベルベットを討ち……………お前とジエームスを連れ戻す!!」

「やれるものなら……………!!」

「やってやるさ!!」

サーベルを構え、相手へと切り上げる。

上昇回避した道夜へとサーベルが襲う。斬撃は相手の左足を切り落とす、左足が爆発。

「くっ……………!!だが!!」

反撃にサーベルを振り下ろす道夜。対応に遅れ、右足に傷をつける。

「……………道夜……………必ず連れ戻してやる!!」

互いに間合いをとる。俺はサーベルを投げ出し、殴りにかかる。

すると道夜もそれに合わせ殴りに来る。

互いの拳がぶつかり合う。

「お前の痛みも、苦しみも……………俺が背負う!だから!!」

「それだけで、俺を理解したつもりか!!」

蹴りと蹴りがぶつかり合う。宙返りのあと、再び拳が交わる。

「分からないさ……！だから教えてくれよ……!!お前の事!!」

「何……!!」

「人は分からない事だらけさ、自分の事だつて分かりきつてない。でも、それでも、分からないから投げ出すんじゃない、理解するんだ!!」

「そして、それを知つて、受け止め、妥協して人々は生きていくんだろ!!」

「俺はお前をほとんど知らない！でも、お前だつて俺を知らない!!!だから、まだ一緒にやるべきことは沢山あるはずだ!!!」

「……俺は……俺は……!!」

道夜を蹴り飛ばす。すかさず受け身を取った彼は、再び突っ込んでくる。俺もスラストを起動し、道夜へ殴り掛かる。

「道夜ああああああ!!!」

「うおおおおお!!!ムゲエエエン!!!」

互いの拳が、メインカメラに打ち込まれる。

衝撃で機体が吹っ飛ぶ。

なんとか態勢を立て直す。しかし、道夜はうまく立ち直れず、宙を舞う。

俺は道夜の機体へと近づき、手を差し出す。

「……………なんの……………つもりだ…」

そんな彼へ、俺は静かに微笑んで言った。

「もう一度、俺たちはお互いを知る必要がある。俺だけじゃなく、皆」

「……………ムゲン……………」

「もう、俺たちは戦う理由なんかはない。そうだろ……………道夜」

「……………馬鹿だな……………。まだ……………やるべきことが残ってる」

「分かってる。でも、もうこれで、お前との戦いは終わり、そうだろ？」

「……………」

彼は静かに考えた後、俺の手を取り機体を起こす

「そうだな。……………俺も、人の事を言えた義理じゃなかったな。他者を理解し、妥協して

共生する……………か。そうだな、人は、”人間は” そうあるべきだ」

「……………それが、本当に分かり合うって事なんだと思う」

「……分かり合う…か。随分と時間のかかりそうな話だな」

「それでも、少しずつでもそうしていかなきゃいけないんだ」

「……ああ。……ありがとう、ムゲン」

「気にしないでいい。……そのためにもまずは、つけなければいけない決着がある。エヴァ、ベルベットは」

「コロニー内部、そこに熱源反応があるから、たぶん、彼はそこに居る」

「…行くのか」

「ああ、行かなきゃいけない。全て、終わらせるために」

「……俺も行こう」

「道夜…」

「俺も、お前を知らなきゃいけない。だから、俺たちで終わらせて、帰るんだ」

「私も忘れないで！先生！」

背後からネティクスと金に輝くガンダムが並び、こちらを見て言う。

「リリー……！それに…ジエームス…！」

「……大丈夫、私達は、分かり合えたから。ね、ジエームス」

ネティクスの顔が金のガンダムのほうを見ると

「迷惑かけてすいませんでした。俺……」

彼は恥ずかしそうにそう言った。俺は首を横に振りながら言葉を返す。

「……いいさ。……もう、恨みは晴れたんだろ？」

「……リリーが居なかつたら、俺は変われなかつた。俺は情けない男です……」

「いいんだよ、それで。これからは、二人で進んでいけばいいんだ」

「……はい」

「皆、覚悟は良いんだな」

「ああ、俺はいつでも行ける」

道夜が軽く笑ってそう言う。

「私も行くよ、先生。私、皆を守りたいから」

「大切な事、リリーから教えてもらったんです。だから、俺も行きます。俺が本当にし

なきやいけない事、見つけたから」

「……分かったそれじゃあ——」

「待つてください。私達も忘れないでもらえますかね」

遅れてユーリとエトワールの機体が到着する。

「……二人とも、無事だったか！」

「当然ですよ、私を誰だと思ってるんです？ 天才スナイパーですよ？」

「…………面倒なのが来たな…………」

「ん……？その声は！おお！懐かしきATM!!元気でしたかー？」

「…………まだその呼び名かよ……………はあ……」

「ほんと……久々だな……」

「ムゲンさん」

「エトワール……？」

「私も、彼と決着をつけるため、行かせてください」

「……………そうだな。君も行くべきだ」

「……………はい」

俺は4機のガンダムへ声をかける。

「……皆、ここから先、もう後戻りはできないけど、必ずみんなで帰ろう」

「俺たちの背中には、沢山の人々の想いがある。どんなに苦しくても、必ず生きよう……」

!!

「ああ、俺たちはまだ、お互いの事を知らなさすぎる。だから、生きて、お互いを知ろう。俺たちはまだ、出会ったばかりなんだから」

道夜を皮切りに、皆それぞれが想いを口にする。

「私、ジェームスともつと世界を見たい……！だから、そのためにも必ず生きて帰る！」

「俺は……名も知らない人から命を救われて、リリーの言葉でやっと目が覚めた。……俺にも沢山の人が手を差し伸べてくれてるんだって。だから、その想いを熱を……無駄にしたくない」

「無茶と言っても皆行くんでしようし、私も行きますよ。……久々に三人で暴れられますしね」

「……ここまで繋げてくれた皆さんのおかげで、私は今ここにいます。だからその想いを無駄にせず、私は次代へとこの想いを残す義務がある。だから、そのためにも、彼を討つ……!!」

「……そうだな。……行こう、”始まりの地”へ」

5機のガンダムがコロニーへと向かう。

そして、始まる最終決戦。

虹の軌跡が迎える戦いの果て

71 : 決着—愛—

グロリアスが宇宙へと上がって数日後、私達はいつもの生活を送っていた。

私に出来るのは、彼らが戻るまで、この子たちを守ること。

……それが、ムゲンとの約束。

「これで全部だ。被害総額の資料はこれと、これ」

カカサに一枚ずつ渡す。カカサは一通り目を通してから、机に資料を投げた。

「ま、こんなもんだらうね。いやあ……バカにならないもんだねえ……」

「今月は中々忙しかったからな。それに、トリントンの襲撃もあつたから、修繕費が掛かるのは仕方ない」

領きながらカカサはコーヒーを口に運ぶ。そして、天井を見上げながら呟く。

「……そういえば、もう3年か。……アイツが死んでから、時間が進むのが余計に早く感じる」

「……そうだな。私も同じだ」

「なあ、フィア」

「なんだ？」

彼は真剣に私を見つめ、言葉が続けた。

「もし、アイツが生き返ったら、どうするよ」

「急にどうしたんだ、現実主義者のお前が言うセリフとは思えないぞ」

彼はふつと笑って言う。

「まあ、そうなんだけどさ。でも時々、そう考えちゃうんだよ……。俺の中でどれだけアイツの存在が大きかったのか、今になって理解できる」

「……確かにな。私にとっても、アイツは大きすぎる存在だった。……だから、お前がそんな事を考えるのも分からなくはないな」

カカサは、じゃあと行って私の答えを待つ。

アイツが……クロノードが生き返ったら、私は……。

伝えたいことも、したいことも沢山あった。けれど、唐突にそんな事を言われても、答えなんか出るわけが無かった。

私は小さく首を横に振ってカカサのほうを見る。

すると、彼は肩を竦め、口を開く。

「ま、そうだよな。……でも、俺はあるんだ」

「へえ、どんなことをしたいんだ？」

「…アイツに、今の世界を見てほしい。俺やムゲンが歩んでいる、いま現在という世界を」
 「見せてどうする。アイツが思ってた世界とは違うかもしれない」

「そりゃあね。でも、見て、答えが欲しいんだ。何だっもいい、ダメ出しだっつて、罵倒だっつて構わない。それで俺はまた前に進める気がするんだ」

「……なるほどな。……でも、私が思うに、今の世界、小さく見れば悪くは無いと思うぞ」
 「フィア………?」

大きく見れば、戦いは終わらず、ただ今までと同じことの繰り返しにも見える。

でも、カカサが守り、築き上げてきたこのトリントンという街だけで見れば、私からすれば、凄いい進歩していると思う。

「アイツならきつと、”よくやった”って言ってくれるさ」

「……どうだろうな。……結局のところ、俺の妄想さ。……クロノードはもう生き返りはしないんだから」

「………ああ……、そうだな……」

3年という月日が経てば彼の死さえも受け止められると思っていた。

でも、実際は違う。

カカサも、私も…、あの時、あの場所でアイツを看取ったムゲンもリナも………まだ受け止め切れてはいない。

どうしても、彼の話になると、悲しくなってしまう。いつまでも、このままで居るわけにはいかない。そうは思っても……。

あの時の……アイツの笑顔が忘れられないんだ……。

大雨だったあの日、アイツは笑ってたんだ。

何一つ、後悔のないような……そんな笑顔で。

今まで、そんな笑顔、見たことなかったのに。

もう一度……アイツと会えたなら……。

後悔は無かったのか、それを……聞きたい。

……クロノード……。

それから、カカサから休憩を貰い、子供たちの所へと足を運ぶ。

丘の上にある小さな孤児院で、子供たちが勉強するのをただ見るだけ。

……私にも知識があれば、教えてあげられるのだが、残念なことに、ルナに教えてあげられることは何一つなかった。

母親として、これほどまでに悲しい事があるだろうか、最愛の娘に何も教えてあげら

れない事が。

ルナの横に座り、ムゲンの娘であるアウロラも、一緒に勉強している。それをただ静かに、見ている。

「……………」

ルナは真剣な表情で、学校以外の時間も机で勉強を続けている。

『私、頑張つて勉強してお医者さんになる!!お医者さんになって、パパの病気を治すんだ!!そうしたら、ずっとずーっと幸せだよね?』

華のような笑顔で、目の前にいるこの子はそう言った。

そして、その日以来、いままですつとこうして勉強し続けて、気づけば医療の事は私やカカサ以上に覚えている。

けれど、いつかはルナにも伝えなければいけない。”あなたのお父さんは、死んだ”。その一言を。

どれだけ傷ついてしまうだろう。もう、立ち直れなくなってしまうんじゃないだろうか……………。

そう考えれば考える程、言葉に出来ない。

この子の意志を折る事など…親である私が出来るわけない。

「……………さん。お母さん」

「っ!!」

ルナの言葉で現実へと引き戻される。

「ど、どうした?」

「ううん。ちよつと、気になって」

ルナは机に向かいながら言葉を続けた。

「お父さん、いつ帰ってくるのかなって」

「っ……………!」

「だってほら、帰ってきてくれなきゃ、何の病気かもわからないから。でしょ?」

そう言っただけ振り向く彼女は、私を見ると驚いて

「ど、どうしたの?お母さん?何で泣いてるの?」

知らずのうちに、涙が流れていた。

胸が苦しくなる。…………あの時の記憶が…………蘇った。

なんでもない、その一言すら言えなくて、ただ地面に崩れ落ちるしかなかった。

「お母さん……………」

何かを察したのか、後ろからドアが開き、その主が言う。

「ルナちゃん、アウロラ、気にしないでいい。気にせず勉強しててね」

「…………分かったよ、ロイ兄さん」

ルナは頷いた後、再び机と向き合った。

私は、ロイに肩を借りながら、子供部屋を出て、椅子に腰かける。

ロイは何も言わず、私の前にコーヒーを置いた。

「……すまない……ロイ……」

彼は首を横に振り、言う。

「大丈夫です。……あんな事言われたら、返せるはずですよね」

「……聞いていたのか」

「ええ。……父さんから、クロノードさんの話は聞いてますから……」

「……君のフォローが無ければ、私はどうすればいいか分からなかったよ」

「俺には、本当の親は居ないから、本当のところは分からないけど……でも、それでも何かできるはずだから……って」

その複雑な表情は、かつてのムゲンを思い出させた。

この子は孤児のはずなのに、そう感じさせた。

やはり、子は親に似るものだな。

「……ありがとう。だいぶ落ち着いたよ」

「気にしないでいいよ。俺は、父さんのように、出来る事をできるだけやるだけだから」

私は小さく頷き、言う。

「それでいい。……まったく、ムゲンはいいい子供を持ったな」

「……父さんと母さん自慢の息子ですから」

瞬間、地面が大きく揺れる。

その振動で、全てを察して叫ぶ。

「ロイ！ルナとアウロラを！」

「……えっ……。は、はい!!!」

駆けだし、外に出ると、遠くで煙が上がっているのが見える。

「……やはり来たか……!!」

急いで商会の格納庫へと走り出す。

手遅れになる前に、カカサが築いたこの街を守るために……!

格納庫では、ほとんどの連中が出撃の準備に手間取り、動けずにいる。

「……見てられんな……」

機体に覆われた布を剥いで、機体に乗込み込む。

「……まだ動けそうだな。……よし、行くぞ、プロトザク」

カメラアイが光ると、機体が動き出し、外へと向かう。

それを見たのか、カカサから通信が入る。

「ファイア!!」

「周りが手間取っている、私が敵を引きつける、お前は奴らを統制し、動かせ」

「出撃するな——」

「市民の命を見捨てる気か!!!」

「っ……………」

「私の命と、多くの市民を秤にかけて、お前はそれで満足か!? 私を死ぬまで守る事、それが、お前とクロノードがした約束か!」

「違うはずだ。アイツなら、そうは言わない。……私にも、守るべきものがある……!!!」

そう言い切り、強引に通信を切った。

……私にとつても、これが本当に最後の出撃だ。

「…ファイア・アッシュベリ……いや、ファイア・グレイス、プロトザク、出撃する!!!」

市民街の一部は、既に炎に焼かれていて、そこにジオンの巨人が立っている。

「……くっ……！連邦の警備は何をしているんだ……！！」

接近する一機をサーベルで切り伏せ、先へと進む。

「こんな……こんな戦いを、誰が望む……！！平和なこの街を……何故……！！」
憎しみよりも悲しみが押し寄せる。

どれだけ繰り返し返せば、世界は変わる……？

どれだけ人が死ねば、世界は許される………？

「答えろ……！！！」

ビームライフルで、敵のコックピットを貫いて眩いた。

誰が悪いわけじゃない……でも、それでも……。

遠方からの狙撃。寸での所で防御。……この的確な狙撃……中々のエースが居るよう
だ。

「……そこか……！！！」

視線を合わせると、そこに立つのは、狙撃銃を構えた白いザク。

「お前が……街を……！！！」

ビームライフルを放ち、牽制しながら接近する。

その射撃を、相殺するように白いザクは狙撃していく。

目の前でサーベルを振りかぶると、それを受けるように白いザクもまた、サーベルで

受けた。

バチバチと火花を散らす。

「何故……なぜ今になってここを狙う……!? 多くの人が生きる街を……!! また戦争を繰り返すのか! ジオンは!!!」

「……………何故……」

白いザクの声聞いて、思考が固まった。

その隙を逃がさず、白いザクは押し切つて、機体を蹴り飛ばす。

「ぐうっ……………!!……………その……声……………お前……」

態勢を立て直しながら、再び白いザクを見る。

そうだ、この機体は……………。

「……………何故お前がここにいる。ファイア」

紛れもない、「アイツ」の声。

「……………クロノード……………」

「何故……お前が戦っている……………!!」

「お前こそ、何故生きている!?!」

「……………俺にも分からないさ。だが、俺は言ったはずだぞ、お前は、もう戦う必要は無い

と」

「……戦わなければ守れないモノも、ある。そう言ったのはお前だ」

「だから戦う……、それはいい。だが、それ以上にお前がしなければならぬ事がある
だろ……!!」

「ルナを守るために、今ここにいるんだ!!」

「お前がしなきゃいけない事は、そんな事じゃないはずだ!!俺は、カカサに託した
……」

「……お前は……お前はいまさら何をしに私の前に現れた!!!そうやって説教するため
に、現れたのか!!!」

「……俺は、連邦の基地を破壊しなければならぬ。それが、命令だ」

「クロノード……!!そんな命令、聞く必要はない!ベルベットの命令など……!!」

「悪いが、俺にも、一応恩がある。だから……そこを退け、ファイア。でなければ、お前
を討つことになる」

「退くわけないだろ……!この背中に、何人の命がいてると思ってる!!」

「……市民には被害は与えない。だから、退くんだけ」

「……お前は……変わらないな。いつも、そうやって戦場では冷酷に務めている」

「……退かないなら、討つしかない」

クロノードがスナイパーライフルを構える。

「……討てるか、私を……!!」

「討つき、お前を」

機体を動かし、射程外へ、そしてなるべく市民街へ被害が無いようにする。

「……なら、私も……お前を討つ……!!クロノード・グレイスは……3年前に死んだ!!!」

ビームライフルを構え、放つ

「ならお前は……クロノードじゃない!!!」

「何を言われても、事実は変わらない。ただ、それでも、此処に居る理由は、命令を遂行するためだ!」

それを受けるように、ビームライフルを放ち、相殺させる。

ビームがぶつかり合い、小さな爆発が起きる。

「その命令は、また人を争いへと巻き込むことになる事が分からないのか!!お前だってそれを望んでるわけじゃないだろ!!!」

「そうだ。だから、基地だけを狙う。そう言ったはずだ」

「違う……!基地にいる奴らだって人間だろ!!!」

「…連邦とジオンの間に生まれた溝は、簡単には片付けられないことくらい、お前も知っているはずだ」

再びビームライフルを構える。しかし、それを予測していたかのように、ビームライフルだけを狙い撃たれ、手元で爆発。

「くっ……!!だが——」

「どんなに時代が進んでも……これだけは、ムゲンもカカサも変えられなかった…。この世界を見て、そう思った」

「違う……!!」

ムゲンとカカサが変えようとした世界は……!!

「違う……! あいつらは、変えたんだ!! この世界を少しずつでも……!!」

「どう変わった。宇宙では袖付きと連邦がラプラスの箱を求めて戦い、そして少年が巻き込まれる。何一つ変わっちゃいない」

「違う!!」

「この街は、アイツらを変えようと頑張ってきた証なんだ……!! お前は、何も見ちゃいない! ただ、言葉を聞いただけだ!!」

バズーカに持ち替え、放つ。そして、一気に背後へと周りサーベルを振るう。

それを予測して、再びサーベル同士がぶつかり火花を散らした。

「……………」

「大きく見れば、変わりはないさ! たった三年だ。その中で出来る事なんか限られて

るだろ!!」

「でも、お前が死んだあと、アイツらは自分たちが出来る精一杯をやってきたんだ!! それを見ずに否定するのか!!」

「……………」

「リナも、ムゲンも、カカサも……私も!!! お前が死んだことを、どれだけ苦しんで、涙を流したか!!!」

「それを今になって……!! 今更……!!! 私達の前に現れて……!!!」

「……………」

「何とか言ってみろよ……!!」

自分でも珍しく怒りを露わにしているのが理解できた。

アイツらしくない——そう思ったから。

「……………」

「何とか言えよ……!! クロノ——」

アイツの背中から複数の機体が迫ってくるのが分かった。

そしてその機体の動きが妙な事も。……クロノードを狙っているのか……?

「……!! くっ……まだ来るって言うのか!!」

白いザクの横をすり抜け、ビームライフルを構え牽制、一気に突っ込む。

それに気づいたザクがこちらを取り囲むように接近する。
続けてバズーカを放つ。

相手は軽々と避けるが、避けた先を見越し、もう一発撃ちこむ。
そこに相手は直撃し、機体が爆散していく。

「……よし、次——ぐあつ?」

背後からの衝撃。運が悪く機体が地面に倒れてしまう。

「まだ………まだ……!!」

フラフラになりながら立ち上がる。

左からの攻撃。直撃。

バランスをなんとか保とうとする。

そして、反撃にサーベルでコックピットを貫こうとするが、それを回避され、左腕を切り落とされる。

「……まだ………私は……!!終われない………終われないんだよ………!!」

「私には………帰りを待たなきや………リナとムゲンを待たなきや………、何より………!!」
腹部を蹴り飛ばし、間合いを取る。

「ルナを………守るためにも!!」

私自身、危険な事も十分わかってる。それでも………

それでも!!!

「うおおおおお!!!」

正面の敵をタツクルで吹き飛ばし、サーベルでコックピットを貫く。

「私がやらなきゃ……誰が……誰がこの街を守る!!! ムゲンとカカサの……戦いの証を!!!」

「私じゃなきゃ……いけないんだよ!!! あの日……アイツが死んだその時から!! 私はその役目を託されたんだ!!!」

カカサでも、ムゲンでもない。私がやらなければならない。たとえば、命を喪うことになつたつて。

守らなければならない命が、私の背中にもある。

「だから……!!! 来い!!! お前ら全員相手になつてやる!!!」

ボロボロの緑のザクが咆える。魂の叫び。

その覇気に圧され、動けるものは居なかつた。

「……………お前という奴は」

「……………はっ……!」

横からビームが飛び、目の前から迫る敵が撃ち抜かれる。

そして、白いザクが私の右に並ぶと、こちらを見た。

「……………何を……」

「俺がいつ、お前にその義務を託した。……それは、俺がすべきことだろうか？」

「クロノード……」

「すまなかつたな、俺だけが一人……」

「……………いいんだ。それでも、私も彼らも前へと進んだんだ。……だから、誰もお前を責めはしない」

「……………もう一度、お前と共に戦える日が来るなんて思わなかった」

「……………私もだよ、クロノード」

「まったく、良い雰囲気だねえ、お二人さん」

その言葉と同時に左に紫のイフリートが並ぶ

「……カカサか……。お前にも……」

「言うなよ。それに、お前が何で生きてるかなんてのも、聞きはしない。ただ、今は目の前の敵を倒す事だけに集中しようぜ」

「……………そうだな。やろう、三人で!!!」

「……ああ!!」

「任せとけよ、相棒!!!」

アイツと別れる前以来聞いたことのない彼の嬉しそうな声。

…私も嬉しい。形はどうあれ、私は死んだ夫と話しているのだから。

「援護する、カカサ、切り込んでくれ。フィアは中距離から遊撃を」

「オーライ! いつも通り頼むぜ!!!」

「…いつも通りか、9年越しの”いつも通り”、任せておけ」

正面からさらに迫る機体へビームライフルで牽制。そのままカカサと共に相手の懐へ接近。

「行くぞカカサ!! ついてこい!!」

「任せろ! フィア!!!」

正面の敵……。分かるぞ、アイツが撃つタイミングが、あの時と同じだ。

3、2、1……今!

同時に頭部が貫かれる。

「今だ!!!」

サーベルに持ち替え、胴体目掛け振り、切り抜ける。

カカサも同時に、切り抜け、斬撃が交差する。

背後で爆散。久々だが、やはりやるじやないか、二人とも。

「ふっ……」

思わず笑ってしまう。

「どうした、ファイア」

「いいや、懐かしくてな、お前たちと連携が取れる事が」

「そんなこと考えてる暇じゃない、次が来るぞ」

会話を遮りながらクロノードが狙撃。

それに合わせビームライフルを発射してコックピットを撃ちぬく。

「良い腕だ。変わってないな」

「……一応な、カカサに黙って腕を慣らしてはいたからな」

「え?!ちよつと困るよファイアちゃん。君は大事な人なんだからさあ……」

「……ふっ、それでこそカカサだな」

「……まったく……だ!!」

会話をしながらも、敵の攻撃を受け止め、反撃に蹴りを入れ間合いを取る。

吹き飛んだ機体を逃すことなくカカサがコックピット目掛けナイフを投げ、直撃。

私達の戦いのおかげか、守備隊が到着した時には既にほとんど片が付いていた。

「……久々の戦闘で疲れちまったなあ……」

カカサが背伸びをしながら言う。

「流石に、堪えたな」

「ふっ……随分お前たち仲良くなったじゃないか」

「そうか？前と変わらないと思うが」

「そうともクロノード君。僕とファイアちゃんは前から仲良しさ！」

「……俺には分かるさ。何だろうな、俺とカカサみたいになってる」

「……………」

「今のお前たちを見て、良かったよ」

「クロノード……………」

一時の静寂の後、クロノードが言う。

「なあ、ファイア」

「なんだ？」

「……あの子に……ルナに会わせてくれないか」

「え……………」

「もう一度だけ、あの子に会いたいんだ。どうせお前たちは俺が死んだことなんて

言っていないだろう？」

「だから、久々に帰ってきたって言ってやりたいんだ」

「……………分かった」

「カカサも、構わないな？」

「……………ああ」

カカサにしては珍しく渋々といった感じの返事だった。

私はコックピットから降り、歩いてあの子の元へと向かった。

「……………ルナ」

「お母さん……………？どうしたの？」

「…少し、会わせたい人が居るんだ」

私はルナの手を引き、歩き出す。

もし、本当に彼が蘇ったなら、もっと伝えたいことは沢山あった。

でも、実際に目の前にすると、何も言えなくて、むしろ、怒ることしか出来なかった。

だが、この子は違う。

本当にまだ生きていると信じているこの子にとつては……

白い機体の前までルナを引く。

そして、白い機体は片膝をつき、ルナの前に手を差し伸べた。

「……お母さん……?」

「大丈夫、私も行くから」

手に乗り、だんだんとコックピットの前まで手が上がっていく。

そして、前まで来ると、コックピットが開き、一人の男性が現れる。

それは、死の直前と全く変わらない、夫の姿。

「お父……さん……?」

ルナが思わず口を開く。

「ルナ」

「お父さん……!!」

ルナはクロノードに駆け寄り、抱き着いた。

「久しいな、ルナ」

「……お父さん……私、頑張つて勉強したよ。難しい数学も、言葉も、全部全部、お父さんのために……!」

「……ああ、知ってるよ」

ルナの頭を撫でながら優しく微笑むクロノード。

「……だからこそ、言わなきゃいけない事がある。ルナ、よく聞いて」

彼は彼女の目線まで膝を折ると、静かに口を開く。

「もう、お父さんのために勉強しないでいい」

「えっ……？」

「今までは、お父さんのために、頑張ってきたけど、これからは、そうする必要はない。お前が、思うままに勉強しなさい」

「どうして……」

彼の突然の言葉に、私は驚いて言葉が出なかった。

まさか、お前は……

「待てクロノ——」

「お父さんは、3年前に死んだんだ」

私の言葉を遮り、彼は言いきった。

「……………え」

「俺は……もう、この世界には居ない」

「じ、じゃあ……今目の前にいるあなたは……」

彼は小さく笑って言う。

「そうだな、皆、お前のためにこの事実を隠してきた、お前を傷つけさせないため、そしてお前の夢を壊さないために」

「でも、お前も大人になる時が来たんだ。だから、知る必要がある。…それを伝えるため

に、俺は天国からやってきたんだ」

「……………お父さん…死んじやったの…………？」

「残念だけど、そうなんだ。……………だけど、誰も恨まないでほしい。仕方のなかったことなんだ」

「なんで……………」

「戦争だから、かな。……………お父さんは、この機械で戦うことしか出来なかつたんだよ」

「……………お父さん……………」

「いいかい、どんなに苦しくても、投げ出しちゃいけない。お前なら、出来る」

「……………」

ルナの頬を伝う涙を拭いて、言う。

「いずれ、人間は死んでしまう。人間だけじゃない、動物も、植物も。そして、時代も」

「でも、それだけで終わらない。人は子を作り、次代へと伝えていく。植物も動物も同じだ」

「そして時代も、誰かが語り継ぐことで、未来でも受け継がれる」

「この行為こそ、君がしなきゃいけない事なんだ」

「でも……………」

「そのためにも、勉強するんだ。多くの事を学んで、今度は君が子供を持った時に、それ

を伝えられるように」

「……っ……………うう……………!!」

「辛いよな、こんな事。でも、立ち止まっちゃいけない。どんなに苦しくても、一歩ずつでもいいから進んでほしい」

「その一歩は、一生の宝、経験になるから。だから、この痛みを、絶対に忘れないで」

クロノードはルナを抱きしめながら

「お前なら、出来る。俺とフィアの子なんだから。大丈夫、何一つ心配いらぬ。皆がお前を見守ってくれる」

「そして、いつかは、お前が皆を見守るんだ。月のように優しい光で」

「……………。パ。パ……………」

「……………。ほら、これを」

クロノードが手渡したのは、小さなネックレス。

「辛くなったら、これを握っていなさい。俺が寂しきなんか消してあげるから」

「……………うんっ……………。うんっ……………。うんっ……………。」

彼は私に視線を向けると、頷いた。

そして、コックピットに乗り込もうとした時、ルナが叫ぶ。

「待って!!」

「……ルナ……?」

「どうした、ルナ」

クロノードが振り返り、片膝をついてルナを見る。

すると、彼女はクロノードを抱き寄せて頭を撫でた。

「……………!!!」

「……お疲れ様、お父さん。…今まで、私とお母さんを守ってくれてありがとう」

「これからは、二人で頑張るから、お父さんはゆっくり……ゆっくり休んでね」

「も、もうっ……な、なかないからっ……さびしくっ……ないから……!」

「心配しないでいい……から……!」

「……………」

クロノードは涙を流しながらルナの頭を撫で言う。

「……ありがとう。お言葉に甘えさせてもらおうよ」

今度こそ、コックピットに乗り込むとルナと私を降ろすと、背を向けて歩き出す。

「どこに行くんだ!クロノード!!」

「……過去の人間でしか出来ない事をするだけだ。カカサ、ルナを頼むぞ」

「……………言われなかったってやってやるさ。今までも、これからも!」

「……こんな苦しみ、もう終わりにしなきゃいけない。俺も、ムゲンも…。いや、終わりにするんだ。俺の手で」

「何を……」

「俺の役目、俺が蘇った場所を破壊する」

「………なら、俺も…!!」

「ダメだ。分かってるだろ、俺が生きてちやいけない存在だって事は。だから、これは俺にしかできない事なんだ」

遠ざかっていく、白い巨人の背中。

「クロノード!!!」

歩みを止める。私は、叫ぶ。

「お前は……お前は後悔してないのか!!!」

それを聞くと歩き出しながら言った。

「後悔なんか、するわけないだろ。俺は、筋書きや物語が大嫌いだ。だから、最期くらいはもう一度筋書きに”抗ってやる”」

「……ファイア、愛してる」

「………っ…!!バカ野郎………!!!」

ゆっくりと消えていく背中を見つめながら、ルナは言う。

「お母さん」

「……………ルナ……………」

ルナは、決意を秘めた目で私を見て、言葉を続けた。

「私、医者目指すよ。お父さんの為じゃなく、”みんな”のために」

「ルナ……………」

「人はいずれ死んでしまう。お父さんはそう言ったけど、でも、きつとその命の時間を増やすことくらいは出来るはずだから」

「……………それが、お父さん……………ううん、”父”が残してくれた言葉だから」

「少しでも多くの人が、私と同じ痛みを負う事の無いように。……………応援してくれるよね」

私はただ涙を流しながらルナを抱き寄せた。

クロノード、お前の子は強く成長した、誰でもない、お前のおかげで……………。

その後、トリントン付近で巨大な爆発を確認。

もし、これが神様の悪戯なら、あの子にとつては変わるチャンスをくれたのかもしれない。
ない。

あの子だけじゃない。いつまでも燻ったままの私達に、もう、前を進んでいいと言ってくれたのかもしれない。

未来を歩んでもいいと。

それにしても……お前は…。

私が愛してると返す前に逝ってしまうなんて。

ロマンチストじゃないな……。

71 完

72 : 決着—真実—

「みんなの心は一つだ。行こうぜ、ムゲン。決着を付けに」

「…ああ。生き残って、帰ろう。過去を伝えるだけじゃなく、俺たちを待っていてくれる人たちのために」

私は頷き、格納庫へと足を向ける。

私が今ここにいる理由、それは、彼に本当の真実を私の言葉で伝えるため。

先生が、先生にしかできない事があるように、これは、私にしか出来ない事。かつて、命を救ってくれたあの人を、今度は私が救う。

「……………だから」

ガンダムを見上げ呟く。

「だから、ネティクス、私に力を貸してね」

沢山のモノを託された。

数え切れないほどの人から、託された。

ネティクスも、その一つ。

彼を救えるかもしれないたった一つの希望。
彼女は……リナさんはそう言ってくれた。

その日、ジムを無くした私に、リナさんは問う。

「リリーちゃんは、どうして戦い続けるの？」

問いに、迷うことなく言葉を返す。

「救いたい人がいるからです。……前の戦闘で出てきた金のガンダムのパイロット
……。ジェームスは……ずっと孤独だった。だから……」

「……………そっか。貴女も、ムゲンと同じなんだね」

「え……………」

「大切な人の為に、今出来る事をしたい。ムゲンもそんな人だから」

「……………先生は、特別ですよ」

リナさんは首を横に振って言う。

「そうかな、私はそうは思わないよ」

「どうして……」

「だって、仲間じゃない。私にとっては本当の家族だし、貴女にとってはかけがえのない

先生。そんな彼が、どうして特別って思えるの？」

「だって…先生はニュータイプで…どんな時も自分一人で抱え込もうとして…」

「そうだよ。誰よりも先へと進んで、自分で全て解決しようとして…でも、それが彼なんだよ。誰よりも人間らしいと私は思う」

「……」

リナさんは私の肩に手を置いて言う。

「リリーちゃんもそう。何一つ、私達と違う所なんてない。ニュータイプが特別なら、それはきつと、皆の希望の光となるための力なんだよ」

「皆の……」

リナさんは頷く。

「宇宙は何もない。黒い世界が広がるだけだから。その世界を先導するための存在、それがニュータイプだと私は思う」

「そして、ニュータイプは、誰にでも優しく、誰とでも分かり合う心を忘れない人。きつと、貴女にもできる、大切な人を想う事」

「リナさん……」

「……私はここで整備やMSを造ることしか出来ないけど、貴女は違う。……その手で人を守る力がある。……だから……」

そう言つてリナさんは布を思いつきり引つ張り、私の前へある機体を見せる。

「……これ……は……」

「私が……うん、ムゲンが託された”もう一つ”の機体。それを使つて、リリーちゃんのためのガンダムを造つた」

「……ガン……ダム……」

私の前にいるその巨人は、ただ一人のパイロット、主を求め待つていた。

両翼をたたみ、ただその時を……。

「この子の基になつた子は、”歴史の裏で眠り続ける存在”。決して表に出る事は無かつた機体を基にしているの」

「名を、”N.T.I.X.”。ネティクスつてみんな呼んでいたらしいよ」

「……ネティクス……」

「貴女が救いたいと言つたガンダム、あの機体と同じ力が、この子にもある。だから、今度こそ、その子を救つてあげて」

「リナさん……でも、私は……」

「この子を造るのは私にしかできない事。でも、この子を使つて大切な人を救うことは、貴女にしか出来ない。……貴女に託すよ、ガンダムを」

「……………」

ガンダムに乗り込み、システムを起動させていく。

どれもこれもジムとは違って、ファンネルも、また別のモノへと変わっていた。

「……………ガンダム……………」

「…行こう、ネティクス」

託してくれた人の想いを乗せて、私は、戦う。

「…リリー・クリーヴズ、ネティクス、出撃します!!」

カタパルトから射出され、宇宙へと翼を広げたガンダムが舞う。

胸に手を当て目を瞑る。

そうしたら感じた。先生を、支えてくれる皆を。

だから、安心できた。

「……………今行くよ、ジエームス」

恨みだけが、憎しみだけが全てじゃない。

誰でもない、私の言葉で——

リーダーにとらえる1機のMS。

お互いに理解した、それが誰なのかを。

「…フィン・ファンネル!!」

頭の中で想像して、それをそのまま反映させる。

ネテイクスなら、それをしてくれる。

それを受け、金の一角獣は攻撃を避けながら接近。

私のジムを焼いた武器を構え、放つ。

あの時は怖かった、でも…今は!!

「大丈夫……皆が居るから!!」

ビームライフルを構え、放つ。

ビームがぶつかり合い、爆発。

煙から抜け出し、金の一角獣は頭部バルカンを放ちながらサーベルを振りぬく。

サーベルを抜いて、それに応戦する。

ぶつかり合った武器は火花を散らして、宇宙へと降り注ぐ。

「またお前か…!!何度俺の邪魔をするんだ!!」

ジェームスの憎しみがこもった声。私は邪魔かもしれない……でも、伝えなきゃいけない。

「邪魔だつて言われたつて構わない……！でも、私はあなたに伝える事があるから……！！」
 「黙れよ……！！あの男に……ムゲンに会わせる！！」

「……嫌だよ。私を見てよ……！！私は、あなたに助けてもらったリリーなんだよ……！」

「お前がリリーであるはずがない……！！リリーは死んだんだ！！俺の目の前で！！」
 「違うよ！！私は生きてる！誰でもない、あなたが救ってくれたから！！」

「まだ言うのか……！！俺の友達を騙るなよ……！！」

腹部を蹴られ、機体が吹き飛ぶ。

態勢を立て直し、ファンネルを射出。

それを回避しながらビームマグナムを構え、ファンネルへと放つ。

1基のファンネルが焼かれ、爆発。

「ぐうっ……！！騙つてない……！！私は……本物だよ！！」

「認められるかよ……そんな事がさあ！！」

「あなたが認めなくなつて、私は生きている！！そして、沢山の人から救ってもらつた！！」

ビームライフルを構え、発射。

それをシールドで防御し、反撃と言わんばかりに肩部に備えられた翼からビームが放たれる。

咄嗟にファンネルでシールドを形成し、攻撃をかき消す。

「お前も…ニュータイプだつて言うのか…!?くそっ…どれだけ俺を…!」
 「ジエームス!聞いてよ!!」

「お前じゃ勝てないって言いたいのかよ…!!お前じゃ救えないって言いたいのかよ!!
 俺を……………!!」

「違う!ジエームス!!!」

金の機体から黒い燐光が放たれ、私の心を抉った。

「ジエームス……………!!あなたは……………!!」

「俺に……………俺に話しかけるなあああああ!!!うああああ!!!全部俺の敵だあああ

あ!!!」

「ジエームス!!!」

金の一角獣を黒い燐光が包み込み、そして翼がその燐光を吹き飛ばすと、現れたのはあの時と同じ憎悪を放つガンダム。

「……………ううっ……………この……………感覚は……………!」

耐えるのですら精一杯のこの憎悪。

ジエームスは……………たった一人で……………。

誰かが受け止めなきや……………。

でも……

「怖い……」

ゆっくりと近づくとフェネクス。

そして、フェネクスが手を私に伸ばすと、握りつぶした。
瞬間、背後からファンネルの攻撃。

肩が貫かれる。そのたびに恐怖が心を支配していく。

「っ……ああ……!!」

「……………」

「ジエームス……………」

霞む目で、ただ彼を見る事しか……………もう、私は……………

彼にはもう、声は届かない。

……………先生……………リナさん……………ごめんなさい……………。

ビームマグナムをコックピットの前で構える。

「……………ジエームス……………私……………」

光が収束して……………

私は……………

静かに目を瞑る。全てを諦めて。

…もう、何も……

「情けないな、その程度で諦めるなど」

「……っ……！」

機体の中に響く声が、私を目覚めさせる。

「誰……？」

「……アイツに……ムゲン・クロスフォードに頼まれただけだ」

目の前を見ると、フェネクスに立ち向かう、紫の機体が居た。

「……先生に……？」

「しやく癩だが……お前を助けなければならぬ気がした。…そして、俺の目の前にいるこ

の機体のパイロットが……アイツの言ってたやつか」

「……」

紫の機体が押し切り、ガンダムの腹部を蹴り飛ばす。

それをシールドで防御し、間合いを取る。

「戦う意思が無いのに、何故戦う。何故戦場に来た」

そのMSがこちらを見て問う。

「お前は何故、此処に居る。答えろ」

「……私は……」

「私は……あの人を……ジェームスに伝えたい……。独りじゃない事を……。支えてくれる人がいたことを……」

その人の顔を私は知らない。でも、その人は確かに私に笑ってくれた。

「ならば、成せ。それがお前の戦う意味ならば」

「……！」

「俺には、答えなど見いだせない。だが、お前は違う。見るべき世界、伝えるべきことがある。ならば、それを成せ」

「どれほど否定されようとも、どれほど痛みを受けようと。前を見ろ、そして前へ行け。振り返る必要などない」

「……」

「それが、”現在を生きる人間がすべき事”だ」

「あなたは一体……」

「……アイツと同じ、”過去の人間”だ。……行くぞ、ハデス!!!」

紫の機体から赤い光が溢れ出す。でも、その光は、憎しみや、悲しみとは程遠い、”命の熱”を感じた。

サーベルを引き抜いて一気に突っ込む。

「そのためにもまずはコイツを目覚めさせないとな……!!!」

大きく振りかぶり、鐳迫り合いを誘発させる。

私もビームライフルを構え

「……私も——」

「必要ない」

「え……」

「見ておけ、戦うという事を」

鐳迫り合いの中、紫の機体が素早く宙返りし、サーベルを蹴り上げる。

そして、宇宙へ舞うサーベルを持ち直し、一気に振り降ろして金のガンダムの左腕を

両断した。

「その程度か、”現在のガンダム”の力は」

「あの男は、強かった。どんなときであろうと諦めず、俺に真正面からぶつかってきた」

「……………」

「……俺も感じていた。アイツと俺が似ていることを。だが、認めなかった。認めてしまえばそこで俺の意志が折れてしまう気がしたからだ」

「その強情さが、アイツと”分かり合うこと”を妨げていたのなら……………」

「こいつも同じだ……。全てを否定する強情さが、皆との繋がりを妨げる」
反撃と言わんばかりにフェネクスがサーベルで頭部を切り捨てる。

「ぐっ……。!! 確かに、アイツの言う通りだ……。! お前は…俺に似ている…。 だがな…!!」

紫の機体が回し蹴りをフェネクスの腹部へと。

それを防御するように右腕のシールドを構える。

「人間、同じなんてものは無い!! だから、俺は…俺だ!! そしてお前は…!!」

素早くサーベルを抜いてシールドを両断。

「お前はなんだ!! 自らに手を差し伸べるものさえ跳ね除け、そのマシンに吞まれ、それでいいのか!!」

「……。知った風な……。事を…!!」

紫の機体のパイロットの人がふつと笑い、言う。

「喋れるじゃないか。……。ならば問う!! お前は…何がしたい!! 恨みを晴らせればそれでいいか!」

「そうだ!! 俺は…ムゲン・クロスフォードを…!!」

互いに間合いを取り、再びサーベルがぶつかり合う。

「時に感情は……。人の視界までもを消してしまうものでな…!!」

「だからこそ、感情さえなければ戦争は無いと、あの男に言った。…だが、その時あの男はこう返したんだ」

「俺の知らない世界を、ジオンも連邦も関係なく手を取り合える日が来ると。彼はそう言った」

「それが……!!なんだ!!そんなものは来ない!!」

「何故わかる? どうしてそうなる。……ますますお前が俺に見えてきて仕方がない」

「くっ……!!バカにしてるのか!?!」

「…視野を広く持て、そして恨みだけに耳を、目を感性を奪われるな!」

「うるさい……!!お前は……お前は……!!俺の敵だああああ!!」

フェネクスが手を握ると、ファンネルが舞い、紫の機体へと迫る。

「危ない……!! ……ネティクス!!お願い!あの人を……撃たないで!!」

首を振り叫ぶ。すると、ファンネルは直前で停止し、私の元へと戻ってくる。

「……そうか……これが——」

瞬間、目の前で紫の機体がビームに吞まれる。

「ああっ……!!」

横切ったビーム、そしてそこに居たのは赤いガンダム。

「……私の邪魔をしすぎだな、シゼル・クライン。お前はここまでだ」
 ビームの後に残るボロボロの機体。

「……………笑わせるな、ベルベット」

「……………！」

その機体から溢れるように赤く燃えるような熱が機体を包む。

「ほお、まだ生きていたか。ならば」

再びビームライフルを構える。

「……………感謝しているぞ、ベルベット。俺は、やつと見つけたんだ……………」
 た意味が……………！！！！」

「ふん、ならば死ぬがいい！！」

「……………ただでは死なん……………！！！！」

ボロボロの機体が赤い機体へと突っ込んでいく。

「な、なにを……………！！」

「……………見ておけ、命は……………重いものなんだと……………今思えば、アイツの両親を殺したことも……………後悔していたのかもしれない」

「無駄な事を……………！！」

ビームを何発も放たれ、ボロボロの機体を貫くも、その機体は動じずに赤い機体へと

突っ込んでいく。

「な……なんだ!? 何故落ちない!?!」

「……………お前には……………一生分からない…。この、命の熱も、優しさも。……………俺は今、満たされている。だから、恐れは…無い!!」

ボロボロの機体が赤い機体に組み付く。

「……………!!!!」

「…まさか…今度は俺がこれをする事になるとはな……………。ふっ…運命というのはつくづく……………」

ボロボロの機体が光を放つと、赤い機体を飲み込み、爆発する。

「そん、な……………私は……………」

声が響く。

『……………ムゲンの言っていることがやっと理解できた』

「はっ……………!!ど、どこに……………」

『俺も変わるんだな……………。“こつち”に来てやっとわかった。……………あつたんだな、ジオンも連邦もない……………そんな世界が……………』

『だが、この世界が此処にたどり着くまで、どれほどの時間が掛かるだろう……。——聞
け、若き力』

流れ込んでくる温かい命の熱。自然と涙が零れてくる。

『お前は“火”だ。とても微かな、今にも消えそうな火だ。だが、その火はお前だけじゃ
ない、ムゲンも、目の前にいる男もそうだ』

「……………せんせいも……………」

『その火が集まり、大きな力を生み出す。……………いずれ、時間が経てば皆が火を持つ時代が
来る。……………そうか……………これが……………』

その人は何かを理解したようで、優しく微笑む姿が頭に浮かんだ。

『大丈夫だ、お前たちならば……………、お前たちのような“火”が居る限り、世界は少しずつ
変わっていく。……………若き力よ……………いいや』

『“ニュータイプ”よ、どうか、俺たちが知らない世界を——』

その言葉を最後に、温もりは消えていった。

「……………ああ……………！行かないで……………！！」

涙が前を邪魔をする。手を伸ばしても、もうその人は……………

でも、確かに残ったものもある。

「う……………あ……………。俺は……………何を……………」

「…ジエームス…」

「……………あの人は……………！あの人はどこへ……………！！」

金のガンダムが手を伸ばし叫ぶ。

私は、私が成すべきことを……………。そうですよね。

私は、金のガンダムの……………フェネクスの手を取って言う。

「……………あの人は、全てを覚えてくれた。私達がやることも、倒すべき敵も」

「……………り……………り……………」

「…私達は、変わらなきや、変われなかった、あの人の為にも」

「本当は……………分かっていた……………。でも、それを理解したくなかった。君が生きていることを認めたら…俺は何のために戦っているか分からなくなったから……………」

「もう、いいんだよ、ジエームス」

ネティクスが、フェネクスを優しく包み込み、そしてファンネルが2機のガンダムを囲み、フィールドを展開する。

その中で、2機のガンダムから優しい虹の光が放たれた。

それに共鳴するように、フェネクスのサイコフレームが”黒から緑”へと昇華する。

「ああ……………。俺は……………君に何て……………。いいや、君だけじゃない、ムゲンさんに

もなんてことをしてしまっただ……」

「…事実は変えられないけど、でも、これからは違うでしょ？……今ここから、もう一度やり直せばいい。私達は現在を生きる人間だから」

「……………リリー……………ありがとう…。俺は君に救われた……………」

私は首を横に振り、言う。

「いいんだよ、だって、私に世界を見せてくれたのはあなたなんだから。だから、今度は私があなただけが知らない世界を見せてあげるからね」

「……………温かい……………こんなにも……………宇宙は……………人は……………」

「うん……。皆……………この温もりを知るべきなんだよ……。あなたも、私も……………現在を生きる皆が感じるべきモノなんだよ」

「……………ああ」

「…そのためにもまずは、すべきことがある」

爆発から抜け出した赤いガンダムは無傷同然で私達の前へと現れる。

「……………ふん、くだらない事を……………!!そんな熱がいくらあろうと……………!!」

背を向けこの場を離れようとする機体へ叫ぶ。

「……………待つて……………!!!」

「…………なんだ？」

「許せない……………。命を…………命は…………そんなに軽いものじゃないのに!!」
その男は不敵に笑いながら返す。

「なら、どうする」

「…………貴方を…………討つ!!!」

赤い機体の前に立ちふさがりビームライフルを構える。

「…………いいだろう、相手になってやる」

「ファンネル!!!」

片手を上へ上げる。宇宙へファンネルが舞い、赤い機体へと迫る。

「小賢しい真似を!!」

ファンネルの射撃を回避しながらこちらへ突っ込み、サーベルを振るう。

それに合わせサーベルを抜いて応戦した。

「くっ…………!!」

ぶつかり合い、火花を散らす。

私はもう、誰も傷つけさせない…………。大切な人も、目の前の命も!!

「だから…………!!ネティクス!!!」

言葉に呼応してファンネルが射撃。赤い機体は間合いを取って射撃を回避する。

「その想いがあろうと、世界は変わらんと云っている!!」

再びサーベルとサーベルが激しくぶつかり合い火花を散らす。

間合いを取りながら、ビームライフルで牽制。

続けて、シールドミサイルで相手の位置を誘導。

すかさずサーベルで斬りに行く……が。

赤い機体はそれを受け止め、さらに空いた右腕でビームライフルを放つ。

受け止めているサーベルを蹴り飛ばし、その勢いで宙返り。

「それでも……!!」

宙返り中にスラストスターを起動。機体が相手を正面へ捉えた瞬間、一気に詰め寄る。

「ちっ!!!こいつ!!!」

サーベルでビームライフルを切り落とし、怯んだ隙に左腕を切り落とす。

「これで——っ!?!」

振り上げようとした右腕が、何かに撃ち貫かれた。

「残念だが、リリー、君はここまでだ。もう一度研究所へ送ってやろう」

「っ……!!」

周りを複数の機体が囲む。その感覚は、あの時、施設で感じたものそのものだった。

暴力的で、恐怖を感じる……。私は……。

その手がネテイクスに触れようとする。

恐怖で手が動かない……。

誰か……。助けて……。

「大丈夫、今度はもう、君を独りにはしないから」

触れようとしていた手は、一瞬で焼かれ、目の前で爆散する。

「ジエームス……」

フエネクスのサイコフレームが強く輝く。その光を見ているうちに、私の中で消えかけていた炎が蘇ってくる。

「……………今度こそ、二人で……、終わらせるんだ!!犠牲になってしまった、施設を抜出すことのできなかつた子供たちのためにも!!」

「……………分かつてる、分かつてるよジエームス。私達はもう、独りじゃない!!皆が、皆が背中を支えてくれている!!」

「そうだ、この熱が、胸に残るこの感覚が、世界を変えるんだ!!」

二機のガンダムから発せられる虹の光。その光が周囲の機体を包み込む。

「くっ……………この熱がいくらあろうと……………!!世界は変わろうとしなかつた!!」

「そうやって答えを急ぐから……………!!」

「急がねばならないだろう!人は所詮生きて100年ぼっちだ、だから急ぐのは当然

だろう!!」

「何故、一人で全て片付けようとする!人は、一人だけじゃ生きていけないのに!!」

「変わろうとしなかった人間が居るからだ!!だから私が変わる!!」

「それは……違う!!」

ファンネルが私の想いを受け取り動く。それを赤いガンダムが回避していく。

そこを的確にフェネクスがビームマグナムを放ち射撃。

「未来は……明日を信じるものだけが造れるものだろ!!」

「信じていなかったお前が言う事かよ!!」

赤いガンダムが回避するも、あまりの威力に足に傷をつける。

「確かに信じれなかったさ!けれど、お前のいう事よりは世界は信じる事が出来る!!」

「今は確かに、変わってないかもしれないけれど、10年後、100年後にはきっと、皆が分かり合える世界が来るって信じたい!!」

「信じてどうなる!!どう変わる!!所詮言葉だけで、世界は動きはしない!行動を見せてさえ変わらなかったんだぞ!」

「……それでも……!」

フェネクスがビームマグナムを投げ、トンファーで切りかかる。

合わせるように私もサーベルで切りかかった。
赤いガンダムはそれを両手で受け、対応する。

「ぐっ……………!!!」

「それでも、変わるって信じたいんだ！俺たちは……………!!!」

「私達は……………!!!」

「明日を信じてる!!!」

二機の攻撃を弾いて、間合いを取る。

「ぐっ……………たかが2機のガンダムごときに……………!!!」

赤いガンダムは背を向け離脱していく。

「待て!!!」

「……………ジェームス、いいよ今は。……………次こそ、彼を討とう」

私は彼を制止すると、フェネクスはこちらを向いて言う。

「……………分かった」

「……………とりあえず、先生の所へ行かなきゃ。……………たぶん、あつちも決着はついたはずだから」

「……………気まずいな……………」

「大丈夫だよ、先生も分かってくれるから」

「……………そうだといいけど……………」

私は目を瞑り、先生の感覚を探る。

この宇宙に光る、結晶体のような感覚——

「……………居た……………」

「……………行こう、リリー。本当の決着を付けに」

「うん」

私は胸に手を当て頷く。

「……………ありがとう、名も知らないパイロットさん。……………私は、世界を照らす火になってみせるから……………」

どうか、この世界のどこかで見ていてほしい。

私達の生きる世界を。

7
2

完

73：虹の軌跡・上

5機のガンダムがゆつくりとコロニーへと入っていく。

「……………これは……………」

機体を降りて、周囲を見渡す。

この景色を、俺は知っている。

ずっと……………ずっと昔の記憶。

道夜も、その景色を見てはつとした。

「……………ここは……………。何故……………」

リリーが不思議そうに俺を見る。

「先生……………どうしたの？」

「……………ここは……………」

「そうだ、ここは……………」

足は自然と居住区へと向かっていた。

「居住区に入って、そこから左に曲がり、突き当たったところに見える黒い色の屋根の家

……………」

眩きながら足を運ぶと、そこに建っていたのは、かつて俺が両親と住んでいた家。どれだけ望んでも、二度と戻ることは出来なかった……俺の……故郷。

「……………これが、お前の家か……………」

道夜がつぶやく。

俺は小さく頷き、再び別の場所へと足を向ける。

「帰って来た時、父に手を引かれ、この道を進んだ」

そして、大きな建物の扉を開く。

「……………だ」

「……………どうかしたんですか？」

エトワールが静かに口を開いた。

「……………ここが、俺にとつての……」 全ての始まりの場所」

過去の記憶が蘇る。

『父さん……………ここはどこなの？』

「そんな俺の問いに、父はひたすら何でもないと言い続けた。そして、大きな振動、そのまま俺はクローゼットへと押し込まれる」

「父が最期に見せた笑顔は、とても悲しそうだったのを今でも覚えている」

「そして、クローゼットの隙間から部屋をのぞいた時、俺の両親はジオンの兵士に撃ち殺されていた」

「死んでいるのにも関わらず、何度も何度も持っている銃で射的の的にように俺の両親の顔を撃っていた」

それを聞いてエトワールが

「なんて……………惨い…」

「……………そして、俺はその恨みから連邦へと入隊したんだ」

今でも、憎んでも憎み切れない事ではある。

だが、今はもうそれだけじゃない事を理解している。

だから、彼らを許せる気がした。

「……………何故、俺にこの景色を見せようとするのか……………」

「それはたぶん、これを作ったアイツが、俺の事を追い込もうとしているからだだろう。

……………そうだろ、ベルベット」

銃を構え、クローゼットへ向ける。

すると、クローゼットがゆっくりと開き、あの男が姿を現す。

そして、男は不敵に笑って言う。

「そんな物騒な物は仕舞うんだ、ムゲン。ここには、お前の両親が眠っているんだ。今の姿をお前の両親が見たらどう思う?」

「ふざけるな!俺の両親は、あの時死んで、そのコロニーももう……ないんだよ!!」

「…あれから既に17年という時間が経っている。そして、直に宇宙世紀は100年という区切りになる」

「そろそろ、君たちとも因縁を断ち切っておかねばな?」

道夜が銃を構え言った。

「それは光栄だな。丁度俺たちもお前との縁を切りたくてここに来たんだ」

「…八雲道夜。お前もサイド2出身だったな?」

「だったら何だ。全て、全てお前が指示し、俺を改造させた。いや、俺だけじゃない。

ムゲンも、クロノードも、全てはお前が仕組んだことだ」

「いけないな、八雲道夜。知ってはならないことまで知っている」

「クロノードまで……?!」

「まあいい。丁度いい機会だ、教えてやる」

ベルベットは静かに言葉を続ける。

「確かに、俺は道夜、そしてムゲンを強化人間へと変えた。それだけじゃない、純粋なキ

リング・マシーンとしてお前たちがクロノードと呼ぶ少年も強化人間へと変えた」

「…だが…クロノードはジオンの人間のはずだ!!」

「そうか…お前は知らないのか。アイツが元々”連邦”の人間だったことを」

「っ…!?!」

「いや、連邦の研究所で強化手術とケアをしたんだ。そして、未完成だと知ったからジオ

ンへ”売った”」

「それを…お前が…!?!」

「そうだ。ジオンは嬉しそうに買ってくれたよ。”命令に忠実な兵士”とな」

「……………貴様…!!」

銃を握る力が強くなる。

アイツが居なければ…クロノードは生きていた……。

そう思えば思う程……。

だが、その手をリリーが優しく包み込み、首を横に振る。

それを見て面白いと思ったのか、彼は言葉を続ける。

「それだけじゃなかったな。ジェームス、そしてリリー、君たちもそうだった」

「だが、君たちは強化手術を受ける前に逃げられてしまったね。随分手を焼いた。特に、

リリーには困ったものだよ。ジェームス、君が逃がしてしまったから」

それを聞き、ジェームスが叫ぶ。

「黙れ！どれだけ俺とリリー……いや、研究所の子供たちを傷つけたら気が済むんだ!!」

「ふん。だが、力が欲しいと言ったのは君のはずだ」

「っ……」

「リリーの死が辛かったんだろう？だから恨みを晴らすためならどんなことでもやってやる、そう言ったのは君だろう？だから力をやった」

「確かにそうかもしれない……。でも、リリーは生きている！俺があの時命を懸けてでも守ろうとした子は、俺の隣にいてくれる！だからもう、憎しみだけで生きる事はしない!!」

リリーも頷きながらジェームスの言葉に続く。

「私も同じだよ。皆、私を支えてくれてる。だからもう、迷うことは無い」

彼はつまらなそうに首を振り、エトワールへと口を開く。

「そうだ、君とも縁があつたね。エトワール」

「……………」

「いやはや、君の両親は忠実で助かったよ。そのおかげで、ちゃんとサイコフレームの機体まで完成したんだ。感謝しきれない」

「…貴方は、そうして父と母が時間と命をかけて造り上げたものを使い、また争いを繰り

返そうとしている。そんな事に何の意味があるんです」

「意味などない。ただ、人が繰り返すという事実だけ、そこに残る。意味など、所詮授業でしか使わぬもの。歴史の一部となり、生きる者たちに意味を説いたところで、返つてくるはずもない」

「……どんなことにだって意味はあるはずですよ。私が今を生きる事も、あなたとこうして話していることも」

「では何だというのだ？ 答えてみてほしい」

「それは……」

「そうだ、何も無いのだよ。意味よりも、事実のみが存在する。意味など、人が取ってつけたような綺麗ごとなんだ」

「くっ……」

「……もういい」

俺は静かに口を開く。

「ん？ どうしたのかな？ ムゲン」

「お前がどんな気持ちで此処に居るかなんか、もうどうだっていい。俺は……お前を殺

すためにここに来た。さっさとMSに乗ったらどうだよ……!!」

「おやおや、俺はまだ紳士なんだがな。俺の”二ヒリテイ”には、お前たちの機体など足下に及ばんから言っている。お前たちが望む、”言葉での解決”というので済ませようとしているのだが？」

「俺たちに言葉での解決など……ない。お前は……今を生きる人を見ているんじゃない。自分しか見ていない……!」

「すべて自分の思うようになると思っている……!!」

「そうだが？それが悪い事か？」

「コイツ……!!!」

彼はふつと笑い、続ける。

「まあいいだろう。お前の望み通り、二ヒリテイで戦ってやろう」

彼がパチンと指を鳴らすと、地響きが起き始める。

「……………ベルベット……」

そして、彼は建物を出ながら言う。

「決着の時だ、ムゲン・クロスフォード」

そして、次の瞬間、建物が消え去り、その場に赤いガンダムがこちらを見下ろしていた。

「……………」

「先生……………」

「ムゲン!!」

「分かってる!!!……………」

相対する5人、俺は大声で叫んだ。

「レゾナンス!!!!!」

居住区を空から飛び、そして俺の元へとガンダムが降りたつ。

「……………そうか、ニュータイプとして目覚めたか。だが、それがどうだというのだ。世界を変えられるとでも?」

機体に取り込みながら言う。

「変えて見せるさ、少なくとも、俺の手で出来ることくらいは!!」

遅れて他の機体も集まり、5機のガンダムが並ぶ。

「悪いが、俺もまだ知らなければならぬことが沢山あるからな。…だから今は、お前という存在が邪魔だ……………!ベルベット!!」

道夜がビームライフルを構える。

「…世界なんか変えるつもりはない…。けど、皆で一緒に歩める道だけでも…！私は…拓いて見せる!!」

リリーが手を広げると、ファンネルが空を舞う。

「俺は…俺を救ってくれる皆を守りたい。…世界よりも、俺は…!!」

ビームサーベルを構えながらジエームスは言った。

「私は、世界何て興味ありません。あなたとの決着をつけるためにここにいます」

エトワールがキャノンを構え、そう言い切る。

「あなたには何の興味もありませんが、仲間を今までさんざん傷つけてくれた礼、させてもらえますよね？」

ユーリがスナイパーライフルを構える。

「所詮、旧式が…!!」

「旧式だろうと…!!」

「やってみせるさ…！道夜!!!」

「合わせる！」

道夜がビームライフルで牽制、その隙に間合いを詰め、ダガーを振り上げる。

それを見切るようにサーベルで受け止めながら、ビームをシールドで防ぐベルベツト。

「……………くっ…!!」

「言っただろう？ お前たちでは勝てない！」

吹き飛ばされ、態勢を整える。

「だが、5対1では分が悪い。悪いが、他の子には彼らの相手をしてもらおうか」
ニヒリテイが手をあげると、レーダーの反応。

「くっ……………！クローンか…!!」

背を向けようとした時、道夜が叫ぶ。

「ムゲン!!!」

「……………道夜…?」

「仲間を信じろ。アイツらはもう、”独り”じゃないことを知っている」

「……………」

「お前が繋げて、皆が信じた。だから今度は、お前が信じる番だ」

「……………分かった。やろう、道夜。俺たちの背中には、信じる仲間が！」

「……………護るべき命が」

「二人してニュータイプとでも言うか!!」

「俺たちはニュータイプなんかじゃない!!」

間合いを詰め、トンファーで罅迫り合う。

それに合わせ、道夜がバズーカを放つ。

「そうだ、俺たちは不完全な人間だ!ニュータイプでも、強化人間でもない!」

「だから未来を信じれる!!」

もう一方の手でダガーを抜き、一気に振りぬき肩を傷つける。

続けて道夜が詰め寄り、シールドを両断。

「だから願いを込めるんだ!!」

「それだけで…世界が変わえられるわけでは無い!!!」

回し蹴り、それを避けて間合いを取る。

「誰も世界を変える事を望んでるわけじゃない!」

「世界は望まなくとも変わるものだ、だから、その可能性を見せるだけで十分なんだ
!」

「それを理解できないお前は…!!人ではなく、ただ先の世界しか見えないお前は!!!」

再び接近し、サーベル同士がぶつかり合う。

「それ以外に何がある!!!お前たちもニュータイプならわかるはずだ!この世界の果て

が!!戦いの果てが!!」

「だとしても……!!」

「人の願いも、託された想いも全て、果ての前の幻想にすぎない!だから理解し、世界を良いほうへと向かわせたいだけだ!!」

「お前がしようとしているのは、人間の生き方を否定することだ!想いを消した世界で、何をするんだ!繋がりも、歴史すらない世界で!!」

「再生だ……!腐りきったこの世界をもう一度やり直す!!」

「違う……!!誰も再生なんて望んでない!!」

もう一方の手でサーベルを引き抜くベルベット、それを受け止めるように道夜がサーベルをふりぬく。

「それは誰かがすることじゃない!世界自身がそう感じた時、世界がそれを行うんだ!!」

「そんな事をする権利は……人間には無いんだ!!」

「世界は……誰のものでもない!!」

「ならばいいのか!!このまま争いが繰り返されるこの世界でも!!貴様たちはそれを望むというのか!!」

ベルベットは間合いを取って言う。

「望んじやいない。でも、お前が変えるべき事でもない！過去に戦争があった、だからもう繰り返しちやいけない、それを伝えるのが、過去を生きた俺たちの役目なんじやないのか!!!」

「綺麗ごとを……それで世界が変わると思うのか!!!」

「変わるさ！少しずつでも変わっていける事を、人はみんな知っている!!!」

「俺たち過去の人間の戦いは、終わっている！だから若い奴らに、託して、伝えなきゃいけないんだろ!!!ベルベット、貴様だつて!!!」

「ふざけるな。俺はまだ過去の人間ではない!!!」

ニヒリテイが両手を広げると背後から大型のユニットが接近する。

そして、そのユニットから高出力のメガ粒子砲が放たれ、道夜を襲った。

「ぐああああああ!!!」

「道夜!!!……ベルベット、貴様!!!」

「そうだ。俺はまだ……現在いまを生きる人間だ!!!」

そして、合体すると、大型のMAとなって再び立ちふさがる。

「……いつは……!!!」

「さあ、ムゲン。第二ラウンドだ!!!」

MAから放たれるビームが街を焼いていく。

「……………くっ……………」

「どれだけ変革を望んでも、否定し続けるお前のような存在がいるのでは、世界は変えられん。だからお前を殺してやる…この手でな!!」

「人が強引に作り出す世界に、平和があるのか!?!お前のような傲慢な人間が造る世界ならなおのこと!!」

「世界は、自然に変わっていく、それを待つのも、人間の役目だろ!!」

「ならば、戦争が起きるのも、世界の定めなのか! 違うだろうに!!」

「だとしても、お前が世界を変えれば、今を生きる人々はどうなる!!」

「全ての事に犠牲はつきものだ。お前の両親も、戦争のために犠牲になった!!」
「犠牲の上に成り立つ世界など…!!」

「お前とて同じ事、誰もが平和な世界をと望みなながらも、何人を殺し、何人の人間に恨まれた!!」

「犠牲失くして変革はない!!そのための犠牲だと思え」

「ふざけるな! 犠牲を前提に考えるな! きつと犠牲が無くても分かり合える時代は来はずだ!!」

接近してビームトンファーを振るい、腹部を狙う。

しかし、Iフィールドがそれを妨げ、反撃にメガ粒子砲が放たれ、左腕を焼く。

「ぐっ……!!」

「それはいつだ？明日か？10年後か？答えられるわけが無い。いつかはと言いながら、お前だって心では来ないかもしれないと思っっているからだ」

「だが……それでも……言い続けなきゃいけないんだ!!」

それでも負けじとダガーを強引にIフィールド発生器へ突き刺す。

「言い続けてどうなる！世界がそれを聞くとでも思うか!!」

「言わなきゃ……言ってやらなきゃ伝わらない!!」

「ならば叫べばいい！誰も聞きはしないその言葉を!!そして嘆けばいい！再び繰り返される戦争を!!」

「俺を討ち、後悔しろ!!戦いが繰り返されるといふ事実!!」

「誰もお前に変えてほしいとは思っちゃいない!!未来は、一人一人が変えていくものだ!!」

「相容れないものだな……！貴様だけは!!」

「それは……出会った時からそうだろう!!」

トンファーでもう1基のIフィールド発生器を突き刺し、脚部を両断する。

「ぐっ……！しかし……どれだけ足掻こうが今更……!!」

「お前たちに出来る事など限られている！変える力も無く、ただ叫ぶことしか出来ぬ者たちよ!!!」

ビームライフルで右足が貫かれる。

「うっ……………」

思わずエヴァが声を上げた。

「エヴァ……………」

「大丈夫…。終わらせなきや、全部…!!」

「分かってる…!!」

「これでトドメだ!!!」

メガ粒子砲が俺を捉える。

「させない!!!」

放たれる刹那、正面に展開される防壁。

「リリー…!!」

「お待たせ、全部片づけたよ!」

リリーは俺の横に並ぶと、ベルベットへと叫ぶ。

「確かに私たちは、叫ぶことしか出来ないよ。でも、力は無くても、出来る事はある!!」

「何を言う。ならばお前たちは世界に貢献できているとでもいうのか!」

「そんな難しい事じゃない。世界は単純で、優しいものなんだって、伝えることは出来る！」

「それが…綺麗ごとだと何故わからん!!」

背後からIフィールドをかき消すほどのビームが飛び、そしてフェネクスが躍り出る
「綺麗でも、偽善でも、救われる人がいるかもしれないだろ!!!何故頑なに否定し続ける
!!」

「お前たちこそ、何故信じ続けられる!!愚かだと思わないのか、人間という存在が!!」

「……確かに……愚かだ……」

「……道夜……?」

ボロボロになったリファーストが立ち上がり、俺の横へと並び言う。

「呆れるほど殺し合い……そのたびに戦争は嫌だと嘆き……そしてまた争う。こんな愚かなことがあるか……」

「なら——」

「だが……それ以上に、人の優しさを……温もりを知ってしまったからには……
信じるしかないんだ」

「温もり……!?そんなもののために……!?」

「そんなものじゃありません」

満身創痕のVーアルバが言う。

「その温もりと優しさが、世界を温めてくれる。どれだけ暗くて、寒くても……その熱が、また人々を温めるんです」

「温もり……、あの時、アクシズ・シヨックが起きても、世界は変わらなかつたのだぞ！ そんな人類を、まだ信じるというのか!!」

「いずれ、お前たちも食いつぶされるだけじゃないのか!!」

「そうかも……しれませんが……」

片足を引きずるんガンダムが言う。

「軍人としての役目を終え……それで、私達は使い捨てられるのかもしれないね。……けど」

「私は後悔しない。ムゲンさんや道夜、彼らと出会えたこの軌跡の果てが、その結果でも。私は、それでいい」

「何故……」

「何故……？ 簡単ですよ。世界よりも大切な、どんなものとも代え難い友が居るんですから。友が信じているなら、私も信じないといけませんからね」

「ベルベット、世界は、お前が思っているほど簡単じゃない。こんなに少ない人ですら、思うことは全く違う」

「だからこそ、世界を信じてみたいんだ……！」

「……話にならない……!!」

「分かってるはずだ、もうこんなことする必要がないことくらい……!!」

「ふざけるな……!!まだ戦いは終わってはいない!!」

俺は二ヒリテイの前に出て手を広げる。

「何を……死にたいのか!？」

「……死ぬつもりも、殺すつもりもない。お前の気持ちも、俺には理解できるから」

「まさか本気でニュータイプにでもなったつもりか!？」

「そうかもな。理解したくなくても、理解できてしまうんだから」

頭の中で彼の過去も、記憶も、悲しみも、すべて理解してしまったからこそ、俺はも

う戦う気は無かった。

ベルベットも、同じで、ただ世界をいい方向へ変えたかったんだ。

恨みもあつた。殺したいとも思つた。

けれど、それは出来なかつた。

……俺には討てない。

「俺を……侮辱する気か！貴様ああああ!!!」

高出力のメガ粒子砲が放たれる。

「っ…………!!」

皆動けなかった。なら…………!!

皆の前へ立ち、背を向け、メガ粒子砲の直撃を受ける。

「ぐっ……………!!」

「何故……………!!」

ベルベットに向き直り、口を開く。

「……………もういいだろ、お前も……………」

「…馬鹿にして……………!!どこまで俺を侮辱すれば……………!!」

アームを振り上げ、レゾナンスを掴む。

「ムゲンさん!!」

「くっ……………!」

「お前だけ戦いを放棄して……………!!お前の両親を殺させたのは俺だぞ!恨まないのか!? 殺さないのか!?目の前にいるというのに!!」

「……………恨みもしたさ……………、殺したいと何度も思ってたさ!!!だが、お前と戦ううちに、そんなの消えたんだ」

「なっ……………!!まだ言うか!!なり損ないのニュータイプのくせして!!」

「……………お前を知ってしまっ——」

「黙れ!!お前が……お前が俺を知るなああああ!!!」
ギリギリと音を上げ腕がレゾナンスを潰そうとする。

「うっ……うう……!!これ以上は……!!」

「エヴァ……。くそっ……!!」

機体を動かさそうにも動かない。

「このまま……!死ねよ!!!」

「……ベルベット……!お前とは……分かり合えないのか……!!」

「分かり合うことなど……!!既に捨てている!!」

「この……!!分からず屋め……!!!いい加減!!!」

「目を覚ませええええ!!!」

レゾナンスから強烈な光が放たれる。

「何……!!何の光だ!?!」

「レゾナンス!!!」

叫ぶとともにレゾナンスがニヒリテイのアームを掴むと、軽々と引き裂き、腕から抜け出す。

「な、何をしたんだ!?!くっ!!!」

一気に間合いを詰め、ベルベットと相対する。

「まだ苦しみたいか!! いくつかは来ると、そんな願いで戦い続けて!!」

「……願わなきや、叶わない事もあるだろ!!」

Iフィールドを展開するニヒリティ。しかし、それに動ずることなくレゾナンスはニヒリティの肩部に腕を突き刺した。

腕はIフィールドを貫通し、ニヒリティの装甲を容赦なく抉っていく。

「それに、この道は俺が選んだ道だ!! 後悔も沢山した!! 苦しみもした! それでも! 今があるから、前へ進むんだ!!」

「それが綺麗事だと言っている! それだけで、これからも戦い続けるのか!! 永遠にこない、分かり合える世界を目指して!？」

「ああ! 戦い続けてやるさ! 分かり合える世界が来るまで!!!」

両手をクロスして振り下ろすと、ニヒリティのコックピットに傷をつける。

「くっ……いつまでもそんな綺麗事を……!! ……くそっ! 機体が!!」

ベルベットが機体から降りてどこかへと走って行く。

「何を……!!」

追撃しようとした時、エトワールが制止する。

「私が追います。ムゲンさん、あなた達は先に脱出を」

「エトワール……」

「討てないんでしよう？ 決着は私の手でつけますから」

「……………分かった、信じるよ」

彼は機体から降りてベルベットを追う。

直後、ニヒリティが勝手に動き出し、コロニーに大穴を開けて逃げて行ってしまふ。

「なんだ…!？」

「……………ムゲン、追わないとまずい！」

「分かってる!!」

俺たちはニヒリティが開けた穴を通り宇宙へと出る。

すると、ニヒリティは地球へと向けて一直線に移動をし始めている。

「これは……………!」

「ムゲン、マズいよ。あの機体、地球へ落ちるつもりみたい」

「何だと…!?!」

「止められないのか!」

道夜が叫ぶ。

「多分、並みの武装じゃ破壊しきれない。破片が大気圏で壊れるかは分からないし…」

粉々には出来ない」

「…被害は少なくできるんだな？」

「分からない。100mを超える物体が宇宙から落ちるから、少なくとも落ちた地域は

……」

「……くっ……!!」

「でも先生」

リリーが笑顔で言う。

「私達に出来る事をする。そうだよ。……ファンネル!!!」

ファンネルが舞い、ニヒリティを攻撃するが、Iフィールドがそれを防ぐ。

「なら……!! 一気に接近する!!」

「リリー……!」

遅れてコロニーを脱出したエトワールが言う。

「遅かった……!! ニヒリティはもうベルベットの手から離れて……!!」

「どこを壊せばいい!？」

「恐らく、コアユニットの……ニヒリティ本体を狙えば!!」

「その機能が停止しない限りは地球へ落下する……!!」

「なら、私の出番ですね……!!」

片腕でスナイパーライフルを構え、放つ。

しかし、実弾ですら容易にその装甲を貫くことは出来ない。

「こんなこと、いくらだつてありましたから。貫けないなら…貫くまで!!!」
俺はニヒリテイの正面へと移動しようとする。

しかし、スラスターがうまく機能せず、動けなかった。

「くっ……!!動いてくれ…レゾナンス!!」

すると、右肩と背中に手が置かれる。

「……!!」

「ムゲンさん、動けないなら、俺が」

「俺も力を貸そう、ムゲン。……今度は…皆でヤツを止めるぞ!!」

「……ああ……!!助かる!」

2機の力を借りながら、ニヒリテイの前へと移動できたときには、既に大気圏前。
「時間が無い、何か、破壊できる武器は…!」

「ビームマグナムが、1発だけなら」

「……マグナムだけじゃダメだ、もつと力が無いと…!」

「まだ、ファンネルは使えるよ!!」

「限界地点まで、残り100!機体が追い付けません!!後は…!!!」

「……くそっ……力が!!」

「ムゲン!!!」

「ムゲンさん!!」

「先生!!!」

「……分かってる!!やるぞ!!」

ジエームスがビームマグナムを構える。

その手の上に手を乗せる。そして、道夜も同じく手を乗せ、リリーはフェネクスの背中へ両手を預ける。

「皆の想いを、この一射に託すんだ!全て……終わらせるために!!!」

「分かってるさ。全て、終わりにするんだ」

「これは、始まり。ここからまた……生きるために!!!」

「そうだ、俺たちは……変わるために……、この一撃を!!!」

想いを込めた一射は、ニヒリティを飲み込むほどの力を発揮する。

「やったのか!?!」

「いや、まだです!!」

煙の中、二つの目が強く光り、俺たちの横を抜けていく。

「なっ…!!」

ニヒリティを黒い波動が包み込み、前よりも速度を増して落ちて行こうとする。

「もう限界、離脱しないと。……………ムゲン？」

全員が離れる中、俺は……

「……俺が止めなきゃ」

「ムゲン！離脱するんだ!!もう限界だと言われただろ!!」

「先生!!」

「……止めなきゃならないんだ!!!」

「皆が……………皆が託してきたこの”軌跡”のためにも!!!」

「そうだね、やろう、ムゲン」

「…ああ」

「死ぬ気か!？」

「俺は死なない。必ず、リナとアウロラの所へ戻る!!!」

レゾナンスはニヒリティの前へ立ちふさがり、手を広げる。

「悪いね、エヴァ、こんな事に付き合わせて」

エヴァは首を横に振りながら言う。

「いいよ。きつと、これで正しいと思うから」

俺は前を向き、二ヒリティを見る。全てを恨む、そんな憎悪が、力となってあの機体に宿っている。

「……………恐怖なんかない。必ず……………戻ると決めたから」

……………俺は、それでも……………、優しさが世界を変えたと信じたい。

レゾナンス……………、俺の……………俺の想いを!!!

「ニュータイプ力なんて”要らない!!!”皆を救う……………あの機体を止める力を……………俺にくれ…!!」

「レゾナンス…!!!」

瞬間、視界が虹に包まれる。

痛みは無い。

何が起きたんだろう……………。

そんな事、考える事さえどうでも良かった。

ずっとこの温かさを感じていたい。

ずっとこのままで……。
俺は……。

『ムゲン』

振り返ると、そこにはエヴァが居た。

「……エヴァ……?」

『貴方の願い、レゾナンスは叶えてくれたよ。ほら、見てごらん』

エヴァが伸ばしたほうを見ると、そこでは、ニヒリティを優しく包み込むレゾナンスの姿があつた。

背中から”生えた”結晶の翼が、宙域を虹の光で照らす。

「……これは……」

『貴方も、私もあの中にいる』

「どういうことだ……?」

『それはね』

正面から歩いてくる少年。

「グレイ……!」

『今なら、君にもいろいろなものが見えると思う。ほら、周りを見れば、沢山のモノが輝いている』

キラキラと光る星のようなもの……手を伸ばせば届くかもしれない。

『これは全て、”人の想い”。その星のようなもの数だけ、人の想いで溢れている』

「……温かい……」

『この想いこそが、世界を温めてくれているもの。君はそれを守った。”命を懸けて”』

「……俺は……死んだのか?」

『………本当はそうかもしれない。けれど、耳を澄ましてごらん、君にも聞こえるはずだ』

『よ』

「ムゲン!!お前がこんな事で………こんな事で良いのかよ!!——俺もお前も……!!まだ何一つ互いを知つちやいないんだぞ!!!」

道夜の声……、アイツとも………もつと話すことがあつたはずなのにな……。

「先生え……!!逝つちやだよ………!!!先生え!!!」

リリー……、君はいつも……泣いてばかりだな……。

「ムゲンさん!!アンタ………また戻ると言つたじゃないかよ!!!」

ジエームス……、リリーは良い人と出会ったな。

「ムゲンさん！また死んだふりですか？いい加減にしてくださいよ」
ユーリ……、今度は違うみたいなんだ……。

「ムゲンさん、こんな事で……リナさんに笑われますよ!!!早く目を覚まして!!!」
エトワール……、ああ、これほどまでに感情が溢れているなんて。

彼らの言葉を聞くたびに、俺は安心感を覚えていく。

もう、大丈夫かな……。

もう、立ち止まっても——

『ムゲン』

「……!!!」

『大丈夫だよね、貴方はいつも、どんな時だって私の所へ帰ってきてくれたもんね。……
だから今度も必ず……』

リナ……。そうだ……俺は……

『パパ』

「アウロラ……………」

『今日は、すつごく大きい虹が見えたんだ！きつとあれは、パパだよね！！分かるんだ！あの暖かいのは、パパなんだって！！……早く、帰ってきてほしいな……パパ……ママ……』

俺は……俺にはまだやるべきことがあったんだ……。

いつまでも……この温もりを感じているわけにはいかなかったんだ……。

『分かってるよ、君の言いたいこと』

「……グレイ、俺は……」

『大丈夫、君なら』

「どうすればいい」

『光が見えるよね』

指を刺した先に、小さな光が見える。

俺は頷くと、グレイは優しく笑んで言う。

『あそこまでたどり着けばいい。大丈夫、君を邪魔するものは何もないから』

「……ありがとう、グレイ」

『僕こそありがとう。君と出会えたこと、そして、君が僕の願いをかなえてくれたことも、全て……ありがとう』

俺はゆつくりと歩き出す。

そして、一步一步進むたびに、声が響く。

『ああ……あの時の少年が……、私は、君を信じて正解だった……』

研究所で、俺を唯一救ってくれたお爺さんが嬉しそうに言った。

『ムゲン・クロスフォード。……お前の作る未来、信じているぞ』

シゼルが、今まで聞いたどんな口調よりも優しい声で、そう言った。

『ムゲン、良い男になったな。本当に、強くなった』

イーサンが、まるで我が子に言うようにそう言った。

『……ムゲン、やはり君は、僕が認めた男だった。変えられないと思った、ベルベットの心さえも、君は……変えたんだ』

ゼロが涙を零しながらそう言ってくれた。

『ムゲン・クロスフォード……。俺の半身を、守り続けてくれたこと、感謝する。……
お前を信じた、Eveが……いや、エヴァが正しかったのだな』

完成型AI、アダムはそう言った。

『ムゲン、オレは、お前の中に光を見た。その光は、宇宙を照らす光となった。……優しきとは……いいものだ。ムゲン』

ヨハネが、微笑む姿が容易に想像できた。

『よっ！ムゲン！バッチリ仕事したな!!……もう、いいんじゃないのか？』

ジャックさんが陽気にそう言ってくれる。

『……ムゲン、願うなら、もう一度あなたに……。……やっぱなんでもねえ……』

アルマが照れくさそうにそう言った。

『大丈夫、ムゲン。私達は、あなたが選んだ選択は、間違っていないって信じてるから』
マヤが優しく微笑みながら言う。

『………ムゲン』

俺の前に立つ白髪の男。

「……クロノード」

『お前にも迷惑かけたな。……この目で見てきた。良い世界になったな』

「ルナちゃんにも、会ったのか」

『ああ。全てを伝えた。……………アイツら、変わってなかったよ』

「……………そうだね、でも、皆変わったんだ。俺も、カカサも」

『…強くなったな、ムゲン。……………さて、この先に進めば、お前は元の場所へ戻れる。だ

が……………お前は一つだけしなきゃいけない事がある』

「え……………?」

『お前が背負って来たものを、ここで降ろすんだ』

「……………俺が背負ったものを…」

『何も無い。次に目覚める時、お前は、戦う人間ではなくなる』

「……………」

『お前の戦いは、この瞬間に終わりを迎えるんだ』

「だが俺は——」

クロノードは俺を優しく抱くと、頭を撫でながら言う。

『もう、いいんだ。全て、終わったんだよ』

「……………」

『辛かった復讐も、苦しい思いも、痛みも、悲しみも。全て、ここへ置いていけ』

嬉しかった。もう、ここで終わりにしても良いとも思えた。けれど……………違うよ、やっ

ぱり。

俺は……この温もりを置いていくことなんかできない。

「……………ありがとう、クロノード。……でも、それは出来ない」

『何……………』

俺は、クロノードから離れるとハッキリと伝える。

「俺は、この歩んできた軌跡を、ここに置いていくつもりはない。だって、置いて行ったら、お前たちを置いていくことになる」

「それはダメだ。誰かが語り継いでいかなきゃならない。お前も言ってただろ、”俺を記憶する人がいてくれてよかった”と」

『お前は……まだ戦うつもりか』

「違う。俺はもう戦わない。だが、お前との思い出も、皆から託された思い全てを忘れるつもりはない」

「ここへこうして導いてくれたこの人生は、お前たちが居てくれなかったら絶対に歩んでこれなかった道だから」

「……………だから、俺はこの軌跡を——」

”虹の軌跡”を忘れるつもりはない」

『……そうか』

クロノードは、もう一度俺を抱くと、笑って言った。

『これで本当にお別れだ。………もう、会えなくなるからな』

「……ああ。………今まで、ありがとう」

『「こちらこそありがとう。お前に出会えたことが、何よりの幸運だった』

彼は俺の背中を叩いて押した。

「………クロノード……」

彼を見ると、笑っていた。最期の別れの時と同じ。

『行け、ムゲン。お前もつと先を見て来い。戦いではない、他の未来を』

彼と別れ、光に手を伸ばさず。

眩い光が去ると、現実の音が耳へと流れ込む。

「——私達の中に眠る、可能性と言う名の内なる神を信じて………」

「………っ………はっ………！」

「目、覚めた？ムゲン」

「……エヴァ……ここは……」

「レゾナンスの中。でも、もうお別れ」

「え……？」

レゾナンスのコックピットがひとりでに開く。

「最新の役目を、私とレゾナンスで果たす」

「何を……」

「宇宙で見てて。ううん、貴方が見届けて。あなたと、レゾナンスの”戦いの果て”を」

「……」

俺は小さく頷き、席を立つ。

「……寂しく……なるね」

「うん。……もう二度と、会えないと分かっているから、私も寂しい」

「……短い時間だったけど、ありがとう。エヴァ、レゾナンス」

「どういたしまして。さ、行って」

俺は機体から降りて、宇宙を漂う。

レゾナンスからだんだんと離れていく。

「……ガンダム……」

一瞬、レゾナンスの顔が笑っているように見えた。

次の瞬間、レゾナンスの翼が羽ばたくと、周囲に虹の光を放ちながら、ニヒリティを包み込む。

あまりの輝きに、目が眩んだ。

再びレゾナンスのいた場所を見ると、そこに残ったのは、温かな虹の光だけだった。

俺はその時理解した。

エヴァとレゾナンスが、ニヒリティを抱いて、”宇宙へ旅立った”のだと。

俺は胸に手を当て眩く。

「……ありがとう、ガンダム。……君と出会えたことを……君と戦えたことを、誇りに思う」

その後、俺たちは地球へと降り、基地へと帰還した。

そして、メデイカルチップを受けた際、俺の”ニュータイプとしての力と驚異的な回復能力”が失われたことを知った。

きっと、クロノードが……いや、皆が俺にしてくれた最後のプレゼントだったのかも
しれない。

もう、戦う必要が無くなった俺へ…。

73 完

終：虹の軌跡・下

燃え盛る市民街を抜け、地下の施設へと辿り着く。

静かに銃を抜き、廊下を歩く。

恨みもあつたが、私も、彼が本当に悪なのか、それは分からないと思う。

でも、だからこそ、この決着は、つけなければいけない。

崩れ行く施設の中で、その男は待っていた。

「……………ベルベット・バーネット」

「何故、来た。ここに」

私は銃を構え、彼に言った。

「あなたに、伝えたいことがあつてここに来ました」

「……………伝えたいことだと？」

「そうです。……………私は、あなたに礼を言いたくてここに来たんです」

「礼……………だと…？」

「あなたが取った行動のおかげで、私の家族、皆の進むべき世界は変わってしまった。で

すが、私は感謝しています」

「……………何故……」

「あなたが行動しなければ、この道を歩くことは出来なかった。あなたがいなければ、私はずっと独りだった」

「…俺は……………お前とお前の両親を離れ離れにした張本人だぞ……？お前は……………」

「……………多くの人と出会い、多くの事を知れたこの道を歩めたのは、貴方が私を両親と離れさせたからです」

「だからこそ、お礼を言いたい。……………私の人生を変えてくれて、ありがとう」

「っ……………！」

「私は、貴方を”赦ゆるします”」

「世界があなたを否定しても、私はあなたを赦す。世界を教えてくれたあなたを」

「……………そんな事を言われたのは、生まれて初めてだ……………」

「ですが、貴方が私の仲間にしてきたこと、多くの罪のない人々への行為、それは許されることではありません。だから、はじめをつけましょう、ベルベット」

「…好きにするがいいさ。どのみち、”もう遅い”」

「それはどういうことです」

彼はにやりと笑い、言い放つ。

「ニヒリティは…俺の手を離れたのさ。…後は、アイツの好きに動くだらう」
「……………」

「どうなるだろうなあ……………？宇宙から降る隕石？それは面白そうだ」

「……………良いんです。もう、貴方は罪を重ねなくて。…………だから…………おやすみなさい、ベルベット・バーネット」

私は、静かに銃の引き金を引いた。

地面に倒れる彼に眩く。

「…………止めましょう、貴方のために。…………人は死んでまで、罪を重ねる必要はないですから」

この時、私にとっての戦いに、一つの区切りがあった。

宇宙に輝く虹とニヒリティを優しく抱く翼の生えたガンダムを見て、私はそう確信した。

宇宙の声、そして彼の温もりを感じながら。

「…………ムゲンさん、あなたは…………」

彼が、私と両親を繋いでくれた。

だから、今度は私が……

「ムゲンさん、こんな事で……リナさんに笑われますよ!!!早く目を覚まして!!!」

誰も、こんな結果は望んではない。私も、道夜様も……!!

だから、彼はまたここに戻ってくる義務がある。

私も、彼も……まだ、全てを見届けてはいないのだから。

私の期待通り、彼はちゃんと目覚め、リナさんの元へと戻ってくれた。

……それでいいんです。

……それから私は、軍人で居続ける事を選んだ。

もう、ムゲンさんや道夜様と同じ道を歩めなくとも、私が出来る事をしていくと、心に決めたから。

そして私は、第00MS遊撃部隊へと名を変えた部隊で、副隊長として戦っていくことになる。

……けれど、その話はまた別のお話。

私の役目は、ここまで。

その虹は、アクシズを押し返した時と同じ光。

暖かく、優しい光だった。

でも、それを発している人は、先生で……

先生がこのままどこか遠くへと言ってしまふ気がして……

ただ一心不乱に叫んだ。

「先生え……!!逝っちゃやだよ……!!先生え!!!」

私を独りじやないと言ってくれた、かけがえのない人が、消えていきそうで

「お願い……ネティクス!!!先生を……!!先生を繋いで……!!!」

でも、ガンダムは応えてくれない。

まるで、その景色に見とれているように。

「動いて!!動いてよ!!!先生が……!!先生が!!!」

「リリー」

フェネクスが優しくネティクスを包み込み、言った。

「大丈夫、あの人は必ず帰ってくる。そう約束してくれた」

「でも……」

「信じよう、あの人を」

「……………うん」

大丈夫……………どんな時でも、先生は私を助けに来てくれた。

大丈夫だつて言い続けてくれた。

だから、今度は私が待たなきや…。

大丈夫つて言い続けなきや…。

先生……………リナさんが待つてるよ……………。

手を組み、目を瞑つて想う。

先生が無事であることを。

信じる事も、戦いだから…。

声が——聞こえた——

「……………帰ろう……………家に……………」

「先生!!」

私は先生を手のひらへ乗せ、コックピットに入れた。

「……………リリー……………」

「先生！おかえり……！本当に……！！」

「……ああ。ただいま」

この時、私には違和感を感じた。先生が、前と違う事、その違和感に。でも、その違和感は、地球へと戻って確信へと変わる。

「……先生……今、なんて……」

先生は頭を掻きながら言う。

「……ニュータイプとしての能力が無くなったらしいんだ」

普通は在り得ない事だ。でも、あの時、あの場所で起こったことなら、不思議と納得がいく気がした。

何て言えばいいかわからないけど、私はなんだか悲しくなった。

「そうなんだ……。先生は……私とは一緒にやなくなっただ……。」

「違うよ、リリー。俺もリリーも人間さ。何一つ違う所なんてない。唯一違うとすれば、それは男か女かってことくらいさ」

先生はあの時と同じ笑みを浮かべそう言った。

「……」

リナさんも言っていた

『リリーちゃんもそう。何一つ、私達と違う所なんてない。ニュータイプが特別なら、それはきつと、皆の希望の光となるための力なんだよ』

…なら、今度は先生に代わって私が^{ニュータイプ}希望の光^がになろう。

「……先生」

「ん？どうした？」

「…私、先生みたいになまくできるか分からないけど、頑張ってみる。私は、私なりのやり方で、皆の希望の光になって見せるから！」

「……リリー」

先生は私を優しく撫でると

「本当に……成長したな、リリー」

「……ぜんぶ、先生のおかげ……。ジエームスと再び出会えたのも、私がこうして前を向けるのも……全部」

「違うよりリリー。俺は手助けをしただけ、全て君が行動した結果なんだ。君が行動したから、君が変わり、ジエームスと出会えた」

「……先生……」

「行こう、ファングから話があるらしいから」

先に歩き出す先生。私もあわてて彼へとついていく。

大丈夫、もう先生が居なくても、私は、”一人で大丈夫”

「先生！待ってよー!!」

虹が見せてくれた奇跡は、私にとって変わるきっかけだったのかもしれない。

格納庫の中で、彼の無事を祈った。

モニターでとらえたその映像を見て、直感的に私は、ムゲンがどこかへ行ってしまうんじゃないかと感じた。

何故だかは分からない。でも、アクシズの時と同じ光が、ムゲンから発せられていたからなのか、そう感じてしまった。

「……………神さま……………お願い、最後のお願いだから……………！ムゲンともう一度……………会わせてください……………！」

ただただ目を瞑りながら祈る。

私は戦うことは出来ないから……、こんなことしか出来ないけれど……。

でも、もし彼が帰ってきたなら、誰よりも上手に彼を受け止める。

それが私の役目。彼を受け止める事が、私の最後の役目。

「ムゲン」

「大丈夫だよ、貴方はいつも、どんな時だって私の所へ帰ってきてくれたもんね。……だから今度も必ず……」

私は信じてる。彼を……、そして、私が造ったガンダムを。

レゾナンスならきつと、彼を連れ戻してくれる。

彼は、ちゃんと戻ってきてくれた。

怪我一つなく、私の前へ。

ネティクスから降りてくる彼を見て、私は涙が零れた。

格納庫では歓声が上がっている中、彼は私に気づいてこちらへと歩いてくる。

「リナ」

そう言つて、彼は私を抱き寄せ

「ただいま」

受け止めようと思つていたのに、逆に抱きしめられてしまつて……。ああ……私は

…。

私は、出来る限り精一杯の笑顔で、彼に返す。

「……………おかえり……………ムゲン」

涙で濡れた顔で、きつとムゲンには複雑な表情にとらえられたかも…………。

地球へ戻った後、ムゲンのニュータイプとしての能力と驚異的な回復能力が失われていることが発覚した。

みんな驚いていたけど、たぶん、エヴァとレゾナンスが持つて行つてくれたんだと思う。

もう、これからは、彼は戦うことは無いのだから。

虹が起こした奇跡は、ムゲンから余分なものを消してくれた。

丘に風が吹き、抜けていく。

久々の自宅、私は、ムゲンを待つていた。

一緒に家に入るために。

外はもう真つ暗で、夜空に星が瞬いている。

そして、ゆっくりとムゲンが歩いてくる。

「遅いよームゲン!!」

久々の帰宅で、とてもワクワクしているからか、彼にそう言った。

「ああ、ごめんごめん。……………なあ、リナ」

「どうしたの?」

彼は歩みを止めると、私の前へ立ち、膝をつく。

「ど、どど……………どうしたの!?!」

慌てる私に、ムゲンは何度も深呼吸してから、ポケットから小さな箱を取り出した。

「……………アウロラが生まれてから、本当の家族にはなつたよね。けど……………これがまだだった」

ムゲンが箱を開くと、そこにあつたのは小さな指輪。

……………私が憧れた、結婚指輪。……………え……………?」

「え……………つと……………。リナ……………いいや、リナ・ハートライト。……………お、俺と……………結婚してくれ」

「え……………」

あまりに突如な事でどう答えて良いのか分からなくなる。

でも、返さない。私が本当に望んでいたことを。

「……………うん、ずっと……………ずーっと待ってたよ……………」

「それじゃあ……………」

私は頷きながら答えた。

「わ、私なんかで……よければ。よろしくお願いします」

その言葉を聞くと、ムゲンは立ち上がって私を抱いて言う。

「お前じやなきやダメなんだ。……リナ、ずっと俺の後についてきてくれてありがとう。……これからは、”一緒に歩いて行こう”」

「……!!」

その言葉で、私は理解した。

私はやっと、”彼に追いつくことが出来た”と。

お母さん、私今……とても幸せです。

私、生まれてよかったよ、お母さん。

グロリアスの帰還報告を聞いて、やっと、俺は心から安堵することが出来た。
クロノード、見てるか、アイツは見届けたぞ。戦いの果てを。

「……………ふっ…………。やっと……………終わったな」

ファイアが隣に並び、小さく呟く。

「ああ……………。これで、戦いは終わるさ。…たぶんな」

「形はどうあれ、ラプラスの箱も開かれた。…後は、若い人たちが変えていくさ」

「……………そうだな。…なら、俺もファイアも終わりにするか」

ファイアは肩を竦め言う。

「バカ、私の戦いはまだ終わらないさ。あの子が立派に成長するまでは、な」

俺は小さく笑って

「……………そうだったな」

ファイアは、あの戦いの後、学校の教師として、仕事を始めた。

担当する科目は、“戦争学”。この世界だからこそある科目なのかもしれない。

実際に戦って来た者だからこそ、伝えられることもある。

だから、俺は許可を出した。

一方の俺は、相も変わらず商会の仕事をする日々が続いていた。

戦争は一区切りついても、街の修復や、各地での火種の消火など、まだまだやることは沢山ある。

……………俺も、まだまだ休めなさそうだ、クロノード。

ルナは、変わらず医者を目指している。

クロノードと出会って、少し変わったとすれば、その目標が父ではなく、皆へと変わったこと。

アイツと会ったことが、あの子にとって変わるきっかけだったのなら、俺たちが強引に縛り付けていたのかもしれない。

クロノードの死というものに、誰よりも執着していたのは俺たちだったのかもしれない。

「……………ねえ、カカサおじさん」

ルナが机のほうを向きながら言う。

「ん？どうした」

「実はさ、私ね、父が亡くなってたこと、知ってたんだよ」

「え……………」

「でも、あの時会った父も、私が知っている父と同じ”感覚”だった」

「だから、本当に、天国から私に真実を伝えるために来てくれたのかも。そう思うんだ」

「……………何故、黙っていたんだい」

ルナは手を止め、俺を見て言う。

「皆が悲しそうにしたからだよ。ムゲンおじさんも、カカサおじさんも、お母さんも。だから、知らないふりをし続けてた」

「だって、皆が悲しむことは、私だって望んでないもん」

「……………そうか……………」

「でも、嬉しかったよ」

「え……………」

ルナは笑顔で俺に言う。

「私を想ってくれて、黙っててくれたんだもん。カカサおじさんには感謝しきれないよ。学校まで作ってもらって」

俺は首を横に振りながら

「俺は、クロノードと約束したただけだ。俺なりに世界を見届けるってさ。皆のための灯台を作る。それが、俺の見届ける形」

「……………立派だよ、カカサおじさん」

……………何だか泣きそうになった。その真剣な瞳が、クロノードそっくりで。

「……………ああ」

気づけば、俺は休暇を取り、ある場所へと向かっていた。

ニユーヤークの、少し小高い丘。
そこで眠るあるやつに会うために。

辿り着いたところには、既に外は真つ暗で、今日は綺麗な満月が空に昇っていた。
丘の上にぽつんと建つ墓に背を向け座る。

「……よお、相棒。とりあえず、俺の中で一区切りついたから、会いに来た」

丘を過ぎていく風が、近くに育った木の葉を揺らす。

「お前は……元氣してるかよ。……ムゲンも、戦いの果てを見届けたぜ、やつぱり、お前が認めた男なだけあるよな」

「……俺も、俺なりに頑張ってたんだ。……でも、アイツよりも過酷な道だわ。……疲れるよ、代わってほしいくらいな」

月が、墓を照らす。

背中に温かさを感じる。

ああ……分かつてるよ、相棒。

……俺たちに言葉はいらない。

そこにいる、そうだろ、クロノード。

虹は、俺に奇跡を見せてくれた。

人を信じる事を、そして、大切な相棒を。

「もう少し、頑張ってみるわ」

墓に白い花を置き、軽く手を振って、別れる。

今度は、本当に全てを見届けてから、彼と会おう。

——全てを超えた、その先で

フアングに集められた俺たちは、全員がフアングの言葉を待っている。

彼は見回すと、声を上げた。

「……本日付で、第00特務試験MS隊は、全ての任を解かれ、解体されることになった」

「……なんだって……」

ざわざわと声上がる。

「上層部の意向だ。新たに宇宙世紀1000年を迎えるにあたり、新たに部隊を編成しな
おす必要があるらしい」

「……そこで、俺は新しい部隊を預けられることになった。部隊名は“第00MS遊撃隊”
」。各地の争いの火種となる存在を未然に潰す、そのために設立された部隊だ」

「だが、俺は、この部隊の部隊長にはならない。……もし、お前たちが戦い続ける意思があるのなら、誰かやってみないか、部隊長を」

誰も手をあげるものなどいかなかった。当然だろう、フアングほどのカリスマを持ち合わせる人物などなかない。

だが、その中、一人の女性が手を挙げた。

「私、やりましょうか？」

「ユーリ……!?!」

俺の隣に立つその女性が言った。

「フアングさんにはそれなりにお世話になりましたし？まあ、誰も上げないなら、私、と思ひまして」

「……いいのか、ユーリ。かなり過酷だが」

フアングが問うとユーリはにっこり微笑み言う。

「ええ、問題ないですよ。私も、私なりに頑張ってみますんで」

その瞳は、決意に溢れていた。何かを覚悟しているような……そんな目。

そして、第00特務試験MS隊は解体。それと同時に、リナと俺は除隊となった。

フユミネは全ての役目を終えたと言って、翌日にはトリントンを後にした。

後日、孤児院の前で、俺とリナの結婚式が行われた。

こんな服を着る日が来るとは思わなかった。

白いスーツを着て、鏡の前へ立つ。

「似合ってるな、ムゲン」

道夜が背後から茶化してくる。

「……似合ってるかなあ……」

自分ではあまり納得いかない。

「……似合ってる。間違いない」

俺の肩に手を置き微笑む道夜。

「なら、いいさ」

「ついに結婚か、ムゲン、リナと仲良くな」

「なんだよ、急に。……まあ、分かってるよ」

「ああ。そうだな、当然の事だったな」

先に俺は道夜に指示された位置で立って待つ。その隣で、道夜も静かに待った。

エトワールが、オルガンの代わりのピアノを弾き始めると、背後からリナとファングが歩いてくる。

リナは、純白のドレスを身に纏い、何というんだらう……：……：……：すごく、綺麗だ。

そして、俺の隣に立つと、フアングは俺たち二人の前へ立ち

「ごほん。……これより、新郎、ムゲン・クロスフォードと、新婦、リナ・ハートライトの結婚式を挙げる」

「早速だが、誓いの言葉を」

俺はリナのほうを向き、口を開く。

「……リナ、君と出会って、もう17年という時間が経った。その間、よく俺についてきてくれたね」

「多くの戦いを超えて、俺たち二人は、アウロラという子供にも恵まれた。時に傷ついていた、お互い、ボロボロになった時もあった」

「けれど、君は、ずっと俺を愛してくれた。だから、これからも、ずっと一緒に歩んでほしい」

「リナ、もう一度言うよ。……俺と、結婚してください」

それを受けて、リナは一拍置いた後

「ムゲン、私は、貴方と出会って愛し合ってから、こんなにも長い時が過ぎていたなんて思いもなかったよ。だって、貴方と居る時はどんな時よりも代えがたいものだったから」

「お母さんを喪って、閉ざされた未来を開いてくれたムゲン、貴方には感謝してもしきれない。苦しい時もあったし、本当にあなたを恨んだ時もあった」

「けれど、今は、貴方が此処に居てくれて、本当に嬉しい。私でよければ、よろしくお願
いします」

俺とリナは手を取り、皆のほうを向いて言う。

「私達は、私たちは、本日お集り頂きました皆様の励ましや祝福のおかげで、今日この場
所に立つことができました」

「お互いをいたわり尊敬し、笑顔に満ちた家庭を築けるようふたりで努力していくこと
を皆様の前で誓います」

フアングのほうを向き直ると、フアングは涙を流していた。

「……大きく……なったな……お前たち……」

「フアング……」

「……道夜、頼む」

道夜は頷き、フアングへと指輪を渡す。

そして、リナはユーリへ手袋とブーケを渡した。

「さあ、ムゲン。お前の手で」

頷き、フアングから指輪を受け取る。

そして、リナの左手の薬指へと指輪を通す。

「…では、今度はリナが」

リナも頷き、俺の左手の薬指へと指輪を通した。

二人が指輪をはめるのを確認すると、フアングは

「じゃあ、二人とも、誓いのキスを」

「……………なあ、フアング……………」

「ん？どうした」

流石に人前でするのには抵抗があった…。

「や、やらないきやダメかな……………」

「ん……………。ダメだな」

ばっさり切り捨てられる。

分かったよ…………、やればいいんだろ!!!

俺だって男だ、やってやるさ!!

俺は、リナを見つめる。

リナも、かなり緊張しているようで、ガチガチに身体が固まっている。

「分かるよ、リナ。俺も同じ気持ちだ」

心臓がバクバクと鳴る。今には破裂しそうだ。

「……わ、私……どんな戦場もムゲンと一緒にだと怖くなかったけど……、こ、こ、これ……それ以上に緊張してるかも」

「ああ……。俺もだ……」

皆、その時を待っている。…待っているのは分かるんだが……。ええい!!!

俺は彼女を抱き寄せると、唇にキスをした。

「んっ!!……ふふ……」

ああ……。恥ずかしい……。凄いい見られてるし……。

リナは地味にうれしそうだし……。

もう色々な感情が混ざって、俺でも訳が分からない。

しばらくして、俺はゆっくりとリナから離れる。

すると、ファンクが高らかに宣言した。

「おめでどう！これでお前たち二人は本当の家族になった!!本当に……おめでどう!!!」

皆から歓声上がる。

それから、カカサが用意したカメラで、全員と記念撮影をして、夜更けまでパーティー

が行われた。

子供たちも幸せそうで、なにより、リナも幸せそうだった。

誰もが寝静まったその丘で、俺は月を見上げていた。

「……………」

「まだ寝ないのか。せつかくの初夜だぞ」

道夜が静かに横に座りながら言う。

「……………眠れなくてね。…道夜はどうしたんだい」

「いや、そろそろここを発とうと思ってるな」

「そうか、道夜も部隊には残らないんだっけ」

「ああ。……………お前も知ってるだろうが、俺にも時間は残されてないからな」

「……………悲しいな。俺なんかよりも、道夜の強化人間としての力を奪ってくれればよかったのに」

道夜はふつと笑って

「無茶を言うな。お前のガンダムは神じゃない。あのガンダムがしたのは、お前の未来への背中を押しただけだ」

「……………」

「でも、俺は後悔してない。この道でなければ、きっとお前たちとは出会えなかった」
「道夜……………」

「なーに、二人で話してるんですかあ？辛気臭いですよー？」

俺と道夜の肩を掴んでユーリが割って入る。

「ユーリ…!?君も寝てなかったのか!？」

「……………はあ……………まったく…」

「ええ。……………あ、そういえば、随分久々ですねぇ、3人でゆっくり話すなんて」

「……………そういえばそうだな。……………あれからもう17年か……………、お互い、歳を取ったな」

「そうだね。……………長かったよ、ここまで来るのに」

「そうですかね？私は結構早いと思いましたがけど」

「……………まあ、感じ方はそれぞれだろう」

「それにしても、ついにムゲンさんも結婚しましたねぇ…」

ユーリが空を見上げながら言う。

「…そ、そうだね」

「……………そういえば、これからは皆それぞれ別のほうへと進む事になるんですよね」

思えばそうだ。ユーリは新たな部隊の部隊長となり、道夜はきつと一人で……………。

皆、みんな変わっていく。仕方のない事だけど、少しだけ寂しいと思う。

『申し遅れました、私はユーリと言います、そしてこっちの弄り…ゲフンゲフン』
『…八雲道夜だ…』

部隊に来て、初めて声をかけてくれた二人が、彼らだった。

『俺は、ムゲン・クロスフォード。よろしく』

『ええ、よろしく、ムゴンさん』

『…よろしく』

それからもう17年。本当に彼らとは長い付き合いになった。

「……………思えば俺も、お前たちとこんなに長い付き合いになるとは思ってたかった」

「それは私もですよ」

「……………俺は、お前たちと出会えて本当に幸せだったぞ」

「何ですか急に。気持ち悪いですね」

「……………そういう気分なだけだ。後気持ち悪くは無いだろ」

「ヘケケ」

「なんだその笑い方。お前こそ人の事言えないぞ」

「……やっぱり、ユーリと道夜も変わらないね」

二人を見てそう思った。

この二人だけは、きつと変わらない。

道夜はゆっくり立ち上がり空を見上げ、口を開く。

「昔、こう言ったのを覚えているか、ムゲン」

「ん？」

「俺は信じてる。人が、ニュータイプが世界をいい方へ変えていってくれると」つて」

「ああ、覚えているよ。二人で甲板で話したよね」

「…俺は最近、こう思うんだ。ニュータイプではなく、人間一人一人が成すべきこと

思ったことを成せば、世界は変わっていけると」

「……そうだね。人が…人間だけが未来を作れる。だから、きつと皆がすべきことをす

れば、世界は変わるよ」

「………来るといいな、そんな時代が」

「来ますよ、絶対に」

ユーリは立ち上がりそう言った。

「ユーリ……?」

「私達が歩んできた道は、それは見せられない所も沢山ありますし、言葉にしきれない事

も沢山あります。けど、その軌跡を語り継いでいけば、きつと……」

「…そうだね、信じよう、これからの時代の人々を、若き力を」

三人で見上げた空には、沢山の星が輝いていた。

道夜は俺たちのほうを見て言う。

「……………そろそろ、俺は寝るとする。お前たちも早く寝ろよ？」

「ああ、おやすみ」

背を向け去っていく道夜の背中を見ながら、俺は叫ぶ。

「道夜!!」

「…どうした。」俺は此処に居るぞ」

手を上げそう言った。

「……………ああ、また……明日な」

止めることは出来なかった。何故だか。……もう、会えないかもしれないのに。

「ああ、また明日」

道夜はゆつくりと丘を降りて行った。

「……………」

「さて、私も寝ますかね。……それじゃ、ムゲンさん、おやすみなさい」

「ああ。お休み」

三人が別々の道へと歩いていく。

それは、これからの事を意味しているようにも見えた。

翌日、道夜トリファーストは、トリントン基地から姿を消した。

それから、二度とその二人の姿を見る者はいない。

快晴の空を見上げながら、アウロラと話をしていた。

「ねえ、パパ」

「うん？どうしたの？」

「私、将来の夢、決まったの！」

「お、どんなことがしたいのかな？」

「私、本を書く！パパや、ママ、皆の物語を書く！」

天使のような笑顔で、その少女は言う。

「……そうか、良いんじゃないかな。でも、パパやママのお話は、アウロラが思っている以上に辛いことも苦しい事もあるんだよ？」

「うん！でも、全部書いて、皆に知ってもらうんだ！こんな人が生きてるんだって！」

「……………そっか」

アウロラは少し考えた後、俺に問う。

「ねえ！パパ!!」

「ん？どうした？」

「私の名前の意味って何なの？」

「アウロラの名前の意味？…ああ、教えてあげるよ」

ワクワクしながら俺の答えを待つ少女。

その姿は、かつて俺が恋をした少女そっくりの表情をしていた。

ああ、そうだ、この子は虹なんだ。

世界をまんべんなく照らすことのできる虹。

「君の名前の意味はね、虹って意味なんだ」

「虹…………？」

「虹は、どんな位置からも見ることができらるだろう？そして、その輝きは、心を癒してくれる」

「君には、どんな人にも平等に光となって欲しい。だからアウロラと名付けたんだよ」

アウロラはゆっくり俺の言葉を理解すると、笑顔で言った。

「そっか！私は虹なんだ!!パパ！いい名前を付けてくれてありがとう!!」

空を見上げれば、そこには七色に輝く虹が掛かっていた。

そうだったって、俺たちを、この虹が照らしてくれている。

忘れはしない、俺が歩んだ道を――

この、”虹の軌跡”を。

分厚い本を閉じ、窓から抜けてくる風を感じる。

あの日も、今日と同じような涼しい風が吹いていた。

……あの夜、私は今までに見たことのない虹を見た。

その光を発する人が、父さんだったと理解できた。

理由は分からない。けれど、その一瞬の出来事で、私は父さんの過去を知った。

9歳の私には理解できない事もあったけど、今思い出せば、理解出来る事ばかり。

……だからこそ、本にした。

時代に埋もれ、消えていく命を、戦うという事で語り継ぐのではなく、文字で語り継ごうと思った。

完成までにはとても時間が掛かった。最初の頃は文字もまともに書けなくて、よく母さんに注意されたっけ

きつと、本を手にして読んだ人の大半は、作り話だと、そう言うだろう。

それなら、それでもいい。ただ、こんな人がいたんだと、理解してくればそれで。

世界はあれから変わっていった。けれど、戦争自体は無くなることは無かった。

…悲しい事だけど、父さんたちがしてきたことに、ちゃんと意味はある。そう信じた

椅子から立ち上がり、軽く本を撫でてから外へ出る。

外は既に夜で、見上げれば綺麗な月が輝いていた。

月から視線を外し、星を見ようとした。

その時、幼いころに見た同じ虹が輝いているのを見つけ、私は驚いた。

父さんや母さん、私が歩んできた歴史は、宇宙世紀の中の一部に過ぎない。

けれど、それでも、その中で必死に生きて、戦い続けてきた人がいる。

そんな人々を語り継いでいくことが、私の戦い。
そう思わせてくれた虹を――

だから私は、この本の名前をタイトルこう書いた。

”虹の軌跡”と

機動戦士ガンダム虹の軌跡 終